# 久田原遺跡 久田原古墳群

苫田ダム建設に伴う発掘調査

2

(第1分冊)

2004

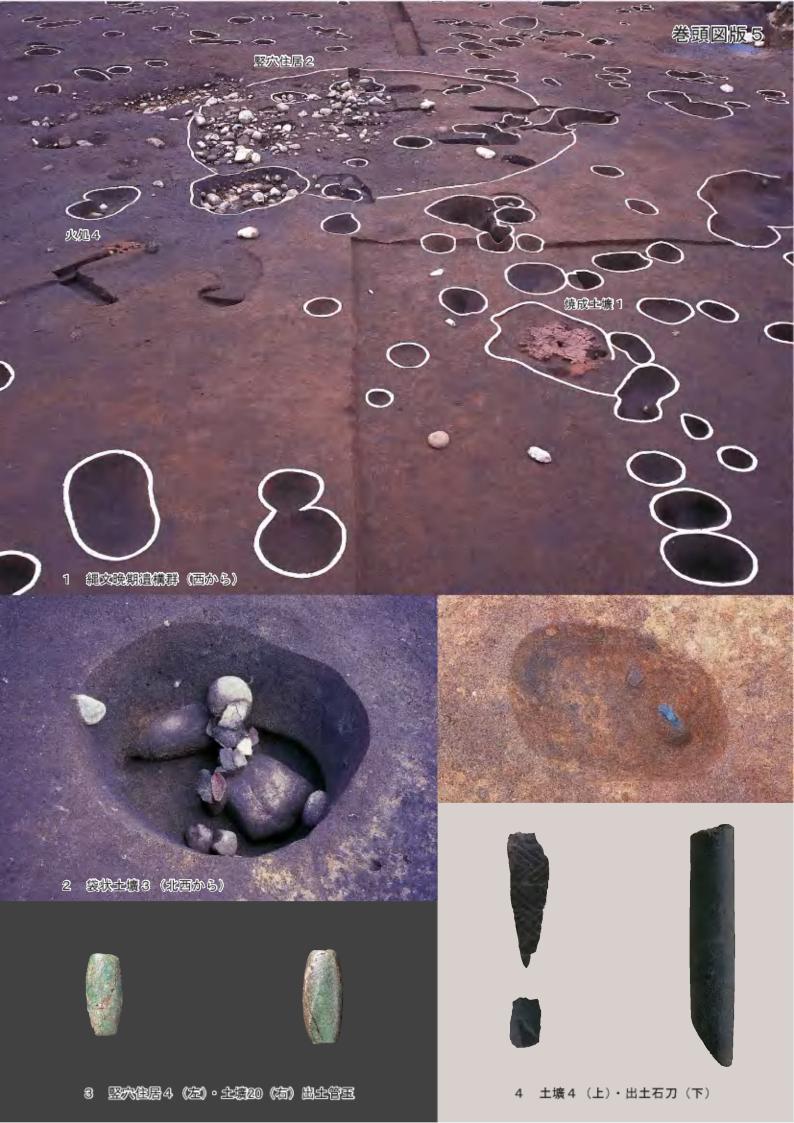
国土交通省苫田ダム工事事務所 岡山県教育委員会













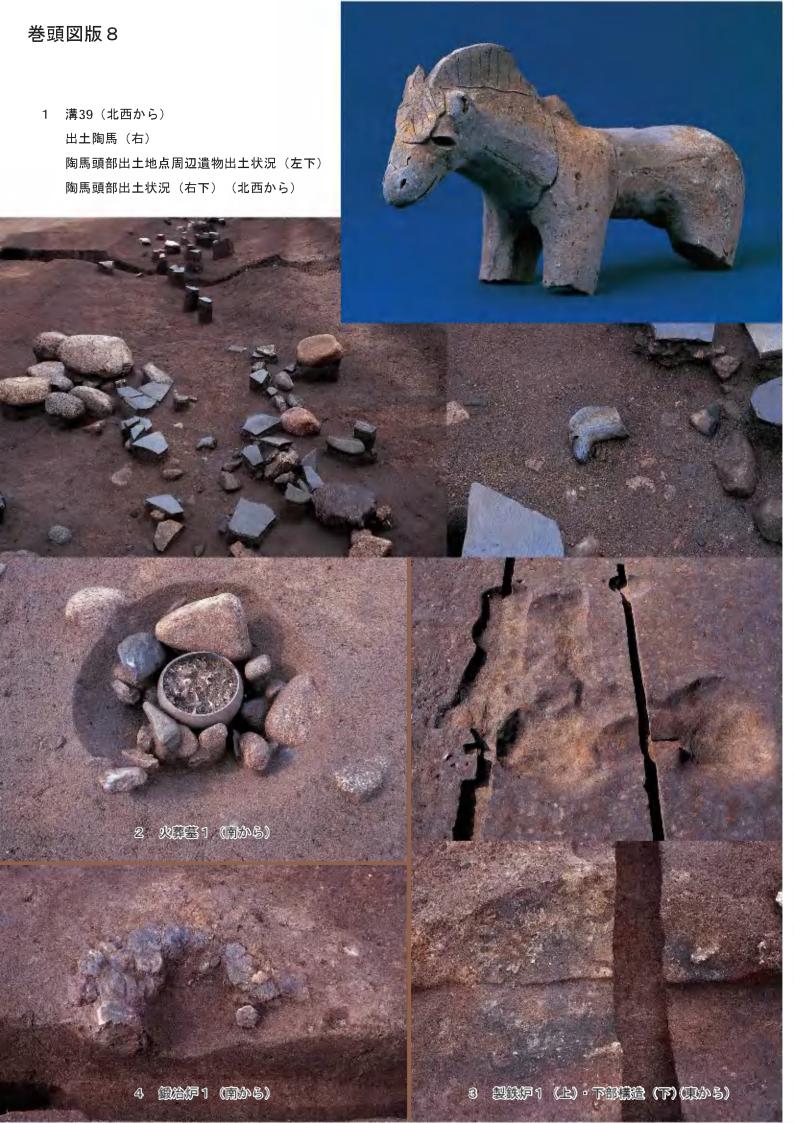




1 久田原古墳群(南から)



2 竪穴住居29とカマド(東から)





苫田ダムは、吉井川水系吉井川に建設される多目的ダムであり、完成後は流域の抜本的な治水対策として、また、将来を担う貴重な水源として流域の発展と豊かで安全快適な暮らしの実現に大きく貢献する事が期待されます。

国土交通省(旧建設省)では、昭和47年から実施計画調査を開始し、昭和56年度からは 建設事業に着手しました。

以来、多くの関係者の皆様のご理解とご協力を頂きながら事業を進め、平成16年度の完成を目指して事業の進捗に鋭意努力しております。

本ダムの完成によって水没する奥津町箱、河内、黒木、久田の各地区は、久田原遺跡・城峪城跡をはじめとする多数の遺跡があることから、本事業に先立ち岡山県教育委員会と協議を重ね、ダムの湛水等によって影響のある遺跡部分についての記録保存を行うため、委員会に発掘調査を委託してまいりました。

この調査によって、当該地区は、縄文時代の終わり頃から中世にかけての、県北有数の 集落が発掘され、縄文時代の集落、古墳群、古代から中世の鉄関連の遺構・遺物など、県 内でも注目される考古資料が発見されるに至りました。

これらの遺跡発掘調査の貴重な記録である本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深める一助となり、また、学術・文化等のために広く活用されることを心から期待致します。

末筆ながら、この発掘調査ならびに本書の編集にあたられた岡山県教育委員会をはじめ とする関係者各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成16年3月

 苫田ダムは、吉井川の上流、奥津町南部から鏡野町の一部にまたがる一帯に計画された 多目的ダムで、昭和56年度から国土交通省(旧建設省)によりダム建設工事が着手され、 今日に至っています。

岡山県教育委員会は、ダム建設によって影響を受ける埋蔵文化財の保護保存のため、昭和62年以来関係各課と協議を重ね、とくに、ダムによる水没部分、あるいは湖岸道路などによってやむなく削平を受ける部分につきましては、平成7年度から記録保存の措置を講じてまいりました。

本書は平成8~12年度まで調査を実施し、平成13・14年度の2か年にわたって整理・報告書作成を行った久田原遺跡を収載しております。そして、苫田ダム関連遺跡の発掘調査報告書としては第2冊目にあたります。

久田原遺跡は、旧吉井川の氾濫や沖積作用の繰り返しによって育まれた肥沃な平野に営まれた、縄文時代の終わり頃から中世にかけての、県北有数の大きな集落の一つです。調査は、当初予想していた調査面積を遥かに上回る78,000㎡余りの大きな規模となり、それとともに、各時代のおびただしい遺構と遺物が発見されています。なかでも、縄文時代晩期の竪穴住居、弥生時代中期の集落および鉄製品の出土、新発見の古墳12基や古代・中世の掘立柱建物群160棟余りの発見、さらには鉄関連遺構・遺物の検出など、県下でも注目される多くの新事例が明らかとなっています。

本報告書が、文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となることを願ってやみません。

発掘調査の実施や報告書の作成にあたりましては、苫田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から有益な御助言と御指導を賜り、また、国土交通省苫田ダム工事事務所をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

岡山県古代吉備文化財センター 所長 正岡睦夫

### 例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が苫田ダム建設事業に伴い、国土交通省と岡山県の委託契約に基づき 実施した、久田原遺跡の発掘調査報告書であり、本報告書は第2分冊にあたる。契約事項は文化課 が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 遺跡は苫田郡奥津町久田下原に所在する。
- 3 遺跡の一次調査および全面調査は、平成8~10年度まで調査第三課が担当し、同11・12年度に調査第二課が引き継ぎ実施した。調査面積は78,340㎡を測る。
- 4 発掘調査および報告書作成にあたっては「苫田ダム建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、次の方々に委員を委嘱した。委員各位からは有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

稲田 孝司(岡山大学)

白石 純(岡山理科大学)

橋本 惣司 (岡山県遺跡保護調査団)

舩津 昭雄(岡山県遺跡保護調査団)

湊 哲夫(津山市郷土博物館)

宗森 英之 (岡山県遺跡保護調査団)

山本 悦世(岡山大学)(平成7~8年度まで)

- 5 調査にあたっては国土交通省苫田ダム工事事務所をはじめ、奥津町・奥津町教育委員会の関係各位から多大なる御協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。
- 6 本書の作成は、平成13~14年度の2年にわたって実施した。初年度は岡山県古代吉備文化財センターで、次年度は岡山市西川原に新たに設置した整理事務所において実施した。遺構・遺物の整理は同文化財センター職員があたり、初年度は江見正己・根木智宏・佐藤寛介の3名が、次年度は伊藤晃・江見正己・岡本寛久・弘田和司・蛯原啓介・河合忍が担当し、全体の編集は江見が行った。
- 7 本書の執筆は、発掘担当者および整理担当者があたり、文責はそれぞれ文末に記した。
- 8 遺物に関する鑑定・同定については次の方々および機関に依頼し、有益な教示を得、一部の成果 については報告文をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。

鉄滓鑑定・分析 大澤正己(株式会社九州テクノリサーチ・TACセンター)

陶磁器鑑定 大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)

胎土分析 白石 純(岡山理科大学)

石材鑑定 妹尾 護(倉敷芸術科学大学)

樹種鑑定 パリノ・サーヴェイ株式会社

火葬骨鑑定 松下孝幸(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)

炭化種子塊鑑定 松谷暁子(東京大学) 石材産地同定 藁科哲男(京都大学)

- 9 遺物写真については江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 10 本書に記載した出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)に保管している。

### 凡例

1 本報告書に用いた高度値は海抜高であり、方位は地形図および全体図などは平面直角座標第V系の座標北を示し、古代以降の遺構図については磁北と座標北を併記した。そのほか特に示さない限り磁北であり、遺跡付近の磁北偏差は西偏6°30′を測る。

また、平成14年4月から経緯度の基準が世界測地系へと移行しているが、本書では日本測地系に 準拠している。

- 2 グリッドは奥津町箱の北西に位置する $X = -92.0 \, \text{km}$ 、 $Y = -41.2 \, \text{km}$ を基準とし、それぞれの軸上に  $100 \, \text{m}$  ごとに $0 \sim 50$ 、および $A \sim U$ を付す。さらに、 $100 \, \text{m}$  を10分割し、 $Aa \sim Aj$ 、 $0.01 \sim 0.09$ のように小文字および半角数字で表している。なお、グリッドの基本杭は北西の杭としている。
- 3 図面の縮尺については明記しており、一部例外があるものの次のように統一している。

遺構 竪穴住居1/60 掘立柱建物1/60、1/100 土壙墓・土壙1/30

遺物 土器1/4 土製品・金属器1/3 石製品1/2、1/3、1/8

4 全体図では遺構名を次のように略称を用いている。

竪穴住居:住 掘立柱建物:建 柱穴列:列 土壙墓:墓 袋状土壙:袋

焼成土壙:焼 土壙:土 柱穴:P

5 掲載遺物番号については遺跡ごとに土器、土製品、金属器、石製品、木製品、ガラス製品に分け て通し番号を付け、土器以外については次の略号を番号の前に付している。

土製品C 金属製品M 石製品S 木製品W

- 6 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性のあることを示す。
- 7 掲載した遺構上の点描等は次の範囲を示すものである。



被熱(強)



被熱(中)



被熱 (弱)



븞

8 遺構一覧表の土壙などで、断面形は立ち上がり形態が I : 袋状、 II : 筒状、 II : 逆台形を表し、床面が a : 平坦なもの、b : 中央が窪むもの、c : 中央が高くなるもの、d : 溝が巡るもの、e : 凹凸が著しいものを表すこととした。

# 目 次

(第1	分冊)
巻頭	図版
序	
例	言
凡	例

	上炉
$\vdash$	レント

目次		
第1章	発掘調査の経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第1頁	<b>節 調査の経過と体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</b>	1
1	調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	調査の体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
第2頁	管整理の経過と体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
1	整理の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
2	整理の体制 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	12
第2章	久田地区の地理的歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
第3章	発掘調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
第1頁	遺跡全体の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
第2頁	7 縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
1	概要	
2	竪穴住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	31
3	袋状土壙 ······	38
4	焼成土壙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	43
5	土壙 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	46
6	火処	66
7	溝	67
8	土器溜まり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
9	河道 •••••	71
10	遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第3頁	第 弥生時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	13
1	概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	13
2	竪穴住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	24
3	掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	56
4	土器棺	61
E	代平土塘	60

6	土壙 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	164
7	火処 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	183
8	水田 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	185
9	溝	185
10	窪地 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	197
11	河道 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	197
12	洪水砂関連遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	200
13	遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	203
第4頁	古墳時代集落の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	215
1	概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	215
2	竪穴住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	226
3	掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	243
4	土壙 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	244
5	溝	250
6	河道	252
7	窪地 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	261
8	遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	270
第5頁	5 久田原古墳群 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	273
1	概要	273
2	久田原 1 号墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	275
3	久田原 2 号墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	275
4	久田原 3 号墳 ••••••	279
5	久田原 4 号墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	280
6	久田原 5 号墳 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	282
7	久田原 6 号墳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	285
8	久田原 7 号墳 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
9	久田原 8 号墳 ••••••	
10	久田原 9 号墳 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	294
11	久田原10号墳 ••••••	
12	久田原11号墳 ······	297
13	久田原12号墳 ••••••	299
14	土器棺 ••••••	
15	箱式石棺 •••••	
16	土壙墓 ••••••	305
(第2分		
第6頁	市 古代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
1	概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
2	竪穴住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	324

3	掘立柱建物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	330
4	柱穴列 ••••••	384
5	製鉄炉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	386
6	鍛冶炉 •••••	387
7	火葬墓 •••••	388
8	土壙 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	389
9	满 ·····	398
10	格子溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	406
11	<b>土器溜まり</b> ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	408
12	遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	409
第7節	i 中世の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	415
1	概要 ************************************	415
2	掘立柱建物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	439
3	柱穴列 ••••••	513
4	鍛冶工房 ••••••	515
5	鍛冶炉 ************************************	520
6	土壙墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	526
7	竪穴遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	536
8	土壙 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	537
9	溝	583
10	河道 ••••••	595
11	落ち込み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	595
12	窪地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	598
13	柱穴 ······	602
14	遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	604
第4章	まとめ ······	613
第1節	5 縄文時代後期の土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	613
1	後期土器の出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
2	土器溜まり1出土土器群 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
3	河道 2 上流部最下層出土土器群 •••••••	617
4	久田原遺跡出土後期土器群の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
5	二つの土器群に前後する後期土器と今後の問題点 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	625
第2節	i 縄文時代の石器について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	627
1	はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
2	主要器種の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	627
3	器種組成からみた久田原遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	632
4	まとめ ······	
第3節	う 弥生土器と弥生集落・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	635

1	弥生土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	635
2	2 集落について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	641
第4	4節 弥生時代の石器・鉄器・玉生産について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	645
1	石器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	645
2	2 鉄器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	648
3	3 玉生産について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	650
第5	5節 古墳時代後期以降の墓制について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	653
1	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	653
2	2 古墳群・墓の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	653
3	3 横穴式石室墳周辺の小規模埋葬施設について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	655
4	日 石室主軸・埋葬頭位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	655
5	5 おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	656
第6	5節 7~8世紀にかけての集落について ······	657
1	久田原遺跡の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	657
2	2 周辺遺跡の状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	661
3	3 建物規模からみた古代集落 ····································	662
4	! まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	663
第7	7節 中世の久田原遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	666
1	集落の構造 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	666
2	2 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	671
3	3 集落の性格 ······	673
遺構一	一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	677
遺物観	見察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	692
掲載遺	adda adda adda adda adda adda adda add	755
(第3)	分冊)	
付載	自然科学による鑑定・分析	
1	岡山県奥津町久田原遺跡出土の奈良時代火葬骨・・・・・・・ 松下孝幸・・・・・・	759
2	久田原遺跡出土炭化種子塊の識別・・・・・・・ 松谷暁子・・・・・・	765
3	奥津町久田原遺跡出土の結晶片岩様緑色管玉、碧玉製剥片の産地分析・・ 藁科哲男・・・・・・	771
4	久田原遺跡出土サヌカイト製石針の原材産地分析・・・・・・・ 藁科哲男・・・・・・	794
5	久田原遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査・・・・・・・ 大澤正己・・・・・・	
6	久田原遺跡出土土器の胎土分析・・・・・・・・・・・・・・・・・ 白石 純・・・・・・	907

写真図版

報告書抄録

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1	1	遺跡遠景(南上空から)	巻頭図版7	1	久田原占墳群(南から)
	2	遺跡遠景(南西上空から)		2	竪穴住居29とカマド(東から)
巻頭図版2	1	北部中央から中央部北西	巻頭図版8	1	溝39(北西から)
		(北上空から)			出土陶馬(右)
	2	中央部北東(北東上空から)			陶馬頭部出土地点周辺遺物出
巻頭図版3	1	中央部東(北上空から)			土状況(左下)
	2	中央部東(南上空から)			陶馬頭部出土状況(右下)
巻頭図版 4	1	中央部(東上空から)			(北西から)
	2	南部南端(西上空から)		2	火葬墓1(南から)
巻頭図版 5	1	縄文晩期遺構群(西から)		3	製鉄炉1 (上)・下部構造(下)
	2	袋状土壙3(北西から)			(東から)
	3	竪穴住居4(左)・土壙20(右)		4	鍛冶炉1(南から)
		出土管玉	巻頭図版 9	1	鍛冶関連遺物
	4	上壙14(上)・出上石刀(下)		2	上壙墓17出上鏡
巻頭図版6	1	竪穴住居15(北から)		3	土壙墓14関連遺物
	2	弥生時代中期出土遺物		4	掘立柱建物110周辺(南から)

# 図目次

第1章 発掘調査の経緯	第16図	縄文時代晚期下層遺構全体図②(1/1,500)
第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000) 1		23
第2図 遺跡周辺位置図(1/200,000) 1	第17図	縄文時代後期遺構全体図③ (1/1,500) · 24
第3図 苫田ダム関連遺跡(1/50,000)・・・・・・2	第18図	縄文時代主要遺構部分図① (1/300) *** 25
第4図 苫田ダム周辺遺跡詳細位置図(1/10,000)	第19図	縄文時代主要遺構部分図②(1/300)・・・ 26
2	第20図	縄文時代主要遺構部分図③ (1/300) *** 27
第5図 久田原遺跡周辺地形およびトレンチ位置図	第21図	縄文時代主要遺構部分図④ (1/300) *** 28
(1/4,000) 3	第22図	縄文時代主要遺構部分図⑤ (1/300)・・・ 29
第6図 第一次調査トレンチ柱状図 (縦1/60)・・・ 4	第23図	縄文時代主要遺構部分図⑥ (1/300) *** 30
第7図 発掘調査経過図(1/6,000)・・・・・・・・5	第24図	竪穴住居 1 (1/60) 31
第8図 旧調査区配置図(1/4,000)・・・・・・・・・ 7	第25図	竪穴住居 1 中央炉(1/30)、
第2章 久田地区の地理的歴史的環境		竪穴住居 1 出土遺物(1/4,1/2,1/3)
第9図 調査地周辺の遺跡分布図(1/60,000)・・・ 14		32
第3章 発掘調査の概要	第26図	竪穴住居 2 (1/60) 33
第1節 遺跡全体の概要	第27図	竪穴住居 2 出土遺物① (1/4) ****** 34
第10図 基本土層堆積図(1/120)・・・・・・・・ 18	第28図	竪穴住居 2 出土遺物② (1/2, 1/3) **** 35
第11図 久田原遺跡下層全体図(1/2,500)・・・・・ 19	第29図	竪穴住居 3 (1/60) 35
第12図 久田原遺跡上層全体図(1/2,500)・・・・・ 20	第30図	竪穴住居 3 出土遺物(1/4, 1/3, 1/2)
第2節 縄文時代の遺構と遺物		36
第13図 微高地・河道と主要遺構(1/5,000)・・・ 21	第31図	竪穴住居 4 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/2)
第14図 上層柱状図(1/80)・・・・・・・・・ 21		37
第15図 縄文時代晚期上層遺構全体図①(1/1,500)	第32図	袋状土壙 1 (1/30) ************************ 38
22	第33図	袋状土壙 2 (1/30) ************************* 38
'		

第34図	袋状上壙 3 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・ 39	第82図 上壙30 (1/30) 56
第35図	袋状上壙 4 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・ 39	第83図 上壙31 (1/30) 56
第36図	袋状土壙 5 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・ 40	第84図 土壙32 (1/60) ******** 56
第37図	袋状土壙 6 (1/30) · · · · · 40	第85図 土壙33 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・・・・ 57
第38図	袋状土壙7 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・ 40	第86図 土壙34 (1/30) 57
第39凶	袋状土壙8・9(1/30)・・・・・・・・・41	第87凶 土壙35 (1/30) 58
第40凶	袋状土壙10 (1/30) ***** 41	第88凶 土壙36(1/30)・・・・・・・・・・58
第41図	袋状土壙11 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・ 42	第89凶 土壙37 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・ 58
第42図	袋状土壙12(1/30)・・・・・・・・・・ 42	第90図 土壙38(1/30)・・・・・・・・・ 58
第43図	袋状土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・ 42	第91図 土壙39(1/30)・・・・・・・・・ 59
第44図	袋状土壙14 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・ 43	第92図 土壙40 (1/30)・・・・・・・・・ 59
第45図	焼成土壙 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・ 44	第93図 土壙41 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)・・ 59
第46図	焼成土壙 2 (1/30) ・・・・・・・・・・・・・・・ 44	第94図 土壙42(1/30)・・・・・・・・・・・・・60
第47図	焼成土壙 3 (1/30) … 44	第95図 土壙43(1/30)・・・・・・・・・・・・・60
第48図	焼成土壙 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・ 45	第96図 土壙44(1/30)・・・・・・・・・・・・・・60
第49図	焼成土壙 5 (1/30) … 45	第97図 土壙45 (1/30) … 61
第50図	焼成土壙 6 (1/30) … 46	第98図 土壙46 (1/30) ********* 61
第51図	焼成土壙 7 (1/30) … 46	第99図 土壙47 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・ 61
第52図	焼成上壙8(1/30)・・・・・・・・・・・・・46	第100図 上壙48 (1/30)・出上遺物 (1/2)・・・・・ 62
第53図	上壙 1 (1/30) ******* 46	第101図 上壙49 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・・・ 62
第54図	土壙 2 (1/30) … 46	第102図 土壙50 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・ 63
第55図	土壙 3 (1/30) ********* 47	第103図 土壙51 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・ 63
第56図	土壙 4 (1/30) · · · · · 47	第104図 土壙52 (1/30) ****** 64
第57図	土壙 5 (1/30) · · · · · 48	第105図 土壙53 (1/30) 64
第58図	土壙 6 (1/30) 48	第106図 土壙54 (1/30)・・・・・・・・・・・ 64
第59図	土壙 7 (1/30) · · · · · 48	第107図 土壙55 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・ 65
第60図	土壙 8 (1/30) 48	第108図 土壙56 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・ 65
第61図	上壙 9 (1/30) • • • • • • 49	第109図 上壙57 (1/30)・・・・・・・・・・・ 66
第62図	上壙10 (1/30) · · · · · 49	第110図 火処1 (1/30)・・・・・・・・・・ 66
第63図	土壙11 (1/60) · · · · · 49	第111図 火処2 (1/30) ******* 66
第64図	土壙12(1/30)・遺物出土状況(1/15)・	第112図 火処7 (1/30)・・・・・・・・・・ 66
	出土遺物 (1/3) 50	第113図 火処8 (1/30) 67
第65図	土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・ 51	第114図 溝1 (1/30) 67
第66凶	土壙14 (1/20)・出土遺物 (1/2)・・・・・ 51	第115図 溝2 (1/30)
第67図	土壙15 (1/30) · · · · · 52	第116図 土器溜まり1周辺土層断面図 (1/60)・67
第68図	土壙16(1/30)・・・・・・ 52	第117図 土器溜まり1遺物出土状況(1/30)・・・ 68
第69図	土壙17(1/30)・・・・・ 52	第118図 土器溜まり1出土遺物① (1/4)・・・・・ 69
第70図	土壙18 (1/30) · · · · · 52	第119図 十器溜まり1出土遺物② (1/4)・・・・・ 70
第71図	土壙19(1/30)・・・・・・・・・・ 53	第120図 土器溜まり1出土遺物③(1/4,1/3)・・71
第72図	土壙20 (1/30)・出土遺物 (1/2)・・・・・・ 53	第121図 河道 1・2 中流部土層断面図 (1/120)・72
第73図	土壙21(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・ 54	第122図 河道断面·遺物山土位置 (1/6,000) · · 72
第74図	土壙22 (1/30) · · · · · · 54	第123図 河道1出土遺物 (1/4) · · · · · · 73
第75図	土壙23(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・ 54	第124図 河道1・2分岐部、
第76図	土壙24(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・ 54	2上流部出土遺物① (1/4) · · · · · · · 73
第77図	土壙25(1/30)・・・・・・・・・・・・ 55	第125図 河道1・2分岐部、
第78図	土壙26(1/30)・・・・・・・・・・・・55	2上流部出土遺物② (1/4) · · · · · · · · 74
第79図	上壙27(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55	第126図 河道 2 上流部上層断面図 (1/120) *** 75
第80図	土壙28(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55	第127図 河道 2 上流部出土遺物①
第81図	土壙29(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・ 56	〈上層:晚期〉(1/4)・・・・・・・・ 76
NIGIE	17,007	T-\E . \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \\ \

第128図	河道2上流部出上遺物②		(1/4,1/3) 99	)
	〈中・下層:後期〉(1/4)・・・・・・・・ 77	第154図	微高地1出上遺物②	
第129図	河道2上流部最下層遺物分布および接合		<上~中層:暗褐色土・褐色砂層>	
	関係(1/200)・・・・・・・・・・ 77		(1/3) 100	)
第130図	河道2上流部出土遺物③	第155図	微高地1出土遺物③	
	〈最下層:後期〉(1/4) • • • • 78		<上~中層:暗褐色土・褐色砂層>	
第131図	河道2上流部出土遺物④		(1/3,1/2) 101	l
	〈石器〉(1/3,1/2) ・・・・・・・・・ 79	第156図	微高地1出土遺物④	
第132図	河道2中流部土層断面(1/150) 80		<下層:黒褐色土層> (1/4,1/3) ••• 102	2
第133図	河道2出土遺物①	第157図	微高地2南東部土層断面図 (1/120)・103	3
	<上層:暗褐色土層> (1/4) • • • • • 80	第158図	微高地 2 南東部斜面出土遺物①	
第134図	河道2中流部出土遺物②		<晩期上~中層> (1/4) ****** 104	1
	<中層:褐色砂層> (1/4,1/3,1/2) *** 81	第159図	微高地 2 南東部斜面出土遺物②	
第135図	河道2中流部遺物出土範囲(1/150)、		<晩期下層・最下層、後期> (1/4)・ 105	į
	山土遺物③<下層:黒褐色土層上面>	第160図	微高地 2 南東部斜面出土遺物③	
	(1/4) 82		<石器> (1/3,1/2) 106	)
第136図	河道2中流部出土遺物④	第161図	微高地 2 出土遺物①	
	<下層:黒褐色土層上面> (1/4)・・・・ 83		<中~下層:褐色砂・黒褐色土>	
第137図	河道2中流部出上遺物⑤		(1/3) 107	7
	<下層:黒褐色上層上面> (1/4)・・・・ 84	第162図	微高地2出上遺物②	
第138図	河道2中流部出土遺物⑥		<下層:黒褐色土>(1/3, 1/2)・・・・ 108	
	<下層:黒褐色土層上面>	第163図	遺構に伴わない遺物①<晩期>(1/4)・109	
	(1/4,1/3,1/2)	第164図	遺構に伴わない遺物②<晩期>(1/4)・11(	
第139図	河道 2 中流部出土遺物⑦	第165図	遺構に伴わない遺物③<後期>(1/4)・111	L
foto	<下層:黒褐色土層> (1/4) · · · · · · · · · 86	第166図	遺構に伴わない遺物④	_
第140図	河道2中流部出土遺物⑧	hoter as hoter	<各地点出土石器> (1/3,1/2) · · · · · 112	2
Mr. a. a. Dort	<下層:黒褐色土層> (1/4,1/3) · · · · 87	第3節		
第141図	河道2下流部出上遺物①	第167図	弥生時代遺構全体図①(1/4,000) · · · · 113	
설득 1.4.0 57	<上~中層:第1~3層> (1/4)···· 88	第168図		
第142図	河道2下流部出土遺物②	第169図	弥生時代遺構全体図③(1/2,000) · · · · 115	
绺14007	<下層:第4層> (1/4) · · · · · · · · 89	第170図	弥牛時代主要遺構部分図①(1/500)・・ 116	
第143図		第171図	弥生時代主要遺構部分図②(1/400) · · 117	
第144図	<下層:第4層> (1/4) · · · · · · 90		弥生時代主要遺構部分図③(1/400) · · 118	
<del>第144</del> 凶	河道 2 下流部出土遺物④ <下層:第 4 層> (1/4) · · · · · · 91	第173図 第174図	弥生時代主要遺構部分凶④(1/400) · · 119 弥生時代主要遺構部分凶⑤(1/400) · · 120	
第145図	河道2下流部出土遺物⑤	第174回	弥生時代主要遺構部分図⑥(1/400)・・ 123	
为14J囚	<下層:第4層> (1/4) · · · · · 92	第176図	弥生時代主要遺構部分図⑦(1/400) · · 123	
第146図	河道2下流部出土遺物⑥	第170回	弥生時代主要遺構部分図®(1/400)・・ 123	
MULICK	<下層:第4層> (1/4) · · · · · 93	第178図	竪穴住居 5 (1/60) · 出土遺物	,
第147図	河道2下流部出土遺物⑦	ултод	(1/4) 124	1
N7111 🖂	<下層:第5層> (1/4)······ 94	第179図	竪穴住居 6 (1/60)・出土遺物	L
第148図	河道2下流部山土遺物8	7,7,7,0	$(1/4,1/2) \cdots 125$	ĩ
), <b>31 10</b>	<石器> (1/3,1/2) · · · · · 95	第180図	竪穴住居 7 (1/60)· 山土遺物	•
第149図	河道 3 土層断面図 (1/100) ・・・・・・・ 96	714-1-1	(1/3,1/4)	ò
第150図	河道 3 出土遺物 (1/4) ・・・・・・・・ 97	第181図	竪穴住居8 (1/60)・出土遺物	
第151図	河道 3 出土遺物 < 石器 > (1/3) • • • • • 98		(1/4)	7
第152図	河道 4 上層断面図 (1/100) ****** 98	第182図	竪穴住居9(1/60)・・・・・・・・・ 128	
第153図	微高地1出土遺物①	第183図	竪穴住居9出土遺物① (1/4) ***** 129	
	<上~中層:暗褐色土・褐色砂層>	第184図	竪穴住居9出土遺物②	
		•		

	(1/3,1/2,1/1)	130	第225図	袋状上壙15 (1/30)・出上遺物	
第185図	竪穴住居10(1/60)・出上遺物			(1/4)	162
	(1/2,1/3,1/4)	131	第226図	袋状土壙16 (1/30) ************************************	163
第186図	竪穴住居11 (1/60) ************************************	132	第227図	袋状土壙17 (1/30)・出土遺物	
第187図	竪穴住居12(1/60)・出土遺物			(1/4)	163
	(1/4,1/2)	132	第228図	土壙58 (1/30)・出土遺物	
第188図	竪穴住居13 (1/60) ************************************	133		(1/4)	164
第189図	竪穴住居14 (1/60) ************************************	133	第229図	土壙59 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	164
第190図	竪穴住居14出土遺物(1/4)・・・・・・・	134	第230図	土壙60 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・	164
第191図	竪穴住居15 (1/80) ************************************	135	第231図	土壙61 (1/30)・出土遺物① (1/3)・・	165
第192図	竪穴住居15 a ~ f (1/120)・・・・・・・	136	第232図	土壙61出土遺物② (1/4) ・・・・・・・・・・・	166
第193図	竪穴住居15 a~d(1/120)・・・・・・・	136	第233図	土壙62 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・	166
第194図	竪穴住居15 e · f (1/120) · · · · · · · ·	137	第234図	土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・	167
第195図	竪穴住居15出土遺物①(1/4)・・・・・・	138	第235図	土壙64(1/30)・山土遺物(1/4)・・・・	167
第196図	竪穴住居15出土遺物② (1/3) ******	139	第236図	土壙65 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	167
第197図	竪穴住居15出土遺物③(1/2)・・・・・・	140	第237図	土壙66 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・	167
第198図	竪穴住居15出土遺物④(1/2,1/3)・・・	141	第238図	土壙67 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	167
第199図	竪穴住居15出土遺物⑤ (1/3) ******	142	第239図	土壙68(1/30)・出土遺物(1/4)・・・・	168
第200図	竪穴住居16(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・	142	第240図	上壙69(1/30)・出上遺物(1/4)・・・・	168
第201図	竪穴住居16出上遺物①(1/4)・・・・・・	143	第241図	上壙70 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	169
第202図	竪穴住居16出土遺物②(1/4,1/2)・・・	144	第242図	土壙71 (1/30)	169
第203図	竪穴住居17(1/60)・出土遺物		第243図	土壙71出土遺物 (1/4) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	170
	(1/4)	144	第244図	土壙72 (1/30)	171
第204図	竪穴住居18(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	145	第245図	土壙73 (1/30)	171
第205図	竪穴住居18出土遺物①(1/4)・・・・・・	146	第246図	土壙74(1/30)・出土遺物(1/4)・・・・	171
第206図	竪穴住居18出土遺物②(1/2,1/3)・・・	147	第247図	土壙75 (1/30)	171
第207図	竪穴住居19 (1/60)	148	第248図	土壙76 (1/30)	171
第208図	竪穴住居19 a ・ b (1/120)・・・・・・・・	149	第249図	上壙77 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・・	172
第209図	竪穴住居19出上遺物①(1/4)・・・・・・	150	第250図	上壙78 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・・	
第210図	竪穴住居19出土遺物②(1/4,1/2)・・・		第251図	土壙79(1/30)・出土遺物(1/4)・・・・	
第211図	竪穴住居19出土遺物③(1/3)・・・・・・・	152	第252図	土壙80 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・	173
第212図	竪穴住居19出土遺物④(1/4,1/3)・・・	153	第253図	土壙81 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第213図	竪穴住居20(1/60)・出土遺物①		第254図	土壙81出土遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	(1/3)	153	第255図	土壙82 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・	
第214図	竪穴住居20出土遺物②(1/4)・154		第256凶	土壙83 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第215図	竪穴住居21(1/60)・出土遺物		第257図	土壙84 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	(1/4)	155	第258図	土壙84出土遺物 (1/3)	
第216図	竪穴住居22(1/60)・出土遺物		第259図	土壙85 (1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	(1/4)	155	第260図	土壙86 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・	
第217図	竪穴住居23(1/60)・出土遺物		第261図	土壙87(1/30)・出土遺物(1/4)・・・・	
	(1/4)	I .	第262図	土壙88(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第218図	掘立柱建物 1 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第263図	土壙89(1/30)・出土遺物(1/4)・・・・	
第219図	掘立柱建物 2 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第264図	土壙90(1/30)・山土遺物(1/4)・・・・	
第220図	掘立柱建物 3 (1/60) ************************************		第265図	土壙91(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第221図	掘立柱建物 4 (1/60) ************************************		第266図	土壙92(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	178
第222図	掘立柱建物 5 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	I .	第267図	土壙93 a · b (1/30) · 出土遺物	170
第223図	掘立柱建物 6 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	101	\$\$000W	(1/4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	178
第224図	土器棺1・2 (1/20)・出土遺物	100	第268図	土壙94(1/30)・出土遺物	170
	(1/4)	162		(1/4,1/3)	179

第269図	上壙95(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	100	<b>空016回</b>	溝29(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	106
	上壙96 (1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第316図	溝30 (1/30) ************************************	
第270図			第317図		
第271図	土壙97(1/30)・出土遺物(1/4)・・・・		第318図		
第272図	土壙98(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第319図	溝32(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第273図	土壙99(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第320図	窪地 1 (1/60)·出土遺物 (1/4)····	
第274図	土壙100 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第321凶	河道 5 (1/80)	
第275図	土壙101 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	I	第322凶	河道 5 出土遺物 (1/4) ************************************	
第276図	土壙102 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	I	第323図	河道6 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・・	
第277図	土壙103 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第324図	河道 7 ①(1/80,1/120) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	199
第278図	土壙104 (1/30) • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		第325図	河道 7 ② (1/80)・出土遺物	
第279図	土壙105 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			(1/3,1/4)	200
第280図	土壙106 (1/30) • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	l	第326図	洪水砂関連断面(1/120)・・・・・・・・・・	201
第281図	火処 9 (1/30)	183	第327図	洪水砂関連遺物(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	202
第282図	火処10 (1/30)	183	第328図	遺構に伴わない遺物① (1/4)・・・・・・	203
第283図	火処11 (1/30)	184	第329図	遺構に伴わない遺物② (1/4)・・・・・・	204
第284図	火処12 (1/30) ************************************	184	第330図	遺構に伴わない遺物③ (1/4)・・・・・・・	205
第285図	火処13 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	184	第331図	遺構に伴わない遺物④ (1/4)・・・・・・・	206
第286図	火処14 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第332図	遺構に伴わない遺物⑤ (1/4)・・・・・・・	207
第287図	火処15 (1/30) ************************************	I	第333図	遺構に伴わない遺物⑥ (1/4)・・・・・・・	208
第288図	水田 1 (1/120)・出上遺物		第334図	遺構に伴わない遺物⑦ (1/4,1/3)・・・	
714-44	(1/4,1/2,1/3)	185	第335図	遺構に伴わない遺物® (1/2)・・・・・・・	
第289図	溝 3 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第336図	遺構に伴わない遺物⑨ (1/3,1/2)・・・	
第290図	溝 4 (1/30)・出土遺物① (1/4)・・・・		第337図	遺構に伴わない遺物⑩ (1/3)・・・・・・	
第291図	溝 4 出土遺物②(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第338図	遺構に伴わない遺物⑪	212
第292図	溝 4 出土遺物③ (1/2,1/3) ····································		N1000⊠	(1/3,1/2,1/6)	213
第293図	溝 5 (1/30)		第4節	古墳時代集落の遺構と遺物	210
第294図	溝 6 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・		第339図	古墳時代遺構全体図(1/4,000)・・・・・	215
第295図	構7 (1/30)     1/30)     1/4)     1/4)			古墳時代主要遺構部分図① (1/400)・	
			第340図		
第296図			第341図	古墳時代主要遺構部分図②(1/400)・	
第297図	溝 9 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第342図	古墳時代主要遺構部分図③(1/400)・	
第298図	溝10 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第343図	古墳時代主要遺構部分図④(1/400)・	
第299図	溝11 (1/30)		第344図	古墳時代主要遺構部分図⑤(1/400)・	
第300図	溝12 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・		第345図	占墳時代主要遺構部分図⑥(1/400)・	
第301図	溝13(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第346凶	古墳時代主要遺構部分図⑦(1/400)・	
第302図	溝13出土遺物① (1/4) ************************************		第347凶	古墳時代主要遺構部分図® (1/400)·	
第303図	溝13出土遺物②(1/2,1/3)・・・・・・・・・	192	第348図	古墳時代主要遺構部分図⑨ (1/400)・	
第304図	溝14・15(1/30)・出土遺物		第349図	古墳時代主要遺構部分図⑩ (1/400)・	225
	(1/4,1/2,1/3)		第350図	竪穴住居24(1/80)・カマド(1/30)・	226
第305図	溝16 (1/30)	193	第351図	竪穴住居24出土遺物(1/3,1/4)・・・・・	227
第306図	溝17(1/30)・出土遺物(1/4,1/2)・・	194	第352図	竪穴住居25(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・	228
第307図	溝18 (1/30)	194	第353図	竪穴住居26(1/60)・・・・・・・・・・・・・・・・・	228
第308図	溝19 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	194	第354図	竪穴住居26出土遺物(1/4)・・・・・・・	229
第309図	溝20 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	194	第355図	竪穴住居27(1/60)・出土遺物 (1/4)・	229
第310図	溝21・22 (1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第356図	竪穴住居28(1/60)・出土遺物 (1/4)・	230
第311図	溝23(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	195	第357図	竪穴住居29 (1/60)・カマド (1/20)・	
第312図	溝24(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	195		出土遺物(1/3,1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	231
第313図	溝25(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	I	第358図	竪穴住居30(1/60)・カマド (1/20)・・	
第314図	溝26 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・		第359図	竪穴住居30出土遺物①(1/4,1/6)・・・	
第315図	溝27(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第360図	竪穴住居30出土遺物②(1/3)・・・・・・	
		1			

第361図	竪穴住居31(1/60)・出上遺物 (1/4)・	234	第404図	河道9 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・・ 261
第362図	竪穴住居32(1/60)・出上遺物		第405図	窪地2 (1/60)・出上遺物
	(1/4)	235		(1/4,1/3) 262
第363図	竪穴住居33 (1/60)	236	第406図	窪地3 (1/1,000) · · · · · 263
第364図	竪穴住居34(1/60)・出土遺物		第407図	<b>窪地3南部 (1/500) · · · · · · · · 264</b>
	(1/4)	236	第408図	窪地3A地点土層断面 (1/60) · · · · · 264
第365図	竪穴住居35 (1/60) ************************************	237	第409図	窪地 3 A地点出土遺物 (1/4) · · · · · 265
第366図	竪穴住居35カマド (1/30)・・・・・・・・・	238	第410図	窪地3 B地点土層断面(1/60)・出土遺物
第367図	竪穴住居35埋土上面遺物出土状態			(1/4) 265
	(1/20)	238	第411図	窪地3℃・D地点土層断面(1/60)・
第368図	竪穴住居35出土遺物(1/4,1/3)・・・・・	239		3 C 地点出土遺物 (1/4) · · · · · · 265
第369図	竪穴住居36(1/60)・出土遺物		第412図	窪地3 D地点出土遺物 (1/4) · · · · · 266
	(1/4,1/3)	240	第413図	窪地3 E地点土層断面(1/60)·
第370図	竪穴住居37 (1/60)	241		山土遺物 (1/4) ********* 266
第371図	竪穴住居38 (1/60)	241	第414図	窪地3F地点土層断面(1/60)・出土遺物
第372図	竪穴住居39(1/60)・出土遺物			(1/4) 266
	(1/4)	242	第415図	窪地3G地点土層断面(1/60)·出土遺物
第373図	掘立柱建物 7 (1/60)	243		(1/4) 266
第374図	上壙107 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第416図	窪地 3 出上遺物① (1/4) ****** 267
第375図	上壙108 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第417図	窪地 3 出上遺物② (1/4) 268
第376図	土壙108出土遺物 (1/4) ************************************		第418図	窪地 3 出土遺物③ (1/4,1/3) · · · · · 269
第377図	土壙109 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・		第419図	窪地3出土遺物④ (1/4) · · · · · · 270
第378図	土壙110 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・		第420図	遺構に伴わない遺物① (1/4)・・・・・・ 270
第379図	土壙111 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・		第421図	遺構に伴わない遺物② (1/4)・・・・・・ 271
第380図	土壙112 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第422図	遺構に伴わない遺物③ (1/4,1/3)・・・ 272
第381図	土壙112出土遺物 (1/4) • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		第5節	久田原古墳群
第382図	土壙113(1/30)・出土遺物		第423図	久田原古墳群全体図(1/1,500)・・・・・ 274
	(1/4,1/2)	247	第424図	久田原 1 号墳地形測量図 (1/120)··· 275
第383図	上壙114 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・	247	第425図	久田原 2 号墳主体部 (1/50)······ 276
第384図	土壙115 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・		第426図	久田原2号墳主体部内遺物出土状況
第385図	土壙116 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・			(1/30)・鉄鏃出土状況 (1/3)・・・・・ 277
第386図	土壙117 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・		第427図	久田原 2 号墳出土遺物 (1/4,1/5) · · · 278
第387図	土壙118 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	I	第428図	久田原 3 号墳地形測量図 (1/120)··· 279
第388図	土壙119 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	250	第429図	久田原 4・5 号墳間周溝断面 (1/30)・ 280
第389図	溝33 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・	250	第430図	久田原 4 号墳地形測量図 (1/120)··· 280
第390図	溝34 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・		第431図	久田原 4 号墳主体部 (1/50)······ 281
第391図	溝35 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第432図	久田原 5 号墳地形測量図 (1/150)··· 282
第392図	溝36 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・	251	第433図	久田原 5 号墳周溝 (1/30) ****** 283
第393図	溝37 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第434図	久田原 5 ・ 6 号墳間周溝 (1/30)・・・・ 283
第394図	河道8断面(1/120,1/60) · · · · · · · · · ·		第435図	久田原 5 号墳主体部 (1/50)······ 284
第395図	河道8出土遺物① (1/4)	253	第436図	久田原 5 号墳山土遺物① (1/4)····· 285
第396図	河道8出土遺物② (1/4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第437図	久田原 5 号墳山土遺物②
第397図	河道8出土遺物③ (1/4)		7,	(1/4,1/3,1/2) 286
第398図	河道8出土遺物④ (1/4) ************************************		第438図	久田原 6 号墳地形測量図 (1/120) · · · 287
第399図	河道8出土遺物⑤ (1/4) ************************************		第439図	久田原 6 号墳周溝 (1/30)······· 288
第400図	河道8出土遺物⑥ (1/4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第440図	久口原 6 号墳主体部 (1/30) · · · · · · 288
第401図	河道8出上遺物⑦ (1/4) ************************************		第441図	久田原 6 号墳出上遺物① (1/4) · · · · · 288
第402図	河道8出土遺物⑧ (1/4) ************************************		第442図	久田原6号墳出土遺物②
第403図	河道8出土遺物⑨ (1/3) ************************************		.,	(1/3,1/4) 289
-,- 10 OF				(-, -, -, -, -, -, -, -, -, -, -, -, -, -

第443図 久田原7号墳地形測量図 (1/120) · · · 290 第444図 久田原7号墳周溝 (1/30) · · · · 290 第445図 久田原7号墳周溝内遺物出土状況 (1/30) · · · · 290 第446図 久田原7号墳主体部 (1/30) · · · · 291 第447図 久田原7号墳出土遺物 (1/4,1/2) · · 292 第448図 久田原8号墳主体部 (1/100,1/60) · · 293 第449図 久田原8号墳出土遺物 (1/4) · · · 294 第450図 久田原9号墳主体部 (1/50) · 出土遺物① (1/4) · · · 295 第451図 久田原9号墳出土遺物② (1/4) · · · 296 第452図 久田原10号墳(1/120) · 主体部 (1/50) · · 296 第453図 久田原11号墳地形測量図(1/120) · · 297 第454図 久田原11号墳周溝内遺物出土状況 (1/15) · · · 298 第455図 久田原11号墳周溝(1/30) · · 298 第456図 久田原11号墳出土遺物(1/4,1/3) · · 299	(1/4) · · · · · · · · 300 第459図 上器棺3出上遺物②(1/4) · · · · · 301 第460図 箱式石棺1(1/30)· 出土遺物(1/4,1/3) · · · · · · · · 302 第461図 箱式石棺2(1/30)· · · · · 303 第462図 箱式石棺2周辺出土遺物(1/4) · · · 303 第463図 箱式石棺3(1/30)· · · 304 第465図 箱式石棺4(1/30)· · · 305 第466図 土壙墓1(1/30)· · · · 305 第466図 土壙墓2(1/30)· 出土遺物(1/4) · · 306 第468図 土壙墓3(1/30)· · · · · · 306 第469図 土壙墓3 出土遺物(1/4,1/3)· · · · 307 第470図 土壙墓4(1/30)· 山土遺物(1/4) · · 307 第471図 土壙墓5(1/30)· 山土遺物(1/4) · · 308 第472図 土壙墓6(1/30)· 出土遺物(1/4) · · 308 第473図 土壙墓7(1/30)· 出土遺物(1/4) · · 309 第474図 土壙墓8(1/30)· 出土遺物(1/4) · · 309
第457図 久田原12号墳主体部 (1/50)・出上遺物 (1/4)・・・・・・・・・300 第458図 土器棺3 (1/20)・出土遺物①	第475図 上壙墓8出上遺物 (1/4) · · · · · · · · 310 第476図 上壙墓9 (1/30) · · · · · · · 310
写真	目次
第1章 発掘調査の経緯 写真1 平成9年度現地説明会および 刊行されたパンフレット1・・・・・7 写真2 平成11年度現地説明会・・・・・8 写真3 苫田ダム関連遺跡整理事務所・・・・11 写真4 整理作業状況(遺物の復元・実測・記録)・・・・・・・・12 第3章 発掘調査の概要 第3節 弥生時代の遺構と遺物	写真5 掘立柱建物3・4 (東から)・・・・・ 159 第4節 古墳時代集落の遺構と遺物 写真6 竪穴住居35清掃およびカマド検出作業 (南から)・・・・・・ 238 写真7 溝35検出状況(西から)・・・・・ 251 写真8 河道8全景(南から)・・・・ 252 第5節 久田原古墳群 写真9 久田原3~7号墳(南上空から)・・・・ 273
表目	]次
第1章 発掘調査の経緯 第1節 調査の経過と体制 表1 発掘調査経過表・・・・・・・・・・・5 表2 久田原遺跡発掘担当者一覧・・・・・・・・・6	表3 対策委員会議および現地説明会記録 ・・・・・ 8 第2節 整理の経過と体制 表4 整理担当者一覧 ・・・・・・・・・・ 11

### 第1章 発掘調査の経緯

#### 第1節 調査の経過と体制

#### 1 調査の経過

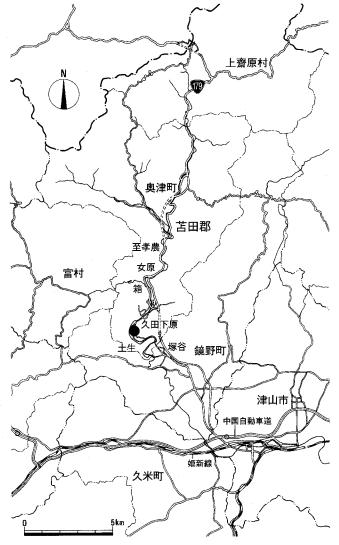
奥津町の南端に位置する久田下原地区は、吉井川東岸に広がるなだらかな河岸段丘を利用して豊かな農地が開かれるとともに、原共栄や夏栗などの集落は多くの家々が軒を連ねる賑わいを見せ、役場や診療所がおかれるなど奥津町の中心的役割を果たしていた。

昭和32年、この久田地区に苫田ダムの建設計画が公表されて以来、長期にわたり協議、交渉が続けられたが、平成3年にはダム建設を前提とする町政の方針が示され、平成6年の町議会によって正式に決定された。

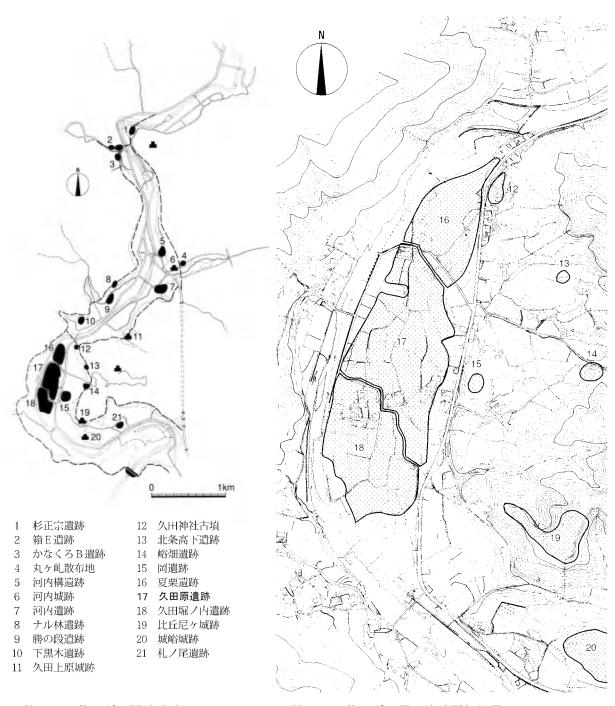
こうした状況を受けて、岡山県教育委員会では、苫田ダムとその関連事業にかかわる遺跡の所在を把握するため、岡山県遺跡保護調査団の協力のもとに、平成5年度に国庫補助を受けて町全域の遺跡分布調査を実施した。この調査で確認された奥津町内の遺跡は131か所を数え、それ以前に知られていた遺跡の3倍にものぼった。



第1図 遺跡位置図(1/2,000,000)



第2図 遺跡周辺位置図(1/200,000)



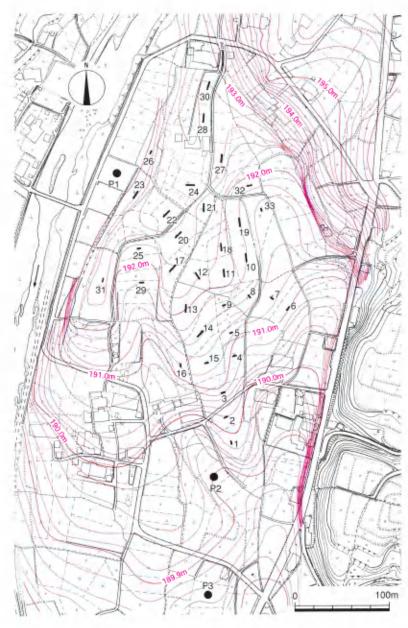
第3図 苫田ダム関連遺跡(1/50,000)

第4図 苫田ダム周辺遺跡詳細位置図(1/10,000)

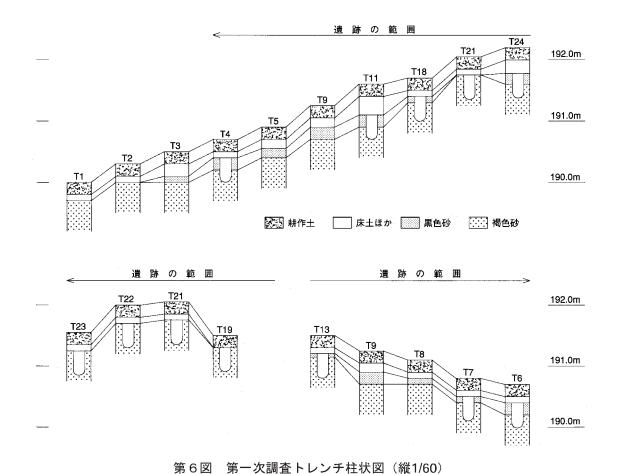
本書に収載した久田原遺跡もこの調査で新たに確認された遺跡の一つであり、夏栗と原共栄の間に 広がる水田で土器の散布が認められたことから、中世の集落跡として知られるようになった。この周 辺の微地形を観察すると(第5図)、吉井川から南東に向かって旧河道の痕跡と見られる幅20mほど の低位部が帯状に延びるとともに、この旧河道によって形成された高さ2mほどの段丘崖が夏栗から 国道179号に沿って連なっている。遺跡は、この低位部と吉井川とに挟まれた微高地上(海抜191m) に立地しており、その範囲は南北200m、東西150mの18,700㎡あまりと想定されていた。

こうした成果をもとに、平成8年11月~平成9年1月、この遺跡の範囲と構造を探る目的で調査員3名により第一次調査を実施することとなった。当初、周知されていた遺跡の範囲に16か所のトレン

チを計画していたが、調査前に実施した周辺の踏査によって遺物の散布がさらに北から西へ広がっていることが確認されたため対象範囲を広げてトレンチを設定し、計33か所(500㎡)の掘り下げを行った。その層序について見ると(第6図)、厚さ25cmほどある耕作土の下には黒色をなす砂質土層が見られたが、微高地の斜面にあたる東側では20~30cmと厚く堆積するものの、頂部にあたる北側ではすでに削平されたようで地山と思われる砂礫層が耕作土直下に広がっていた。遺構の多くはこの黒色砂質土から掘りこまれたものと思われるが、埋土の識別が難しい古代以前の遺構は砂礫層の上面で検出されている。さて、中世の遺構・遺物は微高地全域で検出されたが、とくに微高地の東側(T6・7)に集中する傾向が認められた。また、「金山」の字名が残る北西側(T22・24)では羽口片を含む40kgもの鉄滓が出土し、鉄生産にかかわる遺構の存在が推測された。微高地の中央付近(T9~14・17・18)では奈良時代の遺物が多く出土し、この周辺に同時代の遺構の中心があるものと判断された。さらに、その北側(T27・28)では古墳時代後期の遺物を含む竪穴住居や柱穴が検出され、こ



第5図 久田原遺跡周辺地形およびトレンチ位置図(1/4,000)

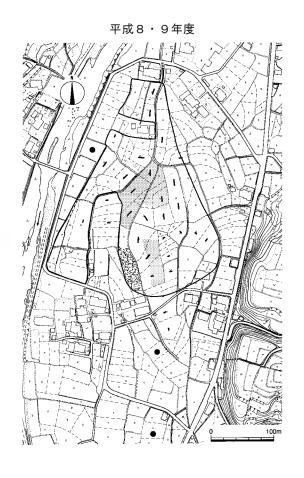


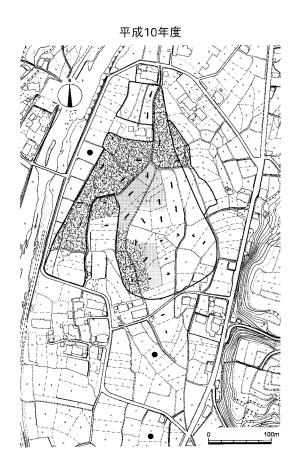
の集落跡が古墳時代まで溯ることが明らかとなった。以上のような調査成果から、久田原遺跡の範囲は南北350m、東西280mの44,100㎡と推定され、周知の範囲を大幅に越えて広がっていることが判明したのである。

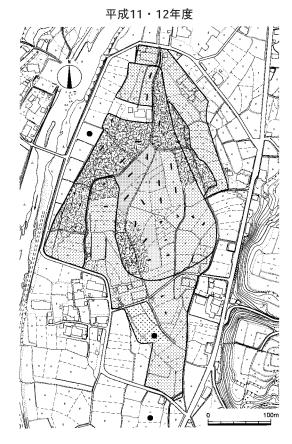
このため、確認調査終了後ただちに調査員9名を担当者として全面調査(第二次調査)を実施する こととなった。まず最初に着手したのは「塚ノ元」の字名をもつ遺跡の南西部分(A1区、1,555㎡) である。この地点では、黒色砂質上層上で中世の建物や上壙、溝等を検出したが、さらに黒色砂質上 を取り除くと南北に連なるように4基の円形周溝が確認された。それぞれの中央には、遺存状況は必 ずしも良好ではなかったものの、箱式石棺や木棺、横穴式石室などの埋葬施設が検出され、6世紀中 葉~7世紀前半にかけて継続して営まれた古墳群であることが判明した。奥津町ではこれまで1基の 古墳しか確認されていなかっただけに、こうした河岸段丘上に立地する古墳群の発見は注目を集めた。 ところで、砂礫層を基盤として築かれたこの古墳群を精査している際、その下部に暗褐色をなす土層 が広がっていることが確認された。この土層は南に隣接する久田堀ノ内遺跡の縄文包含層と類似して いたため、急遽この調査区の南北2か所にトレンチを設定して掘り下げたところ、厚さ約1mの砂礫 層の下でほぼ水平に堆積する暗褐色土層を確認した。その上面には酸化鉄の沈着が認められ、花粉分 析の結果からも水田として利用された可能性が指摘された。また、この土層の下面からは縄文晩期の 土器を伴う複数の土壙が検出され、縄文時代にまで溯る下層遺構の存在が明らかとなったのである。 しかし、すでに平成8年度の調査も終盤を迎えていたことから、下層に存在する遺構面の数やその広 がりについては次年度の調査課題として残されることとなった。 (亀山行雄)

表 1 発掘調査経過表

平成8年度	·次調査面積(㎡)	500	
干成8年度		1, 555	
平成9年度		6, 310	
平成10年度	全面調査面積(m²)	20, 740	
平成11年度		47, 320	
平成12年度		2, 415	
	全面調査面積計(㎡)	78, 340	







第7図 発掘調査経過図(1/6,000)

平成9年度の久田原遺跡の発掘調査は、8月下旬から再開する運びとなった。この理由については、すでに年度調査計画が確定していたことと、平成8年度末に下層遺構の存在が明らかになったとはいえ、湖岸道路に関係する遺跡等の調査を、2班体制で優先的に行う必要があったからである。

年度当初、A 2 区など下層遺構の存在が確定された地点については、シートで被覆措置を執り前年度末の状態で保全することとした。7月には、遺跡地内で計画されている、ダム本体の骨材採掘の候補箇所についての立会調査(第 5 図 P 1 ~ P 3)も行い、上層遺構・下層遺構の有無についての先行的な確認を行った。10月以降は 2 班体制で発掘調査を継続し、年度後半には比丘尼ケ城の発掘調査や久田堀ノ内遺跡の第一次調査も平行して実施した。なお、11月22日には現地説明会を実施し、B 2 区の古墳群や B 1 区の古代建物群や出土遺物を公開・展示し、多くの見学者に発掘成果を披瀝することができた。

平成10年度は新たに1班を加え、3班体制で発掘調査を継続することになった。1班は、比丘尼ケ

表 2 久田原遺跡発掘調査担当者一覧

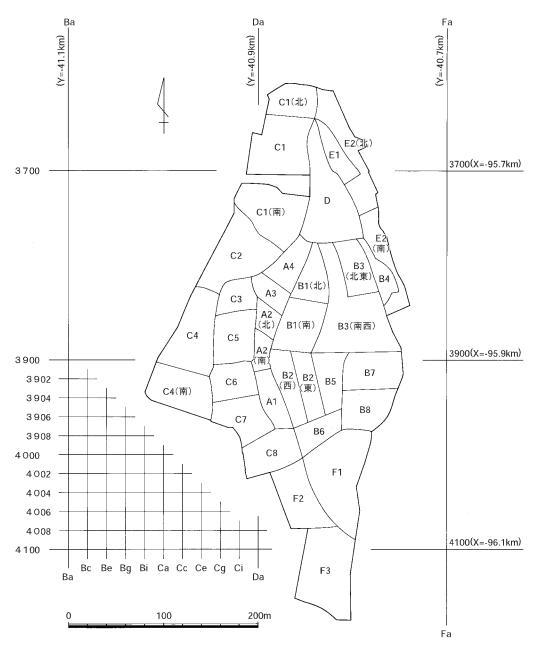
旧調查区名	発掘調查面積(㎡)	発掘調査担当者
一次調査	500	山本道夫・亀山行雄・樋口雅夫
A 1 区	1, 555	易伯通・島崎東・山本道夫・宇垣匡雅・岡田達矢・大村俊幸・亀山行雄・砂泰将・樋口雅夫・杉山一雄
A 2区(北)	1, 038	岡田博・島崎東・易伯通・山本道夫・大村俊幸・佐藤寛介
A 2 区(南)	600	岡田博・山本道夫・内田博雄・権田俊朗・亀山行雄・井上吉和・砂泰将・小嶋善邦・佐藤寛介
A 3 ⋈.	742	岡田博・山本道夫・宇垣匡雅・岡田達矢・砂泰将・佐藤寛介
A 4区	1, 183	岡田博・山本道夫・佐藤寛介
B1区(批)	1, 747	岡田博・山本道夫・佐藤寛介
B 1 区 (南)	2, 250	江見正己・内田博雄・梶田亚友美
B 2区(東)	1,600	易伯通・亀山行雄・井上吉和
B 2 区 (西)	1, 600	内田博雄・亀山行雄・砂泰将・杉山一雄
B 3 区 (北東)	1, 500	岡田博・権田俊朗・井上吉和・小嶋善邦
B 3 区 (南西)	6, 240	伊藤晃・奥野光廣・小嶋善邦
В 4 区	1,300	岡田博・権田俊朗・井上吉和・小嶋善邦
B 5 🗵	1, 670	江見正己・内川博雄・梶川亜友美
B 6 区	1, 400	岡本寛久・常安仲・時實奈歩
B 7区	2, 210	伊藤晃・奥野光廣・小嶋善邦
B8区	2,300	<b>伊藤晃・奥野光廣・小嶋善邦</b>
C 1 区 (北)	1, 470	福川正継・砂泰将・蛇原啓介
C 1 🗷	3, 970	福田正継・砂泰将・小山浩司・根木智宏・蛇原啓介
C1区(南)	3, 210	福田正継・小山浩司・根木智宏
C 2区	3, 710	内田博雄・亀山行雄・砂泰将・杉山一雄
C 3 🗵	1, 200	内川博雄・亀山行雄・砂泰将
C 4 🗵	2, 960	福口正継・小山浩司・速水章人・根木智宏
C 4区(南)	2, 420	福田正継・砂泰将・蛯原啓介
C 5区	2, 270	岡本寛久・内田博雄・亀山行雄・常安伸・砂泰将・時實奈歩
C 6区	1, 660	弘田和司・権田俊朗・西垣彰博
C 7 🗵	2, 030	弘田和司・権田俊朗・西垣彰博
C 8区	2, 630	弘田和司・権田俊朗・西垣彰博
D区	4, 660	岡田博・権田俊朗・井上吉和・小嶋善邦
E 1区	1,000	平井泰男・杉川光紀・根木智宏
E 2 区(北)	2, 285	平井泰男・杉山光紀・根木智宏
E 2区(南)	2, 000	平井泰男・杉山光紀・根木智宏
F 1 区	5, 015	岡木寛久・常安伸・時實奈歩
F 2 🗵	2, 415	岡本寛久・佐桒信也・梶田亜友美
F 3 区 (北)	2, 500	伊藤晃・奥野光廣・小嶋善邦
F 3区(南)	2,000	江見正己・内田博雄・梶田亜友美
全面調査面積計	78, 340	調査員延べ132名

\*一次調査面積を除く





写真1 平成9年度現地説明会および刊行されたパンフレット1



第8図 旧調査区配置図(1/4,000)

城の発掘調査を5月まで実施した後、遺跡北東部のD区からB3・4区を担当した。D区では、奈良時代の祭祀に使われた陶馬が溝に伴うというきわめて良好な状態で出土し、話題を呼んだ。2班は、C1区からC4区を担当し、おもに中世の大規模な建物群の検出に成果を挙げた。3班はA2区の下層遺構の調査を終えた後、C2・3区、B2区を担当した。B2区では縄文時代晩期の竪穴住居や貯蔵穴が発見され、洪水砂礫に覆われた下層遺構の残存度の高さを認識するに至った。 (岡田博)

平成11年度には下層遺構面の広がりを予測のもとに調査は第二課に移され、課長以下18名の調査員による6班体制で発掘調査を実施することとなった。

主に一係は遺跡の北東部から、二係は北西部から、いずれも南方向に調査を進めた。遺跡の北端においてはC1区、E2区に遺構面が広がり、道路を挟んだ夏栗遺跡につながっていくことが判明した。

一方、南部においても当初谷部と想定していたC5~C8区には縄文時代から弥生時代の下層遺構が延びていることが確認され、また、その東部では遺跡は東西に走る町道の北側付近までであろうと予想し調査を続行したところ、道から南のF区にまで遺構面は延び、遺跡の南部においても久田堀ノ内遺跡に連綿とつながっていくことが明らかとなった。

翌平成12年度にF2区の調査をもって久田原遺跡の発掘調査は終了に至ったが、一次調査で予測された遺跡の推定面積44,000㎡は大幅に拡大し、約78,000㎡におよぶ大規模な調査となった。

なお、平成11年11月3日には現地説明会を開催し、12年度末にはパンフレットⅡを刊行した。 (江見正己)

年度(平成)	埋蔵文化財保護対策委員会	久田原遺跡現地説明会	パンフレット刊行
8	平成8年11月11日(月) 平成9年2月18日(火)		
9	平成9年5月29日(木) 平成9年11月6日(木) 平成10年3月13日(金)	平成9年11月22日(上)	11月「よみがえる久 田の歴史」
10	平成10年7月1日(水) 平成10年12月10日(木) 平成11年3月11日(木)		
11	平成11年7月9日(金) 平成11年10月28日(木) 平成12年2月17日(木)	平成11年11月3日(水)	
12	平成12年7月3日(月)		3月「久田原遺跡と 久田堀ノ内遺跡」

表3 対策委員会議および現地説明会記録





写真2 平成11年度現地説明会

#### 2 調査の体制

平成8年度 平成9年度 岡山県教育委員会 岡山県教育委員会 教育長 森崎岩之助 教育長 黒瀬 定生 岡山県教育庁 岡山県教育庁 教育次長 黒瀬 定生 教育次長 平岩 武 文化課 文化課 課 長 大場 淳 課 長 高田 朋香 課長代理 松井 英治 課長代理 臼井 洋輔 参 事 葛原 克人 課長代理 西山 猛 課長補佐 (埋蔵文化財係長) 平井 参 事 葛原 克人 勝 主 若林 一憲 課長補佐(埋蔵文化財係長)平井 勝 岡山県古代吉備文化財センター 文化財保護主任 大橋 雅也 所 河本 清 主 事 三宅 美博 次 長 髙塚 惠明 岡山県古代吉備文化財センター 次 長(文化課本務) 葛原 克人 所 長 籔本 克之 文化財保護参事 正岡 睦夫 次 長 正岡 睦夫 <総務課> <総務課> 課 長 丸尾 洋幸 課 長 小倉 昇 井戸 丈二 井戸 丈二 課長補佐 (総務係長) 課長補佐 (総務係長) 主 査 総務主幹 守安 邦彦 木山 伸一 木山 伸一 <調査第三課> 主 査 <調査第三課> 課 長 柳瀬 昭彦 課 長 課長補佐 (第一係長) 博 柳瀬 昭彦 岡田 課長補佐 (第一係長) 松本 和男 文化財保護主査 易 伯通 文化財保護主査 易 伯通 文化財保護主査 山本 道夫 文化財保護主査 島崎 東 文化財保護主任 亀山 行雄 文化財保護主任 井上 吉和 文化財保護主查 山本 道夫 文化財保護主任 宇垣 匡雅 主 事 佐藤 寛介 文化財保護主任 岡田 達矢 文化財保護主任 大村 俊幸 平成10年度 文化財保護主任 亀山 行雄 岡山県教育委員会 井上 告和 文化財保護主事 教育長 黒瀬 定生 岡山県教育庁 砂 泰将 文化財保護主事 主 事 桶口 雅夫 平岩 适 教育次長 主 事 佐藤 寛介 文化課

課

長

高田 朋香

課長代理	西山	猛	主 任	奥山	修司
参事	正岡	睦夫	岡山県古代吉備文化財センター	-	
課長補佐 (埋蔵文化財係長)	松本	和男	所 長	葛原	克人
文化財保護主任	大橋	雅也	次 長	大村	俊臣
主 事	三宅	美博	<総務課>		
岡山県古代吉備文化財センター	-		課長	小倉	昇
所 長	葛原	克人	課長補佐(総務係長)	安西	正則
次 長	大村	俊臣	主 査	山本	恭輔
<総務課>			<調査第二課>		
課長	小倉	昇	課長	伊藤	晃
課長補佐(総務係長)	安西	正則	課長補佐(第一係長)	江見	正己
主 查	山本	恭輔	文化財保護主幹	杉山	光紀
<調査第三課>			文化財保護主幹	平井	泰男
課長	柳瀬	昭彦	文化財保護主査	内田	博雄
課長補佐(第一係長)	岡田	博	文化財保護主事	奥野	光廣
文化財保護主查	権田	俊朗	文化財保護主事	根木	智宏
文化財保護主任	井上	吉和	文化財保護主事	小嶋	善邦
文化財保護主事(6月まで)	速水	章人	主 事	梶田亜	E友美
文化財保護主事	小嶋	善邦	課長補佐 (第二係長)	福田	正継
主 事(6月まで)	杉山	一雄	文化財保護主幹	岡本	寛久
課長補佐 (第二係長)	福田	正継	文化財保護主査	権田	俊朗
文化財保護主査	内田	博雄	文化財保護主任	弘田	和司
文化財保護主任	亀山	行雄	文化財保護主任	常安	伸
文化財保護主任	小山	浩司	文化財保護主事	蛯原	啓介
文化財保護主事	砂	泰将	文化財保護主事	砂	泰将
文化財保護主事	根木	智宏	主 事	時實	奈歩
			主事	西垣	彰博
平成11年度					
岡山県教育委員会			平成12年度		
教 育 長	黒瀬	定生	岡山県教育委員会		
岡山県教育庁			教 育 長	黒瀬	定生
教育次長	宮野	正司	岡山県教育庁		
文化課			教育次長	宮野	正司
課長	松井	英治	文化課		
課長代理	佐々音		課長	松井	
参事	正岡	睦夫	課長代理	佐々音	邓生
課長補佐(埋蔵文化財係長)	松本	和男	課長代理(埋蔵文化財係長)	松本	和男
文化財保護主任	大橋	雅也	文化財保護主査	福本	明

主	任	奥山 修司	主	查	山本	恭輔
岡山県ī	古代吉備文化財センタ-	-	<調	查第二課>		
所	長	正岡 睦夫	課	長	伊藤	晃
次	長	能登原 巧	課長	補佐(第二係長)	福田	正継
<総	<b>%課</b> >		文化	財保護主幹	岡本	寛久
課	長	小倉 昇	文化	財保護主査	佐桒	信也
課長	哺佐(総務係長)	安西 正則	主	事	梶田	亜友美

なお、苫田ダム関連遺跡調査事務所では平成11年度からの大規模な調査体制改編にあたり、事務方として三浦重康氏に御尽力いただいた。

また、奈良国立文化財研究所の金子裕之氏からは奈良時代の陶馬について、北九州市教育文化事業 団の中村修身氏からは弥生時代の石矛について教示を得た。記して感謝の意を表します。

#### 第2節 整理の経過と体制

#### 1 整理の経過

久田原遺跡の整理は平成13・14年度の2か年にわたって実施した。初年度は岡山県古代吉備文化財センターで、次年度は岡山市西川原に新たに設置した苫田ダム関連遺跡整理事務所で行った。平成13年度の作業は既刊「苫田ダム建設に伴う発掘調査1」の整理期間後半に、これと一部重複しながら開始した。整理作業のうち660箱の遺物洗浄・注記作業は既に奥津町の現場事務所で済ませており、当該年度は遺物の復元・実測の作業に終始し、翌平成14年度に至り調査員6名での本格的な整理が開始された。まず、遺跡を調査区別に6分割し、担当者は個々の遺構・遺物の図面を仕上げる。次に、5時期に割り当てられた担当者は調査区別担当者から図面類を受け取り、各時代の全体図作成~本文割付作業へと移っていった。しかしながら、整理対象面積は東西300m・南北600mの78,000㎡と広く、各時代の全体像を捉えられたのは年度末に至ってであった。また、整理担当者の編集会議を月一度実施し疎通を密に図り作業を進めたが、調査に携わった調査員を含む全体編集会議は平成14年4月に一

#### 表 4 整理担当者一覧

 平成13年度

 遺物整理
 江見
 根木
 佐藤

度しか開催できず、後戻りを余儀なくされた。一方この 間、埋蔵文化財保護対策委員会は6度開催され、委員か らは貴重な教示を得た。また、整理にあたって京都国立

平成14年度					
編集	江見	弘田			
	伊藤	(B3s·B7·B8区)			
	岡本	$(A 2 \cdot A 3, B 6, C 5, F 1 \cdot F 2   X)$			
調查区別担当	江見	(A4,B1•B2e•B5, F3s⊠)			
<b>神田心かげ!</b>	弘田	(A1, B2w, C6·C7·C8区)			
	蛯原	(C1·C2·C3·C4区)			
	河合	(B3n·B4·D·E·F3n区)			
	弘田	(縄文時代)			
	泂合	(弥生時代)			
時代別担当	蛯原	(古墳時代)			
	岡本	(古代)			
	伊藤	(中世)			



写真3 苫田ダム関連遺跡整理事務所

博物館の久保智康氏からは和鏡について、ノートルダム清心女子大学の高橋護氏、京都大学埋蔵文化 財研究センターの千葉豊氏からは縄文土器について教示を得た。記して感謝の意を表します。 (江見)







写真4 整理作業状況(遺物の復元・実測・記録)

## 2 整理の体制

平成13年度			平成14年度	
岡山県教育委員会			岡山県教育委員会	
教 育 長	宮野	正司	教 育 長 宮野	正司
岡山県教育庁			岡山県教育庁	
教育次長	國貞	忠克	教育次長    三浦	一男
文化課			文化課	
課長	松井	英治	課長西山	猛
課長代理(埋蔵文化財係長)	松本	和男	課長代理(埋蔵文化財係長)松本	和男
課長代理	藤井	守雄	課長代理 宮田	正彦
主 任	奥山	修司	文化財保護主任     尾上	元規
岡山県古代吉備文化財センター	_		主 事 浜原	浩司
所 長	正岡	睦夫	岡山県古代吉備文化財センター	
次 長	能登原	瓦 巧	所 長 正岡	睦夫
<総務課>			次 長 藤川	洋二
課長	安西	正則	<総務課>	
係 長	田中	秀樹	課 長 安西	正則
主 任	小坂	文男	課長補佐(総務係長)   田中	秀樹
<調査第二課>			主 任 小坂	文男
課長	伊藤	晃	<調査第二課>	
課長補佐 (第二係長)	中野	雅美	課長伊藤	晃
文化財保護主幹	江見	正己	課長補佐(第二係長)    江見	正己
文化財保護主事(12月まで)	根木	智宏	文化財保護主幹	寛久
文化財保護主事	佐藤	寛介	文化財保護主査     弘田	和司
			文化財保護主事     蛯原	啓介

主 事

河合 忍

# 第2章 久田地区の地理的歴史的環境

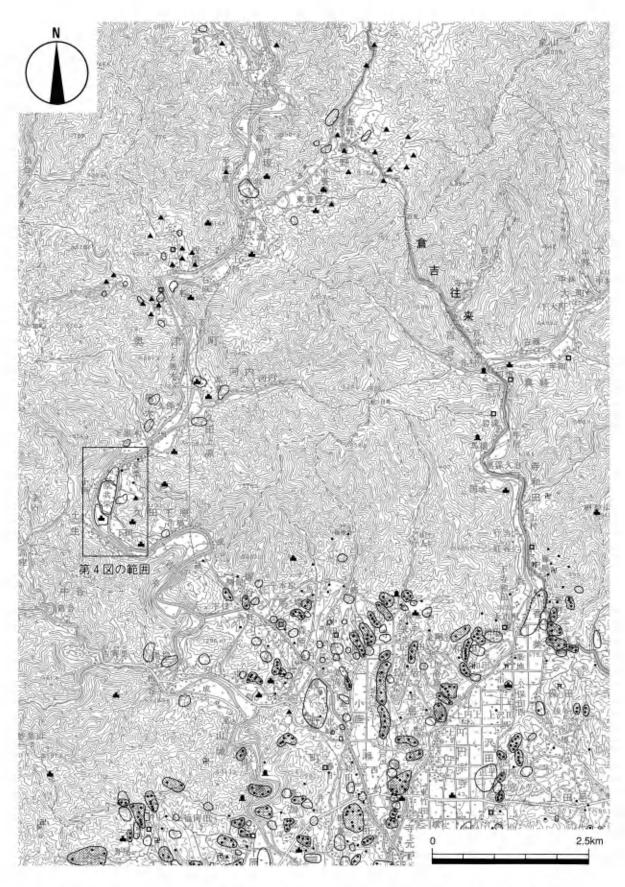
久田原遺跡は岡山県苫田郡奥津町の南部、久田下原に所在する。奥津町は、美作三湯の一つ奥津温泉を擁する、緑豊かな山間の町である。岡山県の北端に位置し、北は上斎原村と県境を挟んで鳥取県三朝町、東と南は津山盆地西端の鏡野町に接する。中国山地脊梁部の南面にあたることから、町域には標高500~1,000m級の山並みが連なり、町面積約130万㎡のうち、実に89.1%が山林によって占められている。

これらの山塊を東西に分かつように、町域のほぼ中央を岡山三大河川の一つ吉井川が南流する。さらに、樹枝状に展開する谷筋からは、数多くの中小河川が奔出し、吉井川へと注ぎ込んでいる。平野部は、これらの河川沿いに形成された谷底平野を主体としている。地形に制約されて狭長なものが多い中で、吉井川流域には胃袋状を呈するやや広まった平野が散在的に認められ、主要な生活の場、そして交通路となっている。特に久田地区には、周囲を比高100~300mの山々によって囲まれた、幅200~300mの平野部が長さ約4kmにわたって形成されており、吉井川上流域では比較的まとまりのある小盆地状の地形をなしている。

第9図は、久田地区を中心に奥津町南部・鏡野町西部の遺跡分布を示したものである。津山盆地の一画を占める鏡野町域では、低丘陵を中心に高い密度で遺跡が分布している。一方、奥津町域では吉井川流域に遺跡が集中するとともに、山間部に近世を中心とした製鉄遺跡が多数分布する状況を看取することができる。こうした特徴的な遺跡分布が示すように、この地域の歴史や文化を特色付けるものとして、吉井川および中国山地を介した各地との交流、そして鉄生産が挙げられる。以下、現在までの発掘調査成果を中心に、久田地区の歴史について概観する。

旧石器時代については、現在のところ確実な旧石器は確認されておらず、具体的な様相は不明である。しかし、吉井川を約20km遡った上斎原村恩原遺跡群で、良好な後期旧石器文化層が検出されていることや、下流の津山盆地で単発的にナイフ形石器が発見されていることを勘案すると、今後発見されることも十分考えられる。特に、恩原遺跡群では黒曜石やサヌカイトを素材に瀬戸内技法や湧別技法によって製作された石器が出土しており、中国山地を介した旧石器人の広範な移動があったことを示唆している。そのルートとして、吉井川流域が利用されたことは十分考えられる。

縄文時代については、主に早期と後~晩期の遺構・遺物が確認されている。早期については、箱E遺跡・河内構遺跡・岡遺跡・夏栗遺跡・札ノ尾遺跡で押型文土器が出土している。特に箱E遺跡では、4点の尖頭器が共伴しており注目される。しかし、量的にはいずれもわずかで、小集団が丘陵部を中心に短期間の移動生活を営んでいた状況を示している。後~晩期になると、丘陵部では岡遺跡、平野部では久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡で多数の遺物が出土しており、この段階から集落立地が平野部へと変わり、定住的な生活に移行したと考えられる。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡では、晩期の竪穴住居や貯蔵穴が検出されるとともに、根菜類の採集に使用されたと考えられる石鍬が多数出土しており、当該期の集落構造や生業のあり方を解明する上で貴重な資料が得られている。また、特筆される遺物として、石刀や南九州産の緑色石材を用いた管玉、東日本の大洞式の特徴をもつ壺形土器などが出土しており、遠隔地との交流をうかがわせる。



○ - 遺物散布地(集落) ○ - 古墳群 ● - 古墳 ▲ - 山城・居館 ▲ - 製鉄遺跡 □ - その他

第9図 調査地周辺の遺跡分布図(1/60,000)

弥生時代については、久田原遺跡・久田掘ノ内遺跡で僅かながら前期土器片が出土しており、中期前~中葉には同じく上記遺跡で本格的な集落形成が始まる。中期後葉には、岡遺跡・峪畑遺跡・札ノ尾遺跡など周辺の丘陵部にも小集落が営まれるが、これらは平野部の集落から派生した分村的集落と評価できよう。後期になると、平野部では夏栗遺跡・河内遺跡・河内構遺跡、丘陵部ではナル林遺跡・河内城跡・岡遺跡・城峪城跡で遺構・遺物が確認されるようになり、集落域がさらに拡充した状況を看取することができる。さらに、久田堀ノ内遺跡では県北部で初例となる水田が、夏栗遺跡では集落内を縦断する大規模な溝が検出されるなど、山間地域における遺跡の分布や変遷、集落構造を全体的に把握しうる希有な調査成果が得られている。特筆される遺物として、久田原遺跡では石矛・鋳造鉄器片・碧玉製管玉とその未成品が、峪畑遺跡では銅剣を転用したと考えられる銅鏃が出土しており、久田地区の拠点性と山陰地域との密接な交流を物語っている。このように、中~後期にかけて順調な発展をとげる久田地区の弥生社会であるが、後期終末~古墳時代初頭に発生したと考えられる吉井川上流域の集中豪雨により、壊滅的な打撃を受けたようである。

古墳時代については、先述の大洪水の影響により前期の遺構・遺物は極めて希薄であるが、中期以降、平野部を中心に大規模な遺跡が形成される。本格的な集落の形成は5世紀中頃から夏栗遺跡で始まり、6世紀代にかけて数十軒の竪穴住居からなる大集落に成長する。これに呼応して、下流側の久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡では古墳の築造が開始される。6~7世紀代には、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡まで集落域が拡大するとともに、古墳築造も最盛期を迎え、大小十数基の墳墓からなる久田古墳群が形成される。その一方、丘陵部の遺跡は極めて希薄で、ナル林遺跡で前期の竪穴住居1軒、久田神社遺跡で横穴式石室墳1基が確認されているにすぎない。なお、吉備の基幹産業ともいえる鉄生産については、久田古墳群の中に炉壁や鉄滓を副葬するものがあることや、城峪城跡・比丘尼ヶ城跡で7~8世紀に比定できる製鉄炉と横口付炭窯が確認されていることから、この地域においても古墳時代後期には開始されたと考えられる。

古代については、奈良時代を中心に大きな調査成果が挙がっている。和銅六年(713年)、備前国から 6 郡が割かれて美作国が成立し、このうち久田地区一帯は苫田郡能鶏郷に比定される。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡では、合わせて数十棟もの掘立柱建物が検出され、古代村落の全体像が明らかとなった。建物群は側柱建物と総柱建物で構成され、小規模なものが多いものの棟方向や配置に規格性が認められる。また、出土した多量の遺物中には、円面硯や稜椀、丹塗り土師器など官衙遺跡に通有のものがある。さらに、建物群を区画する溝から多量の土器とともに陶馬・土馬が出土し、律令祭祀が執り行われたと考えられることや、鉄鉢形須恵器を骨蔵器に用いた火葬墓が検出されるなど、注目すべき文物が数多く発見されている。前代に始まった鉄生産は、美作国が調鉄の貢納国であることからこの時期さらに活発になったと考えられ、久田地区では峪畑遺跡・久田原遺跡で製鉄炉が確認されている。特に久田原遺跡では、複数の鍛冶炉に加え多数の鉄器や羽口、鉄滓が出土しており、集約的な鉄・鉄器生産が行なわれていたと想定される。こうした遺構・遺物のあり方から、先述の建物群は公的性格をもつとともに、鉄と鉄器の生産管理に深く関わっていたと考えられる。

中世については、久田地区一帯に比定されている久田庄の実体が発掘調査によって明らかにされている。久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡は久田庄の中心的な集落と考えられ、県内最大級のものを含む多数の掘立柱建物が検出された。特に、久田堀ノ内遺跡は大規模な方形居館であることが判明し、戦国期には美作国守護所の院庄館に匹敵する規模に拡張されることが明らかとなった。建物群

の周辺では鍛冶工房と考えられる竪穴遺構や多数の鍛冶炉が検出され、前代同様、鉄器生産が盛んに行われたことをうかがわせる。さらに、水田や畑、土壙墓や火葬墓、石造物、各地で生産された陶磁器など、中世荘園の具体像を物語るさまざまな遺構・遺物が発見されている。また、杉正宗遺跡・河内遺跡・河内構遺跡でも、鎌倉〜戦国期の集落が確認されている。一方、これらの集落を取り巻く丘陵上には大小の山城が高い密度で構築されており、このうち河内城跡・久田上原城跡・比丘尼ヶ城跡・城峪城跡について発掘調査が実施された。その結果、この4城は全国的にも調査例が少ない南北朝期の山城であることが判明し、当該期の城郭構造を検討する上で非常に重要な成果が得られた。美作地域は中世を通じて周辺勢力の脅威にさらされ、室町時代には伯耆の山名氏と播磨の赤松氏、戦国時代には山陰の尼子氏・安芸の毛利氏・備前の宇喜多氏が覇権を争った。これらの山城は、陰陽を結ぶルート上にある久田地区の重要性と、緊迫した社会情勢を物語っているといえよう。

近世の久田地区は、宇喜多氏・小早川氏の支配を経て、慶長八年(1603年)津山藩領、後に幕府領津山藩領地となり、北から箱村・黒木村・河内村・久田上原村・久田下原村・土生村が成立した。久田地区以北の丘陵部は花崗岩地帯で、たたら製鉄が盛行したことが数多くの製鉄遺跡の分布から読みとれる。また、美作と伯耆を結ぶ倉吉往来が整備され、箱村まで高瀬舟が運行するとともに、久田下原村には諸品の買集と津山城下への川下が許されており(「郷中御条目」)、吉井川の水運を活かした物流拠点として重要な役割を果たしたことがうかがえる。発掘調査では、久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡・河内構遺跡・札ノ尾遺跡で掘立柱建物や井戸、土壙墓などが検出され、近世村落の様相が捉えられている。特に札ノ尾遺跡では多量の銅滓が出土し、銅製錬を行っていたことが判明した。

近代以降、この地域は明治4年(1871年)北条県の管轄となり、同9年岡山県に合併された。久田地区の諸村は、明治22年(1889年)の合併により西西条郡久田村となり、昭和30年(1955年)に北部の泉村と合併し苫田郡苫田村となった。そして昭和34年(1959年)、苫田村と北部の奥津村・羽出村が合併して奥津町が誕生した。現在、昭和32年(1957年)に発表された苫田ダム建設工事が急ピッチで進められ、かつての景観は大きく変貌しつつある。 (佐藤寛介)

本章は『苫田ダム建設に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170 2003年 に収載したものを一部改変したものである。

本章で述べた内容は、2002年3月までの発掘調査成果と次の3~7の文献に基づいており、今後の整理・検討を通じて内容や評価に変更が生じる可能性があることを断っておく。

### 参考文献

- 1 『岡山県の地名』 平凡社 1988年
- 2 岡山県教育委員会 『岡山県遺跡地図』第5分冊 1978年
- 3 岡山県教育委員会 『岡山県埋蔵文化財報告26~32』 1996~2002年
- 4 岡山県教育委員会 『教育時報』第630号 2002年
- 5 岡山県古代吉備文化財センター 『所報吉備』第20・25・26号 1997・1998・1999
- 6 建設省苫田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター 『発掘された久田の埋蔵文化財』 I 1997年
- 7 国土交通省苫田ダム工事事務所・岡山県古代吉備文化財センター 『発掘された久田の埋蔵文化財』 Ⅱ 2001年
- 8 岡山県教育委員会 「福見口遺跡・殿釜遺跡・大高下遺跡・大柄畑遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告168 2002年
- 9 奥津町教育委員会 『杉遺跡』奥津町埋蔵文化財発掘調査報告 4 2000年
- 10 鏡野町 『鏡野町史』考古資料編 2000年
- 11 上斎原村 『上斎原村史』通史編 2001年

# 第3章 発掘調査の概要

## 第1節 遺跡全体の概要

発掘調査によって明らかとなった縄文時代後期から中世におよぶおびただしい量の遺構と遺物は、この地とこの遺跡の重要性をわれわれに教えてくれる。ただし、この書に示し得たのはそのすべてではない。すなわち遺物を出土しない時期の不明確な遺構の多くは、全体図にのみ位置を示したのみで、個別図の掲載は割愛せざるをえなかったことを初めにお断りしておきたい。

時代区分について 縄文時代から古墳時代までは、前期から後期あるいは晩期とこれまでの「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」と変わりないのでそちらも参照していただきたい。さらに必要に応じて前葉、後葉などと細分している。古代と中世については、前半、後半とし、わかる限りでその実年代を記すことにしたい。土器形式や年代との対比は、それぞれ各時代毎の概要のなかで記載している。ここでは、古墳時代から古代にかけての本書の節立てについて述べておきたい。久田原遺跡では、7世紀末葉~8世紀初頭ころまでの横穴式石室と土壙墓が存在した。これらは、6世紀段階の古墳から時間的に連続しており、かつ1つの墓域を形成していることから、第5節の久田原古墳群に纏めることにした。これは集落も同様で飛鳥・藤原京の段階までを含み、第6節の古代とはおよそ8世紀前葉からのちを指し、そのほとんどが奈良時代の遺構と遺物である。これは従前の時代区分と異なる点である。

**層序(第10図)** 断面図を示した箇所は、縄文時代後期の微高地形成期にできた、北西から南東方向へと傾斜し、遺跡のほぼ中央を縦断する谷状地形とその左右の微高地部にあたる。

この遺跡を特徴づけるのは、大洪水砂層(9層)で、ところによって厚さ2m余りにも及んだ。出土遺物の時期から、弥生時代末葉~古墳時代初頭のできごとであった。この層によって、弥生時代と縄文時代の遺構群と遺物がパックされて残り、後の時代の遺構による損壊を免れることになった。

縄文の谷(縄文河道 2)の最下層(26・27層)は後期から晩期の土器を多く含み、その上面の22~25層にかけての灰色と暗灰色の互層(晩期前葉)からは貯蔵穴と考えられる袋状土壙群が掘り込まれていた。この谷部も幾度かの流水があり(21層:晩期の洪水砂)、その上部の19層(19 c・b 層は晩期後葉から末葉、19 a 層は晩期から弥生を含む)によってほぼ埋没している。弥生時代中期の集落はその上面で検出しており、竪穴住居や土壙、火処がみられた。しかし、再び起こった洪水によって(12~15層)微高地の東は大きく削り込まれており、集落は放棄されたとみられるが、後期段階では再び、水田層(10層)と水路群(17層など)が確認できる。

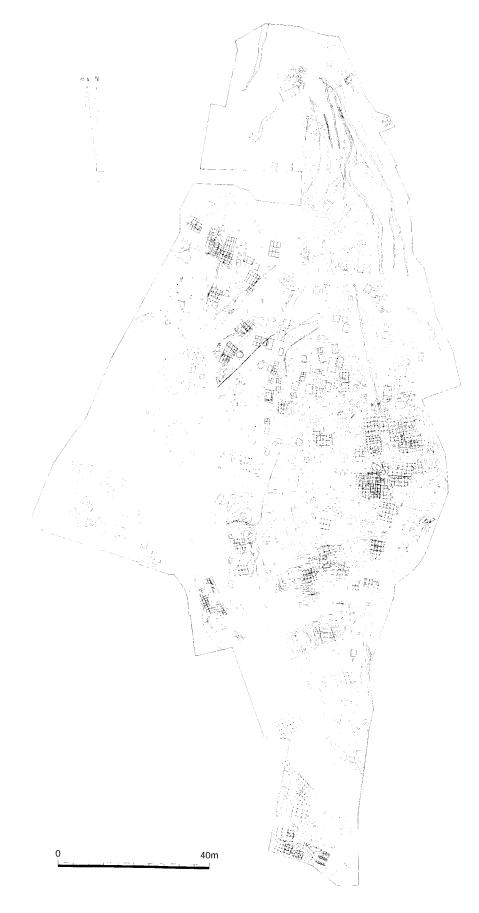
洪水砂層の上面では、古墳時代、古代・中世の包含層が形成され、それを除去したのち各時期の遺構を検出している。久田原古墳群の中心部分は、先の埋没谷上面の窪地を墓道として利用したようである。また斜面部に開口するように横穴式石室が構築される。さらに、洪水砂層を抉るように遺跡のほぼ中央を北から南へと古代~中世にかけての流路が存在し(3~7層)、現代の水田形状にもその痕跡を残す。この河道は、埋没の過程で古代の畑とみられる格子状の溝(7 b 層)、中世の水田層(5層)があり、近世水田(3・4層)のころにはほぼ現代の景観が形づくられている。 (弘田和司)

189.1m

18



第11図 久田原遺跡下層全体図 (1/2,500)



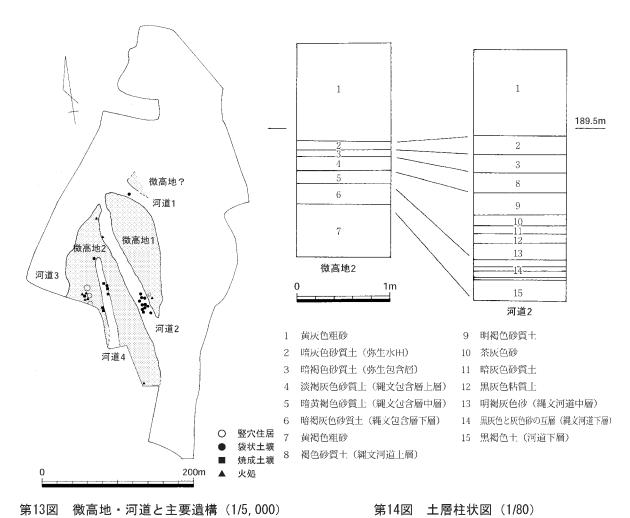
第12図 久田原遺跡上層全体図(1/2,500)

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

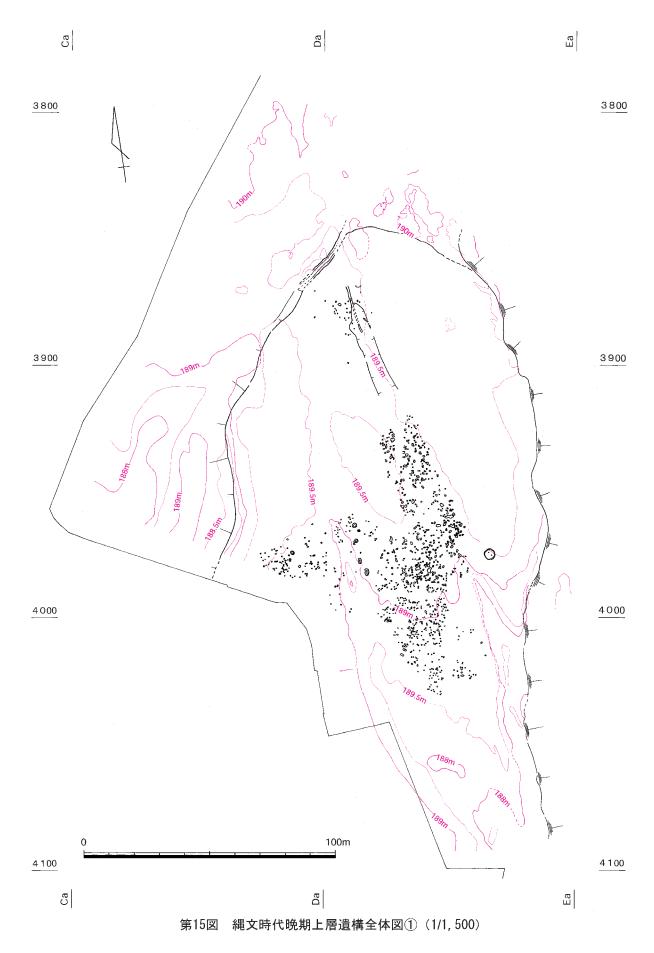
## 1 概要

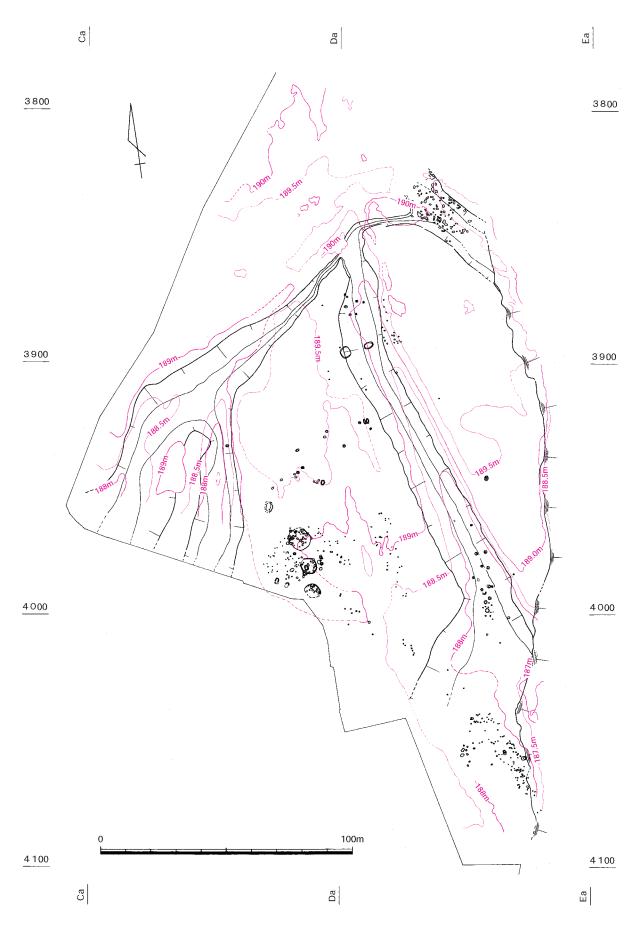
縄文時代後期中葉には河川の氾濫によってすでに微高地が形成されつつあり、それを取り巻く谷状の地形(河道部分)とともに縄文人の活動の痕跡が数多くしるされている。そこにおいて検出した遺構には、竪穴住居4軒、袋状上壙14基、焼成上壙8基、上壙57基、火処8か所、溝2条、河道4条のほか多数のピットがある。土器や石器など出土遺物のなかには、東日本から搬入されたと思われる注口土器などもみられるとともに、大量の石鍬が出土しており注目に値する。それらの時期は、後期中葉(彦崎KI式併行期)に始まり、後葉(彦崎KI式)に増加するが、末葉(福田KIII式)の遺物は少ない。晩期中葉(舟津原式・谷尻式)には遺跡の盛期を迎え、晩期末葉(突帯文土器)の段階にまで及んでいる。

遺跡中央部には河道2が北西から南東に流走しており、これによって東側の微高地(微高地1)と 西側の微高地(微高地2)に分けられる。また、久田原遺跡の北東に位置し、段丘上に立地する夏栗 遺跡や久田原遺跡の南側に接する久田堀ノ内遺跡(微高地3)とは、それぞれ河道1・3によって画 されている。なお、微高地1の北東部において、河道の東側の肩が検出できたことから北東部にも別



-21-





第16図 縄文時代晩期下層遺構全体図② (1/1,500)

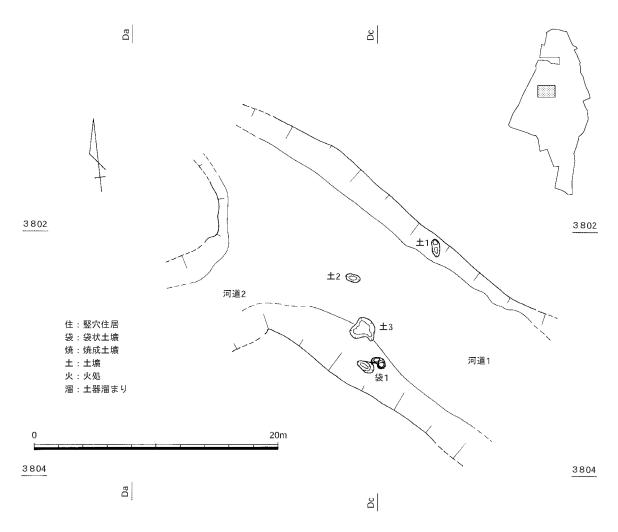


第17図 縄文時代後期遺構全体図③ (1/1,500)

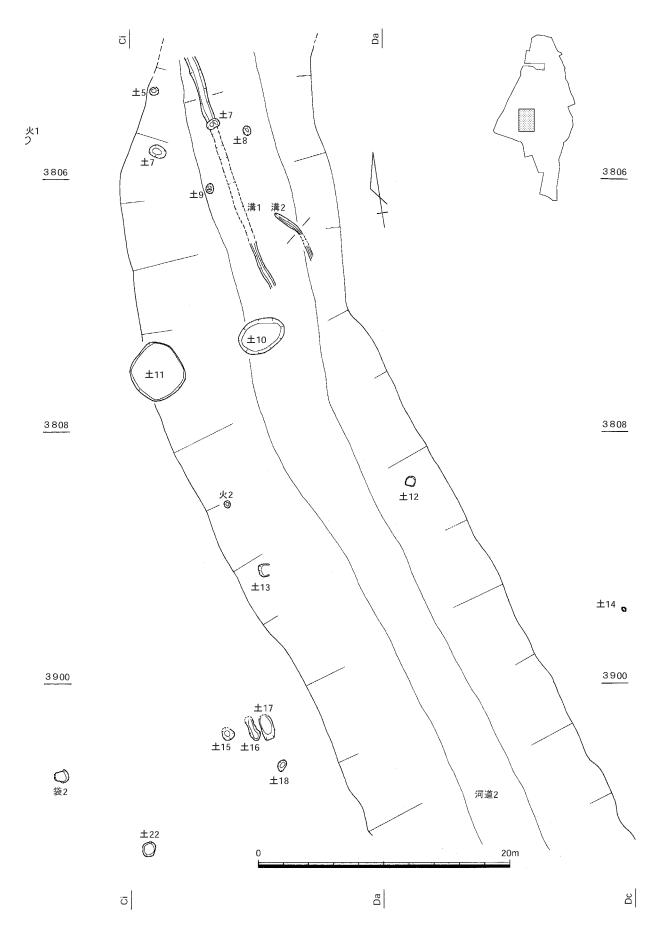
の微高地が存在した可能性がある。弥生時代以降の河道の浸食を受けており縄文時代の包含層、遺構 は存在しないが、古代~中世にかけての包含層中より遺物が出土している。

調査地点によって、土層の堆積の状況、また調査時点での土層名に若干の相違はあるが、おおむね以下の通りにまとめることができる。基盤となる明褐色の砂礫層の上には、地点によっては薄く明黄褐色砂層(後期の包含層)がのる。その上層はほぼ全域において黒色土と褐色砂層が互層になって堆積していた。上の黒色土(暗褐色土・黒褐色微砂・灰褐色砂質土)は晩期中葉から末葉の突帯文土器までが出土しておりその上面を第1遺構面とした。その直下で間層となる褐色砂層はやはり晩期に起こった洪水によると考えられた。そしてその下層の黒色上(黒褐色上・黒色微砂・暗褐灰色砂質上)は晩期中葉から後期の土器も多く出土しており、その上面を第2遺構面とした。さらにその黒色土直下を後期の遺構面(第3遺構面)としている。この3層の堆積状況はおおむね河道部の堆積層にも対応している。

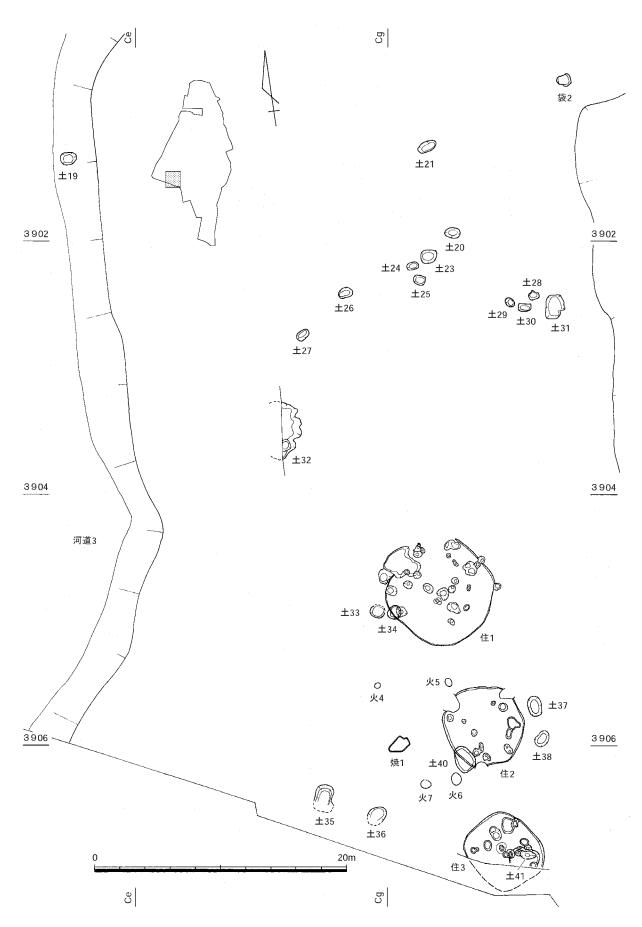
以下に個別図を掲載した遺構及び遺物は、主要な遺構と遺物である。とりわけ土壙においては、時期の不明なものの、不定形で自然に形成された可能性があるもの(第3面を中心に存在し、植物茎の痕跡と思われる)。ピットに近いものを省いているほか、火処の一部や多数のピットは全体図にのみ位置を示し、部分図や個別遺構図は割愛している。 (弘田)



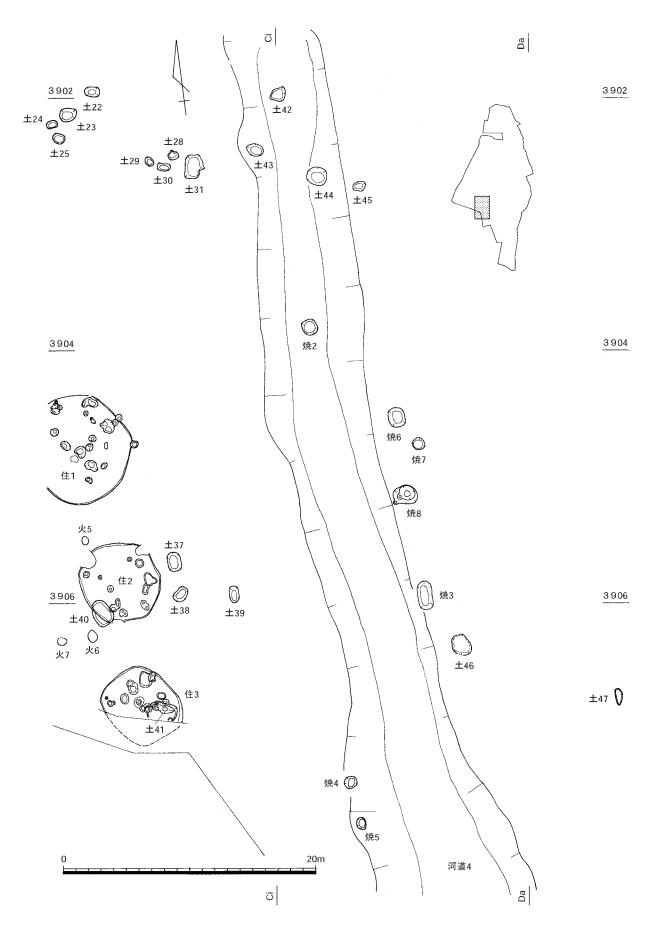
第18図 縄文時代主要遺構部分図①(1/300)



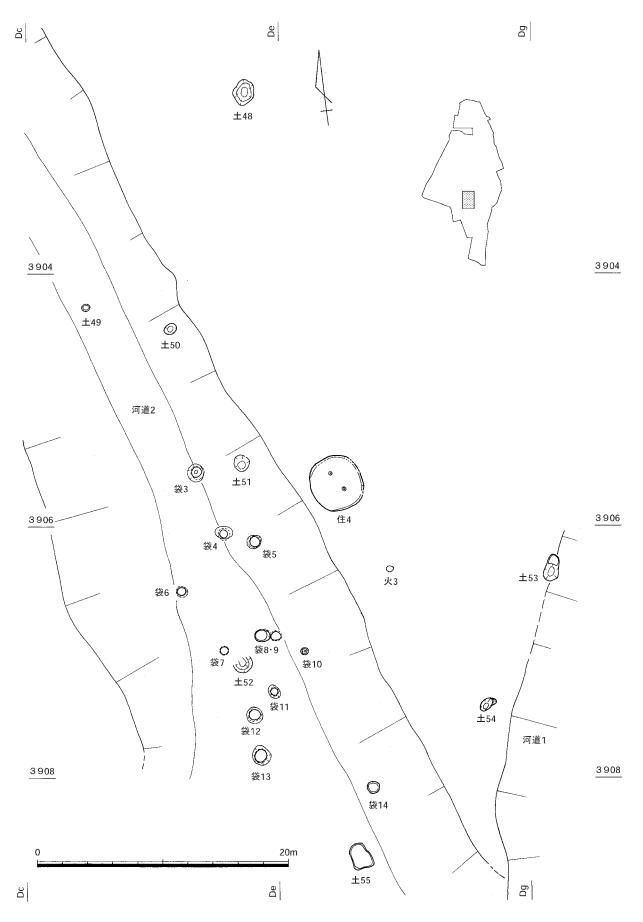
第19図 縄文時代主要遺構部分図② (1/300)



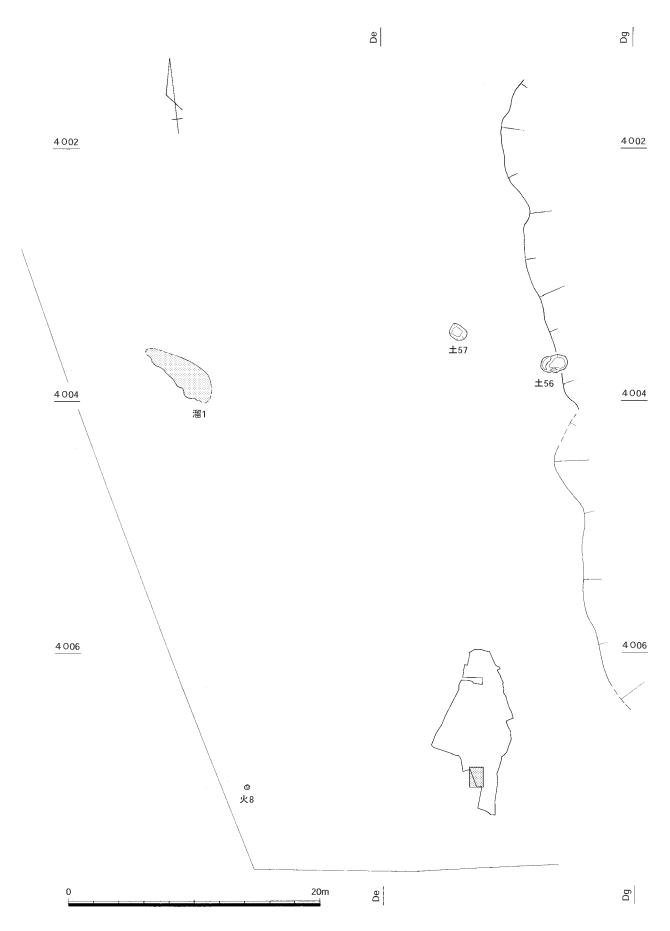
第20図 縄文時代主要遺構部分図③ (1/300)



第21図 縄文時代主要遺構部分図④ (1/300)



第22図 縄文時代主要遺構部分図⑤ (1/300)



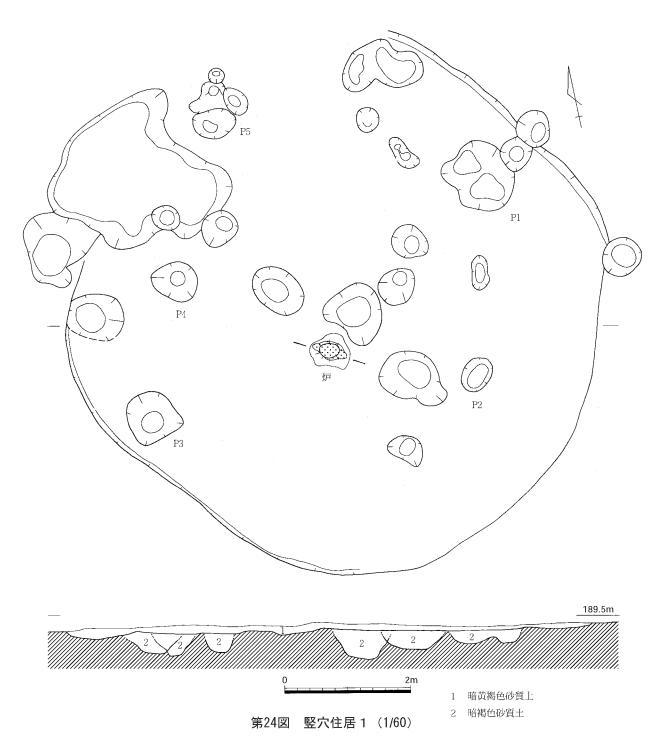
第23図 縄文時代主要遺構部分図⑥ (1/300)

## 2 竪穴住居

## 竪穴住居 1 (第20・24~26図、図版 2・9・11)

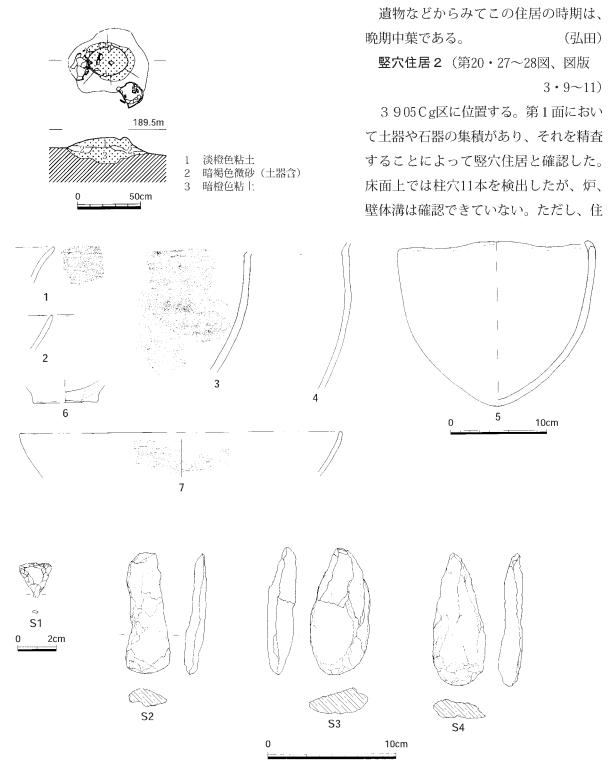
3 9 08 C g 区に位置する竪穴住居である。上層掘削段階において土器とともに石鍬数点が一定の範囲から出土し、遺構検出作業に努めたが不明確であったため、第 3 面近くまで下げたところ炉や柱穴とともに遺物が確認できたことから竪穴住居として認定した。

床面上において検出した柱穴のうち $P1\sim5$ が住居の棟を支える柱の可能性が強い。南端の1本を欠くが、 $2\times1$ 間の6本柱ではなかったかと考えられる。これらの柱穴のうちから上器底部片6やS3



が出土している。

中央やや南に炉を検出している。一度暗褐色微砂で埋められており、その埋土中より無紋粗製の深鉢3・4が出土している。その後再び使用されており、最終段階で無紋粗製の深鉢5が立てられた状態で出土している。深鉢1・3・4は短く外反する口縁部をもつと思われ、1は口縁端部に刻み目がない。2・7は椀状を呈する浅鉢である。このほかの遺物では、サヌカイト製の石錐S1、緑色片岩製石鍬S2~4がある。



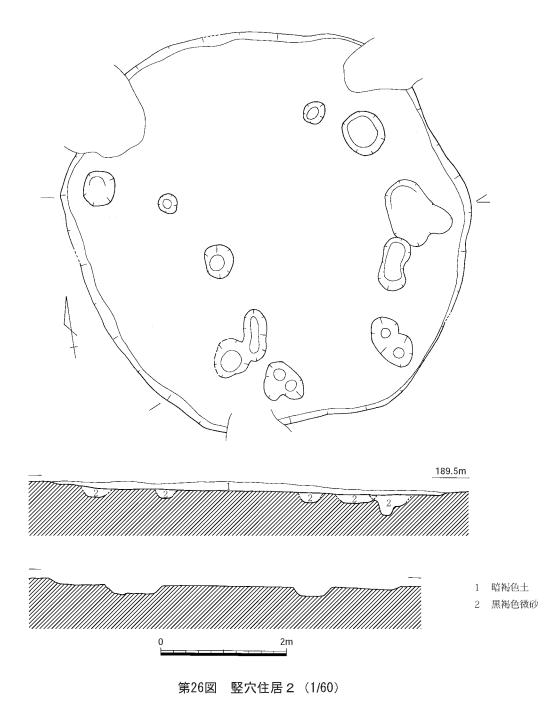
第25図 竪穴住居 1 中央炉(1/30)、竪穴住居 1 出土遺物(1/4, 1/2, 1/3)

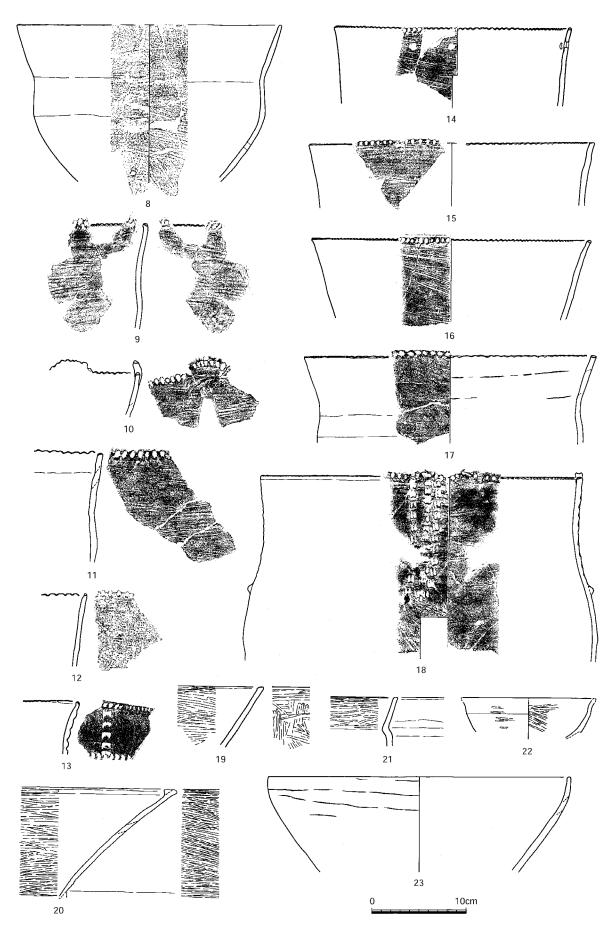
居外周囲において火処4、焼成土壙1基が存在しており住居との関連が想定でる。

出土遺物には、深鉢8~18、浅鉢19~23と、石器類S5~15がある。深鉢のうち、8は短く外反する口縁部をもつがそれ以外では、すべて口縁端部に刻み日を施す。このほかに口縁部に2孔1対の孔をもつ14、端部に突起をもつ10・13・18がある。18は肩部に小突起がつき、この遺跡や久田堀ノ内遺跡でも同様な例がみられる。浅鉢では、口縁部端部の肥厚しない19に対し、口縁部が長く、端部内面に突帯の付く20がある。ほかにも短く「くの字」に外反する口縁部を持つ21、大小の椀状の22・23がある。石器類では、サヌカイト製の石鏃S5~8、スクレイパーS9、緑色片岩製の石鍬S10~15やサヌカイトの剥片も多く出上している。

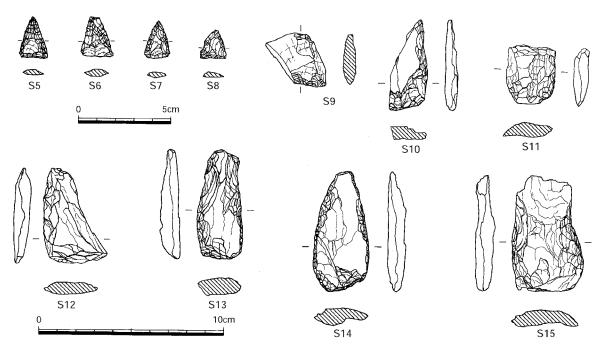
この住居の時期は、晩期中葉である。

(弘田)





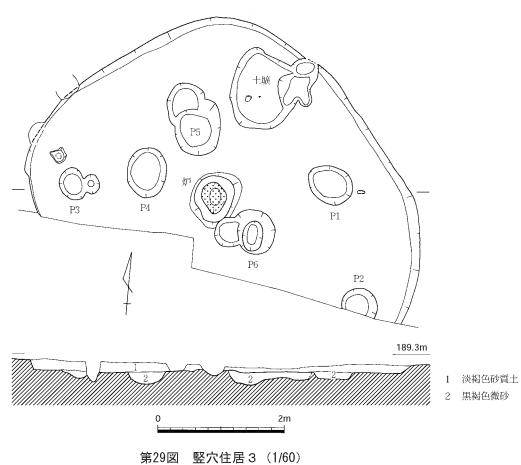
第27図 竪穴住居2出土遺物① (1/4)



第28図 竪穴住居2出土遺物②(1/2, 1/3)

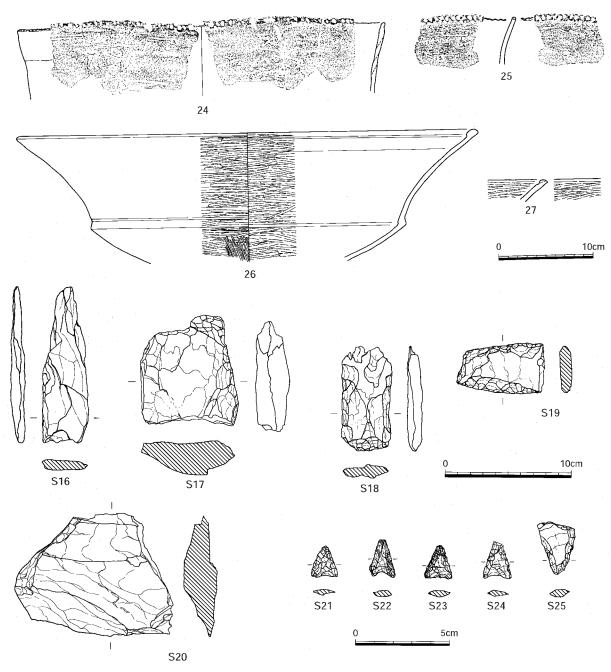
竪穴住居3 (第20・29・30図、図版3・10・11)

3906Cg区に位置し、第2面(褐色砂層)上で検出した。南側半分は未掘であるが、平面形はお



およそ隅丸長方形と想定でき、 $1 \, 206 \times 5 \, \text{m}$ ほどの大きさとなる。床面中央には炉が存在し、周囲からは柱穴6本、土壙1基を検出するが、壁体溝は認められなかった。炉は、皿状にくぼみ、その周囲に床面よりわずかに高い土手をめぐらせる。熱影響は弱く、赤燈色に変色するが、その範囲は炉底から土手上端部にまで及んでいた。柱穴、土壙ともに深さ $10\sim20\,\text{cm}$ ほどと浅い。なお、柱穴P2は突帯文土器が出土したことから住居より後出する可能性がある。

出土遺物のうち、深鉢24・25は、ともに口縁端部に刻み目を施し、内外面には条痕ののちナデがみられる。25には、ススが付着している。浅鉢には、26・27がある。26の口縁部は、体部から強く屈曲し、口縁部は長く外反気味にのびる。ともに、口縁端内面に蒲鉾状の突帯を貼り付ける。石器類のうち、石鍬S16~18、スクレイパーS19が緑色片岩製、スクレイパーS20は安山岩で、石鏃S21~24、



第30図 竪穴住居 3 出土遺物 (1/4, 1/3, 1/2)

石錐S25がサヌカイトである。このうちS20や石鏃1点、剥片類が住居内土壙土壙から出土した。このほか図示した以外で石鍬1点が遺構検出中に出土している。

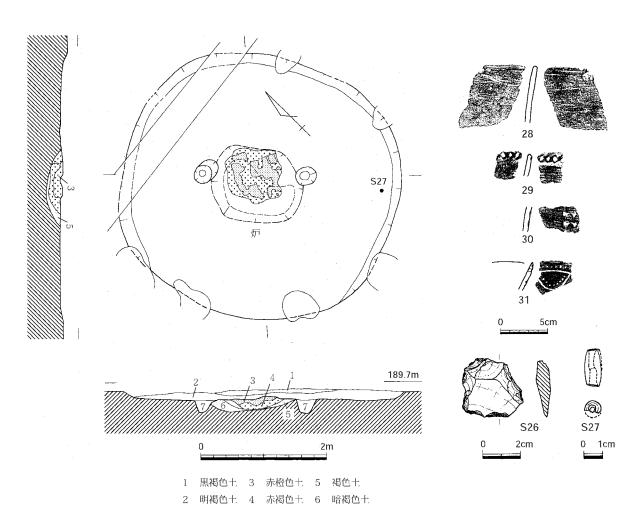
この住居の時期は、晩期中葉である。

(弘田)

## 竪穴住居4 (第22・31図、図版3・11)

3 9 05 De区に位置する。微高地1から河道2を覆う暗褐色土中から掘りこまれており、海抜189.5m の床面は、褐色砂層に達している。規模は、長軸4.35m、短軸4.1mのほぼ円形を呈し、床面積は13.4m を測る。深さは現状で17cmあり、断面は浅い皿形をなす。床面のほぼ中央には、炉と見られる被熱範囲が97×90cmの方形をなすように認められた。赤変して固く焼き締まったこの箇所は周囲より盛り上がり、何らかの区画施設が存在した可能性もある。その周辺には1.5×1.16mにわたって変色部分が見られたが、掘り方かどうかは明らかでない。この炉を挟むように2本の柱穴が検出された。その径は30~43cmあるが深さ20cmと浅く、柱が自立し得るほどの規模ではない。1.6mを測る柱間の方向は北西から南東に走る等高線と一致する。

出土遺物は総じて少ないが、口縁下に刻み目突帯をめぐらす南方前池式の深鉢29や口縁から垂下する爪形文を飾る谷尻式の深鉢30のほか、サヌカイト製のスクレイパーS26や緑色片岩製の管玉S27がある。この住居は、その層位関係や出土遺物から晩期後葉(南方前池式期)に属するものと推定される。



第31図 竪穴住居 4 (1/60) ・ 出土遺物 (1/4, 1/2)

#### 袋状土壙 3

#### 袋状土壙1 (第18・32図)

河道1の南西法面で検出された袋状土壙である。北西側に別の浅い掘り方が認められるが、前後関 係は不明確である。検出時の平面形は、直径約60cmを測る円形を示し、壙底は丸みを持ってくぼんで いる。断面形は壙底に向かってフラスコ状に開く形状を示し、上位は外方する。埋積土は、淡灰褐色 を呈する砂質土であるが、土器や炭化物は見られない。 (岡田)

#### 袋状土壙2 (第19・33図)

3 903Ci区に位置し、平面形が方形を呈する土壙である。断面はいわゆる袋状を呈し、深さが35cm をはかる。立地の面では、微高地2上に存在すること、埋土の色調は後期の包含層に対応する黒色土 である。出土遺物は認められなかったものの、それから判断すると時期は後期にさかのぼる可能性が あることなど、そのほかの袋状土壙と比べるとやや異なる点が指摘できるが、本来は貯蔵穴としての 機能を持っていたと思われる。

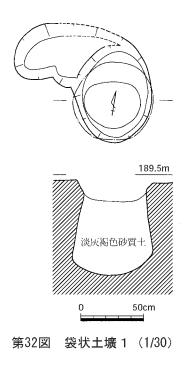
#### **袋状土壙3** (第22·34図、図版4·12)

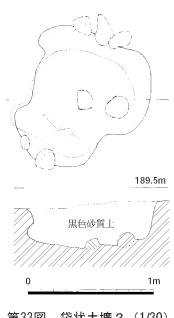
竪穴住居4の西8.5mに位置する土壙で、河道2の東斜面裾部で検出した。長軸98cm、短軸90cmの 楕円形を呈する底面は平坦で、その海抜高は187.75mを測る。深さは現状で70cmあり、断面は上部に 向かってすぼまる袋状をなす。

埋土から出土した32は口径28.2cmを測り、端部に刻み目を施す長い口頸部はナデ、体部は二枚貝で 調整する舟津原式新相の深鉢である。このほか赤漆を施す漆器片W1が出土している。 (亀山)

#### 袋状土壙4 (第22・35図)

袋状土壙3の南東4mで検出した土壙で、ほぼ同様の立地をとる。深さ76cmにある平らな底面は長 軸99cm、短軸92cmの楕円形をなし、海抜高は187.7mを測る。壁面は高さ30cmにわたって内傾しなが ら立ち上がり、すり鉢状の開口部と接続する。口唇部に刻み目を施す深鉢33~35やヘラミガキで仕上





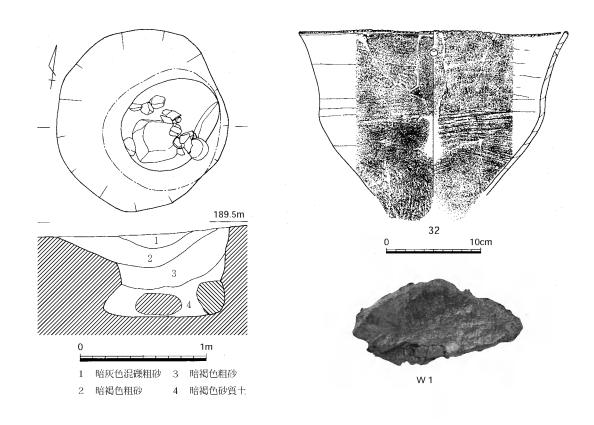
第33図 袋状土壙 2 (1/30)

げる浅鉢36・37が出土しており、袋状土壙3とほぼ同時期とみられる。

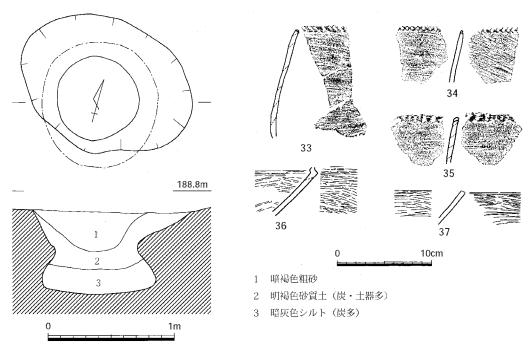
(亀山)

## 袋状土壙 5 (第22·36図)

河道2の東斜面で検出した土壙で、袋状土壙4の東1.2mに位置する。上面は長軸1.19m、短軸1.07m



第34図 袋状土壙 3 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第35図 袋状土壙 4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

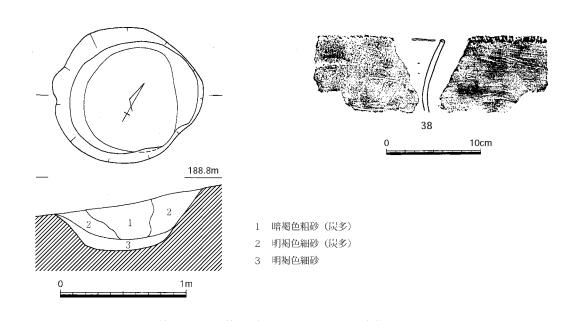
の円形を呈し、中央がわずかに凹む底面から上方に向かって開く断面U字形をなす。深さ48cmにある底面の海抜高は188.2mで、他の袋状土壙に比べてやや高い位置にある。出土した38は口縁端部に刻み日を施し内外面をナデ調整する深鉢で、袋状土壙3・4と近い時期が想定される。 (亀山)

#### 袋状土壙6 (第22・37図)

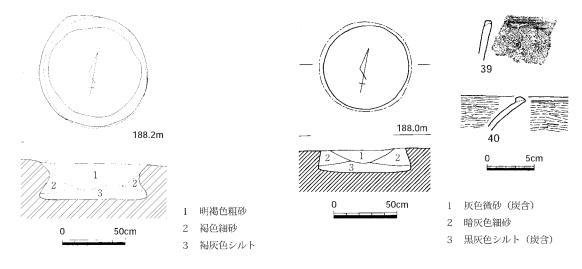
河道2の底面西よりに位置する土壙で、袋状土壙4の南西5mで検出した。検出面から深さ31cmにある平らな底面は長軸87cm、短軸80cmの円形を呈し、その海抜高は187.75mを測る。壁面は内傾しながら20cmほど立ち上がり、それより上は上方に向かって開く。出土遺物はないが、その位置関係からして他の袋状上壙と同様な時期が想定される。 (亀山)

#### 袋状土壙7 (第22・38図)

河道2の底面中央で検出した土壙で、袋状土壙6の南東5mに位置する。円形をなす底面は径73cmを測り、袋状土壙10に次いで小さい。平坦な底面は海抜高187.7mで、高さ17cmほど遺存する壁面はわずかに内傾して袋状をなす。口縁端部を面取りする深鉢39や肥厚した口縁部をもつ浅鉢40が出土し



第36図 袋状土壙 5 (1/30) - 出土遺物 (1/4)



第37図 袋状土壙6 (1/30)

第38図 袋状土壙7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

ており、袋状土壙3と似かよった時期が考えられる。

(亀山)

## 袋状土壙8・9 (第22・39凶、凶版5)

袋状土壙7の東2mに位置する袋状土壙8・9は、河道2の底面東よりで東西に並んで検出した。 長軸1.25m、短軸1.03mの楕円形を呈する袋状土壙8は深さ23cmあり、底面の海抜高は187.7mを測る。 西壁はほぼ垂直をなすが、袋状土壙9に接する東壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。埋土から遺物は出土していない。

西に接する袋状土壙9は長軸87cm、短軸83cmの円形を呈する平らな底面をもち、その海抜高は袋状 上壙8とほぼ等しい。高さ40cmある壁面は内傾しながら立ち上がり、袋状の断面をなす。出上遺物は ないが他の袋状土壙とさほど時間差はないものと思われる。 (亀山)

#### 袋状土壙10 (第22·40図)

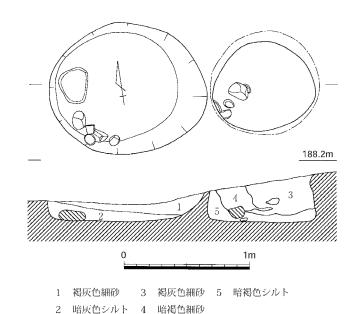
3 9 07De区、河道 2 東側傾斜面の下方に位置し、検出面は第14図の柱状図14層中程にあたるようである。検出面からは第142図383などが流れ込んだような状態で出土したため、晩期中葉に形成された面とみられるが、この土壙は残存状況から判断して、それ以前に存在し、削平をうけたと考えられる。長径66cmの円形で、底部に長径39cm、深さ30cmの穴を伴っていた。遺物はなかった。 (岡本寛久)

#### **袋状土壙11** (第22·41図、図版12)

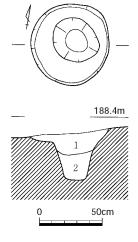
3 9 07 D d 区に位置する。後述する袋状土壙12・13と近接しており、1 つの群をなすとみられる。この土壙が切り込んで営まれていた河道2下流部底面近くに堆積する黒灰色と灰白色粘質土の互層は、出土遺物から晩期中葉(舟津原式段階)と考えられる。この土壙の平面形はやや楕円形を呈し、規模が小さいことを除けば、断面の形態や底面の海抜高、埋土がこの土壙の掘られた基盤層である褐灰色と灰色の互層であることなど、袋状土壙12・13とほぼ近しい。

浅鉢41のほかに種子状の自然遺物が出土している。時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田) 袋状土壙12 (第22・42図、図版5)

袋状土壙11の南に接して位置する。袋状土壙群の中では最大級の規模をもつが埋土の特徴などはそ







1 暗灰黄色微砂

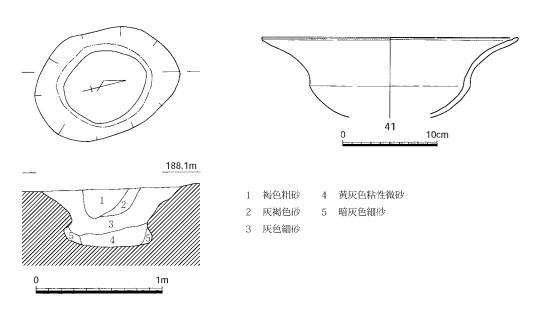
2 黒褐色粘性砂質土

第40図 袋状土壙10(1/30)

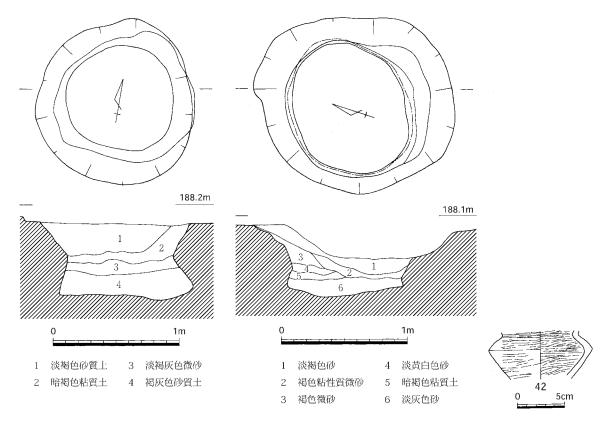
## の他の袋状土壙と大差ない。

出土遺物はみられないが、袋状土壙11同様で、時期は晩期中葉と考えて良いであろう。 (弘田) 袋状土壙13 (第22・43図、図版5)

袋状土壙12より南に2mほど離れて位置する。底面積は0.87㎡を測り、袋状土壙のなかでは最大規模である。土壙検出時に1層上面において土器42が出土している。算盤玉状の体部をもつ浅鉢で、口



第41図 袋状土壙11 (1/30) · 出土遺物 (1/4)



第42図 袋状土壙12 (1/30)

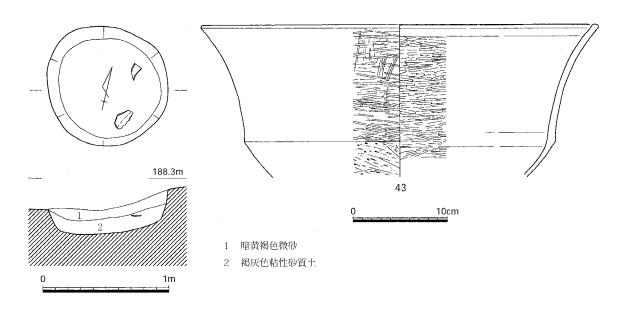
第43図 袋状土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

縁端部は欠損する。この土壙の時期は晩期中葉とみられる。

(弘田)

### 袋状土壙14 (第22·44凶、凶版12)

3 9 08De区、河道 2 東側傾斜面下方に位置し、検出面は袋状土壙10と等しい。しかし、30cm上方で包含層から出土した土器片と土壙内の土器片43が接合したため、実際には洪水砂層直下にあたる第14図10層上面が検出面とみられる。また、土器片の出土地点が土壙から50cmほど南東にあったため、規模もさらに大きかったと思われる。晩期中葉の土壙で、底面は基盤の砂礫層に達していた。 (岡本)



第44図 袋状土壙14(1/30)・出土遺物(1/4)

## 4 焼成土壙

### 焼成土壙1 (第21・45図、図版6・12)

3 9 04Ce区にあり、竪穴住居 2 の西に接して位置する。第 2 面において存在が確認できたものの平面プランが明瞭にできず、さらに掘り下げを行ったのち検出している。不定形ながらも掘り方をもち、底面は中央付近が強い熱影響で黄灰色に変色し著しく硬化している。そこからわずかに西側に上がる傾斜をなしそれとともに熱影響は弱くなっていた。炉状の施設であろうか。後述する焼成土壙 2 ~ 8 とは、立地とともに性格も異なると思われる。

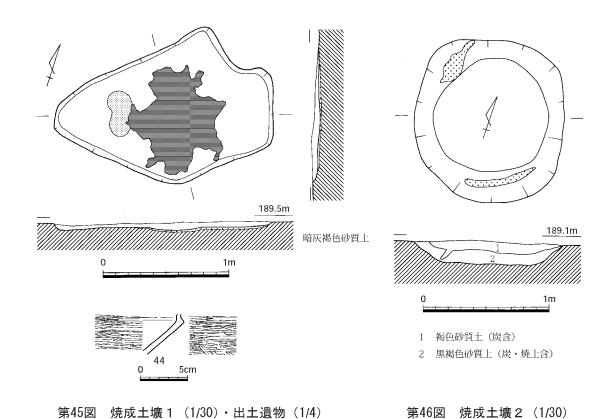
精製浅鉢44以外に出土遺物はみられなかった。この土壙の時期は晩期中葉と考えたい。 (弘田) 焼成土壙 2 (第21・46図)

3 9 02 Ci区に位置し、河道 4 (谷状の自然地形)の底面において検出した。埋土中には、炭とともに焼土塊を含んでいた。この土壙の基盤である砂層は、調査時において風化が大きいものの、壁面には熱影響が看取できた。これは後述する焼成土壙についても同様である。

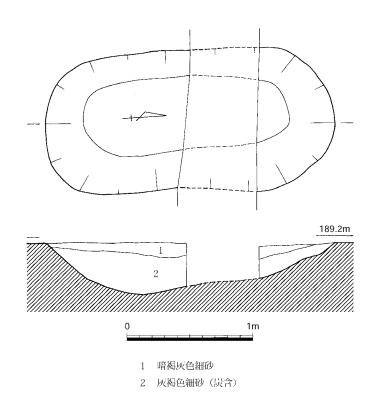
出土遺物はみられないものの、検出面からみて後期にさかのぼる可能性がある。
(弘田)

#### 焼成土壙3 (第21・47図)

3909 Cj区に位置し、焼成土壙 6~8 とともに河道 4の東岸に列状にする。平面は楕円形を呈し、埋土中には炭を多く含んでいた。



他の焼成土壙と同様で出土遺物はみられないものの、第2面において検出していることから、時期は晩期中葉と思われる。 (弘田)



第47図 焼成土壙 3 (1/30)

焼成土壙4(第12・48図、図版12) 河道4の西斜面にあたる3904Ci 区の第3面で検出した。壁面周囲が 熱影響を受けて赤変し、埋土中には 炭とともに焼土塊が散布していた。 出土した45は彦崎 K II 式に併行する 深鉢である。これは土壙検出面とも 矛盾しない。

時期は、後期後葉である。(弘田) 焼成土壙 5 (第21・49図、図版 6) 焼成土壙 4 の南に接する。古代以 降の河道の侵食により上部が削平を 受けたと思われるが、壁面は熱影響 で赤変し、埋土には炭を含んでいた。 時期は、焼成土壙 4 同様で後期に さかのぼる可能性がある。(弘田) 焼成土壙 6 (第21・50図)

3904Ci区で、河道2東岸に沿っ

て焼成土壙7・8とともに列状に位置する。土壙底から最大で8cmの炭の堆積があり、その周囲の壁面が熱影響を受け変色していた。出土遺物はみられないが時期は晩期中葉であろう。 (弘田)

#### 焼成土壙7 (第21・51図)

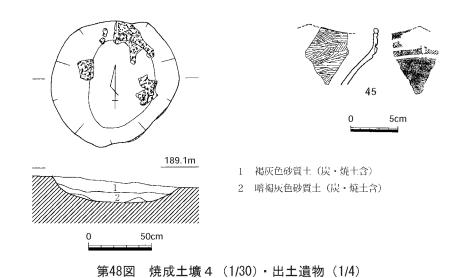
焼成土壙6のすぐ南に位置し、第1面において検出した円形の小土壙である。下層には炭が充満していた。遺物は出土していないが、時期は晩期中葉であろう。 (弘田)

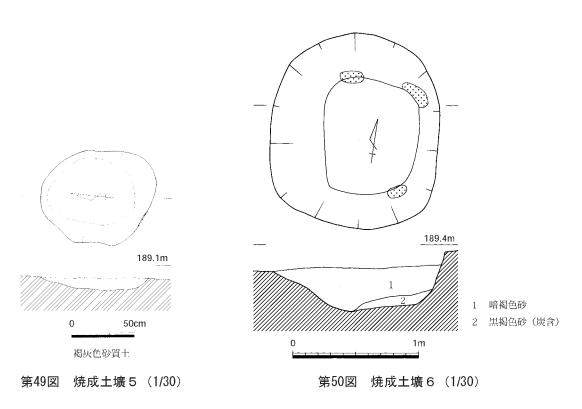
#### 焼成土壙8 (第21・52図)

3905 Ci区にあり、第1面において検出した。土壙底から炭を多く含む2層が堆積し、その上部は緩やかに開口部に向けて広がる。その傾斜変換点あたりの壁面をなす褐色砂層が熱影響により赤変していた。

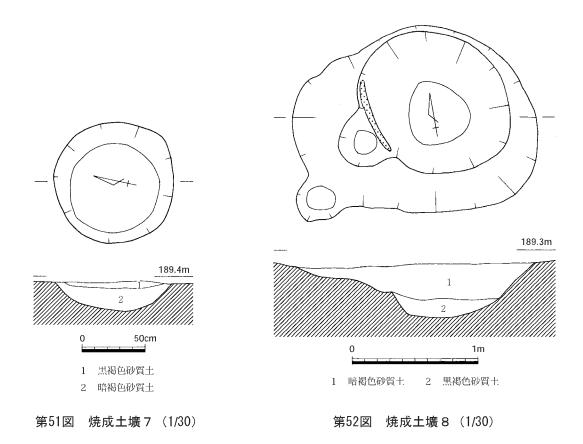
出土遺物は皆無であったが、時期は晩期中葉であろう。

(弘田)





-45-



## 5 土壙

## 土壙1 (第18・53図)

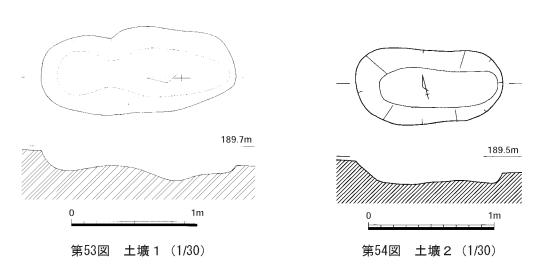
河道1の北側法面で検出された、不整な長円形を示す土壙である。長軸はほぼ南北を示し、中央部から北よりは、やや浅い。埋積上は、黒褐色を呈する砂質上であるが、出上遺物は皆無である。

人工的な掘り込みによるものか断定できない。

(岡田)

#### 土壙2 (第18・54図)

河道1のほぼ中央部で検出された、長円形を示す浅い土壙である。長軸はほぼ東西方向を示す。壙 底は比較的平坦であるが、人工的な土壙である確証はない。



黒褐色砂質土の埋積土中からの出土遺物は皆無である。

(岡田)

### 土壙3 (第18・57図)

河道1の南西側下端よりで土壙2・4と連なるように検出された。平面形は不定型で、壙底も平坦ではない。形状から人工的な遺構とは断定できず、むしろ樹木などの植生痕跡の可能性もあるだろう。 埋積土は黒褐色砂質土で、出土遺物は認められない。 (岡田)

#### 土壙4 (第18・56図)

河道1の南西法面、袋状土壙1に近接して検出された不整な円形を示す浅い土壙である。東よりに 段が存在するが、他の土壙と同様人工的な掘り込みである可能性は低い。

暗褐色~黒褐色を呈する埋積土中からの出土遺物は認められない。 (岡田)

#### 土壙5 (第19・57図)

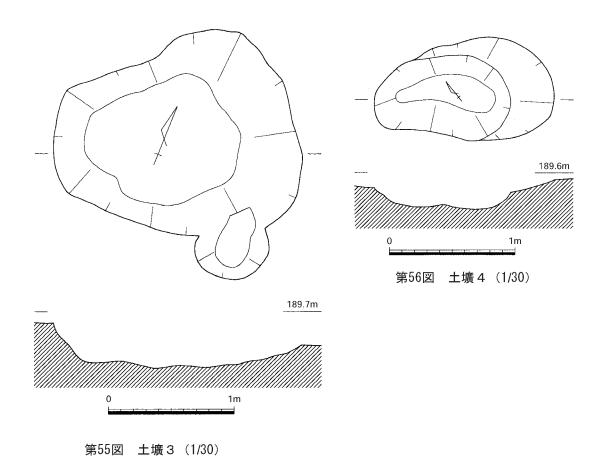
3805 Ci区の河道2 西側緩斜面部に位置していた。下層の黒色土の上面で検出され、埋土は上層の洪水砂層に似た暗灰黄色微砂であった。このことから晩期のものと考えられる。平面形は楕円形で、長径74cm、短径66cm、深さ28cmを測る。断面形は椀形を呈していた。出土遺物はなかった。 (岡本)

#### 土壙6 (第19・58図)

3805 Ci区にあり、河道2の中央部で検出された。溝1より古く、第58図の土層1が溝1の断面である。底部には段があり、最深部は西に片寄る。平面形は楕円形で、長径1.04m、短径73cm、深さ26cmを測る。埋土は2層に分けられた。褐色砂層上面の検出で晩期と考える。遺物はなかった。 (岡本)

#### 土壙7 (第19・59図)

3805Ci区、河道2西側緩斜面で検出された。褐色砂層上面での検出から晩期と考える。平面形は楕



-47-

円形で、長径1.3m、短径98cm、深さ34cmを測る。埋土は黒褐色微砂で、遺物はなかった。 (岡本) 土壙8 (第19・60図)

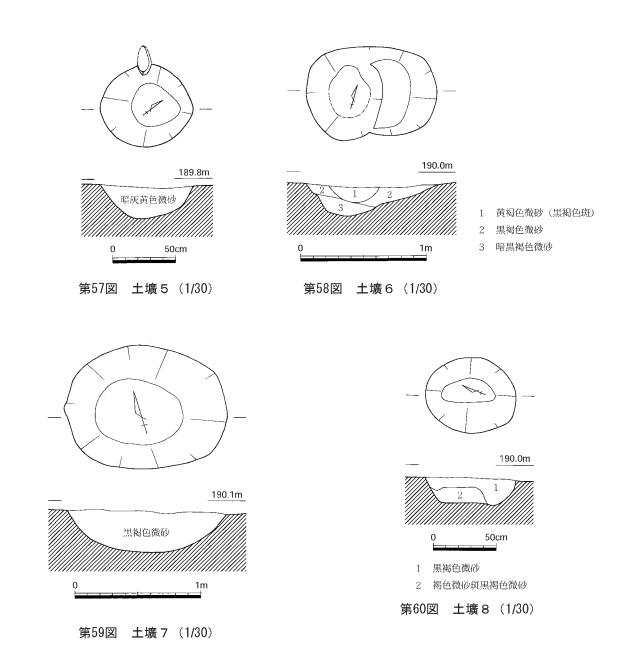
3805Ci区の東端にあり、河道2の中央付近で検出された。検出面が洪水砂層である褐色砂質土の上面のため、晩期の土壙とみられる。平面形は楕円形で、長径72cm、短径60cm、深さは22cmである。底面は不整形だが平坦で、埋土は2層に分けられた。出土遺物はなかった。 (岡本)

### 土壙9 (第19・59図)

3806 Ci区にあり、河道2の中央付近で検出された。底部は段構造になり、北側に片寄って最深部が存在した。平面形は楕円形をなし、長径70cm、短径55cm、深さは41cmを測る。最深部は円形を呈する。埋土は黒褐色微砂で、出土遺物はなかった。褐色砂層上面で検出したため晩期と考える。 (岡本)

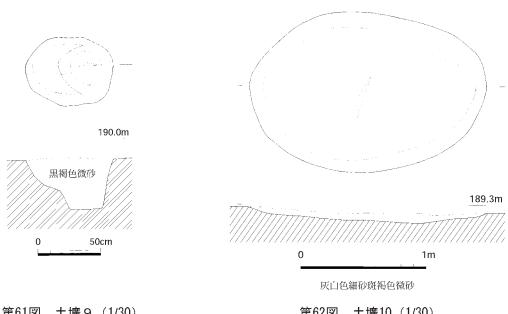
### 土壙10 (第19・62図)

3807 Cj区の北西角、河道2の中央付近に位置している。下層の黒色土の上面で検出したため、縄文時代晩期のものと考えられる。平面形は楕円形で、長径1.87m、短径1.28m、深さは12cmと浅く、



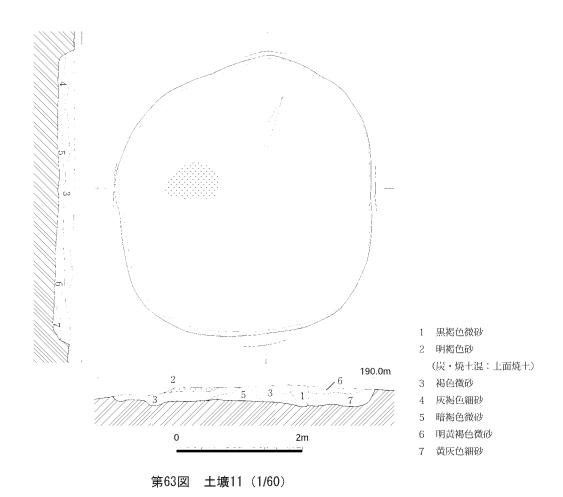
断面形は皿形を呈する。埋土は褐色微砂で灰白色細砂が混じっていた。出土遺物はなかった。(岡本) 土壙11 (第19・63図)

3807Ci区の河道2西側肩部で検出された。検出面は洪水砂層の褐色砂層を除去した段階で、暗灰黄



第61図 土壙 9 (1/30)

第62図 土壙10 (1/30)



-49 -

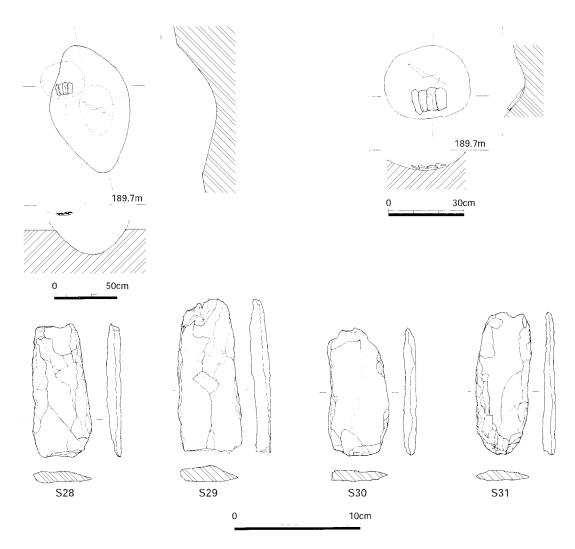
色微砂層上面にあたる。まず焼土面が検出され、ついで大形の円形に近い平面形が不明瞭に認められた。このため、第64図は暗灰黄色微砂層の下の黒色微砂層上面で実測したものである。長径4.6m、短径4.27m、深さ36cmを測り、底面が平坦なため、住居跡の可能性も考えたが、炉跡や柱穴などは確認されなかった。また、遺物も土器細片にすぎない。検出面から晩期中葉のものとみられる。(岡本)

## 土壙12 (第19・64図、図版7・13)

河道2の東斜面に堆積した黒褐色土を掘り下げる過程で検出した、緑色片岩製のスクレイパー**S28** ~31の集積遺構で、掘り方は明確にできなかった。黒褐色土層を除去後、長軸1.04m、短軸64cm、深 さ20cmの楕円形を呈する上壙を検出したが、これらと関連するものかどうかは明らかでない。上器等は伴出していないものの、層位からして晩期中葉~後半に属する可能性が高い。 (亀山)

### 土壙13 (第19・65図、図版12)

3809 C j 区、河道 2 西側傾斜面の基盤層上面で検出した。調査区端にあり、検出は一部にとどまった。 平面形は不整形な円形をなすようで、残存部の長径が1.02m、深さは22cmを測る。埋土は 2 層に分けられ、その状況から風倒木痕の可能性がある。土器片がいくらか出土したが、図示したうち46~54は接合しないものの同一個体とみられる。その年代は後期前葉の津雲 A 式に併行するか。 (岡本)



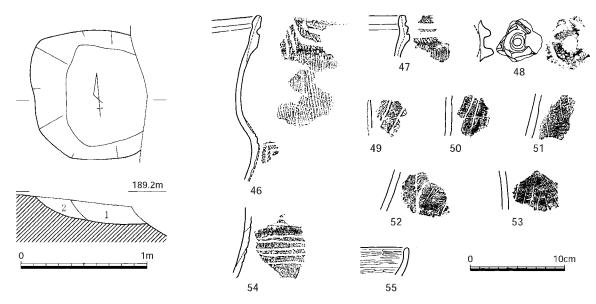
第64図 土壙12(1/30)・遺物出土状況(1/15)・出土遺物(1/3)

### 土壙14 (第19・66図、図版13)

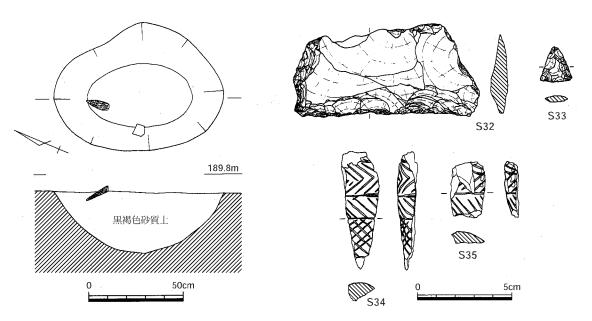
微高地1の中央西よりに位置する土壙で、暗褐色土層の下面で検出した。長軸45cm、短軸33cmの楕円形を呈し、深さ16cmの断面はU字形をなす。黒褐色をなす埋土の上層から黒色粘板岩製の石刀 S 3 4 が出土した。斜格子や羽状文を刻む柄の破片で、30mほど離れて出土した S 35 や S 55 と同一個体と見られる。伴出遺物にはサヌカイト製のスクレイパー S 32 や平基鏃 S 33 のほか精製土器片があり、晩期中葉~後葉に位置づけられる。

### 土壙15 (第19・67図、図版7)

3 900 Ci区に位置する平面形が円形を呈する小上壙である。この上壙の周囲は古代から中世にかけての河道によって縄文の層が削られており、基盤層上でわずかに後期の黒褐色土がみられるかどうかという状況であった。大半の土壙は基盤層を掘り込んでおり、土壙底は礫層に到達している。この



第65図 土壙13 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第66図 土壙14 (1/20)・出土遺物 (1/2)

土壙については、第3面において検出しており、埋土の色調および検出面から考えて、時期は後期に さかのぼる可能性がある。 (弘田)

## 土壙16 (第19・68図)

3 900 Ci 区に位置し、溝状を呈する土壙である。出土遺物は認められなかったが、埋土から判断 すると第2面(晩期下層)に属する土壙ではなかろうか。 (弘田)

## 土壙17 (第19・69図)

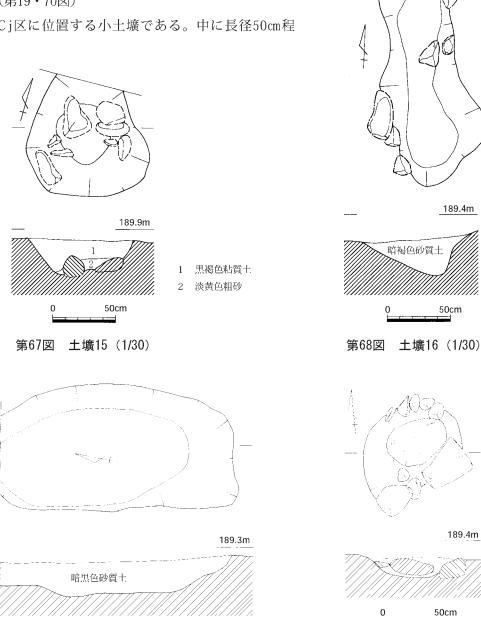
3900Ci区に位置する長円形の土壙で、長さ1.82m以上、幅1m、深さ26cmを測る。

第3面において検出しており、遺物の出上はみられなか

ったが、埋土の色調から判断すると、時期は後期に遡る可 能性がある。 (弘田)

### 土壙18 (第19・70図)

3900Cj区に位置する小土壙である。中に長径50cm程



暗褐色砂質土

第70図 土壙18 (1/30)

1m

第69図 土壙17 (1/30)

の礫を含む。埋土は包含層の第 1 層に相当することから時期は、晩期中葉と推定できる。 (弘田) 土壙19 (第20・71図)

3 9 01 C d区にあり、河道 3 の東斜面部において検出した。平面形はほぼ矩形を呈する。規模は、長さが1.15 m、幅は99 cm、深さが17 cmを測る。

出土した遺物や層位からみて、この土壙の時期は晩期中葉と考えられる。(福田正継)

土壙20 (第19・72図、図版13)

3901 Ci区に位置し、第3面において検出した土壙である。石製管玉 S 36は、結晶片岩様緑色岩で(藁科報告参照)、土壙底の地山礫上から出上している。この玉は、竪穴住居 4 から出上した管玉 S 27 と石材、形態が近似している。

このほかにも土器小片が出土しており、弥生土器と思われる破片もみられたが、土壙の時期として は縄文晩期と理解している。 (弘田)

### 土壙21 (第20・73図)

3901 C g 区に位置し、第3面において検出した。平面形が長円形を呈する土壙で、規模は、長さ 1.55 m、幅80cmを測る。遺物の出土をみないが、埋土からみてこの土壙の時期は、後期にさかのぼる 可能性がある。 (弘田)

### 土壙22 (第20・74図)

3901Cg区に位置する。平面形が方形を呈し、比較的浅い土壙である。

第3面において検出しており、時期は後期と考えられる。

(弘田)

### 土壙23 (第20・75図)

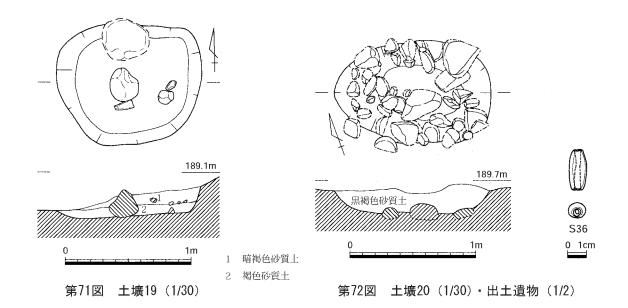
3902Cg区に位置し、第3面において検出した。平面形が方形を呈した土壙である。周辺の土壙と比べると深さが48cmと深く、壁面も垂直に近く立つ。

この土壙の時期は、埋土からみて後期の可能性がある。

(弘田)

### 土壙24 (第20・76図)

3 9 02 C g区に位置し、平面形が長方形を呈する小土壙である。規模は、長さが94cm、幅が65cmで、深さが22cmを測る。遺物はなく、第3面において検出しているが、埋土から判断すると時期は、晩期



中葉と思われる。 (弘田)

## 土壙25 (第20・77図)

3902Cg区に位置し、第3面において検出した平面形が楕円形の土壙である。規模は、長さが1.12m、幅は71cm、深さは45cmを測る。

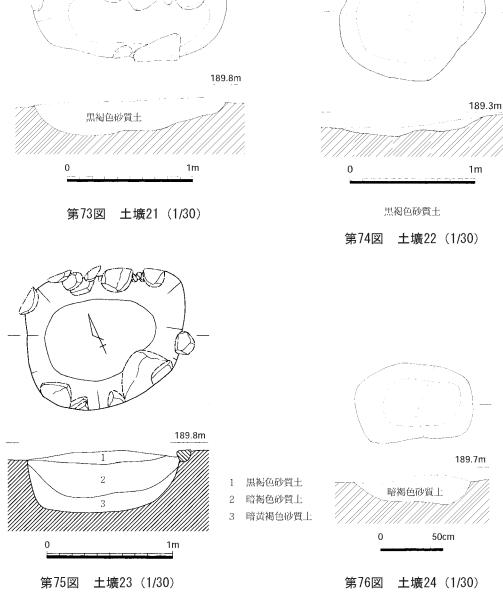
埋土の色調などから判断してこの土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田)

## 土壙26 (第20・78図)

3902 Cf区に位置し、第3面において検出した土壙で、平面形は不整円形である。規模は、長さ1.15m、幅78cm、深さ20cmを測る。この上壙の時期は、晩期中葉とみられる。 (弘田)

## 土壙27 (第20・79図)

3902Cf区に位置し、第3面において検出した土壙である。平面形が隅丸方形をなし、規模は、



長さが1.0m、幅は80cm、深さが18cmを測る。

この土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。

(弘田)

## 土壙28 (第20・80図)

3 9 02 C g 区に位置し、第 3 面において検出した小土壙である。出土遺物にはサヌカイトの剥片や緑色片岩製石鍬片がある。

この土壙の時期は、後期に遡ると考えられる。

(弘田)

### 土壙29 (第20・81図)

3 9 02 Ch区に位置し、第 3 面において検出した上壙である。平面形は楕円形を呈し、長さが85cm、幅は58cm、深さが33cmを測る。

この土壙の時期は、埋土から判断すると晩期中葉と考えられる。

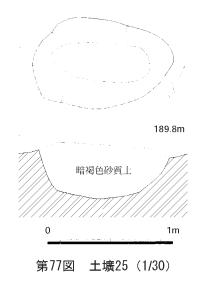
(弘田)

### 土壙30 (第20・82図)

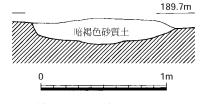
3 9 02 Ch区に位置し、第 3 面において検出した土壙である。平面形は長方形を呈し、長さ1.07 m、幅60cm、深さ20cmを測る。

この土壙の時期は、後期の可能性がある。

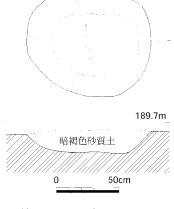
(弘田)



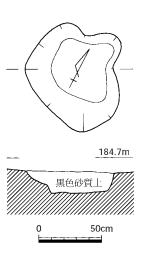




第78図 土壙26 (1/30)



第79図 土壙27 (1/30)



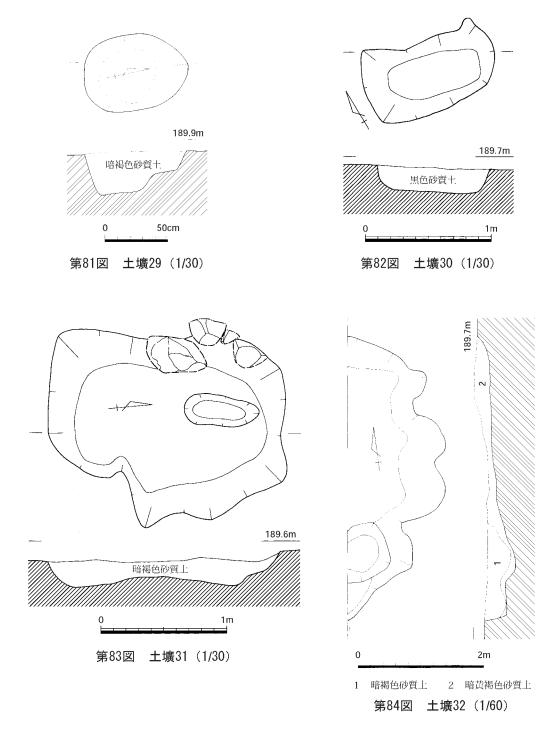
第80図 土壙28 (1/30)

## 土壙31 (第20・83図)

3 9 02 Ch区に位置し、第 3 面において検出した土壙である。平面形が不整方形で、長さは1.88m、幅は1.4m、深さが20cmと、やや大きめの土壙である。埋土の色調から判断すると、この土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田)

## 土壙32 (第20・84図)

3 9 03 C f区に位置する。平面形が不定形で大形の土壙で、大半は未掘部分に続くとみられる。第 2 面において検出したが、埋土は晩期上層に近い。底面はほぼ平坦であるが 1 か所にピットとみられる落ち込みがあった。上壙の規模から竪穴住居の可能性もある。



図示しえていないが、縄文土器底部片やサヌカイトの小剥片がまとまって出土した。

この土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。

(弘田)

### 土壙33 (第20·85図、図版13)

3904Cf区の竪穴住居2のすぐ西に接して位置し、第2面において検出した土壙である。土器小 片や完形の石鍬S37が出土している。石鍬は緑色片岩製で、片面のおよそ下半分が使用によって非常 によく摩滅している。この土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田)

### 土壙34 (第20・86図)

 $3904 \, \mathrm{Cg}$ 区に位置し、第3面において検出した円形の上壙である。規模は、長さが $1.08 \, \mathrm{m}$ 、幅は $1.02 \, \mathrm{m}$ 、深さが $25 \, \mathrm{cm}$ を測る。

図示しえないものの、土器小片が出土しており、この土壙の時期は、晩期と考えられる。 (弘田) 土壙35 (第20・87図)

微高地2上の3906Cf区に位置し、第2面において検出した。平面形が長方形を呈し、南側は調査区外に続くものの、幅が1.3m、検出面からの深さは80cmを測る大形の土壙である。

(弘田)

### 土壙36 (第20・88図)

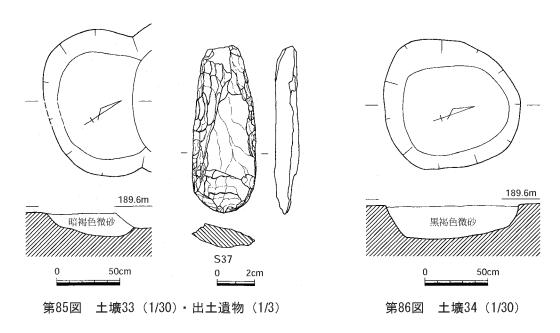
3 9 06 C f区で、土壙35の東に接する土壙である。形態、規模も土壙35に近く、深さは 1 mを測る。 土壙の機能は貯蔵穴であろうか、出土遺物は無い。

第2面において検出しており、この土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田)

### 土壙37 (第20・89図、図版13)

3905 Ch区で、竪穴住居2のすぐ東に接して位置する土壙である。平面形は隅丸方形をなし、規模は長さ1.55m、幅1.05m、深さ26cmを測る。緑色片岩製の石器 S 38が出土している。基部、刃部、左側縁には調整痕が認められるが、右側側縁は原礫面を残す。石鍬ないしはスクレイパーの未製品の可能性もある。住居2からも石鍬6点以上が出土しており住居との関連も考えられる土壙である。

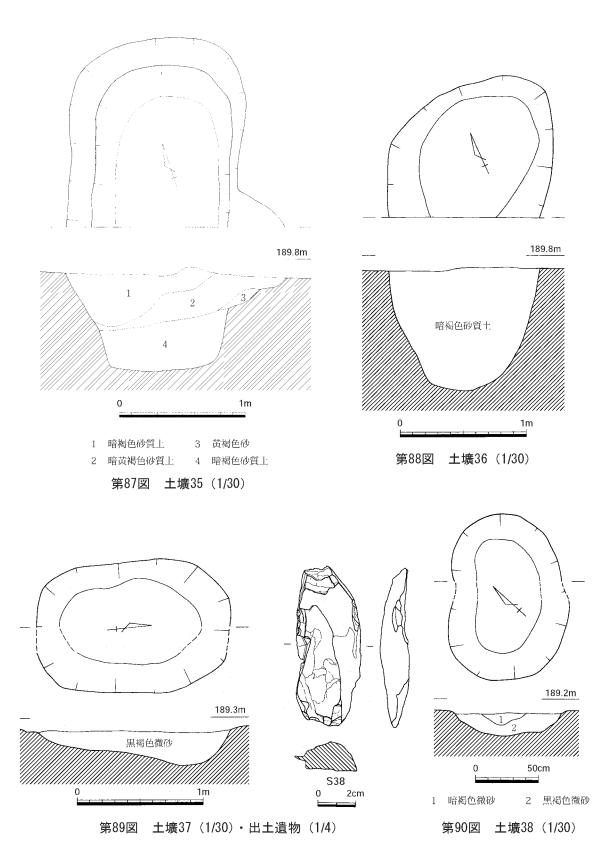
第2面において検出しており、この土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田)



## 土壙38 (第21・90図)

3 9 05 Ch区に位置し、第 2 面において検出した平面形が楕円形の土壙である。長さは1.3 m、幅が95cm、深さは19cmを測る。

遺物は出土していないが検出面からみて時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田)

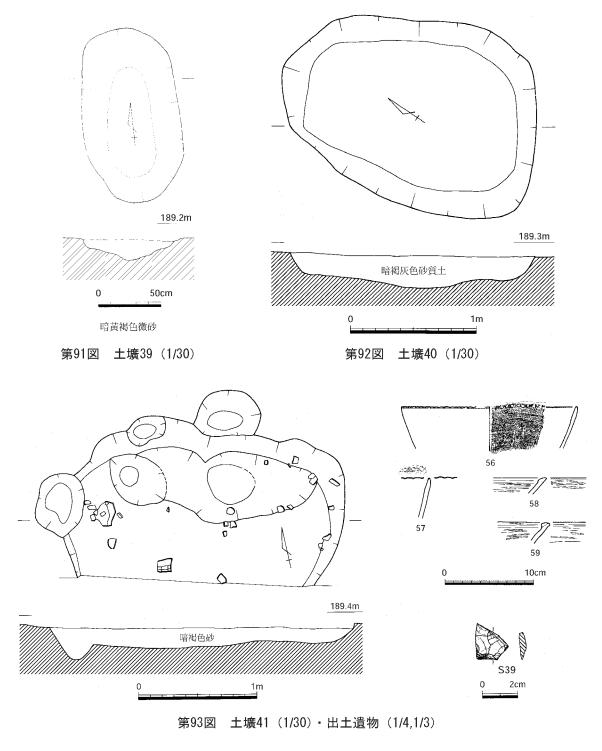


### 土壙39 (第21・91図)

3 9 05 Ch区に位置する、長円形の土壙で、長さは1.4m、幅が1.3m、深さは16cmを測る。第 2 面において検出しており、わずかながらも遺物が出土している。それらから判断するとこの土壙の時期は晩期中葉と考えられる。 (弘田)

## 土壙40 (第20・92図)

3906 Cg区に位置する土壙で、竪穴住居 2 に切られている。埋土中よりサヌカイトの剥片が出土 した。竪穴住居とともに検出したが、埋土の色調からみて第 3 面に伴うと考えられる。この土壙の時



-59-

期は、晩期中葉と考えられる。

(弘田)

### 土壙41 (第20・93図)

4000 Cg区に位置し、第1面において検出した。竪穴住居3覆土上面のたわみで、遺物が集積したと考えられる。出土遺物のうち、深鉢56・57はともに口縁部に刻みを施し、56の内面は条痕がみられるが、57は内外面ともにナデを施す。このほかにも浅鉢58・59やサヌカイト製の楔S39、剥片多数が出土している。この土壙の時期は、晩期中葉と考えられる。 (弘田)

### 土壙42 (第21・94図)

3901Ci区に位置し、河道4の底面において検出した。平面形が方形を呈し、深さは15cmと浅いが、土壙底中央は浅く窪む。この土壙の時期は、後期と考えられる。 (弘田)

189.3m

暗思色砂質土

第94図 土壙42 (1/30)

## 土壙43 (第21・95図)

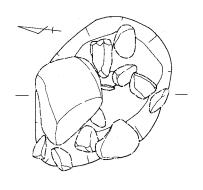
3902Ch区に位置し、第3面において検出した、平面 形がやや不整な方形を呈する土壙で、土壙底面はくぼみを なす。遺物の出土をみないが、この土壙の時期は、後期の 可能性がある。 (弘田)

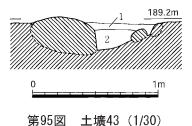
### 土壙44 (第21・96図)

3902Ci区に位置し、第3面において検出した土壙で 基盤の礫層中に掘りこまれていた。ただし、埋土からみて 第1面に伴う可能性があり、この土壙の時期は、晩期中葉 と考えておきたい。 (弘田)

### 土壙45 (第21・97図)

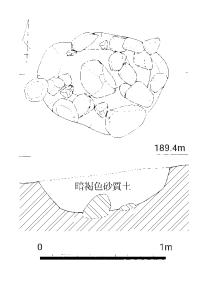
3902Ci区に位置し、河道4の東斜面において検出している。図示しうる遺物は出土していないが、埋土の色調からみて第1面に対応し、晩期中葉の時期に属すると思われる。 (弘田)





1 暗黒色砂質土

2 暗褐色砂質土



第96図 土壙44(1/30)

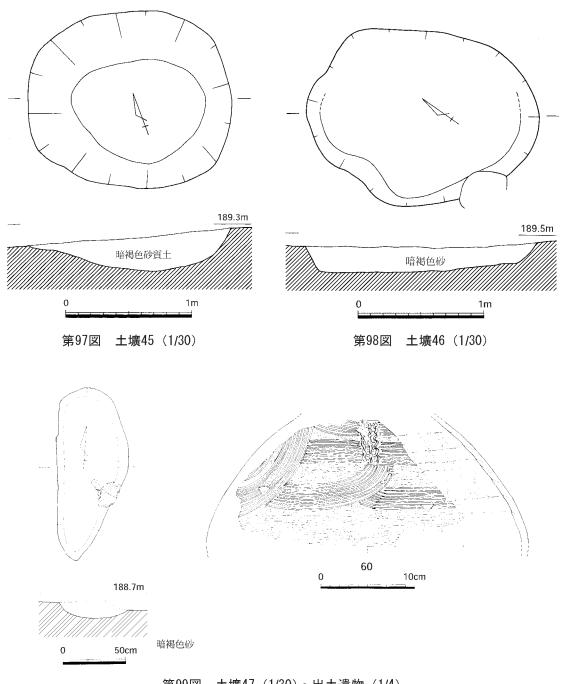
### 土壙46 (第21・98図)

3906 Cj区にあり、河道 4 東岸の焼成土壙列南端位置するが、熱影響や炭層はみられない。

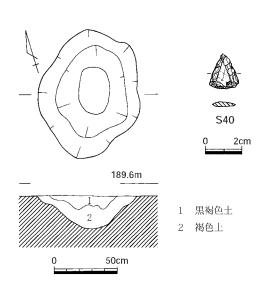
この土壙の時期は、晩期中葉で、第2面に対応すると考えられる。 (弘田)

## 土壙47 (第21・99図、図版7・12)

4000Da区の第3面において検出した浅く不定形な小土壙である。底面より加曽利BI式の大型 注口土器片60が、内面を上にして出土している。体部外面はヘラミガキののち櫛歯状工具により9~ 8条の曲線集合文を施すのに対し、内面は粘土紐の痕跡を明瞭に残し、外傾接合であった。百間川沢 田遺跡四元調査区出上注口上器例(『百間川沢田遺跡3』)と比べると縁取り沈線はみられない。時間 的にこの土壙の時期は、後期中葉から後葉と考えられる。 (弘田)



第99図 土壙47 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第100図 土壙48 (1/30)・出土遺物 (1/2)

### 土壙48 (第22·100図、図版13)

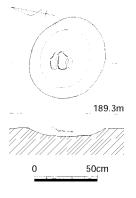
竪穴住居4の北29mで検出した土壙で、微高地1の中央南よりに位置する。暗褐色土層の下面で検出したもので、長軸2.05m、短軸1.6mの不整円形をなす。深さ50cmにある底面は凹凸がみられ、埋土も漸移的変化を示すところから木根の痕跡である可能性が高い。サヌカイト製の平基鏃 S 40が出土している。 (亀山)

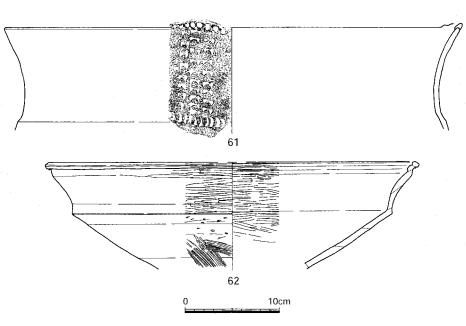
## 土壙49 (第22·101図、図版13)

土壙48の南西20mに位置し、河道2の上部に堆積し 褐色砂層の上面で検出した。長軸67cm、短軸57cm、深 さ7cmの円形をなす掘り方を想定したが明確ではな い。口径48cmを測る深鉢61は長い口頸部をナデで調整 し爪形文を飾る。浅鉢62は、径38.8cmの外反する口縁 端部を二段につくる。いずれも晩期中葉の谷尻式に属 するものと思われる。 (亀山)

# 土壙50 (第22·102図、図版13)

土壙49の西6mに位置する土壙である。褐色砂層の上面で出土した深鉢の周辺を精査し、長軸1.01m、短軸80㎝の楕円形をなす掘り方を想定したが確証に乏しい。横転した状態で出土した谷尻式の深鉢63は、口径39.8㎝を測る口縁部が波状をなし、ナデで調整する外面には爪形文と刺突文を縦位に飾る。径42.7㎝の体部はケズリで調整し、口頸部との間には逆C字の爪形文をめぐらす。 (亀山)

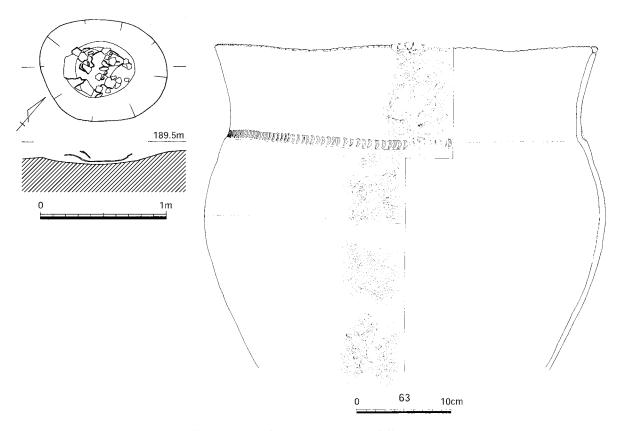




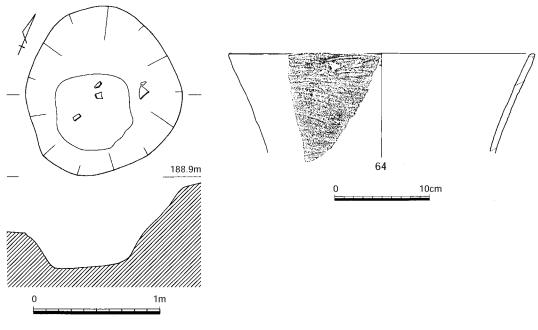
第101図 土壙49(1/30)・出土遺物(1/4)

## 土壙51 (第22·103図、図版12)

河道2の東斜面で検出した土壙で、土壙50の南西11mに位置する。上面は長軸1.36m、短軸1.24m の不整な円形を呈し、深さ70cmにある底面は平坦でその海抜高は188.2mを測る。上方へ直線的に開く口頸部を巻貝で調整する深鉢64が出土しており、後期中葉~後葉に位置づけられる。 (亀山)



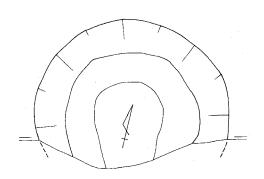
第102図 土壙50 (1/30)・出土遺物 (1/4)

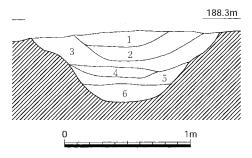


第103図 土壙51 (1/30)・出土遺物 (1/4)

### 土壙52 (第22・104図)

3907Dc区に位置し、河道2底面近く(第14図の第14層)で検出した。埋土は、褐色と灰色の互





- 1 褐色砂
- 4 淡灰色細砂 (炭含)
- 2 暗灰色砂(炭層)
- 5 暗褐色粘質土 (炭含)
- 3 褐色砂
- 6 淡灰色砂(石含)

第104図 土壙52(1/30)

層で、各層には炭を含んでいた。袋状土壙群の中に あり断面が逆台形を呈するほかは、規模や底面の標 高などが近くの袋状土壙と類似することから、機能 的には貯蔵穴の可能性を考えたい。

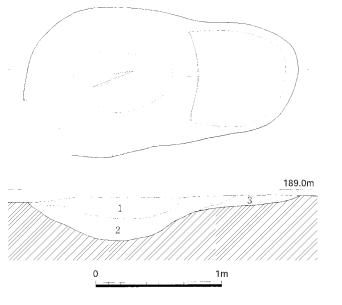
土器細片が出土したのみであるが、層位から判断 してこの上壙の時期は、晩期中葉と考えてよいであ ろう。 (弘田)

## 土**壙53** (第22・105図)

3906Dg区、微高地1の南端、河道1の肩口に位置していた。検出面は微高地基盤層で、周辺にも大小多数のピットが検出された。平面形は長径2.19mの不整形な楕円形で、底面は段状を呈し、深さ37cmを測った。埋土の堆積状況や形態から風倒木痕の可能性もある。遺物はなかった。 (岡本)

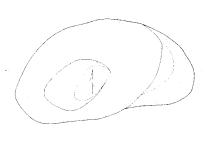
### 土壙54 (第22・106図)

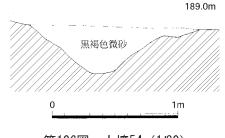
微高地1の南端、3907Df区にあり、土壙53と同じく、微高地基盤層の灰黄褐色弱粘質土層上面で検出された。平面形は不整形で、楕円形の土壙の



- 1 暗褐色微砂(鈍い黄褐色斑)
- 2 鈍い黄褐色微砂
- 3 黄褐色微砂・暗褐色微砂斑鈍い黄褐色微砂

第105図 土壙53 (1/30)



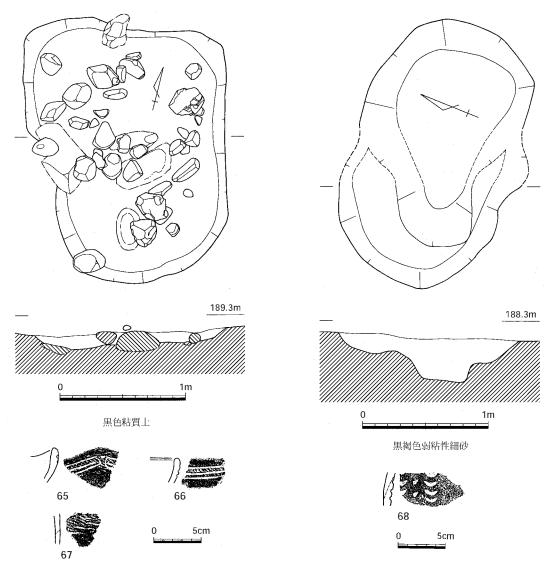


第106図 土壙54 (1/30)

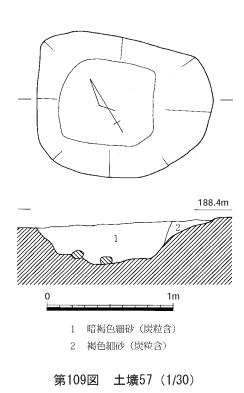
東に浅い張り出しがつく。長径1.43m、短径79cm、深さ39cmを測り、断面形はV字形をなす。埋土は 黒褐色微砂で、土壙53と異なり、土壙の性格が違っていたと思われる。遺物はなかった。 (岡本) 土壙55 (第22・107図、図版8・13)

3 9 08De区、河道 2 の中央部付近に位置し、河道堆積土を除去した基盤層上面で検出した。土壙内には礫が大量に散らばり、また、土壙の底面にも基盤層の礫が顔を出していた。平面形は北半が隅丸方形、南半が円形に近い不整形なもので、長軸2.01m、短軸1.62mを測った。深さは17cmと浅く、検出時に土壙内から頭を出している礫もあり、基盤の上に堆積していた黒色粘性砂質土層上面から掘り込まれていた可能性もある。底面はほぼ平坦であった。図示した上器片は同一個体の可能性が高く、波状口縁をもつ深鉢形土器で、後期中葉のものである。検出面からは後期の土壙と考えられる。(岡本)土壙56(第23・108図)

4 0 03Df区、微高地 2 から河道 2 へ下がる南東部斜面に位置していた。洪水砂層である晩期中層(褐色粗砂)上面で検出した。谷尻式の土器片も出土していて、晩期中葉以降の土壙である。平面形は不整形な楕円形で、長径2.14m、短径1.4m、深さ40cmを測る。底面は階段状をなしていた。 (岡本)



第107図 土壙55 (1/30)・出土遺物 (1/4) 第108図 土壙56 (1/30)・出土遺物 (1/4)



### 土壙57 (第23・109図)

4003De区、やはり微高地2の南東部斜面にあった。 検出面も土壙56と同じだが、埋土は上層の包含層により類似し、遺物もないため、時期については明確ではない。平面形は隅丸方形に近く、底面は平坦である。 長径1.4m、短径1.11m、深さ36cmを測る。 (岡本)

# 6 火処

## **火処1** (第19・110図)

3805Ch区、微高地2の北端に位置し、下層の黒色土の上面で検出された。焼土が長径64cm、短径51cmの楕円形に広がり、断面形は皿形で、厚さは7cmを測った。燃焼に伴う熱の影響でこの範囲が暗赤褐色に変色したものと考える。晩期のものである。 (岡本)

### 火処2 (第19・111図)

3908Ci区の河道2西側傾斜面に位置していた。検出 面は下層の黒色土上面のため、晩期のものと考える。

長径48cm、深さ13cmの土壙の上半に焼土が認められたが、両者の関係は不明である。 (岡本)

### 火処3 (第22図)

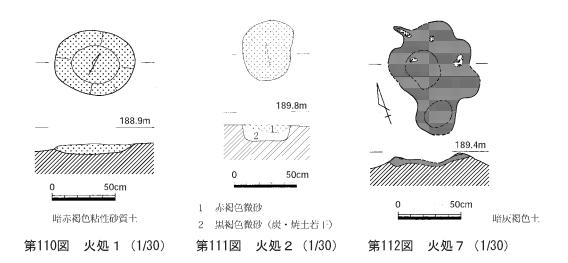
竪穴住居4の南東5.5mの褐色砂層上で検出した被熱痕跡である。赤変した砂の範囲は60×50cmで、 竪穴住居4の炉に比べて被熱は弱い。層位関係から晩期中葉に属する可能性が高い。 (亀山)

### 火処4~6 (第20図)

3009CfからCg区にかけて4か所の火処、焼成土壙1基がみられた。このうち火処2~6は赤橙色を呈する平坦な焼土面であった。第2面において検出し、ともに竪穴住居1・2の周辺部に接していることから屋外炉の可能性が考えられる。 (弘田)

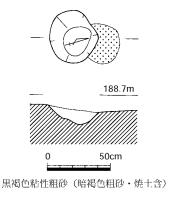
## 火処7 (第20·112図、図版8)

火処4~6同様に竪穴住居2に近接する。第2面において検出しており、晩期中葉に属する。平面



的にはやや不定形で皿状に窪んだピット状で、内面は暗灰褐色を呈し、焼土塊も認められた。先述した火処よりも強い熱影響をうかがわせる。遺物の出土はないが、時期は晩期中葉であろう。 (弘田) 火処8 (第23・113図)

微高地2の南部、4007Cc区にあり、微高地の基盤層である明 褐色砂礫層の上面で検出した。焼土が長径34cmの不整円形に広がり、 それを長径42cmのピットが切っていた。土壙周辺には大小多くのピットがあり、焼上面とピットは関係しない可能性が高い。(岡本)



### 

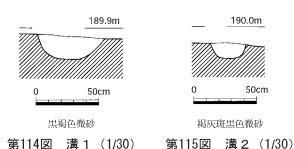
第113図 火処8 (1/30)

### 溝1 (第19・114図)

3805Ci区から3806Cj区までほぼ直線的に延びていた。検出面は晩期洪水砂層上面であるが、埋土からすると検出面から掘り込まれたかは確実ではない。晩期中葉以降のものである。河道2の中央部を走るが、北でははずれていく。最大幅86cm、深さ20cmで、縄文土器の細片が出土している。 (岡本)

### 溝2 (第19・115図)

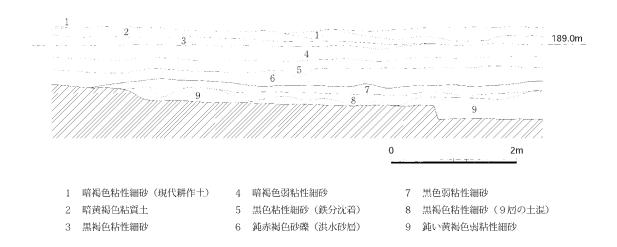
3806Cj区にあり、河道2の東側傾斜面下に 位置していた。検出状況は溝1と同じで、同 時期の可能性もあるが、埋土が黒褐色微砂の ため掘り込み面はより確実ではない。北西か ら南東へ流れていたとみられ、10cmの落差が あった。最大幅36cm、深さ25cmで、断面形は 椀形を呈する。出土遺物はない。 (岡本)



## 8 土器溜まり

土器溜まり1 (第23・116~120図、図版8・14)

4 003Dc区の微高地2南東部斜面において検出された。6×1.5mの範囲に土器片が集中し、土器溜ま

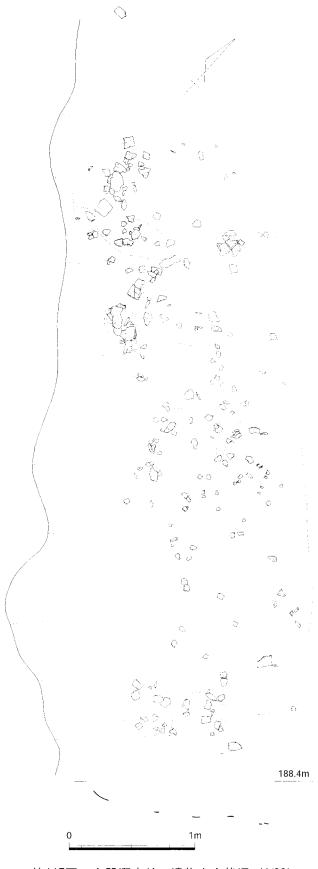


第116図 土器溜まり1周辺土層断面図(1/60)

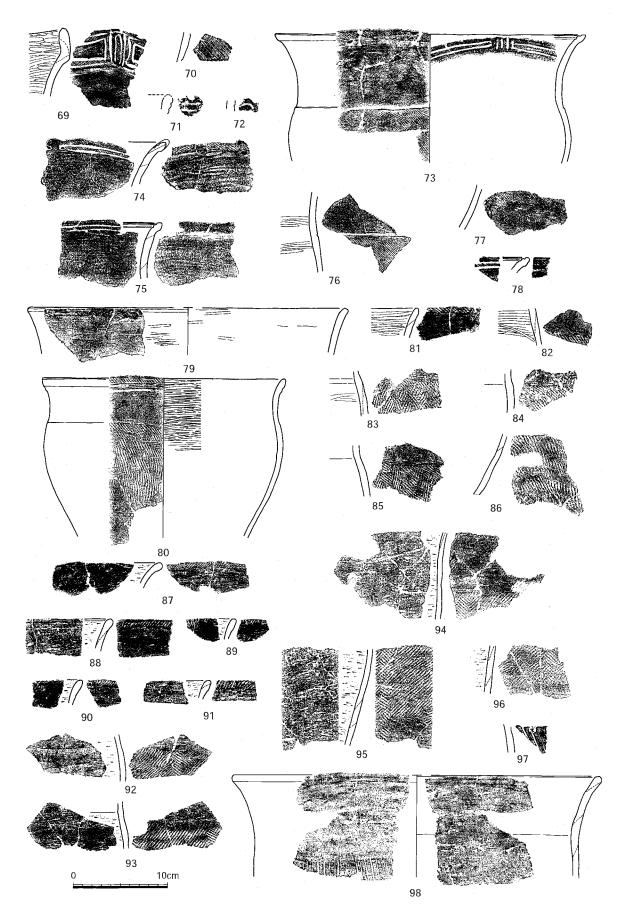
りを形成していた。土器片は25cmほどの 高度差の中に浮き沈みしていた。土器溜 まりの西側は古墳時代以後の洪水によっ て大規模な削平をうけていて、第117図に 示した肩部の線が洪水による削平面と土 器溜まり検出面との境界線である。

第116図は第157図の上段左半の拡大図 で、上器溜まり1から13mほど北西に離 れた調査区北壁の土層断面図である。6 層が古墳時代以後の洪水砂層で、7層以 下が縄文時代の包含層である。7層は晩 期の洪水砂層の下位にあり、縄文時代の 概要で述べた下層の黒色土に対応するも のである。この層を除去した面が土器溜 まり1の検出面にあたる。8層は9層の 一部が黒ずんだような漸移的な層で、9 層との境界はあまり明確ではない。土器 片はこの8層と9層に包含されていたも ので、とくに9層は微高地基盤層の細砂 だまりと考えていた部分であったため、 土器片の出土は意外であった。9層を土 器を包含する部分と基盤の無遺物層に分 けるのは困難で、土器片が出土するとそ の周囲を掘り下げるのが発掘の実際であ った。このため、図版8にみられる土器 溜まりの窪みは発掘調査によってできた もので、縄文時代の遺構ではない。また、 土器溜まり周辺にまだ土器片が埋もれて いる可能性も完全には否定できない。こ のような状況は河道2の上流部でも確認 されている。

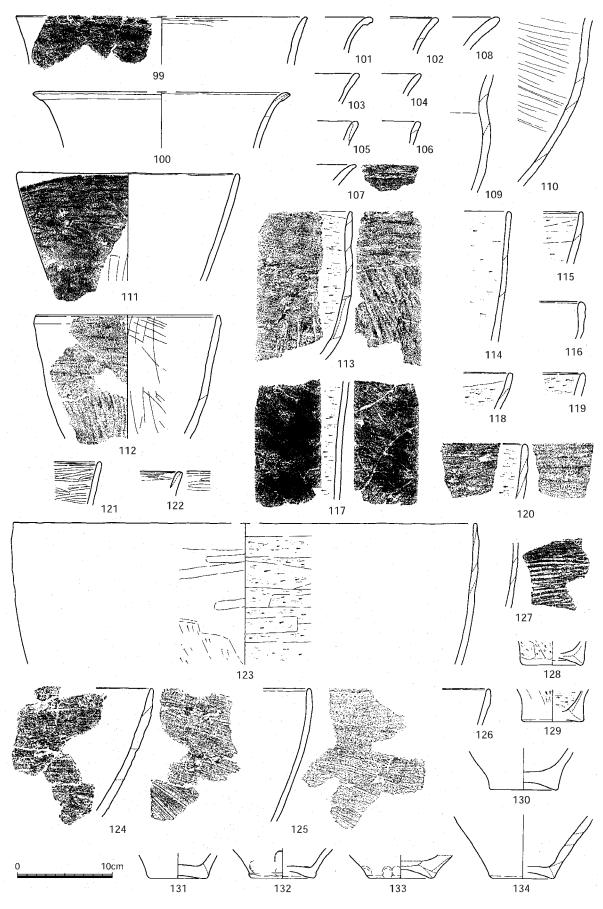
第117図では接合した土器片を線で繋いでいるが、大きく離れたものはあまりなく、一塊の破片群と離れた小破片という例もみられた。また、接合した破片の高度値ではおおむむね西が高く、東が低いという傾向が認められた。南東部斜面は東へ下がる緩斜面であることから、後



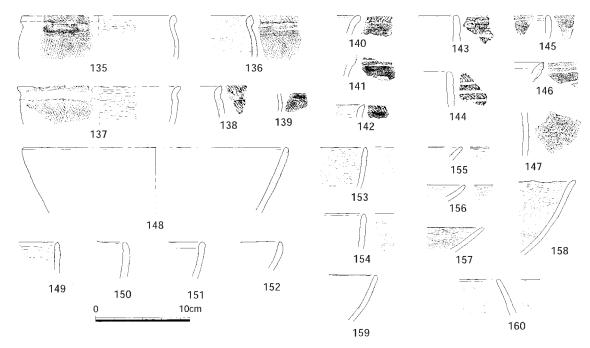
第117図 土器溜まり1遺物出土状況(1/30)



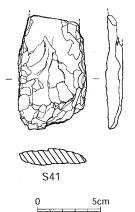
第118図 土器溜まり1出土遺物① (1/4)



第119図 土器溜まり1出土遺物②(1/4)



第120図 土器溜まり1出土遺物③(1/4,1/3)



世の洪水によって削平された部分である微高地2に生活の根拠地があり、そこから壊れた土器を斜面下へ廃棄したものと推定される。

出土した土器には精製の深鉢・鉢・浅鉢や粗製の深鉢がある。施文には縄文が多用され、沈線だけのものもみられた。これらの土器については後章で検討を加えるが、おおむね彦崎 K Ⅱ 式に併行し、後期中葉の比較的良好な一括資料として捉えることができる。

なお、土器溜まり1から採集した炭粒2点について放射性炭素年 代測定を実施し、BC1890年・1950年の測定値を得た。 (岡本)

## 9 河道

河道1 (第10・18・22・121・122・123・324図、図版1・15)

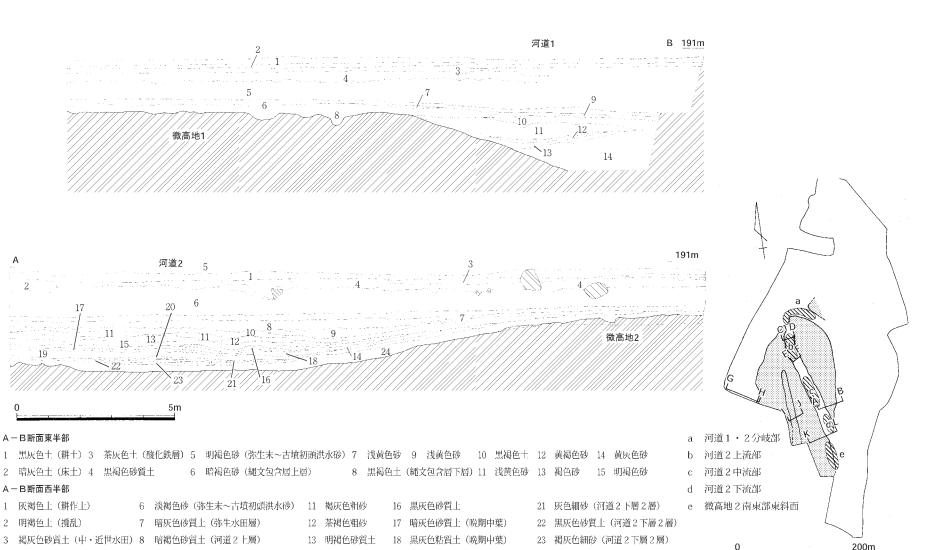
3801Da区から3803Dc区にかけて北西から南東へ続く河道状の窪みを検出した。底面は明褐色砂礫層で、その上の黒褐色土から縄文時代後期以後の土器片が出土した。河道幅は15mを測った。3802Da区あたりで河道2が南西へ分岐する。河道1は微高地1の東側を南流していたと思われるが、弥生時代の河道7によって多くが破壊され、わずかな痕跡を残しているに過ぎなかった。河道1に関連した土層図は第121図と弥生時代の第324図である。第121図では微高地1の縄文時代包含層(8層)が東の河道上まで延び、その下に河道1の堆積層が存在するが、その地点から30m上流の第324図上段では微高地東端に堆積した縄文時代包含層の上に河道7の堆積層があった。両者の河道堆積層が同じである可能性がきわめて高いため、層序の認識について整合性を欠くが、第121図から30m下流の第10図では河道2の晩期中葉の堆積層を河道7が切っていることから、河道1はほぼ消滅していると考える。

第124図の土器は第323図上段の20~22層から出土したもので、河道1に関連する。後期中葉166~170から晩期中葉162・163を経て、晩期後葉の突帯文土器161までがみられた。 (岡本)

4 暗褐色砂質土(中・近世水田) 9 暗褐色砂質土(弥生中期)

10 褐色砂質土 (河道2中層)

5 暗褐色砂質土



第121図 河道 1・2中流部土層断面図(1/120)

19 明褐灰色細砂

20 黒灰色砂質土 (河道2下層1層)

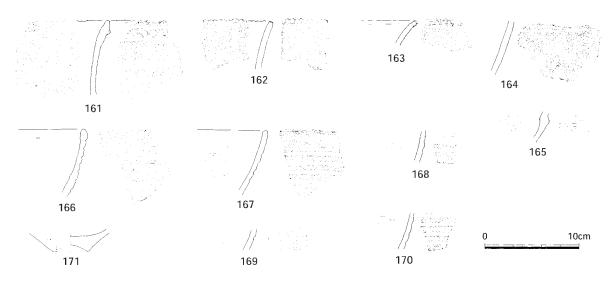
24 黒褐色砂質土 (河道2下層2層)

9~24:河道2埋土

14 黒褐色砂質土

15 茶灰色砂質土

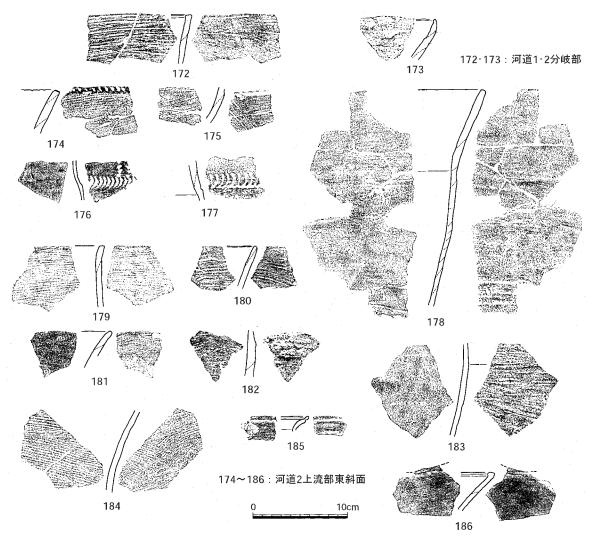
第122図 河道断面·遺物出土 位置(1/6,000)



第123図 河道1出土遺物(1/4)

河道1・2分岐部、河道2上流部(第18・124・125図、図版15)

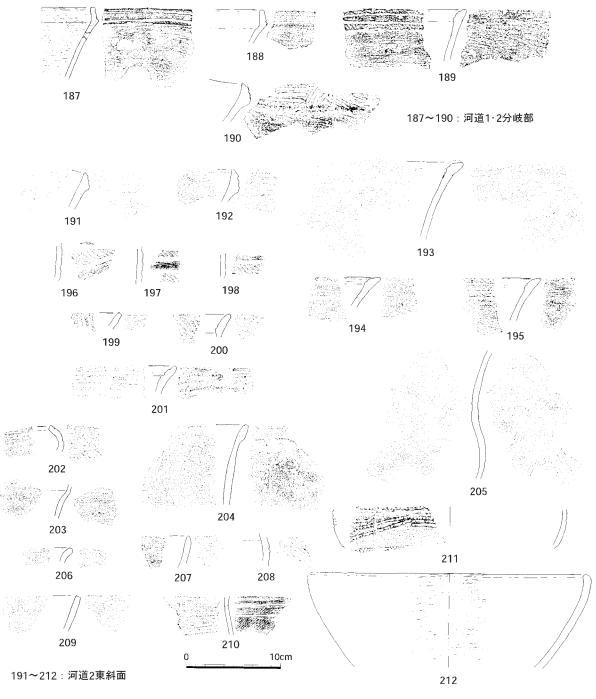
河道1・2の分岐部では、おもに晩期前半の遺物が出土している。このうち、174~177は有文の深



第124図 河道1・2分岐部、2上流部出土遺物①(1/4)

鉢で、半截竹管による逆C字の押引文などから谷尻式平行期のものと考えられる。178~184は無文の粗製深鉢で、内外面の調整には二枚貝条痕や繊維質の原体による擦痕、ケズリ・ナデがある。185・186は、口縁部が短く屈曲する浅鉢である。187・188は精製の深鉢で、彦崎KI式に併行する後期後葉のものと考えられる。190は縁帯文土器で、彦崎KI式に併行する後期中葉のものと考えられる。

河道2上流部出土遺物のうち、ここでは河道1との分岐部に近い地点で出土したものを掲載している。主体となるのは縁帯文土器で、彦崎KII式に併行する後期中葉のものと考えられる。191~210は深鉢、211は浅鉢で、肥厚した口縁部内外面や頸胴部屈曲部分を沈線・縄文で飾る。内外面の調整には二枚貝条痕や繊維質の原体による擦痕、ナデが認められる。このうち、196~198は縄文部分を中心



第125図 河道1・2分岐部、2上流部出土遺物②(1/4)

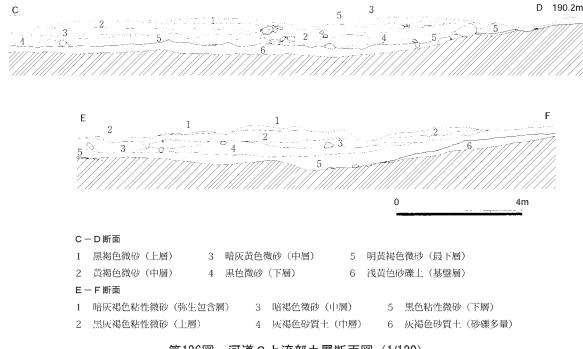
に赤色顔料が認められ、同一個体と考えられる。また、202は竹管文、211は沈線と刺突文で飾っている。なお、212は内外面を丁寧にヘラミガキした椀形の浅鉢で、晩期のものと考えられる。 (佐藤) 河道 2 上流部 (第19・122・126~131図、図版16・17)

河道1との分岐部から70mほどの区間を指している。この間の河道幅は18m前後で、堆積層の厚さは1m程度あった。流走方向は、はじめ南を向いていたものが少し湾曲し、南東へ流れるように変化していた。河道の東西の傾斜面は、東岸が10°ぐらいの傾斜をもっていたのに対して、西岸はだらだらとした緩斜面で、河道の西肩を把握するのは困難であった。この西岸緩斜面では基盤層上面で大小多数の上壙が検出されたが、その多くは風倒木痕の可能性が高く、河道といいながらも、常時流水があったものかどうかは疑問である。あるいは河道中央部のみを流れていたものであろうか。

第126図に上流部分2カ所の土層断面図を示した。これらの図では遺跡を厚く覆っていた弥生時代末~古墳時代初頭の洪水砂層はすでに除去されている。上段の2・3層が晩期の洪水によって堆積したとみられる砂層(河道中層)である。下段でこの中層に対応するのが3・4層にあたる。上段、下段ともに中層の上下には黒色系の微砂層があり、互いに対応している。このように、河道2の堆積層は、縄文時代の概要で述べたように、黒色土と褐色砂が互層になった3層構造をなしていた。上段の6層と下段の6層はともに砂礫土で、微高地の基盤層に続いていた。上段の5層は基盤層に似た砂層(最下層)であったが、後期の土器片を含み、河道が形成された初期の流水時に堆積した可能性が考えられる。先述した土器溜まり1がこれと類似した出土状況にあり注意される。

第127・128・130図は河道 2 上流部の堆積土中から出土した土器である。第127図は C - D 断面のおもに 1 層(上層)出土、第128図の上段は C - D 断面の 3 層(中層)とその直下出土、第128図の下段は C - D 断面の 4 層(下層)出土であり、第130図は C - D 断面の 5 層(最下層)出土で、基盤層の明褐色砂礫層上面に載るような形で出土したものが多かった。

第127図の土器の中では、213~216・222のような谷尻式の深鉢が中心を占める。217のように頸部



第126図 河道2上流部土層断面図(1/120)

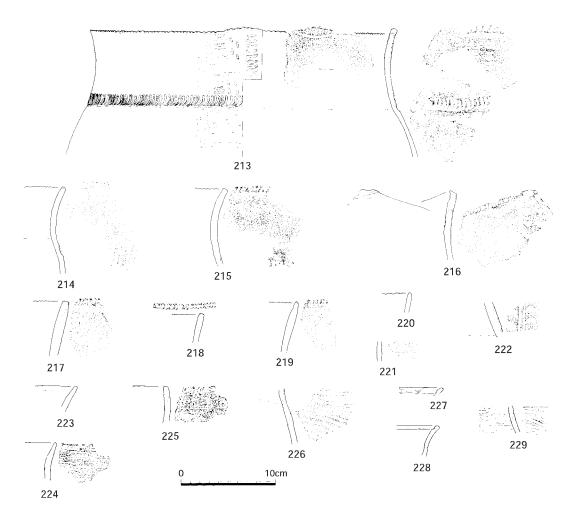
に数条の平行斜線を施すものも出土している。 $225 \cdot 227 \cdot 229$ は浅鉢で、229の外面には沈線による文様が施されている。 $218 \cdot 224 \cdot 225$ はC-D断面の3層(中層)出土であるが、晩期のものとみてここに含めている。このように上層は晩期中葉に形成されたと考えられる。

第128図上段の230は河道2の西肩から2mほど西で出土したが、層位的には中層の直下の可能性が高い。沈線文を施した精製の浅鉢で、晩期初頭頃とみられる。232は平行する2条の沈線の間に貝殻腹縁による擬縄文を施す深鉢で、後期後葉の元住吉山I式に属するものであろう。

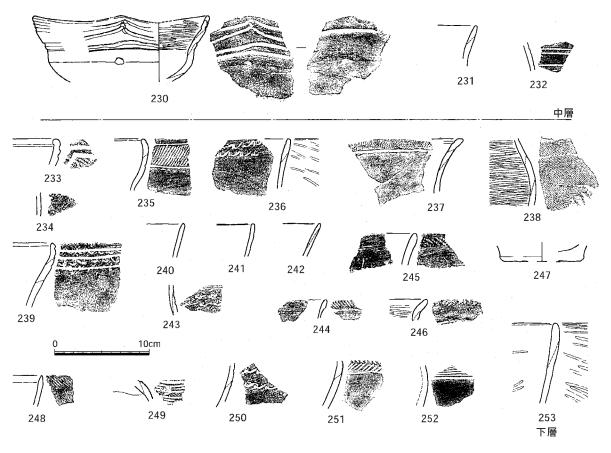
第128図の下段は後期中葉の彦崎 K II 式を中心とするが、236・237のような結節縄文を施すものの割合が高い。251・252は精製の浅鉢で、沈線によって綾杉文や直線文が飾られ、編年的には後出のものである。逆に233は彦崎 K II 式より先行するようで、かなり時間幅をもつ。

第130図の土器は河道2の底部から第129図に示したような分布状況で出土した。接合関係をみると、一点は10m離れていたが、他は2~6m程度離れているに過ぎず、おそらくは東に隣接する微高地1から投棄されたものと思われる。これらの土器については後章で検討するが、彦崎KI式に併行するものと考える。なお、287の底面には編物の圧痕が残り、穀粒痕らしき窪みも認められた。高橋護氏によればイネの籾殻片の可能性があるとされたが、完存した状態にないため断定は困難という。

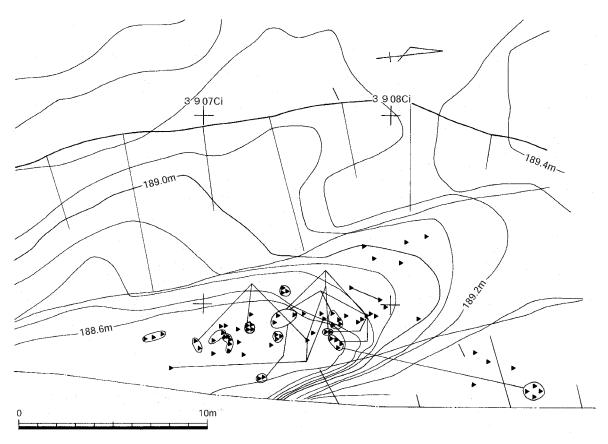
第131図は石器で、 $S42\sim46$ が上層出土、 $S47\sim50$ は中層出土、S51は下層出土である。いずれも石鍬が出土しているが、凸面を示す片面が摩滅して平滑になったものが多い。 (岡本)



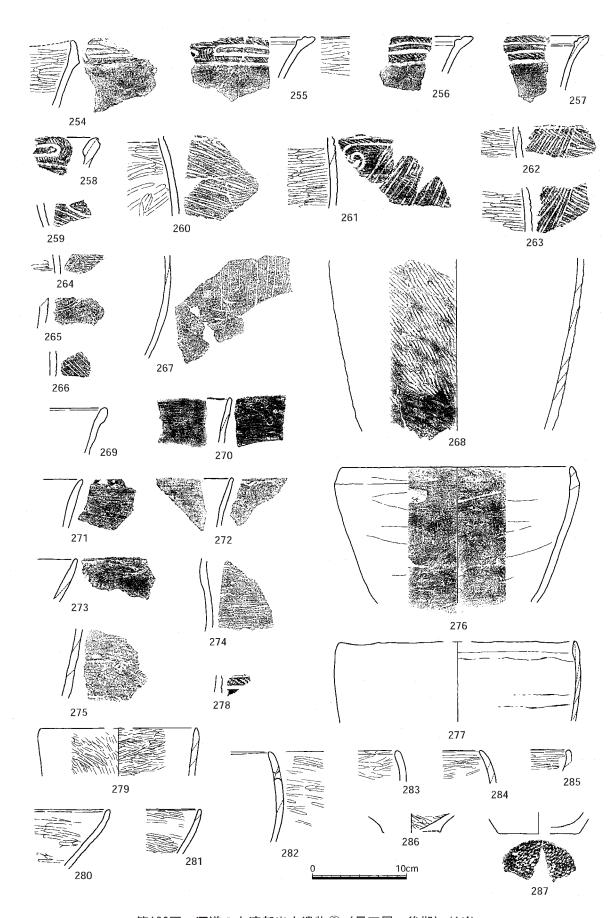
第127図 河道 2 上流部出土遺物①〈上層:晚期〉(1/4)



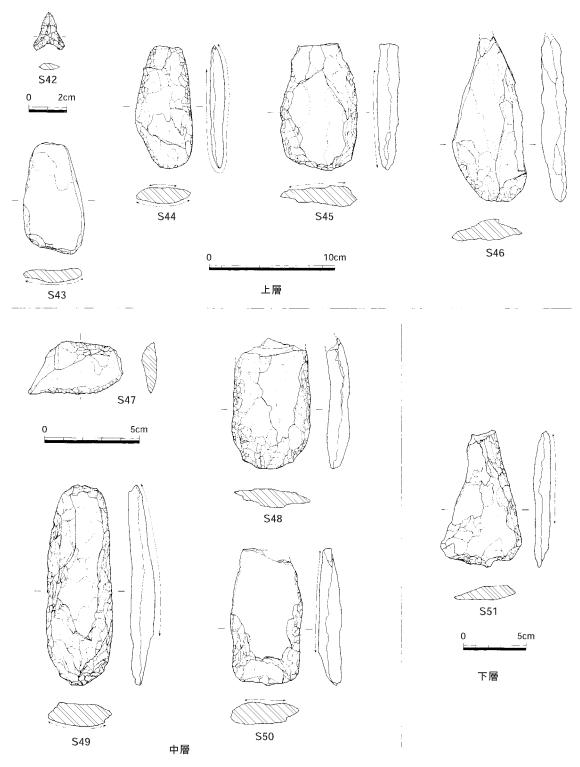
第128図 河道2上流部出土遺物②〈中·下層:後期〉(1/4)



第129図 河道2上流部最下層遺物分布および接合関係(1/200)



第130回 河道2上流部出土遺物③〈最下層:後期〉(1/4)



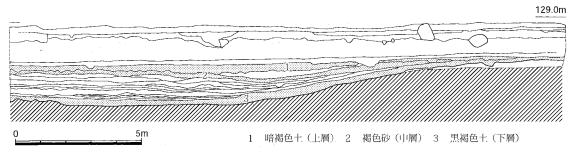
第131図 河道 2 上流部出土遺物④ < 石器 > (1/3,1/2)

河道2中流部 (第22・122・132~140図、図版1・18・19)

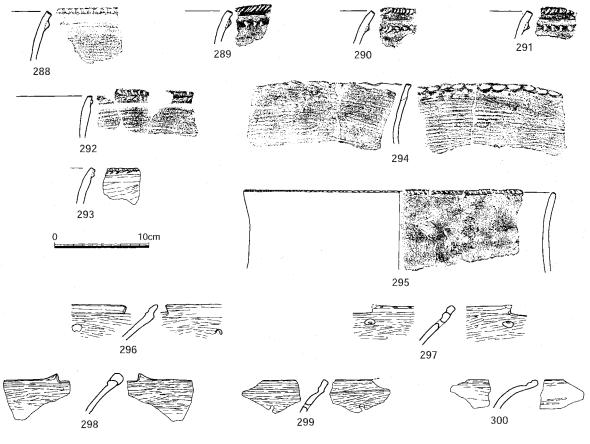
分岐部から $100\sim150$ mほど南東に下った中流部では、上幅 $16\sim22$ m、深さ1.5mほどあり、斜面の勾配は $11^\circ$ を測る。海抜高188.3mを測る底面は平坦で、水流の痕跡は認められない。その埋土には 3層にわたって遺物の包含が認められた。

弥生時代の基盤をなす暗褐色土層(第132図1層)は厚さ40cmほどあり、微高地から水平に延びて

河道2を完全に覆っている。この層から縄文土器288~300が出土しており、竪穴住居4もこの層中から掘りこまれている。288~293は突帯文を飾る深鉢である。口縁端部を面取りするものにはV字形の刻み目が施されるが(71%)、丸く収めるものに刻み目は見られない(29%)。一方、突帯には289~291のようにD字形の刻み目を施すものと施さないものとが同数あり、口縁端部の刻み目とは必ずしも対応しない。また、292・293・589は口縁下を強く圧して突帯をつくりだしたもので、面取りした上端にはV字形の刻み目、前面にはC字形の刺突を連続して施しており、同一個体の可能性が高い。原下層式に併行するとされる阿津走出遺跡の晩期Ⅲ類に類例がみられる。浅鉢296~300には、口縁端部を内側に肥厚させ三角形の突起を貼り付ける298や長方形の突起を備える296・297、削り出しによって口縁内面を二段につくる300などがある。これらは突帯文でも初期の特徴を備えており、南方前池式の古段階に位置づけられる。

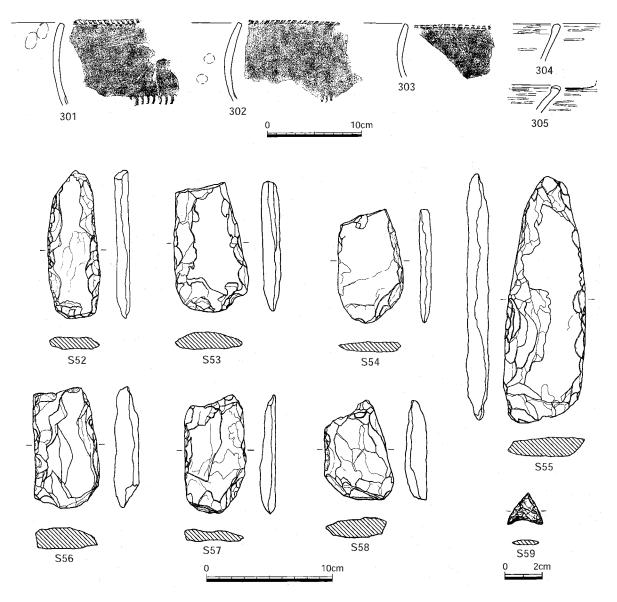


第132図 河道2中流部土層断面(1/150)

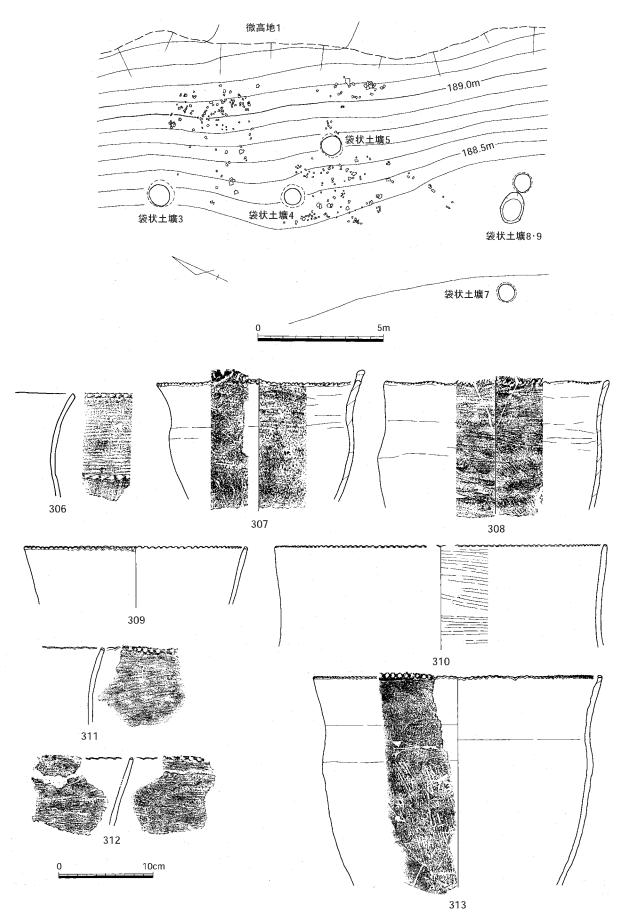


第133図 河道2出土遺物①<上層:暗褐色土層>(1/4)

暗褐色土層の下には褐色をなす砂質土が厚さ25cmにわたって堆積していた(第133図2層)。土壙49・50が検出されたのはこの層で、縄文土器や石器が整理箱2箱ほど出土している。深鉢301~303は長く屈曲する口頸部をナデで調整し、端部にV字形の刻み日を施す。山形をなす口縁部から垂下するように施された文様は爪形文もしくは爪形文と刺突文の組み合わせで、刺突文のみからなるものは見られない。また、爪形文はU字形が38%、逆U字形が62%を占めるが、包含層出土の622のようにU字と逆U字を並列させるものもまれに存在する。ケズリで調整する体部との境界にめぐらされた爪形文は逆C字形をなすものが96%と圧倒的に多く、粗大なものも認められなかった。浅鉢は304・305を図示したが、いずれも口縁端部を肥厚させている。石器には石鍬と石鏃がある。石鍬S52~58は緑色片岩製で、長さ9.5~11.8cm、幅4.0~5.9cm、重量79~130gの小形S52~54・56~58と長さ19.6cm、幅6.4cm、重量312gの大形S55に分けられる。いずれも短冊形をなし、側縁中央から先端にかけて摩滅が認められる。S59はサヌカイト製の凹基鏃で、基部の抉りは浅い。長さ1.7cm、幅1.9cm、重量0.56gを測る。この層に含まれる土器は谷尻式に比定されるが、同型式の土器は暗褐色土層にも多く

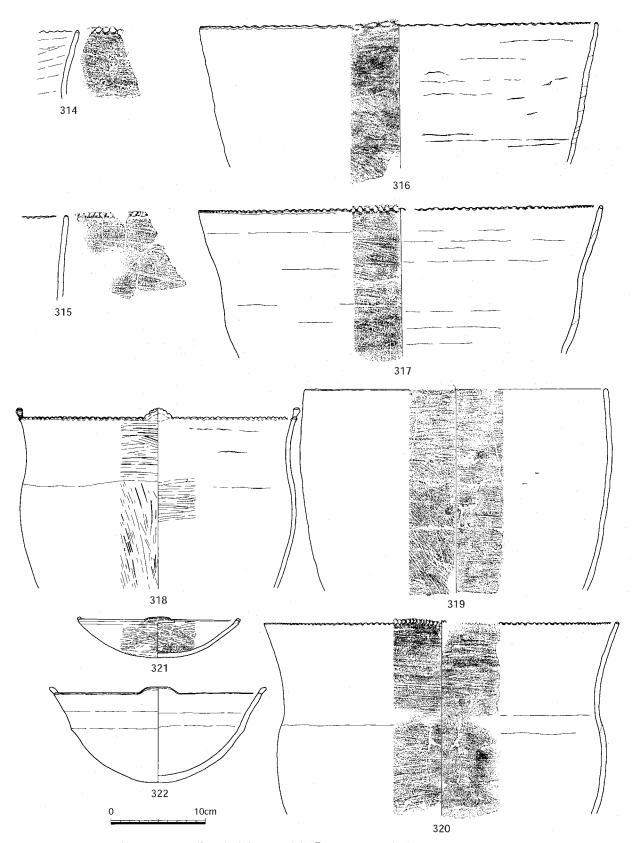


第134図 河道2中流部出土遺物②<中層:褐色砂層>(1/4,1/3,1/2)

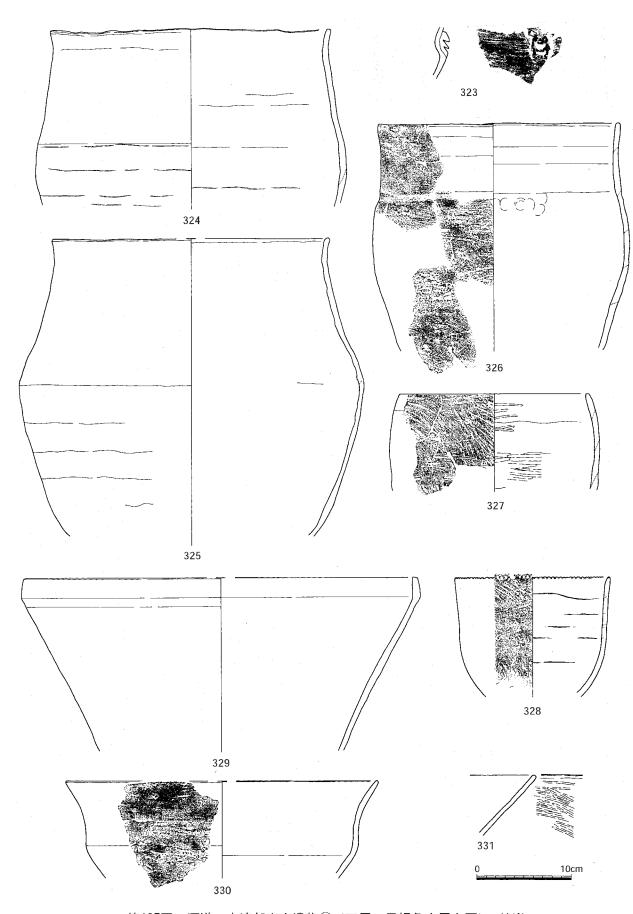


第135図 河道2中流部遺物出土範囲(1/150)、出土遺物③<下層:黒褐色土層上面>(1/4)

混在するところからすると、河道2は、この時期ほぼ完全に埋積したものと思われる。

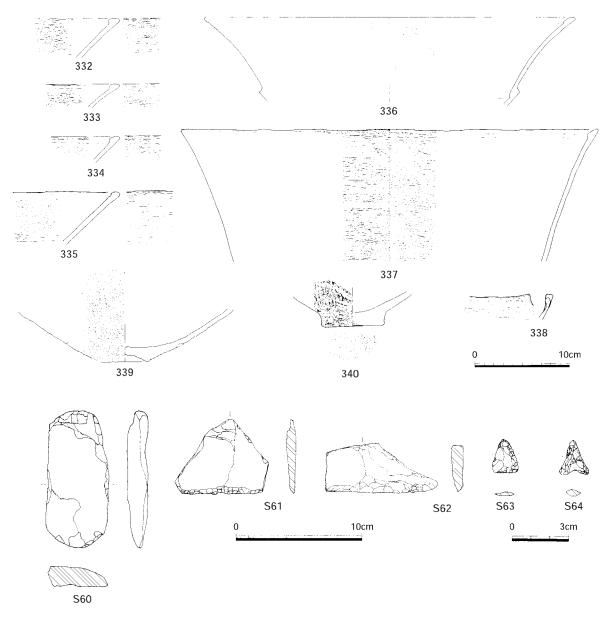


第136図 河道2中流部出土遺物④<下層:黒褐色土層上面> (1/4)



第137図 河道2中流部出土遺物⑤<下層:黒褐色土層上面> (1/4)

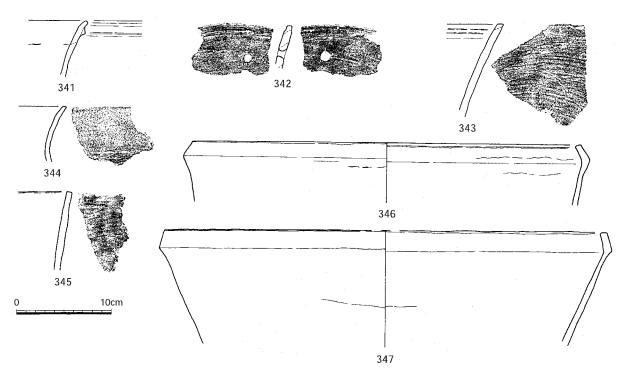
河道の斜面から底面にかけて厚さ40cmほどの黒褐色砂質土が堆積しているが(第133図3層)、この層の上面から整理箱4箱ほどの縄文土器が出土した。これは竪穴住居4の西側にあたる河道の斜面で、東西13m、南北8mあまりの範囲にまとまって検出された。深鉢は134点あり、口頸部と体部との区別が明瞭な深鉢Aと不明瞭な深鉢Bに大別される。深鉢Aは109点あり、深鉢全体の81%を占める。口径20~25cmの小形307~309、30~35cmの中形313・318・325、40cm前後の大形310・320・323・324に分けられる。長い口頸部をナデで仕上げるものが多く、小形の爪形文を縦位に施すものや、体部との境界にめぐらすものが数点ある。深鉢Bは25点あり、口頸部が直線的に開く316と内湾する319・326・327に分けられる。法量も口径15cm前後の小形327、20cm前後の中形326、30cm以上の大形319がある。深鉢の口縁端部に施された刻み目は、ヘラ状工具によるV・D字形が多いが、棒状工具によるO字形もわずかに認められる。その保有率は深鉢全体で68%を占めるが、76%の深鉢Aに対し深鉢Bは38%と少ない。体部の調整は細かな条痕(擦痕)を残すものが51%と最も多く、次いでケズリが



第138図 河道2中流部出土遺物⑥<下層:黒褐色土層上面>(1/4,1/3,1/2)

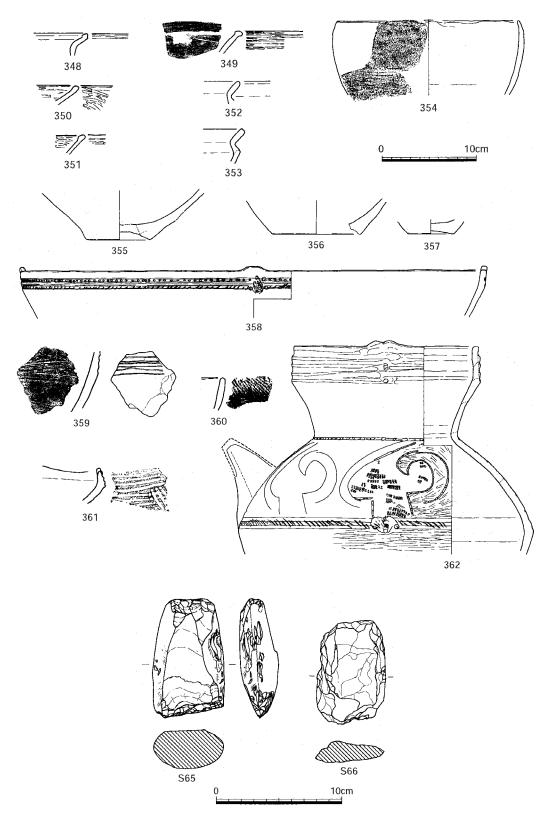
39%、二枚貝(アルカ属)条痕が10%ある。24点ある浅鉢は、口縁部が直線的に開く浅鉢A、内湾する浅鉢B、体部から屈折して開く浅鉢Cに分けられる。浅鉢Aは4点あるが全形のわかるものはない。4点ある浅鉢Bは、椀形をなすB1類と皿形を呈するB2類321があるが、いずれも口径20cm以下の小形である。浅鉢Cは17点あり、浅鉢全体の71%を占める。これらは口縁端部を丸く収めるC1類322、突帯を削り出すC2類334、貼り付け突帯をめぐらすC3類331~333に分けられ、C3類が13点と最も多い。また、黒褐色砂質土中の出土ではあるが、口縁端部を上方に拡張した347や短く屈折した351・352もこれらに伴う可能性がある。黒褐色砂質土の上面で出土した土器を船津原式の新相に位置づけられる総社市南溝手遺跡のB2類と比較すると、口縁端部の刻み目保有率や体部調整におけるケズリの割合が低い点でこれより古い様相を呈する。なお、袋状土壙3~7の土器はこれらと共通し、袋状土壙が本来黒褐色砂質土層の上面から掘りこまれていたことを示している。石器には、石鍬やスクレイパー、石鏃がある。S60は緑色片岩の石鍬で長さ10.8cm、幅4.9cm、重量131gある。S61・62は長さ7.4~8.9cm、幅3.9~5.9cmを測るサヌカイトの剥片に調整を施したスクレイパーである。石鏃には長さ1.8cm、幅1.8cm、重量0.5gの平基鏃S63と長さ1.8cm、幅1.5cm、重量0.7gの凹基鏃S64があり、いずれもサヌカイトを素材とする。

黒褐色砂質土中からは土器340~362や石器 S 65・66が出土しているが、斜面上方において褐色砂層や暗褐色土層と接することから、340・341・343や347~352など上層に帰属すべき遺物の混入が認められる。この層の遺物は中流部の東斜面でも北と南にそれぞれまとまって出土したが、特に斜面堆積の下部にあたる南側では後期の土器が多く見られた。343・345は上方へ直線的に開く深鉢で、厚い器壁の内外面を巻貝で調整する。328・346・347は外反する頸部から屈折して上方にのびる口縁部をもつ。内外面をナデで調整しており、後期末~晩期初頭に位置づけられる。358は直立する口縁部に刺突を加えた凹線文をめぐらし、巻貝の押圧を施す福田 K III 式の深鉢である。362も福田 K III 式の注口



第139回 河道2中流部出土遺物⑦<下層:黒褐色土層> (1/4)

土器で、口縁部と体部に凹線文と巻貝の圧痕を飾り、張りのある肩部には刺突を加えた沈線で鍵手文を描く。石器には長さ9.4cm、幅5.7cm、重量53gを測る流紋岩製の磨製石斧**S65**のほか、緑色片岩製の石鍬3点、サヌカイト製石鏃2点が出土している。 (亀山)



第140図 河道2中流部出土遺物⑧<下層:黒褐色土層> (1/4,1/3)

#### 河道2下流部(第10・22・121・122・141~148図、図版1・20・21)

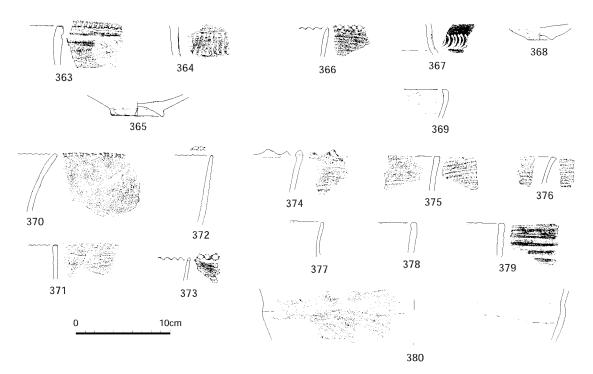
下流部は、河道 1 との分岐部から160mほど下ったところから、弥生時代の河道 7 によって破壊をうけて消滅する部分までである。河道幅は20mを超え、微高地 1 の上面からの深さは1.5mに達する。河道の東側傾斜面は $10\sim12$ °の角度で微高地 1 からなだらかに降っていた。これに対して、西側傾斜面はほとんど水平に近く、後世の洪水による削平もあって明瞭な肩を捉えることは困難であった。

下流部の土層堆積状況を示す断面図は第10図と第121図である。縄文時代の概要で述べた黒色・褐色・黒色の3層構造は基本的に変わらないが、下流になって堆積層が厚いだけ、細かな分層が可能となった。わけても、下層は暗灰色砂質上層と灰色微砂層など5層からなる互層となっていた。

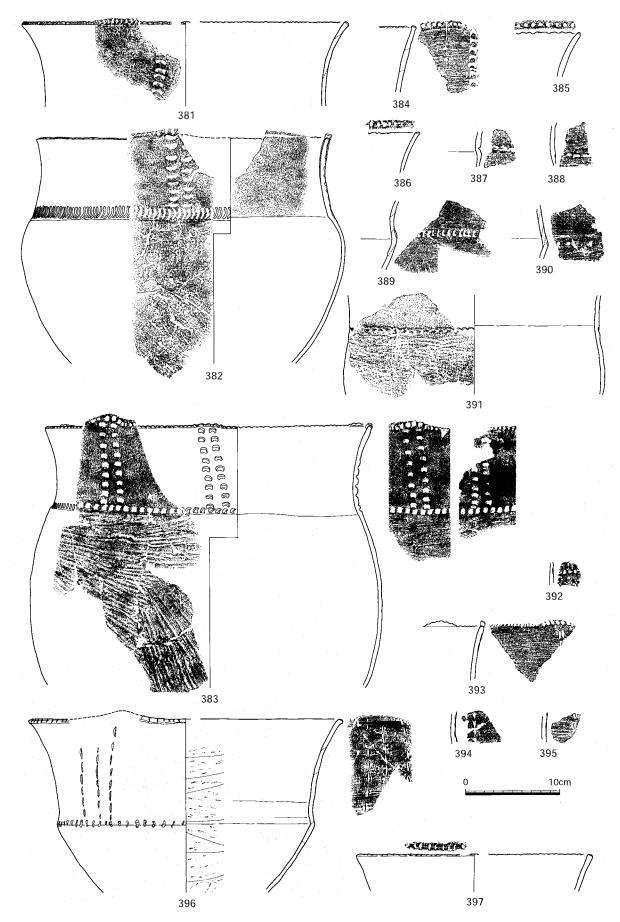
第141~147図は河道2の下流部から出土した土器である。その多くは河道2の東側傾斜面から出土したもので、とくに、第4層の土器は、微高地1から多量に流れ落ちるように拡がり、集中して投棄されたことが明らかである。第4層の土器の年代幅が微高地1での居住期間を示していると考える。なお、第1~5層の番号は調査時の遺物取り上げにあたって便宜的に付したものである。

第141図は中層(洪水砂層)以上から出土したものである。第1層は褐色系の砂層で、第121図では10~13層に対応するとみられる。第2層は上層にあたり、第121図では14~18層が対応しよう。第3層は中層で、第121図の19層にあたる。

第142~146図は第4層出土であるが、第4層は下層第1層にあたる。下流部では下層は5層に分けられるが、上部の4層は灰色と暗灰色の互層になる。発掘中の分層は困難で、これらを第4層として一括して扱った。第121図では20~23層が対応する。第4層出土の土器は平井泰男編年案(土器持寄会編『突帯文と遠賀川』収載)の晩期Ⅲ期からⅣ期(谷尻式を含む)にかけてのもので、かなり年代幅をもっている。第142~145図が深鉢、第146図はおもに浅鉢で、おおむね新しいものから列べる。469~474は後期のものである。第142図の土器がもっとも新しいものであるが、刺突文は小形のものがほとんどで、Ⅳ期の全期間には及んでいない。Ⅳ期の途中で大規模な洪水が襲ったものとみられる。



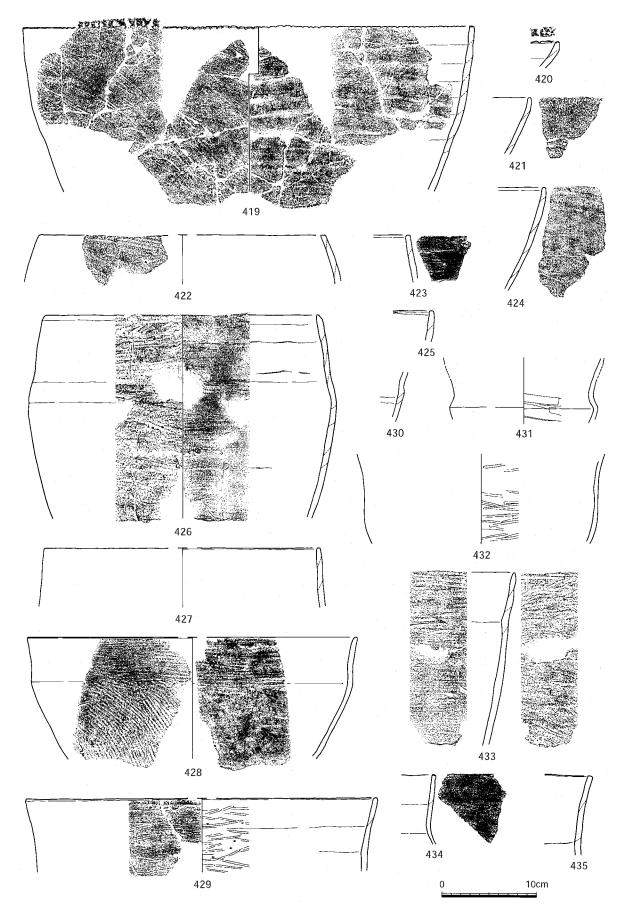
第141図 河道2下流部出土遺物①<上~中層:第1~3層> (1/4)



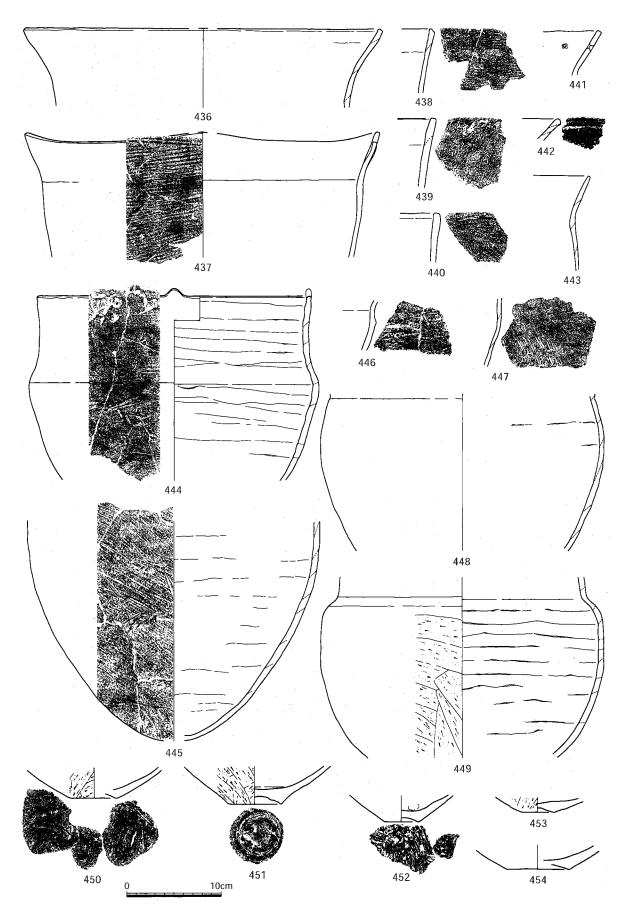
第142図 河道2下流部出土遺物②<下層:第4層>(1/4)



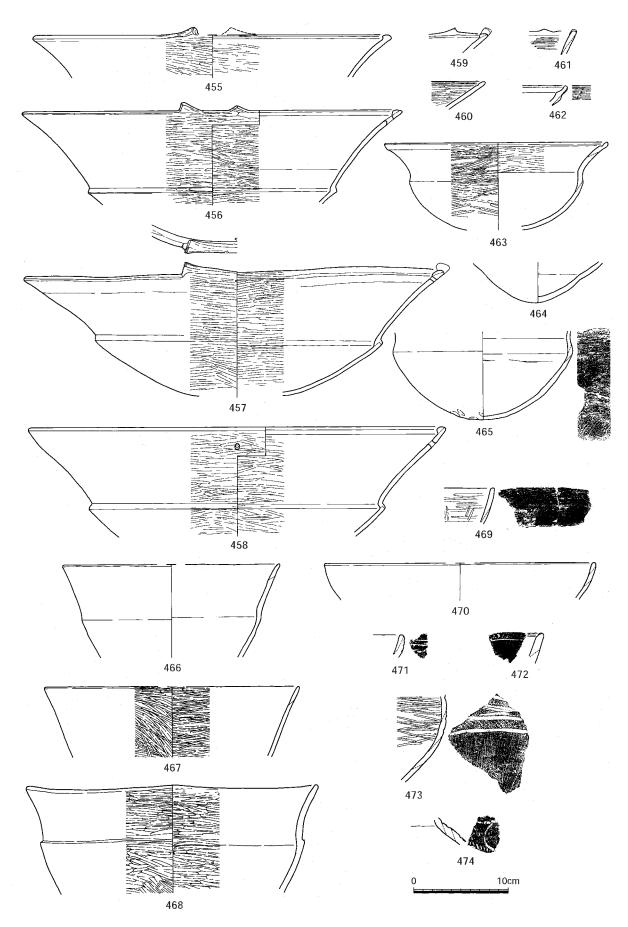
第143図 河道2下流部出土遺物③<下層:第4層>(1/4)



第144図 河道2下流部出土遺物④<下層:第4層>(1/4)



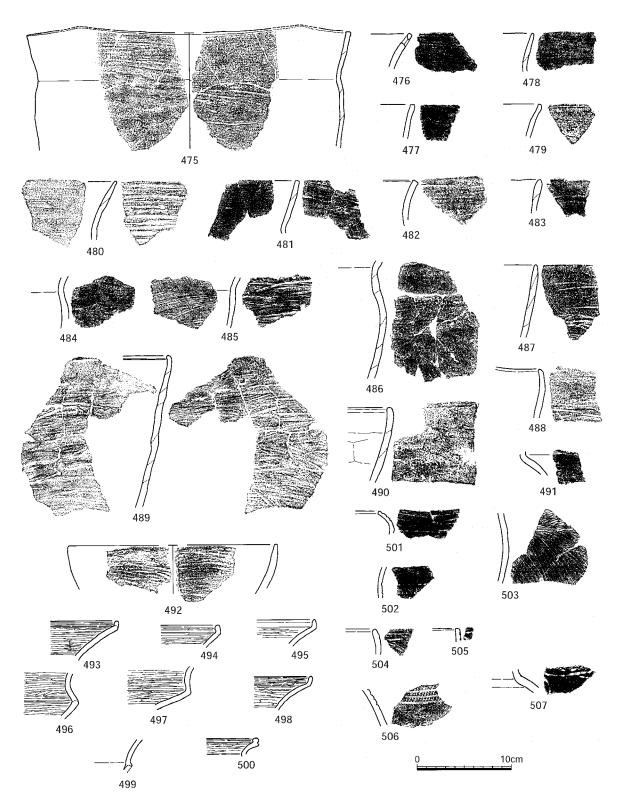
第145図 河道2下流部出土遺物⑤<下層:第4層>(1/4)



第146図 河道2下流部出土遺物⑥<下層:第4層>(1/4)

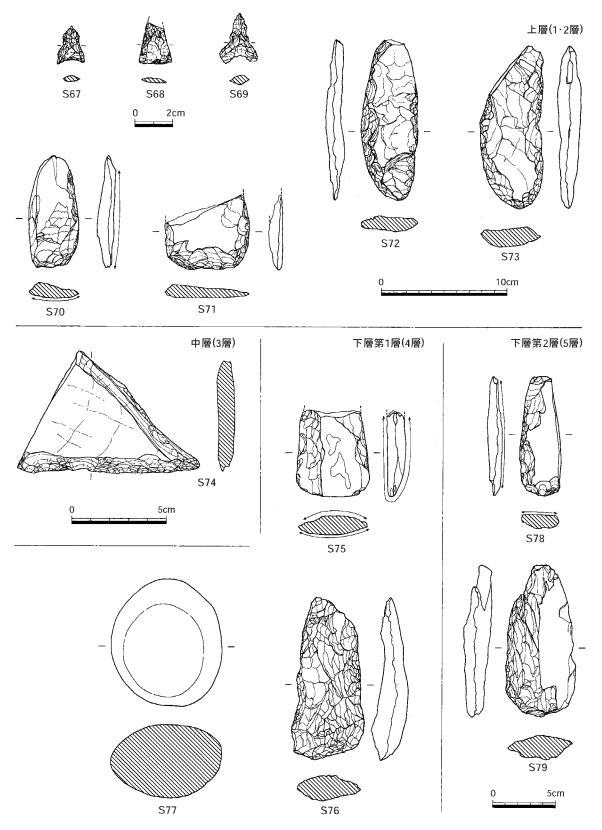
## 第3章 発掘調査の概要

第147図は第5層出土の土器である。第5層は下層の下半(第2層)にあたり、第121図では24層に対応する。黒色、ないしは黒褐色の色調で、上流部の下層に直接続くものとみられる。前述の第4層の形成は深さが増したことにもよるが、微高地1での居住も影響しているかもしれない。475~500は晩期のもので、平井III期・IIII a 期のものが多い。501~507は後期のもので、中葉に遡るものもある。



第147図 河道2下流部出土遺物⑦<下層:第5層>(1/4)

第148図は下流部出土の石器である。土器に比べるとその数は圧倒的に少ないが、いずれの層でも石鍬の出土が認められる。上段の $\mathbf{S}$ 67~73は第2層(上層)以上から出土したものである。 $\mathbf{S}$ 74は第3層で中層、 $\mathbf{S}$ 75~77が第4層で下層第1層、 $\mathbf{S}$ 78・79は第5層で下層第2層出土である。(岡本)



第148図 河道2下流部出土遺物⑧ < 石器 > (1/3,1/2)

**逍道** 3

(第20・149~151・321図、図版2・22)

微高地2の北・西辺を区切るように北東から南西へ走る河道3は、自然堤防形成時の窪みもしくは

96

自然堤防を越えて流水が走った痕跡と考えられ、下流に向かって開放する形状を示す。河道2・4と 併走するように南へ走る河道3Bは上幅26m、深さ1.5mあり、弥生中期の基盤層となった黒褐色砂 層と河道底面との間に黒褐色をなす砂層が2層にわたって堆積しており、この層から遺物の出土が見 られた。

上層の黒褐色粗砂層から出土した遺物には 深鉢510~519と浅鉢520がある。510~514は ナデで調整した口縁の端部に刻み目を施し、 ケズリで仕上げた体部との境界に逆C字形の 爪形文をめぐらす。520は皿形をなす浅鉢で、 薄い器壁はヘラミガキで調整する。これらは 晩期中葉の谷尻式に属するものと思われる。

河道3Aは埋積した3Bの北端を切るよう に北東から南西に走るもので深さは1.3mあ り、3 Bの上部に堆積した黒褐色粗砂層が直 接これを覆っている。この埋土からは谷尻式

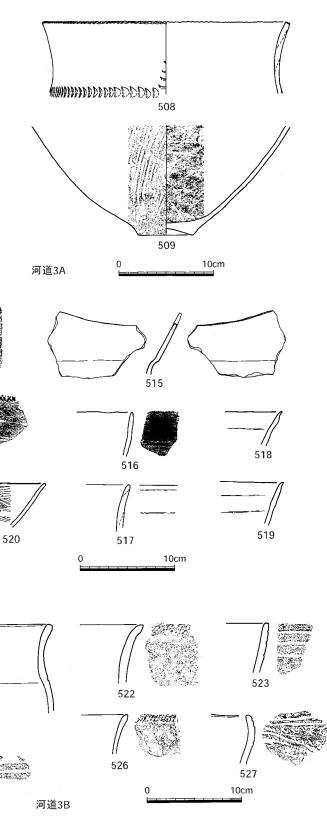
512

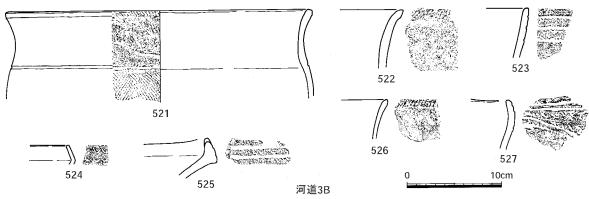
513

510

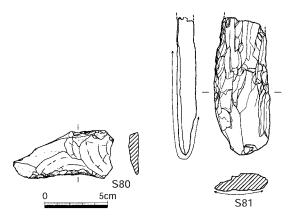
511

514





第150図 河道3出土遺物(1/4)



第151図 河道3出土遺物<石器>(1/3)

の深鉢と石鍬片などが出土している。508は、 口径25.2cmを測る長い口頸部をなす。口縁端 部には刻み日を施し、ナデで調整する外面に は縦位にU字、横位に逆C字形の爪形文を飾 る。体部下半の破片509は、二枚貝(アルカ 属)条痕を残す径5.7cmの凹み底を備えてい る。S81は安山岩製の石鍬で上端を欠いてい るが、現状で長さは10.9cm、幅が4.4cmを測り、 重量は92gある。

下層の黒褐色砂質土層から出土した遺物には、彦崎 K I・K II 式の深鉢がある。521・

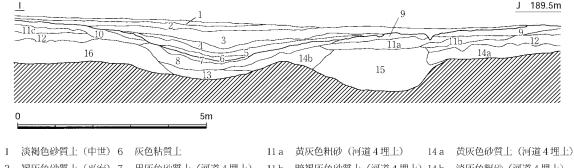
522・526はわずかに肥厚した口縁端部と体部に縄文を施す。527は波状口縁をもつ深鉢で、沈線の間に 結節縄文を飾る。525は上方に拡張した口縁を磨消縄文で飾る縁帯文土器で、当遺跡では最古段階の遺 物である。S80は、両側縁に調整を施したサヌカイトのスクレイパーで、長さ8.0cm、幅3.8cmを測る。

以上のように、この河道も晩期中葉にはほぼ完全に埋積しており、生活の舞台となった微高地はこの段階で東西120mにわたり広がっていたものと推察される。 (福田)

## 河道4 (第21·152図、図版1)

微高地2のほぼ中央部に位置する。後期の土器片を少量含んでいたが、遺物は極端に少ない。微高 地形成時にできた南北方向の谷状地形と考えられる。

晩期中葉までにはほぼ埋没しているが、東岸に沿って焼成土壙群が立地していた。さらに上面のく ぼみにそって中世段階の河道が南流していた。 (弘田)



2 褐灰色砂質上(平安) 7 黑灰色砂質上(河道4埋上) 11b 暗褐灰色砂質上(河道4埋上) 14b 淡灰色粗砂(河道4埋上)

3 暗褐色砂質土 8 暗灰色粗砂(河道 4 埋土) 11 c 暗黄褐色砂質土(縄文晩期) 15 淡灰色粗砂(河道 4 埋土)

4 淡褐灰色砂質土 9 黄灰色砂質土(弥尘中期) 12 暗褐灰色砂質土(縄文晚期) 16 黄褐色粗砂

5 暗褐灰色砂質土 10 淡黄灰色砂質土(河道4埋土)13 灰色混礫粗砂(河道4埋土)

第152図 河道 4 土層断面図 (1/100)

# 10 遺構に伴わない遺物 (153~166図)

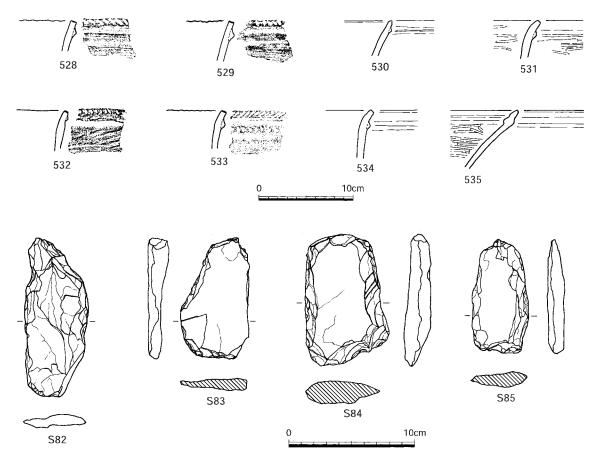
#### 微高地 1 包含層 (153~156図、図版22・23)

河道2の西に広がる微高地1は南北120m、東西55mの紡錘形をなすが、谷尻式期には河道2が完

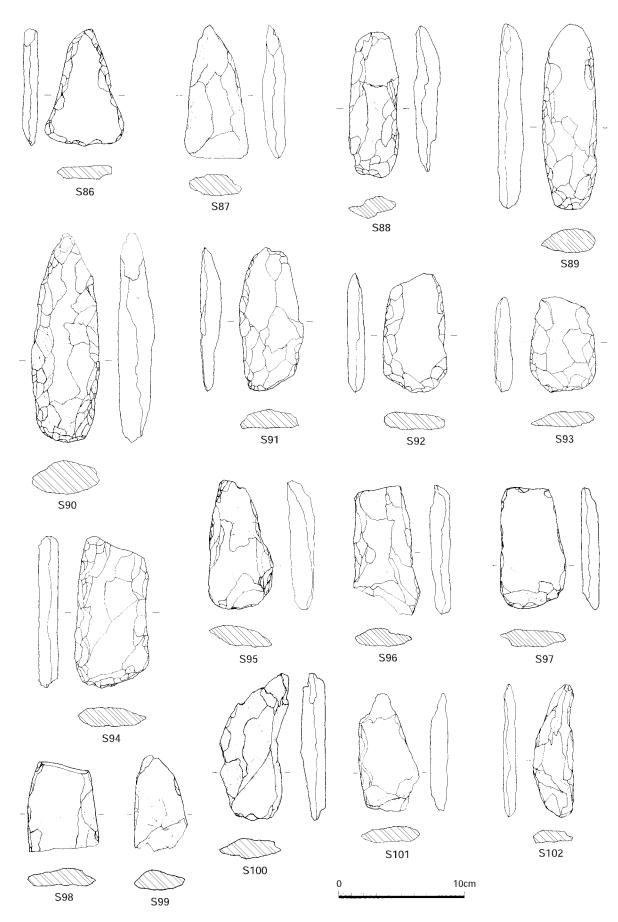
全に埋積し微高地2と連続していたものと思われる。海抜高189mを測る上面には暗褐色土と(晩期上層)一部黒褐色粘質土が堆積している。

暗褐色土層(晩期上層)から出土した遺物は微高地1の南半60×25mほどの範囲に集中している。この層の縄文土器には288~300があるが、同型式の土器はこの層の下部に広がる褐色砂層(晩期下層)や黒褐色粘質土層(後期包含層)中からも出土している。これらは平らに面取りした口縁端部に刻み目を施し、口縁下に貼り付けた断面三角形の突帯に刻みを加えないものが多くみられるなど、突帯文の中でも古い様相を示しており南方前池式の古段階に位置づけられる。

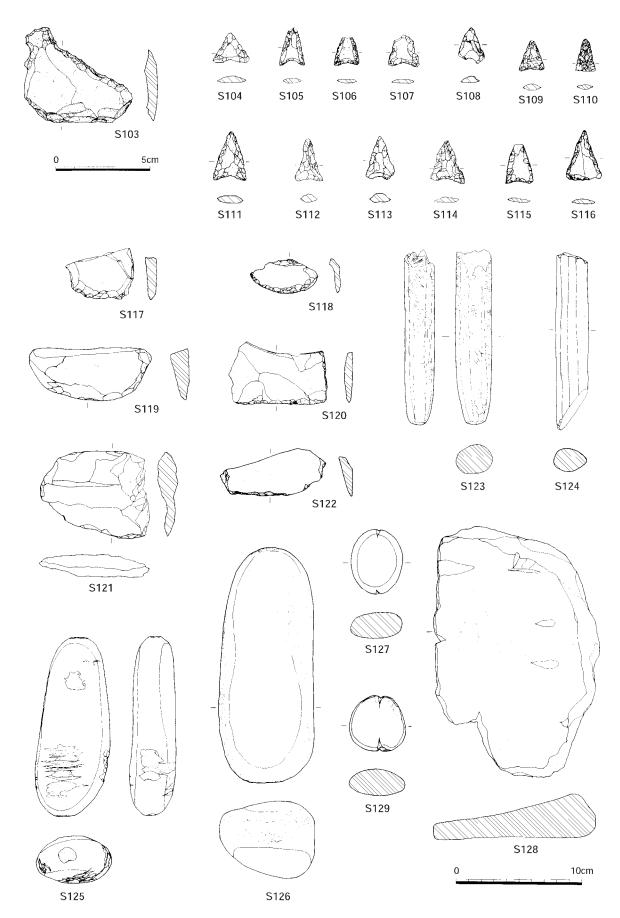
暗褐色上層ないしその下の褐色砂層から出上した石器には、石鍬や石鏃、石匙、スクレイパー、石刀、石錘、叩き石などがある。石鍬は短冊形をなすものが大半であるが、S86のような撥形もわずかに認められる。これらは、長さ9.4~12.0cm、幅5.1~6.7cm、重量86~165gと幅広で小形のS84・92・94・97と、長さ11.6~16.5cm、幅3.9~5.4cm、重量99~337gと細身で大形のS88~90に分けられる。緑色片岩を素材とするものが大半であるが流紋岩や安山岩・砂岩製も少数ある。緑色片岩製の石鍬には自然面を残すものがあり、偏平な転石を加工したものと思われる。石鏃には凹基鏃S104~109・111~115・143と平基鏃S110・116があり、凹基鏃のなかには、両面が研磨されたS106、側縁の中央に抉りを入れるS123・124もみられる。黒曜石製のS110以外はサヌカイト製で、長さ1.6~2.7cm、幅1.1~1.9cm、重量0.5~1.4gを測る。横長型の石匙S103はサヌカイト製で、遺跡全体でわずかに1点のみの出土である。スクレイパーにはサヌカイト製のS117・118・120・122のほか緑色片岩製S119や流紋岩製S121が少なからず存在し、サヌカイトの不足をこうした石材で補っていた様子が窺われ



第153図 微高地1出土遺物①<上~中層:暗褐色土・褐色砂層>(1/4,1/3)



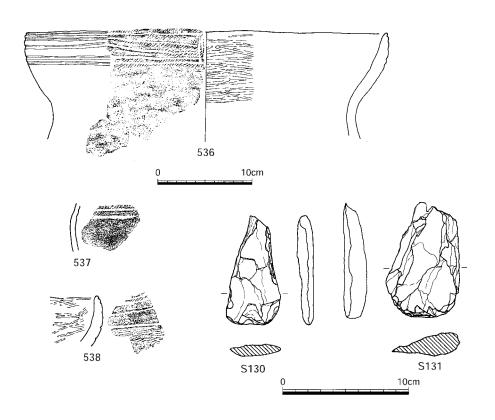
第154図 微高地1出土遺物②<上~中層:暗褐色土・褐色砂層>(1/3)



第155図 微高地1出土遺物③<上~中層:暗褐色土・褐色砂層>(1/3,1/2)

る。石刀には、緑色片岩製のS123と黒色粘板岩製のS124がある。幅2.6cm、厚さ1.8cmを測るS123は橿原式石刀のS34・35と同一個体とみられ、破面にわずかな剥離が認められることから二次的な使用が推定される。S127・128は径4.4~5.2cm、厚さ2cmを測る円礫の両端に切れ日を入れた石錘で、重量57~67gの小形である。円礫は遺跡全域で多数みられるが、両端を打ち欠くなど錘として利用したことが明らかなものはほかに知られていない。S125・126は叩き石で、棒状をなす河原石の両端や側縁に敲打痕を残す。S129は砂岩製の砥石で、褐色砂層から出土したが、弥生時代まで下る可能性も否定できない。

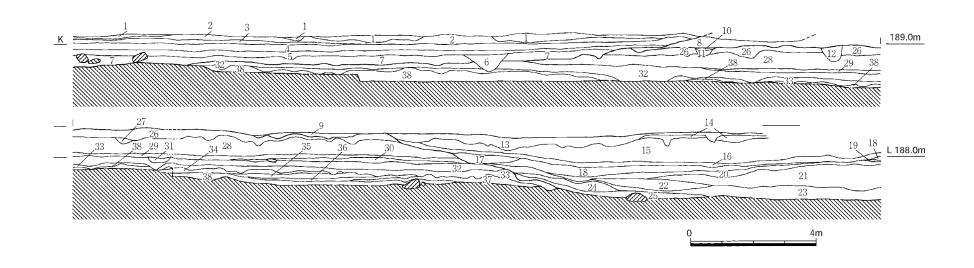
黒褐色粘質上層は、微高地 1 の中央東よりにみられたくぼみにおいて基盤となる礫層にくい込むように堆積している。この層からは彦崎 K II 式の深鉢 $536\sim538$ や、石鍬 S  $130\cdot131$ が出土している。 $536\cdot538$ は同一個体と見られ、波状になる口縁を磨消縄文で飾る。S  $130\cdot131$ は緑色片岩製の石鍬で、いずれも欠損しているが暗褐色土層出土のものと大差ない法量をもつ。 (亀山)



第156図 微高地 1 出土遺物④<下層:黒褐色土層> (1/4,1/3)

#### 微高地2南東部斜面(第23・157~160図、図版22)

微高地2の南部では、東へごく緩やかに傾斜する部分に後期から晩期にかけての包含層が形成されていた。4002~04Dd・e区にあたる。この傾斜面は河道2の西側傾斜面に続くものだったが、弥生時代の河道7によって河道2は消滅し、包含層も一部破壊されていた。また西側でも、縄文包含層は後世の洪水によって消滅していた。第157図がこの部分の土層断面図だが、下段は弥生時代末~古墳時代初頭の洪水砂層(8層)より上層はすでに除去している。7層が後世の洪水砂層、13~25層までが河道7の堆積土で、縄文時代の包含層は26~38層である。ほぼ概要の3層の互層を呈し、微高地上層が26

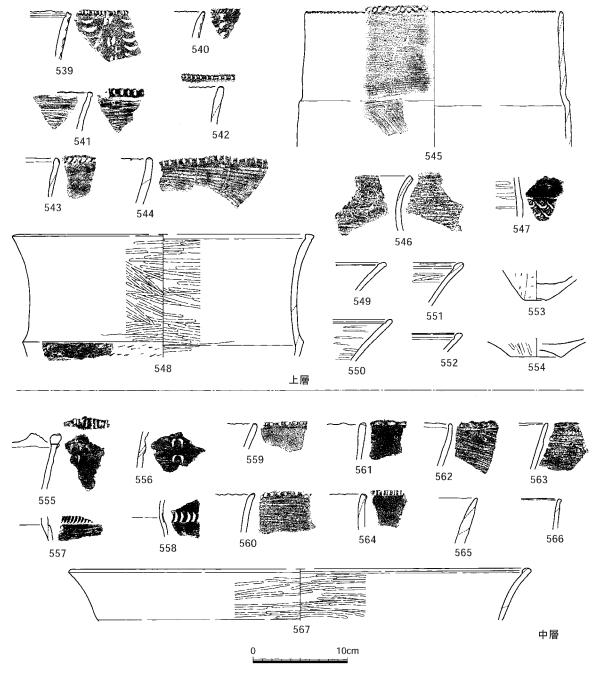


1	暗褐色粘性粗砂(現代耕作土)	11	黑褐色粘性細砂	21	鈍い黄褐色細砂(鉄分沈着)	31	明褐色細砂
2	灰黄褐色粘質土	12	思褐色粘性細砂	22	鈍い黄橙色粗砂	32	<b>黑色粘性細砂(縄文晩期)</b>
3	黒褐色粘性粗砂	13	黒褐色粘性粗砂(鉄分沈着:溝28埋土)	23	褐灰色~灰白色細砂	33	<b>黒褐色粘性細砂(縄文後期)</b>
4	暗褐色弱粘性粗砂	14	黒褐色弱粘性細砂	24	鈍い黄橙色粗砂(鉄分沈着)	34	鈍い黄褐色弱粘性細砂
5	黑色粘性粗砂 (鉄分沈着)	15	鈍い黄褐色粗砂 (下方鉄分沈着)	25	鈍い黄橙色細砂	35	鈍い黄褐色弱粘性粗砂
6	黒褐色細砂	16	黒褐色粘性細砂(河道7最終段階底部堆積層:弥生中期)	26	暗褐色粘性細砂(縄文晩期)	36	灰黄褐色弱粘性粗砂
7	鈍い赤褐色砂礫(洪水砂層)	17	暗褐色粘性細砂(溝29埋土)	27	黄褐色細砂	37	鈍い黄褐色弱粘性粗砂
8	黄褐色粗砂(弥生時代末~	18	黒褐色粘性微砂	28	褐色細砂(縄文時代洪水砂層)	38	鈍い黄褐色弱粘性和砂(縄文後期)
	古墳時代初頭洪水砂層)			29	黒褐色弱粘性細砂		
9	黒褐色粘性細砂(鉄分沈着)	19	鈍い黄褐色弱粘性細砂(鉄分沈着)	30	黒褐色弱粘性細砂(褐色弱粘性細砂混)		
10	褐灰色粘性細砂	20	褐灰色シルト				

層、中層の褐色砂層が28層、下層が29~33層となる。河道7に近い所では34~37層と土層が増え、傾斜もきつくなるが、これについては河道2、あるいは河道1の存在が関係しているものとみられる。

なお、先述の土器溜まり1もこの地区に位置していたが、後世の洪水によって削平をうけた包含層 の西端付近で検出された。包含されていた土層は38層で、この項で図示した遺物より下層にある。

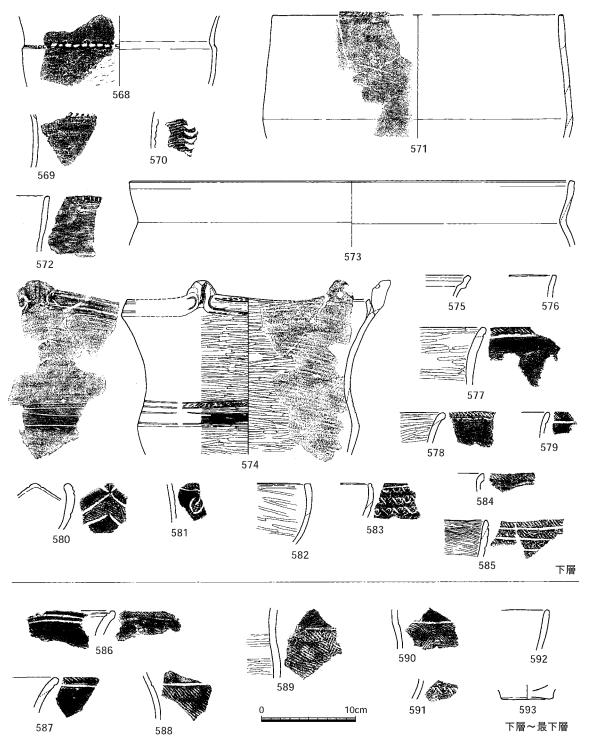
第158・159図は南東部斜面から出土した土器で、出土層位別に上層から図示している。発掘時の遺物取り上げの土層表記が晩期上層・晩期最下層などで、第157図の土層と対応させると晩期上層は26層、晩期中層が28層、晩期下層は29・30層、晩期最下層が32層、後期層は33層に対応するとみられる。 上層図は発掘の最終段階で実測したもので、発掘中の上層認識とは厳密には対応していない。



第158図 微高地2南東部斜面出土遺物① < 晚期上~中層> (1/4)

第158図の上段は晩期上層出土のものである。**547**は後期であるが、他は晩期のものである。浅鉢では、口縁端部の内面を肥厚させるものと、沈線を巡らせるものがある。深鉢では口縁端部に刻み目を施すものがほとんどだが、器面を条痕調整するものと、ナデて爪形の刺突文を縦に列べるものがみられる。このように土器には年代幅が認められるが、晩期中葉の谷尻式までのものが含まれている。

第158図の下段は晩期中層出土のものである。晩期上層と類似するが、上層との違いを探せば、口 縁端部に刻み目をもたないものが増え、頸部の縦の刺突文帯の幅が狭くなっていることであろうか。

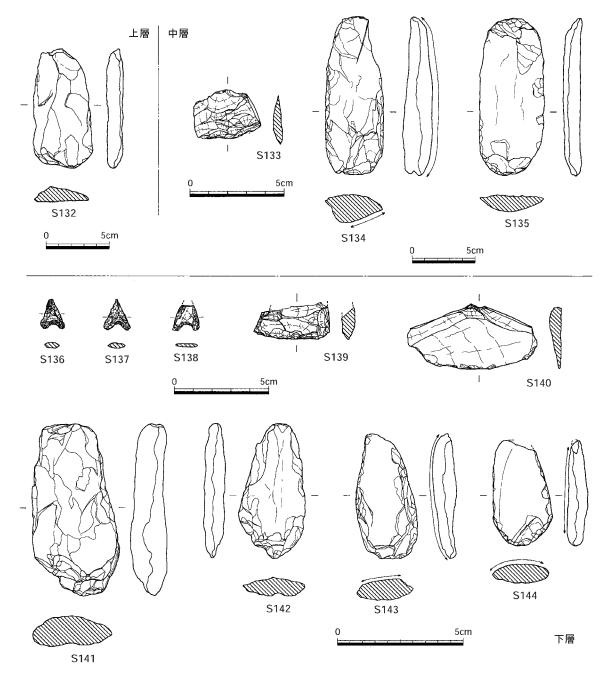


第159図 微高地2南東部斜面出土遺物②<晩期下層・最下層・後期>(1/4)

第159図の上段は晩期下層出土である。第157図の2層分に対応するためか、出土土器の年代幅がかなりみられる。 $568\sim573$ の晩期土器では頸部に爪形文を飾るものがまだみられる。 $574\sim585$ の後期土器では、574のように後葉の元住吉山 I 式併行のものから、 $575\sim579\cdot583\sim585$ のような中葉の彦崎 K  $\blacksquare$  式を経て、 $580\cdot581$ のように前葉の福田 K  $\blacksquare$  式までが含まれている。

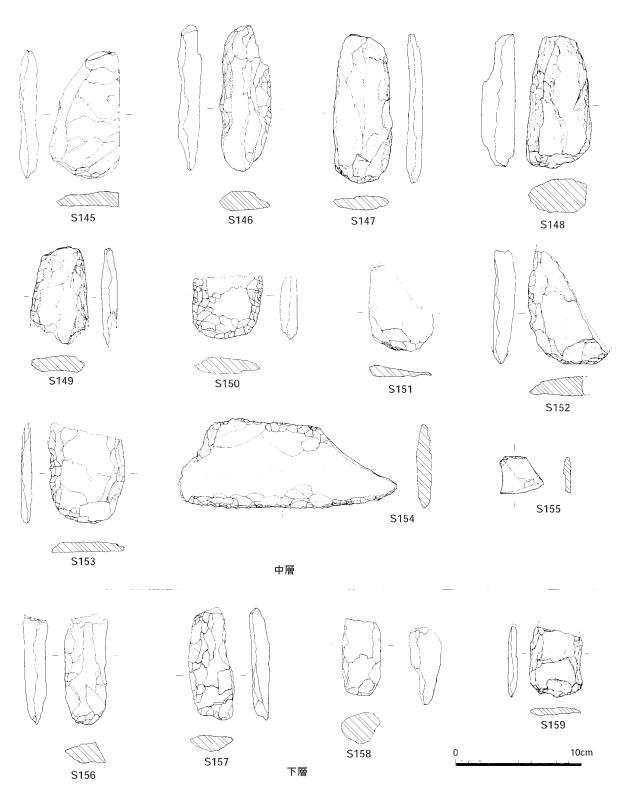
第159図下段は晩期最下層と後期包含層出土遺物をいっしょに掲載している。586~591はいずれも 彦崎 K Ⅱ 式に属するものである。深鉢の口縁端部をみると刻み目を施すものはみられなかった。

第160図は微高地2南東部斜面から出土した石器である。上段左が晩期上層出土、上段右は晩期中層出上、下段は晩期下層出上である。サヌカイト片は多数出上したが、製品は少なく、石鍬が各層でみられ、片面が磨かれたように磨滅しているのは河道2の堆積層と同様である。 (岡本)

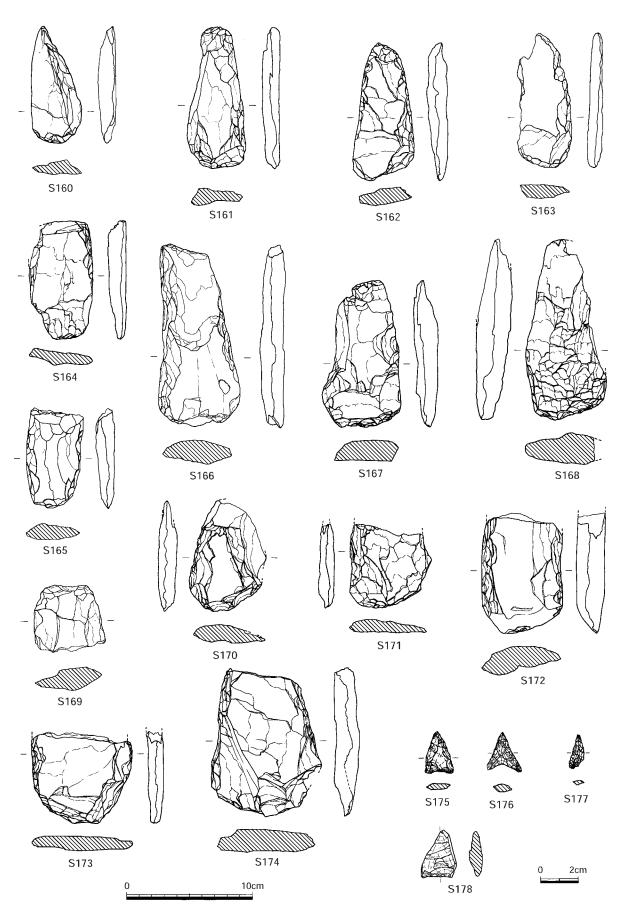


第160図 微高地 2 南東部斜面出土遺物③〈石器〉(1/3,1/2)

上記以外にも微高地 2 全般にわたって石器 S 145~178 が出土している。緑色片岩の石鍬が圧倒的に多く、大きさには大型の S  $166~168 \cdot 172~174$ 、中型の S  $145 \cdot 147~153 \cdot 160~164$ 、小型の  $146 \cdot 156~159$  がある。それ以外にもサヌカイトのスクレイパー S 154、楔 S  $155 \cdot 178$ 、石鏃 S 175~177 も みられる。



第161図 微高地2出土遺物①<中~下層:褐色砂・黒褐色土>(1/3)



第162図 微高地 2 出土遺物② < 下層: 黒褐色土 > (1/3, 1/2)

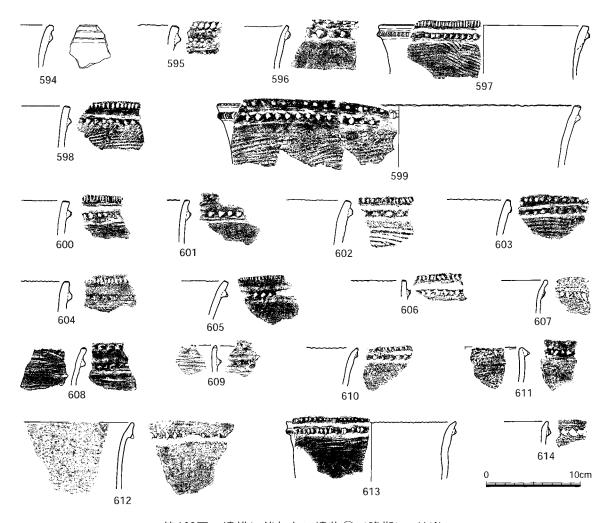
#### その他の遺物 (第163~166図、図版24)

以下は、縄文時代の包含層以外で、柱穴やその他の時代の遺構、包含層から出土した遺物を図示している。

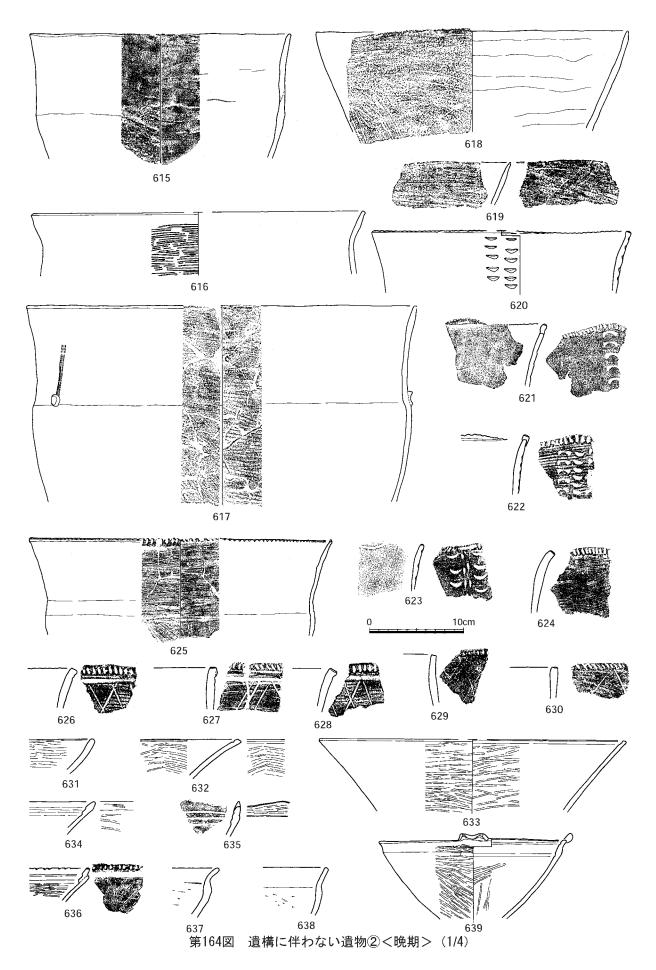
594~613は突帯文土器である。いずれも突帯は口縁直下につくが、口縁端部と突帯に刻み目を施さず古相を示す594、端部に面をもち刻み目を施す595~606、端部は丸みを持つかあるいは尖りぎみの607~614がある。外面の調整は2枚貝条痕のはかにナデ594・612もみられる。晩期後葉でも古段階に位置づけられる。

晩期中葉の深鉢では、口縁端部に刻みのない $615\sim619$ 、刻みを施す $620\sim630$ があり、新古を示すとみられる。 $626\sim628$ は口縁端部に沈線を引き、その直下に斜格子文を施す。617はこの地域に特徴的な肩部に小突起をもつ例である。浅鉢では、端部を丸く収める631、内面に沈線、凹線状のくぼみもしくは段をもたせる $632\sim636\cdot639$ 、短く外反する口縁部をもつ $637\cdot638$ がある。

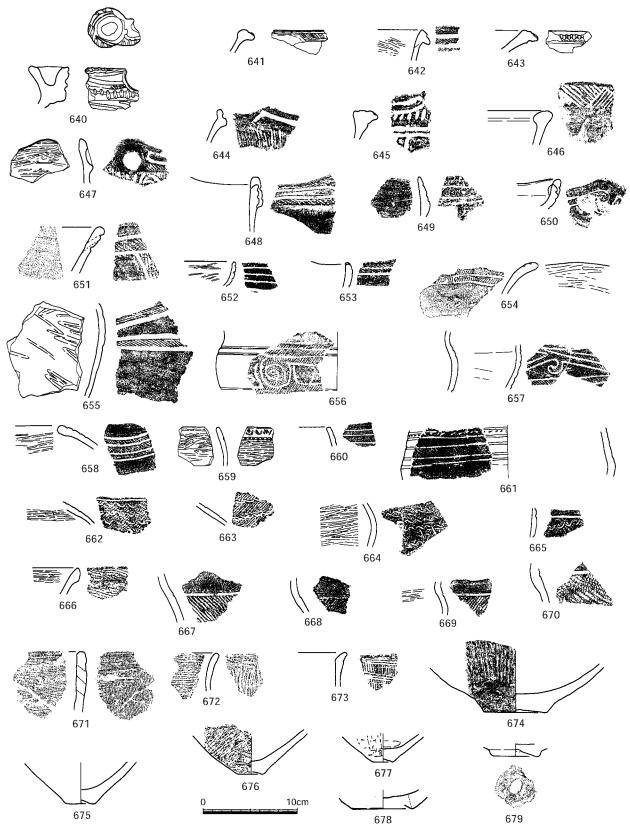
640~679は後期の土器である。突起640、口縁部を肥厚させ端部に沈線をめぐらせ、刻みや縄文も施す641~645、646~649、651などは彦崎 K I 式の範疇にある。以下は彦崎 K II 式に平行する土器群である。658は茶釜形の注口土器である。また、結節縄文662~665、巻き貝による擬縄文660・661、さらに770は複節 3 段の R L R 縄文を施す。671~673はハケ状工具による細密条痕で、山陰的な要素



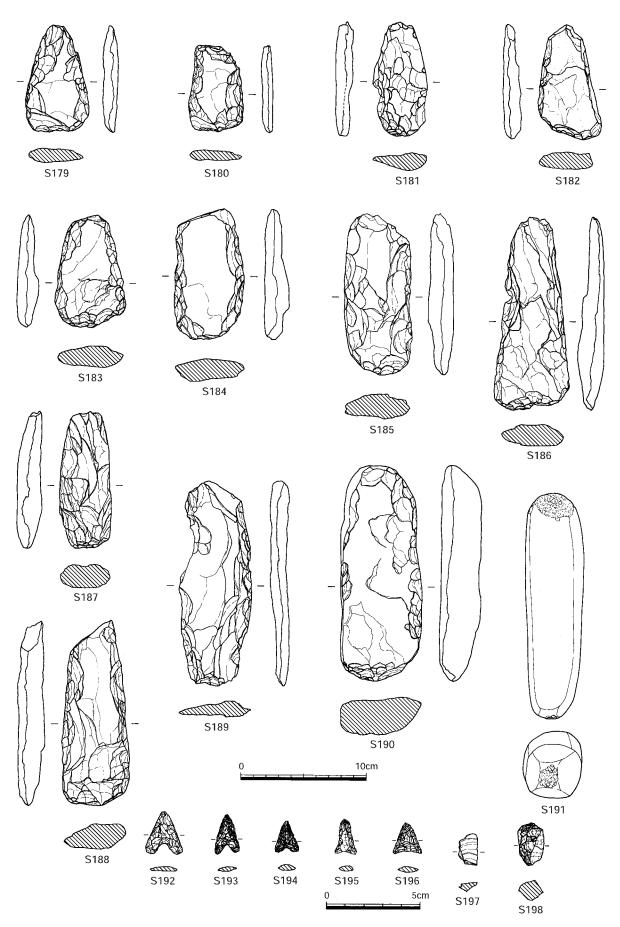
第163図 遺構に伴わない遺物① < 晩期 > (1/4)



がみられる。石器では、緑色片岩製の石鍬S179~190、磨石S191、サヌカイト製の石鏃S192~196、 黒曜石の剥片S197、楔S198がある。 (弘田)



第165図 遺構に伴わない遺物③<後期>(1/4)



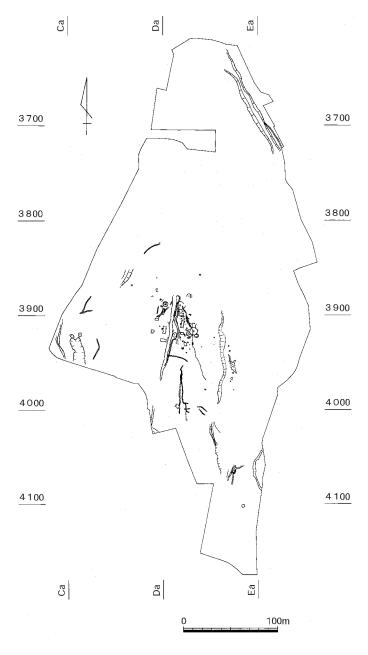
第166図 遺構に伴わない遺物④<各地点出土石器> (1/3,1/2)

# 第3節 弥生時代の遺構と遺物

# 1 概要

弥生時代の遺構は調査区南半の微高地部分と北東部において検出できた。当遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての洪水の跡が確認されており、削平を受けている部分もあるため、本来弥生時代の遺構は周辺にも広がっていたものと考えられる。

検出できた遺構は竪穴住居19軒、掘立柱建物6棟、土器棺2基、袋状土壙3基、土壙49基、溝30条、 水田などである。遺構の時期としては、大きく中期前葉~中葉と中期後葉~後期の2時期に大別でき



第167図 弥生時代遺構全体図① (1/4,000)

る。前期の遺構もあるが、土壙1基のみであり、土器も数片が確認できる程度である。

中期前葉~中葉の遺構は調査区中央部に位置し、その多くが微高地上に位置する。竪穴住居や掘立柱建物・土壙などがセットで把握できる事例であり、県北のものとしては非常に貴重である。

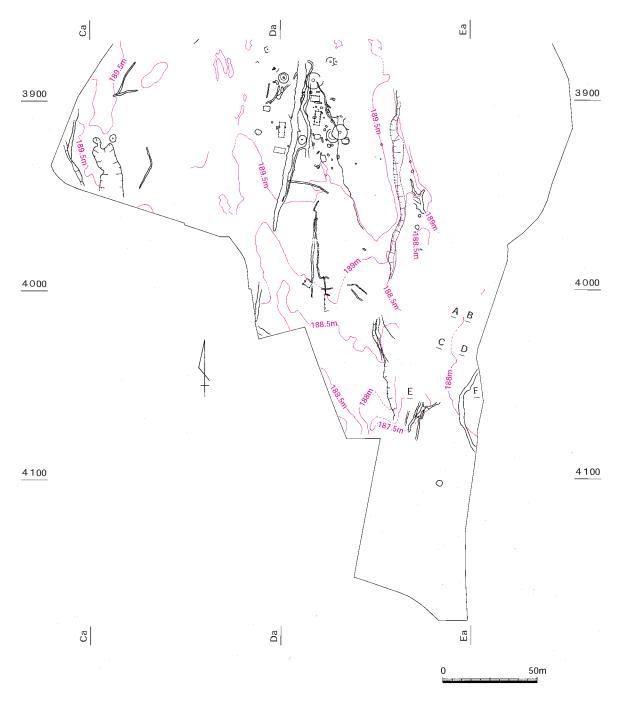
中期後葉~後期・終末期の遺構は中期前葉~中葉よりも広い範囲で検出されている。中期前葉~中葉に生活域であったあたりは、中期後葉~後期には生産域として利用され、水田やそれに関連した溝が多く検出されている。中期後葉の遺構はさらに調査区中央西側の河道沿いに展開し、竪穴住居や溝などが存在するが、この河道が南流する先の久田堀ノ内遺跡の遺構群との関連性が想定できる。また上記以外の後期の遺構としては、前半のものとして調査区北西部の河道があり、多くの上器が出上しているが、これは河道を挟んで北に存在する夏栗遺跡側から投棄されたものであると考えられる。後半のものは調査区南東部に竪穴住居や溝などが存在するが、詳細は不明な点が多い。またこの時期に所属する土器棺が中央部微高地上に検出されている。



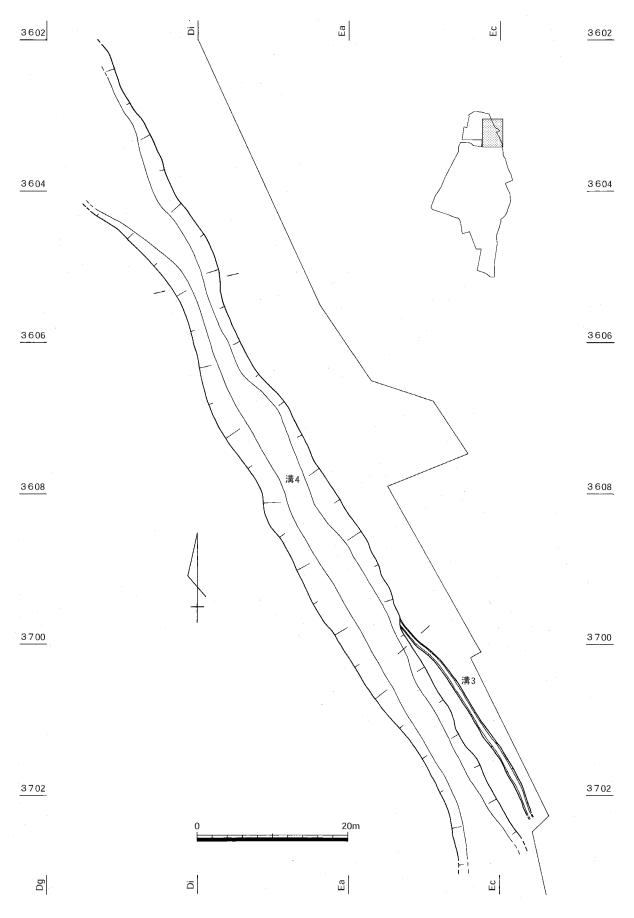
第168図 弥生時代遺構全体図②(1/2,000)

終末期~古墳時代初頭の竪穴住居が水田の廃絶後中央部微高地から調査区西側にかけ若干検出されているが、洪水砂による削平を受けているため詳細は不明である。しかし、洪水砂にはこの時期に所属する遺物が多く含まれるため、この時期までは集落が営まれていたと考える。

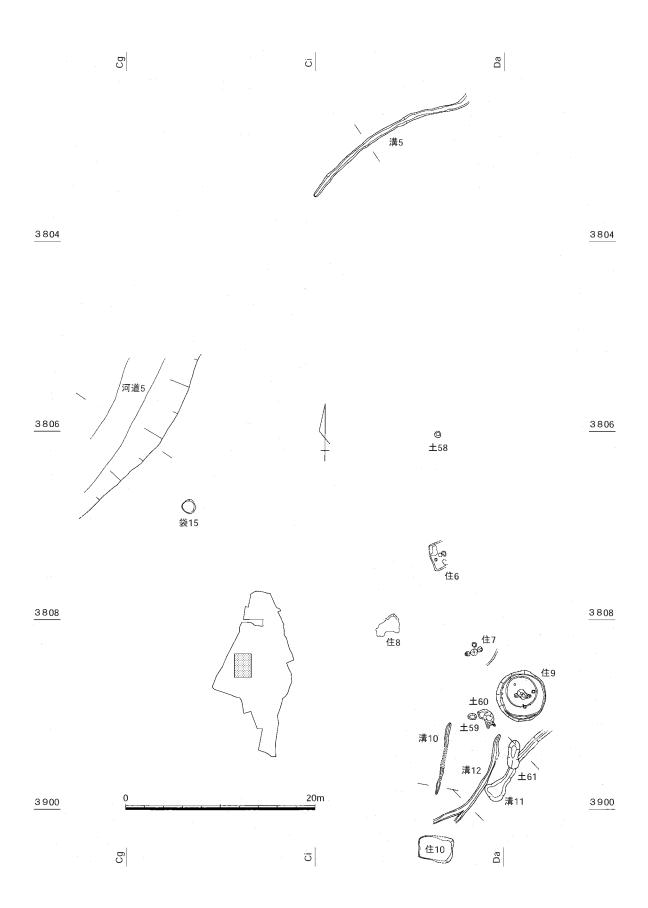
遺物としては、弥生中期前葉~中葉に属する鉄製品と玉関連遺物、磨製石剣(石矛)と考えられる 石器が特筆される。さらに多量に出土した土器もこれまで県北では資料が多くない時期のものとして 重要である。これ以外にも土製品(分銅形土製品、土器片転用の紡錘車)、石器(石包丁、石鏃、石 錐、スクレイパー、石斧類、石杵、砥石、水品製のハンマー)などが多数出土している。(河合 忍)



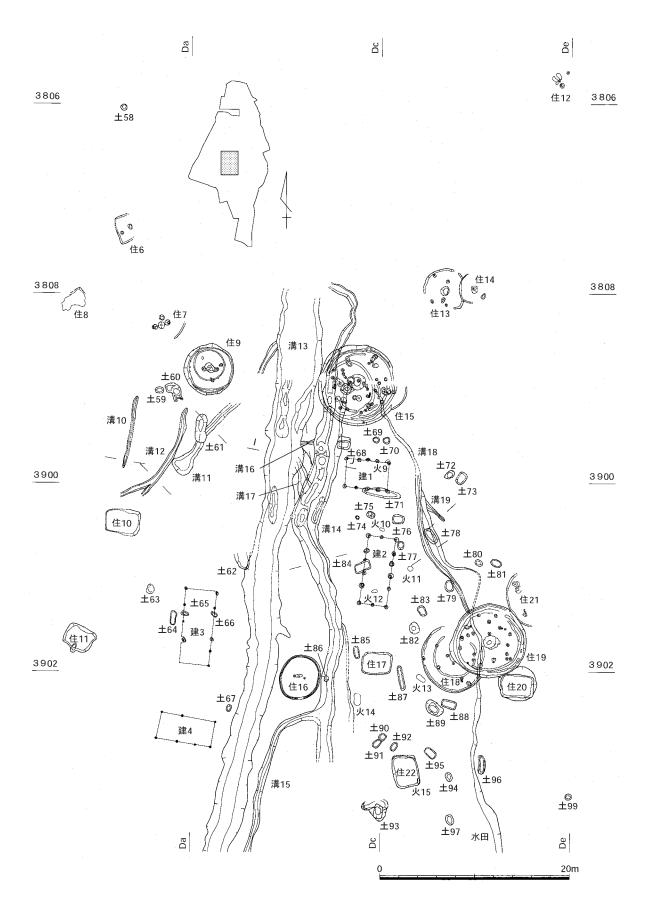
第169図 弥生時代遺構全体図③ (1/2,000)



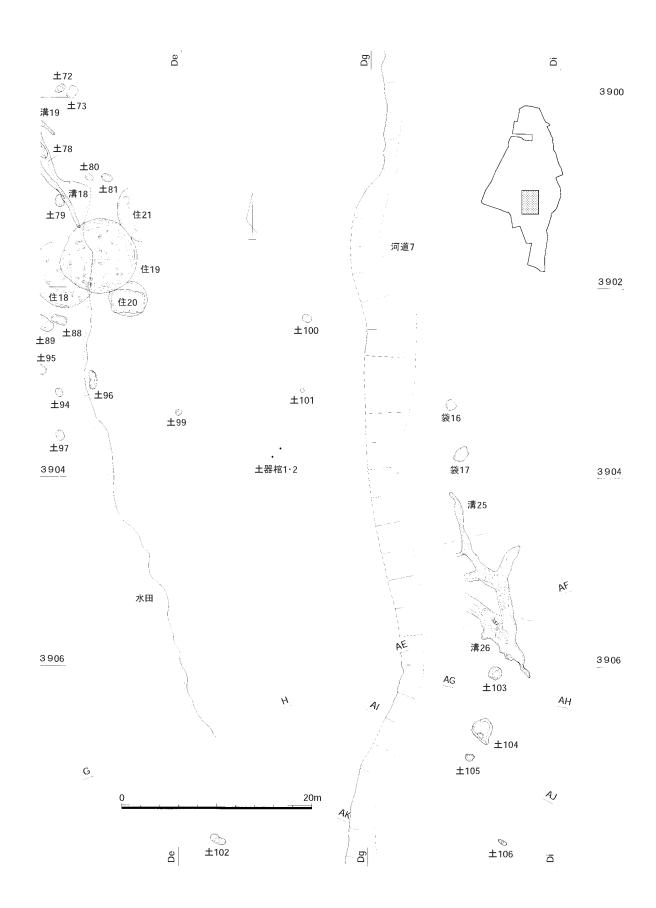
第170図 弥生時代主要遺構部分図① (1/500)



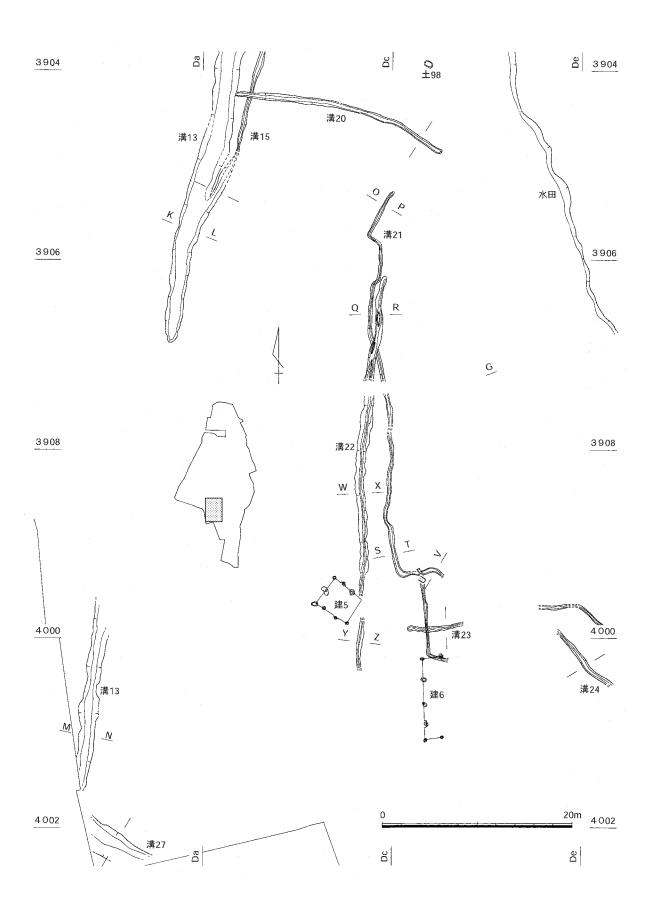
第171図 弥生時代主要遺構部分図② (1/400)



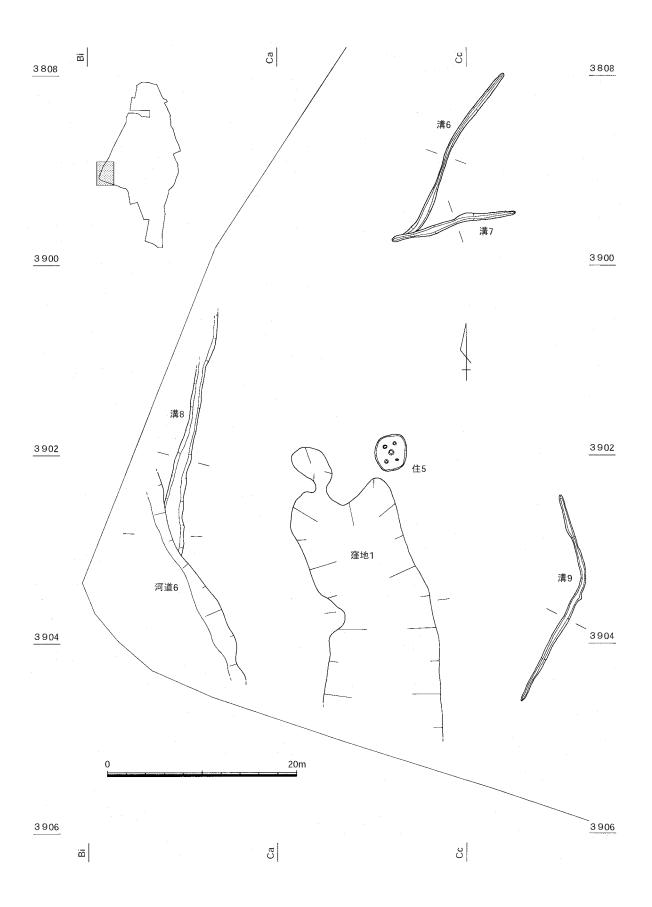
第172図 弥生時代主要遺構部分図③ (1/400)



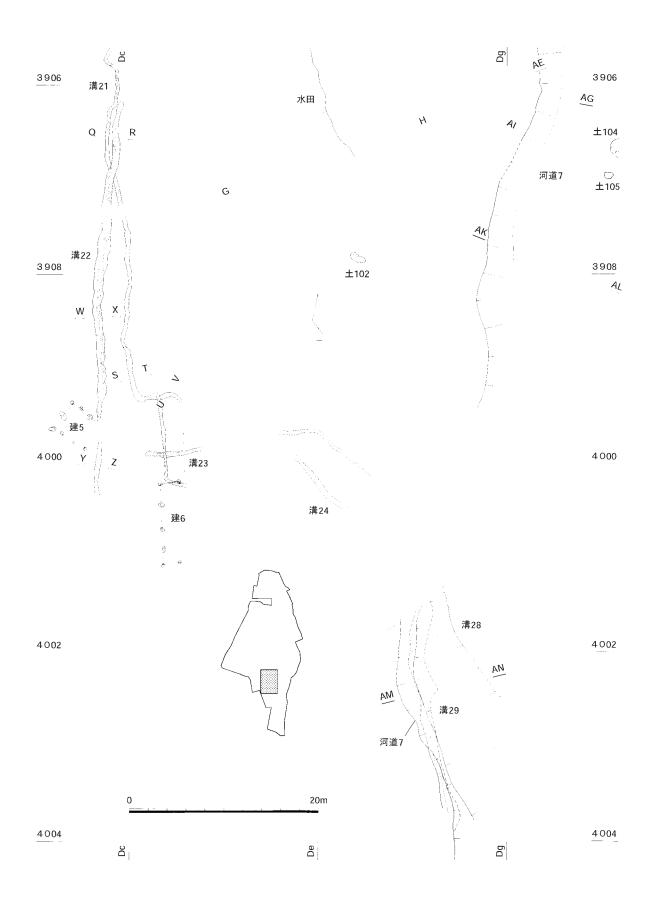
第173図 弥生時代主要遺構部分図④ (1/400)



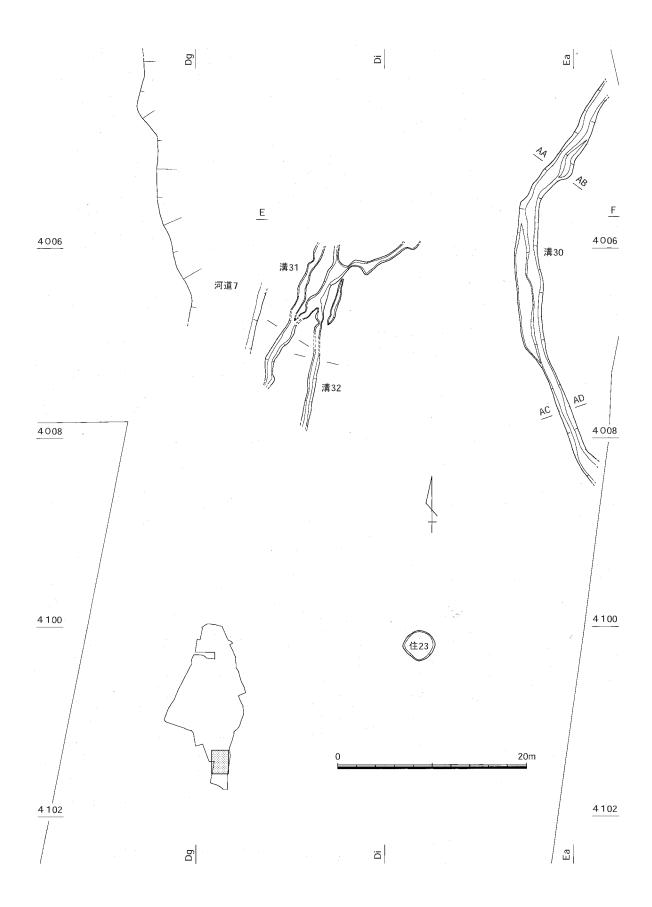
第174図 弥生時代主要遺構部分図⑤ (1/400)



第175図 弥生時代主要遺構部分図⑥ (1/400)



第176図 弥生時代主要遺構部分図⑦ (1/400)

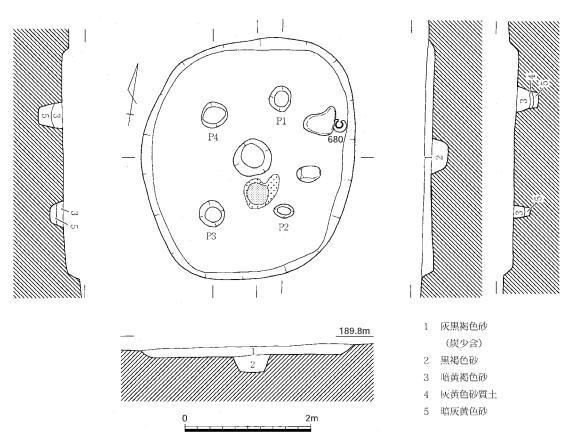


第177図 弥生時代主要遺構部分図⑧ (1/400)

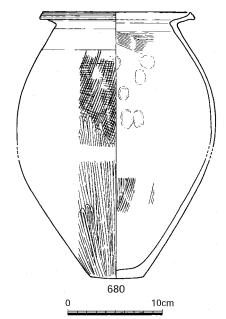
# 2 竪穴住居

### 竪穴住居5 (第175・178図、図版25・41)

吉井川に面した3901Cb区で検出した小規模な竪穴住居で、平面形は隅丸方形に近い形態を呈し、中央穴と4個の柱穴が認められた。床面積は11.2㎡を測り、床面には2個の河原石と焼土面が存在し



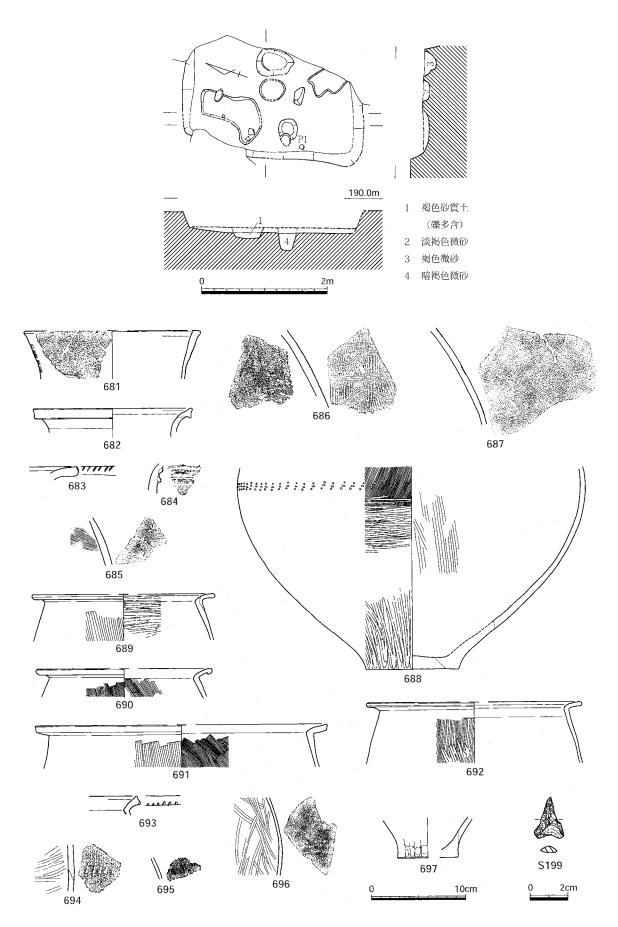
第178図 竪穴住居 5 (1/60) · 出土遺物 (1/4)



たが、壁体溝は確認できなかった。60×55cmを測る中央 穴は、4個の柱穴よりも規模が大きく、断面形は「U」 字形で、内部に黒褐色砂が存在した。柱穴間の距離は 1.75~1.1mを測り、柱穴内には暗黄褐色砂や暗灰黄色砂 が認められた。出土遺物として、完形に近い甕680があ る。遺構の時期は中期後葉と思われる。 (福田)

## 竪穴住居6 (第171・179図、図版25・26・41)

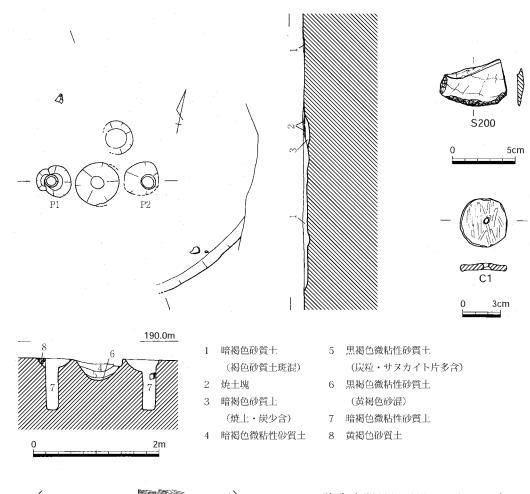
3907 Cj区に位置している、方形を呈すると考えられる竪穴住居である。残存している南北辺は2.87mを測る。第3層が埋土である東端の土壙は炭を含んでおり、中央穴であると考えられる。P1がこの住居に伴う柱穴であり、本来は2本柱であったようである。

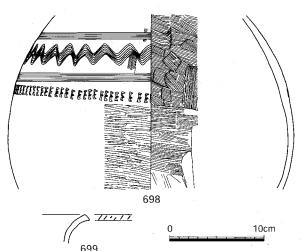


第179図 竪穴住居6 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/2)

出土遺物は、甕689など口縁部内面までミガキが施され古い様相を呈するものも存在するが、時期は弥生時代中期中葉に属すると考えられる。この他にもサヌカイトの剥片が出土している。 (團 奈歩) **竪穴住居7** (第172・180図、図版26・27・41)

 $3808\,C$  j 区に位置する。大きく削平されるが、部分的に検出した壁体から、直径  $4\sim5\,m$ の円形 竪穴住居と考えられる。また、床面中央に中央穴とこれを挟む主柱穴  $P1\cdot P2$  を配する、いわゆる 松菊里型住居に類似した住居構造をとる。壁体溝や、建て替えの痕跡は認められない。出土遺物には、



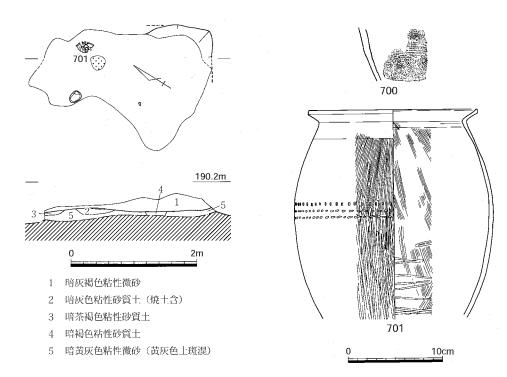


第180図 竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/3, 1/4)

弥生土器698・699のほか、スクレイパー S 200、紡錘車 C 1 がある。また、サヌ カイトの剥片が埋土中から出土してお り、住居内あるいは周辺で石器製作が行 われていた可能性が高い。時期は、弥生 中期中葉の古段階と考えられる。(佐藤)

竪穴住居8 (第171・181図、図版26)

3808Ci区に位置する。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての洪水により 平面の形状は大半が流出しており確認することができなかったが、方形であると



第181図 竪穴住居8 (1/60)・出土遺物 (1/4)

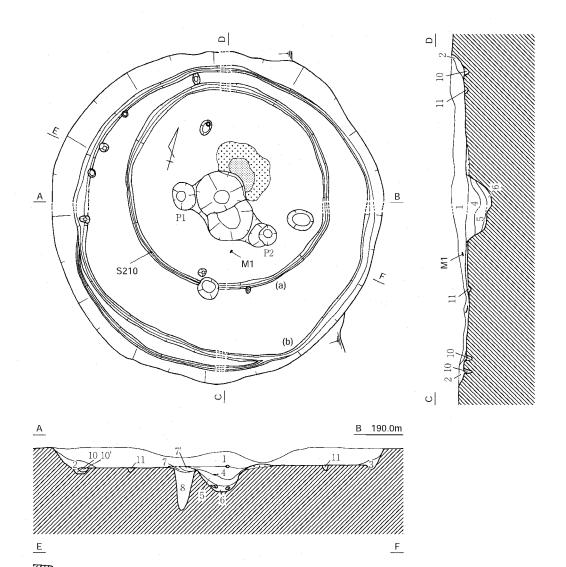
考えられる。断面で床面と、平面で焼土面・台石を確認したため竪穴住居であると判断した。規模は一辺が2.9m以上を測る。出土遺物は、壺700・甕701がある。701は床面直上で検出しており、埋土からはサヌカイトの剥片なども出土している。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。 (團)

竪穴住居9 (第172・182~184図、図版26・27・41・42)

3808Da区に位置する竪穴住居である。住居床面で検出された二重の壁体溝や埋土の状況から、まず壁体溝(a)を伴う竪穴住居(住居9aとする)が建てられ、その後、住居9aを拡張する形で、壁体溝(b)を伴う竪穴住居(住居9bとする)に建て替えられたと考えられる。

まず、住居9 a は、先述のように住居9 b へと拡張されることから、壁体自体は消滅し、壁体溝(a)のみが住居9 b の床面で検出された。平面形は整った円形で、直径約3 mを測る。また、住居規模が小さいことや、確実に住居9 a に伴う柱穴が認められないことから、床面に柱を立てない上部構造だった可能性が高い。次に、住居9 b は、中央穴を挟んで2本の柱穴をもつ、いわゆる松菊里型住居の形態をとる。平面形は整った円形で、直径約5.4mを測る。壁体は擂鉢状を呈すが、地山が砂質のため、崩れたものと考えられる。住居南西部分の壁体溝は二重になっており、部分的に拡張されたことが分かる。中央穴は直径70cmほどの土壙が2つ切り合った形態をしているが、両方とも住居9 b に伴うのか、住居9 a・住居9 b にそれぞれ伴うのか、明確にできなかった。また、中央穴に接して被熱面を検出したが、これも住居9 a・住居9 b のどちらに伴うものか、はっきりしない。

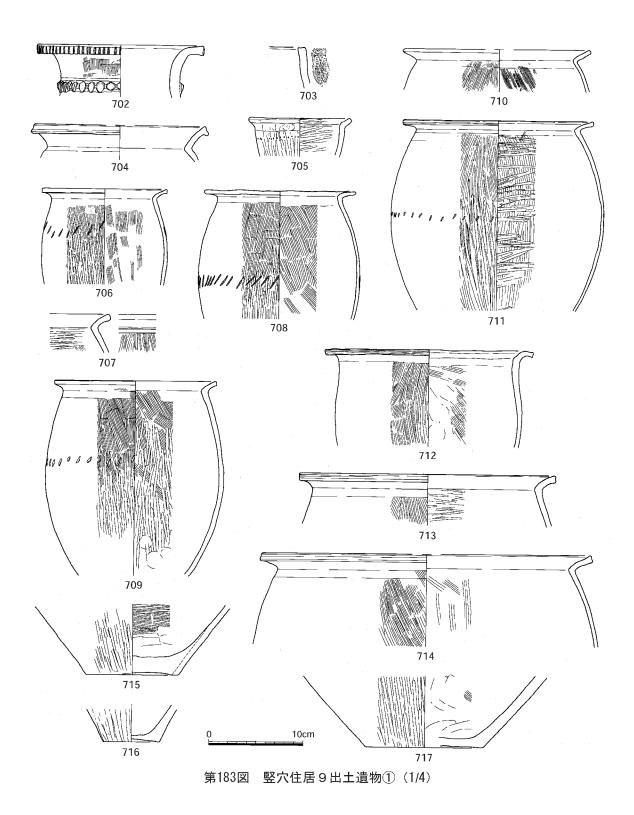
遺物はすべて埋土中から出土しており、住居9bが廃棄され、埋没する過程で、投棄あるいは流れ込んだものと考えられる。このうち、土器は、各器種の口縁部にヨコナデが施されるが、甕の内面下半にヘラケズリが導入されていない段階のものである。土製品は、紡錘車 $C2\sim C7$ があり、いずれも土器片を利用したものである。特筆される出土遺物として、鉄器・玉製品があげられる。このうち、鉄器M1は器種不明の鉄片で、厚さ2mと薄いことから鍛造品と考えられる。玉製品には、碧玉製管



- 1 暗赤褐色砂質土(暗褐色砂質土斑混)
- 2 褐色砂質土(黒色砂質土斑混)
- 3 暗褐色砂質上(褐色砂質上斑混)
- 4 暗褐色微粘性砂質上
- 5 暗褐色砂質土 (赤褐色砂質土斑混) (炭粒多含) 10 ´10と類似するが黒色砂多混
- 6 黒褐色微粘性砂質土(炭粒多含)
- 7 暗褐色砂質土

- 7 8 (暗褐色砂質土) が被熱により赤変
- 8 暗褐色砂質土
- 9 褐色砂質上
- 10 暗褐色砂質上
- 11 暗褐色砂質土(褐色砂質土斑混)

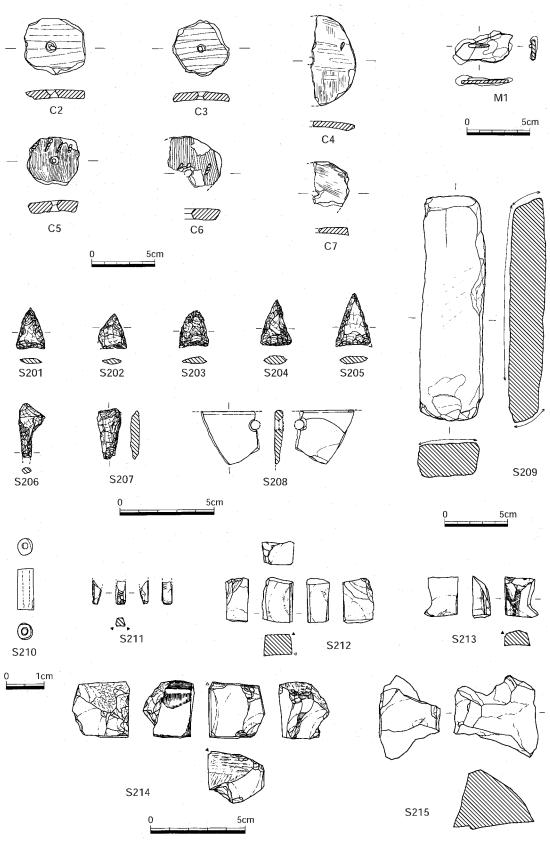
第182図 竪穴住居9 (1/60)



玉S210と、製作途中の欠損品S211、施溝痕が認められる未成品S212~S214、石核S215があり、 多数の紡錘車の出土と合わせ、住居内あるいは周辺で管玉生産が行われていた可能性が高い。これら の出土遺物から、遺構の時期は、弥生中期中葉古段階と考えられる。 (佐藤)

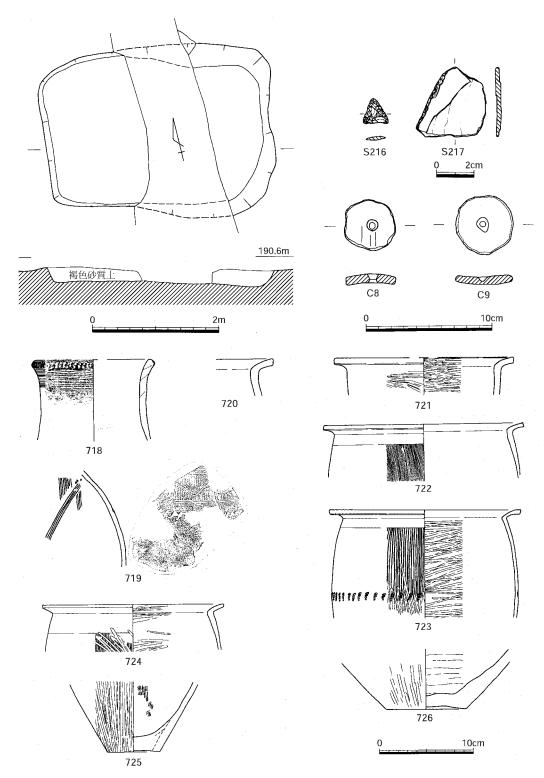
## 竪穴住居10 (第172・185図)

3 900 Ci区において検出した長方形の竪穴住居である。床面中央は破壊されており詳細は明らかでないが、残存部においても焼土面、柱穴、壁体溝などは認められなかった。



第184図 竪穴住居 9 出土遺物② (1/3, 1/2, 1/1)

出土遺物としては、壺718・719、甕720~723、底部片725・726がある。底部725の内面調整はハケで、ケズリは認めらない。それ以外にも、サヌカイト石鏃 $\mathbf{S}$ 216、スクレイパー $\mathbf{S}$ 217、土器転用の紡



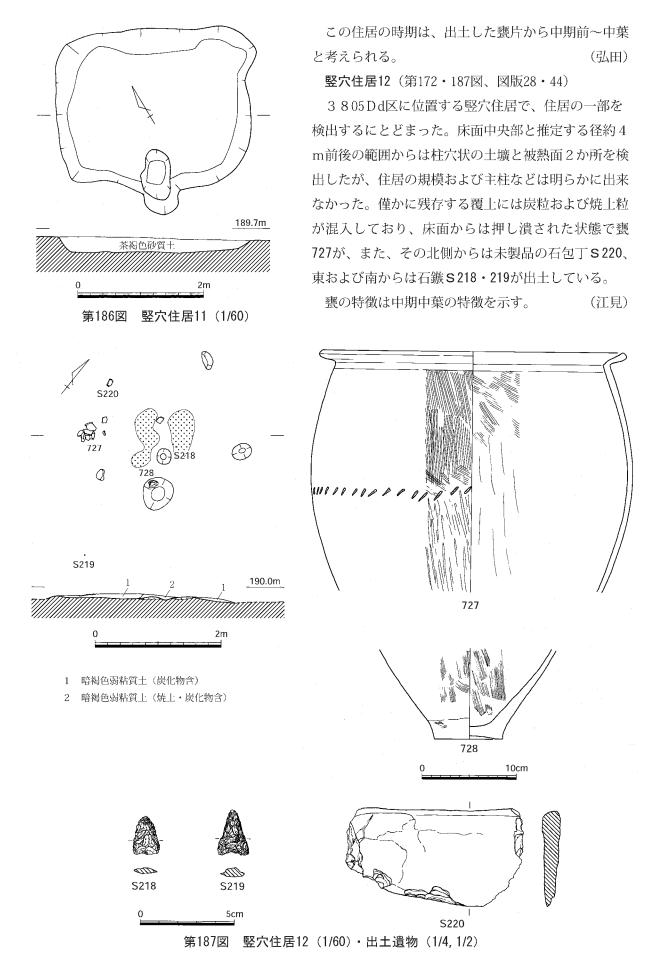
第185図 竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/2,1/3,1/4)

鍾車C8、用途不明のC9がある。この住居の時期は、中期前葉である。

(弘田)

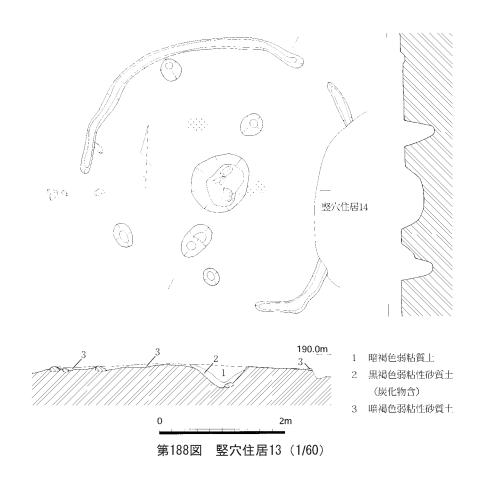
## 竪穴住居11 (第172・186図、図版28)

3 900 Ci区において検出した小型の竪穴住居である。平面形は長方形を呈し、規模は、長さ3.1m、幅2.6mで、深さ25cmを測る。床面上には、焼土面、中央穴、壁体溝は認められなかったものの、南辺中央にこの住居に伴うとみられる小ピットが存在した。



#### 竪穴住居13 (第172・188図、図版28)

3 8 07 Dc区から検出された住居で、東側一部を竪穴住居14に切られ、竪穴の上部および南西部は 後世の洪水によって削平を受けている。平面不整円形を呈す。規模は約4.5mを測り、貼り床がなさ



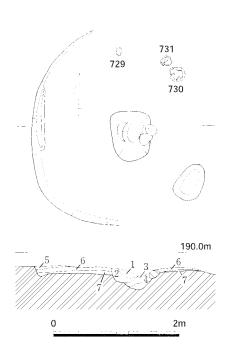
れていた。主柱は2本からなり、柱穴間の距離2.2m、柱穴の径40cm前後、深さ約50cmを測る。径約1 m、深さ40cmの中央穴の周囲からは3か所に被熱面が確認された。

遺物はみられなかったが、後期の範疇か。 (江見

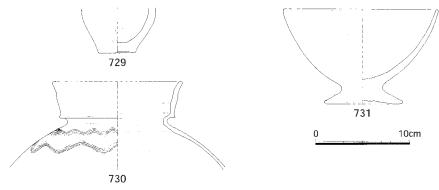
竪穴住居14 (第172・189・190、図版29・44)

竪穴住居13の東に接して検出された住居で東半部は後 世の洪水によって削平を受けている。平面円形を呈す。

- 1 灰褐色弱粘質土 (焼土・炭化物多含)
- 2 暗褐色弱粘質上(炭化物少含)
- 3 暗褐色弱粘質上 (焼上・炭化物多含)
- 4 暗褐色弱粘質土(砂礫含)
- 5 暗褐色弱粘質土 (焼土・炭化物多含)
- 6 暗褐色弱粘質土(貼り床②)
- 7 暗褐色弱粘質土(2より少々淡)(貼り床①)



第189図 竪穴住居14(1/60)



第190図 竪穴住居14出土遺物(1/4)

規模は推定径約3mを測り、貼り床がなされていた。主柱は確認できなかったが、住居中央から径約80cm、深さ約40cmの掘り直された中央穴が検出された。遺物は北部床面から小形壺729・甕730・台付鉢731などが出土している。730は肩部に櫛描波状文が描かれているものの直線的に立ち上がる口縁部の作りはシャープで、731の特徴とも合わせれば、当住居は後期終末に廃棄されたと考える。(江見)

竪穴住居15 (第172・191~199図、図版29~31・43~46)

竪穴住居13の南西 7 mで検出した円形の竪穴住居で、3 8 09 Db区に位置する。調査の結果、床面を海抜180.5mに揃えて拡張が繰り返しなされていることが判明した。

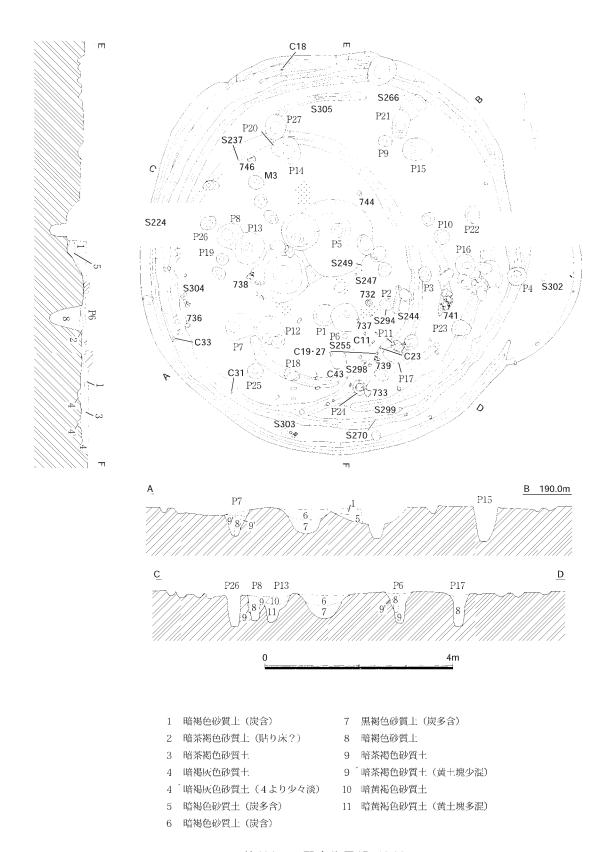
15 a は幅13cm、深さ10cmの溝が径5.5mほどの弧状をなして検出され2本柱の竪穴住居を想定したが、柱穴は貧弱で中央穴も見られないなど不確定な要素が多い。15 b は15 f の東側に張り出すように検出した深さ20cmの浅いくぼみで、径 4 mほどの竪穴住居を想定したが、壁体溝は検出されず柱穴も確定できないなど問題が残る。

15 c は長軸6.14m、短軸5.62mの南北に長い楕円形を呈する。27cmある床面の周囲には幅30cm、深さ18cmの溝をめぐらす。主柱は柱間 $3.3 \times 1.9$ mの4本柱を想定したが、柱間2.2mの2本柱である可能性もある。中央穴は長軸80cm、短軸65cmの不整円形を呈し、深さ43cmの埋土には炭を多く含む。

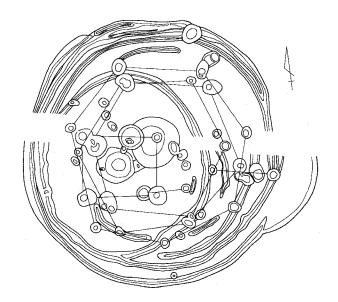
15 d は15 c の床面を北東に向けて1.8mほど拡張した住居で、長軸6.76m、短軸6.5mの円形を呈し、床面積は34.5㎡と15 c の1.3倍になっている。主柱は6本で構成されており、柱間は2.08~2.6mを測る。幅26cm、深さ8cmの溝をめぐらした床面の中央には中央穴を設けているが、15 e ・ f と重複しており当初の規模は不明である。15 e は15 d を北東側に40cmほど拡張したもので、長軸7.86m、短軸7.54mの円形を呈し、幅28cm、深さ8cmの溝で囲まれた床の面積は46㎡ある。主柱は6本あり、柱間は2.2~2.83mを測る。

最も新しい15 f は15 e の周囲を $40\sim60$ cm拡張した、長軸8.6m、短軸8.36mの円形住居である。56m ある床面の周囲には幅28cm、深さ8cmの溝をめぐらせ、中央には長軸1.62m、短軸1.58m、深さ34cm の不整円形を呈する土壙を穿つ。主柱は7本と推定され、その柱間は $2.23\sim3.16$ mを測る。

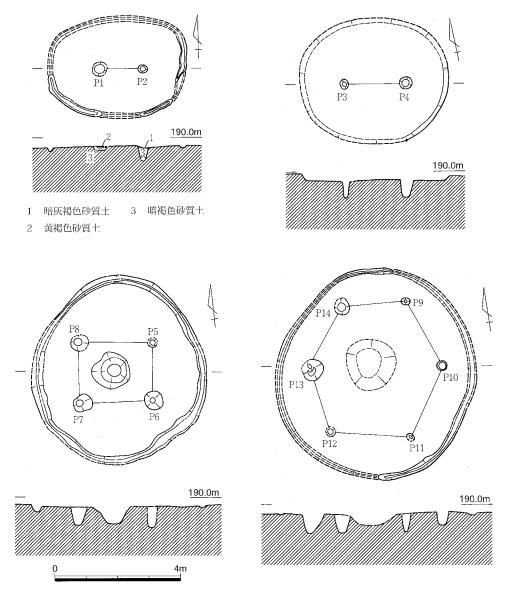
遺物は、埋土から4箱ほどの土器・石器・鉄器が出土しているが、その多くは最終段階に放棄されたものである。732は細長い頸部に突帯を数段にわたってめぐらす壺で、鍔状をなす口縁部の上面には櫛描波状文を飾る。733は広口壺で、頸部には突帯をめぐらし、肩部には櫛描き横線文を飾る。口径17.3cmを測る735は短頸壺で、肩部には列点文を飾る。甕には小形737~739と中形740・741がある。く字形をなす口縁部をヨコナデで調整するものが多いが、740ではヘラミガキが施される。平底が多



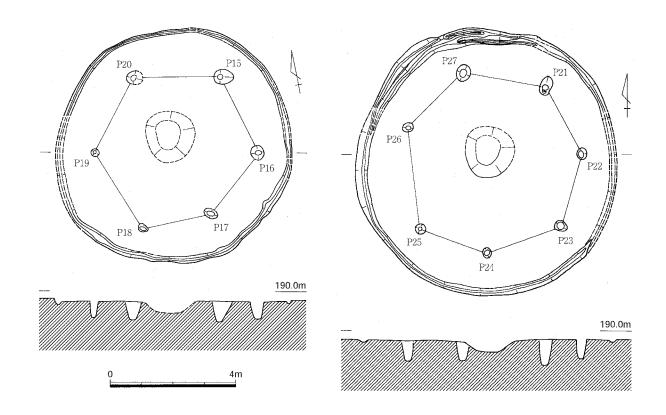
第191図 竪穴住居15 (1/80)



第192図 竪穴住居15 a ~ f (1/120)



第193図 竪穴住居15a~d (1/120)

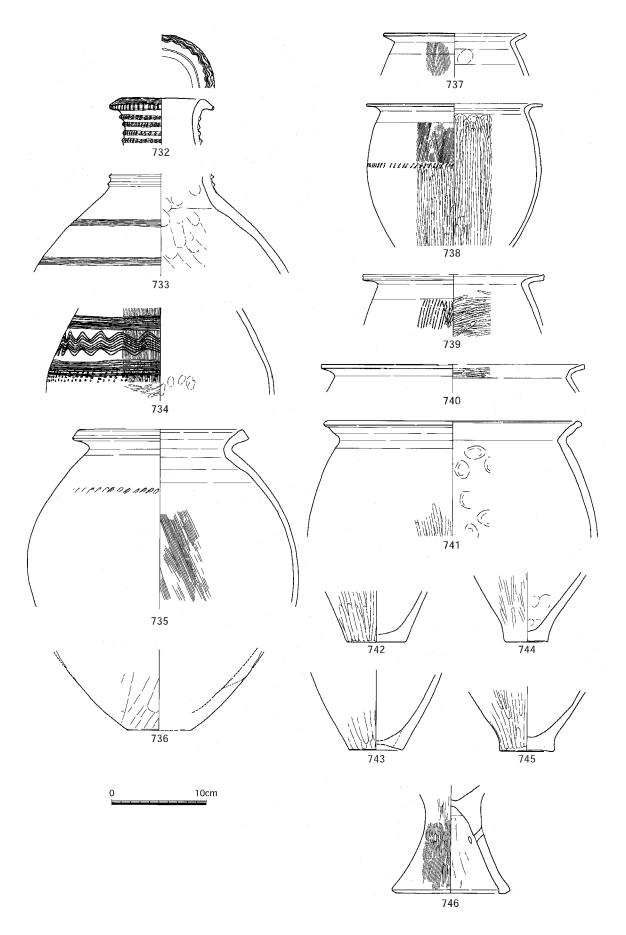


第194図 竪穴住居15 e · f (1/120)

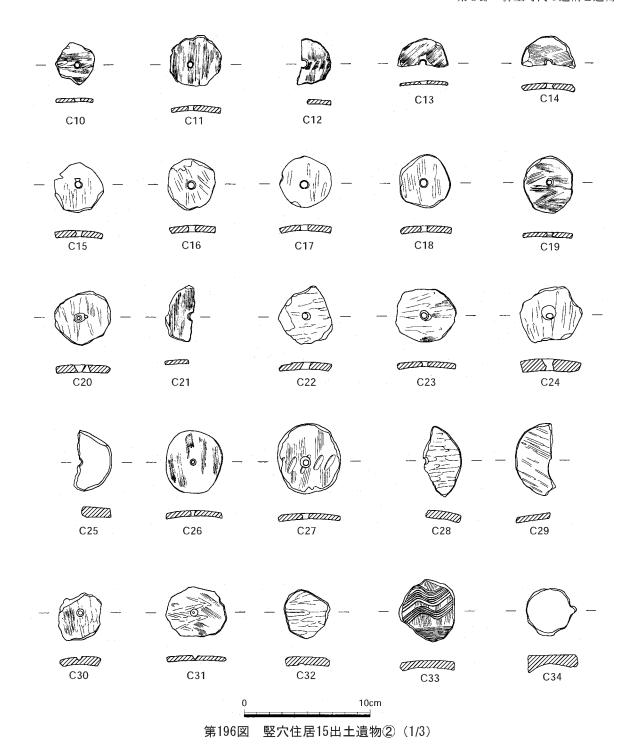
いが、743のような上げ底も見られる。746は円形の透かし孔を飾る高杯の脚部で、径11.5cmの脚端部 は水平面をなす。これらは中期前葉新段階~中葉古段階に比定される。C10~34は厚さ0.3~1cmの 土器片を径4~5cmの円形に加工した紡錘車で、重量は9~22gあり、穿孔途中のC30・31や未穿孔 のC33・34も見られる。石器には石矛や石鏃、石錐、スクレイパー、砥石のほか碧玉の石核がある。 S221は幅5.1cm、厚さ1cmの石矛もしくは幅広の石剣で、縞目のあるホルンフェルスで製作されてい る。サヌカイト製の石鏃S222~274には平基鏃と凹基鏃が見られるが、その法量はばらつきが大きく 素材となる剥片の形状に規定された製作状況が想定される。また、整形や調整に失敗した未成品が多 く含まれており、約2.5kgにのぼるチップとともにこの場所での製作をうかがわせる。スクレイパー には緑色片岩製のS275やサヌカイト製のS298のほか、河原石から剥ぎ取った剥片を利用したS299 ~303がある。このうちS275は穂摘み具として使用された可能性がある。また、S303を剥ぎ取った 石核S476が16.5m南に離れたピットから出土している。S305は長さ6.6cm、幅4.7cm、厚さ3.1cmを測 る碧玉の石核で、施溝分割の痕跡が残る。鉄器M2~7のうち、M3~6は厚さ0.4~0.9cmある鋳造 鉄斧の破片を長さ3.2~4.2cm、幅2.1~3.7cmの方形に加工したもので、M3・4には帯状の凹凸が認め られる。M2は袋部の上端を帯状に折り返した鍛造鉄斧で、この種の鉄斧としては最も古い例である。 このほか、断面矩形の棒状をなすM7があるが、器種については不明である。 (亀山)

#### 竪穴住居16 (第172・200~202図、図版31・46)

3 9 02 Db区に位置する竪穴住居で、竪穴住居15の南25mで検出した。平面形は長軸4.76m、短軸4.18mと南北に長い円形を呈し、深さ15cmにある床面は海抜189.4mを測る。面積は14.9㎡あり、その周囲には幅15cm、深さ5cmほどの溝をめぐらせているが、南側に50cmほど途切れる箇所がある。床面

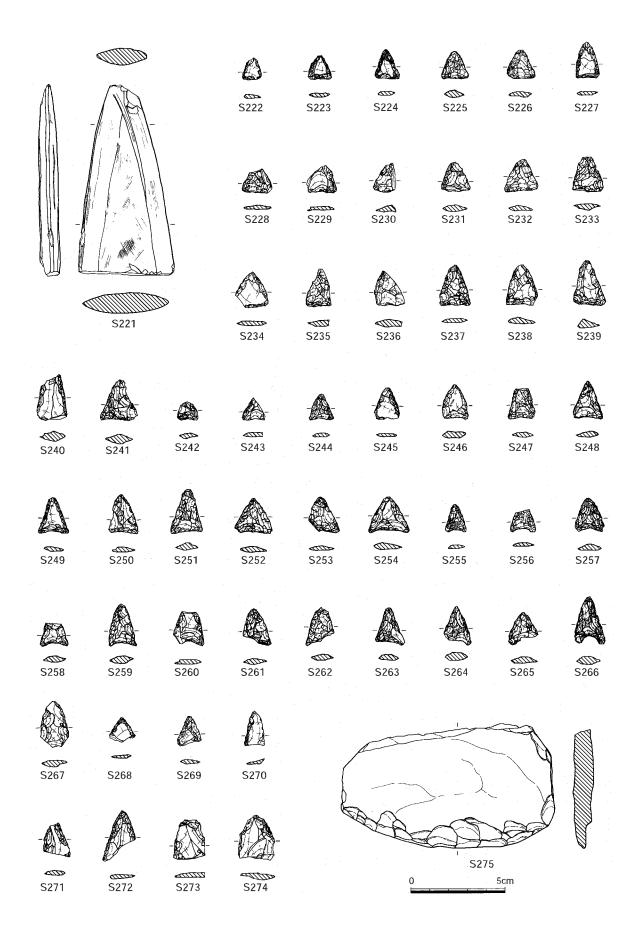


第195図 竪穴住居15出土遺物① (1/4)



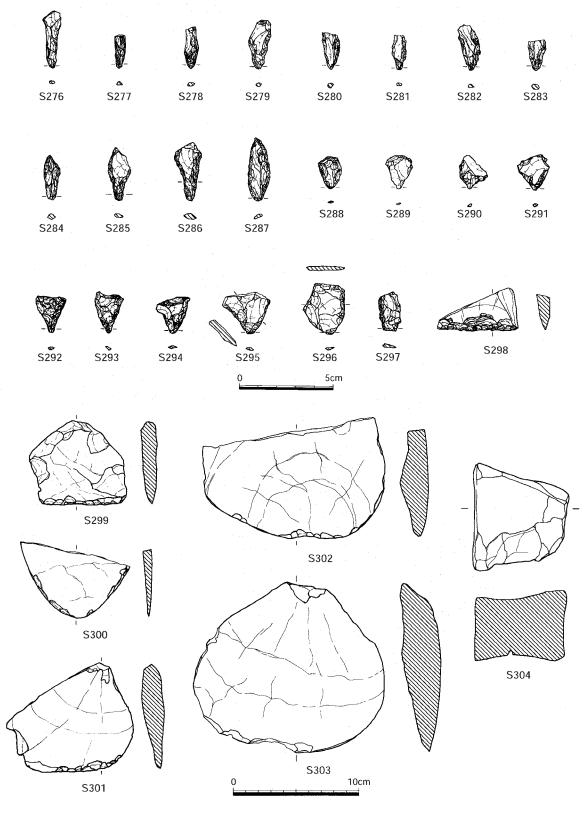
の中央には長さ84cm、幅60cmの東西に長い楕円形を呈する土壙が掘りこまれており、深さ37cmある埋土の下層には炭の堆積が認められた。この土壙を挟むように2本の主柱が設けられていた。その掘り方は径25cmと小さいが、深さは70cmある。柱間は1.1mあり、その方向はN-72°-Wを測る。

出土遺物は竪穴の主軸に沿うように南北に広がっており、東や西には分布の空白が認められる。しかし、これらの多くは埋土からの出土であり、床面に接するものは少ない。細長い頸部をもつ747・748や口頸部が上方にすぼまる749は櫛状工具による横線文と波状文を交互に飾る。751は口頸部が上方に開く壺で、頸部には突帯をめぐらす。甕は口径17~20㎝の小形752~756・762・763、23~25㎝の中形757・760、28~32㎝の大形758・759・761がある。く字形をなす口縁部はヘラミガキを施す752とヨ

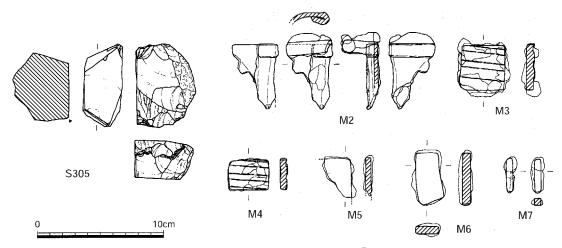


第197図 竪穴住居15出土遺物③ (1/2)

コナデで調整する753~763がある。張りの弱い体部は、内外面をハケメで調整した後、ヘラミガキを施しており、中程にはヘラ状工具による刺突文をめぐらす。底部は厚くつくられており、底面の凹みは浅い。これらは南方  $\Pi$  式、高橋護氏の $\Pi$  b 期にあたるものと考えられ、弥生時代中期前葉の新段階



第198図 竪穴住居15出土遺物④ (1/2, 1/3)

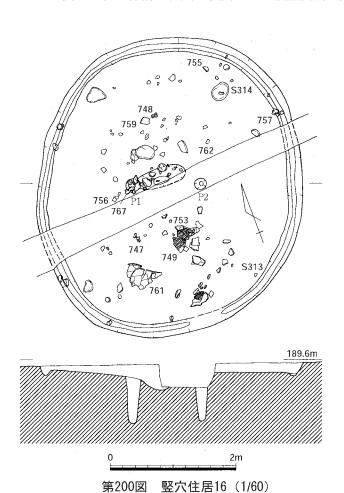


第199図 竪穴住居15出土遺物⑤ (1/3)

に位置付けられる。石器はサヌカイト製の平基鏃S306~310や石錐S312、スクレイパーS313・314のほか、作業台の可能性がある偏平な河原石が出土している。 (亀山)

#### 竪穴住居17 (第172・203図、図版32)

竪穴住居16の東4mで検出した竪穴住居で、3901Db区に位置する。長軸3.15m、短軸2.35mの東西に主軸をもつ長方形を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。海抜189.4mにある床面の面積は5.7㎡を測るが、壁体溝や柱穴は検出されず被熱箇所も見られない。



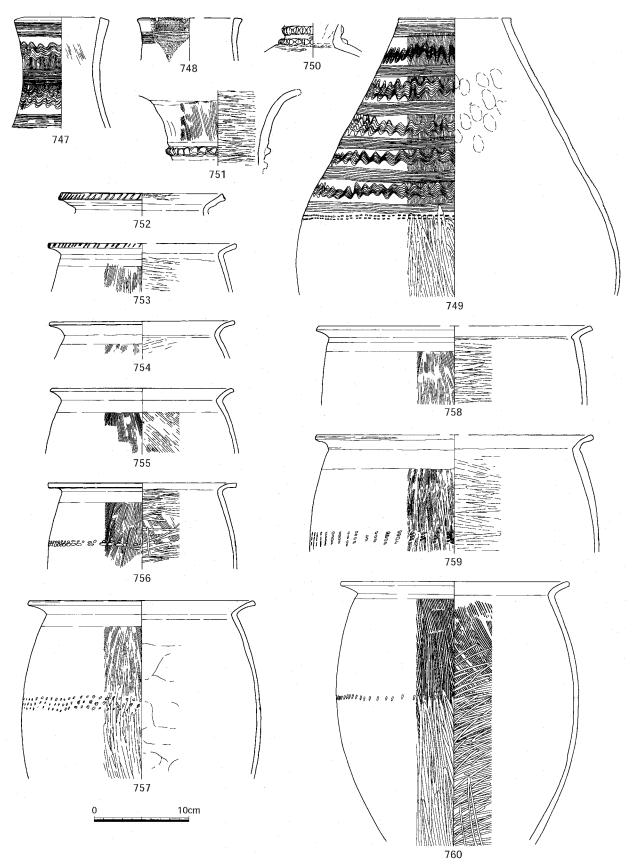
出土遺物は少なく、口縁端部が肥厚して 面をなす広口壺768やく字形の口縁部をヨ コナデで調整する甕769を図示するにとど まった。これらの特徴からして竪穴住居19 と近似した時期が想定される。 (亀山)

**竪穴住居18**(第172・204~206図、図版 29・30・32・47)

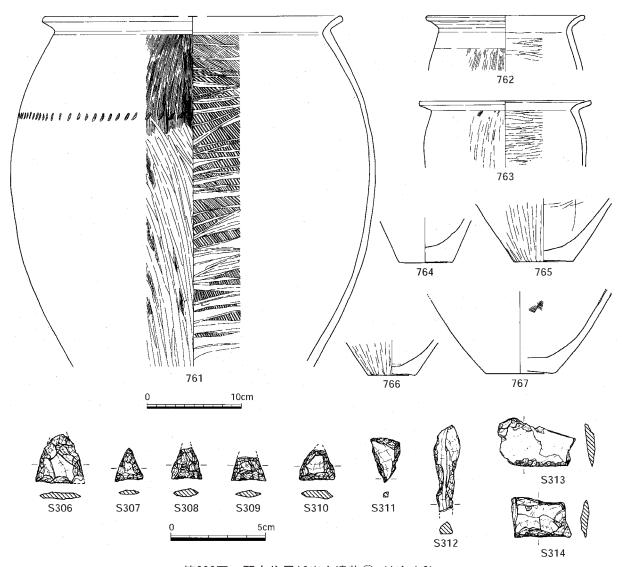
竪穴住居17の東3mで検出した円形の住居で、その北東側は竪穴住居19と重複している。調査の結果、2本柱の竪穴住居18aから5本柱の竪穴住居18bに拡張されていることが判明した。

竪穴住居18 a は長軸4.7m、短軸4.45mの 円形をなす。幅20cm、深さ5cmの溝をめぐ らす床面は海抜189.6mを測り、その面積 は15.3㎡ある。2本ある主柱の掘り方は径 35cm、深さ45cmほどあり、径15cmあまりの 抜き取り痕が確認された。柱間は1.4mで、 その方向はN-83°-Wにある。主柱の間には 中央穴が設けられ、その北には43×30cmの

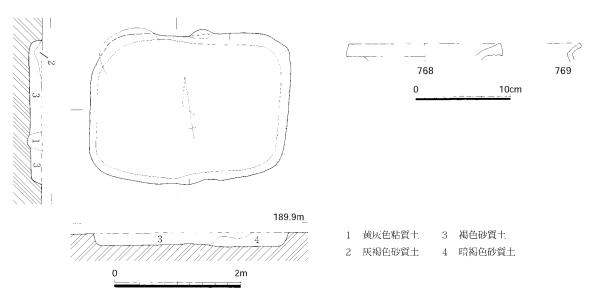
# 範囲で被熱痕跡が認められた。



第201図 竪穴住居16出土遺物①(1/4)

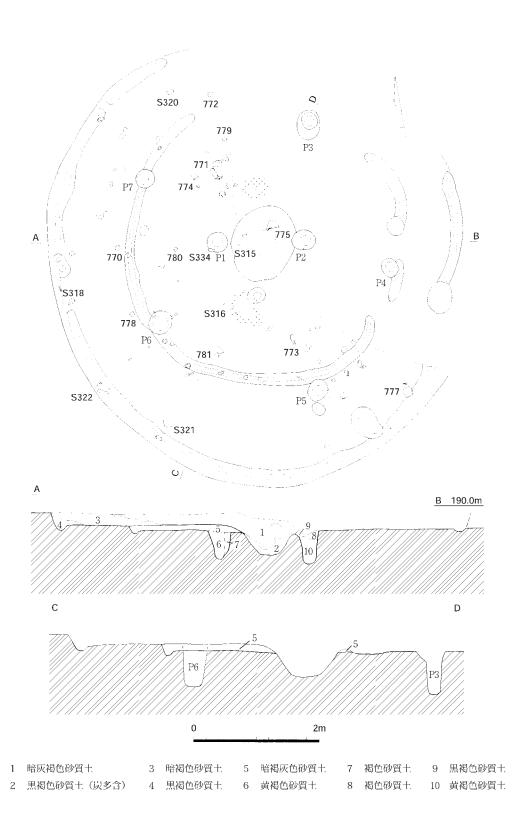


第202図 竪穴住居16出土遺物②(1/4, 1/2)



第203図 竪穴住居17 (1/60) - 出土遺物 (1/4)

竪穴住居18 b は、18 a の床面を10cmほど埋め立てたうえ、壁体を0.9~1.6mほど拡張してつくられており、長軸7.1m、短軸6.6mを測る床面は34.5㎡と18 a の2.2倍となっている。 5 本ある主柱は径30~40cm、深さ65cmの掘り方をもち、柱間は2.25~2.75mを測る。長軸1.25m、短軸98cm、深さ60cmの楕円形を呈する中央穴の下層には炭層が堆積し、その南側には62×48cmの被熱面が見られた。

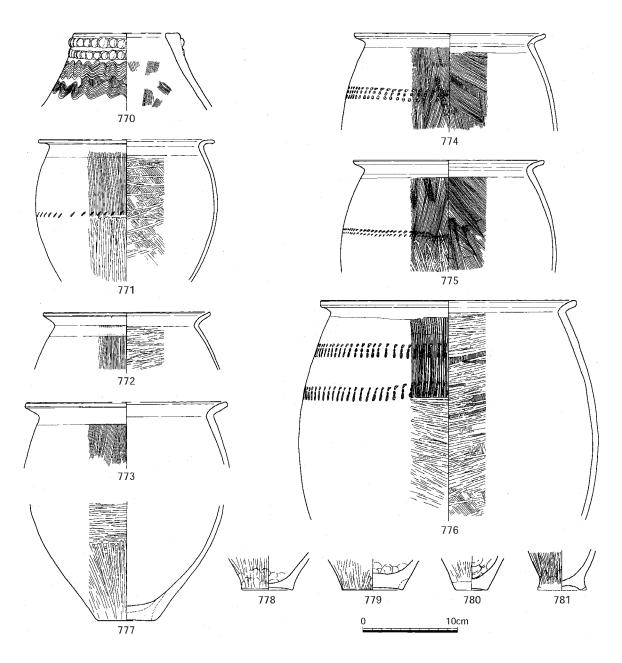


第204図 竪穴住居18 (1/60)

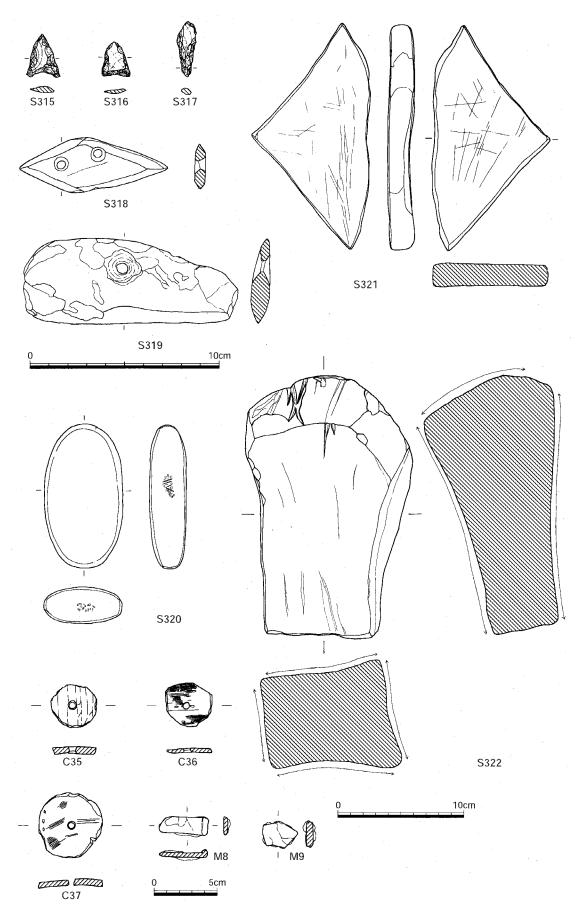
遺物は竪穴住居19と重複していることもあってさほど多くはなく、その大半は18 b の埋土中からの出土である。上方にすぼまる口頸部をもつ壺770は、わずかに肥厚する口縁部に2条の突帯をめぐらし櫛描波状文を飾る。甕は小形と中形がある。口縁部上端が強いヨコナデによって凹むものがあり、体部内面のヘラミガキも粗い。また、底部には薄いつくりのものが見られるなど、竪穴住居16に後出する。石器はサヌカイト製の石鏃S315・316、石錐S317、砂岩製の磨製石包丁S318・319、安山岩の円礫を利用した叩き石S320、砂岩製の砥石S321・322がある。また、土器片を加工した紡錘車C35~37や、方形鉄片M8・9があり、このうちM8は鍛造と見られる。 (亀山)

## 竪穴住居19 (第172・207~212図、図版29・30・32・48・49)

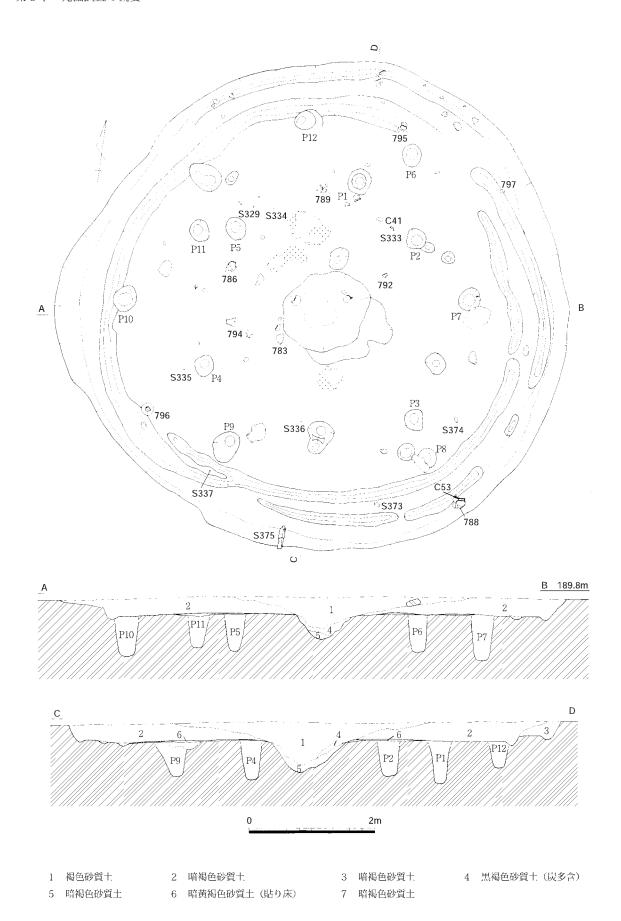
3 901 Dd区に位置する円形の住居で、竪穴住居18の北東に重複して検出した。床面を189.4mにそろえて少なくとも1回以上の拡張が行われている。19 a は長軸6.7m、短軸6.4mの円形を呈し、幅22



第205図 竪穴住居18出土遺物①(1/4)

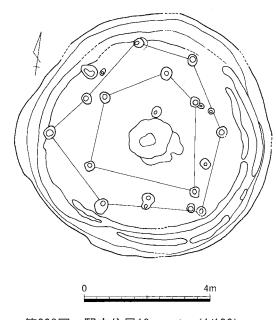


第206図 竪穴住居18出土遺物② (1/2, 1/3)



第207図 竪穴住居19 (1/60)

19 b は19 a の周囲を50cmほど拡張したもので、 長軸8.1m、短軸7.75mを測り、幅22cm、深さ6cm の溝で囲まれた床の面積は43㎡と19 a の1.3倍に なっている。中央穴は長軸1.47m、短軸1.25mの 不整楕円形を呈し、深さ80cmある埋土の下層には 炭を多く含む。また、中央穴の北に2か所、南に 1か所の被熱面が認められた。これらは70~38cm ほどの広がりをもつが、それぞれがいずれの住居 に属するかは明らかでない。主柱の候補は8本あ るが、ここでは5本と推定したい。掘り方は径31



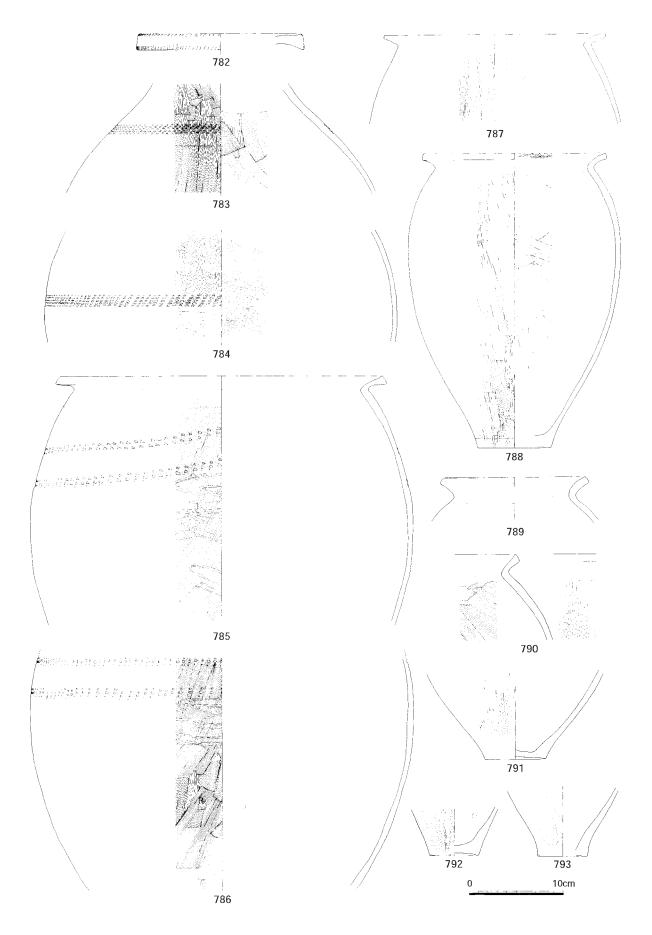
第208図 竪穴住居19a · b (1/120)

~53cm、深さ46~67cmと19 a に比べ径の割りに浅くなっており、柱間は2.59~3.95mを測る。

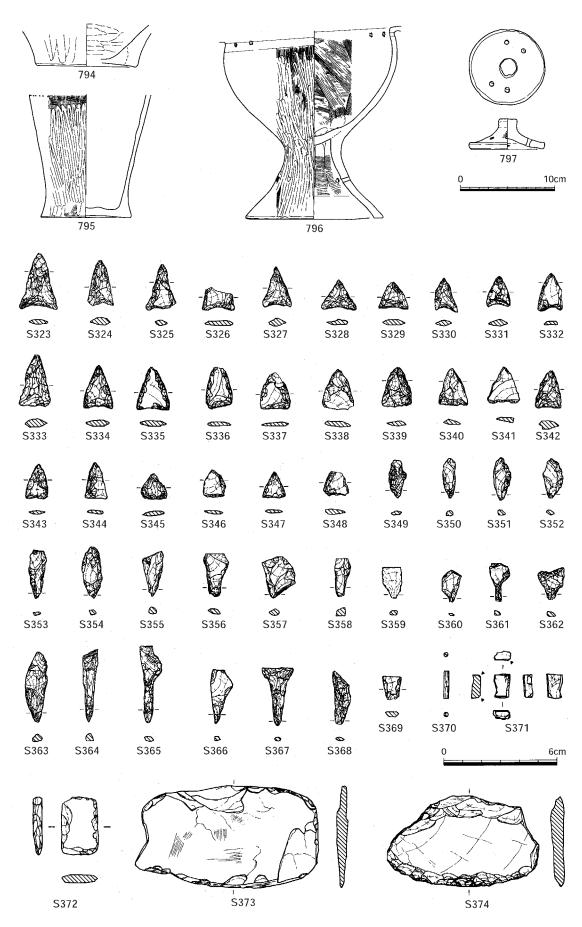
遺物は2箱ほど出土しているが、その大半は19トに属する。782は水平にのびる口縁端部を肥厚さ せ、その上下に刻み目を施した広口壺である。783・784は壺の体部で、なだらかな肩や張りのある体 部中程に刺突文をめぐらす。甕は口径34cmの大形785・786と23.2cmの中形787、19.1cmの小形788があ る。785・786は肥厚した口縁部をヨコナデで調整し、刺突文を二段に飾る体部は外面をハケメ、内面 をナデで仕上げる。く字形の口縁部を強くヨコナデする788は、体部内面をハケメとヘラケズリで調 整する。甕の底部には791~793があるが、いずれも薄いつくりとなっている。795は杯形土器で、口 縁部を失っているが、横に張り出した底部から上方へわずかに開く。南西の壁際から倒立して出土し た高杯796は水平にのびる口縁部を欠いているが、杯部は深く脚端部は水平に終わる。797は径7.6cm の蓋で、2孔一対の穿孔が2か所にある。これらは弥生時代中期中葉の古段階に比定される。石器は、 石鏃、石錐、石斧、スクレイパー、叩き石、砥石のほか碧玉製品がある。石鏃はサヌカイト製で、凹 基鏃S323~332と平基鏃S333~348があるが、欠損品や形状不定の未成品が含まれる。サヌカイト製 の石錐S349~369においても同様に、刃部の欠失や加工途中の未成品が多く見られる。S372は長さ 4.5cm、幅2.9cm、厚さ0.7cmを測る緑色片岩製の偏平片刃石斧で、重量は19.5gある。叩き石S375・ 376は花崗岩や安山岩の円礫を使用したもので、S376には線条痕が見られる。S377は長さ36.7cm、 重量3.1kgある砂岩製の大形砥石で、南側上層から廃棄された状態で出土した。長さ1.3cm、幅0.8cm、 厚さ0.4cmを測るS371は施溝分割した碧玉の石核である。S370は柱状に加工された碧玉製管玉の未 成品で、長さ1.4cm、径0.2cmを測る。土製品には土器片を加工した紡錘車C38~58があるが、破損し たものや穿孔途中のものが大半で、製作過程で廃棄されたものと推定される。 (亀山)

#### 竪穴住居20 (第172・213・214図、図版32・50)

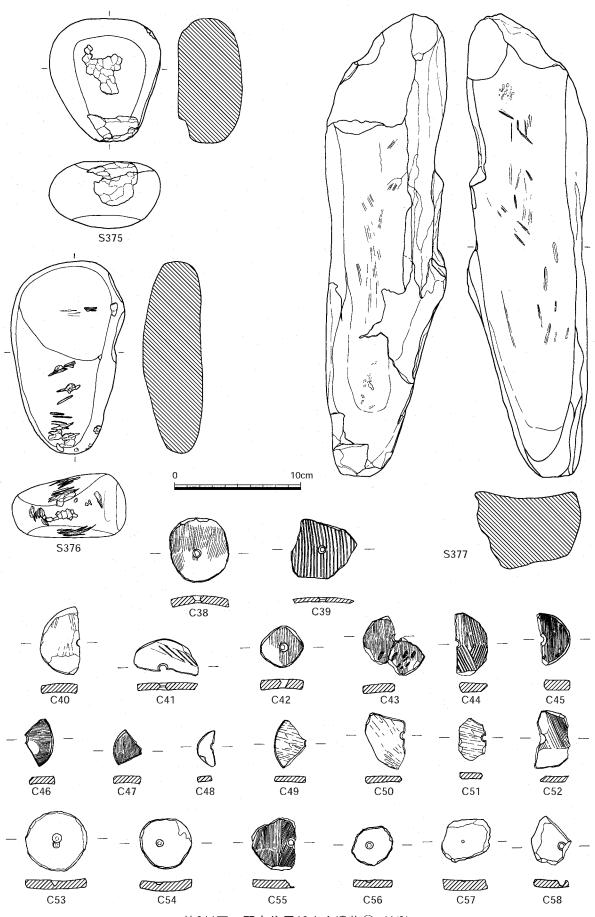
竪穴住居19の南東に接して検出した住居で、3 902 D d 区に位置する。床面は長軸3.74m、短軸2.44 mの東西に長い長方形をなすが、上部が崩壊したためか30cmほど上の検出面では長軸4.05m、短軸3.69mの不整円形を呈していた。6.1㎡ある床面の海抜は189.4mで壁体溝はなく、中央と北西に弱い被



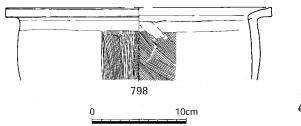
第209図 竪穴住居19出土遺物① (1/4)

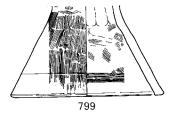


第210図 竪穴住居19出土遺物②(1/4, 1/2)

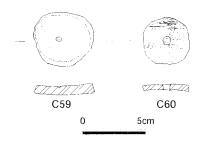


第211図 竪穴住居19出土遺物③ (1/3)





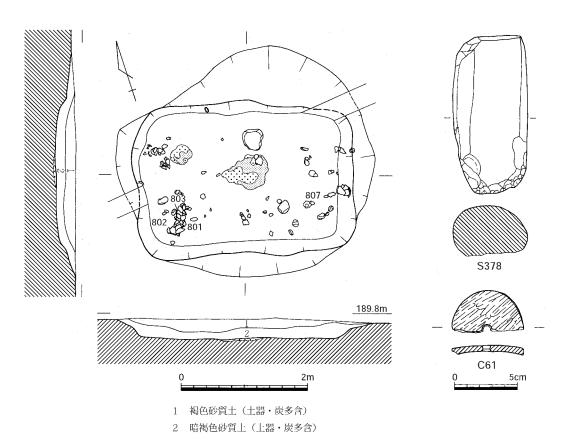
熱面が認められた。埋土からは廃棄された状態で遺物が出土している。800は細長い口頸部に突帯をめぐらす壺である。甕には小形と中形があり、く字形の口縁部をヨコナデで調整するものとヘラミガキを施すものが見られる。体部の張りは弱く、底部は厚いものが多い。竪穴住居18bに先行するものと思われる。 (亀山)



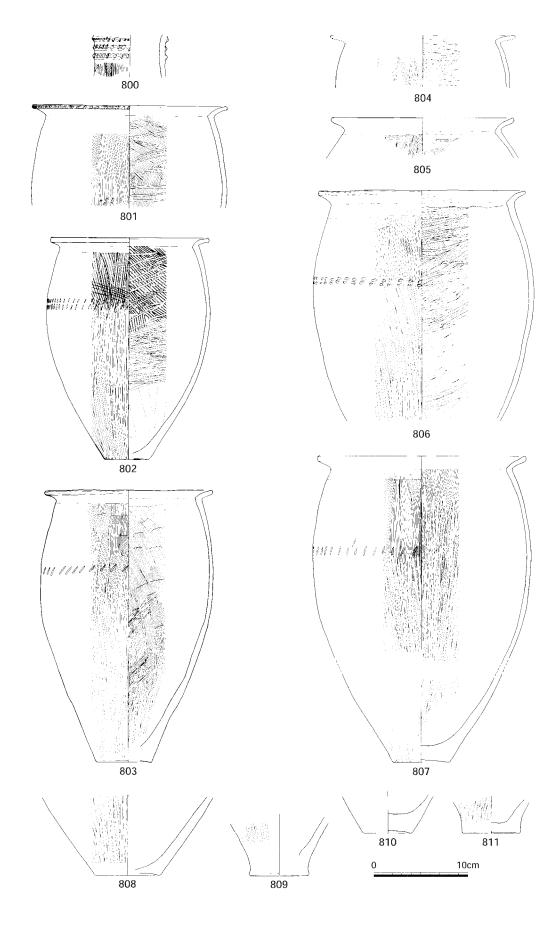
第212図 竪穴住居19出土遺物④ (1/4, 1/3)

竪穴住居21 (第172・215図、図版32・50)

竪穴住居19の北東に接して検出した住居で、3901Dd区に位置する。東側で2本の柱穴と中央穴と見られる埋土に炭を含む土壙を検出したため、その西側を精査したところ径6.2mの円形に復元される弧状の掘り方が確認された。しかし壁体溝は検出されず、2.8mの柱間をもつ4本の柱穴も規模が不揃いであるなど問題も残る。床面から出土した甕812は内面をハケメで調整しており、弥生時代



第213図 竪穴住居20 (1/60) - 出土遺物① (1/3)



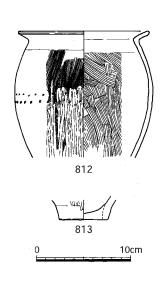
第214図 竪穴住居20出土遺物② (1/4)

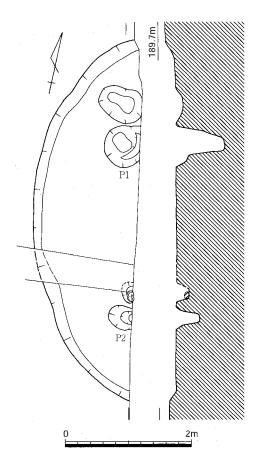
中期中葉の古段階に位置づけられる。

(亀山)

## 竪穴住居22 (第172・216凶、凶版33)

3 903Dc区に位置し、竪穴住居18の南西7.5mで検出した。長軸3.35m、短軸2.67mの南北に長い長方形を呈し、主軸はN-2°-Eを測る。深さ31cmにある床面の海抜は189.2mで、その面積は6.2㎡ある。壁溝はなく主柱も確認されていないが、床面の中央南よりで

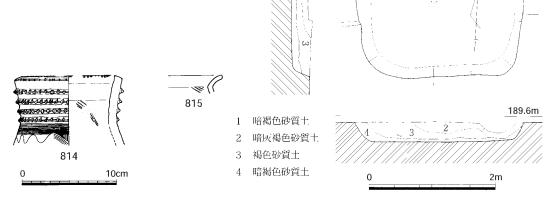




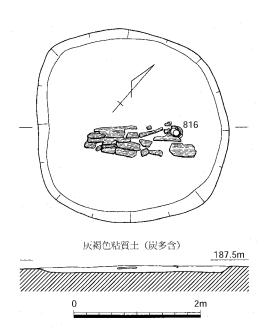
第215回 竪穴住居21(1/60) · 出土遺物(1/4)

56×39cmの強い被熱面を検出している。遺物は少なく、口頸部に突帯をめぐらす壺814や口縁部をヨコナデする甕815のほか、偏平片刃石斧(未掲載)があるにすぎない。中期前葉新段階に位置づけられる。 (亀山)

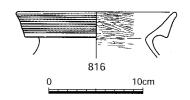
竪穴住居23 (第177・217図、図版33・50) 4 1 00 Di区で検出された竪穴住居であ



第216図 竪穴住居22(1/60)・出土遺物(1/4)



る。平面形は隅丸方形を呈し、長軸3.1m、短軸3.02 mを測る。床面上からは長さ1.5m、幅50cm、厚さ5cm程を測り、用途が不明の炭化した板材が検出されている。この板材の周囲から被熱痕跡は確認されなかった。遺物は外面に煤が付着した甕816が出土している。遺構の時期は弥生時代後期後葉に比定される。 (小嶋善邦)

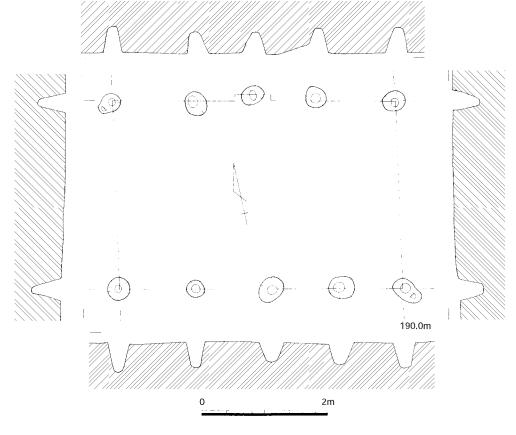


第217図 竪穴住居23 (1/60) - 出土遺物 (1/4)

## 3 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第172・218図、図版29・30・33)

竪穴住居15の南3.5mで検出した  $4\times1$ 間の掘立柱建物で、3 809 Db区に位置する。主軸をN-77°

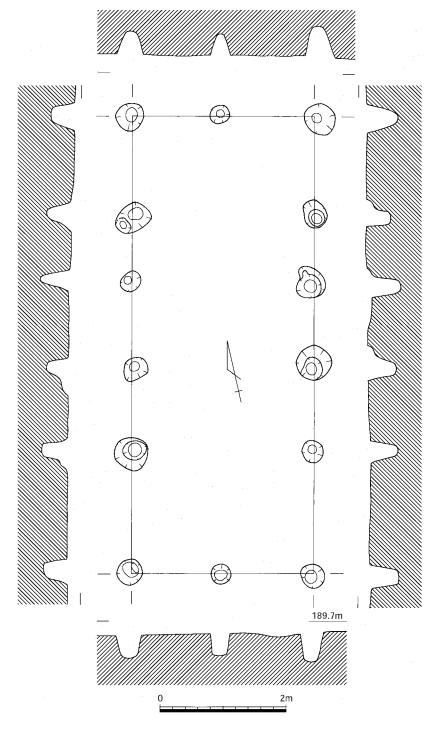


第218図 掘立柱建物 1 (1/60)

-Wにおく東西棟で、桁行4.55m、梁行3mを測り、面積は13.4㎡ある。4間ある桁行の柱間は、比較的均等な南辺に対し、北辺は両端が1.22~1.28mとやや広くなり柱筋の通りも悪い。円形をなす柱穴は径28~45cm、深さ30~50cmを測るが、四隅の柱穴はやや深くなっている。出土遺物はないが、南辺に沿うように土壙71が重複しており、これより先行するものと思われる。 (亀山)

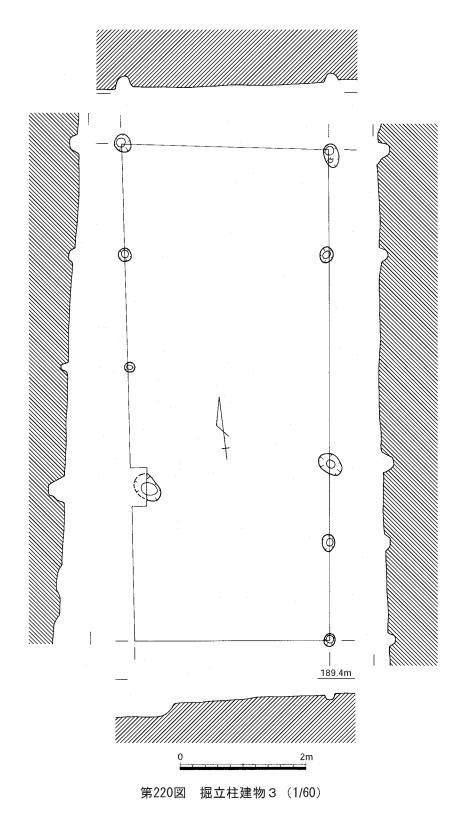
掘立柱建物2 (第172・219図、図版29・30・34)

3900Db区に位置する掘立柱建物で、掘立柱建物1の南5mで検出した。主軸をN-8°-Eにおく



第219図 掘立柱建物 2 (1/60)

 $5 \times 2$ 間の南北棟で、掘立柱建物 1 とほぼ直交する。桁行7.25m、梁行2.9mを測り、面積は21.0mがる。梁行の柱間は $1.4 \sim 1.53$ mを測るが、5 間ある桁行の柱間は $1.05 \sim 2.03$ mとばらつきが見られる。これは両端 2 間がやや広くなっていることによる。柱穴は径 $30 \sim 55$ cmの円形で深さ $30 \sim 50$ cmを測るが、梁行中央の柱穴は浅く、桁行では深いものと浅いものとが交互に並ぶ。図化できるような遺物は出土していないが、その位置関係から掘立柱建物 1 と近似した時期が想定される。



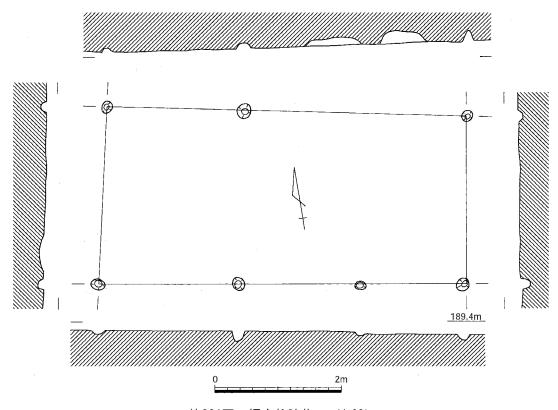
-158 -

## **掘立柱建物3** (第172・220図、写真5、図版34)

掘立柱建物 2 の南西15mで検出した  $4 \times 1$  間の掘立柱建物で、 3 9 01 Da区に位置する。基盤となる砂礫層上で検出したため柱穴の遺存が悪く細部については不確定な点もあるが、現状を掘立柱建物 2 と比較すると、主軸はN-13°-Eとほぼ平行するが、その規模は桁行7.88m、梁行3.29m、面積25.0㎡と掘立柱建物 2 よりわずかに大きい。桁行の柱間は1.7m前後と広く、梁行が 1 間である点でも異なっている。出土遺物は僅少であり時期を知る手掛かりに乏しいが、その構造からすれば掘立柱建物 1・2 に後出する可能性がある。 (亀山)

## **掘立柱建物 4** (第172·221図、写真 5、図版34)

 $3902\,\mathrm{C}_{\mathrm{j}}$ 区に位置する掘立柱建物で、掘立柱建物 30南5.5mで検出した。掘立柱建物 3と同様に遺存が悪く、細部については不安も残るが、現状では  $3\times1$  間で、桁行5.85m、梁行2.8m、面積15.6 ㎡を測る。主軸をN-74°-Wにおく東西棟で、掘立柱建物 3とは 12下に直交し、倒逆 12下に直交す



第221図 掘立柱建物 4 (1/60)

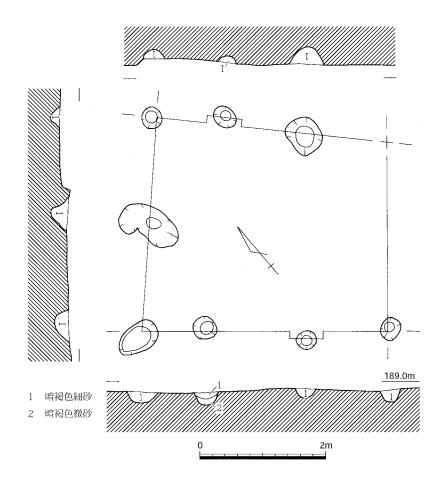


写真5 掘立柱建物3・4 (東から)

る掘立柱建物1・2とは対称的な配置をとる。構造は、1.69~2.2mを測る広い桁行の柱間や1間の梁行など、掘立柱建物3と類似点が多い。遺物は少ないものの、その構造や配置からして掘立柱建物3と同時に機能していた可能性がある。 (亀山)

## 掘立柱建物5 (第174・222図、図版35)

3 908 Da区に位置し、竪穴住居群からは南に60mほど離れたところに存在した掘立柱建物である。調査前は宅地で、撹乱を受けていたため北東隅柱を欠くが、桁行が3間で長さが3.9m、梁行は2間で長さが3.4mを測る。また、他の建物と比べ、棟方向が45°ずれる。ピットからは図化できる遺物は出土していないが、後期の水田と考えられる層を除去した後に検出していることや、周囲の遺構群のあり方から判断して、この建物の時期は中期の範疇にあると思われる。 (弘田)



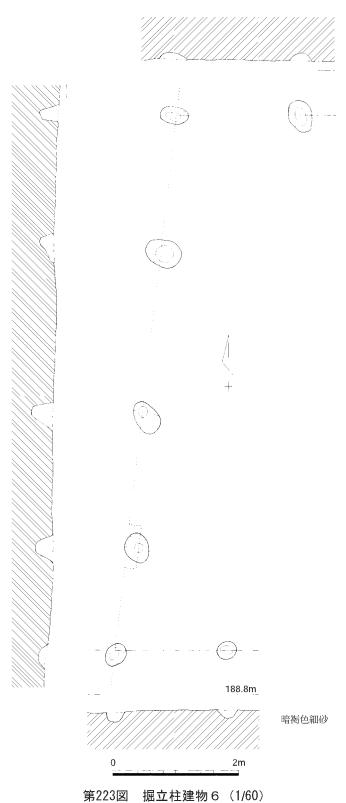
第222図 掘立柱建物5 (1/60)

## **掘立柱建物6** (第174·223図、図版35)

4000Dc区に位置し、弥生水田層直下で検出した掘立柱建物である。東側半分以上は宅地移転の際の掘削により壊されていた。桁行は4間で全長が8.55mを測り、梁行は1間以上の南北棟と思われる。掘立柱建物5の南東約8mの所にあり、掘立柱建物1・2と3・4とともに大小の建物2棟がセットになったあり方を示す。

時期は、先の掘立柱建物5と同様、弥生中期とみられる。

(弘田)



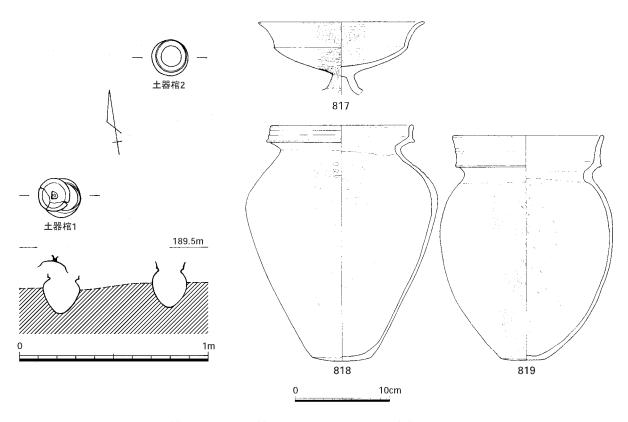
第223图 加工性建物 6(1/00

# 4 土器棺

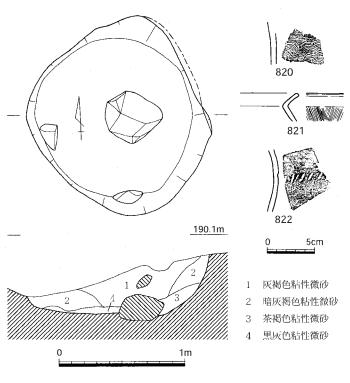
土器棺1・2 (第173・224図、図版35・50)

3 903De区で検出した。70cmほどの間隔をもって甕を正位に埋設しているが、その掘り方につい

では確認できなかった。土器棺1は上東・鬼川市Ⅲ式の甕818と高杯817、土器棺2は的場式の甕819を使用しており、後期後葉に位置づけられる。いずれも、この時期の土器棺としては異例の規模・構造であり、埋葬施設以外の用途も考えられる。 (亀山)



第224図 土器棺 1 ・ 2 (1/20)・出土遺物 (1/4)



第225図 袋状土壙15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

# 5 袋状土壙

**袋状土壙15**(第171・225図、図版 36)

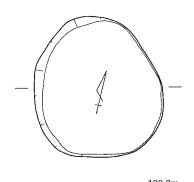
3806 C g 区に位置している、不整円形を呈する袋状土壙である。規模は長軸1.59m、短軸1.49m、深さ48cmを測る。断面形は逆台形であるが、削平が著しく残存状況は悪い。底面には礫がのぞいた状態であったと考えられる。出土遺物には壺820、甕821・822がある。820には外面に櫛描直線文・波状文が、822は外面にミガキと櫛描列点文が施される。遺物から、時期は弥生時代中期中葉であると考えられる。(團)

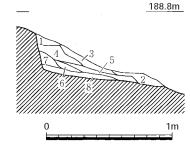
## 袋状土壙16 (第173・226・363図、図版36)

3903Dg区、微高地東端に位置していた。検 出面は第324図上段の13・15層上面あたりとみられ、河道7の埋没途中に掘り込まれた可能性が高いが、上部は西から東へ傾斜する形で弥生時代末から古墳時代初頭にかけての洪水で大きく削られていて確実ではない。遺物はなかったが、袋状土壙17の例や、層位から中期のものと考える。 (岡本)

## 袋状土壙17 (第173・227図、図版36)

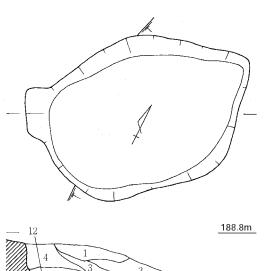
袋状土壙16から4m南に位置していた。検出面は袋状土壙16と同じで、やはり上部を洪水によって削られていた。平面形は楕円形を呈するようで、残存部分の長径で1.74mを測った。底面は小さな凹凸はあるもののほぼ平坦であった。土壙内の埋土は細かく分層が可能で、かなりの時間をかけて埋没したものとみられる。中期中葉の甕が出土し、層位的にも同期の土壙と考える。 (岡本)

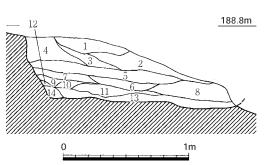


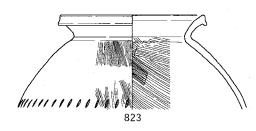


- 1 黄灰色細砂
- 4 灰黄褐色細砂
- 7 黄灰色粗砂
- 2 灰色細砂
- 5 暗灰黄色細砂
- 8 黄灰色細砂
- 3 黄灰色細砂
- 6 黄褐色細砂

第226図 袋状土壙16 (1/30)







0 10cm

- 6 黄灰色細砂
- 11 黒褐色細砂
- 褐灰色細砂7褐灰色細砂褐灰色細砂8灰色微砂
- 12 灰色微砂 13 灰色微砂
- 4 黄灰色細砂9 黒褐色細砂5 褐灰色細砂10 灰色微砂

黄褐色細砂

少 14 灰色細砂

第227図 袋状土壙17 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

#### 土塘 6

## 土壙58 (第171・228図、図版51)

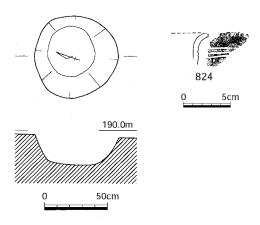
3806Cj区に位置している、円形の土壙である。規模は長軸67cm、短軸66cm、深さ25cmを測る。 断面形は逆台形である。出土遺物は獲824があり、口縁部下に3条の沈線を、口唇部に刻み目を施す。 土壙の時期は、弥生時代前期でも後半に属すると考える。 (團)

## 土壙59 (第172・229図)

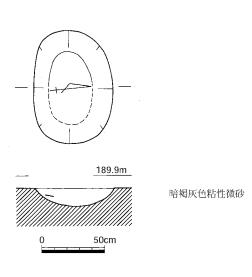
3809Cj区に位置する。平面楕円形を呈し、長軸90cm・短軸63cmを測る。断面形は擂鉢状を呈し、 検出面から底面まで15cmを測る。出土遺物は無く、時期・性格ともはっきりしないが、周辺の遺構・ 遺物の状況から、弥生中期の遺構と考えられる。 (佐藤)

#### 土壙60 (第172·230図)

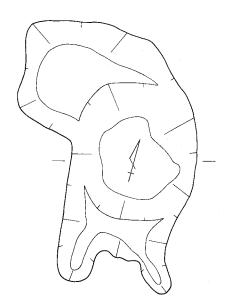
3808・09 Cj区に位置する。平面はいびつな楕円形 を呈し、検出面で長軸約2m・短軸約1mを測る。断面 形は、中央部分が階段状に窪んだ逆台形を呈し、検出面

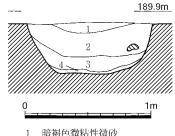


第228図 土壙58(1/30)・出土遺物(1/4)

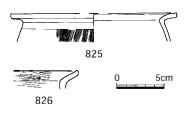


第229図 土壙59 (1/30)





- 暗褐色微粘性微砂
- 暗褐色粘性微砂
- 3 暗褐色粘質土
- 暗褐色粘質土 (黄褐色土混)



第230図 土壙60(1/30)・出土遺物(1/4)

から最深部までの深さ41cmを測る。遺構の性格ははっきりしないが、位置関係から竪穴住居9に関連する可能性もある。遺構の時期は、出土遺物から弥生中期中葉と考えられる。 (佐藤)

## 土壙61 (第172・231・232図、図版51)

3 8 09 Da区に位置する。平面長楕円形で、長軸2.96m・短軸1.24mを測る。断面形は逆台形で、検 出面からの深さ60cmを測る。出土遺物のうち、弥生土器827~833は、各器種の口縁部にヨコナデを施 すが、甕の内面下半にヘラケズリを行っていない段階のものである。鉄製品M10は、厚みから鋳造鉄

器の破片の可能性が考えられる。これ らの出上遺物から、遺構の時期は弥生 中期中葉古段階と考えられる。(佐藤)

## 土壙62 (第172・233図)

3900Da区に位置する土壙で、トレンチにかかって検出したため南半を確認したにすぎないが、本来は長さ約3m、幅1.6mの楕円形を呈するものと判断される。

深さ29cmの土壙内からは櫛描文や突帯を飾る壺834・835、口縁部をヨコナデする甕836のほか赤色顔料などが出土しており、弥生時代中期前葉新段階に位置づけられる。 (亀山)

## 土壙63 (第172・234図)

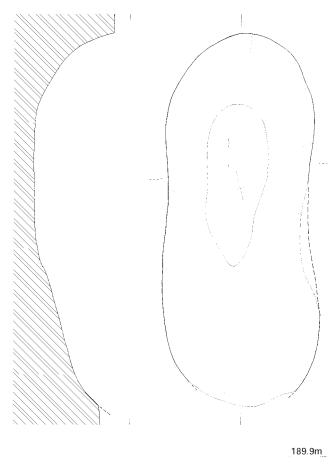
掘立柱建物3の西3.2mで検出した。 長軸1.1m、短軸82cm、深さ22cmの不 整楕円形を呈し、暗褐色をなす埋土の 上層から多量の礫とともに壺838や甕 839の底部が出土している。

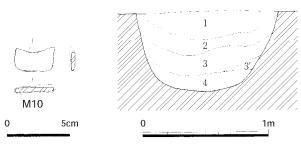
他の遺構と同じく、弥生時代中期前 葉~中葉に属する可能性が高い。

(亀山)

#### 土壙64 (第172・235図)

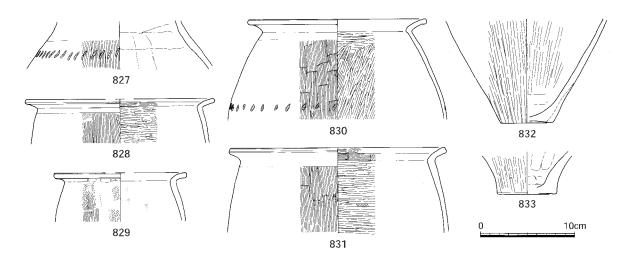
土壙63の南東2.5mで検出した土壙で、長軸1.5m、短軸66cmの南北に長い楕円形をなす。深さ14cmにある土壙底よりやや高い位置で人頭大の礫とともに小形の甕840が出土した。口縁部をヨコナデで調整しているが、体部の張りは弱く、弥生時代中期前葉新段階に比定される。 (亀山)



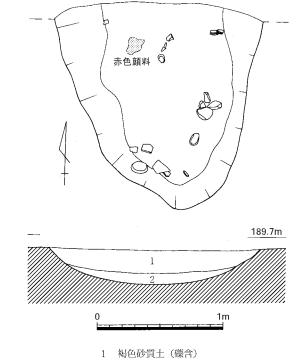


- 1 暗褐色砂質土(灰褐色砂質土斑混)
- 2 灰褐色砂質土(暗褐色砂質土斑混)
- 3 灰褐色砂質土(黒灰褐色砂質土混)
- 3 3より灰褐色砂質土が多い
- 4 暗灰褐色微粘性微砂

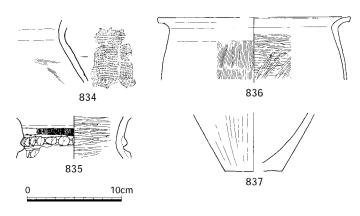
第231図 土壙61 (1/30)・出土遺物① (1/3)



第232図 土壙61出土遺物② (1/4)



- 暗褐色砂質上 (炭多含)



第233図 土壙62(1/30)・出土遺物(1/4)

## 土壙65 (第172·236図)

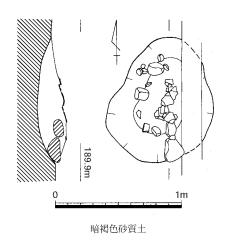
掘立柱建物3の西辺に重複して検出 した。長軸85cm、短軸42cmの楕円形を 呈し、深さは13cmを測る。検出面より 高い位置で大形スクレイパー(石包丁) S445が出土しているが、サヌカイト が入手困難な状況にあったことからす ると意図的に埋納されたものかもしれ ない。 (亀山)

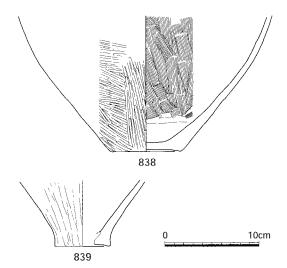
## 土壙66 (第172・237図)

掘立柱建物3の東辺に重複して検出 した楕円形の土壙で、土壙65と対にな る位置にある。長軸70cm、短軸41cm、 深さ13cmを測り、土壙内から肥厚した 口縁をもつ短頸壺841や口縁部をヨコ ナデする甕842が出土した。これらは 弥生時代中期前葉新段階~中葉古段階 に比定される。 (亀山)

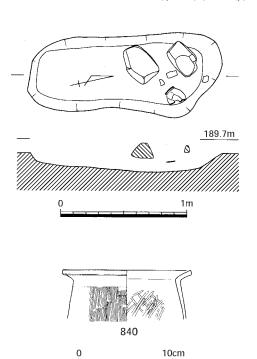
## 土壙67 (第172・238図)

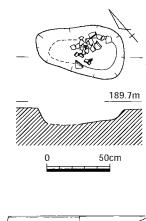
3902Da区に位置する土壙で、掘 立柱建物 4 の北東1.5mで検出した。 長軸72cm、短軸48cmの楕円形を呈し、 深さは18cmある。弥生土器の小片がわ ずかに出土したのみで詳しい時期は明 らかでないが、弥生時代中期前葉~中 葉に属する可能性が高い。 (亀山)

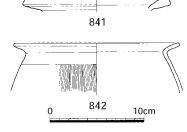




第234図 土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4)

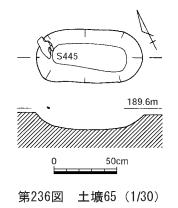


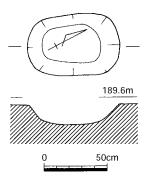




第235図 土壙64(1/30)・出土遺物(1/4)

第237図 土壙66 (1/30)・出土遺物 (1/4)





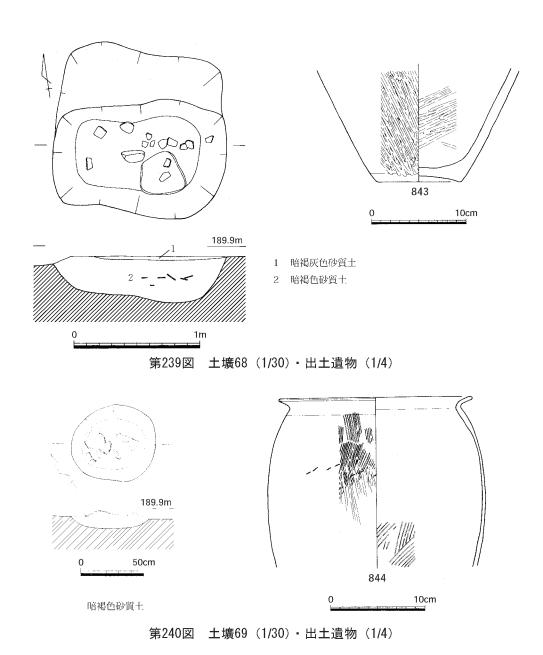
第238図 土壙67 (1/30)

## 土壙68 (第172・239図)

竪穴住居15の南1.3mで検出した土壙で、西側は溝14と重複している。長軸1.38m、短軸1.28mの方形を呈し、深さは37cmを測る。暗褐色をなす埋土から甕の底部843が出土しており、弥生時代中期前葉新段階~中葉古段階に位置づけられる。 (亀山)

## 土壙69 (第172·240図、図版51)

土壙68の東2.3mに位置する円形の土壙で、竪穴住居15の南1.4mで検出した。検出面で甕844が出土 したため精査を行い、長軸67cm、短軸60cm、深さ11cmの掘り方を想定した。844はヨコナデで調整す る短い口縁部と張りの弱い体部をもち、弥生時代中期前葉新段階に比定される。 (亀山)



土壙70(第172・241図)

竪穴住居15の南東2mで検出した土壙で、土壙69の東40cmに位置する。長軸73cm、短軸72cmの不整円形を呈し、深さは13cmを測る。わずかに出土した土器は小片のため詳細は不明であるが、他の遺構

(亀山)

と同じ弥生時代中期前葉~中葉と見て差し支えないものと思われる。

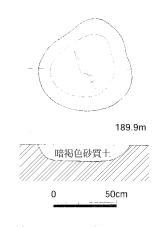
## 土壙71 (第172・242・243凶、凶版51)

掘立柱建物1の南辺に重複して検出した、長軸4.1m、短軸1m、深さ17cmを測る舟形土壙である。

土壙内から整理箱 2 箱ほどの弥生土器が出土した。845は 屈曲する口頸部に突帯をめぐらし、なだらかな肩部を櫛描文 で飾る。846は筒状の頸部から水平に開く口縁端部を肥厚さ せ櫛描文を飾る広口壺である。甕は大形と小形があるが、 いずれもく字形の口縁部はヨコナデする。弥生時代中期前 葉の新段階に位置づけておきたい。 (亀山)

#### 土壙72 (第172・244図)

土壙71の北東4.8mで検出した土壙で、3909Dc区に位置する。南側を失っているが長軸1.3m、短軸74cm、深さ20



第241図 土壙70(1/30)

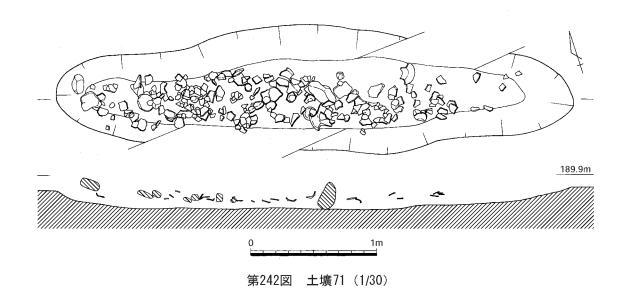
cmの楕円形に復元される。土器の小片が出土したのみで詳細な時期は知り得ないが、周辺の遺構と同じ弥生時代中期前葉~中葉と見て大過ないものと思われる。 (亀山)

#### 土壙73 (第172・245図)

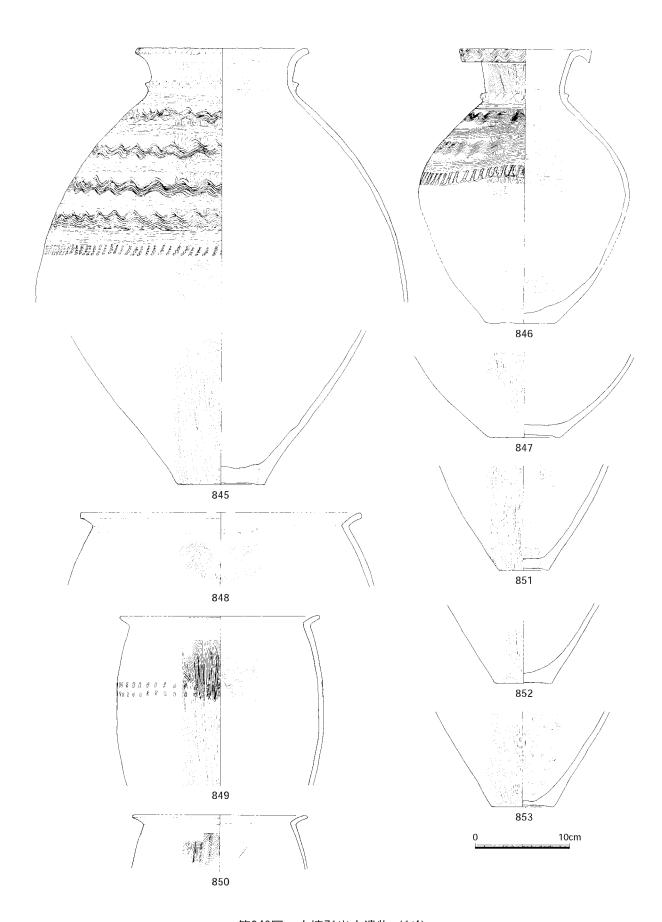
土壙71の東40cmで検出した長軸1.36m、短軸95cm、深さ13cmの隅丸方形を呈する土壙で、3909Dc区に位置する。出土遺物は少ないが、他の遺構との関係から弥生時代中期前葉~中葉と推定される。 (亀山)

#### 土壙74 (第172・246図)

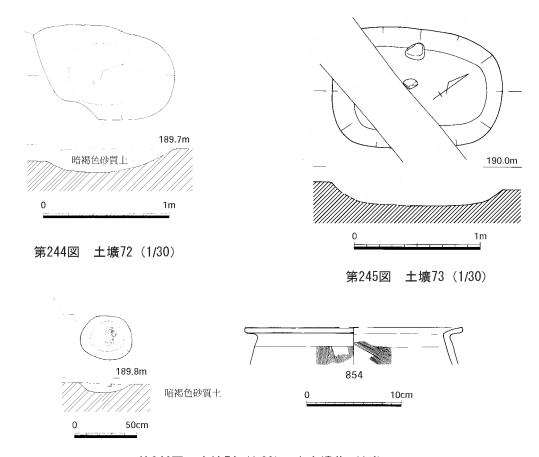
土壙71の南2.4mで検出した土壙で、3900Db区に位置する。長軸41cm、短軸36cmの円形を呈し、深さ7cmの断面は皿形をなす。暗褐色をなす埋土からは甕854が出土しており、弥生時代中期前葉新段階と考えられる。 (亀山)



-169 -



第243図 土壙71出土遺物 (1/4)



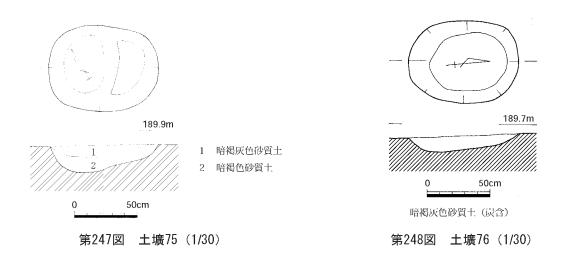
第246図 土壙74 (1/30)・出土遺物 (1/4)

## 土壙75 (第172・247図)

3 9 00 Db区に位置する楕円形の土壙で、土壙74の東70cmで検出した。長軸87cm、短軸69cmを測り、深さ22cmにある底面は北西が一段低くなっている。土器片が少量出土しており、弥生時代中期前葉~中葉に属するものと思われる。 (亀山)

## 土壙76 (第172・248図)

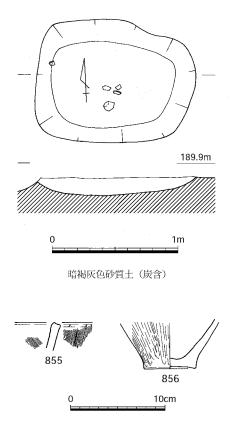
土壙75の東1.8mで検出した。3900Dc区に位置するこの土壙は、長軸88cm、短軸64cmの楕円形を呈し、深さは15cmを測る。遺物は図化できなかったが少量の土器が出土しており、弥生時代中期前葉



~中葉と見られる。 (亀山)

## 土壙77 (第172・249図)

掘立柱建物2の北東に接して検出された土壙で、土壙76の南1.9mに位置する。隅丸方形を呈する 上面は長軸1.26m、短軸97cmを測り、深さは13cmと浅い。炭を含む埋土からは壺855や甕856の小片が 出土しており、弥生時代中期前葉新段階~中葉古段階と推定される。 (亀山)



第249図 土壙77(1/30)・出土遺物(1/4)

#### 土壙78 (第172・250図)

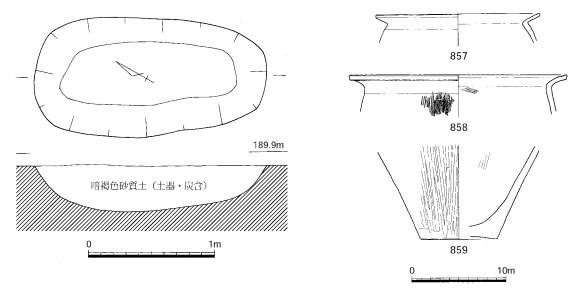
土壙77の東2.2mで検出した土壙で、水田1の肩口に位置している。長軸1.84m、短軸95cmの楕円形を呈し、深さは36cmある。埋土からは甕857・858が出土しているが、いずれもく字形の口縁部をヨコナデで調整する。また、底部859は厚いつくりで、弥生時代中期前葉新段階に比定される。 (亀山)

## 土壙79 (第172·251図、図版51)

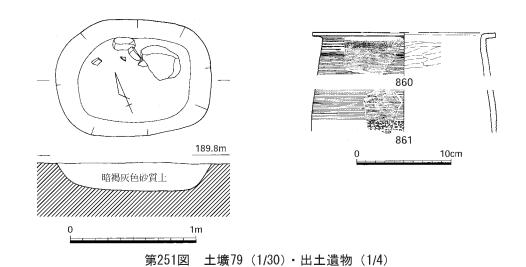
土壙78の南4.3mで検出した、長軸1.22m、短軸92 cm、深さ22cmの楕円形を呈する土壙で、その北東側は溝18と重複している。埋土から出土した甕860・861は同一個体と見られ、倒L字形をなす口縁直下に多条の櫛描沈線文を飾る。弥生時代中期前葉古段階に位置づけられる。 (亀山)

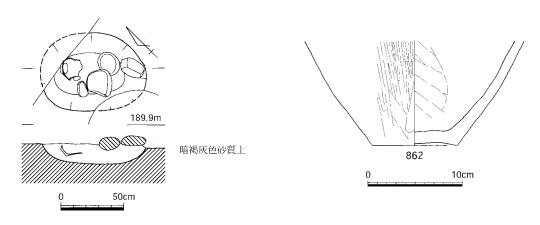
#### 土壙80 (第172·252図)

土壙79の北東3.1mで検出した楕円形の土壙で、 長軸約80㎝、短軸61㎝、深さ15㎝に復元される。土 壙の南東側上層には人頭大の礫が重なり、北西側下 層からは壺の底部862が出土した。弥生時代中期前



第250図 土壙78 (1/30)・出土遺物 (1/4)





第252図 土壙80(1/30)・出土遺物(1/4)

葉新段階と推定される。 (亀山)

## 土壙81 (第172・253・254図)

土壙80の東80cmで検出した。長軸1.15m、短軸75cmの楕円形を呈する土壙で、深さは17cmを測る。暗褐灰色をなす埋土からは櫛描文を飾る鉢863やく字形の口縁部をヘラミガキないしはヨコナデする 甕864・865が出土しており、弥生時代中期前葉の新段階

(亀山)

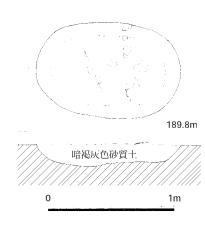
## 土壙82(第172・255図)

に位置づけられる。

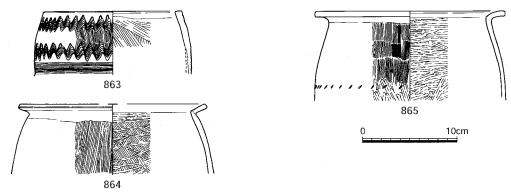
竪穴住居18の北西1 mで検出した土壙で、3901Dc 区に位置する。南側を失っているが、長軸約1.2m、短軸1.01mの不整楕円形に復元される。深さは32cmあり、暗褐灰色の埋土からく字形の口縁部をヨコナデする中形の甕866が出土している。弥生時代中期前葉新段階~中葉古段階に比定される。 (亀山)

## 土壙83 (第172·256図)

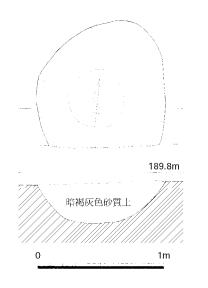
3 901 Dc区に位置する土壙で、土壙82の北東90cmで検

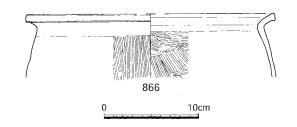


第253図 土壙81 (1/30)



第254図 土壙81出土遺物 (1/4)



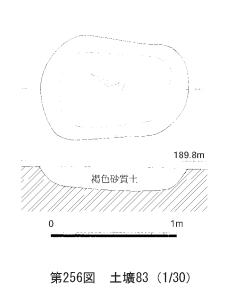


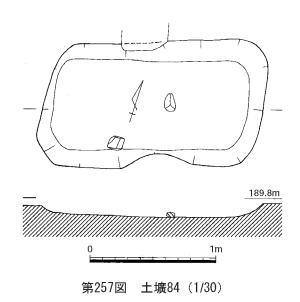
第255図 土壙82 (1/30)・出土遺物 (1/4)

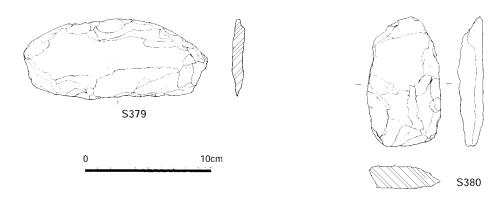
出した。長軸1.18m、短軸83cmの楕円形を呈し、深さは 18cmを測る。土壙内に堆積した暗褐灰色砂質土からは、 弥生土器の小片がわずかに出土している。周辺の遺構と の関係から弥生時代中期前葉~中葉に属するものと思わ れる。 (亀山)

土壙84 (第172・257・258図、図版51)

掘立柱建物2の西辺に重複して検出した、長軸1.75m、短軸1mの長方形を呈する土壙である。深さは11cmと浅い。出土遺物には少量の弥生土器のほか、緑色片岩製石器が2点出土している。S379







第258図 土壙84出土遺物(1/3)

は粘板岩製の石包丁未成品で、長さ10.7cm、幅6.4cm を測る。S380は石鍬で縄文時代まで溯る可能性が ある。 (亀山)

## 土壙85 (第172·259図)

竪穴住居17の北西30cmで検出した土壙で、北側を確認できなかったが、現状で長軸1.01m、短軸56cm、深さ11cmを測る。遺物は図示していないが弥生土器が少量出土しており、弥生時代中期前葉~中葉に属するものと思われる。 (亀山)

#### 土壙86 (第172·260図、図版51)

溝14と重複して検出した土壙で、竪穴住居16の東30cmに位置する。調査区境にかかって検出したため全形は明らかではないが、長軸70cm、短軸50cmほどの楕円形をなすものと想定される。人頭大の礫とともに壺の肩部867が出土しており、弥生時代中期前葉新段階に比定される。 (亀山)

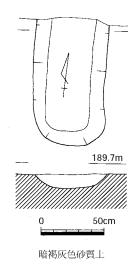
## 土壙87 (第172·261図、図版51)

竪穴住居17の南東で検出した南北に長い溝状の土 壙で、長軸2.6m、短軸55cm、深さ15cmを測る。

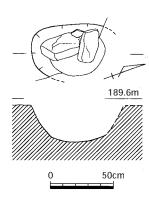
中央付近にまとまって中形の甕868~870が出土している。いずれもく字形の口縁部をヨコナデで調整しており、底部は厚いつくりとなっている。弥生時代中期前葉新段階のものであろう。 (亀山)

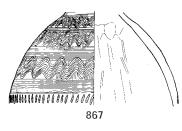
## 土壙88 (第172・262図)

竪穴住居18の南90cmで検出した土壙で、3902Dc区に位置する。北西側を失っているが長軸1.6m、短軸89cm、深さ23cmの東西に長い長方形に復元される。出土遺物は弥生土器がわずかに出土したのみで

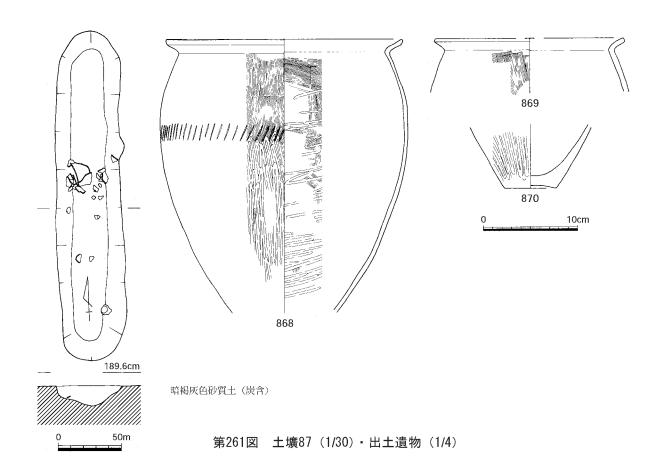


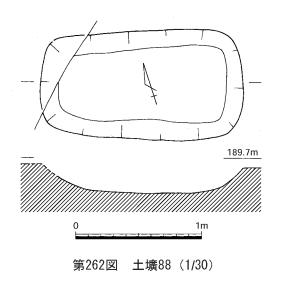
第259図 土壙85 (1/30)





第260図 土壙86(1/30)・出土遺物(1/4)





詳細な時期は不明であるが、周辺遺構と同じ弥生 時代中期前葉~中葉と思われる。 (亀山)

## 土壙89 (第172・263図)

土壙88の西に接して検出した、長軸2.02m、短軸1.34mの楕円形を呈する土壙で、深さは49cmある。上部は崩壊してすり鉢形をなすが、下部は急傾斜となって海抜189.1mの底面につながる。埋土の下層からは肥厚した口縁をもつ広口壺871や口縁部にミガキを施す甕が出土しており、弥生時代中期前葉~中葉に位置づけられる。 (亀山)

## 土壙90 (第172·264図)

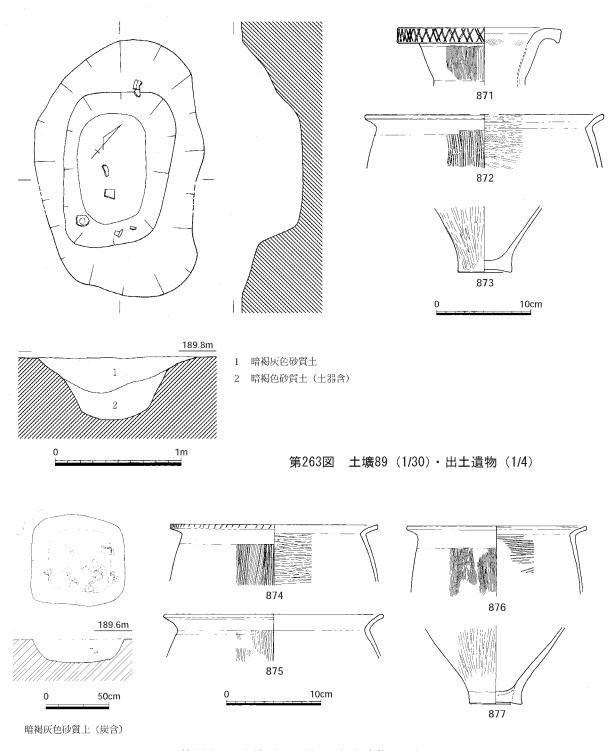
竪穴住居22の北西1.8mで検出した土壙で、長軸74cm、短軸72cmの方形をなす。深さは17cmあり、

暗褐灰色の埋土からは甕874~877が出土した。く字形の口縁はいずれもヨコナデするが、体部の張りは弱く、底部も厚くつくられている。弥生時代中期前葉の新段階と思われる。 (亀山)

#### 土壙91 (第172·265図)

土壙90の南西に接して検出した。長軸1.05m、短軸70cmの楕円形を呈する土壙で、深さは15cmを測る。遺物は図示していないが土器の小片が出土しており、弥生時代中期前葉~中葉と考えられる。

(亀山)



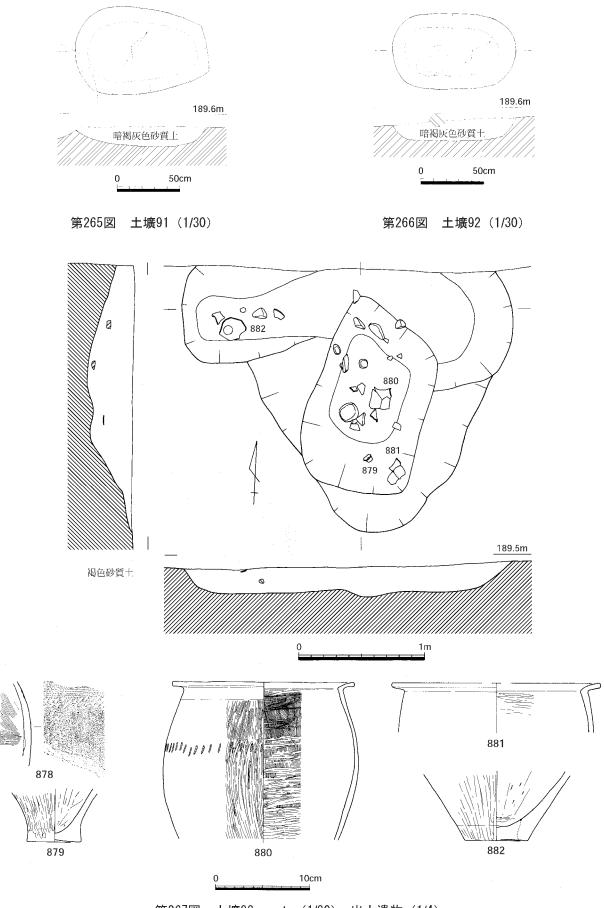
第264図 土壙90(1/30)・出土遺物(1/4)

## 土壙92 (第172・266図)

竪穴住居22の北50cmに位置する楕円形の土壙で、長軸99cm、短軸59cm、深さ16cmを測る。弥生土器が少量出土したのみで詳細な時期は不明であるが、埋土の特徴などから土壙91と近似した時期と判断される。 (亀山)

## 土壙93 (第172・267図)

竪穴住居22の南西1.8mで検出した。不整形の土壙として検出したが、底面の状況からすると2基



第267図 土壙93a・b(1/30)・出土遺物(1/4)

の土壙が重複したものと判断される。93 a は東西に長い楕円形で長軸2.6m、短軸1.2m、深さ20cmを 測る。これを切る93 b は長軸1.5m、短軸92cmの南北に主軸をもつ不整方形で、深さは29cmある。93 a から ${8879}$ ~881が、93 b から ${8882}$ が出土している。いずれも口縁部はヨコナデで調整しており、弥生時代中期前葉新段階と推定される。 (亀山)

## 土壙94 (第172·268図、図版52)

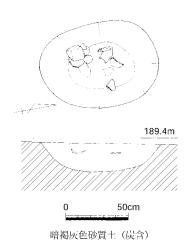
3 902Dc区に位置する土壙で、竪穴住居22の東2.7mで検出した。長軸94cm、短軸68cmの楕円形を呈し、深さは22cmある。土壙内に堆積した暗褐灰色砂質土から、すぼまる口頸部に櫛描文を飾る壺883やく字形の口縁部をヨコナデする甕884、上器片加工の紡錘車C62、叩き石S381が出上しており、弥生時代中期前葉の新段階と考えられる。 (亀山)

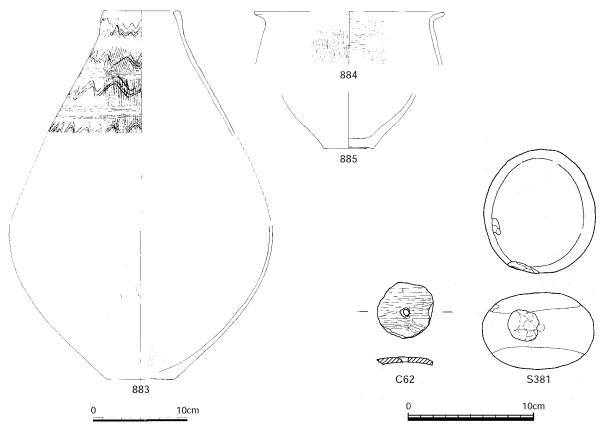
## 土壙95 (第172・269図)

土壙94の北西1.9mで検出した。北西側を失っており全形を知り得ないが、現状で長軸1.1m以上、短軸80cmの隅丸方形を呈し、深さは11cmと浅い。出土遺物は少なく時期を知る手掛かりに乏しいが、他の遺構との関係から弥生時代中期前葉~中葉と推定される。 (亀山)

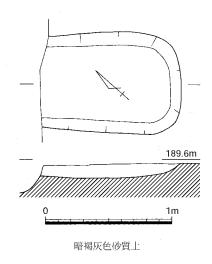
## 土壙96 (第172・270図)

土壙94の北東2.7mで検出した長軸1.93m、短軸74cmの 長楕円形を呈する土壙で、3902Dd区に位置する。深さ





第268図 土壙94(1/30)・出土遺物(1/4,1/3)

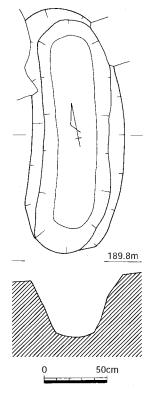


第269図 土壙95 (1/30)

50cmある断面はU字形をなす。その形状から埋葬施設の可能性 も考えられるが、それを具体的に証拠だてるものは見つかって いない。埋土から少量の土器片が出土しており、弥生時代中期 前葉~中葉と思われる。 (亀山)

## 土壙97 (第172·271図、図版52)

3 903Dc区に位置する土壙で、土壙94の南3.3mで検出した。

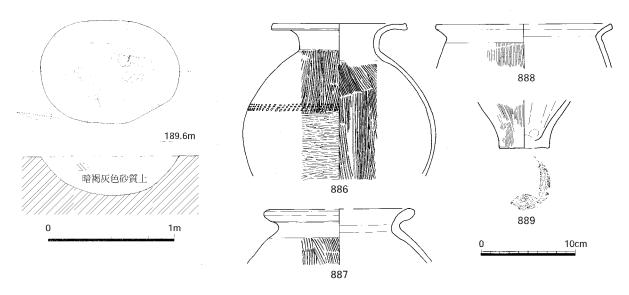


第270図 土壙96 (1/30)

長軸1.1m、短軸81cmの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。886は筒状の頸部から水平に開く口縁部をもつ広口壺で、丸みをおびた体部の中程には刺突文をめぐらす。888はく字形の口縁部をヨコナデする甕で、弥生時代中期中葉の古段階に位置づけられる。 (亀山)

#### 土壙98 (第174·272図)

土壙97の南西4mで検出した、長軸92cm、短軸62cmの楕円形を呈する土壙で、深さは18cmある。海抜188.9mの底面北西側からは人頭大の礫が検出された。遺物は図示できなかったが、弥生土器の小片が出土しており、弥生時代中期前葉~中葉と推定される。 (亀山)



第271図 土壙97 (1/30)・出土遺物 (1/4)

#### 土壙99 (第172・273図)

土壙96の南東8.7mで検出した土壙で、3903Dd区に位置する。長軸71cm、短軸64cmの円形を呈し、深さ14cmある土壙内には人頭大の礫が詰め込まれていた。土器片が少量出土したにすぎないが、弥生時代中期前葉~中葉と見て大過ないものと思われる。 (亀山)

## 土壙100 (第173・274図)

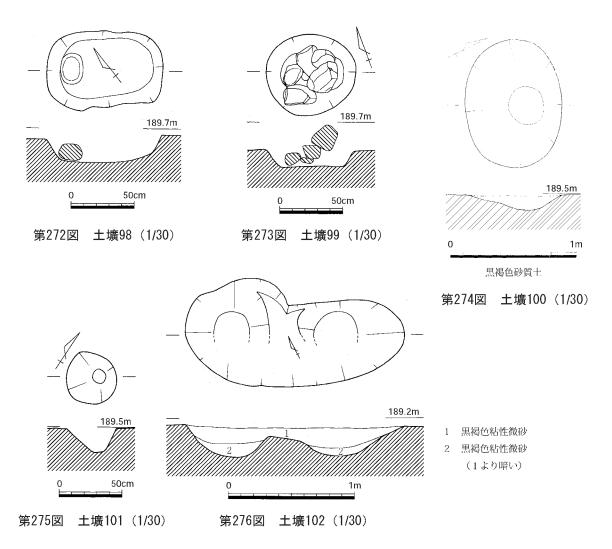
3902Df区に位置する土壙で、竪穴住居20の東16.5mで検出した。長軸1.02m、短軸78cmの楕円形を呈し、深さ11cmある断面はすり鉢形をなす。黒褐色の埋土から出土した土器片はわずかで、時期については判断しがたいが、他の遺構と同じ弥生時代中期前葉~中葉と想定しておきたい。 (亀山)

## 土壙101 (第173・275図)

土壙100の南7.8mで検出した土壙で、3903Df区に位置する。径40cm、深さ18cmの円形を呈する小形のピットである。遺物は図示できなかったが、埋土から弥生土器が少量出土しており、弥生時代中期前葉~中葉と判断される。 (亀山)

#### 土壙102 (第173·276図)

3 9 07 De区の河道 2 埋没部分に位置する。水田層とみられる土層を一部掘り下げた段階で検出されたため、水田層の上面(洪水砂層下面)から掘り込まれていた可能性も否定できない。不整形な土壌で、二つの穴からなるが、一時に埋まっている。遺物はなく、層位から後期以降のものか。(岡本)

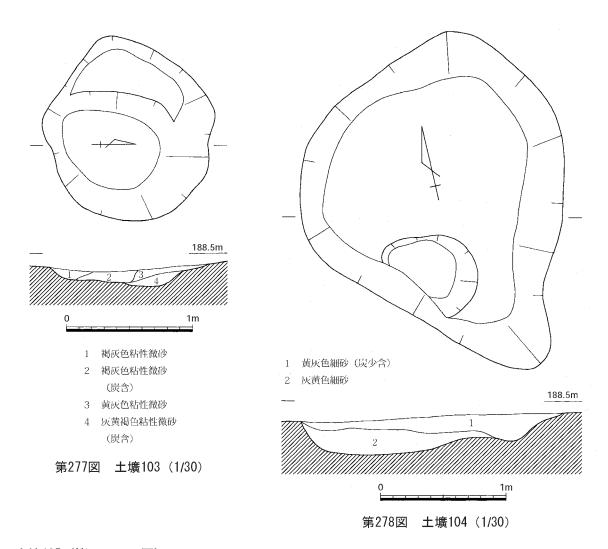


## 土壙103 (第173・277図、図版38)

3 9 06 Dh区にあり、河道 7 の西側肩口から一段下りた河道内の平坦部で検出された。検出面は河道 7 の最終段階での底部堆積層上面にあたる。平面形は不整形な楕円形で、底部は二段構造になっていた。底面はいくらか凹凸をもっていた。出土遺物はないが、層位から中期のものと考える。(岡本)

## 土壙104 (第173・278図、図版38)

土壙103から南5mほどに位置する。やはり河道内の平坦部にあり、検出面も同じである。不整形な大形の土壙で、長径は2.78mを測る。底面には凹凸があり、南端に長径80㎝の浅い窪みが伴っていた。埋上は2層で、出土遺物はない。層位から判断して中期の上壙と考える。 (岡本)

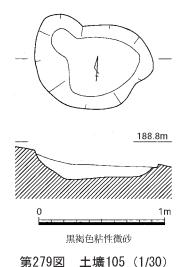


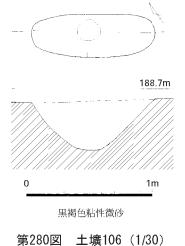
## 土壙105(第173・279図)

3 9 06 Dh区の微高地東斜面に位置する。弥生時代末から古墳時代初頭にかけての洪水砂層を除去し、その下の水田層とみられる土層を一部掘り下げた段階で検出した。平面形は不整円形で、長径は94cmを測った。底面はほぼ平坦である。遺物はなかったが、層位から後期のものと考える。(岡本)

#### 土壙106 (第173·280図)

3 9 07 Dg区のやはり微高地東斜面に位置する。検出面も土壙105と同じで、水田層を一部掘り下げて検出された。平面形は長楕円形で、長径が98cm、短径は35cmを測った。断面形はV字状を呈し、底面は狭かった。出土遺物はみられなかったが、層位から判断して後期のものと考える。 (岡本)





7 火処

#### 火処9 (第172・281図)

水田1を掘り下げる過程で検出したもので、掘立柱建物1の北東隅に接する位置にある。43×35cmの範囲に淡赤橙色の焼土が散在する。被熱の弱い焼土が地山に浸潤したような状況で、本来の被熱面は海抜189.9mの検出面より上位にあったものと推定される。時期については明らかではないが、掘立柱建物1に後出する。 (亀山)

## 火処10 (第172・282図)

掘立柱建物2の北0.5mで検出した。焼土が80×45cmの範囲に散布しており、赤橙色をなす焼土の被熱は強い。火処9と同様に焼土が地山に浸潤したような状況で、海抜189.9mの検出面より上位にあった被熱面は水田により削平されたものと推定される。弥生時代中期前葉~中葉の遺構群に関連するものと思われる。 (亀山)

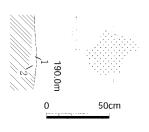
## 火処11 (第172・283図)

掘立柱建物2の東1.5mで検出した、62×54cmの円形を呈する被熱痕跡である。検出面の海抜高は189.9mを測り、赤橙色をなす上面は固く焼きしまっている。時期を判断する手掛かりに乏しいが、やはり弥生時代中期前葉~中葉の遺構群との関連を想定したい。

(亀山)

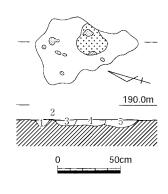
## 火処12 (第172・284図)

掘立柱建物2の南に重複して検出した焼土の広がりで、南側を切られているが、その範囲は現状で67×55cmを測る。火処9・10と同様に被熱面が削平された痕跡と見られ、地山に浸潤した焼土の被熱は弱い。掘立柱建物2との関連を証拠だてるものはないが、弥生時代中期前葉~中葉と見て大過ないものと思われる。 (亀山)



- 1 淡赤橙色上
- 2 褐灰色上

第281図 火処9 (1/30)



- 1 暗褐色上
- 2 赤橙色土
- 3 暗褐色土
- 4 褐灰色土
- 5 暗褐色土

第282図 火処10 (1/30)

#### 火処13 (第172・285図)

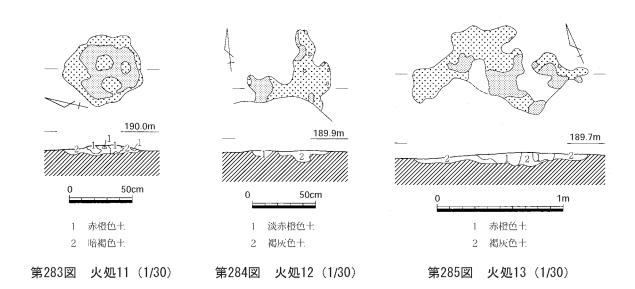
竪穴住居18の南西0.4mで検出した被熱痕跡である。赤橙色をなす焼土が1.39×0.55mの範囲に広がっており、上面の海抜高は189.8mを測る。被熱はやや弱く、幾分かの削平を受けている可能性はある。他の火処と同様に、弥生時代中期前葉~中葉と推定される。 (亀山)

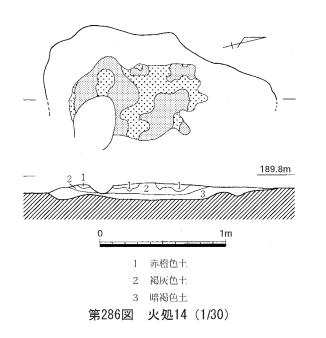
## 火処14 (第172・286図)

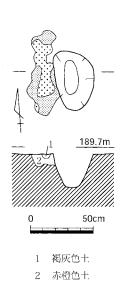
竪穴住居17の南西2.2mで検出した。1.12×0.61mの楕円形に広がる焼土は赤橙色を呈し、海抜189.7mを測る上面は固く焼けしまっている。弥生時代中期前葉~中葉の遺構群と関連する可能性が高い。 (亀山)

## 火処15 (第172・287図)

竪穴住居22の南東隅に切られるように検出した被熱面で、海抜189.6mを測る。現状で68×27cmの 範囲に広がる焼土の被熱は強く赤橙色をなす。竪穴住居22との関係からして弥生時代中期前葉まで溯 る可能性がある。 (亀山)





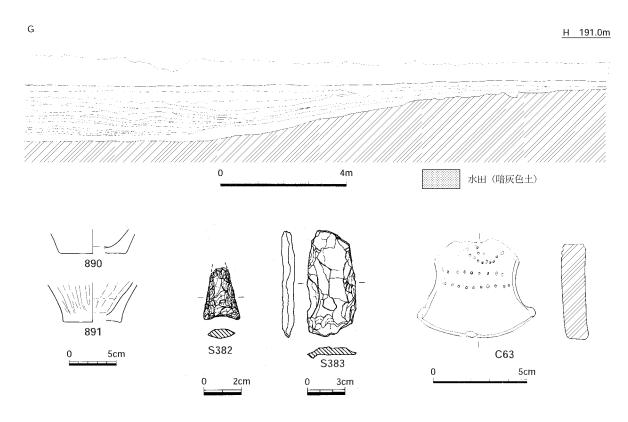


第287図 火処15 (1/30)

## 8 水田

## 水田1 (第172~174・288図、図版37・52)

確認調査の土層観察や花粉分析の結果からその存在が指摘されていたもので、縄文時代の河道2が埋積した窪みを利用して開かれており、東側の肩口を94mにわたって検出したが西や南への広がりについては確認できなかった。水田層と見られる暗灰色土は縄文時代~弥生時代中期の基盤となる暗褐色土上に厚さ30cmほど堆積しており、その下部には酸化鉄の沈着が認められた。幹線水路の溝13から取水し、溝14・16・17・20によって配水されていたものと思われるが、畦畔が検出されておらず具体的な状況は明らかでない。出土遺物から弥生時代後期前半に機能していたものと思われる。 (亀山)



第288図 水田 1 (1/120)・出土遺物 (1/4, 1/2, 1/3)

## 9 溝

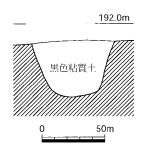
## 溝3 (第170・289図)

3609Ea区から3702Ec区において検出した溝で、全長約30mを検出した。幅は70cm $\sim 1$ mで、深さは約50cm残存していた。断面形はU字形で、埋土は一層のみであった。

遺物は殆ど出土しなかったが、埋土の状況や溝4に切られている ことから、時期は弥生時代と考えられる。 (平井泰男)

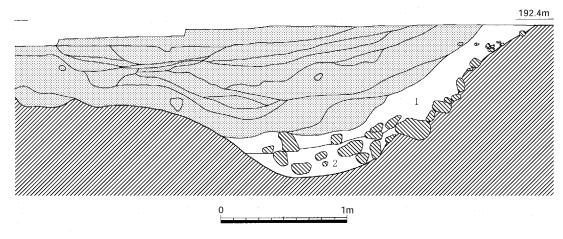
溝4 (第170・290~292図、図版53・54)

3602Dg区から3702Ec区に位置する。この地区は久田原遺跡

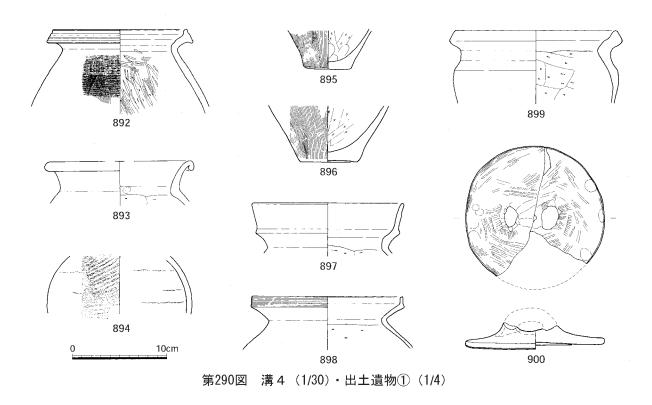


第289図 溝3 (1/30)

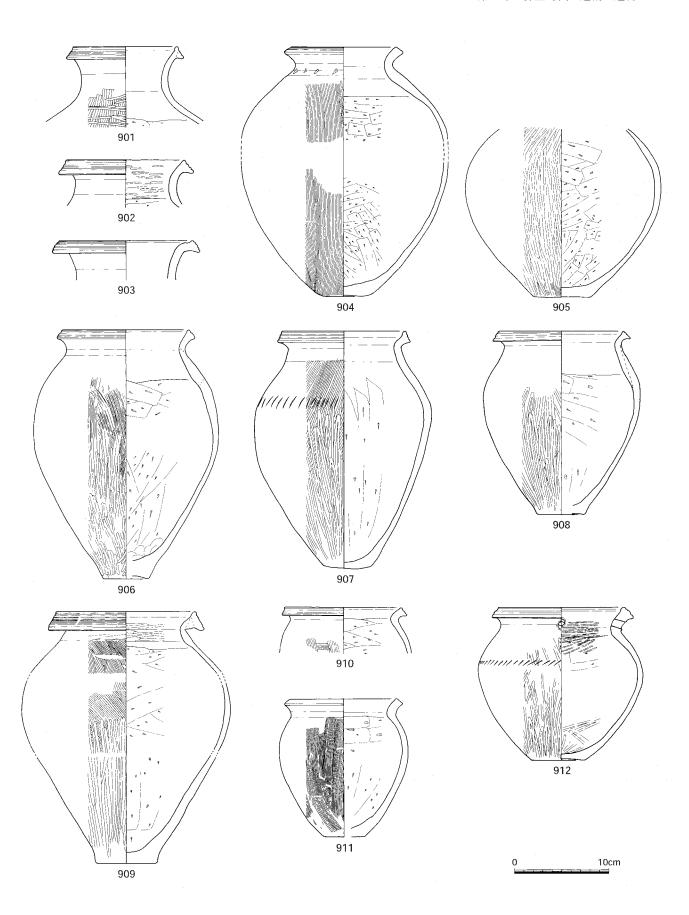
の北東端部に位置しており、この北東隣には地形的に一段高い河岸段丘が広がっている。この河岸段丘上には弥生時代から中世・近世に至る複合遺跡である夏栗遺跡が存在しており、溝4はこの夏栗遺跡西南部の地形に沿って自然に形成された窪地といった性格であろうと考えている。幅は約5~10mで、深さは約1.7m、全長は120m残存していた。図示した断面図では、東側が一段高い夏栗遺跡の所



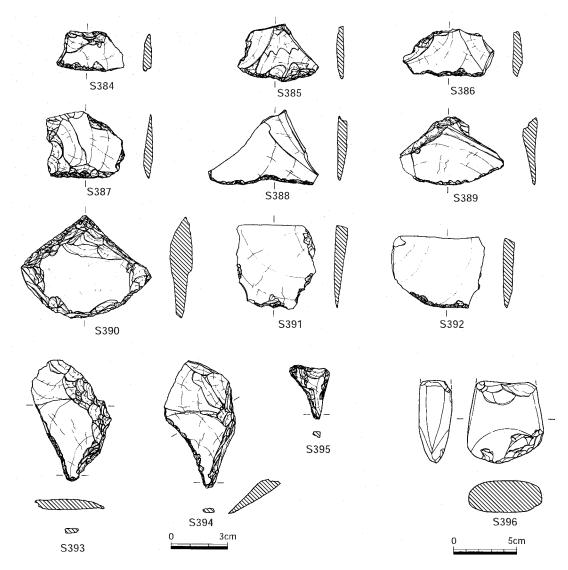
1 黑色粘質土 2 淡黑茶褐色弱粘質土



在する河岸段丘にあたり、最下層にはあたかも落ち込んだように多数の礫が埋没していた。また、底部には、幅 $1\sim2$  mの溝状のくぼみが確認できており、底部には常時ではないものの水が流れていた可能性が考えられる。弥生時代に堆積したのは図の $1\cdot2$ 層で、その上層は古墳時代から古代・中世の堆積層である。出土した土器には時期幅があるが、最下層( $901\sim912$ )には後期前半の土器が多い傾向が認められた。土器・石器とも夏栗遺跡からの流入品であろう。



第291図 溝4出土遺物② (1/4)



第292図 溝4出土遺物③ (1/2, 1/3)

## 溝5 (第171・293図)

3803 C i 区から 3802 C g 区にかけて検出した幅の狭い溝で、緩やかに湾曲した弧を描いていた。 計測した地点での幅は57cm、深さは10cmを測り、断面形が浅い「U」字形で、内部に褐色砂が堆積していた。この溝の周辺には遺構が存在しないが、弥生時代に属するのは確実である。 (福田)

## 溝6 (第175・294図、図版37・53)

3807 C c 区から 3809 C b 区にかけて検出した溝で、南西端部が溝 7 と交差していた。計測した地点での幅は 54 cm、深さは 17 cm を 測り、断面形が浅い「U」字形で、内部に暗褐色を呈する砂質土が堆積していた。出土遺物として 913 ~ 916 の土器片があり、中期後葉に比定される。 (福田)

## 溝7 (第175・295図、図版37)

3809Cb区から3809Cc区にかけて検出した溝で、ほぼ東から西の方向を示していた。計測した地点での幅は78cm、深さは20cmを測り、断面形が浅い「U」字形で、内部に暗褐色砂質土が堆積していた。この溝は前述した溝6を切っていたので、溝6よりも新しいことが判明した。 (福田)

#### 溝8 (第175・296図)

調査範囲西端の吉井川に面した3901Bj区から3903Bj区にかけて検出した溝で、南側は幅が広

くなって河道6に切られていた。計測した地点での幅は1.58m、深さは27cmを測り、断面形が浅い「U」字形で、内部に暗褐色砂質土、灰褐色粘性微砂、灰褐色砂質土が層をなして堆積していた。 (福田)

## 溝9 (第175·297図)

3902Cd区から3904Cc区にかけての窪地1の東側に検出した溝で、「く」字形を描いて湾曲していた。計測した地点での幅は60cm、深さは17cmを測り、断面形が浅い「U」字形で、内部に暗褐色砂質土と灰褐色粘性微砂が堆積していた。出土遺物としては図示できない土器片があり、中期に属すると思われる。(福田)

#### 溝10 (第172・298図)

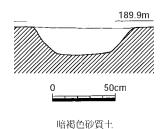
3809 C j 区に位置し、微高地に平行して南北に主軸をとる。検出面での規模は、長さ7.8 m・幅45 cmで、断面形は逆台形を呈し、深さ12 cmを測る。出土遺物は無く、時期ははっきりしないが、周辺の状況から、弥生中期の遺構と考えられる。 (佐藤)

## 溝11 (第172·299図)

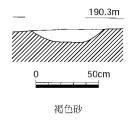
3809 Cj~3900 Da区に位置する。溝13から派生するような形で微高地を斜行し、南西端は土壙状に広がっている。検出面で、長さ約17 m・幅83cmを測り、断面は逆台形で深さ13cmを測る。出土遺物は無く、時期ははっきりしないが、周辺の状況から、弥生中期の遺構と考えられる。 (佐藤)

#### 溝12 (第172・300図)

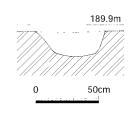
3809 Cj~3900 Da区に位置する。溝11にほぼ平行し、微高地を斜行する。検出面で、長さ約12m・幅68cmを測り、断面は逆台形で深さ15cmを測る。出土遺物には、弥生土器917~921がある。これらから、弥生中期中葉の遺構と考えられる。 (佐藤)



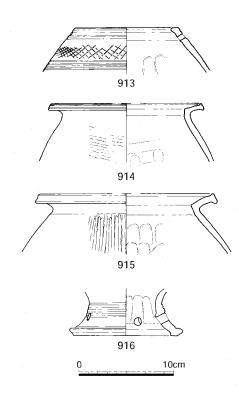
第295図 溝7 (1/30)



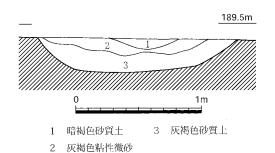
第293図 溝5 (1/30)



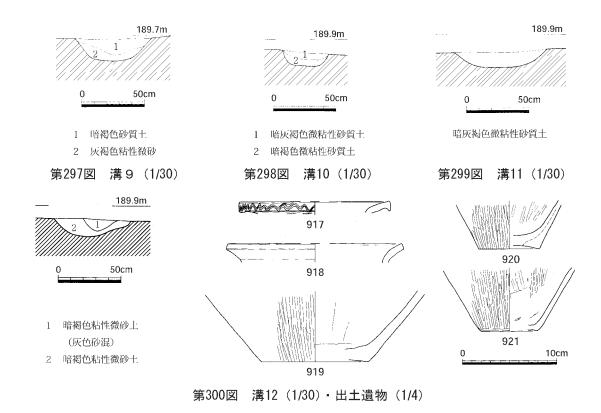
暗褐色砂質土



第294図 溝6 (1/30)・出土遺物 (1/4)



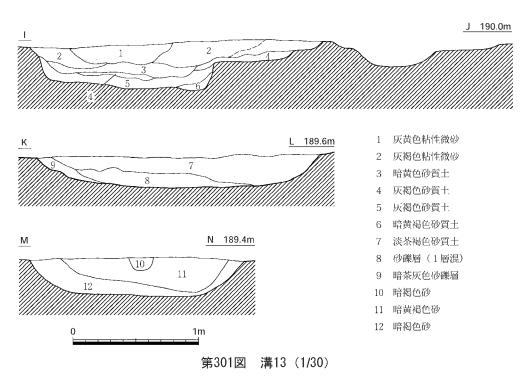
第296図 溝8 (1/30)



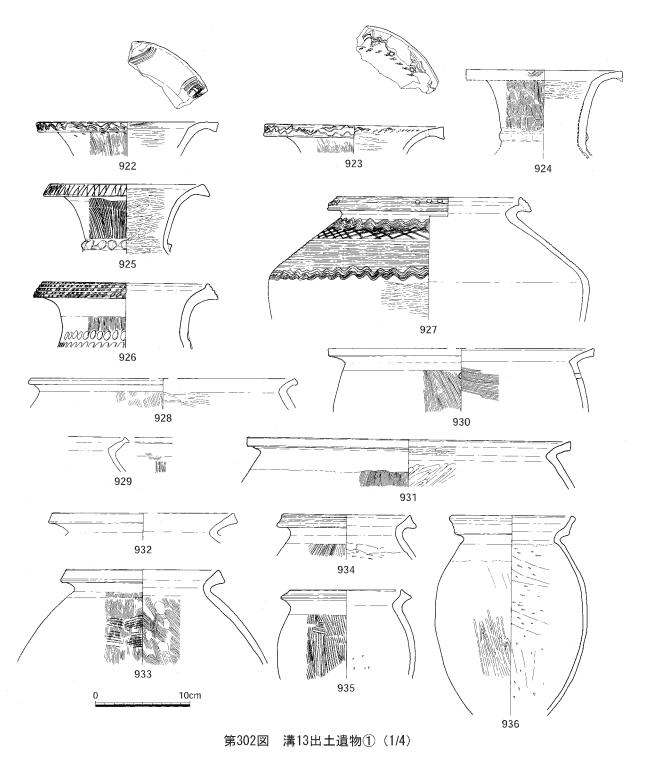
**溝13** (第172・174・301~303図、図版37・38・54)

遺跡全体のほぼ中央から南南西の方向に向けて流れる溝で、水田層から掘り込まれていた。長さ約140mにわたって検出しているが遺跡北部では洪水砂によって削平されたと考えられ、また南部では 久田原遺跡と久田堀ノ内遺跡とを画する河道に流れ込んでいたとみられる。

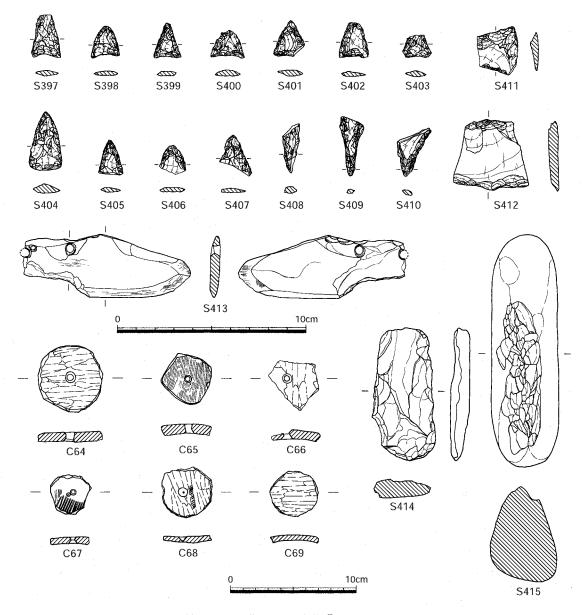
この溝は、3909Db区あたりでその幅を減じており、その辺りの底面には無数の杭の痕跡がみつ



かっている。また、東側に併走する溝14でも底面にも水流によって生じた土壙状のえぐれが存在した。つまりこの部分に堰が想定でき、溝16・17を使って水を東側の溝14に配し、そこから水田へと水を配る水路として機能していたと思われる。幾度かの改修が行われており(第300図の $1\sim3$ 層)、上層からは、後期前葉から末葉にかけての土器 $934\sim936$ が出土しているが、底面に密着して出土した927から掘削の時期は、中期後葉にまでさかのぼると思われる。土器以外にも、サヌカイト製石鏃 $S397\sim407$ 、石錐 $S408\sim410$ 、楔 $S411\cdot412$ や石包丁S413、緑色片岩製の石斧S414や自然礫の側縁を敲打するS415や土器片を転用した紡錘車もしくは未製品の $C64\sim69$ がある。(弘田)



-191 -



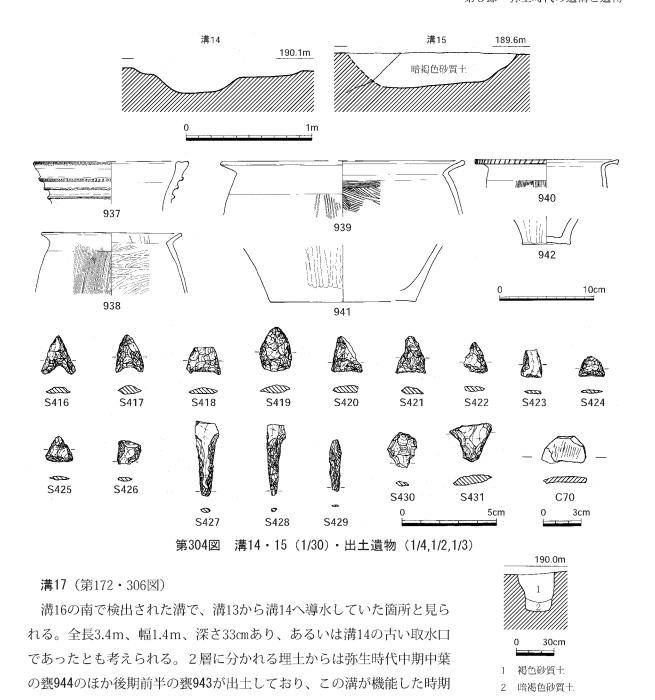
第303図 溝13出土遺物② (1/2, 1/3)

## **溝14・15** (第172・174・304図、図版37・38・55)

溝14は溝13から南の水田へ導水する水路で、幅1.33m、深さ19cmを測る。上流部では1 mほどの間隔を保って溝13と平走するが、導水路と見られる溝16・17の接続部分より下流では水田1の肩口と平行するように南流する。溝16・17の接続部分では溝底に凹凸が見られ、溝17との関係からすると取水箇所が上流に付け替えられた可能性もある。溝15は溝14から分岐して再び溝13と合流する幅1.36m、深さ28cmの溝で、排水路としての機能を果たしていたのかも知れない。出土遺物には中期前葉~中葉の土器・石器などがあるが、いずれもこの溝が機能していた時期を示すものではない。 (亀山)

### 溝16 (第172・305図)

溝13と溝14を結ぶように東西に走る溝で、全長1.4mを測る。幅30cm、深さ36cmと幅の割りに深く、断面はU字形をなす。底面は東に向かって傾斜しており、溝13から溝14へ導水する役割を担っていたものと思われる。 (亀山)



### 溝18 (第172・307図)

を示している。

水田1の肩口を不連続に走る浅い溝で、幅56cm、深さ8cmを測る。溝内には水田層と同じ灰褐色をなす砂質土が堆積しており、水田を微高地から切り離すと同時に排水の機能もあわせもった溝と考えられる。 (亀山)

(亀山)

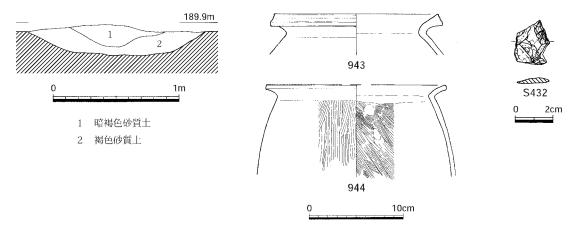
第305図 溝16 (1/30)

### 溝19 (第172·308図)

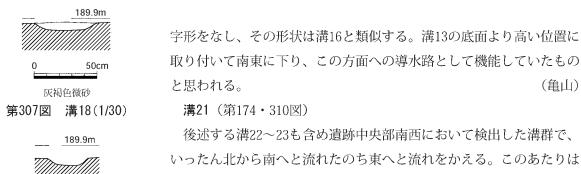
溝18から分岐して南東に延びる幅25cm、深さ3cmの浅い溝である。全長2.9mを検出したにすぎないが、埋土が溝18と共通することからすると同様な機能をもっていた可能性が高く、一段高い水田が南東へ広がっていたとも考えられる。 (亀山)

### 溝20 (第174・309図)

溝13から東に向かって弧状に延びる全長22.9mの溝で、溝15を切る。幅56cm、深さ8cmで断面はU



第306図 溝17 (1/30) · 出土遺物 (1/4,1/2)



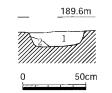
後述する溝22~23も含め遺跡中央部南西において検出した溝群で、 いったん北から南へと流れたのち東へと流れをかえる。このあたりは 調査前が宅地であり、それに関わる撹乱によって遺構が大きく損なわ れていた。また、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての洪水砂に よって水田と考えられる層自体も削平を受けていた。

(亀山)

この溝は、いったん南に向かい、やがて南東方向と南方向への2本 の溝に分岐していた。水田層上面から掘られていることから、水田水 路の可能性が考えられる。最大幅42cm、深さが14cmを測る。図化しう るものはないが後期の土器片が埋土中より出土している。

# 溝22 (第174・310図)

溝21とほぼ平行して南流する溝である。切り合いから溝21より新し い。最大幅が85cm、深さは30cmを測り、埋土の4層は洪水砂層である。 出土した土器片から時期は後期とみられる。 (弘田)



第308図 溝19(1/30)

30cm

- 1 暗褐灰色粘性微砂
- 暗褐灰色粘性微砂 (黑褐色微砂塊含)

第309図 溝20(1/30)

### 溝23 (第174·311図)

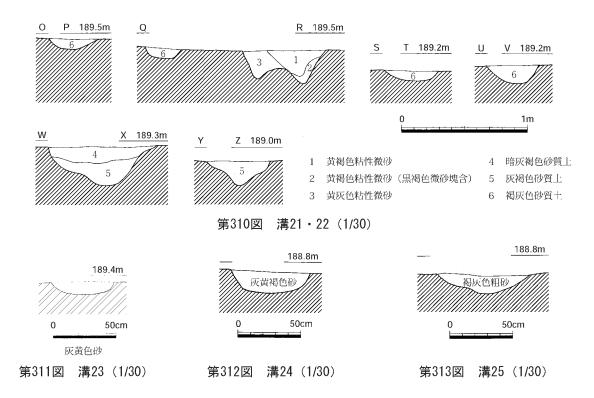
3908Dc区から一旦東に流れたのち南東へと向かう溝で、最大幅が50cm、深さは18cmを測る。溝 22からの派生と推定でき、溝28・29に流れ込んでいたと思われる。時期は後期であろう。 (弘田)

#### 溝24 (第174・312図)

4000De区で検出した西から東へと流れる溝で、最大幅が63cm、深さは17cmを測る。溝21から続 き、溝28・29へと合流すると推定できる。遺物の出土は無いが、時期は後期であろう。 (弘田)

#### 溝25 (第173·313凶、凶版38)

3905Dh区あたりで検出された。南へ流れ、溝26と合流する。河道7の西側肩口から一段下がっ た河道内の平坦部に位置する。検出面は袋状土壙16と同じで、この段階での河道7は、微高地の裾と 河道内の平坦部の間が溝状に窪み、平坦部の東がさらに一段落ち込んで本流となる姿であったと推定



される。微高地裾の溝から溢れた水が東の本流へ流れ出た痕跡が溝25のようにもみられる。 (岡本) **溝26** (第173・314図、図版38)

前述の溝25と同じ立地にあり、検出面も等しく、同様の機能を持っていたと考える。出上遺物として945の壺底部があり、中期のものとみられる。層位的にも同期の溝と判断される。 (岡本)

### 溝27 (第174·315図)

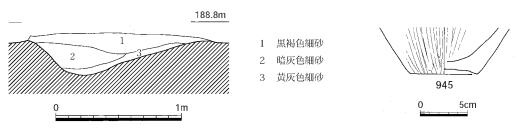
4002Ci区にあり、調査区境の南西隅のわずかな範囲において検出した溝である。溝13から派生し東へと流れ、河道7へと合流すると推定できる。これより南では水田層が確認できなかったことから水田の南を画す溝であろうか。埋土より、中期の土器片が出土している。 (弘田)

#### **溝28** (第157・176・325図、図版39)

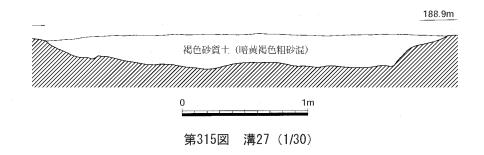
河道7が埋没していく過程の最終段階で、4002Df区付近では幅6.2m、深さ95cmほどの溝状を呈するようになっていた。これを溝28とする。この溝は溝25で述べた微高地裾と河道内平坦部との間の溝に続くものとみられ、上層から壺の破片963が出土している。層位からも中期と考える。 (岡本)

### 溝29 (第157 · 176 · 316 · 325図)

4001~03Df区では河道7の西側肩口に沿うような形で溝状の遺構が検出された。層位的には河道7の最終段階の底部堆積層(溝28)の下に位置している。第325図では7層に対応するとみられる。



第314図 溝26 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

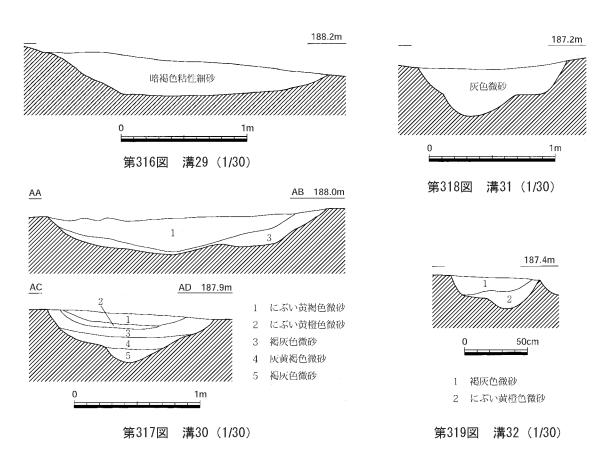


幅 2 m、深さ約34cmを測り、出土遺物はなかった。層位から考えて中期以前のものと考える。(岡本) **溝30**(第177・317・326図、図版39)

遺跡の南東端部、4004~08 Dj・E a区で検出された環状に巡るとみられる溝である。弥生時代末~ 古墳時代初頭の洪水砂層を除去した段階では、この溝に囲まれた部分が周辺では最も高くなっていた。 検出面は洪水砂層下の包含層を1層除去した面で、層位から後期の溝である可能性が強い。 (岡本) 溝31 (第177・318・326図)

河道7南端部の4006・07Dg区で検出された。河道7が埋没していく最終段階で、河道中央部付近に形成された溝である。検出面は溝30と同様、洪水砂層下の包含層(第326図下段24層)を除去した面である。埋土に対応するとみられる層から土器976~978が出土し、後期後葉の溝と考える。(岡本)溝32(第177・319・326図)

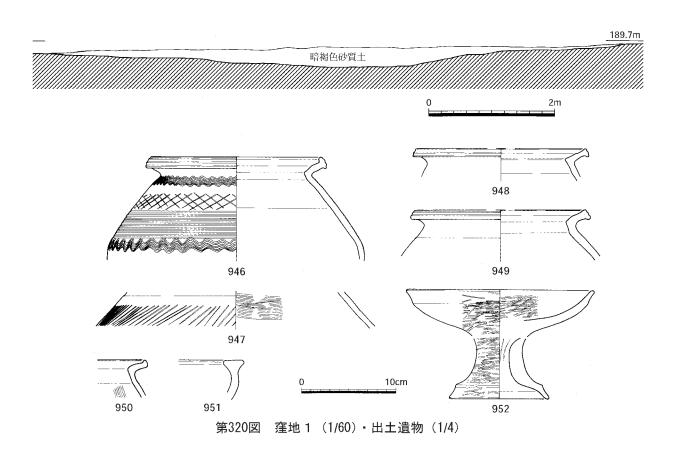
溝31のすぐ東に位置し、複雑に分岐しながら、一部は溝31と繋がっている。検出状況から溝31と同時、同性質の溝である。形状が不規則なのは、人為的に掘削されたものではなく、自然の流水によって流路が形成されたためではないかとみられる。出土遺物はなかった。 (岡本)



## 10 窪地

### 窪地1 (第175・320図)

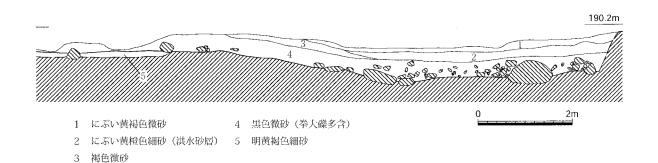
3902 Ca区から3905 Cb区の範囲に検出した窪地で、北には竪穴住居5、東には溝9、西には溝8 と河道6 が確認されている。断面形は、極めて浅い「U」字形を呈し、内部の堆積土である暗褐色砂質土の中から、 $946\sim951$ の中期の土器と952の後期の高杯が出土した。 (福田)



## 11 河道

### 河道5 (第171・321・322図)

縄文時代の河道3が、3805・06Cf・Cg区では弥生時代になっても河道状の窪みを残し、そこに弥生

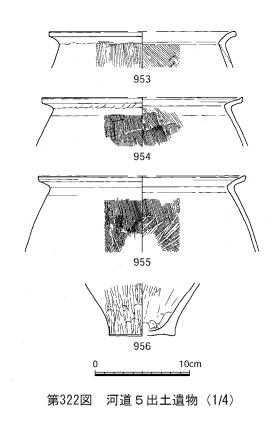


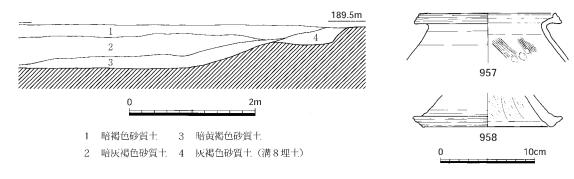
第321図 河道5 (1/80)

時代の堆積層が認められた。弥生時代の遺構としては河道5とする。河道幅は8mを超え、深さは60cm強を測る。第321図の1~3層までが弥生時代の堆積層、4・5層は縄文時代の河道3の堆積層である。2層は粗砂も多く含み、洪水砂層とみられる。第322図の土器は弥生時代の堆積層から出土したもので、中期前半のものである。(岡本)

### 河道6 (第175・323図、図版40)

吉井川に面した調査範囲南西端の3902Biから3904Bjに検出した河道で、溝8の南側を切っていた。この河道の西から南にかけては、調査範囲の境界部分で調査することができなかった。検出面からの深さは70cmで、暗褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、暗黄褐色砂質土が層をなして堆積し、内部から中期末に属すると思われる甕957と高杯958の破片が出土した。 (福田)

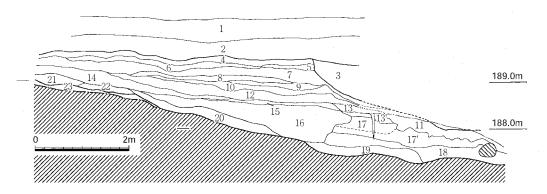




第323図 河道6(1/60)・出土遺物(1/4)

河道7 (第10・121・157・169・173・176・177・324・325図、図版39・40・55)

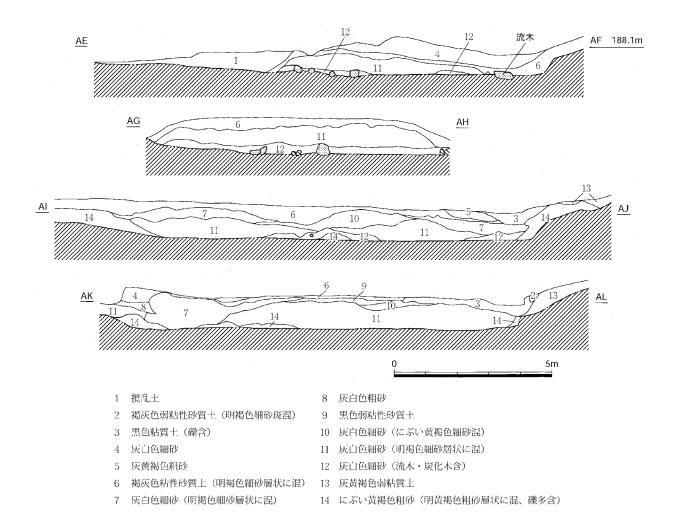
遺跡東部を南北に流走する。検出全長は175m、幅は東岸が後世に破壊されていたが、溝30の存在から30m前後かと推定される。縄文時代の河道1をほぼ踏襲するか。第324・325図は河道7関連の土層断面図である。上流の第324図上段は4~19層が河道7の堆積層で、第325図966(前期土器)が16層、962・965(中期前半)は17層から出土した。第325図は下流部で、第157図はすぐ上流に位置する。ともに古墳時代初頭洪水層は除去されている。第325図3層・第157図16層が河道7の最終段階底部堆積層で、中期の963が出土した。第324図上段では8層がこれに対応するか。この層の下には粗砂層を挟んで粘性砂層の安定面があり、それ以下はトレンチを掘り下げた。第324図下段は各トレンチの北壁土層図で、6層上面が安定面にあたる。この6層には第325図8層、第324図上段14・15層が対応する。第324図下段3層は最終段階底部堆積層と考えられる。中期前葉の964は第324図下段の14層から出土した。安定面での地形は、微高地縁辺に平坦面があり、さらにその東側が河道状に落ち込んでいた。落ち込み部分には流木が多く検出され、板状のものも認められたが、木器はなかった。(岡本)



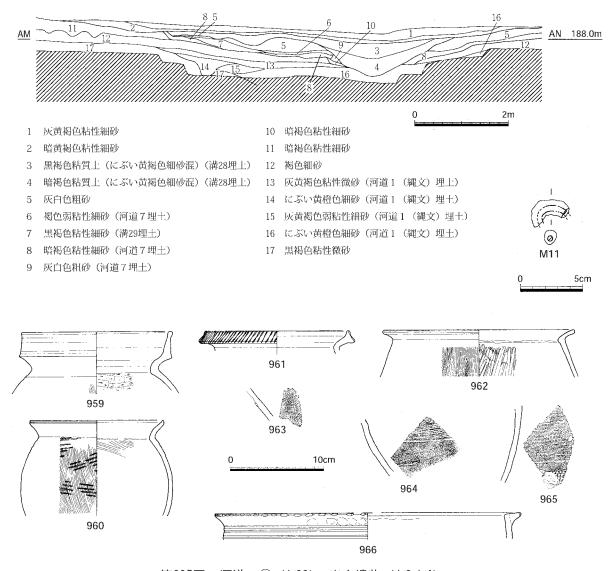
- 1 灰黄色砂(古墳時代洪水砂)
- 2 灰黄色砂礫(古墳時代洪水砂)
- 灰黄色細砂(古墳時代洪水砂)
- 暗褐色砂質土
- 5 黄褐色砂(暗褐色砂質土混)
- 黄褐色砂
- 7 暗灰色砂
- 暗灰褐色砂
- 9 灰褐色砂

- 10 灰褐色砂(暗灰色上塊含) 17 灰黄色細砂
- 11 暗灰色粘性砂質上
- 12 淡灰褐色砂
- 13 灰色粘質土
- 13 灰黄色微砂
- 14 暗灰褐色砂
- 15 淡褐灰色粘質砂
- 16 褐色微砂

- 17 黄灰色細砂 18 灰白色粗砂
- 19 黄灰色細砂
- 20 黒褐色細砂 (礫少含) (縄文晩期包含層)
- 21 暗灰褐色砂(黄色砂質土塊含)(縄文晩期包含層)
- 22 黒褐色砂質土 (縄文後期包含層)
- 23 黄褐色砂質上(微高地基盤)



第324図 河道7① (1/80,1/120)

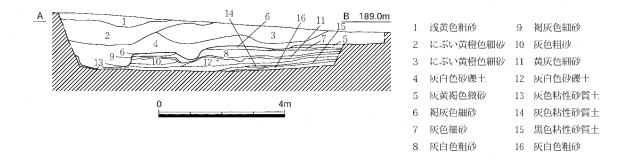


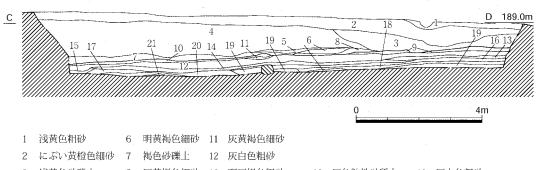
第325図 河道7② (1/80) - 出土遺物 (1/3,1/4)

## 12 洪水砂関連遺物 (第169・177・325・326・327図、図版55)

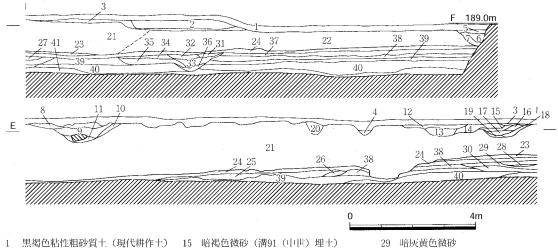
久田原遺跡は弥生時代終末から古墳時代初期にかけて大洪水に襲われていた。ここでは、洪水に関連するとみられる包含層出土土器を取り上げ、洪水の年代を特定するための糸口としたい。

第326図は河道7下流部に設定したトレンチの土層図で、その位置は第169図に示す。上段では1~4層が洪水砂礫層、中段では1~7層が洪水砂礫層、下段では21・22層が洪水砂礫層である。洪水砂礫層の下は暗色系の細砂ないしは粘性砂質土と粗砂層が互層となり、河道7の埋没していった様子がうかがえる。土層の対応関係は、上段の6・7層は中段の9・10層、下段の24層と繋がり、上段の9・11層は中段の14・15層、下段の26・37層と続くとみられる。前述の河道7西岸の土層とでは、上段の6・7層は第157図13層、上段の9・11層は第157図16層、第325図3層に対応する可能性が高い。第327図上段の土器は河道7下流のトレンチ周辺出土である。971・972・975は洪水砂礫層の底面近くから、967~970・973・974は第326図上段の6・7層、下段の24層出土、976~978は第326図中段の12層、下段の25層から出土した。下段の土器は河道7西岸周辺出土である。980・981は調査区南端の





3 浅黄色砂礫上 灰黄褐色細砂 13 明灰褐色粗砂 16 灰色粘性砂質上 19 灰白色粗砂 14 黄灰色粘性砂質土 17 灰白色粗砂 4 にぶい黄橙色細砂 9 黒褐色微砂 20 灰色細砂 5 にぶい黄色微砂 10 褐灰色微砂 15 黒褐色粘性砂質土 18 黄灰色粘性砂質土 21 暗灰色粘性砂質土



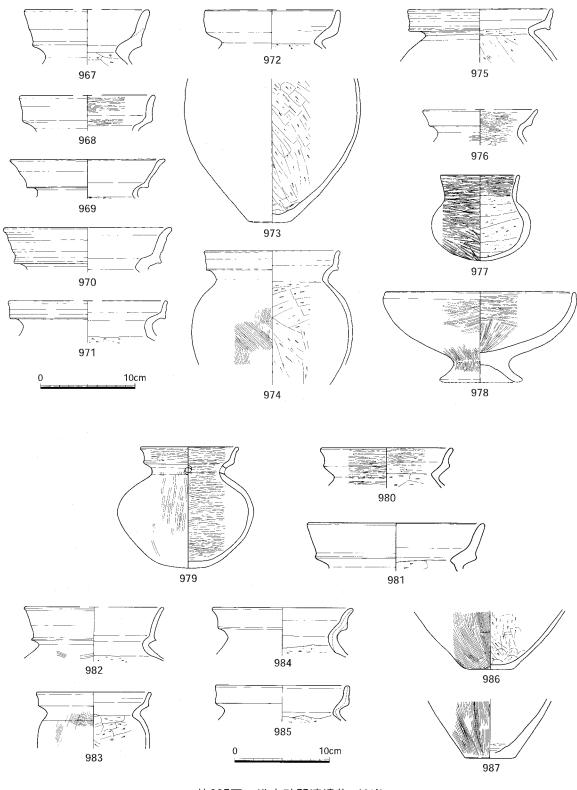
- 2 暗褐色上(造成上)
- 3 褐灰色粘性砂質土(旧耕作土)
- 4 にぶい黄褐色土
- 5 黄褐色粘性砂質上
- 6 灰黄褐色粘性砂質土
- 7 思褐色粘性粗砂質土(現代用水路)
- 8 灰褐色細砂 (溝89 (中世) 埋上)
- 黒褐色粗砂(溝89(中世)埋土)
- 10 灰黄褐色粗砂(溝89(中世)埋土)
- 11 黒褐色粗砂(溝89(中世)埋上)
- 12 暗褐色微砂 (溝90 (中世) 埋土)
- 13 黒褐色細砂 (溝90 (中世) 埋土)
- 14 褐灰色細砂(溝90(中世)埋土)

- 16 灰黄褐色微砂(溝91(中世)埋上)
- 17 褐灰色微砂 (溝91 (中世) 埋土)
- 18 灰黄褐色粗砂 (溝91 (中世) 埋土)
- 19 にぶい黄橙色粗砂(溝91(中世)埋土) 33 暗灰黄色微砂(炭混)(溝30埋土)
- 20 にぶい黄褐色粗砂
- 21 褐色粗砂
- 22 明黄褐色粗砂
- 23 黄褐色微砂
- 24 黒褐色微砂
- 25 明黄褐色微砂(溝31・32埋上)
- 26 黒褐色微砂 (溝32埋土)
- 27 浅黄色粗砂 28 黄灰色細砂

- 29 暗灰黄色微砂
- 30 黄褐色微砂
- 31 黒褐色微砂 (炭少混) (溝30埋土)
- 32 黄褐色微砂 (炭少混) (溝30埋土)
- 34 にぶい黄色細砂 (溝30埋土)
- 35 黄灰色微砂(溝30埋土)
- 36 黄褐色微砂 (溝30埋上)
- 37 褐灰色微砂
- 38 明黄褐色微砂
- 39 黄灰色微砂
- 40 にぶい黄色微砂
- 41 灰黄色砂礫土

第326図 洪水砂関連断面 (1/120)

洪水砂礫層の底面近く、982・983・987も微高地上面の洪水砂礫層の底面から出土している。984~986 は微高地上面の弥生時代包含層出土であるが、その上面に接して洪水砂礫層がある。なお、第325図 960は、河道7の最終段階の底部堆積層を検出中に出土したものであるが、出土地点から検討すると、 洪水砂礫層の底面出土の可能性が高い。



第327図 洪水砂関連遺物 (1/4)

### 13 遺構に伴わない遺物

弥生時代の遺構に伴わない遺物については、遺構検出中に出土したものが多く存在する。そのうち、 完形に近いものや特徴的と考えられるものを中心に図示している。

**土器・土製品** (第328~334図、図版55~57)

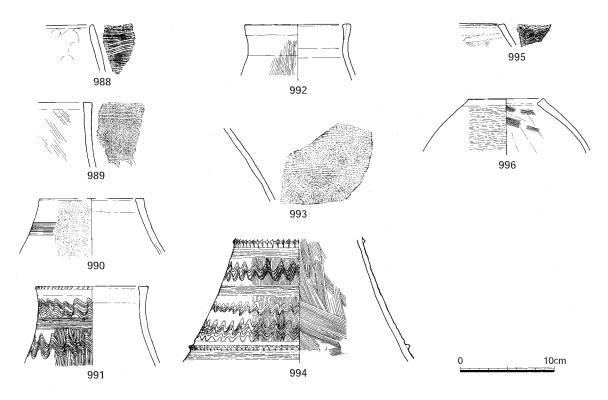
988~1010は中期前葉~中葉に属す壺であり、無頸壺988・995・996、短頸壺989~994・997~1002、 広口壺1003~1010などがある。短頸壺では989・990・993のように外面に櫛描文を施すものが多い。 994~1002は口縁部から頸部にかけて貼り付け突帯を巡らすものである。994は大型品である。広口壺 は短頸・長頸の二者がある。1004の口縁部外面の施文具は698の胴部のものと同一である。

1017は前期後半に属する甕であり、口縁部直下にヘラ状の工具による4条以上の沈線を施す。1018~1028は中期前葉でも古相を示すものであり、口縁部直下に櫛描直線文を施し、頸部外面には指頭圧痕が並ぶ。口縁部の形態は逆L字形・くの字形の二者がある。1029~1059は中期前葉~中葉に属し、多くの土器の体部にヘラや櫛状の工具により刺突文を巡らす。内面にミガキを施すものが古い傾向を示すと考える。1056~1059のような大型品も定量存在する。

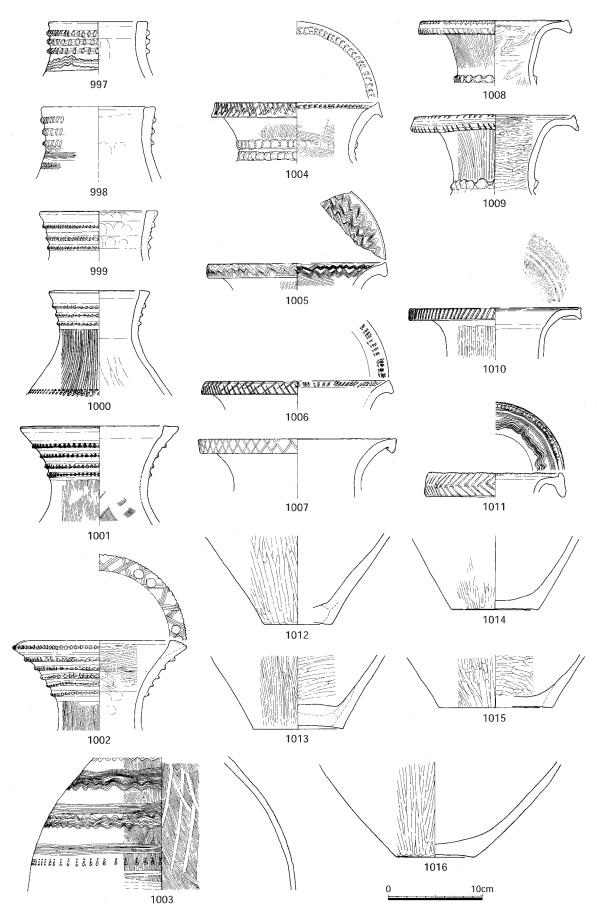
1073・1074・1078・1079は中期中葉の高杯、1081~1084が中期前葉~中葉のジョッキ形土器である。 1085・1086が台付鉢の脚部であると考えられる。

1011・1060・1075~1077・1080・1087~1093は中期後葉に属する土器である。1011は口縁部が大きく垂下する形態を有し、口縁部外面に綾杉文を施す壺であるが、時期や系譜に検討を要する。1094~1099は後期前葉、1100~1104は後期後葉~末に属する土器である。1100は水田層からの出土である。

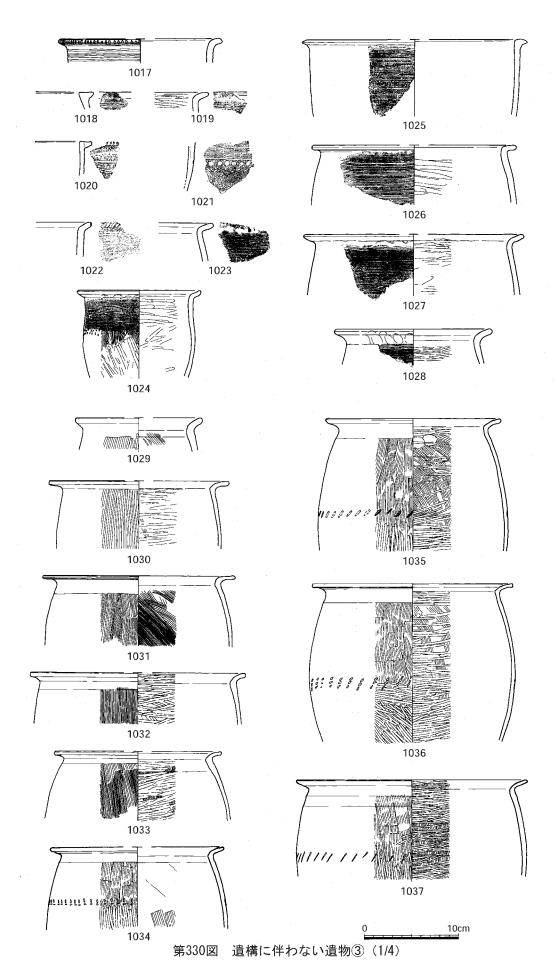
C71~74は出土層位から判断して中期前葉~中葉に属す土器転用の紡錘車である。 (河合)



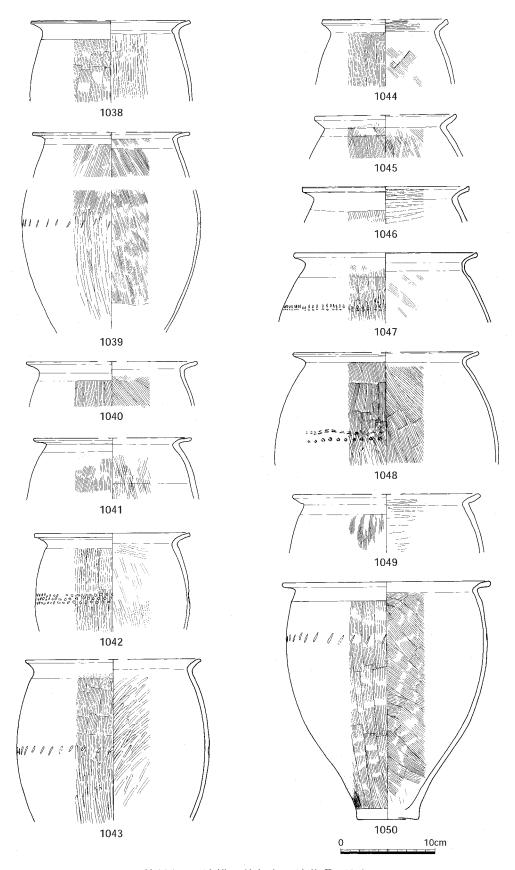
第328図 遺構に伴わない遺物①(1/4)



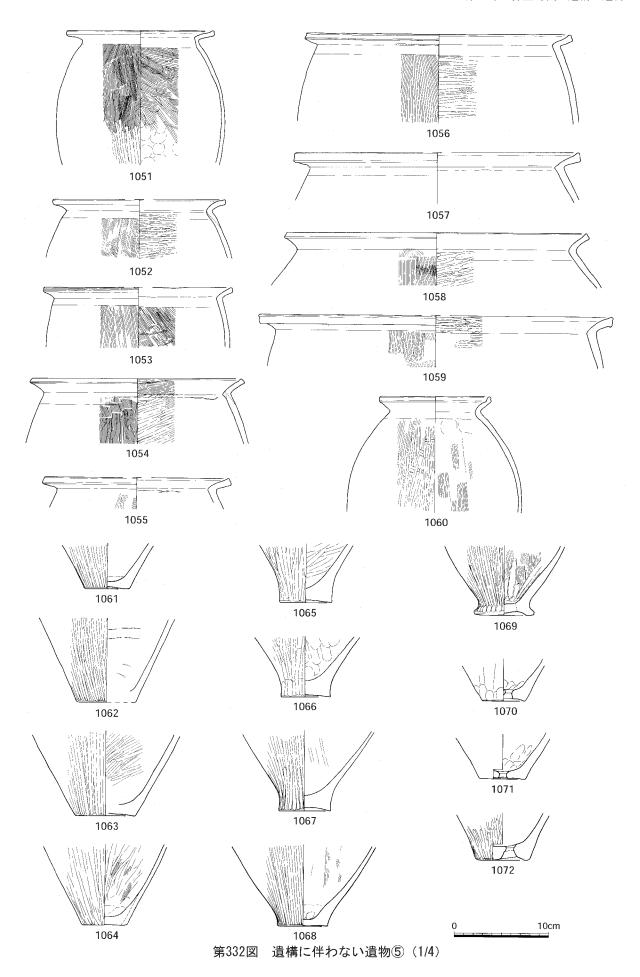
第329図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

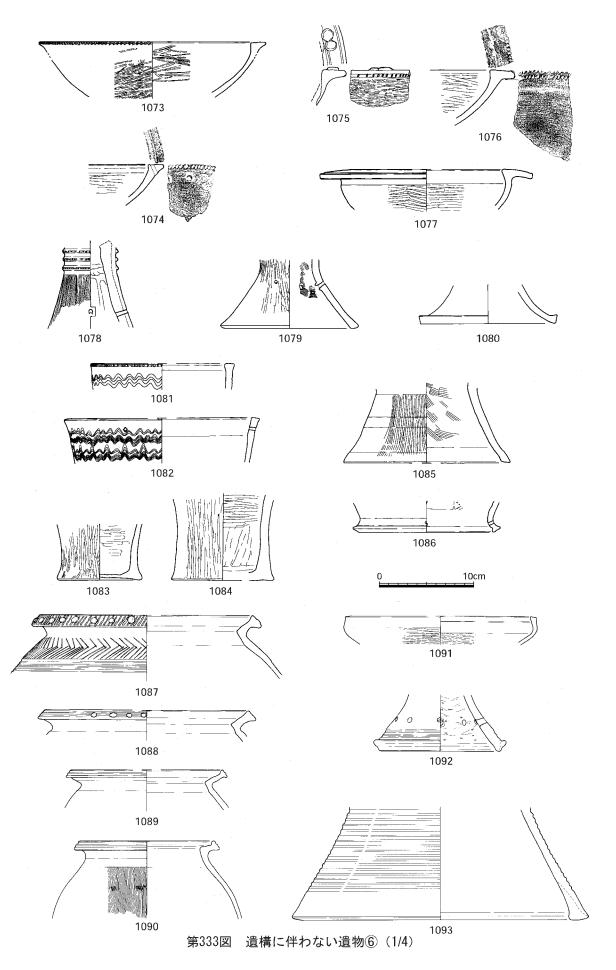


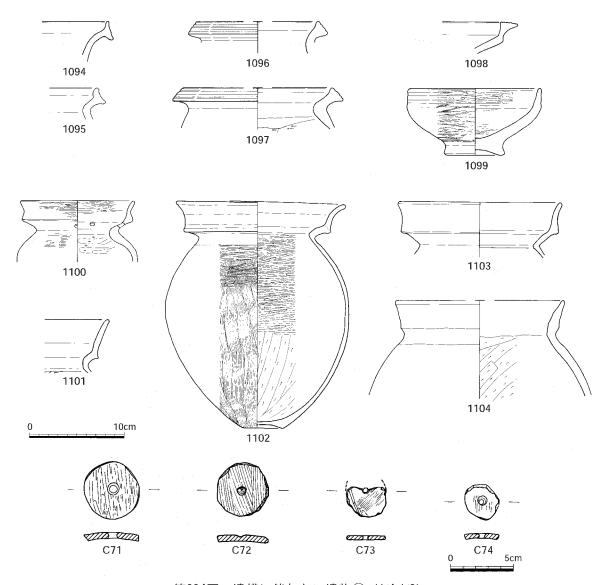
-205-



第331図 遺構に伴わない遺物④ (1/4)







第334図 遺構に伴わない遺物⑦ (1/4,1/3)

### 石製品 (第335~338凶、凶版57~59)

石製品はほとんどが中期前葉~中葉に属するものであるが、若干中期後葉~後期のものも存在する。 またスクレイパー・石鏃・石錐・石斧の中には縄文時代に溯る可能性があるものも含んでいる。

S433~442は磨製石包丁である。S433~438は直線刃半月形または長方形を呈し、S439~441は楕円形、S442は外湾刃半月形を呈する。石材は流紋岩・緑色片岩・粘板岩が使用されている。粘板岩製のS437は竪穴住居9出土のS208と同一個体である。S442は後期に属するものと考えられる。

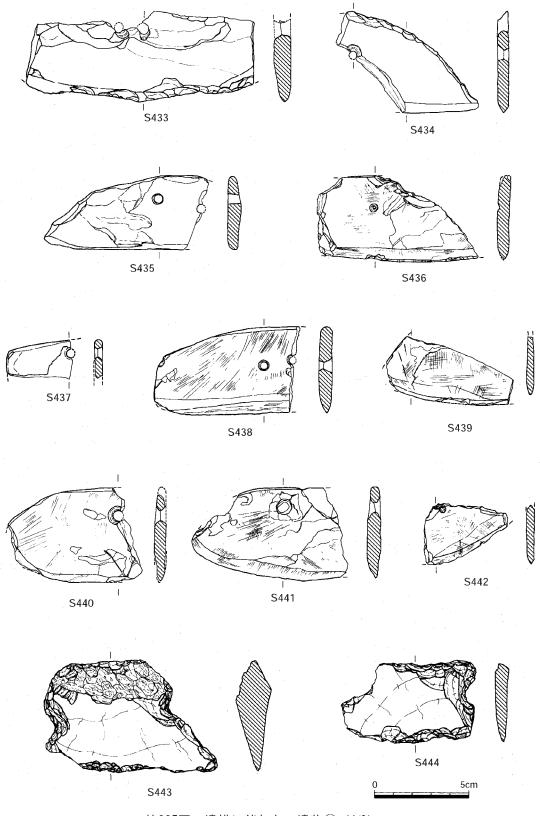
**S443・444**は両側縁に抉りが観察でき、打製石包丁と考えるものであるが、自然面を多く残すことや断面形態から縄文時代にさかのぼる可能性がある。

**S445**~451はスクレイパーであり、大型品**S445**・446も存在する。**S445**の刃部には珪酸の付着が みられる。大きさや形態から柄を装着して用いたものと考えられ、土壙65に埋納されていた可能性も ある。**S452**~459は石鏃、**S460**~464は石錐である。これらの打製石器はサヌカイト製である。

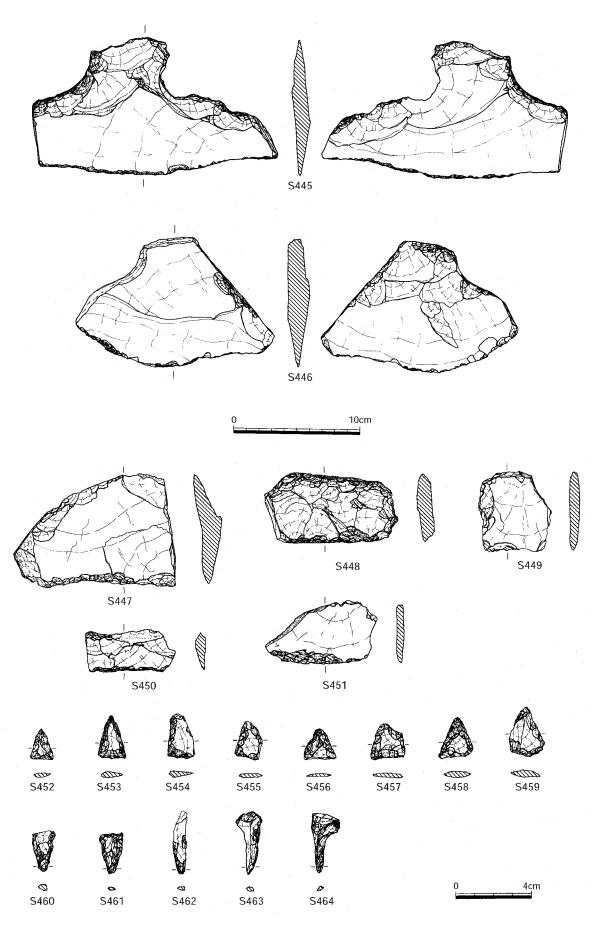
S 465~469は扁平片刃石斧、S 470~475は太型蛤刃石斧と考える。安山岩・緑色片岩等が石材として利用されている。S 476・477は石杵であると考えるが、朱などの付着は観察できなかった。S 478

は叩き石、S480は砥石である。S479は筋砥石である。石材は砂岩であり、玉の成形時についたと考えられる痕跡が明瞭に残る。竪穴住居群出土の玉関係の遺物と有機的な関係にあると考える。

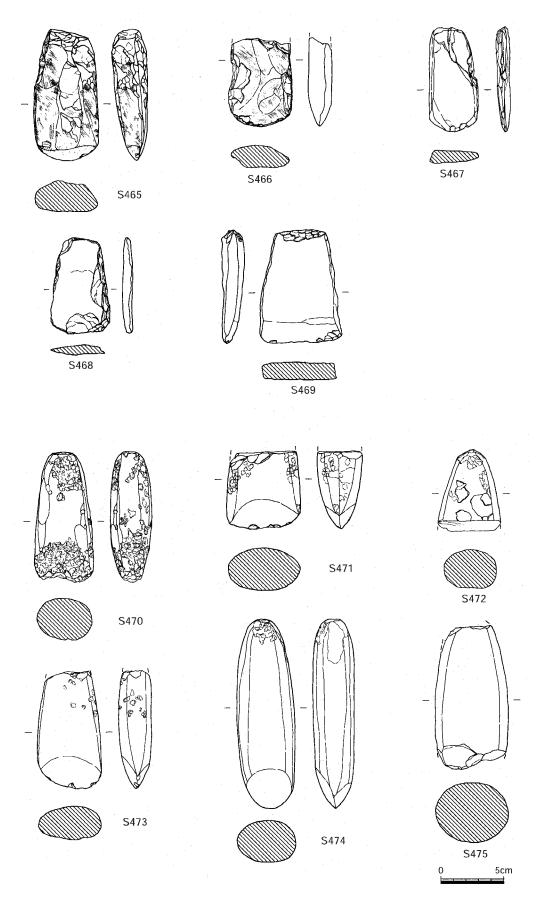
S481は水晶製のハンマーと考えられ、表面には無数の敲打痕が確認できる。 (河合)



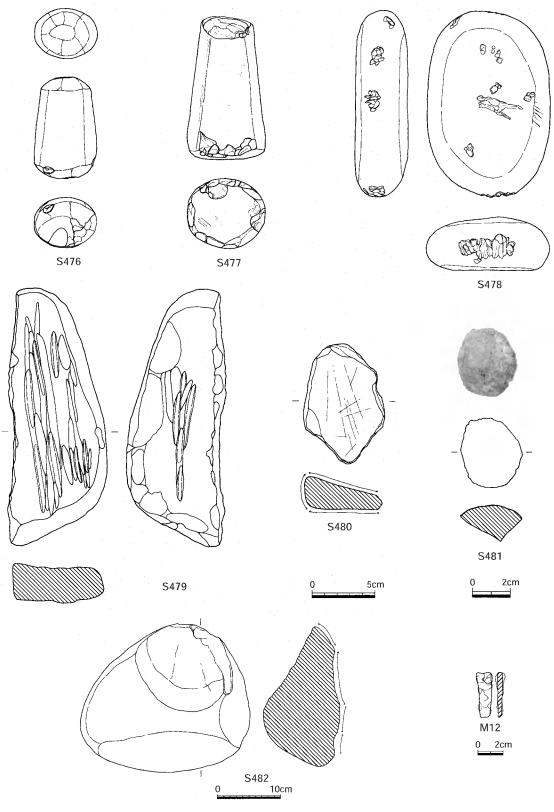
第335図 遺構に伴わない遺物⑧ (1/2)



第336図 遺構に伴わない遺物⑨ (1/3,1/2)



第337図 遺構に伴わない遺物⑩ (1/3)



第338図 遺構に伴わない遺物① (1/3,1/2,1/6)

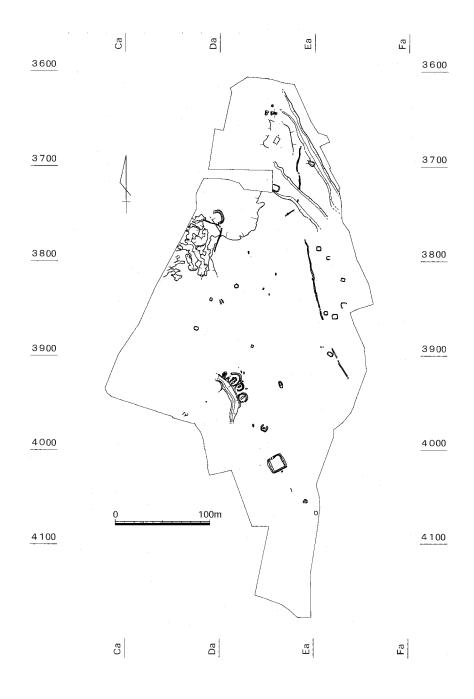
## **鉄製品** (第338図、図版59)

鉄製品としてはM12が確認されている。M12は鋳造鉄斧を再加工した鑿状の鉄器と考えられる。出土位置は中央微高地部分であり、層位から中期前葉~中葉に属するものと判断できる。 (河合)

# 第4節 古墳時代集落の遺構と遺物

## 1 概要

古墳時代に属する遺構は、密度は低いながらも北側の夏栗遺跡に近い場所から、南は久田堀ノ内遺跡の東隣まで満遍なく分布する。時期的には前期から7世紀末までの幅がある。層位的には、久田原遺跡や久田堀ノ内遺跡の大きな鍵層となる弥生時代末~古墳時代初頭の洪水砂の上層に、ほとんどの遺構が散在した。また、その洪水砂の下層においても、土壙119を検出している。遺構の広がりは、

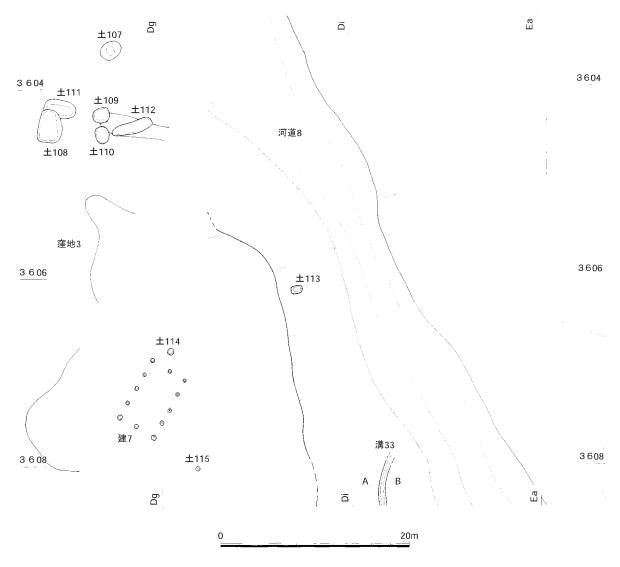


第339図 古墳時代遺構全体図 (1/4,000)

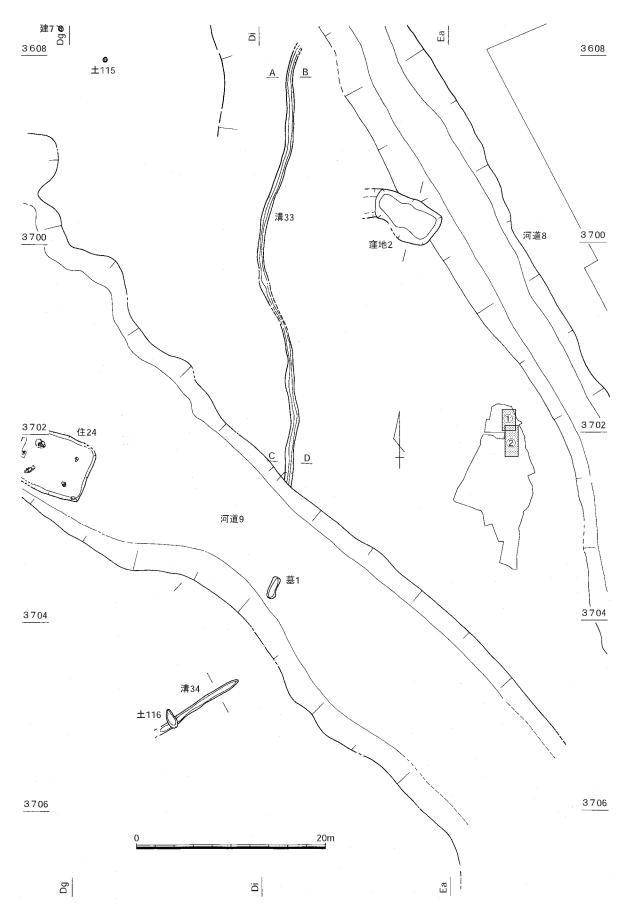
遺跡全体からみて東側に竪穴住居や掘立柱建物といった直接居住に関係した遺構が分布する一方、西側は墓域であり、古墳などが多く所在する。

ここでは、古墳時代における久田原遺跡・久田原古墳群(詳細は第5節を参照)を考える上で、鍵となる遺構・遺物を紹介していく。まず遺跡西側の北半には、たわみ状の窪地(窪地3)が広範囲に広がる。後述するように窪地3は吉井川に隣接した位置にあることや、中に黒味を帯びた粘質土が堆積していたことから、氾濫原の様相を呈していたと思われる。堆積土中から出土した土器は5世紀代のものが多くを占めるが、少量ながらそれ以前の4世紀代のものや、6世紀から7世紀の範疇に入るであろう須恵器や上師器も確認している。これらの上器の出上位置から窪地3は東側から埋まって行き、7世紀後半には完全に埋没したものと思われる。その結果、当地域の生活域は、若干ながらも広がったことが、7世紀以降に属する遺構の分布の在り方から推察できる。またミニチュア土器19点と舟形土製品が、一括して出土したことも注目される。

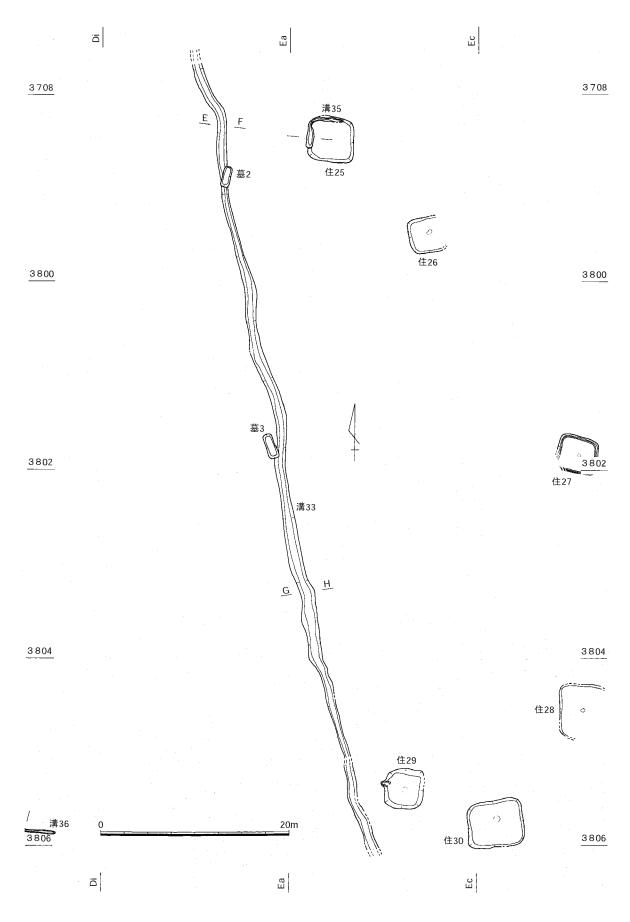
遺跡東側に目を転じると、その北部において北西から南東方向に流れる河道がある。この河道からも5世紀代の須恵器や土師器が多数出土している。ただ、周辺に当該期の遺構はわずかに土壌1基を



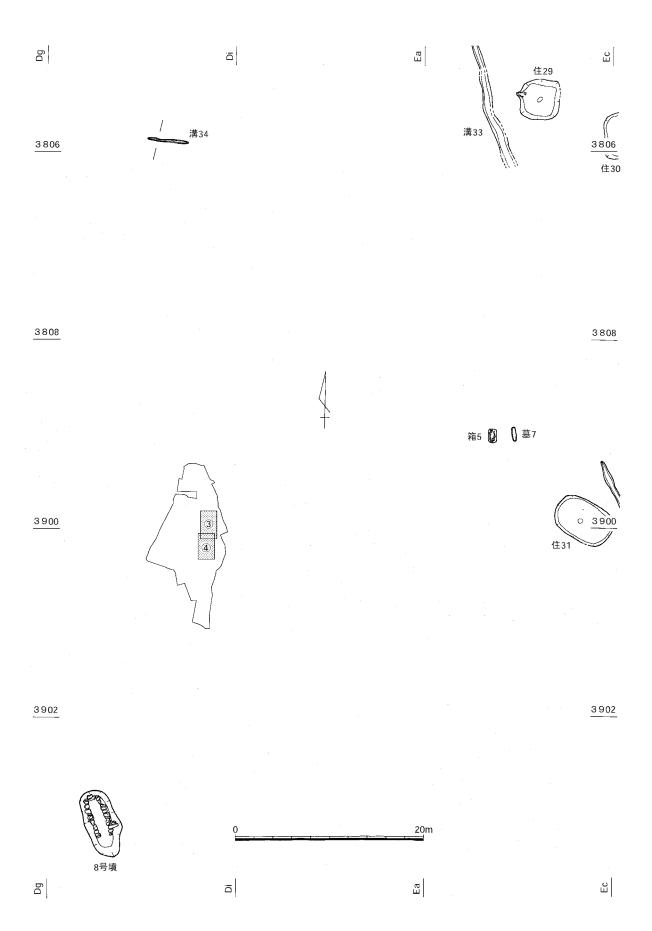
第340図 古墳時代主要遺構部分図①(1/400)



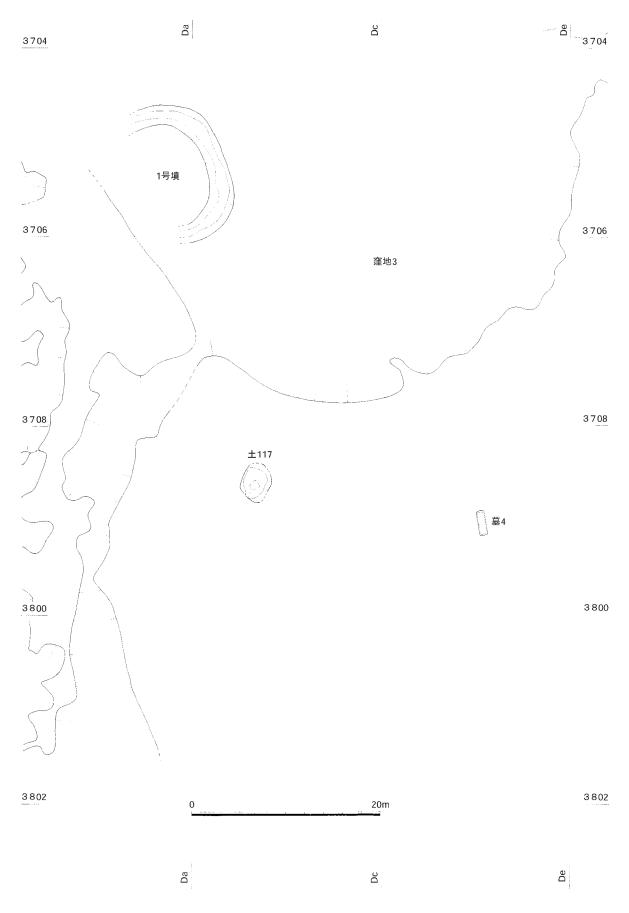
第341図 古墳時代主要遺構部分図② (1/400)



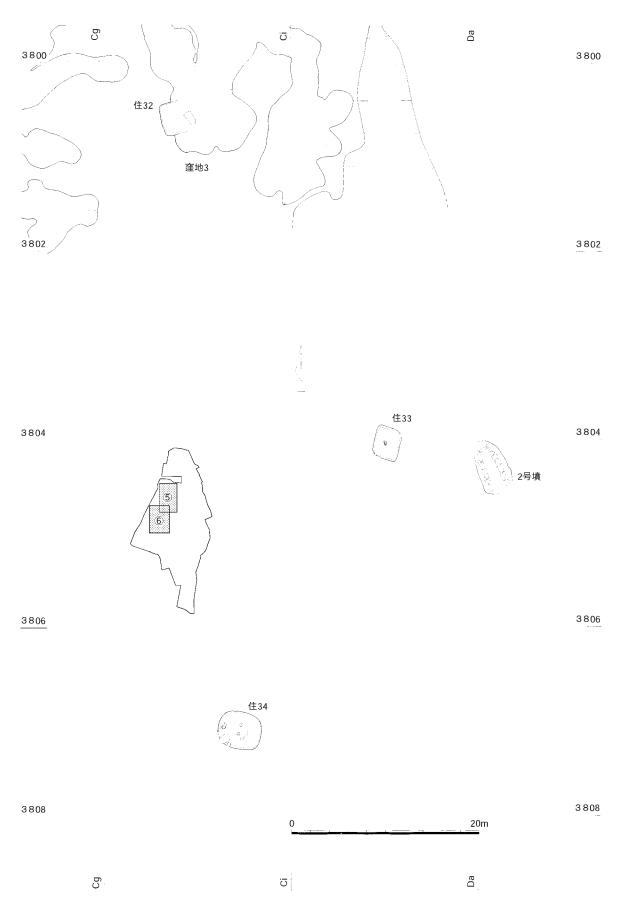
第342図 古墳時代主要遺構部分図③ (1/400)



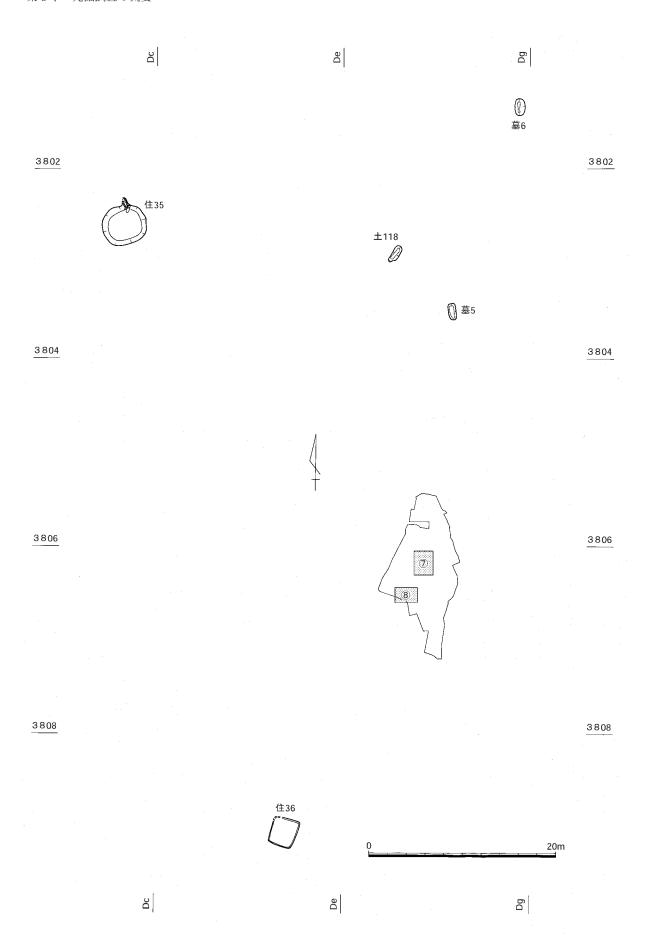
第343図 古墳時代主要遺構部分図④ (1/400)



第344図 古墳時代主要遺構部分図⑤ (1/400)



第345図 古墳時代主要遺構部分図⑥ (1/400)

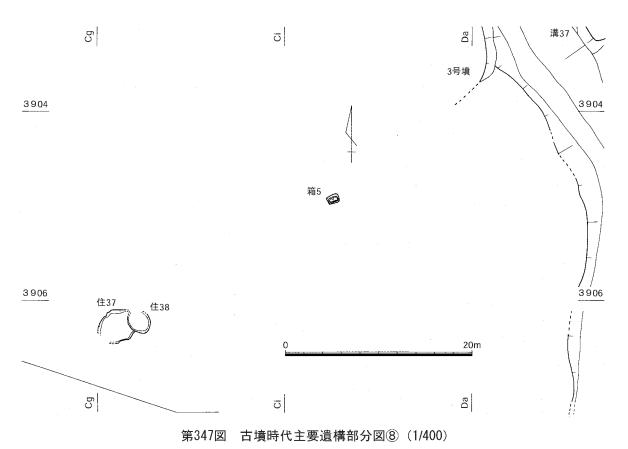


第346図 古墳時代主要遺構部分図⑦ (1/400)

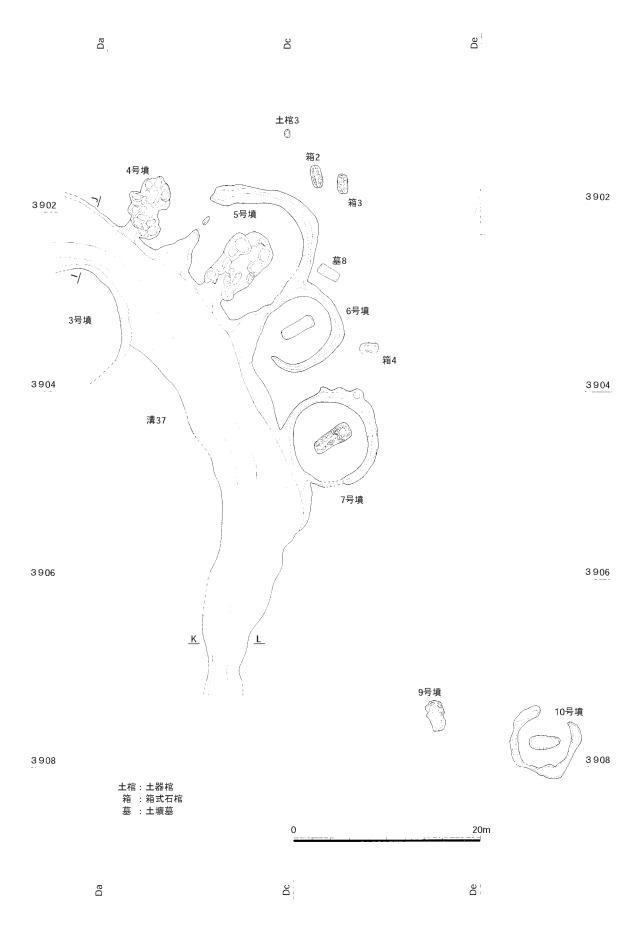
みるのみで、久田原遺跡の北側に接する古墳時代の集落である夏栗遺跡との関係で、捉えることが必要と思われる。東側の中央部には、6世紀後半から7世紀にかけての竪穴住居(竪穴住居24~31)が存在し、その中には石組みのものや移動式のカマドを持つものもある。これら竪穴住居の周辺には、土壙墓1~3・7や箱式石棺1も点在する。時期的には竪穴住居と同時期か新しい様相を呈している。遺跡南東部では、当遺跡では数少ない5世紀代の竪穴住居39や久田原11号墳が築かれる。また、洪水砂下層で検出された唯一の遺構(土壙119)も、位置的には南東部分にある。

久田原遺跡中央部には、6世紀後半~7世紀前半を中心とする古墳群(久田原3~7号墳)があり、 先述した遺跡東側中央部に分布する竪穴住居とは近接した時期に比定される。古墳群の北側から窪地 3周辺にかけてにおいては、竪穴住居5軒(竪穴住居32~36)や土壙7基(土壙107~111・117・118)、 古墳2基(久田原1・2号墳)、土壙墓3基(土壙墓4~6)が検出されたが、全体的に遺構密度は 遺跡東側に比べて低い。この中には、鉄滓や鞴の羽口の出土をみた竪穴住居35や、製鉄炉の炉壁が石 室内から出土した久田原2号墳も存在する。

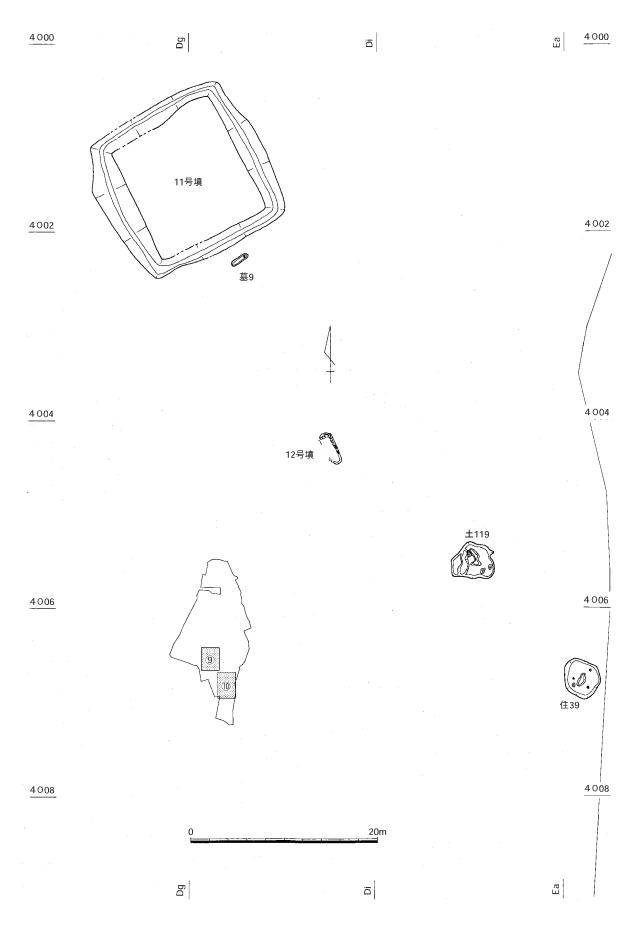
さて、古墳時代に属する遺構とそれに伴う遺物について概観したが、これらをまとめると以下のような傾向があった。5世紀代までは、遺跡の北側には土壙数基が、同じく南側に竪穴住居や方墳(11号墳)が築かれるのみで、北側や西側には河道や窪地があり、あまり生活をするには適していなかったと思われる。だが、ミニチュア土器等の出土が示すように、なにかしらの祭祀が行われていたことも想起される。6世紀代になると墓域として利用され、古墳や土器棺・箱式石棺・土壙墓が存在した。続いて7世紀代には、遺跡北東部を中心に集落が形成される。また、西側に展開していた窪地3も徐々に埋まり、7世紀後半にはこの区域にも竪穴住居や古墳・土壙墓が築かれるようになる。以上のように、時期が下るにしたがって生活域が広がる傾向がみて取れるのである。 (蛯原啓介)



-223-



第348図 古墳時代主要遺構部分図⑨ (1/400)

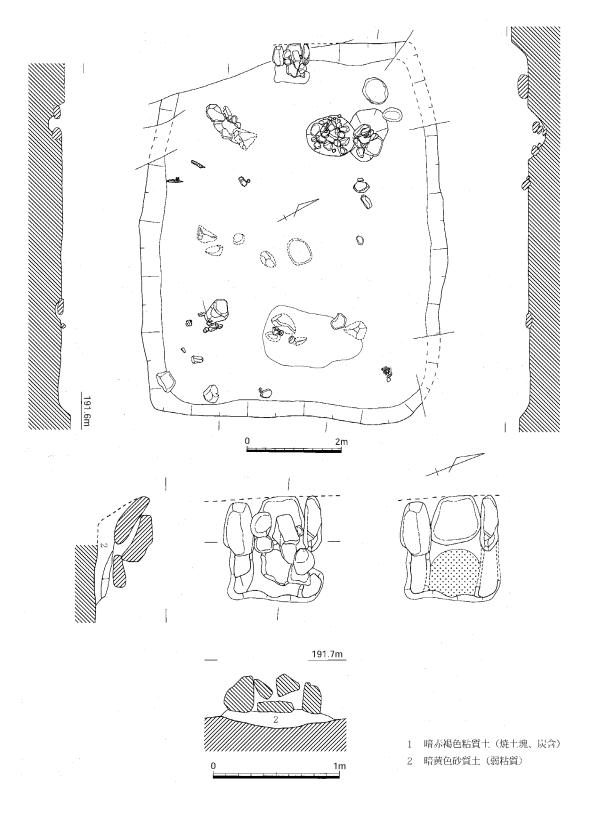


第349図 古墳時代主要遺構部分図⑩ (1/400)

## 2 竪穴住居

竪穴住居24 (第341・350・351図、図版61・71)

遺跡の北端部、河道9の上位で検出された方形の竪穴住居である。東西約8m、南北約6mを測り、

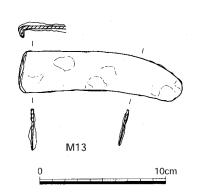


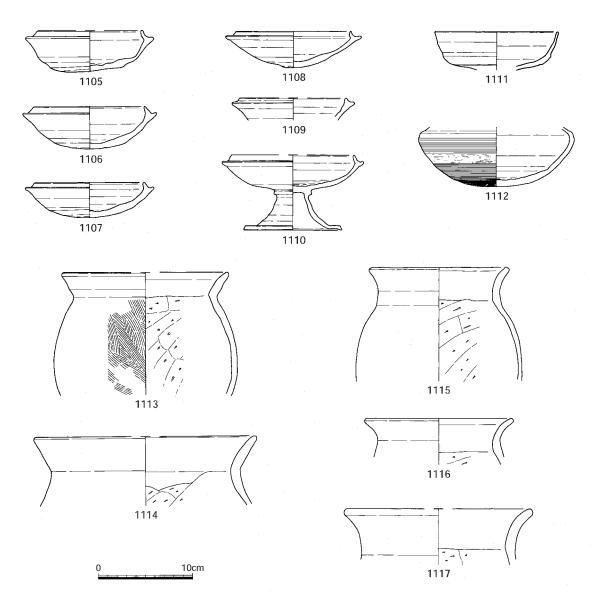
第350図 竪穴住居24 (1/80)・カマド (1/30)

わずかな胴張りが認められる長方形を呈する。深さは25cm前後と浅めであるが、暗褐色ないし黒褐色の埋積土だったので、平面形は明瞭に観察された。西辺中央で検出された竈は石組みで、人頭大~小児頭大の花崗岩を暗黄色砂質土の上面に構築している。竈の内部の堆積層には焼土塊や炭を含んだ暗赤褐色粘質土が認められ、石組みに使われた石にも加熱による赤変が認められる。したがって、実際

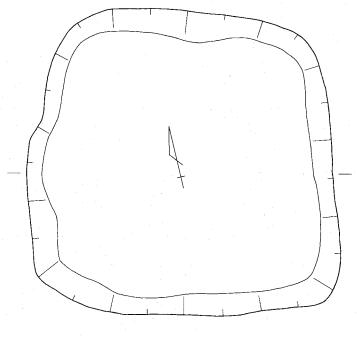
にこの場所で煮沸などに火熱を用いたことは確実であろう。なお、石組みは天井石や側石が内側に崩落した状態を示し、被熱による赤変した面が上を向いた石もみられる。床面は砂質土であるが、随所に自然礫が露呈し、快適な居住には甚だ不向きのような印象を受ける。特に北西隅には、60cmを越える大石が住居内に取り込まれている。床面東辺近くには炭の散布が目立ち、その周辺では土師器片の出土も顕著である。

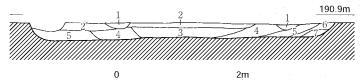
また、北西の床面では拳大から人頭大の礫を集めた土壙が検





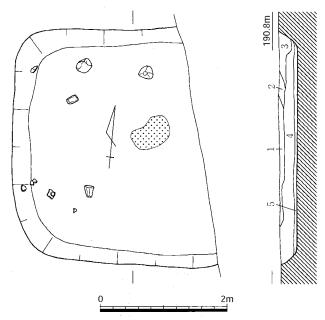
第351図 竪穴住居24出土遺物(1/3,1/4)





- 1 灰色粘質微砂
- 5 暗灰色粘質微砂
- 2 褐色粘質微砂
- 6 灰色粘質微砂
- 3 暗褐色粘質微砂(炭含)
- 7 暗灰色粘質微砂
- 4 黄褐色粘質微砂(炭含)

### 第352図 竪穴住居25(1/60)



- 1 明褐色粘質細砂
- 4 暗褐色粘質細~粗砂
- 2 褐色粘質細砂
- 5 灰褐色細~粗砂
- 3 暗灰色粘質細砂

### 第353図 竪穴住居26 (1/60)

出され、4本柱と推定した場合、 柱位置が想定される。

M13は、床面南東隅の扁平な石の側で出土した鉄鎌で、居住者が所有・使用したものであろう。東辺では少量の炭化材を検出し、須恵器高杯1110はその上で出土している。住居の火災は推定しがたく、燃えさしであろうか。 (岡田)

**竪穴住居25** (第342・352図、図 版62)

3807Ea区に位置し、古代の掘立柱建物35のP9に切られている竪穴住居である。平面形は方形を呈し、長軸4.84m、短軸4.79mを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。底面に被熱痕跡は認められない。

遺物は出土していないが、検出 状況と埋土等から古墳時代の範囲 に収まると考えられる。 (小嶋)

**竪穴住居26** (第342・353・354 図、図版62・63)

3709Eb区に位置し、東側は 用水路により削平を受けている。 残存している南・北・西辺から、 平面形は方形を呈していると想定 される。検出面からの深さ約30cm を測る床面には、60×40cmの範囲 で被熱により赤変した所が確認さ れた。また床面上から検出された 石も赤変していた。

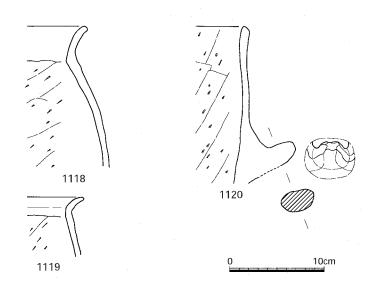
遺物は床面上から土師器甕 1118・1119、土師器甑1120等が出 土している。

出土遺物の諸特徴から、竪穴住 居の時期は古墳時代後期の範囲に 収まる。 (小嶋)

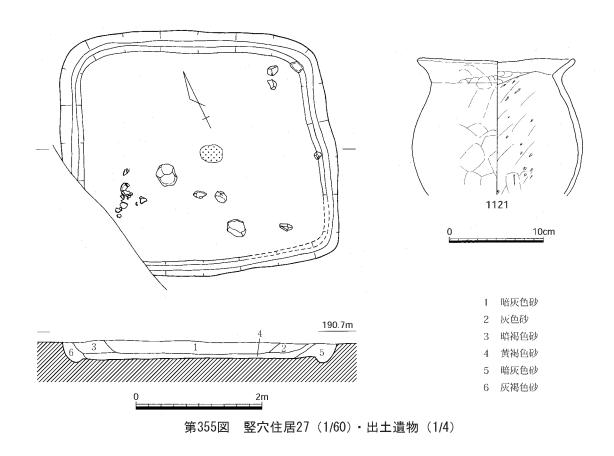
# **竪穴住居27** (第342・355図、図版 63・64・71)

3801Ed区に位置し、南西隅が 用水路によって削平を受けている。 長軸4.36m、短軸3.84mの方形を呈 し、床面積13.9㎡を測る。久田原遺 跡の古墳時代に帰属する竪穴住居で は、壁体溝が認められる唯一の例で ある。床面中央部に35×25cmの範囲 で弱い被熱痕跡が認められた。床面 直上から土師器甕1121や河原石が検 出されている。

遺構の時期は古墳時代後期に比定される。 (小嶋)

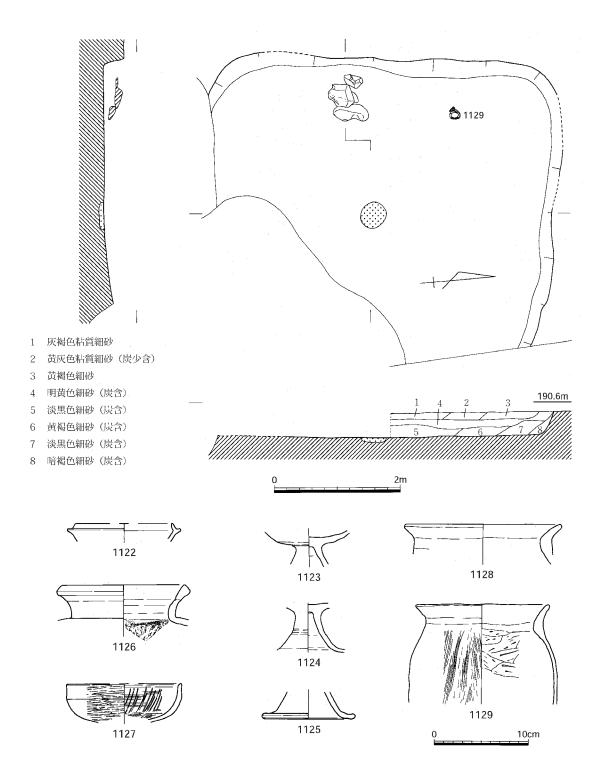


第354図 竪穴住居26出土遺物(1/4)



竪穴住居28 (第342・356図、図版64・71)

3804Ed区に位置し、西辺が用水路、南辺および南東側床面が中世の溝81および落ち込み2により削平を受けている。平面形は一辺5.4m前後の方形を呈すると想定され、検出面から床面までの深さは約50cmを測る。西辺中央の河原石は床面から若干浮いている。平坦な床面中央部には、径40cmを測る平面円形の被熱痕跡が認められた。遺物は床面北西から底部を欠損している土師器甕1129が出土し、



第356図 竪穴住居28 (1/60) - 出土遺物 (1/4)

その他のものは埋土中からである。

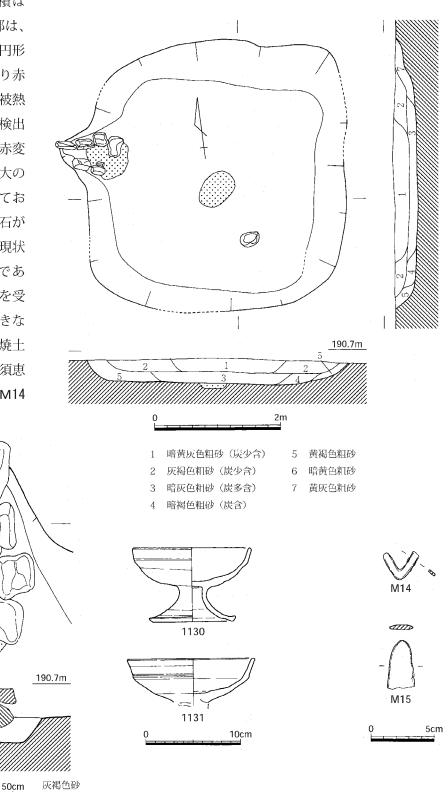
遺構の時期は、古墳時代後期に比定される。

(小嶋)

竪穴住居29 (第342・343・357図、図版64・65・71)

3 8 04Ed区に位置し、古代の掘立柱建物60 P 6 ・ 7 に切られている竪穴住居である。平面形は方形を呈し、西辺中央やや北側に石組みのカマドが検出された。竪穴住居の規模は、長軸4.62m、短軸4.3m、

深さ32cmを測り、床面積は 9.9㎡である。床面中央部は、 長軸60cm、短軸40cmの楕円形 を呈する範囲が被熱により赤 変していた。また、この被熱 範囲から約50cm南東側で検出 された30cm大の河原石も赤変 している。カマドは30cm大の 河原石を用いて構築されてお り、北辺東端の石以外は石が 広口に据えられている。現状 では基本的に1段積みであ る。ただし、上面が削平を受 けている可能性も否定できな い。焚き口付近には炭・焼土 が広がっていた。遺物は須恵 器高杯1131 · 1132、鉄鏃M14



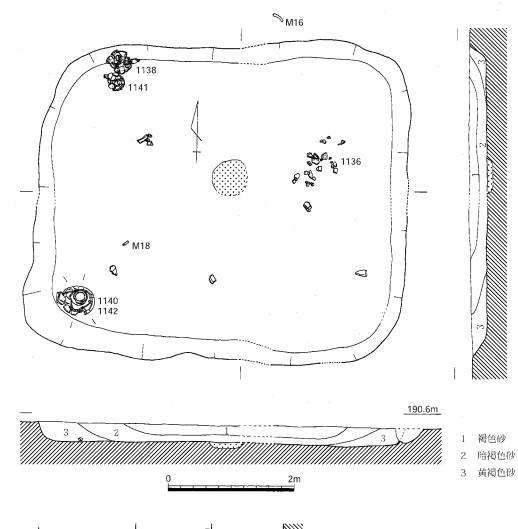
第357図 竪穴住居29 (1/60)・カマド (1/20)・出土遺物 (1/3,1/4)

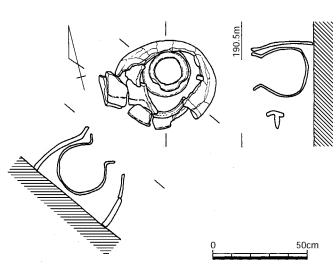
・15等が出土している。なお、須恵器高杯1131は床面直上からの出土である。 遺構の時期は古墳時代後期に比定される。

(小嶋)

#### 竪穴住居30 (第342・343・358~360図、図版65・71・72)

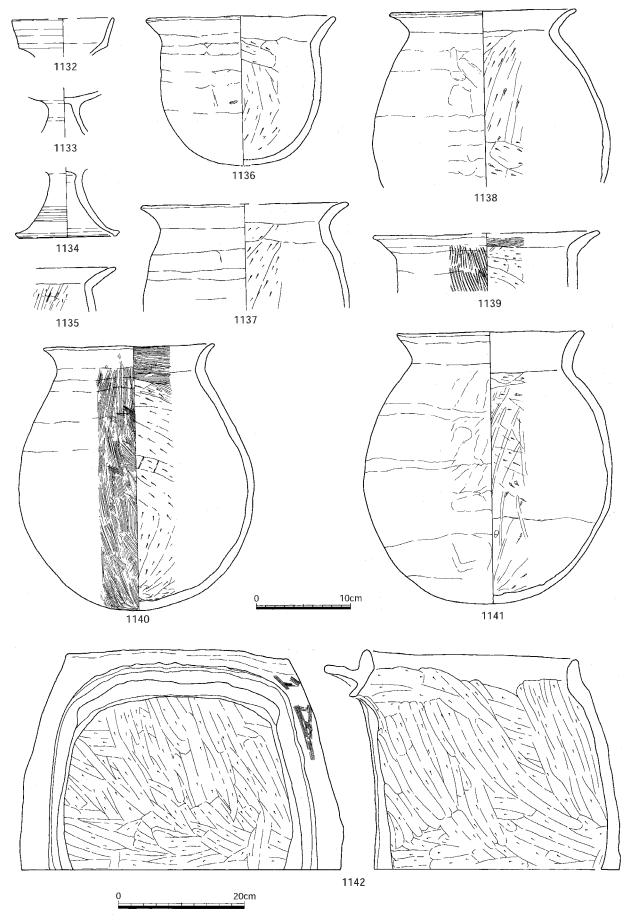
先述の竪穴住居29から約3m南東側に位置している方形を呈する竪穴住居である。規模は長軸5.86m、短軸4.95m、深さ27cmを測り、床面積は23.1㎡である。床面には貼り床は認められなかったが、中央部に径50cm前後の被熱痕跡が確認された。その周囲には炭などは認められない。埋土は3層認められ、いずれも炭が含まれている。



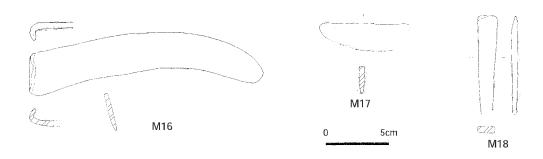


第358図 竪穴住居30 (1/60)・カマド (1/20)

移動式のカマドは住居南西隅から検出され、その中に口縁部付近まで煤が認められる、完形の土師器甕1140が置かれていた。検出時のカマドの焚き口方向が南側を向いていることから、使用時の状況とは考えられない。甕をカマド内に入れ、意図的に廃棄したものであろう。床面からは遺物が多数出土し、土師器甕1136は東側中央部から出土したものである。また住居内からではない



第359図 竪穴住居30出土遺物① (1/4,1/6)



第360図 竪穴住居30出土遺物②(1/3)

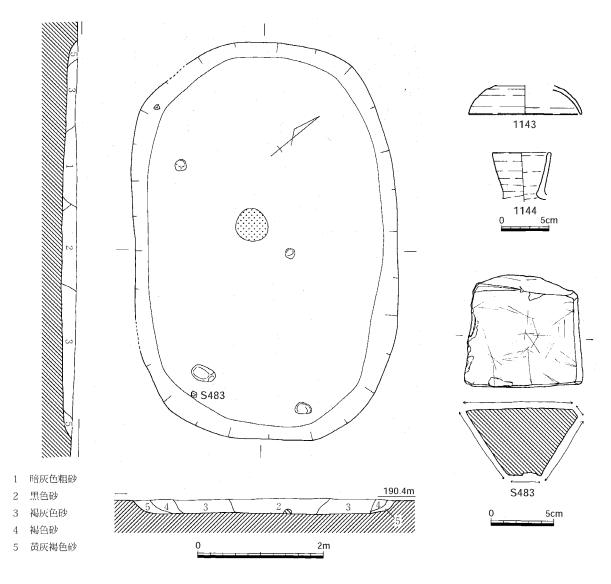
が、その出土位置から、この住居に伴うと想定される鉄鎌M16が認められる。

住居の時期は古墳時代後期である。

(小嶋)

# 竪穴住居31 (第343・361図、図版66)

3 809 E b 区に位置している住居である。長軸6.30m、短軸4.15mを測り、床面積は18.5㎡であった。



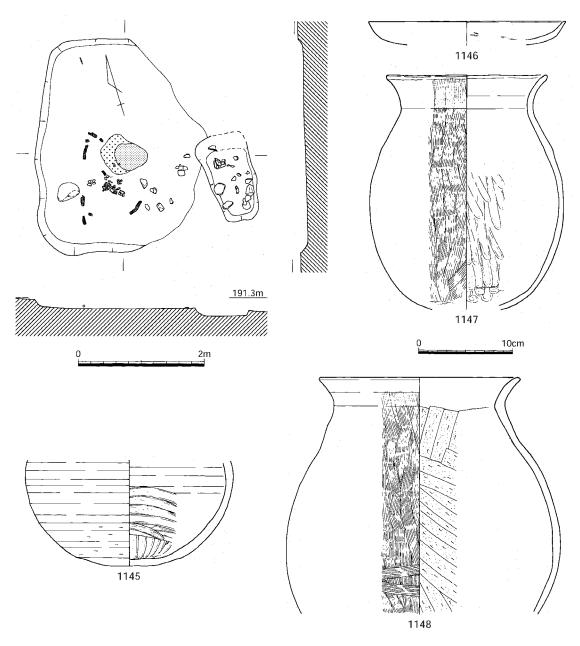
第361図 竪穴住居31 (1/60)・出土遺物 (1/4, 1/3)

検出面から25cmの深さを測る床面には、中央部に被熱痕跡が径50cmの範囲で認められた。南西辺側で 砥石S483と30cm大の河原石が検出されている。

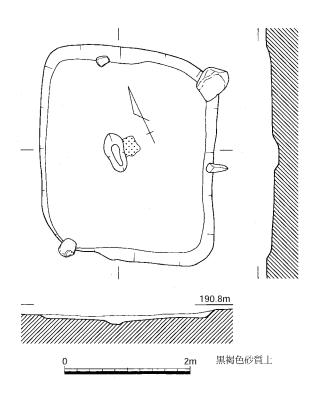
遺構の時期は古墳時代後期に比定される。 (小嶋)

竪穴住居32 (第345・362図、図版66・67・72)

3800 C g区の南東で検出した竪穴住居で、窪地3と重複する。砂礫層上に堆積する黒褐色の包含層を掘り下げ中に、炭化材の集中する個所が確認されたので周辺を精査したところ、住居と思われるコ字形をなす掘り方が検出された。また、その東側には土器を含む方形土壙が確認され、これを屋内施設と考えると、その規模は長軸3.5m、短軸3.35m、面積11.5㎡の方形に復元される。海抜191.2mにある床面の中央には被熱面が認められるが、壁体溝は検出できなかった。方形土壙は長軸1.4m、短軸75cm、深さ22cmを測る。



第362図 竪穴住居32(1/60)・出土遺物(1/4)



第363図 竪穴住居33 (1/60)

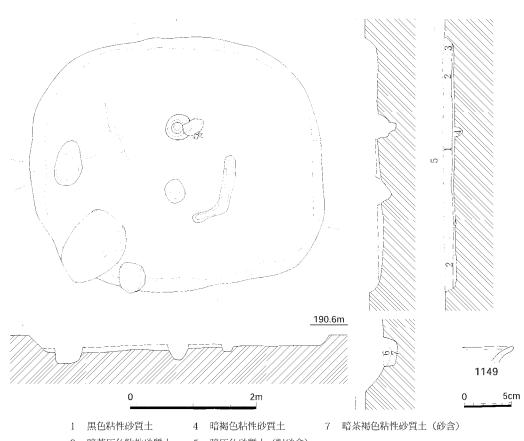
出土遺物には土師器の甕1147・1148や須恵器の壺1145、刀子(未掲載)があり、6世紀後半と推定される。 (亀山)

### 竪穴住居33 (第344・363図、図版67)

窪地3から南へ延びる谷状の窪地で検出した竪穴住居である。長軸3.4m、短軸2.76mの方形を呈し、面積は7.2㎡を測る。海抜190.3mにある床面には柱穴や壁体溝は見られないが、中央に穿たれた長軸64cm、短軸33cm、深さ12cmの楕円形をなす土壙に接して被熱面が広がっていた。遺物は出土していないが6~7世紀に属する可能性が高い。 (亀山)

#### 竪穴住居34 (第345・364図)

調査区の西側、3806 C g区に位置している 平面形が隅丸方形を呈する竪穴住居である。 規模は長径4.64m、短径4.02m、深さ19cmを



2 暗茶灰色粘性砂質上

5 暗灰色砂質上(粗砂含)

3 暗灰色粘性砂質土

6 暗褐色粘性砂質土

第364図 竪穴住居34(1/60)・出土遺物(1/4)

測り、床面積は13.4㎡、床面の海抜は190.3mである。第5層が貼り床と考えられる。柱穴は2個であり、壁体溝はみられない。北西には方形土壙を伴っており、その規模は長径71cm、短径43cm、深さ22cmである。実測に耐える遺物は少なく、壺1149などが出土している。時期は古墳時代に属すると考えられるが、細かい時期については不明である。礫については住居に伴うものではない。 (團)

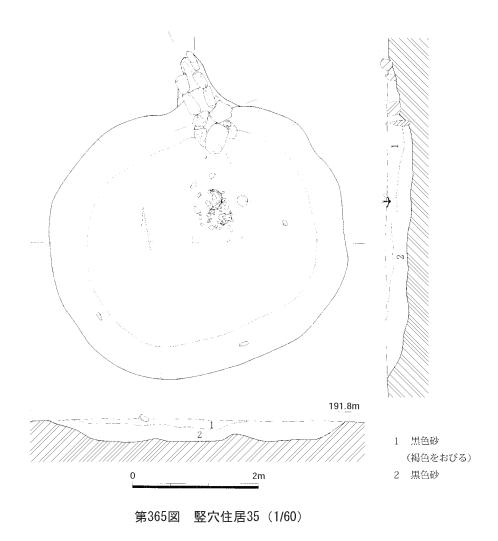
#### 竪穴住居35 (第346・365~368図、写真6)

遺跡のほぼ中央で検出した楕円形の竪穴住居である。東西にやや長く、東西4.75m、南北4.23m、深さ40cmを測る。壁面は30°前後の緩傾斜を示しているが、基盤層が砂であるため、埋没の過程で崩壊しているとみられる。また、崩壊を考慮すれば、本来の平面形は隅丸方形に似た形であった可能性も考えられる。

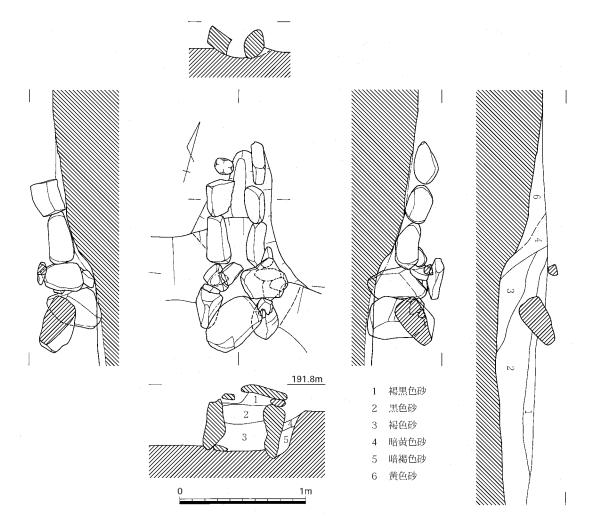
住居の北側には石組みのカマドが設けられている。2列の石組みを設けて焚き口から煙道を構築したもので、石組みの全長1.58m、内法32~12cmを測る。壁面のうち南の2石は石材を縦に、奥側3石は横長に配されていた。また、焚き口に近い南端部には天井石が2石遺存していた。石組み南側の焚き口が想定される部分を精査したが、被熱面や土作り施設などは認められなかった。

床面からは精査にもかかわらず、柱穴は認められなかった。

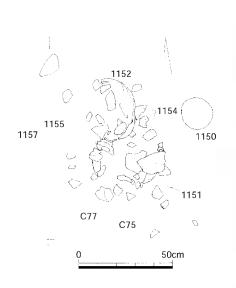
遺物は覆土上面、住居のほぼ中央にあたる位置からまとまって出土したが、床面および覆土下部に は含まれていなかった。覆土上面の遺物は須恵器杯蓋・横瓶、土師器杯・椀からなり、他に土馬の破



-237-



第366図 竪穴住居35カマド (1/30)

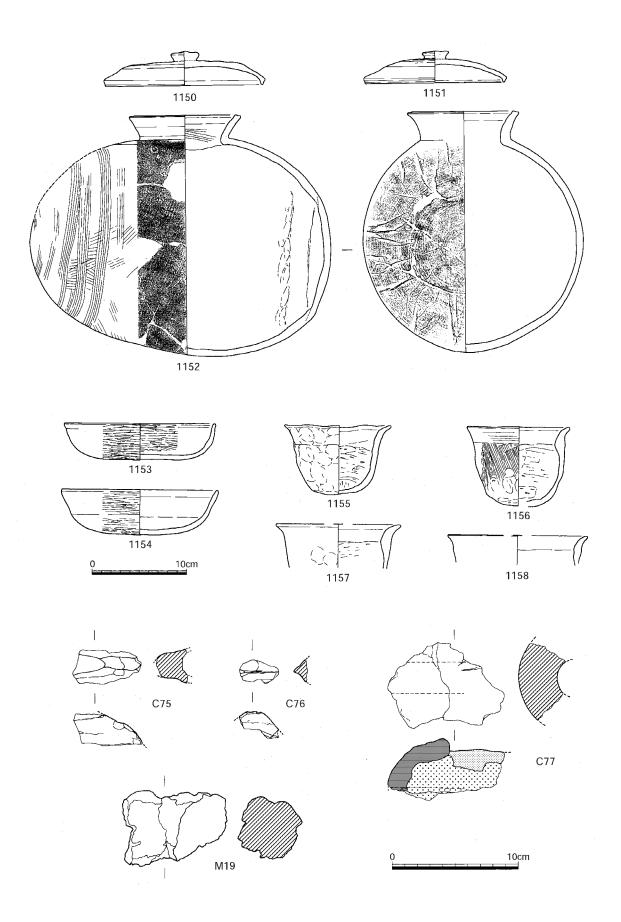


第367図 竪穴住居35埋土上面 遺物出土状態(1/20)



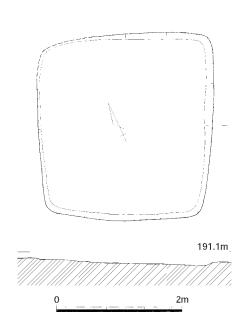


写真6 竪穴住居35清掃およびカマド検出作業(南から)



第368図 竪穴住居35出土遺物 (1/4,1/3)

片 C75・76、羽口 C77、流出孔滓M19などが含まれていた。これらは住居埋没後の窪みに廃棄されたとみられる遺物であり、住居の年代を示すものではないが、古代の一括遺物として重要である。住居の年代を示す遺物はないが、上記の遺物は8世紀初頭の年代を示しており、住居は7世紀代のものと判断する。



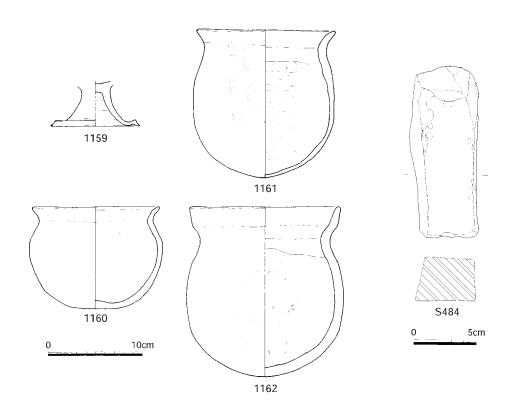
### 竪穴住居36 (第346・369図)

3809Db区で検出した方形の竪穴で、遺跡のほぼ中央に位置する。長軸2.96m、短軸2.82mの方形を呈し、床面積は6.9㎡と小形である。深さ10cmと浅い位置にある床面は海抜190.6mを測る。主柱はなく、壁体溝や被熱面などの付属施設も見られないため、住居とは異なる可能性がある。

出土遺物には土師器の甕や須恵器の高杯、砥石がある。1161・1162は外反する口縁部と球形の体部を持ち、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。1159は端部を下方に折り曲げる脚部で、7世紀前半に位置づけられる。 (亀山)

#### 竪穴住居37 (第374・370図)

3 906 C g区に位置しており、長辺は3.9m、短辺3.35mの小形で歪な方形を呈する竪穴住居である。



第369図 竪穴住居36(1/60)・出土遺物(1/4,1/3)

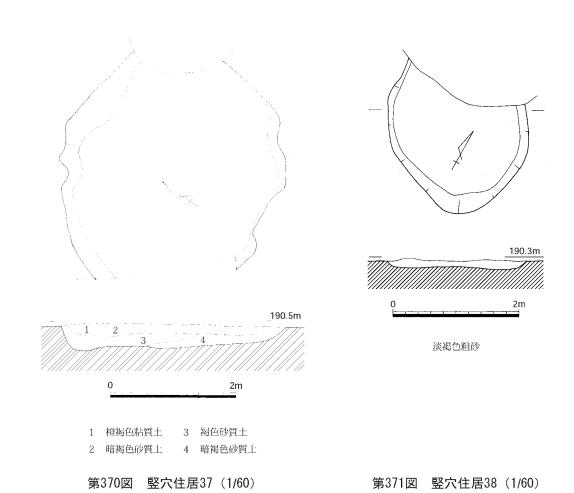
床面上には柱穴、壁体溝、焼土面はみられなかった。洪水砂上で検出しており、検出中および周辺から図化しえないほどの須恵器杯の細片が出土した。

この遺構の時期は、後期と思われる。

(弘田)

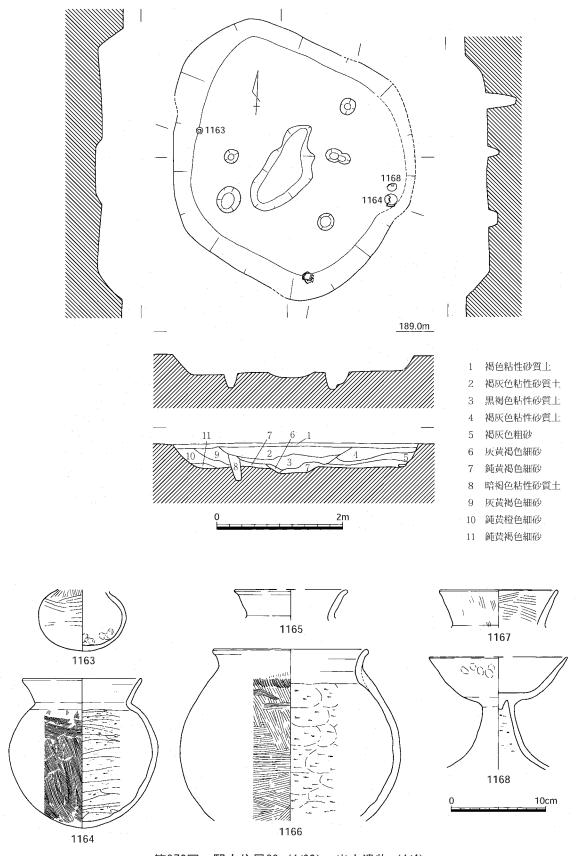
#### 竪穴住居38 (第347・371図)

3906 C g区に位置しており、先の竪穴住居37を切る、1辺2 m強の小形の住居である。竪穴住居37と同様で、床面上には柱穴、壁体溝、焼土面はみられなかった。住居以外の機能も考えられる。 時期も竪穴住居37と近い後期と思われる。 (弘田)



#### 竪穴住居39 (第349・372図、図版69・73)

4006 E a 区で検出された。検出当初は住居跡という認識が持てず、一部が後世に破壊されていることもあって、掘り下げに手間取った。主柱穴は第372図下段の上の断面図に示された2個の柱穴と考える。この主柱穴を結ぶ線と竪穴の平面形を見比べると、平面形を隅丸方形とすれば、柱穴を結ぶ線は対角線に近くなり、方形の軸線から大きく離れることになる。極めて異例で、検出過程に問題があったと認めざるを得ないが、南端からの土器の出土を考慮すれば、平面形が不整円形であった可能性も残される。住居の中央部分には不整楕円形の窪みがあり、この掘り下げ中に炭を少量検出している。火処はなかった。埋土の堆積は複雑で、埋没に時間がかかったようである。第8層の柱痕の存在は、柱が折損した状態で残っていたものとみられる。完形に近い土器片が出土しているが、1164のみが床面に着いていた。住居内からは土師器のみが出土した。5世紀代のものと考える。(岡本)

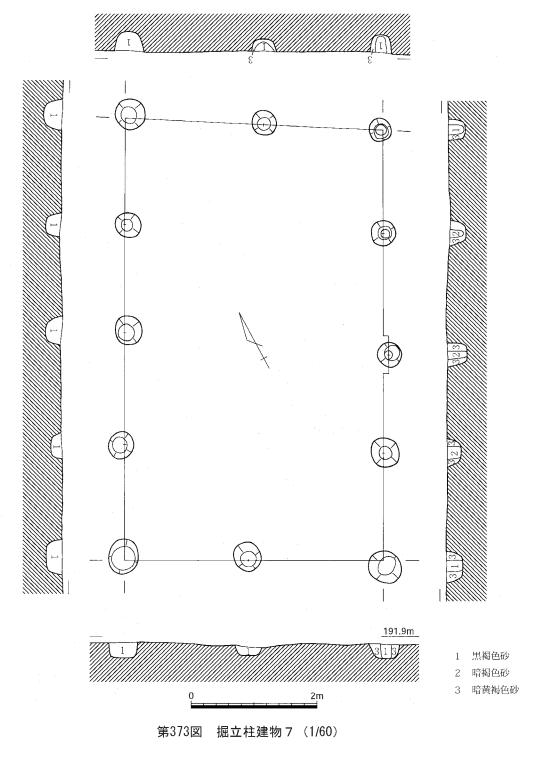


第372図 竪穴住居39 (1/60) - 出土遺物 (1/4)

# 3 掘立柱建物

#### **掘立柱建物7** (第340・373図、図版69)

遺跡の最北端で検出された3×2間の側柱建物である。棟方向はほぼ南北方向を示すが、やや東に振る。柱間は最長でも2m未満で、バラツキが目立つ。柱掘り方はほぼ円形を示し、柱通りは直線的である。一部の掘り方には、柱痕跡が観察される。後述の古代建物の構造に比べると、柱間が狭いことに加え、周辺を含め古代の出土遺物が皆無であることから、古墳時代に比定している。 (岡田)



-243-

# 4 土壙

# 土壙107 (第340・374図)

3 6 03 D f 区から検出された土壙である。平面形はやや大きな楕円形に近い形態を呈し、長径2.43 m、短径2.01 m になっていた。検出面からの深さは66 cm で、拳大の河原石を含む鈍黄褐色粘性砂質土と暗褐色粘性砂質土が堆積していた。断面形はⅢc で、遺物は何も出土しなかった。 (福田)

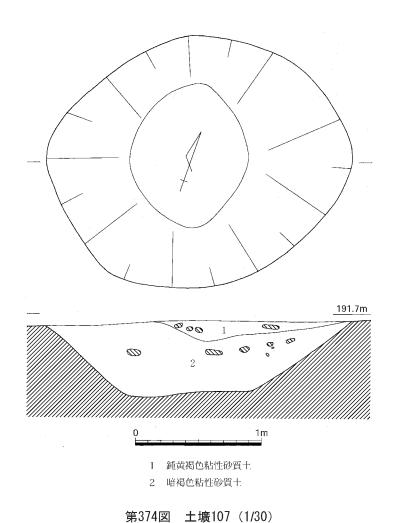
#### 土壙108 (第340・375・376図、図版73)

3 6 04 De区から検出された上壙で、後述する上壙111を新しく切っていた。平面形はやや大きな不整形を呈し、北側の幅が狭くなっていた。検出面での計測値は、長径3.58m、短径2.56m、深さ24cmであった。この土壙の断面形はⅢbで、内部には鈍黄褐色の砂が堆積していた。

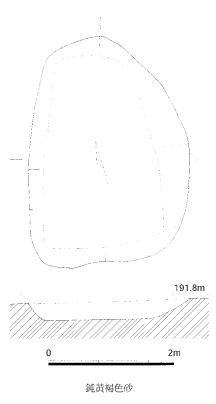
出土遺物としては、壺の口縁部と思われるもの1169、甕の口縁部から頸部にかけての破片1170~1174、坩1175・1176があるが、煤の付着が認められるものが多い。 (福田)

#### 土壙109 (第340・377図)

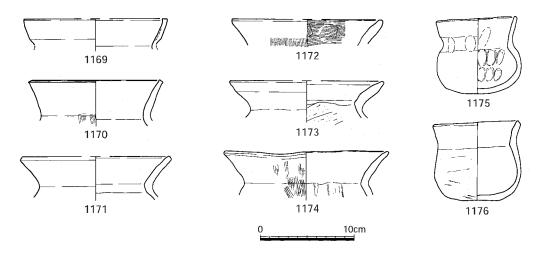
3 6 04 D f区から検出された土壙で、南には後述する土壙110が存在する。平面形は円形に近い形態を呈し、長径1.79m、短径1.69mになっていた。検出面からの深さは17cmを測り、断面形はⅢaであった。この土壙の底面はほぼ水平で、内部には鈍黄褐色の砂が堆積していた。



出土遺物には、土師器の甕の口縁 部から頸部にかけての破片1177が採 集されている。 (福田)



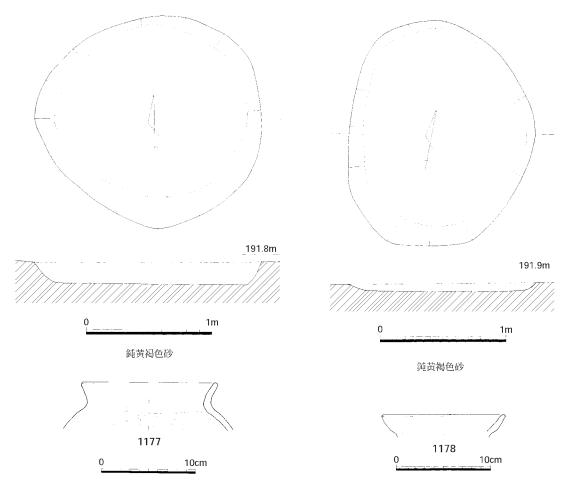
第375図 土壙108 (1/60)



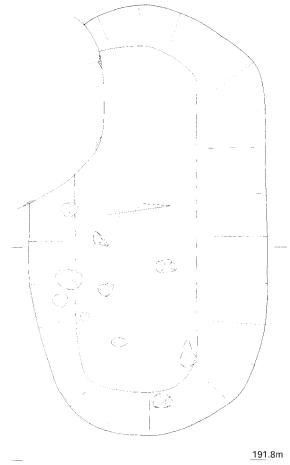
第376図 土壙108出土遺物 (1/4)

# 土壙110 (第340・378図)

3604Df区から検出された土壙で、北側には土壙109が、また北東側には土壙112が、それぞれ近 接して存在する。平面形は楕円形に近い形態を呈し、長径1.79m、短径1.49mになっていた。検出面



第377図 土壙109 (1/30)・出土遺物 (1/4) 第378図 土壙110 (1/30)・出土遺物 (1/4)



からの深さは8cmと浅く、断面形はⅢaであった。この土壙の底面はほぼ水平で、内部には鈍黄褐色の砂が堆積し、口径10.4cmを測る土師器の甕1178が出土した。 (福田)

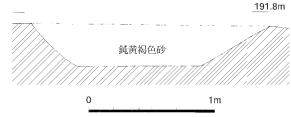
#### 土壙111 (第340・379図)

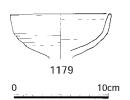
3604De区から検出された土壙で、南西部分が前述した土壙108に切られていた。平面形は長大な楕円形に近い形態を呈て、規模は長径が3.41m、短径は1.89mになっていた。検出面からの深さは32cmで、断面形はⅢaであった。この土壙の底面はほぼ水平で、内部には鈍黄褐色の砂が堆積していた。

出土遺物として、口径10.4cmを測る須恵器 の高杯の破片1179がある。 (福田)

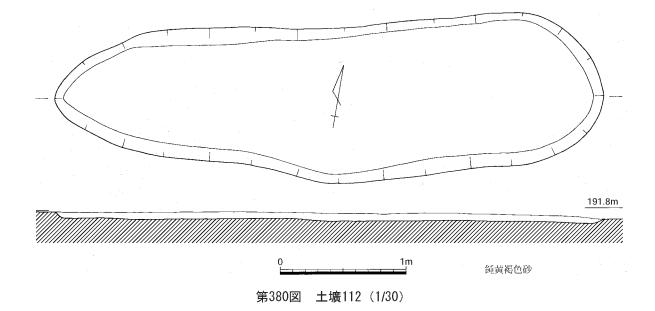
#### 土壙112 (第340・380・381図)

3604Df区から検出された土壙である。平 面形は長大かつ不整形な形態を呈し、長径4.34 m、短径1.21mになっていた。検出面からの深



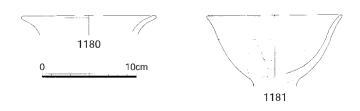


第379図 土壙111 (1/30)・出土遺物 (1/4)



さは7cmと極めて浅く、断面形はⅢ aであった。この土壙の底面はほぼ 水平で、内部には鈍黄褐色の砂が堆 積していた。

出土遺物として、土師器の甕の口 縁部1180と高杯または台付鉢の上部 1181がある。 (福田)

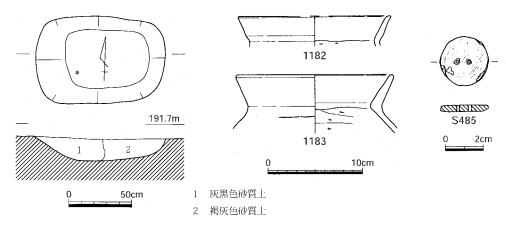


第381図 土壙112出土遺物(1/4)

#### 土壙113 (第340・382図)

3 6 06 Dh区の北東端部において検出した。平面形は約100×70cmの隅丸長方形を呈し、深さは18cm 残存していた。断面形は皿状で、埋土は2層に分離したが、明瞭ではなかった。

埋土中からは、土器・石製品が出土した。1182・1183は土師器の甕である。口縁部が「くの字」状を呈し、内面は頸部までヘラケズリを施しているのが特徴である。S485は滑石製の双孔円盤である。時期は明確ではないが、5世紀代と考えている。 (平井)



第382図 土壙113 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2)

### 土壙114 (第340・383図)

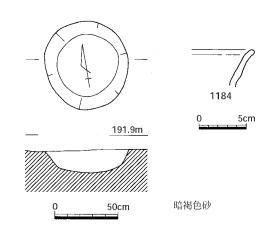
3606Dg区に位置している土壙である。平面形は円形を呈し、その規模は長軸70cm、短軸66cm、深さ18cmを測る。底面は緩やかな弧状を呈し、壁面は逆「ハの字」状に立ち上がる。

遺物は土師器甕1184の口縁部のみ出土している。

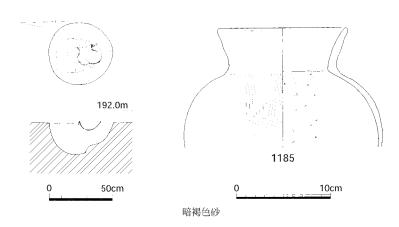
遺構の時期は、出土遺物の特徴や埋土から古墳時代に比定される。 (小嶋)

# 土壙115 (第340・384図、図版74)

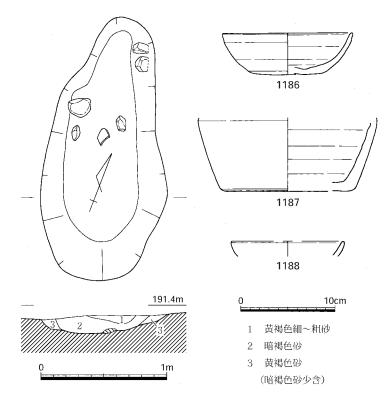
3608Dg区で検出された土壙で、平面 形は径約50cmの円形を呈している。断面形



第383図 土壙114 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第384図 土壙115 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第385図 土壙116 (1/30)・出土遺物 (1/4)

は途中で傾斜が変わっている。最深部で検出面から24 cmを測る。

遺物は土師器壺1185が出土している。調整は外面がハケメ、内面がヨコナデおよびヘラケズリが施されている。外面には煤が付着していた。

出土遺物や埋土の状況から、遺構の時期は古墳時代 に比定される。 (小嶋)

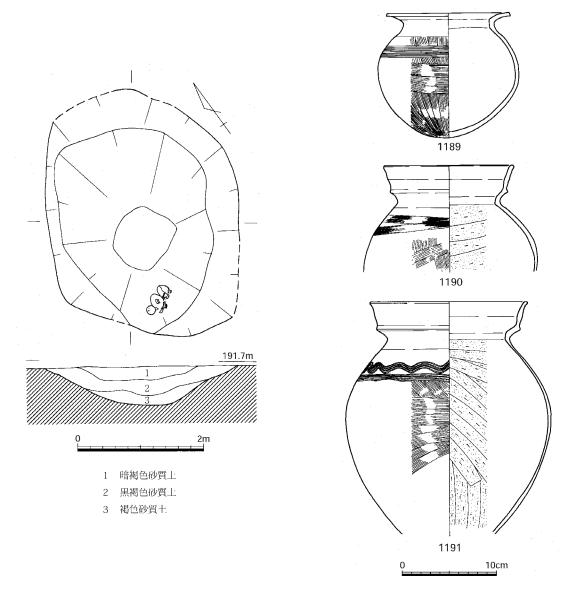
土壙116 (第341・385図) 3705Dh区に位置し、 溝34を切っている土壙である。平面形はやや不整形な 楕円形を呈し、その規模は 長軸2.1m、短軸1.0m、深 さ14cmを測る。底面上に河 原石が検出されたが、意図 的な配置ではない。

遺物は須恵器杯身1186、須 恵器壺1187、土師器杯1188、 鉄滓等が出土した。須恵器 壺の底部には自然釉が認め られ、土師器杯には赤色顔 料が塗布されていた。土師 器杯の調整は剥落して不明 である。

遺構の時期は、出土遺物 の諸特徴や埋土から古墳時 代に比定される。 (小嶋)

#### 土壙117 (第344·386図、図版74)

3709 Db区で検出した大形の土壙である。長軸1.86m、短軸1.55mの不整楕円形を呈し、深さ31cm を測る断面はすり鉢状をなす。埋土の状況からすると、流水などによって形成された窪みと考えられる。南西の法面からまとまって出土した土師器の甕のうち、1190・1191はヨコナデで調整する二重口縁をもつ山陰系の甕で、やや張りのある肩部には波状ないし平行沈線を巡らす。下方にすぼまる体部から尖りぎみの底部が想定され、古墳時代初頭に位置づけられる。 (亀山)



第386図 土壙117 (1/60)・出土遺物 (1/4)

#### 土壙118 (第346・387図)

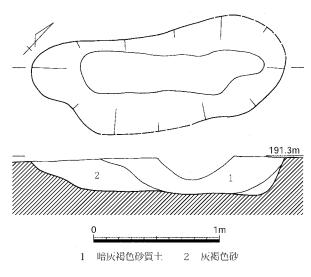
遺跡の中央部、墓5の北西方8mで検出 された。

長径2m、短径70cm前後、深さ約25cmを 測るやや大型の土壙である。

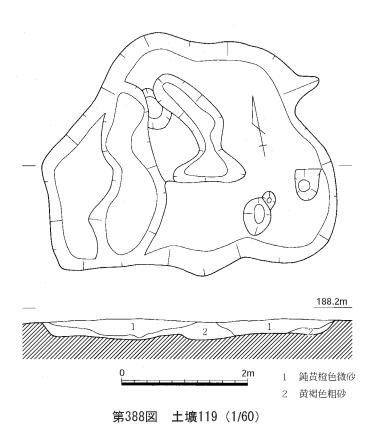
埋積土は下層に灰褐色砂、上層に暗灰褐 色砂質土が堆積する。

平面形は、墓のように整った形状を示さず、特に壙底は起伏がある。

出土遺物は皆無であるが、検出状況や埋 積土から、古墳時代に比定される可能性が 最も高い。 (岡田)



第387図 土壙118 (1/30)



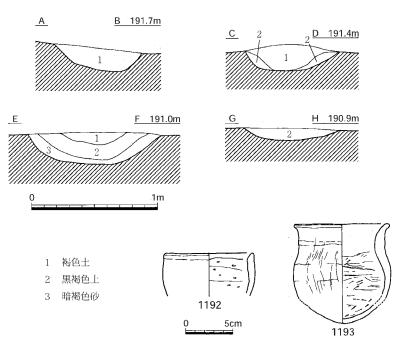
土壙119(第349・388図、 図版58)

4 005 Di 区に位置し、厚く 堆積している洪水砂層を除去 した段階で検出された。検出 地点は縄文時代に河道があっ た窪地に降る緩斜面にあたる。 上壙の平面形は極めて不整形 で、広い底面も10cm前後の高 低差で凹凸が認められる。長 軸4.62m、短軸3.68mの大き さは竪穴住居として適当だ が、出土遺物はなく、柱穴状 の遺構も確認されないので、 その形状からしても人為的な 遺構かかなり疑問がある。埋 土は砂で、下層は粗砂からな っていた。 (岡本)

# 5 溝

# 溝33 (第340~343·389図)

3608Di区から3806Ea区にかけて検出された溝である。久田原遺跡の東側をほぼ一直線に北から



第389図 溝33 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

南へと流走し、検出長約260 mを測る。北端は河道8、南端は中世の落ち込み3により削平され、給排水状況は不明である。幅は約70cm、深さ約20cm、比高差は1.6mを測る。

出土遺物は少なく、わずかに土師器鉢1192、土師器壺1193が図示できたにすぎない。壺の外面には縦方向の工具ナデが施されている。

遺構の時期は、河道8・9 や土壙墓2・3等に切られていることや、出土遺物の諸特徴から古墳時代前半期に比定される。 (小嶋)

#### 溝34 (第341·390図)

3 704Dh区に位置し、北東-南西方向に流走している溝である。検出長約10m、幅63cm、深さ12 cmを測る。遺物は土器細片が出土したのみで、図化可能なものはない。

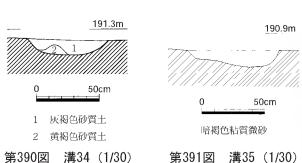
時期は埋土や遺物から古墳時代に比定される。

(小嶋)

溝35 (第342・391図、写真7)

3708Ea区に位置し、竪穴住居25の北・西辺の上部を切っている溝である。検出長は6.5mであっ た。溝は幅72cm、深さ14cmを測る。埋土は暗褐色粘質土の1層で土師器甕細片が出土している。

遺構の時期は検出状況や遺物から古墳時代後期に比定される。 (小嶋)



第390図 溝34 (1/30)

溝35検出状況(西から) 写真7

#### 溝36 (第343・392図)

3805Dh区で検出された検出長約5mの溝であ る。流走方向はほぼ東-西であった。幅10cm、深 さ4cmであるため、耕作溝の可能性が高い。

遺物は須恵器壺1194、土師器小片、鉄滓、炉壁 等が出土している。

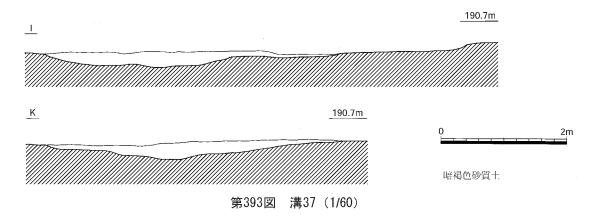
191.0m 1194 50cm 5cm 暗褐色砂

第392図 溝36 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

(小嶋) 遺構の時期は古墳時代後期である。

### 溝37 (第343・393図)

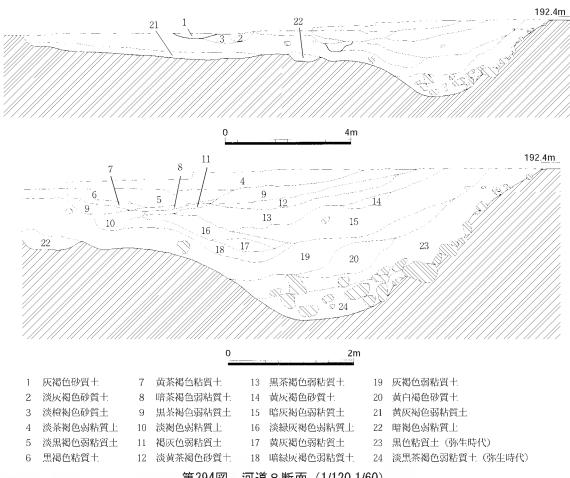
3902Cj区から3907Db区を、北西から南東に蛇行しながら延びる谷状の自然地形で、幅は9m、 深さは26cmを測る。久田原3~7号墳はこの溝に沿って築かれているが、中でも4・5号墳の横穴式 石室はこの溝に向かって開口しており、墓道としての役割を果たしていたと推定される。 (亀山)



#### 河道 6

河道8 (第340・341・394~403図、図版70・74~77)

3 6 02 Dg区から 3 7 03 Fb区にかけて検出した。検出できた最大幅は約20mで、長さは約140mで ある。断面形は南東側が浅く、北東側が一段深くなっており、最も深い部分で、検出面から約2mを



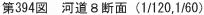


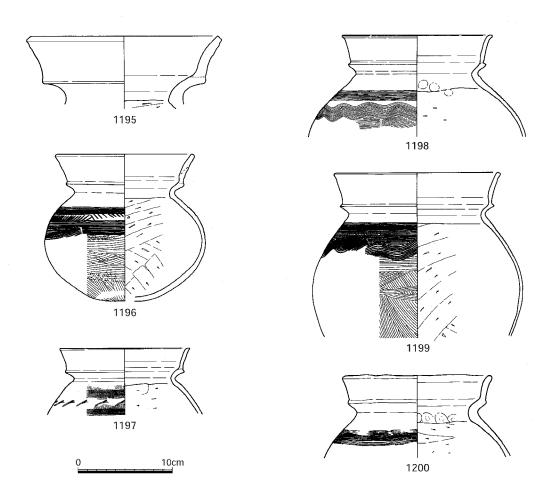


写真8 河道8全景(南から)

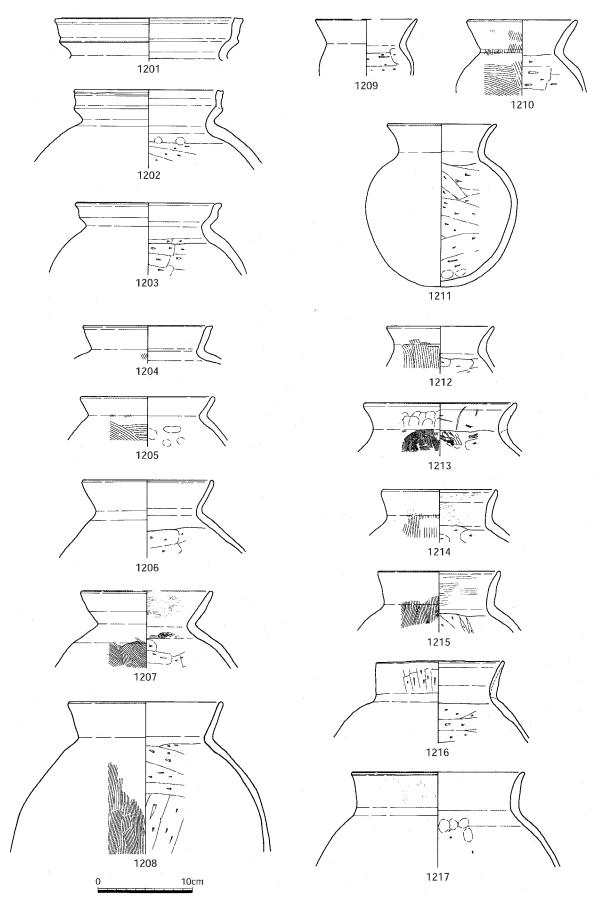
測る。全長のうち南半部では、一段低い部分のみが検出できている。埋土の状況を観察すると、一気に埋没したのではなく、また、4~18層の堆積からは再掘削されたことも想定できる。このことは、出土遺物に時期幅が認められることからも首肯される。

この遺構の性格については、河道という名称で報告してはいるが、底面が砂層であることなどから、 常時水が流れていたとは考えにくい。久田原遺跡の北東端部にあたるこの遺構の東側は、現状でも2 m以上高い河岸段丘が存在し、縄文時代以降、夏栗遺跡が営まれている。したがって、久田原遺跡と 夏栗遺跡との境にある地形変換部が、ある時期洪水などにより河道が走り、その部分が窪地として低 位部の状態で継続されることによって、この遺構が形成されたのではないかと想定している。

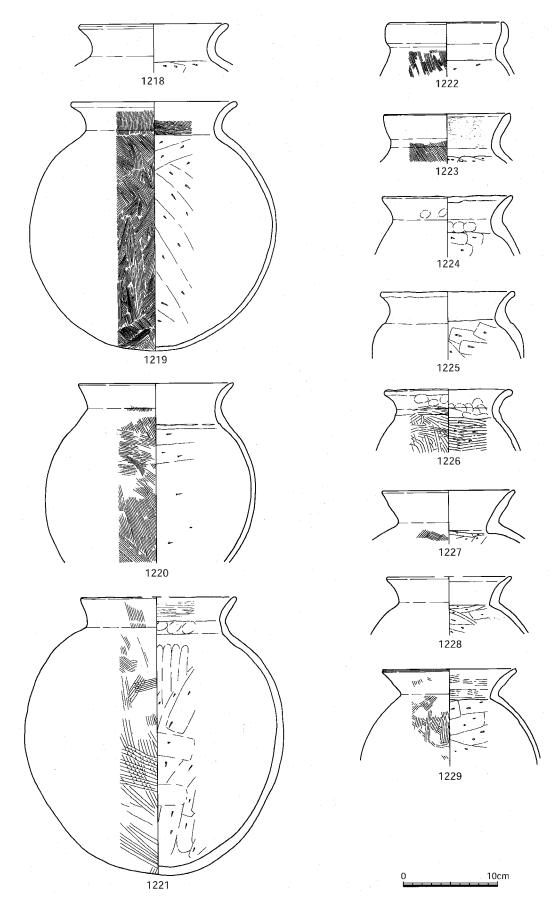
出土遺物には、土器・石器・鉄器がある。1195~1200は古墳時代前期の土器である。1196~1200の 甕の肩部には櫛描文が施されており、山陰地方との関連がうかがえる。1201~1203は古墳時代中期 (5世紀代)の壺と考えている。1204~1256は甕である。口縁部は「くの字」形を呈するが、端部や 屈曲部の形状に違いが認められる。体部の形状は球形から卵形のものが多く、明確に長胴形のものは ない。体部調整は、外面がハケメ、内面がケズリのものが殆どである。こうした特徴から、時期につ いては全てが同一ではなく、ほぼ5世紀前半から6世紀初め頃のものではないかと考えている。1257 ~1261・1264~1270は高杯で、時期は古墳時代前期~中期である。1274は杯で、形状・色調・胎土か ら時期は7世紀後半と考えられる。1276・1277は製塩土器である。1276は5世紀後半、1277は6世紀 と推測されるが、注目できる。1278~1301は須恵器である。1278~1292は杯で、形状や調整から時期



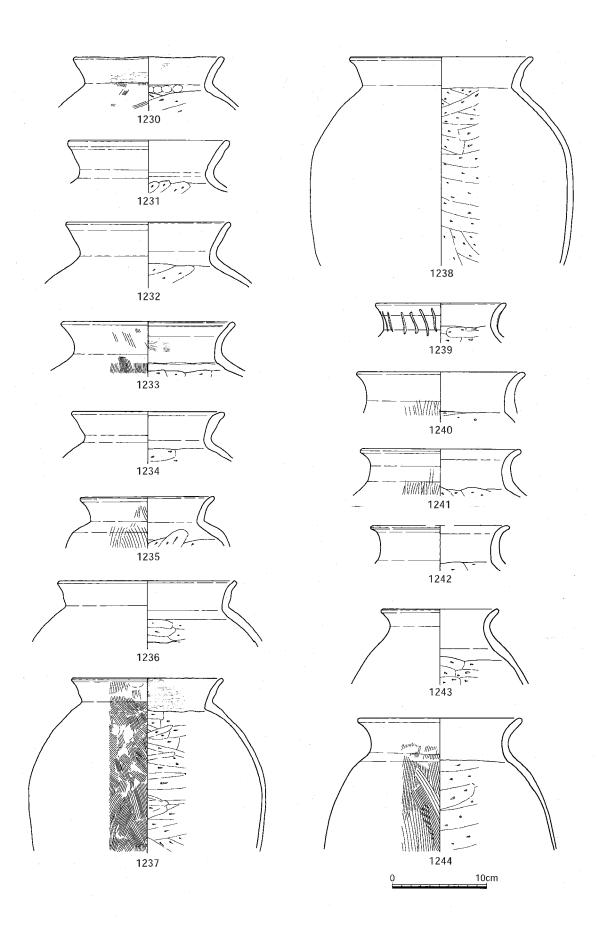
第395図 河道8出土遺物①(1/4)



第396図 河道8出土遺物② (1/4)

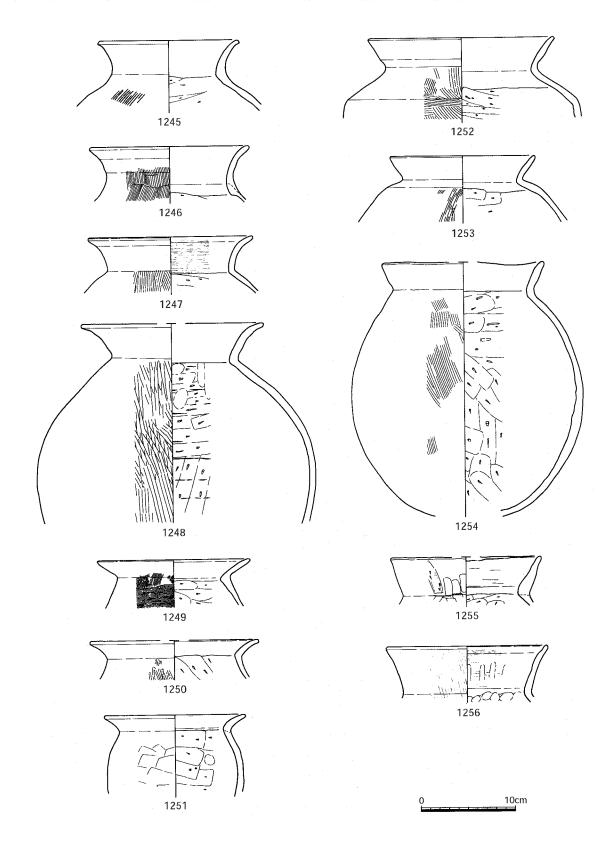


第397図 河道8出土遺物③ (1/4)

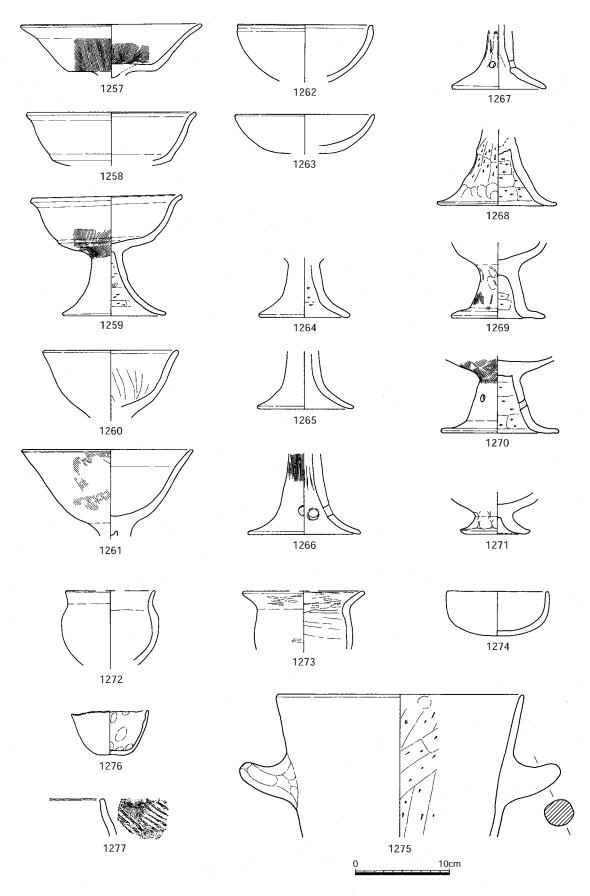


第398図 河道8出土遺物④ (1/4)

は5世紀後半から7世紀中頃と考えている。1293・1294は高杯、1295は平瓶、1297・1298は璲、1299は器台、1300・1301は甕である。1296は鉄鉢で、時期は7世紀後半ではなかろうか。S486は流紋岩製の砥石である。M20~22は鉄器で、M20は鉸具、M21は鏃、M22は鋤か鍬先である。

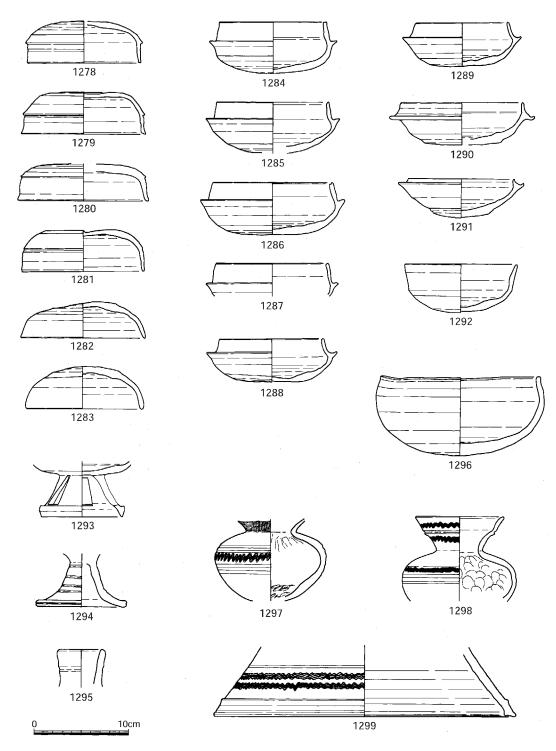


第399図 河道8出土遺物⑤ (1/4)

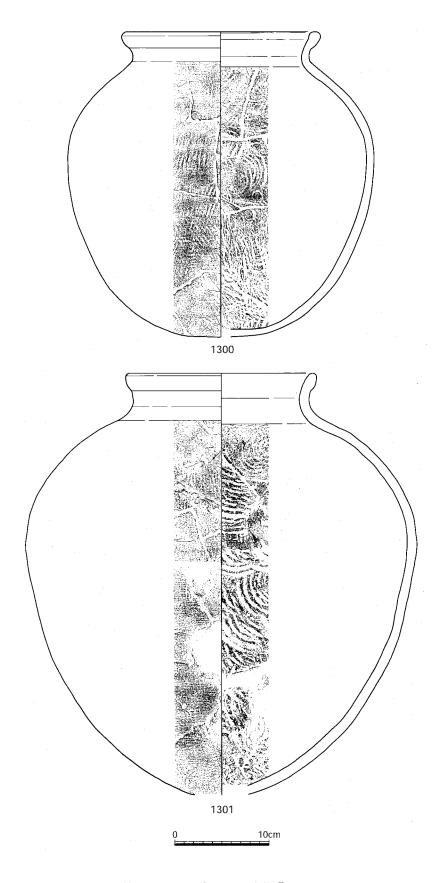


第400図 河道8出土遺物⑥ (1/4)

これらの遺物が出土した層序については、ほぼ第394図の18層を境に上層と下層とに分けて取り上げた。掲載した遺物については、1196・1197・1199・1204・1209・1213・1230・1232・1239・1242・1258・1281・1285・1289・S 486・M22が下層、1195・1201~1203・1205~1208・1210~1212・1214~1229・1231・1233・1236~1238・1240・1241・1243~1249・1251・1252・1254・1256・1257・1259~1270・1272~1277・1279・1280・1282・1284・1286・1288・1290・1291・1293~1295・1297・1298・1300・1301が上層からの出土であり、遺物の出土状況からは、明確な時期的層位関係は捉えら

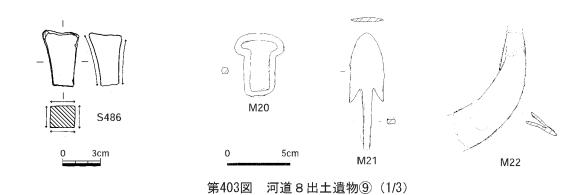


第401図 河道8出土遺物⑦ (1/4)



第402図 河道8出土遺物⑧ (1/4)

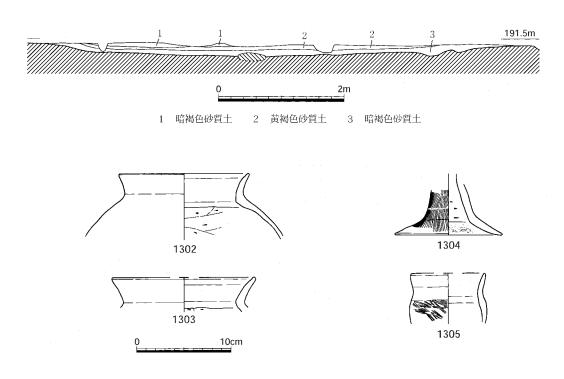
れなかった。 (平井)



河道9 (第341·404図、図版70)

遺跡の中央北部で検出された浅い河道状を示す遺構である。検出全長は約80mに達し、南端は開放して検出不可能となる。検出幅は最大で25m以上の地点もあるが、おおよそ7~10m前後を示す。

深さは約20cm程度で数層の砂質土が堆積するが、出土遺物は極めて少量である。1302~1305は数少ない出土遺物ですべて土師器であるが、この河道に直接伴うか否か、確証に乏しい。 (岡田)



第404図 河道 9 (1/60) - 出土遺物 (1/4)

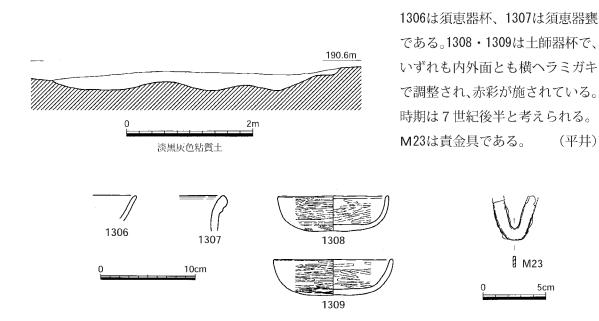
# 7 窪地

窪地2 (第341・405図、図版78・79)

3609Dj区において検出した。平面形は約7×5mの長方形状で、深さは約30cm残存していた。

大規模であることや底面には凹凸が認められることから、窪地として報告している。 埋土は 1 層のみ

で、土器・鉄器が出土している。



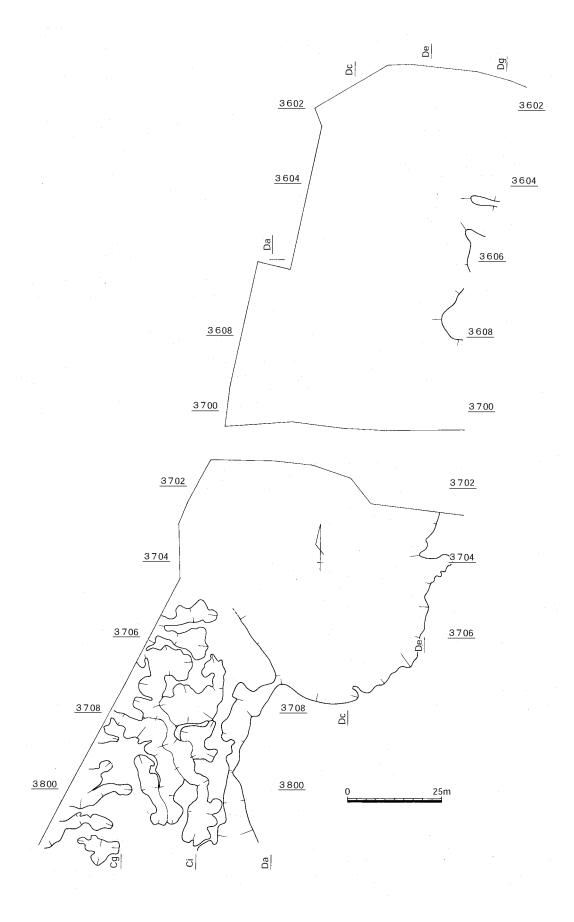
第405図 窪地2(1/60)・出土遺物(1/4,1/3)

**窪地3** (第344・345・406~419図、図版70・78・79)

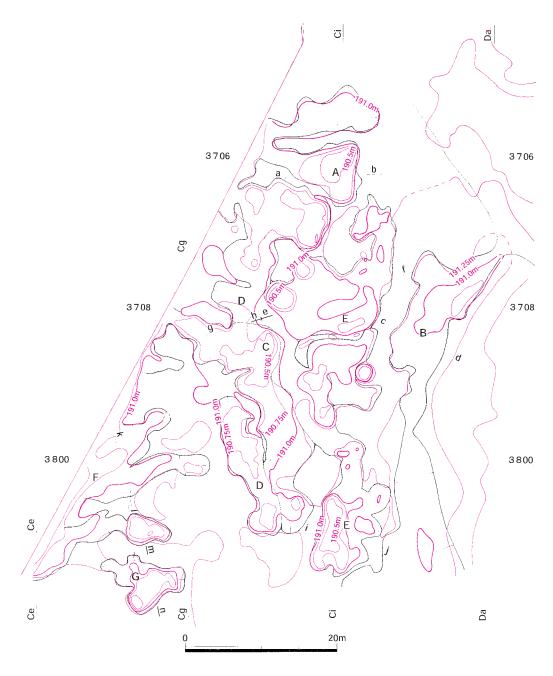
3601~3801 Ce~Dg区の調査区西部で、大きくは西側に下がる状況で検出した。本遺構の北部については全体に窪む状況であったが、南部では砂を基盤層とした面で、北西から南東方向に主軸を持った、やや粘性を帯びた砂質土で埋没した状況を検出した。土層観察の結果、埋土除去後の底面も凹凸が顕著に認められることから、河道の氾濫による自然流路の痕跡と判断される。検出時の状況から、3C・3Dは3Eが埋没後に形成されたことが明らかだが、出土遺物の時期に大差は認められない。各土層断面の観察でも、数回にわたる氾濫によって形成されたことがわかる。

出土遺物は、南部についてA~Gの単位で分割して取り上げを行った結果、3A・3F地点で7世紀後半以降の須恵器がみられるものの、概ね古墳時代前期前半の遺物が主体を占める。これらの遺物は、完形に復元されるものも多く、大形の破片も含めて表面の摩滅が少ないことから、上流から流れて混入したものではなく、近隣集落から持ち込まれたものである可能性が高い。また、3D地点の南端上面には竪穴住居32が築かれていることから、6世紀末頃には比較的安定した状況であったと判断され、1311や1324の須恵器は窪地の形成時期よりも新しい時期の流路に伴うか、該期以降に窪地に持ち込まれたと推察される。したがって、窪地は古墳時代前期前半頃に形成され、小規模な氾濫が続いたものの、6世紀末頃には安定した地区になったと考えられる。

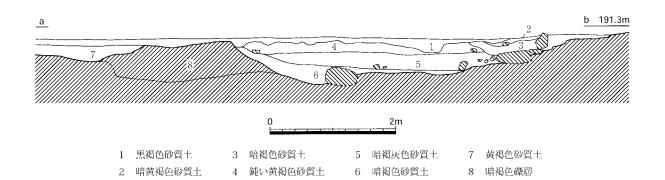
土師器杯1310は内外面に、高杯1316は外面に赤色顔料の塗布が認められる。土師器甕1317はほぼ完形に復元される山陰系の甕である。口縁部下端は鋭くつまみ出され、肩部にはハケメ後に直線文と波状文が巡るが、波状文のみ櫛状工具に変えて施文している。1323も土師器の山陰系甕で、肩部の直線文は上半を幅広な工具によって行い、下半部は幅狭の工具でハケメ工具との差異は認められない。1325は須恵器の杯として図示したが、内面はヨコナデと見込みにはナデの痕跡を明瞭に残すものの、外面は丁寧にナデを行っていることから、杯蓋の可能性もある。 (杉山一雄)



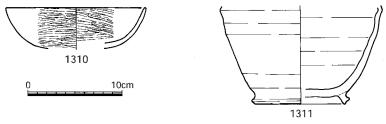
第406図 窪地3 (1/1,000)



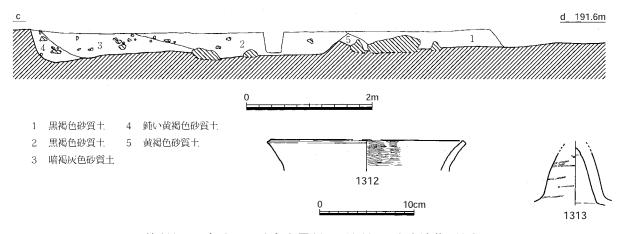
第407図 窪地3南部(1/500)



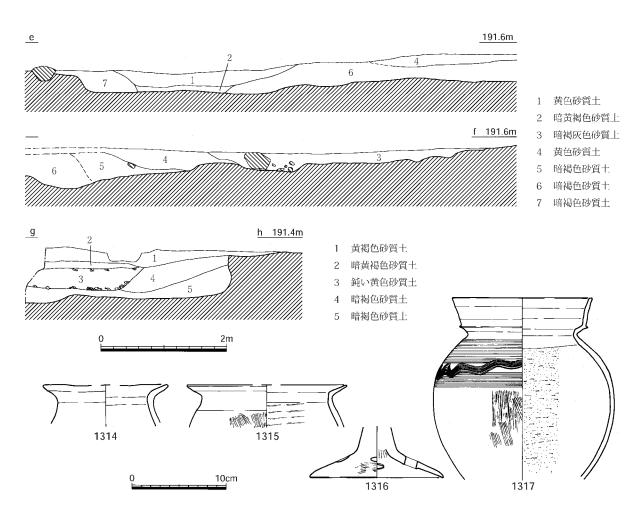
第408図 窪地3A地点土層断面(1/60)



第409図 窪地3A地点出土遺物(1/4)

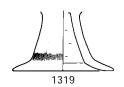


第410図 窪地 3 B地点土層断面 (1/60)·出土遺物 (1/4)



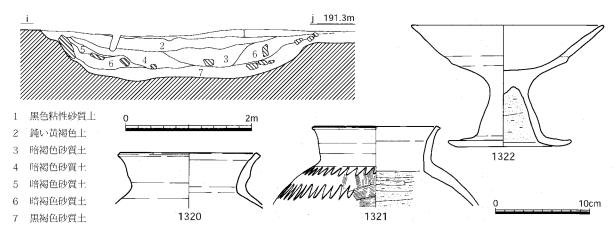
第411図 窪地3C・D地点土層断面(1/60)・3C地点出土遺物(1/4)



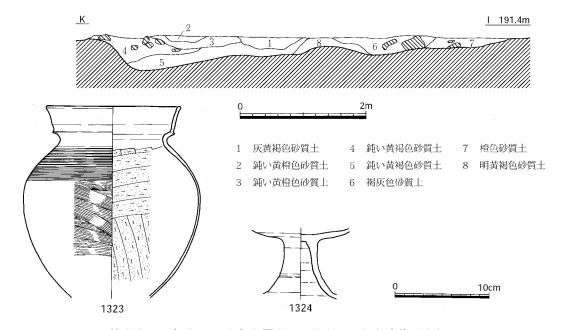




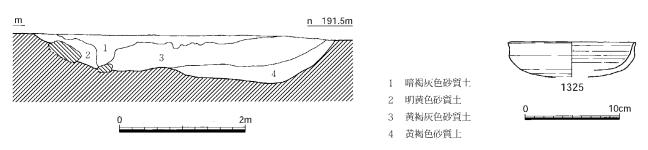
第412図 窪地3D地点出土遺物(1/4)



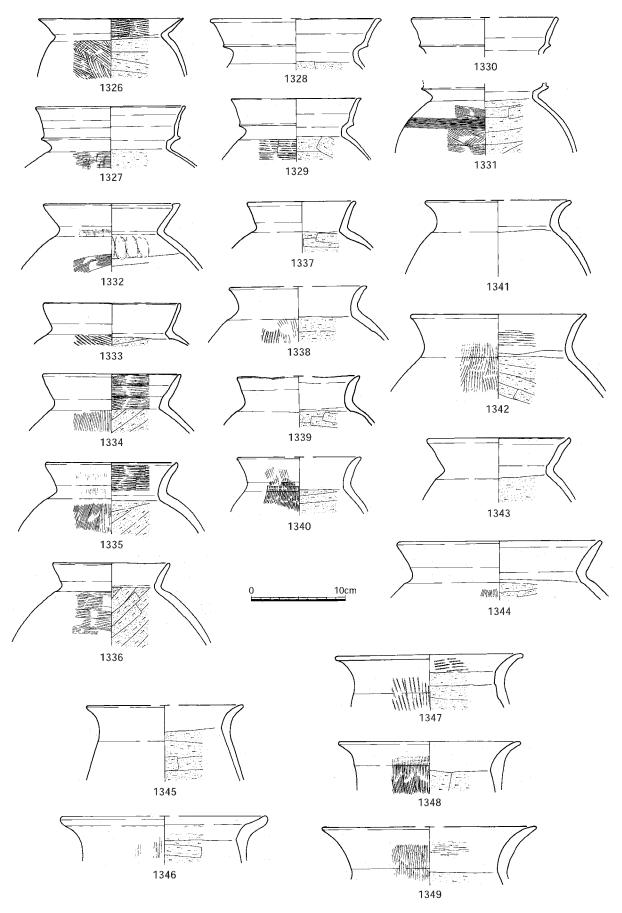
第413図 窪地3 E地点土層断面(1/60)・出土遺物(1/4)



第414図 窪地3 F地点土層断面(1/60)・出土遺物(1/4)



第415図 窪地3G地点土層断面(1/60)·出土遺物(1/4)



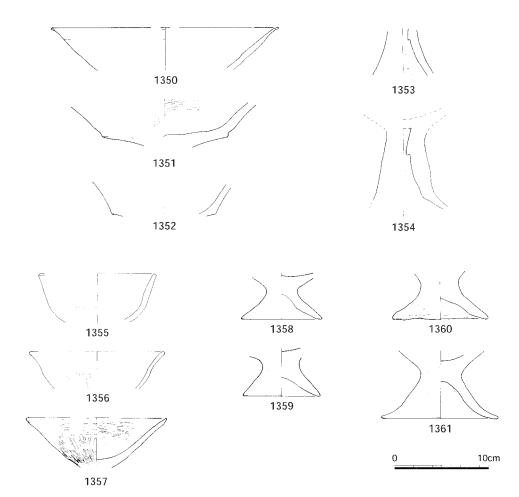
第416図 窪地3出土遺物① (1/4)

以下、窪地3の北半部、面積にして約6,500㎡の概要を述べる。窪地3は久田原遺跡の中でも吉井川に近い位置に展開しており、主として比較的締まった黒褐色粘質土によって埋没していた。この層を除去していく過程において、埋土中に大形の礫が多数含まれていた。

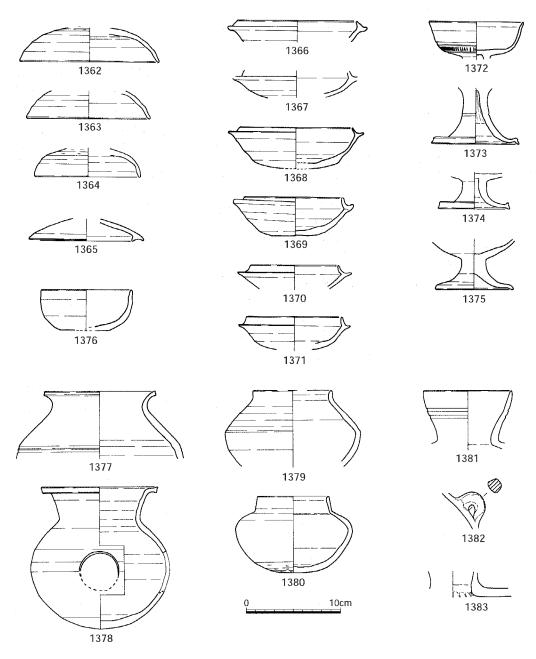
この黒褐色粘質土中からは、第416~418図に掲載している遺物が出土した。土師器の甕1326~1349、高杯1350~1354・1356~1361、杯1355、須恵器の蓋1362~1365、杯1366~1371・1376、高杯1372~1375、壺1377・1378、短頸壺1379・1380、提瓶1381・1382、平瓶1383、ミニチュア土器1384~1402、舟形土製品 C 78である。

上師器の甕は、山陰系の二重口縁のもの1327~1331、口縁部が「くの字」に外反して肩部が張るもの1332~1344、同じく口縁部が外反するが肩部が張らないもの1345~1349があり、ヴァリエーションに富んでいる。時期的にも 4 世紀から 7 世紀に至る長期間のものが含まれている。

以上多様な遺物が出土している。さて、なかでも注目される遺物としては、正確な地点は掲載した 図上に示しきれていないが、当窪地北半東側の肩口の辺りから、1369~1371の須恵器、19点のミニチュア土器、舟形土製品が出土していることであろう。舟形土製品は、その形態に類似したものが香川県の荒神島に所在する荒神島遺跡、櫃石島の大浦浜遺跡などから出土しており、水に関わる祭祀に関係する遺物と思われる。ミニチュア土器がこれらと遠からぬ位置から出土していることからも、祭祀

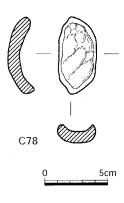


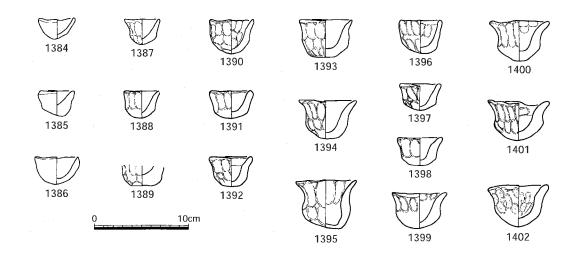
第417図 窪地3出土遺物②(1/4)



第418図 窪地3出土遺物③ (1/4,1/3)

場として裏付けられるであろう。そして祭祀が執り行われた時期は、1369~1371から判断して6世紀末~7世紀初頭と考えられる。ただ、出土遺物の大半は、1332~1344や1350~1361等古墳時代中期に属するもので、完形に復元できるものは皆無であった。つまり、当地より上流に位置する集落から流されたものの、一部が残ったと思われる。このことを踏まえて、当窪地の大半が埋没したのは古墳時代中期ではあるが、その後しばらくは、若干湿地状を呈する場所も残っていて、そこで水辺の祭祀は行われていたのであろう。そして1365、1374~1376の年代観から7世紀後半には完全に埋まり、安定した土地になったと思われる。 (蛯原)

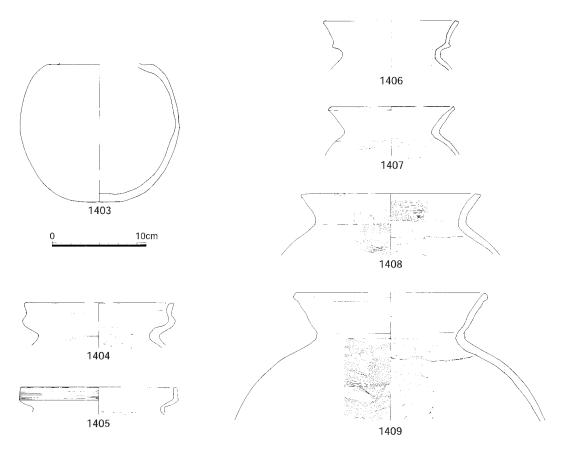




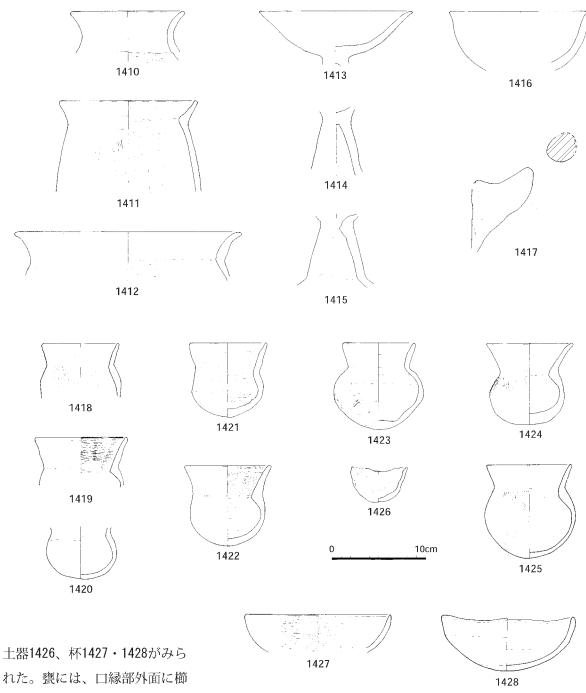
第419図 窪地3出土遺物④ (1/4)

# 8 遺構に伴わない遺物 (第420~422図、図版79)

古墳時代以外の遺構から出土した遺物や、古墳時代の包含層中から出土した遺物を図示している。 それらには、古墳時代初頭に属するものから古墳時代終末の7世紀末に至るまでの時期幅があった。 土師器では、壷1403、甕1404~1412、高杯1413~1415、鉢1416、甑1417、坩1418~1425、手づくね



第420図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



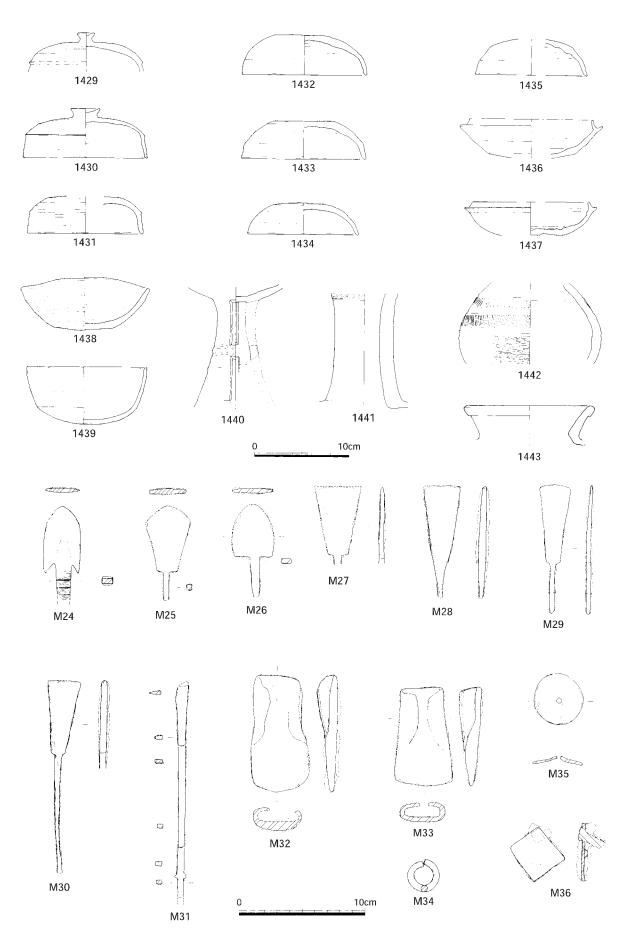
土器1426、杯1427・1428かみられた。甕には、口縁部外面に櫛描沈線文が施される1405がある。現在の県南地域からの搬入品であろうか。1406は二重口

第421図 遺構に伴わない遺物②(1/4)

縁を持つ。杯1428には工具ナデによって成形した後に赤彩が塗布されている。

須恵器では、蓋1429~1435、杯1436~1439、高杯1440、長頸壺1441・1442、甕1443がある。1429・1430は高杯に伴う蓋である。1440は、長脚で2段の透かしを持つ。壺1442は凹線を巡らし、その間を埋めるように刺突文を施している。

金属器には鉄鏃M24~M31、鉄斧M32・M33、耳環(銅製品) M34、紡錘車M35、馬具飾金具M36がある。 (蛯原)



第422図 遺構に伴わない遺物③ (1/4,1/3)

# 第5節 久田原古墳群

## 1 概要

久田原古墳群は12基の古墳、1基の土器棺、5基の箱式石棺、9基の土壙墓からなる。古墳は、1号墳・2号墳がやや北にあるのを除き、ほとんどが遺跡中央からやや南部に分布する。中でも3~7号墳の5基は互いに隣接して存在し(写真9)、1基の上器棺や3基の箱式石棺、1基の上壙墓とともにまとまった墓域を構成している。土器棺や箱式石棺についても、箱式石棺1がやや離れて位置するほかは、ほぼ遺跡中央にある。それらに対して、土壙墓は土壙墓8・9が中央から南に位置するが、主として北側に分布する傾向がある。

古墳のうち周溝の存在が確認されているものは7基あり、方墳の11号墳を除き、いずれも円墳である。主体部は9基で検出しているが、2・4・5・8号墳が横穴式石室を持ち、6・7・9・10・12号墳は竪穴系の主体部であった。出土遺物の大半は須恵器が占めるが、時期的にほかの古墳と比べて遡る11号墳の遺物は、土師器のみで構成される。また2号墳は須恵器の杯や平瓶、土師器の杯とともに、炉壁や馬具も出土している。そのほかの主な遺物としては、2・5・6・11号墳出土の鉄鏃、6号墳から出土の大刀、5・7号墳から出土の管玉、12号墳出土の「×」の墨書土器などが挙げられる。

土器棺は須恵器甕を棺に用い、須恵器杯、長頸壺1点を副葬する。

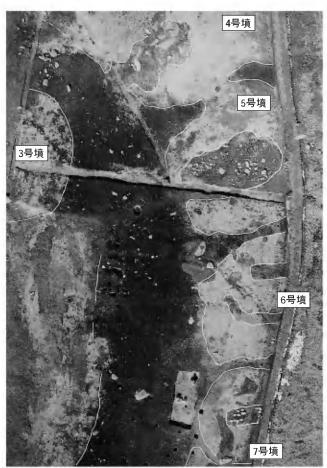
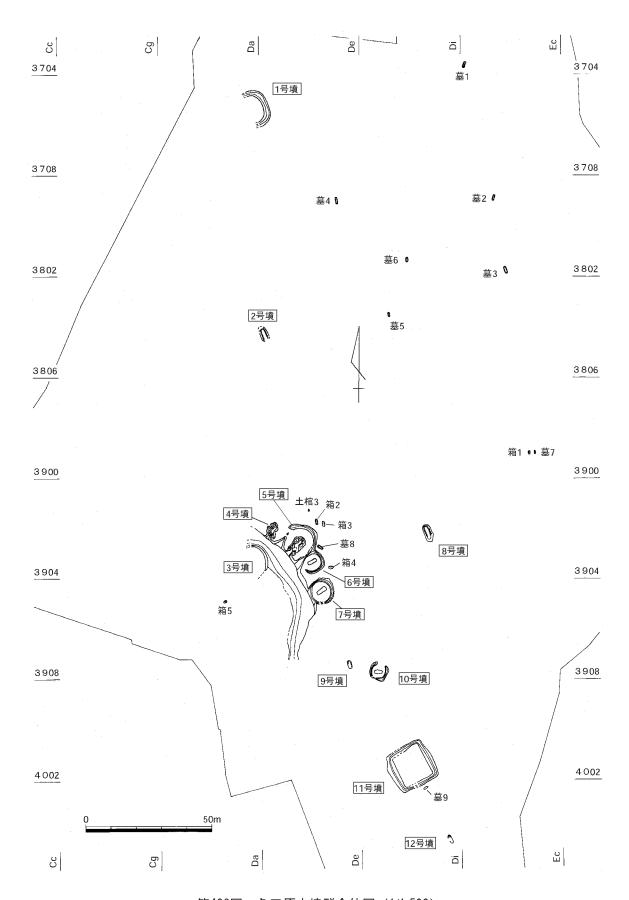


写真9 久田原3~7号墳(南上空から)

箱式石棺の中には古墳の裾に接して位置するものがある。箱式石棺2・3は5号墳の北側に、箱式石棺4は6号墳の南東側に位置し、両者の密接な関係が想定される。また、箱式石棺5も古墳5基が集中する遺跡中央部にある。これらの箱式石棺は遺物の出土がまれであるが、箱式石棺1からは須恵器の杯や刀子が出土している。

土壙墓は、古墳群のなかでも時期が下る こともあってか、古墳とは異なった地点に 分布し、遺跡東側の北から中央にかけての 部分に点在している傾向がある。

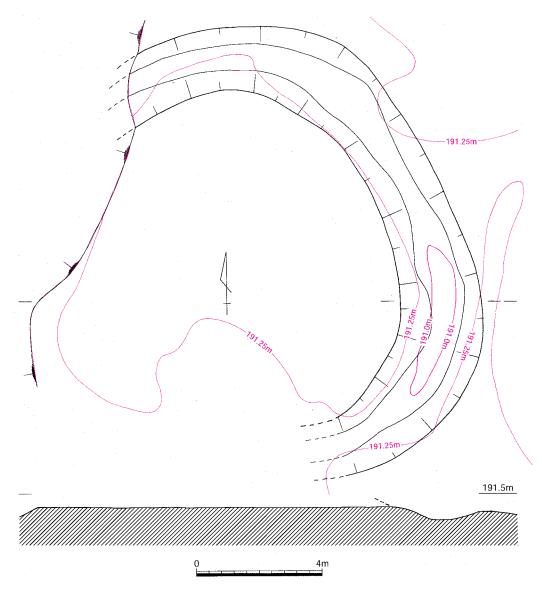
土壙墓の出土遺物には、土師器の杯・皿、 須恵器の蓋・杯・甕・長頸壺等がある。また、土壙墓3からは耳環、鏃が出土している。これらの時期は5号墳に隣接する土壙墓8を除き、7世紀末~8世紀初頭の範疇に入るものが多く、9号墳や12号墳とともにそのほかの古墳よりも時期的に新しいことが明らかになった。 (蛯原)



第423図 久田原古墳群全体図(1/1,500)

# 2 久田原 1 号墳 (第344・423・424図、図版80)

3704 Cj区~3705 Cj区と3704 Da区~3706 Da区の範囲に単独で検出された古墳であるが、 わずかに周溝の一部が残存していただけである。周溝の痕跡から推定して、1号墳は径14.8mの円墳 と思われる。検出面での周溝の幅は2.6mを測り、深さは27cmになっていた。周溝内には黒褐色の砂 が堆積し、7世紀前半に属する須恵器の杯身の破片が出土している。4号墳から7号墳の調査結果か ら判断して、この破壊された古墳の埋葬施設は横穴式石室であったと考える。 (福田)



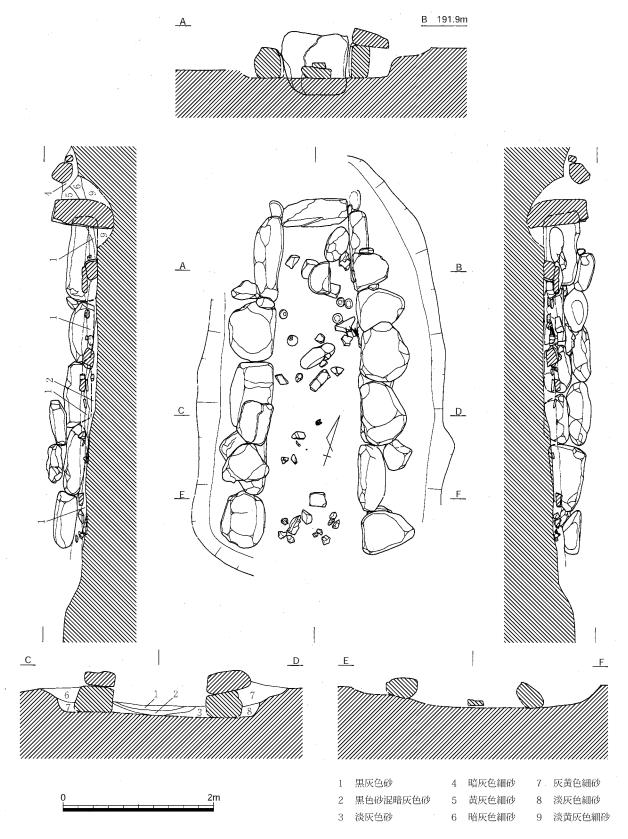
第424図 久田原 1 号墳地形測量図 (1/120)

# 3 久田原2号墳

主体部 (第345・423・425・426図、図版80・81)

1号墳と4号墳のほぼ中間に位置し、現代の耕作土除去後に検出された。古墳は、すでに後世の開

墾により墳丘・周溝ともに大きく削平を受け、主体部の石材の一部が残存するだけの状況であった。 主体部は、幅3.0~3.2m・長さ5.7mの掘り方のなかに花崗岩の河原石を配置し、横穴式石室を構



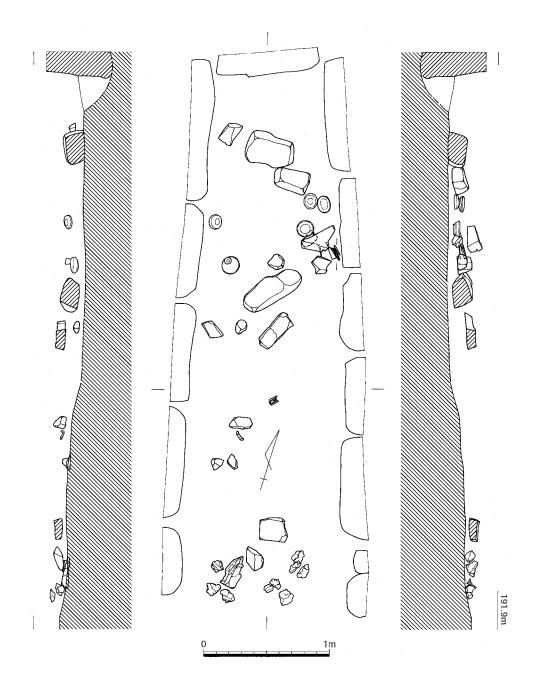
第425図 久田原2号墳主体部(1/50)



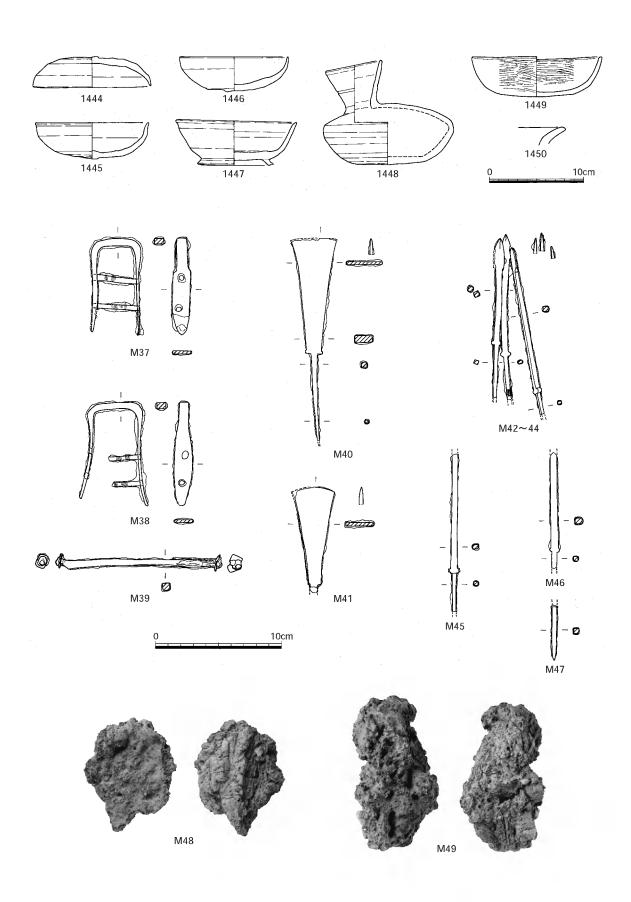
築するものであった。基盤は脆弱な砂であった。石室は無袖で、全長4.3m・開口部幅1.4m・奥壁幅90cmを測る。主軸はN-18°-Wである。奥壁は床面から約60cmの高さが残存していた。奥壁基底部は、左右両側壁が掘り方上面に直置きであるのに対して、20cmほどの掘り方に埋め込まれていた。左右両側壁は、80~110cmの大きさの河原石を腰石に横口に据え、一部残存する2段目には、腰石より若干小さい石を横口に積み上げていた。

## 出土遺物 (第427図・図版94)

床面からは、棺台石と考えられる石を中心とした地点に、須恵



第426図 久田原2号墳主体部内遺物出土状況(1/30)・鉄鏃出土状況(1/5)



第427回 久田原2号墳出土遺物(1/4,1/3)

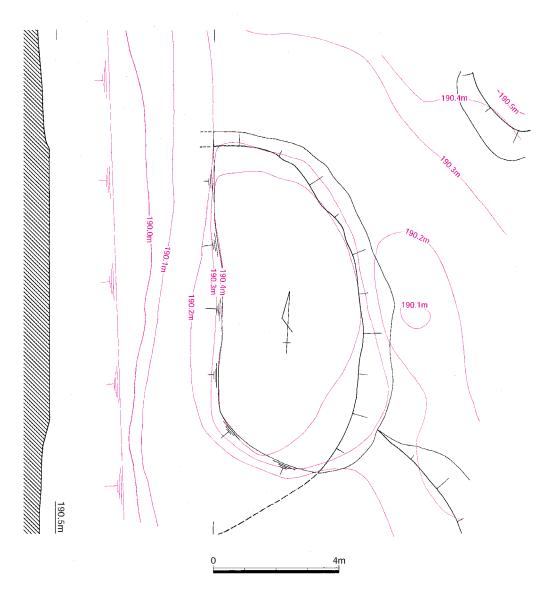
器の杯身1445~1447、杯蓋1444、平瓶1448、土師器の杯1449、甕1450等の副葬が確認された。また土器以外では、鉄鏃M40~47が左側石腰石付近で、馬具の鐙具M37~39が石室中央部で、浮いた状態で検出された。さらに、この古墳の被葬者を性格づける製鉄炉の炉壁M48・49が、いずれも玄門部で検出され注目される。炉壁中には、スサ・木炭等の混入および接合痕等を確認している。

時期は、6世紀後葉~7世紀に築造され、7世紀後半に追葬されたと考える。 (島崎 東)

## 4 久田原 3 号墳 (第348·423·428図、図版81)

溝39の北西端で検出した円墳で、3 9 03 C j区に位置する。西から南側にかけて大幅に削平されており、長さ11.4m、幅5.5m、高さ35cmの半円形をなす地山の高まりとして検出した。このため、正確な規模については明らかではないが、残存部分から径12mほどの円形に復元される。

削平のためか主体部は確認できず、出土遺物もないことから、古墳としての決め手を欠くが、検出 状況から  $4 \sim 7$  号墳と一連のものとして築かれた古墳と考えたい。 (亀山)



第428図 久田原3号墳地形測量図(1/120)

# 5 久田原 4 号墳

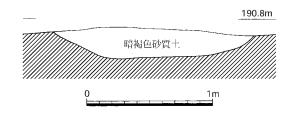
## 墳丘と周溝 (第348・423・430図)

幅4.5mの溝39を挟んで、3号墳の北東に向かい合う位置にある。墳丘はすでに失われており、当初の規模や形状については明らかでないものの、南東に接する5号墳と共有する幅 $1\,\mathrm{m}$ 、深さ $35\,\mathrm{cm}$ の

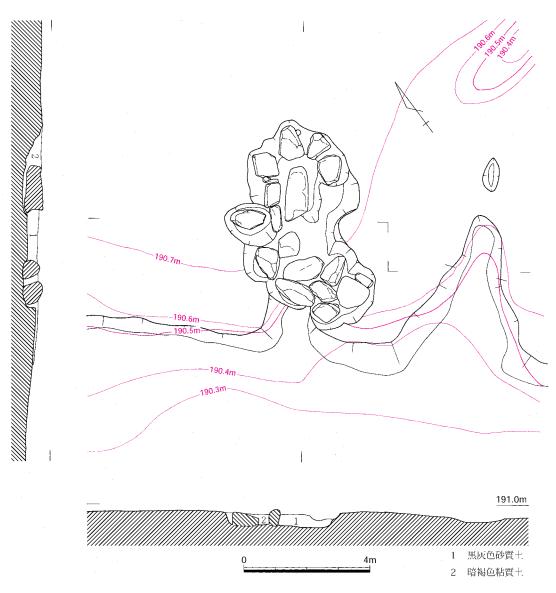
周溝が主体部の、開口部に向かって回り込んでおり、これを墳端として考えれば、径11m余りの円墳が想定できる。

**主体部と出土遺物**(第348・423・432~434 図、図版82)

主体部は、溝39に向かって南西に開口する横穴式石室と考えられるが、その石材は抜き

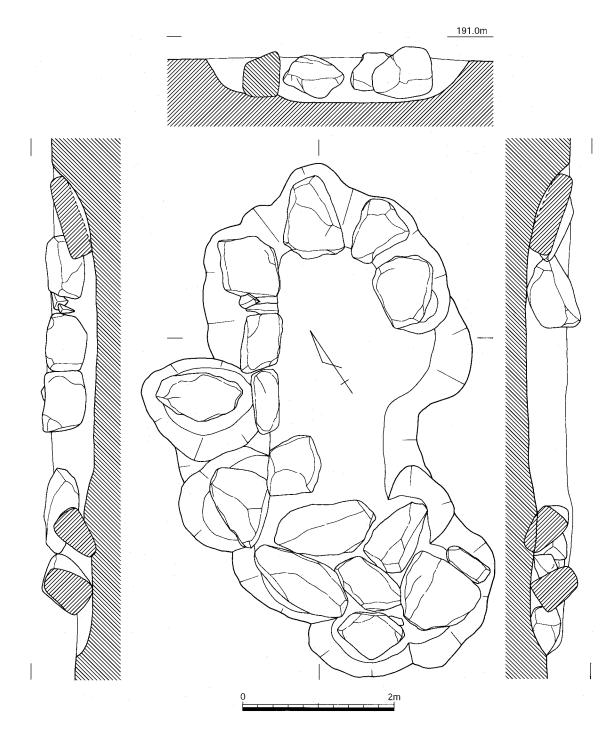


第429図 久田原4・5号墳間周溝断面(1/30)



第430図 久田原 4 号墳地形測量図 (1/120)

取られ、あるいは移動されて、本来の位置を留めているものは、北東側壁の基底部 3 石にすぎない。このため、当初の規模は正確に把握できないものの、残存部分から類推して、主軸がN-69°-Eを示す全長  $4\sim5$  m、幅1.2mの無袖式石室と考えられる。石室を構築する墓壙は、石材を引き倒して落とし込むために掘り広げられているが、わずかに遺存する北東側壁の壁面から測るとその奥行きは 1 mになる。基底部を構成する石材は長さ80cm、高さ50cmで、壁面が垂直になるように据えられている。奥壁の石材は、引き倒された状態で 2 石確認した。このうちの 1 石は長さ1.1mあり、石室の高さもこれ以上あったと考えられる。また、石室中央に落とし込まれていた大形の石材は、長さ1.75m、幅



第431図 久田原 4 号墳主体部 (1/50)

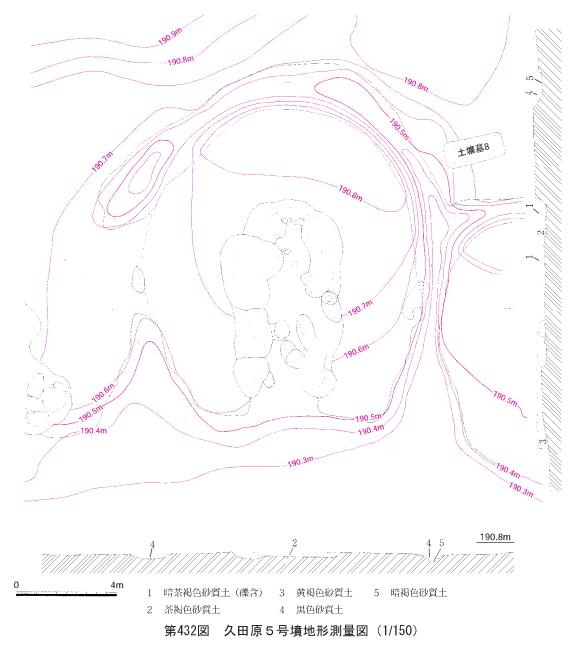
72cm、厚さ59cmあり、天井石と考えられる。

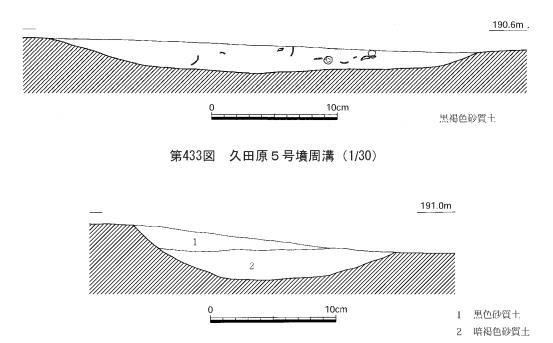
遺物は、須恵器の蓋の小片が石室内から出土したにすぎず、これも図化されていない。調査時の所見から陶邑古窯址群のTK217型式に併行するものと判断しており、5号墳に遅れて築造されたものと思われる。 (亀山)

# 6 久田原5号墳

## 墳丘と周溝 (第348・423・432~434図、図版82)

4号墳と6号墳の間に築かれた円墳で、周溝を含めた規模は径14.3~14.8mを測る。幅1.6m、深さ25cmの周溝は、隣接する4・6号墳とその一部を共有する。この周溝によって画された墳丘は、径11.8~13.5mの不整形な円形を呈する。ことに横穴式石室の開口部から左右に開く墳端は直線的で、その方墳のような正面観はより新しい様相を示している。





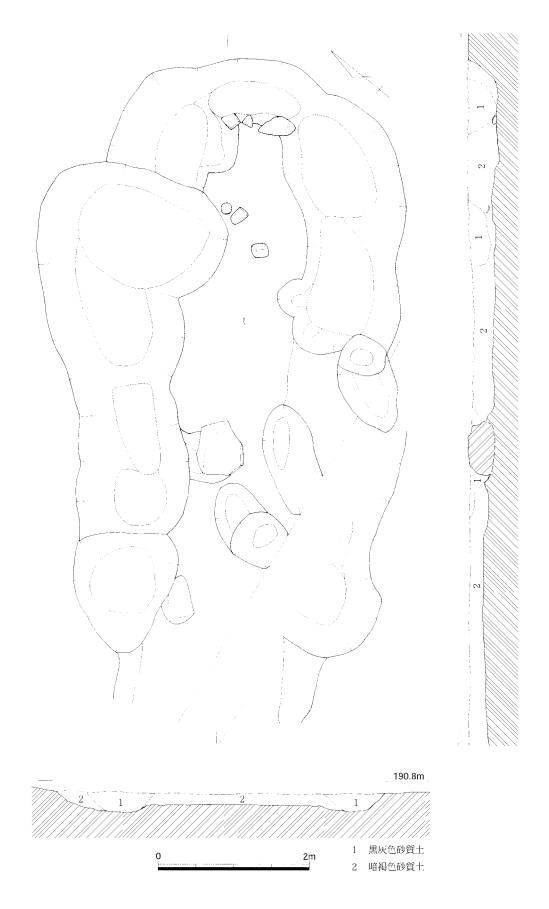
第434図 久田原5・6号墳間周溝(1/30)

#### 主体部 (第348・423・435図、図版82)

墳丘の中央に設けられた主体部は、南西に開口する横穴式石室であるが、石材はことごとく破砕、除去され、旧状を保つものは全く認められなかった。また、床面に敷かれていたと思われる円礫が撹乱土中に多数混在し、石室は徹底的な破壊を被っていた。しかし、長さ7.8m、幅4.3m、深さ40cmを測る墓壙の底面には、石材の据え方がかろうじて遺存しており、これによりこの石室はN-42°-Eを主軸とする全長7m、幅1.5mの無袖式と推定された。

#### 出土遺物 (第436・437図、図版94・95)

この古墳からは整理箱2箱ほどの遺物が出土しているが、石室内のものは須恵器の蓋1451・1452と 刀子M61、緑色凝灰岩製の管玉S487のみで、その大半は前庭部からの出土である。



第435図 久田原5号墳主体部(1/50)

飾り、脚端部はわずかに下方に引き出される。無蓋高杯は口縁部に鈍い段を巡らし、脚部の透かしは 見られない。壺には辣韮形の体部を持つ無頸壺1475と短く外反する口頸部を持つ1476のほか、短頸壺 の蓋と思われる1457・1458がある。

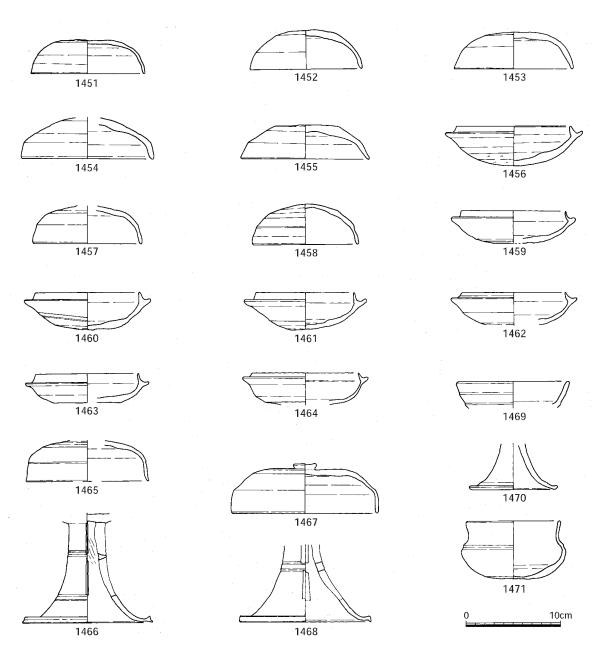
11点ある鉄鏃のうち尖根鏃はM60のみで、ほかは平根鏃である。これらは方頭形の $M50\sim55$ 、圭頭形のM56、三角形の $M57\sim59$ に分けられるが、棘箆被関をもつのはM50のみである。

このほか、古墳の背面にあたる北東の周溝内から土師器の甕1481が出土している。 (亀山)

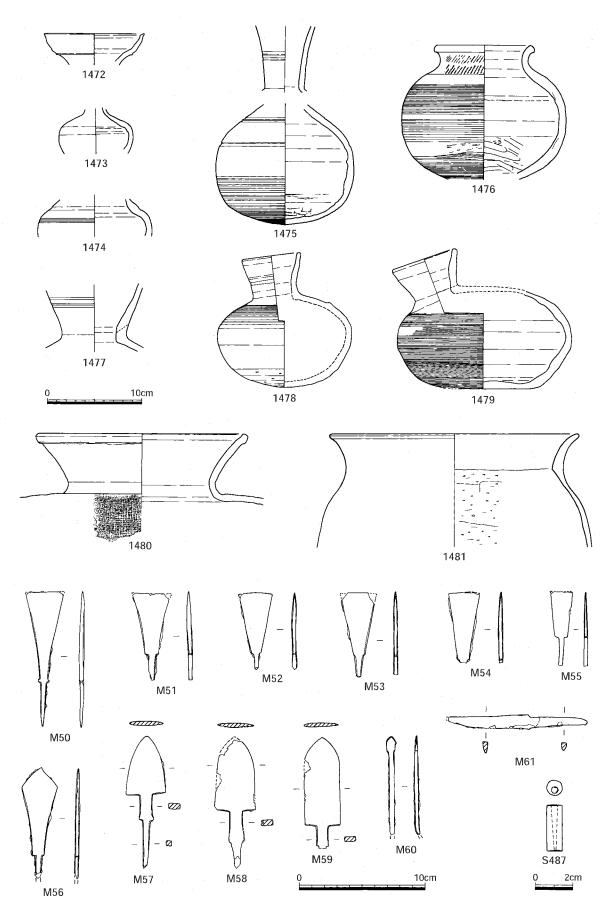
# 7 久田原6号墳

## 墳丘と周溝(第348・423・438・439図)

5号墳の南東に接して検出された円墳で、周溝を含めた規模は径8.5~8.7mを測る。北東から南西



第436図 久田原5号墳出土遺物①(1/4)

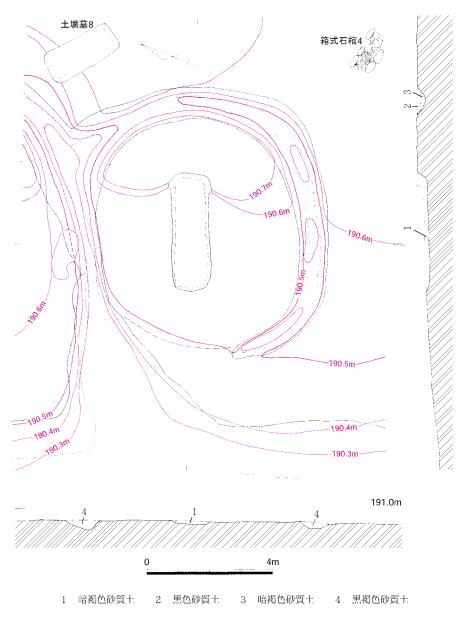


第437図 久田原5号墳出土遺物②(1/4,1/3,1/2)

にかけて弧状に巡る周溝は、幅1.4m、深さ18cmを測り、西側で途切れて終わっている。北西側は5号墳の周溝に切られているものの、底面の高さはほぼ一致しており、埋土にも明確な差は認められなかった。この周溝に区切られた墳丘は、長軸8m、短軸6.9mの不整形な円形を呈し、盛土はすでに失われていた。

## 主体部 (第348・423・440図)

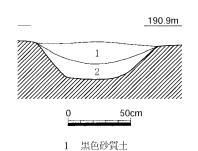
墳丘の中央に掘り込まれた墓壙は、長軸3.69m、短軸1.35mの主軸をN-69-°Eにおく長楕円形を呈し、深さは27cmを測る。墓壙底面の中央には幅53~32cmの窪みが長さ2.06mにわたって認めれ、棺の痕跡とも考えられたが、埋上の差としては確認できなかった。この窪みの北東端には須恵器の蓋杯が並列して置かれ、枕と考えられる。また、西端からは鉄鏃5点がまとまって出土し、棺外と見られる位置からは土師器の直口壺が出土した。



第438図 久田原6号墳地形測量図(1/120)

### 出土遺物 (第441·442図)

須恵器の蓋1483は口径14.2cm、器高4.4cmを測る。左にヘラケズリするなだらかな天井部と、斜め下

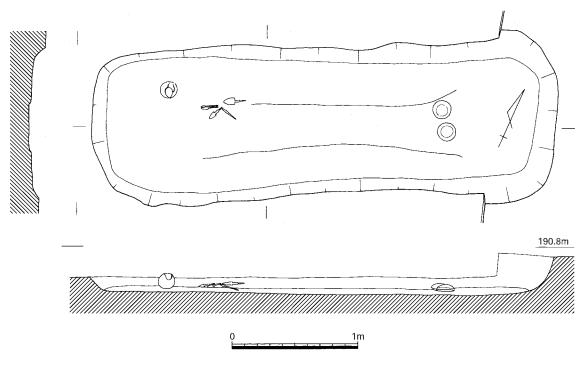


第439図 久田原6号墳周溝 (1/30)

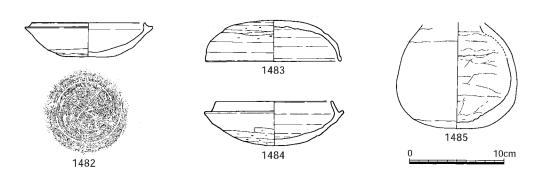
2 暗褐色砂質上

方に延びる口縁部からなる。これに組み合う杯1484は口径12.3cm、器高4.7cmで、長く延びる立ち上がりと短い受け部を持つ。底部は左回りのヘラケズリで調整する。これらはMT85~TK43型式に併行し、6世紀後半に位置づけられる。1485は直口壺と見られるが、口頸部を欠いた状態で副葬されていた。厚手の粗雑なつくりで、内外面ともナデで調整している。

鉄鏃は平根と尖根とがある。平根鏃は長さ15.0cm、幅 4.5cm、重量36.3gで三角形の鏃身を持つM62と、長さ 12.6~13.7cm、幅2.6~3.1cm、重量13.2~17.4gで逆刺を

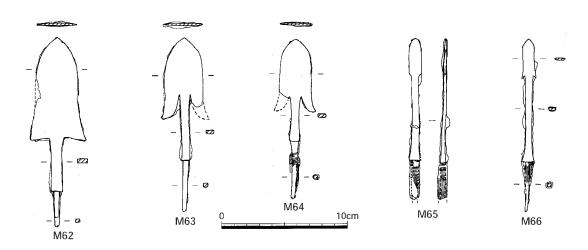


第440図 久田原6号墳主体部(1/30)



第441図 久田原6号墳出土遺物①(1/4)

持つ $M63 \cdot 64$ に分けられる。長さ $12.7 \sim 13.8$ cm、幅 $1 \sim 1.1$ cm、重量 $8.8 \sim 9.5$ gを測る尖根鏃も、身部が三角形のM65と逆刺を持つM66がある。これらはいずれも台形関を持つ点で共通する。 (亀山)



第442図 久田原6号墳出土遺物②(1/3)

# 8 久田原7号墳

## 墳丘と周溝 (第348・423・443~445図)

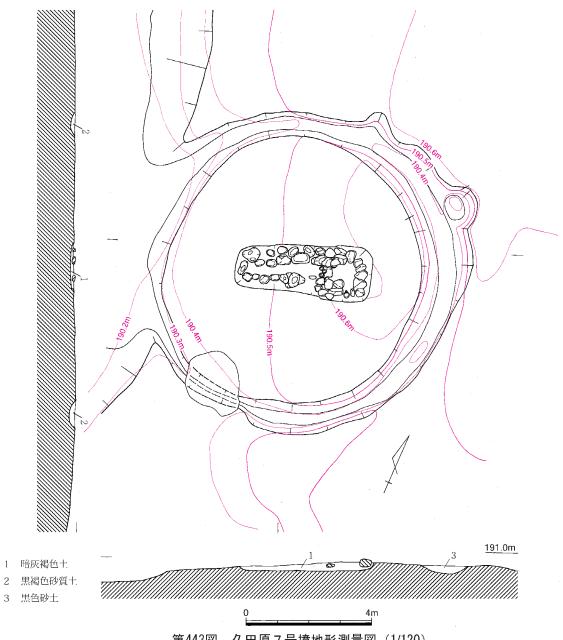
6号墳の南2.8mで検出した円墳で、周溝を含めた規模は径10.2mを測る。周溝は幅0.7~1.6m、深さ21cmで、溝39に接する西側は開放しているが、溝39の埋土との識別が困難であったため、本来は完周していた可能性もある。墳丘は径8.8~9.1mの円形を呈し、盛土は遺存していない。

#### 主体部 (第348・423・446図、図版83・84)

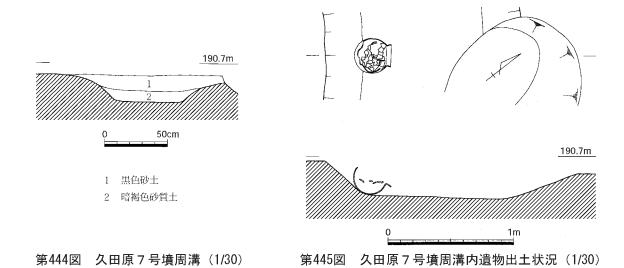
墳丘の中央には、河原石を積み上げて構築した埋葬施設が検出された。その掘り方は長軸4.31m、短軸1.77mの隅丸方形をなし、深さは30cmを測る。主体部の西半は一段低い水田として利用されていたため、総じて遺存が悪く、長さ20~46cm、厚さ9~20cmを測る基底部の石材5個を残すに過ぎない。しかし、その抜き取り痕跡などから推測すると長さ2.72m、幅23~32cmで、主軸をN-68°-Eにおく埋葬空間が復元される。その東端には長さ34cm、幅30cm、厚さ10cmの石材の上に、須恵器の蓋杯4点を伏せた枕が検出され、ここに頭位があったことが判明した。さらにその東側には、長さ72cm、幅46cmにわたって空間が確認され、副室のような施設も考慮したが、撹乱のためか壁面を構成する石材は遺存せず、遺骸を納めた空間との関係は明らかにできなかった。副葬品は南側壁に沿って切先を西に向けた鉄刀が出土した。また、その北側で長さ10cmほどの鉄器が検出されたが、整理の過程で失われた。

#### 出土遺物 (第447図、図版96)

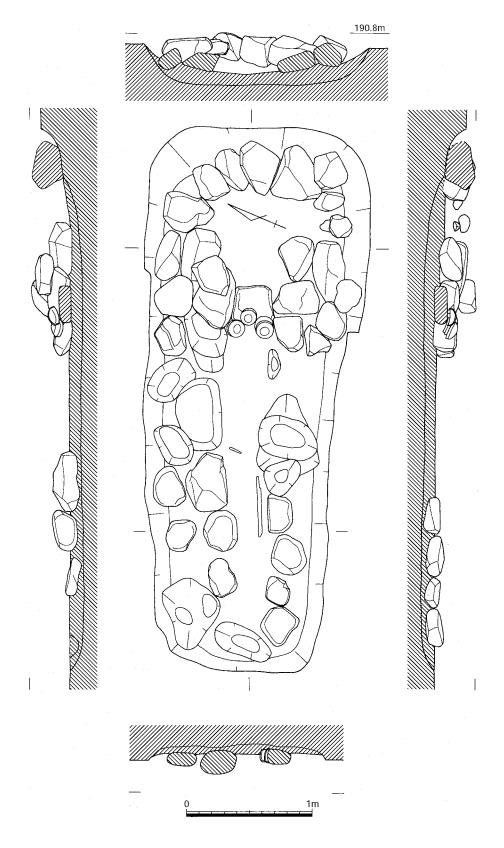
須恵器の蓋1486・1487・1489は口径14.0~15.4cm、器高4.4~5.2cmを測る。左回りのヘラケズリで調整するなだらかな天井部と、端部に内傾する面を持つ長い口縁部からなり、その間は鈍い段をなす。口径12.2cm、器高4.5cmを測る杯1488は、斜め上方に延びる長い立ち上がりと水平に引き出された受け部を持ち、口縁端部には凹線を巡らす。また、平坦な底部は左にヘラケズリする。これらは陶邑古窯址群のMT15ないしTK10型式の範疇で理解できるもので、6世紀前半に位置づけられる。周溝から出土した土師器の甕1490は口径17.6cm、器高28cmを測り、外反する口縁部はヨコナデ、球形の体部は



第443図 久田原7号墳地形測量図 (1/120)

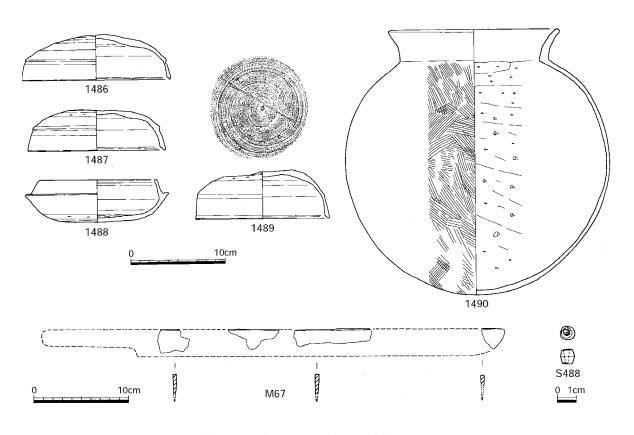


外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。直刀M64は取り上げることができないほど全体に腐食が進んでいたが、検出時の観察から全長49.5cm、刃部長39cm、幅2.8cmに復元される。水晶の丸玉



第446図 久田原7号墳主体部 (1/30)

**S 488**は石材の抜き取り穴から出土したもので、径7.5mm、高さ7.5mmを測り、片面から穿たれた孔径は 3.5mmある。 (亀山)



第447図 久田原7号墳出土遺物(1/4,1/2)

## 9 久田原8号墳

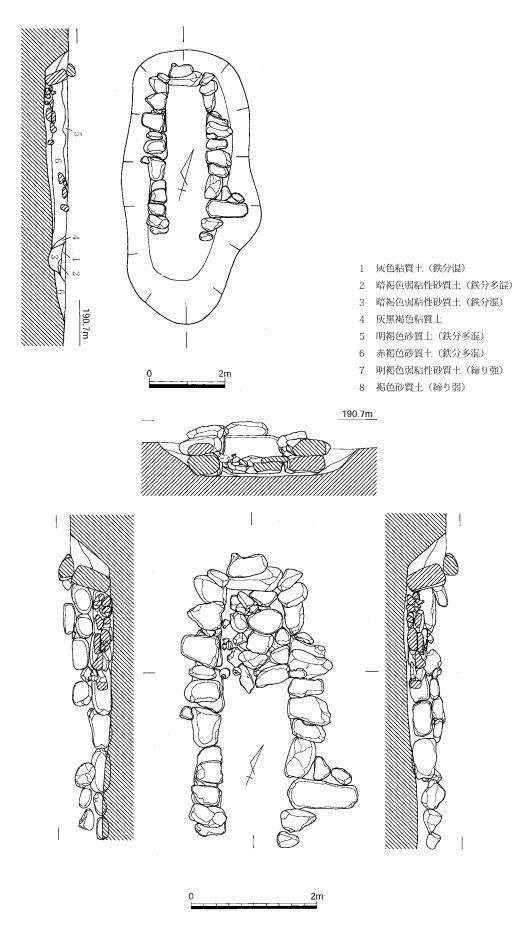
主体部 (第343・423・448図、図版84)

7号墳の北東50m、3903Df区から検出された横穴式石室をもつ古墳であるが、墳丘および周溝は後世の削平によってすでに消失しており、その規模は明らかでない。石室は7.5×3.4mの掘り方に河原石を配し、石室を築いていた。石室は無袖で全長4.2m、開口部幅・奥壁幅ともに80cmを測り、中央部幅が1.1mとわずかに膨らむ。奥壁付近で深さ約80cmを残す。主軸はN-16°-Wである。また、石室の奥には長さ50cm余りの扁平な河原石を中心に10数個の石が並べられ、一段高い平坦面が築かれていた。その範囲は幅90cm、奥行き1.5mと若干短いものの、棺台の役割を果たしたものと考える。

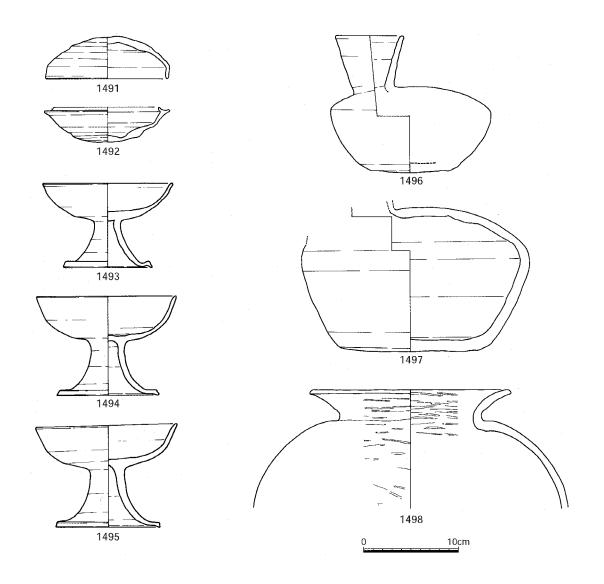
## 出土遺物 (第449図、図版96・97)

遺物は須恵器の杯・蓋、土師器の壺が石室開口部付近から、須恵器の高杯・平瓶1496、鉄片 1 が推定した棺台と側壁の間から、須恵器の平瓶1497が中央断面第 3 層の撹乱土から、それぞれ出土している。

蓋1491・杯1492の天井および底部切り離しはヘラケズリ後ナデており、器壁は厚い。高杯1493~1495は浅黄~灰白色を呈し、幾分焼成温度が低かったと思われるが、平瓶1496は焼成良好で肩部に自然釉が掛かっていた。土師器壺1498は口縁および胴部外面に丹塗りが施されている。須恵器類の特徴は寒風1号窯の様相を示し、陶邑古窯址群TK217型式に併行するものと考えられる。 (江見)



第448図 久田原8号墳主体部(1/100,1/60)



第449図 久田原8号墳出土遺物(1/4)

# 10 久田原 9 号墳

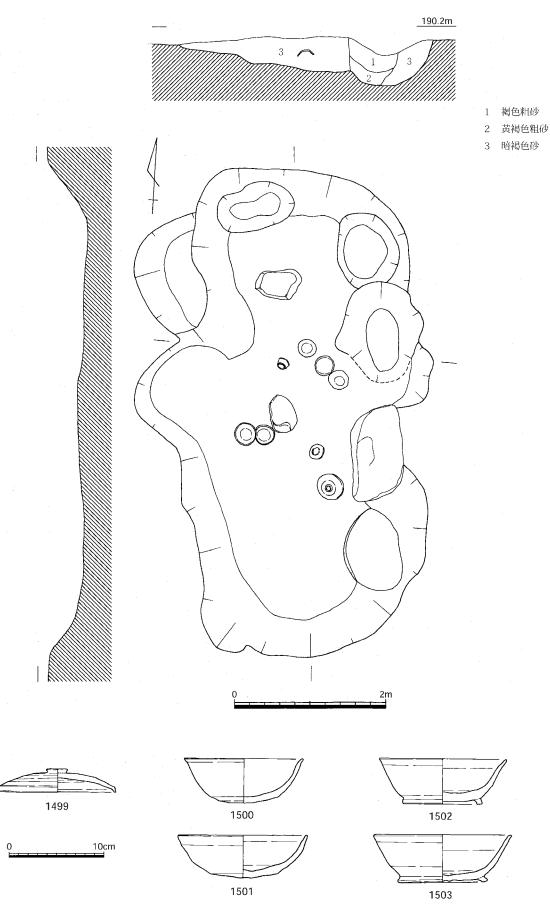
# 主体部 (第348・423・450図)

古墳群の中心より南にやや離れた 3906 D c 区に位置する。検出した時点では、長さ6.5 m、幅  $3\sim4$  mほどの土壙状の落ち込みであったが、東辺沿いで石材が 1 石立てられた状態であり、かつ石材の抜き取り痕が北・東・西の各辺において確認できたことから、南側に開口する小形の横穴式石室もしくは小石槨と考えられる。石室の主軸は、N-12°-E と南北方向を指向する。墳丘は削平されて確認できず、周溝も存在しなかった。

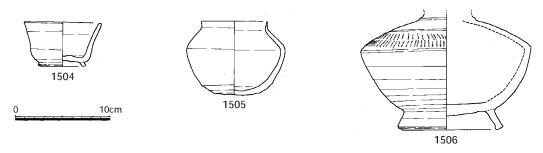
### 出土遺物 (第450·451図、図版97)

中央部底面直上において、土器 8 個体が出土している。いずれも須恵器で蓋1499、杯1500~1504と 短頸壺1505、長頸壺1506である。

これらの須恵器は、久米町の糘山古墳群中の6期に属する古墳や美作国府下層遺構の土器群に近い と思われ、時期は7世紀末~8世紀初頭と考えられる。 (弘田)



第450図 久田原 9 号墳主体部 (1/50)・出土遺物① (1/4)



第451図 久田原9号墳出土遺物②(1/4)

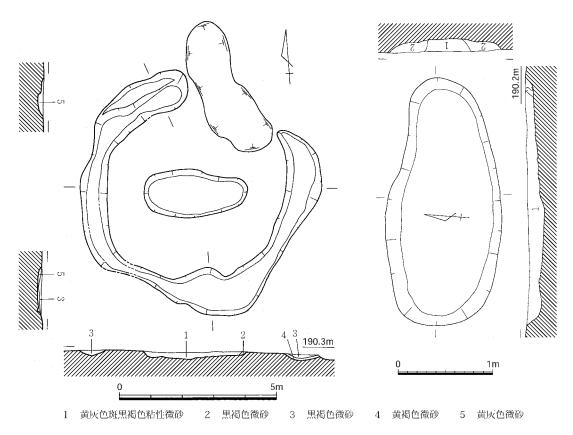
## 11 久田原10号墳

#### 墳丘と周溝 (第348・423・452図)

調査区の中央部付近、3907De区で検出しており、9号墳の東に隣接している。規模が幅54~144 cm、深さ11cmを測る溝が、北側が攪乱によって途切れているものの、ほぼ円形に巡ることから、本来は円墳の周溝であったものと考えられる。墳丘は完全に削平されており、想定される墳丘の規模は、直径5.2m程度である。出土遺物がないため、時期については不明である。

#### 主体部 (第348・423・452図)

周溝のほぼ中央部で検出している。規模は長軸 $3.27\,\mathrm{m}$ 、短軸 $1.54\,\mathrm{m}$ 、深さ $23\,\mathrm{cm}$ で、埋土はおおむね第 1 層の粘性微砂であり、主軸は $N-85\,^\circ$ -Eである。内部主体には礫などは含まれず、埋土断面の観察からも痕跡は認められないものの、木棺直葬であった可能性を考えている。 (團)



第452図 久田原10号墳 (1/120)·主体部 (1/50)

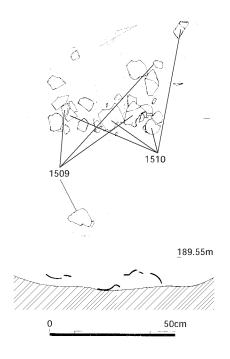
# 12 久田原11号墳

# 墳丘と周溝 (第349・423・453~455図)

4 0 01 Df区を中心に厚く堆積した洪水砂層の上面で検出された。立地は洪水砂層上面としては周



第453図 久田原11号墳地形測量図 (1/120)



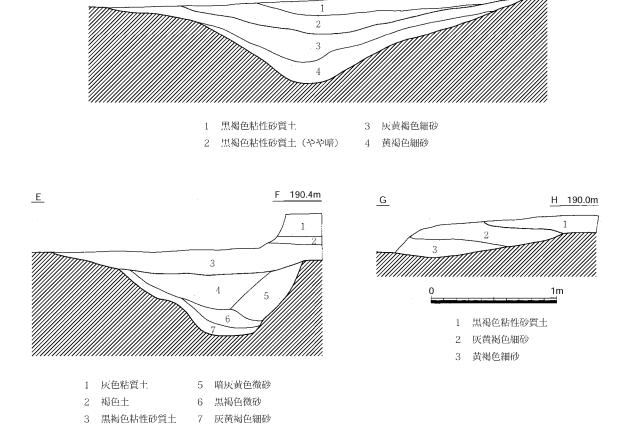
第454図 久田原11号墳周溝内 遺物出土状況(1/15)

<u>C</u>

4 黄灰色微砂

辺で最も高い地点にあたり、10号墳、さらには7号墳、 6号墳へと尾根筋を伝うように続いていく。11号墳の墳 丘はすでに後世の削平によって消滅し、周溝のみが残存 していた。また、埋葬施設も同様に失われているものと 判断された。周溝は方形に巡り、周溝に囲まれた部分は 一辺13.1mの方形を呈する。周溝の底部で計測すると、 南北14.7m、東西13.3mと14.0mとなるが、周溝底部は 各辺とも弧状を描くため、各辺の周溝の中央部で測ると、 南北15.4m、東西15.3mとほぼ同値となる。これは東西 辺の方が湾曲が強いためである。残存する地形にも左右 されるが、周溝の幅も一定しない。各辺の最大幅は、東 辺が2.7m、西辺が3.6m、南辺は1.9m、北辺が2.0mであ る。周溝の底の高度は、東・西・北の3辺がほぼ等しい が、南辺は20cmほど高い。各辺とも最深部は中央付近に あるが、北東隅と北西隅も少し窪んでいた。周溝の底か ら5世紀代の土師器が集中して出土した。出土地点は西

D 190.2m



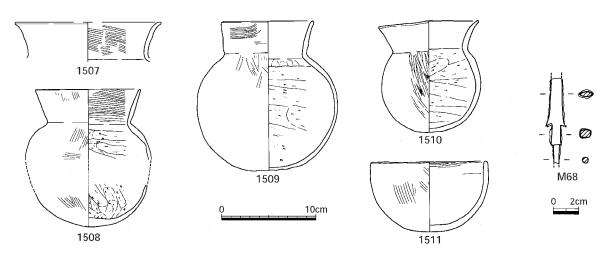
第455図 久田原11号墳周溝(1/30)

辺周溝の中央付近と北東隅(●)の2か所である。このことが、この周溝が古墳に伴うものであることを確定的とした。墓前祭に使用したものを投棄したものであろうか。

第455図は周溝の土層断面図である。上段の第1・2層、下段左の第3層、右の第1層は同じ土と みられ、古墳周辺に堆積している包含層である。それ以下が周溝の埋土で、古墳時代に堆積したもの であろう。上段の第4層は洪水砂に近い混じりのない土で、この層に土器が埋没していた。古墳の築 造後、早い段階で埋まったものとみられる。下段左の第7層、右の第3層が同一の土と考えられる。

#### 出土遺物 (第456図、図版97)

図示できたのは上師器 5 点と鉄器 1 点である。1507と1508は周溝の北東隅、1509と1510とM68は西辺周溝の中央の土器溜まり、1511は北辺周溝の中央付近出土である。1509と1510は第454図にあるようにほとんど同じ複数のブロックから破片が出土しているため、あらかじめ破砕された後に置かれたものとみられる。1507は甕の口縁部、1508~1510は小形の壺、1151も小形の鉢で、小形品が主体となる。M68は鉄鏃で、篦被がつき、細身の鏃身の下端に棘を持つ。長頸鏃の一種か。



第456図 久田原11号墳出土遺物 (1/4,1/3)

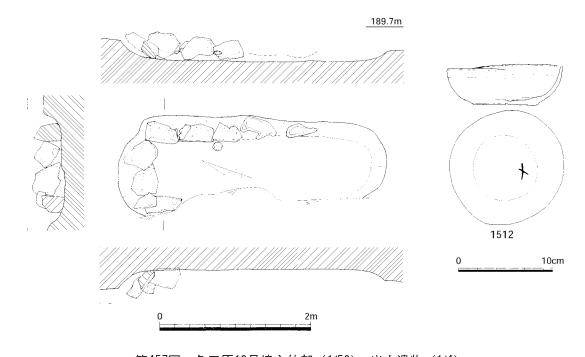
# 13 久田原12号墳

#### 主体部 (第349・423・457図、図版87)

調査区の南側である 4 0 04 Dh区で検出された。11号墳の南側約20mに位置しており、久田原古墳群の最も南でみつかっている。主体部の竪穴式石室のみが検出され、規模は長軸約2.15m、短軸74cm、深さ38cmである。北側では基底の石を検出しており、長辺が40cm程度の比較的大きさの揃った石材を使用している。西側については中世の土壙によって切られている。墳丘は完全に削平を受け、周溝については4号墳、9号墳と同様に削平されたものと考えており、規模などは不明である。

### 出土遺物 (第457図、図版97)

遺物は、図示した杯以外に須恵器片が少量出土している。杯1512は、床面から約10cmの上部、北東側の壁面に隣接した状況で、底部を上にして出土したものである。口径12.1cm、器高4.6cmで口縁部には歪みがあり、焼成はやや甘い。底部には「×」の墨書がみられる。この遺物の時期は7世紀半ばであると考えられ、この古墳の時期も同様のものであると思われる。 (團)

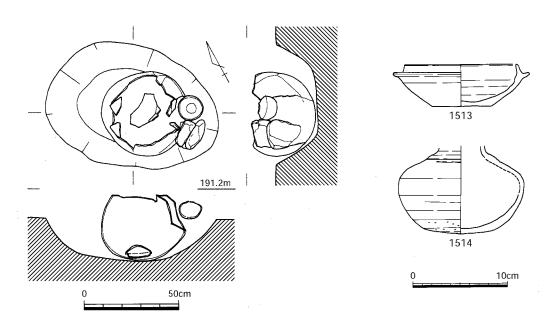


第457図 久田原12号墳主体部 (1/50)・出土遺物 (1/4)

# 14 土器棺

土器棺3 (第348・423・458~459図、図版87・98)

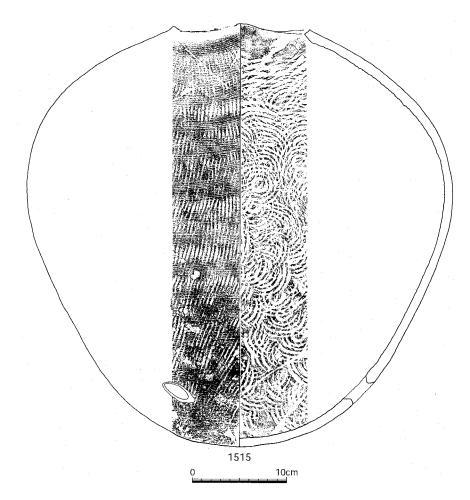
5号墳の北5.5mで検出したもので、長軸92cm、短軸64cm、深さ22cmの楕円形を呈する墓壙に、口 頸部を打ち欠き、石材で蓋をした須恵器の甕を納めていた。棺に転用した甕1515は、胴径45.3cm、現 存高44.6cmを測り、口を南東に傾けるように据えられていた。棺の接地部分には穿孔が施され、これを



第458図 土器棺3 (1/20)・出土遺物① (1/4)

(小嶋)

覆うように蓋杯1513が棺内に伏せられていた。また、壺1514が口に接するように置かれていた。底部 調整を省略する1513は5号墳出土土器と類似し、これと同時期と考えられる。 (亀山)



第459図 土器棺3出土遺物②(1/4)

### 15 箱式石棺

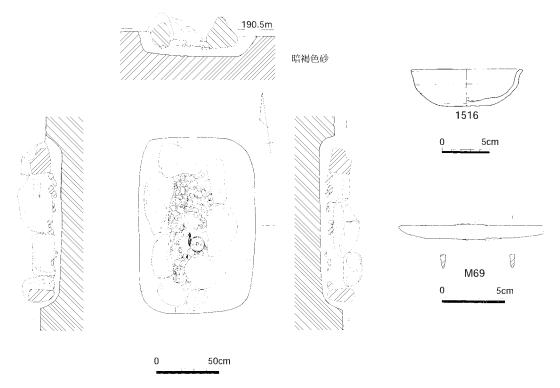
箱式石棺 1 (第343・423・460図)

時期は古墳時代後期に比定される。

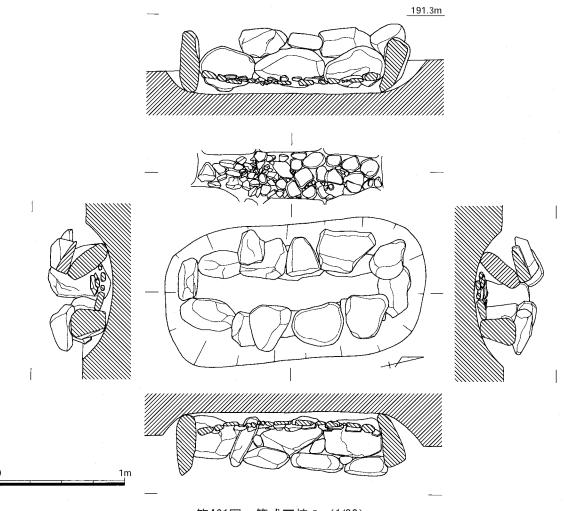
3808Ea区で検出された遺構で、南東隅の石が表土除去時に若干内側に傾いてしまっている。石棺は東西壁に40cm大の石を3個広口に据え、北壁に30cm大、南壁に10cm大の石を用いて構築されている。床面には5cm大の円礫を敷いており、南側では若干疎の部分が見られる。石棺の規模は長軸86cm、短軸32cmの長方形を呈している。遺物は床面直上から須恵器杯身1516、鉄製刀子M69が出土している。

箱式石棺 2 (第348・423・461・462図、図版88)

5号墳の北東2mで検出したもので、3901Dc区に位置する。長軸2.05m、短軸1.08m、深さ23cm の楕円形を呈する墓壙内に、河原石を箱形に組んで棺としたものである。棺の内法は長さ1.46m、幅36cm、高さ32cmあり、主軸はN-12°-Eを測る。両小口は扁平な河原石を立て、側壁は大形の河原石を3つ並べて据えた上に、扁平な河原石を小口積みにして構築する。床面には円礫を敷いているが、北



第460図 箱式石棺 1 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

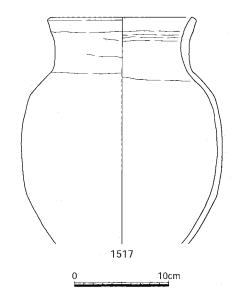


第461図 箱式石棺2 (1/30)

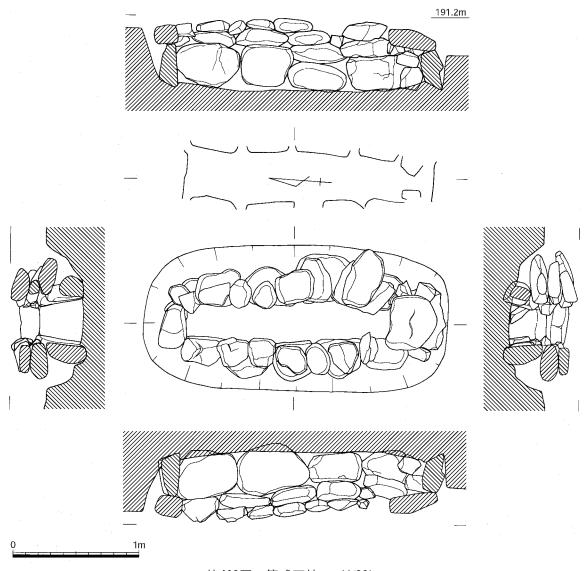
側にやや大形の礫を用いており、この方向に頭位が 置かれていたものと思われる。長頸鏃と思われる鉄 器が1点出土したが、整理の過程で失われた。時期 は6世紀後半と考えられる。なお、箱式石棺3との 間から土師器の独1517が出土している。 (亀山)

### 箱式石棺3 (第348・423・463図、図版88・89)

3901Dc区で検出したもので、箱式石棺2の南東1.4mに位置する。墓壙は長軸2.41m、短軸1.15m、深さ40cmの楕円形を呈する。この墓壙内に組み立てられた石棺の内法は、長さ1.98m、幅40cm、高さ56cmを測り、N-5°-Eにある主軸は箱式石棺2よりわずかに西へ振れる。小口に1個、側壁に4個の板石を立て、その上に扁平な石材を2~3段小口積み



第462図 箱式石棺 2 周辺出土遺物(1/4)

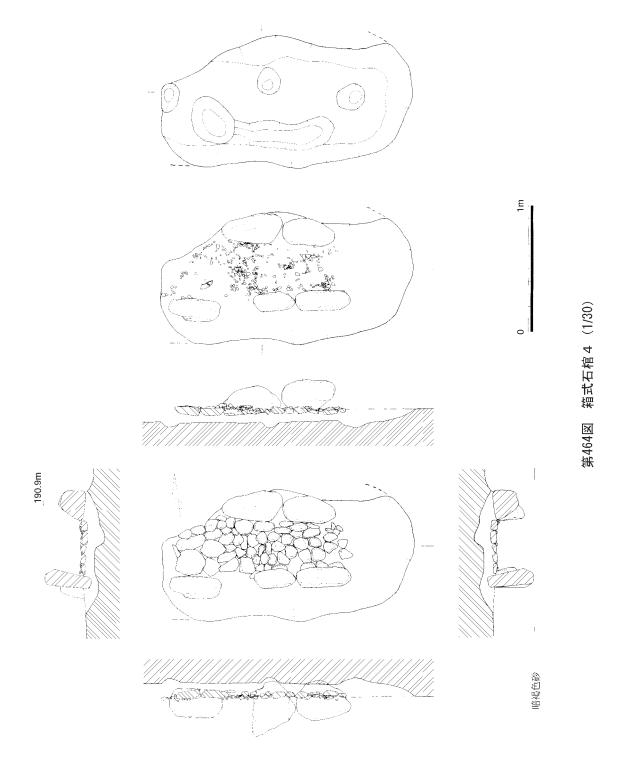


第463図 箱式石棺3 (1/30)

して構築しており、南端には1枚の蓋石が遺存していた。その状況からすると、側壁の上端は南に向かって低くなるようで、北側が広い平面形からしても、この方向に頭位がおかれたものと推定される。 出土遺物はないが、箱式石棺2と近似した時期が想定される。 (亀山)

### 箱式石棺4 (第348・423・464図、図版89)

6号墳の東2mで検出したもので、後世の撹乱で墓壙の北・西側は削られ、石材も側壁の基底部を 5石残すのみである。現状で長軸1.40m、短軸1.05mの楕円形を呈する墓壙内に組み立てられた棺の 内法は、長さ1.41m以上、幅42cm、高さ30cm以上で、主軸はN-81°-Wを測り、西に広がる平面形



から、この方向に頭位がおかれていたと思われる。 床面には拳大の円礫の上に径2㎝ほどの砂利が敷かれており、2時期にわたる埋葬が想定される。 棺内から須恵器の杯が出土したものの、整理過程 で失われ、正確な時期は不明であるが、調査時の 所見から6世紀後半~末と推定される。 (亀山)

### 箱式石棺 5 (第347・423・465図、図版90)

3906 C g 区で、久田原 3 号墳の南西20mに位置する。石室主軸はN-75°-E と東西を向く。長軸89cm、短軸35cmを測る。30cm余りの河原石 1 枚を立てて壁をなすが、それより上部は明かでない。残存する高さで天井石はみられなかった。また、底面にも上面が平坦な石を 2 枚敷いている。

出土遺物はなかったが、3~6号墳との関係が 考えられ、時期的にも後期と推定される。 (弘田)

### 16 土壙墓

### 土壙墓1 (第341・423・466図)

遺跡北部の東寄りで検出された溝33に沿うように、3 基の土壙墓が検出された。

主軸はほぼ南北方向を示し、長径約2.5m、幅約80~95cmを測る。

埋積土は、中央部から上位にかけては炭混じり の褐色砂がみられる。

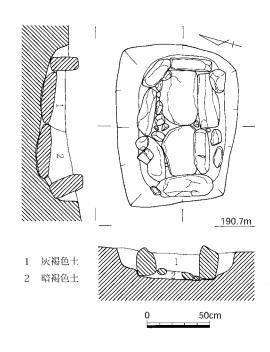
出土遺物は認められず、また人骨など遺骸の残 痕も確認できなかった。したがって、墓とする明 確な根拠に乏しいが、形状からその可能性が高い ことを指摘しておこう。 (岡田)

土壙墓 2 (第342・423・467図、図版90・98) 竪穴住居25の西方約8mに位置し、溝33を切って検出された。

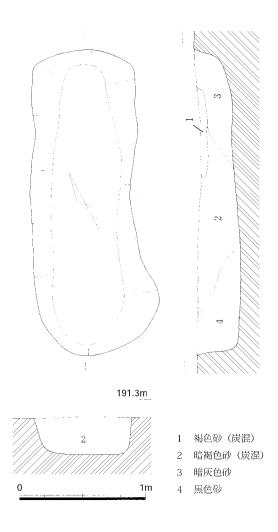
主軸はほぼ南北方向を示し、長径約2.2m、幅約90cm、深さ約30cm前後を測る。

南端で須恵器杯1518と土師器杯1519が出土し、 いずれも完形品であることから、頭位に副葬され た可能性を示している。

1519の内面は丁寧なヘラミガキが施され、赤色顔料の塗布も観察される。 (岡田)



第465図 箱式石棺5 (1/30)



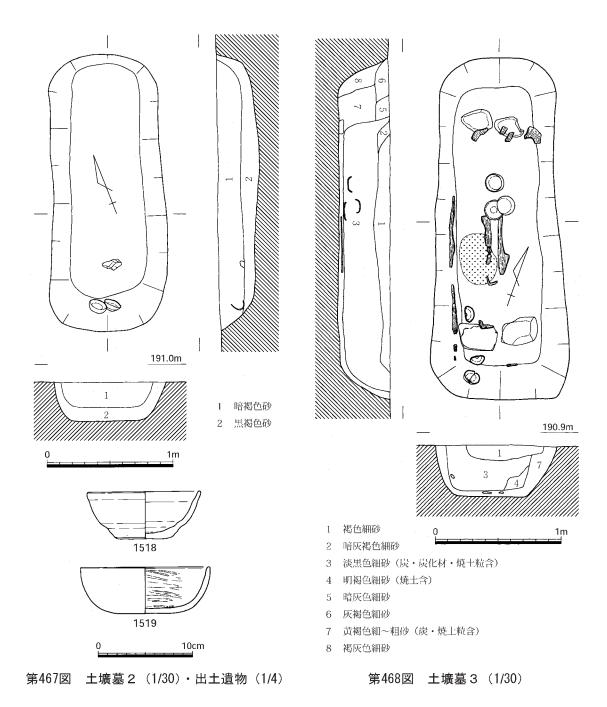
第466図 土壙墓1 (1/30)

### 土壙墓3 (第342・463・468・469図、図版90~92・98)

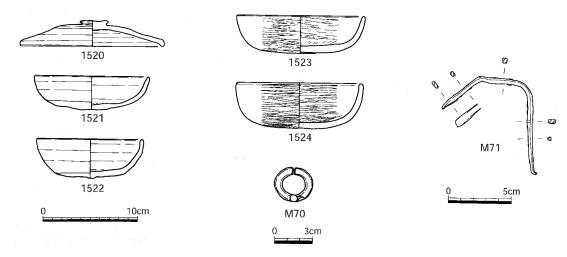
土壙墓2の南方28mで検出された。やはり溝33を切って検出されるという共通点がある。

長軸約2.7m、幅約1m、深さ約40cmを測り、北端と南端とでは形状も含め、幅にもかなりの差がある。壙底は平坦で、中央南寄りに加熱赤変した長円形部分が検出された。これは、近接して出土した炭化材とも関連し、墓壙として掘り込まれた土壙で、遺体の埋葬前に「火」を用いた祭祀が行われたことを暗示する。精査時に、炭化材の一部に炭化穀物が付着しているのが見つかり、応急処置の後、分析同定を行った。あたかも「焦げ飯」のようにこびりついて炭化した物体は、「火」を使った際に生じた物か、あるいはすでに付着した状態の板材が棺床板として使われたのか、様々な可能性が考えられる。なお、炭化物についての分析結果については、付載2に収載する。

壙底には北と南に2個ずつの棺台と推定される花崗岩が置かれており、木棺のような板材が使用さ



-306 -



第469図 土壙墓3出土遺物(1/4,1/3)

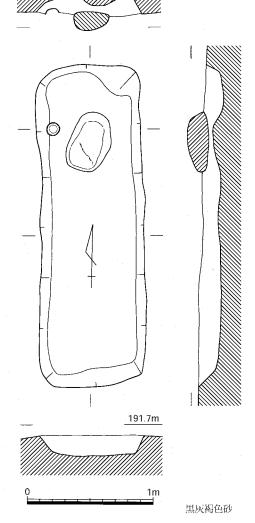
れたことは確実であろう。

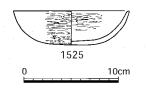
出土遺物は、中央部と南端部に分かれて出土している。確実に副葬品と思われる遺物は、中央部ですべて完形の須恵器蓋1520と土師器杯1523・1524、南端では2点の須恵器杯1521・1522があるが、いずれも中ほどで割れている。

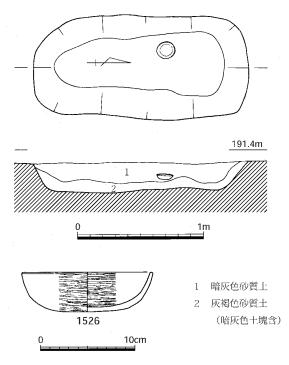
また、墓壙上面南寄りでは、M70の耳環(金環)が出土したが、これは副葬品ではなく、混入品と考えている。さらに被熱範囲の南限付近で、M71の鏃と考えられる鉄製品が出土している。故意に折り曲げられ、埋葬に伴う儀式に使われた可能性も考えられる。出土遺物から、時期的には7世紀中頃前後に比定される。 (岡田)

### 土壙墓4 (第344・423・470図、図版92)

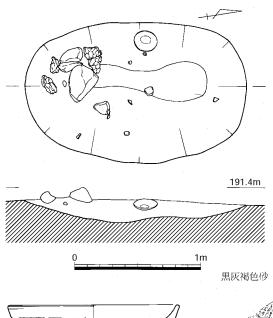
遺跡の中央部やや東寄り、窪地3の南方約18mで検出された。長軸は南北方向を示し、約2.6m、幅80cm、深さ約20cm前後を測る。壙底にはわずかな起伏がある。北寄りで一人持ち大の平らな石が







第471図 土壙墓5 (1/30)・出土遺物 (1/4)



検出されたが、壙底に密着しておらず、埋葬後の墓壙上面に置かれた可能性がある。 遺物は北寄りで出土した土師器杯1525がある。内外面は丁寧なヘラミガキが施され、 7世紀中葉前後に比定される。 (岡田)

土壙墓5 (第423・471図、図版92・98)

遺跡の中央部に存在した竪穴住居35の東 方約33mで検出された。長軸はほぼ南北で、 約1.7m、幅約80cmを測る。

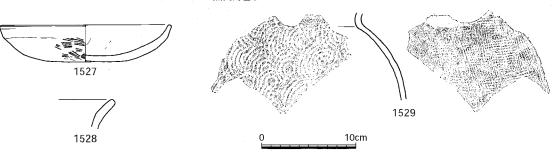
中央やや北寄りで、土師器杯1526が出土 している。壙底からやや浮いた状態で検出 されたが、副葬品と考えて良いだろう。土 壙墓4などと同様、7世紀中葉前後に比定 されるだろう。 (岡田)

土壙墓6 (第423・472図、図版93・98)

土壙墓5の北方約20mで検出された長円 形を呈する土壙である。掘り方は既述の墓 壙と比べると、明確に壙底の形状が狭く、 墓としての土壙と断定することはできな い。長軸はほぼ南北を示し、約1.7m、幅 約1.1mを測る。深さは20cm未満で浅い。

副葬品と考えられる土師器皿1527は、中 央西寄りで出土した完形品である。土師器 甕片1528と須恵器甕片1529は、混入遺物と 考えほうが妥当であろう。 (岡田)

土壙墓7 (第343・423・473図、図版98) 先述の箱式石棺1から約1.5m東側に位置し、主軸の方向が箱式石棺1とほぼ同一の土壙墓である。長軸1.57m、短軸49cmの

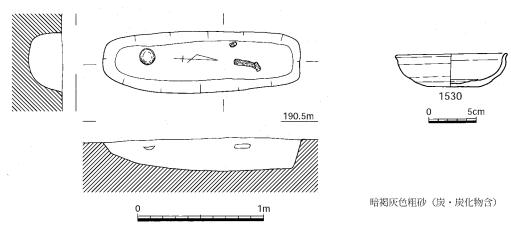


第472図 土壙墓6 (1/30)・出土遺物 (1/4)

長方形を呈し、検出面からの深さは29cmを測る。底面は北側に向かって緩やかに傾斜している。埋土中には炭・炭化物が含まれており、さらに土壙墓北側上面から20×3cmの炭化材が検出されている。出土遺物は須恵器杯身1530のみであり、底面から約15cm浮いた状態で出土した。

遺構の時期は古墳時代後期に比定される。

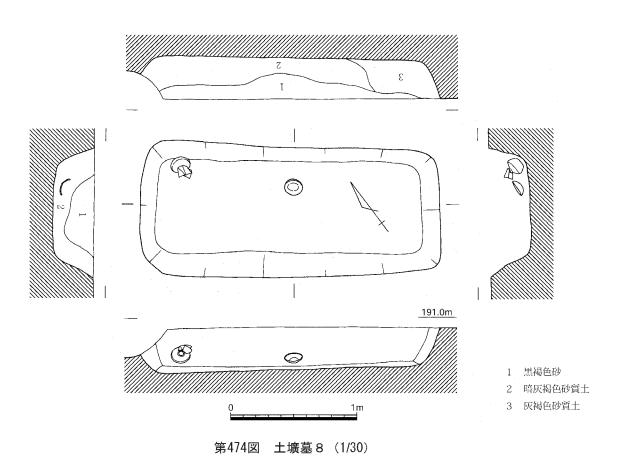
(小嶋)



第473図 土壙墓7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

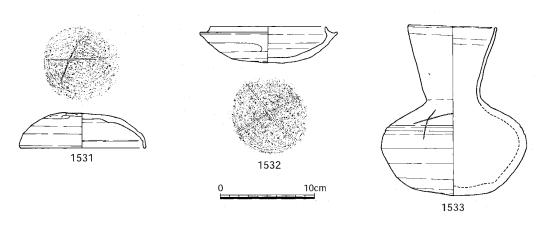
### 土壙墓8 (第348・423・474・475図)

5号墳の東に接して検出した土壙墓で、3902Dc区に位置する。墓壙は長軸2.38m、短軸1.08m



-309-

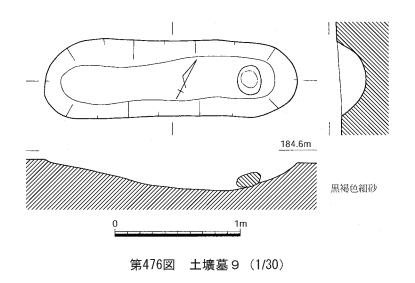
のN-53°-Wに主軸を持つ長方形を呈し、北西端は5号墳の周溝に切られている。深さ35cmの底面は平坦で、北西に向かってわずかに傾斜する。埋土は3層に分けられるが、棺痕跡は確認できなかった。墓壙の北隅から須恵器の直口壺1532が、中央東側から蓋杯1531・1532が出土した。蓋は口径13.3cm、器高3.8cmを測り、右回りにヘラケズリをする天井部と斜め上方に立ち上がる口縁部からなる。口径12.5cm、器高3.9cmを測る杯は、短く延びる立ち上がりと受け部を持ち、底部は右回りにヘラケズリをする。壺は口径9.8cm、器高18.1cmを測る。直線的に開く口頸部と肩の張る胴部からなり、底部は右回りのヘラケズリを施す。これらはいずれも「×」のヘラ描きを持ち、胎土や焼成からも同時に製作された可能性が高い。陶邑古窯址群のTK209型式にほぼ併行し、6世紀末と考えられる。 (亀山)



第475図 土壙墓8出土遺物(1/4)

### 土壙墓9 (第349・423・453・476図、図版93)

久田原11号墳の南正面付近で検出された。11号墳の南側周溝から約1.5m離れ、土壙の長軸を南側の周溝とほぼ平行させていた。ただ、土壙の中心は南側周溝の中央よりは東へ片寄る。土壙は長楕円形で、長さ2.01m、幅64cm、深さ26cmを測った。底面は平坦ではなく、最深部が中心より東側にあり、そこから西へ徐々に浅くなっている。底面の東端近くに長径26cm、厚さ10cmの河原石が1個置かれ、枕石ではないかと考えた。以上の状況から、久田原11号墳に伴う土壙墓と判断する。 (岡本)



### 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184

# 久田原遺跡 久田原古墳群

苫田ダム建設に伴う発掘調査 2 (第1分冊)

平成16年3月25日 印刷 平成16年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター 岡山市西花尻1325-3

発 行 国土交通省苫田ダム工事事務所 津山市小田中原南2280-1 岡山県教育委員会 岡山市内山下2-4-6

印 刷 旭総合印刷株式会社

# 久田原遺跡 久田原古墳群

苫田ダム建設に伴う発掘調査

2

(第2分冊)

2004

国土交通省苫田ダム工事事務所 岡 山 県 教 育 委 員 会

## 第2分冊目次

第6節	う 古代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	311
1	概要	311
2	竪穴住居 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	324
3	掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	330
4	柱穴列 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	384
5	製鉄炉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	386
6	鍛冶炉 ************************************	387
7	火葬墓 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	388
8	土壙 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	389
9	溝	398
10	格子溝	406
11	土器溜まり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	408
12	遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	409
第7頁	p 中世の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	415
1	概要 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	415
2	掘立柱建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	439
3	柱穴列 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	513
4	鍛冶工房 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	515
5	鍛冶炉 ••••••	520
6	土壙墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	526
7	竪穴遺構	536
8	土壙 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	537
9	溝	583
10	河道	595
11	落ち込み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	595
12	窪地 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	598
13	柱穴	602
14	遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	604
第4章	まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	613
第1節	7 縄文時代後期の土器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	613
1	後期土器の出土状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	613
2	土器溜まり1出土土器群 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	613
3	河道 2 上流部最下層出土土器群 •••••••	617
4	久田原遺跡出土後期土器群の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	620

5 二つの土器群に前後する後期土器と今後の問題点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	625
第2節 縄文時代の石器について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	627
1 はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	627
2 主要器種の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	627
3 器種組成からみた久田原遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	632
4 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	634
第3節 弥生土器と弥生集落・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	635
1 弥生上器について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	635
2 集落について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	641
第4節 弥生時代の石器・鉄器・玉生産について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	645
1 石器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	645
2 鉄器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	648
3 玉生産について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	650
第5節 古墳時代後期以降の墓制について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	653
1 はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	653
2 古墳群・墓の変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	653
3 横穴式石室墳周辺の小規模埋葬施設について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	655
4 石室主軸・埋葬頭位 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	655
5 おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	656
第6節 7~8世紀にかけての集落について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	657
1 久田原遺跡の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	657
2 周辺遺跡の状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	661
3 建物規模からみた古代集落	662
4 まとめ ······	663
第7節 中世の久田原遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	666
1 集落の構造 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	666
2 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	671
3 集落の性格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	673
遺構一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	677
遺物観察表	692
掲載遺構新旧対照表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	755

## 図目次

第6節	占代の遺構と遺物		347
第477図	古代遺構全体図(1/2,000)・・・・・・ 312	第515図	<b>掘立柱建物26 (1/60) · · · · · · 348</b>
第478図	古代主要遺構部分図① (1/300)···· 313	第516図	掘立柱建物26出土遺物 (1/4) ****** 349
第479図	古代主要遺構部分図② (1/300) **** 314	第517図	掘立柱建物27 (1/60) *********** 349
第480図	古代主要遺構部分図③ (1/300) ***** 315	第518図	掘立柱建物28 (1/60) ********** 350
第481図	古代主要遺構部分図④ (1/300) ***** 316	第519図	掘立柱建物28出土遺物 (1/4) ****** 351
第482図	古代主要遺構部分図⑤ (1/300) ***** 317	第520図	掘立柱建物29 (1/60) ********* 351
第483図	古代主要遺構部分図⑥ (1/300) ***** 318	第521図	掘立柱建物30(1/60)・出土遺物(1/4)
第484図	古代主要遺構部分図⑦ (1/300) ***** 319		352
第485図	古代主要遺構部分図⑧ (1/300) ***** 320	第522図	掘立柱建物31 (1/60) · · · · · 353
第486図	古代主要遺構部分図⑨ (1/300) ***** 321	第523図	掘立柱建物32 (1/60) · · · · · 354
第487図	古代主要遺構部分図⑩ (1/300) ***** 322	第524図	掘立柱建物33(1/60)・出土遺物
第488図	古代主要遺構部分図⑪ (1/300) ***** 323		(1/4,1/3)
第489図	竪穴住居40 (1/60) … 324	第525図	掘立柱建物34 (1/60) · · · · · 356
第490図	竪穴住居41(1/60)・出土遺物(1/4)	第526図	掘立柱建物35 (1/60) · · · · · 357
	325	第527図	掘立柱建物36 (1/60) · · · · · 358
第491図	竪穴住居42 (1/60) … 326	第528図	掘立柱建物37 (1/60) · · · · · 358
第492図	竪穴住居42出土遺物(1/3,1/4)・・・・ 327	第529図	掘立柱建物38 (1/60) · · · · · 359
第493図	竪穴住居43(1/60)・出土遺物①(1/4)	第530図	掘立柱建物39 (1/60) · · · · · 360
	328	第531図	掘立柱建物40(1/60)・出土遺物
第494図	竪穴住居43出土遺物②(1/4,1/3)・・・ 329		(1/4,1/3)
第495図	竪穴住居44(1/60)・出土遺物(1/4)	第532図	掘立柱建物41(1/60)・出土遺物(1/4)
	329		362
第496図	掘立柱建物8、柱穴列3位置関係	第533図	掘立柱建物42 (1/60) • • • • • 363
	(1/200) 330	第534図	掘立柱建物43(1/60)・出土遺物(1/4)
第497図	掘立柱建物 8 (1/60) 330		364
第498図	掘立柱建物 9 (1/60) 331	第535図	掘立柱建物44(1/60)・出土遺物(1/4)
第499 ※	掘立柱建物10 (1/60) 332		365
第500図	掘立柱建物11 (1/60) 333	第536凶	掘立柱建物45 (1/60) · · · · · 366
第501図	掘立柱建物12 (1/60) ************************************	第537図	掘立柱建物46 (1/60) 367
第502図	掘立柱建物13(1/60)・出土遺物(1/4)	第538図	掘立柱建物47(1/60)・出土遺物(1/4)
	335		368
第503図	掘立柱建物14 (1/60)・・・・・・・・・ 336	第539図	掘立柱建物48(1/60)・出土遺物(1/4)
第504図	掘立柱建物15(1/60) 337		369
第505図	掘立柱建物16(1/60)・・・・・・・・ 338	第540図	掘立柱建物49(1/60)・出土遺物(1/4)
第506図	掘立柱建物17(1/60)・出土遺物(1/4)		370
	339	第541図	掘立柱建物50(1/60)・出土遺物(1/4)
第507図	掘立柱建物18(1/60)・・・・・・・ 340		371
第508図	掘立柱建物19(1/60) 341	第542図	掘立柱建物51(1/60)・出土遺物(1/4)
第509図	掘立柱建物20 (1/60) … 342		372
第510図	掘立柱建物21 (1/60) 343	第543図	掘立柱建物52(1/60)・出上遺物(1/4)
第511図	掘立柱建物22(1/60) · · · · · · 344		373
第512図	掘立柱建物23(1/60)・・・・・・ 345	第544図	掘立柱建物53(1/60)・・・・・・ 374
第513図	掘立柱建物24(1/60) 346	第545図	掘立柱建物54(1/60)・出土遺物(1/4)
第514図	掘立柱建物25(1/60)・出土遺物(1/4)		375

第546図	掘立柱建物55 (1/60)・出上遺物 (1/4)	第592図	上壙146 (1/30) · · · · · · 396
	••••• 37	9,3000	上壙147 (1/30) · · · · · 396
第547図	掘立柱建物56 (1/60) ******************* 37		土壙148 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 397
第548図	掘立柱建物56出土遺物 (1/4)・・・・・・ 37		土壙149(1/30)・・・・・・・・ 397
第549図	掘立柱建物57 (1/60) ************************************	8 第596図	土壙150 (1/30) · · · · · 397
第550凶	掘立柱建物58 (1/60) ************************************	9 第597図	土壙151 (1/30) · · · · · 397
第551図	掘立柱建物59 (1/60) · · · · · 38	0 第598凶	土壙152 (1/30) ************************************
第552図	掘立柱建物60 (1/60) 38	1 第599凶	土壙153 (1/30) • • • • 398
第553図	掘立柱建物61 (1/60) 38	2 第600図	溝38 (1/30) · · · · · 398
第554図	掘立柱建物62 (1/60) *********** 38	3 第601図	溝39上流部 (1/30) ********** 398
第555図	掘立柱建物63 (1/60) ********* 38	3 第602図	溝39中流部・下流部 (1/30)・・・・・・ 399
第556図	柱穴列1 (1/60) **************** 38	4 第603図	溝39出土遺物① (1/4) ******* 399
第557図	柱穴列2 (1/60) 38	4 第604図	溝39出土遺物② (1/4) 400
第558図	柱穴列3 (1/60) 38	5 第605図	溝39出土遺物③ (1/4,1/3) ・・・・・・・ 401
第559図	柱穴列 4 (1/60) 38	5 第606図	溝39陶馬・土馬片分布状況 (1/100)・ 402
第560図	柱穴列 5 (1/60) ********** 38	5 第607図	溝39陶馬頭部片出土地点周辺遺物分布状況
第561図	柱穴列6 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・ 38	5	(1/30) 402
第562図	製鉄炉1 (1/60)・周辺出土遺物 (1/4)	第608図	溝39出土遺物④ (1/3) · · · · · 403
	38	6 第609図	溝40 (1/30) · 出上遺物① (1/4) · · · · 404
第563図	鍛冶炉 1 (1/30) ******** 38	7 第610図	溝40出上遺物② (1/3) 405
第564図	鍛冶炉 2 (1/30) ******* 38		溝41 (1/30) · · · · · · 405
第565図	鍛冶炉3 (1/30) ******** 38		溝42(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・405
第566図	火葬墓 1 (1/20)・出土遺物 (1/4)・	第613図	溝43(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・405
	火葬骨埋納状態 (1/3) • • • • • 38		溝44(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・405
第567図	土壙120 (1/30) · · · · · 38		溝45 (1/30)·出土遺物 (1/4)····· 406
第568図	土壙121 (1/30) · · · · · 38	1	溝46(1/30)・・・・・・・・・・・ 406
第569図	土壙122 (1/30) · · · · · 38		溝47(1/30)・・・・・・・・・・・ 406
第570図	上壙123 (1/30)·出上遺物 (1/4)··· 39	0 第618図	溝48 (1/30) · · · · · · 406
第571図	上壙124 (1/30)·出上遺物 (1/4)··· 39	0 第619図	格子溝 (1/300,1/60) 407
第572図	土壙125 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 39		上器溜まり2 (1/60)・出上遺物① (1/4)
第573図	土壙126 (1/30) · · · · · 39	1	408
第574図	土壙127 (1/30) · · · · · 39	1 第621図	土器溜まり2出土遺物② (1/3)・・・・・ 409
第575図	土壙128 (1/30) • • • • • 39	1	一括出土鉄鎌 (1/3) · · · · · 409
第576凶	土壙129 (1/30) ********** 39	2 第623凶	遺構に伴わない遺物① (1/4)・・・・・・ 410
第577凶	土壙130 (1/30) · · · · · 39	1	遺構に伴わない遺物② (1/4)・・・・・・ 411
第578図	土壙131 (1/30)·出土遺物 (1/4)··· 39		遺構に伴わない遺物③ (1/3)・・・・・・ 412
第579図	土壙132 (1/30) • • • • • 39	3 第626図	遺構に伴わない遺物④ (1/3)・・・・・・ 413
第580図	土壙133 (1/30)·出土遺物 (1/4)··· 39	1	
第581図	土壙134 (1/30) · · · · · 39	1	中世遺構全体図 (1/2,500) ***** 416
第582図	土壙135 (1/30) · · · · · 39	4 第628図	中世主要遺構部分図① (1/500) *** 417
第583図	土壙136 (1/30) · · · · · 39		中世主要遺構部分図② (1/500) **** 418
第584図	土壙137 (1/30) · · · · · · 39		中世主要遺構部分図③ (1/500) *** 419
第585図	土壙138 (1/30) · · · · · · 39		中世主要遺構部分図④ (1/500) **** 420
第586図	土壙139 (1/30) · · · · · · 39		中世主要遺構部分図⑤ (1/500)・・・・・ 421
第587図	土壙140 (1/30) · · · · · · 39		中世主要遺構部分図⑥ (1/500)・・・・・ 422
第588図	土壙141 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 39		中世主要遺構部分図⑦ (1/300) **** 423
第589図	上壙142 (左)・143 (1/30)・・・・・・ 39		中世主要遺構部分図8 (1/300) · · · · · 424
第590図	土壙144 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 39		中世主要遺構部分図⑨ (1/300) · · · · · 425
第591図	土壙145 (1/30) · · · · · · 39		中世主要遺構部分図⑩ (1/300) · · · · · 426
21************************************		1 213001	

প্রত্তরভাগ	中州子亚海ຸ排郊/入図①(1/200) 427	প্রতেওতা	提去疗建物07 (1/100)
第638図	中世主要遺構部分図⑪ (1/300) *** 427	第683図	掘立柱建物97 (1/100) · · · · · · · · · 460
第639図	中世主要遺構部分図② (1/300) ・・・・ 428	第684図	掘立柱建物98 (1/100) · · · · · · · · 461
第640図	中世主要遺構部分図③ (1/300) · · · · 429	第685図	掘立柱建物99 (1/100) · · · · · · · · · 461
第641図	中世主要遺構部分図④(1/300)・・・・ 430	第686図	掘立柱建物100 (1/100) · · · · · · · · 462
第642図	中世主要遺構部分図⑤ (1/300)・・・・・ 431	第687図	掘立柱建物101 (1/100)・出土遺物 (1/4)
第643図	中世主要遺構部分図⑯ (1/300)・・・・・ 432	##t a a a b ut	462
第644図	中世主要遺構部分図⑰ (1/300)・・・・・ 433	第688凶	掘立柱建物102(1/100)・出土遺物(1/4)
第645図	中世主要遺構部分図® (1/300) *** 434		463
第646図	中世主要遺構部分図⑲ (1/300) *** 435	第689図	掘立柱建物103(1/100)・出土遺物(1/4)
第647図	中世主要遺構部分図20 (1/300) **** 436		464
第648図	中世主要遺構部分図② (1/300) **** 437	第690図	掘立柱建物104(1/100)・出土遺物(1/4)
第649図	中世主要遺構部分図② (1/300) **** 438		
第650図	掘立柱建物64(1/100)・出土遺物(1/4)	第691図	掘立柱建物105 (1/100)······ 466
	•••••• 439	第692図	掘立柱建物106(1/120)・・・・・・・ 467
第651図	掘立柱建物65(1/100)・・・・・・・・・ 440	第693図	掘立柱建物106出土遺物(1/4,1/3)・・ 468
第652図	掘立柱建物66 (1/100) 440	第694図	掘立柱建物107(1/100)・出土遺物
第653図	掘立柱建物67(1/100)・・・・・・・・・ 440		(1/4,1/3) 468
第654図	掘立柱建物68(1/100)・・・・・・・・・ 441	第695図	掘立柱建物108 (1/100) **** 469
第655図	掘立柱建物69(1/100)・・・・・・・・・ 441	第696図	掘立柱建物108出上遺物 (1/4) **** 470
第656図	掘立柱建物70 (1/100) • • • • • • • 442	第697図	掘立柱建物109 (1/100) **** 470
第657図	掘立柱建物71(1/100)・・・・・・・・・ 442	第698図	掘立柱建物110(1/120)・・・・・・・・ 471
第658図	掘立柱建物72(1/100)・出土遺物(1/4)	第699図	掘立柱建物110出土遺物(1/4,1/3)·· 472
	••••• 443	第700図	掘立柱建物111 (1/100) **** 473
第659図	掘立柱建物73(1/100)・・・・・・・・ 443	第701図	掘立柱建物111出土遺物 (1/4)・・・・・ 474
第660図	掘立柱建物74(1/100)・・・・・・・・・ 444	第702図	掘立柱建物112(1/100)・出土遺物(1/4)
第661図	掘立柱建物75 (1/100) • • • • • • • 444		474
第662図	掘立柱建物76(1/100)・・・・・・・・・ 445	第703図	掘立柱建物113(1/100)・出土遺物(1/4)
第663図	掘立柱建物77 (1/100) • • • • • • • 446		475
第664図	掘立柱建物78(1/100)・・・・・・・・・ 447	第704図	掘立柱建物114(1/100)・出上遺物(1/4)
第665図	掘立柱建物79(1/100)・・・・・・・・・ 448		••••• 476
第666図	掘立柱建物80(1/100)・出土遺物(1/4)	第705図	掘立柱建物115(1/100)・出土遺物(1/4)
	448		477
第667図	掘立柱建物81(1/100)・・・・・・・・・ 449	第706図	掘立柱建物116 (1/100) **** 478
第668図	掘立柱建物82(1/100)・・・・・・・・・ 450	第707凶	掘立柱建物117(1/100)・出土遺物
第669図	掘立柱建物83 (1/100) • • • • • • • 451		(1/4,1/3)
第670図	掘立柱建物84(1/100)・出土遺物(1/4)	第708図	掘立柱建物118 (1/100) ・・・・・・・・・・ 480
	•••••• 452	第709図	掘立柱建物118出土遺物 (1/4)・・・・・ 481
第671図	掘立柱建物85 (1/100) • • • • • • 453	第710図	掘立柱建物119 (1/100) ***** 481
第672図	掘立柱建物86(1/100)・・・・・・・・・ 454	第711図	掘立柱建物120 (1/100) **** 482
第673図	掘立柱建物87(1/100)・・・・・・・・・ 454	第712図	掘立柱建物121(1/100)・出土遺物(1/4)
第674図	掘立柱建物88(1/100)・・・・・・・・・ 455		483
第675図	掘立柱建物89(1/100)・・・・・・・・・ 455	第713図	掘立柱建物122 (1/120) ***** 484
第676図	掘立柱建物90(1/100)・・・・・・・ 456	第714図	掘立柱建物123 (1/120) · · · · · 485
第677図	掘立柱建物91 (1/100) 457	第715図	掘立柱建物124 (1/100) **** 486
第678図	掘立柱建物92(1/100)・・・・・・・・ 457	第716図	掘立柱建物125 (1/100) ***** 487
第679図	掘立柱建物93(1/100)・・・・・・・ 458	第717図	掘立柱建物126(1/100)・出土遺物(1/4)
第680図	掘立柱建物94(1/100)・・・・・・・ 458		488
第681図	掘立柱建物95(1/100)・・・・・・・・・ 459	第718図	掘立柱建物127(1/100)・出上遺物
第682図	掘立柱建物96(1/100)・・・・・・・・・ 459		(1/4,1/3) 489
	'		

第719図	掘立柱建物128(1/100)・出上遺物(1/3)	第757図	鍛冶工房 1 ② (1/100) 516
MIIJE	······································	第757图	鍛冶工房 1 鍛錬鍛冶滓出上分布 (1/100)
第720図	掘立柱建物129(1/100)・・・・・・・ 490	M1 2012	······································
第721図	掘立柱建物130(1/100)・・・・・・・・ 490	第759図	鍛冶工房 1 出土遺物① (1/4) · · · · · 517
第722図	掘立柱建物131(1/100) 491	第760図	鍛冶工房 1 出土遺物② (1/3)······ 518
第723凶	掘立柱建物132 (1/100)·出土遺物	第761図	鍛冶工房 1 出土遺物③ (1/4) · · · · · · 519
20172D	(1/4,1/3) · · · · · 491	第762図	鍛冶炉 4 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 520
第724図	掘立柱建物133(1/100)・・・・・・・・ 492	第763凶	鍛冶炉 5 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 521
第725図	掘立柱建物134 (1/100) 492 493	第764図	鍛冶炉 6 (1/30)・出土遺物 (1/3)・ 521
第726図	掘立柱建物135 (1/100)・出土遺物 (1/4)	第765図	鍛冶炉7 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)
为170回	加西亞在建物135(1/100)。由 1.週初(1/4)	死103回	мхдиг (1/30) · ц г. дату (1/4,1/3) · · · · · · · · · 522
第727図	掘立柱建物136 (1/100)・出土遺物 (1/4)	第766図	鍛冶炉8(1/30)・・・・・・・・ 523
第171図			
<b>给720</b> 网	495	第767図	鍛冶炉9 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 523
第728図	掘立柱建物137(1/100)・・・・・・・ 496	第768図	鍛冶炉10(1/30)・・・・・・・・・ 524
第729図	掘立柱建物138(1/100)・・・・・・・ 496	第769図	鍛冶炉11 (1/30)・・・・・・・・・・・ 525
第730図	掘立柱建物139(1/100)······ 497	第770図	鍛冶炉12 (1/30) · 出土遺物 (1/4) · · 525
第731図	掘立柱建物140(1/100)・・・・・・・ 497	第771図	土壙墓10 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 526
第732図	掘立柱建物141(1/100)・出土遺物(1/3)	第772図	土壙墓11(1/30)・・・・・・ 526
####	498	第773図	上壙墓11出上遺物(1/4,1/3)・・・・・・ 527
第733図	掘立柱建物142 (1/100) · · · · · · · · 499	第774図	上壙墓12 (1/30)・出上遺物①
第734図	掘立柱建物143(1/100)・・・・・・ 500	Wasse	(1/4)
第735図	掘立柱建物143出土遺物(1/4,1/3) · · 501	第775図	土壙墓12出土遺物②(1/3)・・・・・・ 528
第736図	掘立柱建物144 (1/100)・出土遺物 (1/4)	第776図	土壙墓13(1/30)・・・・・・・・ 528
h-t	501	第777図	土壙墓14関連遺物 (1/4) ***** 528
第737図	掘立柱建物145 (1/100) ***** 502	第778図	土壙墓14(1/60)・・・・・・ 529
第738図	掘立柱建物146 (1/100) ****** 503	第779図	土壙墓15 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 530
第739図	掘立柱建物147 (1/100) **** 503	第780図	土壙墓16(1/30)・出土遺物(1/4,1/3)
第740図	掘立柱建物148 (1/100) ****** 504		530
第741図	掘立柱建物149 (1/100) ****** 505	第781図	上壙墓17(1/30)・出上遺物(1/3,1/2)
第742図	掘立柱建物150(1/100)・・・・・・ 506		531
第743図	掘立柱建物151 (1/100)・出土遺物 (1/4)	第782図	土壙墓18 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 532
	507		土壙墓19 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 532
第744网	掘立柱建物152(1/100)・出土遺物(1/4)	第784図	土壙墓20 (1/30) · · · · · · 533
	508	第785凶	土壙墓21 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 533
第745凶	掘立柱建物153(1/100)・出土遺物(1/4)	第786凶	土壙墓22(1/30)・出土遺物(1/4,1/3)
	509		534
第746図	掘立柱建物154 (1/100) ****** 509	第787図	土壙墓23 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・ 535
第747図	掘立柱建物155 (1/100) ******* 510	第788図	土壙墓24(1/30)・出土遺物(1/4)・・ 535
第748図	掘立柱建物156(1/100)・出土遺物(1/4)	第789図	土壙墓25(1/30)・出土遺物(1/4,1/3)
	510		536
第749図	掘立柱建物157 (1/100)······ 511	第790図	竪穴遺構 1 (1/60) ****** 536
第750図	掘立柱建物158(1/100)・出土遺物(1/4)	第791図	竪穴遺構 2 (1/60)・出土遺物(1/4)
	512		537
第751図	柱穴列7 (1/100) 513	第792図	土壙154~159(1/30)・・・・・・ 537
第752図	柱穴列8 (1/100) 513	第793図	土壙160(1/40)・出土遺物(1/4)・・・ 538
第753図	柱穴列9 (1/100) 513	第794図	土壙161 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 538
第754図	柱穴列10~12(1/100)・・・・・・ 514	第795図	上壙162 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・ 538
第755図	柱穴列13 (1/100) • • • • 514	第796図	上壙163 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・ 539
第756図	鍛冶工房 1 ① (1/60) 515	第797図	土壙164(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 539

```
上壙165 (1/30)·出上遺物 (1/4)··· 539
                                       第846図 上壙219~224 (1/30)・出上遺物
第798図
      上壙166(1/30)・出上遺物(1/4)・・・ 540
第799図
                                               第800図
      土壙167 (1/30) · · · · · · 540
                                       第847図
                                              土壙225 (1/30) · · · · · · 557
第801図
      土壙168 (1/30) ****** 540
                                       第848図
                                              土壙226 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・ 557
第802図
      土壙169(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 540
                                       第849図
                                              土壙227~229 (1/30) · 出土遺物 (1/4)
第803図
      土壙170 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 541
                                              557
第804図
      土壙171 (1/30) · · · · · 541
                                       第850凶
                                             土壙230 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 558
第805図
      土壙172 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 541
                                       第851図
                                              土塘231 (1/30) · 出土遺物 (1/3) · · · 559
      土壙173 (1/30) · 出土遺物 (1/4) · · · 541
                                              土壙232 (1/30) · 出土遺物 (1/4) · · · 559
第806図
                                       第852図
      土壙174 (1/30)·出土遺物 (1/4)··· 542
第807図
                                       第853図
                                              土壙233 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)
                                              559
第808図
      土壙175 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 542
      土壙176 (1/30) · · · · · 542
第809図
                                              土壙234(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 559
                                       第854図
      土壙177 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 543
第810図
                                       第855図
                                              土壙235 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 560
                                              土壙236 (1/30) · 出土遺物 (1/3) · · · 560
第811図
      土壙178 (1/30) · · · · · 543
                                       第856図
第812図
      土壙179(1/30)・山土遺物(1/3)・・・ 543
                                       第857図
                                              土壙237(1/30)・山土遺物(1/4)・・・ 560
                                              土壙238 (1/30) · 出土遺物 (1/4) · · · 561
第813図
      土壙180 (1/30)・出土遺物 (1/5)・・・ 544
                                       第858図
第814図
      土壙181 (1/30) · · · · · · 544
                                       第859図
                                              土壙239 (1/30) · 出土遺物 (1/4) · · · 561
      土壙182 (1/60) *********** 544
                                              土壙240(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 561
第815図
                                       第860図
      上壙183 (1/30) ******* 545
                                              上壙241(1/30)・出上遺物(1/4)・・・ 562
第816図
                                       第861図
      上壙184 (1/30) ******* 545
第817図
                                       第862図
                                              上壙242 (1/30)·出上遺物 (1/4)··· 562
第818図
      土壙185 (1/30) ******* 545
                                       第863図
                                              上塘243 (1/30) • 出上遺物 (1/3.1/4)
第819図
      土壙186 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・ 546
                                              第820図
      土壙187 (1/30) … 546
                                       第864図
                                             土壙244(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 563
      土壙187出土遺物 (1/4) ******* 547
                                              土壙245 (1/30) · 山土遺物 (1/4) · · · 564
第821図
                                       第865図
                                             土壙246 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 564
第822図
      土壙188 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 547
                                       第866図
第823図
      土壙189 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 548
                                       第867図
                                              土壙247(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 564
第824図
      土壙190 (1/30) ------ 548
                                       第868図
                                             土壙248 (1/30) · · · · · 565
                                             上壙249 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・ 565
第825図
      上壙191 (1/30)·出上遺物 (1/5)··· 548
                                       第869図
第826図
      上壙192 (1/30)·出上遺物 (1/4)··· 549
                                       第870図
                                             上壙250 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・ 565
第827図
      土壙193(1/30)・出土遺物(1/3)・・・ 549
                                       第871図
                                             上壙251 (1/30) · · · · · · 566
      土壙194 (1/30) · · · · · · 549
第828図
                                       第872図
                                             土壙252 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 566
      土壙195 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 549
第829図
                                       第873図
                                             土壙253 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 566
                                             土壙254(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 567
第830図
      土壙196(1/30)・出土遺物(1/2)・・・ 550
                                       第874図
                                             土壙255 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 567
第831図
      土壙197 (1/30) ******* 550
                                       第875凶
第832図
      土壙198 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 550
                                       第876図
                                              土塘256(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 567
第833図
      土壙199 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・ 551
                                       第877図
                                             土壙257 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 568
                                              土壙258 (1/30)·出土遺物 (1/3)··· 568
第834図
      土壙200 (1/30)·出土遺物 (1/3)··· 551
                                       第878図
第835図
      土壙201 (1/30) · 出土遺物 (1/4) · · · 551
                                       第879図
                                              土壙259 (1/30)·出土遺物 (1/4)··· 568
第836図
      土壙202・203 (1/30)・・・・・・・ 552
                                       第880図
                                              土壙260(1/30)・出土遺物(1/4,1/3)
第837図
      土壙204・205 (1/30)・・・・・・・ 552
                                              第838図
      土壙206・207 (1/30) · · · · · 552
                                       第881図
                                              土壙261 (1/30) · 出土遺物 (1/4) · · · 570
      土壙208 (1/30)・山土遺物 (1/4)・・・ 553
                                       第882図
                                              土壙262 (1/30) · · · · · · 570
第839図
第840図
      土壙209(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 553
                                       第883図
                                              土壙263 (1/30) … 570
第841図
      土壙210 (1/30) ********** 553
                                       第884図
                                              土壙263出土遺物(1/4,1/3) ****** 571
第842図
      土壙211 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・・ 554
                                       第885図
                                              土壙264(1/30)・出土遺物(1/4)・・・ 572
第843図
      土壙212~216 (1/30) · 出土遺物 (1/4)
                                       第886図
                                              土壙265 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・ 572
      554
                                       第887図
                                              上壙266 (1/60) · · · · · 572
      土壙217 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・ 555
                                       第888図
第844図
                                             上壙266部分拡大図(1/10)・出上遺物
第845図
      土壙218 (1/60)・出土遺物 (1/3)・・・ 555
```

第889図	上壙267 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第936図	溝79 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	589
第890図	上壙268 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第937図	溝80 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・・・・	
第891図	土壙269 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第938図	溝81 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第892図	土壙270(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	575	第939図	溝82 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第893図	土壙271 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	575	第940図	溝83.84 (1/30)	
第894凶	土壙272(1/30)・出土遺物(1/4)・・・	576	第941図	溝85 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第895凶	土壙273 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	576	第942図	溝86 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第896図	土壙274 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	577	第943図	溝87 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	591
第897図	土壙275 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	578	第944図	溝88 (1/30,1/120) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	592
第898図	土壙276 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	578	第945図	溝89 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	592
第899図	土壙277 (1/30) • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	578	第946図	溝90(1/60,1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	593
第900図	土壙278 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・	579	第947図	溝91 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	593
第901図	土壙279 (1/30)・出土遺物 (1/3)・・・	579	第948図	溝92(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	594
第902図	土壙280 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/2)		第949図	溝93(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	594
	••••	579	第950図	溝94 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・	594
第903図	土壙281 (1/30)・出土遺物 (1/2)・・・	579	第951図	溝95 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	594
第904図	土壙282 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・	580	第952図	溝96 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	594
第905図	土壙283 (1/30) ************************************	580	第953図	溝97 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	594
第906図	上壙284 (1/30)・出上遺物 (1/3)・・・	581	第954図	溝98 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	594
第907図	上壙285 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	581	第955図	河道10 (1/120) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	595
第908図	土壙286 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・	581	第956図	落ち込み 1 (1/60)・・・・・・・・・・・・・・	595
第909図	土壙287 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・	582	第957図	落ち込み1出土遺物① (1/4)・・・・・・	596
第910図	土壙288 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・	582	第958図	落ち込み1出土遺物②(1/4,1/3)・・・	597
第911図	土壙289 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・		第959図	落ち込み2出土遺物 (1/4)・・・・・・・・	
第912図	土壙290 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/4)		第960図	落ち込み3出土遺物 (1/4)・・・・・・・・	598
		583	第961図	窪地4 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)	
第913図	溝49① (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	583			598
第914図	溝49② (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第962図	窪地 5 (1/60)・出上遺物 (1/4,1/3)	
第915図	溝50 (1/30)・出上遺物 (1/4)・・・・・・				599
第916図	溝51 (1/30)・出土遺物 (1/4)・・・・・・		第963図	窪地 6 (1/60) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	599
第917図	溝52 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第964図	窪地 6 出土遺物 (1/3,1/4) · · · · · · · ·	
第918図	溝53(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			窪地7 (1/60)·出土遺物 (1/3,1/4)	
第919図	溝54(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	585	Magach		600
第920凶	溝55 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第966凶	窪地8 (1/60)・出土遺物 (1/4)・・・・	
第921凶	溝56 (1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第967凶	窪地 9 (1/60)·出土遺物 (1/3)····	
第922図	溝57 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	585	第968図	窪地10 (1/60)·出土遺物 (1/4)····	
第923図	溝58~61(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	586	第969図	柱穴出土遺物①(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第924図	溝62.63 (1/30) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		第970図	柱穴出土遺物②(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第925図	溝64(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第971図	柱穴出土遺物③(1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第926図	溝65(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	586	第972図	遺構に伴わない遺物① (1/4)・・・・・・・	
第927図	溝66~68(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	587	第973図	遺構に伴わない遺物② (1/4)・・・・・・・・	
第928図	溝69(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第974図	遺構に伴わない遺物③ (1/4)・・・・・・・	
第929図	溝70 (1/30)	587	第975図	遺構に伴わない遺物④ (1/4)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第930図	溝71(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	588	第976図	遺構に伴わない遺物⑤ (1/4) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第931図	溝72(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第977図	遺構に伴わない遺物⑤ (1/4) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第931凶 第932図	溝73(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	I	第978図	遺構に伴わない遺物⑦ (1/3,1/4)・・・	
	溝74(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	I			011
第933図	溝75~77(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	I	第4章	まとめ	
第934図	溝78(1/30)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		第1節	縄文時代後期の上器について	C1E
第935図	(円10 (1/3U)	J09	第979図	久田原遺跡土器溜まり1器種分類図・	010

第980図	主要遺跡出上上器群縄文原体撚り方向	第997図	久口原遺跡出上の弥生時代鉄器・・・・・ 649
	比率比較図 · · · · · · · · 621	第998図	筋砥石 (1/6) · · · · · 650
第981図	久田原遺跡・津島岡大遺跡・百問川沢田	第999図	碧玉製管玉製作工程 (1/3) ***** 650
	遺跡出土縄文後期土器群主要土器変遷図	第5節	古墳時代後期以降の墓制について
	(1/6) 623	第1000図	古墳群の変遷・・・・・・・・・・ 654
第982図	津雲A式~彦崎KⅡ式主要土器群土器組成	第1001図	石室主軸・埋葬頭位・・・・・・・・ 654
	比率 · · · · · 624	第6節	7~8世紀にかけての集落について
第2節	縄文時代の石器について	第1002図	竪穴の規模・・・・・・・・・・・ 657
第983図	石鏃形態分類 • • • • • 627	第1003図	集落の遺構配置 (1/800)・・・・・・・ 658
第984図	石鏃時期別長/幅分布・・・・・・・・ 628	第1004図	久田原遺跡の建物規模・・・・・・・・ 659
第985図	石鍬形態分類 • • • • • 629	第1005図	斎宮遺跡・百間川原尾島遺跡の掘立柱
第986図	石鍬長/幅、長/重分布・・・・・・・ 630		建物 … 660
第987図	久田原遺跡時期別石器の器種組成・・・ 633	第1006図	小型竪穴工房 · · · · · · · 662
第988図	縄文晩期遺跡別石器の器種組成・・・・・ 633	第1007図	岡山県下の掘立柱建物の規模・・・・・ 663
第3節	弥生土器と弥生集落	第7節	中世の久田原遺跡
第989図	久田原遺跡弥生時代土器編年(1/12)	第1008図	掘立柱建物の規模・・・・・・・・・ 666
	636	第1009図	掘立柱建物の規格(1マス3m、1/400)
第990図	久田原遺跡におけるタタキの実例・・・ 639		666
第991図	弥生上器タタキ成形の手順	第1010図	B群区画の変遷(1マス4.5m、1/1,000)
	(深澤1998より引用)・・・・・・・・・ 640		667
第992図	集落の変遷 (苫田5~8期)・・・・・・・ 642	第1011図	土壙墓14の五輪塔(1/12)・・・・・・・ 668
第993図	主要遺構変遷図・・・・・・・・・・ 643	第1012図	鍛冶工房の作業配置と操業風景
第4節	弥生時代の石器・鉄器・玉生産について		(岡山日報社『職人尽図』1982より一部
第994図	久田原遺跡出土の弥生時代石器の出土		転載) … 669
	点数および石器組成・・・・・・・ 645	第1013図	B 群北側の鍛冶関連遺構(1/400)・・ 670
第995図	石鏃の法量分布・・・・・・・・・・ 646	第1014図	椀・杯・皿の変遷(1/6)・・・・・・・ 671
第996図	磨製石剣または石矛、磨製石包」	第1015図	中世集落の建物規模・・・・・・・・ 673
	再加工品 (1/3) • • • • • 647		

## 写真目次

第6節 古代の遺構と遺物	写真19 掘立柱建物44遺物出土状況(南から)・365
写真10 竪穴住居40調査風景(南から)・・・・・・ 324	写真20 掘立柱建物46清掃作業 (南から)・・・・・ 367
写真11 竪穴住居42調査および清掃作業	写真21 掘立柱建物53・54清掃作業(北から)・375
(北西から)・・・・・・・・・ 326	第7節 中世の遺構と遺物
写真12 掘立柱建物8・9付近作業風景	写真22 掘立柱建物76周辺遺構検出状況(東から)
(北西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 332	445
写真13 掘立柱建物12~19付近作業風景(北から)	写真23 掘立柱建物84周辺遺構検出状況(北から)
341	451
写真14 掘立柱建物22清掃作業 (北から)・・・・・ 343	写真24 掘立柱建物94清掃作業 (北から)・・・・・ 458
写真15 掘立柱建物22~24付近作業風景(北から)	写真25 掘立柱建物103清掃作業(南から)・・・・ 463
344	写真26 掘立柱建物111清掃作業(南から)・・・・ 473
写真16 掘立柱建物24清掃作業(東から)・・・・・ 346	写真27 掘立柱建物119(右下)周辺遺構(北から)
写真17 掘立柱建物33清掃作業(北西から)・・・ 354	481
写真18 掘立柱建物39・42・43付近作業風景	写真28 掘立柱建物143清掃作業(南から)・・・・ 499
(南から)・・・・・・・・・ 364	写真29 掘立柱建物148周辺遺構検出状況(東から)
	I and the second

	•••••	504		••••	512
写真30	掘立柱建物150清掃作業(西から)		写真33	鍛冶工房1内方形上壙(南から)・・・・・	519
	•••••	505	写真34	土壙墓14関連五輪塔(南から)・・・・・・・	528
写真31	掘立柱建物151周辺遺構検出状況(西か	5)	写真35	土壙177 (北から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	543
	•••••	507	写真36	溝86清掃作業 (南から)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	591
写真32	掘立柱建物158清掃作業(南から)				
		表 E	3次		

## 表目次

第4章 まとめ	第6節 7~8世紀にかけての集落について
第2節 縄文時代の石器について	表 6 側柱建物の規模 ・・・・・・・・・・・・・ 659
表 5 久田原遺跡出上石器の器種組成 ・・・・・・ 632	表 7 岡山県下古代の遺跡 ・・・・・・・・・・・ 665

### 第6節 古代の遺構と遺物

### 1 概要

古代の遺構は久田原遺跡全体に展開するのではなく、遺跡の北東部に竪穴住居や掘立柱建物をはじめとして、ほとんどの種類の遺構が集中し、北隣の夏栗遺跡との境界付近には、古代の遺構群の北限を画するかのように溝群が北西から南東へ流走していた。この集中地区をはずれた遺構をみると、遺跡の北西部に火葬墓が1基と土壙が3基、南西部に耕作痕跡かとみられる格子溝と平安時代後期の掘立柱建物が1棟、南東部に掘立柱建物が1棟にすぎない。南東部の掘立柱建物は時代を厳密には確定できなかったため、多くの古代遺構の年代を占める奈良時代から平安時代初めの頃には、人々の日常活動が行われた居住域は遺跡北東部に限定されていたものとみられる。この遺跡北東部は古墳時代の7世紀に竪穴住居や土壙墓がすでに作られていて、出土遺物には丹塗りの土師器もみられた。後述するが、古代遺構群に官衙的な色彩が見られるとすれば、その起源はこの7世紀代に求められる。

古代の遺構は竪穴住居5軒、掘立柱建物56棟、柱穴列6列、製鉄炉1基、鍛冶炉3基、火葬墓1基、土壙11基、溝12条、格子溝1か所、土器溜まり1か所を数える。土壙は、出土遺物から年代の確定できるものや、埋土・検出面などによる推定年代ではあるが形態的に特徴のあるものを掲載した。

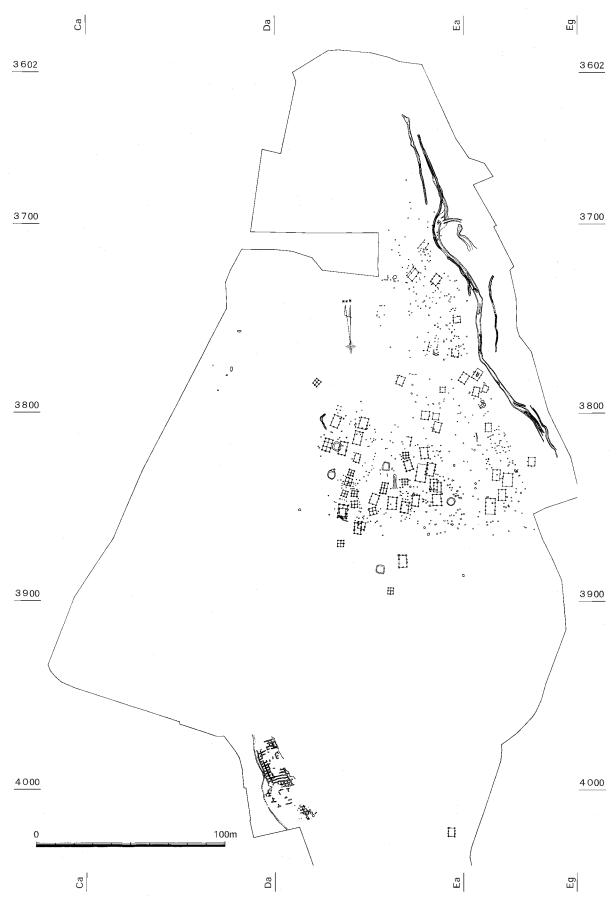
竪穴住居の分布状況をみると、10~50mの間隔で散在し、近接したり重複するような状況にはなかった。掘立柱建物との関係では重複例があり、掘立柱建物の廃棄後に造られているものもあった。

掘立柱建物を規模からみると、 $4\times2$ 間が5棟を数えるものの、 $3\times2$ 間と $2\times2$ 間が合わせて45棟になって大半を占める。もっとも大きな建物は $4\times2$ 間で、面積が48.6㎡を測る。掘立柱建物の分布状況をみると、同じような棟方向をもった建物が地区ごとに集中するという傾向がみられる。このような群が $8\sim10$ 程度はみられるようで、それらの群がほとんど重複することなく配置されている。個々の建物群では軒の出を考慮すると同時に複数の建物は併存しえない場合が多い。建物が重複している場合では棟方向がほぼ等しいことも考え合わせると、建物群の複数建物は数度の建て替えによる結果ではないかと考えられる。久田原遺跡の古代建物群では、さまざまな棟方向を持った建物が散在し、同地点で同じ棟方向の建物を建て替え続けていったのではないかとみられる。

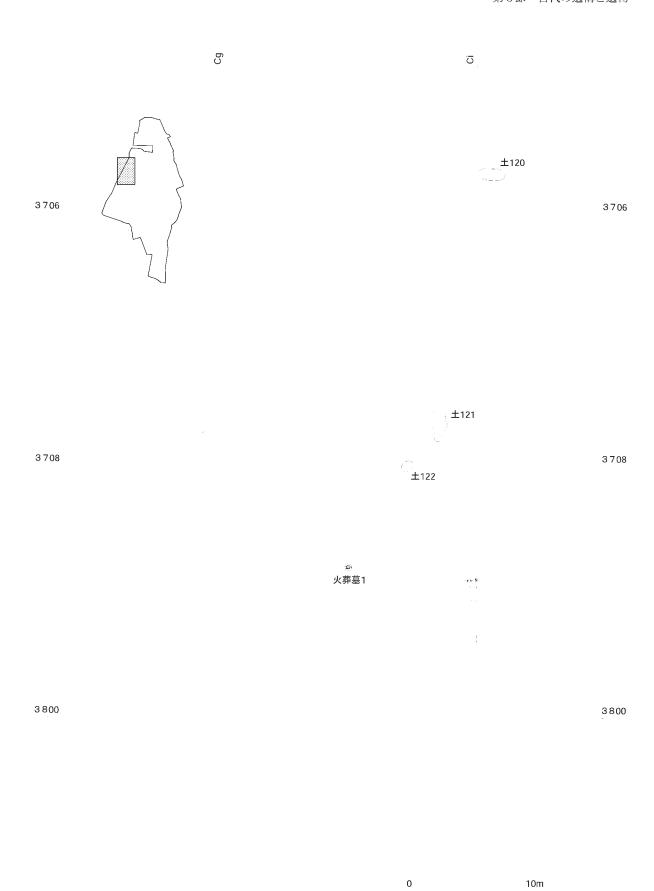
北限の溝群は流路の複雑さから自然流路とみられる。もっとも南の溝39からは陶馬や土馬が破砕された状態で出土した。土馬の破片は溝40や、溝の南側に沿った地区を中心に、包含層からも10点を超える出土があった。溝を中心にして陶馬・土馬を使用した律令的祭祀が行われたものと考えられる。

遺構の中で注目されるものに製鉄炉・鍛冶炉がある。出土遺物にも久田原2号墳からの炉壁や竪穴住居からの鉄滓や羽口があり、包含層中からもこれらがかなり出土した。また、使用された柱状の砥石も複数出土した。製鉄作業がこの遺跡でなされたことは確実であるが、炉の数や関連遺物の量からすると、専業的な製鉄遺跡とは考えにくい。ちなみに、遺跡の所在する美作国は鉄の貢納国である。

掘立柱建物には大形のものはみられず、倉庫とみられる総柱建物がかなりの割合にあった。一方、 律令的祭祀の執行や鉄鉢形須恵器を使用した火葬墓の存在、さらには硯や丹塗り土師器の出土、製鉄 炉の検出など、官的な色彩が認められる。これらのことに合わせ、直近の吉井川の水運を考慮すれば、 遺跡の性格を、物流に関わる小規模な積み出し基地としての公的出先機関と位置付けたい。 (岡本)



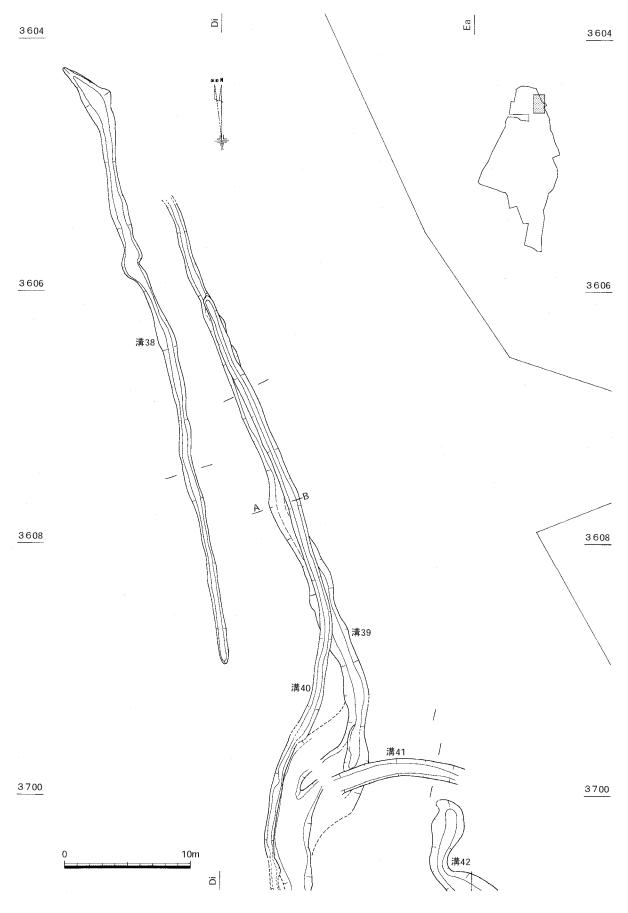
第477図 古代遺構全体図 (1/2,000)



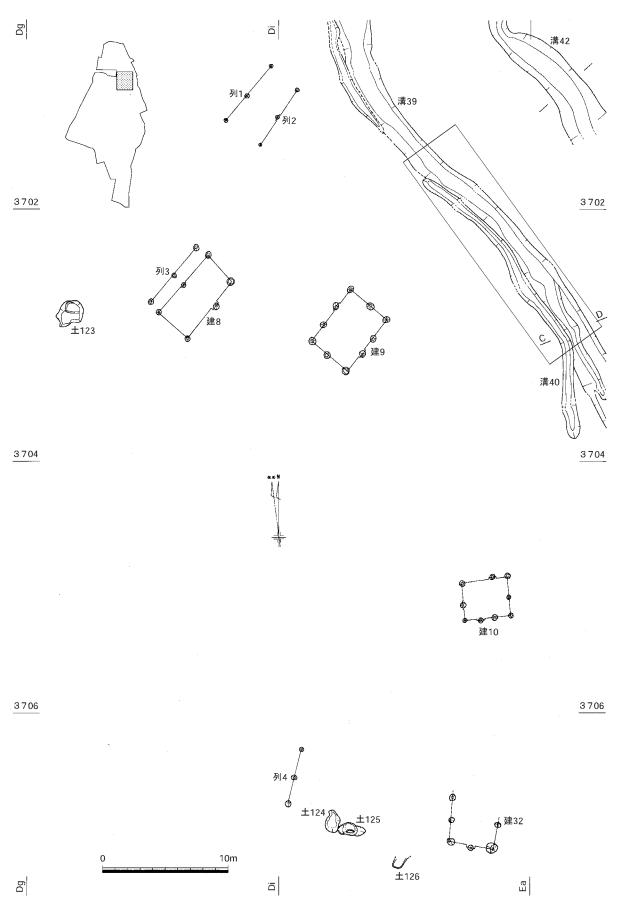
第478図 古代主要遺構部分図① (1/300)

:5 F

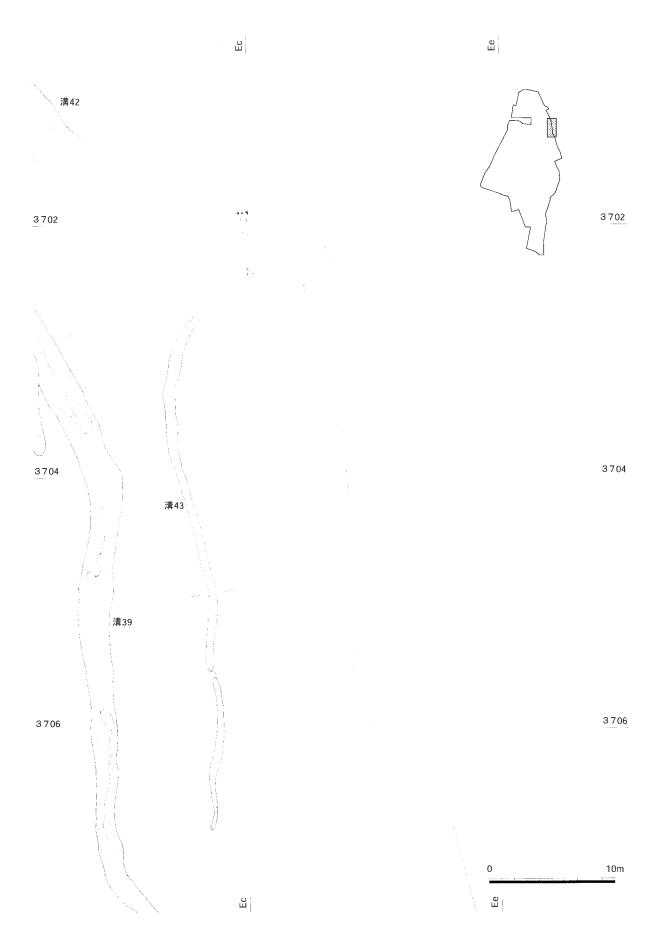
Cg



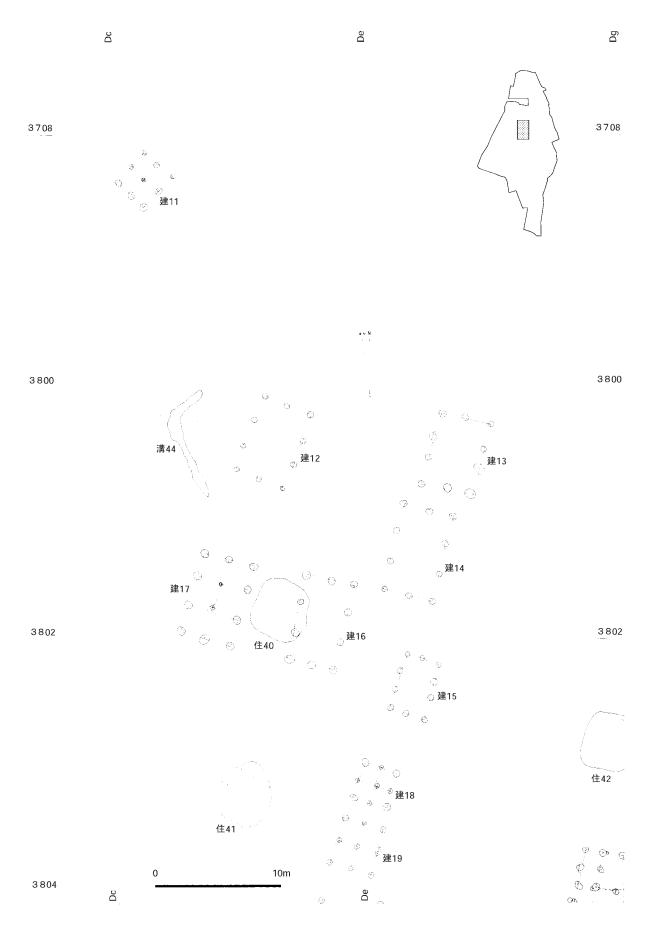
第479図 古代主要遺構部分図② (1/300)



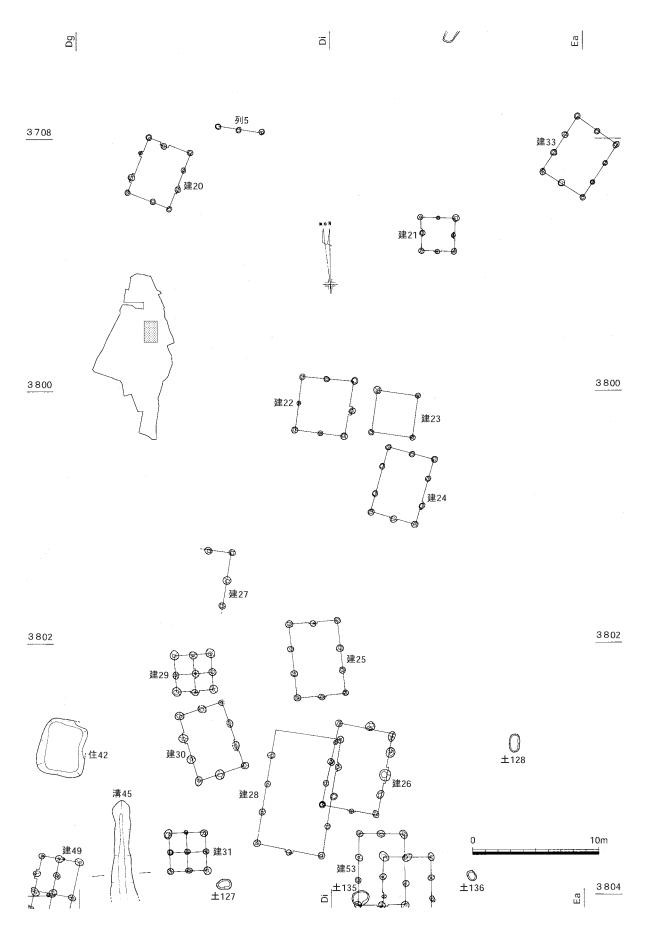
第480図 古代主要遺構部分図③ (1/300)



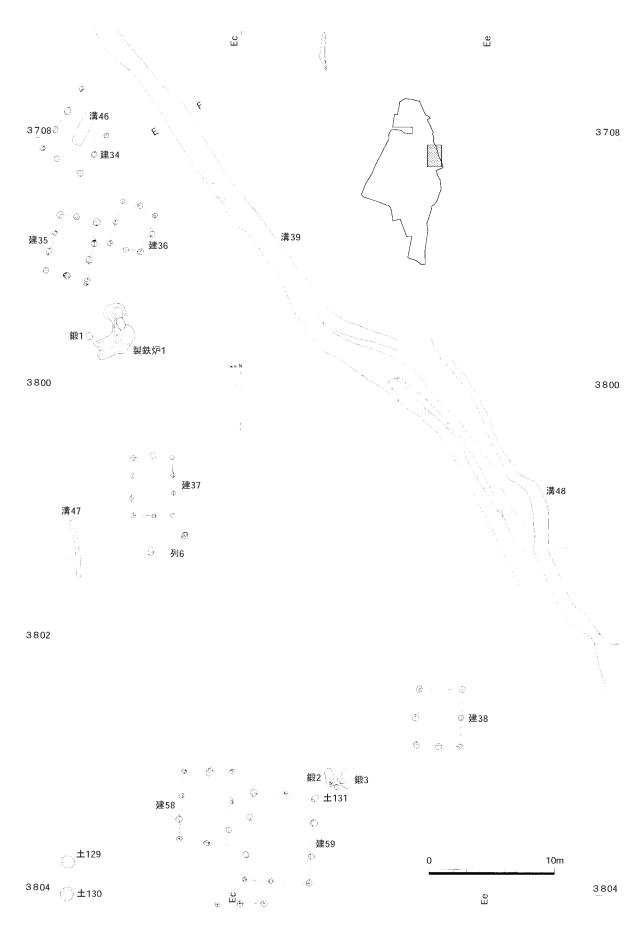
第481図 古代主要遺構部分図④ (1/300)



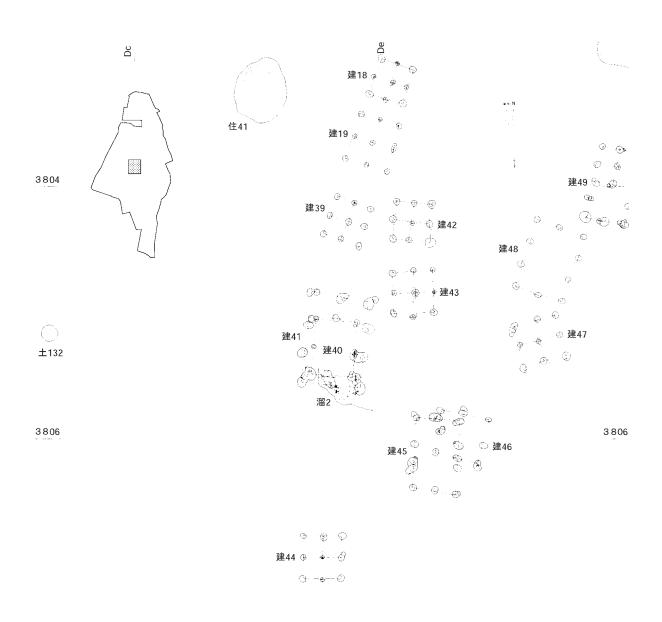
第482図 古代主要遺構部分図⑤ (1/300)



第483図 古代主要遺構部分図⑥ (1/300)

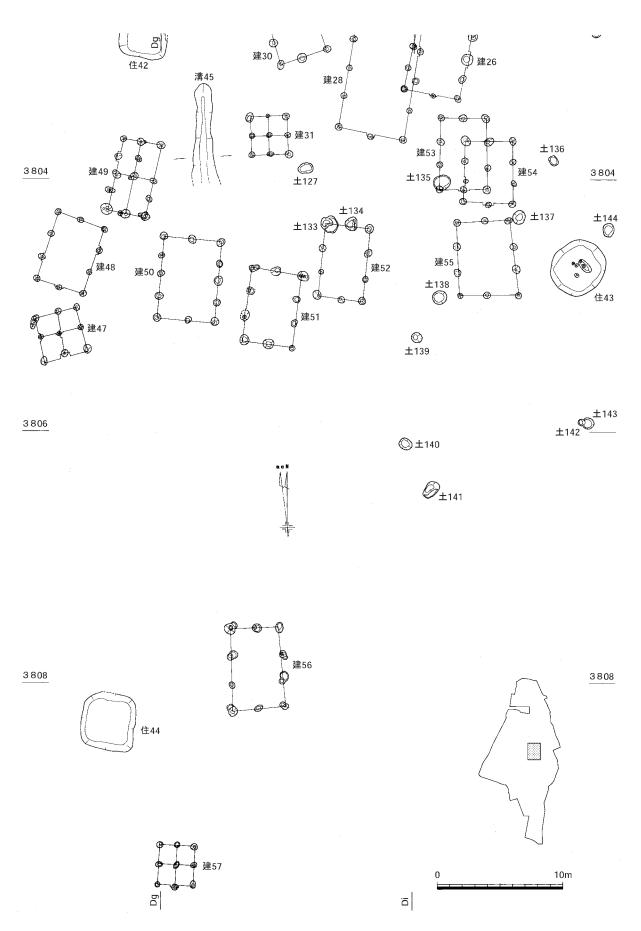


第484図 古代主要遺構部分図⑦ (1/300)

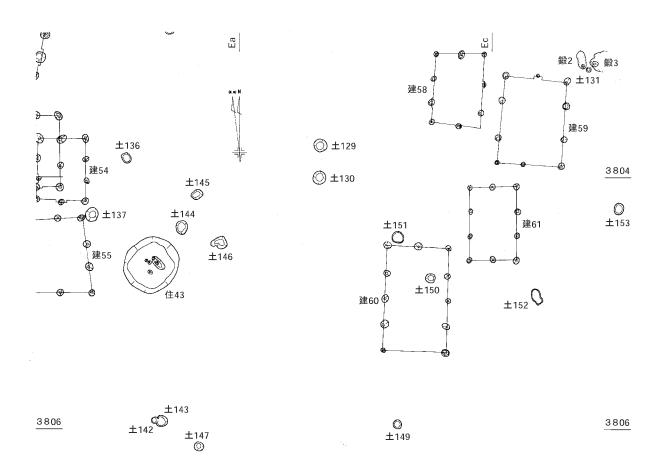


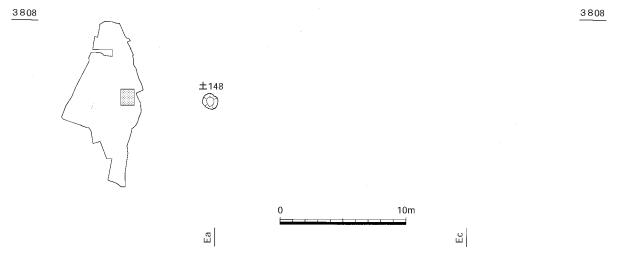


第485図 古代主要遺構部分図⑧ (1/300)



第486図 古代主要遺構部分図⑨ (1/300)





第487図 古代主要遺構部分図⑩ (1/300)

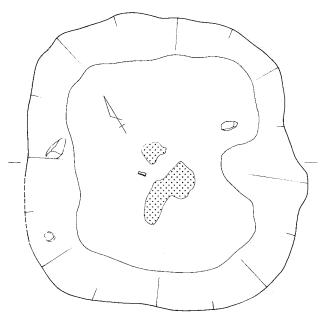


第488図 古代主要遺構部分図⑪ (1/300)

### 2 竪穴住居

### 竪穴住居40 (第482・489図、写真10)

掘立柱建物16と掘立柱建物17にはさまれた位置で検出された。掘立柱建物16の西側桁行の柱穴2本は、不鮮明ながらもこの竪穴住居を切っていることが観察された。



191.6m 1 2 0 2m 1 黒灰褐色砂 2 灰褐色砂斑黒灰褐色砂

第489図 竪穴住居40 (1/60)

平面形は隅丸の方形を示し、断面形は 凸レンズ形を示す。最下層には黒灰褐色 の砂層が埋積し、床面中央部には赤変し た被熱範囲が確認された。 (岡田)

### 竪穴住居41 (第482:490図)

3803Dc区で検出した竪穴住居である。検出状況は長径5.0m、短径4.14mの不整楕円形であるが、埋没時の崩壊によって東側部分が広がり、本来は長さ4mの隅丸方形であった可能性が考えられる。南半はかなり削平を受けており、中央部での深さ43cmを測る。

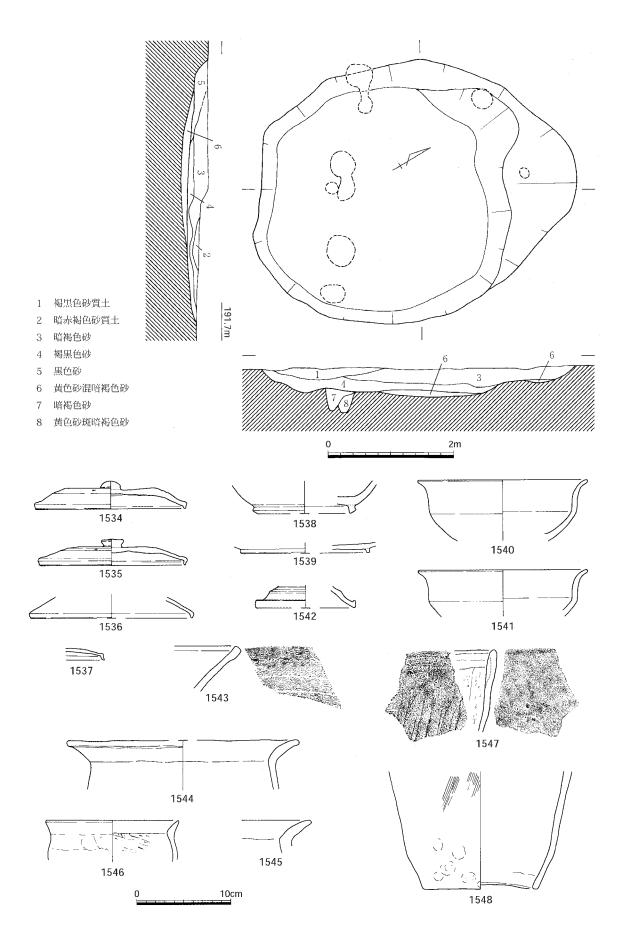
床面から若干のピットを検出したが柱 穴の配置を示しておらず、柱の配置に関 しては不明とせざるをえない。

覆土中からは須恵器杯蓋・身、土師器 甕・甑などが出土した。1540・1541は須 恵器稜椀である。

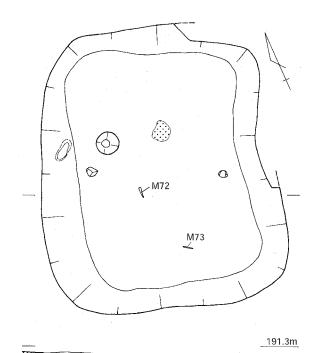
これらの遺物から住居の時期は8世紀 初頭前後と推定される。 (宇垣)



写真10 竪穴住居40調査風景(南から)



第490図 竪穴住居41 (1/60)・出土遺物 (1/4)



第491図 竪穴住居42(1/60)

# 竪穴住居42(第483・491・492図、図版101)

竪穴住居41の東約5m、掘立柱建物49の北約8mで検出された、南北方向にやや長い隅丸長方形の竪穴住居である。中央やや北よりの床面では、径約15cmほどの被熱部分、西よりで径約35cmの円形の柱穴が確認された。

床面の南半分では、鉄鎌M72と鉄製刀子M73 の2点の鉄器が出上している。いずれもほぼ完 形で、刃部も鋭利な状態を示し、居住者の所 有・使用が推定される農工具と考えられる。

出土土器には、須恵器1549~1552と土師器 1553~1555があり、いずれも日常の食器と考えられる。1549の天井部には扁平なツマミが取り付けられる。1555は甑で、元は体部上位に1対の把手が取り付けられていた可能性が高い。時期的には7世紀第4四半期から8世紀初頭頃に比定されるだろう。 (岡田)

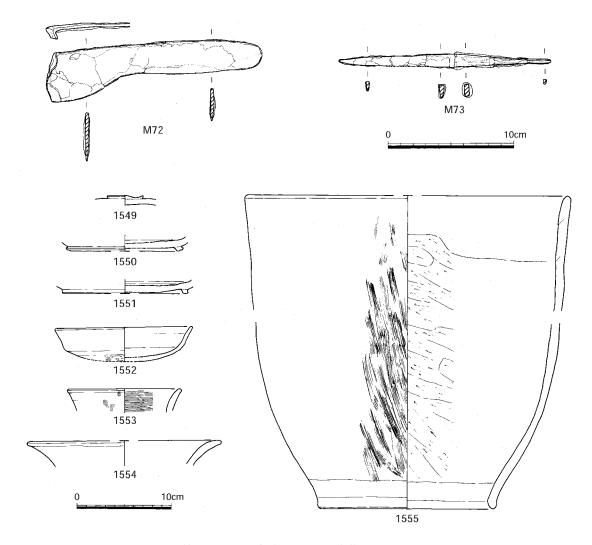




写真11 竪穴住居42調査 および清掃作業 (北西から)

1 黒褐色砂

2 黒灰褐色砂



第492図 竪穴住居42出土遺物(1/3,1/4)

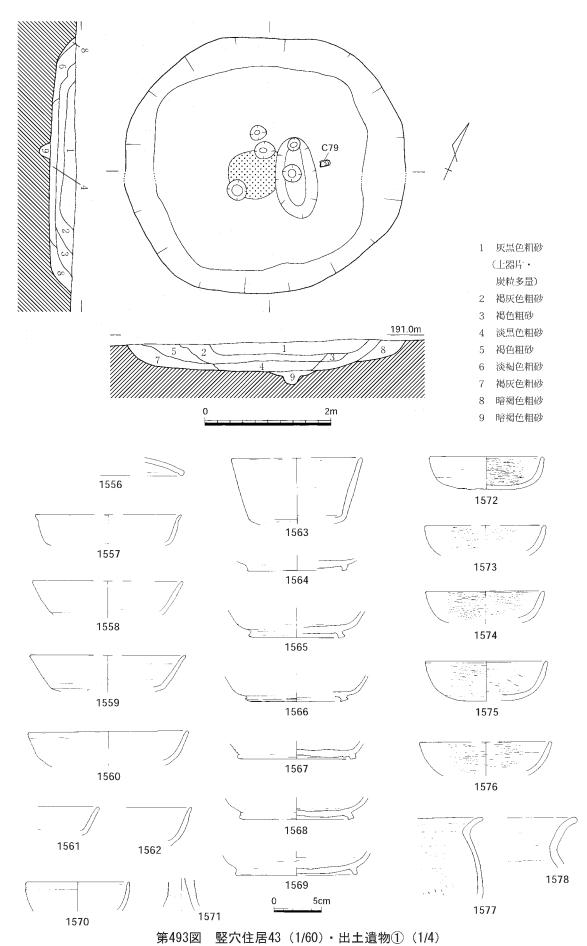
#### 竪穴住居43 (第486・493・494図、図版101・121)

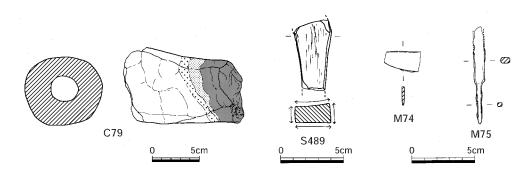
3804Dj区で検出された竪穴住居である。平面形は円形を呈し、長軸4.45m、短軸4.05mを測る。 検出面からの深さ約40cmを測る底面は、中央部に向かって緩やかに傾斜している。底面には中央穴・ 被熱範囲・柱穴状の穴が認められた。

中央穴は床面中央部からやや東側で検出され、長軸1.3m、短軸65cmを測り、平面形は長楕円形を呈している。底面中央部には径25cm程の柱穴状の穴が検出された。この中央穴の西側では径80cm程度の被熱範囲が認められ、この周囲から炭が多く出土している。柱穴状の穴は底面中央部で3基検出されている。3基とも同様な規模・形状を呈し、大きさは径25cm、深さ10cm程度である。

遺物は須恵器杯 (1556~1568・1570)・高杯1571、土師器杯 (1569・1572~1576)・甕 (1577・1578)、 羽口 C79、刀子M74、鉄鏃M75、砥石 S 489などが認められ、そのほとんどは埋土上層から出土している。土師器杯には赤色顔料を塗布後、内外面に細かいヘラミガキが丁寧に施されている。その他に図化していないが鉄滓・骨片(歯)・炭化材などが出土している。

これらの出土遺物は、住居がある程度埋没した時点で廃棄されたと考えられるため、住居の時期は 8世紀前半を下限とし、7世紀後半までさかのぼる可能性も否定できない。 (小嶋)

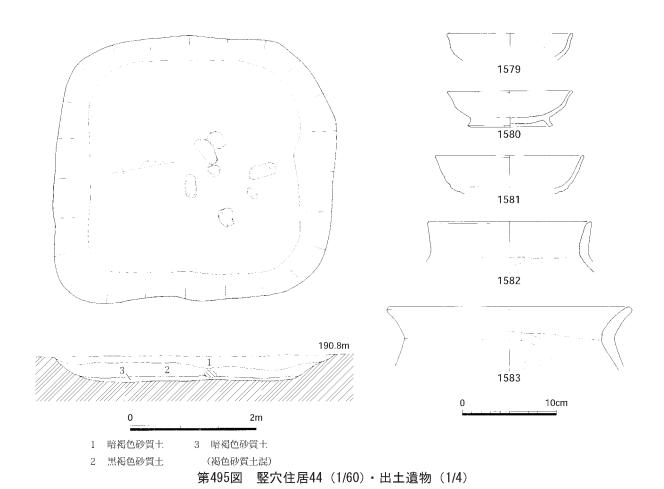




第494図 竪穴住居43出土遺物②(1/4,1/3)

#### 竪穴住居44 (第486・495図、図版101)

竪穴住居43の南西50m、3808Df区から検出された平面隅丸方形を呈す竪穴住居である。長軸約4.5m、短軸4.2mとほぼ同様の数値を測り、ほぼ磁北に沿って建てられている。深さは20cmを残す。床は平坦で貼り床がなされ、壁は斜めに緩く立ち上がるが、地山が砂層からなっているため全体に崩落している可能性は否めない。覆土は暗褐色および黒褐色の砂質土が堆積していた。床面中央付近からは10~30cm大の川原石が散在しており、これらに混じって須恵器の杯1579・1580、高杯1581、土師器の甕1582・1583や鉄滓約400gなどが出土している。1580は口縁部が斜め外方に外反しながら立ち上がり、底部は平坦ではなくやや窪む。1581杯部に凹部を形成するなど若干古く遡る様相もうかがえるが、当住居は7世紀末から8世紀にかけて廃棄されたものと考えられる。 (江見)



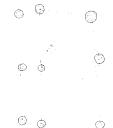
-329-

# 3 掘立柱建物

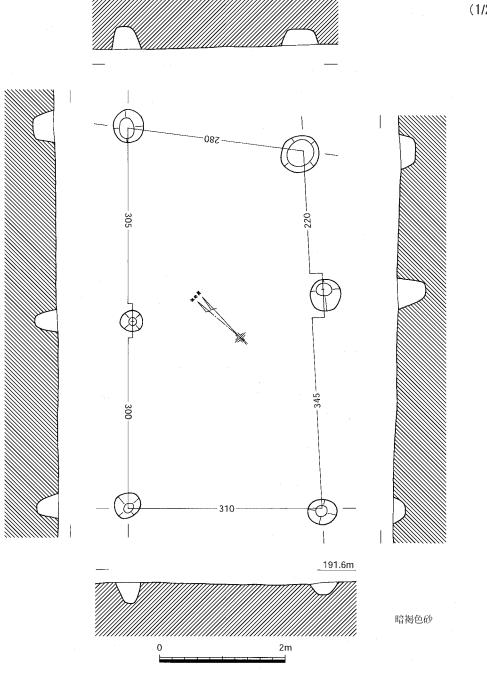
**掘立柱建物8** (第480·496·497図、写真12、図版99·102)

やや遺構の存在が散漫なエリアで検出された  $1\times 2$  間の小規模な建築遺構で、 北西に柱列 3 を伴う。棟方向は、東方約10mで検出された掘立柱建物 9 とほぼ 一致する。

柱掘り方はいびつな円形を示し、比較的深く掘りこまれている。



第496図 掘立柱建物8、 柱穴列3位置関係 (1/200)



第497図 掘立柱建物8 (1/60)

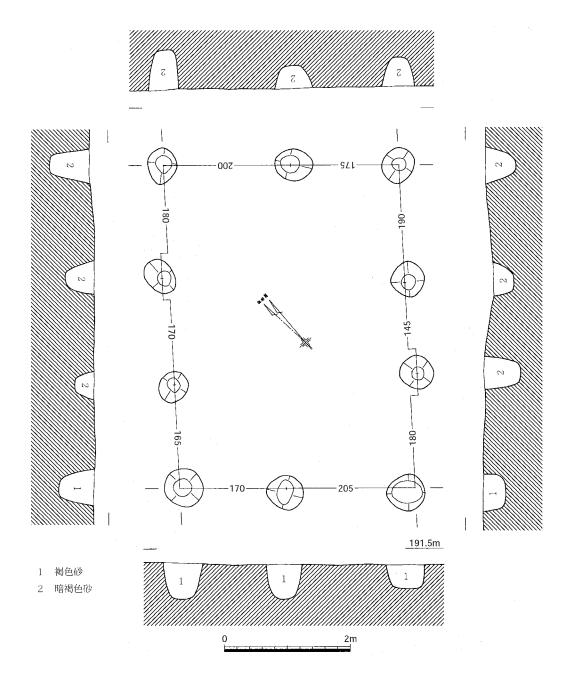
柱間は桁行 2 間(19~20尺)、梁行 1 間(9~10尺)といびつな形態を示し居住には適さない。柱列と一体となった仮設の小規模な作小屋のような機能が考えられる。 (岡田)

# **掘立柱建物 9** (第480·498図、写真12、図版99·102)

溝39・40と掘立柱建物8の間で検出された3×2間の掘立柱建物である。

掘立柱建物群が密集して検出されたエリアから北方へ約100mに位置し、古代に比定される明確な 建築遺構としては北限にあたる。

棟方向は北東から南西を指し、南北方向から44度東へ振る。桁行は17尺、梁行は12尺を測り、柱間 等間は認められないが、建物の平面形態は整然としている。 (岡田)



第498図 掘立柱建物 9 (1/60)

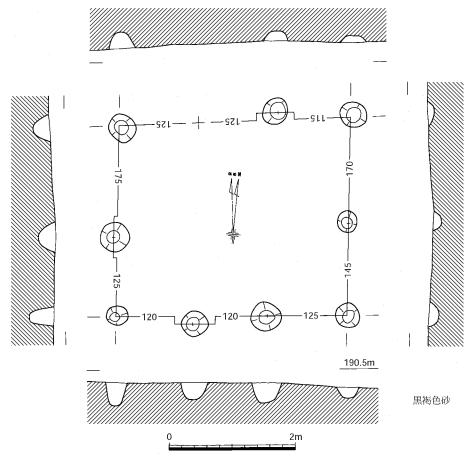


写真12 掘立柱建物8・9付近作業風景(北西から)

**掘立柱建物10** (第480·499図、図版99·102)

の南東方約20mで検出された3×2間の側柱建物である。

棟方向はほぼ東西を示し、掘立柱建物20などの同規模の掘立柱建物に比べると、やや小規模でしか も東西方向の掘立柱建物としては唯一の建物である。すべての柱穴には暗褐色の砂が埋積しているが、



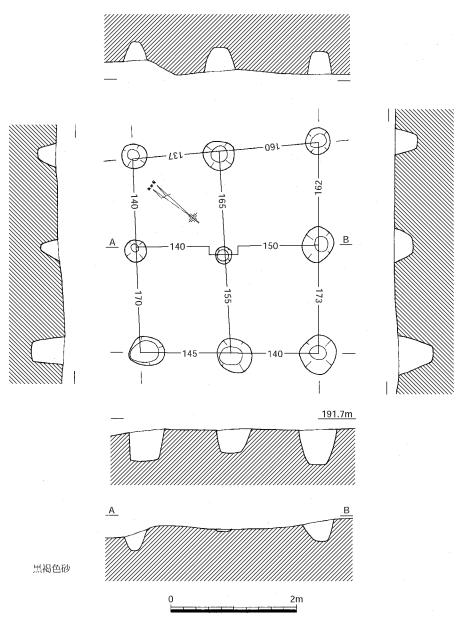
第499図 掘立柱建物10(1/60)

出土遺物は皆無である。

(岡田)

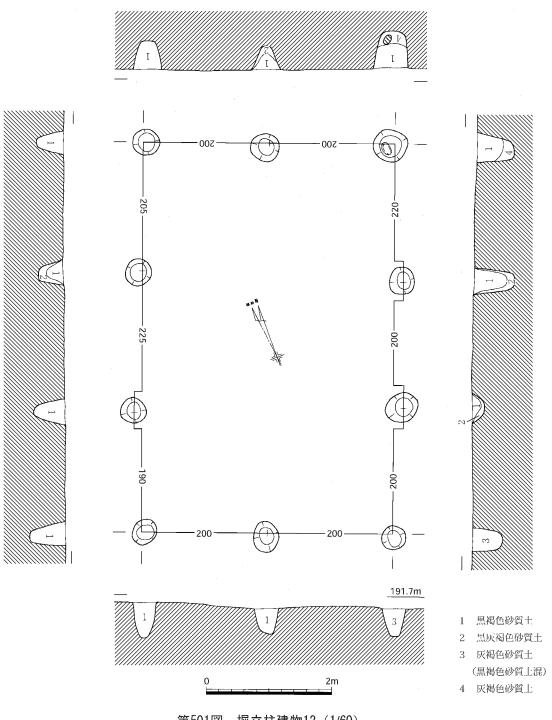
### 掘立柱建物11 (第482.500)以、 凶版103)

 $3708\,\mathrm{D}\,\mathrm{c}$ 区に検出した掘立柱建物で、数多く確認された掘立柱建物群よりもやや西方向に離れた位置に存在した。 $2\times2\,\mathrm{ll}$ の小規模な総柱の建物で、棟方向はN-54°-Eを示し、面積は9.4㎡になっていた。中央の柱穴は、周辺に位置するものよりも径が小さく、底部が検出面から浅い。桁行は3.35~3.1mを測り、柱穴間の距離は1.7~1.4mである。柱穴の断面形は「U」字形を呈し、内部にいずれも黒褐色砂が認められた。



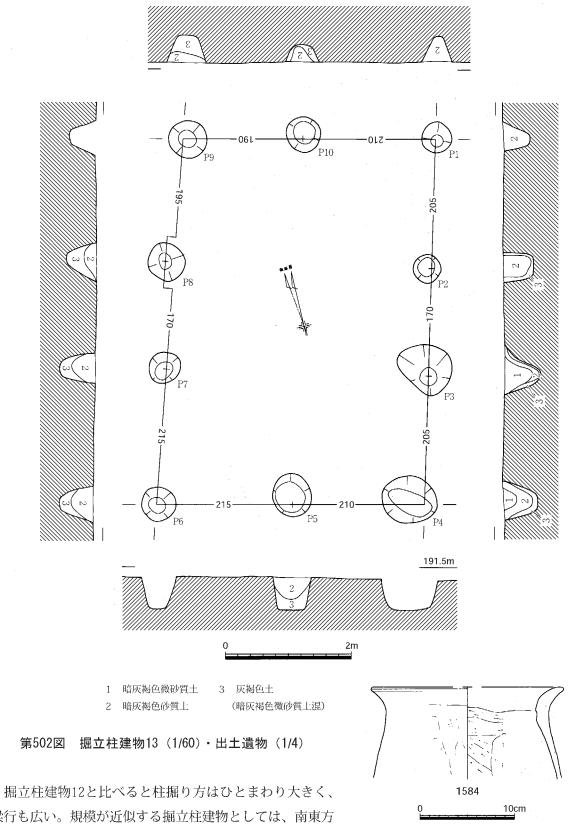
第500図 掘立柱建物11 (1/60)

**掘立柱建物12**(第482·501図、写真13、図版103) 掘立柱建物11の南東方で検出された3×2の側柱建物である。 周辺の20~40mの範囲には、掘立柱建物13~19の棟筋あるいは柱通りを揃えた掘立柱建物群が集中し、同一時期に建築され、存続した可能性が考えられる。ほぼ同規模の掘立柱建物には、東方約50mの掘立柱建物25がある。柱間は、桁行・梁行ともに等間隔で1.9~2.25mすなわち7尺前後を示す。出土遺物は認められない。 (岡田)



第501図 掘立柱建物12 (1/60)

**掘立柱建物13** (第482・502図、写真13、図版103) 掘立柱建物12の東方約10mに位置する 3 × 2 間の側柱建物である。



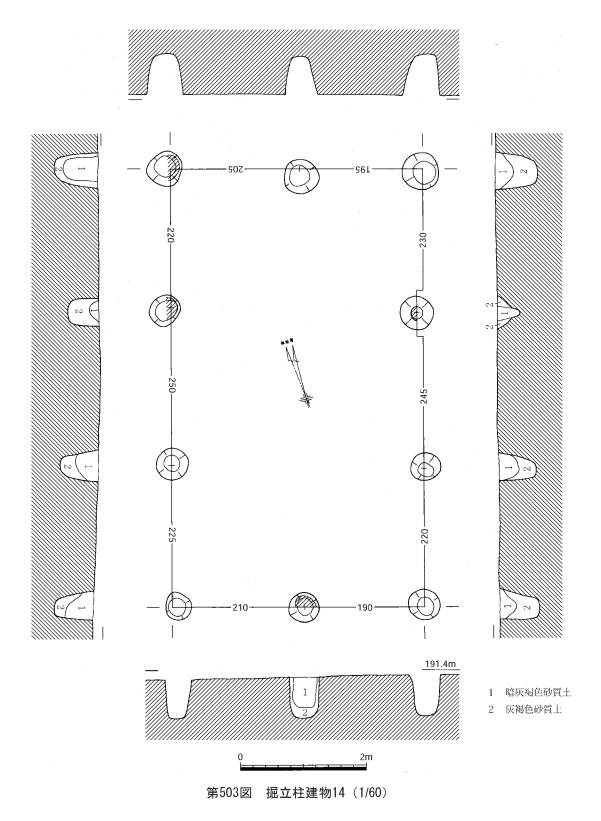
梁行も広い。規模が近似する掘立柱建物としては、南東方 40mの掘立柱建物26がある。柱掘り方は円形を基本とする

がかなり不揃いで、P3やP4はかなりいびつである。柱穴からの出土遺物には、P7からやや長胴 の甕と思われる土師器1584が出土している。 (岡田)

# **掘立柱建物14** (第482·503図、写真13、図版103)

掘立柱建物13の南約2mと近接して検出された3×2間の側柱建物である。

棟方向や建物規模は、掘立柱建物16ときわめて近似する。柱掘り方はほぼ円形を示し、比較的バラッキが少ない。深さも50cm以上掘りこまれ、柱痕跡を残す柱穴もみられる。柱穴からの出土遺物は、認められない。 (岡田)

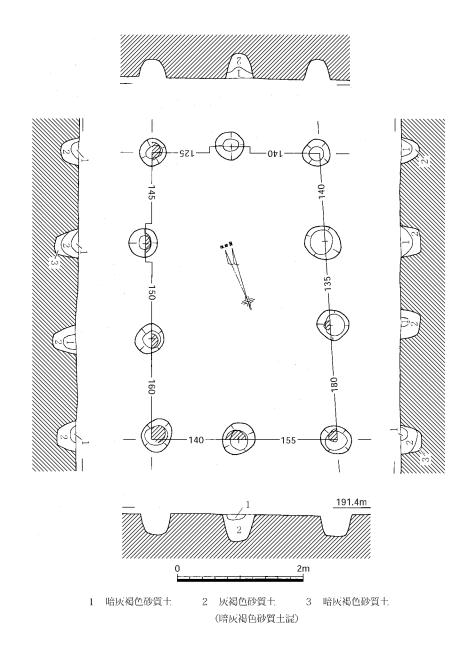


-336-

# **掘立柱建物15** (第482·504図、写真13、図版103·104)

掘立柱建物14の南方約5mで検出された3×2間の側柱建物である。棟方向は南北を示し、南の掘立柱建物18・19とほぼ一致する。

身舎はややいびつな長方形を示し、 $3\times2$ 間の構造の掘立柱建物の中では4坪にも満たない最小規模を示す。柱掘り方は規模の差異はあるがすべて円形を示し、桁行はほぼ15尺、梁行は $9\sim10$ 尺を示す。一部の柱穴には、柱痕跡が残る。なお、掘り方からの出土遺物は認められない。 (岡田)



第504図 掘立柱建物15 (1/60)

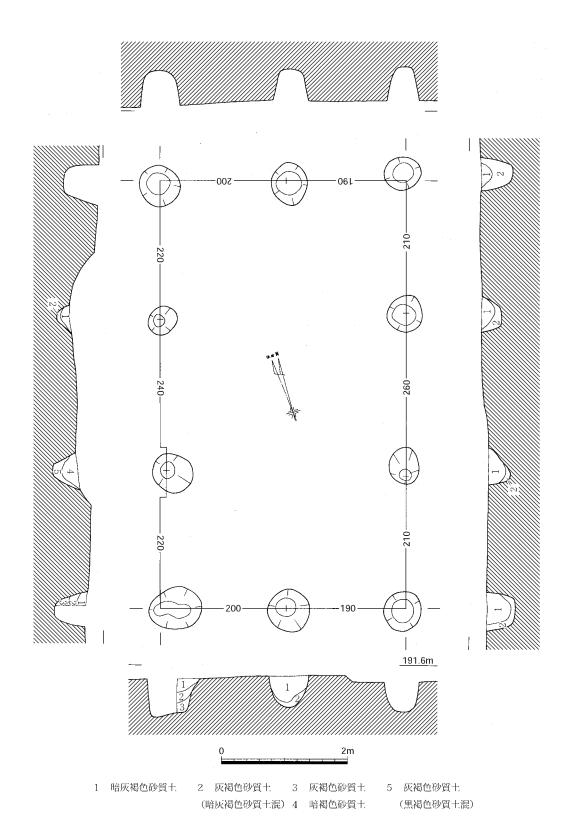
# **掘立柱建物16** (第482·505図、写真13、図版103·104)

掘立柱建物14の南西方約3 m、掘立柱建物15の北西方約6 mで検出された  $3\times2$  間の側柱建物である。

建物の西辺は竪穴住居40を切り、西側にはほぼ同規模で棟方向も同一な掘立柱建物17が検出されて

いるが、これは総柱建物である。規模が近似する建物としては、掘立柱建物14がある。

柱掘り方はほぼ円形を示し、桁行は $7\sim8$  尺前後、梁行は $6\sim7$  尺等間を測り、身舎は比較的整った長方形を示している。柱穴は深く掘りこまれてはいるが、バラツキが日立つ。 (岡田)

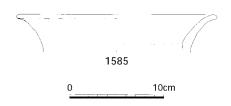


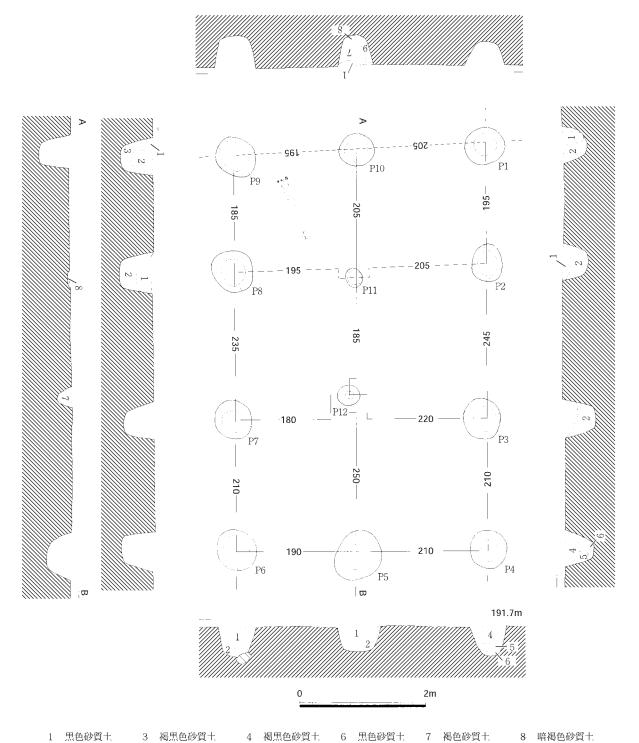
第505図 掘立柱建物16(1/60)

**掘立柱建物17** (第482·506図、写真13、図版103·104)

3801Dc区で検出した3×2間の掘立柱建物である。

建物の軸線は北東-南西方向をとっており、これは該期の他の建物と同様である。建物の規模は長さ6.5m、幅4.0mを測る。建物は整った長方形であるが、柱間は2m前後~2.4





2 褐黑色砂質土 (黄色砂質土多含) 5 黒色砂質土 (黄色砂質土含) (黄色砂質土含) 9 褐色砂質土

第506図 掘立柱建物17(1/60)・出土遺物(1/4)

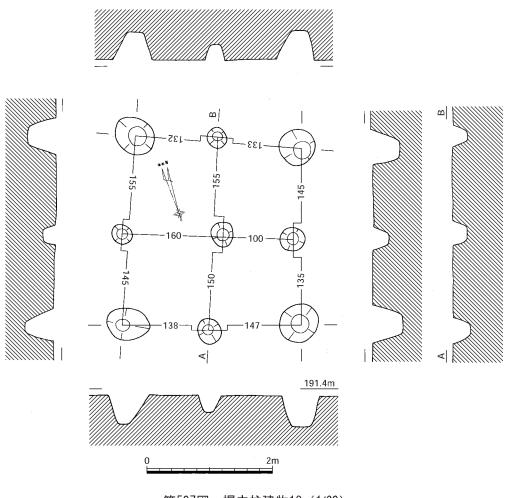
mとばらつき、一定ではない。

建物外周部分の柱穴は径60cm、深さ50cm前後と大きいが、建物内のP11・12は径30cm前後、深さ23~3cmと小規模である。

柱穴埋土からは土師器甕1585が出土しており、奈良時代の建物と判断できる。 (宇垣)

# **掘立柱建物18** (第482·507図、写真13)

掘立柱建物15の南方約5mに位置し、掘立柱建物19とともに棟方向を揃える2×2間の総柱建物で、柱穴の配置はかなりバラツキがある。東方30mには同規模の掘立柱建物29・31があり、久田原遺跡での総柱建物の標準的な規模を示す。隅柱はひとまわり大きく、しかも深く掘り込まれている点に注意されるが、この特徴は掘立柱建物19や掘立柱建物29などとも共通し、側柱建物である掘立柱建物33にも看取される。柱穴からの出土遺物は認められない。 (岡田)



第507図 掘立柱建物18 (1/60)

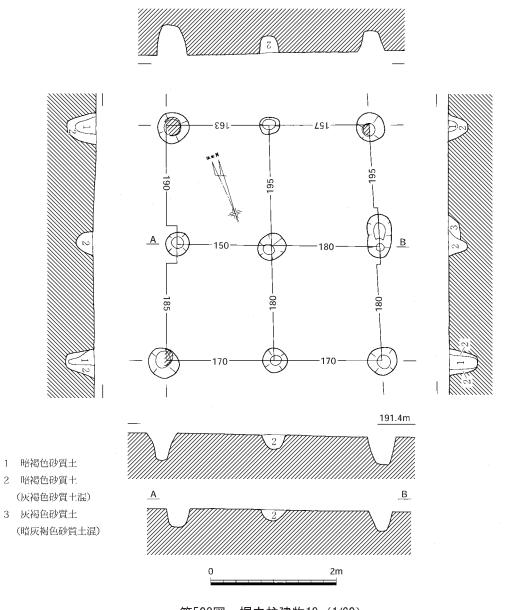
### 掘立柱建物19 (第482.508図、写真13)

掘立柱建物18のすぐ南に位置する総柱建物である。  $2 \times 2$  間で、掘立柱建物18よりはひとまわり大きな建物である。

すでに指摘したとおり、隅柱が大きくしかも深く掘り込まれている点が、特徴的である。一部の柱 穴には柱痕跡が認められるが、出土遺物は得られなかった。 (岡田)



写真13 掘立柱建物12~19付近作業風景(北から)

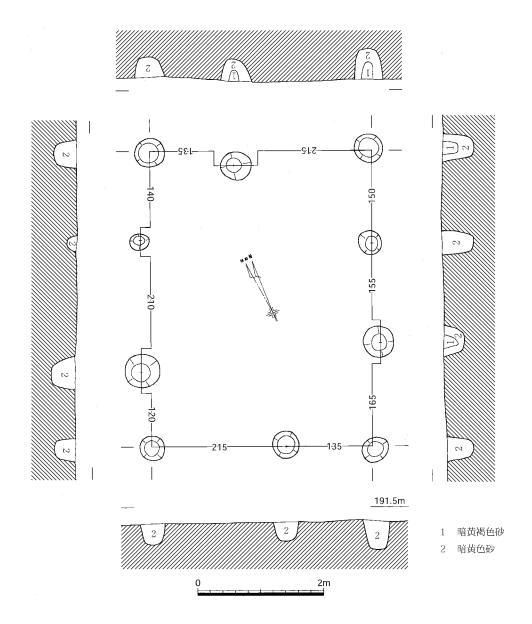


第508図 掘立柱建物19 (1/60)

# **掘立柱建物20** (第483·509図、図版104)

掘立柱建物13などの建物群の北東方約30m、掘立柱建物33の西方約30mに位置する、3×2間の側柱建物である。棟方向は、やや東振する南北方向を示す。

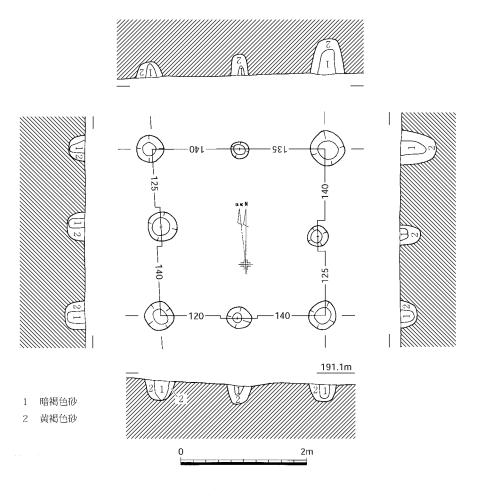
棟持柱は桁行の方向と一致せず、柱間も不揃いでやや不安定な構造を示す。柱穴の一部には、柱痕跡が観察されるが出土遺物は認められない。 (岡田)



第509図 掘立柱建物20 (1/60)

### **掘立柱建物21** (第483·510図、図版105)

掘立柱建物20の東方約35m、掘立柱建物23などの北方約20mに位置する  $2 \times 2$  間の側柱建物である。ほかの  $2 \times 2$  間の建物のほとんどが総柱建物であるのに対し、このような形態を持つ建物としては掘立柱建物36が認められるに過ぎない。ただ束柱あるいは床柱が浅く掘り込まれていて、残存しなかった可能性も考慮する必要がある。なお、すべての柱穴にはその痕跡が残る。 (岡田)



第510図 掘立柱建物21 (1/60)

# **掘立柱建物22** (第483·511図、写真14·15、図版105)

掘立柱建物21の南東方約13mに位置する 2 × 2 間の側柱建物である。掘立柱建物23と棟筋を揃え、まとまりを示す。

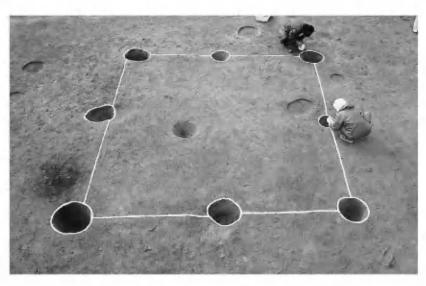
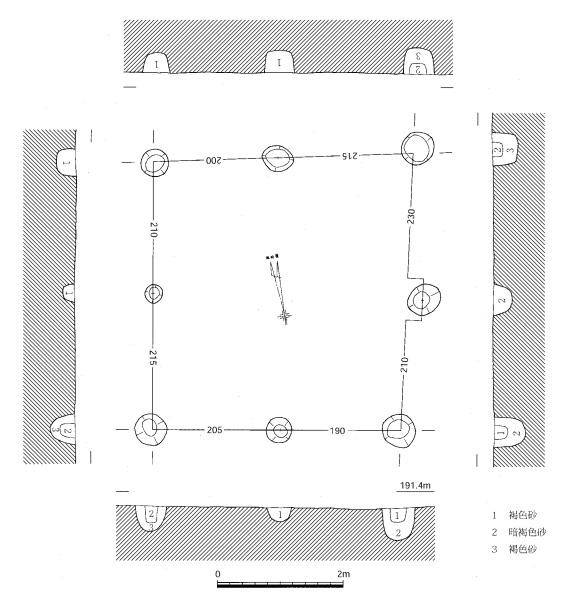


写真14 掘立柱建物22清掃作業(北から)

# 第3章 発掘調査の概要

南方約25mの掘立柱建物28とも、棟筋が一致し、しかも柱間が長めである点が共通する。 柱間はやや間延びしており、不安定な印象を与える。隅柱はわずかに大きく深めに掘り込まれており、 うち3本には、柱痕跡が認められる。 (岡田)



第511図 掘立柱建物22 (1/60)

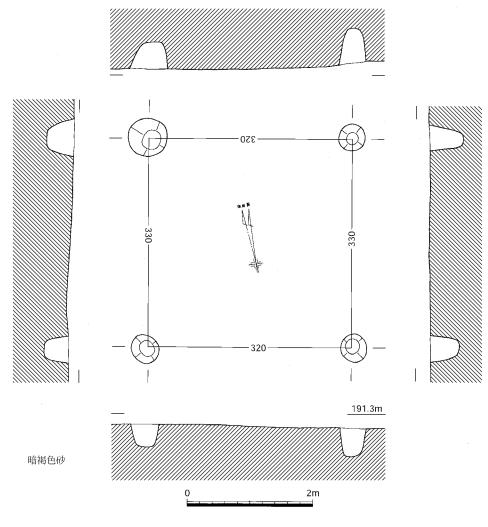


写真15 掘立柱建物22~24付近作業風景(北から)

#### **掘立柱建物23** (第483·512図、写真15、図版105)

掘立柱建物22の東側で検出された  $1 \times 1$  間の小規模な建物である。柱間は $10 \sim 11$ 尺を示し、やや間延びする。

掘立柱建物19や掘立柱建物22などのように、隅柱が深めに掘り込まれている建物が認められ、後世の削平を考えれば本来は束柱が存在し、総柱建物であった可能性も否定できない。 (岡田)



第512図 掘立柱建物23 (1/60)

# **掘立柱建物24** (第483·513図、写真15·16、図版106)

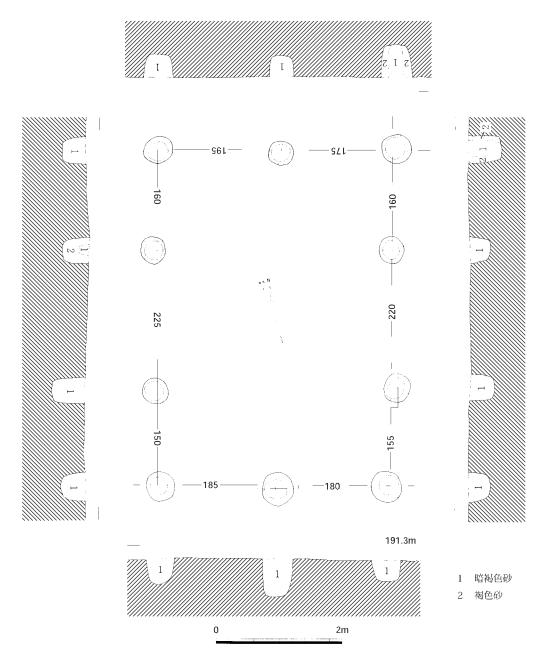
掘立柱建物22のすぐ南で検出された3×2間の比較的整然とした側柱建物である。

棟方向は、南方約20mの掘立柱建物26や西方40mの掘立柱建物13などとほぼ一致する。棟方向や規模は、掘立柱建物12・13などの西方約40mの建物群に近似する。

桁行は中ほどが7尺前後、妻寄りが5尺前後で揃い、梁行は6尺前後を示す。柱掘り方はいずれもほぼ円形を示し、バラツキが少ない。一部の柱掘り方には、明瞭な柱痕跡が観察され、暗褐色を呈している。柱穴からの出土遺物は認められなかった。 (岡田)



写真16 掘立柱建物24清掃作業(東から)

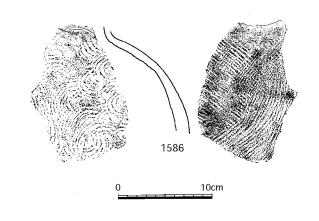


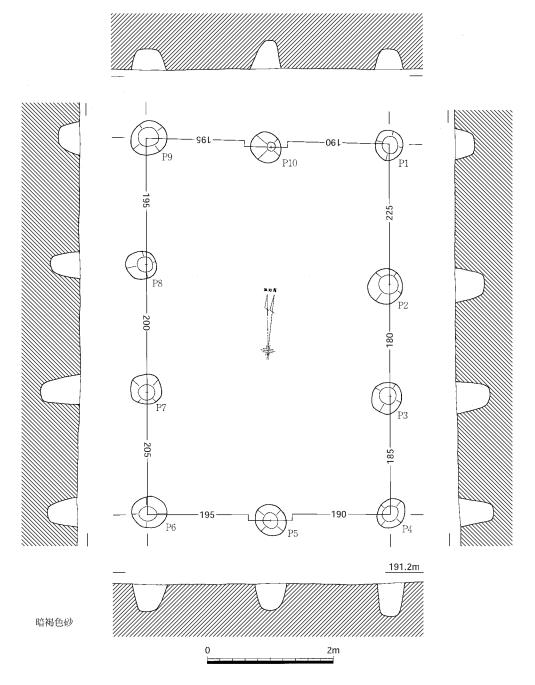
第513図 掘立柱建物24 (1/60)

# **掘立柱建物25** (第483·514図、図版106)

掘立柱建物24の南方約10mで検出された3×2間の側柱建物である。棟方向は、磁北にほぼ一致するが同一の棟筋を示す建物は意外に少ない。

柱穴からの出土遺物に大型の須恵器壺1586がある。内面には同心円タタキ、外面にはカキ目調整が認められる。甕あるいは、横瓶の可能性も十分に考えられる。 (岡田)



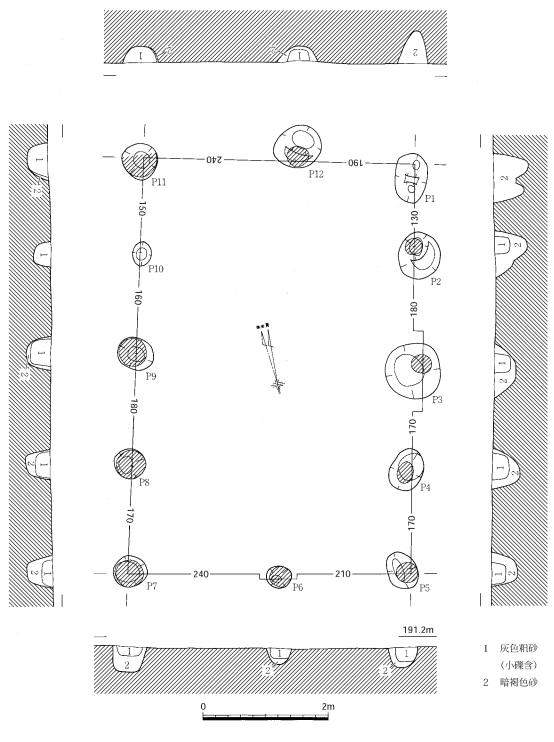


第514図 掘立柱建物25 (1/60) - 出土遺物 (1/4)

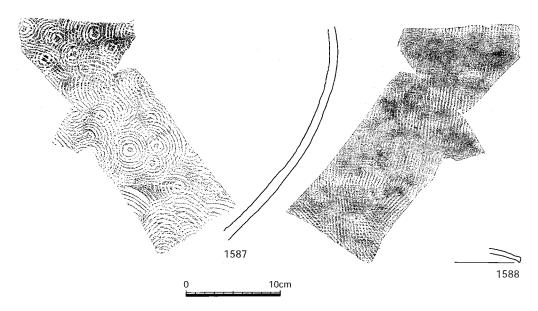
# 掘立柱建物26 (第483・515・516図、図版106)

3~8~02~Di 区で検出された  $4\times2$ 間の掘立柱建物である。径30cm前後を測る柱の抜き取り痕跡が明瞭に検出され、その抜き取り痕跡は 1~cm大の小礫を含む灰色粗砂で埋められていた。建物の棟方向は $N-19^\circ$ -E、面積は28.8mである。

遺物は須恵器杯蓋1588・甕1587などが出土している。図示した須恵器甕はP6とP8の柱痕跡から出土したものが接合した。遺構の時期は古代に比定される。 (小嶋)



第515図 掘立柱建物26 (1/60)



第516図 掘立柱建物26出土遺物(1/4)

#### 掘立柱建物27 (第483·517図)

掘立柱建物25の北西方約6mで検出された 建物の一部である。

建物の西側は、台風による増水により、遺 構面がえぐられて流出したため、精査が不可 能となった。おそらく側柱建物と想定され、 桁行と想定された東側、南北柱列の柱間が長 めである。柱穴からの出土遺物は認められな い。 (岡田)

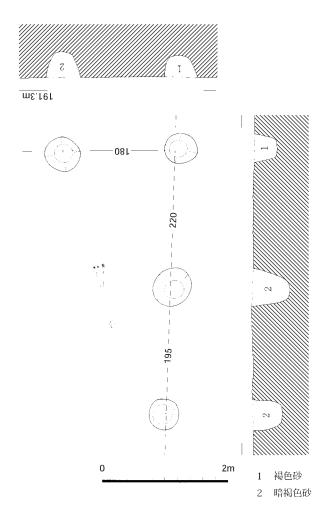
**掘立柱建物28**(第483・518・519図、図版107) 先述の掘立柱建物26と一部重複して検出さ れた4×2間の掘立柱建物である。

掘立柱建物26 P 10と本掘立柱建物 P 1 の切り合い関係から本掘立柱建物の方が古い。 P 11・12は台風による水害で削平されたため、検出できなかった。

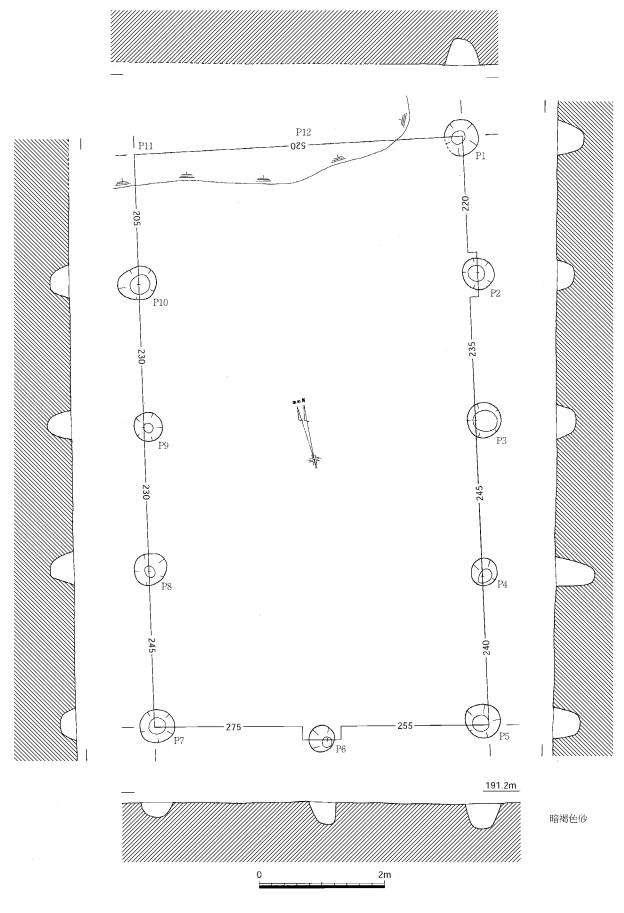
桁行9.4m、梁行5.3m、面積推定48.6㎡を 測り、久田原遺跡で検出された古代の掘立柱 建物の中では最大規模である。棟方向はN-17°-Eである。

遺物は図示した土師器杯1589、須恵器杯 1590・1591のほかに丹塗りの土師器杯・鉄 滓・鉄釘ないしは茎などが出土している。

遺構の時期は8世紀代と想定される。(小嶋)



第517図 掘立柱建物27 (1/60)

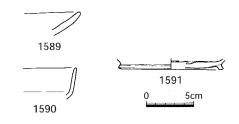


第518図 掘立柱建物28 (1/60)

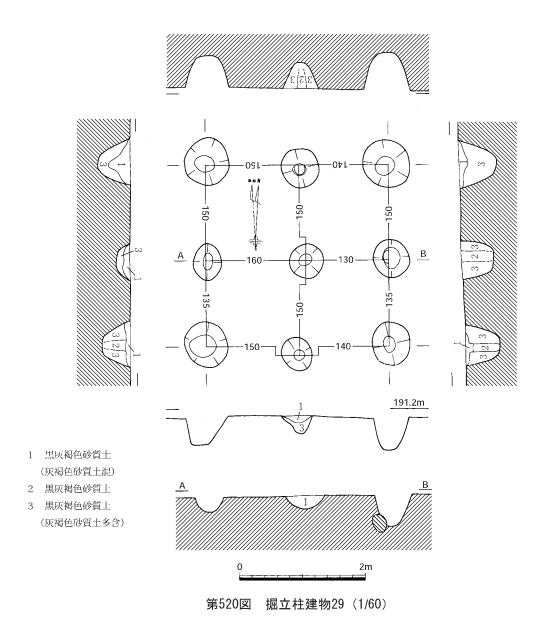
# **掘立柱建物29** (第483·520図、図版107)

掘立柱建物30の北側、掘立柱建物25の西方約7mで 検出された総柱建物である。後者とは棟筋を揃え、南 方約11mの掘立柱建物31とも規模等近似する。

柱穴は大小さまざまで、掘り方は隅柱が深く大きい傾向が強い。中には柱痕跡を残すものもあるが、一部には抜き取りを示す断面も看取される。 (岡田)



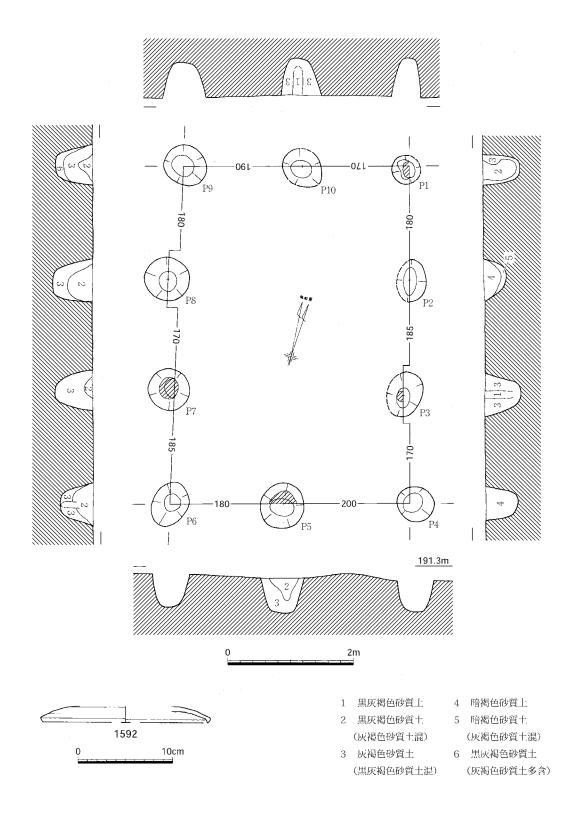
第519図 掘立柱建物28出土遺物(1/4)



### **掘立柱建物30** (第483·521図、図版107)

掘立柱建物29のすぐ南で検出された南北方向の側柱建物である。周囲の掘立柱建物群の中に棟方向 が合致する建物は認められない。

柱穴は大小バラツキがあるが、掘り方は長円形ないし円形を示す。掘り方の深さは、50cmを越える ものが大半を占め、一部には径約15cm前後の柱痕跡を残すとともに、柱の抜き取りを示す断面(P6)



第521図 掘立柱建物30(1/60)・出土遺物(1/4)

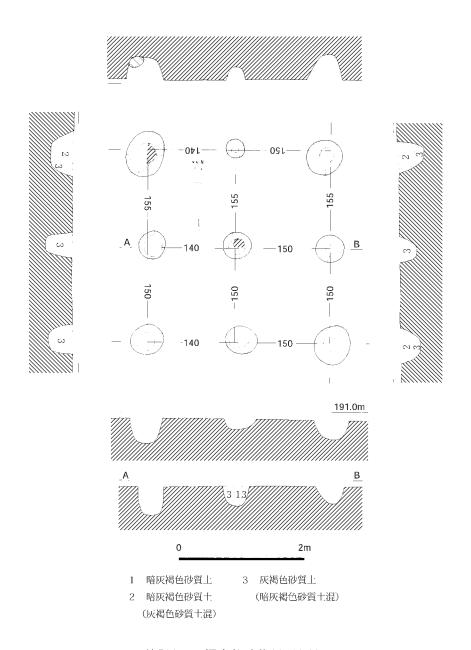
が明瞭に観察される。柱間はおよそ6尺前後の等間で、桁行・梁行も大きな差はない。出土遺物には、 須恵器蓋1592がある。おそらく天井中央部に退化した宝珠ツマミをもつものであろう。 (岡田)

# **掘立柱建物31** (第483·522図)

掘立柱建物29の南約12mに位置する2×2間の総柱建物である。棟方向はほぼ真北を示し、規模と

もに掘立柱建物29と近似する。

柱間は、おおむね5尺前後の等間が認められ、南北方向がやや長めである。隅柱がやや大きく、深めに掘られた形跡がこの建物でも認められるが極端ではない。柱掘り方の断面では、柱痕跡を残すものもある。柱穴からの出土遺物は認められない。 (岡田)

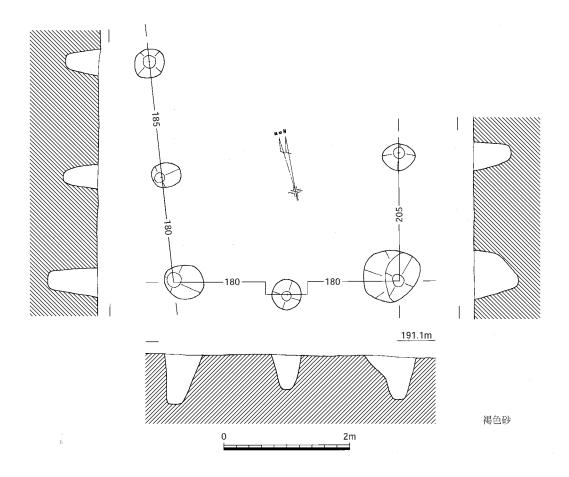


第522図 掘立柱建物31 (1/60)

### **掘立柱建物32** (第480·523図、図版107)

掘立柱建物10の南方約15mで検出された側柱建物と推定される建物の南梁行の一部と考えられる。 周囲には掘立柱建物は検出されず、比較的遺構の検出が希薄なエリアに位置する。

棟方向は南北と考えられ、南梁行では隅柱が深く大きい掘り方であることに注意される。また、すべての柱穴が50cm以上、70cmにも達し、上面の削平を考慮すると、建築時にはかなり深かったことが想像される。柱穴からの出土遺物は認められない。 (岡田)



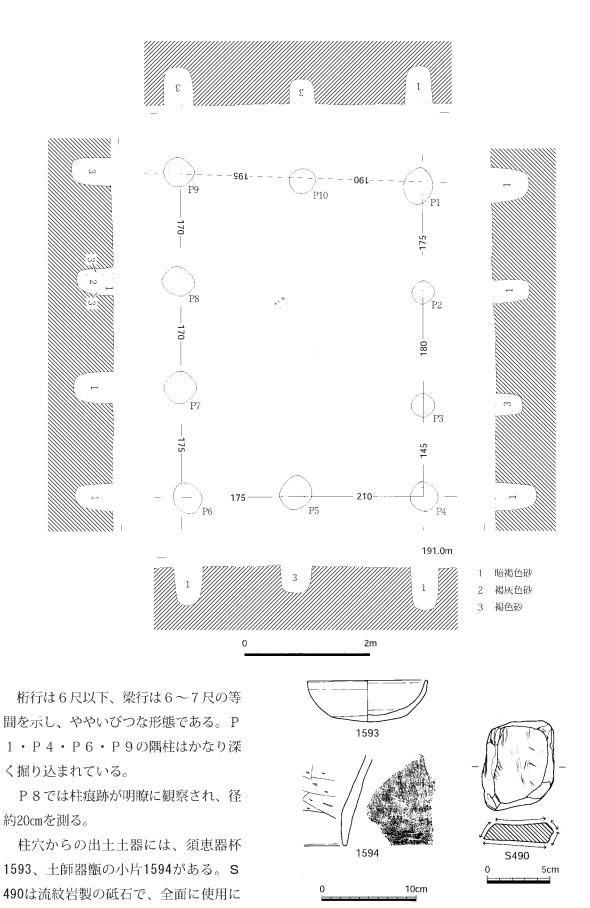
第523図 掘立柱建物32 (1/60)

# **掘立柱建物33** (第483·524図、写真17、図版108·121)

掘立柱建物21の北東方約9 mで検出された  $3\times 2$  間の側柱建物である。棟方向は南北方向で、規模とともに掘立柱建物20などと近似する。



写真17 掘立柱建物33清掃作業(北西から)



第524図 掘立柱建物33(1/60)・出土遺物(1/4,1/3)

(岡田)

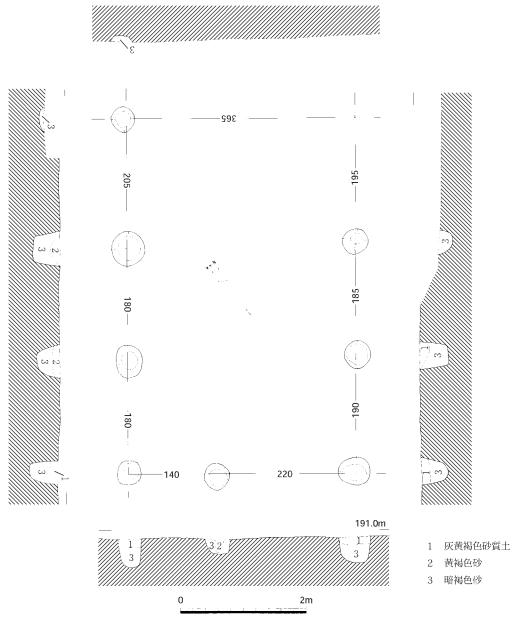
よる磨滅がみられる。鉄器の研磨に使用

された可能性が高い。

# **掘立柱建物34** (第484·525図、図版108)

遺跡の北東部、溝39の西側で検出された、 $3\times2$ 間の側柱建物と推定される。南側の掘立柱建物35、掘立柱建物36と隣接してまとまりをなす。柱間は桁行が6尺強ないし7尺等間、南梁行はほぼ12尺を測る。

隅柱が深く掘り込まれる傾向は、この建物でも顕著に認められる。柱穴からの出土遺物は認められない。 (岡田)



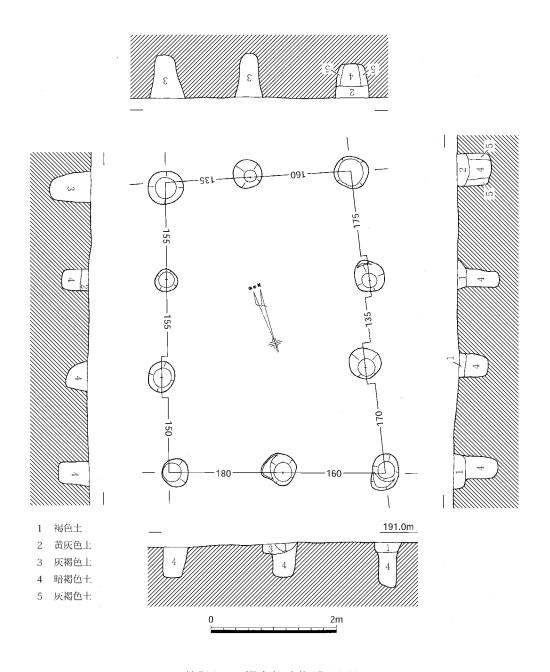
第525図 掘立柱建物34 (1/60)

# **掘立柱建物35** (第484·526図、図版109)

掘立柱建物34の南方約4mで検出された南北方向の側柱建物である。棟方向はほぼ真北を示し、掘立柱建物48や掘立柱建物58などとほぼ同一で、しかも規模や形態も近似する。

東側桁行が西側のそれより長めで、さらに梁行も北側より南側が長めとかなりいびつな平面形態を示す。隅柱が多少深めに掘り込まれる傾向はうかがえるものの、掘り方の形状は不揃いである。

柱穴からの出土遺物は、認められない。 (岡田)



第526図 掘立柱建物35 (1/60)

### **掘立柱建物36** (第484·527図、図版109)

掘立柱建物35のすぐ東側、溝39の西約7 mで検出された $2 \times 2$  間の側柱建物であるが、東柱が削平された総柱建物の可能性もある。平面形はかなりいびつであるが、隅柱は大きめで深く掘り込まれている。柱掘り方の埋積土も多少バラツキがみられ、柱穴からの出土遺物は皆無である。

位置的に、掘立柱建物35とともに南約4mの製鉄炉1や鍛冶炉1などの鉄に関わる生産遺構と関連があるかもしれない。 (岡田)

第527図 掘立柱建物36 (1/60)

— 358 —

第528図 掘立柱建物37 (1/60)

# **掘立柱建物37** (第484·528図、図版109)

掘立柱建物35・36の南約16m、掘立柱建物58の北方約20mで検出された3×2間の側柱建物である。 棟方向は、掘立柱建物38や掘立柱建物58などとほぼ同一方向で、真北を示している。

桁行は15尺強、梁行はほぼ10尺を測り、比較的整った平面形を示している。柱掘り方はほぼ円形を示しているが、大きさは不統一である。

柱穴からの出土遺物は、認められない。

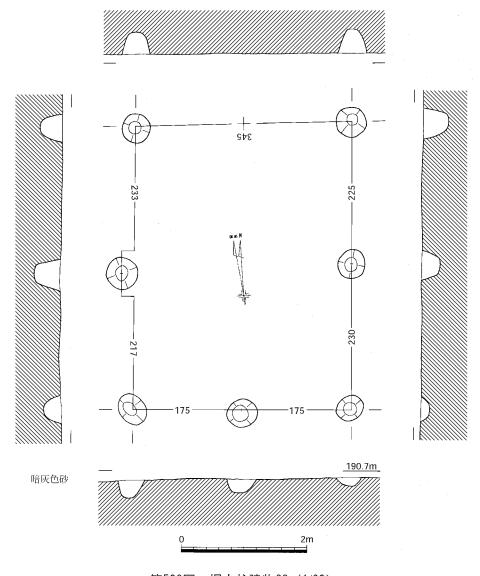
(岡田)

# **掘立柱建物38** (第484·529図、図版109)

掘立柱建物37の南東方約25mに位置する2×2間の側柱建物である。

棟方向はほぼ真北を示し、北側梁行の棟持柱は削平によるものか、未検出である。柱掘り方は、径約40~50cm前後、深さ約15~40cm前後を測る。

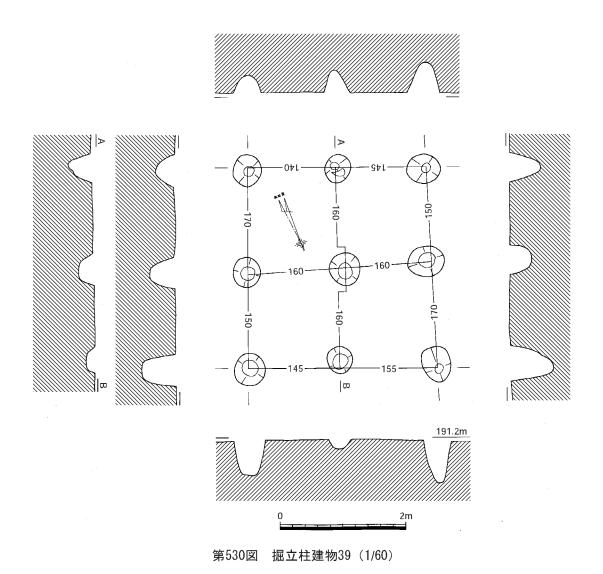
桁行は15尺、梁行は約11.5尺と棟方向は、明らかに南北を示すことがわかる。柱穴からの出土遺物は認められない。 (岡田)



第529図 掘立柱建物38 (1/60)

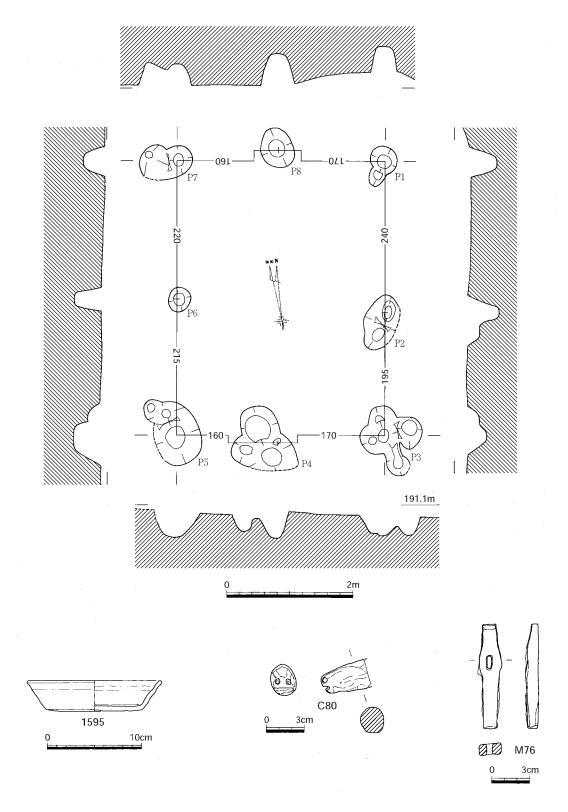
#### **掘立柱建物39**(第485·530図、写真18、図版99)

掘立柱建物19の南西  $5\,\mathrm{m}$ 、  $3\,8\,04\,\mathrm{D}\,\mathrm{d}$ 区から検出された  $2\times2\,\mathrm{ll}$  の総柱建物で、棟方向はN-25°-E である。規模は桁行 $3.2\,\mathrm{m}$ 、梁行  $3\,\mathrm{m}$ とその差は僅かである。平面形態は方形を呈し、床面積は $9.4\,\mathrm{m}$  を測る。柱穴間の距離は桁行 $1.7\sim1.5\,\mathrm{m}$ 、梁行 $1.6\sim1.4\,\mathrm{m}$ を測る。柱穴は四隅が比較的深く掘り込まれていたが、南辺中央の柱穴は僅かながら軸線より内側にはいり、深さも $15\,\mathrm{cm}$ 余りを残す浅いものであった。遺物の出土は見られず時期は不明であるが、奈良時代の範疇のものと考える。 (江見)



#### **掘立柱建物40**(第485·531図、図版99·110·121)

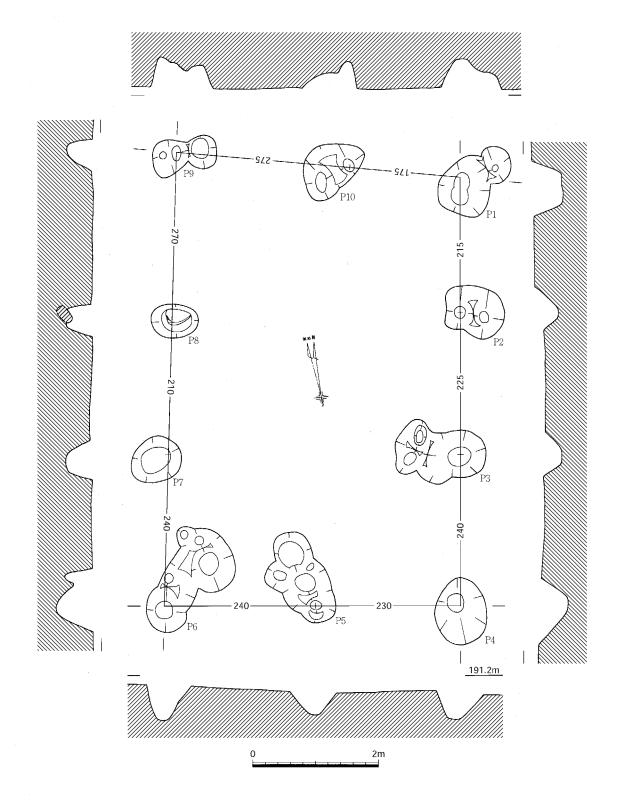
掘立柱建物39の南約8 m、3805 D d区から検出された2×2間の南北棟建物で、後述する掘立柱建物41・土器溜まり2と重複関係にある。棟方向はN-14°-Eである。規模は桁行4.35m、梁行3.3m、床面積は14.4㎡を測る。柱穴間の距離は桁行が2.4~1.95m、梁行が1.7~1.6mを測る。柱穴は径40~80cm、深さ30~50cmを残す。柱穴埋土はいずれも暗褐色砂質土でP6の検出時に南西肩部から須恵器杯1595、P1から土馬C80、P2から金槌?M76、柱穴全体から約520gの鉄滓などが出土している。なお、1595は平坦で広い底部をもち、C80は鼻面部分の破片である。M76は52gの小形のものである。土器は奈良時代末から平安時代初頭にかけての特徴をもつ。 (江見)

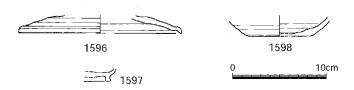


第531図 掘立柱建物40(1/60)・出土遺物(1/4,1/3)

## **掘立柱建物41** (第485·532図、図版99·110)

掘立柱建物40を大型化したように建てられた $3\times2$ 間の南北棟で、棟方向はN- $16^\circ$ -Eである。規模は桁行7.2m、梁行4.7m、床面積は32.2m を測る。柱穴間の距離は桁行2.7~2.1m、梁行2.75~1.75m を測る。柱穴径80cm前後、深さ50cm前後を残す。



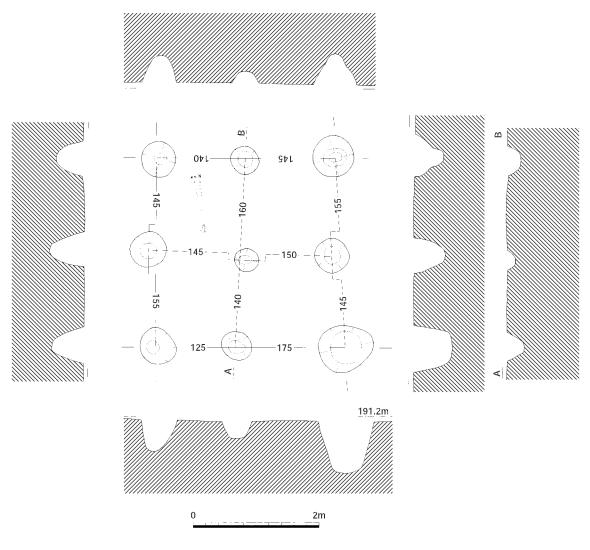


第532図 掘立柱建物41 (1/60) - 出土遺物 (1/4)

遺物は P 4 から須恵器蓋1596、P 2 から杯1597、P 3 から勝間田焼椀1598、柱穴全体から鉄滓約300gが出土している。なお、1598は混入の可能性が高い。蓋の特徴は8世紀後半を示す。 (江見)

### **掘立柱建物42** (第485·533図、写真18、図版99·110)

3804De区から検出された、掘立柱建物41とほぼ同様の棟方向をもつ2×2間の総柱建物である。 規模は東西3m、南北3mのほぼ方形を呈す。桁と梁の決定が困難であるが、柱穴配置および他の建 物配置状況から南北方向に桁行をもつ建物と理解したい。床面積は8.8㎡を測る。柱穴間距離は桁行 1.6~1.4m、梁行1.75~1.25mを測る。四隅の柱穴は比較的深く掘られていたが、束柱は深さ約10cmと 浅い。遺物は土師器甕細片が出土しており、古代の範疇のものと思われる。 (江見)

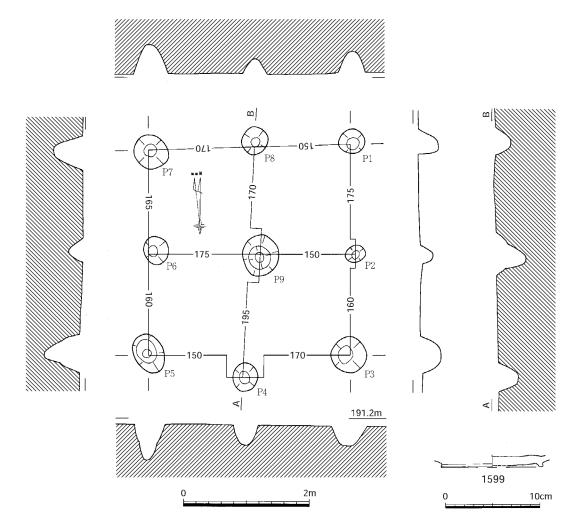


第533図 掘立柱建物42(1/60)

## **掘立柱建物43** (第485·534図、写真18、図版99·110)

掘立柱建物42の南から検出された  $2 \times 2$  間の総柱建物で、棟方向は $N-7^\circ$ -Eである。規模は桁行3.65 m、梁行3.25m、床面積10.6㎡を測る。柱穴間の距離は桁行1.75~1.6m、梁行1.75~1.5mを測る。柱穴は四隅および中央のそれが径50cm前後、深さ30~50cmを測るのに対し、側柱中央の柱穴は小規模で浅いことから、  $1 \times 1$  間の建物で柱穴間は束柱からなる掘立柱建物の可能性も考えられる。

遺物はP1から須恵器杯1599、P9から土師器甕細片、柱穴全体から鉄滓約40gが出土している。 杯の特徴から古代に建てられたものと考えられる。 (江見)



第534図 掘立柱建物43(1/60)・出土遺物(1/4)

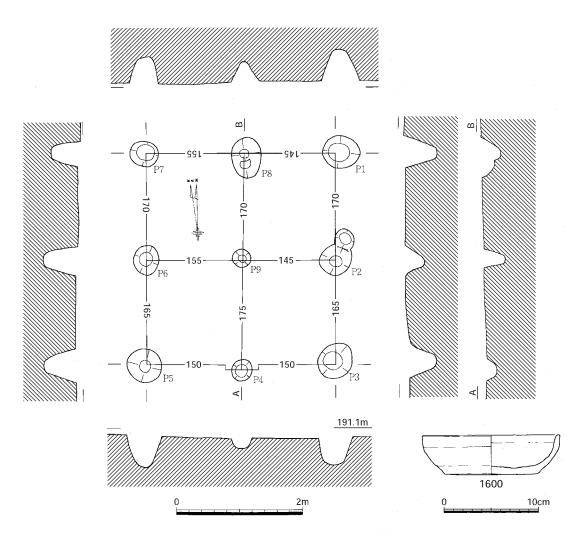


写真18 掘立柱建物39・42・43付近作業風景(南から)

### **掘立柱建物44** (第485·535図、写真19、図版99·121)

掘立柱建物40の南約15m、3806 D d 区から検出された  $2 \times 2$  間の総柱建物で、棟方向はN-9°-Eである。規模は桁行3.45m、梁行 3 m、床面積10.1㎡を測る。柱穴間の距離は桁行1.75~1.65m、梁行1.55~1.45mを測る。柱穴は径30~60cm、深さ20~50cmを測るが、南辺中央の P 4 は他と比較して極端に小規模なものであった。

遺物はP1・5から土師器甕片、P3から須恵器杯1600が出土している。1600は広い底部に、口縁



第535図 掘立柱建物44(1/60)・出土遺物(1/4)

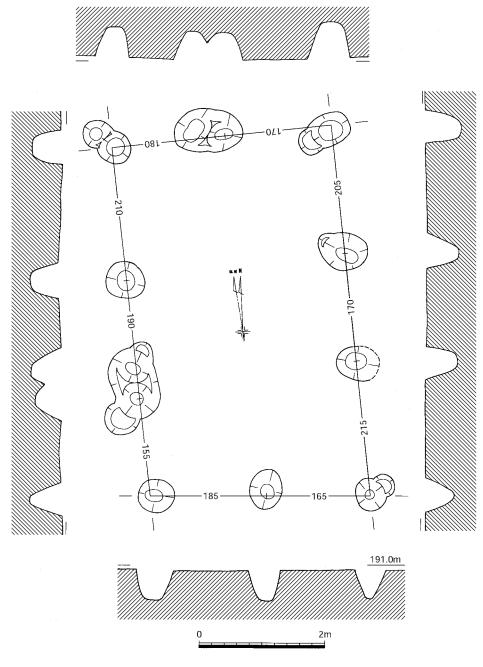
部は内湾気味に立ち上がる。8世紀後半を示す遺物 と思われる。 (江見)

## **掘立柱建物45** (第485·536図、図版99)

掘立柱建物40の南東10m、3806De区から検出された3×2間の南北棟で、棟方向はN-2°-Eである。規模は桁行5.9m、梁行3.5m、床面積20㎡を測るが、東側の桁行が西側に比べ35cm余り長いため、平面形態は矩形を呈さずやや歪んだ形態になっている。柱



写真19 掘立柱建物44遺物出土状況 (南から)



第536図 掘立柱建物45 (1/60)

穴間距離は桁行2.15~1.55m、梁行1.85~1.65mを測る。柱穴は径50~80cm、深さ50cm前後を測り、埋土はいずれも暗褐色砂質土であった。

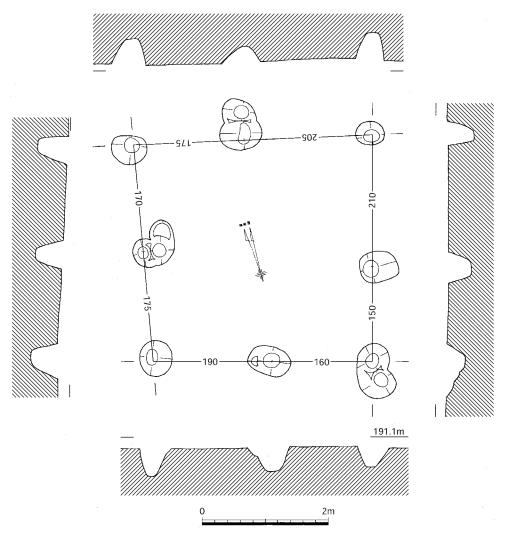
柱穴内からは須恵器杯をはじめ土師器甕、鉄滓約50gなどが出土しているが、いずれも小破片で掲載し得なかった。建物の時期は占代の範疇と思われる。 (江見)

## **掘立柱建物46** (第485·537図、写真20、図版99·111)

掘立柱建物45の北東部に位置し、それと一部重複した状態で検出された $2\times2$ 間の東西棟と推定される建物で棟方向はN- $64^\circ$ -Wである。規模は桁行3.8m、梁行3.6m、床面積12.9m $^\dagger$ を測る小規模な建物で、対応する桁行および梁行の数値が微妙に相違しているため、平面形態は歪んでいる。柱穴間の距離は桁行 $2.05\sim1.6$ m、梁行 $2.1\sim1.5$ mを測る。遺物は柱穴から土師器甕細片、鞴の羽口片、鉄滓



写真20 掘立柱建物46清掃作業(南から)

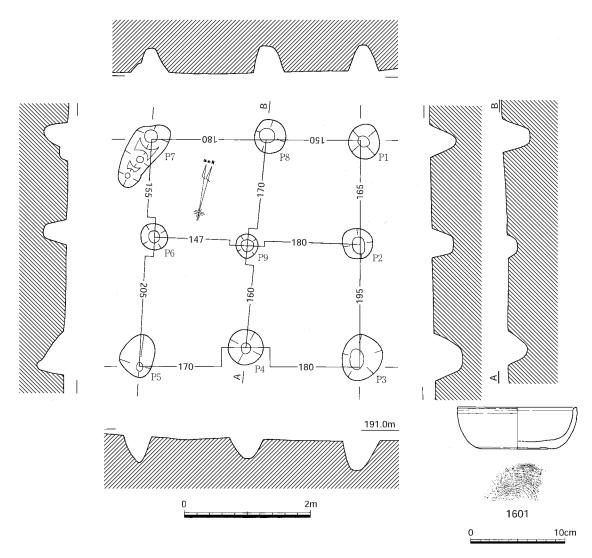


第537図 掘立柱建物46 (1/60)

7 g、炭化木片などが出土している。建物の時期は古代の範疇のものと考えられる。 (江見) **掘立柱建物47** (第485・538図、図版99・121)

掘立柱建物46の北東10m、3805Df区から検出された $2\times2$ 間の総柱建物で、棟方向は $N-7^{\circ}-W$ で

ある。規模は桁行3.6m、梁行3.5m、床面積12.2mを測り、平面形態はほぼ方形を呈す。柱穴間の距離は桁行 $2.05\sim1.55$ m、梁行 $1.8\sim1.47$ mを測る。柱穴は径50cm前後、深さ50cm前後を測るが、建物中央の束柱と考えられる P 9 は径35cm、深さ15cmと小規模であった。柱穴埋土はいずれも茶褐色砂質土であった。遺物は P 5 からの須恵器杯1601をはじめ、 P  $1\cdot2\cdot4\cdot8$  から土師器の甕細片が出土している。1601は底部糸切りされており、形態の特徴から 8 世紀代のものと思われる。 (江見)

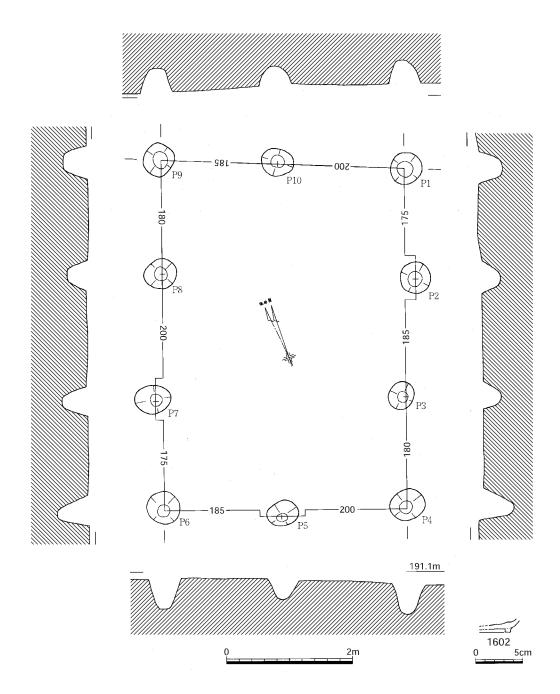


第538図 掘立柱建物47 (1/60) · 出土遺物 (1/4)

### **掘立柱建物48**(第485·539図、図版99·111)

掘立柱建物47の北から検出された  $3\times 2$  間の南北棟で、棟方向はN-24°-Eである。規模は桁行5.55 m、梁行3.85m、床面積19.2㎡を測る。柱穴間の距離は桁行  $2\sim 1.75$ m、梁行  $2\sim 1.85$ mで、桁行の柱間の計測値は僅かに相違するとともに柱根もずれてもいたが、平面形態はほぼ矩形を呈す。柱穴は径50cm前後、深さ30~60cmを測り、建物の四隅の柱穴に対し他は若干浅く、特に P 5 は顕著であった。柱穴埋土は暗褐色砂質土であった。

遺物は須恵器の杯・壺・甕、土師器の杯・甕など、大半の柱穴から出土しているが、図示し得たのは須恵器杯16021片のみであった。古代の範疇のものと考えられる。 (江見)



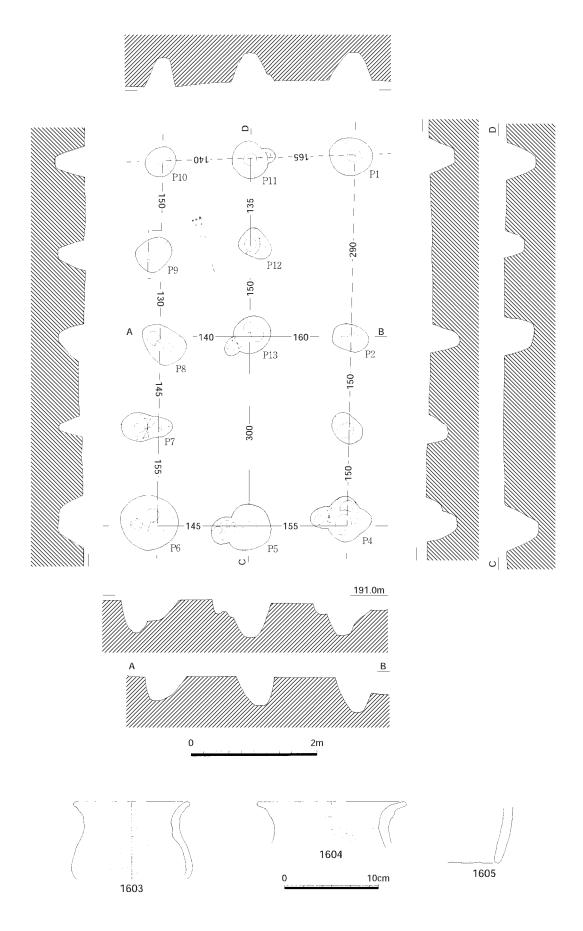
第539図 掘立柱建物48(1/60)・出土遺物(1/4)

## **掘立柱建物49** (第486·540図、図版111)

掘立柱建物48の北東、3803Df区から検出された $4\times2$ 間の南北棟で、棟方向はN-21°-Eである。規模は桁行5.9m、梁行3.05m、床面積17.7㎡を測る。建物の北東および南部中央からは柱穴が検出されなかったため、変則的な柱間の形態となっている。柱穴間の距離は桁行2.9~1.3m、梁行1.65~1.4 mを測る。柱穴は径50~80cm、深さ30~55cmを測る。柱穴内埋土は暗褐色砂質土であった。

遺物は須恵器の杯・蓋・甕、土師器の甕、鉄滓600gなど、大半の柱穴から出土しているが、図示し得たのはP13の土師器甕1603、P2の甕1604・甑1605のみであった。

1603は小形で外面にはハケが施されており、1604は胴部がやや長くなるものと思われ、いずれも奈良時代の範疇のものと考えられる。 (江見)

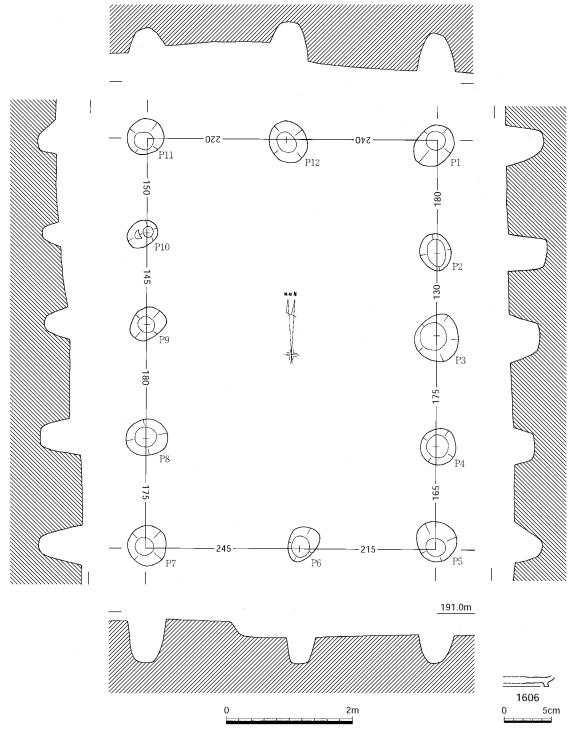


第540図 掘立柱建物49 (1/60)・出土遺物 (1/4)

## **掘立柱建物50** (第486·541図、図版100·111·112)

掘立柱建物48の東10m、3 8 04 D g 区から検出された  $4 \times 2$  間の南北棟で、棟方向はN-5°-E である。 規模は桁行6.5m、梁行4.6m、床面積29.9㎡を測る。柱穴間の距離は桁行1.8~1.3m、梁行2.45~2.15 mを測り、桁行の柱間がやや詰んでいる。

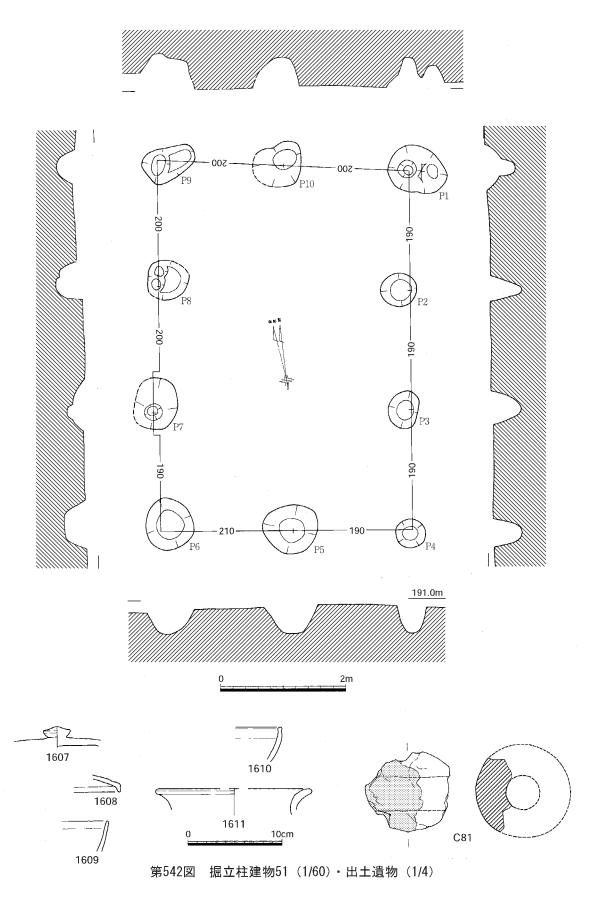
遺物は須恵器杯・甕、土師器の杯・甕、鉄滓約300gなどが大半の柱穴から出土しているが、図示し得たのはP8からの須恵器杯1606のみで、その特徴は8世紀代と考えられる。 (江見)



第541図 掘立柱建物50(1/60)・出土遺物(1/4)

# **掘立柱建物51** (第486·542図、図版100)

掘立柱建物50の南東にほぼ棟方向をそろえて位置する $3\times2$ 間の南北棟で、棟方向はN-14°-Eである。

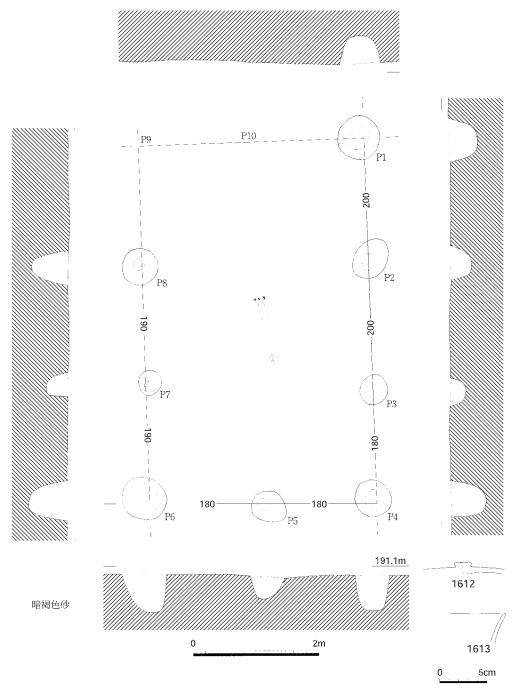


規模は桁行5.9m、梁行4m、床面積は23.2mを測る。柱穴間距離は桁行 $2\sim1.9$ m、梁行 $2.1\sim1.9$ mを測る。柱穴は径 $50\sim80$ cm前後、深さ $30\sim50$ cmを測る。柱穴埋土は暗褐色砂質土であった。

遺物はP7から須恵器蓋1607、P4から蓋1608、P5から杯1609・土師器杯1610、P6から甕1611、P3から鞴の羽口片C81、柱穴全体から約410gの鉄滓が出土しており、その特徴は8世紀代を示すものと考えられる。 (江見)

## 掘立柱建物52 (第486・543図、図版100・112)

3 8 04 Dh区に位置し、先述の掘立柱建物50・51とほぼ同一の棟方向を呈する。 P 9 と10は後述する上壙133・134により削平されているため検出できなかった。規模は  $3 \times 2$  間で、桁行5.8m、梁行



第543図 掘立柱建物52(1/60)・出土遺物(1/4)

3.6m、面積は推定で20.7㎡を測る。柱穴掘り方は円形を呈し、深さは $23\sim64$ cmと一定ではない。出土遺物は土器細片のみで、かろうじで須恵器杯 $1612\cdot1613$ が図化可能であった。

遺構の時期は8世紀代に比定できる。

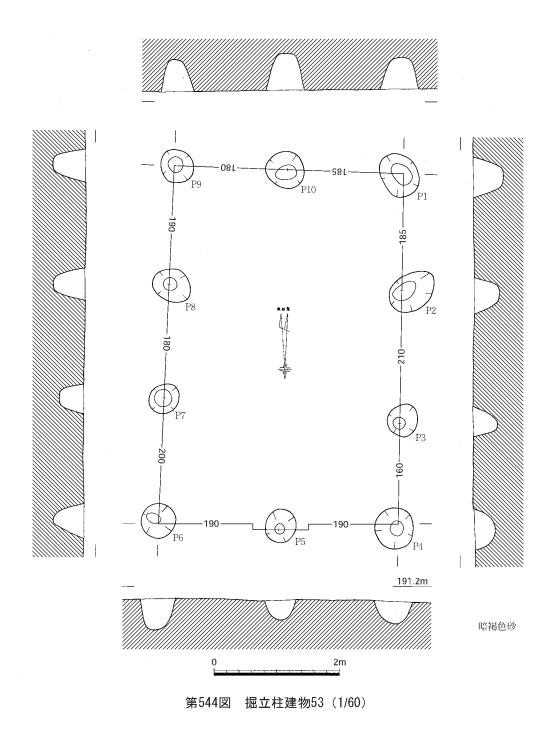
(小嶋)

掘立柱建物53 (第486・544図、写真21、図版100・112)

3803Di区で検出された3×2間の掘立柱建物である。平面形はやや台形を呈し、南側の梁行が広い。規模は桁行5.7m、梁行3.8m、面積21.0㎡を測る。出土遺物は土器細片のみであった。

遺構の時期は古代の範囲に収まる。

なお、本掘立柱建物 P 2 と後述する掘立柱建物 54 P 10は同一の柱穴を使用しているが、この先後関係は不明である。 (小嶋)



-374-

**掘立柱建物54** (第486・545図、写真21、 図版100・113)

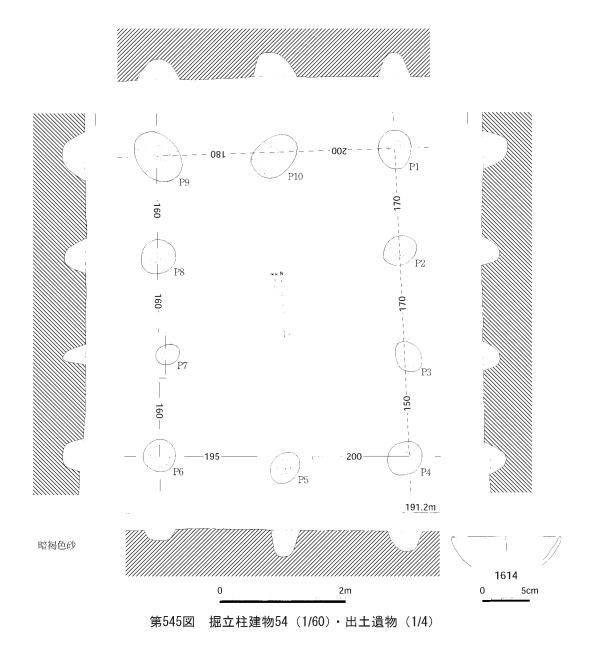
先述の掘立柱建物53とほぼ同一の棟方 向を呈し、北西部が一部重複している3 ×2間の掘立柱建物である。桁行4.9m、 梁行3.95m、面積18.8㎡を測る。柱穴掘 り方は円形ないし楕円形である。

遺物は須恵器杯・上師器甕・丹塗りの 椀などがあり、図化した須恵器杯身1614 はP9から出土している。

時期は出土遺物等から、8世紀代を想 定したい。 (小嶋)



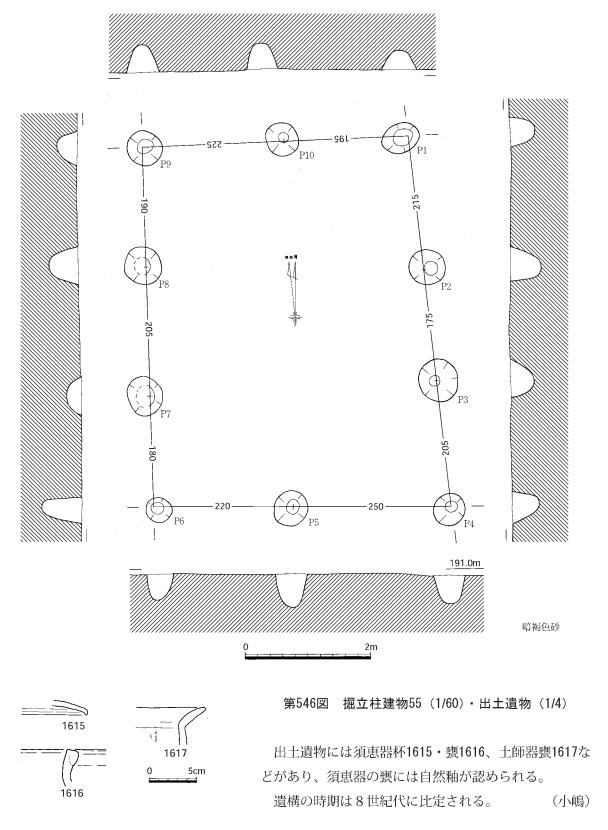
写真21 掘立柱建物53・54清掃作業(北から)



-375-

## 掘立柱建物55 (第486・546図、図版100・113)

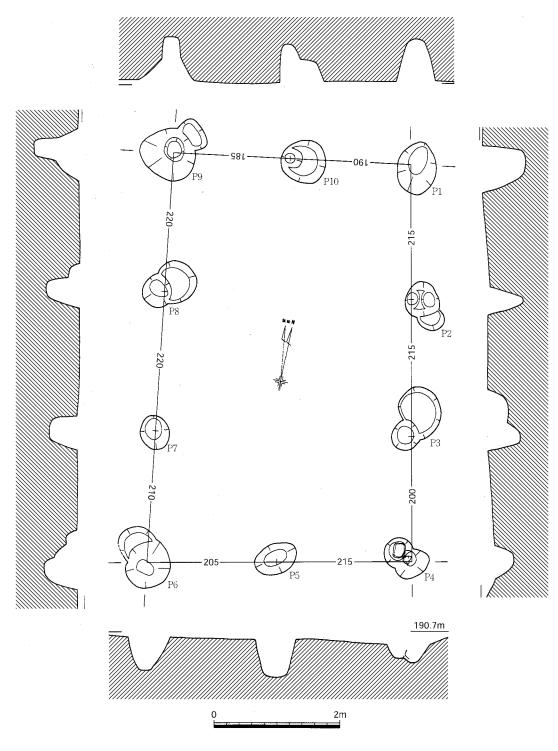
先述の掘立柱建物54の南側約1 mに位置し、ほぼ同一の棟方向を呈する掘立柱建物である。平面形は南東側が外側に開く台形を呈している。規模は $3\times2$ 間で、桁行5.95m、梁行4.7m、面積26.0mを測る。



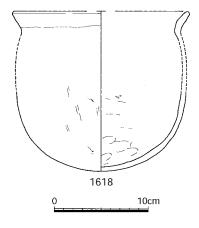
## **掘立柱建物56** (第486·547·548図、図版113)

掘立柱建物55の南西約40m、3807Dg区から検出された $3\times2$ 間の南北棟で、棟方向は $N-3^\circ$ -Wである。規模は桁行6.5m、梁行4.2m、床面積25.4mがを測る。柱穴間の距離は桁行2.2~2 m、梁行2.15~1.85mを測る。柱穴は径50~80cm前後、深さ30~70cmを測る。

遺物は土師器独片が P 1  $\sim$  4  $\sigma$ 出土している。独1618は P 4 の底部付近から出土したもので、胴の一部が欠損していたが、本来は完形品を埋めていた可能性が強いものと考えている。独は外面に煤が



第547図 掘立柱建物56 (1/60)



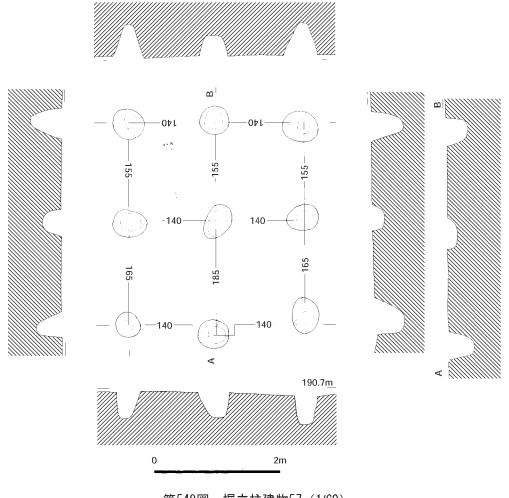
第548図 掘立柱建物56出土遺物 (1/4)

付着し、内面を指頭圧およびケズリで仕上げている。8世紀 代のものと考えられる。 (江見)

## **掘立柱建物57** (第486·549図、図版114)

掘立柱建物56の南西15m、3809Dg区から検出された2 2間の総柱建物で、棟方向はN-11°-Eである。規模は桁行3.4 m、梁行2.8m、床面積9㎡を測る。柱穴間の距離は桁行1.85 ~1.55m、梁行1.4mを測り、南辺中央の柱穴が南にやや突出 している。柱穴は径50cm前後、深さは30~40cmを測る。

遺物は土師器杯・甕、鉄滓100gなどが出土しているが、 いずれも小破片で図示し得なかった。周囲の状況から古代の 範疇の建物と考える。 (江見)

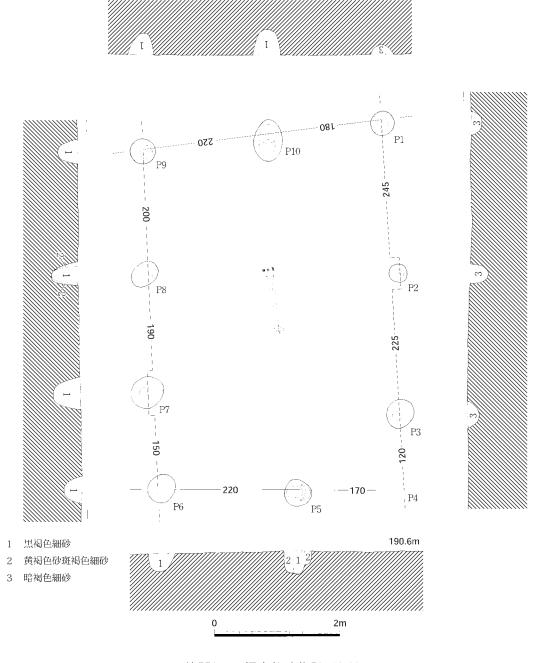


第549図 掘立柱建物57 (1/60)

## 掘立柱建物58 (第487・550図、図版100・114)

3803Eb区で検出された3×2間の掘立柱建物である。南東端のP4は検出されなかった。P5 とP8で柱痕跡が認められ、その埋土は黒褐色細砂である。規模は桁行5.9m、梁行3.9mを測り、推 定面積21.8㎡である。桁の柱穴間距離は一定ではなく、1.2mから2.45mまでの幅をもつ。棟方向は N-13°-Eである。

出土遺物は土器細片のみで時期の特定は困難であるが、検出状況等から古代に比定される。(小嶋)



第550図 掘立柱建物58 (1/60)

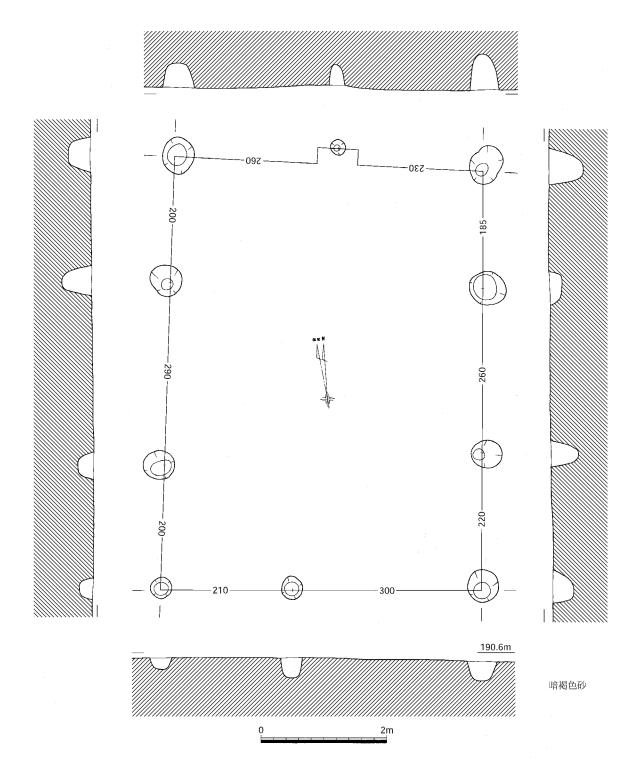
## 掘立柱建物59 (第487・551図、図版100・114)

掘立柱建物58の西側約1.5mに位置し、ほぼ同一の棟方向を呈している。規模は3×2間で、桁行6.90m、梁行は久田原遺跡の古代に属する3×2間の掘立柱建物の中では広く5.1mを測る。面積は35.2㎡である。柱穴掘り方は円形を呈している。

遺物は土器細片のみで図化可能なものは出土していない。

遺構の時期は検出状況等から古代に比定される。

(小嶋)

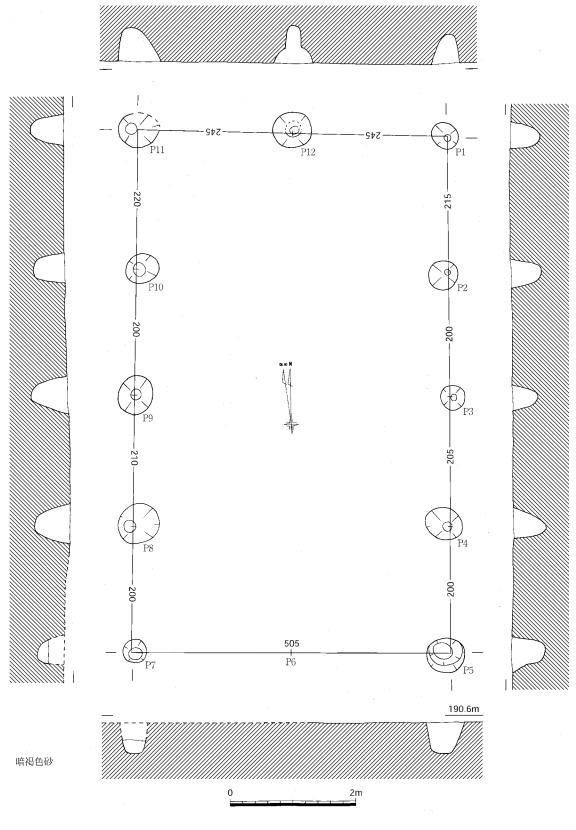


第551図 掘立柱建物59 (1/60)

掘立柱建物60 (第487・552図、図版100・115)

3~8~04~E b区に位置し、古墳時代の竪穴住居29を切って検出されている。建物の規模は $4\times2$ 間で、桁行8.3m、梁行5.05m、面積41.0㎡を測る。柱穴掘り方の深さは50cm前後で一定している。棟方向は N-9°-Eである。

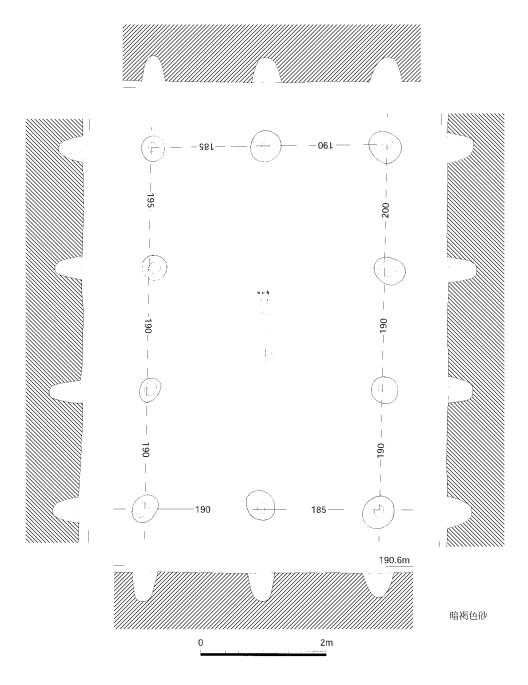
出土遺物は土器細片のみである。遺構の時期は検出状況等から古代に比定される。 (小嶋)



第552図 掘立柱建物60 (1/60)

**掘立柱建物61** (第487・553図、図版100・115)

先述の掘立柱建物60から約1.5m北東で検出され、棟方向が掘立柱建物60とほぼ同一方向を呈する



第553図 掘立柱建物61 (1/60)

掘立柱建物である。桁行5.8m、梁行3.75m、面積21.7㎡を測り、規模は $3\times2$ 間である。柱穴掘り方は約50cmの円形を呈し、深さは検出面から40cm前後を測る。

遺構の詳細な時期は不明であるが、検出状況等から古代に比定される。 (小嶋)

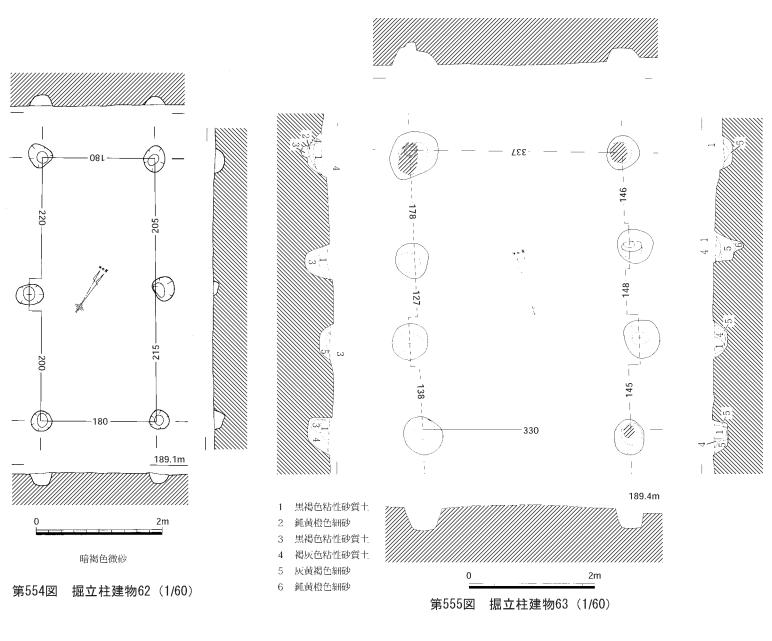
## 掘**立柱建物62** (第488・554図)

中世の水田層と暗褐色砂質土(奈良時代の包含層)の間にある褐灰色砂質土を除去後、ピット群を 検出しており、その中に存在した2×1間の小規模な建物である。柱穴から遺物は出土していないが、 検出面からみて、この建物の時期は平安時代の可能性がある。

## **掘立柱建物63**(第488·555図、図版115)

4002Dj区で検出され、古代の遺構群から孤立する。規格は3×1間で、桁行全長が4.43m、床

穴の深さは地形に応じ、南から北へ深くなる。遺物には年代不明の土器小片がある。柱穴規模で古代 面積は14.5㎡を測る。柱穴の長径は56~86cmで、柱の抜き取り跡を残す北西隅柱穴のみが大きい。柱 と判断したが、 3×1間の建物は1棟しかなく、柱間や桁行と梁行の比率も他とやや異なる。 (選本)



# 4 柱穴列

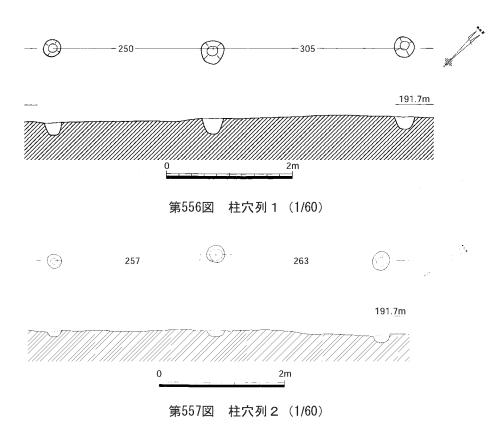
## 柱穴列 1 (第480.556図、図版102)

溝39の西方約7mで検出された。検出当初は、柱列2と掘立柱建物を構成する可能性を模索していたが、断念した。柱穴からの出土遺物は認められない。 (岡田)

#### 柱穴列 2 (第480.557図)

柱列1の南東方で、ほぼ平行するかのように検出された。

2間分に相当する3本の柱穴が、直線的に並ぶ。柱掘り方は径約30cm未満で、ほぼ円形を示す。柱間は8尺強を示し、建物を構成する距離を示しているが、柱列1と比較すると、この柱間がかなり相違している。また、深さもかなりの隔たりがある。柱穴からの出土遺物は、皆無である。 (岡田)



### 柱穴列3 (第480.558図)

掘立柱建物8のすぐ西側で、平行して検出された。

掘立柱建物8の桁行柱間数値との緊密な関係を考えれば、庇あるいは濡れ縁の可能性が十分に考えられる。柱穴からの出土遺物は皆無である。 (岡田)

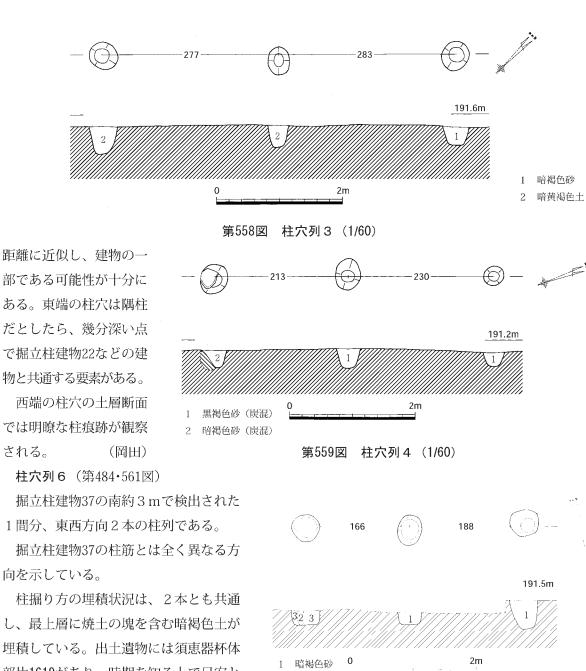
## 柱穴列 4 (第480.559図)

土壙119の西側で検出された南北方向の柱列である。

柱間2間分、3本の柱穴が直線的に並ぶ。柱穴の埋積土には炭片の混入が認められるが、土器片は全くない。 (岡田)

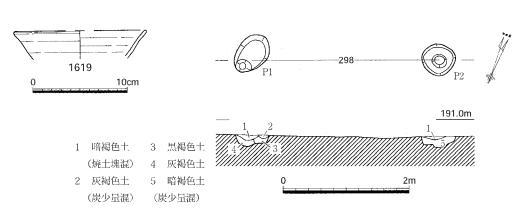
## 柱穴列 5 (第483.560図)

掘立柱建物20の北東約4mで検出された、東西方向の柱列である。柱間は、2×2間の総柱建物の



し、最上層に焼土の塊を含む暗褐色土が 埋積している。出土遺物には須恵器杯体 部片1619があり、時期を知る上で目安と なる。 (岡田)

される。



褐色砂

黑褐色砂

第560図 柱穴列5 (1/60)

第561図 柱穴列6 (1/60)・出土遺物 (1/4)

## 5 製鉄炉

製鉄炉1 (第484・562図、図版109・116)

3709Ea区に位置している製鉄炉である。炉の下部構造と廃滓穴・廃滓溝が検出された。

炉の下部構造は、遺構の東側中央部に位置している。炉床部までの上部構造は、後世の削平により 失われている。下部構造の掘り方は長軸85cm、短軸63cmの隅丸長方形を呈している。掘り方底面上に は、カーボンベットと考えられる炭層が5cm程の厚さで認められる。その上層は黄色土の単一層で、 おそらく炉底下部に貼られていた粘上と想定され、熱影響による硬化が著しい。炉操業時の下方への 熱の放散は炉掘り方底面から約5cm下まで及んでいる。

廃滓穴は炉の下部構造の南北両側に位置している。北側の廃滓穴は長軸1.72m、短軸1.25mを測り、平面楕円形を呈している。深さは検出面から40cmである。南側の廃滓穴は長軸1.55m、短軸1.02m、深さは北側のものより浅く26cmを測る。平面形はややいびつな楕円形を呈している。両者の最下層(第12・13層)には鉄滓がほとんど含まれていなかった。

南側の廃滓穴の南西部から西に向けて2.4m程続く溝が確認されている。これはいわゆる廃滓溝と 想定され、多量の鉄滓で埋まっていた。検出面からの深さは最深部で約10cmを測る。

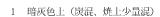
出土遺物は土器細片のみであり、唯一土師器甕1620が図化可能であった。

廃滓穴

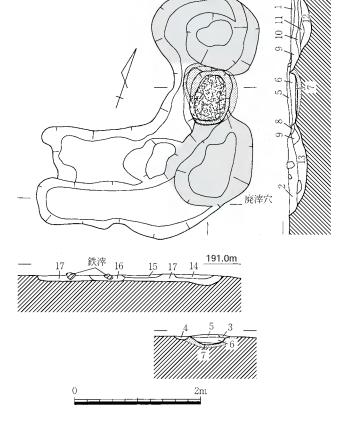
出土遺物と検出状況等から、遺構の時期は8世紀代と考えられる。



(小嶋)



- 2 暗灰色土(1僧より締まった感)
- 3 暗褐色土 (炭・鉄滓混、焼土僅少)
- 4 暗灰色土 (炭・鉄滓混、焼土僅少)
- 5 明橙色上(1~5cm大の鉄滓多、 ほとんど焼土)
- 6 黄色土(よく締まった土、鉄滓僅少)
- 7 黒色土 (炭層)
- 8 黄褐色上 (鉄滓・小礫・炭・焼上混)
- 9 暗褐色土(焼土焼土粒多量、炭粒若干、 鉄滓混)
- 10 暗褐色土 (焼土など僅少、鉄滓混)
- 11 褐灰色上(焼上粒多量、鉄滓混)
- 12 淡黒色土 (炭・焼土粒若干、鉄滓僅少)
- 13 暗褐色土 (炭・焼土粒若干、鉄滓僅少)
- 14 灰褐色土 (1 cm大の鉄滓、焼土粒、炭若干)
- 15 暗灰色上(1 cm大の鉄滓若干、焼上粒、 炭1 僧より多)
- 16 黒色土 (炭粒多、焼土粒やや大、5 cm以下 の鉄滓混)
- 17 暗褐色上 (炭・焼上粒・鉄滓多量、1~5 cm大 の鉄滓湿)



第562図 製鉄炉1 (1/60) · 周辺出土遺物 (1/4)

# 6 鍛冶炉

## **鍛冶炉1** (第484·563図、巻頭図版8、図版116)

製鉄炉1の炉の下部構造部から南西へ約2.5m程の所に位置し、厚さ5cm程の炉床粘土のみ検出された鍛冶炉である。炉床粘土は長軸45cm、短軸31cmの環状を呈している。中央部には粘土が認められず、削平により失われたと想定したい。炉床掘り方は長軸65cmを測る楕円形を呈し、防湿構造等は認められない。出土遺物は皆無であるが、検出状況から製鉄炉1と同時期としたい。 (小嶋)

## 鍛冶炉2 (第484・564図、図版116)

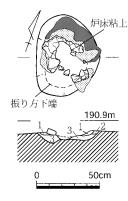
3803 E c区に位置している。炉床の規模は長軸24cm、短軸20cmを測り、平面楕円形を呈している。 炉内残留滓と考えられる鉄滓が炉床内に残存していた。この炉床から50cm 程北側では鍛造剥片の密集部が径約50cmの範囲で確認されている。鍛冶炉 の掘り方は長軸1.44m、短軸70cm、深さ15cmを測る。

遺構の時期は、鍛冶炉2と3に挟まれた位置で鍛冶炉用の水甕と考えられる甕が出土している土壙131から、8世紀代を想定したいが、これとほぼ同様の形態の鍛冶炉が中世でも認められるため、中世に繰り上がる可能性も否定できない。 (小嶋)

## 鍛冶炉3 (第484・565図、図版116)

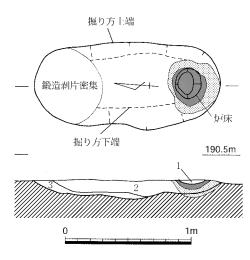
先述の鍛冶炉2から約1.5m西側に位置している。炉床は50×45cmの不整円形を呈し、検出面からの深さ5cmを測る。炉には熱影響が顕著に認められる。炉床から約50cm北西側に鍛造剥片の密集部が存在していた。

鍛冶炉2との先後関係は、掘り方埋土中に鉄滓・鍛造剥片が含まれていることや土壙131の位置関係から鍛冶炉3の方が新しいと考える。ただし、埋土中の鉄滓等に関しては改修の可能性も否定できない。 (小嶋)



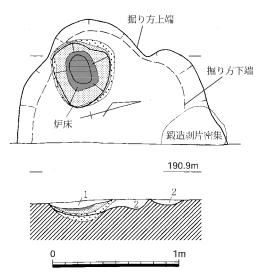
- 1 赤褐色粘土
- 2 灰白色粘土
- 3 暗褐色砂

第563図 鍛冶炉1 (1/30)



- 1 鉄滓層(表面から1~2cm下での多量含)
- 2 暗灰褐色上(鉄滓含)
- 3 灰色土

第564図 鍛冶炉2 (1/30)



- 1 暗灰褐色土 (灰色砂塊含、鉄滓・鍛造剥片多)
- 2 暗灰色土 (鉄滓・鍛造剥片若干、炉床整地土?)

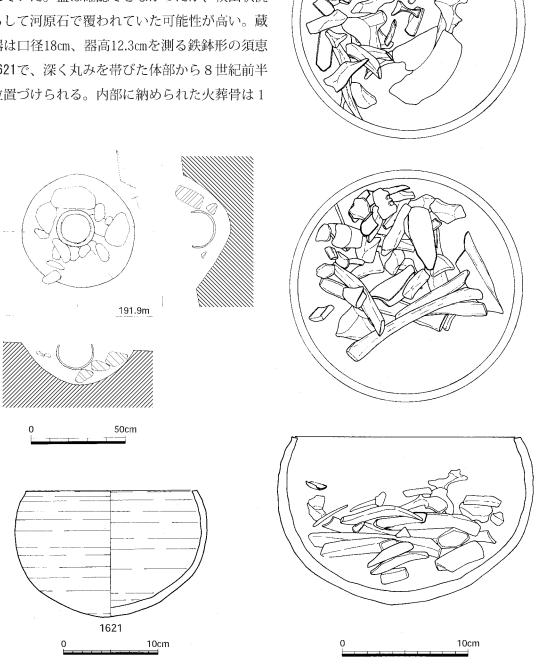
第565図 鍛冶炉3(1/30)

# 7 火葬墓

## **火葬墓 1** (第478·566図、巻頭図版 8、図版117·121)

久田原遺跡の北西側、吉井川の河岸に近い3708Ch区で検出したもので、建物群から西に60mほど離れた位置にある。人頭大の河原石を多量に含む黒褐色の包含層を掘り下げる過程で、火葬骨を納

めた須恵器が検出されたため周囲を精査したところ、長軸61cm、短軸58cm、深さ26cmを測る円形の掘り方が確認された。蔵骨器はその中央に据えられた後、掘り方との間隙に大形の石を配して固定されていた。蓋は確認できなかったが、検出状況からして河原石で覆われていた可能性が高い。蔵骨器は口径18cm、器高12.3cmを測る鉄鉢形の須恵器1621で、深く丸みを帯びた体部から8世紀前半に位置づけられる。内部に納められた火葬骨は1



第566図 火葬墓 1 (1/20)・出土遺物 (1/4)・火葬骨収納状態 (1/3)

体分で、四肢骨などの長骨を納めた上に椎骨や頭骨・骨盤などの骨片が置かれており、被葬者は女性 と推定されている(付載1参照)。

特殊な蔵骨器を使用する火葬墓は女性の場合が多いことが指摘されており、鉄鉢形土器のような仏器が使用された背景には被葬者に対する強い追慕の念が働いていたものと考えられる。 (亀山)

## 8 土壙

## 土壙120 (第478.567図)

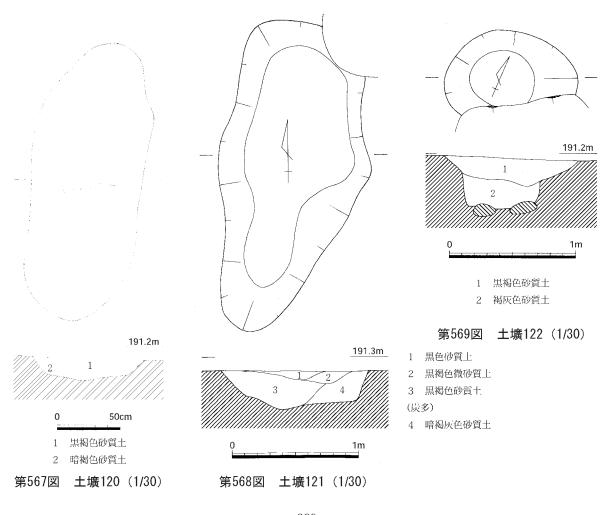
遺跡の北西にあたる3705 Ci区で検出した。長軸2.23m、短軸89cm、深さ17cmの東西に長い楕円形を呈する。土師器の甕の小片が出土しており、埋土の状況なども考慮すると占代以前に形成された自然地形の可能性が高い。 (亀山)

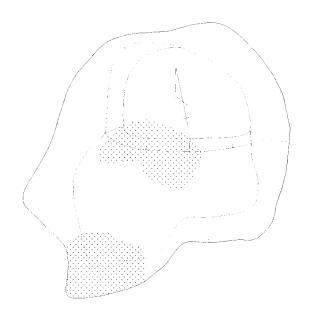
#### 土壙121 (第478.568図)

土壙115の南18.7mで検出した土壙で、3707 Ch区に位置する。長軸2.49m、短軸1.21mの南北に長い不整楕円形を呈し、深さは31cmある。詳細な時期は明らかでないが、出土した土師器片や少量の鉄滓からすると中世まで下る可能性がある。 (亀山)

#### 土壙122 (第478・569図)

3708 Ch区で検出した土壙で、土壙116の南西2.5mに位置する。上部は長軸1.07m、短軸60cm以上の楕円形を呈し断面はすり鉢形をなすが、不整円形下部は壁面が垂直ぎみに立ち上がる。





第570図 土壙123 (1/30)・出土遺物 (1/4)

埋土には炭片や鉄滓が含まれるが時期は不 明である。 (亀山)

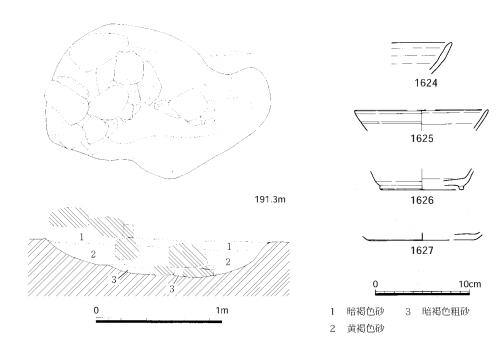
### 土壙123 (第480·570図)

3702Dg区に位置している土壙である。 平面形は不整円形を呈している。規模は長軸 2.04m、短軸1.88m、検出面からの深さ24cm を測る。底面北側は一段、長軸1.1m、短軸 90cm程の長方形状に深くなっている。底面上 には80×50cm程の範囲で被熱痕跡が認められ た。南西部上面付近の埋土には炭が多く含ま れている。遺物は須恵器杯1622・土師器甕 1623などが出土し、それらから遺構の時期は 8世紀前半に比定される。 (小嶋)

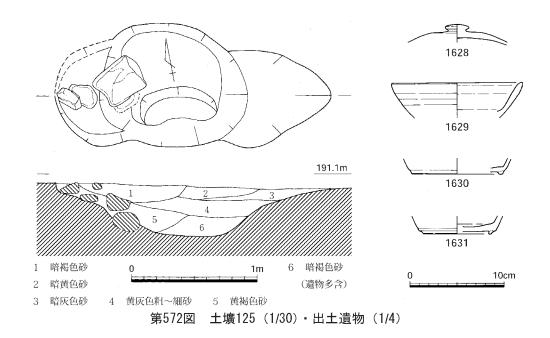
## 土壙124 (第480・571図)

3706Di区に位置し、30cm大の河原石が 多量に出土している土壙である。河原石は据 え置かれていると思われるが判然としない。 規模は長軸1.78m、短軸1.14mを測り、不整 円形を呈している。

遺物は土師器杯1624・須恵器杯1625~1627 や鉄片などが主に河原石の下から出土し、時 期は8世紀前半に比定される。 (小嶋)



第571図 土壙124(1/30)・出土遺物(1/4)



土壙125(第480・572図)

土壙119の西側で検出された土壙である。長軸2.2m、短軸1m、検出面からの深さ40cmを測る。長軸断面形は中央部が約20cm程深くなる逆凸状を呈している。埋土中からは30cm~20cm大の河原石が出土している。遺物は主に第6層中から出土しており、図化しているもののほかに丹塗りの土師器杯や鉄滓などが認められる。遺構の時期は8世紀前半に比定される。 (小嶋)

#### 土壙126 (第480・573図、図版116・121)

3707Di区で検出された土壙である。側溝により北側が削平を受けている。検出面からの深さ15cmを測り、底面北東側には粘土が貼られていた。遺物は須恵器甕の胴部大片や杯の底部片などが出土しており、それらから遺構の時期は8世紀代を考えたい。 (小嶋)

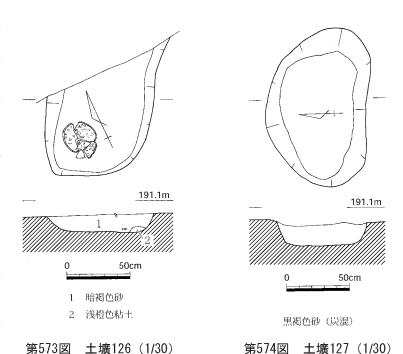
## 土壙127 (第483・574図)

3803Dh区で検出された土壙で、平面楕円形を呈している。規模は長軸1.26m、短軸78cmを測る。検出面から18cmの深さを測る底面はほぼ水平である。

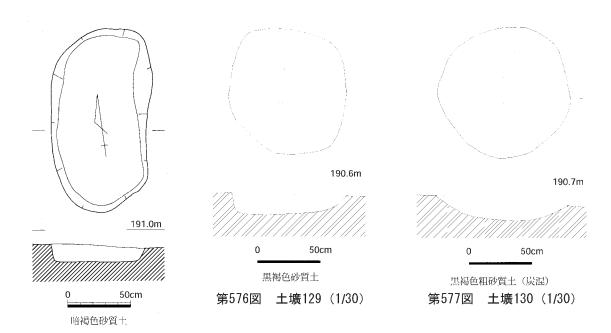
図化可能な遺物はないが、須恵 器杯片や土師器片などが出土して おり、遺構の時期は8世紀代を想 定したい。 (小嶋)

土壙128 (第483·575図、図版121)

3 8 02 Dh区に位置している長軸1.46m、短軸75cm、深さ14cmを測る土壙である。平面形は楕円形を呈している。



-391 -



第575図 土壙128 (1/30)

遺物は須恵器杯蓋片や土師器甕小片が出土し、遺構の時期は8世紀 代に比定される。 (小嶋)

#### 土壙129 (第484・576図)

3803 E a 区で検出された土壙である。平面形はやや角張った円形を呈している。長軸99cm、短軸93cmを測り、検出面からの深さは16cmを測る。

出上遺物は皆無であったが、検出状況や埋上から古代に比定される。

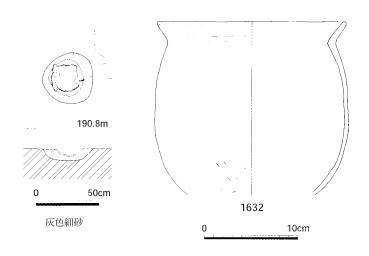
(小嶋)

#### 土壙130 (第484・577図)

先述の土壙129の約1.2m南側に位置している。長軸1.06m、短軸1.04m、深さ16cmを測る。平面形は円形を呈し、断面形は浅い皿状を呈している。遺構の時期は、遺物が出土していないため確定はできないが、検出状況等から古代の範囲に収まると想定される。 (小嶋)

## 土壙131 (第484・578図)

先述の鍛冶炉2と3に挟まれた位置に所在している。径約40cmの円形を呈した土壙内には、口縁部から胴部下半まで残存している土師器甕1632が出土している。この甕は出土状況等から、鍛冶作業に



第578図 土壙131 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

伴う水甕と想定したい。この土壙は、 鍛冶炉2と3の炉や鍛造剥片密集位置 と、それらの操業時の状況を想定した 結果、鍛冶炉3に伴うと判断した。時 期は、出土遺物から8世紀代を想定で きる。 (小嶋)

## 土壙132 (第485・579図)

掘立柱建物の集中する地区より西側 の3805Da区に位置する。

土壙は脆弱な砂地を基盤として検出 されたもので、直径1.3mを前後する 円形を呈し、黒色土で埋没していた。 時期は、遺物の出土が見られなかったことで明言出来ないが、埋没した土質から古代と考える。 (島崎)

#### 土壙133 (第486・580図)

3 8 04 Dh区で検出された平面不整円形を呈している土 壙である。長軸1.45 m、短軸1.24 mを測り、土壙底面は北 西側が一段深く、約15 cmの段差がついている。この一段深 くなった底面から高台付きの須恵器杯身1633 が出土した。 遺物は図示したもののほかに、須恵器・上師器甕片と製錬 滓が多量に出土している。

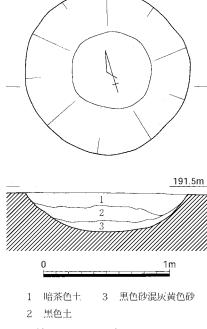
遺構の時期は8世紀前半に比定できる。

なお、掘立柱建物52P9を切っている。 (小嶋)

## 土壙134 (第486・581図)

土壙128の40cm東側に位置し、掘立柱建物52 P 10を切っている。断面形は西側に一段の段がつく。図化可能な遺物はないが、土師器甕小片や鉄滓が出土している。

遺構の時期は古代に比定できる。 (小嶋)



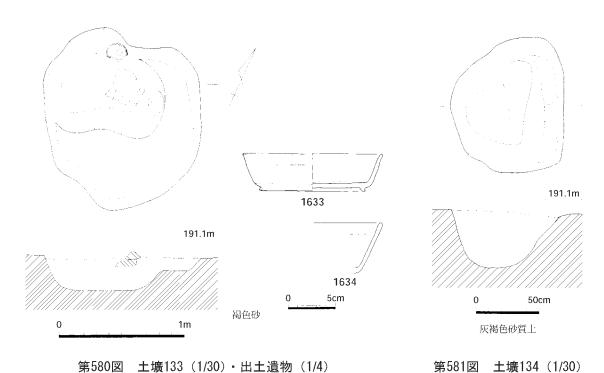
第579図 土壙132 (1/30)

#### 土壙135 (第486・582図)

3 8 04 Di区に位置し、掘立柱建物53 P 6 を切っている土壙である。平面形は円形を呈し、長軸1.34m、短軸1.23mを測る。検出面から22cmの深さを測る底面はほぼ水平である。出土遺物は土師器 甕小片のほかに、鉄滓や炉壁などがある。遺構の時期は古代に比定される。 (小嶋)

## 土壙136 (第486・583図)

3803Di区で検出された土壙である。長軸87cm、短軸71cmを測るやや楕円形気味の平面形を呈す



## る。深さは検出面から31cmである。

出土遺物はないが、検出状況や埋土から遺構の時期は古代の範囲に収まる。

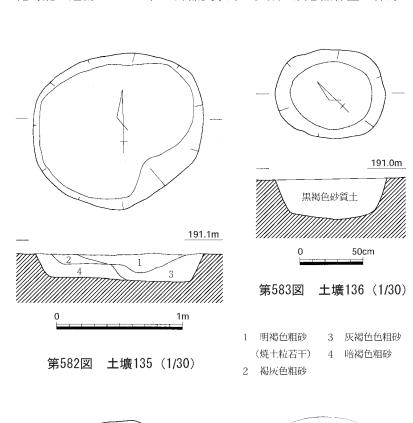
### 土壙137 (第486・584図)

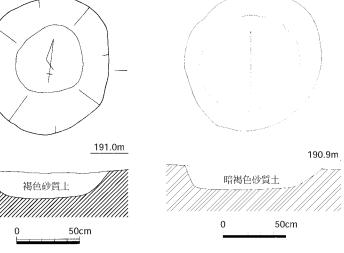
掘立柱建物55 P 1 の東側に接して所在している土壙である。平面形はやや南北に長い楕円形を呈し、108×99cmの規模を測る。出土遺物は土師器甕小片 2 点のみであった。

詳細な時期を特定できないが、遺構の時期は古代の範囲に収まる。

# 土壙138(第486・585図)

掘立柱建物55 P 6 の約 1 m西側に位置している。規模は109×108cmを測り、平面円形を呈する。図 化可能な遺物はないが、土師器甕小片が多数と須恵器杯蓋・杯身・甕片や鉄滓が出土している。







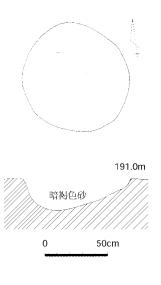
詳細な遺構の時期は特定 できないが、古代と考えら れる。 (小嶋)

(小嶋)

(小嶋)

土壙139 (第486・586図) 3805 Di区で検出され、 平面円形を呈している土壙 である。長軸85cm、短軸84 cmを測る。底面は平坦面を もたない。遺物は土師器甕 小片が多数出土している が、時期を特定できるもの はなかった。

遺構の時期は検出状況等 から古代の範囲に収まると 想定される。 (小嶋)



第586図 土壙139 (1/30)

#### 土壙140 (第486・587図)

3806Dh区に位置している土壙である。長軸1.05m、短軸93cmを測る。断面形は浅い皿形を呈し、 検出面からの深さは16cmである。

出土遺物は皆無であるが、検出状況や埋土から古代に比定される。 (小嶋)

## 土壙141 (第486・588図)

3806Di区で検出された土壙である。南東側に幅約30cmのテラスが検出された。底面の平面形は 長軸約80cmを測る長楕円形を呈している。出土遺物は図示した土師器杯1635のほかに、土師器甕片・ 鞴の羽口・鉄滓・炉壁などがある。遺構の時期は8世紀代を想定したい。 (小嶋)

## 土壙142 (第486・589図)

3 8 05 Di区に位置している。平面形は57×56cmを測る円形を 呈している。埋土中には炭・焼土が多数含まれていた。

図化可能な遺物は出土していないが、須恵器杯蓋・土師器杯・ 鉄滓などが出土している。時期は古代に比定される。

### 土壙143 (第486・589図)

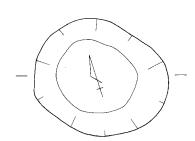
土壙142に切られている土壙である。長軸95cm、短軸91cmを測 る平面円形を呈している。検出面から深さ16cmを測る底面はやや 凸状となっている。

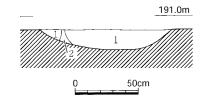
出土遺物は土師器甕・杯片や鉄滓・炉壁等があり、それらから 遺構の時期は古代に比定される。 (小嶋)

#### 土壙144 (第487・590図)

3804Dj区に位置している土壙である。平面形はやや楕円形 気味で、109×91cmの規模を測る。深さは検出面から15cmを測り、 底面中央部から須恵器杯1637が出土している。

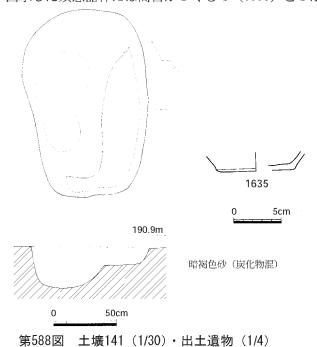
図示した須恵器杯には高台がつくもの(1638)とつかないもの

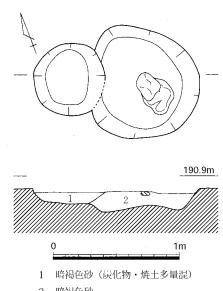




- 暗褐色砂(炭化物混)
- 2 黄褐色砂

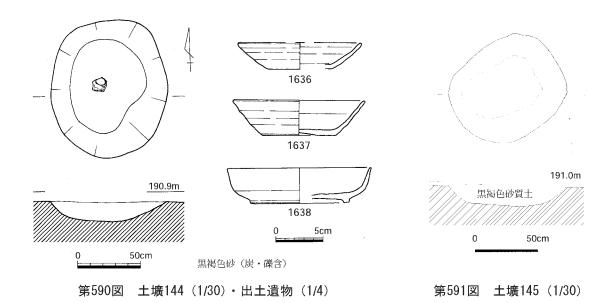
第587図 土壙140 (1/30)

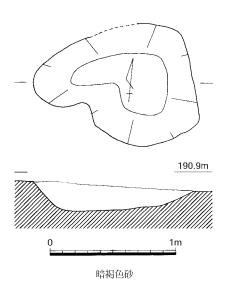




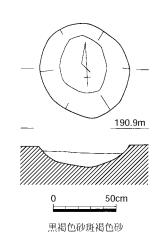
2 暗褐色砂

第589図 土壙142 (左)・143 (1/30)





第592図 土壙146 (1/30)



第593図 土壙147 (1/30)

(1636・1637) がある。そのほかの出土遺物は土師器杯の底 部や甕の体部片、鉄滓などである。

遺構の時期は8世紀代に比定される。 (小嶋)

土壙145 (第487·591図)

3 8 04 Dj区に位置し、平面形はやや角張った円形を呈している。規模は長軸93cm、短軸85cm、深さ20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面はほぼ水平である。

遺物は出土していないが、検出状況等から古代の範囲に収 まると考えられる。 (小嶋)

## 土壙146 (第487・592図)

先述の土壙145の約3 m南側に位置している土壙である。 平面形は、南西側が内側に屈曲し、いびつな楕円形を呈している。出土遺物には須恵器杯蓋・杯身、土師器甕などがあるがいずれも小片であり図化は不可能であった。

詳細な遺構の時期は確定できないが、古代に比定されると 考えられる。 (小嶋)

### 土壙147 (第487・593図)

3806 Dj区に所在している平面円形を呈している土壙で、 長軸74cm、短軸71cm、検出面からの深さ12cmを測る。遺物は 土師器甕の胴部細片が1点出土したのみである。

遺構の時期の特定は困難であるが、検出状況や埋土から古 代の範囲に収まるであろう。 (小嶋)

## 土壙148 (第487・594図)

3808Dj区で検出された土壙である。平面形はややいびつな円形を呈し、長軸1.28m、短軸99cmを測る。検出面から

の深さは55cmを測り、この時期の土壙では深い。

遺物は図示した須恵器甕口縁1639のほかに土師器甕細片や 鉄滓などが出土した。

遺構の時期は古代に比定される。 (小嶋)

## 土壙149 (第487・595図)

3805Eb区に所在している土壙である。平面形は円形を 呈し、規模は長軸75cm、短軸63cm、検出面からの深さ31cmを 測る。

遺物は須恵器杯身、土師器杯・甕、鉄滓、羽口、土錘など が出土しているが、いずれも細片で図化可能なものはない。

時期は古代に比定される。 (小嶋)

#### 土壙150 (第487・596図)

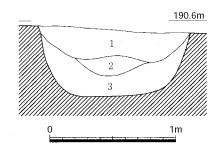
3 8 04 E b 区で検出されている。長軸79cm、短軸75cmの平 面円形を呈している土壙である。検出面からの深さは15cmを 測る。

出土遺物が土器細片のみであるため詳細な時期の特定は困 難であるが、検出状況等から古代と考えたい。 (小嶋)

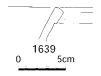
#### 土壙151 (第487・597図)

土壙150の約3m北西に位置している土壙である。平面形 はややいびつな円形を呈している。底面は西側へ緩やかに傾 斜している。規模は長軸95cm、短軸92cmを測る。埋土には炭 が含まれていた。

時期は古代に比定される。 (小嶋)



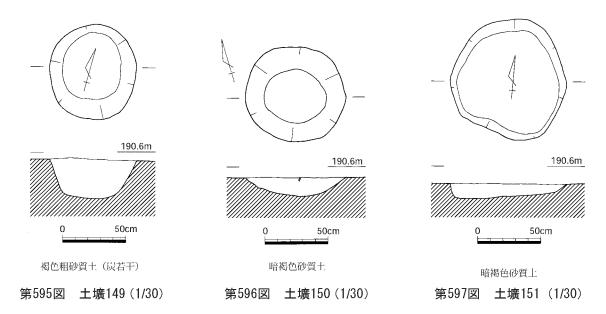
- 1 灰褐色粗砂(炭含)
- 2 暗黄褐色砂 (炭含)
- 3 暗褐色砂 (炭含)

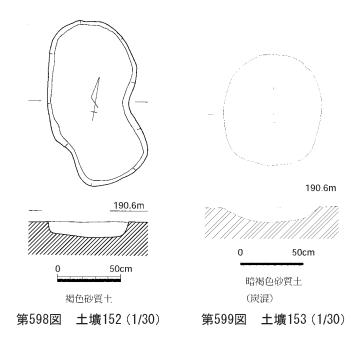


第594図 土壙148 (1/30) • 出土遺物(1/4)

# 土壙152 (第487・598図)

3804Ec区で検出された土壙である。平面形はいびつな楕円形を呈し、検出面から12cmの深さを





測る底面は水平である。規模は長軸 1.3m、短軸64cmである。

遺物は須恵器杯蓋のつまみ、土師器甕・小皿、鉄滓などが出土しており、これらから遺構の時期は古代に比定される。 (小嶋)

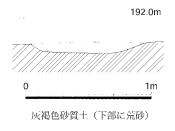
#### 土壙153 (第487・599図)

3804 E c 区で検出され、平面円 形を呈している土壙である。規模は 長軸89cm、短軸72cm、深さ11cmを 測る。

出土遺物は皆無であるが、検出状 況や埋土から、遺構の時期は古代の 範囲に収まる。 (小嶋)

## 9 溝

溝38 (第479·600図、図版118)



第600図 溝38 (1/30)

3 6 04 Dg区から 3 6 08 Di区にわたって、全長約50mを検出した 溝である。幅は、約2.4~0.5mで、深さは10cm前後であった。

埋土は灰褐色砂質土で、最下部には荒砂が堆積していた。

遺物はほとんど出土しなかったが、検出面の深さや埋土の状況から、時期は古代と考えている。

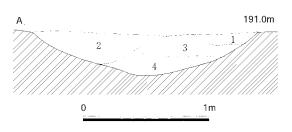
溝38・39と同じく、掘立柱建物群などの集落北東部を区画するために掘削された溝ではないかと考えている。 (平井)

溝39 (第479~481·484·601~608図、巻頭図版8、図版118·119·122)

遺跡の北東部緩斜面で検出された長大な溝で、検出全長はおよそ170mを測る。

南端の溝48近くでは、開放して検出不能となる。北半では溝40や溝41と重複する部分がある。溝の幅は1.8~2.2m前後、深さは10~30cm前後を測り、地点によりかなり差異がある。

断面形は凸レンズ形を示しているが、かなりの起伏が認められ、流水による影響を受けたことを示唆している。したがって最終的な流路は、幅約1m前後、深さ約20~30cm程度まで縮小して埋没したようである。



- 1 褐灰色粘質土
- 2 淡褐色弱粘質上
- 3 淡褐色砂質上
- 4 淡茶褐色弱粘質土

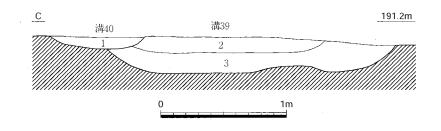
第601図 溝39上流部 (1/30)

埋積土は褐色系の色調を 示す砂質土を主体とし、比 較的多くの出土遺物が含ま れていた。須恵器や土師器 などの土器類のほか、鉄器 や鉄滓(製錬滓)も少なか らず含まれている。また、 C82~C90の陶馬・土馬の出土は、律令的な祭祀を物語る貴重な遺物として特筆される。

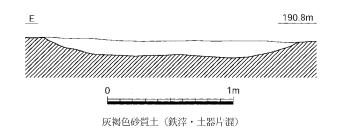
須恵器は小型の器種として、第603図の蓋1640~1642、杯1643~1652がある。杯は輪状の貼り付け高台を持つもの1647~1650とそうでないもの1643~1646・1651・1652があるが、後者の1651・1652は椀ともいうべき丸みをもった体部が観察される。

中型の須恵器として第604図の長頸壺1653、壺と考えられる1654~1656や甕1657、鉢1658などがある。1657はかなり大型の甕が想定され、第607図に示した出土遺物分布実測図の中で、C82の周囲で多数観察される甕体部片との関連に注意を払う必要がある。

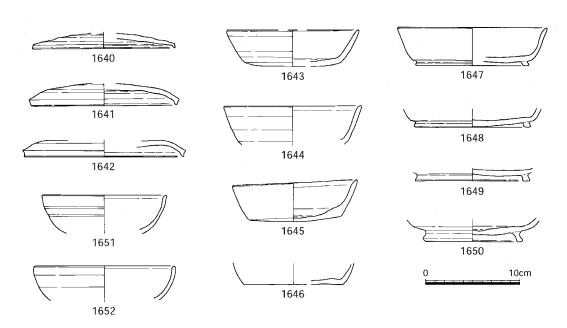
上師器は第604図に掲げた小型の杯1659~1663、盤1664、甕1665~1672のほか、第605図の鉢1673



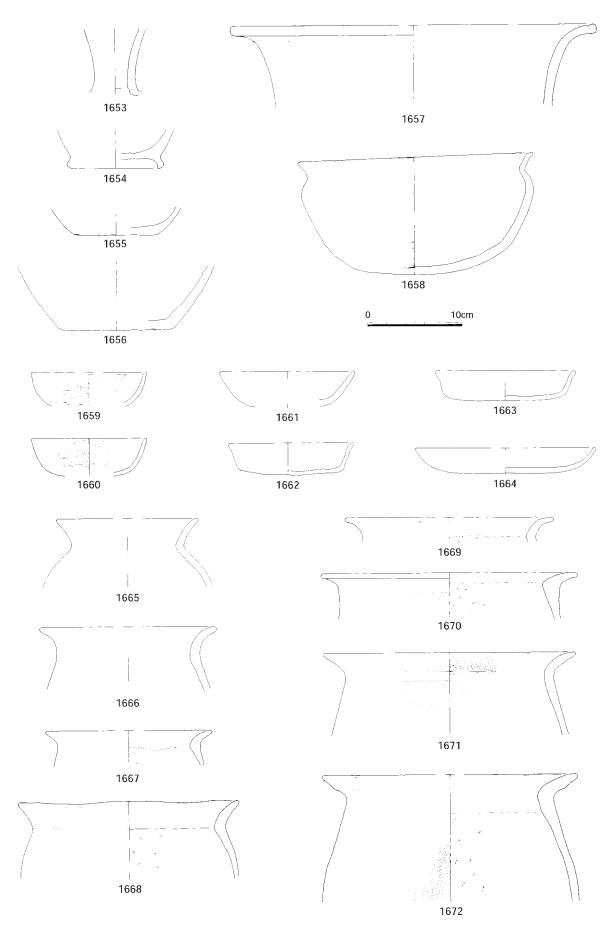
1 黒灰褐色砂質土(2~3㎝の礫混) 2 灰褐色砂質土 3 暗灰褐色砂質土



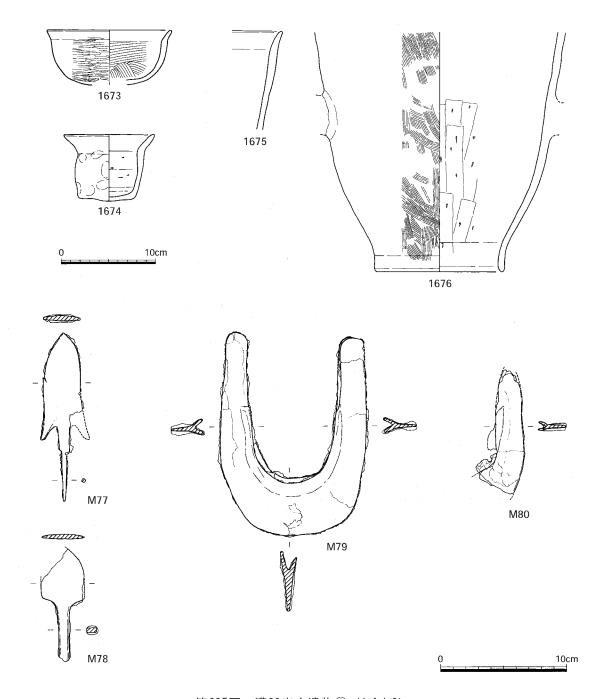
第602図 溝39中流部・下流部 (1/30)



第603図 溝39出土遺物① (1/4)



第604図 溝39出土遺物② (1/4)



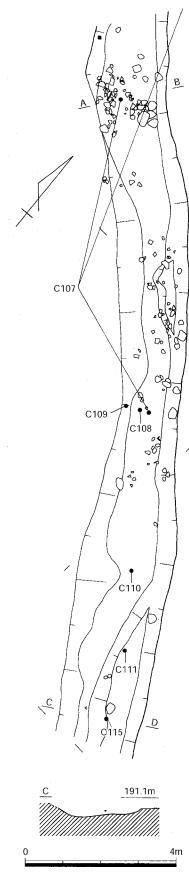
第605図 溝39出土遺物③ (1/4,1/3)

## ・1674、甑1675・1676がある。

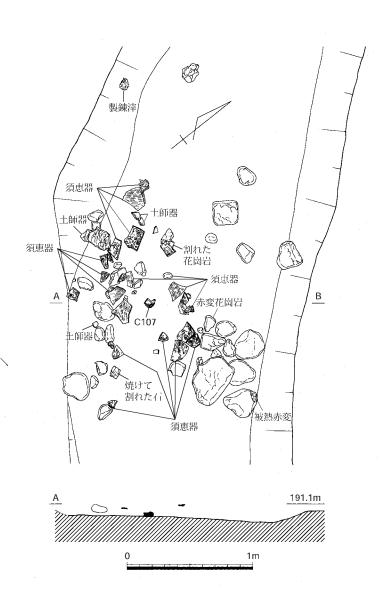
これらの土師器のうち、供膳器種である杯と盤のすべてが、赤色顔料の塗彩が認められている点に 注意される。また、1673にも赤色塗彩が認められる。

鉄製品としては武器として鏃M77・78と農具である鋤先M79・80がある。前者はやや大振りな鏃身と茎の間に頸部が作り出される。鏃身の大きさに比べると茎は短く、古墳時代のものとは異なり、前述の土器に伴う時期に比定されるだろう。M78には頸部ぎはなく、茎は下半を欠失している。

M79はほぼ全形が残るU字形を示す鋤先で、約190gを量る。木製の柄に装着するために、内側にはV字形の刳り込みが作り出される。M80にも同様な特徴的な形状を観察することができる。



第606図 溝39陶馬·土馬片 分布状況 (1/100)

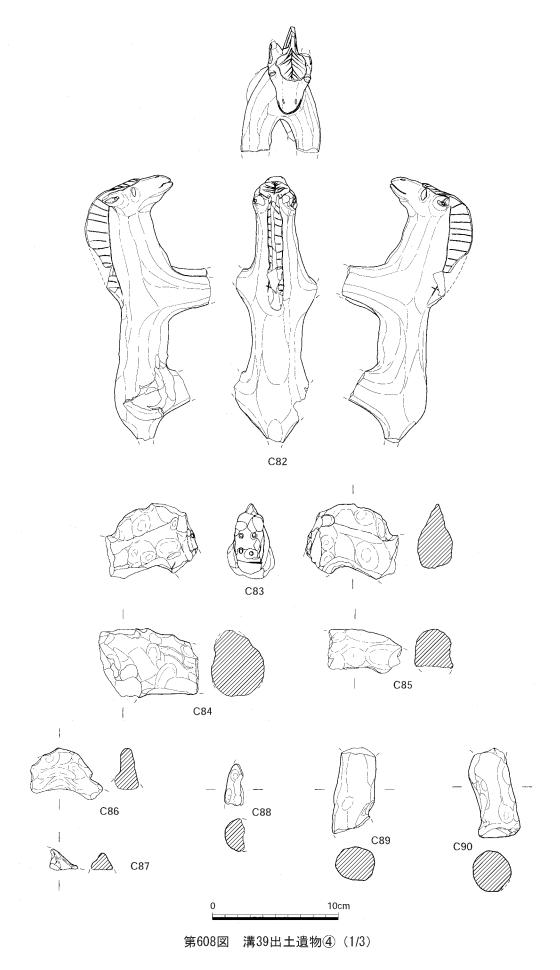


第607図 溝39陶馬頭部片出土地点周辺遺物分布状況(1/30)

第606図には、陶馬 C82と土馬 C83~90など出土位置を示した。 C82が原位置を保って出土したのも、周辺では須恵器・土師器など比較的多く認められたため、発掘作業については細心の注意を払って継続したことによる。当初から、溝内の遺物出土状態については実測図を残す方向で意思統一を図っていたため、C82はまず頭部、そして胴部、尻部の順に接合資料を原位置で確認することができた。

**C82**は須恵質のいわゆる陶馬で、四肢・尻尾と耳や鬣の一部を打ち割られて失っているが、頭部の細部は大変精緻に製作されている。鬣・目元・口元を箆状の工具を巧みに使って表現しており、素朴な表情に古代人の真摯な祈りや願いが込められているようである。

C83は、土師質の土馬の頭部片であるがC82に比べると、作

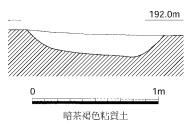


りはかなり粗雑である。ほかに、脚部の破片あるいは、胴部と思われる破片が出土している。

溝39は、建物群などの古代遺構の北東縁辺の、区画溝のような性格も想定される。人為的に掘開された確証はないが、付近で陶馬や土馬を使った祭祀行為が行われた点で重要な遺構である。 (岡田) 溝40 (第479・480・609・610図、図版118・123)

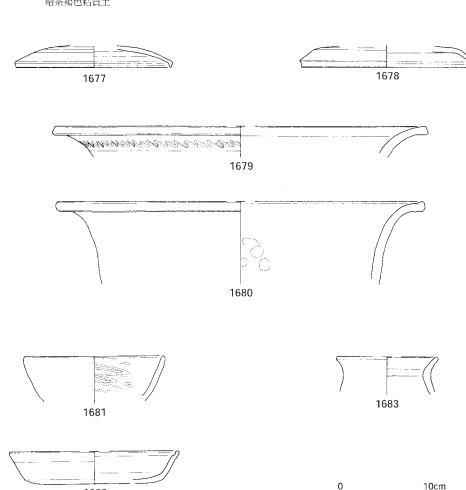
3606 Dh区から3703 Ea区の間に検出した溝である。全長約80mを検出しており、幅は約50~100cmで、深さは15cm前後残存していた。平面的には溝38と重なるように検出しており、切り合い関係は、溝38を切っていることが確認できた。

出上遺物としては、須恵器、上師器、鉄器、上製品がある。須恵器はいずれも小片で、1677・1678 は杯蓋である。1679・1680は甕の口縁部である。1679の頸部外面には波状文が施されている。1680は 溝39出土の1657と類似している。1681~1683の土師器も小片で、いずれも赤色顔料(ベンガラか)が

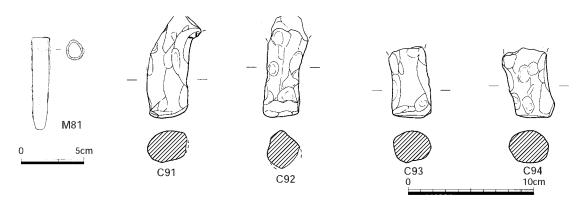


塗布されているのが特徴である。M81は用途不詳の鉄製品で石 突であろうか。C91~94は形状・調整から判断して土馬の脚と 考えている。

これらの出土遺物は、検出状況から判断するならば、溝38出 土遺物と一連の遺物として取り扱うべきものと考えられる。時 期は奈良時代であろう。 (平井)



第609図 溝40(1/30)・出土遺物①(1/4)



第610図 溝40出土遺物② (1/3)

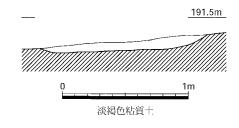
#### 溝41 (第479·611図)

3 6 09 Dj区において検出した溝で、幅1.3m前後、深さは約10cm残存していたのみである。長さは約10m検出し、弧状を呈していた。

遺物は殆ど出土しなかったが、埋土の状況などから時期は古代ではないかと考えている。 (平井) **溝42** (第479~481·612図)

3700Dj区から3701Ea区にかけて検出した溝である。幅は最大で3.5m、深さは約40cm残存していた。断面は浅い皿形であった。埋土は三層に分離でき、一度に埋没したとは考えにくい。

遺物は殆ど出土しなかったが、埋土や溝38・39と並行 していることから、時期は古代と考えている。 (平井)



第611図 溝41 (1/30)

## **溝43** (第481·613図)

3702 E b 区から3706 E b 区にかけて検出した溝で、全長約40mを検出した。 最大幅約1m、深さ約25cm が残存していた。断面形は 椀形で、埋土は一層のみで あった。

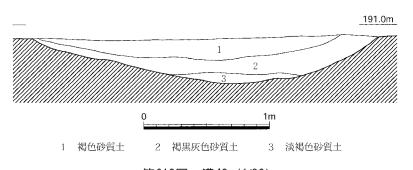
遺物は殆ど出土しなかったが、埋土の状況などから 時期は古代と考えている。

## (平井)

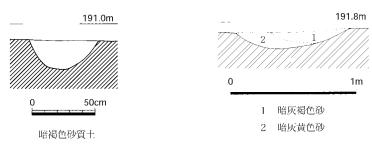
#### 溝44 (第482 · 614図)

掘立柱建物12の西約4m で検出された、L字形の平 面形を示す。

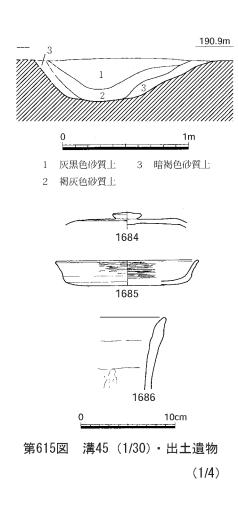
幅約90cm、深さ約10数cm、



第612図 溝42 (1/30)



第613図 溝43 (1/30) 第614図 溝44 (1/30)



検出全長約9.5mを測る。掘立柱建物の片側を囲む溝のような印象を与えるが、柱穴は付近で検出されなかった。 出土遺物は認められない。 (岡田)

#### **溝45** (第483·615図、図版120)

3803Dg区から検出された南方向に延びる溝であるが、南端は後世の削平を受け明らかでない。溝は幅約1.4m、深さ約35を測り、断面は緩く逆台形状に広がる。埋上はやや粘性をおびた砂質上であった。遺物は須恵器蓋1684、土師器杯1685・甑1686、鉄滓290gなどが出土した。遺物は奈良時代の範疇のものと考える。(江見)

#### **溝46** (第484·616図)

掘立柱建物34の身舎中央部で検出された、ほぼ南北方 向の浅い溝である。

最大幅約85cm、深さ約10cm前後を測り、凸レンズ形の 断面形を示す。埋積土は灰褐色粘質土で、出土遺物を含 まない。 (岡田)

#### **溝47** (第484·617図)

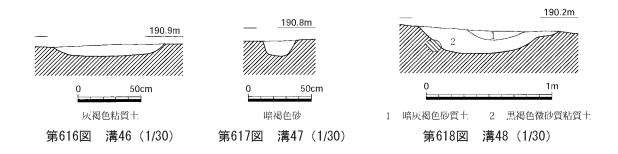
掘立柱建物37の南西方で検出された南北方向の溝である。検出全長約5m、幅約25cm、深さ約10cmを測り、逆台形の断面形を示す。

完結した区画溝と考えられるが、出土遺物は認められない。

(岡田)

#### 溝48 (第484・618図)

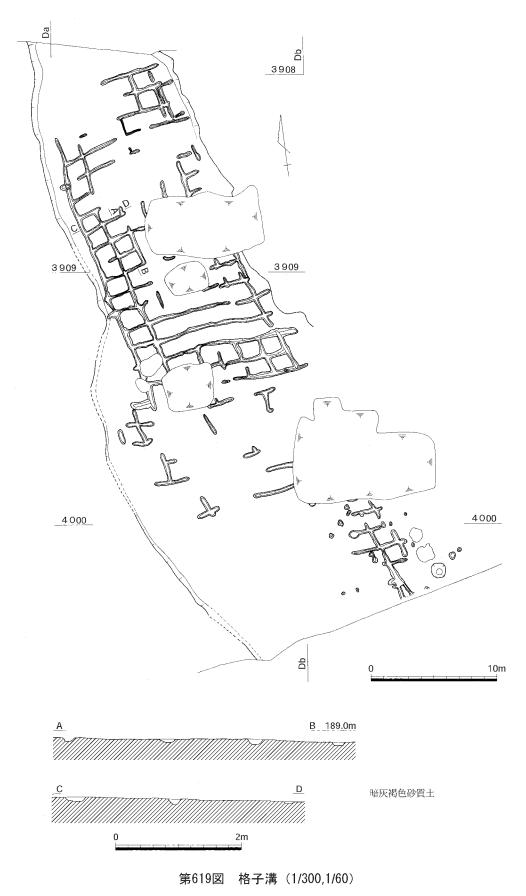
遺跡の北東部、溝39が消滅するあたりで検出された。位置的には溝39の支流のようにみえるが、出土遺物は皆無でしかも埋積土も異なる。検出全長はおよそ30mを測り、北から南にかけて溝幅が広くなり、幅1.1m、深さ20cm前後を測る。 (岡田)



## 10 格子溝 (第488·619図、図版120)

遺跡中央部の南西に位置する。東西に12~20mの幅のたわみ状地形のなかに幅8~20cmほどの浅い溝を東西、南北方向に掘り込んでいた。水田や畑など何らかの耕作痕と考えられる群である。南北45mほどにわたって検出したが、それ以北、以南では確認できていない。これは、縄文時代の河道4がこ

のあたりで深く抉れ込んでおり、古代においても周囲より低い地形を呈していたためと思われる。須 恵器甕片が出土したのみであるが、包含層中の土器から、時期は奈良時代とみられる。 (弘田)



-407 -



第620図 土器溜まり2(1/60)・出土遺物①(1/4)

## 12 遺構に伴わない遺物

#### 一括出土鉄鎌 (第622図、図版123)

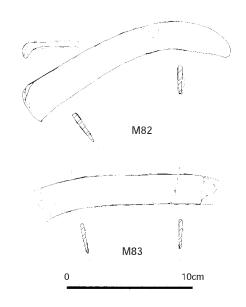
遺跡中央部の包含層から出土した。鉄鎌M84・M85は、中ほどで折り曲げられていたため、出土時点では4点の鉄鎌が銹着した状態と理解していたが、整理段階で折り曲げられた事実が判明した。2点の鉄鎌は、刃部が形成されているため、製品として使用・研磨されたことが推察される。硬い鉄鎌を、折り曲げる行為については、破棄あるいは祭祀目的か溶解して再利用を意図した可能性もある。(岡田)

#### **土器・硯** (第623·624図、図版123)

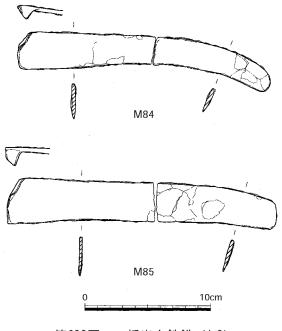
ここでは包含層から出土した古代の土器と硯を紹介するが、建物を構成できなかった柱穴出土の土器も合わせて掲載する。1694~1728は須恵器、1729~1735が土師器、C95~98は須恵器の硯である。

1694~1702は蓋で、口縁部の形態に、外反させた後に先端を摘み出すもの(1698)と、単純に端部を摘み出すもの(1695)の2種がみられる。つまみの形態は3種あり、中央が窪むもの(1694)、宝珠形のもの(1698)、扁平な宝珠形のもの(1695)である。

1703~1712・1714~1720・1729~1731は杯である。高台をもつものと、もたないものに大別される。高台の形態ではやや長くて踏ん張るもの(1703)、短く踏ん張るもの(1706)、短く垂下するもの(1708)に分けられる。高台をもたないものの底部は平坦なものがほとんどだが、1719は凸面を呈している。1720の底面には糸切り痕跡が認められ、1731の底面には板目の圧痕が残る。1717の底部内面には竹管文がみられる。



第621図 土器溜まり2出土遺物② (1/3)



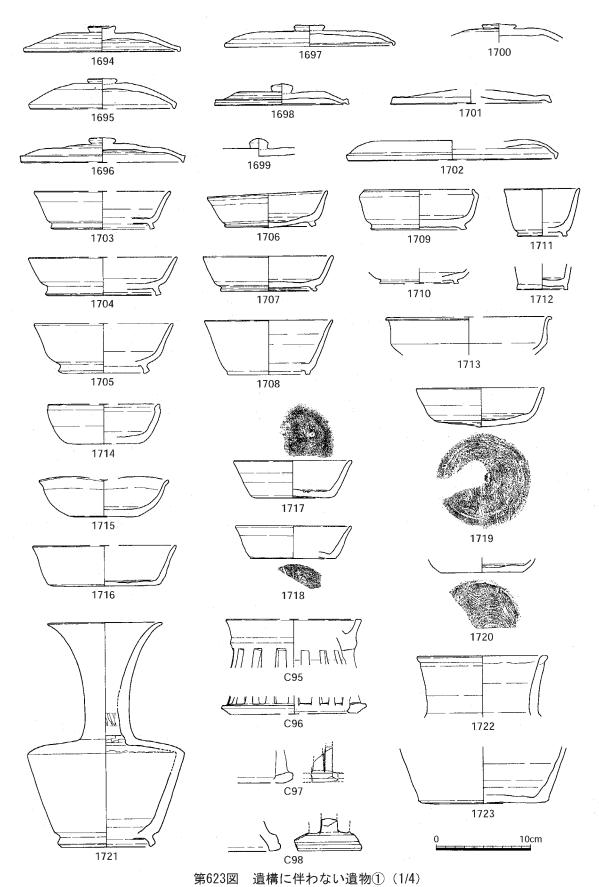
第622図 一括出土鉄鎌(1/3)

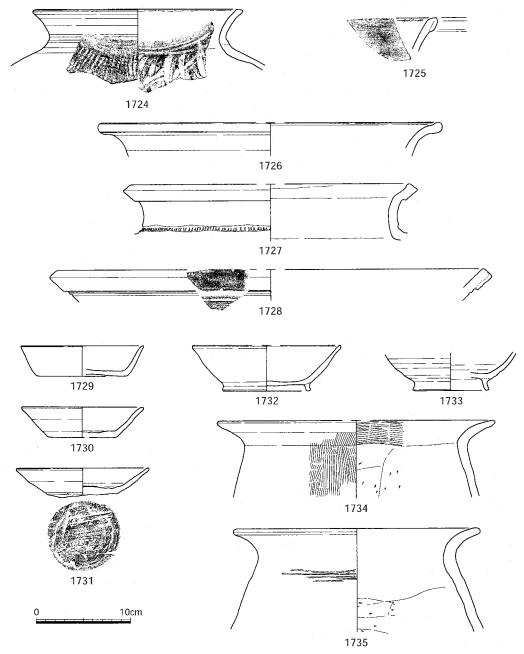
1713・1732・1733は椀で、1713は稜椀と呼ばれる。1732には赤色顔料がわずかに認められる。 1721は長頸壺である。肩部の張りは鋭角的で、高台は踏ん張り気味になる。1722・1723は壺か。

1724~1728・1734・1735は甕である。土師器の口縁部は丸く収めているが、須恵器の口縁部には変化が多く、直口で端面をもつもの(1724)、外面を丸く肥厚させるもの(1725)、上方へ肥厚させるもの(1726)、肥厚部が帯状を呈するもの(1727・1728)がみられる。

年代的には、1694~1697・1703~1705・1713・1721・1724~1726・1734・1735が奈良時代前半以前、1698・1701・1702・1706~1708・1711・1712・1716~1719・1722・1723・1727・1728・1729は奈良時代後半、1709・1714・1730~1733は平安時代で、1731や1733などはその後半のものとみられる。

硯は円面硯で、脚部に方形の透かし孔を巡らせる。脚端部の形状では突帯を巡らせるもの(C96・ 97) と、段状に屈折させるもの(C98)がある。いずれも奈良時代のものと考えたい。 (岡本)





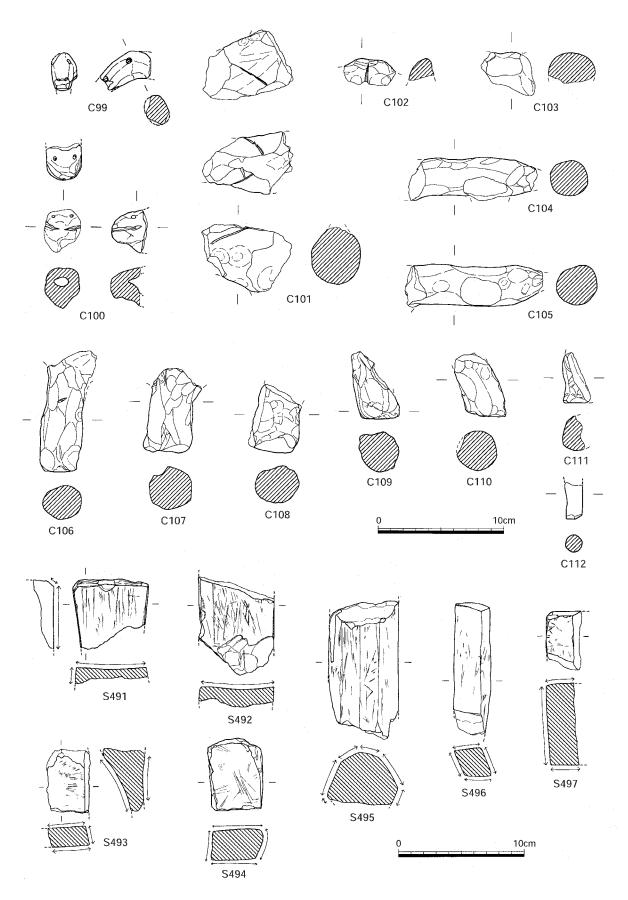
第624図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

### 土馬 (第625図、図版124)

C99・100は頭部の破片で、C99には眼と鼻孔が刺突で、C100では刺突の鼻孔と口を篦描き線で表現している。小形品で、C100は中空のようである。C101・102は頸部の破片で、C102はたてがみ部分のようで、C101はたてがみ部分が剥離している。ともに篦で沈線が刻まれ、C101では手綱のようにも見える。C103~105は胴部の破片、C106~112は脚部の破片である。円筒形の胴部に円柱状の脚を単純に接合したものとみられ、写実性には欠ける。C112は小形品で、C99・100と組み合うか。 (岡本)

#### 砥石 (第625図、図版124)

いずれも包含層から出土したもので、厳密には古代のものと確定する根拠が不十分であるが、出土 地区はほぼ古代の遺構しか存在しないことから、ここで紹介する。いずれも角柱状を呈し、側面のす べてを研磨に使用するが、**S493**などは一面がよく使用され、おおきく窪んでいる。 (岡本)



第625図 遺構に伴わない遺物③ (1/3)

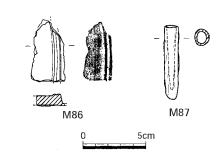
#### 金属器 (第626図、図版124)

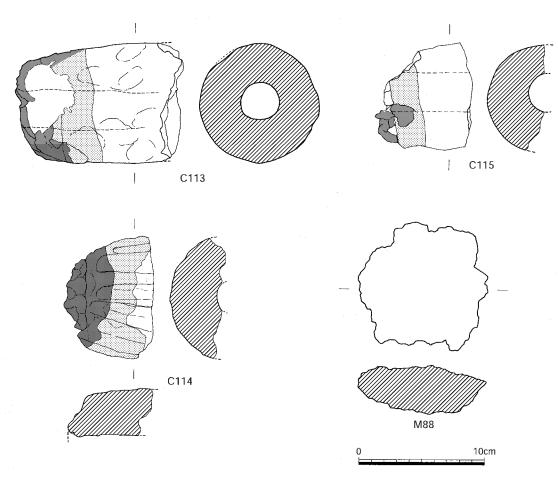
M86は、長さ5cm、幅2.2cm、厚さ9mm、重さ36gの破片で遺跡中央部の古代包含層から出土した。 周縁部に緩やかな弧を描く圏線が鋳出され、精緻な鋳造技術をかいま見ることができる。形状から、 鏡片の可能性は乏しく、仏具あるいは仏塔に関わる扁平な銅製品と推察される。

M87は鉄製品である。直径1.2cm、長さ5.85cmの円筒形を呈し、一端は円頭におさめる。もう一端からは穿孔がなされるが、先細りとなり、貫通しない。鉄板を曲げて接合したような痕跡はなく、鋳造製品とみられる。石突きのようなものか。溝40からも同製品が出土している。 (岡田・岡本)

### 羽口・鉄滓 (第626図、図版124)

竪穴住居からも出土したが、古代の遺構が集中した地区の包含層から出土したものをここに掲載する。 C113の鞴の羽口は外径が9.5cm、孔径は3cmを測る。先端から6cmまでは黒色から灰色を呈し、先端部にはガラス状の熔融物が付着する。 M88は鉄滓で、その形状から鍛冶炉の椀形滓とみられる。長径10.35cm、重さ527gを測る。 (岡本)





第626図 遺構に伴わない遺物④ (1/3)

## 第7節 中世の遺構と遺物

## 1 概要

久田原遺跡の中世遺構は、耕作土直下の砂礫層から検出される。この砂礫層は、弥生時代後期から 古墳時代初頭と考えられる吉井川の洪水層で、深いところでは2m以上の堆積がみられる。この砂礫 層上面に古墳時代中頃から近世に至るまでの遺構が存在している。

中世に属する主な遺構は、掘立柱建物群、製鉄関連の遺構、土壙墓、土壙、溝、落ち込み、窪地、 河道などである。

掘立柱建物は総計83棟あるが、大きくは北西部に集中する一群と、中央部の一群、南部の一群に分けられる。これらの建物群は、北に位置する夏栗遺跡、南西の久田堀ノ内遺跡などの中世遺跡群との関わり合いながら「久多庄」の中心部であったと想像できる。さらにこれらの中には、方位が異なる建物、完全に重複して建てられているもの、一部が重なるもの、軒が重なるものなどがあり何度かの立て替えがおこなわれている。掘立柱建物の大きさは、大きい建物では、桁行5間×梁行4間、床面積100㎡を越える建物が5棟、桁行2間×梁行1間、あるいは1間×1間の建物で床面積10㎡以下のものも6棟存在する。また庇あるいは縁を持つ建物も何棟かみられる。

柱穴列、掘立柱建物にまとまらないもの、掘立柱建物の一方を囲う塀状のものなどがみられる。

製鉄関連と考えられる遺構は、方形の竪穴状の遺構で、これまで県内では類例の知られていないものである。これに関連すると考えられる土壙も何基かみられる。

土壙墓は16基あり、人骨が残るものは別として、釘、刀・刀子・鏡など特徴的な副葬品を持つものを主体としている。

土壙は数多く検出されているが、掲載できたものは290基で総数の1/3以下である。その多くは、遺物を含まず時期確定に困難であったためでもある。これらの土壙の中には明らかに掘立柱建物と共存するものがある。

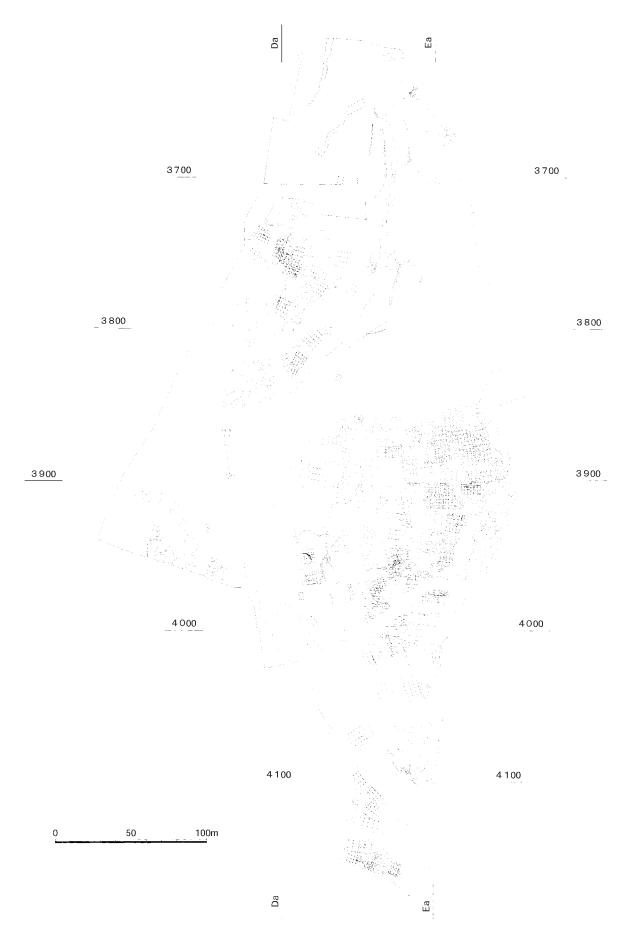
柱穴、建物、柱穴列にまとまらない柱穴が数多く検出され、中には遺物を含むものがある。

窪地、土壙にするには浅かったり、擂鉢状になっているものを窪地として扱った。

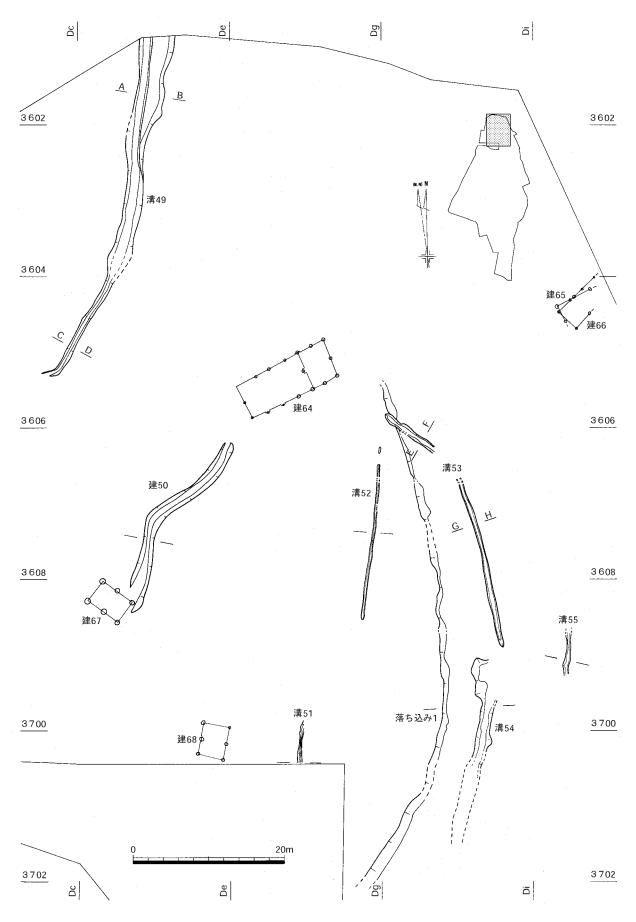
落ち込み、中世の段階で谷水などによって遺構面の砂層が削られている。特に遺跡東側部においては、谷から流れ出た水によって大きく削り取られている。

河道、遺跡北半では顕著でなかったが、南半においては北西から南東に流れる幅50~60m前後の河道がみられる。洪水等によって吉井川の本流から分かれたと考えられるもので、中世の段階においても周辺より一段低くなっていたものと思われる。中世でも後半と考えられる数棟の掘立柱建物を除外すれば、基本的に居住地としては利用されていなかったものと考えられる。

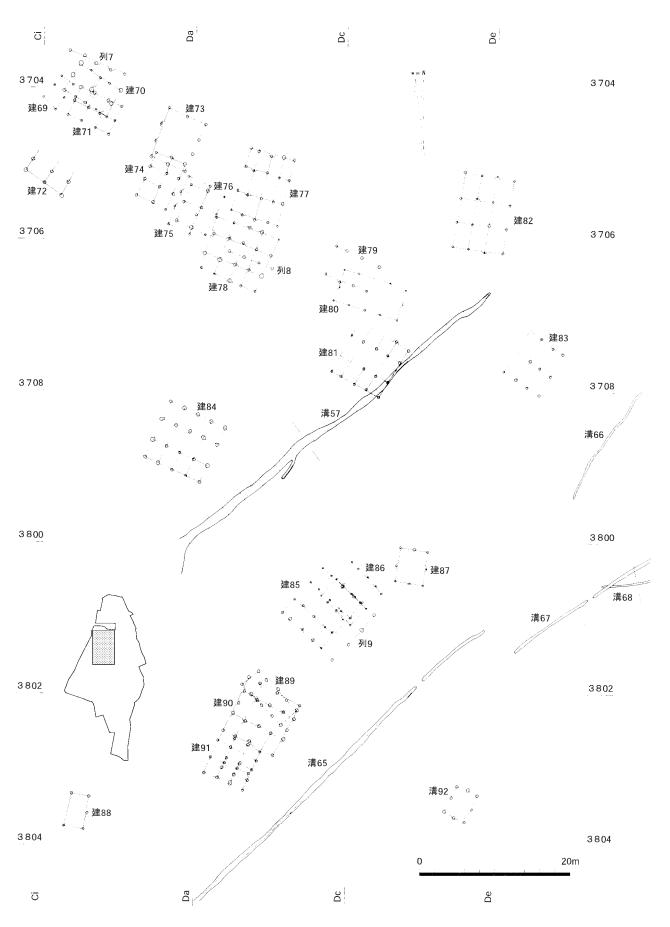
出土遺物については、在地産の土師質小皿・杯・鍋、瓦質鍋・羽釜、勝間田焼小皿・椀・捏鉢・壺・甕、備前焼壺・甕・擂鉢、亀山焼甕、東播産の捏鉢、瀬戸・美濃産の灰釉壺・卸皿・天目碗、輸入陶磁器の、青磁皿・椀、白磁碗、この遺跡を特徴付ける多種の鉄器類とともに、鞴・焼土塊などがみられる。また木器類は、砂質土層で残りは悪く椀に塗られたであろう漆の皮膜部分が土壌・柱穴などから断片的に出土している。 (伊藤)



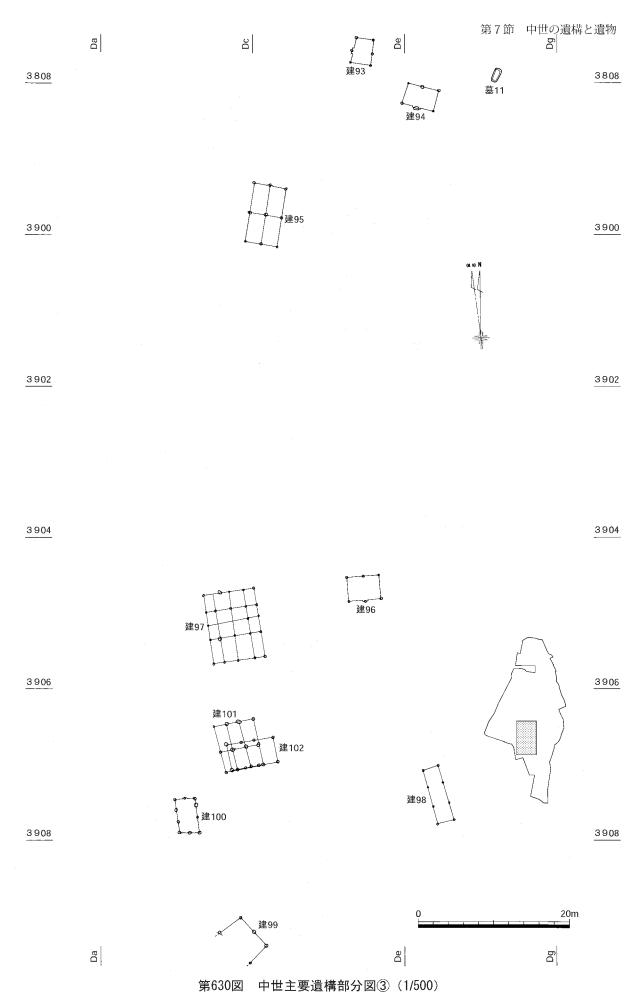
第627図 中世遺構全体図 (1/2,500)

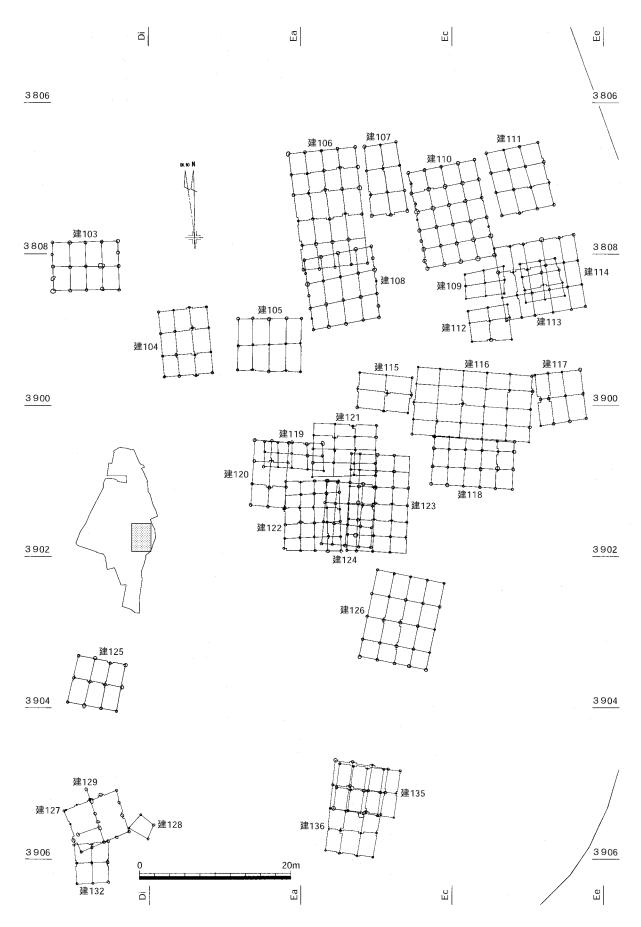


第628図 中世主要遺構部分図① (1/500)

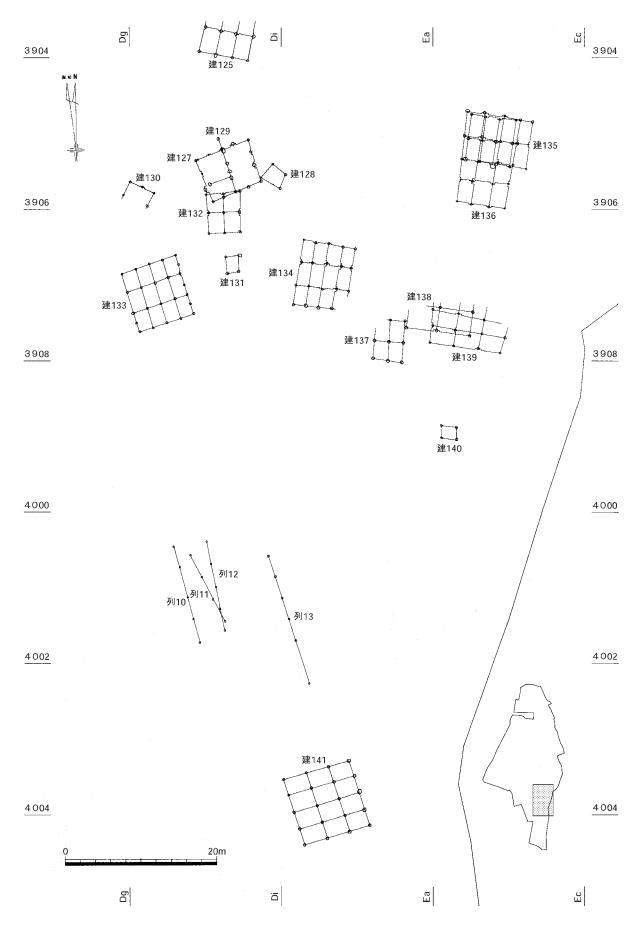


第629図 中世主要遺構部分図② (1/500)

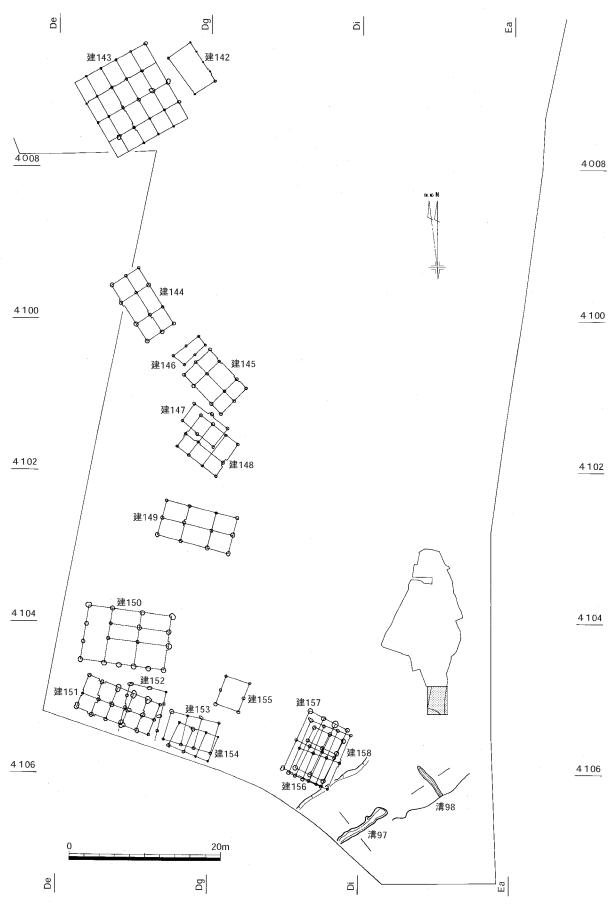




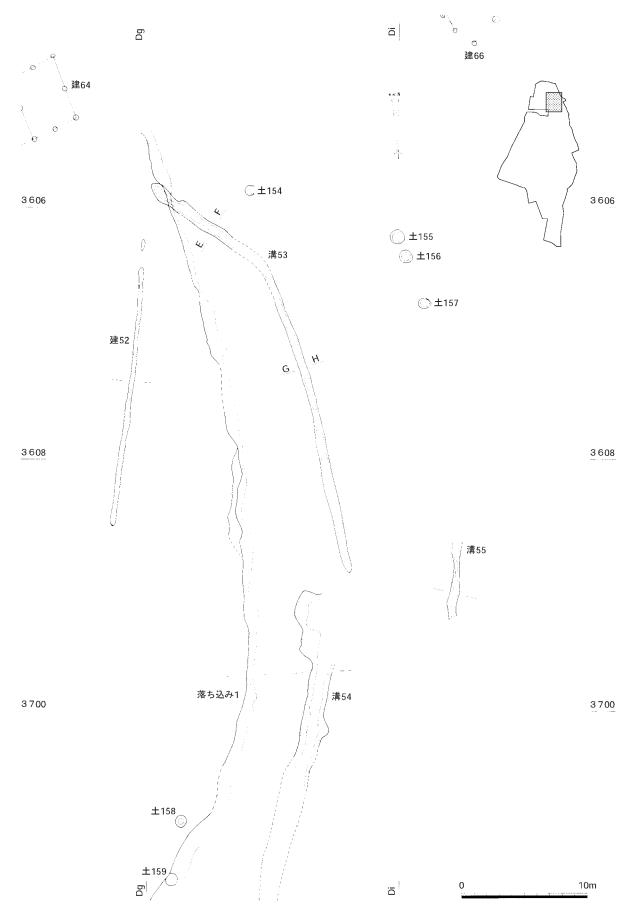
第631図 中世主要遺構部分図④ (1/500)



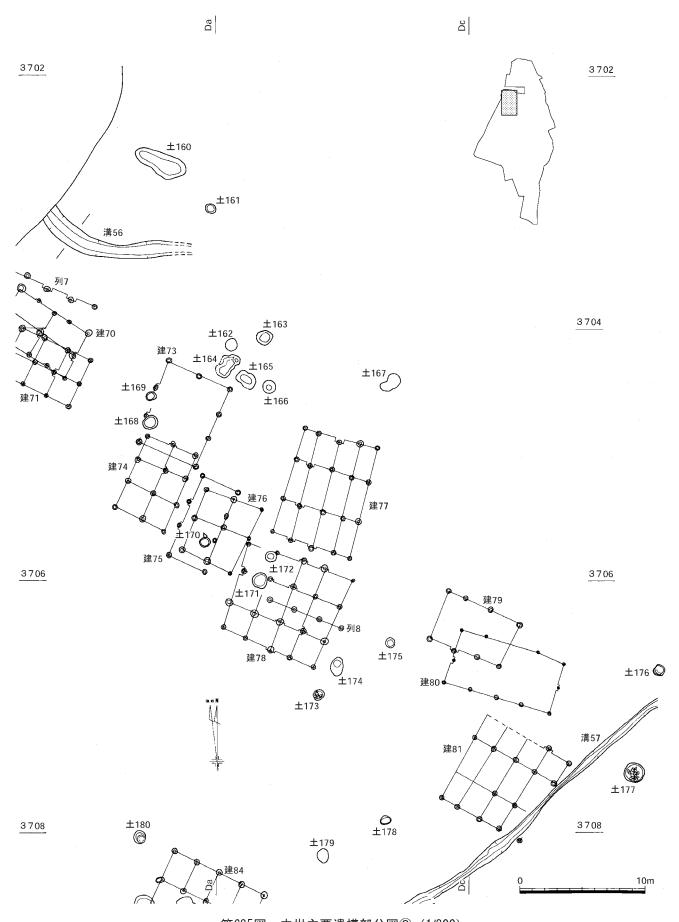
第632図 中世主要遺構部分図⑤ (1/500)



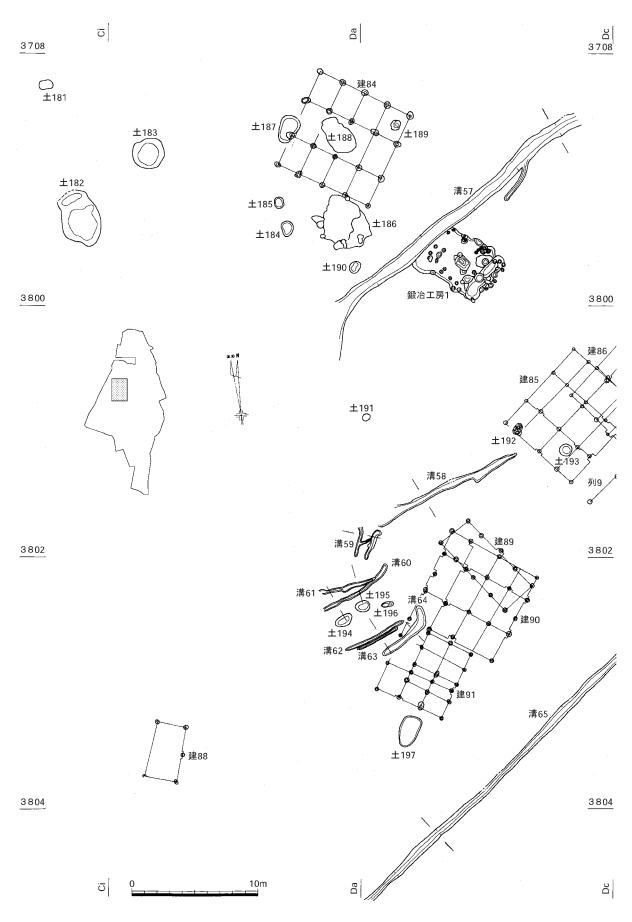
第633図 中世主要遺構部分図⑥ (1/500)



第634図 中世主要遺構部分図⑦ (1/300)



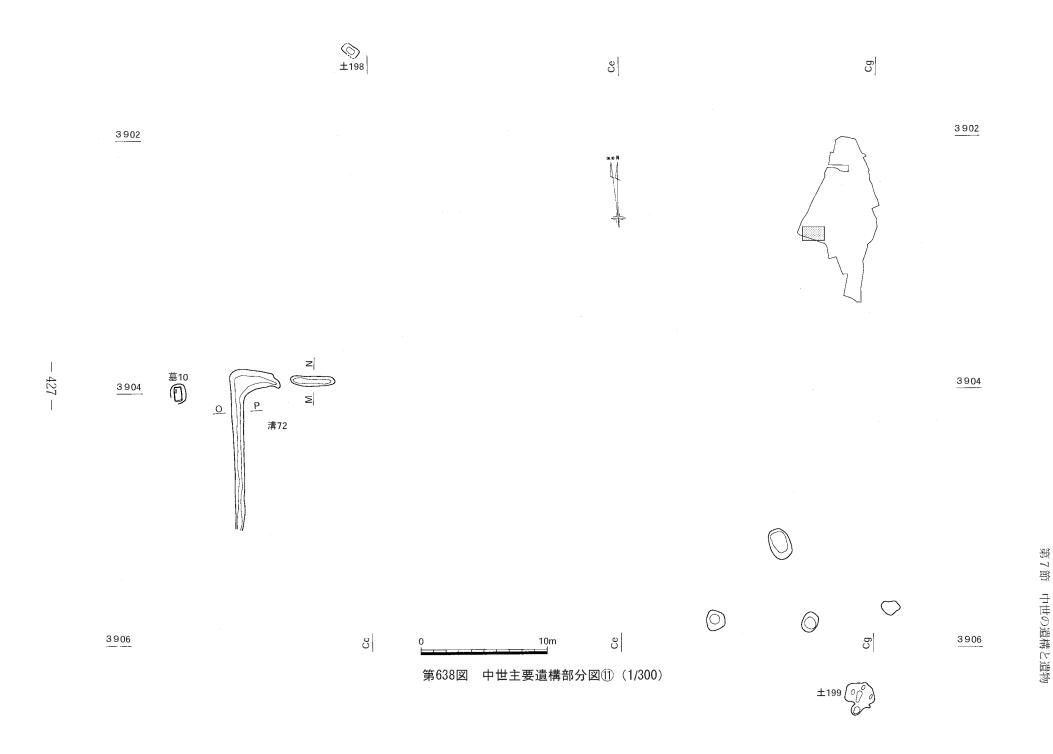
第635図 中世主要遺構部分図⑧ (1/300)

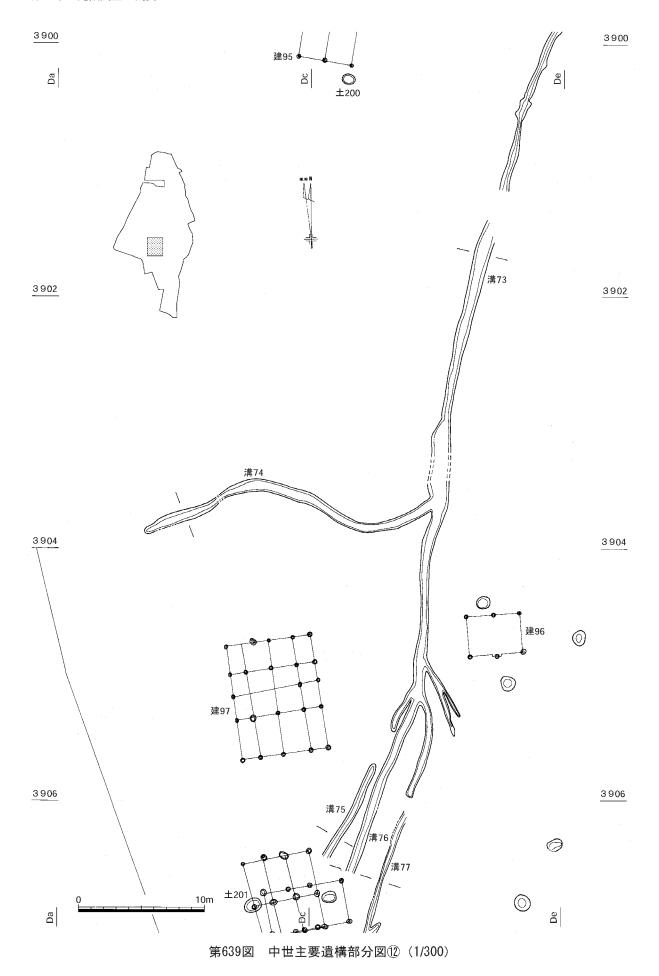


第636図 中世主要遺構部分図⑨ (1/300)

Dg Ea ō 3704 3704 3706 3706 3708 3708 10m Dg  $\bar{\Box}$ Ea

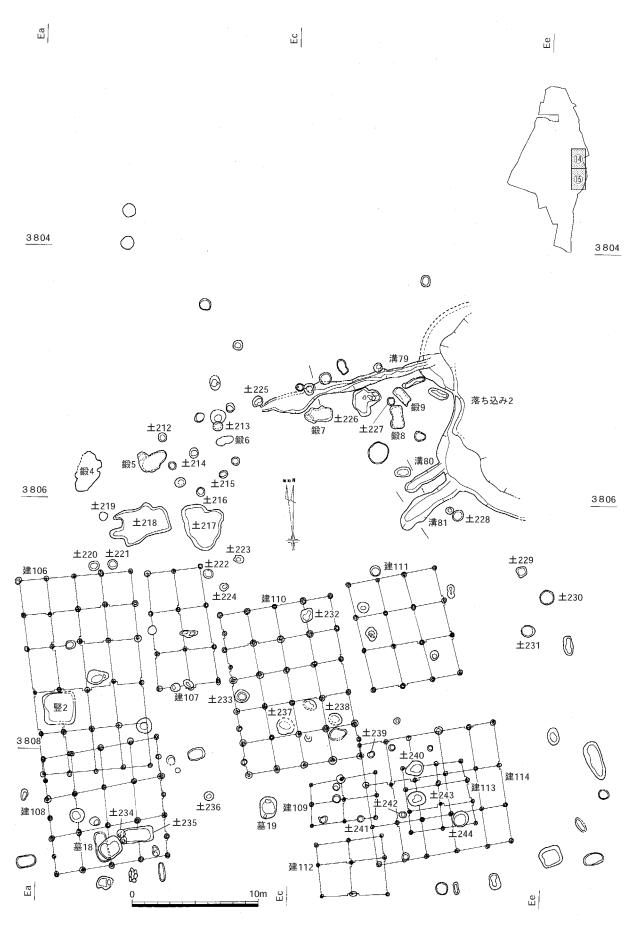
第637図 中世主要遺構部分図⑩ (1/300)



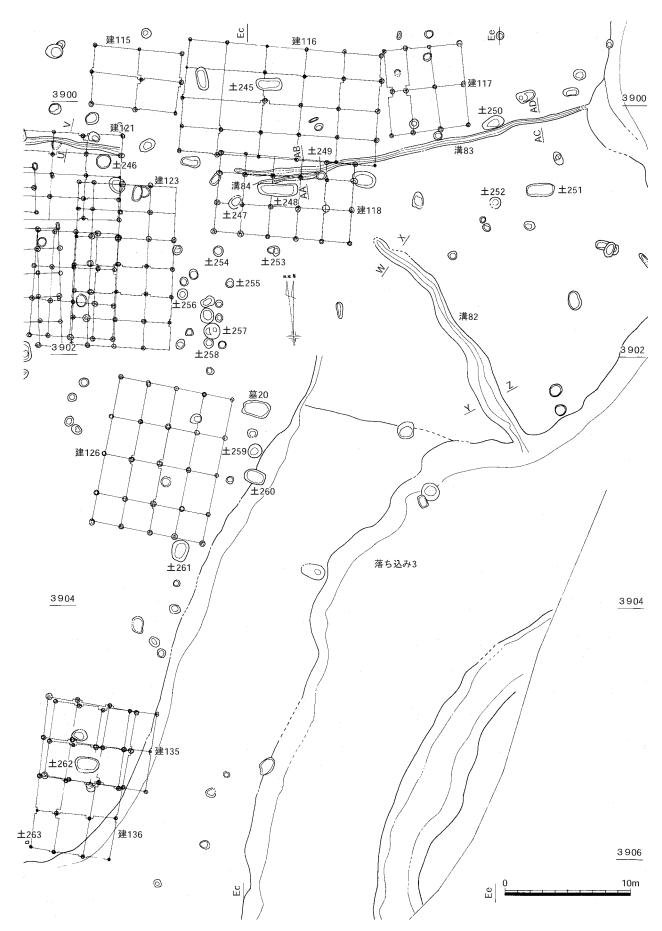




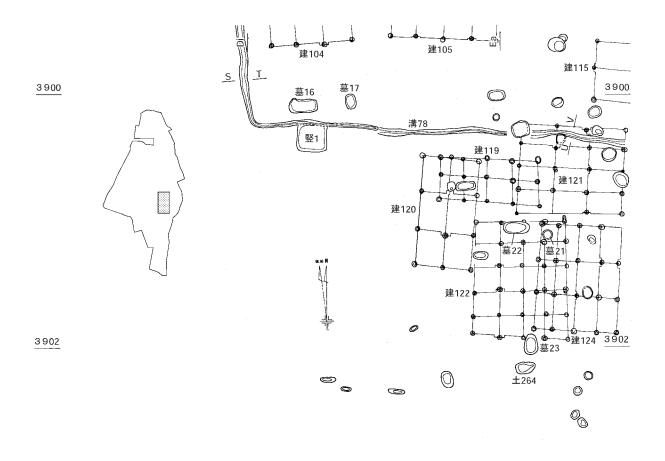
第640図 中世主要遺構部分図③ (1/300)

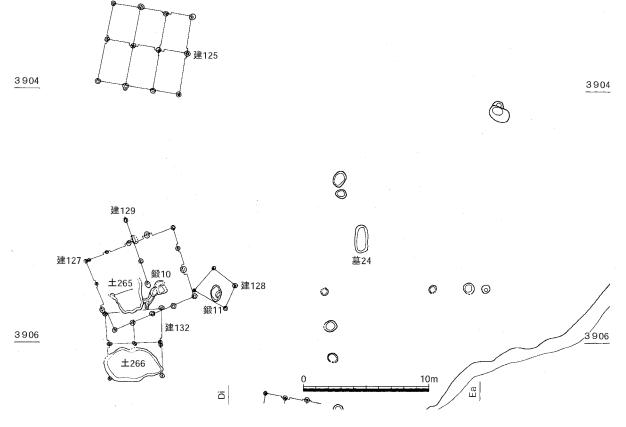


第641図 中世主要遺構部分図⑭ (1/300)

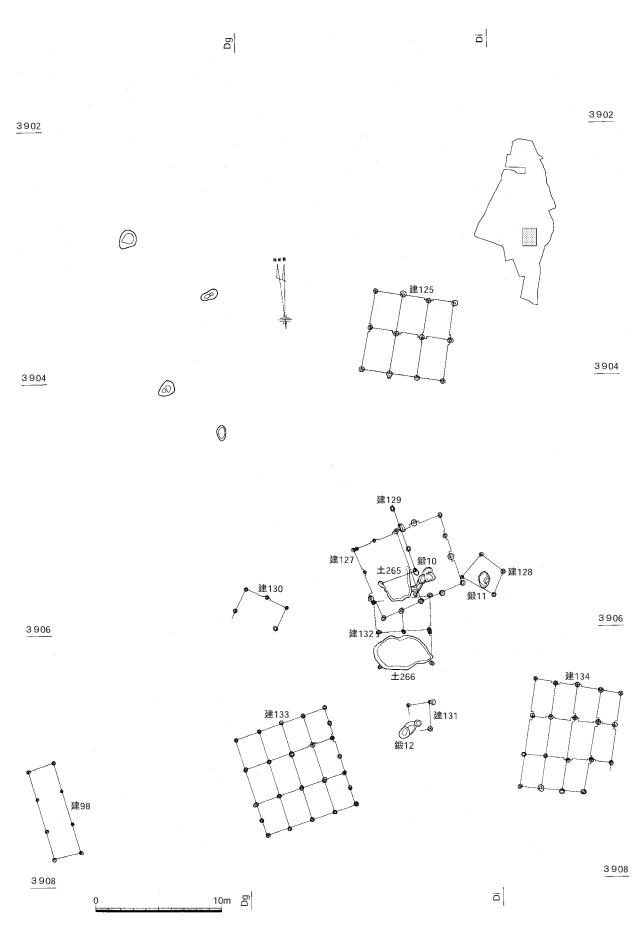


第642図 中世主要遺構部分図⑮ (1/300)

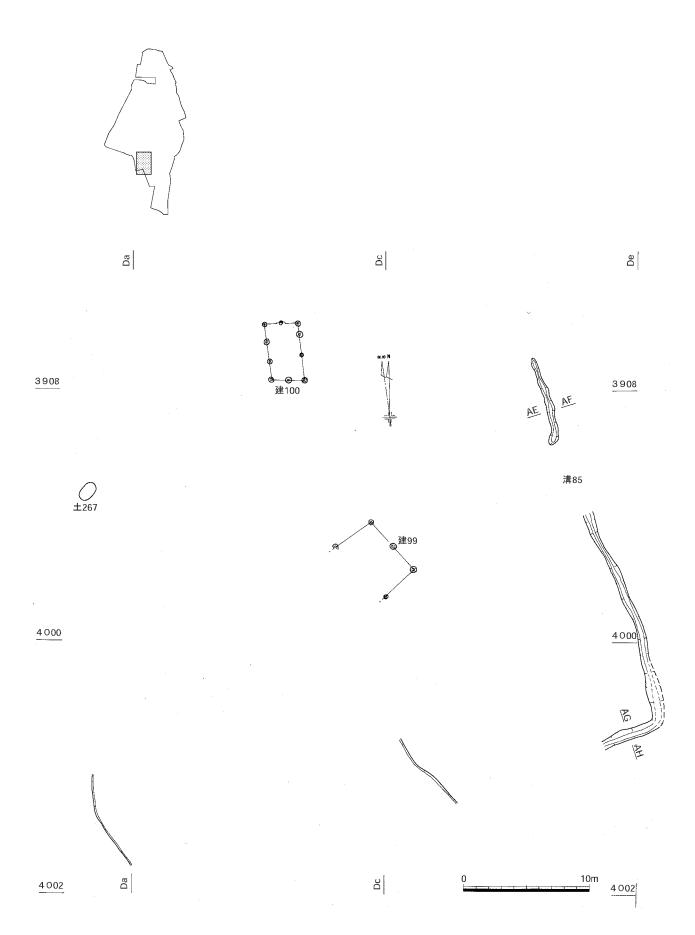




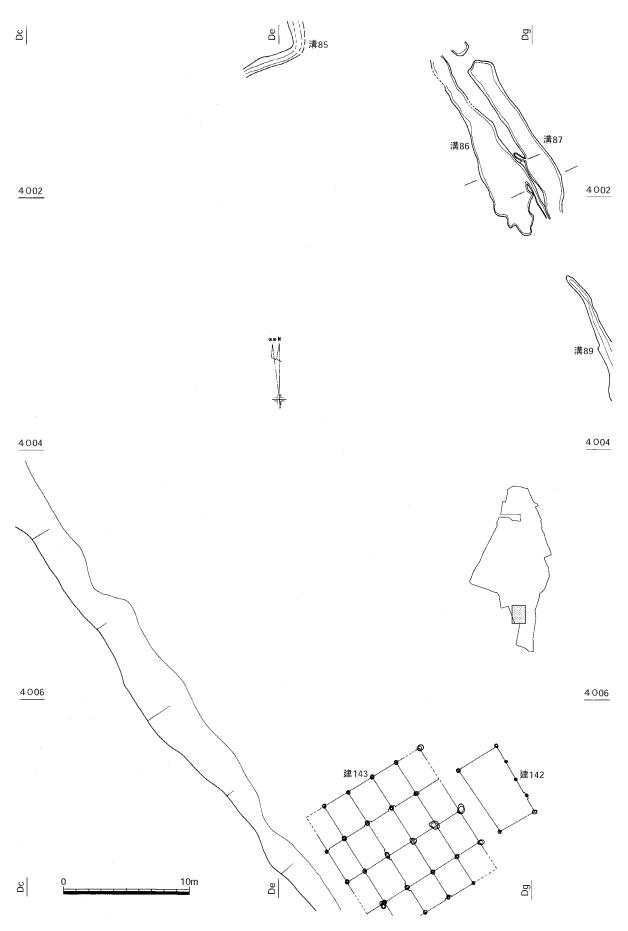
第643図 中世主要遺構部分図⑮ (1/300)



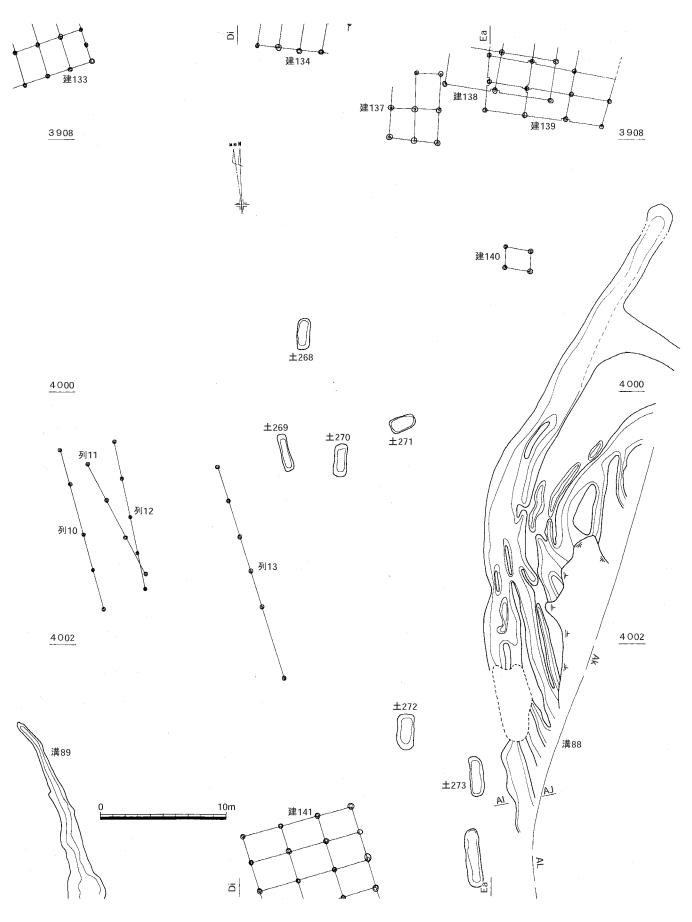
第644図 中世主要遺構部分図① (1/300)



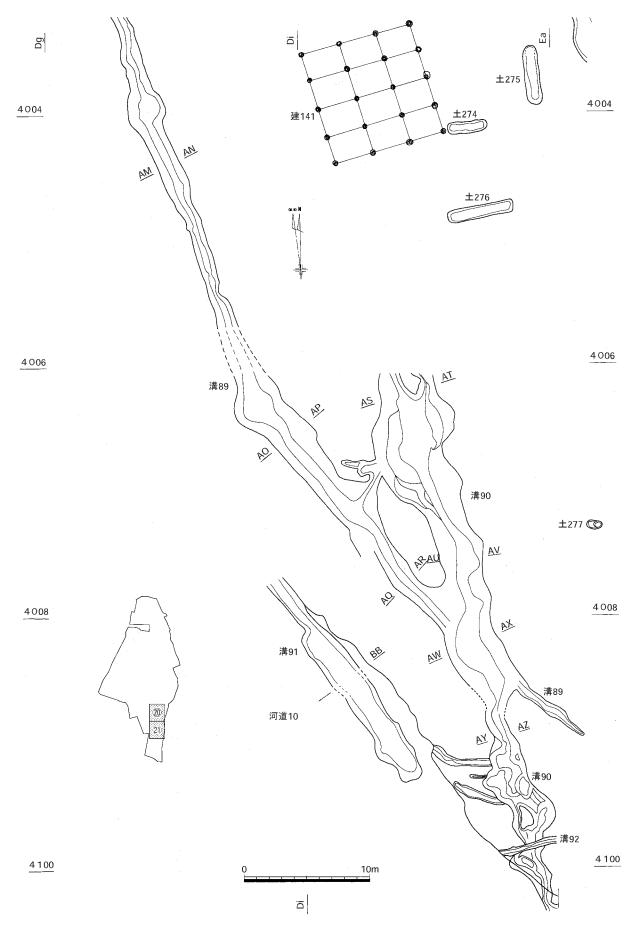
第645図 中世主要遺構部分図⑱ (1/300)



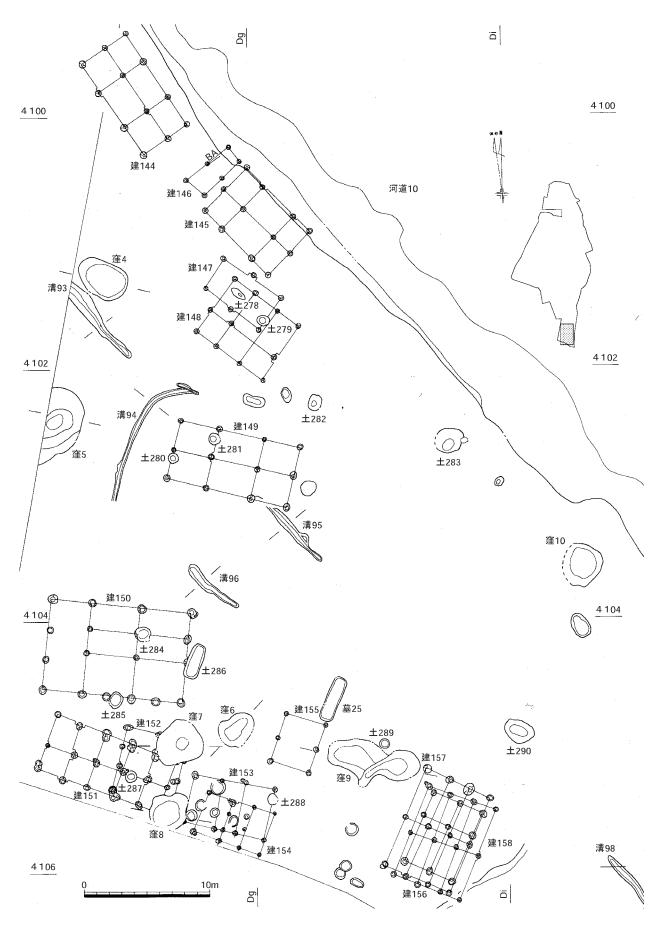
第646図 中世主要遺構部分図⑲ (1/300)



第647図 中世主要遺構部分図⑩ (1/300)



第648図 中世主要遺構部分図② (1/300)



第649図 中世主要遺構部分図②(1/300)

# 2 掘立柱建物

### 掘立柱建物64 (第628・650図、図版125)

3605De区から検出された6×2間の掘立柱建物である。北西隅の柱穴は、地形が低くなってい

たので存在しなかった。桁行 12.5 m、梁行4.65 mを測り、面積が61.7 m°で、棟方向はN-78°-Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.8~1.7 m、梁行2.65~2.25 mになっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈してしていた。

出土遺物としては P 11から 白磁碗の小破片1736が出土し ている。 (福田)

# 掘立柱建物65 (第628・

651図、図版125)

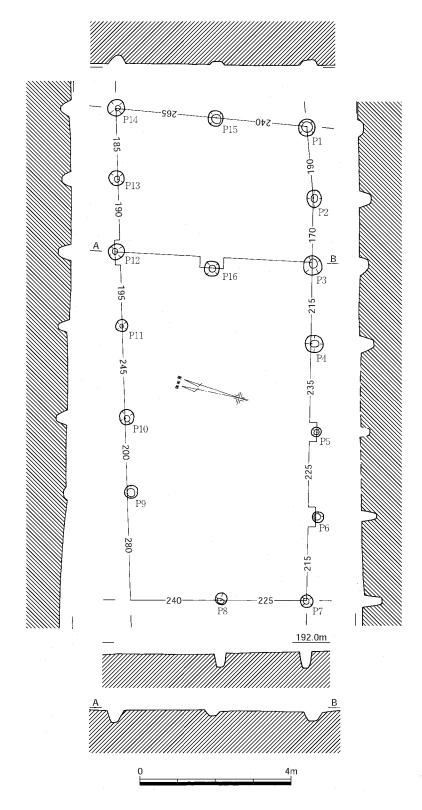
3604Di区に位置する。 柱穴は、人家の移転のため一部削平され、4本のみ確認できた。規模は、桁行2間以上、梁行1間以上で、東に広がるが、この部分は、調査時点では竹藪で、かつ夏栗遺跡に相当するため、調査は後年次対応となった。時期は中世と考えている。 (平井)

# 掘立柱建物66 (第628・

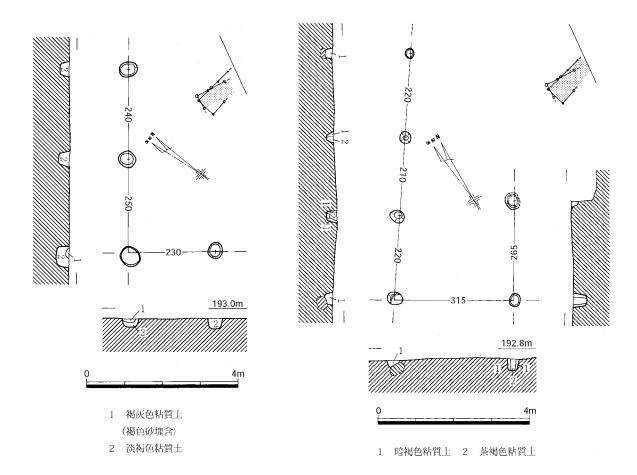
652図、図版125)

掘立柱建物65と重複する。 規模は、桁行3間以上、梁行

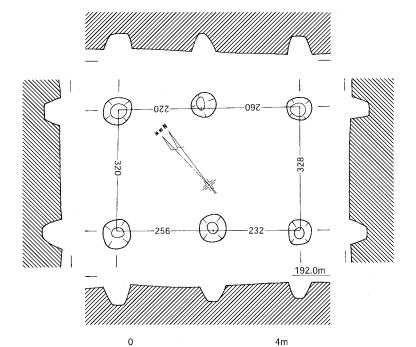




第650図 掘立柱建物64(1/100)・出土遺物(1/4)



第651図 掘立柱建物65 (1/100)



第653図 掘立柱建物67(1/100)

第652図 掘立柱建物66(1/100)

1間以上で、東部分は夏栗遺跡に相当するため、後年次対応となった。

掘立柱建物65・66は、地形 が久田原遺跡より一段高い位 置にあり、夏栗遺跡で検出し た建物群との関係で理解すべ きであろう。時期は中世と考 えている。 (平井)

## 掘立柱建物67 (第628·

653図、図版125)

 $3608 \, \mathrm{D}\, \mathrm{c}$ 区から検出された  $2\times1$  間の掘立柱建物で、北東側には溝52が存在した。桁行 $4.8\,\mathrm{m}$ 、梁行 $3.2\,\mathrm{m}\,\mathrm{e}$ 測り、面積が $15.7\,\mathrm{m}$ で、棟方向は $\mathrm{N}-47\,\mathrm{e}$ -Wを示していた。柱穴間

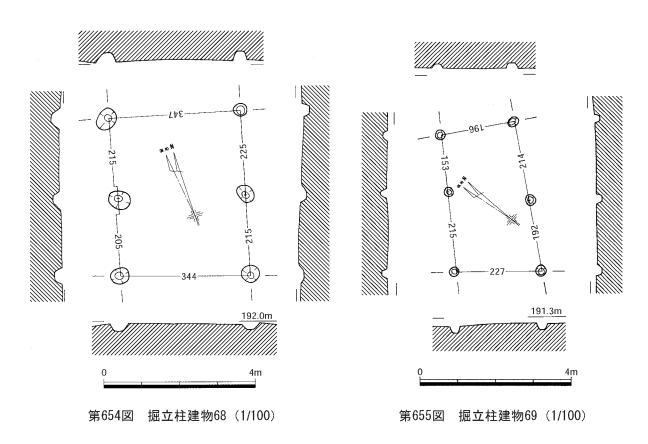
の距離は、桁行2.6~2.2m、梁行3.28~3.2mになっていた。柱穴の平面形は比較的規模が大きい円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。 (福田)

#### 掘立柱建物68 (第628・654図、図版126)

 $3700\,\mathrm{D}\,\mathrm{d}$ 区から検出された  $2\times1\,\mathrm{ll}$  の掘立柱建物である。桁行 $4.2\,\mathrm{m}$ 、梁行 $3.44\,\mathrm{m}$ を測り、面積が $14.9\,\mathrm{m}$ で、棟方向はN- $21\,\mathrm{s}$ -Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行 $2.25\,\mathrm{s}$ - $2.05\,\mathrm{m}$ 、梁行 $3.47\,\mathrm{s}$ - $3.44\,\mathrm{m}$ になっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。

#### 掘立柱建物69 (第629・655図、図版127)

 $3704\,\mathrm{C\,i}$ 区から検出された  $2\times1\,\mathrm{ll}$  の掘立柱建物である。桁行3.68m、梁行1.96mを測り、面積  $8.2\,\mathrm{m}$ で、棟方向はN-47°-Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.14~1.53m、梁行2.27~1.96mになっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。 (福田)

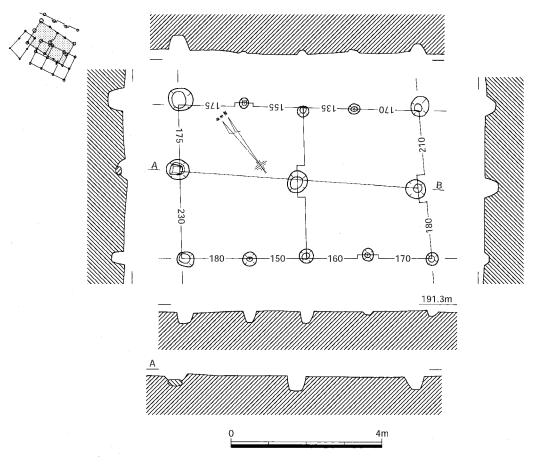


# 掘立柱建物70(第629・656図、図版127・128)

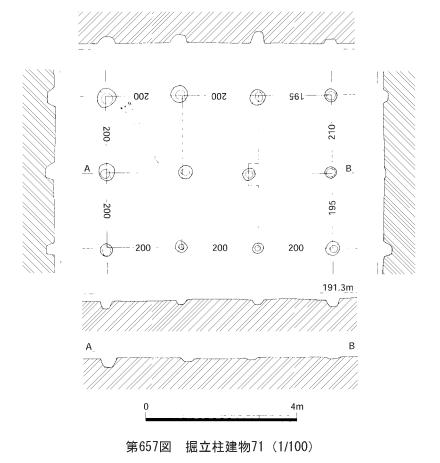
3704Ci区から検出された  $4\times2$ 間の掘立柱建物で、南西側が前述した掘立柱建物69と重複していた。桁行6.35m、梁行3.9mを測り、面積が25.7㎡で、棟方向はN-48°-Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行1.8~1.35m、梁行2.3~1.75mで、桁行の間の柱穴は規模がやや小さくなっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。

### 掘立柱建物71 (第629・657図、図版127・128)

3704Ci区から検出された  $3\times2$ 間の掘立柱建物で、北西側が前述した掘立柱建物70と重複していた。桁行5.95m、梁行 4 mを測り、面積が24.0㎡で、棟方向はN-57°-Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行 2 m~1.95m、梁行2.1m~1.95mで、南西側の桁行と北西側の梁行の柱間は、2 mに統つされていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。



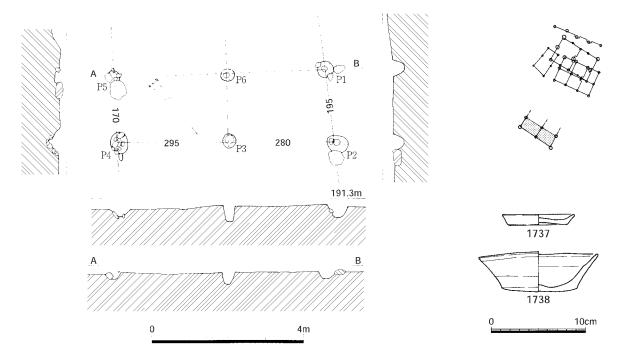
掘立柱建物70 (1/100) 第656図



掘立柱建物72(第629凶

·658図、図版128·175) 3 705 Ci区の北西に位 置する東西2間(5.75m)、 南北1間 (1.95m) 以上の 建物で、主軸はN-47°-Wと 掘立柱建物70にほぼ一致す る。

径35~58cm、深さ16~42 cmを測る。柱穴からは土師 器の杯1738・小皿1737が出 土しており、14世紀代の建 物と考えられる。 (亀山)

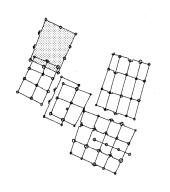


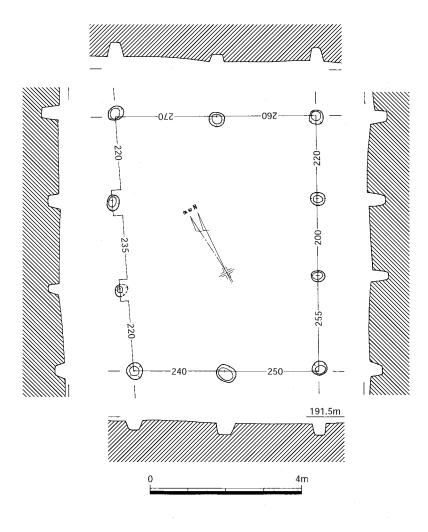
第658図 掘立柱建物72 (1/100)・出土遺物 (1/4)

# 掘立柱建物73 (第629・

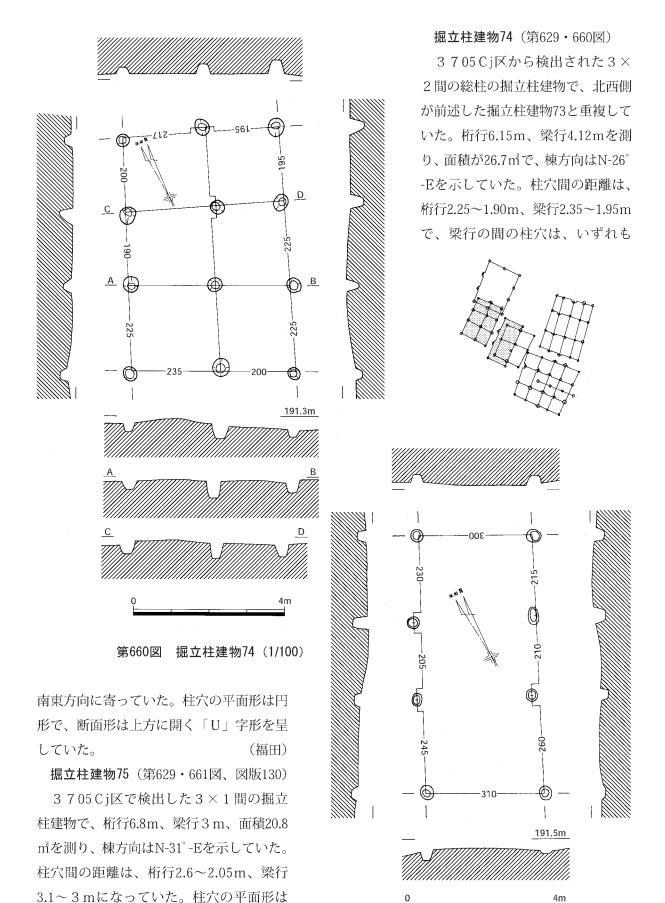
659図、図版129)

3705 C i 区から検出された3×2間の掘立柱建物である。桁行6.75m、梁行4.9mを測り、面積が34.4㎡で、棟方向はN-31°-Eであった。柱穴間の距離は、桁行2.55~2m、梁行2.7~2.4mになっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)





第659図 掘立柱建物73 (1/100)



第661図 掘立柱建物75 (1/100)

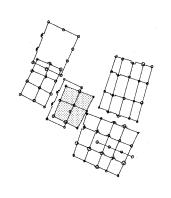
(福田)

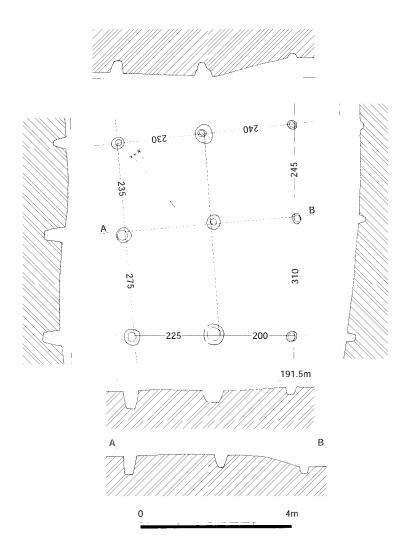
円形で、断面形は上方に開く「U」字形を

呈していた。

# **掘立柱建物76** (第629・662図、 写真22、図版130)

3705 Da区から検出された 2×2間の総柱の掘立柱建物で ある。桁行5.55cm、梁行4.7mを 測り、面積が23.8㎡で、棟方向 はN-37°-Eを示していた。柱穴 間の距離は、桁行3.1~2.35m、 梁行2.4~2mで、検出面での 南東側桁行の柱穴は、規模がや や小さい。柱穴の平面形は円形 で、断面形は「U」字形を呈し ていた。 (福田)





第662図 掘立柱建物76(1/100)

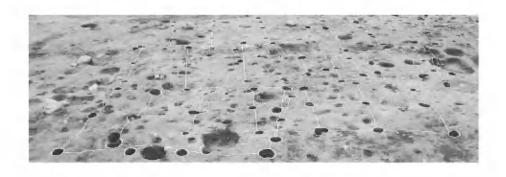
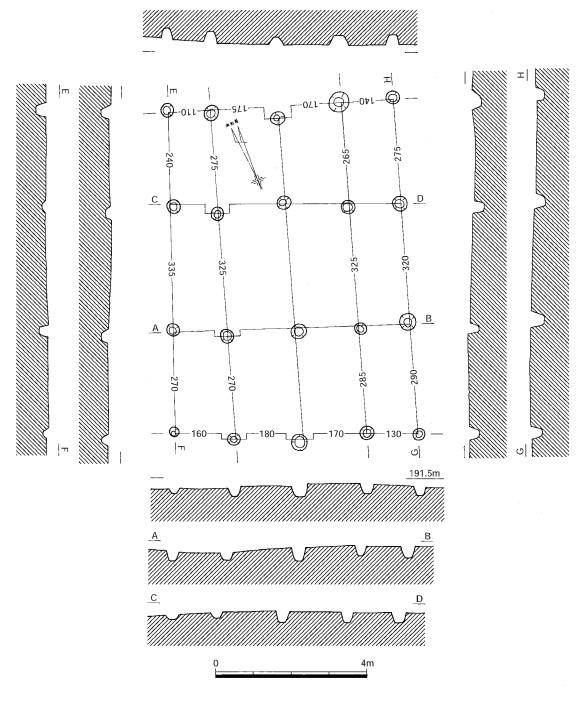


写真22 掘立柱建物76周辺遺構検出状況(東から)

#### 掘立柱建物77 (第629・663図、図版130)

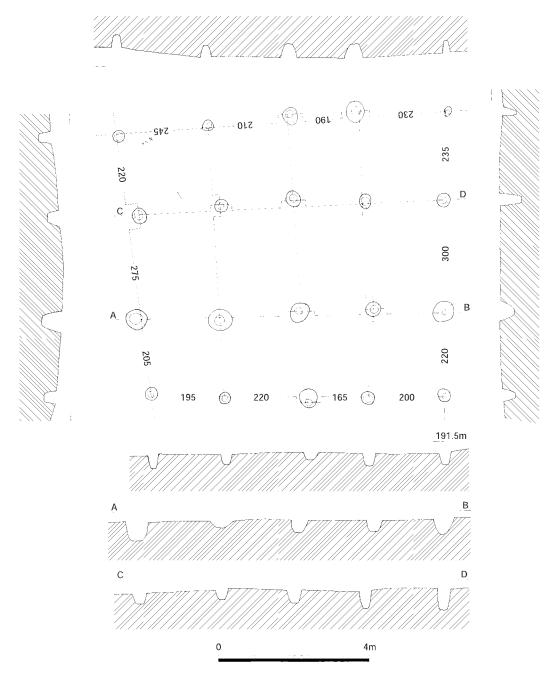
 $3705\,Da$ 区から検出された  $3\times 2$  間の総柱の掘立柱建物である。この掘立柱建物は、梁行の両端の柱間が中間の 2 間の柱間よりも狭いので、桁行に沿って両側に庇を有する構造になっていた。桁行  $8.75\,m$ 、梁行 $3.5\,m$ を測り、棟方向は $N-25\,^\circ$ -Eを示していた。面積は $30.3\,m$ であるが、庇部分も含めると $53.4\,m$ になる。庇部分も含めた柱穴間の距離は、桁行 $3.35\sim 2.4\,m$ 、梁行 $1.8\sim 1.1\,m$ になっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。



第663図 掘立柱建物77 (1/100)

## 掘立柱建物78 (第629・664図、図版130・131)

 $3706\,\mathrm{DaE}$ から検出された  $5\times3\,\mathrm{ll}$  の総柱の掘立柱建物である。この掘立柱建物は、後述する柱 穴列 8 と重複していた。桁行 $7.8\,\mathrm{cm}$ 、梁行  $7\,\mathrm{m}$  を測り、面積が $60.2\,\mathrm{m}$ で、棟方向は $\mathrm{N}$ - $57\,\mathrm{s}$ - $\mathrm{W}$ を示していた。柱穴間の距離は、桁行 $2.45\sim1.65\,\mathrm{m}$ 、梁行  $3\,\mathrm{m}\sim2.05\,\mathrm{m}$ になっていたが、桁行のみならず梁行も 両端の長さだけでなく柱穴間の距離が不揃いで、全体が著しく歪んだ形態になっていた。検出面での 柱穴の規模は大小様々で、柱穴の底部のレベルも一定の値になっていなかった。それでも柱穴の平面 形は円形で、断面形は上方に開く「 $\mathrm{U}$ 」字形を呈していた。



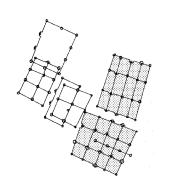
第664図 掘立柱建物78 (1/100)

## 掘立柱建物79(第629・665図、図版131)

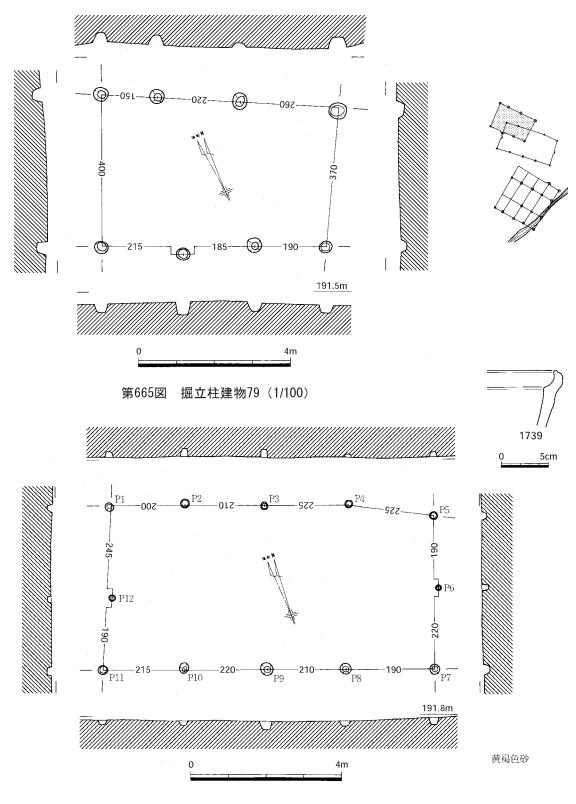
 $3706\,\mathrm{D}\,\mathrm{c}$ 区から検出された  $3\times1$  間の掘立柱建物である。 桁行5.9 $\mathrm{m}$ 、梁行3.7 $\mathrm{m}$ を測り、面積が23.5 $\mathrm{m}$ で、棟方向はN-59 $^\circ$ -Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.6 $\sim$ 1.5 $\mathrm{m}$ 、梁行4 $\sim$ 3.7 $\mathrm{m}$ になっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。

# 掘立柱建物80 (第629・666図、図版131)

3706Dc区から検出された4×2間の掘立柱建物である。



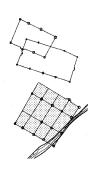
桁行8.5m、梁行4.1mを測り、面積が36.5㎡で、棟方向はN-64°-Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.4~1.95m、梁行2.45~1.9mを測るが、東隅に位置するP 5 がP 6 に近接しているため、南東側の梁行が北西側のものより短くなっていた。この掘立柱建物は重複する掘立柱建物69よりも新しく、柱穴の規模が小さい。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)

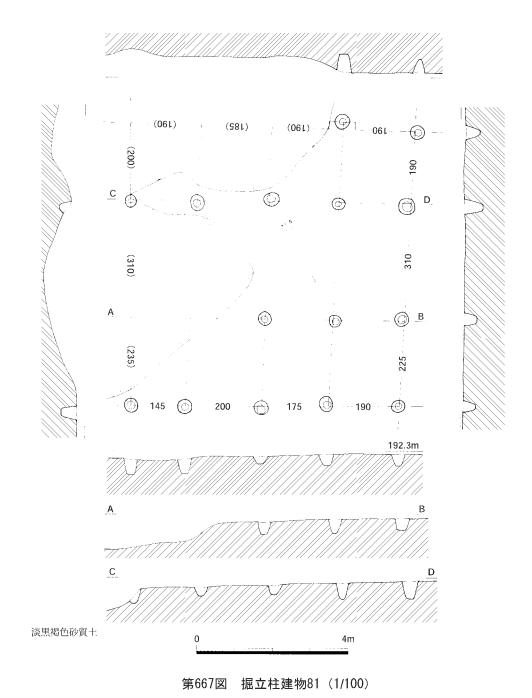


第666図 掘立柱建物80 (1/100) - 出土遺物 (1/4)

## 掘立柱建物81 (第629・667図、図版132)

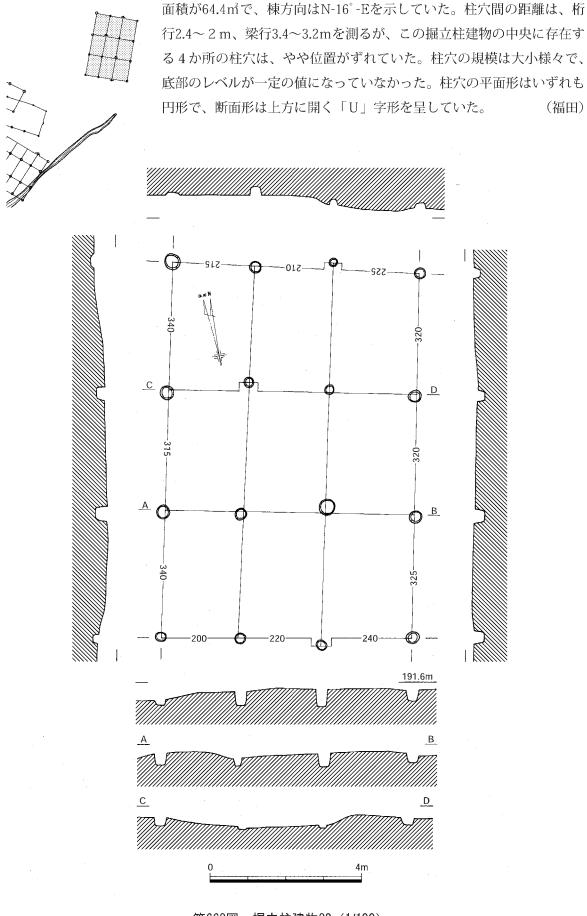
3707 Dc区で検出した  $3 \times 4$  間の総柱の掘立柱建物である。北側と西側の部分は後世に削平が行われていたため、柱穴が存在しなかった。推定桁行7.25 m、推定梁行7.1 mを測り、推定面積が53.8 m で、棟方向はN-31°-Eを示していた。柱穴間の距離は、桁行3.1~1.9 m、梁行2~1.45 m になっていた。柱穴の平面形は円形で、断面形は上方に開く「U」字形を呈していた。(福田)





掘立柱建物82 (第629・668図、図版132)

3705Dd区から検出された3×3間の総柱の掘立柱建物である。桁行9.65m、梁行6.55mを測り、



(福田)

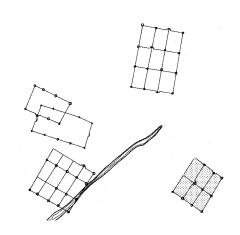
第668図 掘立柱建物82 (1/100)

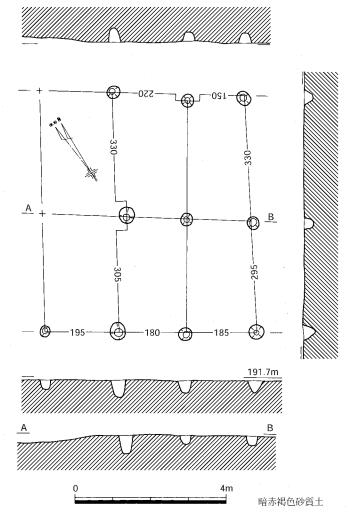
#### 掘立柱建物83 (第629・669図)

溝57の東方約10m、掘立柱建物82 の南方約15mに位置する、総柱建物 と想定される建築遺構の一部であ る。

棟方向は、おそらく東西方向を示すと考えられ、柱間や柱通りは掘立柱建物81や掘立柱建物85などに近似し、規模の点からは掘立柱建物86にきわめて近い規模を示す。

柱間や柱掘り方の形状は、不揃いである。 (岡田)





第669図 掘立柱建物83 (1/100)

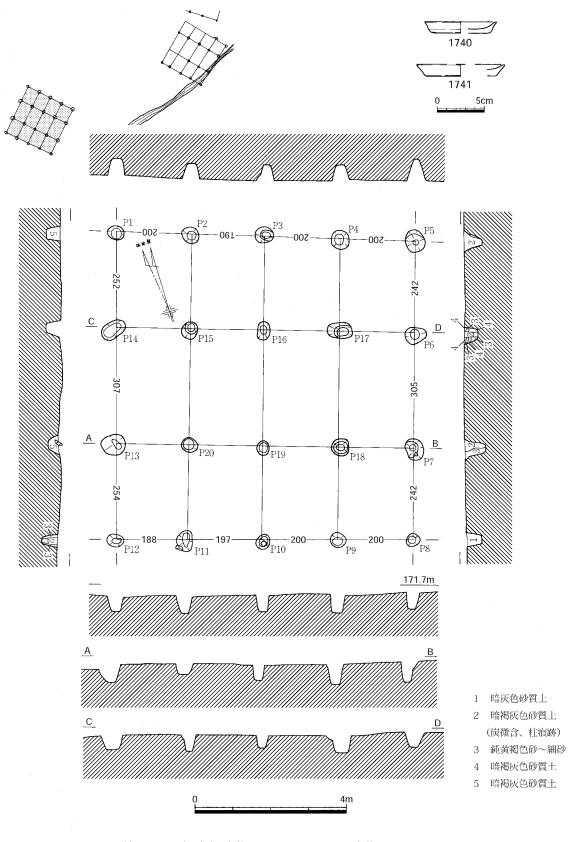
**掘立柱建物84** (第629·670図、写真23、図版132)

3708Cj区の東で検出した建物で、北側の掘立柱建物69~83や南側の掘立柱建物85~91から15~

20mほど離れた位置にある。桁行4間(8.13m)、梁行3間(7.9m)で、整った柱配置をとる。面積は63.1㎡を測り、棟方向はN-24°-Eにおく。桁行の柱間は1.88~2mでほぼ等しいが、梁行の柱間は2.42~3.07mと中央が両端より広くなっている。柱穴は径32~67cm、深さ33~57cmあり、径15cmほどの柱痕跡を残すものもある。土師器の小皿1740・1741から14世紀と推定される。(亀山)



写真23 掘立柱建物84周辺遺構検出状況(北から)



第670図 掘立柱建物84 (1/100) - 出土遺物 (1/4)

# 掘**立柱建物85** (第629·671図)

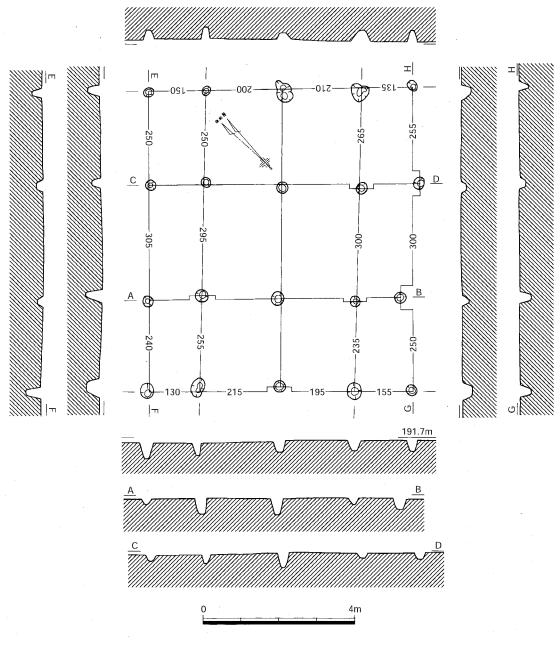
溝57の南東方約15mに位置し、掘立柱建物86と重複検出された総柱建物である。棟方向はおそらく

北東から南西方向を示すとみられる。

基本的には身舎は桁行3間、梁行2間で両側に庇を持つ建物と理解される。

柱掘り方は円形で、最大の柱穴でも径25cmと小規模である。桁行はおおむね8尺、梁行は7尺前後と比較的柱間距離は整然とした配置を示している。出土遺物はみられない。 (岡田)

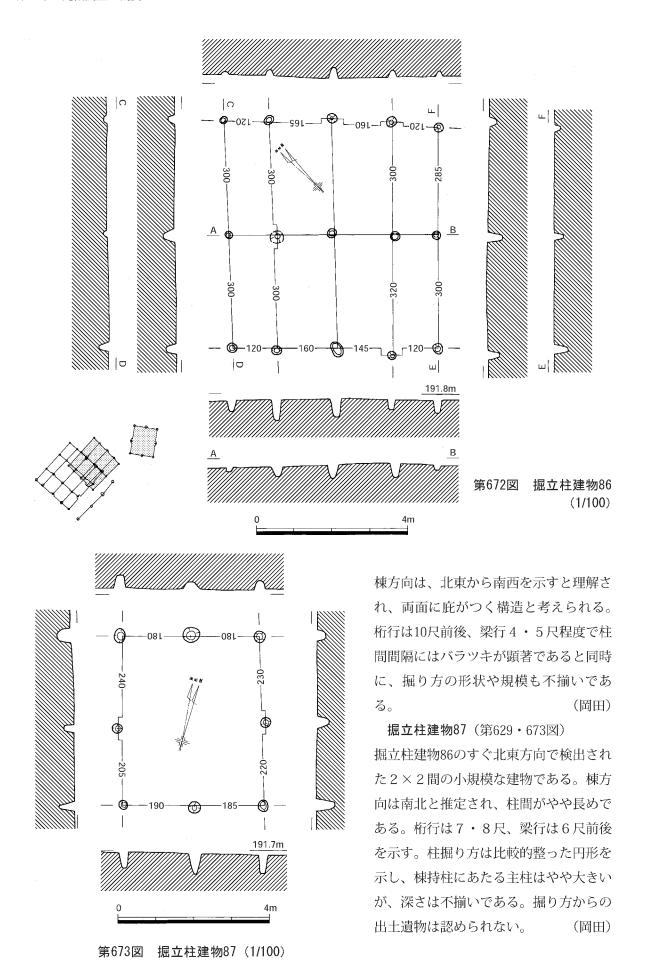




第671図 掘立柱建物85 (1/100)

# 掘立柱建物86 (第629・672図)

掘立柱建物85のやや北寄りで重なって検出された、やはり総柱建物である。掘立柱建物85に比べると一回り小規模であるが、構造はきわめて近似する。



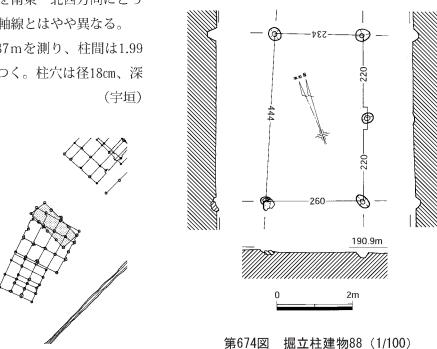
#### 掘立柱建物88 (第629・674図)

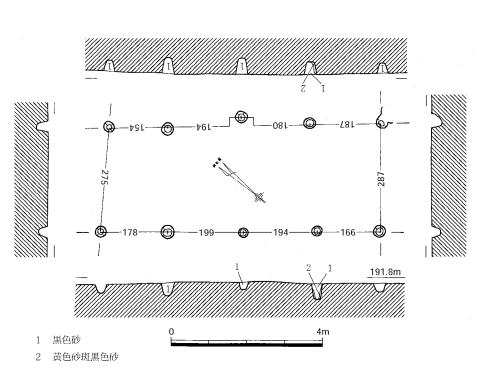
3 8 03 C i 区で検出したN-24°-Eに棟をおく 2 × 1 間の建物で、谷状のくぼみに位置する。桁行4.4 m、梁行2.6mで面積は10.9mを測るが、柱筋の通りは悪い。出土遺物はなく時期の決め手に欠くが、 周辺遺構との関係から室町時代を想定しておきたい。 (亀山)

## 掘立柱建物89 (第629・675図)

遺跡の中央部西寄りで検出した4×1間の 建物で、掘立柱建物90と重複するが前後関係 は不明である。軸線を南東一北西方向にとっ ており周囲の建物の軸線とはやや異なる。

長さ7.37m、幅2.87mを測り、柱間は1.99 ~1.54mとややばらつく。柱穴は径18cm、深 さ20cm前後を測る。



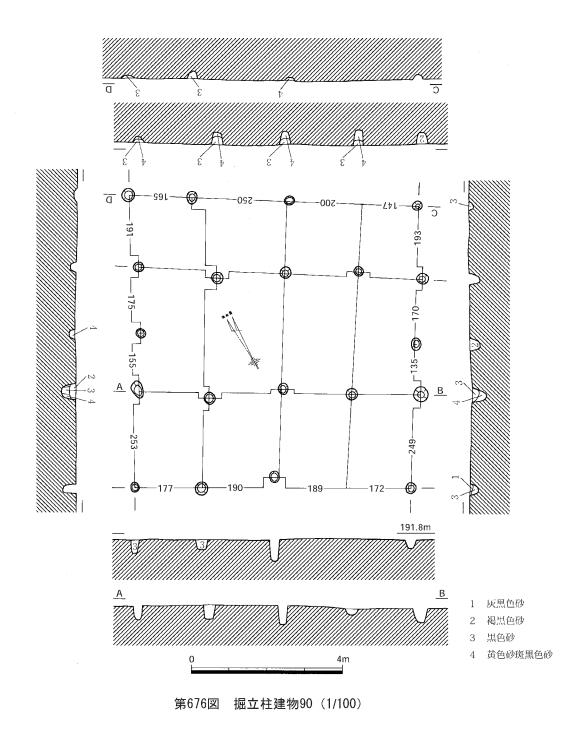


第675図 掘立柱建物89 (1/100)

## 掘**立柱建物90** (第629·676図)

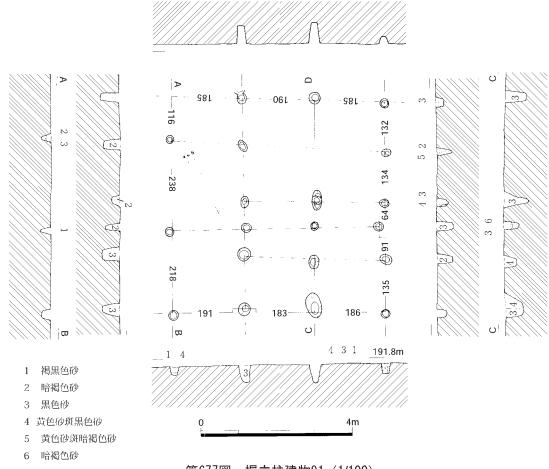
 $4 \times 3$ 間の掘立柱建物で、軸線は方位に対して斜交する。北東辺の長さ7.62m、北西辺の長さ7.74 mを測る。前記のように掘立柱建物89と重複する。

建物はほぼ整った方形を呈するが、北西、南東の柱穴列や床束柱のいくつかは配置にやや乱れがある。柱穴の径は18cm前後、深さは20cm前後を測る。柱穴埋土から土器細片が出土してはいるが、中世という以上には時期を限定できない。 (字垣)

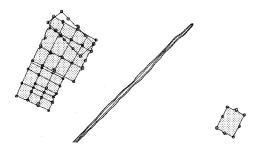


# 掘立柱建物91 (第629·677図)

掘立柱建物90の南に接する形で検出した掘立柱建物で、掘立柱建物90と軸線を同じくする。軒が重



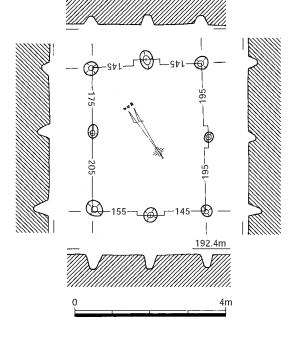
第677図 掘立柱建物91 (1/100)



複する配置となっており、両者が共存するとは考えにくい。3×3間に近い柱の配置を示すが北隅には柱穴がなく、やや変則的な形状を示す。中央南側部分のみ3本2列の床束柱が別に配置されている。建物南東辺の長さ5.56m、南西辺5.6mを測る。柱穴の規模、深さは掘立柱建物91と同様である。柱穴から土器細片が出土してはいるが、時期の限定は困難である。(字垣)

# 掘立柱建物92 (第629・678図、図版133)

溝65の南南東約15mで検出された2×2間の 小規模な建物である。棟方向は北東から南西を



第678図 掘立柱建物92 (1/100)

示し、柱の配置は比較的整然としている。柱掘り方は不整な円形もしくは長円形を示しているが、深 さは一定している。出土遺物は認められない。 (岡田)

#### 掘立柱建物93 (第630・679図)

 $3807 \,\mathrm{D}\,\mathrm{d}\mathrm{E}$ から検出された  $2\times1\,\mathrm{l}$  間の南北棟で、棟方向はN-13°-Eである。規模は桁行3.35m、梁行2.65m、床面積8.2㎡を測る小規模な建物である。柱穴は径・深さとも $30\mathrm{cm}$  前後を測る。柱穴から土器細片および鉄滓約 $50\,\mathrm{g}$  が出土しており、遺物の特徴から建物の時期は中世と思われる。 (江見)

# **掘立柱建物94** (第630·680図、写真24)

掘立柱建物93の南東10mから検出された  $2 \times 1$  間の東西棟で、棟方向は $N-75^\circ$ -Wである。規模は桁行4.3m、梁行2.8m、床面積11.8m $^\circ$ を測る。柱穴間距離は桁行2.2~1.9mを測る。柱穴は径50~20cm、深さ30~15cmを測る。遺物は中世に属すと思われる土器 1 片が出土するのみであった。 (江見)

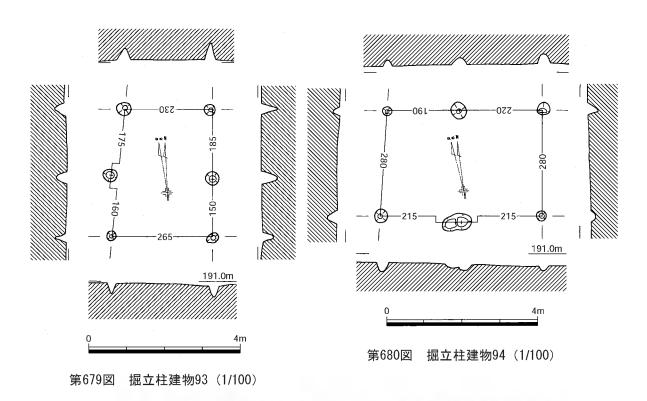
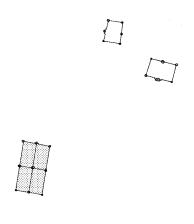




写真24 掘立柱建物94清掃作業(北から)

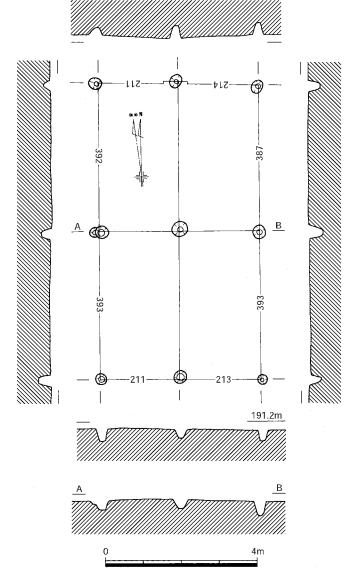


# 掘立柱建物95 (第630・681図)

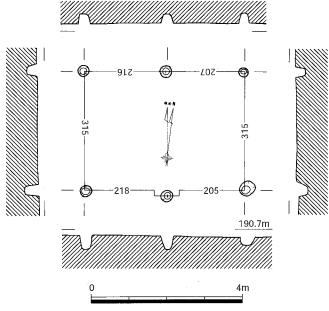
掘立柱建物94の南西19mで検出した 2×2間の南北棟(N-9°-E)で、3809 Dc区に位置する。桁行7.85m、梁行 4.25mで面積は33.2㎡ある。梁行の柱 間が2.11~2.14mを測るのに対し、桁 行の柱間は3.87~3.93mと極めて長い。 柱穴は径25~45cmで、埋土の特徴など から室町時代と考えられる。(亀山)

# 掘立柱建物96 (第630・682図)

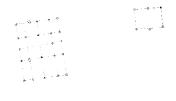
3 9 04 D d 区で検出した 2 × 1 間の 東西棟で、掘立柱建物95の南44mに位 置する。桁行4.23m、梁行3.15mで、 面積は13.3㎡あり、棟方向はN-88°-W



第681図 掘立柱建物95 (1/100)



第682図 掘立柱建物96 (1/100)



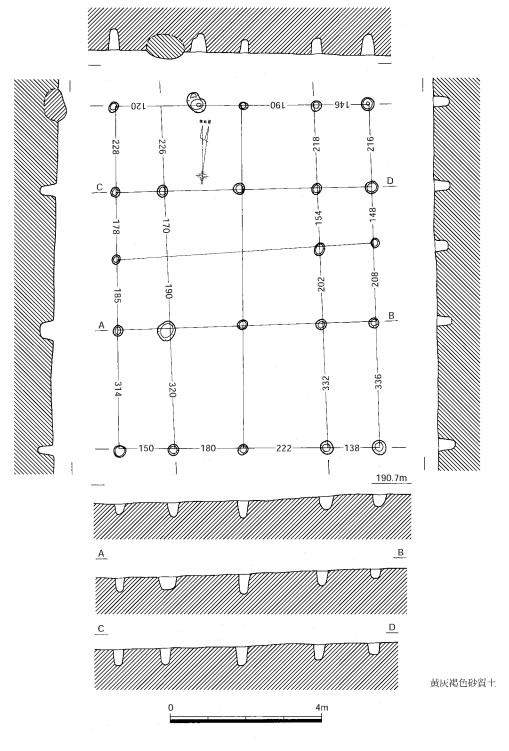
を測る。柱穴は径25~45cm、深さ25~40cmで、桁行の柱間は2.05~2.18mとほぼ等しい。埋土の特徴などから室町時代と考えられる。 (亀山)

# 掘立柱建物97 (第630・683図)

3905Db区で検出した南北棟で、 掘立柱建物96の西12mに位置する。桁 行3間 (9.08m)、梁行4間 (6.9m) で、面積は36.7㎡ある。梁行の柱間は中央の2間が1.8~2.22m を測るのに対し、両端の2間は1.2~1.5mと狭く、二面庇の可能性がある。3間ある桁行の柱間は 2.16~3.36mと不揃いで、特に北の1間が狭くなっている。径25~50cmの柱穴は西に向かって深くなり、旧地形を反映しているものと思われる。

出土した備前焼などから15世紀後半の建物と考えられる。

(亀山)



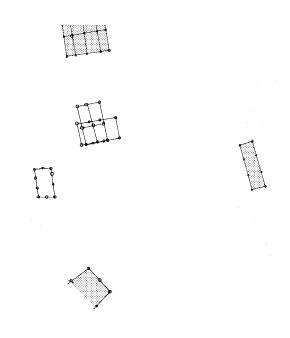
第683図 掘立柱建物97 (1/100)

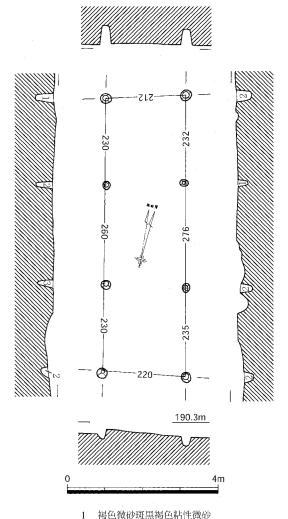
#### 掘立柱建物98 (第630・644・684図)

3 9 07 De区で検出された。  $3 \times 1$  間の細長い建物で、桁行全長が7.43m、梁行は2.2m、床面積は15.8m を測る。柱穴掘り方は円形で、長径が $21\sim31$  cmと小さく、最深で50cm であった。棟方向はN-9 - Wで、13m 西の溝85や14m 東の掘立柱建物133とほぼ平行するため併存した可能性が高い。 (岡本)

## 掘立柱建物99 (第630・685図)

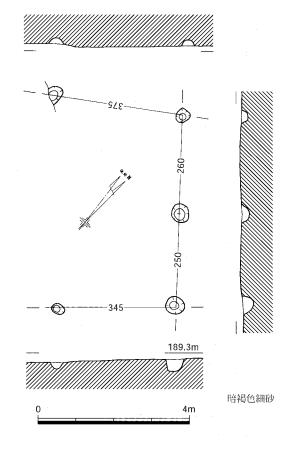
3909Db区に位置する。この建物の西側は大きく現代の撹乱が入っており、その全容は明らかではないものの、南北方向2間、東西方向が1間以上の建物である。出土遺物はないが、検出面などから判断して、時期は中世と思われる。 (弘田)





- 1 褐巴做砂塊黑褐巴枯性做的
- 2 黒褐色粘性微砂
- 3 黄灰色微砂

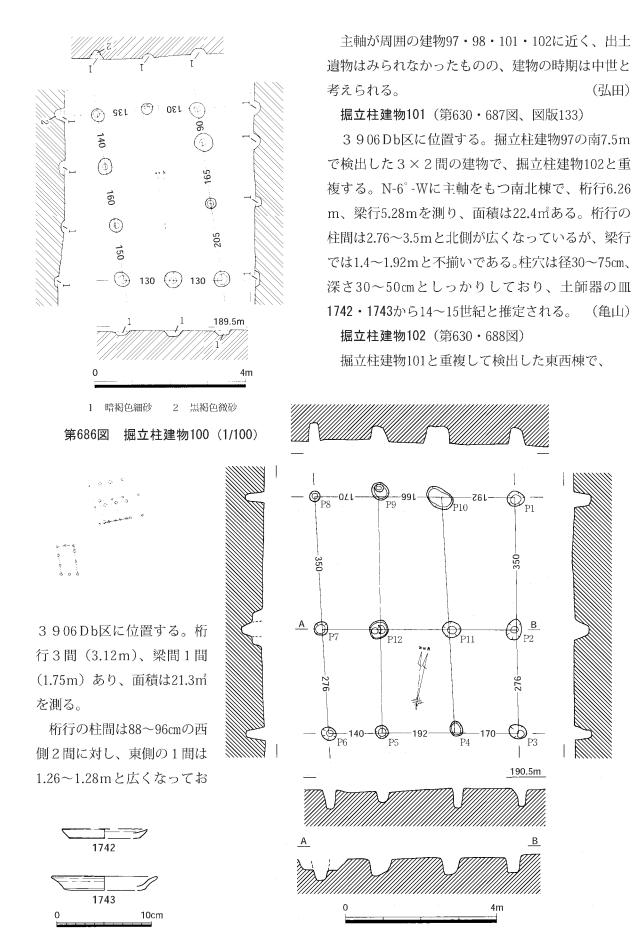
第684図 掘立柱建物98 (1/100)



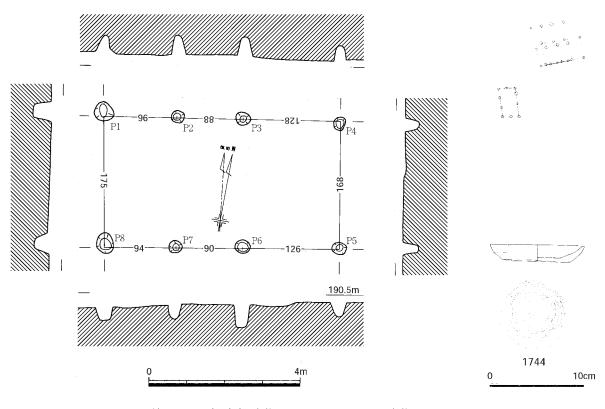
第685図 掘立柱建物99 (1/100)

## 掘立柱建物100 (第630・686図)

3907Db区に位置する。平面形がやや菱形をなす  $3\times2$ 間の建物で、規模は桁行で4.6m、梁行は2.65mを測る。



第687図 掘立柱建物101(1/100)・出土遺物(1/4)



第688図 掘立柱建物102 (1/100) 出土遺物 (1/4)

り、径30~55cmある柱穴も東の妻柱は浅い。

柱穴から土師器の皿1744が出土しており、15世紀後半と推定される。

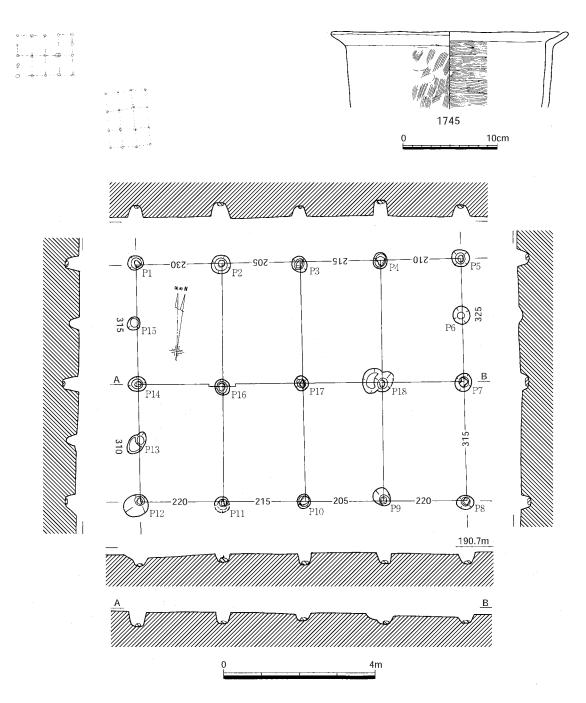
(亀山)

掘立柱建物103 (第631・640・689図、写真25、図版133)

3808Dh区、後述の土壙墓14の下層から検出された4×2間の東西棟で、棟方向はN-88°-Eである。



写真25 掘立柱建物103清掃作業(南から)



第689回 掘立柱建物103(1/100)・出土遺物(1/4)

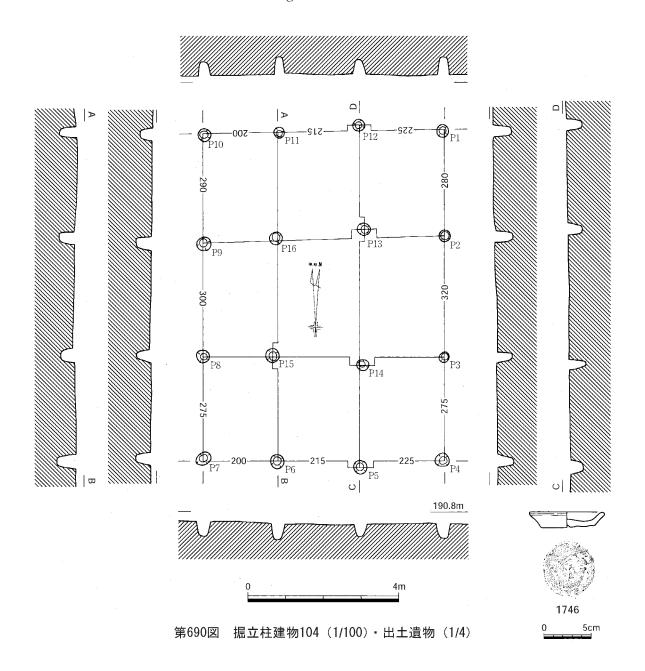
規模は桁行8.6m、梁行6.4m、床面積54.4㎡を測る。主柱穴にはいずれも礎盤石が据えられ、東西の梁行には束柱(P6・13・15)が掘られていた。柱穴間の距離は桁行2.3~2.05m、梁行3.25~3.1mを測る。遺物はP11の鍋1745をはじめ大半の柱穴から土師器破片が出土しており、P10からは鉄滓12gもみられた。1745は内外面をハケ調整されたもので、口縁部は斜め外方に延び、端部は丸く収めており、土器の特徴は中世前半のものと考える。

# 掘立柱建物104 (第631・640・690図、図版136・175)

掘立柱建物103の南東15m、区画溝と考えられる溝78の東から検出された  $3 \times 3$  間の南北棟で、棟方向は $N-3^\circ$ -Eである。規模は桁行8.75m、梁行6.4m、床面積55.7㎡を測る。柱穴間の距離は桁行  $3 \sim$ 

2.75m、梁行2.25~2mを測る。柱穴は径40~30cm、深さ40cm前後を測る。

遺物は6個の柱穴から土師器の甕・小皿などが出土しているが、P12からは完形の小皿1746が出土している。このほか、全体の柱穴から計740gの鉄滓も出土している。 (江見)

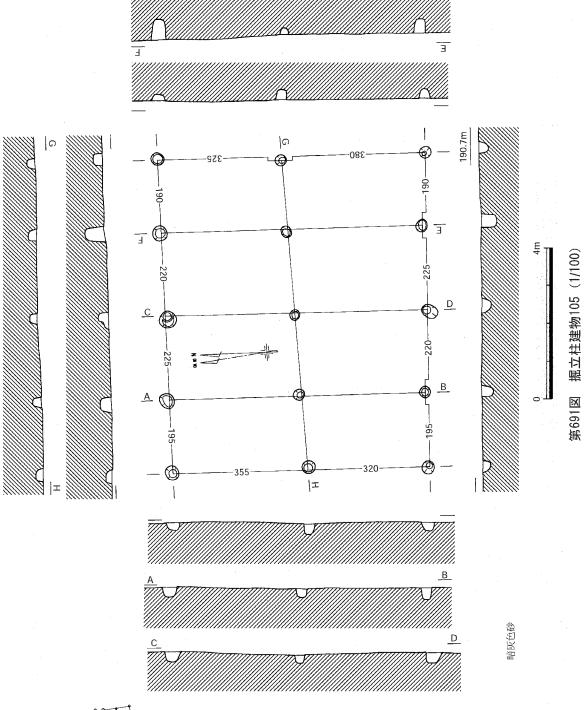


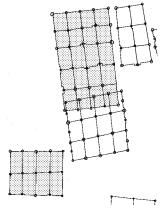
#### 掘立柱建物105(第631・640・691図、図版136)

久田原遺跡中央部北西に位置し、桁行4間(6.3m)、梁行2間(6.3~7m)の東西棟である。柱穴間の距離は、桁行2.25~1.9m、梁行3.8~3.2mを測る。中央桁柱列が南東に振っているが、建物の方位は、梁列が磁北に近くN-81°-Wである。柱の掘り方は、直径40~30cm、深さは、55~20cmを測る。中央桁列はすべて20cm前後で、他に比べ浅い。床面積は、57.3㎡である。柱穴内から土師器杯、土師器土鍋などの小片が出土している。

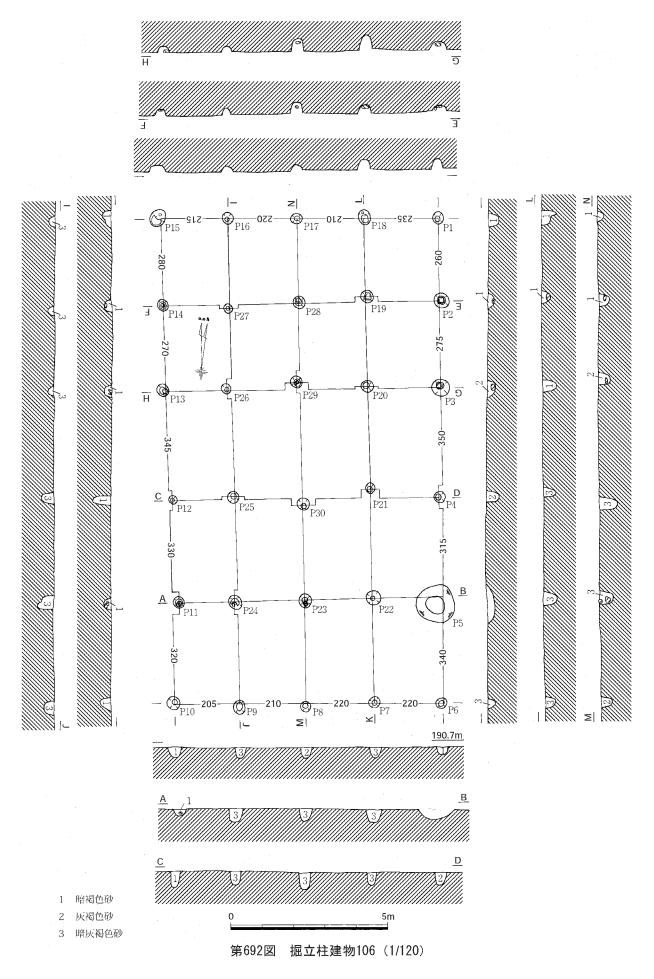
#### 掘立柱建物106 (第631・641・692・693図、図版135・175)

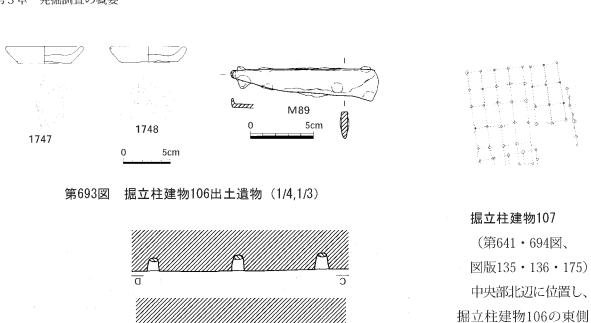
中央部北辺に位置し、南端が掘立柱建物108と重複する。桁行5間(15.45m)、梁行4間(8.8m)





の大形の南北棟である。柱穴間の距離は、桁行3.5~2.6m、梁行2.05~2.35mで、北側2間の桁が狭く、南3間が3mを越える。建物の方位は、桁列が真北に近くN-3°-Wである。柱の掘り方は、直径50~30cmで、深さは55~20cmである。多くの柱穴内の底部に扁平な石を置いている。床面積は、133.8㎡を測り、久田原遺跡の中では最も大きな掘立柱建物である。P29から土師器小皿1747・1748、P20から鎌状の鉄器M89の他に多くの土師器小皿片・土師器杯片・土師器鍋片、勝間田焼甕片などが出土している。





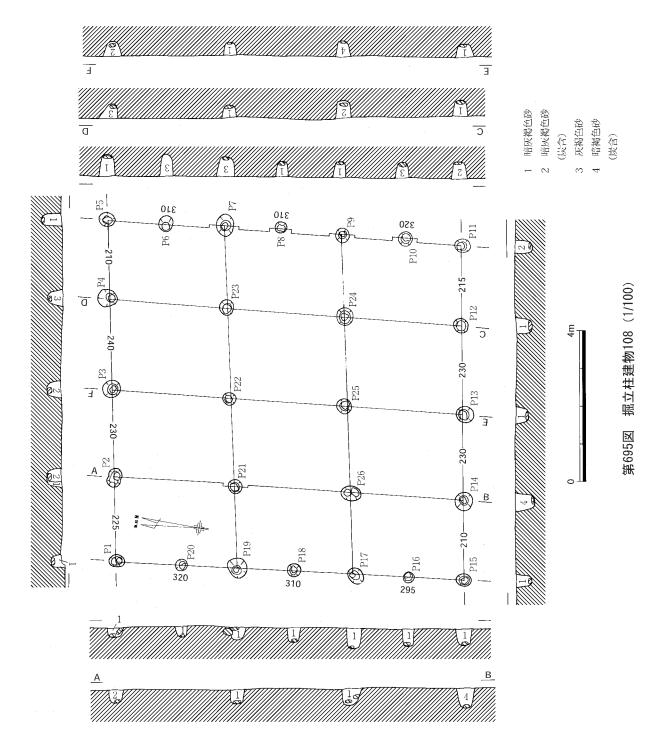
に平行して存在する。 桁行3間 (9.2m)、梁 <del>©</del>-017 012 行2間(4.8~4.2m) の南北棟である。柱穴 間の距離は、桁行3.3 ~2.75m、梁行2.55~ 2.1mを測る。建物の lacksquare□ (P8) 方位は、桁列が真北に 近くN-1°-Wである。柱 穴の掘り方は直径50~ 30cm、深さ50~25cm、 多くの柱穴内に石を配 A P7 P12 O P5 P4 190.6m 暗褐色砂 5cm

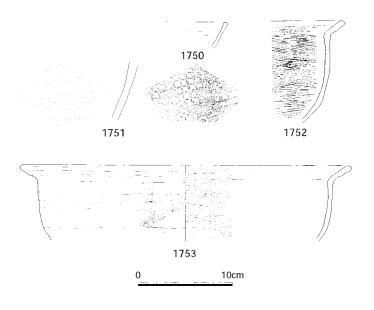
第694図 掘立柱建物107 (1/100) - 出土遺物 (1/4,1/3)

している。床面積は41.4㎡である。P4から青磁碗体部片1749、P10から 鈴状の鉄製品M90が、他に土師器小皿・鍋片が出土している。 (伊藤) 掘立柱建物108(第641・695・696図、図版137・139)

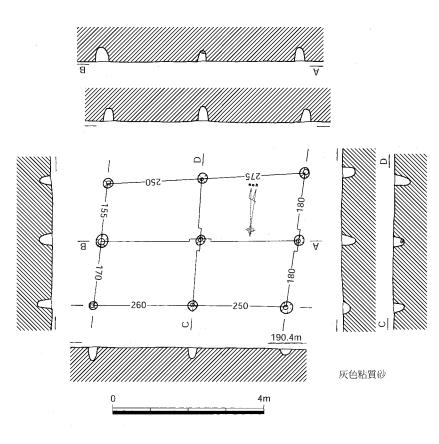
中央部北辺に位置し、掘立建柱建物106の南端部に重なる。桁行4間(9~8.90m)、梁行3間(9.3m)の南北棟である。柱穴間の距離は、桁行2.4~2.1m、梁行3.2~2.95mを測る。東西両側の梁行には、ほぼ中央近くに東柱が存在する。建物の方位は、梁列が真北に近く、N-2°-Wである。東柱も含めすべての柱穴底部には、扁平な石を配している。P9からは上



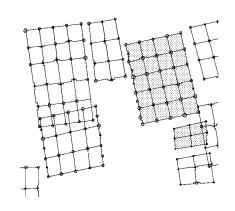




第696図 掘立柱建物108出土遺物(1/4)



第697図 掘立柱建物109 (1/100)



師器鍋1752・1753、勝間田焼甕片 1751、P15から土師器鍋、P24から 勝間田焼椀1750が、他のからも土師 器鍋・釜・小皿片などが多く出土し ている。 (伊藤)

#### 掘立建柱建物109

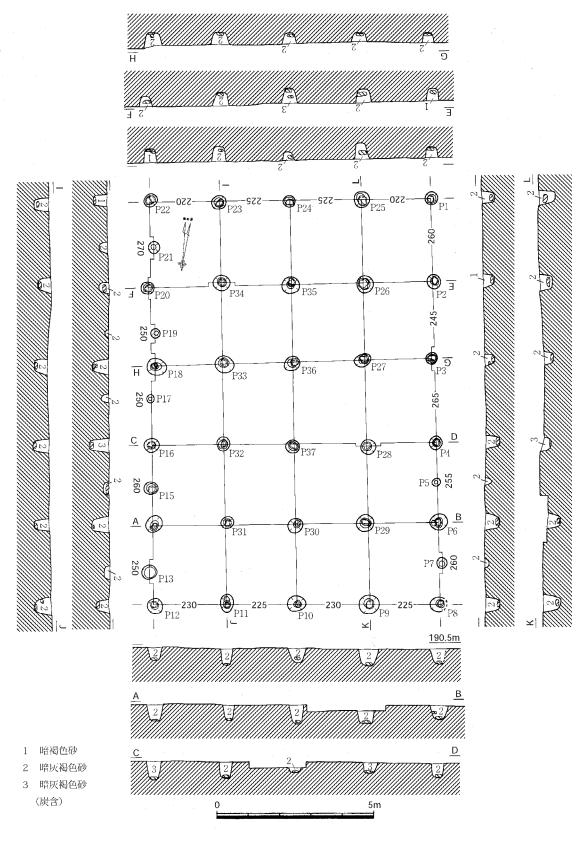
(第641・697図、図版139) 中央部北辺、掘立柱建 物110の南側に位置する。 桁行2間 (5.2~5.1m)、 梁行2間 (3.6~3.25m) の東西棟である。柱穴間 の距離は、桁行2.75~2.5 m、梁行1.8~1.55mを測 る。床面積は17.7㎡であ る。建物の方位は、梁列 が真北に近くN-88°-Eで ある。

柱穴内からは、土師器 鍋片、小皿小片などが出土 している。 (伊藤)

#### 掘立柱建物110

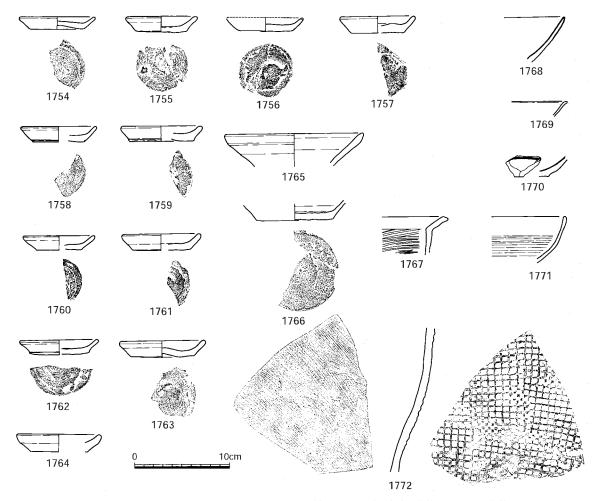
(第641・698・699図) 中央部北辺東側に位置 する。桁行5間(10.8m)、

梁行 4 間(7.5m)の大形南北棟である。柱穴間の距離は、桁行2.7~2.45cm、梁行2.5~2.3mを測る。建物の方位は、桁行が磁北に近く $N-4^\circ$ -Wである。床面積は115.4㎡を測り、100㎡を越える数少ない掘立柱建物の一つである。柱穴掘り方は直径50~30cm、深さ50~20cmを測る。桁行西側列と、東側南 2 間には束柱を持つ。束柱の深さは全体に浅く20cm前後である。ほとんどの柱穴内底部に扁平な石を

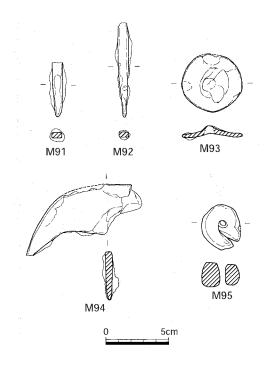


第698図 掘立柱建物110 (1/120)

配している。P20・36・16・10・29 (2個)・27・6・2・3・9から土師器小皿1754~1764、P20・3から土師器杯1765・1768、P35から土師器鍋1767、P33から勝間田焼椀1771、P8から勝間田焼甕



第699図 掘立柱建物110出土遺物 (1/4,1/3)



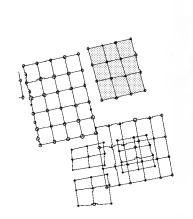
も多くの小細片が柱穴内から出土している。

1772、青磁椀片などの土器類、楔状M91・釘状M92・ 紡錘車M93・鎌M94・不明鉄器M95などが、中央部の P36を中心に出土している。 (伊藤)

掘立柱建物111 (第641·700·701図、図版138·175)

中央部北辺東側、掘立柱建物110の東側に位置する。 桁行3間(8.6m)、梁行3間(7m)の南北棟である。 建物全体が北東から南東に歪んでいる。柱穴間の距離 は、桁行3.15~2.65m、梁行2.45~2.1mを測る。建物 の方位は、桁行が磁北に近くN-6°-Wである。床面積 は、59.6㎡を測る。柱穴掘り方は、直径40~30cm、深 さは50~30cm前後である。ほとんどの柱穴内底部に扁 平な石を配している。

P4・5・6 (2点)から土師器小皿1773~1775、 P9から土師器杯1777・1782、P8 (2点)、P7か ら土師器鍋1779~1781、P6から瓦質鍋1778、P3から勝間田焼小皿1776、白磁碗片1783などの他に (伊藤)



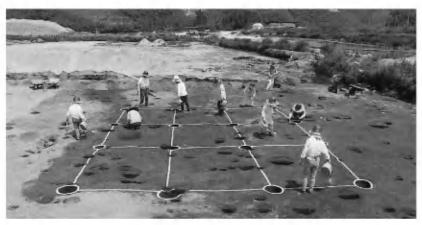
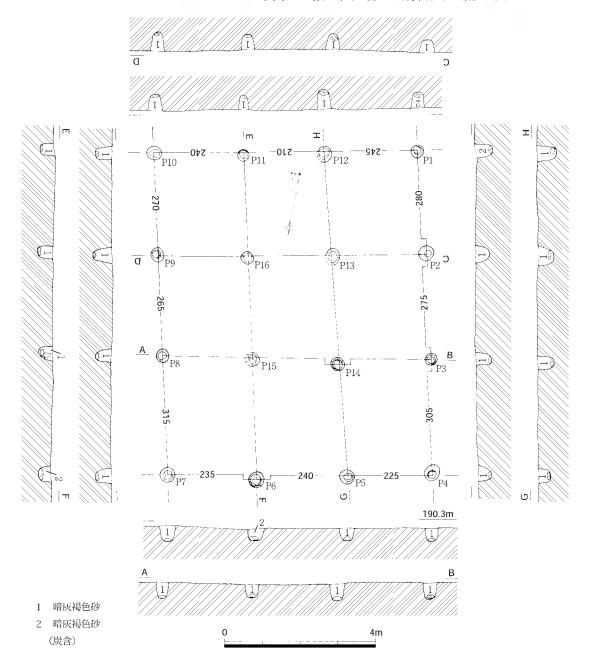
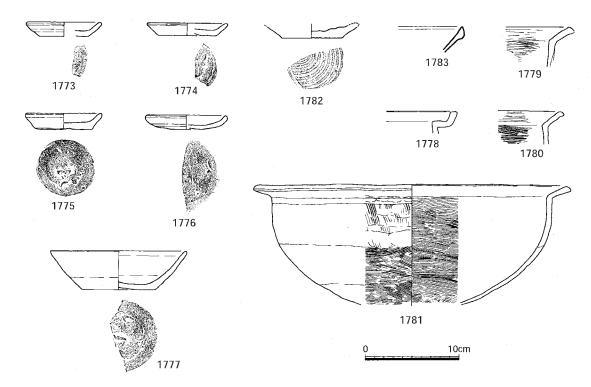


写真26 掘立柱建物111清掃作業(南から)



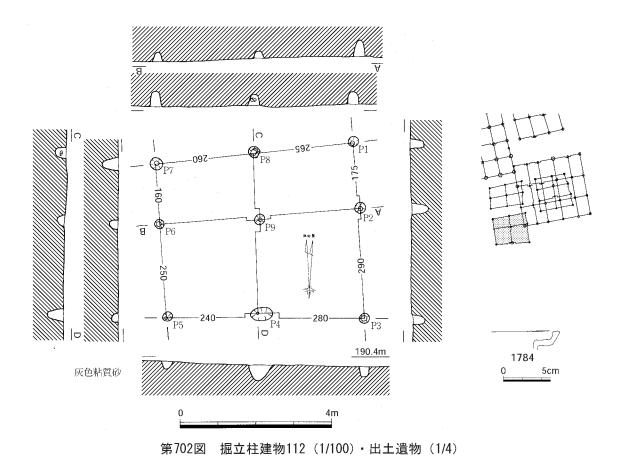
第700図 掘立柱建物111 (1/100)



第701図 掘立柱建物111出土遺物(1/4)

# 掘**立柱建物112** (第641 · 702図)

中央部北辺東側、掘立柱建物109の南に位置し、北東部の一部が掘立柱建物114と重なる。桁行2間

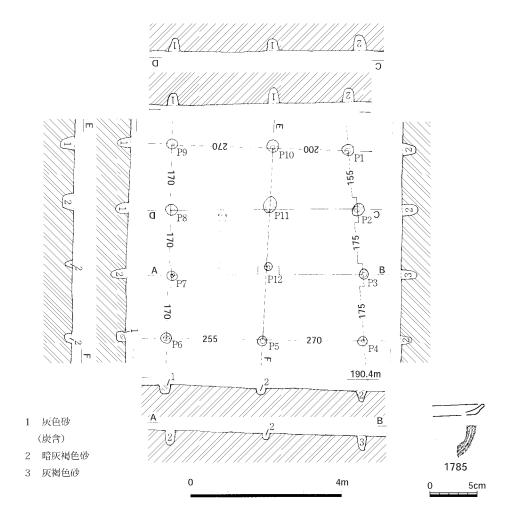


-474-

 $(5.25\sim5.2\mathrm{m})$ 、梁行 2 間  $(4.1\sim4.65\mathrm{m})$  の掘立柱建物である。柱穴間の距離は、桁行  $2.8\sim2.4\mathrm{m}$ 、梁行  $2.9\sim1.6\mathrm{m}$  を測る。床面積は  $22.9\mathrm{m}$  である。建物の方位は梁行が磁北に近く、N-89°-Wである。P 7 から瓦質鍋 1784、土師質鍋などが出土している。 (伊藤)

# 掘立柱建物113 (第641・703図、図版138)

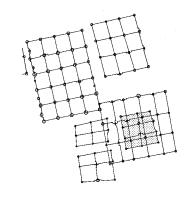
中央部北辺東側に位置し、掘立柱建物114と重なり合って存在する。桁行3間(5.1~4.05m)、梁行2間(5.25~4.7m)の南北棟と考えられる。柱穴間の距離は、桁行1.75~1.55m、梁行2.7~2mである。床面積は25.2㎡である。建物の方位は、桁行が真北に近くN-2°-Wである。P10から土師質小皿1785、上師質鍋・勝間田焼椀片などが出上している。 (伊藤)

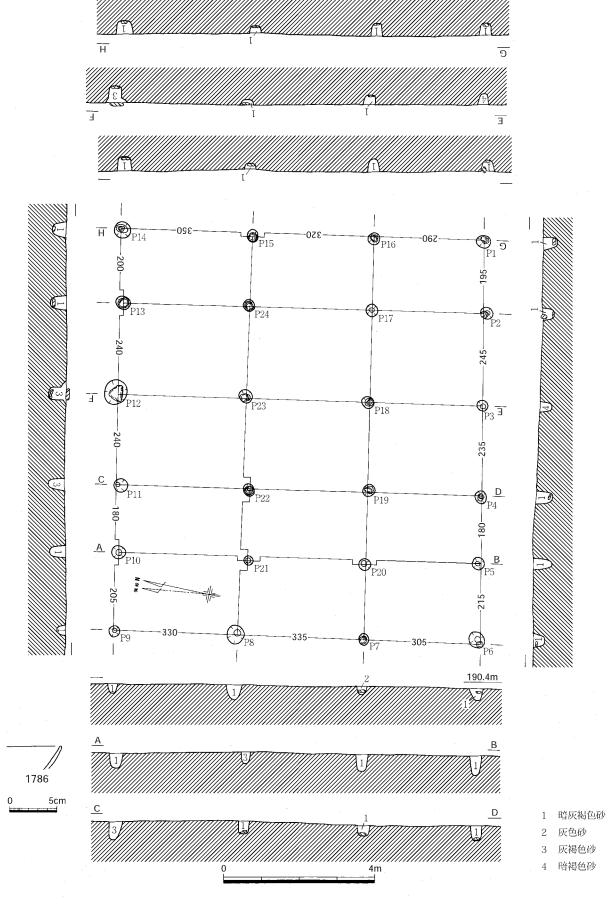


第703図 掘立柱建物113 (1/100) · 出土遺物 (1/4)

# **掘立柱建物114**(第641・704図、図版138・140)

中央部北辺東側に位置する。桁行5間(10.7m)、梁行3間(9.6 m)の東西棟である。柱穴間の距離は、桁行2.45~1.8m、梁行3.5~2.9mである。建物の方位は、磁北に近くN-86°-Wである。床面積は103㎡を測る。柱穴の掘り方は直径50~15cmで、柱穴底部に何カ所かには石を配している。P1から勝間田焼椀1786、他の柱穴からは土師器鍋・小皿片、勝間田椀片などが出土している。(伊藤)

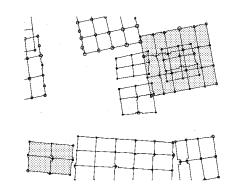




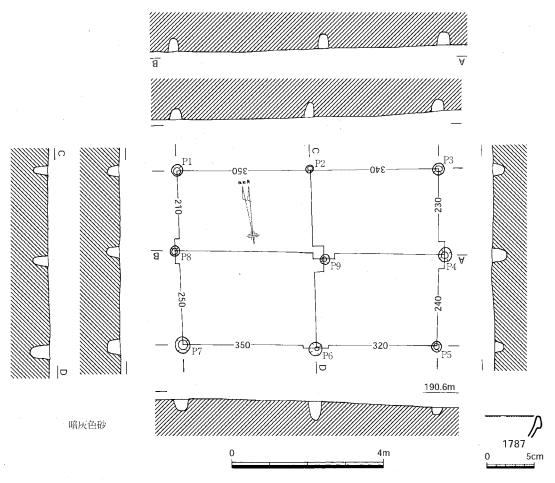
第704図 掘立柱建物114 (1/100) - 出土遺物 (1/4)

#### 掘立柱建物115 (第642・705図、図版140)

中央部中央に位置する。桁行 2 間( $6.9\sim6.7$ m)、梁行 2 間( $6.9\sim6.7$ m)の東西棟である。柱穴間の距離は、桁行  $3.5\sim3.2$ m、梁行 $2.5\sim2.1$ mである。建物の方位は、真北に近く $N-77^\circ$ -Wである。床面積は31.6mを測る。P4から白磁碗1787、他の柱穴から土師器鍋片などが出土している。



(伊藤)



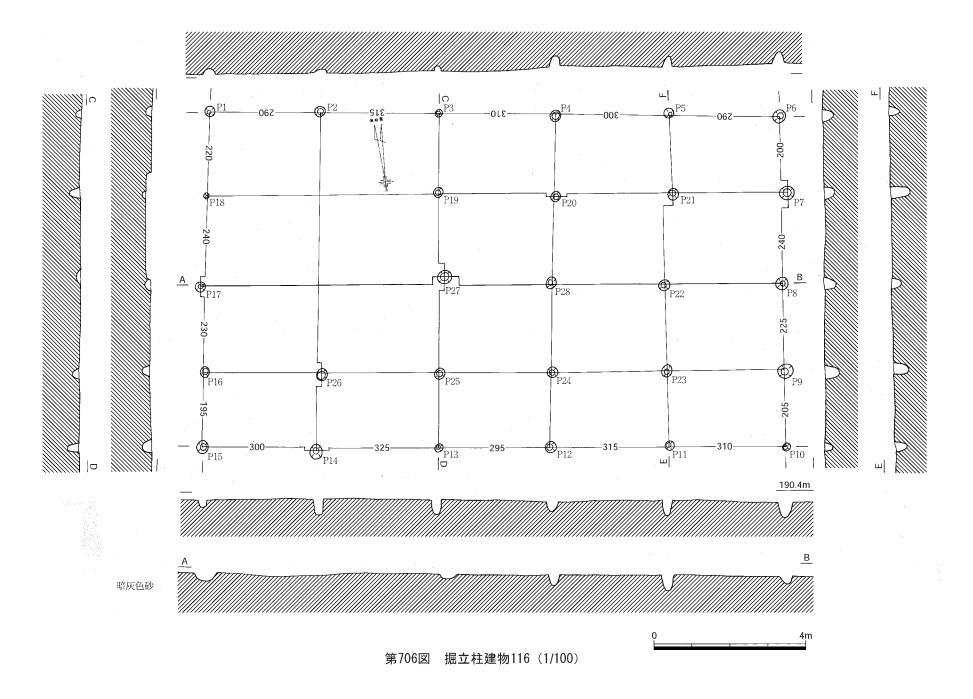
第705図 掘立柱建物115 (1/100) - 出土遺物 (1/4)

#### **掘立柱建物116** (第642·706図、図版141)

中央部中央に位置する。桁行 5 間(15.5~15.1m)、梁行 4 間(8.9m)の東西棟である。柱穴間の距離は、桁行3.25~2.9m、梁行2.4~1.95mである。南側 1 間分の梁行は2.05~1.95mと、北側の梁行2.5~2 mに比べて狭く、庇になる可能性がある。

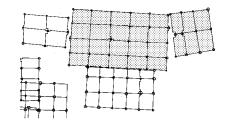
建物の方向は、真北に近くN-78°-Wである。床面積は、庇と考える部分を含め133.8㎡を測り、身舎の床面積は100.9㎡を測る。久田原遺跡中世建物群の中で最も広い床面積を持つ建物である。柱穴は直径40~30㎝前後、深さは、50~30㎝である。

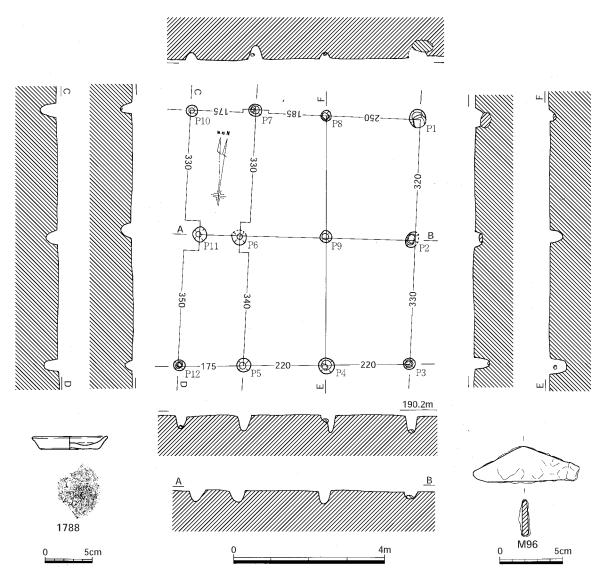
P4から瓦質片・土師器小片が、P7から土師器鍋、P20から小皿、P28から土師質鍋片、勝間田焼甕片、P9・11・23からは土師器片、瓦質鍋片、P10から土師器杯片などが出土している。(伊藤)



#### 掘立柱建物117 (第642・707図、図版142・175)

中央部東端に位置し、掘立柱建物116の東に接している。 桁行2間(6.7~6.5m)、梁行2間(4.4~4.35m)の南北棟で、 西側1間分の1.75mは庇と考えられる。柱穴間の距離は、桁 行3.3~3.2m、梁行2.5~1.85mである。建物の方位は磁北に





第707図 掘立柱建物117 (1/100) - 出土遺物 (1/4,1/3)

近くN-2°-Wである。床面積は庇部分を含め40.7㎡、身舎は29.48㎡を測る。

P4から土師器小皿1788、P2から火打鉄M96、他から土師器小皿・杯・鍋、勝間田焼椀片などが出土している。 (伊藤)

## 掘立柱建物118 (第642・708・709図、図版142)

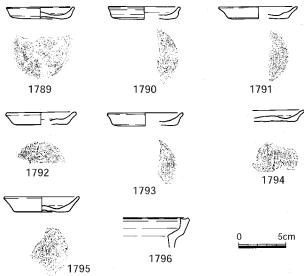
中央部東端に位置し、北側桁列は掘立柱建物116の南側桁列と同一線上にある。桁行 5 間(10.7~10.5m)、梁行 2 間(5~4.75m)の東西棟で、北側 1 間分が1.65~1.5mと狭く庇となる。柱穴間の距離は、桁行2.2~2 m、梁行2.55~2.3mである。

-480 -

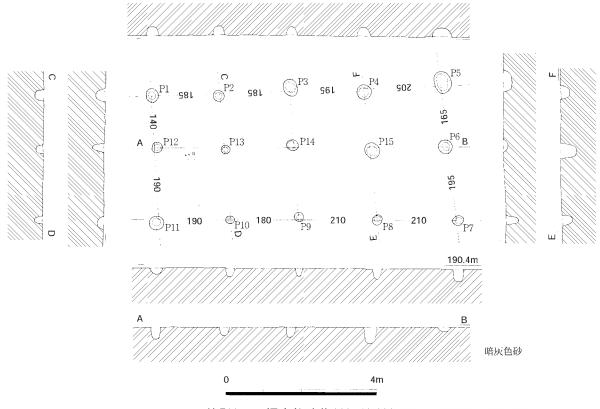
建物の方位は、真北に近くN-80°-Wである。 床面積は庇部分を含め66.8㎡、身舎は49.82㎡ を測る。P10から土師器小皿1789・1793、P 9から1790・1791・1794、P17から1792、P 21から1795、P12から土師器鍋1796、他にも 土師器小皿片・杯片、瓦質鍋片、勝間田焼甕 片、鉄製品(不明)など、多くの遺物が出土 している。 (伊藤)

## 掘立柱建物119 (第643・710図、図版142)

中央部南西に位置し、掘立柱建物120・121 と重なる。桁行4間(7.9~7.8m)、梁行2間(3.6~3.3m)を測る東西棟である。柱穴間



第709図 掘立柱建物118出土遺物 (1/4)



第710図 掘立柱建物119 (1/100)

の距離は、桁行 $2.1\sim1.8$ m、梁行 $1.95\sim1.4$ mである。建物の方位は、真北に近く $N-77^\circ$ -Wである。床面積は、26.9mである。柱穴の掘り方は $50\sim20$ cm、深さは $40\sim10$ cmとばらつきが見られる。

出土遺物はみられない。 (伊藤)

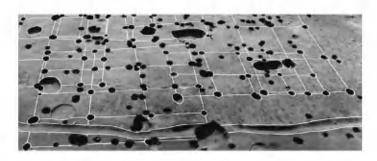
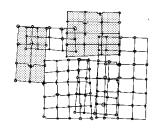
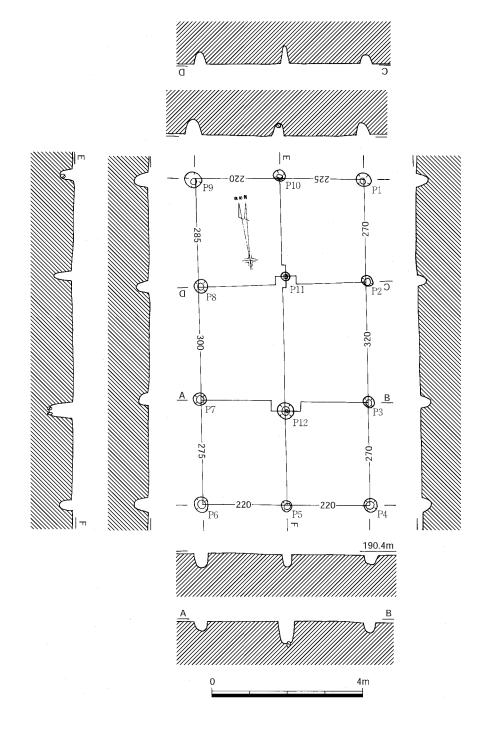


写真27 掘立柱建物119 (右下) 周辺遺構 (北から)



## **掘立柱建物120** (第643・711図、図版143)

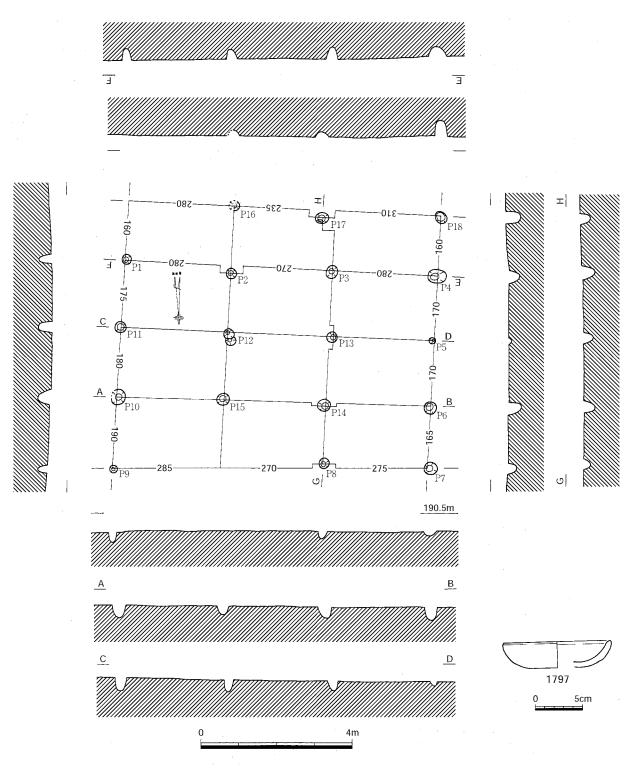
中央部南西に位置し、掘立柱建物119と北東部が、南東部が掘立柱建物122と軒が重なる。桁行3間(8.6m)、梁行2間(4.45~4.4m)の南北棟である。柱穴間の距離は、桁行3.2~2.7m、梁行2.25~2.2mである。建物の方位は、N-10°-Wである。床面積は、38.1㎡を測る。出土遺物はP7から備前焼甕片、P8から土師質鍋片、P9から土師器小細片などが出土している。 (伊藤)



第711図 掘立柱建物120 (1/100)

## **掘立柱建物121** (第643·712図、図版143)

中央部南西に位置し、西側が掘立柱建物119と重なる。桁行3間(8.3~8.25m)、梁行4間(7.1~6.7m)の東西棟と考えられる。柱穴間の距離は、桁行3.1~2.35m、梁行1.9~1.6mである。南北1間分は庇の可能性がある。建物の方位は、N-83°-Wである。床総面積は56.3㎡、身舎は29.8㎡を測る。P2から土師器杯1797の他に土師器小皿片・瓦質土器片などが出土している。 (伊藤)



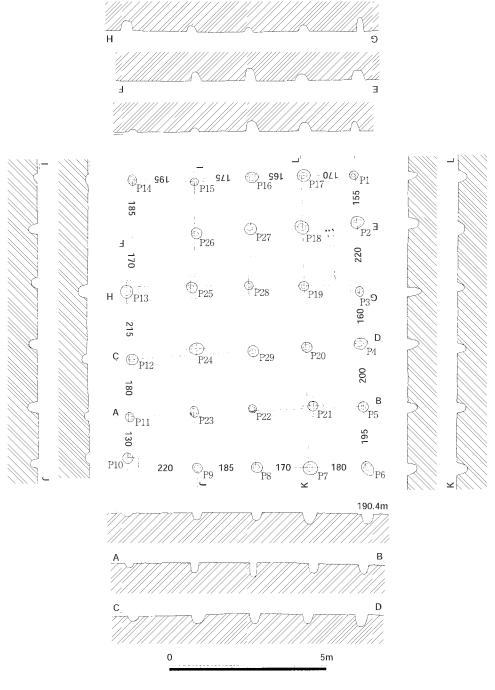
第712図 掘立柱建物121(1/100)・出土遺物(1/4)

## 掘立柱建物122 (第643・713図、図版143)

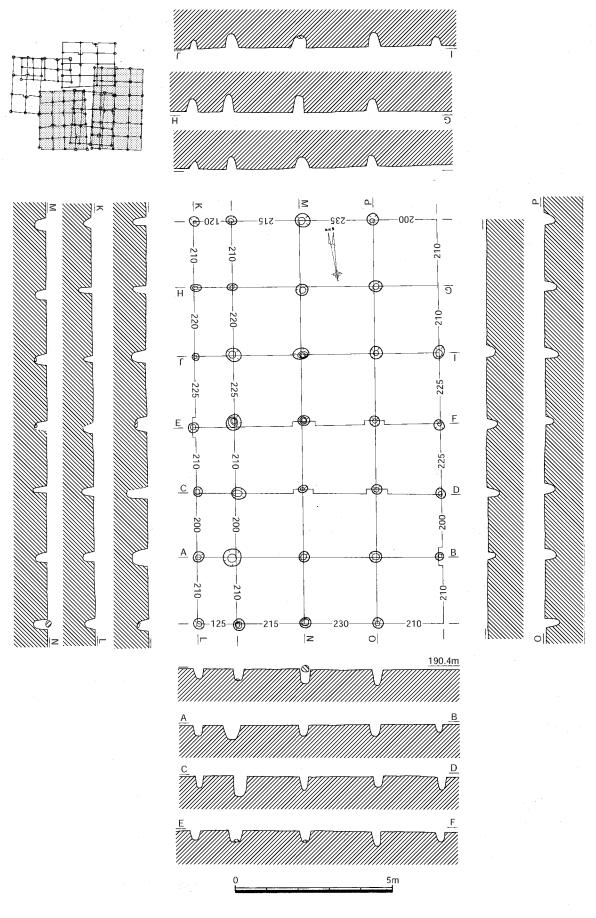
中央部南西に位置し、掘立柱建物120と北西部が、東側が掘立柱建物122と重なる。桁行 5 間 (9.3 ~8.9m)、梁行 4 間 (7.55~7m) の南北棟である。柱穴間の距離は、桁行2.15~1.3m、梁行2.2~1.65 mである。建物の方位は、N-9°-Eである。床面積は66.1㎡を測る。柱穴内から、土師器皿・小皿片などが出土している。 (伊藤)

#### **掘立柱建物123** (第642·714図、図版144)

中央部南西に位置し、北西側が掘立柱建物121と、西側が掘立柱建物124と重なる。北東角2本と南東角の柱穴を欠くが、桁行6間(13.85~12.9m)、梁行3間(6.55~6.5m)の東西棟で、北側に1.25



第713図 掘立柱建物122 (1/120)

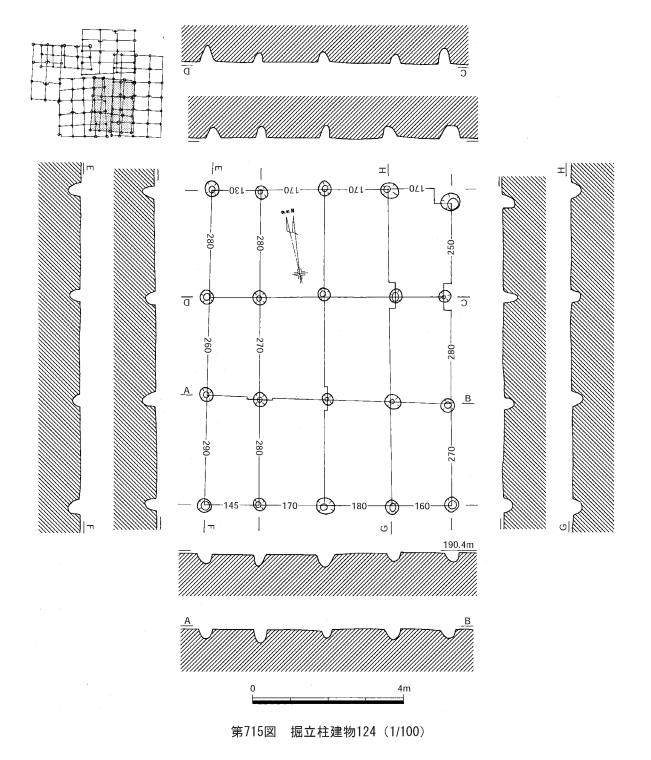


第714図 掘立柱建物123 (1/120)

~1.2mの庇あるいは、縁を持つ建物である。柱穴間の距離は、桁行2.25~2 m、梁行2.35~2 mである。建物の方位は、N-10°-Eである。床面積は庇部分を含め99㎡、身舎は83.2㎡を測る。柱穴内から土師器小皿片・瓦質鍋片などの小片が出土している。 (伊藤)

# **掘立柱建物124**(第643・715図、図版143・144)

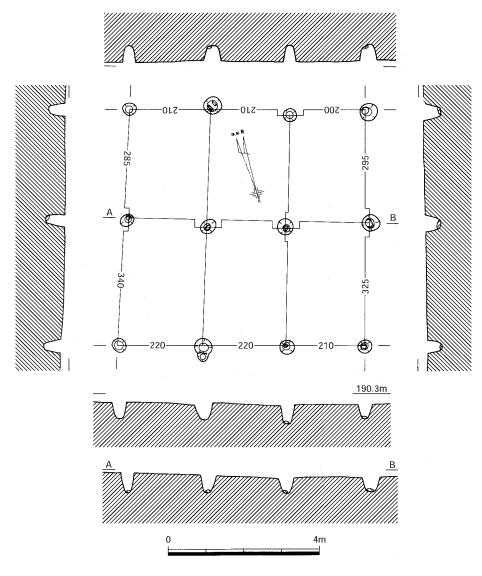
中央部南西に位置し、中央より東が掘立柱建物123と、中央より西が125と重なる。桁行 3 間(8.3~8.79m)、梁行 4 間(5.2~5.1m)の南北棟である。1.45~1.3mの庇を持つ。柱穴間の距離は、桁行 2.8~2.5m、梁行1.8~1.6mである。建物の方位は、N-14°-Eである。床面積は庇部分を含め52.8㎡、身舎は41.82㎡を測る。柱穴内から、上師器鍋・杯・小皿片などが出上している。



-486-

#### **掘立柱建物125** (第643·716図、図版144)

掘立柱建物124の南西40m、3903Dhから検出された東西棟で、棟方向はN-69°-Wである。規模は桁行6.5m、梁行6.25m、床面積39.5㎡を測る。柱穴間の距離は桁行2.2~2m、梁行3.4~2.85mを測る。柱穴は径50~35cm、深さ40cm前後を測り、大半の柱穴底部には扁平な礎盤石が据えられていた。遺物は柱穴から総計鉄滓49gが出土したのみで土器類は皆無であった。 (江見)

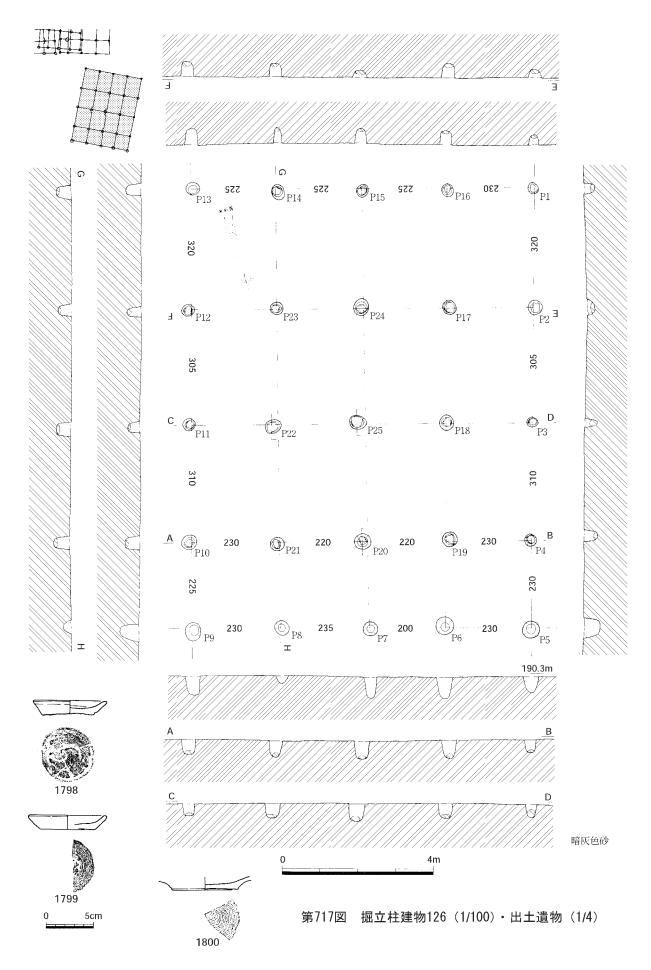


第716図 掘立柱建物125 (1/100)

## 掘立柱建物126 (第642・717図、図版145・175)

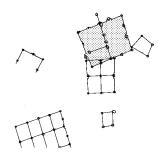
中央部南東に位置する。桁行 4 間(11.6m)、梁行 4 間(8.95~8.85m)の南北棟である。南側 1 間分の桁間が2.3~2.25mと狭く、庇の可能性を持つ。柱穴間の距離は、桁行3.2~2.25m、梁行2.3~2m、である。建物の方位は、N-19°-Eである。床面積は庇部分を含め104.6㎡、身舎は83.14㎡を測り、久田原遺跡の建物群の中では 4 番目の大きさを持つ。

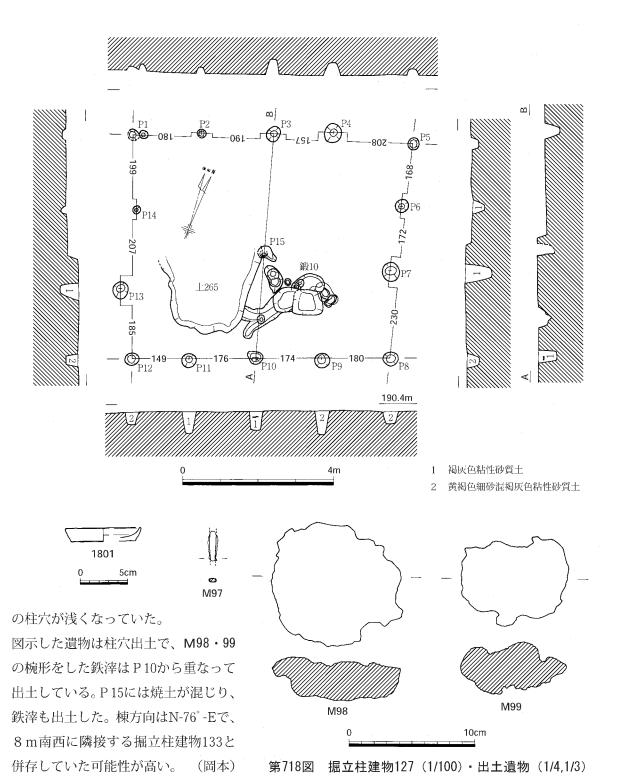
P3・18から土師器小皿1798・1799、P20から勝間田焼椀底部1800、他の柱穴から土師器鍋片・小皿片などが出土している。 (伊藤)



#### 掘立柱建物127 (第632・644・718図、図版145・146)

3905Dh区に位置する。東辺がすこし斜行するが、桁行4間、梁行3間の建物と考えられる。桁行の中央柱穴を結ぶ梁間の中央に柱があり(P15)、これによって四分割された建物の南東部分の真ん中に鍛冶炉10が設けられていた。桁行全長7.35m、梁行全長5.91m、床面積は41.0㎡を測る。柱穴掘り方は円形で、長径が32~52cmあり、四隅

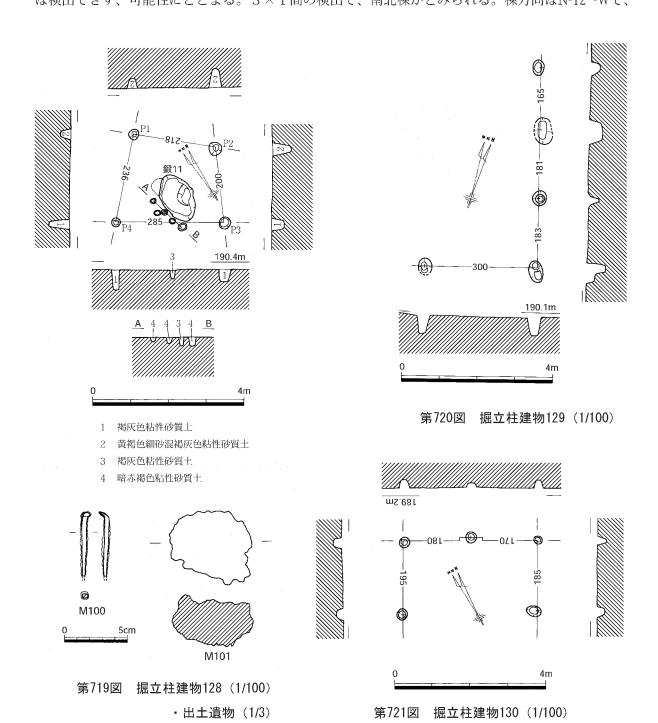




#### 掘立柱建物128 (第632・644・719図、図版145・146)

3 9 05 Dh区に位置し、掘立柱建物127と重複する。不整形な四辺形を呈しているが、中央付近で鍛冶炉11が検出されていることから、その簡略的な覆い屋の可能性を考えている。鉄釘と椀形滓が柱穴から出土しているが、椀形滓の出土は掘立柱建物127でもみられ、このことも鍛冶炉と建物の関係の参考になっている。南西桁は2間をなすか。柱穴掘り方は円形で、長径が25~37cm、床面積は5.5 ㎡を測る。鍛冶炉の西側の柱穴列からも鍛冶滓が出土し、炉に伴う施設の痕跡かとみられる。(岡本)掘立柱建物129(第632・644・720図)

3905 Dh区で掘立柱建物127と重なっていた。複数の調査区にまたがっていたため、完全な形では検出できず、可能性にとどまる。 $3\times1$  間の検出で、南北棟かとみられる。棟方向はN-12°-Wで、

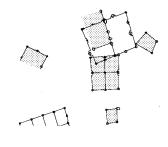


掘立柱建物133とほぼ直交する。柱穴掘り方は円形ないしは楕円形で、長径42~70cmを測る。(岡本) 掘立柱建物130 (第632・721図)

3905Dg区で検出した建物で、掘立柱建物127の西7mに位置する。東西2間(3.5m)、南北1間 (1.95m) 以上で、現状の主軸はN-65°-Wにある。柱穴は径20~40cmと 小規模で、北東辺中央の柱穴は浅い。出土遺物はない。 (亀山)

#### 掘立柱建物131 (第632・644・722図、図版147)

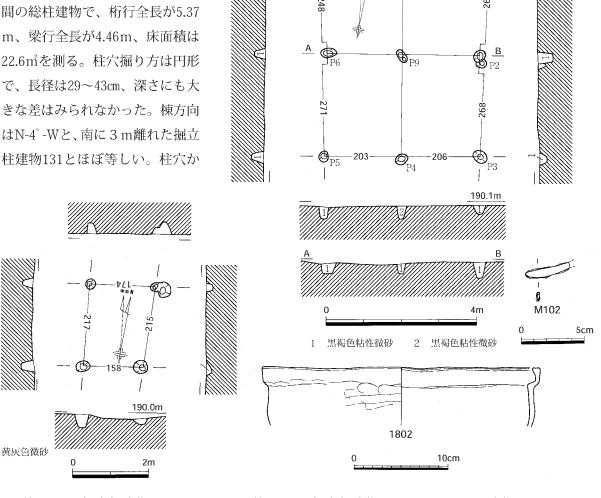
3 906 Dh区にある 1 × 1 間の小形建物である。床面積は3.6 ㎡にすぎ ない。鍛冶炉12と重複するが、炉が西桁の中央付近にあって、出上遺物 もなく、掘立柱建物128ほど鍛冶炉と建物の親密性は高くない。ただ、 柱穴の一部は鍛冶炉と検出面を同じくしていた。柱穴掘り方は円形で、 長径が27~38cmを測る。 (岡本)



## 掘立柱建物132 (第632・644・

723図、図版146)

3906Dh区に位置し、掘立柱 建物127や土壙266と重複している。 土壙266は偶然か掘立柱建物132の 南半に収まる。桁行2間、梁行2 間の総柱建物で、桁行全長が5.37 m、梁行全長が4.46m、床面積は 22.6㎡を測る。柱穴掘り方は円形 で、長径は29~43cm、深さにも大 きな差はみられなかった。棟方向 はN-4°-Wと、南に3m離れた掘立 柱建物131とほぼ等しい。柱穴か



 $\Theta_{\overline{P7}}$ 

第722図 掘立柱建物131 (1/100)

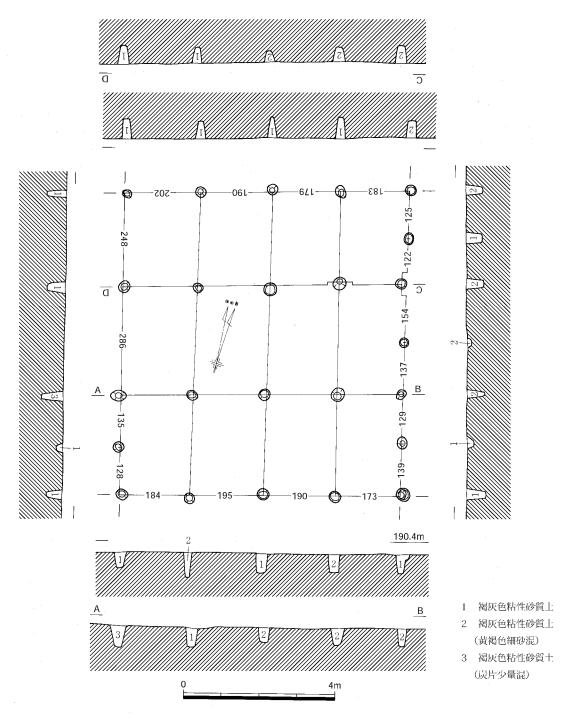
第723図 掘立柱建物132 (1/100) - 出土遺物 (1/4,1/3)

らは土師器や瓦質土器1802が出土し、器種不明の鉄器片M102や鉄滓もみられた。

(岡本)

### **掘立柱建物133** (第632・644・724図、図版147)

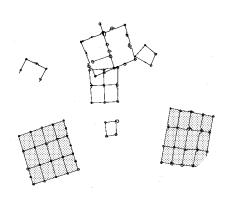
3907Dg区で検出された中形の建物である。桁行4間、梁行3間の総柱建物で、桁行全長は7.54m、梁行全長が8.06m、床面積は60.6㎡を測る。東西棟の建物で、その方向はN-79°-Eをなし、近隣の掘立柱建物98・127・141などと併存するか。東梁行と西梁行の南1間では東柱が柱間中央にあったことから、建物の東と南の1間分は広縁のような開放された空間であったとみられる。柱穴は円形で、長径が26~44cm、深さは最深で68cmを測る。出土遺物は土師器片と鉄滓であった。 (岡本)

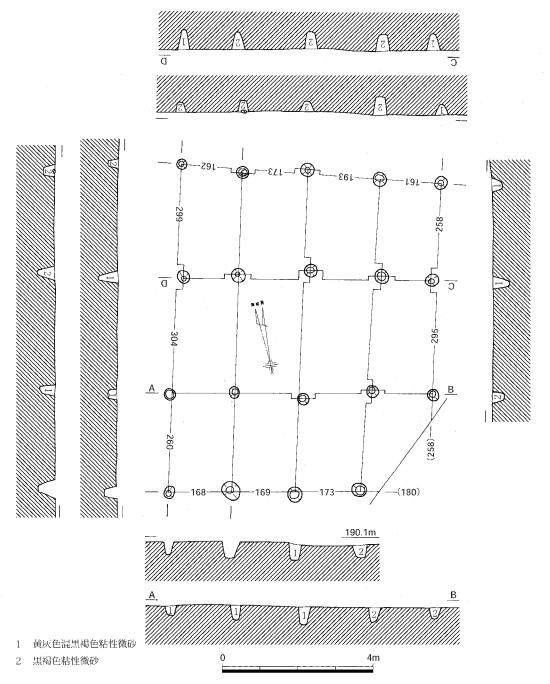


第724図 掘立柱建物133 (1/100)

## **掘立柱建物134** (第632・644・725図、図版147)

3906 Di区に位置する 4×3間の総柱建物である。建物の四隅は直角にはならず、やや歪んだ長方形の平面形をもっている。とくに北辺の傾斜が目につくが、この辺の柱穴は浅く、あるいは北1間が庇になる可能性も考えられる。しかし、柱穴の規模や柱間は他と大きな差はないため、ここでは南北棟の建物としておく。桁行全長8.63m、梁行全長6.89m、床面積57.7㎡。柱穴は円形で長径27~53cmを測る。(岡本)





第725図 掘立柱建物134 (1/100)

#### **掘立柱建物135** (第642·726図、図版148)

中央部南東に位置し、掘立建柱建物136の北側部分の2間分と重なる。桁行4間(8.1~8.05m)、梁行2間(6.2~6m)の東西棟である。柱穴間の距離は、桁行2.2~1.7m、梁行3.2~2.8mである。建物の方位は、N-73°-Wである。床面積は、49㎡を測る。柱穴掘り方は直径50~20cm、深さ20~4cmと幅がある。P1から土師器鍋1803、他の柱穴から備前焼?、土師器鍋片・土師器の小片などが出土している。

## 掘立柱建物136 (第642・727図、図版148・175)

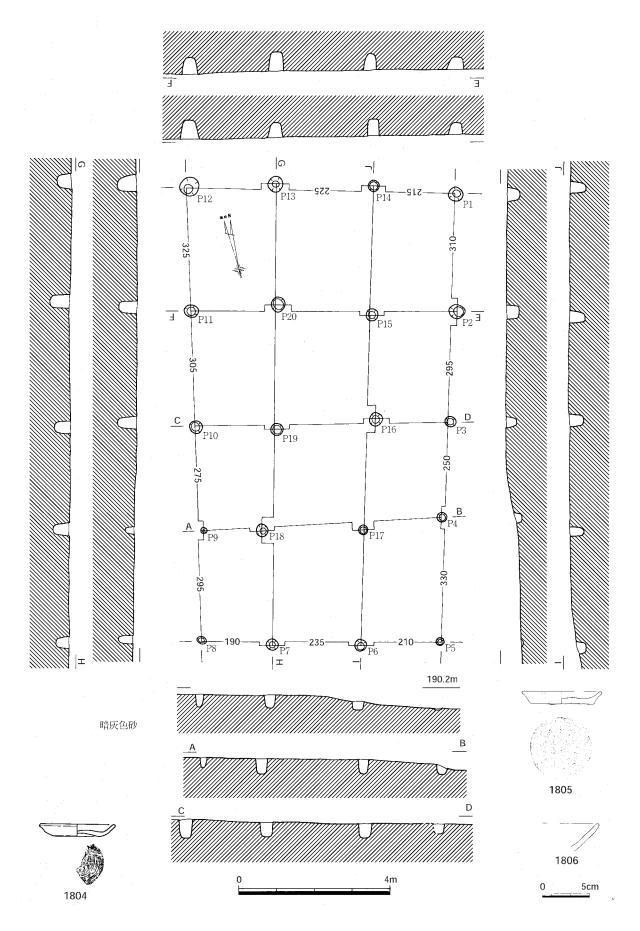
中央部南東に位置し、掘立柱建物135の西側部分の3間分と重なる。南東部は落ち込み3によって削られており、南東角の柱穴での検出面は50cm程低い。桁行4間(12~11.85m)、梁行3間(7.1~6.35m)の南北棟である。柱穴間の距離は、桁行3.3~2.5m、梁行2.35~1.9mである。建物の方位は、N-16°-Eである。床面積は、79.9㎡を測る。柱穴掘り方は16cm、深さ16cmである。P13から出土した土師器小皿1804は、口径7.5cm、高さ1.4cmで、底部は篦で起こしている。P11から出土した1805は、口径8 cm、高さ1.4cmを測る。底部は篦で起こししている。P15から土師器杯口縁部1806、P1から

土師質鍋、P2・8から土師質小皿、P6・7・9から土師質杯、P6から勝

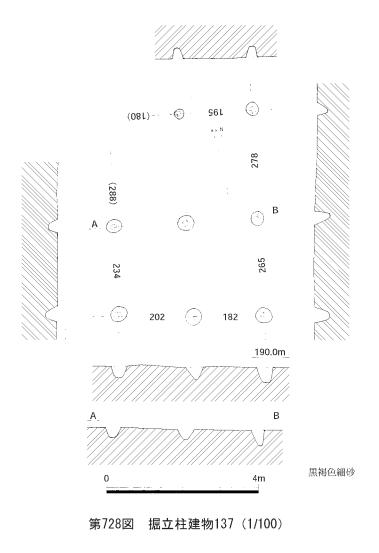
間田焼焼片などの小細片が多く出土している。 (伊藤)

P1 061 P2 581 P3 S1Z P1 S1Z P5 S1Z P5 S1Z P5 S1Z P5 S1Z P5 S1Z P5 S1Z P6 S1Z P6 S1Z P7 S1Z P6 S1Z P7 S1Z P6 S1Z P7 S1Z P7 S1Z P6 S1Z P6 S1Z P6 S1Z P7 S1Z P6 S1Z

第726図 掘立柱建物135(1/100)・出土遺物(1/4)



第727図 掘立柱建物136 (1/100) - 出土遺物 (1/4)



#### 掘立柱建物137 (第632·647·

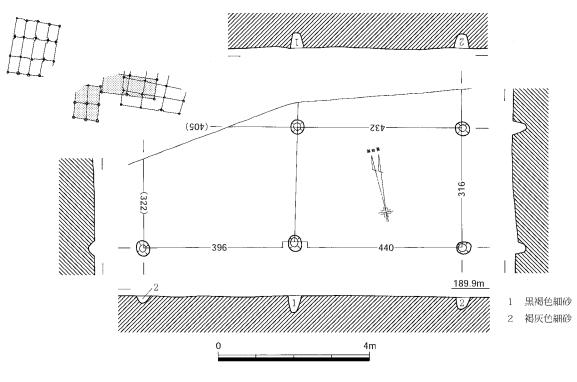
728図、図版148)

3907 Dj区にあり、桁行2間、梁行2間と推定される総柱建物である。 南辺がやや斜行して歪んでいる。桁行全長が5.43m、梁行全長は3.84m、床面積は20.2㎡を測る。棟方向はN-9°-Eで、近隣の建物とは少し異なる。柱穴掘り方は円形で、長径が27~45cmである。出土遺物はなかった。掘立柱建物138とは重複関係にある。(岡本)

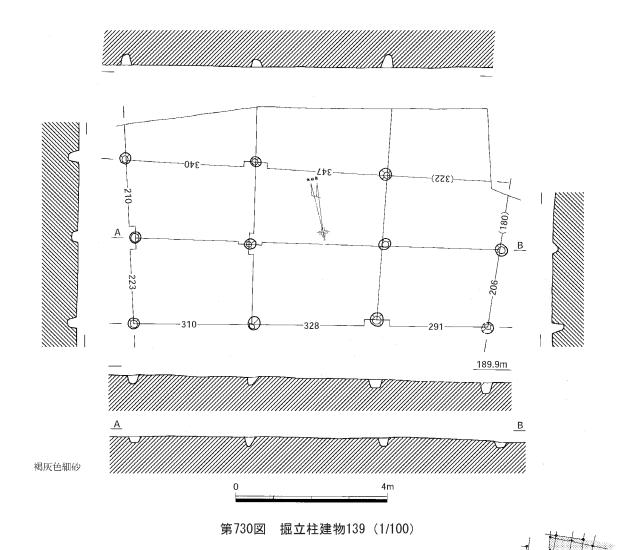
## 掘立柱建物138 (第632・647・

729図、図版149)

3907 E a区で検出され、北方の未調査部分に延びていたものとみられるが、3間を超えることはない。総柱の建物であろう。南辺の4m前後の柱間は稀で、掘立柱建物95・157・158しかない。東西棟の建物と考えると、桁行全長は8.36mとなる。柱穴は円形で、長径が39~42cmを測る。(岡本)



第729図 掘立柱建物138 (1/100)



掘立柱建物139 (第632・647・730図、図版149)

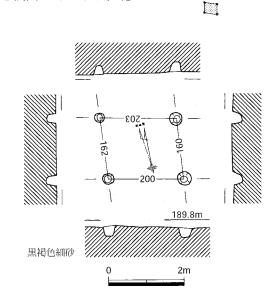
3907 E a区にあり、掘立柱建物138と重複している。棟方向が近似し、どちらかが建て直されたものとみられる。総柱の $3\times2$  間分を検出しているが、北

方の未調査部分に続いていた可能性があり、図上の逆 ハの字状の平面形も修正されるかもしれない。東西棟 の建物と推定され、桁行全長は9.29mである。柱穴掘 り方は円形で、長径28~36cmを測る。 (岡本)

#### **掘立柱建物140** (第632・647・731図、図版149)

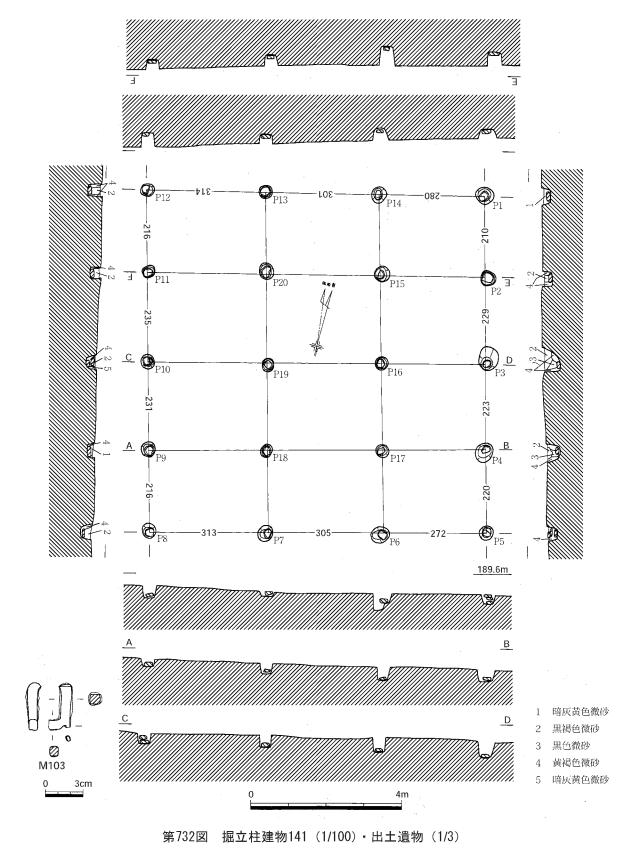
3 9 08 E a区で検出された 1 × 1 間の小形の建物である。棟方向はN-71°-Wで、北へ10m離れた掘立柱建物139のそれと近しい。桁行2.02m、梁行1.62m、床面積は3.2㎡にすぎない。柱穴掘り方は円形で、長径は26~38cmを測る。出土遺物はなかった。 (岡本)

**掘立柱建物141**(第632・647・732図、図版149・150) 4 0 03 D i 区で検出された総柱建物である。桁行 3 間、梁行 4 間の構造で、桁行全長が8.95m、梁行全長



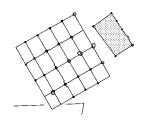
第731図 掘立柱建物140 (1/100)

は8.98mあり、ほぼ正方形の平面形をもつ。ただ、建物の四隅は直角からわずかに増減し、少し歪んでいる。床面積は79.4㎡である。柱穴は円形で、長径が35~64cmを測り、すべての柱穴の底に扁平な河原石が据えられていた。石を2個重ねた柱穴と3個重ねた柱穴が1個ずつあり、柱の高さを調整し



-498 -

たものと考える。ちなみに、北西から南東へ傾斜する地形に合わせて柱穴の底部も低くなっていて、柱材の長さは揃っていなかったとみられる。ほとんどの柱穴で柱痕跡が確認され、その直径は16~30cmを測る。棟方向は柱穴列13や掘立柱建物133と近く、併存した可能性が高い。 (岡本)

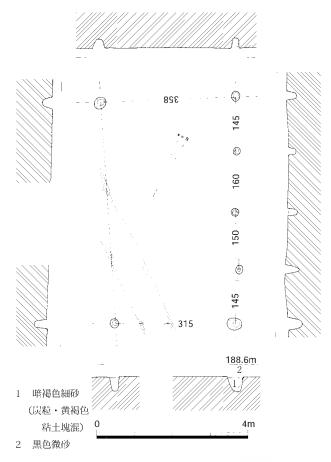


## 掘立柱建物142 (第633·733図、図版150)

4006 D f 区にあり、掘立柱建物143の東に隣接していた。建物142の東辺は建物143の棟方向と近似しているため、付属施設の可能性もある。桁行4間、梁行1間の建物とするが、東桁行の中間にある3個の柱穴は径が小さく浅いため、通有の建物とは形態を異にするかもしれない。柱穴長径は21~40cm、床面積は20.0㎡を測る。 (岡本)掘立柱建物143 (第633・734・735図、

写真28、図版150·175)

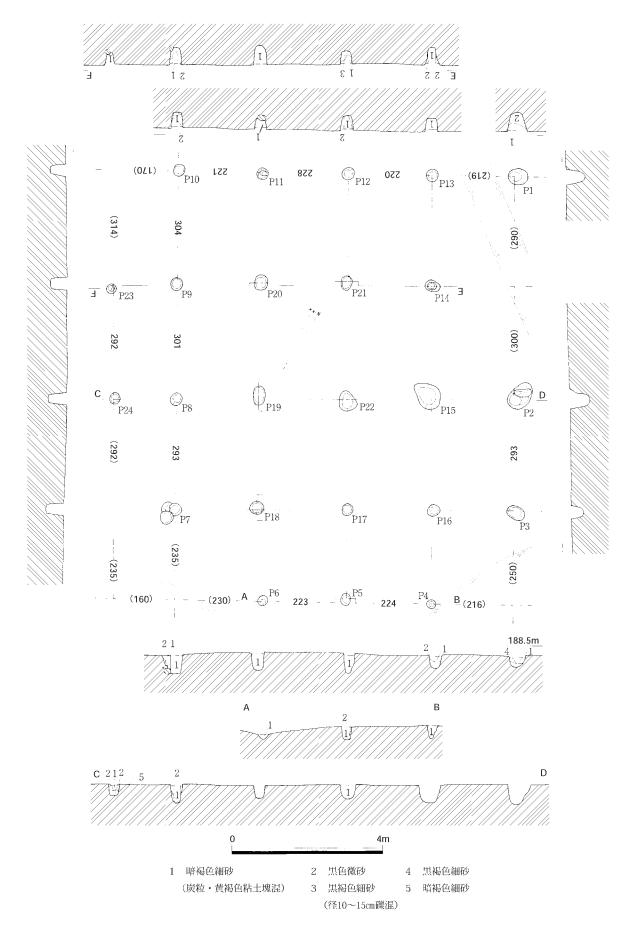
4007De区で検出された大形の建物である。全体の規模は桁行5間、梁行4間で、桁行全長10.58m、梁行全長11.35m、床面積は119.6㎡を測る。このうち、西縁辺の柱穴は長径が小さく、深さも東隣の柱穴より浅くて、西端の柱間も他よりかなり短いため、西端の1間は縁ではないかと考える。また、南辺の柱穴も、検出面が他の柱穴より一段低いこともあるが、長径が小さく、南端の柱間も短いため、この南端1間も庇



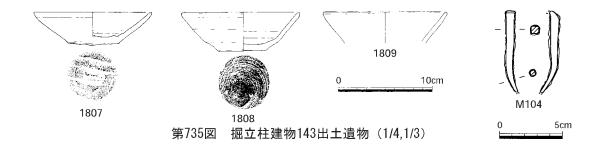
第733図 掘立柱建物142 (1/100)



写真28 掘立柱建物143清掃作業(南から)



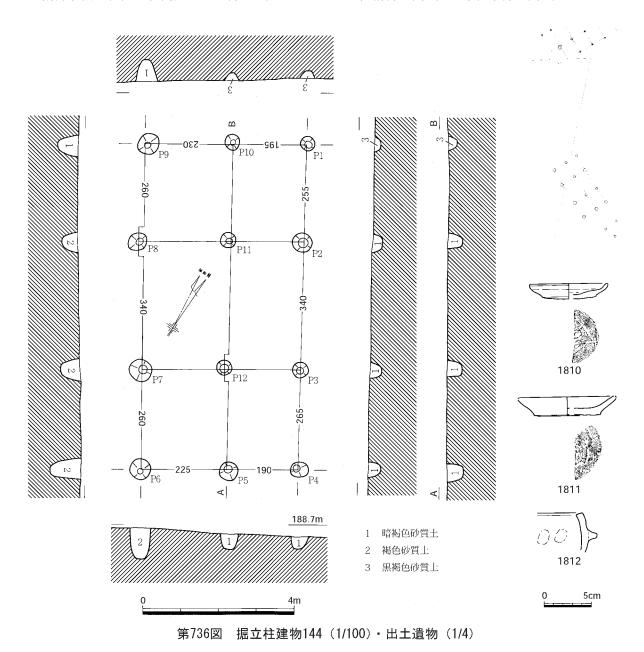
第734図 掘立柱建物143 (1/100)



の可能性が高い。柱穴の長径は25~83cmと変化が大きい。柱痕跡を残す柱穴が多く、その直径は13~23cmを測る。出土遺物には土師器の杯や鉄釘・鉄滓などがあり、杯は底部をヘラ切りするものと糸切りするものの両者がみられる。遺物から掘立柱建物143の年代は室町時代と考えられる。 (岡本)

#### 掘立柱建物144 (第649·736図)

南部北西に位置し、河道10に並行して建てられている。桁行3間(8.6m)、梁行2間(4.25~4.15

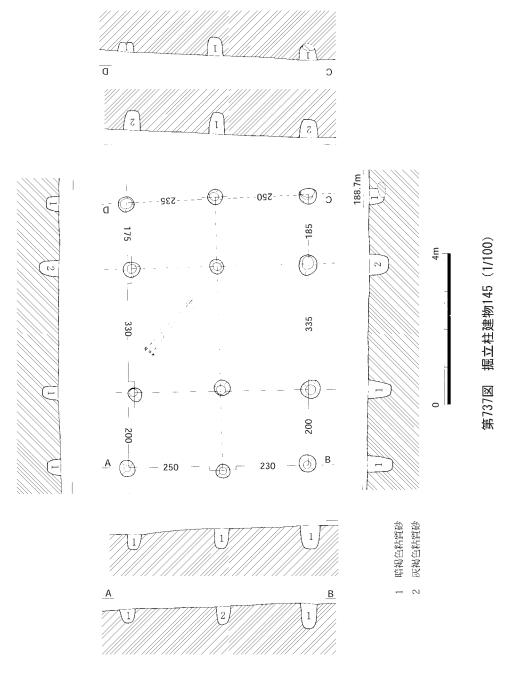


-501 -

m)の南北棟である。柱穴間の距離は、桁行 $3.4\sim2.55$ m、梁行 $2.3\sim1.9$ mを測る。建物の方位は、N- $27^{\circ}$ -Wである。床面積は、35.7mがを測る。柱穴の掘り方は $60\sim40$ cm、深さ $80\sim15$ cmを測る。 P 6 から出土した土師器小皿1810は、口径8 cm、高さ1.6cmを測る。 P 1 から出土した土師器小皿1811は、口径12cm、高さ12cmを測る。両者とも底部は篦で起こしている。 P 4 からは瓦質羽釜の口縁部片1812が出土している。

#### **掘立柱建物145** (第649·737図、図版154)

南部北西に位置する。桁行 3 間( $7.2\sim7.05$ m)、梁行 2 間( $4.85\sim4,8$ m)の建物である。柱穴間の距離は、桁行 $3.35\sim1.75$ m、梁行 $2.5\sim2.3$ mを測り、桁行中央部が $3.35\sim3.3$ mと広く、両側が $2\sim1.75$ mと狭く桁行 1 間、梁行 2 間の建物に、両庇の付く建物の可能性がある。建物の方位は、 $N-37^\circ$ -Wである。床面積は、33.9m²を測る。出土遺物はみられない。 (伊藤)





### 掘立柱建物146 (第649・

738図)

南部北西に位置し、河道10に 並行して建てられている。桁行 2間(4.2~3.85m)、梁行1間 (1.85~1.5m)の小規模な建物 である。柱穴間の距離は桁行 2.1~1.9m、梁行1.85~1.5m

を測る。建物の方位は $N-57^\circ$ -Eである。床面積は7.7㎡と極端に狭く、この遺跡内において  $2\times1$ 間の掘立柱建物の中でも 2番目に狭い床面積である。

出土遺物はみられない。 (伊藤)

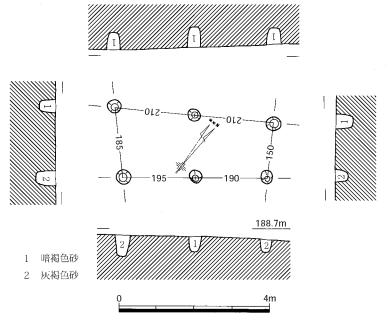
## 掘立柱建物147 (第649·739図)

南部北西に位置し掘立柱建物148と重なる。桁行 2 間(5.45~5.3 m)、梁行 1 間(3.05~2.75) mの小規模な建物である。柱穴間の距離は桁行2.75~2.6 m、梁行3.05~2.75 mを測る。梁中央列が、25~10 cm外にでる。柱穴掘り方は40~30 cm、深さ40~20 cmを測る。建物の方位はN-43°-Wである。床面積は15.5 ㎡である。

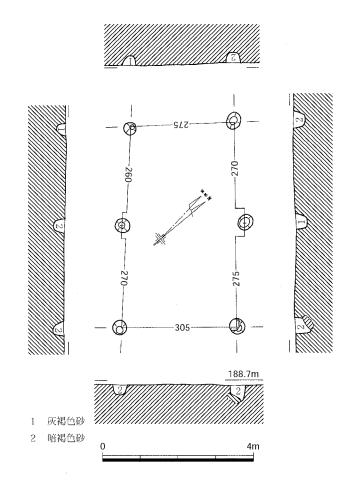
出土遺物はみられない。 (伊藤)

#### 掘立柱建物148(第649・740図)

南部北西に位置し掘立柱建物147と重なる。この建物も河道10に並行して建てられている。桁行3間(6.4~6.25m)、梁行1間(3.15~3.1m)で、南西の1間2.05~2m分は庇を持つ建物と考えられる。柱



第738図 掘立柱建物146 (1/100)

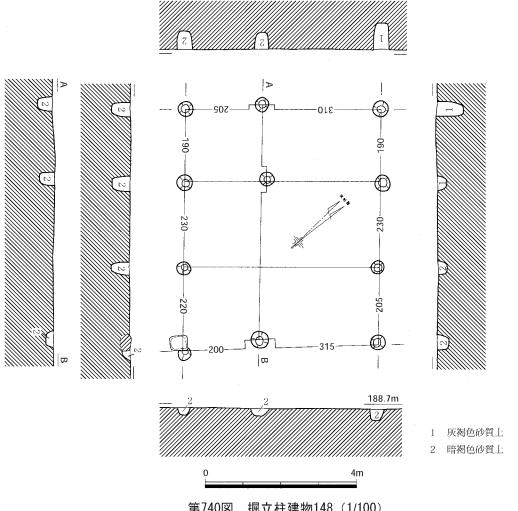


第739図 掘立柱建物147(1/100)

穴間の距離は桁行2.3~1.9m、梁行3.15~3.1mを測る。柱穴の掘り方は40~30cm、深さ70~25cmを測る。建物の方位はN-44°-Wである。床総面積は32.4㎡で、身舎は19.22㎡を測る。



掘立柱建物148周辺遺構検出状況(東から)



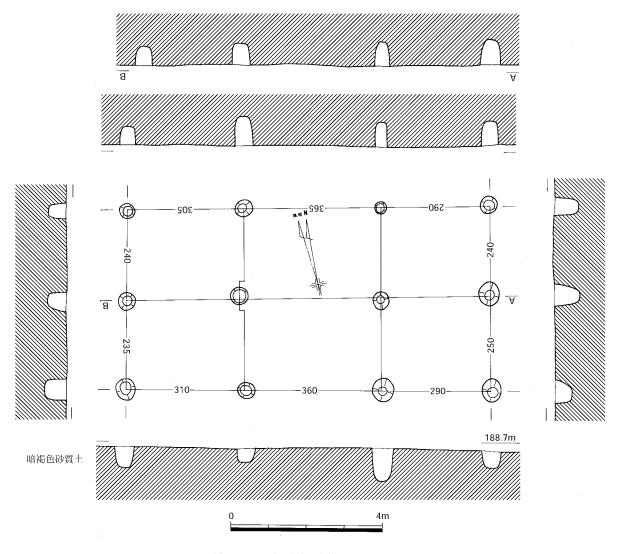
第740図 掘立柱建物148 (1/100)

出土遺物はみられない。

(伊藤)

## **掘立柱建物149** (第649·741図、図版154)

南部北西に位置する。桁行3間(9.6m)、梁行1間(4.9~4.75m)の略東西方向の建物である。柱 穴間の距離は、桁行中央が3.65~3.6mと広く、両側が3.1~2.9mと狭い。梁行は2.5~2.35mを測る。 柱穴の掘り方は、50~30cm、深さ90~40cmを測る。建物の方位は、N-73°-Wである。床面積は46.4㎡



第741図 掘立柱建物149 (1/100)

である。出土遺物はみられない。

(伊藤)

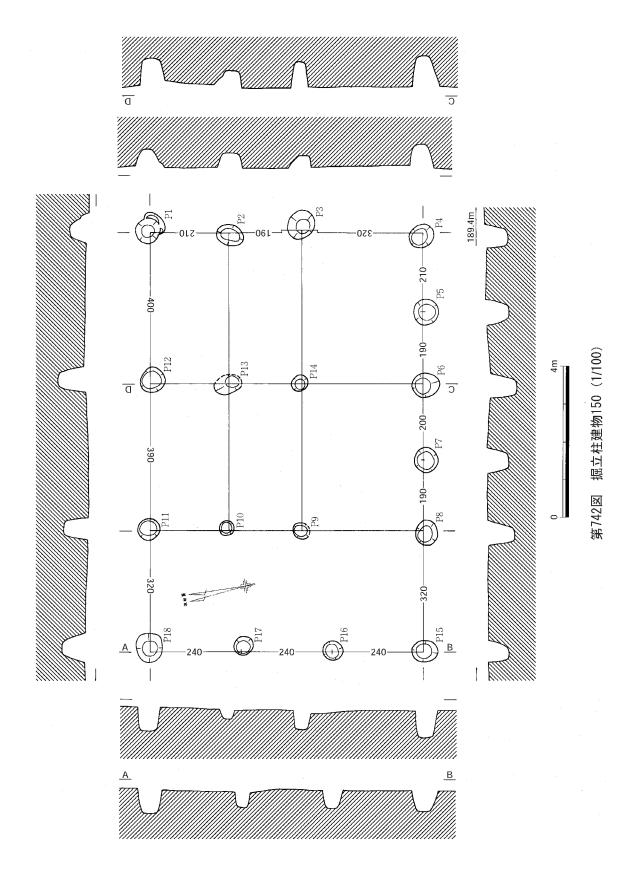
## 掘立柱建物150 (第649・742凶、写真30)

4 1 04 De区から検出された、 大形の柱穴をもつ変則的ながら  $3 \times 2$  間の南北棟に西側に庇が 延びた建物と推定される。棟方 向は $N-17^\circ$ -Eである。規模は桁 行( $P1 \sim 4$ )7.2 m、梁行 ( $P4 \sim 8$ )7.9 m、床面積56.88 ㎡を測り、庇部分23.04㎡を加 えると総計79.92㎡となる。

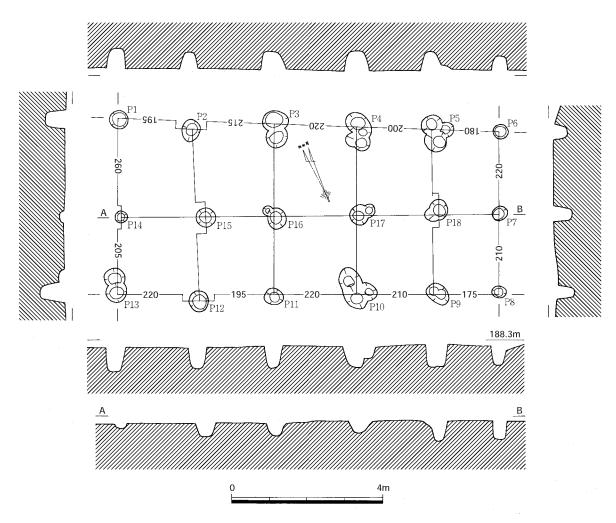
柱穴間の距離は桁行の $P1\sim$ 3 間が2m前後であるのに対し $P3\cdot 4$ は3.2mと長い一方、



写真30 掘立柱建物150清掃作業(西から)



梁行は 4 m前後を測るが南側は束柱が掘られていて、建物南側の広い空間との関係からこのような柱穴配置になったのではないかと考えている。また、西側に 1 間分出された庇の柱穴は桁行全体を 3 等分する位置に配せられていた。柱穴は総じて大きく径 $40\sim70$ cm、深さ $40\sim70$ cmを測る。遺物は土師器



第743図 掘立柱建物151 (1/100) - 出土遺物 (1/4)

小皿・鍋、瓦質鍋、備 前焼片などが出土して いる。 (江見)

掘立柱建物151 (第 649・743図、写真 31、図版155)

掘立柱建物150の南から検出された東西に細長い5×2間の建物で、棟方向はN-61°-Wである。規模は桁行10.1m、梁行4.65m、床面積45.2㎡を測る。柱穴間の距離は桁行2.25~1.6m、梁行2.6~2.05mを測る。柱穴は径

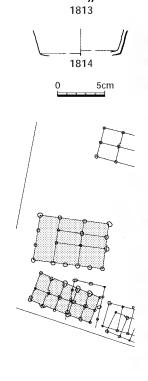




写真31 掘立柱建物151周辺遺構検出状況(西から)

 $30\sim50$ cm、深さ $15\sim40$ cmとばらつく。遺物はP11から白磁皿1813、P6から瀬戸美濃火入れ香炉1814のほか、柱穴からは土師器小皿・鍋片、鉄滓45gなどが出土している。1814の年代観から、建物の時期は中世末から近世初頭に比定される。

#### **掘立柱建物152** (第649・744図、図版155)

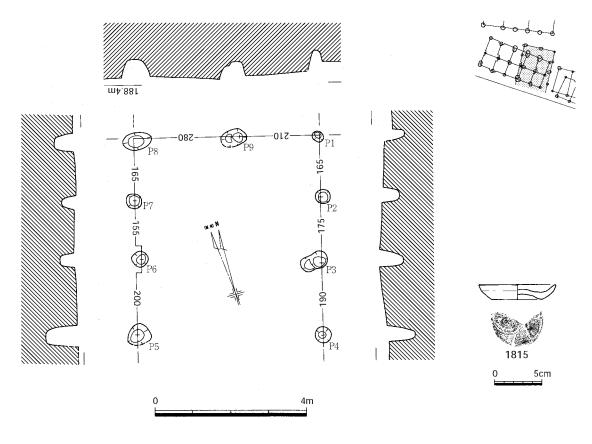
掘立柱建物151の東部分に重複して検出された建物で、一部を後述する窪地  $6\cdot7$ によって削平を受けている。桁行は南部分が既存道路内に延びるため不明であるが 3 間以上×梁行 2 間、棟方向は N-21°-Eである。規模は桁行5.3m以上、梁行4.9m、床面積26m<sup>3</sup>以上である。柱穴間の距離は桁行 2 ~1.55m、梁行2.8~210mを測る。柱穴は径40cm前後、深さ40~70cmを測り、特に南端にあたる P  $4\cdot5$  はいずれも深く、桁行 3 間の建物になる可能性もある。遺物は P 3 からの土師器小皿1815をはじめ、 P 5 から土師器鍋片、 P 8 から瓦質鍋片が出土している。1815は上げ底を呈し、底部の切り離しは回転糸切りされており中世後半のものと考える。

#### 掘立柱建物153(第649・745図、図版155・156・175)

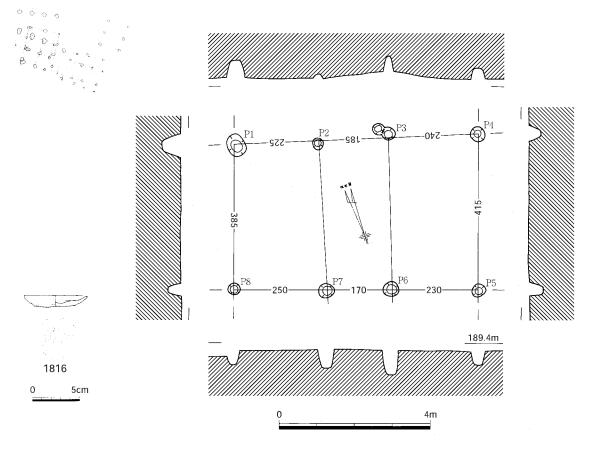
掘立柱建物152の東から検出された桁行推定2間×梁行3間の南北棟で建物は南の既存道路に延びるものと思われる。なお、一部窪地6に削平を受けている。規模は桁行4.15m以上、梁行6.5m、床面積50㎡前後と推定される。遺物はP8から土師器小皿1816が出土している。 (江見)

#### 掘立柱建物154(第649・746図、図版155・156)

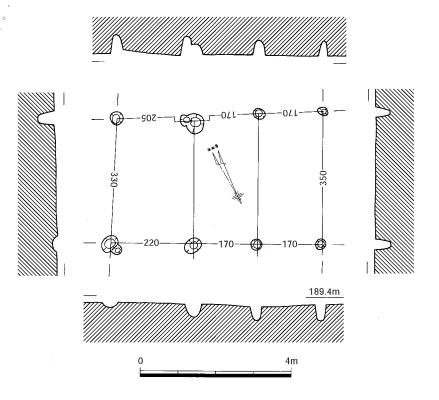
掘立柱建物153に重複して検出された桁行推定2間×梁行3間の南北棟で、掘立柱建物153と同様に建物南部は道路下に延びていたものと推定される。棟方向はN-30°-Eである。規模は桁行3.5m以上、梁行5.6m、床面積40㎡前後と推定される。遺物は備前焼小破片が出土するのみであった。 (江見)



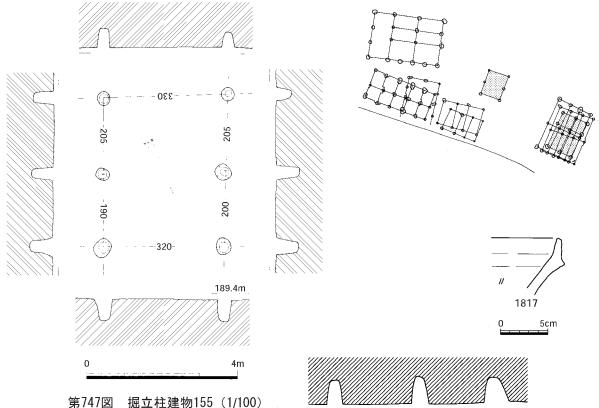
第744図 掘立柱建物152(1/100)・出土遺物(1/4)



第745図 掘立柱建物153 (1/100) · 出土遺物 (1/4)



第746図 掘立柱建物154 (1/100)



## **掘立柱建物155** (第649・747 図、図版155・156)

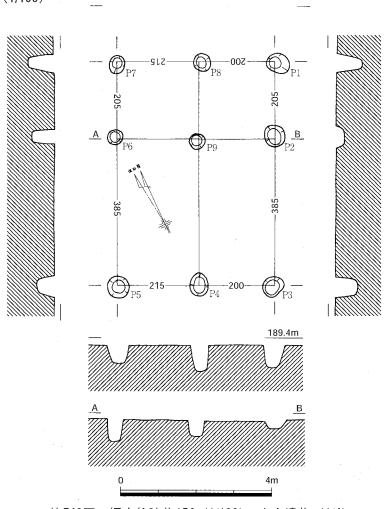
掘立柱建物153の北東数mから検出された2×1間の南北棟で、棟方向はN-28°-Eである。規模は桁行4.05m、梁行3.3m、床面積13㎡の小規模な建物である。柱穴間の距離は桁行2.05~1.9m、梁行3.3~3.2mを測る。

遺物は柱穴から土師器の小皿・鍋片、備前焼片、鉄滓97gなどが出土している。 (江見)

# 掘立柱建物156(第649・748

図、図版156·157)

掘立柱建物155の南東10数m、4 1 05 Dhから検出された建物で後述する掘立柱建物157・158と重複する。変則的な2×2間の南北棟で棟方向はN-31°-Eである。規模は桁行5.9m、梁行



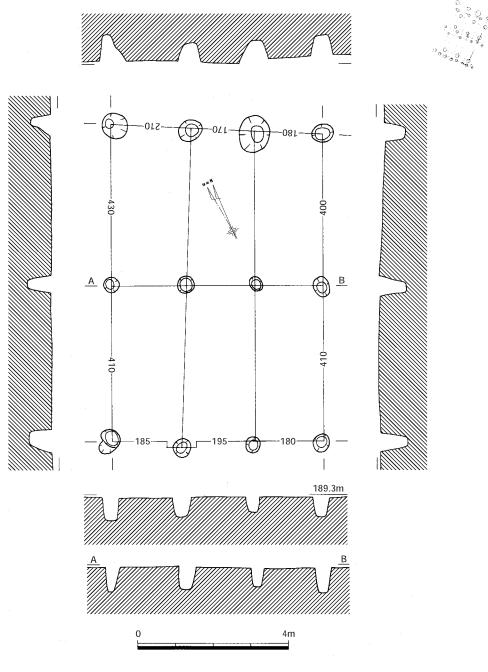
第748図 掘立柱建物156(1/100)・出土遺物(1/4)

4.15m、床面積24.5m を測る。柱穴間の距離は桁行北側が短く2.05m、南側が3.85と倍近く、梁行は2.15~2mを測る。柱穴は径40cm前後、深さ70~20cmを測り、P2 は特に浅かった。

遺物はP1から備前焼擂鉢1817、 $P7\sim9$ から土師器細片が出土している。擂鉢の特徴から建物は15世紀代に比定される。 (江見)

#### 掘立柱建物157 (第649・749図、図版156・157)

掘立柱建物156と重複して検出された  $2 \times 3$  間の南北棟で、棟方向は $N-30^\circ$ -Eである。規模は桁行 8.4m、梁行5.6m、床面積46.2mを測る。柱穴間距離は桁行 $4.3 \sim 4$  m、梁行 $2.1 \sim 1.7$ mを測る。柱穴は径 $80 \sim 30$ cm、深さ $60 \sim 40$ cmを測り、梁行内側の 2 柱穴はいずれも若干浅い。遺物は柱穴から上師器鍋、瓦質鍋、青磁片など細片が出土するのみであった。 (江見)



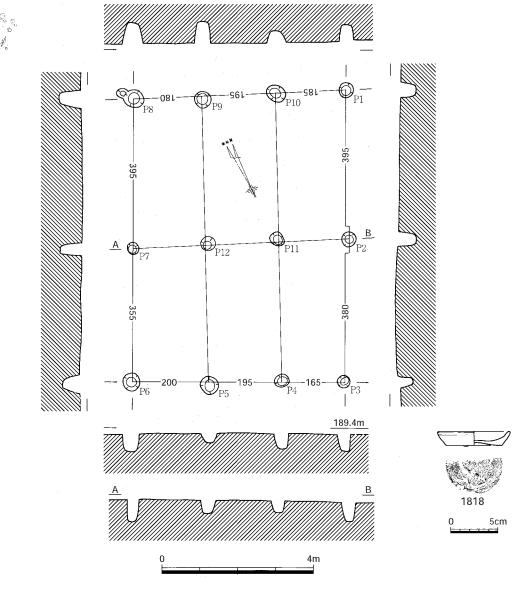
第749図 掘立柱建物157 (1/100)



写真32 掘立柱建物158清掃作業(南から)

**掘立柱建物158** (第649・750図、写真32、 図版156・157・175)

掘立柱建物157と重複して検出された 2×3間の南北棟で、棟方向は掘立柱建物157と同様N-30°-Eである。規模は桁行7.75m、梁行5.6m、床面積42.7㎡を測り、前記建物に比べ僅かに小さい。柱穴間の距離は桁行3.95~3.65m、梁行21.65mを測る。柱穴は径40~30cm、深さ60~20cmを測り、梁行内側の2柱穴は浅い傾向が認められる。遺物はP5から土師器小皿1818が出土している。 (江見)



第750図 掘立柱建物158 (1/100) - 出土遺物 (1/4)

### 3 柱穴列

柱穴列7 (第629・751図、図版127)

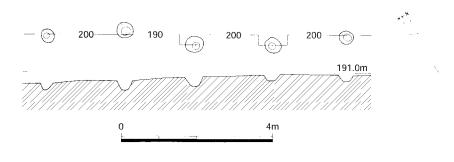
3702Ci区で検出した 4間の柱穴列で、全長7.9mになっていた。柱穴間の距離は $2.0\sim1.9$ mを測り、方向は $N-55^\circ$ -Wを示していた。この柱穴列は、掘立柱建物71の棟方向と一致するから、その建物の目隠し塀と推定される。柱穴の平面形は円形で、断面形は「U」字形を呈していた。 (福田)

柱穴列8 (第629・752図、図版131)

 $3706\,Da$ 区で検出した3間の柱穴列で、全長 $6\,m$ になっていた。柱穴間の距離は $2.1\sim1.9\,m$ を測り、方向は $N-58\,^\circ$ -Wを示していた。この柱穴列は、掘立柱建物77の梁方向と一致するから、その建物の目隠し塀と推定される。柱穴の平面形は円形で、断面形は「U」字形を呈していた。 (福田)

柱穴列9 (第629・753図)

掘立柱建物85の東側で検出された、4本からなる柱穴列である。掘り方の形状や深さは不揃いで、 柱間も等間隔ではないが、ほぼ北東方向を指し示す。掘立柱建物85の棟筋とも一致するため、目隠し



第751図 柱穴列7 (1/100)

塀のような意図によって配され た可能性もある。 (岡田)

柱穴列10 (第632・647・

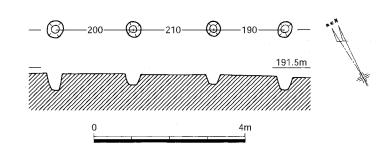
754図、図版150)

4000Dg区に位置する4間の柱穴列である。柱穴は円形で長径が20~26cmあり、底の高度もほぼ揃っているが、柱間は2.77~4.12mと変化が大きい。列の方向は掘立柱建物141の棟方向とほぼ直交する。中世の土師器片が出土している。(岡本)

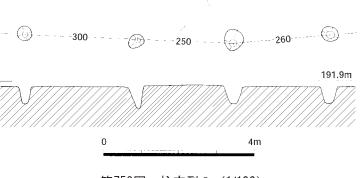
柱穴列11 (第632・647・

754図、図版150)

柱穴列10のすぐ東で検出された3間の柱穴列である。列の方



第752図 柱穴列8 (1/100)



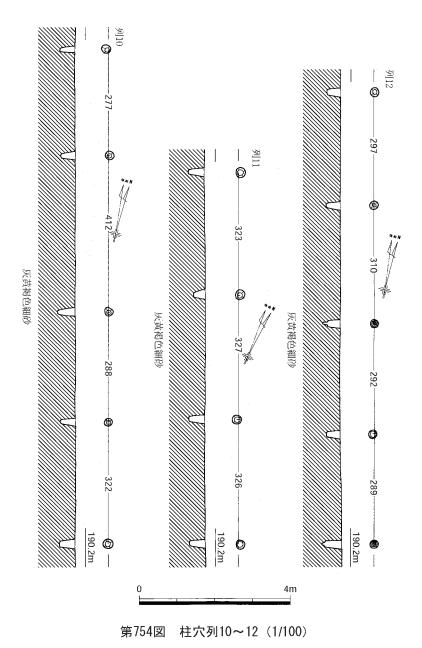
第753図 柱穴列9 (1/100)

向はN-20°-Wで、柱穴列10とはかなり異なる。柱穴は円形で、長径が24~26cm、柱間も3.23~3.27m とよく揃っている。1個の柱穴がやや浅い。中世の土師器片と鉄釘2片が出土している。 (岡本) **柱穴列12**(第632・647・754図、図版150)

柱穴列10から4m東に位置し、柱穴列10とほぼ平行している。やはり4間を数えるが、柱間は対応せず、組み合って建物になることはない。柱穴は円形で、長径は22~24cm、柱間も2.89~3.10mとほぼ揃う。2個の柱穴で直径10cmの柱のめり込みを確認した。中世の土師器片が出土した。 (岡本)

#### 柱穴列13 (第632・647・755図)

4 0 01 Dh区にあり、柱穴列12から 8 m東に位置している。列の方向はN-11°-Wで、掘立柱建物133の棟方向と直交する。列の北延長上に掘立柱建物133の東辺があり、併存していた可能性が高い。 6 間と推定され、柱間は2.9 m前後、柱穴は円形で、長径28~33cmを測る。遺物はなかった。 (岡本)



289 働 働

第755図 柱穴列13 (1/100)

### 4 鍛冶工房

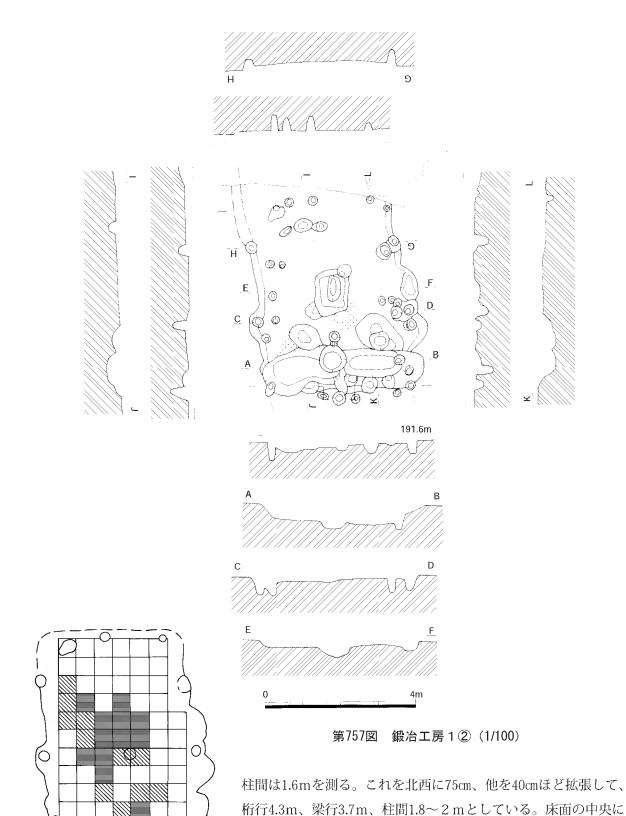
#### 鍛冶工房 1 (第636・756~761図、写真33、図版158・176)

掘立柱建物84の南東5.5mで検出した長方形の竪穴遺構で、3709Da区に位置する。短軸は4.75m を測るが、長軸は北西を溝57によって切られており必ずしも明瞭ではないものの床面の遺存状態から5.5mに復元される。検出面から17cmの深さにある平坦な床面は海抜高191.5mで、推定面積は22mを測る。砂層中に掘りこまれた竪穴の周囲には多数の柱穴が検出された。これらは $3\times2$ 間にまとめられ、少なくとも1度の拡張を伴う建て替えが推定される。当初の建物は、桁行4m、梁行3.3mで、



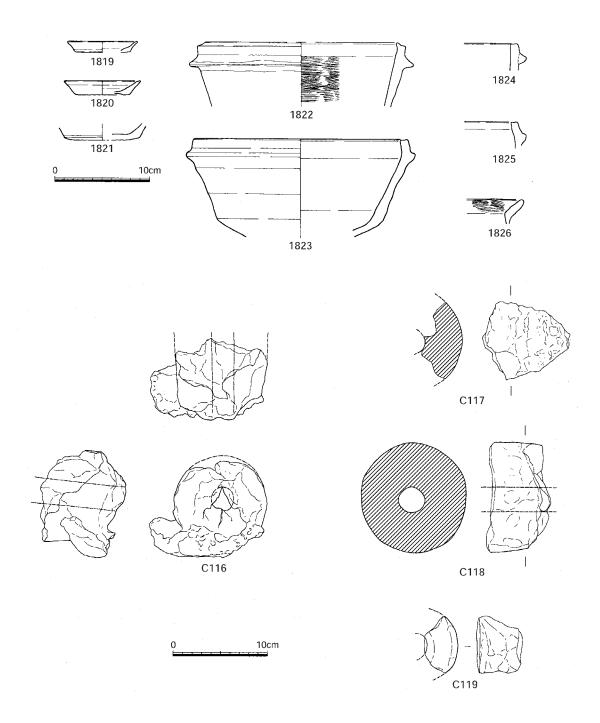
- 1 褐灰色砂質上(炭・スラグ・上器多含)
- 2 黑色砂質土 (炭密含)
- 3 黒褐色砂質土 (炭・スラグ多含)
- 4 黒色砂質上 (炭屑多含、黄色クサレ礫微含)
- 5 暗黄褐色砂質土 (炭屑少量含)
- 7 暗褐灰色砂質上 (スラグ・黄色クサレ礫少量含)
- 8 鈍黄褐色砂質土
- 9 赤褐色砂質土

第756図 鍛冶工房 1 ① (1/60)

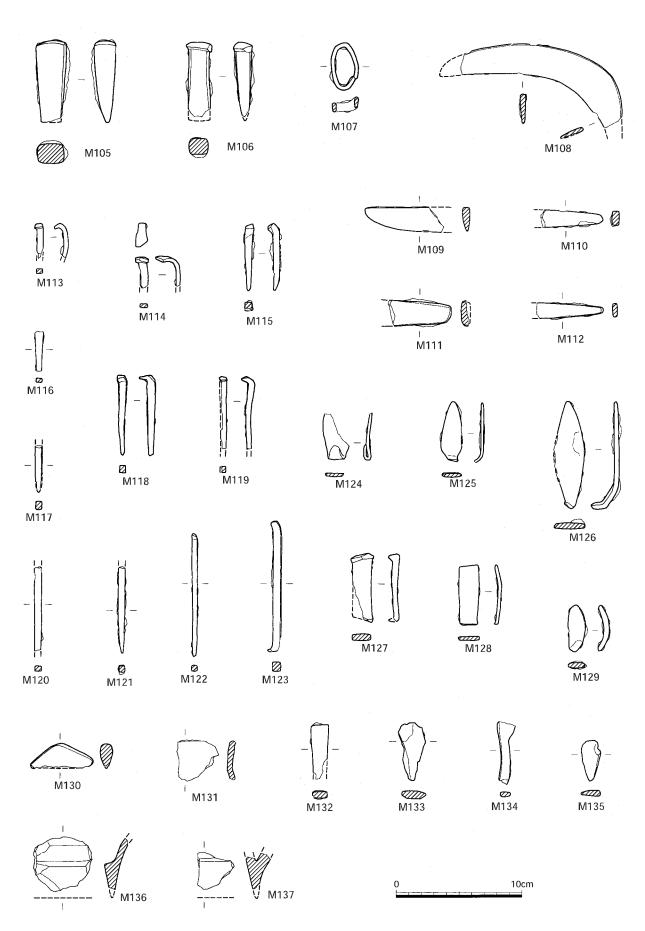


は方形をなす長軸122cm、短軸91cmの土壙が検出された。底面は 含有鉄滓重量 二段に掘りこまれており、深さは38cmある。また、南東辺に沿っ 80g以1: 100g以上: て長方形の土壙を検出した。検出段階では1つの土壙として掘り 第758図 鍛冶工房 1 下げを行ったが、底面の凹凸から長軸2.05~2.12m、短軸1.13~ 1.18m、深さ38~50cmの長楕円形の土壙2基が連なり、その間

に径72cm、深さ53cmの円形を呈する土壙が重複したものであることが判明した。長楕円形の土壙2基はほぼ同時に掘りこまれたものと思われるが、円形の土壙はその埋土を切って設けられている。黒褐色をなす埋土には炭や鍛冶滓を含んでいる。さらに、方形土壙の東に接した床面で炉と見られる被熱箇所が確認された。これは床面中央からやや東に偏した位置にあたる。赤変する範囲は85cmに及ぶが、強度の被熱範囲は径30cmほどの不整円形を呈する。床面の土砂を採取して精査した結果、方形土壙の北東と南西に鍛造剥片や粒状滓の集中が認められ、この間に鉄砧が据えられていたものと推定された。このことから、方形土壙は鉄砧を固定するための施設と考えられ、南東辺の土壙群も同様に鞴を設置するための施設と推測される。



第759図 鍛冶工房1出土遺物①(1/4)

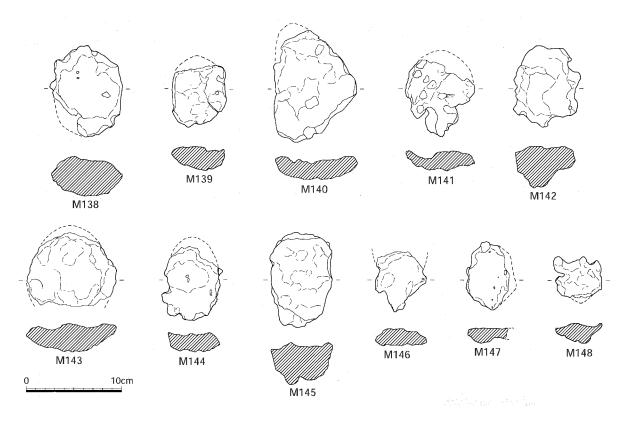


第760図 鍛冶工房1出土遺物② (1/3)

土師器には杯1821や小皿1819・1820、鍋1826、瓦質の釜1822~1825がある。径10~11.6cmの羽口 C 116~119は孔径2.4~2.8cmを測る。鉄器には鏨M105・106や鎌M108、刀子M109~112、責め金具M 107、釘M113~121、不明金具M122~127や鉄片M129~135のほか鋳造の鋤先M136・137などがある。また、鉄滓の多くは数cmの塊状をなすが、M138~148のような椀形鍛冶滓も認められる。これらは埋土中の出土であり、この工房が放棄された後、他所から廃棄されたものと考えられる。時期は出土土器から14世紀と考えたい。 (亀山)



写真33 鍛冶工房1内方形土壙(南から)

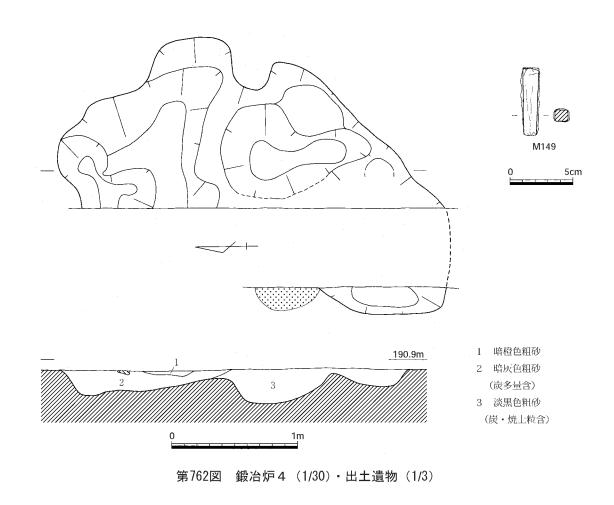


第761図 鍛冶工房 1 出土遺物③ (1/4)

### 5 鍛冶炉

#### 鍛冶炉4 (第641・762図、図版159・177)

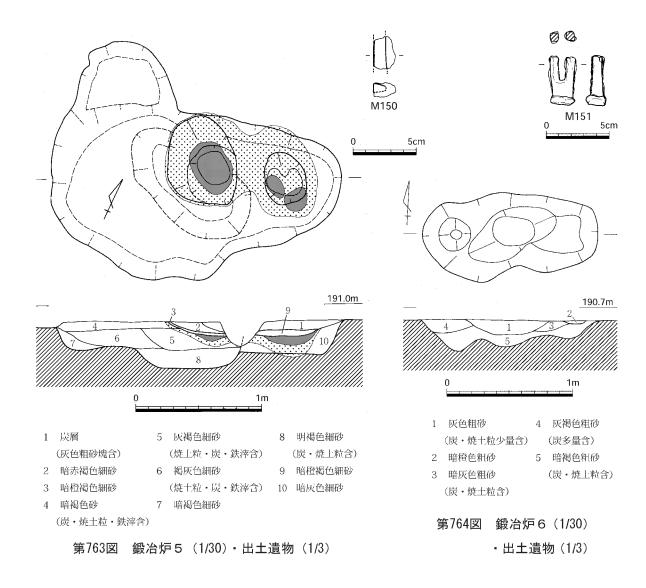
3805 E a 区に位置する遺構で、中央部分は側溝により削平されている。いびつな形態を呈しており、西端中央部に径約50cmの被熱痕跡が検出された。この土壙は、埋土中から鍛造剥片が多量に認められることや鞴の羽口が出土していること等から鍛冶炉跡と判断した。遺物は鉄鏃の茎M149のほかに土師器鍋・甕等が出土している。出土した鉄滓の重量は約19.6kg。遺構の時期は中世。 (小嶋)



鍛冶炉5 (第641・763図、図版159)

先述の鍛冶炉4から約3m東側に位置する鍛冶炉である。炉は鍛冶炉掘り方の東側に2基検出され、その規模は西側が70×56×14cm、東側が40×32×10cmを測る。炉の先後関係は、両炉間に柱穴が掘削されているため確証はないが、西側の方が新しいと想定している。第3・9層は炉床粘土であり、還元色を呈している部分も認められる。鍛造剥片や粒状滓の密集域は西側の炉から約50cm北西側で検出されており、その付近に鉄砧が配されていたと想定したい。鍛冶炉の掘り方は北西側に半円形の土壙が付属した長楕円形を呈している。掘り方底面には111×61×17cmの長楕円形を呈する土壙が検出され、その埋土中(第8層)には鍛造剥片や粒状滓が多量に含まれていた。また第4層は固く締まった層で、貼り床層とも考えられる。鍛冶滓が約2.4kg出土している。

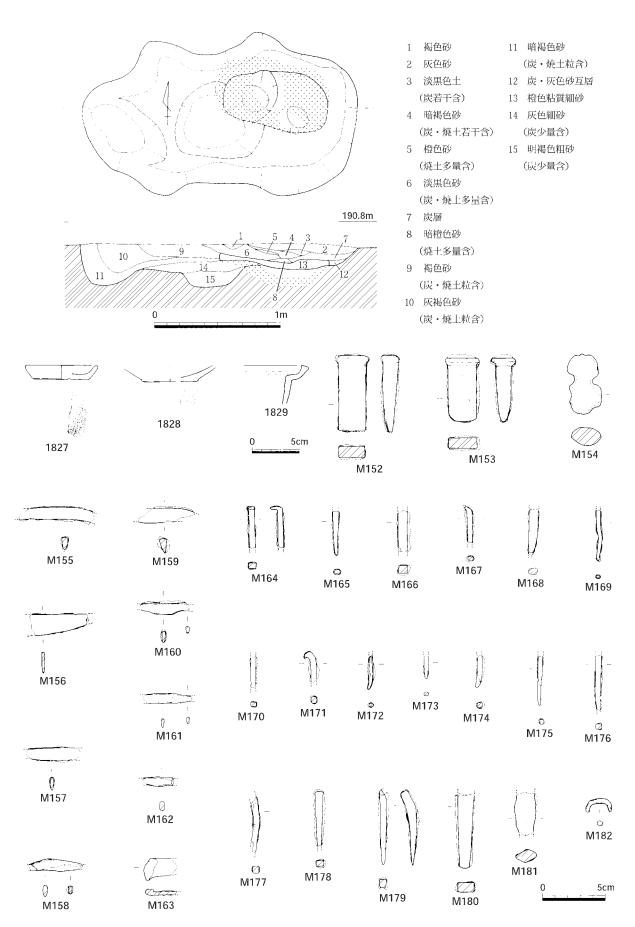
遺物は土器細片や鉄器M150が出土し、それらから遺構の時期は中世の範囲に収まる。 (小嶋)



鍛冶炉6 (第641・764図、図版159・177)

鍛冶炉5から約4m東側に位置している遺構である。炉は検出されなかったが、第2層が被熱により赤変していることや鍛造剥片が多量に出土していること、さらに掘り方の形態が鍛冶炉5・7と近似していることから鍛冶炉と判断した。掘り方平面形はやや不整形な長楕円形を呈し、底面には73×36×7cmの長楕円形を呈する土壙状のものと径26cm、深さ5cmの柱穴状のものが掘削されている。遺物はM151の金槌や土器細片が少量出土している。出土した鍛冶滓の重量は194g。時期は中世。(小嶋) 鍛冶炉7 (第641・765図、図版177)

鍛冶炉6から約6m東に位置する鍛冶炉である。炉は被熱状況と掘り方から2基認められた。ただしその先後関係は不明。両炉ともに第13層を炉床としていたと判断した。炉床の平面形は83×45cmの隅丸長方形を呈し、厚さは最大で8cmを測る。炉床および炉床下には被熱による色調変化が顕著に認められる。鍛造剥片の密集域は炉から約50cm西側で認められ、その付近に鉄砧が位置していたと想定したい。鍛冶炉掘り方は平面不整楕円形で、規模は2.2×1.2mを測る。掘り方底面中央部には67×60cmの不整円形を呈する土壙状のものが掘削されていた。炉の埋土(第1~8層)中からは鏨M152・153や、釘・刀子等の鉄器の破損品ないしは切断されたものが多数出土している。この鍛冶炉は出土した鉄器類の状況と鉄滓の分析結果(付載5)から、廃鉄器を原材料としているようである。出土し



第765図 鍛冶炉7 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

た鉄滓の重量は306gであった。

遺構の時期は出土土器の特徴から中世に比定 される。 (小嶋)

#### **鍛冶炉8** (第641·766図、図版159)

3805 E c区に位置している鍛冶炉である。 炉は鍛冶炉掘り方南側で検出され、31×24cmの 楕円形を呈し、深さは検出面から5cmを測る。 第2層が炉床粘上で、被熱による色調変化が顕 著に認められ、青灰〜灰白色を呈している。第 3層はきめ細かい粘質土で、炉床の整地土と想 定したい。鍛冶炉掘り方はややいびつな長方形 を呈し、その規模は1.83×1.09mである。深さ は浅く12cmを測るにすぎない。掘り方底面は鍛 冶炉5~7とは異なり平坦であった。遺物は土

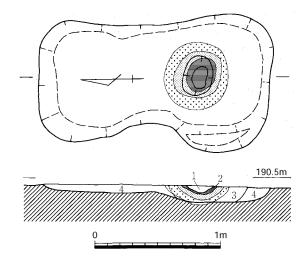
師器甕小片の他に鍛冶滓が151g出土している。詳細な遺構の時期は不明であるが、中世の範囲に収まる。 (小嶋)

### 鍛冶炉9 (第641・767図、図版177)

先述の鍛冶炉8の北東側に隣接して検出された。炉は鍛冶炉掘り方の北西側に位置している。炉の平面形は径約30cmの不整円形を呈し、深さは8cmを測る。第2層の炉床粘土には鍛冶滓がくい込んでいた。炉床は被熱により青灰~灰白色の還元色を呈している。鍛造剥片の密集範囲は炉から約50cm南西側に認められる。鍛冶炉掘り方はややいびつな長方形を呈し、規模は1.68×0.76mである。検出面からの深さ9cmを測る掘り方底面は平坦であった。遺物は鉄器M183~187、土師器甕や杯の小片が出土している。鍛冶滓は457g出土した。

時期は中世に比定される。 (小嶋) **鍛冶炉10** (第644・768図、図版160)

3 9 05 Dh区にあり、掘立柱建物127の 内部に構築されていたものと考えている。



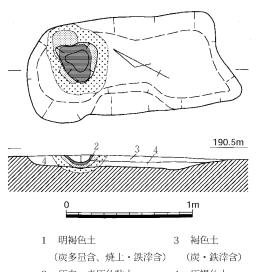
1 明褐色土 (農多量会 鉄波小量会)

黄色粘質微砂

(炭多量含、鉄滓少量含) 4 褐色土 2 青灰~灰白色粘上 (炭・鉄)

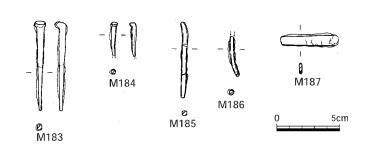
(炭・鉄滓含)

第766図 鍛冶炉8 (1/30)



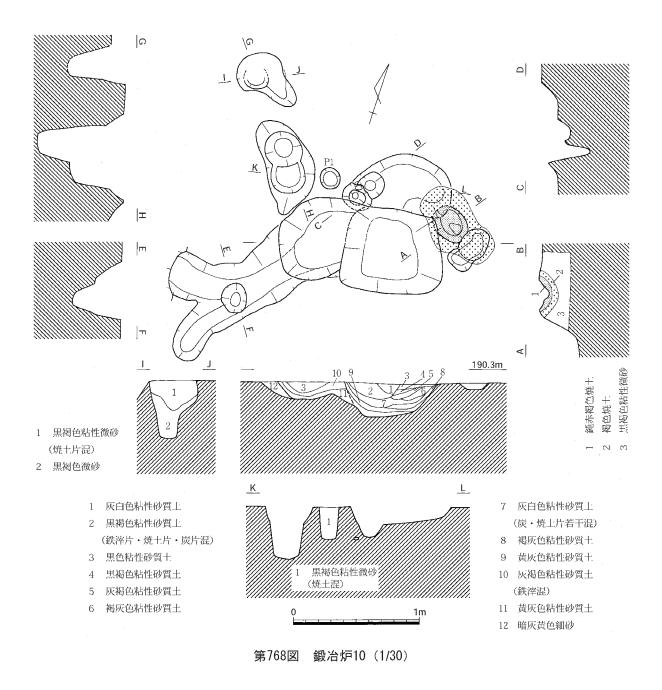
2 灰白~青灰色粘上 4

4 灰褐色上(炭少量含)



第767図 鍛冶炉9 (1/30) · 出土遺物 (1/3)

炉は長径26cm、短径22cmの楕円形で、深さは8cmを測る。炉底はにぶい赤褐色を発していたが、灰白色部分は認められなかった。この炉の南東に接して長径26cm、短径21cm、深さ5cmの楕円形の窪みが



あり、被熱範囲が及ぶため、これも炉跡とみられる。炉の南西側に長軸81cm、短軸68cm、深さ28cmの方形土壙があり、この方形土壙に切られる形で、さらに西側に長径83cm、短径61cm、深さ15cmの楕円形土壙が検出された。土壙内からは土師器や須恵器片とともに鍛造剥片や粒状滓が出土し、この土壙が鍛冶炉に伴う可能性を示している。鍛造剥片がとくに顕著に認められたのは第2・3・10層で、第2・3層からは焼土や炭片も出土した。鍛冶炉や土壙の下の溝状遺構は周辺で検出されている不整形な溝状遺構と平行し、鍛冶炉には伴わない可能性が強い。P1からは羽口片と鉄滓が出土した。

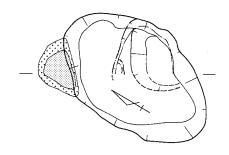
炉に接して土壙を伴う例は当遺跡では鍛冶炉11・12、鍛冶工房 1 がある。岡山県内では総社市樋本遺跡の例がある(『樋本遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65 1987年)。大澤正己氏は福岡県奈良尾遺跡の鍛冶工房に関して先手が土壙に入った姿を想定している(「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』福岡県教育委員会 1991年)。現代でも横座が穴に入って作業することがあり(かくまつとむ『鍛冶屋の教え』小学館文庫 1998年)、これらが参考になろう。 (岡本)

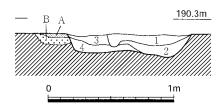
#### **鍛冶炉11** (第644·769図)

鍛冶炉10の3m東にあり、掘立柱建物128の中央付近に位置している。長径134cm、短径86cm、深さ19cmの土壙が検出され、土壙の北西肩部に半月状の焼土塊が認められた。土壙の中からは土師器片の他に、炉壁片や鍛造剥片・粒状滓などが出土したため、焼土塊が鍛冶炉の痕跡と判明した。炉床は後世の削平で消滅し、地山の被熱部分のみが残存していた。その長径は48cmを測る。上壙は検出時から2基の上壙が重複しているとみられ、断面で確認された。第1層から炭・焼土粒・鍛造剥片などの鉄滓が多く出土した。 (岡本)

#### 鍛冶炉12 (第644・770図)

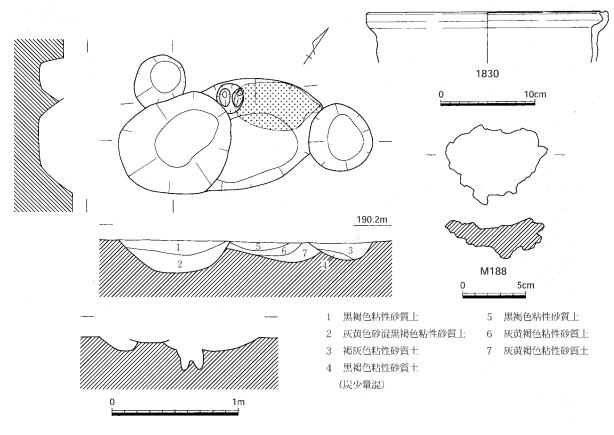
鍛冶炉10から11m南で長径70cm、短径38cmの楕円形を呈する焼土の広がりが認められた。この焼土の両端から土壙が検出され、さらに、焼土の下にも土壙がみつかった。各土壙の埋土からは鉄滓が出土し、とくに焼土下の土壙とその南西の土壙からは鍛冶滓の鍛造剥片が出土した。また、第5層からは椀形滓M188も出土した。近接して鍛冶炉が存在することから、この焼土も鍛冶炉の痕跡と考える。焼土南西の土壙は長径93cm、短径80cm、深さ26cmを測った。 (岡本)





- 灰褐色粘性砂質土 (炭・焼土粒・鉄滓混)
- 2 黄灰色粘性砂質上 (炭若干混)
- 3 褐灰色粘性砂質土
- 4 暗灰黄色細砂
- A 赤褐色焼土
- B 灰褐色焼土

第769図 鍛冶炉11 (1/30)

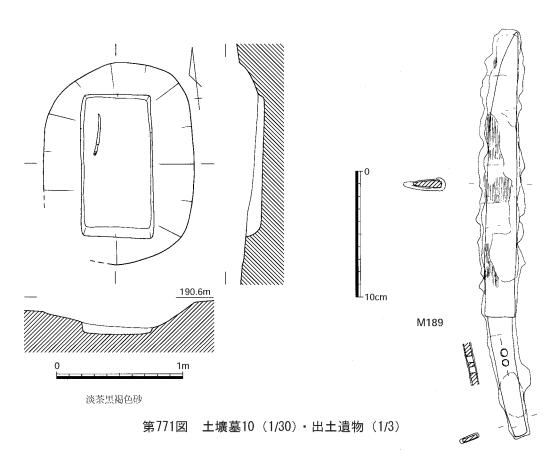


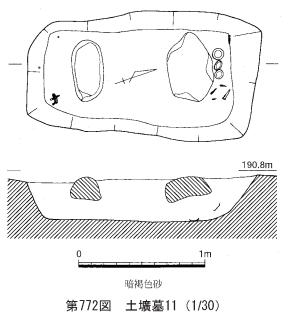
第770図 鍛冶炉12(1/30) 出土遺物(1/4,1/3)

### 6 土壙墓

#### 土壙墓10 (第638・771図、図版161・177)

3 9 04 Ca区から検出された土壙墓である。検出面での平面形は、長径1.55m、短径1.2mの楕円形で、内部に105×52cmを測る木棺痕跡と思われる長方形の掘り方を確認した。この掘り方内には淡茶黒褐色を呈する砂が認められたが、横幅は南が北よりもやや広く、底面が南から北に向かって緩やか





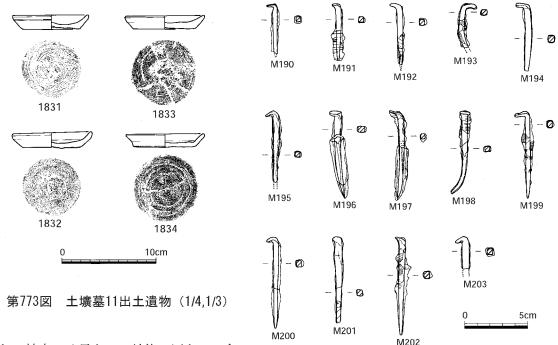
に傾斜していたから、埋葬された遺骸の頭 位は南側と推定された。

出土遺物として腰刀M189があるが、切 先の尖がった刀身には木質が付着し、柄に は2個の目釘穴が存在する。 (福田)

#### 土壙墓11(第630・772・773図、

図版161·178)

3707Df区から検出された平面長方形で南北方向に主軸をもつ土壙である。規模は長さ1.8m、幅1m、深さ約30cmを残す。釘の出土位置から長さ約1m、幅約50cmの木棺が埋納されたものと推定され、棺内北隅には4枚の土師器小皿が副葬されていた。



また、棺内には長さ50cm前後、厚さ15cm余

りの礫2個が浮いた状態で出土しており、墓標としたものと考えている。

出土遺物は土師器小皿1831~1834、棺釘M190~M203、鉄滓約30gなどである。小皿は口径7.9~8.3cm、器高1.4~1.6cmを測る。底部の切り離しは1831・1833は回転糸切り、1832・1834は回転ヘラキリされており、15世紀代のものと思われる。 (江見)

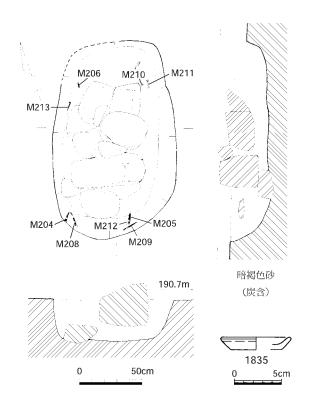
土壙墓12 (第640・774・775図、図版162・178)

3807Dh区に位置し、土壙墓14に伴うと 思われる石組み基段の下から検出された。平 面形は長軸1.6m、短軸97cmの楕円形を呈し、 検出面からの深さは33cmを測る。土壙墓から はほぼ原位置を保った鉄釘が検出され、その 出土状況から板材を組み合わせた木棺が埋葬 されていたと想定される。土壙墓内の石の多 くは墓標石が落ち込んだものであるが、底面 上に据えられているような石も認められるこ とから、棺台が存在しているかもしれない。

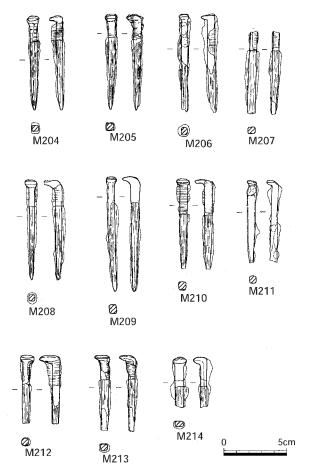
副葬品と認められるものはなく、埋土中から土師器小皿1835・土師器甕などが出土したのみである。

遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋) 土壙墓13 (第640・776図、図版162)

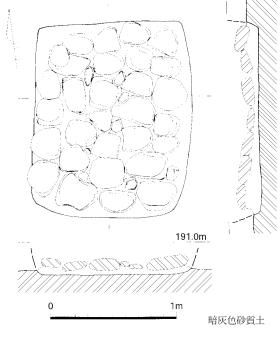
土壙墓14に伴うと思われる石組み基段の下から検出された。規模は長さ1.54m、幅1.23m、深さ10cmを測る。土壙墓底面は平坦で、



第774図 土壙墓12(1/30)・出土遺物①(1/4)



第775図 土壙墓12出土遺物② (1/3)

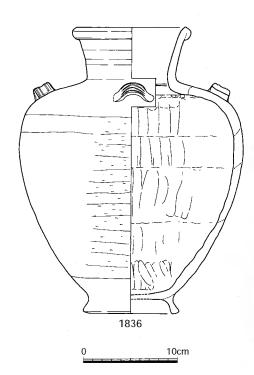


第776図 土壙墓13 (1/30)

その直上付近には30cm大の扁平な河原石が整然 と配されていた。石には被熱を受けた痕跡は認 められない。出上遺物は上器小片のみで、時期 は中世に比定される。 (小嶋)

土壙墓14 (第640・777・778図、図版162・163・178)

3807Dh区で検出された。この場所は本調査以前には 2基の五輪塔がまつられており、周囲には拳大から人頭大 までの礫とおそらく周辺から集められたと思われる最低で も数基分の五輪塔が散在していた。五輪塔付近は周囲の田 面から約20~30cm高い状況であった。



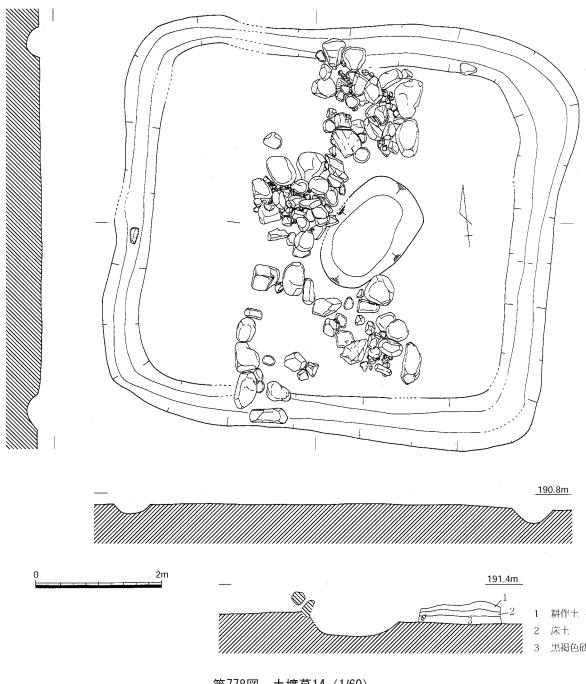
第777図 土壙墓14関連遺物(1/4)



写真34 土壙墓14関連 五輪塔(南から)

久田原遺跡内の墓地移 転事業に伴って、この五 輪塔も移転されることに なり、その際に立会調査 を行った。五輪塔下を重 機で掘削している途中で 底部が穿孔されている古 瀬戸の四耳壺1836が出土 し、その時点で掘削を中 止して検出状況の記録を 行った。四耳壺は五輪塔 から約40cm下、海抜約19 1.2mからの出土である。重機による掘削のため四耳壺はすでに破砕されおり、詳細な埋納状況等は 不明である。しかし掘削中には5cm大の円礫が約10cmの厚さで認められ、また四耳壺の周囲には30~ 60cm程度の河原石が検出されていた。埋納した掘り方は重機による掘削のため不明である。四耳壺内 には骨片は認められず、さらに四耳壺内の土壌のリン酸分析を行ったが芳しい結果はでなかった。四 耳壺は五輪塔に伴う可能性が高いが、確証はない。

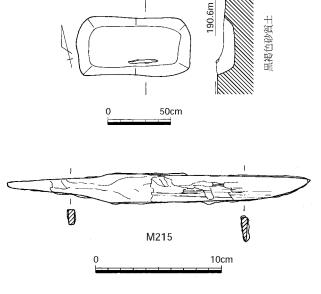
本調査で五輪塔付近を掘り下げたところ、五輪塔を中心とした(第778図ヤラレ部分)南北約3m、 東西約1.5mの範囲で拳大から40cm大までの河原石が密集して検出され、石組み基段と想定される。 さらに五輪塔を中心にして幅約40cm、深さ約10cmの方形を呈する周溝が検出されたが、五輪塔に伴う 可能性は低く、古い時代の遺構であろう。 (小嶋)



第778図 土壙墓14 (1/60)

### 土壙墓15 (第640・779図、図版178)

3809Di区、掘立柱建物104と重複する位置から検出された。平面形態は長方形で主軸を東西に



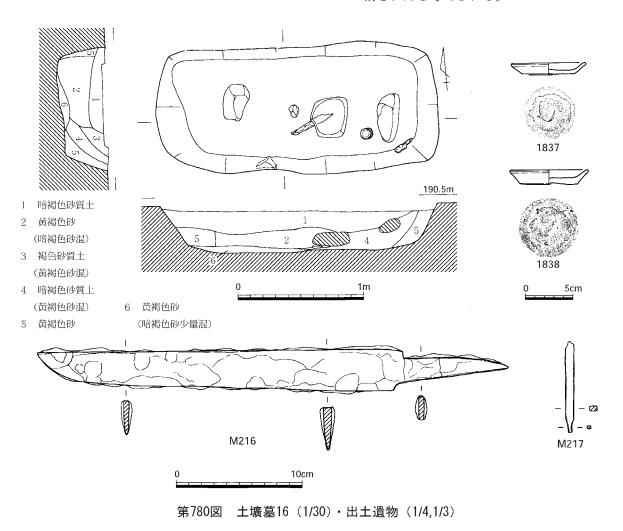
第779図 土壙墓15(1/30)・出土遺物(1/3)

もつ小規模な土壌である。規模は長さ96cm、幅46cm、深さ15cmを残す。遺物は土壌中央南からやや浮いた状態で腰刀M215が一振のみ出土している。M215は全長約24cm、刃渡り約15cm、幅約2cm、重さ91.5gを測る。墓と扱ったが墓であればその規模から小児が推定される。 (江見)

土壙墓16 (第640·780図、図版163

• 179)

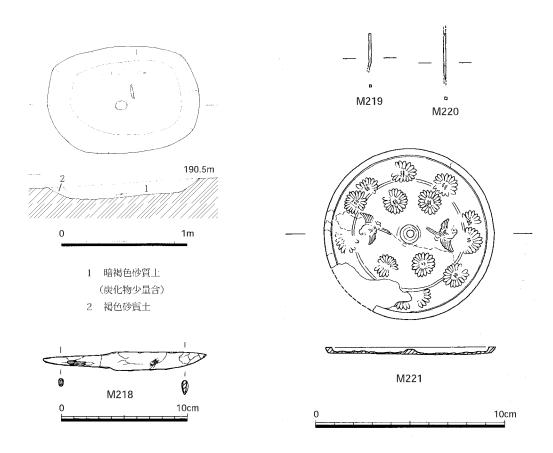
3900Di区から検出された平面長方形で主軸をほぼ東西にもつ土壙墓である。規模は2.25×1m、深さ35cmを残す。断面から明らかなように第2層から棺の規模が推定でき、長さ約1.4m、幅約50cmの棺が埋納されたと考えられる。



遺物は土壙中央から腰刀M216と不明鉄製品M217が、東から土師器小皿2枚が重なった状態で出土した。また、土壙内には3個の礫が落ち込んでいたが、前述の土壙墓11同様にこれらの礫は墓標として利用されたものと考える。腰刀は全長37.45cm、刃渡り28.5cm、幅約3cmを測る。小皿1837・1838の底部はいずれも回転へラキリされている。 (江見)

#### 土壙墓17 (第640・781図、巻頭図版9、図版163・179)

土壙墓16の東約4mから検出された平面楕円形で主軸を南北にもつ。規模は長さ1.25m、幅85cm、深さ10cmを残す。遺物は土壙中央から和鏡M221が鏡面を上に向けた状態で検出され、鏡の下から針M219・220が、鏡の北西から刀子218が出上した。M221は菊花散双鳥鏡で、部分的に布目痕跡が認められる事から布にくるまれていたものと思われる。制作年代は12世紀末から13世紀中頃である。また、針は2本に分かれているが、本来1本であった可能性が高い。一方、刀子を化粧道具と考えれば、これら遺物は女性に持ち物と思われ、遺体とともに埋納されたと理解される。 (江見)



第781図 土壙墓17 (1/30)・出土遺物 (1/3,1/2)

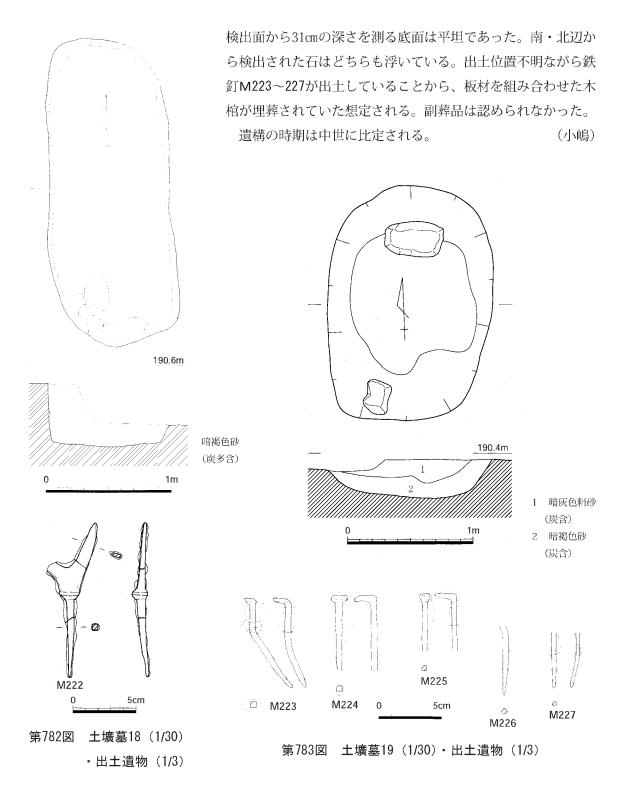
### 土壙墓18(第641・782図、図版179)

3808 E a区で検出された土壙墓である。平面長楕円形を呈し、長さ2.44m、幅95cm、深さ47cmを 測る。底面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。南辺から扁平な河原石が出土しているが、すべて浮 いおり、墓標石が落ち込んだものであろう。遺物は鉄鏃M222や勝間田焼椀等が出土している。

遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

#### 土壙墓19 (第641·783図、図版179)

3808Eb区に位置している土壙墓である。長さ1.86m、幅1.3mを測る平面楕円形を呈している。

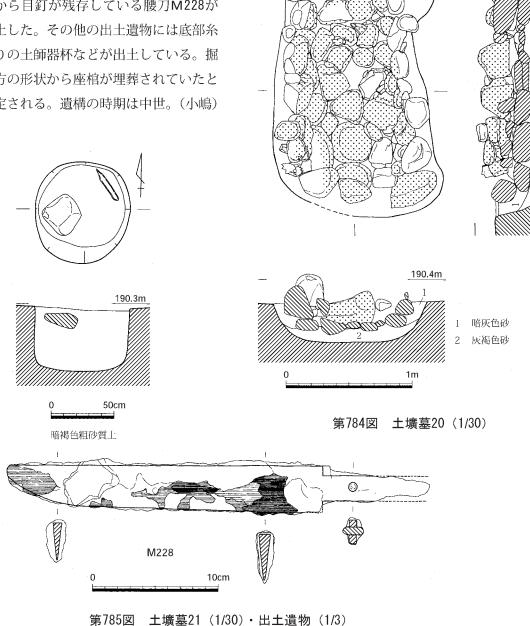


#### 土壙墓20 (第642・784図、図版164)

3902 E c区に位置し、底面および壁面に河原石が据えられている土壙墓である。被熱により赤変している石も認められる。底面には拳大から40cm大までの扁平な河原石が敷かれている。側壁は割り石を使用し、基本的に一段積みであるが、扁平な河原石を用いて三段積みされている所も認められる。石組みの幅は東辺側より西辺側の方が約20cm短い。掘り方はいびつな楕円形を呈し、長さ2.3m、幅1.2m、深さ40cmを測る。出土遺物には底部糸切りの土師器小皿小片や瓦質土器の鍋等があり、それらから遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

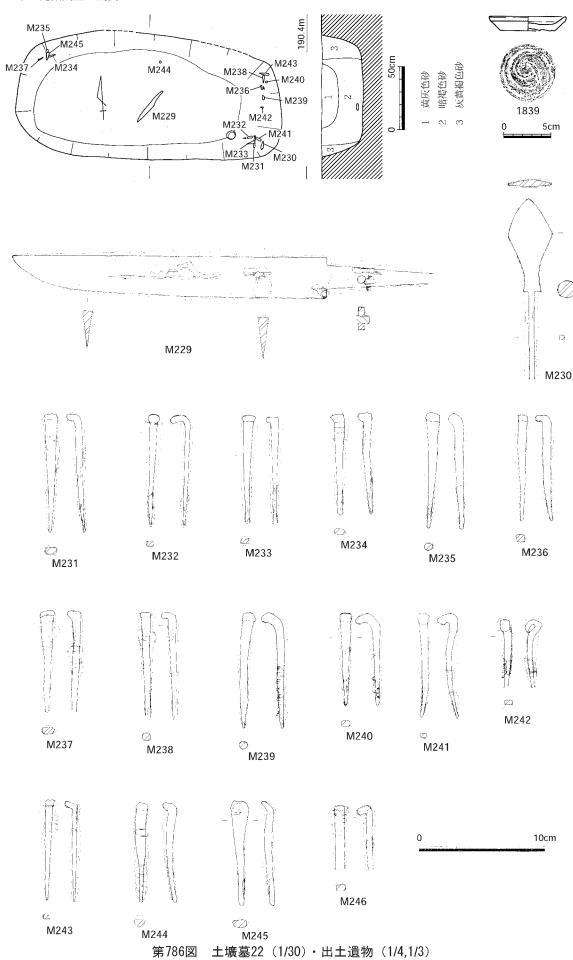
#### 土壙墓21 (第643・785図、図版164・179)

3901Ea区に位置し、径約80cmの円形 を呈した土壙墓である。検出面からの深 さは49cmを測る。底面は平坦で、その直 上から目釘が残存している腰刀M228が 出土した。その他の出土遺物には底部糸 切りの土師器杯などが出土している。掘 り方の形状から座棺が埋葬されていたと 想定される。遺構の時期は中世。(小嶋)



#### 土壙墓22 (第643・786図、図版165・180)

土壙墓21から約1m西側に位置している土壙墓である。北辺の中央部は掘立柱建物122 P16に切ら れている。原位置をほぼ保った鉄釘の出土状況や土壙墓断面から、推定長1.7m、推定幅70cmの板材 を組み合わせた木棺が埋葬されていたと想定される。鉄釘の出土状況は先端を上にしたものがM 239・242、下にしたものがM244、土壙墓長軸と平行しているものがM232~234・237・243、直交して いるものがM231・235・238・245である。掘り方平面形は楕円形を呈し、長軸2.1m、短軸99cm、深さ 33cmを測る。底面中央直上から目釘が残存している腰刀M229が出土した。その他の出土遺物は底面



**−** 534 **−** 

より約10cm上から土師器小皿1839、 棺釘から想定される木棺の外側から 鉄鏃M230が検出されている。

遺構の時期は中世。 (小嶋)

土壙墓23 (第643・787図、図版165)

3901 E a区に位置し、掘立柱建物122 P 8 に切られた土壙墓である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.64m、短軸1.06mである。検出面から23cmの深さを測る底面は平坦であった。底面中央やや東側で目釘が残存している腰刀M247が検出され、北西隅から内面には赤漆、外面には黒漆が塗布されている漆椀が出土している。ただし木質は腐植していた。

遺構の時期は中世。 (小嶋)

土壙墓24 (第643・788図、図版165)

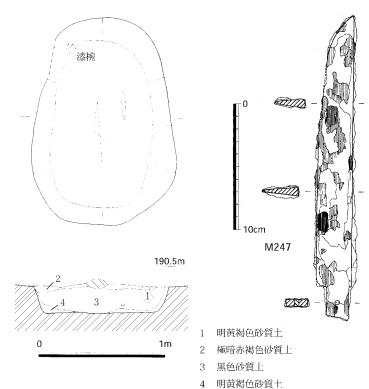
3905Dj区から検出された土壙墓である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸2.21m、短軸96cm、深さ21cmを測る。底面はほぼ平坦であった。

土壙墓南端で底面より約15cm上から 土師器小皿1840~1843が一列に並んで 検出された。小皿はすべて底部へラ切 りである。その他に土師器杯小片が出 土している。

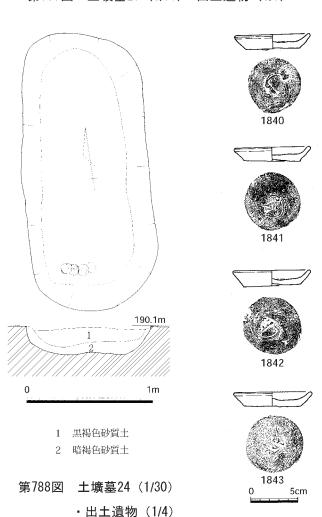
遺構の時期は中世。 (小嶋)

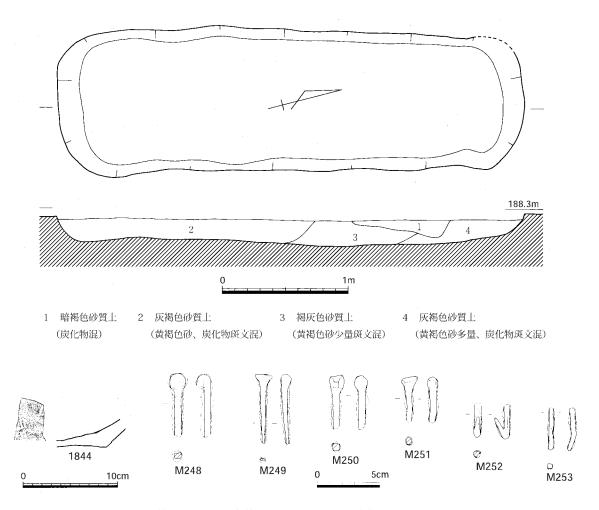
土壙墓25 (第649・789図、図版181)

4 1 04 D g 区、掘立柱建物155の北東に接して検出された。平面隅丸長方形を呈し、主軸を南北にもつ。規模は3.75×1.12m、深さ20cmを残す。埋土の状況からは棺痕跡の確認をすることができなかったものの、土壙内から釘M248~M253が出土していることから土壙墓として取り扱った。他に遺物は備前焼擂鉢1844が出土している。15世紀代のものであろう。 (江見)



第787図 土壙墓23 (1/30) - 出土遺物 (1/3)



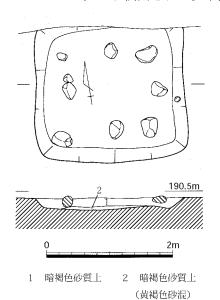


第789図 土壙墓25 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

### 7 竪穴遺構

#### 竪穴遺構 1 (第640・790図、図版166)

3900Di区から検出された。平面方形を呈し主軸はほぼ方位に沿った竪穴で、後述する溝78に北



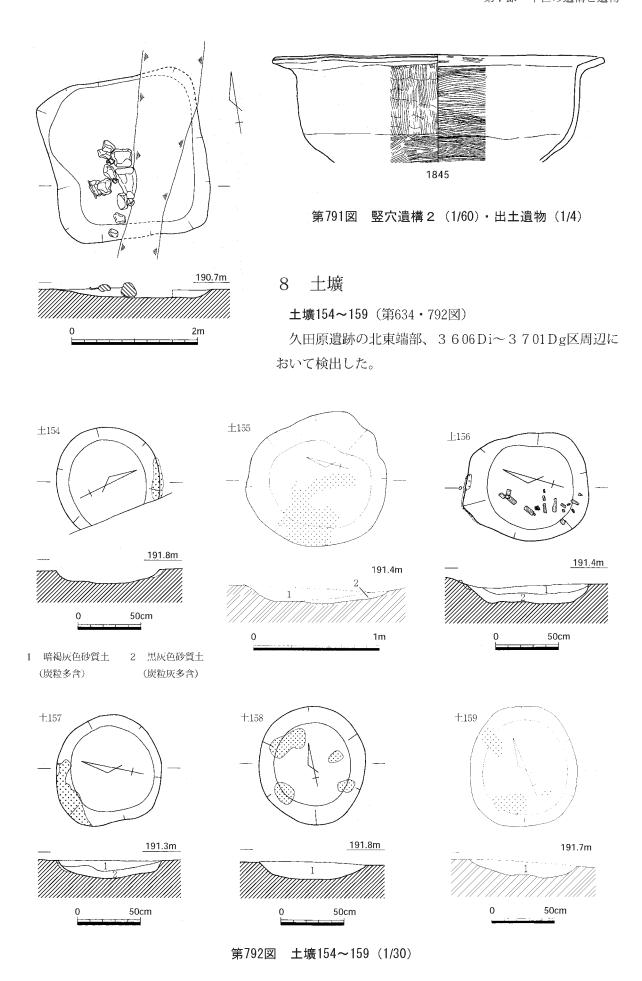
第790図 竪穴遺構 1 (1/60)

辺を削平されている。規模は一辺2.4m、深さ20cmを残す。埋土は暗褐色砂質土で、中央付近は一部張り床がなされていた。しかしながら他に付設遺構は確認されなかった。遺構内には径20~30cm大の礫が散在しており、それらに混じって土師器小皿細片および鉄滓約300gが出土している。 (江見)

#### 竪穴遺構2(第640・791図、図版166)

3807 E a区から検出された遺構である。東側が側溝により一部削平されている。平面形は方形を呈し、規模は長軸2.5m、短軸2.44m、深さ12cmを測る。床面上には拳大から20cm大の河原石が検出され、なかには被熱により赤変しているものも認められる。しかし床面上に被熱痕跡は認められない。

遺物は土師器鍋1845、鉄釘、鉄滓等が出土し、それらから遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)



-537-

これら6基の土壙は共通した特徴を備えている。平面形は円形~楕円形で、検出できた規模は径 1.1~0.8mである。断面形はいずれも皿形で、深さは15cm前後残存していた。埋土は暗褐灰色~黒灰色砂質土で、炭粒や灰を多く含んでいた。また、底面や壁面が被熱していることも大きな特徴で、この土壙内で火が焚かれたことが想定できる。なお、被熱部分には明確な焼土壁はできておらず、さほど強い火力ではなかったことが窺える。時期は、明確ではないが中世と考えている。 (平井)

#### 土壙160 (第635・793図)

3702Cj区から検出された大形の土壙で周辺からは大形の土壙は確認されていない。平面形は長大な不整形を呈し、 長径4.22m、短径1.84mを測るが、検出面からの深さは16cm と極めて浅い。内部には茶褐色の砂が認められ、備前焼の擂 鉢と推定される小破片1846が出土している。 (福田)

#### 土壙161 (第635・794図)

3703Cj区から検出された土壙である。平面形はほぼ円形に近い形態を呈し、長径80cm、短径79cmになっていた。検出面からの深さは20cm、断面形はIIIbで、内部に黒褐色の砂が認められた。出土遺物として土師質土器の鍋1847があり、底部の器壁は体部よりも薄くなっている。 (福田)

#### 土壙162(第635・795図)

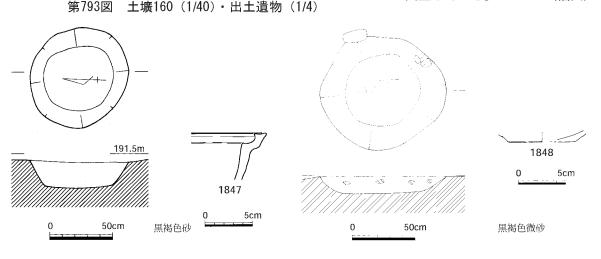
3704Da区から検出した土壙である。平面形は楕円形を 呈し、長径99cm、短径89cmになっていた。検出面からの深さ

1846 0 5cm

191.0m

は15cm、断面形はⅢaであった。 内部には黒褐色の微砂が堆積し ており、底部より浮いた状態で 人頭大から拳大の河原石が多く 認められた。

土師質土器の杯の破片1848が 出土している。 (福田)



第794図 土壙161 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第795図 土壙162(1/30)・出土遺物(1/4)

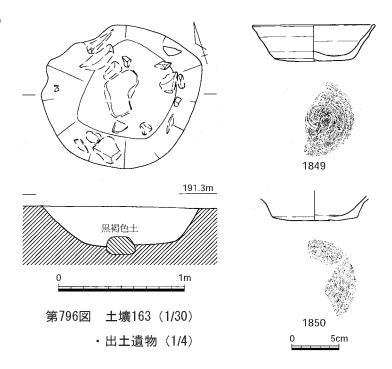
#### 土壙163 (第635・796図、図版181)

3704Da区から検出された土 壙である。平面形は不整円形で、 長径1.21m、短径1.12mになって いた。検出面からの深さは32cm、 断面形はⅢaであった。内部には 黒褐色土が堆積し、底部や法面に 河原石が認められた。

出土遺物として土師質土器の杯 1849・1850があるが、底部はどち らも糸切りである。 (福田)

#### 土壙164 (第635・797図)

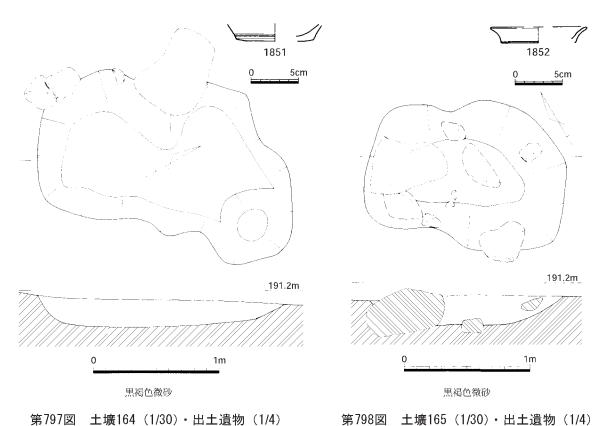
3 7 04 Da区から検出された土 壙である。平面形は歪んだ形態を 呈し、東端部には柱穴が確認され



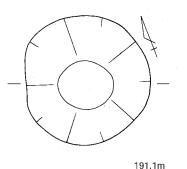
た。検出面での計測値は、長径2.2m、短径1.35m、深さ22cmを測り、断面形はIIbになっていた。内 部には黒褐色の微砂が堆積し、底部が糸切りの土師質土器の杯1851が出土している。 (福田)

#### 土壙165 (第635・798図)

3704Da区から検出された不整形な土壙である。検出面での計測値は、長径1.59m、短径1.2m、 深さ23cmを測り、断面形はⅢcになっていた。内部には黒褐色の微砂が堆積し、底部や法面に人頭大



第797図 土壙164 (1/30)・出土遺物 (1/4)



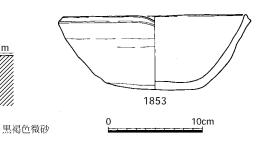
azo a

から拳大の河原石が認められた。

出土遺物として土師質土器の小皿1852がある。

土壙166 (第635・799図、図版181)

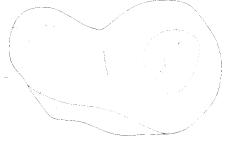
3704Da区から検出された土壙である。平面形はほぼ円形に



近い形を呈し、長径1.03 m、短径98cm、検出面からの深さ25cmであった。内部には黒褐色の微砂が認められ、口径19.4cm、器高7.9cmの片口を有する瓦質土器の鉢1853が出土した。 (福田)

(福田)

第799図 土壙166(1/30)・出土遺物(1/4)



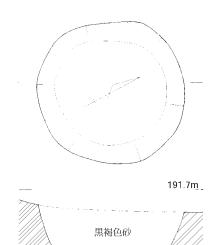
50cm

191.5m 暗褐色粘質十

第800図 土壙167 (1/30)

1m

1m



第801図 土壙168 (1/30)

#### 土壙167(第635・800図)

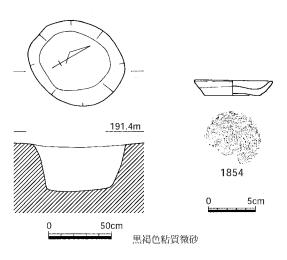
3704Db区から検出された不整形な土壙である。 この土壙は単独に存在したもので、近くに土壙は確認 されていない。検出面での計測値は、長径1.71m、短 径1.06m、深さ51cmを測り、断面形はⅢbになってい た。この土壙の西側にはテラス部分が認められ、内部 には暗褐色を呈する粘質土が堆積していた。 (福田)

#### 土壙168 (第635・801図)

3704Cj区から検出されたほぼ円形に近い形態の 土壙である。検出面での計測値は、長径1.18m、短径 1.11m、深さ34cmを測り、断面形はⅢbで、内部に黒 褐色を呈する砂が堆積していた。 (福田)

#### 土壙169 (第635・802図)

3704Cj区から検出された土壙である。平面形は



第802図 土壙169 (1/30)・出土遺物 (1/4)

楕円形に近い形態を呈し、長径75cm、短径64cmになっていた。検出面 からの深さは35cm、断面形はⅢaで、内部に黒褐色を呈する粘質微砂 が堆積し、口径8.1cm、器高1.6cmを測る完形に近い底部糸切りの土師 質土器の小皿1854が出土している。 (福田)

### 土壙170 (第635・803図)

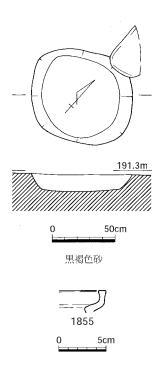
3705Cj区から検出された隅丸方形の土壙である。検出面での計 測値は、長径80cm、短径72cm、深さ13cmを測り、断面形はⅢaになっ ていた。内部には黒褐色の砂が堆積し、灰白色を呈する瓦質の鍋の小 破片1855が出土している。 (福田)

### 土壙171 (第635・804図)

3705Da区から検出された土壙である。平面形はやや歪んだ円形 を呈し、長径1.19m、短径1.17mになっていた。検出面からの深さは 9cmと極めて浅く、断面形はⅢaであった。内部には黒褐色土が堆積 したが、遺物は何も出土していない。 (福田)

#### 土壙172 (第635・805図)

3705Da区から検出された土壙である。平面形は円形に近い形態 を呈し、長径88cm、短径85cmになっていた。検出面からの深さは51cm

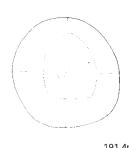


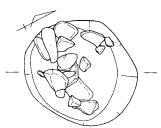
第803図 土壙170(1/30) ·出土遺物(1/4)

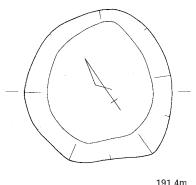
で、周辺に存在した土壙の中ではやや深く、断面形はⅢaであった。内部には暗褐色の砂が堆積し、 灰オリーブ色に発色した白磁の碗の口縁端部小破片1856が、1点だけ出土している。 (福田)

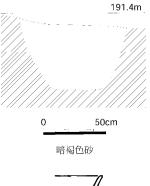
#### 土壙173(第635・806図)

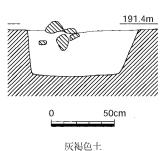
3706Da区から検出された楕円形 の土壙である。長径91㎝、短径83㎝、 深さ35cmを測り、断面形はⅢaであ った。内部には灰褐色土が堆積し、 拳大の河原石が約20個も認められた。

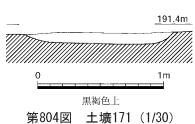




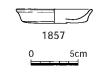












第805図 土壙172 (1/30) • 出土遺物(1/4)

第806図 土壙173 (1/30) · 出土遺物 (1/4)

出土遺物として口径7.9cm、器高1.5cmを測る土師質土器の小皿1857がある。

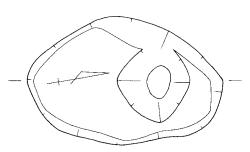
(福田)

### 土壙174 (第635・807凶)

3706 Da区から検出された土壙である。掘立柱建物78の南東に位置し、南西約2.5mには土壙173が存在した。平面形は楕円形を呈し、長径1.55m、短径1.01mになっていた。この土壙の中央よりやや北側に寄った部分には、後世の柱穴が認められた。検出面からの深さは33cm、断面形はⅢbであった。内部には灰褐色土が堆積し、土師質土器の杯の破片1858が出土している。 (福田)

### 土壙175 (第635・808図)

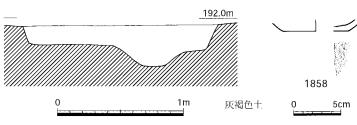
3706Db区から検出された上壙である。平面形はほぼ円形を呈し、長径78cm、短径77cmになって



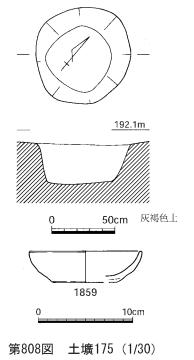
いた。検出面からの深さは31cm、断面形はⅢaであった。内部には灰褐色土が堆積し、口径11.7cm、器高3.3 cmを測る土師質土器の杯1859が出土している。色調は 鈍橙色で、外面に煤が付着している。 (福田)

土壙176(第635・809図)

3706Dd区から検出された土壙である。平面形は



第807図 土壙174(1/30)・出土遺物(1/4)



· 出土遺物(1/4)

191.4m

第809図 土壙176 (1/30)

ほぼ円形で、長径83cm、短径81cm になっていた。検出面からの深さ は82cmと極めて深く、南西部分は 袋状を呈していた。この土壙の底面は、南から北に向かって緩やかに傾斜していた。 (福田)

# 土壙177 (第635・810図)

3707Dd区から検出された土 壙である。掘立柱建物81と掘立柱 建物83の間に単独で存在し、近く に溝57が北東から南西に向かって 直線的に流れていた。平面形は円 形に近い形態を呈し、長径1.53m、 短径1.47mになっていた。検出面 からの深さは58cm、断面形はⅡa であった。内部には暗褐色粘質土 と黒褐色粘質土が堆積し、底面か ら浮いた状態で人頭大から拳大の 河原石が認められた。(福田)

### 土壙178 (第635・811図)

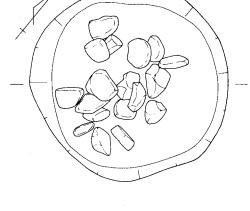
3707Db区から検出された楕 円形に近い形態の土壙である。検 出面での計測値は、長径86cm、短 径69cm、深さ70cmを測り、断面形 はⅡbで、南側の壁面が袋状を呈していた。内部には 黒褐色の砂が堆積し、底面が東から西に向かって緩や かに傾斜していた。 (福田)

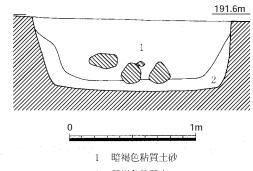
#### 土壙179 (第635·812図)

土壙178の南西4.7mで検出した土壙で、3708 Da 区に位置する。上面は長軸1.08m、短軸81㎝の不整楕円形を呈し、深さ55㎝にある底面は北にもぐりこむ。多量の炭を含む埋上から磁器や上錘 C120などが出上しており中世以降のものであることは明らかであるがその性格は不明である。 (亀山)



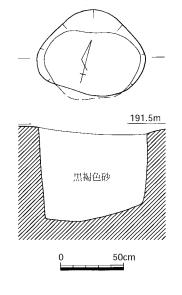
写真35 土壙177 (北から)



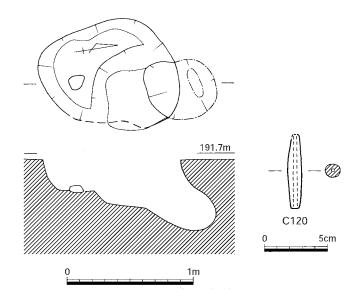


2 黒褐色粘質上

第810図 土壙177 (1/30) - 出土遺物 (1/4)



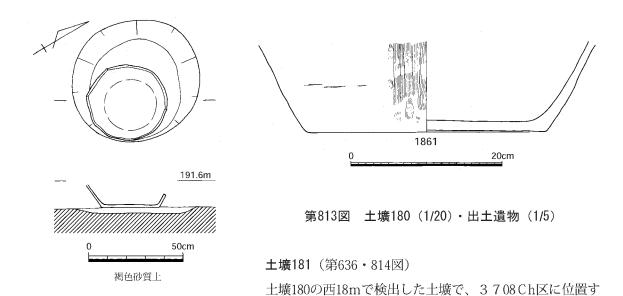
第811図 土壙178 (1/30)



第812図 土壙179 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壙180 (第635・813図、図版166・181)

3708 C j 区で検出した土壙で、掘立柱建物84の北西2.3mに位置する。底径31.3cmを測る備前焼の 甕1861を掘り据えたもので、長軸1.03m、短軸98cmの円形を呈する掘り方を検出した。その深さから すると埋葬施設とは考えにくく、水溜めなどの機能が想定される。掘立柱建物84に伴う可能性があり、 14世紀と見て差し支えないものと思われる。 (亀山)



る。長軸1.05m、短軸68cmの東西に長い楕円形を呈し、深さは15cmある。土器は出土していないが、 鉄滓がわずかに出土しており、鍛冶工房1と近似した時期が想定される。 (亀山)

### 土壙182 (第636・815図)

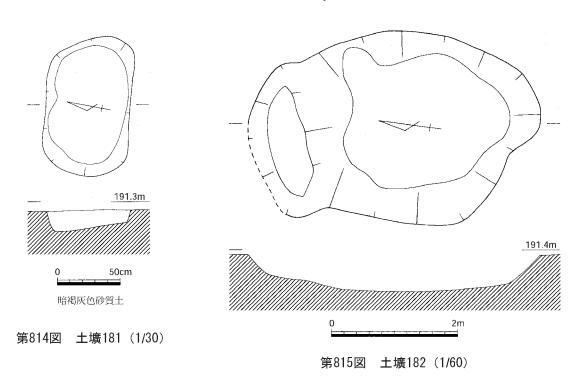
土壙181の南8.3mで検出したくぼみで、3709 Ch区に位置する。長軸2.32m、短軸1.51mの不整な 楕円形をなし、深さは28cmある。土器の細片が出土しているが中世まで下るものはなく、埋土の特徴 から古代以前に形成された自然地形と考えられる。 (亀山)

#### 土壙183 (第636・816図)

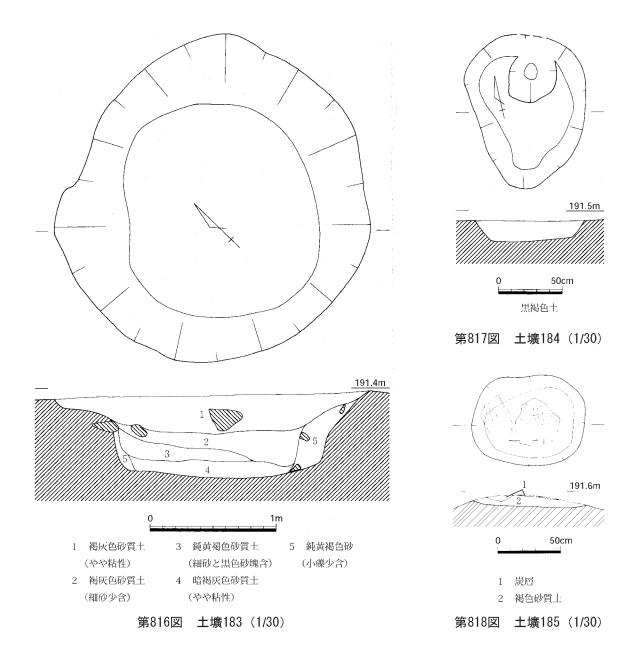
土壙182の北西2.3mで検出した大形の土壙で、長軸2.6m、短軸2.51mの不整な円形を呈し、深さは66cmある。上層で鉄滓が出土しており、中世ないしそれ以前の遺構と考えられる。 (亀山)

#### 土壙184 (第636・817図)

掘立柱建物84の南西3.7mで検出した土壙で、3709Cj区に位置する。長軸1.21m、短軸96cmの不



-544 -



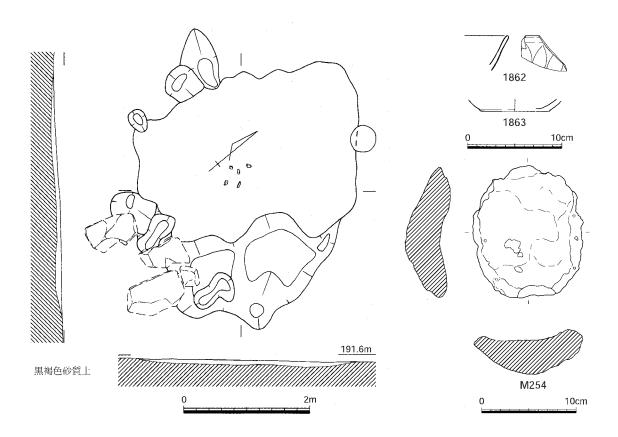
整楕円形をなし、深さは17cmを測る。黒褐色を呈する埋土からは土師器の鍋が出土しており、14世紀を前後する時期が想定される。 (亀山)

#### 土壙185 (第636・818図)

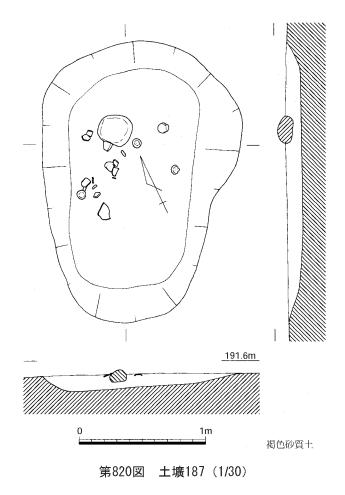
 $3708\,\mathrm{C}\,\mathrm{j}$ 区で検出した土壙で、土壙184の北 $1\,\mathrm{m}$ に位置する。楕円形を呈する上面は長軸 $1\,\mathrm{m}$ 、短軸 $78\,\mathrm{cm}$ を測り、深さは $9\,\mathrm{cm}$ と浅い。埋土には炭や焼土を含み、土師器の小片が出土している。詳細な時期は明らかでないが、他の遺構との関係から $14\,\mathrm{t}$ 世紀に属する可能性が高い。 (亀山)

#### 土壙186 (第636・819図)

掘立柱建物84の南に接して検出した土壙で、3709Cj区に位置する。長軸3.5m、短軸2.78mの不整方形を呈する浅い土壙で、黒褐色をなす埋土からはM254のような椀形鍛冶滓をはじめとする鉄滓が多量に出土した。鍛冶工房1の西5.5mに位置することからすると、こうした工房から排出された鉄滓の廃棄場所として使用されたものと思われる。鉄滓に混じって出土した青磁蓮弁文碗1862や土師器の杯1863などからして14世紀代と想定される。 (亀山)



第819図 土壙186 (1/60)・出土遺物 (1/4)



土壙187 (第636・820・821図、図版167) 掘立柱建物84の北西辺に重複して検出し た土壙で、3708 C j 区に位置する。長軸 2.23 m、短軸1.58 mの南北に長い楕円形を 呈し、深さは13 cmを測る。

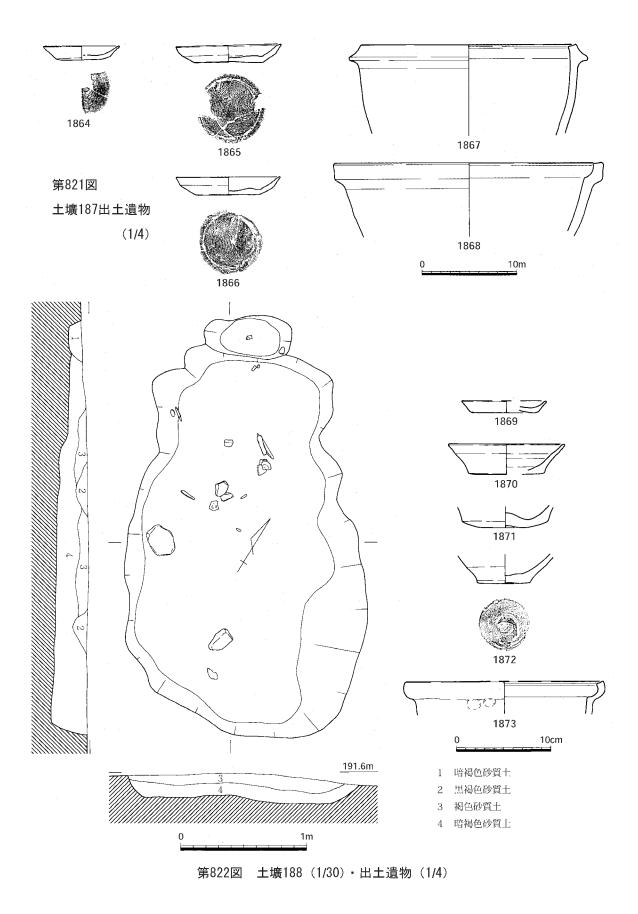
褐色の埋土からは土師器の皿1864~1866 や瓦質の鍋1867・1868、鉄釘などが出土し ており、掘立柱建物84に先行する可能性が 高い。 (亀山)

### 土壙188 (第636・822図)

3708 C j 区、掘立柱建物84の中央に重複して検出した土壙で、土壙187の東1.6mに位置する。

不整な楕円形をなす掘り方は長軸3.32 m、短軸1.89mを測り、深さは29cmある。

褐色をなす埋土の上層から土師器の杯1870 ~1872や小皿1869、瓦質の鍋1873、土錘・ 鉄器(未掲載)などが出土しており、土壙 187と近似した時期が考えられる。(亀山)



土壙189 (第636・823図)

掘立柱建物84の北東に重複して検出した土壙で、土壙188の北東に位置する。掘り方は長軸85cm、

短軸79cmの円形を呈し、深さは32cmある。上部は緩やかなすり鉢状をなすが、下部は急な傾斜をもって下る。

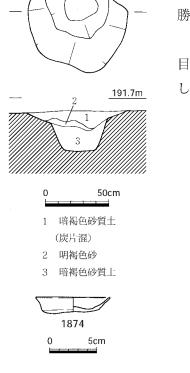
土師器の杯や小皿1874、瓦質の鍋が出土しており、土壙187・188と同様な時期が想定される。(亀山) 土壙190 (第636・824図)

3709 Cj区で検出した土壙で、土壙186の南1.1mに位置する。楕円形を呈する掘り方は長軸1 m、短軸78cmを測り、深さは9 cmある。図化できなかったが土師器の皿や鉄滓が出土しており、室町時代前葉と推定される。 (亀山)

# 土壙191(第636・825図、図版181)

土壙190の南11mで検出した土壙で、3800Da区に位置する。 長軸59cm、短軸57cmの円形をなし、深さ21cmある埋土の上層から 勝間田焼の甕1875が出土した。

口径35.7cmある口縁端部は面をなし、肩の張る体部は外面に格子目叩き、内面にハケメをとどめる。これは進上谷窯のものに類似し、平安時代末に比定される。 (亀山)



第823図 土壙189 (1/30)

• 出土遺物(1/4)

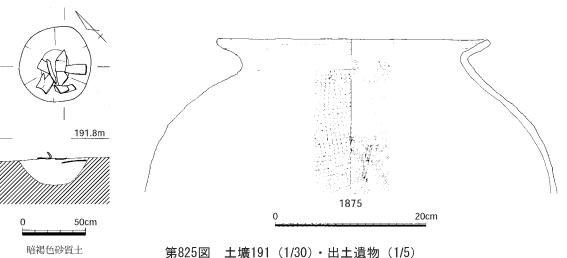
2 2 191.6m 1 0 50cm 1 暗褐灰色砂質土

2 鈍黄褐色粗砂

土壙192(第636・826図、図版167) 建物85の西隅部分で検出した小規 模な配石土壙である。土壙の長さ89 cm、幅60cm、深さ34cmを測り、軸線 は北東一南西をとる。底面に3石を 敷き、その上方南東側に3石、北西 側に2石を配している。石材は長さ 30cm前後の亜円礫である。

小規模な箱式石棺状の石材配置で あり、埋葬施設である可能性が考え られるが、遺構の性格は不明と言わ ざるをえない。土壙の埋土中からは

第824図 土壙190(1/30)



土師器杯小片1876が出土しており、中世の遺構とみてよい。

(宇垣)

### 土壙193 (第636・827凶)

建物85の南部分で検出した円形の土壙である。長径1.01m、深さ43cmを測る。埋土中から少量の鉄 滓のほか、鉄釘M255が出土している。他と同様、中世の遺構である。 (宇垣)

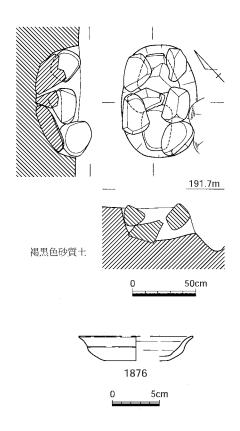
### 土壙194 (第636・828図)

建物91の西側、溝60と62の間に所在する長楕円形の土壙である。軸線をほぼ東西にとり、長径1.44

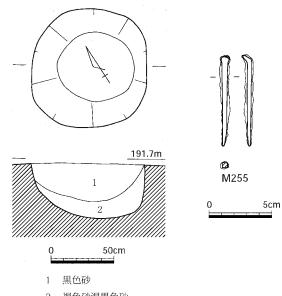
m、短径84cm、深さ31cmを測る。埋土中からは土師器の 細片が出上したのみである。

# 土壙195 (第636・829図)

土壙194の東側に所在する不整楕円形の土壙である。

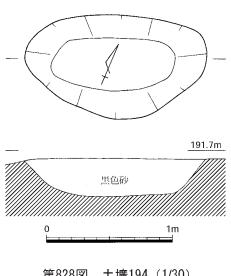


第826図 土壙192 (1/30)・出土遺物 (1/4)

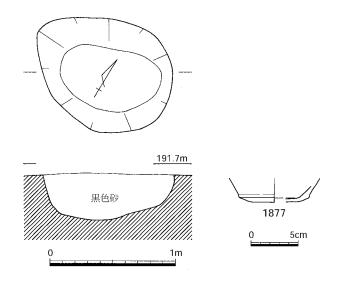


2 褐色砂混黑色砂

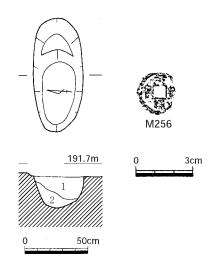
第827図 土壙193 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第828図 土壙194 (1/30)

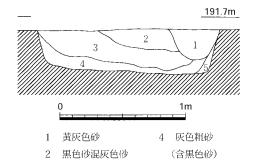


第829図 土壙195 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黒色砂
- 2 黒色砂

第830図 土壙196 (1/30) ・出土遺物 (1/2)



第831図 土壙197 (1/30)

5 灰黄色砂

黑色砂

長径1.17m、短径90cm、深さ38cmを測り、壁面は急角度で下がる。埋土は黒色砂であり、古代の土器小片のほか、土師器杯1877が出土した。中世の遺構である。 (宇垣)

#### 土壙196 (第636·830図)

土壙195の東側で検出した長楕円形の土壙で、軸線を東西にとる。長径90cm、幅50cm、深さ25cmを測り、底面は東端部で段をもつ。

埋上中から上器類の出上はなかったが、元豊通宝1点が出 土した。周縁の一部が欠損しており保存状態も良くない。中 世でも後半の遺構であろう。 (字垣)

#### 土壙197 (第636·831図)

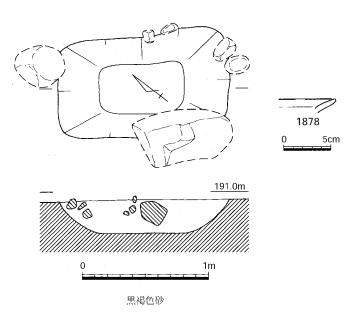
建物91の南数m、溝65の間で検出された土壙である。長軸 2.50m、最大幅1.50mの長楕円形を呈し、検出面から底部にかけては深さ35cmで壁は角度が急である。遺物の出土が確認されなかったことで時期の詳細は明確にできないが、埋土の状況から中世と推測する。 (島崎)

#### 土壙198 (第638・832図)

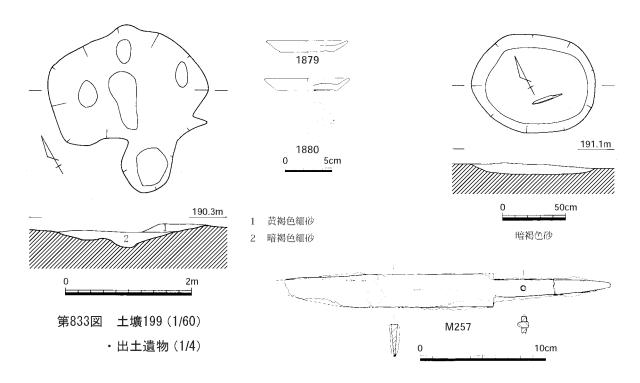
3901 Cb区から検出された隅丸長方形の土壙である。 検出面での計測値は、長径1.37m、短径78cm、深さ26cmを 測り、断面形はⅢaになっていた。内部には黒褐色の砂が 堆積し、底面から浮いた状態で河原石が認められた。出土 遺物として灰釉系陶器の小皿1878がある。 (福田)

#### 土壙199 (第638・833図)

3906Cf区において検出した。平面形は不定形をなし、



第832図 土壙198(1/30)・出土遺物(1/4)



深さが27cmほどの浅い窪み状を呈する土壙である。

第834図 土壙200 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土師器皿1879・1880の2点が出土しており、時期は中世に属する。

(弘田)

土壙200 (第639・834図、図版167・181)

3708 Cj区で検出した土壙で、掘立柱建物95の南東0.6mに位置する。長軸98cm、短軸58cmの楕円形を呈し、深さは8cmを測る。

底面から長さ27cmあまりの腰刀M257が出土しており埋葬施設の可能性も考えられたが確定できなかった。埋土の特徴などから室町時代と思われる。 (亀山)

#### 土壙201 (第639・835図)

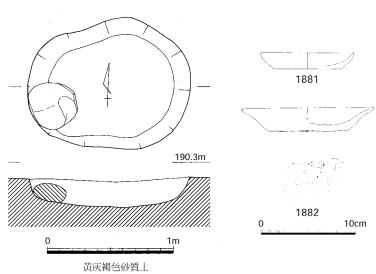
掘立柱建物101の西辺と重複して検出した土壙で、3906Db区に位置する。楕円形をなす掘り方は長軸1.29m、短軸1.04mを測

り、深さは23cmある。

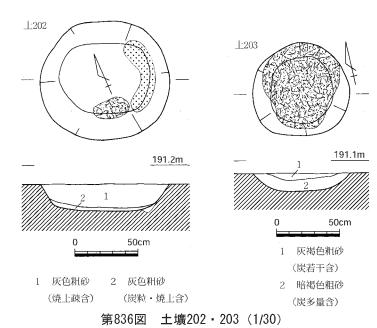
黄灰褐色の埋土から土師器の皿と赤地裂の断片が出土した。口径9.8cmを測る1881は短く内湾する口縁部をもち、口縁部が外反する1882は口径13.7cmある。いずれも底部はヘラ切りし、15世紀後半と考えられる。(亀山)

土壙202・203 (第640・836

両土壙とも3805Di区から 検出されている。土壙202は平



第835図 土壙201 (1/30)・出土遺物 (1/4)



 ±204
 ±205

 —
 191.2m

 —
 191.2m

 0
 50cm

 0
 50cm

 0
 50cm

 0
 1

 6
 6

 6
 6

 7
 6

 8
 6

 9
 6

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 1
 1

 2
 1

 2
 1

 2
 1

 2
 1

 3
 1

 4
 1

 5
 1

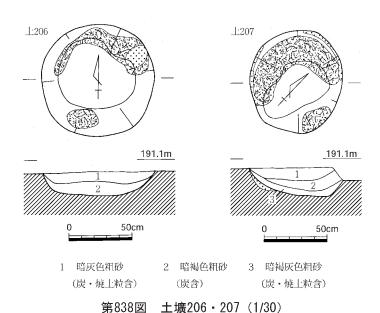
 6
 1

 6
 1

 7
 1

 8
 1

第837図 土壙204・205 (1/30)



面円形を呈し、規模は長軸1.02m、 短軸94cm、深さ22cmを測る。底面南 東側に弧状を呈している被熱範囲が 検出され、その南西側には炭の分布 が認められる。

土壙203は長軸78cm、短軸74cmの ほぼ円形を呈している。検出面から の深さは14cmであった。底面全域に 炭の分布が認められたが、被熱痕跡 は検出されていない。

両土壙とも出土遺物が土器細片の みのため、時期の決定は困難である が、埋土や検出状況などから中世に 比定される。 (小嶋)

#### 土壙204 · 205 (第640 · 837図)

3805Di区から検出された土壙である。両土壙とも径60cm前後、深さ15cm前後を測り、平面形は円形を呈している。壁面は土壙204が逆「ハ」の字状、土壙205がほぼ垂直に立ち上がっている。両土壙とも埋土中に炭を多量に含んでおり、土壙204には焼土も認められた。出土遺物は土器細片のみである。

時期は中世に比定される。(小嶋) **土壙206・207** (第640・838図)

土壙206は3805Di区から検出された。径90cmの円形を呈し、底面北東には径約20cmの赤変した範囲が認められる。また北および南側には炭が広がっていた。

土壙207は3805Dj区に位置している。逆「ハ」の字状に立ち上がる壁面には被熱による赤変が観察される。底面には炭が認められた。

両土壙とも土器細片が出土しているのみであるが、埋土や検出状況から中世に帰属する。 (小嶋)

#### 土壙208 (第640・839図)

3807 E a 区に位置する土壙で、平面形は楕円形を呈す。規模は長軸1.75m、短軸1.09m、深さ28cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がり、逆「ハ」の字状を呈する。遺物は土師器鍋1883の他に土師器杯や鉄滓等が出土した。



遺構の時期は中世に比定される。

#### 土壙209 (第640·840図)

掘立柱建物108の P 21と26に挟まれた位置に所在している。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.14m、短軸1.09m、深さ75cmを測る。

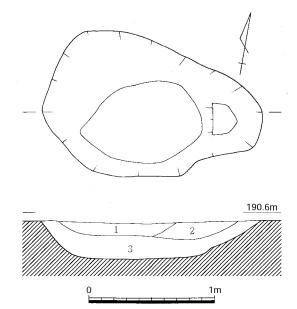
この土壙はその出土位置から掘立柱建物108に 伴うことが想定される。 (小嶋)

### 土壙210 (第640・841図)

3808Dj区に位置している土壙である。土壙 底面にはやや雑然と10~30cm大の扁平な河原石が 据えられていた。埋土中には多量の炭が認められ るが、石に被熱を受けた痕跡は認められない。遺 物は勝間田焼椀や土師器甕などが出土している が、いずれも小片で図化は不可能である。

遺構の時期は中世に比定される。

土壙墓13と同様な形態を呈していることから土壙墓の可能性が想定される。 (小嶋)



(小嶋)

第839図 土壙208 (1/30)・出土遺物 (1/4)

2 褐色粗砂

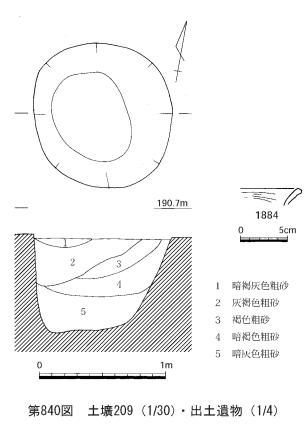
(炭少含)

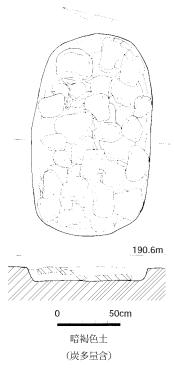
3 暗褐色粗砂

(炭少含)

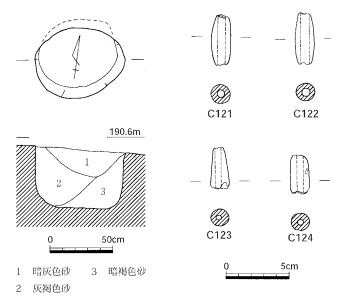
1 暗褐灰色粗砂

(炭少含)





第841図 土壙210 (1/30)



第842図 土壙211 (1/30)・出土遺物 (1/3)

#### 土壙211 (第640・842図)

3809 Dj区に位置し、平面形は長軸72cm、短軸64cmの円形を呈している土壙である。検出面からの深さ48cmを測る底面は水平であった。北側以外の壁面は垂直に立ち上がる。

遺物は図示した土錘 C121~124の他に 上師器甕小片や瓦質上器鍋などが出上し ている。これらから遺構の時期は中世に 比定される。 (小嶋)

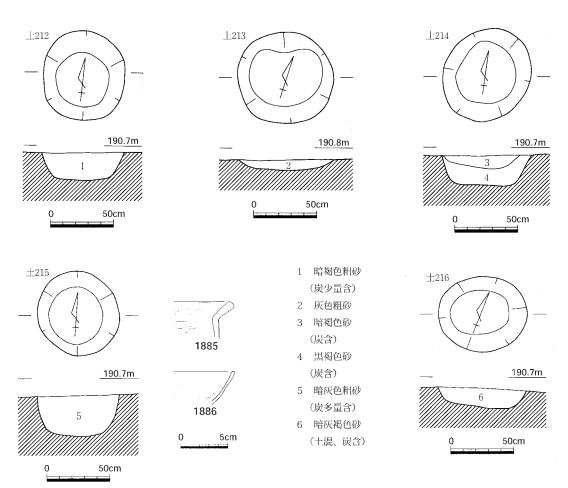
#### 土壙212~216 (第641・843図)

鍛冶炉5・6周辺に位置している土壙群である。平面形はすべて径70cm前後の円形を呈している。これらの土壙埋土中

には炭や鉄滓が含まれているものが多い。土壙の出土位置から鍛冶作業に関係する土壙が存在すると 思われる。いずれの土壙も出土遺物は少なく、時期の特定は困難である。

埋土や検出状況等から中世に比定される。

(小嶋)



第843図 土壙212~216(1/30)・出土遺物(1/4)

#### 土壙217 (第641・844図)

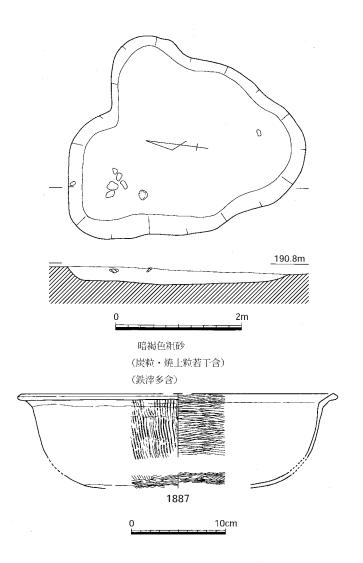
3805 E b 区に所在し、鍛冶炉4~6から約3 m 南側に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は長軸3.72m、短軸3.2m、深さ24cmである。鍛冶滓が約10.66 kg出土しており、土壙と鍛冶炉群の位置関係から鍛冶炉に伴う廃滓場ないしは作業場と判断したい。

遺物は土師器鍋1887や羽口等が出土 している。 (小嶋)

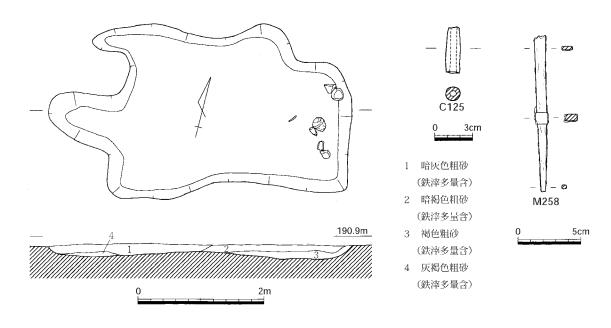
### 土壙218(第641・845図、図版168)

先述の土壙217の東側約1mに位置している土壙である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸4.8m、短軸2.8m、深さ24cmを測る。東辺付近に20cm大の角礫がまとまって出土しており、その中には被熱により赤変しているものも認められる。土壙217と同様に鍛冶滓が多量に出土し、鍛冶炉群との位置関係から鍛冶炉に伴う廃滓場ないしは作業場と判断したい。

遺物は鉄鏃M258や土錘C125、土器 細片等が出土している。 (小嶋)



第844図 土壙217 (1/60)・出土遺物 (1/4)

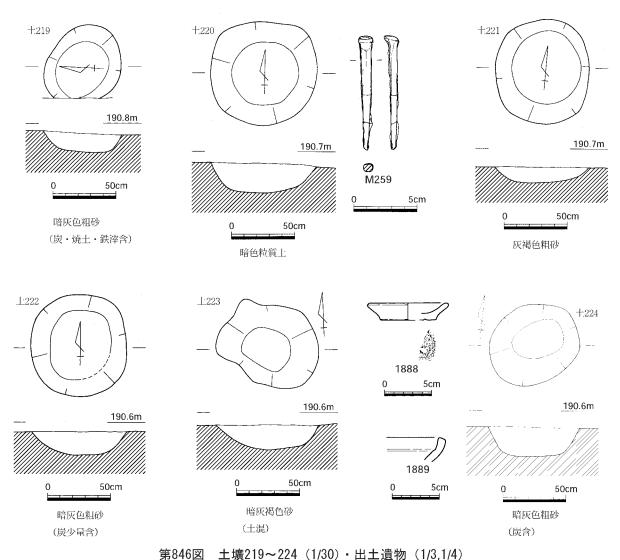


第845図 土壙218 (1/60) - 出土遺物 (1/3)

#### 土壙219~224 (第641・846図、図版182)

すべて 3806 E a 区で検出された土壙である。平面形は土壙223を除きほぼ円形を呈している。規模は土壙220~224が長軸80cm前後、短軸70cm前後であり、土壙219が径60cm前後を測る。底面はすべて平坦であり、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土には炭などが含まれていた。

出土遺物は少なく、土壙220で**M259**、土壙223で**1888**、土壙224で**1889**が図化可能であった。これらの土壙の時期は中世の範囲に収まる。 (小嶋)



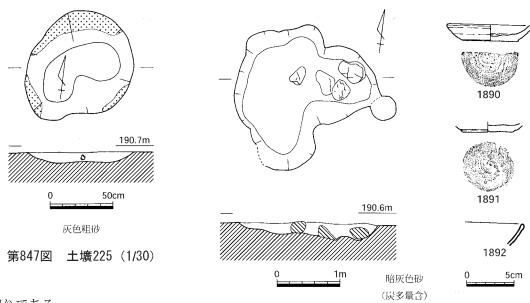
第040回 工順219~224 (1/30/•山工退彻(1/3,1/4

# 土壙225 (第641・847図)

3805 E b 区に位置している土壙である。長軸84cm、短軸82cmの平面円形を呈している。検出面からの深さは8cmと浅い。底面直上には薄い炭層が広がり、北および南東・南西の壁面は被熱により赤変している。埋土中には鉄滓が含まれていた。遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

#### 土壙226 (第641・848図)

3805 E c区で検出された。平面形は不整円形を呈している。検出面から12cmの深さを測る土壙底面は波打っており、人頭大の河原石が認められる。土壙の規模は長軸2.2m、短軸2.18mを測る。遺物は土師器小皿1890・1891、白磁碗1892の他に土師器甕小片・鉄滓が出土した。土師器小皿の底面は



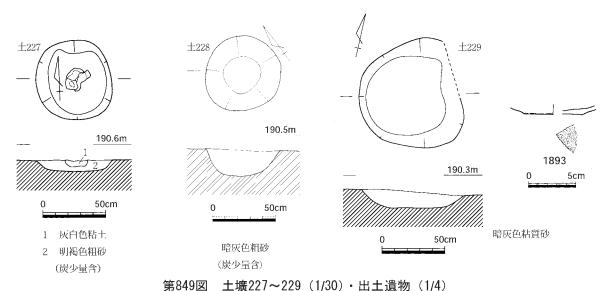
ヘラ切りである。

遺構の時期は出土遺物から中世に比定される。 (小嶋)

第848図 土壙226 (1/60)・出土遺物 (1/4)

### 土壙227~229 (第641・849図)

3805 E c 区および3806 E d 区に位置している。土壙227は鍛冶炉8・9に挟まれた場所で検出され、その出土位置や埋土中に鍛造剥片が含まれていることから鍛冶炉に伴う土壙と判断した。土壙からは炉壁用粘上かもしれない20cm大の灰白色粘土塊が出上している。土壙228・229は平面円形を呈した土壙で、土壙228が径60cm前後、土壙229が径80cm前後を測る。いずれの土壙も遺物は土器細片のみであり、土師器小皿1893のみが図化可能であった。遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)



#### 土壙230 (第641·850図、図版181)

3806 E e区に位置している土壙である。平面形は円形を呈し、長軸1.14m、短軸1.09mを測る。検出面から38cmを測る底面には10~30cm大の河原石が3個置かれていた。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。

1897・1898が出土している。 190.3m 土している。 灰褐色砂 50cm 2 暗灰褐色砂 灰色砂 1894 1895 1896 1897 1898 10cm

第850図 土壙230 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

遺物は土師器小皿1894、瓦質土器鍋1895・1896、土師器鍋

遺構の時期は中世に比定される。

(小嶋)

(小帽)

土壙231 (第641·851図、図版182)

3806 E d区で検出された土壙である。長軸1.03m、短軸94cm を測る。検出面からの深さは14cmを測り、底面は平坦であった。 壁面は西側より東側の方が緩やかに立ち上がっている。第2層中 には炭が多量に含まれていた。遺物は鉄釘M260の他に鉄滓が出

土壙232 (第641·852図、図版182)

遺構の時期は中世。

3806Ec区に位置している土壙 である。平面形は不整円形を呈し、 底面平面形は中央部がくびれたキノ コ状を呈する。規模は長軸1.28m、 短軸98㎝、深さ22㎝を測る。出土遺 物は土師器小皿1899の他に土師器甕 片や鉄滓等がある。

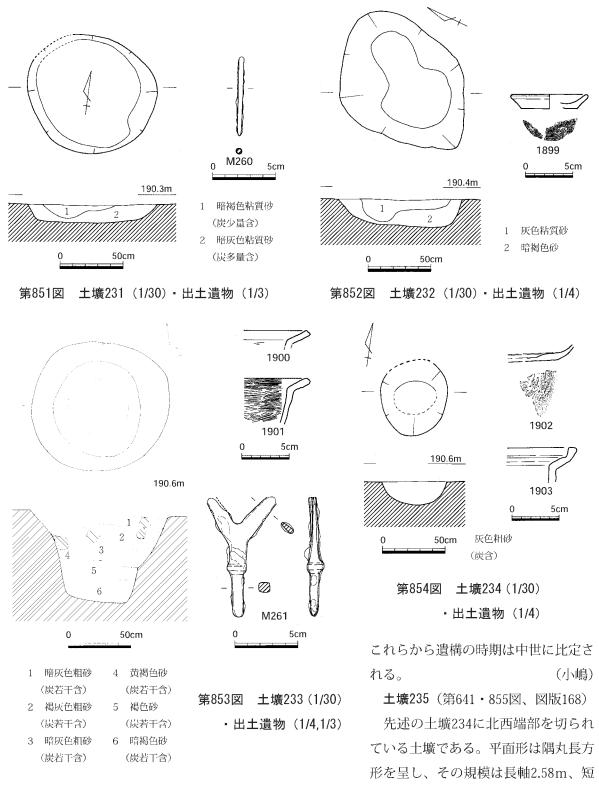
遺構の時期は中世。 (小嶋)

土壙233 (第641·853図、図版168) 掘立柱建物110の P 16と18の間に位 置している土壙である。平面形は円 形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸 1.01m、深さ69cmを測る。壁面は中 位付近までやや垂直に立ち上がり、 そこから逆「ハ」の字状に開いてい る。遺物は土師器鍋1900・1901、鉄 鏃M261の他に土師器小皿・鉄滓・ 羽口などが出土している。この土壙 は出土位置から掘立柱建物110に伴 う可能性が想定される。 (小嶋)

# 土壙234 (第641・854図)

3808Ea区に位置している土壙 である。長軸61cm、短軸53cmの平面 円形を呈する。検出面からの深さは 19cmを測る。

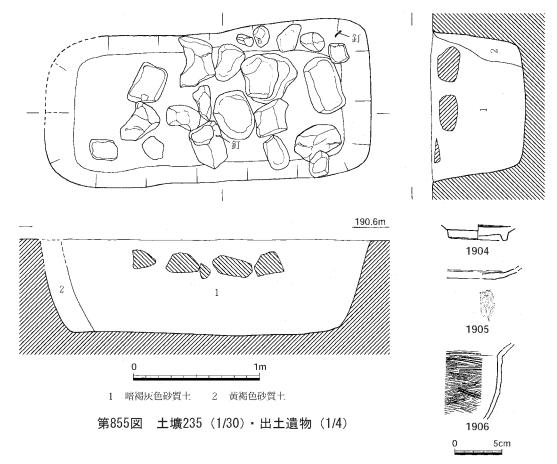
遺物は土師器皿1902、瓦質土器鍋 1903の他に鉄滓・羽口等が出土し、



軸1.16m、深さ75cmを測る。底面は平坦で、壁面はやや急角度で立ち上がっている。土壙の形態や鉄 釘の出土から土壙墓と想定され、板材を組み合わせた木棺が埋葬されていたと思われる。埋土上部の 10~40cm大の石は墓標石が落ち込んだものであろう。鉄釘はこれらの石の下から出土し、ほぼ原位置 をとどめていると考えられる。遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

#### 土壙236 (第641・856図、図版182)

3808 E b 区に位置し、平面形は方形を呈している土壙である。規模は長軸70cm、短軸67cmを測る。



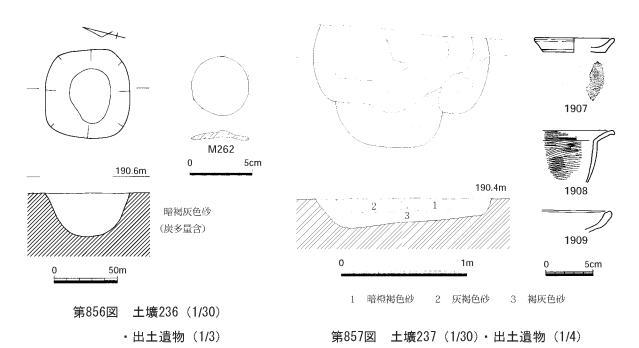
検出面からの深さは34cmであった。断面形は椀状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。鉄製の紡錘車M262が出土している。

遺構の時期は、検出状況や埋土等から中世の範囲に収まる。

(小嶋)

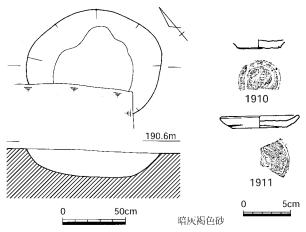
### 土壙237 (第641・857図)

3807Eb区に位置し、北東側は一次調査のトレンチにより削平されている土壙である。平面形は



190.3m

50cm



第858図 土壙238 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

不整円形を呈し、規模は長軸1.06m、短軸89cm、深さ24cmを測る。遺物は土師器小皿1907、土師器鍋1908・1909や鉄釘5点等が出土している。土壙の形態や出土遺物から土壙墓と想定される。

遺構の時期は中世。

(小嶋)

#### 土壙238 (第641・858図)

3807 E c区に位置している土壙である。 南西側は一次調査のトレンチで削平されている。平面形は円形を呈すると想定され、 長軸1.06m、短軸推定85cm、深さ20cmを測る。埋土中には炭が含まれていた。遺物は 土師器小皿1910・1911の他に土師器杯・鉄 滓等が出土している。

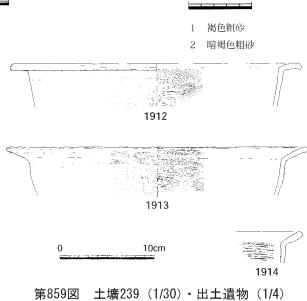
遺構の時期は中世。 (小嶋)

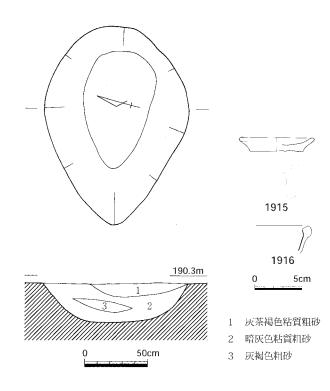
#### 土壙239 (第641・859図)

3808 E c区に位置している土壙である。 長軸56cm、短軸49cmの平面円形を呈し、深 さは26cmを測る。底面は平坦で、壁面はや や垂直に立ち上がる。土師器鍋が最低でも 数個体分出土したが、完形に復元できるも のはなかった。その他の出土遺物として鞴 の羽口が認められる。

遺構の時期は中世に比定される。(小嶋) **土壙240** (第641・860図)

3808Ec区で検出された土壙である。





第860図 土壙240 (1/30)・出土遺物 (1/4)

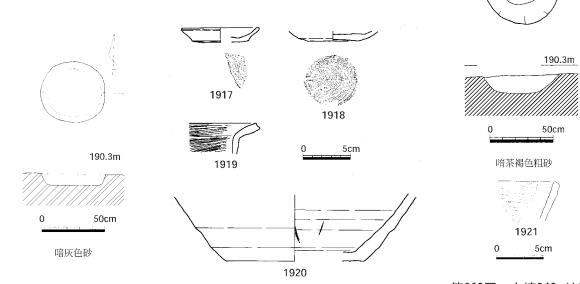
平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.57m、短軸1.15m、深さ31cmを測る。底面平面形は倒卵形を呈していた。壁面は逆「ハ」の字状に立ち上がっている。遺物は土師器小皿1915や器種不明の陶器1916等が出土しており、これらから遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

#### 土壙241 (第641·861図)

3808 E c区に位置している土壙である。平面形は円形を呈し、その規模は長軸51cm、短軸48cm、深さ10cmである。底面は平坦で、壁面はやや垂直に立ち上がる。遺物は多数出土し、土師器小皿1917、土師器鍋1919、勝間田焼鉢1920、鉄滓、羽口等が出土している。

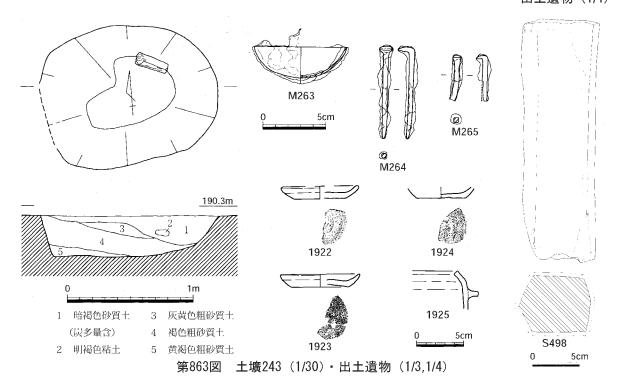
遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋) 土壙242 (第641・862図)

先述の土壙241から東側へ約3mの所に位置している土壙である。平



第861図 土壙241 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第862図 土壙242 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



(小嶋)

面形は長軸60cm、短軸55cmの円形を呈し、深さは15cmを測る。遺物は亀山焼鉢**1921**や土師器鍋等が出土し、それらから遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

#### 土壙243 (第641·863図、図版182)

土壙240から約1 m南で検出された土壙である。平面形は長軸1.41m、短軸1.12mの楕円形を呈している。検出面からの深さ32cmを測る底面は西側に若干傾斜していた。埋土は5層認められ、第1層には炭が多量に含まれていた。

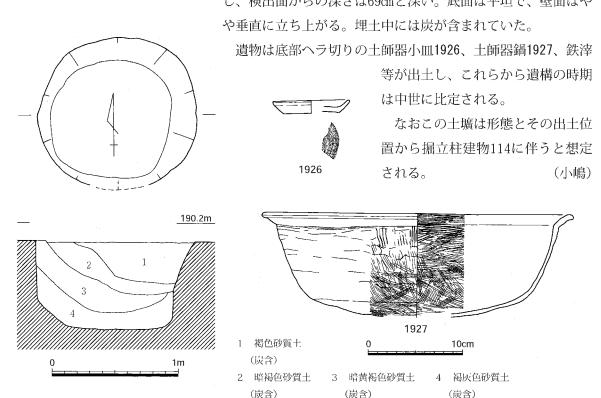
遺物は底部へラ切りの土師器小皿1922~1924、瓦質土器羽釜1925、鉄製の椀M263、鉄釘M264・265、砥石S498等が出上している。

遺構の時期は出土遺物の諸特徴から中世に比定される。

なお土壙の形態や出土遺物から土壙墓の可能性が想定される。

# 土壙244 (第641・864図、図版182)

掘立柱建物114のP18に隣接して検出された土壌である。長軸1.36m、短軸1.26mの平面円形を呈し、検出面からの深さは69cmと深い。底面は平坦で、壁面はや



第864図 土壙244(1/30)・出土遺物(1/4)

#### 土壙245 (第642·865図)

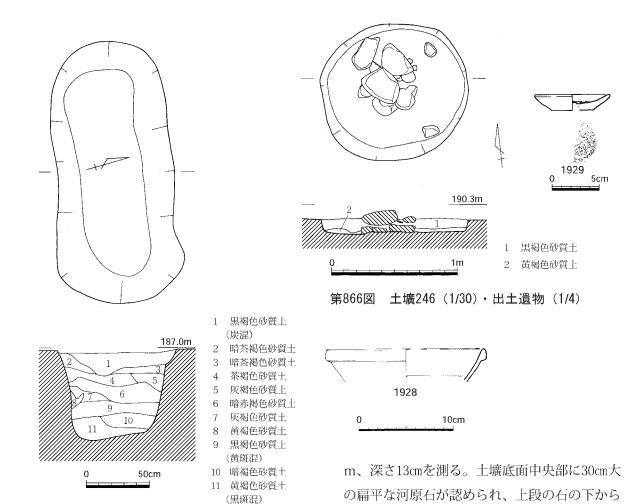
3809 E c区に位置し、平面楕円形を呈している土壙である。規模は長軸2.08m、短軸93cm、深さ70cmを測る。壁面はやや垂直に立ち上がっている。遺物は白磁碗1928や土師器甕・鍋・小皿、勝間田焼小皿等が出土し、それらから遺構の時期は中世に比定される。

なお土壙の形態から土壙墓と想定される。

(小嶋)

### 土壙246 (第642・866図)

3900Ea区に位置している土壙である。平面形は円形を呈し、その規模は長軸1.19m、短軸1.09



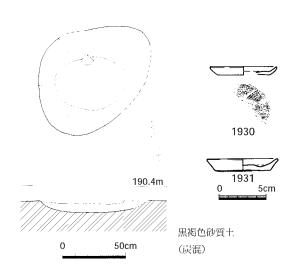
している。遺構の時期は中世に比定される。

土壙245 (1/30)・出土遺物 (1/4)

#### 土壙247 (第642・867図)

第865図

3 900 E b 区に位置している土壙である。東側は掘立柱建物118の P 15により削平されている。平面形は楕円形を呈し、その規模は長軸1.02m、短軸76cm、深さ7cmであった。底面北側から土師器小



第867図 土壙247 (1/30)・出土遺物 (1/4)

皿1930・1931が出土している。

遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

土師器小皿1929が出土した。その他の出土遺物

として土師器小皿の底部や瓦質土器鍋等が出土

(小嶋)

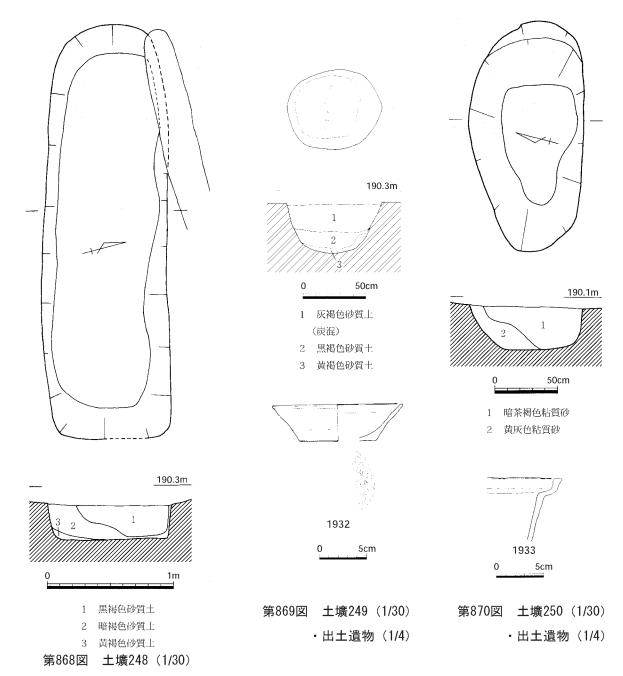
### 土壙248(第642・868図)

3900 E c 区に位置し、溝84に北辺西側を削平されている土壙である。平面形は長軸3.27m、短軸98cmを測る長方形を呈し、検出面からの深さは28cmであった。出土遺物は皆無である。土壙の形態から土壙墓と想定される。

遺構の時期は検出状況や埋土から中世の範囲 に収まる。 (小嶋)

#### 土壙249 (第642・869図)

3900Ec区に位置している土壙である。平



面形は円形を呈し、規模は長軸75cm、短軸63cmを測る。検出面か

らの深さは39cmであり、断面形は椀状を呈している。遺物は土師器杯1932や土師器小皿、鉄滓等が出土している。土師器杯の底面は糸切りのちナデが施されている。

遺構の時期は中世に比定される。
(小嶋)

#### 土壙250 (第642・870図)

3 900 E d区に位置している土壙である。平面形は楕円形を呈し、長軸1.83m、短軸90cm、検出面から底面までの深さは34cmを測る。底面は平坦で、壁面は南辺以外は緩やかに立ち上がっている。遺物は土師器鍋1933、瓦質土器鍋、鉄滓等が出土している。

遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

#### 土壙251 (第642·871図)

3900Ee区で検出された、平面隅丸長方形を呈している土壙である。規模は長軸2.21、短軸95cm、

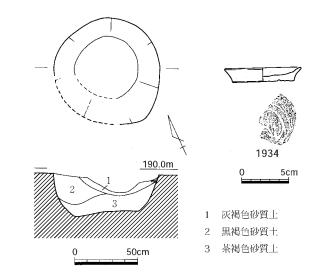
深さ15cmを測る。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。 出土遺物は土器細片のみであった。

遺構の時期は、検出状況と埋土から中世に比定される。

なお土壙の形態から土壙墓と想定される。 (小嶋)

土壙252 (第642・872図)

3900 E d区から検出された平面円形を呈すると想定される 土壙である。規模は長軸89cm、短軸84cm、深さ32cmである。遺



第872図 土壙252 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第871図 土壙251 (1/30)

物は土師器小皿1934の他に勝間田焼甕等が出土している。遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋) 土壙253 (第642・873図)

3901 E c 区に位置している土壙である。平面形は南辺中央部がくびれている。底面西側は一段深く掘り下げられていた。規模は長軸83cm、短軸52cm、深さ16cmを測る。遺物は完形に復元されるもの

はなかったが、土師器小皿1935~1939、土師器杯1940・1941、瓦 質土器鍋等が出土している。 遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋) 1940 1935 1938 190.3m 1936 1939 1941 灰褐色砂質土 50cm (炭混) 1937 2 黄褐色砂質土

第873図

土壙253 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

#### 土壙254 (第642・874図、図版169・182)

3901Eb区で検出された土壙である。長軸83cm、短軸79cmの平面円形を呈し、検出面からの深さ 24cmを測る。土壙底面は平坦で、壁面はやや垂直に立ち上がる。遺物は土師器小皿1942、土師器杯 1943~1946が出土した。杯1944は底部糸切り、それ以外は底部ヘラ切りである。

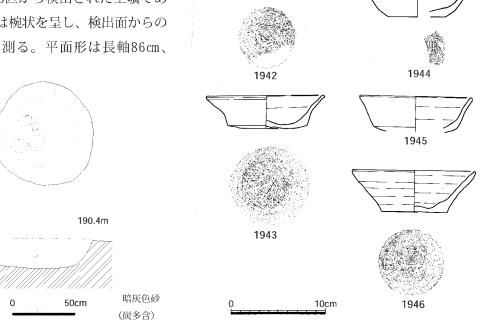
遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

# 土壙255 (第642・875図、図版169・182)

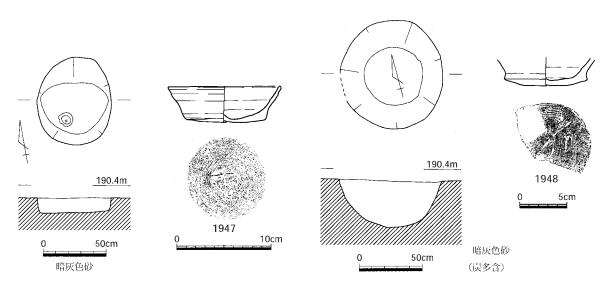
先述の土壙254から約2m南東に位置している土壙である。平面形は長軸70cm、短軸59cmの円形を 呈している。検出面からの深さ12cmを測る底面は水平で、その南西側に上師器杯1947が出上している。 (小嶋) 遺構の時期は中世に比定される。

### 土壙256 (第642·876図)

3901Eb区から検出された土壙であ る。断面形は椀状を呈し、検出面からの 深さ36cmを測る。平面形は長軸86cm、



第874図 土壙254(1/30)・出土遺物(1/4)



第875図 土壙255(1/30)・出土遺物(1/4)

第876図 土壙256 (1/30)・出土遺物 (1/4)

短軸81cmの円形を呈する。出土遺物は底部糸切りのちナデが施された土師器杯1948がある。

遺構の時期は中世に比定される。

(小嶋)

### 土壙257 (第642·877図、図版182)

3 901 Eb区に位置している土壙である。底面南西側にテラス状の段が認められ、そこから約15cm 下がって土壙最低面にいたる。遺物は底部糸切りの土師器杯1951や底部へラ切りの土師器小皿1949、 鉄釘等が出土している。遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

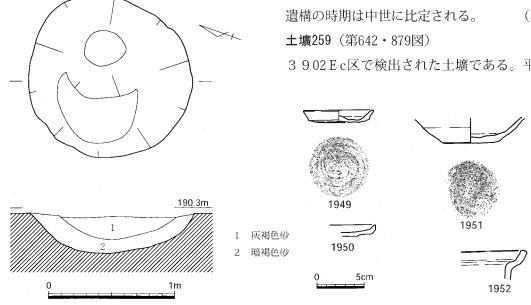
#### 土壙258 (第642・878図)

先述の上壙257の南に接して検出された上壙である。平面形は円形を呈し、規模は長軸82cm、短軸

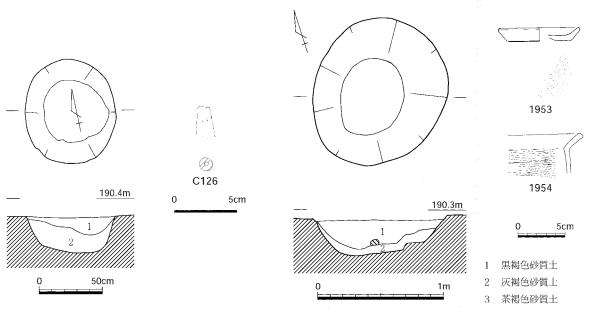
71cm、深さ28cmを測る。遺物は土師器杯、土師器 小皿の他に土錘C126が出土している。

遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)

3902Ec区で検出された土壙である。平面形



第877図 土壙257 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第878図 土壙258 (1/30)・出土遺物 (1/3)

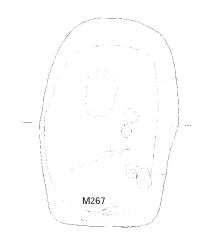
第879図 土壙259 (1/30)・出土遺物 (1/4)

は円形を呈し、規模は長軸1.3m、短軸1.22m、深さ29cmを測る。遺物は図化した土師器小皿1953、土師器鍋1954の他に瓦質土器鍋等が出土している。

遺構の時期は土器の特徴から中世に比定される。
(小嶋)

### 土壙260 (第642·880図、図版182)

先述の土壙259から約1m南側に位置している土壙である。平面形は長軸1.64m、短軸1.1mの隅丸



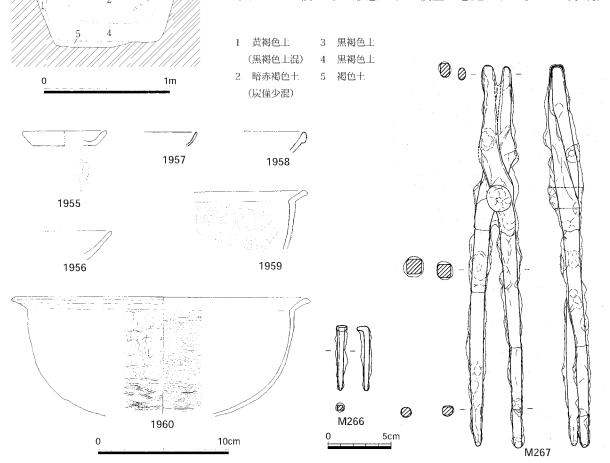
190.3m

長方形を呈し、検出面からの深さ53cmを測る。土壙底面はやや平坦で、東側から鉄鉗M267、中央西側では30cm大の河原石が検出された。出上遺物には勝間田焼椀、白磁碗、青磁皿などが認められる。この土壙はその形態と出土遺物、さらに埋土の状況から土壙墓と考えられ、被葬者は鉄鉗の出土から鍛冶に従事していた者と想定される。遺構の時期は中世。 (小嶋)

### 土壙261 (第642・881図、図版169)

3903 E b 区に位置している土壙である。平面形は長軸1.67m、短軸1.31mを測る楕円形を呈し、検出面からの深さは64cmと深い。 壁面は緩やかに立ち上がり、逆「ハ」の字状を呈する。遺物は土師器杯1961、土師器鍋1962等が出土している。

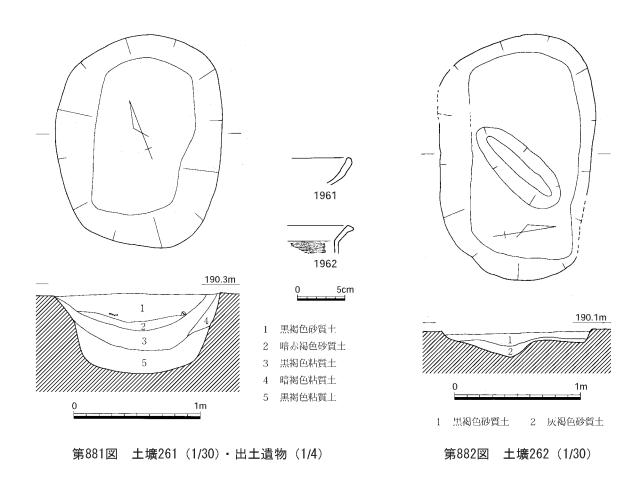
遺構の時期は出土遺物や埋土の状況から中世に比定される。 なおこの土壙はその形態から土壙墓と想定される。 (小嶋)



第880図 土壙260 (1/30)・出土遺物 (1/4,1/3)

#### 土壙262 (第642・882図)

3 905 E a 区で検出された土壙である。平面形は長軸1.95m、短軸1.19mの楕円形を呈している。底面には長軸96cm、短軸31cmを測る楕円形の土壙が確認された。遺物は土師器鍋、鉄滓等が出土している。遺構の時期は中世に比定される。 (小嶋)



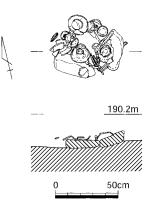
#### 土壙263 (第642・883・884図、図版183)

3 9 04 E g区に位置し、耕作土直下から検出された。遺構の掘り方は後世の削平により失われている。30cm大の扁平な河原石が3個検出され、その上から土師器小皿1963~1972、土師器杯1973~1977、

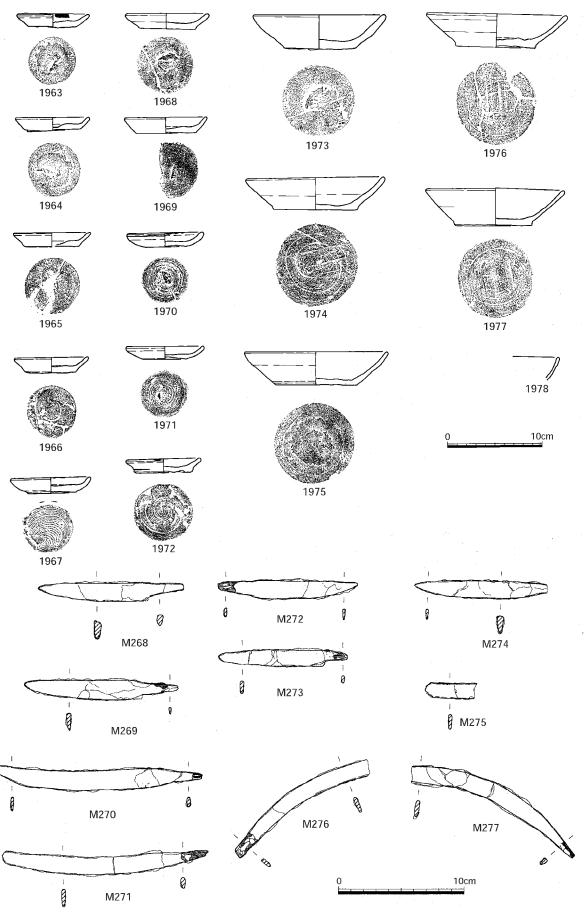
刀子M268~275、鉄鎌M276・277が出土している。勝間田焼の椀 1978は掘り下げ中に出土したものであり、これらに伴わないと考 える。小皿1967のみが底部糸切りで、それ以外の小皿・杯は底部 へラ切りである。また1967はその色調および胎土がその他の小皿 と異なっていた。遺物の出土状況から、何らかの意図で埋納され たものと考えられる。 (小嶋)

### 土壙264 (第643・885図、図版170・184)

土壙墓23から約60cm南側で検出された土壙である。平面形は長軸1.68m、短軸94cmの平面楕円形を呈している。断面形は椀状を呈し、底面に平坦面は認められない。底面南側から完形の土師器小皿1979~1983が出土している。小皿1980以外は底部糸切りであ



第883図 土壙263 (1/30)



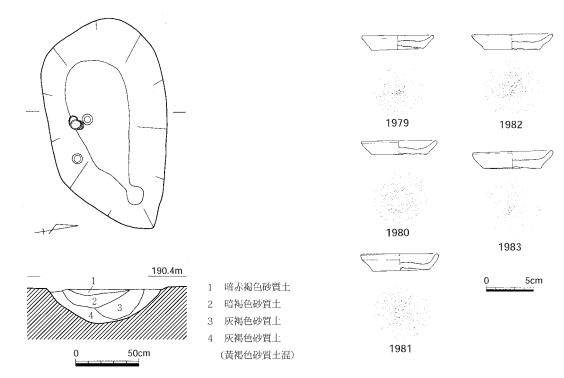
第884図 土壙263出土遺物 (1/4,1/3)

る。その他の出土遺物は鉄釘 2 点、勝間田焼甕等が出土している。遺構の時期は中世。 なおこの土壙の形態や出土遺物から、土壙墓と想定される。

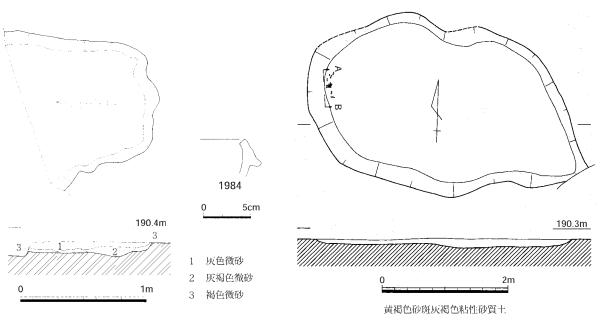
#### (小嶋)

#### 土壙265 (第644・886図)

3 9 05 Dh区にある掘立柱建物127の内部で検出された。北半部は検出できていないが、南半部の位置と形状から考えると、掘立柱建物の西半分を占める可能性もあり、この建物に伴う施設ではないかと思われる。羽口片や鍛冶滓・椀形滓の他、土師器・須恵器・瓦質土器片が出土した。鍛冶に伴う材料置き場のようなものであろうか。埋土は3層に分けられ、第1層は締まっていた。 (岡本)

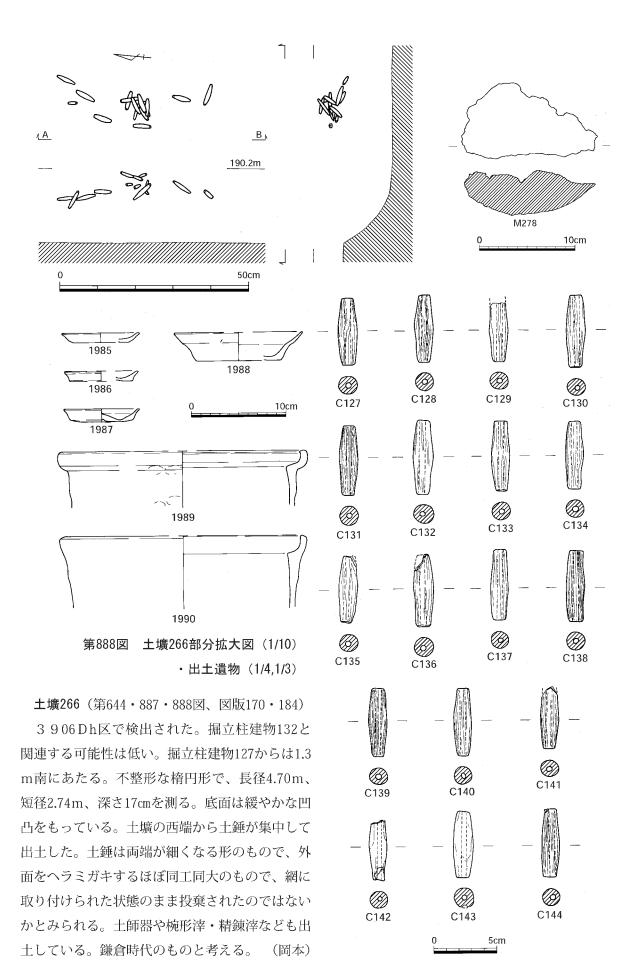


第885図 土壙264 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第886図 土壙265 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第887図 土壙266 (1/60)



#### 土壙267 (第645・889図)

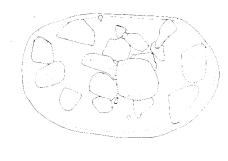
3908Cj区で、これより南に広がる中世水田の肩部に位置する。平面形が楕円形を呈して、規模は長径が1.56m、短径は97cm、深さが22cmを測る。円礫を長方形に囲うように配し、土壙墓の可能性も考えられたが人骨や副葬品はみられなかった。検出面からみて、時期は中世と思われる。 (弘田)

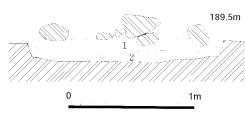
# 土壙268 (第647・890図)

3909Di区で検出された。平面形は長楕円形で、長軸の方向はN-11°-Eを測る。長径2.52m、短径1.02m、断面形は逆台形で、深さは42cmである。縦断面を観察すると、一度大きく掘り直されているようである。弥生上器の破片が1片出上したのみで、類例から中世の上壙とみられる。 (岡本)

# 土壙269 (第647・891図、図版171)

土壙268から9m南に位置する。平面形は細長い長方形に近く、四隅が丸く、中央が少しくびれる。





1 唷灰褐色細砂 2 唷褐色微砂第889図 土壙267 (1/30)

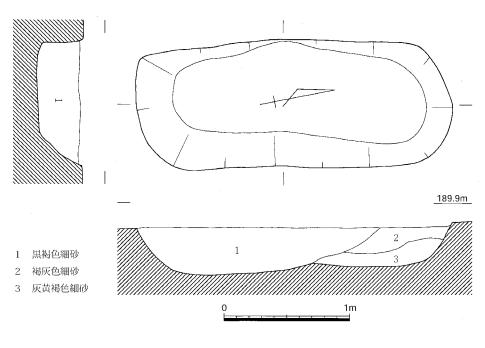
長軸の方向はN-5°-Wである。長軸2.98m、短軸0.7m、深さ27cmを測る。長軸側の壁は急傾斜で、横断面は逆台形を呈するが、短軸側の傾斜は緩やかである。出土遺物はなかった。 (岡本)

#### 土壙270 (第647・892図)

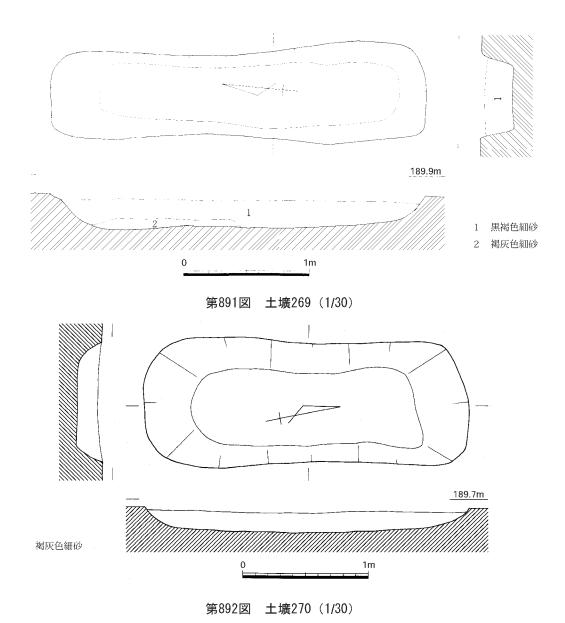
土壙269から3m東で検出された。平面形は長楕円形で、中央部が少しくびれる。長軸の方向はN-11°-Eを測り、土壙268と等しい。土壙の規模も、長径2.58m、短径1.05mで、土壙268と近似している。深さは一段低い水田部分にあったため21㎝と浅くなっている。出土遺物はみられなかった。 (岡本)

# 土壙271(第647・893図)

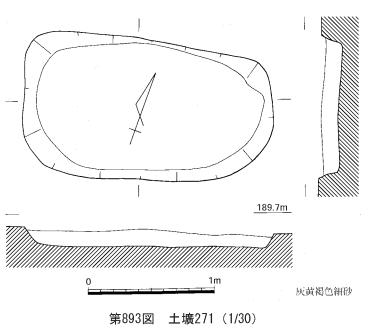
土壙269の北東4mに位置していた。平面形は隅

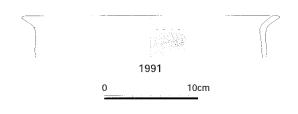


第890図 土壙268 (1/30)



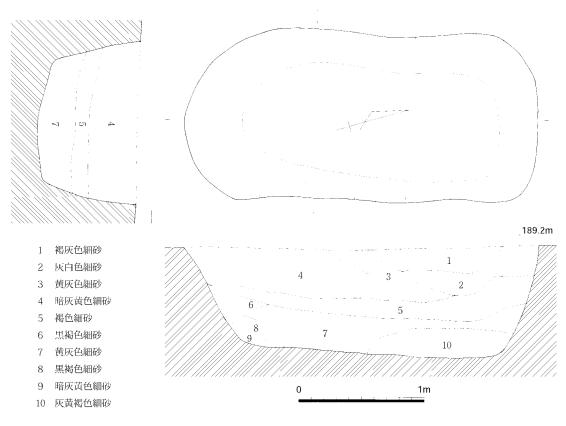
丸長方形に近く、長軸1.99 m、短軸1.14m、深さは18 cmを測る。長軸の方向は N-70°-Eで、土壙268~270と は大きく異なっている。平 面形も細長くはない。埋土 は灰黄褐色細砂で、これも前3者と相違をみせている。土壙271は土壙268~270と は機能も年代も異にしているとみられる。なお、出土遺物はなかった。(岡本)



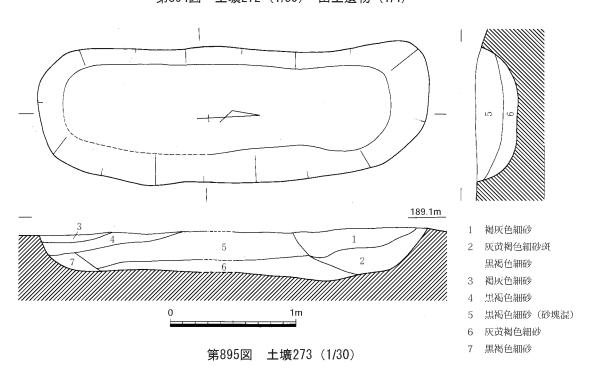


### 土壙272 (第647・894図)

4 0 02 D j 区で検出された。掘立柱建物141の6 m北東に位置している。平面形は長楕円形で、長径2.81 m、短径1.35 m、深さは90 cmを測る。中央部がわずかにくびれている。長軸の方向はN-16°-



第894図 土壙272 (1/30)・出土遺物 (1/4)

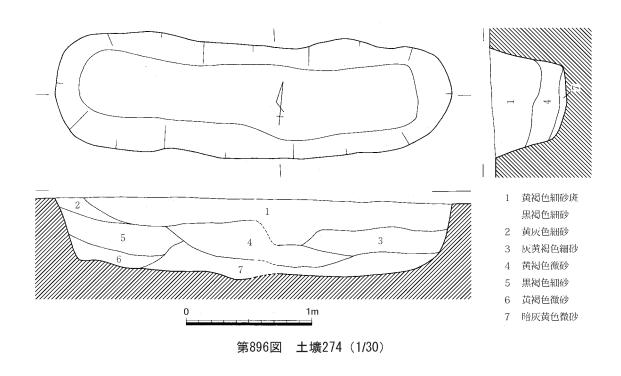


#### 土壙273 (第647・895図)

土壙272から4m南東に位置している。平面形は長楕円形で、長径が3.10m、短径は1.08m、深さは43cmである。長軸の方向はN-4°-Eを測る。壙壁は緩やかに湾曲し、横断面の形状は椀形を呈する。埋土の堆積状況は複雑で、土壙の北端部では掘り直しがなされたように観察された。土壙平面形の北端の捻れはこのせいかもしれない。出上遺物としては中世の上師器片と鉄滓がみられた。 (岡本)

#### 土壙274(第648・896図、図版171)

4004Di区、掘立柱建物141の南東隅に接している。平面形は長楕円形を呈し、長径3.14m、短径



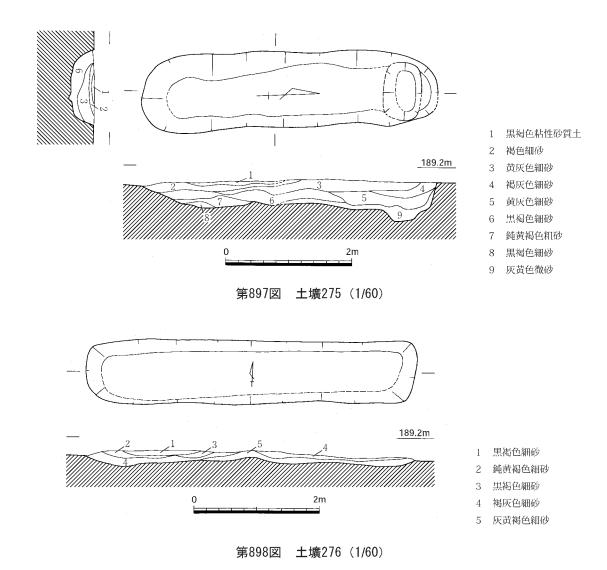
0.96m、深さ67cmを測る。長軸の方向はN-85°-Eで、土壙269のそれと直交する。壙壁の傾斜は急で、 断面形は逆台形を呈する。埋土の堆積状況は複雑で、掘り直しの痕跡も認められるが、第1層の土は 埋め戻した感じを受ける。鉄滓と土師器片が出土するが、その年代は明瞭ではない。 (岡本)

#### 土壙275 (第648・897図、図版171)

土壙273から南2.5m、土壙274から北北東4mで検出された。長楕円形の長大な土壙で、全長4.70m、幅1.26m、深さ64cmを測る。長軸の方向はN-3°-Eで、土壙273とほぼ平行している。壙壁は緩やかに湾曲する。土壙の底面には小さな凹凸があり、北端部で幅60cmの落ち込みが認められる。埋土は細かく分層され、しだいに埋没していったものとみられる。土師器片が出土した。 (岡本)

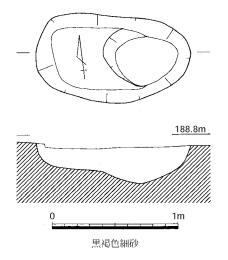
### 土壙276 (第648・898図)

土壙274から南 6 mで検出された長大な土壙である。平面形は隅丸の長方形に近く、長軸5.23m、短軸1.04m、深さ27cmを測る。長軸の方向はN-87°-Eで、土壙275と直交している。底面はかなり凹凸がある。埋土は 5 層で、じょじょに埋まったとみられる。遺物は出土しなかった。 (岡本)



# 土壙277 (第648・899図)

4 0 07 E a区で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸方向を東西にとる。長径が1.23m、短径は69cm、深さが30cmを測る。底面は段状になり、東半が落ち込む。段差は10cm程である。出土遺物と



第899図 土壙277 (1/30)

して年代不明の土師器や須恵器の破片がある。周辺の状況か ら判断して、中世の土壙とみられる。 (岡本)

# 土壙278(第649・900図)

南部南端の掘立柱建物147の中央部、掘立柱建物148の西北に位置する。長径1.33m、短径43cmの東西に長い形を呈する。 深さは10cmを測る。

土壙内から土師質小皿1922が1点出土している。これは淡橙色を呈し砂粒を含む。復元口径6.8cm、器高1.2cmを測る。 底部は篦で起こしている。 (伊藤)

# 土壙279 (第649・901図、図版184)

南部南端掘立柱建物147の東端、掘立柱建物148の北側に位置している。長径1.4m、短径1.1mの楕円形を呈し、深さ19

第901図 土壙279 (1/30)・出土遺物 (1/3)

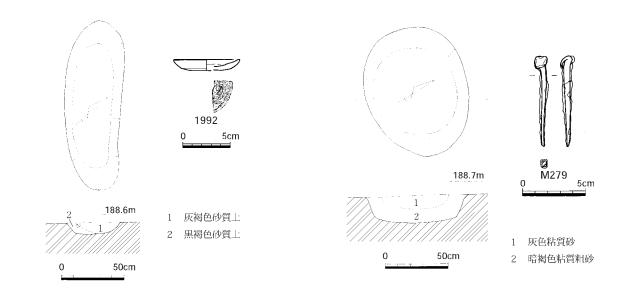
cmを測る。土壙内から釘M279が1点出土している。これは長さ7cmで、幅4mm角前後で、重さは5.95gを測る。釘の存在は、土壙墓の可能性も考えられる。 (伊藤)

# 土壙280 (第649·902図)

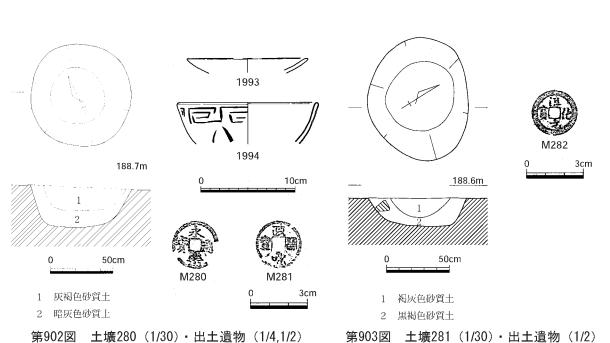
南部南端掘立柱建物149の西南に位置する。長径84cm、短径80cmのほぼ円形を呈する。深さ32cmを 測る。土壙内から復元口径12.8cmの土師質皿1935、口径14.6cmの雷文帯連弁青磁碗1994が出土してい る。その他に永楽通寶M280(明永楽6(1408)年初鋳)、政和通寶M281(北宋政和元(1111)年初 鋳)の宋銭2枚が出土している。 (伊藤)

# 土壙281 (第649・903図)

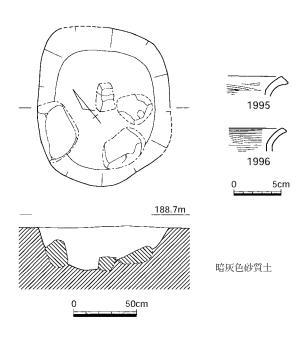
南部南端掘立柱建物149内の西南に位置する。長径98cm、短径30cmの楕円形を呈する。深さは22cm を測る。土壙内から淳化元寶M282(北宋淳化元(990)年初鋳)が出土している。 (伊藤)



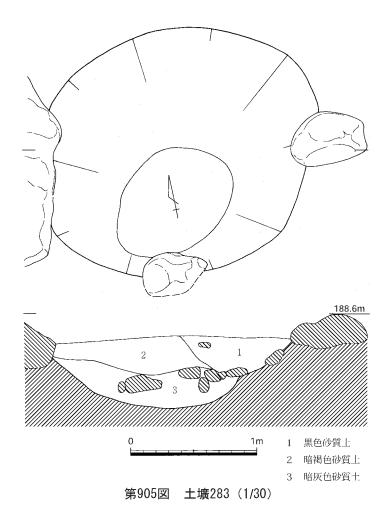
第900図 土壙278 (1/30)・出土遺物 (1/4)



工模200 (100) 出土及物 (17,112) 另 3000因 工模201 (100) 出土



第904図 土壙282 (1/30)・出土遺物 (1/4)



## 土壙282 (第649・904図)

南部南端掘立柱建物148の南桁列南東4.5m、掘立柱建物149の東梁列北4mの所に位置する。 長径1.3m、短径1.04mの楕円形を呈し、深さは 34cmを測る。底部および壁面には人頭大の自然 石が散在する。土壙内から土師器甕あるいは鍋 の口縁部小片2点1995・1996が出土している。

(伊藤)

# 土壙283 (第649·905図、図版172)

4 1 02 Dh区から検出された平面不整円形を呈す土壙で、土壙の西肩には土石流によって流されてきた巨石が所在する。規模は2.35×1.95m、深さ60cmを残す。底部はやや窪み、壁は緩い傾斜をもつ。埋土には拳大から人頭大の礫が混じ

り、それとともに中世土器細片が 出土している。 (江見)

#### 土壙284 (第649·906図、

# 図版184)

4 1 04 D f 区から検出された平面不整円形を呈す土壙で、掘立柱建物150の P 13を一部切っている。規模は1.1×1.05m、深さ25cmを残す。底部はやや傾斜し、壁は斜めに立ち上がる。埋土第1層からは約110 g の炭化木とともに刀子M 283が出土している。現存長約16cm、幅1.2mm、重さ32.65 g を測る。中世の範疇であろう。 (江見)

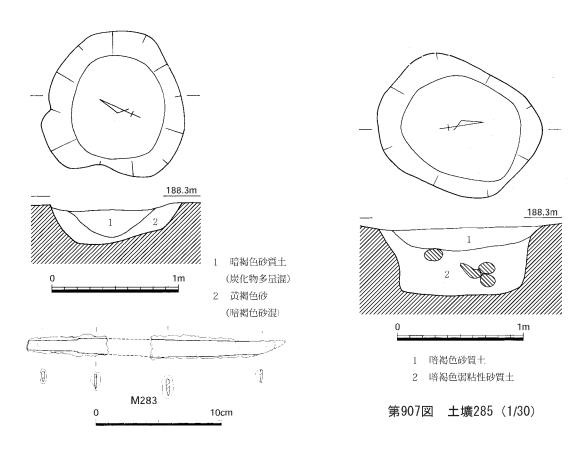
## 土壙285 (第649·907図)

土壙284の南5mから検出され、 掘立柱建物150と重複する位置に はあるが切り合いはない。平面楕 円形を呈し、規模は1.22×1m、 深さ54cmを残す。底部は平坦で、 壁は肩口が広がっているが、本来 垂直に近く立ち上がっていたもの

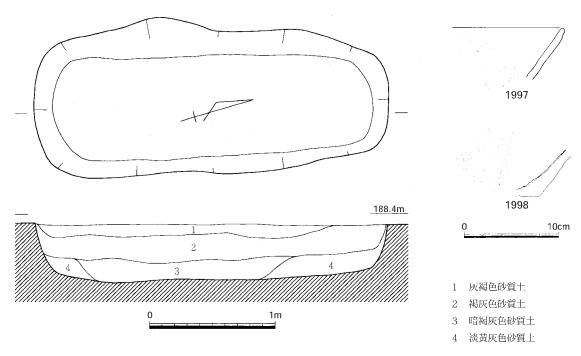
と想像される。埋土に20cm前後の川原石が流れ込み、これに混じって土師器小皿・鍋、瓦質鍋などの細片が出土している。 (江見)

# 土壙286 (第649・908図)

4 1 04 D f 区、掘立柱建物150の P 3 を一部切って検出された長楕円形の土壙である。規模は $2.8 \times 1.15$  m、深さ45 cm を残す。埋土は4 層からなり、土壙内からは勝間田焼鉢1997、備前焼擂鉢1998が出土



第906図 土壙284 (1/30)・出土遺物 (1/3)



第908図 土壙286 (1/30)・出土遺物 (1/4)

している。なお、土壙墓25と方位がそろっており、中世土壙墓の可能性もある。

(江見)

# 土壙287 (第649・909凶、凶版184)

4 1 05 De区に位置し、掘立柱建物151と重複関係にある。平面円形を呈し、規模は95×85cm、深さ38cmを残す。底部は中央がやや高く、壁は斜めに立ち上がる。埋土は4層からなり、これに混じって土師器の杯1999が出土している。15世紀前半のものか。 (江見)

## 土壙288 (第649·910図、図版172)

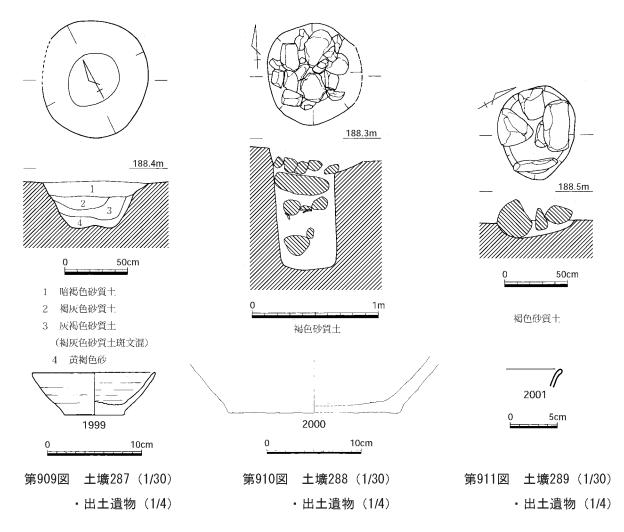
4 105 Dg区に位置し、掘立柱建物153と重複関係にある。平面円形を呈し、規模は検出面で80×75cmを測るが途中から径約45cmと狭く、深さは95cmと深い。上壙底部は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は褐色砂質土で径10~40cmの川原石が重なるように流れ込んでいた。これらに混じって備前焼の甕片2000が出土している。 (江見)

#### 土壙289 (第649・911図)

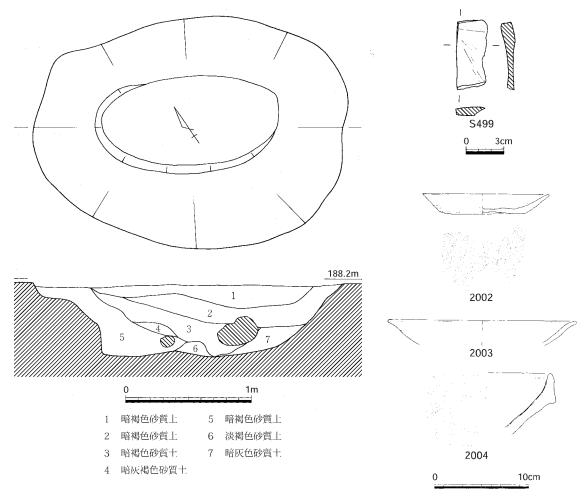
4 1 04 Dh区から検出された平面円形の土壙で規模は $75 \times 62$ cm、深さ14cmを残す。底部はやや傾斜し、壁は緩く斜めに立ち上がる。土壙内からは径 $20 \sim 40$ cmの川原石が出土しており、これらの間から土師器小皿・鍋、青磁2001が出土している。2001は $14 \sim 15$ 世紀の年代観を与えられる。 (江見)

#### 土壙290(第649・912図、図版172・184)

4 1 04 Di区から検出された平面楕円形の大形土壙である。規模は2.5×1.85m、深さ約60cmを残す。 土壙の底部はほぼ平坦で、壁は一部垂直に立ち上がる部分も認められるが、全体的には斜めに立ち上



がる。埋土は7層からなり、人頭大の川原石も混入していた。これらに混じって土師器皿2002・2003、 備前焼擂鉢2004、砥石 S 499などが出土している。皿はいずれも底部をヘラキリ後ナデられ、2003は 底部と口縁部の境界がほとんどない形態である。15世紀後半のものであろう。 (江見)

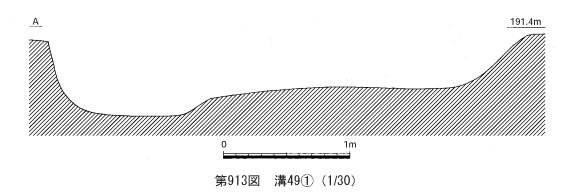


第912図 土壙290(1/30)・出土遺物(1/3,1/4)

# 9 溝

溝49 (第628·913·914図)

3601Dd区~3605Db区にかけて検出された溝である。北部分は町道の位置になるため、調査が



-583 -

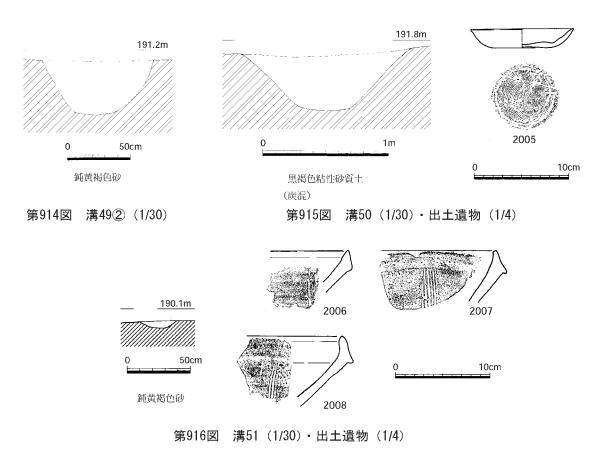
できなかった。南西方向の端部は幅が狭いが、町道に面した北側は幅が広くなって2段掘りになっていた。断面形は上方に開いた「U」字形で、内部には鈍黄褐色の砂が堆積していた。 (福田)

#### 溝50 (第628・915図)

3608Dd区~3700Dc区にかけて検出された溝で、南西には掘立柱建物67が、北東には掘立柱建物64が存在した。この溝の中間部分は緩やかに湾曲しているが、内部には炭化物を含む黒褐色粘性砂質土が堆積し、口径10.8cm、器高2.1cmを測る土師質土器の皿2005が出土している。 (福田)

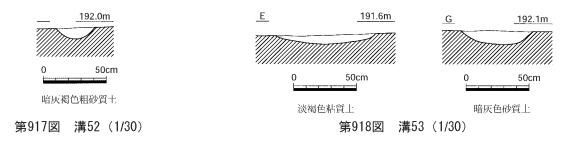
## 溝51 (第628・916図)

3608De区~3700De区にかけて検出された溝である。南は大きな穴を掘って産業廃棄物が埋められていたので、調査することができなかった。この溝は幅が狭くて浅かったが、断面形は上方に開く「U」字形を呈し、内部の鈍黄褐色砂から備前焼の擂鉢2006~2008が出土している。 (福田)



溝52 (第628・917図、図版173)

ほぼ南北方向に検出された検出全長約20mあまり、幅約30cm、深さ約10cmの直線的な溝である。周囲に掘立柱建物は検出されず、用途や性格は明らかでない。人工的に掘開された溝であれば、排水な



どの機能も考えられ、溝53との関連性も考慮する必要がある。

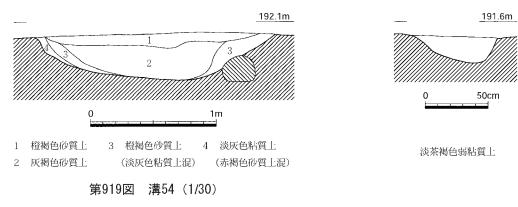
(岡田)

#### 溝53 (第628・918図)

落ち込み1をはさみ、溝52の東方で検出されたほぼ南北方向を示す溝である。検出全長約35m、幅約50~80cm、深さ約10cm前後を測る。断面形は凸レンズ形を示し、暗褐色粘土あるいは暗灰色砂質土が埋積するが出土遺物は認められない。 (岡田)

#### 溝54 (第628·919図)

満53の南側で検出されたややいびつな南北方向の溝である。検出部分はわずかで、全容は明らかでない。検出部分の幅は約1.9m、深さ約30cmを測る。周辺に掘立柱建物も検出されていないため、この溝の性格や機能は不明である。出土遺物は認められない。 (岡田)



第920図 溝55 (1/30)

#### 溝55 (第628・920図)

3 6 08 Di ~ 3 6 09 Di 区に位置する。検出した幅は約70cm、深さは約20cm残存していた。全長は約5 m検出したのみである。

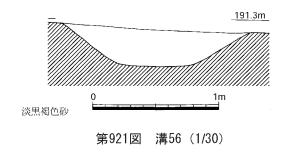
時期は検出面や埋土から中世と考えており、性格は不明である。(平井)

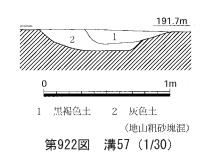
# 溝56 (第635・921図)

3703Ci区~3703Cj区にかけて検出された溝である。この溝は緩やかな弧を描いて確認されたが、西側は吉井川の支流である久田川の氾濫によって削平されていた。断面形は上方に開く「U」字形を呈し、内部には淡黒褐色の砂が堆積していた。 (福田)

# 溝57 (第629·922図、図版173)

3703Ci区~3703Cj区と3706Dd区~3800Cj区にかけて検出された溝である。北東から南西に向かって直線的に延びる溝で、掘立柱建物81の南東部分と重複していた。断面形は上方に開く浅い「U」字形を呈するが、上層に黒褐色土が、下層に地山の粗砂魂を含む灰色土がそれぞれ堆積して





いたので、ほぼ同じ流路を踏襲して2度にわたって水が流れたと思われた。

(福田)

## 溝58 (第636・923図)

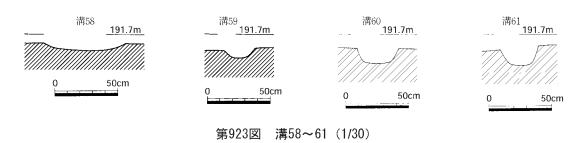
建物89・90の北西側、建物85の南西側で検出した溝で、ほぼ直線をなし、南西に流下するとみられる。浅く幅広で、幅65cm、深さ6cmを測る。時期を判断できる遺物が出土しなかったが、埋土等から中世の遺構と判断する。 (宇垣)

#### 溝59 (第636·923図)

建物90の北西側、溝58の南西端部分で検出した溝で、短い溝2条がそれに斜めに交差する溝で接続した形となる。溝の断面は浅い逆台形をなし、幅24cm、深さ9cmを測る。時期を判断できる遺物は出土しなかった。中世の遺構であろう。 (字垣)

#### 溝60 (第636・923図)

建物89・90の北西、溝59の南側で検出した溝で、緩い曲線をなし、西に流下する。断面は逆台形をなし幅32cm、深さ12cmを測る。時期を判断できる遺物は出土しなかった。埋土等から中世の遺構と判断する。 (宇垣)



# 溝61 (第636・923図)

溝60北側に所在する溝でほぼ東西方向をとり、東端は溝60を切っている。延長は短いが、断面逆台形で幅30cm、深さ15cmを測る比較的しっかりした溝である。埋土等から中世の遺構と判断する。

(宇垣)

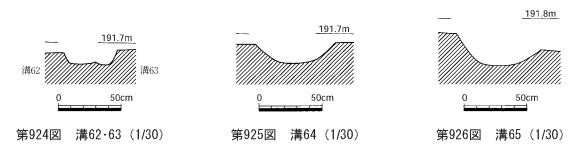
#### 溝62・63 (第636・924図)

溝60・61の南3.4mの位置で検出した2条の溝で、溝60とほぼ同様の規模・形状を示して平行しており一連の遺構の可能性がある。切り合い関係を把握できなかったが、溝62と63はほぼ同様の規模で同方向であり、一方の埋没後に他方が掘り直されたとみられる。

深さはいずれも12cm前後で、幅は溝62が30cm、溝63が26cmである。時期を判断できる遺物が出土しなかったが、埋土等から中世の遺構と判断する。 (字垣)

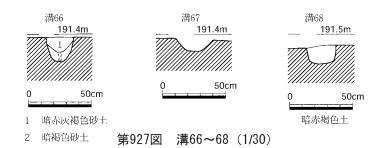
# 溝64 (第636・925図)

建物90・91の北西部分で建物に重複して検出した溝であるが、建物の柱穴との切り合い関係は認め



られなかった。

他と同様、北東~南西方向に軸線を とるが、東端では北に屈曲する。断面 は浅い半円形で、幅63cm、深さ17cmを 測る。他と一連の中世の遺構とみられ る。 (字垣)



## 溝65 (第629・926図)

建物85・90・91等北東から南西方向に並ぶ建物群の南東側に検出された。幅1mに満たない、長さ40mの比較的規模の小さい溝である。北約35mに位置する溝57と平行し、建物85とも棟方向が同一とあってその関係が推測されるが明確ではない。時期は、埋土から中世と判断される。 (島崎)

#### 溝66 (第629·927図)

溝57の東方約30m、掘立柱建物83の東方約12mで検出された狭長な溝である。幅約20cm、深さ約20cm前後を測り、断面形は明瞭なU字形を示す。南方溝69や溝67などと方向や形状に共通点を見いだすことができる。埋積土は上・下層ともに砂質土である。 (岡田)

#### 溝67 (第629・927図)

溝66の南方約10mで検出された狭長で直線的な溝である。幅約30cm、深さ約10cmを測り、断面形は 逆台形を示す。

検出南端部は南西方の溝65と筋互い状に開放し、あたかも通路のような印象を与える。そして北西 方約38mの溝57と平行している点にも注意を払う必要があるだろう。 (岡田)

#### 溝68 (第629·927図)

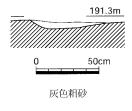
溝67に切られて検出されたほぼ東西方向を示す狭長な溝である。幅約20cm、深さ約15cm前後を測り 断面形は角張ったU字形を示す。埋積土は暗赤褐色土で、出土遺物は認められない。 (岡田)

## 溝69 (第637·928図)

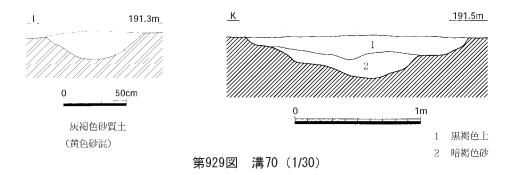
溝70に切られて検出された北西から南東方を示す直線的な溝である。検出全長は5mあまり、幅約60cm、深さ約6cm前後を測り、断面形は凸レンズ形を示している。周囲に掘立柱建物などの建築遺構がなく、性格や機能は明らかでない。 (岡田)

# **溝70** (第637・929図)

ほぼ南北方向で検出された浅い溝で、検出全長約35mを測る。幅は最大で約1.8m、平均で70cmを測る。深さは20~35cm前後と他の



第928図 溝69 (1/30)



 溝に比べるとかなり深い。

北端は緩やかに屈曲するが、掘立柱建物などに伴うものではなく、出 土遺物も認められない。 (岡田)

溝71 (第637・930図)

暗黄褐色砂質土 第930図 溝71 (1/30) 溝70の東方約16mで検出された、北北東から南南西を示す直線的な溝である。検出全長約5m、幅約35cm、深さ約20~30cmを測る。高位となる北端は確認できなかった。埋積土は暗黄褐色砂質土で、出土遺物は認

られない。周囲に掘立柱建物なども検出されておらず、性格等は不明である。

(岡田)

## 溝72(第638・931図、図版173)

3 9 03 Cb区~3 9 05 Ca区にかけて検出された溝で、土壙墓10の東に確認された。この溝はほぼ 直角に屈曲するが、東と南の部分は削平されて残存しなかった。断面形は上方に開く浅い「U」字形 を呈し、内部に黒褐色の砂質土が堆積していた。屋敷の区画溝になるのかもしれない。 (福田)



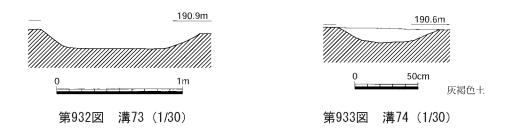
第931図 溝72 (1/30)

# 溝73 (第639・932図)

3 8 08 De区から 3 9 05 Dc区にかけて63mにわたり延びる溝である。幅1.8m、深さ15cmを測り、 北端から50mの位置で溝74、63mの位置で溝75~77に分岐する。微高地上から南西の斜面に配水する 水路と考えられる。出土遺物はないが、建物との関係から16世紀以降と考えられる。 (亀山)

#### 溝74 (第639・933図)

満73から分岐し蛇行しながら西に延びる溝で、3903Db区から3903Dc区にわたり検出した。 検出長は23mあり、幅80~90cm、深さ9cmを測る。出土遺物はないが、溝73と同様に16世紀以降の耕作にかかわる水路と考えられる。 (亀山)



# 溝75(第639・934図)

 $3905 \,\mathrm{Dc}$ 区の北東から $3906 \,\mathrm{Dc}$ 区の南西に向かって延びる溝で、その北東端は溝73に接続する。幅 $60\mathrm{cm}$ 、深さ $9\,\mathrm{cm}$ を測り、断面は浅い皿形をなす。

遺物は出土していないが、溝75と同じ時期が想定される。

(亀山)

## 溝76 (第639・934図)

溝73から分岐し溝75・77と併走しながら南西に延びる溝で、3905 Dc区から3906 Dc区にかけて検出した。検出長22m、幅1 mを測り、深さは $6\sim12$  cmと浅い。

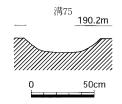
時期の判断できるような遺物はないが、溝73・75と同時期と思われる。 (亀山)

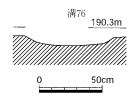
## 溝77 (第639・934図)

3 9 05 Dc区から 3 9 06 Dc区にかけて検出した溝で、溝73から分岐して溝76の東を併走する。検出長20m、幅40~55cm、深さ 5 cmを測る浅い溝である。

溝75と接続することからこれと同時期と判断される。

(亀山)



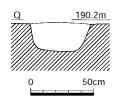


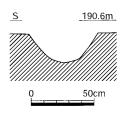


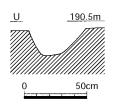
第934図 溝75~77 (1/30)

## 溝78(第640・643・935図)

中央部北西端にある掘立建柱建物103の東3807Dh区から始まり、103の東2m、掘立柱建物104の2mの西側を並行に南に走り、104の西南6mの所3900Di区で直角に東に曲がり東走する溝である。北側での幅は48cm、深さ22cmを測る。、溝底部の海抜は、189.4mである。東端では幅42cm、深さ20cmを測る。溝底部の海抜は、190.23mである。出土遺物はみられない。この溝は中央部北端の建物の







第935図 溝78 (1/30)

一群を囲う可能性がある。

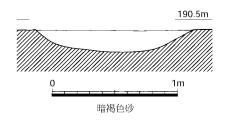
(伊藤)

# 溝79(第641・936図)

中央部北端 3 8 05 E c 区付近から、西から東の落ち込み 2 に流れる全長13 m の溝である。溝の幅は1.2 m ~60 cmで一定しない。深さは、18 cm 前後である。溝内からの出土遺物はみられない。 (伊藤)

# 溝80 (第641・937図)

溝79の南にあり、南西から北東の落ち込み2に流れる 全長3.5m程の溝である。幅は60cm、深さ22cm前後を測



第936図 溝79 (1/30)

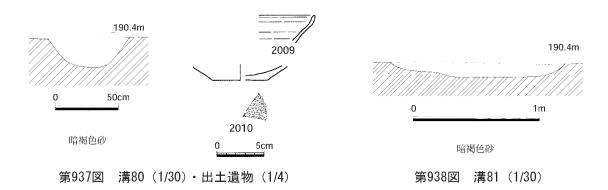
る。溝底部の海抜は、190.16mである。溝内から勝間田焼椀口縁部2009、と底部片2010が出土している。 (伊藤)

## 溝81 (第641・938図)

溝80の南側にあり、溝80と並行し、落ち込み 2 に流れる全長 6 mの溝である。溝の幅は1.8~1.2m あり、深さは12㎝前後である。

溝内からの出土遺物はみられない。

(伊藤)



## 溝82 (第642·939図)

南西側を走る古墳時代溝33にほぼ並行している。落ち込み3にわずかに蛇行して流れる全長20mの溝である。幅は $1\sim2$  mを測る。先端部での幅は1.1m、深さ40cm程であるが、落ち込み近くでの幅は1.8m、深さ50cm前後を測る。上流部での海抜は189.7m、落ち込み付近では189.41mである。

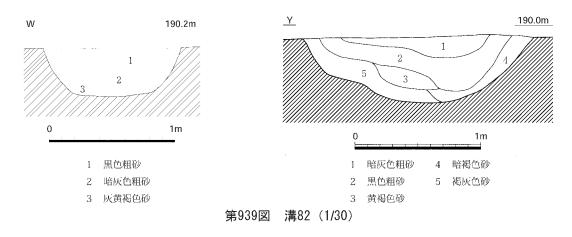
出土遺物はみられない。 (伊藤)

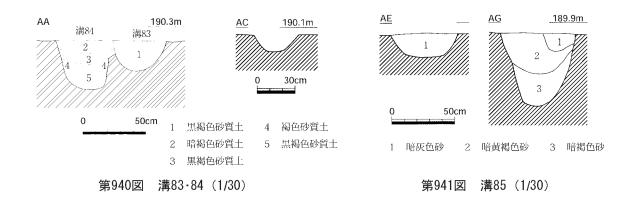
# 溝83 (第642·940図)

中央部北西3902 E c北区から始まり、落ち込み2の南側に走る全長29mを測る略東西の溝である。 溝西側のセクション部では40cm、深さ24cm、東部分では幅34cm、深さ14cmを測る。途切れてはいるが、 溝78と同じ溝の可能性がある。出土遺物はみられない。 (伊藤)

#### 溝84 (第642・940図)

出土遺物はみられない。 (伊藤)





# 溝85 (第645・941図)

南北方向に30m、東西方向へ5mにわたって検出できた。「逆L字」状を呈する溝で、屋敷地を区画する可能性があるが、西側は現代の撹乱が激しく溝の続きや建物は確認できていない。

青磁や土師器片が出土しており、時期は中世とみられる。 (弘田)

# 溝86 (第646·942図、写真36)

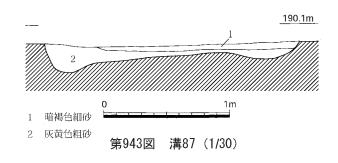
4000Df区から4002Df区にかけて検出された。平面形は不整形で、幅が3.7mから0.9mまで変化し、底面の形状もとくに南端部で凹凸が激しかった。図示した断面図の土層を検討したところ、溝の流路が2度東方へ移動したことが認められ、その重複の結果が幅広の平面形になったものである。現代の水田の段差で切断されているが、流路や埋土から溝89に続いていたとみられる。 (岡本)



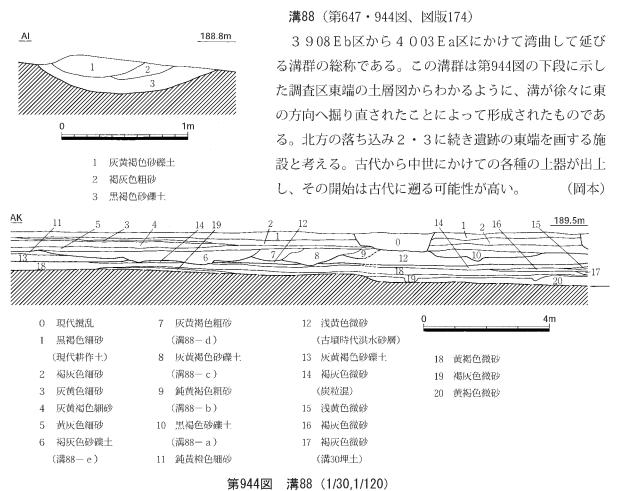
写真36 溝86清掃作業(南から)
- 6 3 4 190.0m
- 6 3 2 1
- 1 灰黄色粗砂 2 暗灰黄色細砂 5 黒褐色細砂 3 黄灰色細砂 第942図 溝86 (1/30) 6 灰黄色粗砂

# 溝87 (第646・943図)

溝86のすぐ東にあって、ほぼ平行した 流路をもつ。南端部では少し西へ湾曲し、 溝86と接触する。溝86と溝87の南には溝 89しか存在せず、溝86の流路が徐々に東 へ移動させられていったことを考慮する

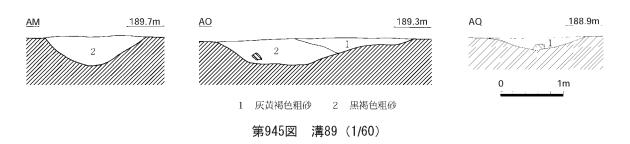


と、溝87は溝86の最終段階の姿ではないかと考えられる。埋土も同じ粗砂である。 (岡本)



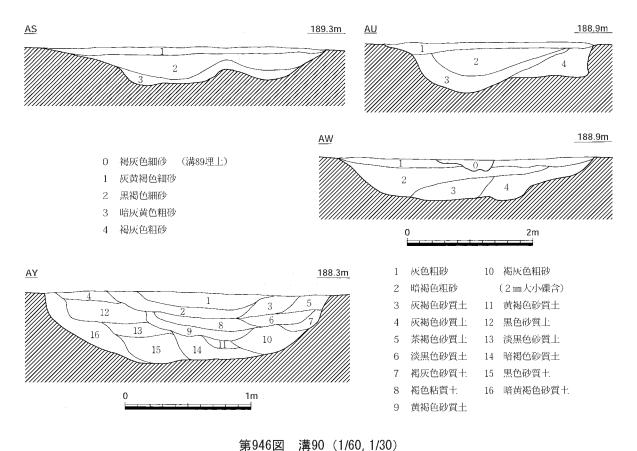
# 溝89 (第646~648・945図、図版174)

前述の溝86・87に続くと考えられる。北西から南東へわずかに弧状を描いて長く延びる溝である。 下流で溝90と交差するが、第946図から溝89が新しい。4004Dg区付近では掘立柱建物141とほぼ平 行するため、併存の可能性がある。土師器・瓦質土器・勝間田焼の破片が出土している。 (岡本)



**溝90** (第648·946図、図版174)

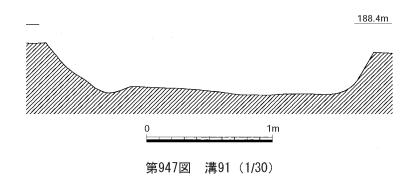
掘立柱建物141の16m南から始まり、ほぼ直線的に南南東へ延びる。溝内の形状は複雑で、凹凸に富むが、これは断面図にもみられるように、流路の変化に伴うものかもしれない。溝底の埋土は粗砂で、かなりの流水のあったことが想定されるが、後世の削平を考慮しても、その水源がどこにあったか疑問である。洪水痕跡とすべきであろうか。最下流の断面土層はきわめて複雑だが、大きくは第10



層を底層とする溝と、第15層を底層とする溝が重複していると解釈できる。後者の溝には粗砂の堆積 はなかった。土師器・瓦質土器・勝間田焼の土器片の他、羽口や鉄滓、炉壁も出土した。 (岡本)

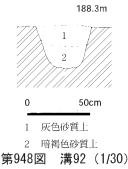
## 溝91 (第648・947図)

遺跡南部北東に位置し、河道10の東岸肩部に沿って北西から南西に向いている。北西部での幅は16 cmと狭い。南西中央部では幅2.6m、深さ34~40cmを測る。南西端で止まってしまい、土壙の可能性が残る。出土遺物はみられない。堆積土層からみると近世の遺構とも考えられる。 (伊藤)



#### 溝92 (第648・948図)

溝90を切って東から西に向かい河道に流れ込む。全長 5 m程が検出されている。幅44cm、深さ34cm、断面部での溝底部の海抜は、187.92mである。出土遺物はみられないが、溝90を切っていることから90より新しい溝である。 (伊藤)



#### 溝93 (第649・949図)

遺跡南部北西に位置し、南東から北西に流れる。調査区内での 長さは、7m程であるがまだ北西部にのびる。最も広いところで、 幅1.5m、深さ50cmを測る。1番低いところでの海抜は、189.96m である。出土遺物はみられない。 (伊藤)

# **溝94** (第649・950図)

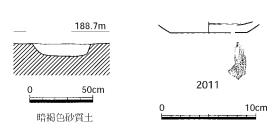
滞94の南東にあり、東から弧状になって南にのびる、全長10m程 の溝である。幅46cm、深さ10cmを測る。堆積上は暗褐色砂質上であ

る。溝の最も低いところでの海抜は、188.52mを測る。溝内から土師器杯底部片2011が1点出土してい る。橙色を呈し、胎土には砂粒を含んでいる。底部はヘラで起こしている。 (伊藤)



褐灰色砂質土

第953図 溝97 (1/30)



第950図 溝94 (1/30) - 出土遺物 (1/4)

#### 溝95 (第649・951図)

灰黄色砂質土

暗灰黄色砂質上 3 黑褐色砂質上

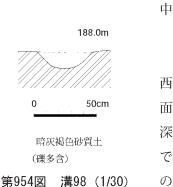
1

4 1 03 Dg区から検出された北西から南東に延びる溝である。長さ 約6mを検出し、幅は約60cm、深さ約20cmを測る。断面は緩い逆 台形状を呈す。遺物は土師器鍋片が出土したのみである。

#### 溝96 (第649・952図)

溝95と同様の方向を示す溝である。長さ5m、幅約70cm、深さ12 cmを測る。断面は弧状を描き、溝内からは土師器小皿・鍋、勝間田 焼椀が出土しているが、いずれも細片で図化し得なかった。(江見) **溝97** (第633・953図)

4 106 Dh区から検出された北東から南西に延びる溝で、溝の方 向は旧地形の斜面と平行している。溝は長さ8mを検出し、幅は90 cm、深さ15cmを測る。出土遺物は皆無であったが、周囲の状況から



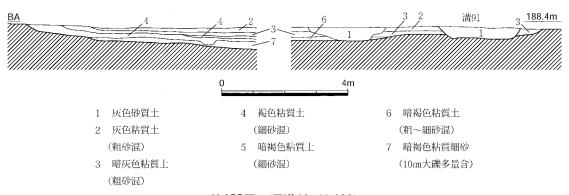
中世の遺構と判断した。 (江見) 溝98 (第633・954図)

溝97の北10mから検出された北 西から南東方向の溝で、微高地斜 面に直交する。長さ5m、幅40cm、 深さ13㎝を測る。出土遺物は皆無 であったが、周囲の状況から中世 の遺構と判断した。 (江見)

# 10 河道

## 河道10 (第648·649·955図)

中央部北西から南東に流れた河道である。元水田面、遺構検出時においても1段低くなっていた所である。河道幅は、場所によって異なるが55~60m前後である。南東部では河道上面において遺構は確認できなかったが、西北部において掘立柱建物142・143があり、中世でも古い段階で埋没した河道と考えられる。出土遺物はみられない。 (伊藤)



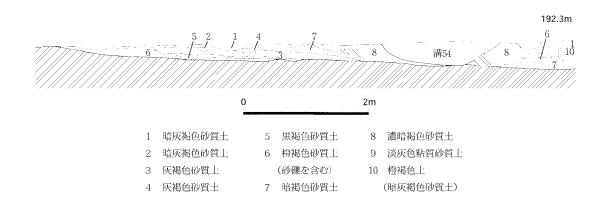
第955図 河道10 (1/120)

# 11 落ち込み

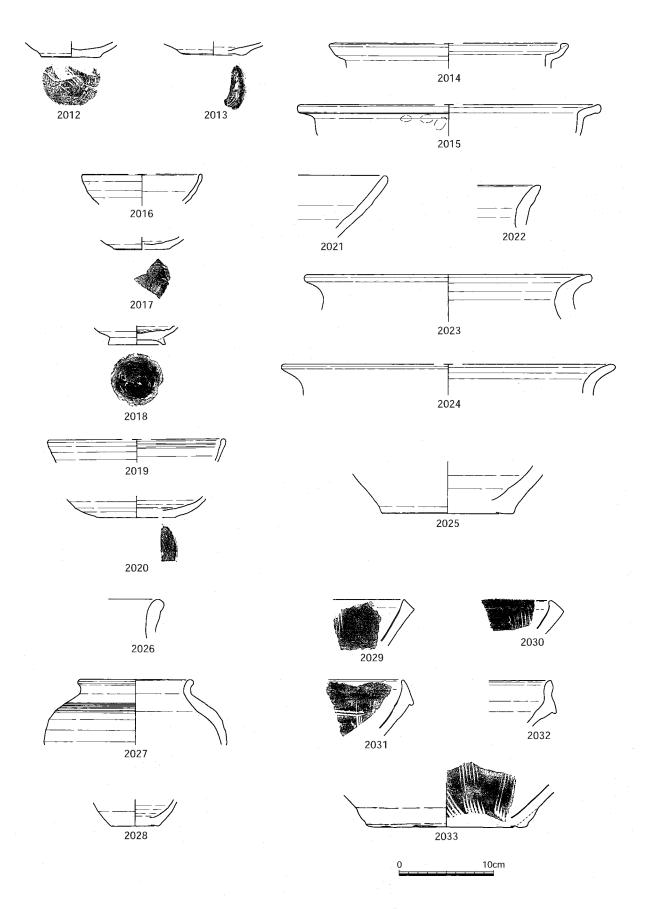
#### 落ち込み 1 (第628・956~958図、図版173)

検出全長約70mを測るほぼ南北方向の段状遺構で、緩やかな弧を描いて検出された。溝54との共通 土層断面図によると、地形の変換点ともいえる形状を示し、埋積過程は長期にわたっていることがわ かる。西側が高位、東側が緩斜面となっている状況が示されているともいえる。溝54は、埋積後に彫 り込まれた溝である。

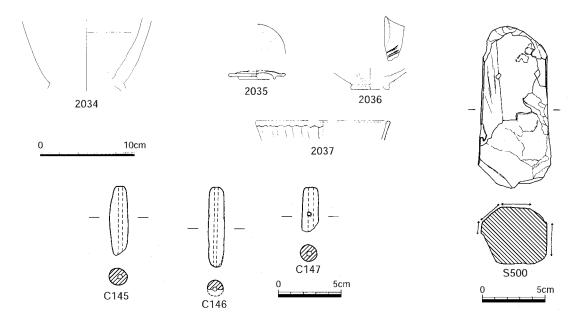
出土遺物には日常雑器が多くみられ、什器としての土師器椀2012・2013や勝間田焼椀2016~2020のほか、瓦質土器2014・2015、備前焼2026~2033など煮沸や食物加工、貯蔵用具としての土器がある。 これらの土器から、おおむね鎌倉時代から室町時代前半にかけての時期幅が考えられる。 (岡田)



第956図 落ち込み1(1/60)



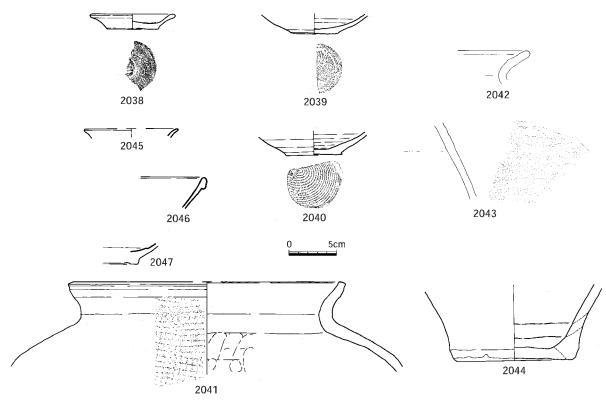
第957図 落ち込み 1 出土遺物① (1/4)



第958図 落ち込み 1 出土遺物② (1/4,1/3)

# 落ち込み2 (第641・959図、図版184)

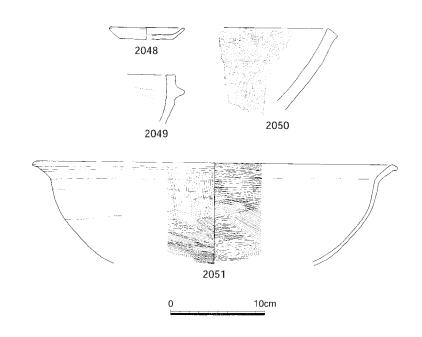
中央部北西にあり、北東の谷筋からの流れ込みの一部と考えられる。遺構面から30~50cm低くなる。 西から東に流れ込む溝が3本(79~81)みられる。出土遺物は、土師質小皿2038、玉縁の口縁部を持つ白磁碗2046、底部2047、勝間田焼椀底部2039・2040、甕口縁部2041・2042、体部片2043、壺底部2044などである。12世紀後半から13世紀代のものと考えられる。



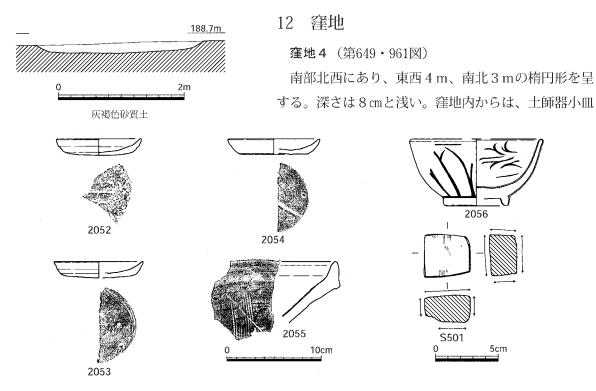
第959図 落ち込み2出土遺物(1/4)

# 落ち込み3 (第642・960図、図版184)

中央部南西にあり、落ち込み2から続くもので北東から南に向かう。この付近においては削り込みが2段に落ち込み、浅いところでは深く掘られた遺構が残存する。中央部が一段低くなり最終的な流れと考えられる。出土遺物は、土師器小皿2048・羽釜2049・鍋2051、備前焼Ⅲ期擂鉢2050などがみられる。 (伊藤)



第960図 落ち込み3出土遺物(1/4)

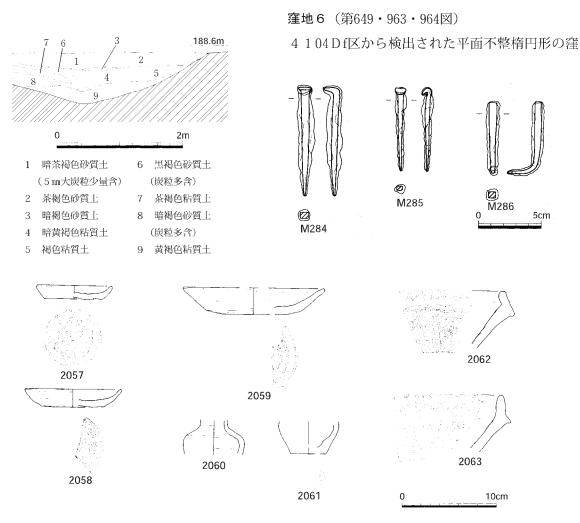


第961図 窪地4 (1/60)・出土遺物 (1/4,1/3)

2052~2054、備前焼Ⅲ期擂鉢2055、連弁青磁碗2056、4面とも利用した流紋岩製の砥石 S 501などが 出土している。2052の小皿は、口径 9 cm、高さ1.8 cm、2053は、口径9.2 cm、高さ1.8 cm、2054は、口径 9.6 cm、高さ1.4 cmを測る。いずれも底部は篦で起こしている。 (伊藤)

# 窪地5 (第649・962図)

南部北西にあり、窪地4の南側に位置する。西約半分程が今回の調査区からはずれる。南北6m程で円形を呈するものと思われる。底部は擂鉢状を呈し、最も深いところで40cmを測る。この海抜高は187.75mである。窪地内から土師器小皿2057・2058、皿2059、備前焼小壺2060・2061・IV期擂鉢2062・2063、釘3本M284~M286などが出上している。 (伊藤)

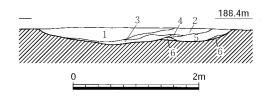


第962図 窪地5 (1/60) - 出土遺物 (1/4,1/3)

地である。規模は $3 \times 2.5$ m、深 さ25cmを測る。埋土は6層からな り、底部は凹凸が認められる。

遺物は土師器小皿2064・2065・ 鍋2066、備前焼壺2068・2069・甕 2070、青磁皿2067、責金具M287 などが出土している。小皿の底部

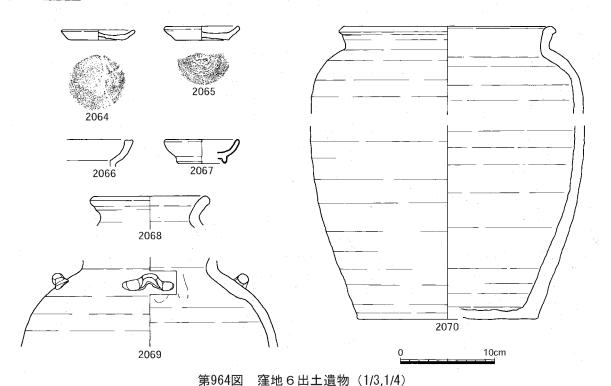
- 1 褐灰色砂質土 (炭化物塊混)
- 2 黄褐色砂 (灰色砂質土混)
- 3 暗褐色砂質土
- 4 淡黄褐色砂
- 5 炭化物層
- 6 褐灰色砂質土



第963図 窪地6(1/60)



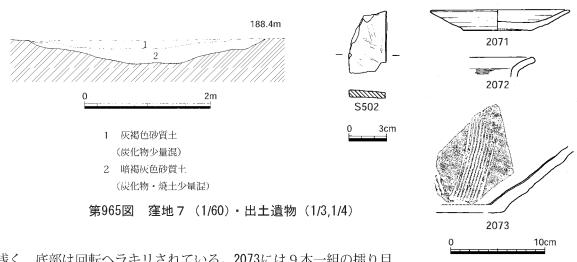
はいずれも上げ底気味で、回転糸切りがなされている。2065は14~15世紀の年代観をもつものである。2070は短く直立する頸部に端部は外方に摘み出している。胴部は肩がやや張り、備前焼の特徴はIV期を示し、15世紀後半には埋まった窪地と考えられる。 (江見)



为304四 注述0日工度物(1/0,1/4

# 窪地7 (第649・965図)

窪地6の南西数mから検出された平面不整円形の窪地である。規模は $4 \times 3$  m、深さ約40cmを測る。 埋土は2 層からなり、いずれも僅かながら炭化物粒が混じる。出土遺物は土師器皿2071・鍋2072、備前焼擂鉢2073、青磁小破片、砥石S502などが出土している。2071は口径14.1cm、器高2.2cmと非常に



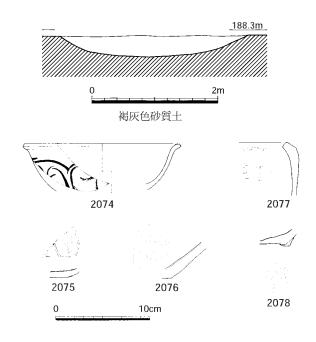
浅く、底部は回転へラキリされている。2073には9本一組の擂り目が施されており、15世紀後半のものか。 (江見)

## 窪地8 (第949・966図、図版184)

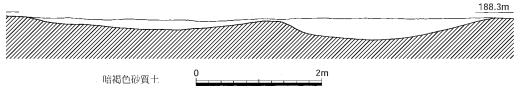
窪地7の南5mに位置し、掘立柱建物151・152を一部切って検出された。平面不整円形で、規模は4×3m、深さ約35cmを測る。埋土は褐灰色砂質土であった。出土遺物は土師器鍋2077、青磁碗2074・皿2075、備前焼擂鉢2076、瀬戸美濃香炉2078などが出土している。2074は14~15世紀、2075は13~14世紀、2078は16世紀の年代観を示すものである。 (江見)

# 窪地9 (第949・967図)

4 1 05 Dh区から検出された、平面瓢箪状になった窪地である。不整楕円形の土壙が重複したような状況ともうかがえるが、埋土に差はなく、同一の窪地と取り扱った。出土遺物は土師器皿・鍋、青磁、硯S 503・砥石 S 504、鉄滓約280 g などであったが、土器類はいずれも細片で図化し得なかった。 (江見)



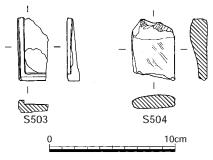
第966図 窪地8 (1/60)・出土遺物 (1/4)

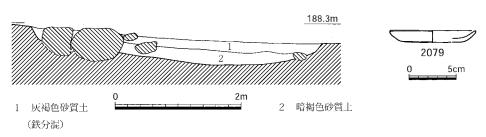


第967図 窪地9 (1/60)・出土遺物 (1/3)

窪地10 (第949・968図、図版174・184)

4 103 Di区から検出された平面不整円形の窪地である。規模は3.5×3.5m、深さ40cmを測る。埋土は2層からなり、これに混じって土師器小皿2079、備前焼甕小破片が出土している。2079は底部を回転ヘラキリしている。口径9cm、器高1.3cmで、径の割に器高が低く、中世も後半のものか。 (江見)





第968図 窪地10 (1/60) ・出土遺物 (1/4)

# 13 柱穴 (第969~971図、図版185)

遺跡内からは、掘立柱建物以外で掘立柱建物にまとめられない多数の中世と考えられる柱穴が検出されている。これらの中には遺物を含むものが多くある。これらの柱穴は、全体図には載せ切れていないが出土遺物を紹介する。

土師質小皿2081・2089~2097・2120~2123、口径7.2~8 cm、高さ0.8~1.5cm前後の皿で、口縁部は斜め上方に1 cm程引き上げる。底部は箆状工具で起こしている。明肌色を呈するものが多い。砂粒を含んでいる。

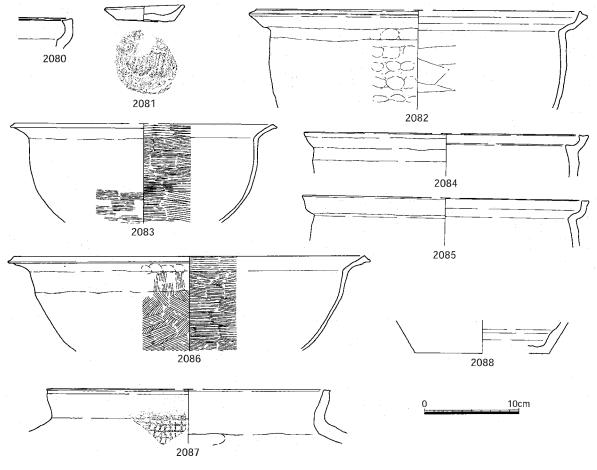
土師質皿2104は、口径11cm、高さ2cmのもので、明橙色を呈する。

土師質椀2098~2102は、口径12~13cm、高さ3.4cm前後である。

土師質杯2105~2116は、口径11.4cm、高さ3.8cm前後で、口縁部が直線的に外にのびるもの2105・2106と、口径12~14cm、高さ3~4.2cmで、口縁部が凹凸を持ちながら外にのびる2種がある。

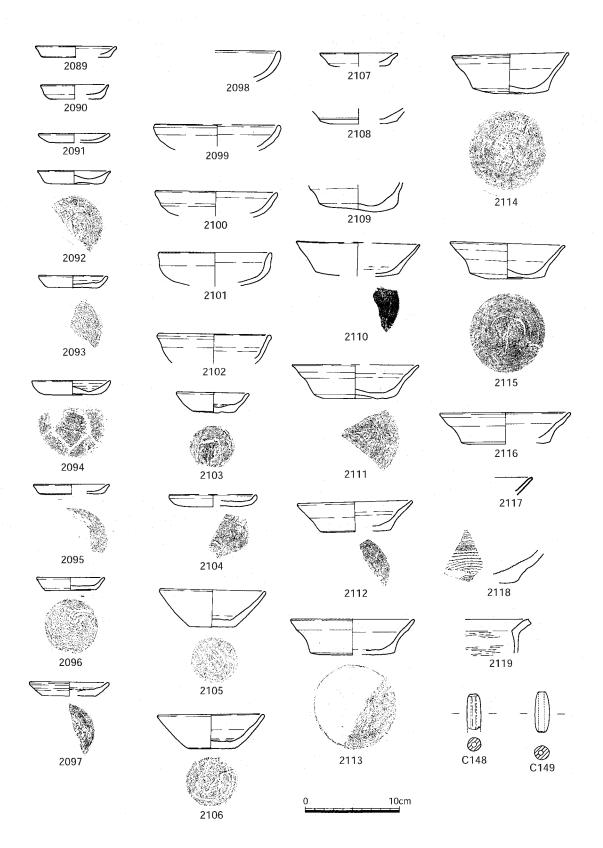
土師質鍋2083・2086・2119は、「く」の字状口縁からボール状の体部を持つもので、口径22.5cmの小形のものと37.2cmの大形のものがある。内外面とも丁寧に刷毛で調整を行っている。

瓦質鍋2080・2082・2084・2085は、口径30~35cm前後あり、明灰色を呈す。内外面は押圧により調整を行っている。備前焼擂鉢2128~2132は、間壁編年のIV期前半のものである。勝間田捏鉢2133は、口径34cmで、灰色を呈す。勝間田壺2087・2088は、頸部以下に格子目の叩きが残る。2088は壺の底部である。

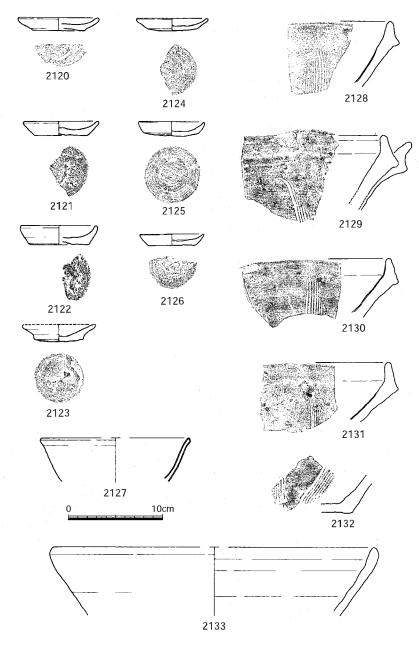


第969図 柱穴出土遺物①(1/4)

(伊藤)



第970図 柱穴出土遺物② (1/4)

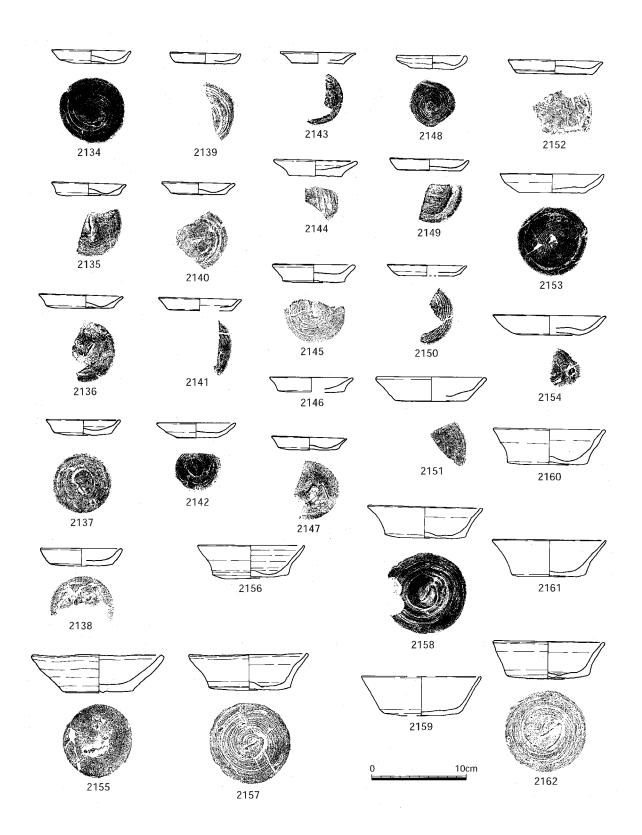


第971図 柱穴出土遺物③(1/4)

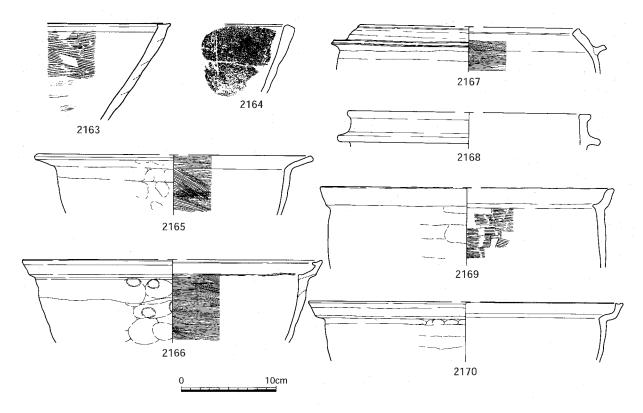
# 14 遺構に伴わない遺物 (第972~978図、図版185)

遺構内出土遺物より豊富な遺物が出土している。これらは包含層というよりむしろ遺構検出中に出 土したものがほとんどであり、遺構上面での遺物と考えられるものである。

土師質小皿2134~2150、口径7.2~10cm、高さ1.1~1.8cmのものである。土師質皿2152~2154、口径 11~12cm、高さ2cm前後のものである。土師質高台皿2186・2185、口径8.5cm、高さ4cm程で、小皿に3cm程の台が付くものである。土師質杯2155~2162、口径11~14cm、高さ4cm前後のものが多い。土師質鉢2163・2164、口径は不明である。内面を刷毛丁寧に調整するもの(2163)とそうでないもの(2164)がある。土師質鍋2092、口径29cm、内面は刷毛で丁寧な調整を行っている。外面は煤が厚く付着している。



第972図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第973図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

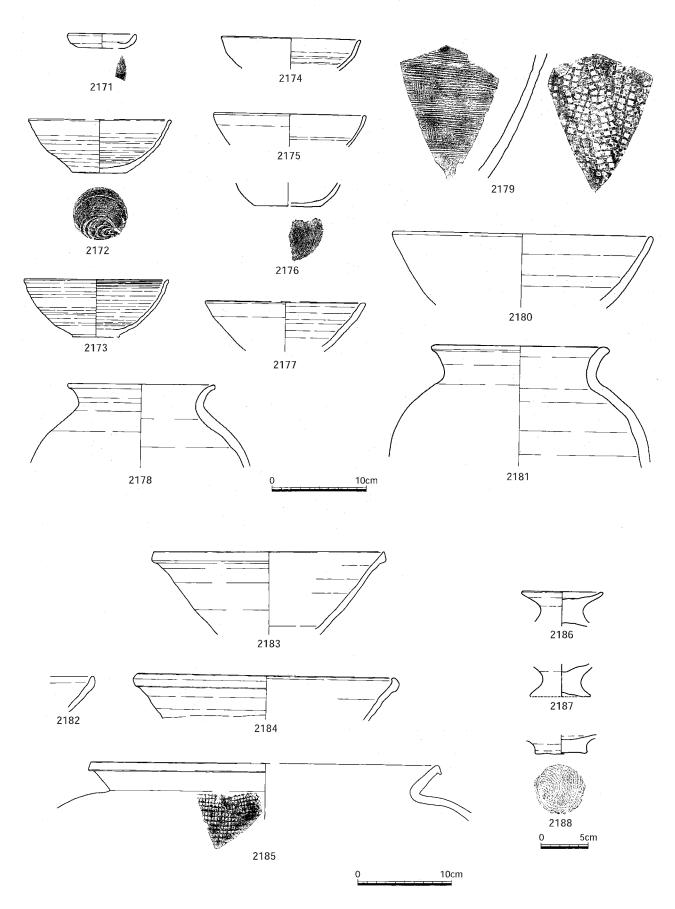
瓦質鍋2166・2169・2170、口径30~33cmを測り、口縁部が「く」の字状に外にのびるものと、段を持って立ち上がるものがある。瓦質羽釜2167は、口径23cmで口縁部は内側に傾き、体部は球状を呈する。1cm程の鍔が斜め上方に向かって伸びる。内面は刷毛により丁寧に調整を行う。2168は、口径25.4cmを測り、口縁部は上方に伸びる。

勝間田焼小皿2171、口径 7 cm、器高1.4cm、底部糸切りで明灰色を呈する。勝間田焼椀2172~2176、口径15cm、器高6 cm前後で、底部は糸切りである。勝間田焼鉢2177・2180、小形のもの(2177)と大形(2180)がある。小形のものは口径16.6cm、大形のものは口径27.2cmを測る。勝間田焼壺2178・2181、口縁部は外反し、口径15.5~18cmを測る。灰色を呈し、緻密な胎土である。勝間田焼甕2179、外面は5 mm方眼の格子叩きを行い、内面は横方向の刷毛で丁寧に仕上げている。これら勝間田焼は、勝間田焼編年の第 II 期(12世紀前後)に属するものと考えられる。

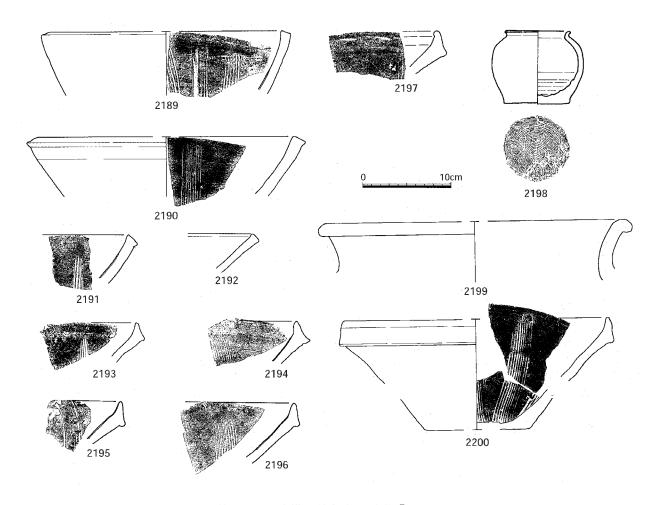
東播産鉢2182~2184は、口径24.6~27㎝測る。東播森田編年の第IX期(14世紀前後)に含まれる。 亀山焼甕2185は口径37㎝を測り、外面は格子叩きである。瓦質で胎土に砂粒を含む。

備前焼擂鉢2189~2197・2200の口縁部は、水平に近いものから端部を上下に拡張するものなどがある。口径21~30cmを測り、内面下から上に向けて7~10本の卸目を入れる。備前焼編年のⅢ期~Ⅳ期のものが多い。備前焼小壺2198は、口縁部はわずかに外反し、短く引き上げる。口径7 cm、器高8.2 cmを測る。底部は糸切りである。備前焼甕2199、口縁端部をわずかに折り曲げ、口径34cmを測る。Ⅲ期に含まれる。

輸入陶磁器は、青磁小皿2220~2203、同安窯系の小皿で、口径10~11.2cm、器高 2 cm前後である。 内面に猫描き手文様を施す。青磁碗2204~2210・2218~2221、連弁文、雷文帯連弁文、線書き連弁文、 無紋のものが含まれる。白磁碗2211~2217・2222~2225、玉縁、端反り椀などがある。



第974図 遺構に伴わない遺物③ (1/4)



第975図 遺構に伴わない遺物④(1/4)

土錘は、 $C150\sim192$ の43点の土錘がある。形、大きさ、重さが1点ごとに異なるものである。 砥石は $S505\sim508$ の4点が出土している。 $S505\cdot507$ は、4面とも使用している。S507が砂岩 (流紋岩質) で後の3点はすべて流紋岩である。

鉄鍋M288は、瓦質鍋状を呈する鉄鍋で、口径19cm、復元高18cm前後と考えられる。重さは48.19 g を測る。

紡錘車 $M296 \cdot 297$ のうち、M296は直径 $5.6 \sim 5.8$ cmを測り、中央に $3 \sim 4$  mmの穴があく。重さは42.33 g を測る。M297は直径4.8cm前後あり、心棒が残る。重さは19.46 g を測る。

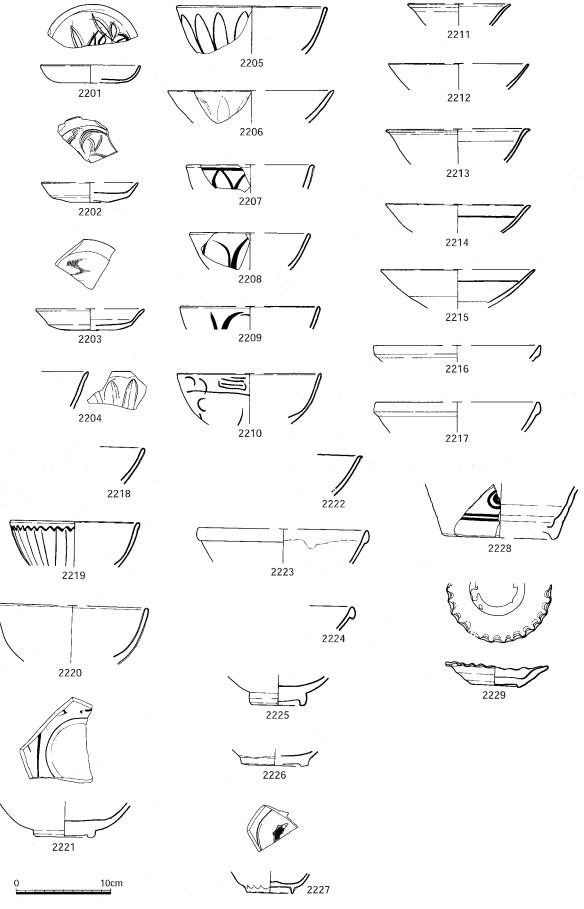
鉄鏃M289~293、M289・290は鑿頭式、M290は、先端部幅 3 cm、関部幅1.6cm、全長7.6cmを測る。重さは36.97 g を測る。M291・292は雁股式、M251は先端部の幅 4 cm、関部まで 5 cm、全長10cmを測る。重さは36.65 g(処理前)を測る。M293は、先端部が一部欠損するが関部まで 5 cm、全長12cm前後で、重さは13.23 g を測る。丸根式と呼ばれている鉄鏃である。

刀子は、 $M298\sim302$ がある。M298は、関部まで5.5cm、全長7.5cm、幅1cm前後である。M299は、関部まで8cm、全長14cm、関部での幅1cmで徐々に細くなっていく。M302は、先端部を欠くが全長23cm前後で、関部まで14cm、関部での幅2.4cmを測る。

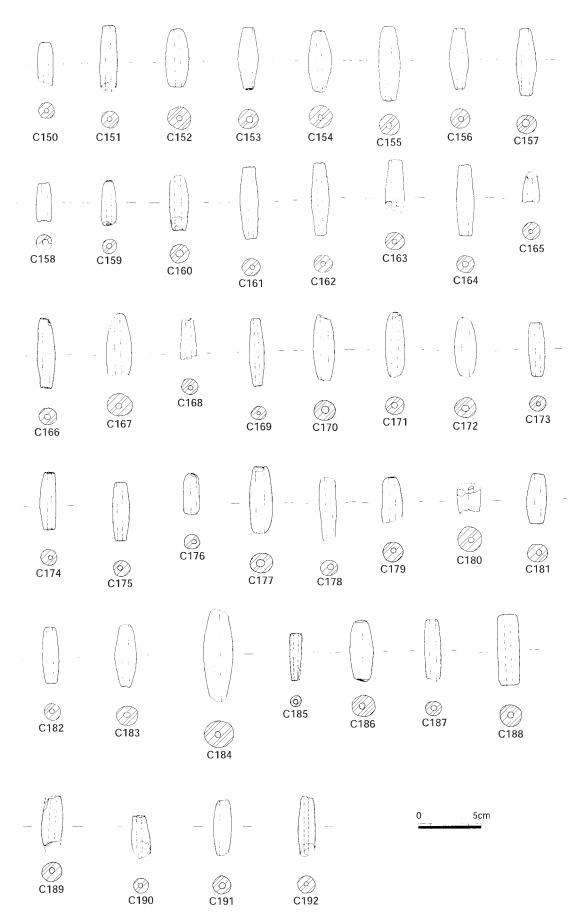
釘 $M294 \cdot 295 \cdot 303 \cdot 304$ は、頭部で1 cm角、先端を欠くが長さ6 cmを測る。

宋銭M305は祥符通寶、北宋大中祥符2(1009)年初鋳の宋銭である。

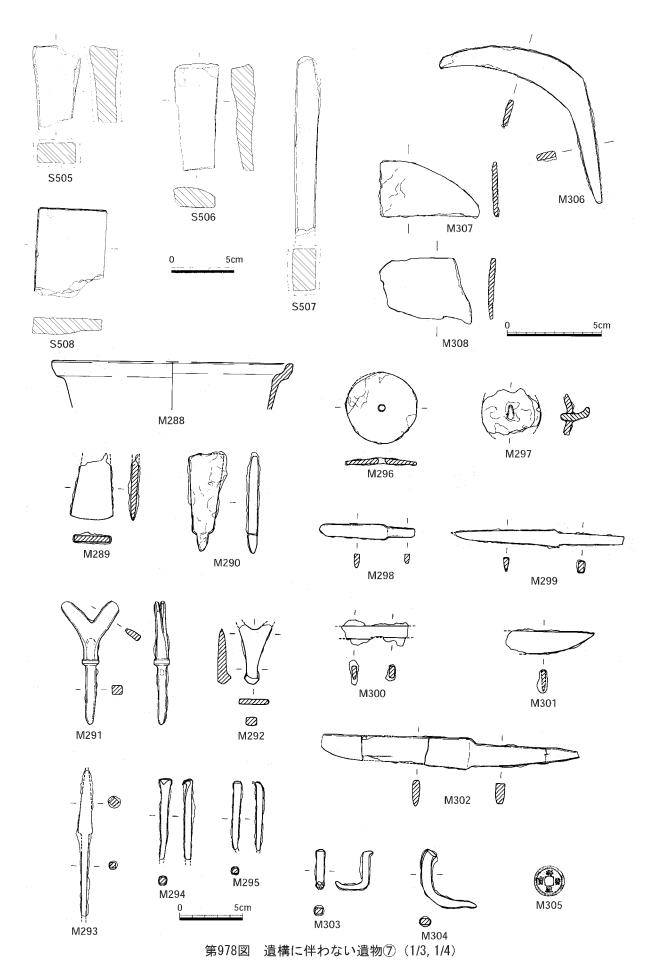
(伊藤)



第976図 遺構に伴わない遺物⑤ (1/4)



第977図 遺構に伴わない遺物⑥ (1/3)



-611 -

# 第4章 ま と め

# 第1節 縄文時代後期の土器について

# 1 後期土器の出土状況

久田原遺跡においてもっとも古い遺構・遺物は縄文時代後期に属するものである。遺構としては数基の焼成土壙と土壙が考えられるが、後期の遺物を伴うものはわずかであった。これに対して、後期の土器はかなりの量に上り、遺跡の南部では土器溜まりも検出された。すなわち、後期の土器のほとんどは包含層から出土したものである。後期の包含層は微高地上にはほとんど残存せず、多くが旧河道内の堆積土として形成されていた。河道1・2・3のそれぞれに存在し、いずれも下層の黒色系粘質土層とその下にあって河道の初期段階に堆積したとみられる黄色系砂質土層に含まれていた。

とくに、微高地1の北端部を取り巻く河道1とそこから分岐した河道2上流部からはかなりの出土がみられた。これらは微高地1の北端部にあった生活領域から投棄されたものとみられるが、なかでも河道2上流部では河道底部の直上に堆積した明黄褐色微砂(最下層)からまとまった出土をみた。これらの土器は一定の広がりで接合関係を持ち、個々の土器は同一型式内のものとみられることから、一括性の高い資料と判断される。

また、久田原遺跡の南部で検出された土器溜まり1は微高地2から河道2へ下がる斜面に形成されたもので、微高地2の南部にあった生活領域から投棄されたとみられるが、これも接合関係や同一型式内に収まるものと考えられることから良好な一括資料として取り扱うことができる。

ここではまず、この二つの土器群の内容を詳述することによって当地域における縄文時代後期土器の実態を明らかにしたい。続いて、周辺の遺跡の資料、なかでも岡山県南部のそれと比較検討することによって、二つの土器群の位置付けを行う。さらに、当遺跡において二つの土器群と前後する資料について触れることによって後期土器の全体像を紹介し、今後の問題点も指摘したい。

# 2 土器溜まり1出土土器群 (第118~120図)

土器溜まり1は前述したように、検出方法がやや作為的であり、これを包含した土層の直上にも別の包含層が重なっていたため、土器型式上ではわずかに混乱がみられた。このため、明らかに型式上から混人とみられるものは除いたが、なお二三の疑問品を含む。3器種、13類に分別する。

## 深鉢A類 (69~72)

頸部が外反し、口縁部が屈折して立ち上がる形状をもつ。口縁部の外面にはヘラ描き沈線で区画文を施して縄文を充填した磨消縄文を飾る。69は波状口縁をなす。波頂部下には縦長の渦巻文を置き、両側に横長の二重区画文を描く。区画内はミガキを施し、外周区画から区画線を越えて口縁の上端、あるいは下端まではRLの縄文を充填する。区画文の短辺側の外郭から渦巻文部分にかけては縄文の回転方向を90°変化させている。内面と頸部外面には丁寧なミガキが施されている。70は波状口縁の

枠状施文部分とみられ、上辺と下辺に沈線の痕跡が認められる。枠内をRLの縄文で充填したものであるう。内面は平滑に整えられている。71・72は同一個体の可能性が高い。ともに全面に鉄分が付着し、土器群の中では異質の存在である。71は横走する2条の沈線が認められ、上方の2区画に渡ってRLの縄文が施されている。72は渦巻文の一部で、全面にかなり不明瞭だが縄文がみられる。71は厚手で、わずかに外反することから深鉢としているが、浅鉢の可能性もある。

#### 深鉢B類(73~96)

外反する頸部に幅の狭い口縁部をもつ。頸部は無文で、口縁部と胴部に縄文を施すことを特徴とする。口縁部を肥厚させるものが多い。口縁部の形態や調整手法の違いなどから3種類に分ける。

1種(73~78)は口縁端部を段状に肥厚させ、そこにRLの縄文を施す。口縁部の内面にも施文があり、73では縦に短い沈線を3条刻んで両側に狭長な区画文を配し、区画内にRLの縄文を施す。3条の短沈線部分では中央の2沈線間に施文方向を90°変化させた縄文が施文されている。74も口縁部内面に区画文を施すが、3条短沈線はみられない。水平な口縁であるが、区画文の間にあたる部分には小さな山形の突起をもっている。突起の内面には施文方向を90°変化させた縄文が施され、3短沈線施文から退化したとはいえ、類似した意識が残存している。73・76にみられるように頸部と胴部の境には沈線が引かれている。胴部にはRLの縄文を主体的に施すが、73・77では回転方向を90°変化させた縄文を所々縦方向に追加し、羽状縄文的な効果を出している。胴部の縄文は77にみられるように底部にまでは及んでいない。頸部の外面と内面は丁寧にミガキがなされているが、それ以前の条痕調整らしい痕跡も認められる。なお、73・75・77・78は同一個体の可能性がある。

2種(79~86)は口縁部をほとんど肥厚させないが、頸部を削り込んだためか、口縁部と頸部の境は明瞭である。口縁部外面にはRLの縄文を施すが、内面には文様をもたない。口縁端部の形状には丸くおさめるものと尖り気味のものがみられる。頸部と胴部の境界には沈線は認められないが、頸部の削り込みによってごく浅い段を形成するものがあり、また、削り込みの際に工具によって付いたとみられる細線が途切れながら巡るもの(80・82・83)がある。胴部にもRLの縄文を施すが、83・85では回転方向を縦に変えた縄文が追加され、羽状縄文的な表現になっている。胴部の縄文は底部までは施されず、80ではミガキによって最終調整がなされ、縄文を消している。縄文施文部以外の頸部外面と内面全体はミガキで丁寧に調整される。80と82、81と84はそれぞれ同一個体の可能性がある。

3種(87~96)の口縁端部は丸くおさめられ、外面にLRの縄文を施す。頸部を強くヘラケズリしたためか口縁部は肥厚気味にみえる。口縁部の内面はヘラケズリ調整で、文様は施されていない。頸部と胴部の境には界線などは認められず、段なども明瞭ではない。ただ、頸部を強くヘラケズリするため、頸部から胴部にかけては湾曲に変化がみられる。頸部のヘラケズリは胴部の施文後になされ、縄文を消している。このため、頸部と胴部の境界線はジグザグしている。胴部にはLRの縄文が主体的に施されるが、すべての胴部片で回転方向を90°変えた縦方向の幅1cm前後の縄文が部分的に押され、不規則な羽状縄文を呈している。胴部の縄文は底部までは施されない。頸部外面と内面全面はヘラケズリされたままで終わり、これが3種のもっとも大きな特徴である。それ以外の特徴からみると、3種は2種と類似している。87・89・90・92と93~95はそれぞれ同一個体である可能性が高い。

# 深鉢 C 類 (97・98)

口頸部はゆるやかに外反し、胴部には垂下する多条沈線を施す。沈線の間隔は微妙に異なるが、ほ ぼ均等と表現してよい。ただ、数か所間隔の広い部分も認められる。口縁端部は丸くおさめるが、頸 部外面の調整によって口縁部と頸部の 境には稜線が明瞭に認められ、わずか に肥厚した感じを与える。内面はミガ キ、頸部外面はナデ調整される。

# 深鉢D類 (99)

わずかに外反した口頸部をもち、口 縁端部は尖り気味におさめる。口縁部 の外面にはヘラ描きの二重弧線文を重 複させながら巡らせる。内外面はナデ て平滑に調整するが、内面がより丁寧 である。器表の色調や胎土・焼成など は次の深鉢 E 類や F 類に類似する。

### 深鉢E類(100~110)

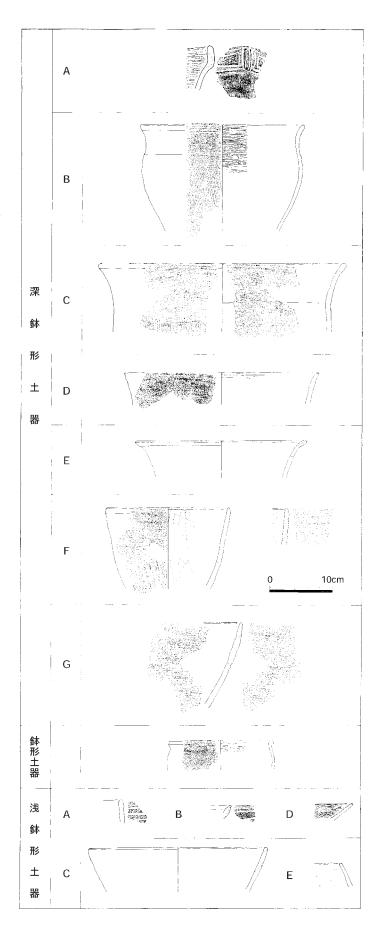
頸部がくびれ、口頸部が大きく外反 する無文の深鉢である。器壁の厚さと 焼成の違いから2種類に分けられる。

1種(100~107)は薄手で、焼成は 堅緻である。口縁部の形態には微妙な 変化がみられる。100と101は同一個体 の可能性があるが、口縁部分を折り返 し、段状に肥厚させている。102は口 縁部の内面に傾斜面をもつ。内外面と もにナデ調整がほとんどだが、工具を 使用した痕跡を内面に認めるものが多 い。107の外面はケズリがなされる。

2種(108~110)は厚手で、焼成が やや甘い。108の口縁端部は尖り気味 で、内面には工具ナデの痕跡がみられ る。110は内外ともに7~10㎜幅の凹 面の調整痕跡が連続している。条痕か ミガキか明瞭ではない。外面の調整方 向は左上から右下に傾斜し、底部に近 い下半では傾斜が急になる。109とと もに内面の調整はより丁寧である。

### 深鉢F類 (111~123)

口頸部が直口ないしは、わずかに内 湾する無文の深鉢である。口縁部の形 態や調整手法から5種に分けられる。



第979図 久田原遺跡土器溜まり1器種分類図(1/6)

全体的に焼成は堅緻である。

1種(111~113)は直口する口縁部をもち、胴部下半は湾曲してすぼまる。口縁端部は尖り気味で、 外面には荒いナデ調整の痕跡を残し、調整方向は口頸部が横、胴部は縦方向になされている。内面は ケズリの後に、工具ナデで調整されたとみられる。112と113は類似し、同一個体の可能性もある。

2種(114~117)は口縁部が直口ないしは、やや内湾し、内外面を工具で調整する。とくに内面にはかすかな砂粒の移動痕跡があり、ミガキ風の調整を加えたようである。114と117は薄手で、外面には砂粒の移動痕跡をとどめるが、削りっぱなしでもない。115・116は厚手で、外面はナデている。

3種(118~120)はわずかに内湾する口縁部をもち、口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。外面は横方向の荒いナデが施され、内面はケズリがなされたままである。

4種(121・122)は直口ないしは、わずかに外反する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめる。内外面ともにヘラミガキによる調整がなされ、調整は口縁端部まで及んでいる。

5種(123)は口径50cm程度の大形の深鉢である。口縁部はほぼ直立し、胴部へかけてじょじょにすぼまっていく。器壁は6mm前後と薄く仕上げられる。外面の口頸部には横方向の荒いナデがなされ、胴部には縦方向のケズリ痕跡が残る。内面は3種と同様で、ケズリがなされたままである。

#### 深鉢G類(124~126)

F類と同じような内湾する口頸部をもつ器形とみられるが、内湾の度合いが強く、また器面の調整手法が異なることから別類とする。外面は条痕による調整がなされているが、126では明瞭ではない。124の内面も条痕調整であるが、125と126の内面はナデによって平滑に整えられている。

深鉢127は外面に二枚貝による条痕調整を施し、内面は丁寧なナデ調整である。二枚貝条痕はこの 土器群では異質な存在であり、上層の黒色包含層から混入した晩期土器の可能性が高い。

# 深鉢底部 (128~134)

底部は上げ底で、底面は丁寧にナデられる。128・130・132・134では底面の周縁部にナデ回しが加えられ、中央部との境に稜線が認められる。底部外面は荒くナデ調整するものが多いが、128と129ではミガキに近いケズリがなされる。接合痕からは底部の円盤に胴部を積み上げたと観察される。

#### 鉢(135~142)

短く外反する口頸部をもち、底部は丸底になるとみられる土器である。頸部は無文で、口縁部の外面と胴部に縄文を施している。口頸部の形態に変化がみられ、類別が可能である。

135・136は口縁部を折り返しか粘土帯の貼り付けによって肥厚させ、幅の広い施文部を形成する。口縁部にはRLの縄文、胴部には羽状縄文を施す。羽状縄文は横方向のRLが先に押捺される。内面はミガキがかけられ、頸部外面はナデる。両者は同一個体の可能性がある。137・138は前者より口頸部が短い。縄文を施文した後に、頸部外面を強くナデたため、口縁部が肥厚しているような印象をうける。口縁端部は尖り気味である。両者の口縁部と138の胴部にはRLの縄文、137の胴部には羽状縄文が施されるが、やはり横方向のRLが先に押され、回転方向を変えて粗く押捺が付加されるようである。140は口縁端部を丸くおさめ、外面にLRの縄文を施す。口縁端部はほとんど肥厚しない。142は口縁端部が尖り、口縁部はまったく肥厚しない。外面の縄文はRLで、内面には丁寧なミガキが施される。139の胴部は羽状縄文で飾られる。横方向のRL縄文が先で、回転方向を変えた縄文を加える。141は肥厚させた口縁部にRL縄文を施し、横走する沈線を1条引いている。口縁部の下端にも沈線が認められるが、この沈線は縄文施文前に引かれている。内面には広い剥離面があり、形態的に

は不明瞭な部分が多く、施文も前述のものとは異なることから、鉢とすることには疑問も多い。

### 浅鉢A類 (143~145)

口頸部はほぼ直立する。143・144は外面に沈線を横走させ、RLの縄文を施す。143は口縁部が無文、144は施文帯と無文帯を交互に配する。ともに内面は平滑に整えられている。145は口縁部の内外にRLの縄文帯を飾り、施文帯の下端を沈線で画する。内外面ともに丁寧なミガキを施している。

#### 浅鉢B類(146)

外傾して開く口縁部をもつとみられ、端部は尖り気味である。内面はミガキが施され、口縁部と体部の境に鈍い稜をもつ。外面には2条の沈線を横走させ、二つの施文帯に渡ってRLの縄文を充填する。その下には無文帯を挟んでRLの縄文帯を飾るが、沈線は湾曲し、渦巻文に続く可能性がある。

### 浅鉢C類(148~154)

内湾気味の体部に直立に近い口縁をもつ無文土器である。外面調整の粗いものが多いが、内面はナデで平滑に整えられている。深鉢との識別が困難なものも含まれる。148以外は小片のため傾きについては確実ではなく、とくにヘラミガキの顕著な153は次の浅鉢D類の可能性もある。

### 浅鉢D類(155~159)

口縁部が大きく開く椀形ないしは、皿形の無文土器である。口縁端部は尖り気味で、外反するものもある。内外面ともに細かなヘラミガキが施され、精製土器の様相を呈する。胎土も良好である。

#### 浅鉢 E類 (160)

口縁部が内傾する器形の無文土器である。口縁端部内面に狭い平坦面をもつ。外面には斜め方向で 丁寧なミガキが施される。内面もミガキと思われるが剥落し、砂粒の移動痕跡のみが認められる。

#### 結節縄文施文土器片(147)

外面に結節縄文を施した土器片である。浅鉢の破片ではないかと考えるが、強い確証はない。この 土器片についても型式学的にこの土器群に含めることには問題があり、除外すべきかと考える。

# 3 河道2上流部最下層出土土器群 (第130図)

次に河道2上流部最下層出土土器群について述べるが、資料的には少量のため2器種、8類にしか分別できない。幸いに近接して同時性を持つとみられる資料があり、1器種、1類を加える。

### 深鉢A類(254)

頸部を外反させ、口縁部を屈折して立ち上げる器形をもつ。口縁部外面を肥厚させ、頸部との境に 段を形成する。端部はやや内湾し、丸くおさめる。口縁部外面にはヘラ描き沈線で3ないし4条の平 行線を引き、これと斜行する短かい沈線を数条描く。口縁は波状になるとみられ、短沈線が波頂部に あたるようである。第125図190が同一文様である。頸部外面と内面はミガキがなされている。

### 深鉢B類(255~258)

A類よりも強く外反する口頸部をもち、口縁部の内面を高く肥厚させる。このため頸部と口縁部の境は段状となる。肥厚部は施文帯となり、長楕円形の区画文を配する。施文帯にはRLの縄文が施され、区画文内は縄文を磨り消している。すべて同一個体の可能性がある。255は二つの区画文の間にあたり、そこに縄文施文原体によるとみられる押捺が、右の区画文の端部と平行するように、弧状に4ないし5条認められる。258は区画文の端部外郭を盛り上げ、側面から上半にかけて沈線でなぞっている。このため、水平な口縁とみられるこの深鉢で、この部分のみが突起しているように見える。

いずれも頸部内面は丁寧なミガキが施され、外面はナデ調整の後、粗いミガキがなされている。

### 有文深鉢胴部 (259~268)

259~263はすべて同一個体である可能性が高い。261は胴部の肩付近の破片と考えられる。頸部と胴部の境に沈線を1条巡らせ、その下に左巻きの渦巻文を描く。渦巻文の右には斜めに沈線を多条引き、渦巻文を中心とした三角形の装飾部を作るようで、この部分にRLの縄文を充填する。262や263にみられる左半の左下がり条線が渦巻文の右側、右半の右下がり条線が渦巻文の左側に描かれると考えられ、これらの破片は渦巻文の中間点のものとみられる。260・262でも頸部と胴部の境に沈線が認められる。262では沈線の上に条線が引かれ、頸部にも条線が描かれていた可能性がある。斜行した多条沈線の上には所々粗雑に縄文が施されているが、縄文の条の傾きをみると、260はわずかに右上がりだが、他は右下がりで相違がみられる。原体は同一とみられることから、おそらく羽状縄文を施文する時のように縦方向に回転方向を変化させて押捺したために生じたのではないかと考える。いずれも内面は丁寧にミガキが施され、鈍い光沢を発している。これらの破片は焼成・胎土・調整・色調から深鉢Bの破片と同一個体である可能性がきわめて高いが、接点は見つからなかった。

264は縄文地に交差する細く浅い条線を引く。内面は丁寧なミガキである。265は部位が不明確だが、 半截竹管によって弧線が描かれる。胎土には砂粒が多く、内外面をナデ調整するものの器表に砂粒が 浮かび、他の破片より異質な感じを受ける。266・267は垂下する多条沈線を胴部上半に飾るもので、 内面は丁寧なミガキである。268は胴部下半で、RLの縄文が全面に施され、底部近くは荒いナデが なされる。内面は丁寧なミガキ調整で整えられる。胴部の傾斜度については確実とはいえない。

### 深鉢E類 (269~275)

粗製無文の深鉢である。頸部がくびれ、口縁部が外反する形態をもつ。口縁部の形態で類別する。

1種(269)は口縁部の外面を大きく肥厚させる。口縁端部は丸くおさめている。頸部外面は中央部が厚く、断面が弓状を呈する。内外面ともナデによって調整されている。

2種(270~273)は薄手の作りで、口縁部は肥厚せず、端部は尖り気味におさめている。焼成は堅緻で、外面には煤が多く付着する。内外面ともに条痕による調整がなされ、ナデを加えるものもある。 270の外面調整は弥生土器のハケに似て、山陰地方に多い細密条痕といわれるものであろう。

胴部片(274・275)が 2 片ある。274は外面を巻貝によって条痕調整し、275は細密条痕で調整するが、器壁は 2 種より厚く、内面もミガキが施されて平滑に整えられている。

#### 深鉢F類(276・277)

バケツ形の胴部に内湾する口縁部をもつ粗製の無文深鉢である。内外面は工具ナデのような調整がなされるが、276の内面は指ナデによっていくらか整えられ、外面にもミガキのような痕跡が一部にみられる。口縁部はともにナデて調整するが、277の内面には粘土帯が付加され、肥厚がみられる。

### 浅鉢A類(278)

横走する2条の沈線の間にRLの縄文を施す。沈線が縄文施文後に引かれているが、再調整かどうかは明らかではない。施文帯の下は無文帯で、左端にヘラ描き沈線の先端のような窪みがある。内面は丁寧にミガキが施されている。浅鉢とする確証はなく、深鉢胴部の可能性も否定できない。

# 浅鉢C類 (279)

口縁部がほぼ直立する器形をもち、無文である。口縁端部はわずかに内湾し、尖り気味に丸くおさめられている。外面には斜めから縦方向の、内面には横方向の丁寧なミガキが施されている。

### 浅鉢D類 (280・281)

口縁部が開く形態の無文浅鉢である。280では口縁部を内側へ屈曲させている。内外面ともにミガキが施されるが、281の調整はやや荒く、外面のミガキは体部では斜め方向になされている。口縁端部は丸くおさめるが、280ではヘラミガキのために内面に鈍い稜が認められる。

### 浅鉢E類 (282~285)

ボール状の湾曲した体部をもち、口縁部は内湾してすぼまる。無文である。口縁端部は丸くおさめられるが、285の内面には端面が形成され、鈍い稜が認められる。内外面は工具でナデ調整を行い、ミガキを加えるが、外面が内面より丁寧である。それでも有文深鉢ほどは磨かれていない。282は口縁端部から2.5cmほど下がったところに直径10mmの孔を1個、焼成後に内外両面から穿っている。

### 底部 (286・287)

いずれも深鉢のものと考えるが、形態を異にしている。286は底部の円盤が剥離したもので、おそらく上げ底になると推定される。底部外面は荒いミガキ、内面は丁寧な細かいミガキが施されている。287は平底で、底面には編物の押圧痕が認められる。いわゆる網代底である。圧痕から編目を復元するのは難しいが、縦糸の圧痕は認められず、横糸のみが交互にずれて並ぶようである。細い縦糸に太い横糸を一本おきに潜らせた編み方が想定されそうである。河道2の項でも述べたが、底面の縁辺に籾の圧痕らしきものが認められた。確定できなかったが、今後注意を要する資料である。

河道2上流部最下層出土土器群は上記のとおりであるが、量的には貧弱の感を免れない。これらの土器群は微高地1から投棄されたと考えられ、そこに生活拠点が存在したとみられる。第122図のa地区もこの生活拠点から投棄されたとみられる土器の集中出土地点とみられ、第125図の土器の中には上流部最下層土器群と同時期と考えられるものがかなり含まれる。ここではこれらも最下層出土土器群の一部として詳述したい。189~201・204~206・208・212がこれにあたるとみられる。

190~192は深鉢A類である。断面三角形に肥厚させた口縁部外面にヘラ描き沈線文を飾る。

189・193~195・199~201は深鉢B類である。189・193~195は第130図255などと同様の区画文を飾り、区画文の外郭にはRLの縄文を施し、区画内は縄文を磨り消している。193でも区画文端部の突出が認められるが、隣接する区画文との間には二重の弧状沈線が浅く刻まれる。第130図255などとこれらの同類の土器とは調整方法が大きく異なり、第125図のものは内外面ともに巻貝による条痕調整のままである。201も区画文を飾るようだが、縄文は施されていない。内面はミガキ、外面は条痕とナデで、頸部は縦方向の条痕調整である。199・200は第130図の土器群にはみられなかったもので、肥厚させた口縁部内面に斜行する短沈線文を飾る。外面は条痕調整のようである。

205と208は外反する頸部をもち、胴部外面には斜行する多条沈線を交差させて施文する。同一個体の可能性がきわめて高い。頸部外面は工具ナデ、頸部内面はミガキが施され、胴部内面もナデで丁寧に調整されている。多条沈線は明瞭で第130図261~263とよく類似する。

204は頸部を外反させ、口縁部外面を厚く肥厚させた深鉢である。内外面ともにミガキが施されるが、内面には下端付近で条痕が残存する。口縁部外面は幅広の平坦面となるが文様はない。頸部外面もほとんど無文であるが、浅いかすかな垂下条線が3条認められる。第130図267の垂下条線と類似することから、204の胴部上半にも垂下条線が施されていた可能性を考慮し、深鉢C類とする。

206は**鉢**の口縁部と考えられる。口縁部は外反し、やや肥厚気味で丸くおさめられている。内面から端部にかけては巻貝による条痕調整で、外面はナデ調整が加えられたようである。

212は浅鉢 E 類である。厚手の土器で、口縁部は内湾し、端部は内側へ少し肥厚させている。内外面は横方向のヘラミガキで調整するが、内面がより丁寧である。

# 4 久田原遺跡出土後期土器群の位置

さて、これまで詳述してきた二つの土器群が、縄文時代後期の土器編年上でどのような位置を占めるかを考えたい。二つの土器群はいずれも深鉢の口縁部を拡張、あるいは肥厚させて文様を飾り、頸部は無文とするものを含む。縄文時代後期前葉から中葉にかけて盛んに作られた、いわゆる縁帯文土器の一部であることは明らかである。河道2上流部最下層出上上器群では、深鉢の肥厚させた口縁部内面に文様を施していて、199や200ではヘラ描きの斜線文が飾られるなど、彦崎KI式の特徴を示している。土器溜まり1出土土器群では、口縁部外面と胴部に縄文を施した深鉢B類や同様の施文意匠をもつ鉢が一定の割合を占め、また、頸部から屈折して上方へ立ち上がる口縁部の外面に、渦巻文を中心にして区画文を飾る深鉢A類が存在するなど、広義の彦崎KⅡ式に含まれるものと考える。

津雲A式・彦崎KI式から彦崎KII式にかけての土器については、間壁忠彦氏による彦崎KII式土器の再検討を端緒として、千葉豊氏による一連の縁帯文土器に関する論考などによって研究が深まっている。これには岡山県百間川沢田遺跡や同県津島岡大遺跡、また香川県永井遺跡・同県なつめの木貝塚などにおける一括資料の出土を踏まえた、調査担当者による詳細な分析結果なども寄与している。これらの研究によって土器型式内容の明確化や細分化が進展し、とくに、かつて未命名の型式が想定されていた津雲A式・彦崎KI式と彦崎KII式との間隙が埋められていったことは記憶に新しい。

河道2上流部最下層土器群は彦崎KI式に含まれる。彦崎KI式は永井遺跡において永井II~IVの3段階に分期されているが、その指標は肥厚させた口縁部の外面に沈線文を主体とした文様をもつ深鉢の減少と文様の退化、「く」の字状の口縁部をもち口縁部外面を肥厚させて縄文を施す深鉢の増加、内傾する口縁部を肥厚させて外面に文様を施す浅鉢の減少などである。河道2上流部最下層土器群は資料的に貧弱で、永井遺跡ほど土器群の全貌を表しているとはいえないが、比較を試みてみたい。

第130図**254**や第125図**190~192**の深鉢 A 類であるが、口縁部は大きく肥厚して頸部との境は段状を呈し、施文部にあたる外面は広い。文様の沈線は太く、**190**のように入り組み状になるものもみられる。先の指標からすれば永井 II に対応するか、さらに遡る可能性も感じさせる。

第130図255~258や第125図189・193~195の深鉢 B 類は永井 II (註(5)文献(以下省略)第359図4725~4727)や永井 II (第340図4402)にも存在するが、肥厚の度合いからは永井 II に近い。しかし、永井 II のように外面を肥厚させて縄文を施すことはない。「く」の字状口縁の外面に縄文を施す深鉢の増加が新しい傾向を示すとすると、河道 2 上流部最下層土器群が永井 II より古いことを表すのであろうか。258の施文部は突出していて、内面施文と外面施文の違いはあるが、永井 I に対比される津雲 A 式に近いものを感じる。なお、255の区画文は津雲 A 式から派生したと思われるが、類似したものとして、外面施文ではあるが、永井遺跡 S R 8602下層 E・F -15・16 X 層(下層 II)出土の第303図3838がある。この層から出土した土器群は彦崎 I 式とされるが、3838は津雲 A 式的である。永井 II とされる E -20包含層 IV 層の直上にある III 層から出土した第355図4572も類似し、しかも内面施文である。ただ、施文部分には縄文はなく、外面には櫛描文がみられ、255との違いは大きい。

第130図259~263は永井 II 式とされる第355図4669と文様構成が類似している。また、永井遺跡 S R 8602下層  $E \cdot F - 15 \cdot 16$  X 層(下層 II)出土の第306図3875も同様である。しかし、261の渦巻文を飾

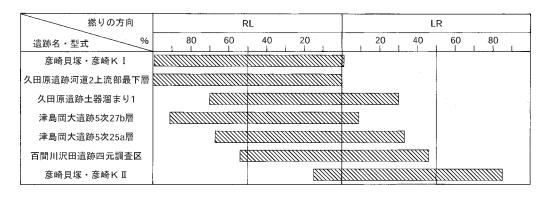
る逆三角形部分は永井遺跡のそれよりも大きく、また、その部分にRLの縄文を施している。型式学的には永井遺跡の方に文様の退化が認められるのではないだろうか。

第125図**204**は深鉢 C としたものであるが、幅広く肥厚させた口縁部外面の断面形が永井 I とされる第311図3984によく類似している。また、永井 II の第361図4779などのようにこの時期以前に多いようである。深鉢 F 類とした第130図**277**は口縁部の内面を肥厚させている。このような無文深鉢の類例として、なつめの木貝塚の無文深鉢 II b類(文献(7)渡辺論文第3図59・60など)が、器形では問題があるものの、あげることができよう。永井遺跡ではほとんど類例をみない。

以上のようにみてくると、河道 2 上流部最下層上器群は彦崎 K I 式の古相を示す永井 II に併行するように考えられる。深鉢 A 類や B 類、それに第130図261などの文様構成からすれば、永井 II よりも古相を示している可能性もある。ここで注意されるのは、同じ文様構成をもつ第130図255と第125図193の器面調整が異なっていることである。255は丁寧なミガキだが、193は条痕調整のままである。彦崎 K I 式に特徴的な口縁部内面の斜線文をもつ土器(第125図199・200)は第122図 a 地区のみから出土している。厳密に言えば、第130図と第125図の土器の間でも時期差の可能性が考えられるのであり、永井 II ~IVの土器群が彦崎 K I 式の全貌を表しているとは言い切れないこともありうる。

それにしても、河道2上流部最下層出土土器群は、しばしば永井遺跡出土土器に類例を求めたように、中部瀬戸内地域の土器相とよく近似している。第130図270・275に認められる細密条痕や同図287の網代底土器のような山陰地方の影響を示すものもいくらか含まれているが、基本的には岡山県南部の土器様相と相違せず、その土器文化圏の中にあったものと考えてよい。

上器溜まり1出上上器群は広義の彦崎 K Ⅱ 式に含まれるとしたが、彦崎 K Ⅲ 式の内容については間壁氏による指摘にもあるように明確さを欠いていた。千葉氏は彦崎 K Ⅲ 式という型式名がかなり広い意味で使用されてきたという研究史を重視し、新しい型式名の導入による混乱を避けて、彦崎 K Ⅲ 式を3段階に細分した。これに対して平井勝氏は、百間川沢田遺跡四元調査区から出土した土器群について詳細な検討を加える中で、彦崎 貝塚出土の彦崎 K Ⅲ 式土器について整理を行い、千葉氏の第1段階は彦崎 貝塚には認められないとして、「彦崎 K Ⅲ 式を基準資料に立ち戻って狭義に定義し直」し、「彦崎 K Ⅲ 式との型式内容の差異および編年的位置関係が明確になれば、別の型式名を与えても不都合はない」とする千葉氏の指摘を受けてか、四元調査区土器群を「彦崎 K Ⅲ 式に先行する土器群」として、四元式という型式名称を与えている。ここでは、「器種の組合わせはみなほぼ同じであるが、それぞれの器種ごとに、文様や器形に若干の違いが認められる」という、泉拓良氏による北白川上層



第980図 主要遺跡出土土器群縄文原体撚り方向比率比較図

式の細分にあたっての指摘を参考に、型式名の乱立を懸念して千葉氏の広義の彦崎KII式を使う。

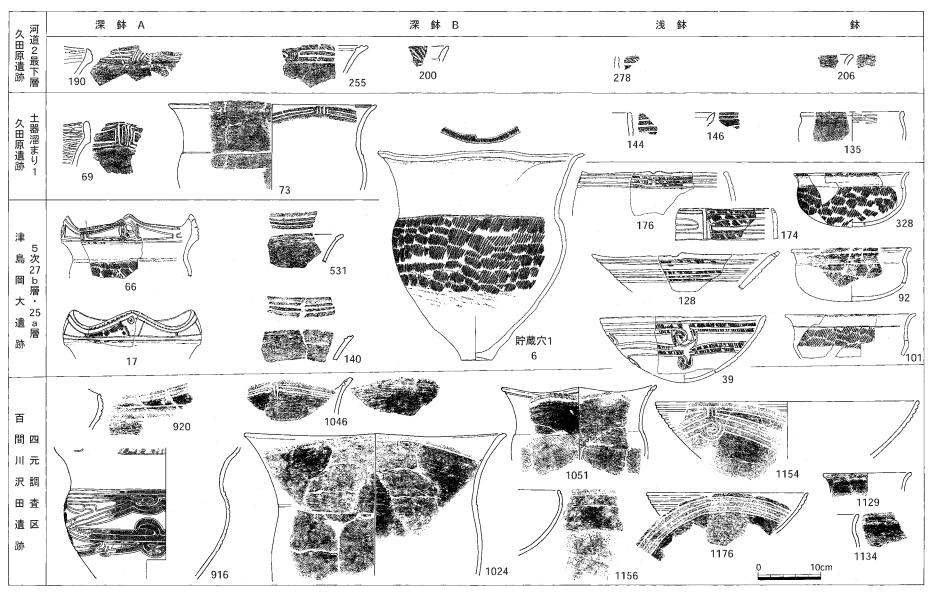
彦崎 K Ⅱ式の細分案については前述の千葉氏や平井氏の論考が代表的なものであるが、他に阿部義郎氏や橋本雄一氏の研究もある。それらの中で、細分の指標として示されたものは、縄文の撚りの方向、深鉢口縁部の肥厚度合い、深鉢 B 類の口縁部内面文様、渦巻文の変化、沈線内連続刺突文や結節縄文の出現などである。まず、もっとも明瞭な変化を示す縄文の撚りの方向について検討したい。

久田原遺跡・彦崎貝塚・津島岡大遺跡・百間川沢田遺跡の主要土器群を取り上げ、それらの縄文の撚りの方向を第980図に示した。彦崎貝塚と百間川沢田遺跡については註(7)の平井論文、津島岡大遺跡については註(4)報告書の観察表を参照して筆者が計算したものである。久田原遺跡の河道2については点数が5点とあまりにも少ないが、一応RLが100%を占める。久田原遺跡の土器溜まり1は同一個体の可能性がある破片をかなり含んでいるが、縄文をもつ全破片を対象とした。ただ、小破片で上下左右が不明なものは対象から除外した。破片全体ではRLが70%、LRが30%となるが、口縁部に限るとRLが75%、LRが25%を示した。津島岡大遺跡では、5次調査27b層でRL91%、LR9%、同25a層ではRL67%、LR33%となる。久田原遺跡土器溜まり1は津島岡大遺跡5次27b層と四元調査区の中間に位置し、津島岡大遺跡5次25a層とほぼ同じということになる。

久田原遺跡土器溜まり1出土の第120図147は、この土器群の中では唯一の結節縄文をもつ土器であるが、これについては第159図に出土土器を示した上層からの混入品である可能性が高い。百間川沢田遺跡四元調査区土器群には結節縄文がいくらかみられ、千葉氏の細分案の第2段階に入っているものとみられる。縄文の撚りの方向の集計結果を加えると、土器溜まり1土器群が四元土器群より古いと判断される。問題は津島岡大遺跡27b層土器群と土器溜まり1土器群との先後関係である。

まず、深鉢B類の口縁部内面の文様から考えたい。土器溜まり1の深鉢B類1種の文様は区画文であり、破片では2条の沈線が平行して刻まれる。これに対して、津島岡大遺跡27 b層において多数を占める深鉢B類a1種は口縁部内面に1条の沈線を引くもので、基本的に異なる文様と理解される。むしろ、27 b層では深鉢B類a2種の方が2条の沈線ということで類似しているようにみられるが、土器溜まり1の第118図73の施文部が平面的であるのに、27 b層のそれは段状に肥厚するものが多い。また、土器溜まり1では区画文内に縄文が施されるのに対し、27 b層では2条の沈線の間を無文としてその両側に縄文を飾るのが一般的である。なによりも27 b層の註(4)報告書図96の535は25 a層の同図49の142と同じ文様で区画文とは呼べず、土器溜まり1の73とは同一文様と考えにくい。27 b層の深鉢B類a2種は25 a層にも存在し、四元調査区土器群にも含まれている(第981図参照)。四元調査区の註(3)報告書第509図1046は2条の横走する沈線を2条の短沈線で区切り、一見して土器溜まり1の73に類似しているが、縄文は沈線を跨いで口縁部内面全面に施される。

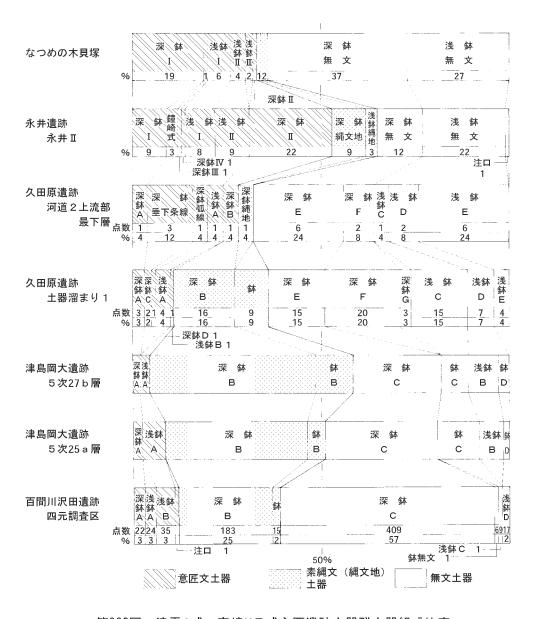
土器溜まり1の73の口縁部内文は、系譜的には同じ久田原遺跡の河道2上流部最下層出土土器群の第130図255の文様を受け継いだものである。255の文様は73より立体的で、区画文の内部を磨り消して外郭部に縄文を施しているため施文が逆になるが、区画文の間にある縄文原体を押捺したとみられる短い凹部が73ではヘラ描き短沈線に変わり、縄文原体を表現するためか、区画文内の縄文とは角度を変えた縄文が施され、忠実な模倣をヘラ描きで行おうと意図している。同じ土器群に属する74はさらに文様の簡略化が進んだものであるが、区画文間の縄文は存在している。河道2上流部最下層土器群は彦崎KI式の初期のもので、255に類似した文様は永井遺跡の津雲A式から彦崎KI式にかけての土器でいくらか認められた。したがって、土器溜まり1の73は古相を持つものとみられ、前述の27



第981図 久田原遺跡・津島岡大遺跡・百間川沢田遺跡出土縄文後期土器群主要土器変遷図 (1/6)

b層深鉢B類a2種との比較からすれば、それより古い可能性が強い。土器溜まり1土器群の深鉢B類2種・3種では口縁部内面に文様をみないが、これも永井遺跡の彦崎KI式に多い、口縁部を「く」の字状に外反させ、肥厚させた口縁部外面に縄文を施す器種の影響を受けているかもしれない。

土器溜まり1 土器群は津島岡大遺跡や百間川沢田遺跡の土器群と比べると資料の点数があまりにも少ないため、比較することをためらわれたが、第982図に津雲A式から彦崎KII式にかけての主要土器群の器種別構成比率グラフを作成してみた。なつめの木貝塚と永井IIについては註(7)の渡辺論文から、津島岡大遺跡については註(14)論文から、百間川沢田遺跡については註(12)論文から引用・参照し、器種分類については各著者の表現のままにしている。遺跡間における器種の対応については論文にあるものはそのまま引用し、他は筆者が判断している。これを見ると、久田原遺跡土器溜まり1と津島岡大遺跡27 b層とでは、縄文地土器と無文土器の比率が逆転している。土器溜まり1の無文土器の比率は、より古い久田原遺跡河道2上流部最下層やなつめの木貝塚のものに近く、深鉢C



第982図 津雲A式~彦崎KⅡ式主要遺跡土器群土器組成比率

(註(7)・(14) 文献挿図を一部改変)

類が圧倒的多数を占める百間川沢田遺跡四元調査区とは異なっている。縄文地深鉢の津島岡大遺跡27 b層から同遺跡25 a層を経て四元調査区へ至る漸減の流れに土器溜まり1は入れない。

統計的な資料点数の過小不安はあるが、以上のような諸事実から判断すると、久田原遺跡土器溜まり1土器群が津島岡大遺跡5次27b層土器群より古い可能性が考えられないだろうか。

# 5 二つの土器群に前後する後期土器と今後の問題点

久田原遺跡から出土した二つの土器群は、それぞれ彦崎 K I 式と彦崎 K II 式の前期段階のものではないかと考えたが、久田原遺跡からはそれらの土器群に前後する時期の後期土器も多く出土している。ここではそれらの土器を紹介するとともに、今後の問題点を二三指摘して終わりとしたい。

まず彦崎 K I 式に先行する土器型式のものであるが、もっとも古いものとして第159図580・581があげられる。磨消縄文をもつ深鉢で、580は波状口縁の波頂部、581は胴部上半にあたる。580は波頂に小さな菱形を画し、その下に口縁と平行する山形施文帯をもつ。581は J 字文の一種とみられるが、輪郭線が切れている。これらの文様から判断すると福田 K Ⅱ 式に属するものとみられる。

後続する津雲A式の土器としては土壙13から出土した第65図46~54の深鉢がまずあげられる。口縁部は粘土帯を貼り付けて肥厚させ、幅広い外面に太い沈線で文様を刻む。頸部外面は縦方向の条痕調整で、胴部には角張った区画文を飾るようである。土壙13は河道2の底部にあり、土層的には上流部最下層と近い年代が想定される。他には第165図の641~644・647・648などが候補にあげられる。

次に土器溜まり1土器群に後続するものとしては河道2上流部最下層と土器溜まり1の二つの土器群が出土した土層の上部に堆積した土層出土のものが中心になる。第128図の下段は河道2上流部の下層から出土したもので、236や239など結節縄文を施す土器が目に付く。237の深鉢口縁部内面には1条の沈線で区画がなされ、LRの縄文が施される。235は内湾する深鉢の口縁部外面に沈線で区画した施文帯を設けてLRの縄文が飾られる。これらの土器は千葉氏の彦崎KII式細分案の第2段階にあたり、235の土器は千葉氏が彦崎貝塚出土の彦崎KII式土器として提示したものに類例が認められる。平井氏の彦崎KII式細分案の古段階に対応し、百間川四元調査区土器群に後続するものとみられる。第125図211や第147図501のように沈線内に連続刺突文を施す土器も同時期のものとみられる。

第125図187・188、第128図232、第159図574は近畿地方の元住吉山 I 式に近似している。口縁部も胴部上半に沈線で横走する施文帯を画し、貝殻による擬似縄文を施している。これらの土器は千葉氏細分案の第3段階、平井氏細分案の新段階に対応するとみられ、中部瀬戸内地域では彦崎 K II 式の範疇とされる。両型式を対比したものとしては間壁氏の論考がある。

久田原遺跡からは後期末期の土器はあまり出土していないが、第140図358の深鉢や同図362の注口 土器には凹線文が施され、巻貝の押圧文がみられ、いずれも同期の福田 KⅢ式に属するものである。

以上のように、久田原遺跡からは後期のほぼ全期間にわたる土器が出土していることになる。しかし、時期別の出土量では、前葉の福田 K II 式や末期の福田 K III 式のものはきわめて少なく、初頭の中津式のものはみられない。中心を占めるのは彦崎 K II 式の土器で、彦崎 K I 式がこれに次ぐ。久田原遺跡に隣接する久田堀ノ内遺跡と夏栗遺跡からも縄文時代後期の土器が出土しているが、時期別の出土量は久田原遺跡とは微妙に相違するようである。これら3遺跡は縄文時代においては一つの生活領域であったとみられ、最終的には3遺跡すべての土器を考察対象にした段階で、この地域における縄文土器の実態が明瞭になるものと考えられる。今後のもっとも大きな課題である。

土器溜まり1土器群の深鉢B類3種土器は縄文施文部分以外はヘラケズリで調整を終わっている。管見ではこのような例は周辺地域では確認できない。しかも、このB類3種のみが深鉢B類の中でLRの縄文の撚りをもっていて注意される。B類3種は同一個体と思われる破片が多いため、あるいは1点のみ存在していたかもしれず、土器制作者の個性に帰すべきものとして処理される可能性もある。しかし、土器溜まり1土器群には他にもヘラケズリで調整を終わっている土器が含まれている。それは深鉢F類3種と5種である。外面は荒いナデが施されているが、内面はヘラケズリのままである。深鉢F類はバケツ状の器形を呈するようで、岡山県南部ではほとんどみられず、山陰地方に多い。しかし、山陰地方のその種の上器にもヘラケズリのままのものはあまりないようである。有文の深鉢B類と無文の深鉢F類の両者でヘラケズリで調整を終わる土器がみられるということは、これらが地域性をもったものとして存在している可能性を暗示する。今後、岡山県北部の周辺遺跡で類例の発見されることを期待したい。土器溜まり1土器群も中部瀬戸内地域の土器群と大きな相違をもたず、同一土器文化圏にあったものとみられるが、その内部での小地域性を考える材料になるか注意される。

これらの考察にあたっては高橋護氏と千葉豊氏から種々の有益なご教示を得た。末筆ではあるが、 記して感謝を申し上げる。 (岡本)

### 註

- (1) 問壁忠彦「縄文後期彦崎 K Ⅱ (竹原) 式土器をめぐって」『倉敷考古館研究集報』第15号 倉敷考古館 1980年4月
- (2) 千葉豊「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会 1987年4月 千葉豊「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』第72巻第6号 史学研究会 1989年11月 千葉豊「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会 1992年4月
- (3) 平井勝ほか『百間川沢田遺跡 3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 岡山県教育委員会 1993年3月
- (4)阿部芳郎ほか『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年3月
- (5)渡辺明夫・安藤清和ほか『永井遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第九冊 香川県教育委員会ほか 1990年12月
- (6) 笹川龍一「なつめの木貝塚の縄文土器」『香川考古』 2 香川考古刊行会 1993年
- (7) 平井勝「縄文後期・四元式の提唱」『古代吉備』第15集 古代吉備研究会 1993年4月 渡辺明夫「観音寺市なつめの木貝塚出土の縄文時代後期土器(なつめの木式)について」『研究紀要』 II 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1994年3月
- (8) 鎌木義昌・高橋護「Ⅱ縄文文化の発展と地域性 9瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』 河出書房 新社 1965年7月
- (9)渡辺明夫「第V章まとめ 第1節縄文時代後期・晩期の上器について」『永井遺跡』四国横断自動車道 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第九冊 香川県教育委員会ほか 1990年12月
- (10) 鳥取県智頭町に所在する智頭枕田遺跡から出土した後期前葉の土器を実見する機会を得たが、その際、 調査担当者の木田真氏からかなりの高率で網代底が存在するというご教示をいただいた。
- (11) 千葉豊「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会 1992年4月
- (12) 平井勝「縄文後期・四元式の提唱」『古代吉備』第15集 古代吉備研究会 1993年4月
- (13) 泉拓良「第7章北白川上層式土器の細分」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1980年3月
- (14) 阿部義郎「第V章調査の成果と課題 1.後期第IV群土器の型式学的検討」『津島岡大遺跡 4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年3月
- (15) 橋本雄一「第V章調査の成果と課題 2. 彦崎 K 2 式に先行する土器群について」「津島岡大遺跡 4 』 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年3月

# 第2節 縄文時代の石器について

# 1 はじめに

久田原遺跡は、吉井川の左岸に営まれた縄文時代から近世にわたる複合遺跡である。このため、出土石器の大半が遺構から遊離した状況で出土している。石器の内、出土遺構・包含層の時期から縄文時代に帰属するものを抽出すると、石器678点、剥片・砕片・残核が867点で、合計1545点を数える。このうち、時期がある程度限定できるものは1311点で、内狭義の石器は531点である。

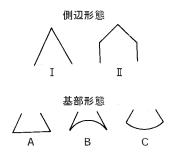
以下、まずは主要器種の状況を概観する。時期については、多少の遺物の混入が認められるものの、 彦崎 K Ⅱ式以降の後期後半、後期後半を一部含んだ谷尻式までの晩期前半、谷尻式期の晩期中葉、それ以降の晩期後半の大きく4時期に遺物を区分する。

# 2 主要器種の概要

石鏃(第983・984図) サヌカイト製の無茎鏃に限定される。側辺形状には三角形を呈するもの(Ⅰ類)と細部調整の打撃方向を意図的に変えて五角形を呈するもの(Ⅱ類)がある。また、基部の形状には、抉りをもたない平基のもの(A類)、意図的に調整を加えて抉りをもつ凹基のもの(B類)、円基のもの(C類)がある。

したがって、形態分類は側辺と基部の形状を組み合わせた分類名 称を用いる。

本遺跡では89点が出土し、内分類可能な48点についてみてみると、 三角形平基鏃(IA類)14点、三角形凹基鏃(IB類)31点、三角 形円基鏃(IC類)1点、五角形凹基鏃(IB類)2点がある。

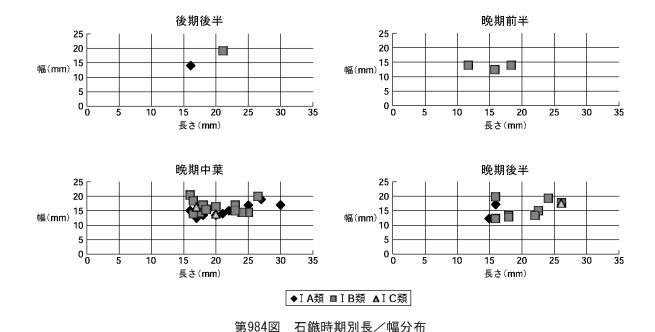


第983図 石鏃形態分類

時期別には、後期後半に I A類と I B類が 1 点づつ出土している。晩期前半には I B類のみが 3 点、晩期中葉に I A類 9 点、 I B類13点、Ⅱ B類 2 点の計24点、晩期後半には I A類 2 点、 I B類 8 点、 I C類 1 点の計11点がある。形態的には時期的な差違は認められず、Ⅱ類が晩期中葉に新しく加わる。ただ、 I B類については抉りの深いものが残るものの、 1 m前後の浅いものが増加する。

次に、計測値の時期別推移をみてみる。後期後半には、長さ平均18.5mm(最大21.0mm、最小16.0mm)、幅平均16.5mm(最大19.0mm、最小14.0mm)を測る。晩期前半には、長さ平均15.0mm(最大18.0mm、最小11.5mm)、幅平均13.5mm(最大14mm、最小12.5mm)、晩期中葉には長さ平均20.6mm(最大30.0mm、最小16.0mm)、幅平均15.8mm(最大20.5mm、最小12.5mm)、晩期後半には長さ平均20.0mm(最大26.0mm、最小15.0mm)、幅平均15.5mm(最大19.0mm、最小12.5mm)を測る。第984図に I 類の長/幅分布を示した。これでも分かるように、後期後半の資料が少ないが、晩期前半にかけて小型化したものが、晩期中葉以降、長さと幅において大型のものが加わる。

石鏃の製作技法においては、後期後半以降主要剥離面を一面もしくは両面に大きく残し、剥片の周囲のみに細部調整を加えたものが主体を占める。しかしながら、全面を丁寧に調整し、断面凸レンズ形に作り、厚みが5mm程度に仕上げた丁寧なものも残る。また、晩期後半にサヌカイト製の石鏃の中



央部に研磨を施した局部磨製のものが2点みられる。

**石錘** 楕円形の扁平な円礫の長軸両端に、擦り切りによる切り目を入れた切目石錘2点(S127・S129)が出土したのみである。晩期中葉の包含層出土で、黒色粘板岩製と溶結凝灰岩製のいずれも河原で採取可能な石材でつくられたものである。

県内の石錘は打ち欠きのものが主体だが、本遺跡においては、石錘に用いる円礫がたやすく入手できる状況にある。このため、あえて紐掛け用の溝を丁寧に打ち欠いて作出せずに使用している可能性も考えられる。

**石匙** サヌカイト製のものが 1 点(**S 103**)のみ晩期後半の包含層から出土している。表裏に主要剥離面を大きく残し、周辺部のみに細部調整を加えて刃部の対辺につまみ部を作り出す横型の石匙である。つまみ部には自然面を残している。

**刃器類** 削器・掻器・不定形刃器を含める。サヌカイト製を主体に片岩系の石材のものもみられる。 厚手の剥片の全面または一部に二次加工を加え、側縁に細部調整を加えて刃部を作出している。形状 には長方形・方形・三角形など定形的なものはなく、石包丁状石器と呼ばれる長方形の短辺に抉りを 持つものはない。形態上での時期的推移は捉えにくいが、晩期中葉から後半にかけて出土数が増加す る傾向が窺われる。

横刃形石器 中部・東海地方で「横刃型(形)石器」「粗製剥片石器」などと呼ばれている横長の使用痕のある剥片で、明確に定義されてはいない。ここでは仮に、「片面に円礫面、もう片面に主要剥離面をもつ横長の剥片で、明確な刃部を作出せずに長辺に使用によると考えられる連続的な微細な剥離痕をもつ剥片石器」について特に分類した。

後期後半から数点ではあるが晩期後半まで出土している。石材は片岩系を主体に、まれに安山岩系の石材を用いたものがある。石鍬と同じ石材であることから、後述する石鍬を円礫から作る際に最初に出る剥片を石器として利用している可能性がある。剥離痕のある面については、肉眼観察では明確な使用痕は認められない。

RF・UF サヌカイト製で、刃器よりも小形の剥片の中で主に側縁部に二次加工を行ったものを RF (二次加工のある剥片)、連続する微細な剥離痕を持つものを UF (使用痕のある剥片)とした。 RFには刃器の破片が含まれる可能性もある。サヌカイト製の剥片・砕片の推移と比例して、後期後 半以降増加する傾向にある。

石鍬(第985・986図) 打製石斧と同一のものだが、県南部の発掘調査例からその機能が土掘り具と推測されることから、この名称を用いている。時期不明のものを含めて304点出土し、石材は、緑色片岩・結晶片岩・黒色片岩など片岩系のものを主体に安山岩系のものもみられる。本遺跡では後期後半からみられるが、県内全域でも、山間部の桃山遺跡、上野遺跡、石ヶ坪遺跡、沖積地の南溝手遺跡など後期中葉にはみられ始める。

ここではまず、形態を平面形態・刃部形態・側面形態の3段階に分類し、それぞれを以下のように細分し、形態名称をそれぞれの段階を組みあわせて行う。

平面形態: I — いわゆる短冊形である。両側縁が平行で、基部と刃部の比率が1:1.5までを含める。さらに、基部: 刃部が1:1.0ものをA、1:1.5までのものをBに細分する。

II — いわゆる撥形である。両側縁が刃部に向かい「ハ」の字状に広がり、基部と刃部の比率が 1:1.5以上のもの。ただし、全長が最大幅の 2 倍以上は含まない。

さらに、基部=側縁<刃部のものをA、基部<側縁<刃部のものをBに細分する。

刃部形態:a-円刃で、刃縁が弧状を呈するもの。

b-直刃で、刃縁が直線的なもの。

c-偏刃で、刃縁が弧状ないし直線的なもので、長軸の中心線で線対称にならないもの。

d 一剣先形で、刃縁が「V」字状を呈するもの。

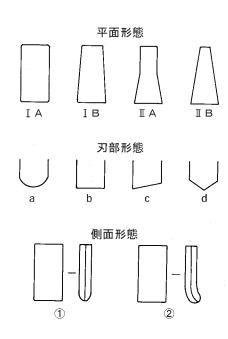
側面形態:①一直線的なもの。

②一弧状を呈するもの。

以上の分類に基づいて時期と全形がわかる資料についてみてみる。

後期後半は33点中18点が分類可能で、IAa①類1点、IBa類1点、ⅡBa類1点、ⅡBa①6点、ⅡBa②類2点、ⅡBb①類1点、ⅡBc①類3点、ⅡBd①類1点、ⅡBd②類2点である。晩期前半は19点中8点が可能で、IAb①類1点、ⅡBa類1点、ⅡBa①類3点、ⅡBaD類1点、ⅡBd①類1点、ⅡBa①類6点、IBb①類2点、ⅡAb①類1点、ⅡBa①類6点、IBb①類2点、ⅡAb①類1点、ⅡBa①類8点、ⅡBb①類2点、ⅡBc①類4点、ⅡBc②類2点、ⅡBd①類1点である。晩期後半は85点中26点が可能でIAd①類1点、IBa①類1点、ⅡBa①類5点、ⅡAa①類1点、ⅡAd②類1点、ⅡBa類1点、ⅡBa①類1点、ⅡAd②類1点、ⅡBa類1点、ⅡBa①類1点、ⅡBa①類1点、ⅡBa②類1点、ⅡBa①類1点、ⅡBa②類1点、ⅡBa①類1点、ⅡBa②類1点、ⅡBa

平面形態上には大きな変化は認められないが、典型的な



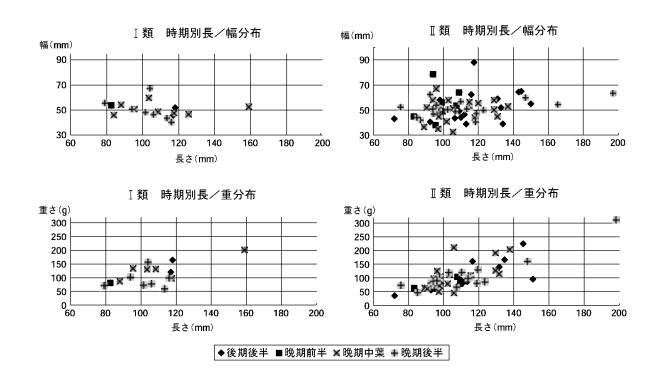
第985図 石鍬形態分類

撥形であるⅡ A 類が晩期中葉から新しく加わることは注目される。刃部形態では特に平面形態との有機的な関連性は認められない。円刃を主体にその他が共存するが、直刃が使用によって円刃や偏刃になる可能性も考慮しておく必要があろう。また、側面部形態は①類が圧倒的に主体をなす。②類のものは刃部に自然面を残し、原材の形状を反映しているものがあり、意図的に②類が存在しているかどうかは判然としない。

次に、平面形態別に長/幅分布と長/重分布の変遷をみてみたい。

まず、I類についてみてみる。長/幅分布では、後期後半が長さ平均117.5mm、幅平均48.5mm、晩期前半が長さ82.5mm、幅55.0mm、晩期中葉が長さ平均110.2mm、幅平均50.7mm、晩期後半が長さ平均102.0mm、幅平均50.4mmを測る。平均値でみる限りでは長さ・幅共に大きな変化は認められないが、長さにおいて晩期中葉に150mmを越える大型品が加わる。また、長/重分布では、後期後半が平均142.25g、晩期前半が81.27g、晩期中葉が平均130.32g、晩期後半が平均91.53gを量る。平均では顕著な差違が認められるが、時期別の分布では50~100gの小型品と100~150gの中型品、150g以上の大型品に分けられ、後期後半が中・大型品、晩期前半が小型品、晩期中葉と後半には小・中・大型品がみられる。晩期中葉の大形品で特に200gを越える超大形品がみられる。

Ⅱ類については、長/幅分布では、後期後半が長さ平均117.6mm、幅平均53.0mm、晩期前半が長さ98.2mm、幅54.9mm、晩期中葉が長さ平均108.7mm、幅平均49.2mm、晩期後半が長さ平均112.6mm、幅平均54.2mmを測る。平均値からは時期的な顕著な差違は認めがたいが、長さ150mmを越える大型品が後期後半からすでに存在し、晩期後半には200mm弱まで大型化したものが少量みられる。また、長/重分布では、後期後半が50g未満の超小型品と小・中・大型品があり、平均108.55gを量る。晩期前半には小・中型で、平均77.11g、晩期中葉には超小型品の比率が増し、小・中・大・超大型品があり、



第986図 石鍬長/幅、長/重分布

平均110.30 g である。晩期後半には平均119.53 g を量り、さらに超小型品の比率が増し、超大型品も300 g を越えるものがみられる。

I・Ⅱ類間を比較すると、Ⅰ類がやや小振りで、時期を通じて比較的規制的な計測値を示す。それ対して、Ⅱ類は後期以来の小・中・大型品に加えて、超小型品と超大型品に分化が進み、晩期中葉にはそれぞれの機能分化がほぼ成立したといえる。機能分化については、県南部の南溝手遺跡や窪木遺跡では指摘でき、西部瀬戸内から九州でも同様な状況が窺える。

次に石鍬の機能についてだが、刃部に使用による摩滅痕が残るものが数点観察される。また、大半は非常に粗雑な作りで、使用による欠損なのか未製品なのか判断しにくいものが多い。このため、肉眼による使用痕観察と形態からの推察は困難といえる。近年の顕微鏡による使用痕観察では、石鍬の中に土掘り具と考えられる使用痕と伐採斧と考えられる使用痕が確認され、石鍬(打製石斧)の用途の多様性が指摘されている。 I 類と II 類の間に計測値上で差違が認められ、各類型の中でも機能分化が窺えることから、本遺跡出土資料についても多様な機能を考えて行く必要があるだろう。

刃部磨製石斧 磨製石斧の内、主に刃部のみを研磨し、全面に粗い剥離面を残すものを扱う。

晩期前半から後半まで少量みられる。石材は、石鍬と同じ片岩系のものと河原で採取可能な安山岩系のものがある。基部の調整では石鍬との分別は困難だが、総じて比較的丁寧に二次加工を行い整形している。計測値では全形を知り得るもので、長さ100mm弱、最大幅50mm弱で、全体が扁平な短冊形を呈する。磨製石斧の未製品である可能性も否定できないが、資料が少なく不明な点が多い。

**磨製石斧** ほぼ全面に研磨を施した石斧である。全形を知り得るものがないが乳棒状になると考えられる。石材はわかるもので緑色片岩と安山岩系の円礫を用いている。

**砥石** 直線的な使用痕を持つ川原石で、石皿とは区別した。砂岩製で晩期前半から中葉にかけて3 点出土しているが、板石状になるまで使用されたものがある。

**磨り石・叩き石** 人為的と判断できる敲打痕や摩擦痕が認められる川原石である。両者を厳密に分別できないので一括して扱ったが、磨り面の確認できるものは少ないのに対して、敲打痕は明瞭に確認できる。晩期以降に7点が出土しているが、多様な石材を用い、河原で主に棒状の円礫を選択的に採取し、小口だけでなく側面全体を使用している。また、凹状の使用痕と同時に線状の使用痕を残すものもあり、点数は少ないが石鍬の製作時に使用された可能性も考慮する必要があろう。

石皿 晩期後半に1点のみが出土しているが、石材は不明である。

**石錐** サヌカイト製に限定され、晩期中葉から後半に10点が出土している。つまみ部は扁平で主要 剥離面を大きく残し、周辺のみに細部調整を加えている。錐部はわかるもので断面方形か多角形をなす。形態上では晩期中葉のものがつまみ部を大きく作り錐部が短いのに対して、晩期後半のものは小さなつまみ部に2cm前後の細長い錐部を作り出す。この差が時期差を示すかどうかは点数が少なく明確でない。

楔形石器 両極打撃によって作られたサヌカイト製の石器である。ここでは一辺に階段状剥離を持ち、その対辺に明確な細かい潰れ痕跡の認められるものを扱った。したがって、使用時の砕片などがRFなどに含まれている可能性はある。

本石器は、晩期前半以降22点が出土している。全形を知れる資料がないが、線打面のものを主体として、面打面のものもみられる。

その他の石器 晩期前半には、器種不明の礫石器1点、晩期後半に石剣片4点、管玉1点がある。

剥片・砕片など サヌカイト製のものが主体で、後期後半から晩期後半まで多数みられるが、ほとんどが砕片である。その他の砕片としては、隠岐産と考えられる黒曜石の砕片が晩期前半に1点(2.86g)と時期不明のもの2点がある。また、そのほかは緑色片岩や黒色片岩など石鍬の石材のものが晩期中葉を中心にして散見される。

# 3 器種組成からみた久田原遺跡

### (1) 出土地区の状況

器種組成について検討する前に、石器の遺跡の中における出土状況をみてみると、北端と南西部の大きく2つの地区に分かれる。北端の地区では、縄文時代の明確な遺構は確認されておらず、久田原遺跡の北に隣接した夏栗遺跡との関連性が強いと判断される。それに対して南西地区は、微高地1の竪穴住居4のある区域を中心に微高地2の集落域までの広い範囲で出土する。石器各器種の出土状況は、やはり竪穴住居のある南西地区では、サヌカイトの剥片類が集中的にみられる傾向にあり、その他の石器も偏りなく出土している。それに対して、北端地区では遺構がないものの、サヌカイトの剥片類40点や残核の可能性のある剥片1点とRF・UF35点、楔形石器1点、石皿1点、叩き石1点など、石器製作が行われていた可能性の高い状況が窺われる。

### (2) 器種組成の状況

先に述べたように、久田原遺跡の中でも北端地区は本来は夏栗遺跡との関連が強いと判断されるが、 ここでは、南西地区と同様に久田原遺跡の中に含めて考えていきたい。

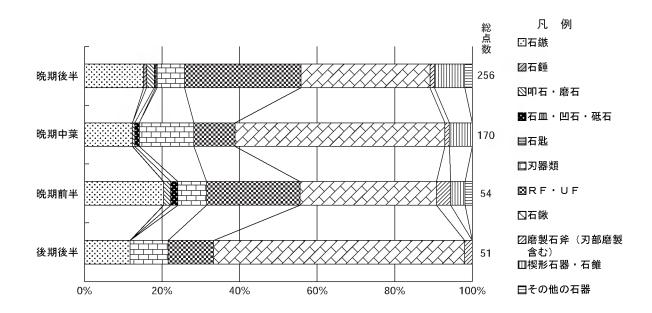
表5と第987図に石器組成の変遷を示した。出土総点数は、遺構の増加に比例して増加するが、各時期に共通して石鍬の占有率が64%→35%→54%→33%と非常に高い以外は比較的安定している。

生産用具についてみてみると、石鏃は $12\% \rightarrow 20\% \rightarrow 12\% \rightarrow 15\%$ と安定しているが、石錘が全体でも 2点と少なく、現状では漁労活動を行っていたとは言い難い。しかしながら、未加工の円礫を用いた 可能性もあり、検討の余地はあるだろう。伐採具である磨製石斧と刃部磨製石斧は時期不明品を含めて 5点のみである。県下では伐採斧の出土数が、沖積地・山間部の立地に関係なく一遺跡で 0点か数 点と少ない状況で、本遺跡も同様な状況である。また、刃器類・RF・UFといった加工具が、 $22\% \rightarrow 31\% \rightarrow 26\% \rightarrow 37\%$ と高率で増加していくものの、石皿・叩き石・磨り石など植物質加工具と評価される石器が非常に低率である。

それにも関わらず、本遺跡の石鍬の出土量をどのように考えたら良いのだろうか。石鍬は304点出土した内、厳密に計量していないが70%以上が破損品である。刃部に摩滅や欠損といった使用痕が残

時	期	石鏃	石錘	叩石 磨石	石皿	石匙	刃器類	R F U F	石鍬	ガ部磨 製石斧	磨製 石斧	低石	石錐	楔	その他 の石器	San.剥 片類	San.以外の 剥片類	総計
後	期後半	6					5	6	33		1					17	2	70
晚	期前半	11		1			4	13	19	2		1		2	1	82	24	160
晚	期中葉	21		1			24	18	92	2		2	4	6		167	34(内1ob)	371
晚	期後半	39	2	5	1	1	18	77	85	1	2		6	14	5	434	20	710
晩	期	3					2		1									6
小	計	80	2	7	1	1	53	114	230	5	3	3	10	22	6	700	80	1317
後期	一晚期	9		3	1		5	40	74	2	2		2	3		77	10(内2ob)	228
総	1111	89	2	10	2	1	58	154	304	7	5	3	12	25	6	777	90	1545

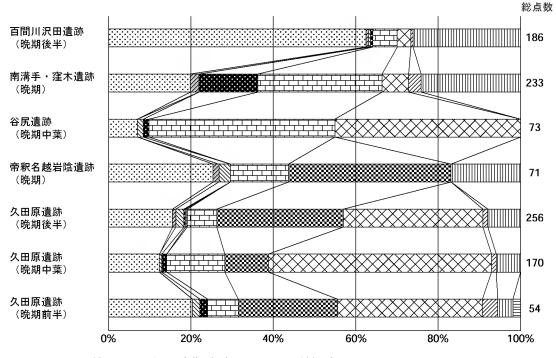
表 5 久田原遺跡出土石器の器種組成



第987図 久田原遺跡時期別石器の器種組成

るものがあることから、使用されたことは明らかである。そうであるならば片岩系の石材が破損しや すいために、破損後の廃棄によって高率を占めていると考えられる。しかし、石鍬の全部もしくは一 部が土掘り具としての機能を有していたとしたならば、植物加工具の出土量が低率すぎる感がある。

そこで、他遺跡の石器組成と比較したグラフが第988図である。ただし、後期については出土点数が少ないことから晩期についてのみ検討する。扱う遺跡は、山間部で広島県帝釈名越岩陰遺跡(晩期)、岡山県谷尻遺跡(晩期中葉)、岡山県南部の沖積地の百間川沢田遺跡(晩期後半)、南溝手・窪木遺跡(晩期)である。



第988図 縄文晩期遺跡別石器の器種組成(凡例は第987図と同じ)

山間部の遺跡では、帝釈名越岩陰遺跡では石鏃や刃器類・RF・UFが高率で、狩猟活動中心の状況が窺える。谷尻遺跡では、石鍬44%と高率で叩き石・磨り石や石皿・凹石が計 4%を占める。沖積地の遺跡では、南溝手・窪木遺跡は石鍬6%に対して、叩き石・磨り石や石皿・凹石が砥石類も含まれているが14%を占める。百間川沢田遺跡では、石鍬3%に対して叩き石・磨り石や石皿・凹石が計 1%を占める。これらの状況から、石鍬の出土量と植物質加工具の出土量は、正比例の関係にはなく、竪穴住居や袋状土壙などの遺構数に比例しているといえる。久田原遺跡も竪穴住居 4棟、袋状土壙12基が晩期の遺構であることから、植物質加工具が他遺跡に比べて低率とは言い難いだろう。

# 4 まとめ

最後に石器組成からみた久田原遺跡についてまとめる。

久田原遺跡は、漁労活動については明確にしえないが、石鏃の出土量が安定した状況から狩猟活動を行っていたといえる。また、石鍬の出土量が後期後半以来特異なまでに多いが、片岩系という加工しやすく破損しやすいという性質上、短いサイクルで遺跡内において製作・消費が行われていたためと考えられる。土掘り具として機能を重視するなら、横刃形石器や刃器類の多様さからも農耕が行われていた可能性は十分考えられる。

したがって、久田原遺跡では、狩猟・採集といった生業活動に加えて、農耕を行いながら後期中葉 以来継続的に集落が営まれたといえる。 (杉山)

#### 註

- (1) 小林公明「新石器的石器の製作技術」『季刊 考古学』第35号 1991
- (2) 石黒立人「朝日遺跡IV」「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第33集 1993 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

原田 幹「粗製剥片石器研究ノート(I)」『年報平成8年度』1997 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

- (3) 平井 勝「瀬戸内地域における縄文時代研究の課題」『考古学研究』第125号 1985
- (4) 岡山県教育委員会「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12 1976
- (5) 岡山県教育委員会「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91 1994
- (6) 勝田町教育委員会「石ヶ坪遺跡」『勝田町埋蔵文化財発掘調査報告』 1 2000
- (7) 岡山県教育委員会「南溝手遺跡 1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 1995 岡山県教育委員会「南溝手遺跡 2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 1996
- (8) 石鍬の分類基準は、小嶋善邦と協議の上作成した。
- (9) 杉山一雄「農耕具以外の生業に関わる石器」『第13回 中四国縄文研究会』資料 2002
- (10) 吉留秀敏「石器の交流」『第9回 中四国縄文研究会』資料 1998
- (11) 池谷勝典「石鍬?打製石斧?の使用痕」『第7回石器使用痕研究会』発表要旨集 2002
- (12) 石器組成表には、未掲載のものを含めて作成している。また、組成グラフの刃器類には横刃形石器も含めている。ただし、組成グラフには剥片・砕片・残核は除外している。
- (13) 敦賀啓一郎「石器組成分析による縄文時代生産活動の復元」『広島大学大学院文学研究課帝釈峡遺跡群発掘調査年報』XVI 2002 広島大学大学院文学研究課帝釈峡遺跡群発掘調査室
- (14) 岡山県教育委員会「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 1976
- (15) 岡山県教育委員会「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 1985
- (16) 久保恵里子「第2節 南溝手遺跡・窪木遺跡出土の石器・石製品」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」 124 1998 岡山県教育委員会

# 第3節 弥生土器と弥生集落

# 1 弥生土器について

# (1)遺物の概要

久田原遺跡で出土した弥生土器は前期~終末期までと各時期のものがそろっている。その中でも、量的に多く、その多くが竪穴住居や土壙などの遺構出土であるものが中期前葉~中葉の土器である。この時期の資料は岡山県北部では出土事例に乏しく、視野を岡山県内に広げても一括の資料に恵まれていないのが現状である。この現状を踏まえ、土器様相の概要説明および編年的位置づけを行い、当該時期の土器様相を理解するための一助としたい。

資料の制約上、編年的位置づけを行うのは中期中葉までの時期に限り、中期後葉以降は久田堀ノ内 遺跡や夏栗遺跡に良好な資料が存在するため、後に刊行されるそちらの報告書を参照されたい。

# (2) 土器の編年的位置づけ (第989図)

前述したように中期前葉~中葉の土器は多数の遺構から出土し、建て替えが確認できる数軒の住居を除いて、比較的まとまりのある内容をもつものが多く、絶好の基準資料をなすものである。また一部の遺構には重複関係が認められ、土器の編年的な位置づけに重要な手がかりを与えている。

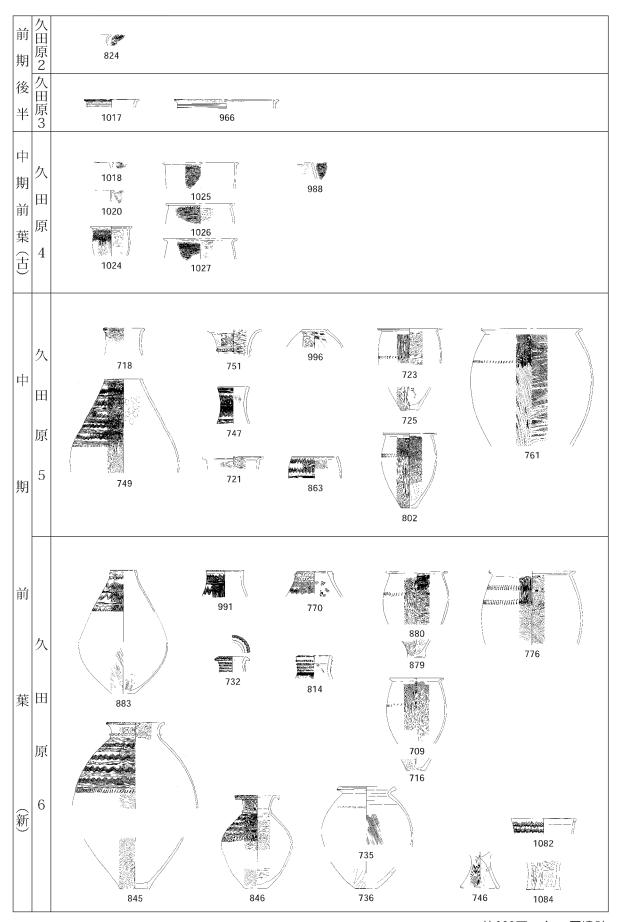
ここでは、遺構の重複関係に加え、変化の速い形式である甕の型式変化を基準として、前期~中期中葉までの上器を9時期に細別する。詳細は次に述べる通りである。

弥生前期に対応する時期を久田原1~3期(以下、久田原を省略する)と細別するが、資料は少なく、詳細は不明な点も多い。特に前期前半に相当する1期は現状では資料が未確認であるが、県南部での出土例(岡山市津島遺跡や総社市窪木遺跡など)を参考として設定しておく。これは当該遺跡において、縄文晩期の遺物が豊富に出土することや少量ながらも前期後半の出土していることから、その存在が想定できるからである。

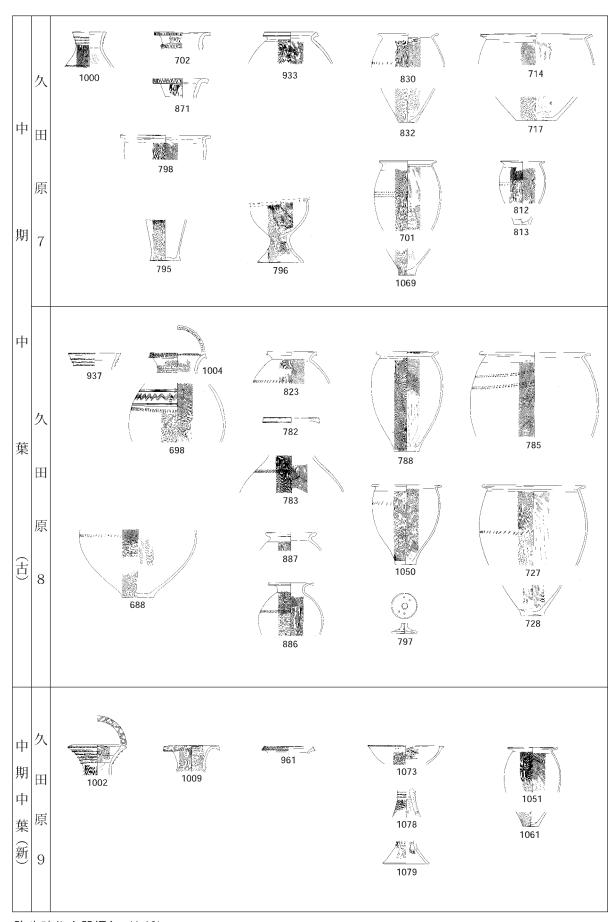
 $1 \sim 3$  期の甕は口縁部が如意状または逆「L」字形を呈し、口唇部には刻み目を施すものが多い。また頸部外面には指頭圧痕が並び、口縁部内面はナデによって仕上げられることが多い。これらの諸特徴は次の弥生中期前葉の古段階、4期にまで引き継がれるものである。そのなかで、編年の基準とされてきたものとしては、ヘラ描沈線文・櫛描沈線文がある。ここでもそれを基準として、ヘラ描沈線文がないものを1期、数条のものを2期、多条のものを3期、櫛描沈線文の出現をもって4期として便宜的に用いることとする。5期以降の甕は、櫛描沈線文の消失にとどまらず、作り方にも体系的な差異が生じている可能性があるため、次項で詳細な検討を行いたい。

4期になると資料は増加傾向にあるものの、遺構資料は少ない。無頸壺988も存在する。

弥生中期前葉新段階~中期中葉古段階に相当する5~8期は久田原遺跡においてもっとも資料が多い段階である。9期も加え、甕の型式変化に注目しつつ、そのほかの形式についても説明を加えたい。 甕では5期に口縁部に強いヨコナデを施し、くの字状をなすものが出現し(723・802)、三角形突帯口縁は消滅する。その一方で口縁部内面にミガキを施すものも定量存在するが、量比を減らしてゆき、8期にはほぼ消滅する。5期の甕は頸部のくびれが顕著でなく、底部も厚手のものが多く、胴部内面はミガキ調整を施すものが主体である。6期になると頸部のくびれが強まる(880・709)ととも



第989図 久田原遺跡



弥生時代土器編年(1/12)

に底部も薄手化をするようになり (716)、底部付近がくびれるものも出現する (879)。さらに胴部上半の内面のミガキ調整を省略するものも出現する。7期には頸部のくびれがさらに強まるようになる (830・701)。8期には胴部上半の張りが強くなり始め、胴部内面をハケまたはナデ調整するものが主体を占めるようになり、下半にケズリを残すものが明瞭になり始める (788)。9期には口縁部のヨコナデがさらに強まり、口唇部に明瞭な面をもち、内湾指向が看取されるようになる (1051)。

壺では988に後続する加飾性の高い長胴の無頸壺749が5期に存在し、口縁端部に面取りを行うようになる。6期には頸部を意識するようになるが(883・991)、7期には消滅する。無頸壺996および加飾性の高い長頸壺747は6期において消滅する。5期に存在する胴部と頸部の境に指押圧貼付突帯文を施す長頸の広口壺751は6期になり頸部が短くなるものの、7~9期、またそれ以降も受け継がれていく形式である(846・702・871・1004・1009)。6期に出現する口縁部から頸部にかけて押圧貼付突帯文を施す広口壺は6期には口がすぼまる(770)か直行気味(814)だったものが、口縁部が徐々に広がっていき9期まで存在する(1000・937・1002)。この形式の型式変化は県南部のものと比して、遅いようである。口縁部が肥厚し、加飾性の低い広口壺735は6期に出現し、9期まで継続して存在する形式である(933・823・961)。9期には口縁部に列点文を施すものが増加する(961)。肩部のはりが弱くなる、口縁部のヨコナデが強くなるなどの変化があるものの、形態変化は少ない形式である。高杯は各時期を通して、それほど出土量は多くない(この点では鉢も同様)。当遺跡では確実に5期に出現(962)」とお野口縁

期に出現(863)し、9期には量比を増す傾向にある。深い椀形を呈するもの(863)と水平口縁(746・796)を有するものの2種類が存在する。またジョッキ形が6・7期に、蓋が8期に存在する。以上おおまかにではあるが、土器の編年的位置づけについて説明を加えてきた。最後にこの作業を基礎として、土器組成の変化についての若干の見通しを述べておきたい。

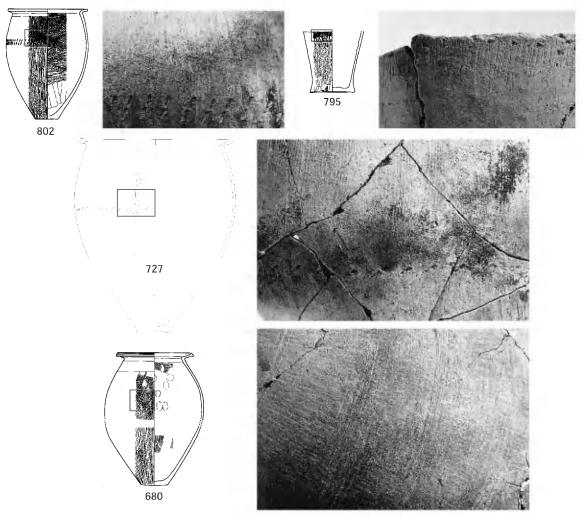
2~4期は資料が少ないため不詳である。比較するための資料(4期)が少ないものの、5期では 壺が量・形式ともに増加しているものと考えられる。また高杯が確実に定量を占めるようになってい る。6期には広口壺やジョッキ形がこれに加わる。その一方で前期以来の形式である無頸壺が消滅し、 7期にはこれも前期以降継続してきた形式である加飾性の高い長胴無頸壺が消滅する。しかし、その ほかの形式では6期と7期との違いを抽出することが難しい。8期ではジョッキ形の消滅、壺の形式 の増加はあるものの、7期と大きく変化をするものではない。9期は資料が少ないものの、近在の遺 跡である奥津町杉遺跡土器溜りなどの資料も援用して考えれば、壺の形式の増加と高杯の大幅な増加 が認められる。現状では土器組成に大きな変化の見られる4期と5期との間、前期的な要素の払拭さ れる6期と7期との間、高杯の大幅な増加が認められる8期と9期の間に画期を求めておきたい。

#### (3)タタキ技法

### 遺物の概要

久田原遺跡では土器が洪水砂の下から検出されたこともあり、器面の残りが非常に良好である。このため、製作技法の観察に適した資料が多く存在している。土器製作技法の正確な把握が土器の理解を深めていく上で重要であることは、従来指摘されてきた通りである。ここでは製作技法のなかでも注目されることが少なかったタタキ技法に注目し、若干の検討を加えておきたい。

当遺跡出土土器において、タタキが観察されるものは680・727・795・802・892・894・910・914・933・960・1060であり、その可能性が高いものとしては760・788がある。このうち、粗いタタキの施される獲894と960は搬入土器(後期以降)の可能性の高いものであるため、ここでは除外したい。



第990図 久田原遺跡におけるタタキの実例

タタキが観察される土器の時期は中期前葉新段階(6(5)期)~後期前葉であり、形式は甕を中心としてジョッキ形と壺の事例も存在する。

タタキの特徴としては第990図に図示した通りであり、外面肩部付近は口縁部と平行にタタキが施され、それより以下では右下がりに施されるものが多い傾向にある。また、タタキの後に胴上部にタテハケ、胴下部にタテミガキ(タテハケ後)が施されることが普通であり、最終調整になることはない。タタキの観察される土器の内面には指頭圧痕が認められるものが多く、タタキと有機的な関連性をもつ可能性が高い。また、器面がきれいな曲面でなく、ボコボコとした状態を呈すものも存在する。

## 当遺跡におけるタタキ技法の位置づけ

さて、以上で概観してきた当遺跡のタタキ技法であるが、周辺地域との比較を行い、さらに既往の 研究と照らし合わせることで、その占める位置を明らかにしておきたい。

岡山県内では古い例として中期中葉に属する岡山市百間川兼基・今谷遺跡、同加茂政所遺跡例があり、近いところでは鏡野町九番丁場遺跡例が近年明らかにされている。続く中期後葉には確認例が増加し(岡山市津寺遺跡、同高塚遺跡、同鹿田遺跡、倉敷市上東遺跡、総社市南溝手遺跡、同窪木遺跡、津山市大田茶屋・大正開遺跡、奥津町杉遺跡など)、以後、古墳前期に至るまで連綿と確認例が存在する。タタキが確認できる形式は甕を中心として、壺と鉢および高杯がある。これらの事例のタタキ









第991図 弥生土器タタキ成形の手順(深澤1998より引用)

の特徴(位置・方向・順序等)は高杯を除き、基本的に当遺跡の事例と同様である。

視点を北に向ければ、鳥取県にもタタキの例が確認されている。鳥取県青谷町青谷上寺地遺跡では中期中葉~中期後葉の甕の事例が、鳥取市岩吉遺跡では中期後葉の甕の事例がそれぞれ確認されている。青谷上寺地遺跡には数点タテハケ後にもう一度タタキ調整を行うもの(深澤芳樹氏の二次タタキ、小林正史氏の整形タタキ)が存在するが、外面の調整等の特徴からも近畿北部からの搬入品である可能性が高いと考えている。タタキの特徴はおおむね当遺跡と同様であると考えて差し支えない。

さらに視点を広げれば、深澤氏の研究に詳しいように同様の技法(同氏の一次タタキに相当)は西日本の広い範囲において共有されていたようである。深澤氏はこの技法が前期段階にまず北部九州において出現し、中期中葉までには中四国・近畿地方に、中期後葉には北陸・東海にまで広がったものと想定し、これらの地域ではタタキ技法を土器作りの工程に完全に組み込んでいると評価している。また底部側面のタタキの観察から基本的に土器のほぼ全面に及んでいたと推定している(第991図)。

当遺跡のタタキもこの流れで理解することが可能である。当遺跡では中期前葉というこれまで発見されてきた中では古い例(802(可能性のあるものとして760))も含んでおり、その重要性が特に注目される。つまり、遅くとも中期前葉新段階には当地域においてタタキを土器作りの一連の工程に組み込むようになったと評価でき、中期中葉以降それが維持されたと考えることができるからである。

前述したように、当遺跡においては中期前葉古段階と新段階では甕の作りに大きな違いが看取できる。それは胴部上半の櫛描の消失にとどまるものではなく、口縁部における強いヨコナデの出現(口縁部外面にみられる指押さえ痕の消失)とそれに伴う口縁部形態のくの字への統合化や器壁の相対的な薄化等である。これらはこのタタキ技法の導入と有機的な関係にある可能性があると考える。

そのように仮定すると、その情報はどこから受容されたのであろうか。当遺跡において土器と共伴する遺物(鉄製品・一部の石製品・玉関連遺物)(次節参照)からは日本海沿岸地域との強い関係が想定できるため、こちらの地域がまずは有力である。しかし、土器型式からみれば、日本海沿岸地域よりもむしろ岡山県南部地域つまり瀬戸内海沿岸地域との共通性が強いと考えられる。そのため、現状では多様な可能性を考えておく必要がある。

ここではタタキの観察からはじめ、最終的にはその位置づけまでを考えてみた。当遺跡においては、遅くとも中期前葉新段階以降タタキを一連の工程に組み込み、それを連綿と継承していることが明らかとなった。また、そのあり方がタタキが目立つ中期後葉・後期前葉以降も古墳時代前期までは少なくとも継続していることを岡山県内の事例を通して指摘した。同様のことは土器の断面の詳細な観察を行った高橋護氏から指摘されていることでもある。土器の器表面の明瞭なタタキ痕の有無を問わず、中期前葉新段階以降の大半の土器にこのタタキの存在を想定して大過はないと考える。ここでの検討がタタキ技法、ひいては土器製作技法理解の一助になればと考える。

# 2 集落について

### (1) 集落の変遷 (第992・993図)

弥生時代の遺構の変遷については、第3章第3節の冒頭で述べた通りであるので、省略をしたい。 ここでは前節において検討してきた土器の編年的位置づけを受け、中期前葉新段階(5期)~中期中 葉古段階(8期)に焦点をしぼって、集落の変遷についてまとめておきたい。

まとめを進めて行く前に、当報告書において竪穴住居としたものについて1つだけ断っておきたい。 この中には円形のものと小型で柱穴をもたない長方形のものの二者がある。ここでは前者を竪穴住居、 後者を竪穴住居状遺構として呼び分けることとする。それはこの両者において、後述するように構造 や機能が違うと判断するからである。まずは各時期毎の様相を詳述したい。

5期には竪穴住居3軒(15・16・18)と竪穴住居状遺構2軒(10・20)が存在し、遺物はないものの土壙との切り合いから、2棟の掘立柱建物(1・2)が同時併存した可能性が高いと考えられる。この段階の竪穴住居はすべて二本柱であり、規模も近似したものであることが注意される。

6期には竪穴住居3軒(9・15・18)と竪穴状住居状遺構2軒(11・22)が存在する。遺物はなく、根拠に乏しいが建物同士の構造の比較や集落の構成から判断して、2棟の掘立柱建物(3・4)がこれらに伴う可能性が高いと判断する。竪穴住居は3棟のうち1棟が二本柱であり、場所が移動している。残る2棟が同じ場所での建て替えが行われ、多柱のものに変化し、規模も大きくなっている。そのため、住居の規模に相対的な違いが生じているが、出土遺物の質は住居の大小で顕著な違いはない。

7期には竪穴住居3軒(9・15・21)と竪穴住居状遺構1軒(8)が存在する。竪穴住居3軒ともに同じ場所または付近に建て替えを行っており、各住居の規模も相対的なものとしては変化が見られないことから、集落の構成に大きな変化を見いだすことができない。そこから6期同様、2棟の掘立柱建物(3・4)がこれらに伴う可能性が高いものと判断する。

8期には竪穴住居3軒(7・12・19)と竪穴住居状遺構2軒(6・17)が存在する。これに伴う掘立柱建物は未検出ではあるものの、遺構の状況と住居等の配置から判断し、削平を受けた場所に存在した可能性が高いものと考えている。竪穴住居は19を除いて、正確な規模や内容を窺い知ることはできないが、これまで同じ場所で継続して建て替えが行われてきた竪穴住居15が廃絶し、場所を移している(竪穴住居12へ移動か)ことに注目しておきたい。

以上をまとめると、各時期には竪穴住居3軒と竪穴住居状遺構2軒が存在(7期は1軒であるが、 うち1棟が削平を受けていると考えている)し、2棟の掘立柱建物がこれに伴うようである。

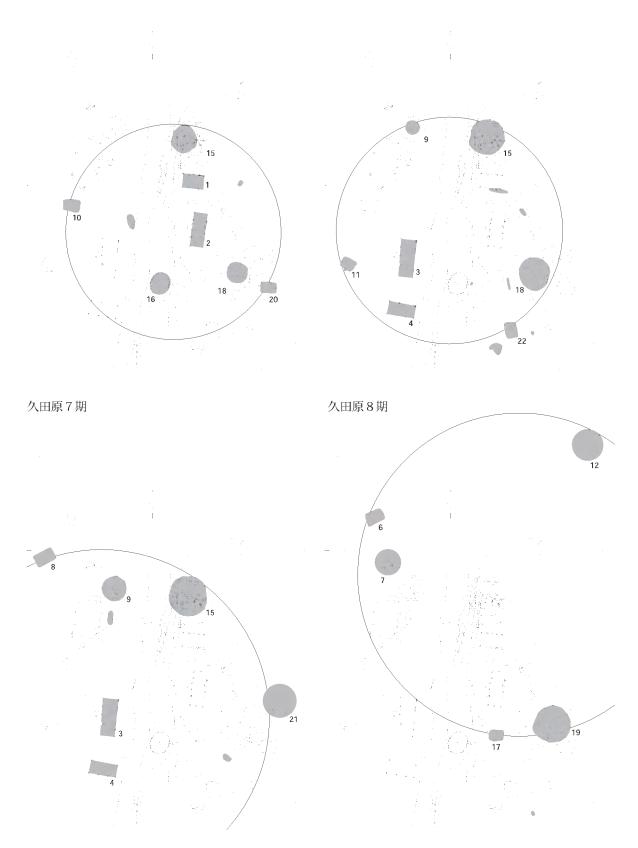
竪穴住居と竪穴住居状遺構は、検討する余地があるものの、おおむね円形を意識して配置しているように考えられ、その中央の広場的な場所に2棟の掘立柱建物を配置している。

この2棟の掘立柱建物は1対をなすようであり、 $1 \cdot 2 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4$ 、そして当地点から南へ下った箇所にも時期不明の $5 \cdot 6$ があり、それぞれに大小とほぼ直行した配置であるといった共通点がある。

この1対間については、その規模の相違に加え、掘立柱建物2の長軸中心軸上の一方に偏った場所に存在する火処12が、津山市沼E遺跡等における類例の存在から、これに共伴すると考えることで、建物構造の違いも想定できるため、機能がそれぞれに違うものと判断できる。つまり、大型のものは火処の存在から床がない施設であり、小型のものはその構造等から高床式の建物と判断し、倉庫であった可能性が高いものと考えておきたい。

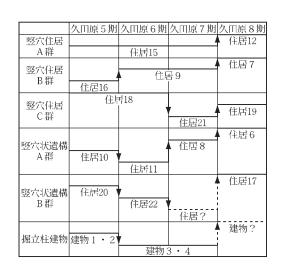
久田原5期

久田原6期



第992図 集落の変遷(久田原5~8期)

竪穴住居は5期にはすべての規模がほぼ等しく、 二本柱であったものが、6期には同じ場所において 建て替えが行われたものが多柱のものに変化し、規 模も大きくなっている。このため、住居の規模に相 対的な違いが生じ始めている。7期にはこのあり方 がそのまま継続され、8期には詳細を窺い知ること ができないものの、同じ場所で継続して建て替えが 行われてきた竪穴住居15が廃絶し、場所を移してい る。これを契機として、住居群の配置が大きく北東 方向へ移動した可能性があり、これに伴い最大の住 居がA群の竪穴住居15からC群の竪穴住居19へと移 動している可能性もある。また、上述したように住



第993図 主要遺構変遷図

居規模の大小を問わず、遺物の構成(鉄や玉も含めて)に大きな偏りはないが、竪穴住居と竪穴住居 状遺構とでは大きな違いがあり、後者には基本的に鉄や玉、剥片などの石器の未製品の類などは出土 していないため、その規模のみならず遺物からも両者にその機能の違いを想定できる。

### (2) まとめ

以上、土器の編年的位置づけを基礎として、集落の変遷について概観してきた。ここでは周辺地域との比較から、久田原遺跡における弥生集落の位置づけを行いたい。

岡山県北部の中期中葉〜後葉の事例を分析した中山俊紀氏は、竪穴住居数軒・竪穴住居状遺構・掘立柱建物が構成要素をなし、一単位となっていたと指摘している。岡山県南部の中期前葉〜後葉の事例を分析した平井勝氏も竪穴住居1〜3軒程度が一単位をなすとの指摘を行っている。これらの成果は、当遺跡で抽出された成果と矛盾するものではなく、このあり方が少なくとも岡山県域では普遍的なものであった可能性が高い。

当遺跡においては1時期3軒の竪穴住居を抽出したが、そのうち1軒のみが大型であるような6期以降のあり方については、津山市沼遺跡(中期後葉)に類例が存在する。また大型ではないが、岡山市矢部堀越遺跡(中期後葉)では周囲に溝を巡らす住居が17軒中2軒存在する例が発見されている。ともにリーダー的な存在の居住した住居と指摘されている。検討の余地はあるものの、当遺跡の事例も同様に解釈しておきたい。このように考えると、遺物の構成等には大きな偏りはないため、中期前葉~中葉の段階ではリーダーとほかの構成員の間が均質であったと判断できる。8期に中心的な住居が違う群(A群→C群)へ移動している可能性があることも、その考えの裏付けとなる。

一時期の同時併存を竪穴住居3軒・竪穴住居状遺構2軒・掘立柱建物2棟と考え、掘立柱建物のうち1棟を倉庫と判断し、もう一方を火処の存在から床のない施設として推測してきた。竪穴住居状遺構は約5~7㎡程度の小型であり、住居とは考えにくく、竪穴住居とは遺物の構成にも違いがあるため、別の性格を想定する必要がある。竪穴住居状遺構について、考古学・文献・民家史から検討を進めた中山氏はこれを炊事施設として評価している。当遺跡では約半数の床面に明瞭な比熱痕があり、後に投棄された状態であるとはいえ、甕の構成比率が高いことから判断してもその可能性はあると考えておきたい。ただし、火処は住居外からも多く検出されている。大型掘立柱建物の性格の追求も含め、残された課題はあるものの、当遺跡で得られた情報は弥生集落を考える上で貴重である。(河合)

#### 註

- (1) 土器の編年的位置づけには以下のものを参考とし、前期・中期という大別はこれらに従った。従来の土器編年は岡山県南部の資料を主体として組まれていたものであったが、県北部に位置する久田原遺跡においてもおおむね同様の流れで理解することが可能であった。ただし、例外も存在する。これは地域差として理解できると考えているが、今回はその指摘にとどめておくこととする。
  - 江見正己 1980「時期区分について」『百間川原尾島遺跡1』岡山県埋文発掘調査報告39 岡山県教委平井典子 1996「備前・備中地域」「YAY!』弥生土器を語る会
- (2) 甕の型式変化は漸移的であり、土器単体では時期の判定は困難であるが、傾向を捉えることは可能である。
- (3) 佐原 真 1959「弥生土器製作技術に関する二、三の考察」『私たちの考古学』5-3 考古学研究会 高橋 護 1988「弥生土器の製作に関する基礎的考察」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集
- (4) 弥生土器のタタキ技法について、体系的に扱った研究としては以下のものがある。 都出比呂志 1986「タタキ技法」『弥生文化の研究』 3 弥生土器 I 雄山閣 深澤芳樹 1998「東海洋上の初期タタキ技法」『一色青海遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 小林正史 2001「弥生土器のタタキ技法」『つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究会
- (5) 高橋護氏の詳細な断面観察によれば、タタキとは性格の違うものであることが指摘されており、器面調整時に押し当ててできた工具痕であると解釈する(註3高橋論文)。これについては定見をもちえなていないが、当遺跡の資料が胎上も含めて在地産ではないと考えるため、除外して考えることとした。
- (6) 奥津町杉遺跡の土器については、同町教育委員会の日下隆春氏に実見させていただいた。その際、中期後葉の甕に明瞭なタタキを発見した。(岡山県奥津町教育委員会 2000『杉遺跡』第26図32)
- (7) 管見にふれた資料には次のものがある。後期前葉:高塚・津寺・加茂政所・立田・津島岡大・南溝手・窪木遺跡。後期中葉:津寺・加茂政所・立田・鹿田・百間川原尾島遺跡。後期後葉:立田・百間川原尾島遺跡。終末期:加茂政所・百間川原尾島遺跡。古墳時代前期:津寺・加茂政所・鹿田遺跡。
- (8) 大橋雅也 1995「考察 まとめ 遺物」『津寺遺跡2』で指摘がなされている。第215図329。
- (9) 財団法人鳥取県教育文化財団 2000~2002『青谷上寺地遺跡1~4』
- (10) 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991 『岩吉遺跡Ⅲ』、および註 4 深澤論文
- (11) 註4深澤論文および小林論文
- (12) 資料の実見を行った。実見に際しては、高垣陽子氏をはじめ鳥取県教育文化財団の職員にお世話になった。 註9文献『青谷上寺地遺跡3』第39図28・第40図32。そのほかに註9文献『青谷上寺地遺跡2』第30図2 の細頸壺の胴下半部にらせん状のタタキが確認できたが、これも搬入品の可能性が高いと考えている。
- (13) 註 4 深澤論文
- (14) 深澤芳樹氏は二次タタキを近畿地方(~東海地方西部)において工程を追加することによって出現した地域色として理解している(註4深澤論文)。
- (15) 北部九州の事例から判断すれば、当地域でも大型甕には前期段階からタタキをしていた可能性もある。 福岡県教育委員会 1978『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告XXIV』第180図 5
- (16) 註3高橋論文
- (17) 中山俊紀 2001「長方形竪穴住居状遺構と掘立柱建物の分類と機能」「年報津山弥生の里』8 津山市教委
- (18) 第993図参照。建て替えの重複関係および柱穴の本数等から判断して、A~Cの3群に分類した。
- (19)中山俊紀 1993「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備』15 古代吉備研究会
- (20) 平井 勝 1999「東部瀬戸内地域の弥生集落」『みずほ』30 大和弥生文化の会
- (21) 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- (22) 註20文献
- (23) 中期後葉の事例では、大型住居等にガラス玉・鉄器・青銅器などを含む率が高いという指摘(註21文献)があり、隣接する夏栗遺跡でも同様の事例が確認されている。竪穴住居15には鉄器の集中を読みとることも可能ではあるが、中期後葉の事例ほどの明確な差は看取できないため、このように判断する。
- (24) リーダー的な存在が世襲的であったり、絶対的な権力を持っていた場合、中心的な住居が他群へ移動することはないと考えるためである。
- (25) 註19文献

# 第4節 弥生時代の石器・鉄器・玉生産について

# 1 石器について

### (1) 石器組成

久田原遺跡では、これまで岡山県北部では資料がほとんど無かった弥生時代中期前~中葉の石器がまとまって出土しており、定量的な分析が可能である。第994図は、石器の種類ごとの点数と石器組成を図示したものである。石器組成の特徴として、石鏃が約46%と大きな比率を占め、この時期の生業における狩猟の比重の高さを示している。また、石錐・スクレイパー・楔形石器といった縄文系加工具が約33%と比較的多くあるが、太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧などの弥生系加工具は5.1%と少ない。その一方、石包丁は8.4%と一定の量を保有しており、縄文時代の石器組成をベースに稲作農耕に必要な器種を選択的に取り入れていることが分かる。こうしたあり方は、同時期の津山盆地の遺跡ともほぼ共通し、岡山県北部における当該期の普遍的な石器組成を示していると考えられる。

# (2) 各種石器の様相

### 石包丁

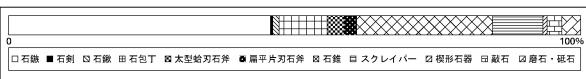
石包丁は計23点出土しており、その内訳は磨製石包丁18点(未成品 4 点含む)、打製石包丁 3 点、大形石包丁 2 点である。磨製石包丁の形態は、欠損や 対部の研ぎ減りで判然としないが、対部・背部とも緩やかに湾曲する楕円形あるいは紡錘形を主体とし、津山盆地の傾向とも合致している。打製石包丁はサヌカイト製で、同時期の県南部のものと比較すると小形でむしろスクレイパーに類似する。大形石包丁(S445・S446)はサヌカイト製で、県北部での出土は初例となる貴重な資料である。背面には敲打によって突出部をつくり出し、刃部には珪酸による光沢や摩耗が認められる。このうち、S445については土壙65の上面から出土しており、県南部でしばしば認められる石製収穫具の埋納事例である可能性が考えられる。

#### 太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧

太型蛤刃石斧は、計8点出土している(未成品1点含む)。欠損品が多いことから、本来の規模・形態ははっきりしないが、断面厚 $2.5\sim4$  cmと扁平で、平面形は基部が丸く刃部から基部に向かってすぼまる形態をとるものが多い。これは縄文石斧の特徴であり、その系譜を引いていることを示している。また、欠損後に敲石に転用されたもの( $\mathbf{S}$ 378・ $\mathbf{S}$ 470)も認められる。

扁平片刃石斧は、計6点出土している(未成品1点含む)。長さ8~10cmの大形品が5点、長さ4.5

種類	狩猟具	・武器	土掘具	収穫具	伐採·	加工具		加工	加工具Ⅱ	合計		
	石鏃	石剣	石鍬	石包丁	太型蛤刃石斧	扁平片刃石斧	石錐	スクレイパー	楔形石器	敲石	磨石·砥石	口前
点数	125	1	3	23	8	6	65	24	2	7	9	273
%	45.8	0.4	1.1	8.4	2.9	2.2	23.8	8.8	0.7	2.6	3.3	100.0



第994図 久田原遺跡出土の弥生時代石器の出土点数および石器組成

cmの小形品が1点ある。主面・側面の敲打・研磨が不十分で断面形が中膨らみになる点、平面形が刃部から基部に向かってややすぼまる点、刃部が緩やかで甘い点など、かなり弛緩した形態であり、太形蛤刃石斧と同じく縄文石斧の影響を強く受けていることを示している。なお、同じ加工斧である柱状片刃石斧が出土していないが、これは柱状片刃石斧の機能を大形扁平片刃石斧が代替していたためと考えられる。また、小形扁平片刃石斧が少ない点は、小形加工斧が担う細部加工を後述する鋳造鉄器再加工品が果たしていたためと考えられる。

#### 石鏃

石鏃については125点を掲載している。このうち完形とほぼ完形のもの68点について形態分類と法量分布図を作成した。形態では、凹基式が44点(64.7%)、平基式が24点(35.3%)とほぼ2:1の比率で、凸基式・有茎式は認められない。規模的には、第995図の通り全長2cm・全幅1.5cm付近に分布の中心があり、平均重量は0.88gである。全長が3cm近いものも数点あるが、大多数は全長2.5cm以下のもので、石鏃の大形化現象は認められない。なお、石材はすべてサヌカイトである。

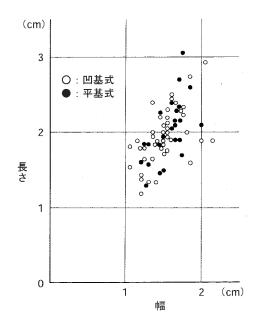
### 磨製石剣あるいは石矛

磨製石剣あるいは石矛と考えられる石器が1点出土している(S221:第197・996図)。剣身の中程で横一線に破折しており、鋒も欠損する。この資料については、幅広の磨製石剣あるいは石矛の剣身部と考えられるが、分類の基準となる基部が無いため判断できない。現状では、平面形が破断面から鋒に向かって直線的にすぼまる二等辺三角形を呈し、剣身断面形は凸レンズ状となっているが、再研磨によって鎬と刈部が研ぎ落とされている可能性もある。この資料で注目されるのは、石材に在地では産出しない縞目のあるホルンフェンスを使用している点で、搬入品の可能性が極めて高い。岡山県内で磨製石剣は10例出土しているが、いずれも縞目のない在地産石材を使用している。また、石矛には基本的に縞目のある石材は用いられない。逆に、縞目のある石材を用いる武器形石器は、縄文晩期末葉~弥生前期末葉の有茎式・有柄式磨製石剣にほぼ限定される。この時期の磨製石剣は、北部九州を中心に日本海沿岸地域と西部瀬戸内地域で若干の出土例がある。このことから、S221については、北部九州あるいは日本海沿岸地域で製作され、当地へと持ち込まれた磨製石剣が、一部再加工された

ものである可能性を提示したい。その場合、かなり長期 にわたり伝世したことになり、武器形石器に対する特別 な意識を感じさせる。また、地域間の交流を具体的に示 す極めて重要な資料といえる。

### (3) 石器素材と石器生産

久田原遺跡出土の弥生石器には、搬入石材と在地産石材が用いられている。搬入石材はサヌカイトで、石鏃・石錐・スクレイパーなど主に打製石器に用いられる。サヌカイトは、大形石包丁の存在から大形板状剥片の形で搬入されたと考えられる。しかし、その流通量自体はサヌカイト製打製石器のほとんどが小形品であることや、スクレイパーに人頭大の河原石の縁辺を剥ぎ取って製作したもの(S300~S303・石核S482)などがあることから、非常に限定されたものであったと想定される。



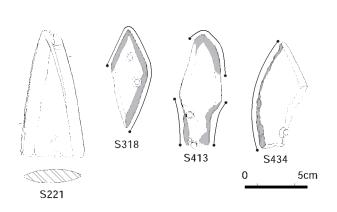
第995図 石鏃の法量分布

その製作は、集落内の一画で集中的に行われたと考えられ、竪穴住居15・19では埋土中から石鏃・石錐の成品とともに大量のチップや未成品、製作途中の失敗品が出土している。こうした状況は、県南部の百間川遺跡群や南溝手遺跡でも確認されており、吉備地域におけるサヌカイト製打製石器の基本的な生産のあり方と考えられる。

在地産石材は、安山岩・結晶片岩・砂岩など吉井川流域で拳~人頭大の河原石として採取できる石材で、磨製石包丁・石斧など主に磨製石器に用いられる。磨製石包丁については、板状の剥片が取りやすい結晶片岩・流紋岩・頁岩・粘板岩を選択的に使用している。未成品は、敲打成形段階のものが2点(S275・S373)、研磨段階のものが2点(S220・S379)出上している。太形蛤刃石斧については、比較的硬質な安山岩を利用しているものが3点あるが、伐採石斧の素材としては不適な結晶片岩(3点)や頁岩(2点)も使われており、良質な石材に恵まれなかった状況と石材選択の意志の弱さがうかがえる。S475は敲打段階の欠損品で、一部に自然面を残して全面に敲打して形態を整えている。扁平片刃石斧についても、板状の素材がとりやすい結晶片岩(1点)や頁岩(2点)だけでなく安山岩(3点)を用いており、形態不均整の一因となっている。S468は敲打成形段階の未成品で、人頭大の円礫の縁辺を剥ぎ取ったものを素材に、周辺を敲打して形態を整えている。これらの未成品から、久田原遺跡では搬入石材・在地産石材を用いて各種石器が生産され、集落内での自己消費にあてられたと想定される。ただし、久田原遺跡の周辺丘陵上に位置する遺跡では未成品が出土していないことから、周辺小集落に供給する程度の余剰生産が行われていた可能性も考えられる。

# (4) 石器の転用行為

久田原遺跡出土の弥生石器で特徴的なものに石器の転用品がある。先にS221についてその可能性を指摘したが、ここでは特に石包丁の転用行為について取り上げたい。久田原遺跡から出土した磨製石包丁のうち、欠損品を再加工して石剣あるいは装飾品への転用を試みたものが3例(S318・S413・S434)あり、第996図で再加工の部位を示している。S318については本来の紐孔を中心に3辺に新たに刃部を研ぎ出し、平面菱形に再加工している。この再加工は4辺が両刃をなす点で石剣を意識させるが、平面菱形に成形することから装飾品への転用を意図した可能性がより高いであろう。S413については図示した範囲を敲打して茎をつくりだし、研磨によって鋒を研ぎ出していることから、有茎式磨製石剣をイメージして再加工されたことが明確である。S434は石包丁の背面を敲打して本来の刃部との角度を鋭角にしようとする意図を看取することができる。加工途中で放棄したのか、中途半端な調整で終わっているが、これも石剣をイメージして再加工を加えた可能性が考えられる。岡



第996図 磨製石剣または石矛、磨製石包丁再加工品(1/3)

山県内では磨製石包丁を石剣に転用した例が2点あり、県南部でも打製石包丁を打製石剣に転用した事例が確認されている。こうした石包丁を石剣に転用する行為には、単なる二次利用を越えた、石剣という武威の象徴への特別な観念を感じさせる。また、機能を変えるという、弥生人の道具に対する意識を考えるうえでも興味深い資料であ

(佐藤)

る。

# 2 鉄器について

久田原遺跡では、計12点の鉄器が出土している。これらは弥生時代中期前~中葉のもので、岡山県下では最古級の鉄器である。日本列島における鉄器の初現は縄文時代晩期末葉で、中国大陸・朝鮮半島製の鉄器が稲作農耕文化の一要素として北部九州にもたらされた。そして弥生文化の成立・発展とともに、北部九州を頂点に列島各地へ段階的に普及していったことがこれまでの研究により明らかにされている。岡山県における鉄器の初現は、先述のとおり弥生時代中期前~中葉で、久田原遺跡のほか5遺跡で確認されている。この段階の鉄器については、その多くが中国大陸北東部あるいは朝鮮半島北西部で製作された鋳造鉄器(鉄斧)の破片を素材に、大陸系磨製石器の製作技術を援用して再加工したものであることが明らかにされている。久田原遺跡から出土した鉄器にも、この鋳造鉄器再加工品が含まれており、当該地における鉄器出現期の様相を考えるうえで極めて貴重な資料である。その重要性に鑑み、ここで改めて詳しく検討を加えることとする。

M 1 は板状鉄片で、長さ4.45cm・幅2.5cmを測る。平面形はいびつで、明確な刃部は認められない。 不整形な形態や厚さ 2 mmと薄手であることから、鍛造鉄器の破片の可能性が考えられる。

M2は袋状鉄斧の破片と棒状の鉄片が錆で溶着したものである。ここで注目されるのは、袋部の端部が折り返しにより帯状に肥厚されている点である。この有帯袋状鉄斧は、北部九州でほぼ独占的に製作されたもので、M2も北部九州からの搬入品と考えられる。有帯袋状鉄斧の出現は弥生後期後半とされているが、この資料の存在からその出現が遡る可能性を提示したい。また、もう一つ注目されるのは、欠損した袋部を板状に叩き潰し、突出した破断部を錐状の工具として利用している可能性が高いことで、当該期における鍛造鉄器の再加工とその利用法が確認できる希有な資料である。

M3・M4は板状鉄片である。M3は縦3.5cm・横3.5cm・厚さ5~7 mm、M4は縦2.3cm・横3.2cm・厚さ5~6 mmを測り、両者とも平面形は整った方形を呈する。この資料で注目されるのは、その厚さと、平坦面に幅約8 mm・高さ1~2 mmの突帯が2条平行して認められる点である。これは、中国大陸北東部あるいは朝鮮半島北西部で製作された、2条突帯をもつ鋳造鉄斧の袋部端部の特徴と一致し、その破片と判断できる。研磨によって平面方形に再加工されたと考えられるが、明確な刃部は認められず、利器としての使用ははっきりしない。

M5は板状鉄片で、縦3.2cm・横2.5cm・厚さ4mmを測る。方形鉄片のコーナー部分と考えられ、平面三角形を呈する。この資料については金属学的調査を実施し、その結果、鋳造鉄器の破片であることが判明した(付載5参照)。明確な刃部は認められず、利器としての使用ははっきりしない。

M6は板状鉄片で、縦4.2cm・横2.1cm・厚さ6mmを測る。平面長方形を呈するが、明確な刃部は認められない。この資料についても、その厚みから鋳造鉄器の再加工品である可能性が高い。

M7は棒状鉄片で、長さ2.6cm・厚さ5mmを測る。その形態から錐状の工具と考えられるが、明確な刃部は認められない。また、鍛造品である可能性が高い。

M8は板状鉄片で、長さ3.9cm・幅1.3cmを測る。平面形はいびつな長方形で、一方の端部に直角に立ち上がる屈曲部が認められる。こうした特徴から鍛造鉄器の破片の可能性が考えられる。

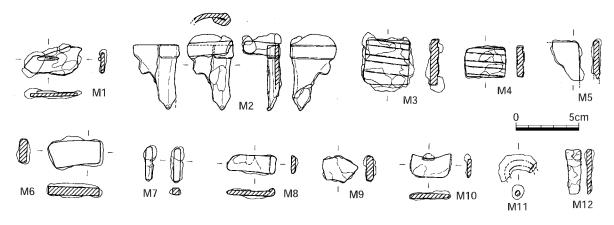
M9は板状鉄片で、縦2.8cm・横2cm・厚さ5mmを測る。平面方形を呈するが、明確な刃部は認められない。この資料についても、その厚みから鋳造鉄器の再加工品である可能性が高い。

M10は板状鉄片で、縦1.9cm・横3.0cm・厚さ2.5mmを測る。平面形は方形を呈し、直線的な一辺にわ

ずかながら刃部の研ぎ出しが観察できる。この資料についても鋳造鉄器の再加工品と考えられるが、 やや薄手であることから鍛造品の可能性もある。

M11は棒状鉄器である。これについては河道埋土からの出土であり、混入の可能性も考えられる。 M12は板状鉄片で、縦3.5cm・横1.0cm、厚さ 4 mmを測る。平面形は長方形を呈し、短辺の一方に刃部を研ぎ出し、鑿状鉄器にしている。その形態や厚みから、鋳造鉄器の再加工品と考えられる。

以上、久田原遺跡出土鉄器について詳述したが、これらの資料から派生する諸問題のうち、鉄器の 加工技術と流通経路について触れておきたい。まず、鉄器の加工技術であるが、既往の研究で指摘さ れているように、弥生中期前~中葉段階には北部九州を除き鍛冶技術はまだ普及しておらず、基本的 に大陸系磨製石器の製作技術によって再加工を試みていることが指摘できる。その技法には、M2の ように打撃によって変形させる方法と、M10のように研磨によって成形する方法の2者があることが 分かる。また、M3やM4・M6のように、形態が整っているにも関わらず明確な刃部が認められな いものがある。これらは、こののち使用に際して刃部を研ぎ出すことも考えられるが、逆に鋳鉄とい う硬い素材を十分使いこなせずそのまま廃棄された可能性も指摘しておきたい。さらに、中期中葉ま での鉄器に鋳造鉄器の再加工品が多いのは事実であるが、M1・M2・M7のように鍛造品の可能性 が高いものもあり、その実態解明は今後の課題といえる。なお、久田原遺跡では鍛冶炉など鉄器生産 に関連する遺構はないが、南に隣接する久田堀ノ内遺跡では中期末葉の竪穴住居から鍛冶で生じたと 考えられる鉄片が出土しており、さらに北接する夏栗遺跡では後期初頭の竪穴住居から多数の鉄片が 出土している。これらの発掘成果から、当該地では中期前~中葉に小形加工具を中心に鉄器が導入さ れ、中期末葉〜後期初頭段階に鉄器生産が開始されたと考えられる。次に、これらの鉄器の流通経路 であるが、鋳造鉄器再加工品を含む初期鉄器は弥生時代前期~中期中葉にかけて北部九州を中心とす る西日本一帯に分布することが明らかにされいる。岡山県内では、先述のように瀬戸内海沿岸部の遺 跡で出土例があり、これらは瀬戸内海を通じた北部九州圏との交易により入手したものと思われる。 その一方、久田原遺跡の位置する岡山県北部一帯では、現在までのところ当該期の鉄器出土例はなく、 瀬戸内海ルートでの鉄器入手は考えにくい。むしろ、久田原遺跡の地理的歴史的環境や、先述の磨製 石剣(石矛)、後述する碧玉製管玉の生産など日本海沿岸地域との強い結び付きを考慮すると、これ らの初期鉄器は近年注目されている日本海を介した北部九州圏と日本海沿岸地域との流通網を通じて 入手した可能性が高いといえよう。 ただし、その流通量や普及の程度は、出土鉄器(鉄片)がいずれ も小形で完形品も無いことから、かなり低いものであったと想定される。 (佐藤)



第997図 久田原遺跡出土の弥生時代鉄器(1/3)

# 3 玉生産について

### (1)遺物の概要

久田原遺跡では中期前葉~中葉に位置づけられる3軒の竪穴住居から合わせて9点(竪穴住居9出土の剥片3点を含まない)の玉生産関連遺物が検出された。これは少量ながらも、原石から完成品にいたる各工程を復元することが可能である良好な資料である。この製作技術としては、次に示すように「施溝分割技法」が用いられていると考えられる。石材はすべて碧玉であり、そのうち2点については自然科学的方法による産地分析を試みており、その結果から「女代南B群」と同定されている。

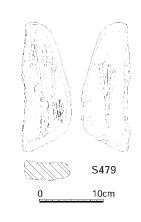
そこで、まず製作工程の復元を行っておきたい。それを基礎として、他遺跡における碧玉製管玉の類例を概観し、玉生産から見た当遺跡の位置について明らかにしておきたいと思う。

# (2)製作工程の復元(第999図)

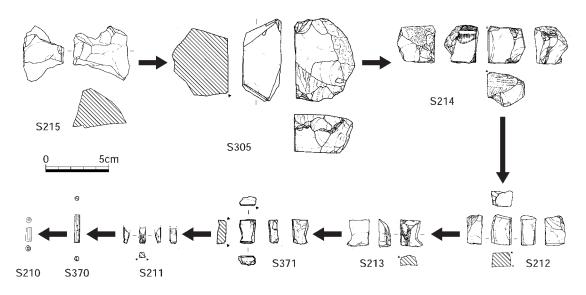
**S215**は原石の残核と考えられ、この資料から久田原遺跡には原石の状態で碧玉がもちこまれたものと推測する。**S305・214・212・213・371**はそれぞれ施溝の痕跡が認められるものである。原石をまず流理を利用して打割し、素材となる石核を作る。次に打割して得られた面(主要剥離面)を作業面として擦り切りによる施溝を行う。この施溝に間接打撃を加えていき、作業面を転移させつつ自然

面を切除し、最大限の直方体を作る(\$305)。そこから管玉の規格に合わせ、施溝→分割を繰り返してゆき、最終的に管玉1個体分の素材が作出されるまで繰り返す(\$214→212→213→371(371は素材211の1個体分、213は同じく3個体分か))。そして管玉1個体分の角柱状素材が得られた段階で、筋砥石(\$479、第998図)を用いて多角柱になるまで長軸に平行した研磨を行う(\$211(失敗品)・\$370)。最後に両面から穿孔を加え、仕上げの研磨を行って完成品(\$210(全長1.1cm・直径0.4 cmがその規格))となる。

当遺跡では施溝具である石鋸(紅簾片岩が一般的)は未発見であり、 その役割を担う器種も特定できなかった。



第998図 筋砥石 (1/6)



第999図 碧玉製管玉製作工程(1/3)

### (3) 玉生産などからみる久田原遺跡の位置づけ

当遺跡では、以上で見てきたように碧玉を素材として、施溝分割技法を用いた管玉の生産を行っていたことが明らかとなった。ここでは他遺跡における碧玉製管玉の類例を概観し、玉生産からみた当遺跡の位置づけを行った上で、最後に遺構やほかの遺物から得られた成果も総合して簡単なまとめを行っておきたい。

日本列島における管玉の生産は弥生時代前期後半には出現しているようである。当遺跡同様の技法を用いたものは、周辺地域に所在する鳥取県青谷上寺地遺跡における前期末~中期前葉(~後期)の事例が現状では最古のグループに属し、この頃に出現したと見られている。ここでは当遺跡同様の石材(碧玉:女代南 B 群)と同様の技術(施溝分割技法)を用いて玉生産を行っており、その時期も当遺跡と一部重複することから、両遺跡間に密接な関係が想定できる。さらに視点を広げると中期中葉~後葉の京都府弥栄町奈具岡遺跡や石川県小松市八日市地方遺跡など多くの類例があり、当遺跡同様のあり方は日本海沿岸地域(一部は畿内北部地方で確認されている)の広い範囲で共有されていたものと考えられる。

以上から当遺跡における玉生産のあり方は、同時期の日本海沿岸地域の広い範囲で共有されていたものと同様であり、当遺跡では素材の選択から製作技法におけるまでの体系的なあり方を総体としてこの地域から受容していたと評価できる。その情報は日本海沿岸地域でも天神川ー吉井川を介して鳥取県中部地域から得ていた可能性が高いと考えられ、先に検討が加えられた鉄器や一部の石器も同様の経路を介してもたらされた可能性が高いと判断している。

玉生産関連遺物からは日本海沿岸地域の情報に精通していた人々の存在が窺い知れるのであり、鉄器や一部の石器から得られた成果も同様の傾向を示している。その一方で土器や集落から得られた成果では、津山盆地や岡山県南部地域との関連性も示している。これらは久田原遺跡を営んだ人々の交流における指向性の多様な側面を示している。今後はこれらを総合的に判断して行くことで、当遺跡を含めた久田地域全体の評価が可能となっていくものと考えている。今後の成果の蓄積を待って、さらなる検討を加えていきたいと思う。 (河合)

#### 註

- (1)報告書掲載品を対象とする。石器の分類・グラフのスタイルは、次の文献に従った。 国立歴史民俗博物館 1996『農耕開始期の石器組成1』
- (2) 弥生時代の石器全般について、次の文献を参考とした。 下條信行 1994 『弥生時代・人陸系磨製石器の編年網の作成と地域間の比較研究』
- (3) 安川豊史 1996「岡山県北部の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成1』国立歴史民俗博物館
- (4) 佐藤寛介 1999「弥生時代の石器について」『大田茶屋遺跡2・大田障子遺跡・大田松山久保遺跡・大田大正開遺跡・大田西奥田遺跡』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129 岡山県教育委員会
- (5) 平井 勝 1998「石製収穫具埋納の意義」『古代吉備』第20集 古代吉備研究会
- (6) 石矛は下條信行によって提唱された武器形石器で、剣身部は磨製石剣と共通するが、茎部に関をもたず一方に抉りをもつことが最大の特徴である。ただし、類例は少なくマイナーな器種である。 下條信行 1982「石矛の提唱」『賀川光夫先生還暦記念論集』賀川光夫先生還暦記念会
- (7) 作東町高本遺跡・津山市一町田遺跡・倉敷市酒津遺跡・総社市すりばち池遺跡・総社市南溝手遺跡・ 岡山市百間川沢田遺跡・岡山市百間川兼基遺跡・岡山市百間川米田遺跡・勝北町山ノ奥遺跡・勝央町 天神遺跡
- (8) 下條信行 1994「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」『「社会科」学研究』第28号

- (9) 岡山県域における弥生時代の石器生産と流通については、次の文献に詳しい。 高田浩司 2001「吉備における弥生時代中期の石器の生産と流通」「古代吉備』第23集 古代吉備研究会
- (10) 平井典子 1982「石器」『百間川兼基・今谷遺跡 I 』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51 岡山県教育委員会
- (11) 久保恵里子 1996「石器・石製品について」『南溝手遺跡 2 』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107 岡山県教育委員会
- (12) 註7のうち、酒津遺跡例・山ノ奥遺跡例が磨製石包丁からの転用品である。
- (13) 高田浩司 2002「中部瀬戸内と畿内の打製石剣」『考古学研究』49-1 考古学研究会
- (14) 武器形石器の中でも、剣のもつ武威の表徴性や属人器的な性格は、次の文献で明快に述べられている。 松木武彦 2001『人はなぜ戦うのか』講談社
- (15) 弥生時代の鉄器全般について、次の文献を参考とした。 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
- (16) 岡山県における弥生時代の鉄器の様相については、次の文献に従った。 佐藤寛介 2002「岡山県域における弥生時代鉄器文化の様相」『環瀬戸内の考古学』古代吉備研究会 佐藤寛介 2003「吉備における弥生時代の鉄器文化」『吉備の鉄』考古学研究会岡山例会第7回シンポ ジウム発表資料 考古学研究会
- (17) 村上恭通 1998「鉄器普及の初段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』
- (18) 岡山県教育委員会 2001·2002 『岡山県埋蔵文化財報告』31·32
- (19) 野島 永 1992「破砕した鋳造鉄斧」『たたら研究』32・33号 たたら研究会
- (20) 村上恭通 2001「日本海沿岸地域における鉄の消費形態」『古代文化』53-4 古代學協会 また、久田原遺跡の東丘陵上に位置する峪畑遺跡では、中細型銅剣 C 類(出雲型銅剣)の鋒を転用し た可能性が高い銅鏃が出土しており、この地域と日本海沿岸地域との強い結び付きを物語っている。
- (21) 河村好光氏の「施溝打割法」、大賀克彦氏の「B技法」にそれぞれ対応するものと考えられる。 河村好光 1986「玉生産の展開と流通」『岩波講座 日本考古学』3 生産と流通 岩波書店 大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』86-4 日本考古学会
- (22) 藁科哲男 1998「窪木遺跡・南溝手遺跡出土の碧玉製管玉、碧玉片の産地分析」『窪木遺跡2』岡山県 埋蔵文化財発掘調査報告124 岡川県教育委員会、および本報告書付載3参照。 近年の成果からは、日本海沿岸地域の玉作遺跡を中心とした分布傾向を示すことが明らかになりつつ ある。
- (23) 註21人賀論文
- (24) 財団法人鳥取県教育文化財団 2002『青谷上寺地遺跡 4』
- (25) 資料の実見を行った。資料の実見に際しては、財団法人鳥取県教育文化財団の高垣陽子氏をはじめと する財団法人鳥取県教育文化財団秋里分室の職員にお世話になった。記して感謝したい。
- (26) (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993『京都府遺跡調査概要』第55冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『京都府遺跡調査概要』第76冊
- (27) 石川県小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡 I』
- (28) 註21大賀論文

### 第5節 古墳時代後期以降の墓制について

### 1 はじめに

久田原古墳群では、12基の古墳と石棺5基、土器棺1基、土壙墓9基が存在した。それらは後世の開墾によってその原形が大きく損なわれてしまっているものの墳丘を伴い、周溝が存在する古墳と墓壙を掘り込み、横穴式石室を構築しただけの古墳がみられた。そのうち、前者はすべて円墳であった。埋葬施設としては、竪穴式石槨、横穴式石室があり、その周辺には箱式石棺(以下小石槨とする)や土器棺、土壙墓が存在する。

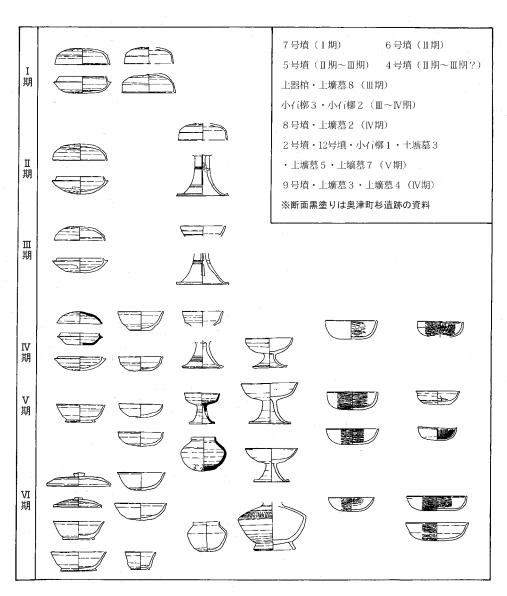
古墳のうちの11号墳は5世紀代の方墳で1基単独で存在するが、それ以外のすべては6世紀中葉以降に継続して一つの墓域を形成している。そこでこの項では、後期の古墳群を中心に取り上げる。

### 2 古墳群・墓の変遷

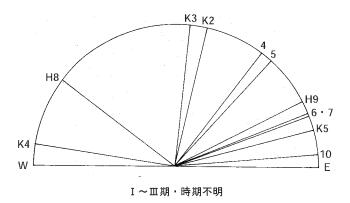
古墳群形成の契機となった7号墳(I期)の内部構造は、竪穴式石槨であった。その次に築造された6号墳(II期)は木棺直葬であったが、群中最大規模の墳丘を持つ5号墳の段階において横穴式石室が導入されている(第1の画期)。5号墳は石室がほぼ全壊しているものの、有蓋高杯蓋1465・高杯1466がII期に含まれて、III~IV期にかけて追葬が行われている。その周囲の土器棺や土壙墓8(III期)は時期的にはわずかに後出すると考えられるが、5号墳との関わりが深いとみられる。小石槨2・3もその位置から同様のことがいえよう。4号墳は、5号墳と同時期かそれより後出する可能性がある。横穴式石室導入の時期やそれ以前の埋葬施設の特徴は、周辺の津山市域の古墳に類似するが、III期以降において美作地方に多くみられる陶棺はここでは存在しない。

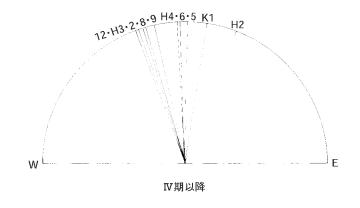
IV期以降の古墳(2・8・9・12号墳)や土壙墓は、明確な墳丘・周溝を持たないことと、第1001 図にみられるように石室主軸が北を強く指向することが特徴的である(第2の画期)。この点は4の項において述べる。IV期は概ね藤原京の段階に相当するが、2号墳では $I \sim III$ 期の古墳に引き続き馬具や鉄鏃を副葬していた。

Ⅲ期までの古墳築造主体は一系列と理解できるが、3~7号墳を中心として、時期が新しくなると立地から北(2号墳・小石槨1・土壙墓1~7)と南(8・9・12号墳、小石槨5・土壙墓9)の二系列に分かれている。さらに、Ⅵ期の古墳から時間的に連続して、その周辺において火葬墓が1基存在した。間壁葭子氏が古代の墳墓について述べられた中で、とりわけ火葬墓の立地について、A:後期古墳追葬の例、B:後期古墳群周辺の例、C:山中の尾根・山腹に分けられたが、そのうちのBに該当しよう。美作地域、とりわけ苫田郡や周辺の久米郡は集中する地域といえ、官人層・小豪族ばかり



第1000図 古墳群の変遷





数字のみは占墳、Kは小石槨、Hは土壙墓を表す

第1001図 石室主軸・埋葬頭位

か「有力な家父長層」にも急速に浸透したとみなすことができるのではなかろうか。

さらに、津山市域の後期群集墳は、横穴式石室導入期において墓域の変動を伴うことが一般的であることからみれば、久田原古墳群はその継続性においてやや特徴的といえる。

### 3 横穴式石室墳周辺の小規模埋葬施設について

5・6号墳の墳丘背後には、小石槨2・3・土器棺3や土壙墓8が展開する。これらは、小石槨4、土壙墓8の出土遺物と位置関係から、いずれも5号墳に付随すると考えられる。それら以外の小規模埋葬施設では遺物を伴わず、時期のわからない小石槨5を含め、古墳群中心から少し離れて位置し、古墳との関係は不明瞭である。

小型の竪穴式石槨や箱式石棺について、周辺の津山市域にまで例を探ってみると、ともに竪穴式石槨や横穴式石室より下位の従属的な埋葬の形態である場合が多くみうけられる。位置は、墳丘内・周溝内・墳丘外に位置し、副葬品を伴わない場合が多いが、それ自体周溝・墳丘を持つ例も存在する。竪穴式石槨は、5世紀後葉から6世紀中葉にかけての例から、規模が底面で長さ3m余り、幅が0.8~1mに達する。箱式石棺や竪穴式小石槨は、長さ2m未満で、幅が0.2~0.6mの範囲にある場合が多く(Ⅰ類:久田原古墳群の小石槨2・3)、またそれより小型の、長さ1m前後から70cm、幅20~40cm余り(Ⅱ類:久田原古墳群の小石槨1・5)がある。この二者の関係は、被葬者の性や年齢と関わった場合もあろうが、ここではⅡ類の小石槨1からV期に相当する杯が出土しており、小石槨2・3より後出することから、Ⅰ類からⅡ類へと小型化した可能性を指摘しておきたい。そしてⅡ類については、成人男性の伸展葬は不可能であり、改葬墓(火葬など)の可能性を考えたい。

県下における後期古墳の小規模周辺埋葬の例のうち、岡山市西山古墳群、阿哲郡哲西町山根屋遺跡のⅡ類小石槨は、時期的に7世紀後半に下る可能性があり、さらに山根屋遺跡では小石槨から火葬墓へと変化してゆく過程が考えられる。

なお、箱式石棺と小型竪穴式石槨については、6世紀後葉の横穴式石室導入期において前者から後 者に移行するようである。

### 4 石室主軸・埋葬頭位

I・Ⅱ期の古墳や5世紀代の10号墳(方墳)の周溝南辺に主軸が平行し、それとの関わりが強いと考えられる土壙墓9は、埋葬施設の主軸が東西主軸であった。次のⅢ期の古墳と周辺にある土壙墓や石棺が正方位に対して斜行するのは、埋葬頭位はこのころには意識されず、古墳の構築に際しては地形に即したことが考えられる。しかしながら、Ⅳ期以降の石室や土壙墓の主軸は強く南北を指向しており、石室は南に開口することから、おそらく北頭位とみられる(第1001図)。

埋葬頭位・埋葬施設の主軸については、すでに津山市域の6世紀初頭前後の古墳が東西主軸をとるという指摘がある。さらに勝田郡勝央町畑ノ平占墳群の調査成果からも、東西主軸は美作でも吉井川流域の特色で、横穴式石室導入期まで認められること、畑ノ平4期(TK217併行)には南北主軸に変わることを指摘している。久田の地は後の律令期には津山盆地と同じ苫田郡に編入され、地縁・血縁的に関わりが深いと考えられる。久田原古墳群においても同様な傾向を示したのではなかろうか。ところで、前期~中期前半頃の古墳では、津山盆地においても強い画一性のようなものは存在していない。有元古墳群のように古式の群集墳の一部には東西主軸もあるが、東西主軸にみられる紐帯とは、

津山盆地を中心とした5世紀末葉の群小墳盛行と強く関わっている可能性が強いとみなせる。

#### 5 おわりに

古墳群は、丘陵の尾根上や谷斜面ではなく氾濫原に立地していた。周辺の丘陵部には、わずかに1 基が存在するのみで、後期群集墳の通常の立地形態とは異なる。こうした原因の1つには、丘陵部における炭窯や炉の存在、燃料としての薪、砂鉄原料の採取など鉄生産との関わりが想定できようか。生産基盤が脆弱なこの地における後期群集墳の存在とその立地条件については、周辺の段丘状に立地する集落に対し、河川の氾濫によって荒廃した地を利用したことが考えられる。

占墳群の形成は6世紀中葉ころに始まるが、7世紀末~8世紀初頭の段階においても横穴式石室を築いており、副葬品として馬具・鉄鏃や鉄滓がみられる。このような例は、県北部においてはしばしばみうけられるが、岡山県南部域における終末期古墳の多くが、副葬品において薄葬化が進んでいるのに対して特徴的な点である。 (弘田)

#### 註

- (1)津山市近長丸山古墳の第2主体は、長さ1.95m、幅1.06mと小規模であるが、箱式石棺を内蔵する小石槨である。この古墳は、時期は前期に属するが、後期の同規模の例も石槨と判断する。津山市教育委員会『近長丸山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集 1992 本文において箱式石棺と呼称しているものは、小口部は河原石を上下に立てて用いるのに対し、側面は小口積みにしており、横穴式石室の影響を受けた小型の竪穴式石槨である。本来の箱式石棺とは、壁面を扁平な板石1枚で構成するものを呼びたい。
- (2) 津山市教育委員会『門の山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集 1992
- (3) 間壁葭子「古代の墳墓」『吉備古代史の基礎的研究』 1992 古代の墳墓は100遺跡以上を数え、そのほとんどが奈良時代の火葬墓である。火葬墓も容器が田辺墳墓 群のように木櫃であれば、骨の遺存状況は悪いと思われることから実数は相当な数と想定しなければな らない。火葬は、一定の階層にはかなり普遍的に普及していたとしても不思議ではない。
- (4) 服部伊久男「終末期群集墳の諸相」『橿原考古学研究所研究論集』9 1988 小型石室を規模から二類に分け、無袖式石室から小型石室へと、横穴式石室の構造的な退化過程の中での時間的推移と指摘されている。長さ1.5~2mの小石室の規模が後期群集墳の木棺規模を基準にしていること、それより小規模な石室を複次葬としている。
- (5)岡山県教育委員会『田益新田遺跡・西山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告109 1996
- (6) 岡山県教育委員会「山根屋古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査報告12』岡山県埋蔵文化財発 掘調査報告22 1977
- (7) 津山市教育委員会『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集 1991
- (8) 岡山県教育委員会『西大沢占墳群・畑の平占墳群・虫尾遺跡・黒土中世墓・茂平占墓・茂平城』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告111 1996
- (9) 津山市教育委員会『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集 1997
- (10) 岡山県教育委員会「(2)苫田ダム建設に伴う発掘調査」『岡山県文化財報告』33 2003
- (11) 岡山県教育委員会『河内構遺跡・河内城跡・河内遺跡・ナル林遺跡・久田上原城跡・北条高下遺跡・ 峪畑遺跡・岡遺跡・比丘尼ヶ城跡・城逧城跡・札の尾遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170 2003

### 第6節 7~8世紀にかけての集落について

### 1 久田原遺跡の状況

#### (1)遺跡の立地

久田原遺跡では、弥生時代中期以降、集落としての活発な土地利用を行った形跡は乏しい。古墳時代前・中期に属する遺構としては、わずかに古墳1基、竪穴住居(以下竪穴とする。)1軒と土壙数基のみであった。しかし後期(6世紀中葉ころ)に入ると古墳群が形成され始めており、夏栗遺跡(集落)に対応した墓域(古墳群)であったと考えられる。7世紀以降は再び集落が形成され、竪穴住居20軒、掘立柱建物53棟と古墳・土壙墓・製鉄炉・鍛冶炉・火葬墓などを検出している。

第1003図は遺構検出レベルを参考に、10cmコンターを遺構配置図に合成したものである。遺跡は、弥生時代末には大洪水に見舞われており、古代の集落もその上に立地している。しかし、縄文時代後期に形成された微高地と谷状地形は、埋没しながらもある程度古代の地形にその一部を反映していたようである。古代集落は、その北西から南東方向の2つの埋没谷に挟まれた台地状地形の南東斜面に多くが位置し、頂部の平坦面には遺跡西端で火葬墓などがみられたにすぎない。さらに、集落南西部にある格子状の溝群は畑とみられるが、やはり縄文時代の河道4埋没後の窪地に存在した。

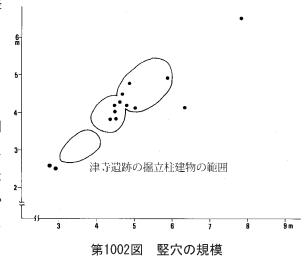
#### (2) 竪穴について

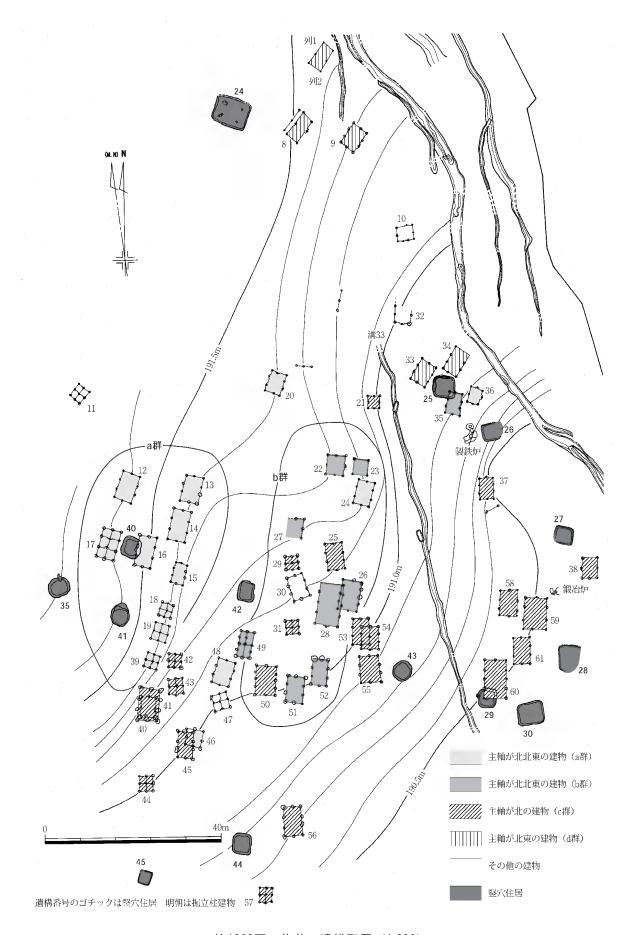
平面形は一般的に矩形を呈するが、長方形もしくは長円形を呈するものがある。いずれも竪穴内に柱穴はなく、竪穴住居27以外は壁体溝も存在しなかった。その大きさは、県南の津寺遺跡高田調査区における7世紀代の竪穴と比較しても(第1002図)さほど変わりなく、前代に比べて相対的に竪穴が小型化する傾向は指摘できる。竪穴の掘削深度も10~45cmと、県内でみられる古墳前期の竪穴と比べかなり浅くなっている。また、石組みカマドをもつ竪穴が3軒あるほかは、造り付けのカマドは持たないが、床面中央に火処をもつ場合が多く、なかには可動式のカマドが遺存した例もある。

県南部域では、7世紀前半の竪穴住居には粘土で構築した造り付けのカマドが一般な存在といえ、可動式カマドの普及は掘立柱建物の普及と軌を一にするとみられる。一方、山陰側では土製支脚や可動式カマドが多くみられ、造り付けカマドは山間部の特徴とされている。当遺跡では土製支脚は出土

していないが、石組みカマドと長方形プランの竪 穴など、山陰の影響を受けているといえよう。

出土遺物からみた竪穴の変遷は、竪穴24・ 30(7世紀中葉)→28・31・36(7世紀後葉)→35(7 世紀末~8世紀初頭)→44・43(8世紀前半)→41・42(8世紀後半)の通りとなる。県下では、百間川原尾島遺跡において7世紀初めころには、集落における住居の形態が掘立柱建物へと移行する。ただし、備前より備中は遅く、県北でも山陰と近い位置にある当遺跡では8世紀まで竪穴が存続することが明らかとなった。





第1003図 集落の遺構配置 (1/800)

#### (3) 掘立柱建物

53棟が確認できる。その  $552 \times 2$ 間の建物(総柱 と中央の東柱がない建物も 含む)と、 $1 \times 1$ 間の建物 は倉と考えられ、13棟が該 当する。それ以外の側柱建 物は基本的に住居とみられ る。すべて南北棟で棟方向 は北から $N45^{\circ}$ Eの間にあ り、東西棟はない。また、

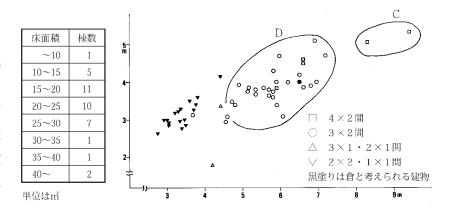


表 6 側柱建物の規模

第1004図 久田原遺跡の建物規模

倉は一般集落の高床倉庫の規模が20㎡前後に集中するのに比べ、大半が10㎡前後であり、総じて小規模な部類に入る。柱穴も隅柱が直径50~60cm程の円形で、束柱はさらに小規模である。また、柱通りも良くないことからみてすべて穎倉の可能性が高い。

側柱建物においても、柱穴掘り方の形状はすべて円形で、直径40~60cm程の大きさが一般的である。 平面形態は  $3\times2$  間の場合が大半で、桁行が $4.5\sim7$  m辺りの規模となり、中でも床面積で $15\sim25$  m が全体の55% を占める(表 6)。 それよりやや大きい建物 2 棟は  $4\times2$  間(第1004図)(桁行が  $8\sim9.5$  m程で床面積が40 m 以上)と、両者に格差を認めることができる。

掘立柱建物の時期は、柱穴から出土する小量の土器片からのみでは決定しづらいものの、建物33では7世紀末、建物40からは8世紀末に位置付けられるほぼ完形の須恵器杯が出土しており、遺構の年代を示している可能性は高い。なお、竪穴住居40・25を切る掘立柱建物16・35があるものの、竪穴から出土した遺物の時期から両者は併存しているとみた方が良い。そこでまず、掘立柱建物の配置や棟方向によるグルーピングを行ったところ、次の4群に分けられた。

a群 主軸が北北東 建物12~19・39、46・48

b群 主軸は北北東 建物22・23・26~28・51・52

c群 主軸は北 A・Bの斜面下方で広範囲に立地する。建物40~45、56・57、25・29・50・38・58~60、31・53~55・50

d群 主軸は北東 埋没谷筋に立地する。建物8・9・33・35、柱穴列1・2

これら各群は、それぞれ時期差を表している可能性がある。d群は古墳時代とした建物7と棟方向が一致し(地形に沿っている?)、7世紀代の竪穴24~30とともに溝33より東側に位置する。また、7世紀末の遺物が出土した建物33はこのd類である。

a・b群はともに、建て替えや建物相互の切り合いや近接して同時併存とは考えられない建物があることから、少なくとも 2 時期があると考えられる。そして、 a・b 両群は建物主軸が近似し、立地からも建物相互が競合せず、同時期に併存してもよいと考える。主に溝33の西にあり、8 世紀の竪穴住居とも近接している。 c 群については、地形に即した建物配置から建物軸線が北志向へと推移していったとみなし、建物40の遺物が年代の一端を示していると思われる。そこで、 d 群( I 期:7 世紀末葉前後)  $\rightarrow$  a・b 群( II ・ III 期:8 世紀前・中葉)  $\rightarrow$  c 群( IV 期:8 世紀末葉前後)へと時間的に推移していったと考えられる。

#### (4) 集落の構成

建物相互の配置や集落全体を通して、規格性は乏しいといえる。また、建物規模を久田原遺跡内の7世紀代の竪穴住居や先に触れた津寺遺跡高田調査区例と比較してみると(第1003図)、その床面積はほぼ同じ広さであった。

これをさらに古墳時代後期から7世紀末ころの集落である斎富遺跡や百間川原尾島遺跡の建物規模と比較してみたところ(第1005図)、ほぼ同様の傾向を示すことが分かる。7世紀段階からこうした集落内の建物規模によるランクが存在しており、大型の建物は、集落内の有力農民層の起居する住居であろうか。

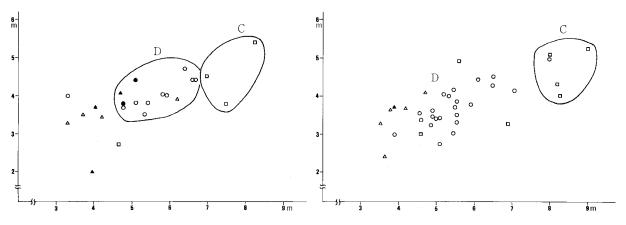
次に配置状況をみると、b群では、大型の側柱建物26・28、小型の側柱建物51・52と倉22・23の組み合わせが存在する。建物の切り合い関係から1回の建て替えが考えられ、側柱2棟と倉1棟が同時併存となる。

a 群においても、側柱建物12~17と倉18・19・39や側柱建物48と倉46の組み合せが想定できる。側柱建物12~17は、位置関係から同時に存在したのは 2~3 棟とみられ、b 群同様、側柱 2 棟と倉 1 棟が 1 つの単位をなしたと思われる。

c 群も同様に、側柱建物25と倉29、側柱建物40・41と倉42・43、側柱建物50・45と倉44(c 1 群)、側柱建物53~55と倉31(c 2 群)、側柱建物56と倉57(c 3 群)で1つの単位をなす。側柱建物1~2に倉1で、最高5単位が同時併存していたとみられる。側柱建物38・58~61(c 4 群)は側柱建物のみで1グループをなしている。これは倉が屋へと変化したとも考えられる。また、近在する鍛冶炉と関わりもあったかもしれない。やはり位置関係から、2~3棟が同時に存在したであろう。

竪穴と掘立柱建物の関係は、あまり明確にはできなかった。両者が集落内において併存している南関東などの例では、竪穴の機能として竈屋などが想定されている。当遺跡でも1辺3 m未満の小型竪穴36などには、住居以外の機能を想定すべきかもしれない。ここでは竪穴35・40・41が a 群に、竪穴43・44が b 群に、竪穴42が c 2 群に伴っている可能性を指摘しておく。つまり、掘立柱建物  $1 \sim 2$  棟と倉 1 棟、(+竪穴 1 軒)の組み合わせ単位が抽出でき、II・III期で  $5 \sim 6$  単位程が、IV期にも最高で7単位が存在したと考えられる。

さて、住居の基本単位とした掘立柱建物  $1\sim 2$  棟に居住する人数であるが、穎倉は10㎡前後で満倉ならば1,000束程度の収納量が見込まれていることと、10人あたりの年間の消費量は627.8束であるこ



第1005図 斎富遺跡・百間川原尾島遺跡の掘立柱建物

### 2 周辺遺跡の状況

さて、苫田郡は平安時代の初期に東西に分かれ、そのうちの苫西郡は田中郷・田邑郷・田邊郷・布原郷・野鶏郷・大野郷の各郷に分かれる。久田原遺跡とその周辺は、そのうちの能鶏郷(鏡野町北部)に近接するが、これに含まれていたかは定かではない。久田原遺跡と同郷に属する遺跡としては、奥津町杉遺跡が挙げられる。また、奥津町に南接する鏡野町のうち大開遺跡や九番丁場遺跡は、布原郷に比定できる。ここでは、これらの遺跡について多少触れてみたい。

#### (1) 杉遺跡

久田原遺跡の北東3㎞の位置に所在する。7世紀代の遺構には、竪穴住居21軒と古墳1基などがある。竪穴住居のうちの1軒からは畿内産土師器椀(飛鳥Ⅲ期)が出土している。

8世紀代における確実な遺構はみあたらないが、掘立柱建物のうち2×2間の倉庫と考えられる建物 (『杉遺跡』では掘立柱建物3)と、3×2間で片庇の付く総柱の建物 (同報告の掘立柱建物5)は、柱穴掘り方の大きさなどから古代の可能性がある。古墳は、出土遺物から7世紀第2四半期ころと考えられるが、石室内から火葬骨が出土している。調査所見では追葬時の人骨とされ、外容器を伴わない。県内において、横穴式石室墳に骨蔵器(火葬骨)を追葬する例はしばしば認められることから、初葬時とさほど時間的な隔たりはないとみたい。また包含層から、8世紀前半の土器や須恵質や土師質の土馬が出土している。

### (2) 大開遺跡

現在の行政区画では、苫田郡鏡野町布原に所在する。主軸を南北(N3°E)に並列する5×3間の大型の掘立柱建物2棟(床面積56㎡・61㎡)を中心に、周辺に数棟の掘立柱建物や鍛冶炉、小竪穴状の土壙(『鏡野町史』「大開遺跡」の46号土坑)が存在し、官衙的建物と鍛冶工房という評価がなされている。

#### (3) 九番丁場遺跡

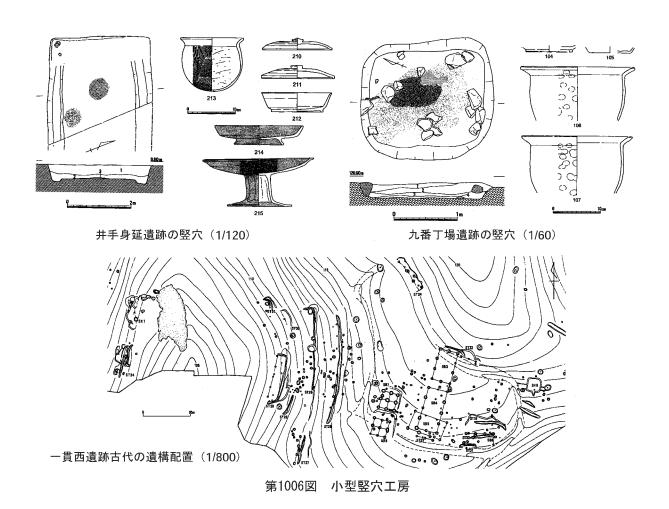
大開遺跡の南500mに位置する。7世紀代から継続する集落で、竪穴住居が6棟ある。掘立柱建物は22棟確認されているが、その大半が奈良時代後半を中心とする時期とされている。ほかに、製鉄炉の下部構造や古代の小竪穴状土壙(同遺跡報告書の土壙39)が確認されている。

#### (4) 小規模竪穴状遺構(第1006図)

これまで古代の「竪穴住居」は、県下では津山市一貫西遺跡において、4×2間と3×2間の側柱建物2棟と2×2間の総柱建物2棟に併存した竪穴住居1例のみであった。その竪穴住居址6は1辺約3mの方形で、柱穴や壁体溝は存在せず、久田原遺跡の小型竪穴と類似した規模と特徴をなす。そのほかにも段状遺構とともに、製鉄炉が存在する製鉄工房遺跡であった。このような竪穴の例は、土壙として報告された中にいくつか存在するようである。

総社市井手見延遺跡の土壙8は、長辺3.4m以上、短辺3.25mを測り、長辺側には壁体溝を持ち、床面中央部に焼土面がみられた。周辺には桁行4間(全長13.39m)の掘立柱建物があり、さらにその他の土壙や包含層からは鉄滓が出土している。

先述した鏡野町大開遺跡46号土壙の規模は、長辺2m、短辺1.7mを測る。九番丁場遺跡の土壙39は 長辺2.1m、短辺1.88mとやや小規模ではあるが、床面中央に焼土と炭や灰がみられ、ともに周辺に製 鉄遺構が存在している。久田原遺跡の例も含めて、このような竪穴の機能の一つとして、工房であっ た可能性を考えておきたい。



### 3 建物規模からみた古代集落

現在岡山県下における古代前期(7~8世紀)の集落は、およそ50遺跡を数える (表 7)。これは 弥生時代や古墳時代の集落数と比べ決して多い数字ではない。その理由には、中世以降の開発で削平 を受けているか、もしくは今の集落と立地が重なっているといったことも考えられよう。また、調査 地の一部に古代の遺構がみられる、あるいは調査面積自体がごくがわずかで遺跡の性格付けができな いといった場合もあろうが、かなりの数の遺跡が官衙やその関連遺跡の可能性を指摘されているのも ひとつの特徴といえ、古代集落の実態は明らかになっていない。従来、官衙あるいは公的施設と評価 された遺跡も再検討してみる必要があると考えている。ここでは今後の検討材料として、県下における8世紀代の側柱建物を以下のように規模別で分類する(第1007図)。

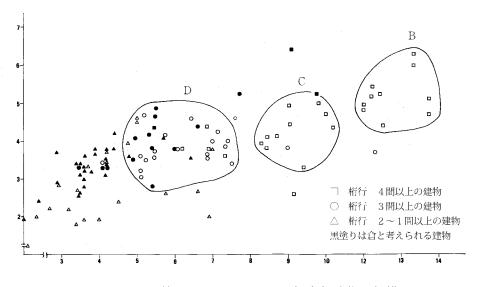
B類 桁行5間(10m以上) 高本遺跡など

C類 4×2間(桁行8~10m)のやや大きい建物

D類 3×2間の一般的な建物 久田原遺跡

A類はB類より大きく、久米町宮尾遺跡の大型建物群を挙げる。律令的な建築様式と建物配置をとり、 久米郡衙の一部を構成していたとみられる。

建物規模の類別を集落との関係でみると、①:B類建物が複数みられる遺跡には、高本遺跡(勝田郡衙関連?)がある。②:B類建物が最大規模でC・D類で構成する遺跡では、二野遺跡、谷尻・赤



第1007図 岡山県下の掘立柱建物の規模

茂遺跡、大開遺跡があげられる。③:1~数棟のC類建物を中心とした遺跡には、久田原遺跡、清水 谷遺跡、馬屋遺跡、斎富遺跡、窪木遺跡、一貫西遺跡、領家遺跡、九番丁場遺跡が挙げられよう。

さらに、遺跡が長期間継続し複数の世帯が集住する、A:集住(継続)型として久口原遺跡、斎富遺跡、九番丁場遺跡、清水谷遺跡が挙げられる。建て替えは1回程度の短期間で、規格をもって配置された3~4棟の建物群で構成する、B:単独型には馬屋遺跡、窪木遺跡、一貫西遺跡、城山東遺跡がある。

①~②は豪族居宅や郡衙より下位のいわゆる末端官衙などの可能性もある。A③型は一般的な集落の可能性が高く、そのうち久田原遺跡などは特殊遺物の在り方などから、C類建物を里長の起居する郡内の集落であった可能性が高い。また、B③型のなかにも、居宅(馬屋遺跡 下級官人?)や工房(一貫西遺跡 製鉄)と考えられる例がある。

#### 4 まとめ

古代の久田原遺跡は、遺構のあり方や周辺遺跡との比較検討から集落遺跡と考えられる。しかしながら発掘から整理の段階において、官衙遺跡とする評価も一方で存在する。ただ集落遺跡と官衙遺跡を対比するときに、集落とは日常起居する場であるならば、久田原遺跡が7世紀(末葉)に集落の形成が始まって8世紀には集落規模を著しく拡大させることと、夏栗遺跡、杉遺跡の集落の衰退とが連動している意味を考えねばならない。集落の移動や再編成が、7世紀末葉に起こったのであろうか。

火葬墓については、間壁葭子氏による集成以降、当遺跡以外にも、北房町定北古墳(追葬)、奥津町杉古墳(追葬か?)、瀬戸町松尾火葬墓(後期古墳群周辺)、津山市大畑遺跡、男戸嶋遺跡(丘陵上・斜面)、勝央町岡東高塚遺跡(丘陵上)、夏栗遺跡(集落内)が挙げられ、県北部域においてさらなる資料の追加となった。久田原遺跡の例は、出土地点が集落からやや西にはずれており、7世紀代

の墓域を意図したものと考えておきたい。また、外容器が仏具である鉄鉢形土器であることが注目されるが、遺跡内に仏堂と考えられる建物や仏教関係の遺物は出土していない。いずれにせよ火葬は、8世紀初頭には小豪族や有力な家長層にはかなり浸透していたとみられる。

最後に製鉄と集落との関わりについて少し触れておきたい。集落内には、製鉄炉1基、鍛冶炉3基があるほか、久田原2号墳において鉄滓や羽口が出土している。さらに周辺の丘陵部においても、7世紀から10世紀にかけての製鉄炉2基と炭窯2基が調査されており、この地が鉄を基盤に成り立っているともみられる。古代においても貢納品としての鉄生産を行っていたことも想像に難くないが、ここでは十分検討できなかった。今後の課題としたい。 (弘田)

#### 註

- (1) 岡山県教育委員会「(2)苫田ダム建設に伴う発掘調査」『岡山県文化財報告』32 2002 岡山県教育委員会「(2)苫田ダム建設に伴う発掘調査」『岡山県文化財報告』33 2003
- (2) 岡山県教育委員会『津寺遺跡 4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 1997
- (3) 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会『志津見ダム地内の遺跡』2002
- (4) 山中敏史『古代の穎穀収収に関する考古学的研究』2003
- (5) 岡山県教育委員会『斎富遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105 1996
- (6) 岡山県教育委員会『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 1994
- (7) 神奈川県教育委員会「向原遺跡』1983
- (8) 松村恵司「正倉の存在形態と機能『古代の稲倉と村落・郷里の支配』1998
- (9) 奥津町教育委員会『杉遺跡』 奥津町埋蔵文化財発掘調査報告 4 2000
- (10) 岡山県教育委員会『立石遺跡 大開遺跡 六番丁場遺跡 九番丁場遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 165 2002
- (11) 文献10に同じ。
- (12) 立石盛詞「大開遺跡」『鏡野町史』2000
- (13) 津山市教育委員会『一貫西遺跡』「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」第33集 1990
- (14) 岡山県教育委員会『岡谷大溝散布地 三須今溝遺跡 三須河原遺跡 三須畠田遺跡 井手見延遺跡 井手天原 遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告156 2001
- (15) 文献12に同じ。
- (16) 文献10に同じ。
- (17) 岡田博「官衙」『吉備の考古学的研究』(下) 1992
- (18) 岡山県教育委員会「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 8(中国縦貫道建設に伴う発掘調査報告 5) 1975
  - 岡山県教育委員会「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』61 1985
- (19) 岡山県教育委員会「宮尾遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 4(中国縦貫道建設に伴う発掘調査報告2) 1973
- (20) 岡山県教育委員会「二野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15(中国縦貫道建設に伴う発掘調査報告) 1977
- (21) 北房町教育委員会『谷尻遺跡赤茂地区』北房町埋蔵文化財発掘調査報告 4 1986
- (22) 矢掛町教育委員会『清水谷遺跡<一本木地区>』矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告 1 2001
- (23) 岡山県教育委員会『松尾古墳群・斎富古墳群・馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105 1996
- (24) 岡山県教育委員会『窪木遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124 1997
- (25) 岡山県教育委員会「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 8(中国縦貫道建設に伴う発掘調査報告 5) 1975
- (26) 岡山県教育委員会「城山東遺跡」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査報告2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93 1900

- (27) 硯、陶馬、上馬、火葬墓を特殊な存在と捉え、久田原遺跡が一般集落ではあり得ないという意見もある。なお、集落内に小豪族の居宅が存在した可能性もあるし、集落内に公的機能を持つ施設の存在を否定するものではない。
- (28) 間壁葭子『吉備古代史に関する考古学的研究』 1992
- (29) 岡山大学考古学研究室『定北古墳』北房町教育委員会 1995
- (30) 文献 9 に同じ。
- (31) 文献23に同じ。
- (32) 津山市教育委員会『大畑遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集 1993
- (33) 津山市教育委員会『有元遺跡・男戸嶋遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集 1999
- (34) 岡山県教育委員会『田井たれをず遺跡・田井ちご池遺跡・岡東高塚遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査 報告171 2003
- (35) 岡山県教育委員会『河内構遺跡・河内城跡・河内遺跡・ナル林遺跡・久田上原城跡・北条高下遺跡・ 峪畑遺跡・岡遺跡・比丘尼ヶ城跡・城逧城跡・札の尾遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170 2003 平安時代後期の遺跡の状況は今一つ明らかではないが、中世段階では再び集落が盛隆し、100棟余りの 掘立柱建物とともに鍛冶工房、炉群が存在する。

#### 表 7 岡山県下古代の遺跡

		遺跡名	所在地	主要検出遺構		文字関連遺物		緑釉	瓦	遺跡の性格
	1	高本遺跡	英田郡作東町	掘立柱建物・溝・鍛冶炉	円面硯、 書上器	転用硯、墨書土器墨				郡衙関連
	2	平遺跡	勝田郡勝央町	礎石建物・掘立柱建物・井戸・土壙・溝・鍛冶炉	円面硯、 書上器	風字硯・転用硯、墨	丸鞆	0	0	郡衙関連
美	3	勝間田遺跡	勝田郡勝央町	掘立柱建物・溝・築地?	円面視				0	郡衙関連
天	4	宮尾遺跡	久米郡久米町	掘立柱建物・柵列・溝・鍛冶炉	门面硯、	転用硯、墨書上器			0	郡衙関連
	5	領家遺跡	久米郡久米町	掘立柱建物・井戸・土壙・溝・炉	门面砚、	墨書土器	丸鞆	0		
作	6	下市瀬遺跡	真庭郡落合町	礎石建物・掘立柱建物・井戸	転用硯、	墨書土器	巡方	0	0	港津関連
115	7	高屋A・福田B遺跡	真庭郡落合町	掘立柱建物・土壌・溝				0		
	8	荒神風呂遺跡	真庭邵落合町	溝	円面視					
囯		須内遺跡	真庭郡落合町	掘立柱建物			銅印			
_	10	城山東遺跡	真庭郡川上村	掘立柱建物・井戸状遺構・溝・鍛冶炉						
	11	九番」場遺跡	苦田郡鏡野町	<b>加立柱建物・竪穴・土壙・溝・炉</b>						
	12	大開遺跡	苦田郡鏡野町	掘立柱建物・竪穴・溝・炉						
	13	一貫西遺跡	津山市	掘立柱建物竪穴製鉄炉						
	14	小中遺跡	勝央町	掘立柱建物						倉庫群?
		西谷遺跡	邑久郡長船町	掘立柱建物・上壙・溝						
	16	門田貝塚遺跡	邑久郡邑久町	掘立柱建物				0		郡衙関連
備	17	佐山丸川遺跡	備前市	掘立柱建物・柵列						
17111	18	門前池遺跡	赤磐郡山陽町	掘立柱建物・柵列・鍛冶炉	円面硯			0	0	
	19	馬屋遺跡	赤磐郡山陽町	掘立柱建物・柵列・胞衣容器・上壙・溝				0	0	駅家関連
前	20	斎冨遺跡	赤磐郡山陽町	掘立柱建物・溝	転用硯		丸鞆			
189	21	雄叮遺跡	岡山市	掘立柱建物・溝	門面硯、	風字硯、転用硯		0	0	
	22	百間川米川遺跡	岡山市	掘立柱建物・溝	円面視・	<b>墨</b> 書	丸鞆	0	0	港津関連
国	23	原尾島遺跡	岡山市	溝						
_		津島江道遺跡	岡山市	掘立柱建物・溝	円面硯			0		郡衙関連
	25	鹿田遺跡	岡山市	掘立柱建物・井戸・土壙・溝・橋	転用砚					
	26	<b>冨原遺跡</b>	岡山市						0	駅家関連
	27	川入遺跡	岡山市	掘立柱建物・土壙・溝・築地						郡衙関連
	28	矢部南向遺跡	倉敷市	掘立柱建物・溝						
	29	矢部遺跡	倉敷山	礎石建物						邵衙関連
	30	津寺遺跡	岡山市	方形区画溝・掘立柱建物・エナ容器・土壙・溝						郡衙関連
	31	菅生遺跡	倉敷市	掘立柱建物・井戸						郡衙関連
		白江遺跡	小田郡矢掛町							郡衙関連
備	33	毎戸遺跡	小田郡矢掛町							郡衙関連
1/11	34	鍛冶屋遺跡	笠岡市	掘立柱建物・土壙・溝						
		備中平遺跡		掘立柱建物・溝						
ıπ		谷尻遺跡		掘立柱建物・溝						郡衙関連
Ι΄.		小殿遺跡	上房郡北房町	掘立柱建物	円面砚					
	38	野遺跡	阿哲郡哲西町	掘立住建物・柵						郡衙関連
围	39	西江遺跡	阿哲郡哲西町	掘立柱建物・柵・溝	円面砚					
	40	清水谷遺跡	総社市	掘立柱建物						
	41	井出見延遺跡	総社市	掘立柱建物・竪穴	円面視、	風字視				
		宮ノ前遺跡	総社市	掘立柱建物	川面硯・	墨書				
		坊ヶ内遺跡	総社市	掘立柱建物	円面視					
	44		総社市	掘立柱建物	門面砚					
	45	三須河原遺跡	総社市	掘立柱建物	墨書 「召	『殿』				
L_	46	中須賀遺跡	総社市	掘立柱建物						

岡田博「官衙」「吉備の考古学的研究』(下)1992を参考に一部加筆し作成

# 第7節 中世の久田原遺跡

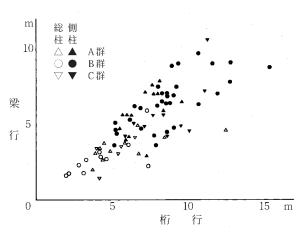
### 1 集落の構造

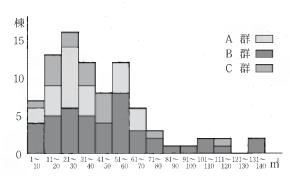
#### (1) 掘立柱建物

#### 規模と構造

久田原遺跡では、中世の掘立柱建物が95棟検出されている。その規模は10~130㎡にわたっているが、50㎡以下の小型は66%、51~80㎡の中型は24%、81㎡以上の大型は10%を占める。また、側柱建物は32棟(34%)、総柱建物は63棟(66%)行あり、中・大型建物のほとんどは総柱式である。これらの屋内の柱は掘り方が浅く、床束と考えられるものが多い。歪んだ建物が多く見られる点でも特徴的である。

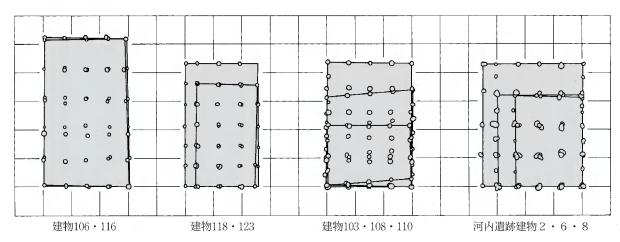
ここで中型建物の構造を見ると、桁行4間、梁行4間の方形をなすものと、桁行3間、梁行4間の長方形をなすものとがある。後者では梁行の両端が狭く、二面庇と見られるものが多い。この二面庇の建物は南北棟がほとんどで、前者が東西棟と南北棟が見られるのと対照的である。また、前者では側辺に束柱をもつものがいくつか見られる(建物103・108・110・133)。これは桁行・梁行と関係なく南北辺にのみ認められる特徴がある。



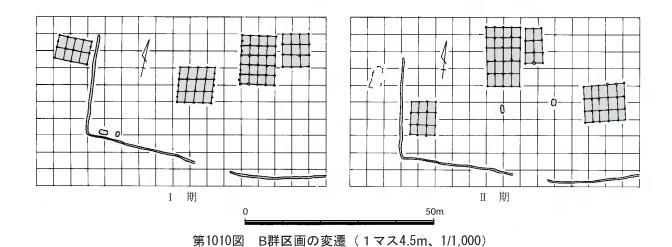


第1008図 掘立柱建物の規模

ところで、こうした建物の中には規模を同じくするもの(建物106・116、建物120・144)、あるいは間数を異にしながらも柱間寸法が一致するもの(建物103・108、建物118・123)を指摘できる。こ



第1009図 掘立柱建物の規格 (1マス3m、1/400)



のように設計規格を共有する建物は河内遺跡でも確認されており、これらの間に同時併存もしくは連続した建て替えといった強い繋がりを想定することが許されるであろう(第1009図)。

#### 分布と構成

さて、この95棟の掘立柱建物は耕地として利用されていた可能性のある空閑地を挟んでA~Cの3群に大別される。北西に位置するA群は29棟からなる。溝等の区画施設は確認されていないが、鍛冶工房の北に展開する建物群と東に広がる建物群に分かれる。50㎡以上の中型建物は7棟あり、それぞれ15~20㎡ほどの間隔を保って散在している。このうち、鍛冶工房の西に位置する建物84は孤立しており、建物85・90も重複ないし近接する小型建物86・91と共存していた可能性はない。また、後述するB群と比較して重複する建物は少なく、屋敷墓と見られる土壙墓も検出されていない。こうしたことからするとA群は、中型建物を主屋とする2~3の単位で構成された集落であり、長期にわたって固定化された屋敷地は形成されていなかった可能性が高い。勝間田焼の出土から集落の形成はB群と同じ12世紀後半に溯る可能性があるが、その中心は14世紀代にあるものと思われる。

遺跡の東に位置する B 群は、中世建物の56%にあたる53棟の建物で構成されている。大型建物は 7棟、中型建物は12棟あり、これらは主に溝78・79・83で構成される東西71m、南北52mの区画を中心に展開している。区画内の建物は大きく 2 時期に分けられる(第1010図)。 I 期の建物は115㎡ある 5×4間の南北建物110を主屋として、その西前方に 4×3間の中型建物108、東後方に 3×3間の小型建物111を配している。これらは柱穴内に礎盤石を置く点で共通しており、さらに建物108・110は東西辺に束柱をもつ構造で一致する。また区画外ではあるが同様の構造をもつ建物103も同時期と考えてよいかもしれない。 II 期は主屋の南北建物106は133㎡と大型化する一方で小型建物107は 3×2間と間数を減らし小さくなる。中型建物114も桁間を増やして大きくなり、その位置も主屋の東へと移動している。また、区画の南東に位置する 3×3間の小型建物104もこの時期に属する可能性がある。なお、区画内には中央南と南東の2か所で土壙墓群が検出されている。前者はこの区画に伴う屋敷墓として理解できるものであるが、後者についてはその位置関係からして問題が残る。この区画の時期については建物110の出土遺物から13世紀に比定され、西側に広がる落ち込み 1・2から出土した遺物の多くはここから廃棄されたものと思われる。区画の南辺に重複する東西建物116は II 期の主屋と同規模であり、位置を移して建て替えられた可能性が強い。さらに北庇の東西建物118は116と北辺が重複する位置にあり、西庇をもつ大型の南北建物123ともにこれと連続して建造されたものと

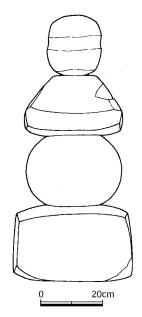
も考えられる。このように、区画の廃絶後、建物はその南に展開しており、建物119~124の関係に示されるような長期にわたる変遷が想定される。このような屋敷地移動の背景として久田堀ノ内遺跡との関わりが指摘できるが、詳細については報告書の刊行を待ちたい。

13棟からなるC群はさらに南西へ広がるものと想定され、久田堀ノ内遺跡の一端として理解される。 建物143・150のような大型建物も見られるが、それぞれ地形に沿った棟方向をとり明瞭なまとまりは 調査範囲に限り指摘できない。

#### (2)屋敷墓と火葬墓

この遺跡で検出された中世の埋葬施設は16基を数えるが、その多くはB・C群で集中し、A群では確認されていない。これらの内訳は火葬墓3基、土葬墓13基で、金具や痕跡等により木棺の使用が想定されるものが含まれている。これらから想定される木棺の規模は、長さ1.1~1.7m、幅0.5~0.6mほどで、長さ0.6~0.8m、幅0.4~0.5mを測る県南部のものと比べると長大なものが目につく。人骨は出土していないが、棺や掘り方の規模からすると屈位をとっていたようで、副葬品の配置から想定される頭位は北ないし東が多い。こうした傾向は同時期の県南部と一致する。また、土壙中に石材が陥没しているものがあり、墓上に標石や集石を置くものもあったことが知られる。副葬品は土師皿と刀子が一般的で、銅鏡や鏃・針などもわずかに見られるが、銭貨等の副葬はいまだ認められない。刀子は刃渡り20㎝前後の腰刀で、百間川米田遺跡で出土しているような呑口式と見られるが、M187は柄曲で銅の折金が伴うなど他と異なる。こうした腰刀の副葬は、中世を通じて男女の別なく広く行われており、さまざまな機能を有していたものと想定されている。墓17の銅鏡は背面に鎌倉時代に盛行した菊花散双鳥文を鋳出すもので、鉄針とともに被葬者が女性であることを物語る。鏃が副葬されることは稀であるが、ここでは2基の墓で確認されている。後述するように他の遺構でも鏃の出土が見られ、この遺跡の性格を考えるうえで興味深い。

ところで、13世紀になると溝で区画された屋敷地の一画に墓を設ける屋敷墓が現れる。B群における墓の分布を見ると、2~3基からなる単位が3か所にわたって認められ、それらはまた近接する建



第1011図 土壙墓14の 五輪塔 (1/12)

物群と対応しているようにも見受けられる。これらを屋敷の一画に営まれた屋敷墓と見なすことができるならば、この3群は屋敷地の変遷を反映している可能性がある。また単独で存在する墓10も鍵形の溝72と近接しており、やはり屋敷墓の可能性が指摘できる。

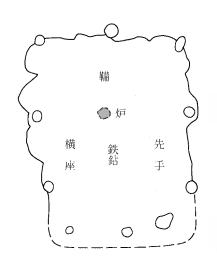
一方、墓13・20として報告されたものは、土壙内にしつらえた敷石の上で木棺を焚焼したもので、被熱を受けた敷石の間隙から棺釘が出土している。同様な遺構は杉遺跡でも検出されているが、地下にこのような施設を設けていることからすると、火葬後収骨を行う事なく土で覆ったものと推測される。火葬が集落内で行われることは極めて異例であり、かつまた墓13の北に隣接して築かれた墓14を見ればその被葬者が極めて特殊な人物であったことは容易に想像できる。この墓は古瀬戸の四耳壺に火葬骨を納め、その上に石組基段を築いて花崗岩製の五輪塔を造立したもので(第1011図)、その基段の長辺は区画溝78と平行するうえ、屋敷の造営時期とも一致することから両者の深い繋がりが窺われる。おそらくはこの地域の開発者として、屋敷地が移動した後も長く崇敬の対象

とされていたものと思われる。しかし、遺跡全体の耕地化が進んだ江戸時代以降はそうした所伝も失われ、「小寺」といった地名を生じることになったのであろう。

#### (3) 鍛冶炉と鍛冶工房

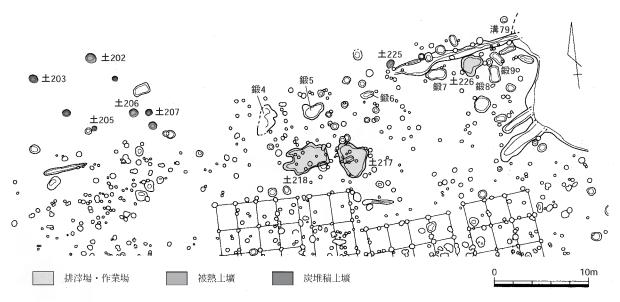
この遺跡の鍛冶関連遺構は3か所にまとまって検出されている。A群の中央に位置する鍛冶工房は、長軸5.4m、短軸4.5mの長方形を呈する竪穴に3×2間の上屋を設けた半地下式の施設である。北西の短辺を入り口とし、床面中央よりやや奥まった位置に鍛冶炉が設けられている。その手前には方形の土壙を穿ち黒褐色土を詰めて固めていた。鍛造剥片や粒状滓の分布からこの位置に鉄砧が据えられていたようで、砂層という軟弱な基盤を克服するための工夫と考えられる。「職人尽図」によれば、横座が鞴を操って炉内の鉄を熱し、鉄鉗で鉄砧に移した鉄を先手が鍛打する様子が描かれている。そうして見ると、やや北東に偏した鍛冶炉の位置から、鉄砧の北東に横座が、南西に先手が座した姿が復元できる(第1012図)。また、横座が操作する鞴は楕円形の土壙上に据えられたものと想定され、これらの土壙もまた地盤を固める目的をもっていたものと推定される。この工房で生産された製品ではないが、釘や鎌、刀子などが出土しており、14世紀を中心とした年代が想定される。

B群区画の北側で検出された鍛冶炉は6基ある。これらは溝79の南に3~6mの間隔をもって東西に並んでいるが、一定の時間幅をもって順次築かれたものと思われる。これらはいずれも大形の掘り方を伴っており、1.4~2.3m×0.7~1.3mの長楕円形で底面が凹凸をなすものと、1.7~1.9m×0.8~1mの長方形で底面が平坦なものがある。前者は西側に、後者は東側にまとまっており、前者から後者への移行が想定される。鍛冶炉はこの掘り方内に充填した黒色土の上に築かれているが、径30㎝前後の円形を呈する炉床は掘り方の一端に偏した位置にある。この鍛冶炉から50㎝ほど離れたもう一端の周辺からは鍛造剥片が集中して認められ鉄砧の存在が想定されることから、この掘り方は鍛冶工房の場合と同様に鍛冶炉と鉄砧の基礎を固定するための施設と考えられる。また、鍛冶炉群の南側に廃滓場ないしは作業場と推定される土壙217・218があり、鍛冶炉群の西側には壁面や底面が被熱により赤変する土壙202・205・206・225や底部に炭の堆積が認められる土壙203・207が存在する。さらに鍛冶炉を取り巻くように多数の柱穴が検出されており、規模は明らかではないもののこれらを覆う上屋を構成していたものと思われる(第1013図)。これらの遺構からは鍛冶道具(鏨・鉄槌)のほか、未製





第1012図 鍛冶工房の作業配置と操業風景(岡山日報社『職人尽図』1982より一部転載)



第1013図 B群北側の鍛冶関連遺構 (1/400)

品もしくは再生原料と思われる鉄器や鉄片が出土している。鍛冶炉の移動はB群区画の変遷と対応しており、これらも13世紀に比定される。

B群の南側では3基の鍛冶炉が検出された。これらはいずれも上屋と思われる建物を伴っているが、中でも4×3間の建物127は側柱建物としては大型に属する。鍛冶炉の掘り方は1.3×0.9mと小規模で、鉄砧の掘り方とは分離して設けられている。また、炉10のように地山に直接築かれたものもあり、A群の鍛冶工房と類似する。鍛冶炉に近接して様々な形態や規模をもつ土壙が穿たれているが、その中には鍛打作業の座として設けられたものもあると言う。埋土中には鍛冶滓が含まれるものの、鉄器は出土していない。建物群との関係から14世紀を中心とした時期が想定される。

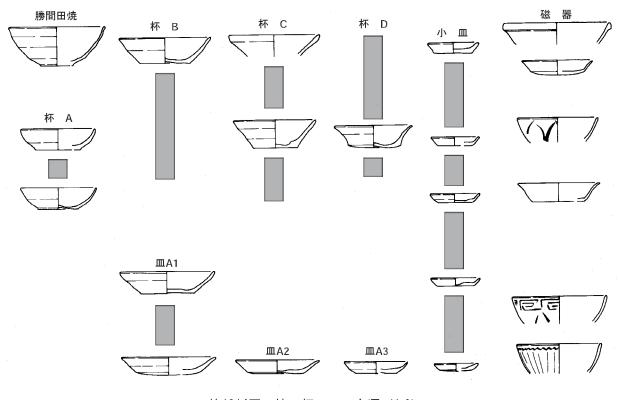
さて、こうした鍛冶関連施設や周辺遺構から出土した鉄滓には精錬滓と沸かし鍛接から素延べにわ たる鍛練鍛冶滓とがあり、長さ14.0~14.4cm、幅7.7~11.5cm、重量430gを測る大形の椀形鍛冶滓は前 者に、長さ4.2~11.2cm、幅5.4~9.4cm、重量130g以下の小形は後者に属する。また、廃鉄器再生に伴 う鍛冶滓の中には鋳造鉄の再利用を示す脱炭精錬鍛冶滓も見られ、鍛冶工房から出土した鋤先はその 原料であった可能性が高い。A群の鍛冶関連施設から出土した羽口は、孔径2.4~2.8cmで総社市樋本 遺跡のものとほぼ一致するが、径は10~11㎝とやや大形である。また、出土した鍛冶道具には鏨や鉄 槌、鉄鉗があり、土壙243から出土した大形の砥石も製品の仕上げに使用された可能性が考えられる。 このように久田原遺跡では、砂鉄起源の荒鉄や鍛造・鋳造の廃鉄器を原料として、成分調整の精錬か ら成形の鍛練、裁断加工、仕上げまでの工程が一貫して行われていたものと考えられる。鍛冶工房か ら出土した釘や鎌、刀子、金具等は必ずしもこの工房で製作されたものではないが、こうした鍛冶関 連施設の製品がこの集落で消費されるような品々であったことを示している。ただし、この遺跡でま とまって見られる武具(鏃)は一般の集落では見られないもので、鍛冶関連施設の中で最も古い一群 がB群区画に付随するように展開している事実は、居館としての性格を物語ると同時に、これに従属 しその需要を満たすものとして鉄器生産がはじまった可能性を想起させる。さらに、長期にわたって 鍛冶作業に専従している状況は、生産された鉄製品が一集落を越えて流通していた可能性をも示唆す るものである。

### 2 出土遺物

#### (1) 土器・陶磁器

久田原遺跡の中世遺物は数百箱にものぼるが、各時代と複合し、なおかつ良好な一括資料にも乏しいことから、ここではこれまでに報告された河内遺跡や河内構などの中・近世集落、河内城や城峪城といった城塞群の資料と比較しその位置づけを検討する(第1014図)。

久田原遺跡の中世遺物で最も古く位置づけられるのは B 群区画内の建物やその東に広がる落ち込みから出上したものである。杯は14.2~14.5㎝を測る口径に比して底径が広い B 類と狭い C 類のほか、口径が11~12㎝で外反する口縁部をもつ D 類が存在するようであるが全形のわかるものはない。底部はいずれもへラ切りする。小皿は口径7.6~8.6㎝、器高1.3~1.9㎝で、斜め上方にのびる口縁部とへラ切りする底部をもつものが一般的であるが、ほかに長く外反するものや内湾しておわるものもある。鍋 A はやや深い体部から屈折して広がる口縁部をもち、端部は丸くおさめるものと面をなすものとがある。また、受け口状の口縁部をもつ瓦質の鍋 B も現れている。勝間田焼は椀や鉢・壺・甕がある。椀は口径13.6~15.1㎝、器高5.7~6.1㎝を測り、 $\Pi \sim \Pi$  期に比定される。また、包含層からわずかに出土した東播磨系擂鉢のうち、口縁部が肥厚して断面三角形をなすものはこの段階に属する可能性がある。備前焼は、体部が湾曲し口縁部が面をもっておわる中世2~3 期の擂鉢がある。このほかの陶器として古瀬戸の椀や壺が数点あるが、県南部でもこれらの出土は稀であり、この遺跡の特異性を物語っている。磁器は少ないが、白磁の碗 $V \cdot V$ 類や青磁の $\Pi \cdot V$  質な音、電泉窯系)が出土している。これらは概ね13世紀に位置づけることができるもので、一部に12世紀まで溯る可能性があるものも含まれる。



第1014図 椀・杯・皿の変遷(1/6)

これにつづく遺物としてまとまったものはないが、A群やB群でも区画の南側から出土した遺物の多くはこの時期に比定される。杯B~Dとも口径12~13cmと縮小する傾向にある。また、杯Dの中には底面中央を凹ませるものがあり、へそ椀と呼ばれる県南部の土師器椀との関連が考えられる。さらに、この段階でも新しい時期に比定される城峪城の資料には杯Bと同法量ではあるが口縁部が湾曲する杯Aが見られるが、この遺跡ではほとんど確認できない。城峪城の小皿は口径6.8~8.7cm、器高1.1~1.8cmで、口縁部は短く内湾ぎみになって器高を減じ、底部はヘラ切りと糸切りが混在する。鍋Aは口縁端部に面をもつようになり、体部も幾分丸みをおびて浅くなる。また、鍋Bの比率が増加し、口縁下に鍔状の突帯をめぐらす瓦質の釜Aも現れる。口縁部が内湾する畿内系の釜Bもあるいはこの段階に属するのかもしれない。須恵器系陶器は、口縁部の上端が上方に拡張される東播磨系や備前の擂鉢がある。磁器には龍泉窯系の蓮弁文を飾る青磁椀(I-5類)と口禿げの白磁皿(同IX類)があり、14世紀を中心とした時期が考えられる。

土壙263の土器は皿と小皿で構成され、杯はすでに見られない。皿Aは口径13.6~15.1cm、器高3.5~4.0cmで、底部はいずれもヘラ切りする。口径6.9~8.5cm、器高1.4~1.9cmを測る小皿は口縁部が外反し底部をヘラ切りするものと、内湾する口縁部に糸切りする底部を備えたものとがある。陶磁器を伴っていないため年代を知る手掛かりに乏しいが、広島県草戸千軒町遺跡出土資料との比較から15世紀前半を想定したい。

C群の土壙290や窪地 4・5から出土した皿 A は土壙263よりも低平になり、その法量も口径13.2~15.6cm、器高2.1~2.8cmの A 1 と口径11~12cm、器高1.9~2.1cmの A 2、口径9.8~10cm、器高1.8~1.9 cmの A 3 に分化している。口径8.8~9.6cm、器高1.3~1.7cmを測る小皿も短く内湾する口縁をもつものが主体であるが、底部はヘラ切りによるものが依然として多いようである。これに伴う備前の擂鉢は中世 5 期に属し、蓮弁文を飾る青磁碗も B・ C 群に属するものであることから、15世紀後半と推定される。河内構の土壙29や溝 4 の資料もこの段階と考える。

このように、久田原遺跡の中世土器・陶磁器は12世紀後半~15世紀後半の範疇で理解できるものであり、その出土傾向から既述したような A・B 群から C 群への移行が推察される。また、良好な資料が得られなかったため具体的な数値を示すことはできないが、13~14世紀の土器組成において杯Dの占める割合が高いことが注意される。北房町植木遺跡や哲西町二本松遺跡では搬入品と見られる少量の土師器椀や杯 B を除けば杯 D と小皿のみで構成されており、勝間田焼の衰退後も土師器椀を採用しなかった美作・備中北部の地域性をなしているものと考えられる。

#### (2) 土製品·金属製品

土製品には土錘や羽口がある。土錘は土壙266の上層から18点まとまって出土している。これらは長さ5.3~5.9cm、幅1.4~1.5cmの紡錘形で、重量は8~9 gある。20~31 gを測る城峪城のものよりは小さく、河内遺跡の土錘に類似する。これは東柱をもつ建物の柱穴から出土したもので、建物廃絶に伴う儀礼に使用されたものと推定されている。建物107の柱穴から出土した銅鈴もあるいはこうした行為にかかわるものかもしれない。

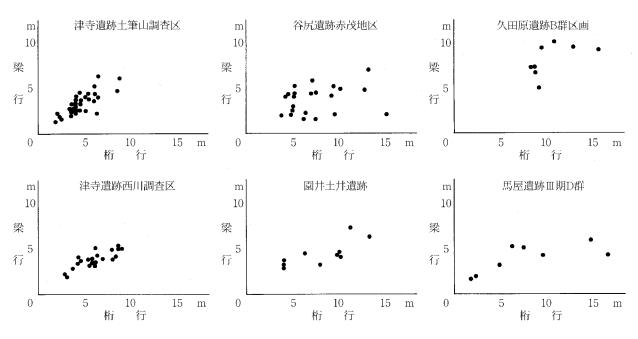
金属製品は鉄釘や刀子、鎌、紡錘車などがある中で、鏃がやや多く含まれる点は注目してよい。一般に城館からの出土が多い遺物ではあるが、鍛冶道具を副葬する土壙が検出された津寺遺跡丸田調査区でも鏃が多く見つかっており、いずれの性格にかかわるものか判断しがたい。銅銭は整理の過程ですべてが抽出されていないため総量を把握できないが、10数点を越えることはないようである。A・

B群は北宋銭に限られるがC群では明銭も出土している。

### 3 集落の性格

ここで、これまでに報告されている県内の中世集落や居館と比較し、その性格を検討したい。岡山県では13世紀になると溝で区画された屋敷が出現する。これまでに知られたものとしては岡山市高塚遺跡や津寺遺跡土筆山調査区、百間川米田遺跡、北方薮ノ内遺跡などがある。これらは幅1.5~4mの溝で区画された方形の屋敷地が連接して検出されている。1,000~2,000㎡あまりの敷地内には数棟~数十棟の建物が確認されているが、20㎡以下の建物が主体で、最大のものでも50~60㎡ほどである。また、屋敷地内やその隣接地に墓を設けており、磁器などの副葬がしばしば認められる。明瞭な区画施設をもたない集落には山陽町馬屋遺跡や津寺遺跡西川調査区、中屋調査区がある。馬屋遺跡の中世集落は平安時代末~鎌倉時代前期(III期)と鎌倉時代中期~室町時代前期(IV期)に区分されており、III期では60㎡ほどの建物を主屋とした屋敷が想定されている。また、IV期には屋敷と呼べるようなまとまりを抽出できないものの40~60㎡の建物が散在する。津寺遺跡西川調査区では20㎡以下の建物とともに40㎡ほどの主屋と見られる四面庇の建物が4棟検出されている。また中屋調査区は、桁行3~7間、梁行1間の建物数棟で構成され、最大の建物で60㎡を測る。西川調査区は中世末、中屋調査区は近世初頭の集落と推定されている。

一方、居館として報告されている遺跡を見ると、幅  $4\sim5$  mの堀で区画されたものに落合町赤野遺跡、北房町谷尻遺跡赤茂地区、植木遺跡がある。このうち谷尻遺跡では4,000㎡ほどの敷地内に50㎡ほどの中型建物を含む10棟ほどの建物と井戸からなる二つの単位が検出されているが、87㎡を測る大型建物も1棟存在する。赤野遺跡や植木遺跡は全掘されていないが、 $2\sim8$ 棟検出された建物の中で最大のものは赤野遺跡で89㎡、植木遺跡で66㎡を測る。また、笠岡市園井土井遺跡は14世紀後半~15世紀後半の建物群で、40㎡の中型建物を主体に70㎡の大型建物が2棟含まれており、16世紀の新見市田治部氏屋敷は $40\sim50$ ㎡の建物 3棟で構成されている。



第1015図 中世集落の建物規模

このように、B群区画内に配された100㎡を越える大型建物は県下でも最大級の規模であり、3,500㎡あまりのその敷地は南接する久田堀ノ内遺跡で最初に設けられた区画の規模とほぼ一致する。12世紀後半、長く居住域として利用されていなかったこの遺跡に再び居を構えたB群区画の主はこの地の開発者と呼ぶに相応しく、A群はその下で実際に耕作に携わった人々の住居と考えられる。この集落が、周辺に開かれた豊かな耕地や多数の鍛冶関連遺構に示されるような鉄器生産などを背景に、後の久田庄域において中心的な役割を担っていたことは容易に想像できる。しかし、14世紀に入ると区画は放棄され、集落は南へと移動する。その背景には久田堀ノ内遺跡のような居館の成立があり、さらには城峪城や比丘尼ケ城が築かれるような動乱があったものと考えられるが、詳細は報告書の刊行を待ちたい。16世紀以降の久田原遺跡には顕著な遺構は見られず、以後遺跡地全体の耕地化が進められていったものと考えられる。

本稿は、調査を担当した亀山と小嶋が協議し執筆した。調査成果を整理・検討する機会に恵まれなかったため、理解不足や認識の誤りが多々あるものと思われるが、今後隣接する久田堀ノ内遺跡や夏 栗遺跡の成果と比較検討する中で訂正されることと思う。久田原遺跡の調査が完了して3年、遺跡は 大規模に掘削され、すでに往時の面影は微塵もない。湛水を目前に控えた今、炎暑や酷寒の中にもかかわらず調査に従事された作業員のみなさん、また多大なる御理解と御協力を賜った地元住民のみなさんに深甚なる謝意を表します。

#### 註

- (1)下澤公明・岡田 博・亀山行雄ほか「河内構遺跡・河内遺跡・河内城跡・久田上原城跡・城峪城跡・比 丘尼ケ城跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170』岡山県教育委員会 2003
- (2) 釘に付着した木質から推定される材厚は2㎝前後である。
- (3) 亀山行雄「中・近世の津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116』岡山県教育委員会 1997
- (4)福島政文「中世の刀形刃物ー腰刀の変遷をめぐって」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V』広島県教育 委員会 1996
- (5) 註3文献
- (6)勝田 至「中世の屋敷墓」『日本歴史民俗論集6』1993
- (7) 副葬された和鏡は磁器の合子を伴う例が多く、津寺土筆山中世墓5の被葬者は成人女性と推定されている。ただし、湖州鏡を副葬した百間川原尾島遺跡土壙墓3は壮年男性と鑑定されている。なお、近年報告された和鏡を副葬する墓には前記以外に津寺中屋調査区土壙墓20、高塚遺跡角田調査区土壙墓21がある。
- (8) 日下降春「杉遺跡」『奥津町埋蔵文化財発掘調査報告4』 奥津町教育委員会 2000
- (9) I 期から II 期にかけて四へ移る主屋を避けるように鍛冶炉は東へ移動しており、両者の間に強い関連が窺われる。
- (10) 12世紀末~14世紀の鍛冶炉17基と、その周辺に大小の土壙が検出されている。南北朝の動乱で焼亡した福山寺の坊院との関連が想定されている。 高畑知功ほか「樋本遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告65」岡山県教育委員会 1987
- (11) 註 1 文献
- (12) 口縁端部がわずかに肥厚する杯 C は美作国府に類例があり、勝間田焼とともに持ち込まれた可能性がある。
  - 安川豊史「美作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告50』津山市教育委員会 1994
- (13) 平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究IX』中近世土器研究会 1993
- (14) 森田 稔「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995

- (15) 乗岡 実「備前焼」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000
- (16) 古瀬戸の壺は、倉敷市城ケ端、総社市久代、賀陽町大村・妙本寺、勝山町若代例など蔵骨器として使用された例が多く、集落からの出土は少ない。 荻野繁春「中国・四国における瀬戸焼の世界」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』瀬戸市埋蔵文化財センター 1996
- (17) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』 九州歴史資料館 1978
- (18) 鈴木康之「土帥質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V』広島県教育委員会 1996
- (19) 小野正敏「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会 1982
- (20) 田仲満雄「植木遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』岡山県教育委員会 1976
- (21) 伊藤晃ほか「二本松遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告22』岡山県教育委員会 1977
- (22) 松本和男・岡田博ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』岡山県教育委員会 1994
- (23) 岡本寛久ほか「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150』岡山県教育委員会 2000
- (24) 註18文献
- (25) 岡本寛久ほか「百間川米田遺跡 3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74』岡山県教育委員会 1989
- (26) 高田恭一郎ほか「北方薮ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149』岡山県教育委員会 2000
- (27) 伊藤 晃ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99』岡山県教育委員会 1995
- (28) 大橋雅也ほか「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会 1996
- (29) 高畑知功ほか「津寺遺跡 5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』岡山県教育委員会 1998
- (30) 橋本惣司ほか「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会 1973
- (31) 森田友子ほか「谷尻遺跡赤茂地区」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告4』北房町教育委員会 1986
- (32) 福田正継ほか「園井土井遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70』岡山県教育委員会 1988
- (33) 高畑知功ほか「田治部氏屋敷址」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告67』岡山県教育委員会 1988
- (34) 岡山県内でこれまで知られている中世建物のうち最大の規模をもつものは総社市殿峪遺跡のSB01で、 桁行7間(16m)、梁行5間(12m)、面積192㎡を測り、13世紀末~14世紀前半に比定されている。 武田恭彰「新本新庄地区圃場整備事業に伴う発掘調査4」『総社市埋蔵文化財調査年報5』総社市教育 委員会 1995
- (35) 江見正己ほか「苫田ダム建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財調査報告31』岡山県教育委員会 2001
- (36) 2 kmほど上流に溯った河内遺跡においても110㎡を越える建物が存在し、建物規模で見る限り必ずしも 突出した存在であったとは言えない。もっとも、側辺に束柱をもつ構造とともに庇を除く身舎の規模 までがまったく一致する状況は両者の深い繋がりを窺わせる。久田庄は文明13年(1481年)の「山名 政之注進状」にその名が見えるが、立荘の時期や主体については明らかでない。

# 遺構・遺物一覧(観察)表

# 1 遺構

### 2 遺物

土器観察表 土製品一覧表 石製品一覧表 金属製品一覧表

3 新旧遺構名称対照表

					正軸		床面海拔高				中央穴	
掲載遺構名	地区名	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	N- °-E•W	床面積(m)	(m)	和穴	柱間距離(cm)	形状	長×短	深さ
竪穴住居 1	3 904Cg	隅丸方形	800	_	_	(52.3)	189.2	5	_	_	-	_
竪穴住居 2	3 905 Cg	隅丸方形	663	600	_	(29.9)	189.3	4	_	_	_	_
竪穴住居 3	3 9 06 C g	隅丸方形	(580)	(510)	N-34° -W	(17.8)	189.0	4	-	-	-	_
竪穴住居 4	3 9 05 D e	円形	435	410	N-45° -W	13.4	189.5	2	160			
竪穴住居 5	3 9 01 Cb	隅丸方形	380	340	N-9° -W	11.2	189.5	4	110~175	円形	60×55	25
竪穴住居 6	3 8 07 C j	方形	(175)	287	N-75°-E	(3.9)	189.6	(2)	_	楕门	59×42	20
竪穴住居7	3 8 08 C j	円形	(342)	_	N-78°-E	_	189.7	2	155	円形	70	32
竪穴住居 8	3 8 08 C i	方形?	(290)	(200)	N-32° -W	_	189.7	_	_	-	-	_
竪穴住居 9	3 8 08 Da	印形	540	528	N-81°-W	18.0	189.5	2	152	円形	76×80	40 · 32
竪穴住居10	3 9 00 C i	方形	360	275	N-77" -W	7.2	190.1	_	_	_	_	_
竪穴住居11	3 9 00 C i	方形	310	260	N-58° -W	5.0	189.4	_	-	-	-	_
竪穴住居12	3 8 05 D d	_	_	-	_	_	189.8	_	-	-	-	_
竪穴住居13	3 8 07 D d	隅丸方形	(420)	380	N-43° -W	(18.5)	189.8	(2)	220	円形	100×90	35
竪穴住居14	3 8 07 D d	円形?	_	_	_	_	189.7	_	_	隅丸方形	78×60	35
竪穴住居15	3 8 08 D c	四形	530	500	N-72"-E	27.8	180.5	2~7	130~98	円形	80×65	43
竪穴住居16	3 9 00 Da	円形	(476)		N-8° -W	14.9	189.4	2	110	円形	84~60	37
竪穴住居17	3 9 02 D c	長方形	315	235	N-8° -W	5.7	189.4	_	_	_	_	_
BT7.11.63.1-14.0	3 9 02 D c	円形	470	445	N-83° -W	15.3	189.6	2	140	楕门形	125×98	60
竪穴住居18	3 9 02 D c	円形	710	660	N-28"-E	34.5	189.7	5	225~275	楕円形	125×98	60
®V⇔(+ E Lo	3 9 00 D c	פֿתנין	810	775	N-84^-E	43.4	189.4	8	135~250	_	_	_
竪穴住居19	3 9 01 D c	円形	670	640	N-59° -W	32.5	189.4	6	165~210	不整円形	147×125	80
竪穴住居20	3 9 01 D d	長方形	374	244	N-20°-W	6.1	189.4	_	_	_	-	_
竪穴住居21	3 9 00 D d	円形	(570)	_	_	_	_	_	-	-	-	-
竪穴住居22	3 9 02 D c	長方形	335	267	N-2°-E	6.4	189.2	_	_	_	-	_
竪穴住居23	4 1 00 D i	方形	310	302	N-40°-W	6.4	187.3	_	-	-	-	-
竪穴住居24	3 7 02 Df	方形	780	650	N-61°-W	39.5	191.1	-	-	_	-	_
竪穴住居25	3 7 08 E a	方形	484	479	N-14°-E	15.9	190.5	-	_	_	-	_
竪穴住居26	3 7 09 Eb	方形	370	(297)	N-6° -W	10.0	190.5	_	_	_	_	_
竪穴住居27	3 8 01 E d	方形	436	384	N-65° -W	13.9	190.3	_	_	_	_	_
竪穴住居28	3 8 04 E d	方形	537	(537)	N-11°-E	25.3	190.1	_	_	_	_	_
竪穴住居29	3 8 05 E b	方形	462	430	N-83" -W	9.9	190.2	_	_	_	_	_
竪穴住居30	3 8 05 E c	方形	586	495	N-89^-E	23.1	190.1					
竪穴住居31	3809Ea	長方形	630	415	N-51" -W	18.5	190.1	_	-	_	-	_
竪穴住居32	3800Cg	隅丸方形	340	-	_	_	191.2	_	_	-	-	-
竪穴住居33	3 8 04 C j	方形	340	276	N-27^-E	7.2	190.6			楕円形	64×33	12
竪穴住居34	3807Ch	隅丸方形	464	402	N-23° -E	13.4	190.3	2	104	_	_	_
竪穴住居35	3 8 02 Db	長凹形	477	420	N-79°-E	9.8	191.3	-	_	_	_	_
竪穴住居36	3 8 09 D d	方形	296	282	N-15°-E	6.9	190.9	_	_		_	
竪穴住居37	3906Ce	方形	390	335	-	7.3	190.1	_	_	_	_	
竪穴住居38	3 9 06 C e	方形	235	210	N-80°-E	3.2	190.1	_	_		_	
竪穴住居39	4 0 06 Ea	隅丸方形	448	(385)	N-87°-E	9.2	189.4	2	153	楕円形	155×78	14
竪穴住居40	3 8 01 D d	隅丸方形	465	450	N-35° -E	8.7	191.2	_	-		_	
竪穴住居41	3 8 03 D c	不整楕円形	500	414	N-32° -E	10.1	191.0	_	_	_	_	_
竪穴住居42	3 8 02 Df	隅丸方形	450	385	N-20°-E	9.5	190.9					
竪穴住居43	3 8 04 Dj	円形	445	405	N-60° -E	9.3	190.4	_	_	楕円	130×65	20
竪穴住居44	3 8 08 D f	隅丸方形	445	420	N-8° -E	10.6	190.4	_	_	_	_	_

# 竪穴住居一覧表

<b>方形土</b>	护蛇		l	1	1	カマド	I	
	_	焼土面	壁体溝	高床部			時 期	備考
艮×短	深さ				有無	位置	ØR Jones Hill	
	_	_	_	_		_	縄文晩期	
_	_	_	_	_	_		縄文晩期	
	-		_	_		-	組文晩期	1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.
							縄文晩期	中央に炉あり
_	-	1	-	_	_	_	弥生中期	
	-	_	-	_	_	_		1/2残存
		7.1					- 弥生中期	大きく削平破壊をうけている
_	-	(1)	-	_	_	_	弥生中期	わずかに残存
_	_	1	0	_	_	_		壁体溝二重、中央穴2基 建替の可能性人
-	_	_	_	-	_	_	弥生中期	A2区住居 1 の西半分
_	_	_	-	-	_	_	弥生中期	
_	_	(2)	-	-	_	_		明瞭な掘り方は確認できず
	-	3	ं	-		_	弥生中期	
_	-	_	0	_	_	_	弥生終末	
_	-	4	0	_	_	_	弥生中期	
_	_	_	0	_	_	_	弥生中期	
_	_	_	_	_	_	_	弥尘中期	
_	_	1	0	_	_	_		
-	_	1	0	_	_	_	弥生中期	
-	_	ı	0	-	_	_	弥生中期	
_	_	3	0	_	_	_	弥生中期	
_	_	2	_	_	_	_	弥生中期	
							弥生中期	B2Wに一部のみ残る
-	_	1	_	-	_	_	弥生中期	
-	-	-	-	-	-	-	弥生後期	炭化した板材が出上
					有	北西辺中央	占墳後期	長軸は一部推定、西の一部調査区外、床面積は一部復元
-	-	-	-	-	_	-	古墳	
_	-	1	-	-	_	_	古墳後期	東の一部破壊、床面積は一部復元
		1					占墳	西の一部破壊、床面積は一部復元
_	_	1	_	_	_	_	古墳後期	南東部破壊 床面積は一部復元
_	-	1	_	_	有	西辺中央	古墳後期	
_	_	1	-	_	有	南西隅	占墳後期	カマドは移動式
_	_	1	_	_	無	_	古墳	
140×75	15	1	-	_	無	_	古墳後期	窪地3埋没後に構築
_	_	1	_	_	無	_	占墳	
71×43	22	_	_	_	_	_	古墳	
_	_	_	_	_	有	北辺東寄	古墳後期	カマドは石組
_	_	_	_	_	-	_	占墳後期	
_	_	_	_	_	_	_	古墳後期	竪穴2に切られる
_	_	_	_	_	_	_	占填後期	
	_	_	_	_	_	_	占墳後期	
	_	2	_	_	無	_	古代	
		1	_	_	##	_	占代	北辺に棚状の段あり
		1	_		無無		古代	30A24~ (001/1/1/2/FX 00 / 2
	_	1	_	_	無	_	古代	
	_		_	_	無無	_	古代	
		_			無	_	<u> </u>	

# 掘立柱建物一覧表

掲載遺構名	地区名	規模	柱間趾	離(cm)	桁行(cm)	梁行(cm)	而精(㎡)	棟方向	時期	備考
			桁	梁				N- °-E•W		MII -2
掘立柱建物 1	3 8 09 D b	4 × 1	128~97	300	455	300	13.4	N-77° -W	弥生.	
掘立柱建物 2	3 9 00 Db	5 × 2	203~105	153~140	725	290	21.0	N-8°-E	弥生	
加立柱建物 3	3 901 Da	4 × 1	125~233	329	788	329	25,0	N-13°-E	弥生	
掘立柱建物 4	3 9 02 Ci	3 ×1	169~351	280	585	280	15.6	N-74" -W	弥生	
掘立柱建物 5	3 9 08 Da	3 × 2	157~105	180~160	390	340	(12.1)	N-50' -E	弥生	
加立柱建物 6	4 0 00 Dc	4×?	250~175	202~180	855	-	_	N-6°-E	弥生	day I N. o. sharth
掘立柱建物 7	3 6 07 Dh	4 × 2	192~156	220~190	702	410	28.5	N-35" -E	占墳	一部柱の痕跡
掘立柱建物 8	3 7 02 Dh	2 × 1	345~220	310~280	605	310	17.3	N-48' -E	占代	塀をもつ?
加立柱建物 9	3 7 02 Di	3 × 2	190~145	205~170	515	375	19.2	N-44°-E	古代	
掘立柱建物10	3 7 05 Dj	3 × 2	125~115	175~125	365	315	11.2	N 90" E	占代	4615
加立柱建物11	3 7 08 D c	2 × 2	173~140	160~137	335	297	9.4	N-54°-E	古代	総柱
掘立柱建物12	3 8 00 D d	3 × 2	225~190	200	620	400	24,8	N-27°-E	古代	
掘立柱建物13	3 800 De	3 × 2	215~170	215~190	580	425	23.9	N 24° E	占代	
掘立柱建物14	3 8 01 De	3 × 2	250~220	210~190	695	400	27.8	N-21°-E	古代	
掘立柱建物15	3 8 02 De	3 × 2	180~135	155~125	455	295	12.7	N-22' -E	古代	
掘立柱建物16	3 8 01 Dd	3 × 2	260~210	200~190	680	390	26.5	N-22°-E	占代	4615
加立柱建物17	3 8 01 Dc	3 × 2	250~185	220~180	650	400	25.6	N-25°-E	古代	総柱
掘立柱建物18	3 8 03 De	2 × 2	155~135	160~100	305	285	8.0	N-23°-E	古代	総柱
掘立柱建物19	3 8 03 Dd	2 × 2	195~180	180~150	375	340	12.4	N-22°-E	占代	総柱
掘立柱建物20 堀立北は###21	3 7 08 Dg	3 × 2	210~120	215~135	470	350	16.5	N-29°-E	古代	
掘立柱建物21	3 7 08 Di	2 × 2	140~120	140~125	275	265	7.1	N-82°-W	古代	
掘立柱建物22	3 8 00 Dh	2 × 2	230~210	215~190	440	415	17.5	N-16°-E	古代	
振立柱建物23 展立程建物24	3 8 00 Di	1 × 1	330	320	330	320	10.7	N-15°-E	古代	
掘立柱建物24	3 8 00 Di	3 × 2	225~150	195~175	535	370	19.7	N-20°-E	古代	
掘立柱建物25	3 8 02 Dh	3 × 2	225~180	195~190	600	385	23.0	N-2"-E	占代	
加立柱建物26	3 8 02 Di	4 × 2	180~130	240~190	660	450	28.8	N-19°-E	古代	最高 20月日 - 325名 24月日121 L.
掘立柱建物27	3 8 01 Dh	?	220~195	180	- 0.40		40.0		古代	桁行2間、梁行1間以上
掘立柱建物28	3 8 03 Dh	4 × 2	245~205	275~255	940	530	48.6	N-17°-E	占代	(A) E-
加立柱建物29	3 8 02 Dg	2 × 2	150~135	160~130	300	290	8.3	N-86° -W	古代	総柱
掘立柱建物30	3 8 02 Dh	3 × 2	185~170	200~170	535	380	19.8	N-12° -W	古代	
掘立柱建物31	3 8 03 Dg	2 × 2	155~150	150~140	305	290	8.8	N-6°-E	古代	彩柱 PS4 (entropy t
掘立柱建物32 加立柱建物33	3 7 06 Dj	?×2	205~170 180~145	180 210~175	515	360 385	17.7	N-14°-E	占代	桁行2間以上
掘立柱建物34	3 7 08 Dj	3 × 2	205~180	220~140	570	365	17.7	N-38° -E N-42° -E		777121 (Ab.si=111 (B) (777)
掘立柱建物35	3 7 07 Ea	3 × 2			480	340	20,5	N-42 -E N-22° -E	古代	部現代用水路に削平
加立住建物36	3 7 08 E a	3×2	175~135 175~150	180~135 145~115	345	285	15.0 8.7	N-22 -E N-29° -E	占代	一部測溝にかかり削平
掘立柱建物37	3 7 08 E b 3 8 00 E b	2 × 2 3 × 2	175~130 175~140	165~145	460	310	14.1	N-29 -E N-7 -E	古代	一部側再にかかり刊平
掘立柱建物38	3 8 02 E d	2 × 2	233~217	175	455	350	15.5	N-11°-E	古代 古代	
加立住建物39	3 8 04 D d	2 × 2	170~150	160~140	320	300	9.4	N-25°-E	占代	総柱
掘立柱建物40	3 8 05 D d	2 × 2	240~195	170~140	435	330	14.4	N-14°-E	古代	<b>本公任</b>
掘立柱建物41		3 × 2	270~210	275~175	720	470	32,2	N-14 -E N-16" -E	占代	
加立住建物42	3 8 04 D d	2 × 2	160~140	175~125	300	300	8.8	N-10 -E N-11° -E		\$0\fr
ten a sa senata co	3 8 04 De	2 × 2		175~125 175~150					古代	総柱
掘立柱建物43 掘立柱建物44	3 8 04 De 3 8 06 Dd	2 × 2	175~160 175~165	175~150 155~145	365 345	325 300	10.6	N-7°-E N-9°-E	古代 占代	総柱
掘立柱建物44 掘立柱建物45	3 8 06 D a	3 × 2	215~155	185~165	590	350	20.0	N-9 -E N-2° -E	古代	nso/f L
掘立柱建物46	3 8 05 De	2 × 2	205~160	210~150	380	360	12.9	N-69°-W	古代	総柱?
掘立柱建物47	3 8 05 Df	2 × 2	205~155	180~147	360	350	12.3	N 7° W	占代	総柱
加立柱建物48	3 8 04 D f	3×2	200~155	200~185	555	385	19.2	N-24°-E	古代	MANUEL CONTRACTOR
掘立柱建物49	3 8 03 Df	4×2	290~173	165~140	590	305	17.7	N-24 -E N-21 -E	古代	総柱?
掘立柱建物50	3 8 0 3 D I	4 × 2	180~130	245~215	650	460	29.9	N-21 -E N 5 E	占代	morti. :
加立住建物51	3 8 0 4 D g	3×2	200~190	210~190	590	400	23.2	N 5 E N-14' -E	古代	
掘立柱建物52	3 8 0 4 D g	3×2	200~190	180	580	360	(20.7)	N-14 -E N-13° -E	古代	
掘立柱建物53	3 8 04 D n 3 8 03 D i	3 × 2	210~160	190~180	570	380	21.0	N-13 -E N 7° E	占代	
加立住建物54 加立住建物54	3 8 03 Di	3 × 2	170~150	200~180	490	395	18.8	N-9°-E	古代	
掘立柱建物55	3 8 04 Di	3×2	215~175	250~195	595	470	26.0	N-3°-E	古代	
掘立柱建物56 掘立柱建物56	3 8 04 D1 3 8 07 Dg	3 × 2	215~175	250~195 215~185	650	420	25.4	N-3 -E	占代	
掘立住建物50 掘立柱建物57	3 8 0 7 Dg 3 8 0 9 Dg	2 × 2	185~155	215~185 140	340	280	9.0	N-11°-E	古代	総柱
掘立柱建物58	3 8 03 E b	3 × 2	245~120	220~170	590	390	(21.8)	N-11 -E N-13 -E	古代	ANDYLL
掘立柱建物59	3 8 03 E c	3 × 2	290~185	300~210	690	510	35.2	N-12" -E	古代	
振立柱建物60 堀立柱建物61	3 8 04 E b	4 × 2	220~200	245	830	(505)	41.0	N-9°-E	古代	
掘立柱建物61	3 8 04 E b	3 × 2	200~190	190~185	580	375	21.7	N-7'-E	古代	
掘立柱建物62	3 9 09 Cj	2 × 1	220~200	180	420	180	7.6	N-29° -W	占代	
掘立柱建物63 掘立柱建物64	4 0 02 Dj	3×1	178~127	337~330	443	337	14.5	N-15°-E	古代	
	3 6 05 De	6×2	280~170	265~225	1250	465	61.7	N-78°-E	中世	I .

# 掘立柱建物一覧表

掲載遺構名	地区名	規模		離(cm)	析行(cm)	梁行(cm)	面積(㎡)	棟方向	時期	備考
10 / 10 th t/			桁	梁				N- '-E•W		Total and the second
掘立柱建物66	3 6 04 D i	?	222~210	320	_	_		N-38°-E	中世	桁行3間、梁行1間以上
加立柱建物67	3 6 08 D c	2 × 1	260~220	328~320	480	320	15.7	N-47°-W	中世	
掘立柱建物68	3 7 00 D d	2 × 1	225~205	347~344	420	344	14.9	N-21°-E	中世	
掘立柱建物69	3 7 04 C i	2 × 1	214~153	227~196	368	196	8.2	N-47°-E	中世	
加立柱建物70	3 7 04 C i	$4 \times 2$	180~135	230~175	635	390	25.7	N-48°-W	山堆	
掘立柱建物71	3 7 04 C i	3 × 2	200~195	210~195	595	400	24.0	N-57°-W	中世	
掘立柱建物72	3 7 04 Cj	?×2	295~280	195~180	_	575	_	N-47° -W	中世	
捌立柱建物73	3 7 05 Ci	$3 \times 2$	255~200	270~240	675	490	34.4	N-31°-E	中世	
掘立柱建物74	3 7 05 Cj	3 × 2	225~190	235~195	615	412	26.7	N-26°-E	中世	
掘立柱建物75	3 7 05 Cj	3 × 1	260~205	310~300	680	300	20.8	N 31° E	中世	
加立柱建物76	3 7 05 Da	2 × 2	310~235	240~200	555	470	23.8	N-37°-E	申世	
掘立柱建物77	3 7 05 Da	3 × 2	325~265	180~170	875	350	30.3	N-25°-E	中世	庇付面積53.4nt
掘立柱建物78	3 7 06 Da	5 × 3	245~165	300~205	780	700	60.2	N 57° W	中世	
掘立柱建物79	3 7 06 D c	3×1	260~150	400~370	590	370	23.5	N-59°-W	中世	
掘立柱建物80	3 7 06 D c	4 × 2	240~195	245~190	850	410	36.5	N-64°-W	中世	
掘立柱建物81	3 7 07 D c	3 × 4	310~190	200~145	(725)	(710)	(53.8)	N 31° E	中世	
加立柱建物82	3 7 05 D d	3×3	240~200	340~320	965	655	64.4	N-16°-E	中世	
掘立柱建物83	3 7 07 De		330~295	220~150	635	560	23.2	N-36°-E	申世	1
掘立柱建物84	3 7 07 DC	5 × 3	200~188	307~242	813	790	63.1	N 24° E	中世	1
加立柱建物85	3 8 00 Db	$3 \times 4$	305~240	215~130	805	410	32.8	N-48°-E	中世	庇付面積55.6m <sup>2</sup>
掘立柱建物86	3 8 00 D c	2 × 4	300~285	165~120	600	325	19.2	N-46 -E N-48 -E	中世	庇付面積32.9㎡
掘立柱建物87		2 × 4	240~205	190~180	450	375		N-48 -E N 10° W	中世	well middoring
	3 8 00 D c			260~234	<b>I</b>		16.4			
加京柱建物88	3 8 03 Ci	2 × 1	220		440	260	10.9	N-24°-E	中世	
掘立柱建物89	3 8 02 Db	4 × 1	199~154	287~275	737	287	30.4	N-39°-W	中世	Hallic o
掘立柱建物90	3 8 02 Da	4 × 3	250~163	330~158	762	774	56.7	N-57"-W	中世	北1間庇?
加立柱建物91	3 8 02 Da	3×2	238~116	191~170	572	560	31.6	N-29°-E	11世	西1間庇?
掘立柱建物92	3 8 03 D d	2 × 2	205~175	155~145	390	300	11.4	N-35°-E	中世	
掘立柱建物93	3 8 07 D d	2 × 1	185~150	265~230	335	265	8.3	N-13°-E	中世	
掘立柱建物94	3 8 08 D e	2 × 1	220~190	280	430	280	11.8	N-75°-W	中世	
掘立柱建物95	3 8 09 D c	2 × 2	393~387	211~214	785	425	33.2	N-9°-E	中世	
掘立柱建物96	3 9 04 D d	2 × 1	218~205	315	423	315	13.3	N-88°-W	中世	
掘立柱建物97	3 905Db	$4 \times 2$	362∼148	222~120	908	690	36.7	N-1`-W	中世	庇付面積61.6㎡
加立柱建物98	3 907De	$3 \times 1$	276~230	220~212	743	220	15.8	N-9°-W	世世	
掘立柱建物99	3 9 09 Db	?×2	260~250	375~345	_	510	_	N-36" -W	中世	
掘立柱建物100	3 907 Db	3×2	205~90	135~130	460	265	11.9	N-2`-W	中世	
掘立柱建物101	3 906 Db	2 × 2	350~276	192~140	626	528	22.4	N-6° -W	中世	
掘立柱建物102	3 9 06 Db	3 × 1	128~88	175~168	312	175	21.3	N-87° -E	中世	
掘立柱建物103	3 8 08 Dh	4 × 2	230~205	325~310	860	640	54.4	N-88°-E	中世	
加立柱建物104	3 8 09 Di	3×3	320~275	225~200	875	640	55.7	X-3°-E	中世	
掘立柱建物105	3 8 09 Di	4 × 2	225~190	380~320	830	705	57.3	N-81°-W	申世	
掘立柱建物106	3 8 07 E a	5 × 4	350~260	235~205	1545	880	133.8	N-3° -W	中世	
掘立柱建物107	3 8 07 E b	3×2	330~275	255~210	915	480	41.1	N-1°-W	中世	
掘立柱建物108	3 8 08 E a	4 × 3	240~210	320~295	905	940	83.5	N-2°-W	中世	
掘立柱建物109	3 8 08 E c	2×2	180~155	275~250	360	525	17.7	N-88° -E	中世	
掘立柱建物110	3 8 07 E b	5 × 4	270~245	230~220	1285	910	115.4	N-4°-W	中世	1
掘立柱建物111	3 8 06 E c	3×3	315~265	245~210	860	700	59.6	V-6, -M	申世	1
掘立柱建物112	3 8 08 E c	2×2	290~160	280~240	465	525	22.9	N-89°-W	中世	1
掘立柱建物112	3 8 08 E d	3×2	175~155	270~200	510	525	25.2	N-2°-W	中世	
掘立柱建物113	3 8 08 E d	5×3	245~180	350~290	1070	970	103.0	N-86°-E	中世	1
掘立柱建物115			245~180 250~210	350~290	470	690		N 77° W	中世	1
掘立柱建物115	3 8 09 E b	2×2	250~210 325~290				31.6			
	3 9 00 E c	5 × 4		240~195	1545	885	133.8	N-78°-W	中世	1611 FREPS 40 7 - 2
掘立柱建物117	3 8 09 E d	3 × 2	250~175	350~320	615	680	29.5	N-2, -M	中世	庇付面積40.7㎡
掘立柱建物118	3 9 00 E c	5 × 3	220~195	245~135	1070	635	49.8	N 80, M	中世	庇付面積66.8㎡
掘立柱建物119	3 9 00 Dj	4 × 2	210~180	195~140	790	360	26.9	N-77°-W	中世	
掘立柱建物120	3 9 00 Dj	3 × 2	320~270	225~220	860	445	38.1	N-10°-E	申世	
掘立柱建物121	3 9 00 Ea	$4 \times 3$	190~160	310~235	665	830	29.8	N 83° W	中世	庇付面積56.7m
加立柱建物122	3 9 01 E a	5 × 4	220~130	220~165	930	755	66.1	N-9°-E	中世	
掘立柱建物123	3 9 01 E a	6 × 4	225~200	235~120	1280	780	83.2	N-10°-E	中世	庇付面積99.0㎡
掘立柱建物124	3 9 01 E a	$4 \times 3$	180~130	290~250	655	830	41.8	N-14° -E	中世	庇付面積52.8㎡
掘立柱建物125	3 903Dh	$3 \times 2$	220~200	340~285	650	625	39.5	N-69°-W	中世	
掘立柱建物126	3 9 02 E b	4 × 4	320~225	235~200	1165	905	83.1	N-19°-E	中世	庇付面積104.6㎡
掘立柱建物127	3 9 05 Dh	$4 \times 3$	208~149	230~168	735	591	41.0	N 76° E	中世	内に鍛治炉を伴う
	3 9 05 Dh	1 × 1	285~218	236~200	285	236	5.5	N-49° -W	中世	内に鍛治炉を伴う
加立柱建物128										
加立柱建物128 掘立柱建物129	3 9 05 Dh	(3×1)	183~165	300	(529)	(300)	(8.8)	N-12°-W	中世	

# 掘立柱建物一覧表

HI TENDANT OF	HILL C	+94*	柱間趾	離(cm)	#816-1 C	8/1/2:()	di (# ( - E)	棟方向	UNIVERS	備考
掲載遺構名	地区名	規模	桁	梁	MT/T(cm)	梁行(cm)	面積(㎡)	N- °-E•W	時期	備考
掘立柱建物132	3 906Dh	2 × 2	271~248	227~199	537	446	22.6	N-4° -W	中世	
加立柱建物133	3 9 07 Dg	4 × 3	202~166	299~238	754	806	60.6	N-79° -E	中世	東・南一間広縁か
掘立柱建物134	3 9 06 Di	$3 \times 4$	339~245	193~130	863	689	(57,7)	N-17° -E	中世	
掘立柱建物135	3 9 05 Ea	4×2	220~170	320~280	805	620	49.0	N-73° -W	中世	
抽立柱建物136	3 9 05 E a	4 × 3	330~250	255~190	1200	705	79.9	N-16° -E	中世	
掘立柱建物137	3 9 07 Dj	(2) × 2	283~234	202~182	(543)	384	(20.2)	N-9°-E	中世	
掘立柱建物138	3 907 F.a	(2×1)	440~396	316~303	(836)	(316)	(26.7)	N-75° -W	中世	
振立柱建物139	3 9 07 Ea	(3×2)	349~291	223~188	(929)	(433)	(39.7)	N-73° -W	中世	
掘立柱建物140	3 9 08 E a	1 × 1	202~198	162~159	202	162	3.2	N-71° -W	中世	
掘立柱建物141	4 0 03 Di	3 × 4	314~272	235~210	895	898	79.4	N 83" E	中世	各柱穴に礎盤石あり
抽立柱建物142	4 0 06 D f	4 × 1	160~145	358~315	600	358	20.0	N-33° -W	中世	
掘立柱建物143	4 0 07 De	5 × 4	228~166	312~233	1058	1135	75.3	N-24° -W	中世	庇・縁付面積119.6㎡
掘立柱建物144	4 0 09 Df	3 × 2	340~255	230~185	860	420	35.7	N 27° W	中世	
加立柱建物145	4 1 00 Dg	3 × 2	335~175	250~225	725	485	33.9	N-37° -W	中世	
掘立柱建物146	4 1 00 Df	2 × 1	214~188	180~140	420	140	7.7	N-57°-E	中世	
掘立柱建物147	4 1 01 Df	2 × 1	275~260	305~275	545	305	15.5	N 43° W	中世	
加立柱建物148	4 1 01 D f	3 × 2	230~190	315~200	640	515	12.9	N-44° -W	中世	庇付面積32.4㎡
掘立柱建物149	4 1 02 D f	3 × 2	375~290	250~235	965	490	46.4	N-73° -W	中世	
掘立柱建物150	4 104De	3 × 2	320~190	400~190	720	790	56.8	N 17° E	中世	庇付面積79.9㎡
掘立柱建物151	4 105De	5 × 2	225~160	260~205	1010	465	45.2	N-61´-W	中世	
掘立柱建物152	4 1 05 D f	(3) × 2	200~155	280~210	_	490	_	N-21 -E	中世	
掘立柱建物153	4 1 05 Df	(2) ×3	415~385	240~170	_	650	_	N 23° E	中世	
掘立柱建物154	4 1 05 Df	(2) ×3	350~330	220~170	_	560	_	N-30° -E	中世	
掘立柱建物155	4 1 04 Dg	2 × 1	205~190	330~320	405	330	13.0	N-28° -E	中世	
掘立柱建物156	4 105Dh	2 × 2	385~205	215~200	590	415	24.5	N-31°-E	中世	
加立柱建物157	4 105 Dh	2 × 3	430~400	210~170	840	560	46.2	N-30° -E	中世	
掘立柱建物158	4 1 05 Dh	2 × 3	395~355	200~165	775	560	42.7	N-30´-E	中世	

# 柱穴列一覧表

掲載遺構名	地区名	規模	全長(cm)	柱間距離(cm)	方向	掘り方	時期	備考
拘戦退制石	地区石	分配欠	(共15/(CIII)	在1可以用E(CIII)	N- °-E•W	が出り刀	11/14	1/日
柱穴列1	3 7 01 Dh	2問	555	305~250	N-48° -E	円形	古代	
粒次列 2	3 7 01 Dh	2間	520	263~257	N-39" -E	円形	占代	
柱穴列3	3 7 02 Dh	2間	560	283~277	N-50" -E	円形	占代	
柱穴列 4	3 7 06 Di	2 問	443	230~213	N-20° -E	円形	古代	
柱穴列 5	3 7 07 Dh	2間	254	188~166	N-73° -W	円形	<b>占代</b>	
柱穴列 6	3 8 01 E b	1 間	298	298	N-71°-E	円形	占代	
柱穴列7	3 7 02 C i	4 間	790	200~190	N-55° -W	円形	中世	
相次列8	3 706Da	3間	600	210~190	N-58° -W	円形	中世	
柱穴列 9	3 8 01 D c	3 間	810	300~250	N-47° -E	円形	中世	
柱穴列10	4 0 00 • 01 Dg	4 間	1299	412~277	N-8°-W	円形	中世	
柱穴列11	4 0 00 • 01 Dh	4間	1188	310~289	N-8° -W	円形	中世	
柱穴列12	4 0 00 • 01 Dg•h	3 間	976	327~323	N-20° -W	円形	中世	
柱穴纫[13	4 0 00 • 02 Dh•i	(6) 問	1743	294~280	N-11°-W	円形	中世	柱穴1個撹乱で消滅か

IH HINDAH A	Idea of Ar	2E 1318	掘り方」	Liáj(cm)	掘り方廊	美山(cm)	深さ	主軸	1198.001	備考
掲載遺構名	地区名	平面形	長さ	幅	長さ	幅	(cm)	N- ° -E•W	時期	
上壙墓1	3 7 02 D i	長方形	242	80	222	54	30	N-33° -E	占填後期	
土壙墓2	3 7 08 D i	長方形	220	92	185	59	33	N-21° -E	占墳後期	
上壙墓3	3 8 00 Di	長方形	271	109	220	68	41	N-19° -W	古墳後期	被熱痕有り
上壙墓 4	3 7 08 D c	長方形	256	84	235	67	16	N-3" -W	占墳後期	
土壙墓 5	3 8 03 D f	長方形	171	81	135	51	24	N-1°-E	占墳後期	
上壙墓6	3 8 01 D f	隅丸長方形	175	112	110	31	17	N-9" -E	古墳後期	
土壙墓 7	3 8 08 D f	長方形	157	49	141	29	35	N 2° W	占墳後期	
土壙墓 8	3 9 02 D c	長方形	238	108	210	75	34	N-53° -W	古墳後期	
上壙墓9	4 0 02 D f	長楕円形	201	64	171	34	26	N-63°-E	古墳後期	枕石様の円礫1個。11号墳に伴うか
土壙墓10	3 904Ca	楕凹形	155	120	105	52	20	N 7° E	中世	
上壙墓11	3 8 07 D f	長方形	180	100	147	60	35	N-23° -E	中世	
土壙墓12	3 8 07 D h	楕円形	160	97	135	73	33	N-23°-E	中世	
土壙墓13	3 8 08 Dh	方形	154	123	_	_	5	N 8° E	中世	
上壙墓14	3 8 08 Dh	方形	_	_	_	_	_	N-14° -E	中世	
土壙墓15	3 8 09 D i	長方形	96	46	_	_	15	N-76° -W	中世	
土壙幕16	3 9 00 Di	長方形	225	100	135	80	35	N 85° W	中世	
上壙墓17	3 9 00 D i	楕円形	120	85	_	_	_	N-3° -W	中世	
土壙墓18	3808Ea	楕円形	244	95	_	_	47	N-2° -W	中世	
土壙墓19	3808Eb	楕凹形	186	130	_	_	31	N 6° E	中世	
上壙墓20	3 9 02 E c	楕円形	230	120	_	_	40	N-73° -W	中世	
土壙墓21	3 901 Ea	円形	81	76	_	-	49	_	中世	
土壙墓22	3 9 01 E a	楕円形	210	99	_	_	33	N 83° W	中世	
上壙墓23	3 901 E a	楕円形	164	106	_	_	23	N-9°-E	中世	
土壙墓24	3 9 05 Dj	楕円形	221	96	_	_	21	N-4°-E	中世	
土壙墓25	4 104Dg	隅丸長方形	375	112	_	_	20	N-14" -E	中世	

# 袋状土壙一覧表

掲載遺構名	地区名	平面形	附面形	長輔(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	最大径 (cm)	床面積 (㎡)	底面海抜高 (m)	時期	備	考
袋状上壙 1	3 8 03 D c	不整楕门形	Ιb	77	63	76	65	0.32	188.60	縄文		
袋状土壙 2	3 900 Ch	不整円形	Ιa	110	90	35	119	0.55	189.00	縄文		
袋状土壙 3	3 9 05 D d	楕円形	Ιa	145	127	70	83	0.69	187.75	縄文晩期中葉		
袋状上壙 4	3 9 06 D d	楕円形	I a	122	101	76	90	0.73	187.70	縄文晩期中葉		
袋状土壙 5	3 906Dd	円形	∭a	119	107	48	85	0.50	188.20	縄文晩期中葉		
袋状土壙 6	3 906Dd	円形	Ιa	87	86	31	85	0.53	187.75	縄文晩期中葉		
袋状上壙 7	3 9 07 D d	円形	Ιa	73	71	17	73	0.41	187.70	縄文晩期中葉		
袋状土壙 8	3 907Dd	楕円形	Ιa	125	103	23	97	0.66	187.70	縄文晩期中葉		
袋状土壙 9	3 9 07 D d	円形	Ιa	80	70	40	85	0.55	187.70	縄文晩期中葉		
袋状土壙10	3 9 07 De	円形	Шa	66	63	41	60	0.28	187.90	縄文晩期中葉		
袋状土壙11	3 9 07 D d	円形	Ιa	113	84	50	76	0.40	187.50	縄文晩期中葉		
袋状上壙12	3 9 07 D d	円形	Ιa	130	123	60	114	0.87	187.50	縄文晩期中葉		
袋状土壙13	3 9 07 D d	円形	lа	160	138	57	113	0.89	187.50	縄文晩期中葉		
袋状土壙14	3 9 08 De	円形	Ша	99	96	36	84	0.53	187.85	縄文晩期中葉		
袋状上壙15	3 8 06 Cg	不整円形	Шa	159	149	48	123	1.21	189,46	弥生中期		
袋状土壤16	3 9 03 Dg	円形	Ша	(116)	(102)	42	103	0.80	188.20	弥生中期	洪水によって破壊	
袋状土壙17	3 903Dh	梢円形	Ma	(174)	(125)	57	160	1.25	188.14	弥生中期	洪水によって破壊	

掲載遺構名	地区名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
上壤 1	3 8 02 D c	楕円形	Шe	157	68	24	189,42	縄文	
土壙 2	3 8 02 D b	楕円形	Шa	118	61	18	189.28	縄文	
上壙3	3 8 03 Db	不整楕円形	Ша	197	156	35	189.25	綖文	
土壙 4	3 8 03 D b	不整楕円形	Ша	144	82	23	189.31	縄文	
土壙 5	3 8 05 C i	楕円形	Шa	70	55	41	189.43	縄文晩期	
上壙 6	3 8 05 C i	楕円形	Ша	187	128	12	189.16	縄文晩期	
1:壙 7	3 8 05 C i	楕凹形	Шb	104	73	26	189.65	縄文晩期	
土壙 8	3 8 05 C i	楕円形	Шр	71	66	28	189.48	縄文晩期	
上壙 9	3 8 06 C i	楕円形	Шa	72	60	22	189.68	縄文晩期	
土壙10	3 8 07 C 1	楕凹形	Шь	130	98	34	189.69	縄文晩期	
上壙11	3 8 07 C i	不整円形	Шa	460	427	36	189.54	縄文晩期中葉	
土壙12	3 9 08 Da	楕円形	Шb	104	64	20	189.31	縄文晩期中葉	石鍬4点伴うか
土壙13	3 8 09 C j	不整円形	Ша	(91)	102	22	188.84	縄义晩期中葉	風倒木痕?
上塘14	3 8 09 D b	楕円形	Шb	45	33	16	189.60	縄文晩期中葉	石刀出土
土壙15	3 9 00 C i	不整円形	IIIa	108	85	27	189.00	糺文後期	
土壙16	3 9 00 C i	不整円形	Шb	180	70	38	189.00	縄文晩期	
上壙17	3 9 00 C i	長円形	<b>III</b> a	(182)	100	26	188.90	縄文後期	
土壙18	3 9 00 C 1	不整円形	Ша	90	77	16	189.10	剎文晚期	
土壙19	3 9 01 C d	隅丸方形	Ша	115	(99)	17	188.72	縄文晩期	
上壙20	3 9 01 C i	長円形	Ша	125	80	22	189.40	縄文晩期	管玉出土
土壤21	3 9 01 C g	長円形	Ша	155	80	26	189.40	縄文後期	
土壙22	3 9 01 C j	隅丸方形	Ша	115	105	15	189.10	縄文後期	
上壙23	3 9 02 C j	隅丸方形	Шa	125	110	48	189.30	縄文後期	
土壤24	3 9 02 C g	隅丸方形	Ша	94	65	22	189.40	縄文晩期	
土壙25	3 9 02 C g	長川形	Ша	112	71	45	189,30	縄文晩期	
上壙26	3 9 02 C f	不整円形	Шa	115	78	20	189.50	縄文晩期	
土壤27	3 9 02 C f	隅丸方形	Шa	100	80	18	189.50	縄文晩期	
土壙28	3 9 02 C g	長方形	Ша	85	60	17	189.40	縄文後期	
上壙29	3 9 02 C h	楕円形	Шa	85	58	33	189.30	縄文晩期	
土壤30	3 9 02 C h	長方形	Шa	107	60	20	189.40	縄文後期	
1:塘31	3 9 02 C h	不整円形	Шa	188	140	20	189,20	縄文晩期	
土壙32	3 9 03 C f	不整门形	Шe	450	-	40	189.10	縄文晩期	
上塘33	3 904Cf	楕円形	Шa	120	(80)	20	189.40	縄文晩期	
1:塘34	3 9 04 C g	円形	Шa	108	102	25	189,30	縄文晩期	
土.壙35	3 906 C f	長円形	Шa	(150)	136	80	188.90	縄文晩期	
上壩36	3 906 C f	隅丸方形	Шa	(155)	(130)	95	188.70	縄文晩期	
1:塘37	3 9 05 C h	隅丸方形	Шa	155	105	26	188.90	縄文晩期	
十.壙38	3 9 05 C h	不整门形	Шa	130	95	19	188.90	縄文晩期	
上塘39	3 9 05 C h	長円形	Шa	140	130	16	188.90	縄文晩期	
1:塘40	3 9 06 Cg	隅丸方形	Шa	202	152	25	189.00	縄文晩期	
土.壙41	3 906Ch	不整门形	Ша	240	-	19	189,10	縄文晩期中葉	
上壙42	3 9 01 C i	不整円形	Шa	125	108	15	189.00	縄文後期	
1:壙43	3 9 02 C h	不整円形	Ша	135	95	20	189.00	縄文後期	
土.壙44	3 9 02 C i	不整円形	Шa	95	75	34	189.00	縄文晩期	
上壙45	3 9 02 C i	隅丸方形	Шa	162	140	32	188.90	縄文晩期	
上壙46	3 9 06 C j	不整円形	Ша	185	140	22	189.20	縄文晩期	
土壙47	3 9 06 Da	長川形	Шa	140	57	14	188.50	縄文後期	注口上器用上:
上壙48	3 9 02 D d	不整円形	Шb	205	160	50	189.00	縄文晩期	
1:壙49	3 9 04 D c	円形	Шa	67	57	7	189.10	縄文晩期中葉	
土.壙50	3 904Dd	楕凹形	Ша	101	80	10	189.20	縄义晩期中葉	
上墲51	3 9 05 D d	楕円形	Шa	136	124	70	188.20	縄文後期中葉	
上壙52	3 9 07 D d	円形	Ша	155	-	56	187.60	縄文晩期中葉	
土壙53	3 9 06 Dg	不整楕门形	ШЪ	219	120	37	188.59	縄文晩期	
上壙54	3 907D1	不整楕円形	Шb	143	79	39	188.52	縄文晩期	
上壙55	3 9 08 D e	隅丸方形	Ша	201	162	17	187.03	縄文後期中葉	
土壙56	4 0 03 Df	不整楕円形	Ша	214	140	40	187.81	縄文晩期	
上壙57	4 0 03 D e	隅丸方形	Ша	140	111	36	187.96	縄文晩期	
土壙58	3 8 06 C j	円形	Ша	67	66	25	189.72	弥生前期	
土壙59	3 8 09 C j	楕円形	Шь	90	63	15	189.65	弥生中期	
上壙60	3 8 08 C j	不整形	Ша	217	142	41	189.40	弥生中期	底面2段になる
土壤61	3 8 09 Da	長楕円形	Ша	296	124	60	189.18	弥生中期	
土壙62	3 9 00 Da	不整形	Ша	(166)	(162)	29	189.30	弥生中期	
上壙63	3 9 01 C j	不整形	Ша	101	82	22	189.50	弥生中期	
土壙64	3 9 01 C j	長方形	Ша	150	66	14	189.40	弥生中期	
		<del> </del>	+	94	42	13	189.40	弥生中期	1

掲載遺構名	HIGG AZ	777.461485	HG. Aines	長軸	短軸	深さ	底面海抜高	urts#fi)	## - ##
拘拟思傳石	地区名	平面形	断面形	(cm)	(cm)	(cm)	(m)	時期	備考
土壙66	3 9 01 C j	楕円形	Ша	70	41	13	189.50	弥生中期	
上壙67	3 9 02 Da	楕円形	∭a	72	48	18	189.40	弥生中期	
1:塘68	3 8 09 Db	長方形	III a	138	128	37	189,40	弥生中期	
土壙69	3 809 Db	門形	III a	67	60	11	189.70	弥生中期	
上墳70	3 8 09 D c	円形	III a	73 410	72 100	13 17	189.70	弥生中期	
土壙71 土壙72	3 9 00 D c 3 8 09 D c	長円形	IIIa IIIa	(112)	74	20	189.60 189.50	弥生中期 弥生中期	
上壙73	3 8 09 D c	間丸方形	ша Ша	136	95	13	189.70		
1:塘74	3 9 00 Db	円形	Ша	41	36	7	189,70	弥生中期	
土壙75	3 9 00 Db	楕円形	Ша	87	69	22	189.60	弥生中期	
上壙76	3 9 00 D c	楕円形	Ша	88	64	15	189.50	弥生中期	
土壙77	3 9 00 D c	隅丸方形	Ша	126	97	13	189.70	弥尘中期	
土壙78	3 9 00 D c	長円形	Ша	184	95	36	189.40	弥生中期	
上壙79	3 9 01 D c	隅丸方形	Ша	122	92	22	189.50	弥生中期	
土壤80	3 9 00 D d	楕円形	IIIa	84	61	16	189.60	弥尘中期	
土壙81	3 9 00 D d	楕凹形	Ша	115	75	17	189.50	弥生中期	
上壙82	3 901Dc	円形	IIIa	101	(100)	32	189.40	弥生中期	
土.壙83	3 9 01 D c	隅丸長方形	Ша	118	83	18	189,60	弥尘中期	
土壙84	3 9 00 Da	長方形	Ша	175	100	11	189.60	弥生中期	
上壙85	3 901 Db	長方形	III a	(101)	56	11	189.50	弥生中期	
土壙86	3 9 02 Db	楕円形	III a	(55)	(42)	28	189.30	弥生中期	
土壙87	3 9 02 Dc	長楕円形	lll a	260	55	15	189.30	弥生中期	
上壙88	3 9 02 D c	長方形	III a	(160)	89	23	189.40	弥生中期	
土壙89 土壙90	3 9 02 D c 3 9 02 D c	開丸長方形 方形	III a	202 74	134 72	49 17	189.10 189.40	弥生中期 弥生中期	
上壙91	3 9 02 D b	ガル 楕円形	∭a ∭a	(105)	70	17	189.40	弥生中期 弥生中期	
土壙92	3 9 02 Dc	楕円形	Ша	99	59	16	189.30	弥生中期	
十.壙93a	3 903Db	長方形	Ша	260	(91)	20	189,10	弥生中期	
土壙93b	3 903Db	隅丸方形	Шa	150	92	29	189.00	弥生中期	
土壌94	3 9 02 D c	楕円形	Шa	94	68	22	189.10	弥生中期	
1:壙95	3 9 02 D c	隅丸方形	Шa	(110)	80	11	189,40	弥生中期	
十.擴96	3 9 03 D c	長楕凹形	Шa	193	74	50	189.10	弥生中期	
上塘97	3 9 03 D c	楕円形	Шa	110	81	32	189.20	弥生中期	
1:壙98	3 9 04 D d	長方形	Шa	92	62	18	188,90	弥生中期	
十.塘99	3 902De	門形	Ша	71	64	14	189.30	弥生中期	
上塘100	3 9 02 D f	楕円形	Ша	102	78	11	189.37	弥生中期	
:壙1()1	3 9 03 Df	円形	Шa	40	40	18	189.30	弥生中期	
土壙102	3 9 07 De	不整楕円形	Шe	173	86	26	188.89	弥生中期	
上壙103	3 9 06 Dh	不整円形	ΠI e	149	137	17	188.24	弥生中期	
1:塘104	3 9 06 Dh	不整楕円形	Шe	278	220	32	188.07	弥生中期	
土壙105	3 9 06 Dh	不整円形	Ша	94	68 35	23 41	188.50	弥生中期	
上壙106 上壙107	3 9 07 Dh 3 6 03 Df	長楕円形 楕円形	III c	98 243	201	66	188.21 191.09	弥生中期 古墳	
十.壙108	3 6 04 De	長円形	Шb	358	256	24	191.42	占墳	
上壙109	3 6 04 D f	円形	Шa	179	169	17	191.56	占墳	
上編110	3 6 04 Df	不整円形	Ша	179	149	8	191.74	古墳	
十.壙111	3 6 04 De	長凹形	Ша	341	189	32	190.37	占墳	
上壙112	3 6 04 D f	長円形	Ша	434	121	7	191.71	占墳	
上壙113	3 6 06 Dh	隅丸方形	Шa	102	70	18	191.40	古墳	双孔円盤の出上
十.壙114	3 606Dg	円形	Ша	70	66	18	191.60	占墳	
上壙115	3 6 08 Dg	円形	Шр	50	48	24	191.70	占墳	
上壙116	3 7 05 Dh	長楕円形	Шь	210	100	14	191.20	古墳	
土.壙117	3 7 09 Db	隅丸方形	Ша	186	155	31	191.35	占墳	
上壙118	3 8 02 De	楕円形	III a	201	78	30	190.98	古墳	
:壙119	4 0 05 Dj	不整円形	Ше	462	368	34	187.68	古墳	
十.壙120	3 7 05 Ci	長円形	ШЬ	223	89	17	190.91	占代	
上壙121	3 7 07 Ch	不整円形	Шь	249	121	31	190.88	古代	
土壙122 土壙123	3 7 07 Ch	楕円形 不救III形	III a	107 204	(60) 188	40	190.78	古代	
土壙123 土壙124	3 7 02 D g	不整円形	ше	178	114	30	191.30 190.70	古代	石が多く出土
土壙124	3 7 06 Di 3 7 06 Di	不整円形不整円形	III a III a	220	100	40	190.70	古代	石が多く出土
土壙126	3 7 00 Di	長楕円形	Ша	86	(82)	16	190.80	占代	
上壙127	3 8 03 Dh	格円形	Ша	126	78	18	190.80	古代	
土壙128	3 8 02 Dh	楕円形	Ша	146	75	14	190.75	古代	
土壙129	3 8 03 E a	円形	Ша	99	93	16	190.32	占代	
	0 0 00 H W	1 1 777	1 11 0		- 00		100000	- 1	I .

掲載遺構名	地区名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
土壙130	3 8 03 E a	円形	Шa	106	104	16	190.44	占代	
上壙131	3 8 03 E c	円形	Шa	12	40	10	190.50	占代	
1:壙132	3 8 05 Db	円形	Шb	133	130	31	191.14	古代	
土壙133	3 8 04 Dh	円形	Ша	145	124	25	190.69	占代	
上壙134	3 8 04 Dh	円形	Шb	107	89	45	190.56	古代	
土壙135	3 8 04 Di	円形	Шa	134	123	22	190.76	古代	
土塘136	3 8 03 Dj	円形	ШЪ	87	71	31	190.60	占代	
上壙137	3 8 04 D i	円形	Πa	108	99	21	190.64	占代	
上壙138	3 8 04 Di	円形	Шa	109	108	18	190.72	古代	
土壙139	3 8 05 Di	門形	Шb	85	84	22	190.70	占代	
上壙140	3 8 06 Dh	円形	Шb	105	93	16	190.73	古代	
土壙141	3 8 06 D i	楕円形	Шb	147	90	33	190.48	古代	
土壙142	3 8 05 D j	円形	Ша	57	56	9	190.68	占代	
上壙143	3 8 05 Dj	円形	Шс	95	91	16	190.62	古代	
土壙144	3 8 04 D j	円形	∭a	109	91	15	190.75	古代	
土壙145	3 8 04 D j	円形	Ша	93	85	20	190.80	占代	
上壙146	3 8 04 D j	円形	<b>Ⅲ</b> a	99	85	22	190.60	古代	
土壙147	3 8 06 D j	円形	Шb	74	71	12	190.59	古代	
土壙148	3 8 08 D j	円形	Ша	128	99	55	190.00	占代	
上壙149	3 8 05 E b	円形	Шa	75	63	31	190.23	介古	
土壙150	3804Eb	円形	Шb	79	75	15	190.37	古代	
土壙151	3804Eb	円形	Ша	95	92	12	190.35	占代	
上壙152	3 8 04 E c	楕円形	Шa	130	64	12	190.39	古代	
土壙153	3 8 04 E c	円形	Шb	89	72	11	190.38	古代	
土壙154	3 6 05 Dg	円形	ШЪ	80		10	191.65	中世	
上壙155	3 6 06 Dh	円形	Шb	110	106	14	191.20	中世	被熱土壙、炭混
土壙156	3 6 06 D i	円形	Шb	98	86	16	191.10	中世	被熱上壙、炭混
土壙157	3 6 06 Di	円形	ШЪ	88	84	14	191.10	中世	被熱土壙、炭混
上塘158	3 7 00 Dg	円形	Шa	94	84	14	191.60	中世	被熱土壙、炭混
土壌159	3 7 01 Dg	円形	Шa	96	84	12	191.50	中世	被熱上壙、炭混
上壙160	3 7 02 C j	不整形	Шb	422	184	16	190.72	中世	
土壙161	3 7 03 Cj	円形	Шb	80	79	20	191,22	申世	
上墳162	3 7 04 Da	精円形 不整円形	Шa	99	89	15	190.95	1世	
上版163	3 7 04 Da	不整円形	IIIa III	121 220	112 135	32	190,88	中世	
土壙164 上壙165	3 7 04 Da	不整形	Шb	159	120	22	190.90	中世	
上塘166	3 7 04 Da 3 7 04 Da	不整形 円形	Шb	103	98	25	190.85 190.83	中世	
土壙167	3 7 04Da	不整形	Шр	171	106	51	190.89	中世	西側にテラス
上壙168	3 7 04 Cj	円形	шь	118	111	34	191.20	中世	四側にアンハ
上塘169	3 7 04 Cj	楕円形	Ша	75	64	35	190.93	中世	
土壙170	3 7 05 Cj	隅丸方形	Ша	80	72	13	191,10	中世	
上壙171	3 7 05 Da	不整円形	Шa	119	117	9	191.25	中世	
上版172	3 7 05 Da	円形	Ша	88	85	51	190.79	中世	
土壙173	3 7 06 Da	楕円形	Ша	91	83	35	190.99	中世	
上壙174	3 7 06 Da	楕円形	ша	155	101	33	191.61	中世	
上壙175	3 7 06 Db	円形	Ша	78	77	31	191.67	申世	
十.壙176	3 7 06 D d	円形	Ib	83	81	82	190.50	中世	
上壙177	3 7 07 D d	円形	Па	153	147	58	190.99	中世	
1:壙178	3 7 07 Db	楕円形	Пр	86	69	70	190.72	中世	
土壙179	3 7 08 Da	不整门形	I e	108	81	55	191.08	中世	
上塘180	3 7 08 Cj	円形	Ша	103	98	5	191.36	中世	
上壙181	3 7 08 C h	楕円形	Ша	105	68	15	191.05	中世	
土壙182	3709Ch	不整门形	Шь	232	151	28	190.70	中世	
上壙183	3 7 08 C i	不整円形	Ша	260	251	66	190.68	中世	
1:場184	3 7 09 Cj	不整円形	Ша	121	96	17	191.25	中世	
土.壙185	3 7 09 Cj	不整円形	Ша	89	71	9	191.48	中世	被熱上壙
上壙186	3 7 09 Cj	不整円形	Ша	420	350	10	191.45	中世	
十.壙187	3 7 08 Cj	不整円形	Ша	223	158	13	191.40	中世	
土壙188	3 7 08 C j	不整円形	Ше	332	189	29	191.34	中世	
上壙189	3 7 08 Da	不整円形	Шa	85	79	32	191.30	中世	
土壤190	3 7 09 C j	不整円形	Шb	100	78	9	191.48	中世	
土壙191	3 8 00 Da	円形	ШЪ	59	57	21	191.53	中世	
上壙192	3 8 00 D b	楕円形	Шb	89	60	34	191.28	中世	
土壙193	3 8 01 D b	円形	Шb	101	95	43	191.23	中世	
土壙194	3 8 02 C j	長楕円形	ШЪ	144	84	31	191.34	中世	

掲載遺構名	地区名	平面形	断面形	長輔 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
土壙195	3 8 02 Da	楕円形	Шь	117	90	38	191.25	申順	
上壙196	3 8 02 Da	<b>楕円形</b>	Шρ	90	50	25	191.35	i litt	底面は2段になる
上塘197	3 8 03 Da	長楕円形	Ша	255	147	36	191,24	中世	18211110 = 1921 = 01 0
土壙198	3 901 Cb	隅丸長方形	Ша	137	78	26	190.66	中世	
上壙199	3 9 06 C f	不整円形	Ше	265	255	27	189.90	中世	
土壙200	3 9 00 Dc	陽丸方形	Ша	98	58	8	190.90	中世	
土壙201	3 906Db	楕円形	Ша	129	104	23	189.90	中世	
上壙202	3 8 05 Di			102	94	22	190.80	中世	被熱土壤、炭混
上壙202	3 8 05 Di	円形	III a	78	74	14	190.80	中世	炭混 炭泥
			Ша						
土壙204	3 8 05 Di	円形	III a	56	48	16	190.90	中世	炭混
上壙205	3 8 05 Di	円形	Ша	60	50	12	190.90	中世	<b>炭混</b>
土壙206	3 8 05 Di	円形	Ша	90	90	20	190.80	中世	被熱上壙、炭混
土壙207	3 8 05 Dj	円形	Ша	82	74	22	190.80	中世	被熱土壙、炭混
上壙208	3 8 07 E a	楕円形	Шa	175	109	28	190.24	中世	
土.壙209	3 8 08 E a	円形	IIIb	114	109	75	189.73	中世	
土壙210	3 8 08 Dj	楕円形	Ша	160	93	12	190.39	中世	
上壙211	3 8 09 Dj	円形	Ша	72	56	48	190.03	中世	
土壙212	3 8 05 E a	円形	Ша	72	64	22	190,40	申世	炭渥
土壙213	3 8 05 E b	円形	Ша	76	72	8	190.60	中世	炭混
上壙214	3 8 05 E b	円形	Ша	74	70	24	190.40	中世	炭混
土壙215	3 8 05 Eb	円形	Ша	68	66	32	190.20	中世	炭泥
土壙216	3 8 05 E b	円形	III a	70	60	16	190.40	中世	炭混
上壤217	3 8 05 E b	不整円形	Ша	372	320	24	190.48	中世	鉄滓多量に出土、炭混
土壙218	3 8 06 Ea	不整楕円形	Шc	480	280	24	190.54	申世	鉄滓多量に出上
土壙219	3 8 06 E a	円形	Ша	60	(58)	16	190,60	中世	鉄滓・焼土・炭混
上壙220	3 8 06 E a	円形	Ша	84	82	24	190.40	中世	上面に鉄分沈着
十.壙221	3 8 06 Ea	円形	Ша	84	74	12	190.40	中世	
土壙222	3 8 06 E b	円形	Ша	82	76	18	190,30	中世	·
上壙223	3 8 06 E b	不整円形	Ша	82	64	20	190.30	ПЩ	- DAGE
土壙224	3 8 06 E b	円形	Ша	72	64	24	190.20	中世	炭混
上號225	3 8 05 Eb	円形	Ша	84	82	8	190,60	中世	被熱土壙、炭混
十.擴226	3 8 05 E c	不整门形	Шe	220	218	24	190,16	中世	1放於工場(、)及但
上壙227	3 8 05 E c	円形	Шe	64	60	8	190.16	中世	
:塘228		<del> </del>		60	60	20	190,40	中世	灰混、
十.廣228 十.廣229	3 8 06 E d	円形	III a	88	80			中世	灰龍
	3 8 06 F.d	円形	Ша			14	190.05	* * *	
上壙230	3 8 06 E e	円形	Па	114	109	38	189.77	中世	
1:壙231	3 8 06 E d	円形	III a	103	94	14	190.08	中世	
十.壙232	3 8 06 E c	不整门形	Ша	128	98	22	190.08	申順	
上壙233	3 8 07 E b	円形	Шa	110	101	69	189.69	中世	
上壙234	3 8 08 E a	円形	Шь	61	53	19	190,28	申世	
十.壙235	3 8 08 E a	隅丸長方形	II a	258	116	75	189.70	中世	
上壙236	3 8 08 E b	方形	Шр	70	67	34	190.13	中世	
1:壙237	3 8 07 E b	不整円形	Ша	106	89	24	190,11	中世	
十.壙238	3 8 07 E c	円形	Ша	106	(85)	20	190.31	中世	
上壙239	3 8 08 E c	円形	Па	56	19	26	189.99	中世	
1:壙240	3 8 08 E c	楕円形	Пр	157	115	31	189,93	中世	
十.壙241	3 8 08 E c	円形	II a	51	48	10	190,12	申順	
上壙242	3 8 08 E c	円形	Ша	60	55	15	190.08	中世	
1:壙243	3 8 08 E c	楕円形	III a	141	112	32	189,91	中世	
十.壙244	3 8 08 E d	円形	Ша	136	126	69	189.41	中世	
上壙245	3 8 09 E c	楕円形	Па	208	93	70	189.26	中世	
1:壙246	3 9 00 E a	円形	Πa	119	109	13	190.26	中世	
十.壙247	3 9 00 E b	楕円形	Шb	102	76	7	190.19	中川	
上壙248	3 9 00 E c	長方形	Πa	327	98	28	189.87	中世	
1:壙249	3 9 00 E c	円形	Шb	75	63	39	189.80	申世	
土壙250	3 9 00 E d	楕凹形	Ша	183	90	34	189.68	中川	
上壙251	3 9 00 E e	隅丸長方形	Ша	221	95	15	189.80	中世	
土壙252	3 9 00 E d	円形	Шc	89	84	32	189.62	中世	
土壙253	3 9 01 E c	不整楕円形	Шь	83	52	16	190.08	中世	
上壙254	3 901 Eb	円形	III a	83	79	24	190.06	月世	
土壙255	3 901 Eb	円形	Па	70	59	12	190.08	中世	
土壙256	3 901Eb	円形	ШЬ	86	81	36	189.94	中世	
上壙257			Шь	130	122	29	189.94	中世	
土城257 土城258	3 9 01 E b	円形		82		28	189.94	中世	
	3 9 01 E b	-	III a		71				
土壙259	3 9 02 E c	円形	Ша	119	106	28	189.94	中世	

#### 土壙一覧表

掲載遺構名	地区名	平面形	断面形	長帕 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海抜高 (m)	時期	備考
土壙260	3 9 02 E c	隅丸長方形	Ша	164	110	53	189.69	中世	
上壙261	3 9 03 E b	楕円形	Шþ	167	131	64	189.59	中世	
1:壙262	3 9 05 E a	楕円形	Шe	195	119	19	189.83	申世	
土壙263	3 9 02 E b	-	-	-	_	20	190.00	中世	
上壙264	3 9 02 E a	楕円形	Шb	168	94	27	190.03	中世	
土	3 9 05 Dh	不整楕円形	Шa	(258)	(263)	(24)	189.94	中世	大きく破壊をうける
土壙266	3 906Dh	不整楕円形	Шa	470	274	17	190.00	中世	上錘が集中出土
上壙267	3 9 08 C j	楕円形	Па	156	97	22	189.09	中世	
上壙268	3 9 09 Di	長楕円形	Шa	252	102	42	189.32	中世	
土壙269	4 0 00 Di	長楕円形	Ша	298	70	27	189.48	中世	
上壙270	4 0 00 D i	長楕円形	Ша	258	105	21	189.43	中世	
土壙271	4 0 00 Dj	隅丸長方形	Шa	199	114	18	189.42	中世	
土壙272	4 0 02 Dj	長楕川形	Ша	281	135	90	188.22	中世	
上壙273	4 0 03 Dj	長楕円形	Шa	310	108	43	188.59	中世	
土壙274	4 0 04 Dj	長楕円形	Шa	314	96	67	188.39	中世	
土壙275	4 0 03 Dj	長楕川形	Шс	470	126	64	188.34	中世	
上壙276	4 0 04 Dj	長楕円形	Шс	523	104	27	188.73	中世	
土壙277	4 0 07 E a	楕円形	Шb	123	69	30	188.41	中世	
土壙278	4 101Df	長楕川形	Ша	134	44	10	188.40	中世	
上壙279	4 1 01 Dg	円形	Ша	104	82	22	188.40	中世	
土	4 1 02 D f	円形	Шa	82	80	22	188.30	中世	
土壙281	4 102Df	円形	Ша	98	80	22	188.30	中世	
上壙282	4 1 02 Dg	隅丸方形	Шa	128	106	34	188.30	中世	底面に石有
土壙283	4 102Dh	不整円形	Шb	235	195	60	187.85	中世	
土壙284	4 104Df	不整円形	ШЪ	110	105	25	187.92	中世	
上壙285	4 104De	楕円形	Па	122	100	54	187.70	中世	
土壙286	4 1 04 D f	長楕円形	Πa	280	115	45	188.00	中世	
土壙287	4 105De	円形	ШЪ	95	85	38	187.94	中世	
上壙288	4 1 05 Dg	円形	Πa	80	75	95	187.25	中世	
土壤289	4 104Dh	円形	Шρ	75	62	14	188.15	中世	
1:塘290	4 1 04 Di	楕円形	Ша	250	185	58	187,60	中世	

#### 焼成土壙一覧表

掲載遺構名	地区名	平面形	断前形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (m)	時期	備考
焼成土壙1	3 9 05 C e	長方形	Πa	172	103	5	189.40	縄文晩期	
焼成上塘 2	3 9 03 C i	隅丸方形	Шa	127	120	17	188.90	縄文後期	
焼成土壙 3	3 9 05 Cj	長凹形	Ша	230	110	40	188.80	縄文晩期	
焼成土壙 4	3 9 07 C i	円形	Шa	107	91	20	188.80	縄文後期	
焼成上壙 5	3 9 07 C i	楕円形	Шa	93	79	10	188.90	縄文後期	
焼成土壙 6	3 9 04 C i	隅丸方形	Шa	152	133	44	188.90	縄文晩期	
焼成土壙 7	3 9 04 C j	円形	Шa	95	95	24	189.10	縄文晩期	
焼成上壙 8	3 9 05 C i	楕円形	∭a	190	150	42	188.80	縄文晩期	

### 火処一覧表

掲載遺構名	地区名	平面形	長軸 (cm)	知軸 (cm)	深さ (cm)	上面海抜高 (m)	時期		備	考
火処1	3805Ch	楕円形	64	51	_	190	縄文			
火処2	3 8 08 C i	不整门形	48	38	13	190	糾文			
火処3	3 9 06 Dc	楕凹形	60	50	_	189	縄文晩期			
火処 4	3 9 04 C e	円形	80	60	_	190	縄文			
火処 5	3 9 04 C g	円形	70	55	_	190	組文			
火処 6	3 9 06 Cg	凹形	80	60	_	189	縄文			
火処7	3906Cg	円形	100	75	_	189	縄文			
火処 8	4 0 07 C c	楕円形	42	38	16	189	糾文	焼上範囲長径 3	34cm	
火処9	3 8 08 D c	不整形	43	35	6	189	弥生中期			
火処10	3 9 00 D c	不整形	80	45	5	190	弥生中期			
火処11	3 9 00 D c	不整门形	62	54	8	190	弥生中期			
火処12	3 9 00 D c	不整形	67		9	190	弥生中期			
火処13	3 9 02 D c	不整形	139	55	12	190	弥生中期			
火処14	3 9 02 Da	不整门形	112	61	13	190	弥生中期			
火処15	3 9 02 D c	不整円形	68		10	190	弥生中期			

#### 溝一覧表

掲載遺構名	地区名	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	方 向	時 期	備考
溝1	3 8 05 C i∼ 3 8 06 C j	Ша	86	20	北西~南東	縄文晩期	NO.47河道中央
満2	3 8 06 Cj	Ша	36	25	北西~南東	縄文晩期	NO.47河道内
溝3	3 609Ea~3 702Ec	Ша	70	54	南東	弥生	
溝 4	3602Dg~3800Eg	ШЬ	250	121	南東	弥生後期	上層が古墳時代・古代の溝
満 5	3803Ci~3802Cg	Пa	57	10	南西	弥生	
溝6	3807Cc~3809Cb	Ша	54	19	南西	弥尘中期	
溝 7	3 809Cb~ 3 809Cc	Ша	80	20	西	弥生中期	
満8	3 901Bj~3 903Bj	Ша	158	27	南	弥生中期	
溝 9	3 9 02 C d~ 3 9 04 C c	Ша	60	17	南	弥尘中期	
満10	3 8 09 C j	Шь	45	12	南	弥生中期	
溝11	3 809Cj~3 809Da	Шb	83	13	北東	弥生中期	
溝12	3 809Cj~3 900Cj	Шb	68	15	南西	弥生中期	
満13	3 8 08 Da~ 4 0 00 Ci	III a	400	63	南	弥生中期~後期	
溝14	3 8 08 Da	Ша	133	19	南	弥生中期~後期	
溝15	3 902Db~3 905Da	Ша	136	28	南	弥生中期~後期	溝14から派生、溝13と合流
満16	3 808Da	III a	30	36	東	弥生中期~後期	満13と満14を結ぶ満
溝17	3 8 08 Da	Ша	140	33	南	弥生中期~後期	溝13と溝14を結ぶ溝
溝18	3 808Dc	Ша	56	8	型	弥生	
満19	3 808Dc	Ша	25	3	南東	弥生.	
溝20	3 904Da~ 3 904Dc	Ша	44	12	東西	弥生	溝13より派生
溝21	3 905Db~3 908Dc	Ша	42	14	南	弥生後期	
満22	3 906Da~3 907Db	III a	85	30	南	弥生後期	
溝23	3 908Da~3 908Dc	Ша	50	18	南東	弥生後期	
溝24	4 0 00 De	Ша	63	17	南東	弥生後期	講21から派生、講28・29と合流か
満25	3 9 04 Dh	Шр	160	49	南	弥生中期	溝26と合流
溝26	3 9 04 Dh	Ша	192	28	南東	弥生中期	HIPSO CELLIDIO
溝27	4 0 02 C i	Ша	300	28	西	弥生中期	講13から派生、河道7と合流か
滞28	4 0 01 Df~ 4 0 03 Df	Шр	620	95	南	弥生中期	HATON DIN IN PINET CHANG
溝29	4 0 01~03 Df	Шр	200	34	南	弥生中期	
溝30	4 004 Ea~ 4 008 Ea	ШР	282	43	南		
溝31	4 0 06 · 07 Dg	ШР	120	22	型	弥生後期	
満32	4 0 07 Dh	Шр	88	27	南	弥生	
11305	100/DII	Шa	69	17	南	占墳	
		шь	75	22	<b>南</b>	古墳	
溝33	3 6 08 Di∼ 3 8 06 Ea	Шр	106	25	南	占墳	
		Ша	74	10	南	占墳	
溝34	3 7 04 Dh	Ша	63	12	南西	古墳	
満35	3 7 08 E a	Ша	72	14	南西	占墳	竪穴住居25を取り巻く
溝36	3 8 05 Dh	Шb	10	4	東西方向	古墳	WATER CONTROL OF THE PARTY OF T
溝37	3 9 02 Cj~3 9 07 Db	Шa	500~900	20~26	北~南	古墳	古墳群 (3~7号墳) の墓道か?
満38	3 6 04 Dg~ 3 6 08 Di	Ша	90	9	南	占代	日頃前(3・1万頃)の霊血が:
溝39	3 605Dh~3 801Ee	_	180	33			造物文品 陶田
No.		Шb			南山	古代	遺物多量、陶馬
溝40 溝41	3 6 06 Dh~3 7 03 Ea 3 6 09 Di~3 6 09 Dj	III a	108 160	17	西西	古代	
溝42		Ша	275				
溝43	3 700Dj~3 701Ea	III b III a	55	36 22	南南	古代	
	3 7 02 Eb~3 7 06 Eb			15			相談を日本
満44 港45	3 800Dc	Mb	90		南	古代	炬形を呈す。
溝45	3 803Dg	Шb	140	35	南	古代	
溝46	3 7 07 E a	III a	86	9	南西	古代	
満47	3 801 Ea	Ша	26	12	南	古代	
溝48	3 7 09 E d~ 3 8 02 E e	Шb	111	19	南東	古代	
溝49	3 6 01 Dd~ 3 6 05 Db	II a	90	40	南	中世	
満50	3 6 08 D d~ 3 7 00 D c	Ша	130	43	南東	中世	
溝51	3 6 08 De~ 3 7 00 De	Шb	25	5	南	中世	
溝52	3 6 06 Df~ 3 6 08 Df	ШЬ	30	10	単	中世	
溝53	3 605Dg~3 608Dh	IIIb IIIb	75 55	5 10	南 南東	中世	
溝54	3 608Dh∼3 701Dg	Ша	190	30	南	中世	
満55	3 608Di~3 609Di	Шþ	67	21	南	中世	
溝56	3 7 03 Ci~ 3 7 03 Cj	Шa	150	28	南東	中世	
溝57	3706Dd~3800Cj	Ша	105	16	南西	中世	
清58	3 801Db~3 801Da	Шb	65	6	南西	中世	
溝59	3 801 Cj~ 3 801 Da	Шb	24	9	北	中世	

#### 溝一覧表

掲載遺構名	地区名	断面形	幅(cm)	深さ(cm)	方 向	時期	備 考
清61	3 802Da~ 3 802Cj	Шb	30	15	南西	中世	
溝62	3 802Da~ 3 802Cj	Шb	30	13	南西	中世	
溝63	3 8 02 Da	Шь	26	6	南西	申世	
満64	3 8 02 Da	ШЪ	83	21	南西	中世	
溝65	3 801 Dd~ 3 804 Da	ШЬ	76	24	南西	中世	
溝66	3 7 08 D f~ 3 7 09 D f	Шь	22	19	南西	中世	
満67	3 800Df~ 3 801Dc	Шь	27	9	南西	中世	
溝68	3 8 00 D f	ΠЬ	22	15	南四	中世	
溝69	3 7 05 Dh	Шь	59	6	南東	中世	
満70	3 7 05 Di∼ 3 7 07 Dh	Шь	178	34	南	中世	
溝71	3 7 06 D f	Шþ	34	25	南西	中世	
'dhe o	3 903Cb~ 3 905Ca	Шь	75	12	東西	中世	
溝72		Шь	95	24	南		
溝73	3 8 08 De~ 3 9 05 Dc	Шa	125	15	南	中世	
溝74	3 903Da∼3 903Dc	Ша	80~90	10~18	東西	中世	
滞75	3 905Dc~ 3 906Dc	Ша	60	9	北東~南西	中世	
溝76	3 905Dc~3 906Dc	Ша	100	6~12	北~南	中世	
溝77	3 906Dc~3 907Dc	Шa	40~55	5	北~南	中世	
滞78	3807Dh~3900Ea	Ша	48	24	南~東	中世	
溝79	3804Ec~3805Eb	Шb	122	17	ल	中世	
溝80	3805Ec~3805Ed	Шb	64	22		中世	
満81	3805Ed~3806Ec	Ша	136	12	南西	中世	
溝82	3 9 01 E d~ 3 9 02 E e	Шb	183	52	北西~ 南東	中世	
溝83	3 900Eb~3 900Ee	Шb	100	24	東西	中世	
淸84	3 9 00 E c	Шb	50	39	東西	中世	
溝85	3 907Dd~4 000Dd	Ша	40~60	6~20	掛	中世	
溝86	4 0 00 Df~ 4 0 02 Df	Шa	237	32	南東	中世	
満87	4 0 00 Df~ 4 0 02 Dg	Ше	220	26	南東	中世	
溝88	3 908Eb~4 003Ea	Шb	435	45	閛	中世	複数溝の重複
溝89	4 0 02 Dg~4 0 08 Ea	πь	410	50	南東	中世	
affino	4 006Di~4 008Dj	Шр	516	101	幫	中世	
溝90	4 0 08 Di~4 1 00 Di	Шa	260	58	南東	中世	
溝91	4 007 Dg~4 008 Dh	шр	260	37	南東	中世	
溝92	4 0 09 Di	Ша	44	34	西	中世	
清93	4 101De~4 101Df	Шb	146	47	南東	中世	
溝94	4 1 02 D f~ 4 1 03 D f	Шa	45	10	南西	中世	
溝95	4 1 03 Dg	Шb	62	21	南東	中世	
清96	4 1 03 D f	Шb	72	12	南東	中世	
溝97	4 106Di~4 106Dh	Шa	90	15	南西	中世	
溝98	4 105Di~4 106Dj	Шb	40	13	南東	中世	

### 河道一覧表

掲載遺構名	地区名	断面形	⊯ (m)	深さ (m)	方 向	時 期	備考
河道 1	3 801Da~4 908Di	Шb	(25.0)	(1.80)	南東	縄文	
河道1・ 2分岐部	3 801 Da~3 803 Dc	Шb	13.0	0.70	北西~南東	縄文後期~晩期	
河道 2	3 805Da~ 4 900Di	Шb	21.0	1.50	北から南	縄文	
河道3A	3 9 00 C c	Шb	_	1.30	北東から南西	縄文	
河道 3 B	3 9 00 C c	Шþ	26.5	1.50	北東から南西	縄文	
河道 3 C	3 9 00 Bj	Шb	_	_	北東から南西	縄文	
河道 4	3 9 04 C i	Шb	15.5	2.50	北から南	縄文	
河道 5	3 8 05 · 06 Cf · g	Ше	(8.4)	1.04	南西	縄文~弥生	
河道 6	3 9 02 B i ~ 3 9 04 B j	Ша	_	0.70	南東	弥生中期	
河道7	3 902∼09Df~i	ШЬ	(24.0)	1.50	南	弥生.	
門理 /	4 0 01~06 Df ⋅ g	Шb	14.5	0.98	南	弥生	
河道8	3 6 02 Dg~ 3 8 00 Eg	Шb	1000.0	87.00	南東	古墳	最下層が弥生時代後期
河道 9	3 608Df~ 3 706Ea	ШЬ	735.0	42.00	南東	古墳	

### 古墳·箱式石棺一覧表

掲載遺構名	地区名		墳	Æ		周	滞		埋 3	幸 施 ii	Q.		出 出 遺 物	備 考
拘戦退奪者	地区名	墳形	長軸(m)	短軸(m)	高さ(cm)	幅(m)	深さ(cm)	種類	主軸	長輔(m)	短軸(m)	高さ(cm)	11 丁. 坦 柳	भाग रह
久川原 1 号墳	3 7 05 Cj	円墳	14.8	_	_	2.60	27.0	_	_	_	_	_	_	
久田原 2 号墳	3 8 04 Da	_	_	_	_	_	_	横穴式石室	N 18° W	4.30	1.30	67.0	須恵器・上師器・鉄器・製鉄炉壁	墳丘なし。
久Ⅲ原 3 号墳	3 9 03C j	円墳	(11.4)		35	_	_	_	_	_	_	_	_	墳丘半壊。主体部不明
久田原 4 号墳	3 9 01 · 3 9 02Da	円墳	(11.0)	_	35	1.00	35.0	横穴式石室	N-69°-E	1 ~ 5	1.20	(110.0)	須恵器・上師器	
久田原 5 号墳	3 9 02Db	円墳	13.5	11.8	60	1.60	25.0	横穴式石室	N 42° E	(7,00)	(1.50)	(40.0)	須恵器・土師器・鉄器・玉	
久田原 6 号墳	3 9 03Db • Dc	円墳	8.2	6.9	40	1.40	18.0	木棺直葬	N-69° -E	3.69	(1.35)	27.0	須恵器・土師器・鉄器	
久田原7号墳	3 9 04Dc	円墳	9.1	8.8	25	1.60	21.0	竪穴式石室	N-68°-E	(2.72)	0.32	(34.0)	須恵器・上師器・玉	周溝から遺物出上
久HI原 8 号墳	3 9 03Df	_	_	_	_	_	_	横穴式石室	N 16° W	4.20	1.00	80.0	須恵器 土師器	
久田原 9 号墳	3 9 06Dc	_	_	_	_	_	_	竪穴系小石室	N-12* - E	3.20	1.54	_	須恵器	数値は掘り方規模
久川原10号墳	3 9 07 De	円墳	5.7	5.2	_	1.50	11.0	木棺直葬?	N-85° -E	3.27	1.54	23.0	なし	墳丘は削平
久田原11号墳	4 0 01 Df	方墳	13.1	13.1	-	3.60	70.0	_	_	-	_	-	土師器・鉄器	墳丘・埋葬施設は削平で消滅
久田原12号墳	4 0 04 Dh	_	_	_	_	-	_	竪穴式石室?	N-20°-W	(2.15)	0.74	(38.0)	須恵器 (×印墨書)	墳丘は削平されるか

掲載遺構名	地区名		墳	丘		周	溝		埋	膵 施 i	<b>2</b>		出土遺物	li:	*
化軟退售台	地区石	墳形	長軸(m)	短軸(m)	高さ(cm)	幅(m)	深さ(cm)	種類	主軸	長軸(m)	短軸(m)	高さ(cm)		THI I	75
箱式石棺1	3 8 08 E a	_	_	_	_	_	-	石棺	N-9" -E	0,86	0,32	0,25	須恵器 鉄器 (刀子)		
新式石棺 2	3 9 00 D c	_	_	_	_	_	-	石棺	N-12° -E	1.46	0.36	(32.0)	鉄器片(鏃か?)		
箱式石棺3	3 9 00 D c	_	_	_	_	_	_	石棺	N-5.5° -W	1.98	0.40	(56.0)	なし		
箱式石棉 4	3 9 02 D c	_	_	_	_	_	_	石棺	N-81° -W	1.41	0.42	(30.0)	須恵器		
箱式石棺 5	3906Cg	_	_	_	_	_	_	石棺	N-75°-E	0.89	0.35	0.0	なし		

掲載	No. 1 decision from	glask error f	DUMS.	L.	測値(cn	1)	<b>A</b> 500	yl Padala	100 ABS - The Section Section 100	2,44-	14
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1		縄文土器	深鉢?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。内・ 外面-煤。		
2		縄文1:器	深鉢?	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-貝殻条痕のちナデ。内面-ナ デ?。		
3	B07-1-77-1-1-4	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-貝殻条痕のちナデ。内面-貝 殻条痕。		
4	竪穴住居 1	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-ミガキ・貝殻条痕のちナ デ。内面-ナデ。外面-黒斑。		
5		縄文土器	浅鉢	20.3	_	16.9	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-条痕のちナデ。内面-ナデ。 内・外面-黒斑。外面-煤。		
6		縄文土器	底部片	_	6.6	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-ナデ。内面-調整不明。		
7		縄文上器	浅鉢	33.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤。		
8		縄文上器	深鉢	24.5	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		内·外面-貝殼条痕。黑斑。		
9		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)				
10		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黃橙色(10YR6/4)		外面-条痕。内面-条痕のちナデ。 外面・内面-黒斑。		
11		縄文上器	深鉢	-	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-条痕。内面-ナデ。外面-煤。		
12		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-ケズリ。内面-ナデ。外面一 部と内面-黒斑。		
13		縄文土器	深鉢				鈍褐色(7.5YR5/4)		内・外面ーナデ。		
14		縄文上器	深鉢	24.8	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)		外面一貝殻条痕。内面-ナデ。		
15	製売分足の	縄文上器	深鉢	30.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面 貝殻条痕のちナデ?。内面 ナデ。		
16	│竪穴住居2	縄文土器	深鉢	29.1	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-貝殼条痕。内面-ナデ。内 面 黒斑。		
17		縄文土器	深鉢	30.0	-	-	鈍黄橙色(10YR7/2)		外面-貝殼条痕。煤。内面-ナデ。 黒斑。		
18		縄文土器	深鉢	34.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面 貝殻条痕。内面 ナデ。外面-黒斑と煤。		
19		縄文土器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)				
20		縄文上器	浅鉢	-	_	1	灰黄色(2.5Y6/2)				
21		縄文上器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)				
22		縄文土器	浅鉢				鈍黄色(2.5Y6/4)		外面-煤。内面-黒斑。		
23		縄文土器	浅鉢	31.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面ナデ。煤。		
24		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		内・外面-貝殻条痕のちナデ。		
25	竪穴住居3	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍褐色(7.5YR5/3)		外面-条痕。煤。内面-条痕のちナ デ。黒斑。		
26		縄文土器	浅鉢	48.2	_	_	鈍黄色(2.5Y6/3)		外面 黑斑。		
27		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面全体-煤。		
28		縄文土器	深鉢	_	_	-	オリーブ黒色 (5Y3/1)		外面-只殻条痕のちナデ。内面-ナ デのちミガキ。		
29		縄文土器	深鉢	-	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。口縁 内外面-黒斑。		
30		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外而-貝般条痕。内而-ナデ。		
31		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/4)		内面-ヘラミガキ。内・外面-黒斑。		
32	竪穴住居 4	縄文土器	深鉢	28.2	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		□縁内・外面 条痕のちナデ。		
33		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-条痕。黒斑。煤。内面-条痕 のちナデ。黒斑。		
34		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-貝殼条痕。黑斑·煤。內面- 黑斑。		
35		縄文上器	深鉢	-	_	_	褐灰色(10YR5/1)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。		
36		縄文上器	浅鉢	-	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-黒斑。		
37		縄文土器	浅鉢	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		内・外面-黒斑。		
38	袋状  : 擴 5	縄文上器	深鉢	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)		外面-条痕のちナデ。黒斑内面-ケ ズリのちナデ。黒斑。		
39	袋状土壙 7	縄文上器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		内・外面-条痕のちナデ。		
40		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
41	袋状  : 壙11	縄文上器	浅鉢	30.0	_	_	鈍黄橙(10YR7/2)		内・外面 ヘラミガキ。外面に黒 斑。		

BH 105				54	  測値(cn	n)					—
掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	備。	K
42	袋状土壙13	縄文上器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)				
43	袋状土壙14	縄文上器	浅鉢	41.5	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)				
44	炸成土壤 1	縄文土器	浅鉢				鈍黄褐色(10YR5/3)				
45	焼成土壙 4	縄文土器	浅鉢?				暗灰黄色(2.5Y5/2)		外而-結節縄文 (LR)・ヘラミ ガキ。		
46		縄文上器	深鉢	-	-	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文(R L)・巻貝条痕。 内面-ナデ。黒斑。47~50同一個 体か。		
47		縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR6/4)		外而-縄文(RL)・巻貝条痕。 内面 ナデ。黒斑。		
48		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-縄文(R L )。内面-ナデ。 黒斑。		
49		縄文土器	深鉢	_	ı	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外血-沈線のち縄文(R L )。内 面-剥離。		
50	土壤13	縄文土器	深鉢				鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-沈線のち縄文(R L )。内 面 ナデ。		
51		縄文上器	深鉢	_	1	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-沈線のち縄文(RL)。内 面-ナデ。		
52		縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-沈緑のち縄文(R L )。内 面-ナデ・黒斑。		
53		縄文土器	深鉢				鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-縄文(R L)。内面-ナデ。		
54		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR6/3)		外面-縄文(R L)。内面-ナデ。		
55		縄文上器	浅鉢	-	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-ヘラミガキ・煤。		
56		縄文土器	深鉢	19.4	_	-	鈍黄橙色(10YR7/2)		外面-剥落。内面-条痕。		
57	土  蛭/1	縄文土器	深鉢	-	_	_	暗灰色 (N3/)				
58	十.壙41	縄文土器	浅鉢	_	_	_	黄灰色(2.5Y5/1)				
59		縄文上器	浅鉢	_	_	_	黒褐色(10YR3/1)				
60	上壙47	縄文土器	注[土	_	_	_	橙色(2.5YR6/6)		内·外面-黒斑。		
61	Lutina	縄文土器	深鉢	48.0	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-ナデ・ケズリ。内面-ナデ。		
62	土壙49	縄文土器	浅鉢	38.8	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-黒斑。		
63	土壤50	縄文上器	深鉢	39.8	-		鈍褐色(7.5YR6/3)		外面-ナデ・ケズリ。内面-ナデ。 内・外面-黒斑。		
64	土壙51	縄文土器	深鉢	32.0			灰黄褐色(10YR5/2)		外面-貝条痕。内面-貝条痕のちナ デ。内・外面-黒斑。		
65		縄文土器	深鉢	_	_	_	喑灰黄色(2,5Y5/2)		外面-縄文 (RL)。内面-ナデ。		
66	土壙55	縄文上器	深鉢	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-縄文 (RL)。内面-ナデ。		
67		縄文二器	深鉢	_	_	_	暗灰黄色 (2.5Y5/2)		内・外面-黒斑・煤。縄文 (R L)。		
68	上塘56	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)		外血-ナデ。煤。内血-ナデ。		
69		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面-沈線のち縄文 (R L)。		
70		縄文上器	深鉢?	_	_	_			外面-ナデ。内面-縄文(RL)。		
71		縄文土器	深鉢	_		_	灰色 (7.5Y4/1)		外面-ዲ文(R L)・ヘラミガキ。 内面-ヘラミガキ。		
72		縄文上器	深鉢	_		_	灰色(7.5Y4/1)		外面 縄文 (RL)。 内面 ヘラミ ガキ。		
73		縄文土器	深鉢	32.8		_	鈍褐色(7.5YR5/4)		外面:縄文 (RL)。内面-縄文 (RL)。内・外面-黒斑。		
74		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)		(RL)。内・外田-黒斑。 外面-縄文(RL)。内面-縄文 (RL) の後決線。内面-黒斑。		
75	土器溜まり1	縄文上器	深鉢	_		_			外面-縄文(R L )。内面-沈線の		
76		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		ち縄文 (RL)・ナデ。 外面-ヘラミガキ・縄文 (RL)。		
-											
77		<b>刹文上器</b>	深鉢	_	_	_	明褐色 (7.5YR5/6)		外面 ヘラミガキ・縄文 (RL)。 内面-ナデ。		
78		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰色 (5Y4/1)		外面-縄文 (RL)。内面-ヘラミ ガキ・沈線2条の後縄文 (RL)。		
79		縄文土器	深鉢	33.3	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)				
80		縄文土器	深鉢	25.6	_	_	鈍黄褐色(10YR5/4)		外面-縄文 (R L)・ヘラミガキ。		

掲載				į	測値(cr	n)					
番号	掲載遺構	種別	器種		底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
81		縄文上器	深鉢	-	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-縄文 (RL)。		
82		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文(R L)。		
83		縄文土器	深鉢	_	-	_	鈍黄褐色(10YR5/2)		外面-縄文(R L)。		
84		縄文上器	深鉢	_	_	_	明褐色(7.5YR5/6)		外面-縄文(R L )。内面-ヘラミ ガキ。黒斑。		
85		縄文上器	深鉢	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面 縄文 ( R L )。内面 ヘラミ ガキ。		
86		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面 縄文(R L)。内面 ナデ。		
87		縄文土器	深鉢				鈍黄褐色(10YR5/3)		外而-縄文(LR)・ケズリ。内 面 ケズリ。		
88		縄文上器	深鉢	_	_	_	褐灰色(10YR5/1)		外面-縄文(LR)・ケズリ。		
89		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文(L R)・ケズリ。		
90		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-縄文(LR)・ケズリ。		
91		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		外面-縄文(LR)・ナデ。		
92		縄文土器	深鉢	_	_	_	褐灰色(10YR5/1)		外面-ケズリ・縄文(LR)。		
93		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-ケズリ・縄文 (LR)。		
94		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-ケズリ・縄文 (LR)。		
95		縄文土器	深鉢	_	_	_	橙色(7.5YR7/6)		外面 縄文(LR)・ナデ。		
96		縄文土器	深針				鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文(LR)・ナデ。		
97		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)				
98		縄文上器	深鉢	38.7	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)				
99		縄文土器	深鉢	30,7	_	_	明褐色(7.5YR5/6)				
100		縄文土器	深鉢	26.0	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)				
101		縄文土器	深鉢	_	-	_	橙色 (7.5YR6/6)				
102		縄文上器	深鉢	_		_	褐色 (7.5YR4/3)				
103		縄文土器	深針				橙色 (7.5YR7/6)				
104		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)				
105	上器溜まり1	縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)				
106		縄文土器	深鉢	-	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
107		縄文土器	深鉢	_	_	_	褐色 (7.5YR4/4)		外面-ヘラケズリ。内面-ナデ。		
108		縄文土器 縄文土器	深鉢	_	_	_	黒褐色 (2.5Y3/1) 橙色 (7.5YR6/6)		<ul><li>外面-ナデ。内面-ヘラミガキ。</li><li>外面-条痕の後ナデ。内面-ナデ。</li></ul>		
110		縄文上器	(木)外				反黄褐色(10YR5/2)		外面・ペラミガキ。		
111		縄文土器	深鉢	23.1					内・外面・ナデ。		
112		縄文土器	深鉢	19.2	_		褐色 (7.5YR4/6)		PN - 2 MILL - J J o		
113		縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)				
114		縄文上器	深鉢	_		_			外面-ケズリ?。黒斑。		
115		縄文土器	深鉢	_	_	_	明黄褐色(10YR6/6)		外面-貝殻条痕のちナデ。内面-ケ ズリ。		
116		縄文土器	深鉢?	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		内・外面-ナデ。		
117		縄文土器	深針	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		内・外面-ケズリ。内面-黒斑。		
118		縄文上器	深鉢?	_	_	_	橙色 (7.5YR6/6)		外面・ナデ。		
119		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)		外面ナデ。		
120		縄文土器	深鉢	_	_	_	橙色 (7.5YR6/8)				
121		縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-ヘラミガキ。		
122		縄文上器	深鉢?	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/4)				
123		縄文上器	深鉢	49.2	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-黒斑と煤。内面-黒斑。		
124		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-巻貝?条痕。		
125		縄文土器	深鉢	_	_	_	黑褐色(10YR3/1)		外面二枚貝条痕。内面ナデ。		
126		縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。		
127		縄文上器	深鉢	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-二枚貝条痕のちナデ。内面- ナデ。黒斑。		
128		縄文上器	深鉢	_	6.0	_	鈍黄褐色(10YR5/4)		内面ナデ。		
129		縄文土器	深鉢	_	5.4	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		内・外面 ケズリ。外面 黒斑。		
130		縄文土器	深鉢		7.0		橙色(7.5YR6/6)		内・外面-ナデ。底面-ナデ。		
131		組文上器	深鉢	_	5.8	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。		

掲載				ů	l測値(cn	1)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	備考
132		縄文土器	深鉢	-	6.4	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面 ナデ。黒斑。	
133		縄文土器	深鉢?	_	4.9		鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-オサエ・ナデ。内面-ナデ。 底-ナデ?。	
134		縄文上器	深鉢	_	6.4	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。内面-黒斑。	
135		縄文土器	鉢	15.8	_	_	灰褐色(7.5YR4/2)		外面-縄文(R L)。煤。内面-黒 斑。	
136		縄文上器	鉢	_	_	_	黒褐色(10YR3/1)		外而-縄文(RL)・ヘラミガキ。	
137		縄文上器	鉢	16.9	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文(R L )。内·外面-黑斑。	
138		縄文土器	鉢	_	_	_	黄灰色(2.5Y4/1)		外面-縄文(L R)。内面-ヘラミ ガキ。内・外面-黒斑。	
139		縄文上器	鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/4)		外而-縄文(L R)。内而-ナデ。	
140		縄文土器	鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文 ( L R )。内面-ヘラミ ガキ?。	
141		縄文土器	鉢?	-	-	-	灰色 (5Y4/1)		外面-縄文(R L)・ヘラミガキ。 内面 調整不明瞭。	
142		縄文上器	鉢	-	-	-	暗灰色(N3/)		外面-縄文 (RL)・ヘラミガ キ?。	
143		縄文土器	浅鉢	_	_	_	褐灰色(10YR5/1)		外面 縄文(R L )。内面 ナデ。	
144		縄文土器	浅鉢	_	_	-	明赤褐色(5YR5/6)		外面-縄文(R L )。内面-ナデ。	
145	上器溜まり1	縄文上器	浅鉢	-	-	=	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-縄文(R L)・ヘラミ ガキ。	
146		縄文土器	深鉢	-	-	-	灰色 (5Y4/1)		外面-縄文(L R)・ヘラミガキ。 内面-ヘラミガキ。	
147		縄文上器	浅鉢	_	-	-	灰黄褐色(10YR4/2)		外面-結節縄文。内面-ナデ。	
148		縄文上器	浅鉢	27.8	_	_	鈍褐色(7.5YR5/3)		外血-条痕のちナデ。内血-ナデ。	
149		縄文上器	浅鉢?	_	_		黄褐色(10YR5/6)		外面-ヘラミガキ。	
150		縄文土器	浅鉢	-	_	-	灰褐色(7.5YR4/2)		内・外面-ナデ。	
151		縄文土器	浅鉢				鈍黄褐色(10YR5/4)		内・外面-ナデ。外面-黒斑。	
152		縄文上器	浅鉢	_	-	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-ナデ。	
153		縄文土器	浅鉢	_	_	_	灰黄色(2,5Y6/2)		内・外面-黒斑。	
154		縄文土器	浅鉢	_	_	_	灰白色(10YR8/2)		外面-黒斑。内面-ナデ・ヘラミガ キ。	
155		縄文上器	浅鉢	-	-	_	褐色(10YR4/4)		内・外面-ヘラミガキ。	
156		縄文土器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(7.5YR4/2)			
157		縄文土器	浅鉢	-	-	_	鈍黄褐色(10YR4/3)		外面-ヘラミガキ。	
158		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外而-ヘラミガキ。	
159		縄文上器	浅鉢	-	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面ナデ。	
160		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
161		縄文土器	深稣	_	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/3)		内·外面-貝条痕。	
162		縄文上器	深鉢	-	_	_	鉅黄松色(10YR6/3)		外面-貝条痕。内面-ナデ。	
163		縄文土器	鉾	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。内面-ケズリ・条 痕。	
164		縄文上器	深鉢	_	_	_	橙色 (7.5YR6/6)			
165	\$01\X 1	縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)			
166	河道 1	縄文土器	深鉢	_	_	_	橙色(7.5YR6/6)		外面 縄文(RL)。内面 ケズリ。	
167		縄文土器	鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ヘラミガキ・縄文(LR)。	
168		縄文上器	鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-縄文(LR)・ヘラミガキ。	
169		縄文土器	鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-ヘラミガキ・縄文(LR)。	
170		縄文土器	稣				鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-縄文 (LR)。	
171		縄文上器	鉢	_	2.8	_	褐灰色(10YR5/1)			
172	河道1・2分岐 部	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-貝殻条痕。	
173		縄文土器	浅鉢				鈍黄色 (2.5Y6/3)		内・外面-条痕。	
174	河道2上流部	縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-条痕。縄文(R L)。	

掲載					測値(cn	1)					
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
175		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍褐色 (7.5YR6/3)		内·外面-条痕。		
176		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(5YR5/4)				
177		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)				
178		縄文土器	深鉢				浅黄橙色(10YR8/4)				
179		縄文土器	深針	_	_	_	黑 (2.5Y2/1)		内・外面-貝殻条痕。		
180		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-貝殻条痕。		
181	河道2上流部	縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
182		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)				
183		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
184		縄文土器	深鉢	_	_	_	黒色 (N2/1)				
185		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)				
186		縄文土器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)				
187		縄文土器	深鉢	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/4)		縄文(RL)。		
188	河道1・2分岐	縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR7/3)		縄文(RL)。		
189	部	縄文土器	深鉢	-	_	-	鈍黄褐色(10YR4/3)		内·外面-条痕。縄文(R L)。		
190		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (5YR6/4)				
191		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/3)				
192		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍褐色(7.5YR5/3)				
193		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		縄文 (RL)。		
194		縄文土器	深鉢	_	_	_	黒色(N2/1)		縄文 (LR)。		
195		縄文上器	鉢	_	ı	-	黄灰色(2.5Y4/1)		内面-縄文(R L )。外面-貝殻条 痕。		
196		細文上器	深鉢	_	-	-	灰黄褐色(10YR4/2)		丹が付着(明赤褐色2.5YR5/6)。 内面-黒斑?。		
197		縄文上器	深鉢	_	-	-	灰黄褐色(10YR4/2)		丹が付着(明赤褐色2.5YR5/6)。 内面-黒斑?。		
198		縄文上器	深鉢	-	I	-	灰黄褐色(10YR4/2)		丹が付着(明赤褐色2.5YR5/6)。 縄文(R L R)。		
199		縄文土器	深鉢	_	-	-	橙色 (5YR7/6)				
200		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
201	河道2上流部東 斜面	縄文上器	深鉢	_	-	_	黒色(N2/1)				
202		縄文上器	深鉢	_	1	-	褐灰色(10YR4/1)		縄文 (RL)。		
203		縄文上器	浅鉢	_	_	_	黒褐色 (7.5YR3/1)				
204		縄文土器	深鉢	_	-	_	灰黄色(2.5Y6/2)		外面-ナデ。内面-条痕のちナ デ?。		
205		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍橙色(5YR6/3)				
206		縄文土器	深鉢?	_	-	_	鈍黄橙色(10YR7/3)				
207		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)				
208		縄文土器	深鉢	_	-	-	灰褐色(7.5YR4/2)				
209		縄文上器	深鉢	_	-	_	鈍黄橙色(10YR7/2)				
210		縄文土器	深鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR5/3)		外面-縄文(LR)。内面-貝殻条 痕。		
211		縄文土器	深鉢?				鈍黄橙色(10YR6/3)		内而-ナデ。内・外而-黒斑。縄文 (R L )。		
212		縄文土器	浅鉢	28.9	-	_	灰褐色(7.5YR5/2)				
213		縄文土器	深鉢	32.0	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		内面ナデ。		
214		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍黄褐色(10YR5/4)		外面-ナデ・ヘラケズリ。内面-ナ デ。		
215		縄文土器	深鉢	=	-	-	橙色(7.5YR6/6)		外面-ナデ。煤。内面-ナデ・黒斑 と煤。		
216	5回2回 1.3と hu	縄文上器	深鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外而-ナデ。黒焼。		
217	河道2上流部	縄文上器	深鉢	-	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		内・外面-ナデ。		
218		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/3)		内・外面-ナデ。		
219		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-ナデ。		
220		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。		
221		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)		外面 ナデ。煤。内面 ナデ。		
		縄文上器					鈍橙色 (7.5YR7/3)		内面-ナデ。		

掲載	10 HV/P I#	trans.	ED 4-6	ņ	l测值(cr	n)	67 300	.(044	and date of the sea their office as 1 to	/II: str
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
223		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。黒焼。	
224		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外而-煤。内面-ナデ。黒斑。	
225		縄文上器	浅鉢	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/4)		内・外面-ナデ。煤。	
226		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-二枚貝条痕。煤。内面-ナデ。	
227		縄文上器	浅鉢	_	_		暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-ヘラミガキ。内面-ヘラミガ キ・黒斑。	
228		縄文上器	深鉢	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-ナデ。内面-ナデ・黒斑。	
229		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍黄色(2.5Y6/3)			
230		縄文土器	浅鉢	18.2	_	_	鈍黄色(2.5Y6/3)		外面-ナデ。内面-ヘラミガキ・ナ デ。	
231		縄文土器	深鉢	-	-	_	明黄褐色(10YR6/6)		内・外面-ナデ。	
232		縄文土器	深鉢	_	_	_	橙色(7.5YR6/6)		貝殻腹縁文。	
233		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文 (R L)。内面-ヘラミ ガキ・ナデ。	
234		縄文土器	深鉢	_	_	-	明赤褐色(5YR5/6)		外面-結節縄文(LR)。内面-ナ デ。	
235		縄文土器	深針				褐灰色(10YR4/1)		外而-ヘラミガキ・縄文(LR)。 内面-ヘラミガキ。	
236		縄文土器	深針				鈍黄褐色(10YR5/3)		内面-結節縄文・ヘラミガキ。	
237		縄文土器	深鉢	_	-	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-ナデ。内面-縄文(LR)。	
238		縄文土器	銝	-	-	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文(L R)。	
239		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-結節縄文(LR)・ナデ?。 内面-ナデ?	
240		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR4/3)		内・外面-ナデ。	
241		縄文上器	深鉢	_	-	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-ナデ。	
242		縄文土器	深鉢	_	-		鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-ナデ。内面-ナデ・黒斑。	
243		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-結節縄文(LR)。内面-ナ デ?。	
244	河道 2 上流部	縄文土器	針				鈍褐色(7.5YR6/4)		外而-縄文 (R L) ・ナデ。内而- 条痕の後ナデ?	
245		縄文土器	鉩	_	_	-	灰白色(2.5Y8/2)		外面-縄文(R L)・ナデ。内面- 只殻条痕の後ナデ。	
246		縄文上器	鉢	_	_	-	暗灰色(N3/1)		外面-縄文(L R)。煤。内面-ヘ ラミガキ。	
247		縄文上器	深鉢	_	8.0	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		内面-ナデ。	
248		縄文上器	浅鉢	_	_		オリーブ黒色(7.5Y3/1)		外面-縄文(R L)・ナデ。内面- ヘラミガキ?。	
249		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-縄文(R L )。内面-ナデ?	
250		縄文上器	鉢	_		_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-結節縄文。内面-ナデ。	
251		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-ヘラミガキ。内面-ナデ。	
252		縄文上器	浅鉢	_	_	_	黄褐色(2.5Y5/3)		外面-ヘラミガキ?。内面-剥離。	
253		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内•外面-黑斑。	
254		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外血・ナデ。煤。	
255		縄文土器	深鉢	_	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		縄文 (RL)。	
256		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		縄文(RL)。	
257		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		内・外面-ヘラミガキ。黒斑。外 面-煤。内面-縄文(R L)。	
258		縄文土器	深鉢	-	_	-	喑灰色(N3/1)		内・外面-ヘラミガキ。内面-純文 (RL)。	
259		縄文土器	深鉢				灰色 (5Y5/1)		外面-縄文(R L )。煤。内面-ナ デ。	
260		縄文土器	深針	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文(R L)。	
261		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文(R L)・煤付着。内 面-黒斑。	
262		縄文上器	深鉢	_	_	_	オリーブ黒色(5Y3/1)		外面-縄文 (RL)・全体に煤付 着。	
263		縄文上器	深鉢	_	_	_	オリーブ黒色(5Y3/1)		外面-縄文(R L)・煤。	
264		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文(RL)。	
			protect.				- 57-1,40 (101100) 07		7.1 pm; 1052% - 145 E/20	

掲載	In the second	·		п	測値(cn	1)				*** *
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色調	状態	形態・手法の特徴など	備考
265		縄文上器	深鉢	-	_	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-ナデ。	
266		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/4)		外面・ナデ・煤。内面・ナデ。	
267		縄文土器	淡鉢	_	_	_	黄灰色(2.5Y4/1)		内面-ナデ・黒斑。	
268		縄文上器	深鉢	_	_	_	黄灰色(2.5Y4/1)		外面-縄文(R L)。煤と黒斑。 内面-ナデ・黒斑。	
269		縄文土器	深鉢	_	_	_	明褐色 (7.5YR5/6)		外面-煤。内面-ナデか?。	
270		縄文土器	深鉢				黒褐色 (2.5Y3/1)		内・外面-巻貝条痕。煤。	
271		縄文土器	深鉢	_	_	-	黒褐色(10YR3/2)		内・外面-巻貝条痕。内面-条痕の ちナデ。	
272		縄文上器	深鉢	_	_	_	褐灰色(10YR4/1)		内・外面-巻貝条痕のちナデ。	
273		縄文土器	深鉢				褐灰色(10YR4/1)		内・外面-巻貝条痕。内面-条痕の ちナデ。	
274		縄文上器	深鉢	_	-	-	明黃褐色(10YR6/6)		外面-巻貝条痕。内面-ヘラミガ キ・黒斑。	
275	河道2上流部	糺文上器	深鉢	-	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-巻貝条痕・煤付着。内面-ナ デ。内・外面-黒庭。	
276		縄文土器	深鉢	24.3	-	-	鈍黄色(2.5Y6/3)		外面-ナデ・黒と煤。内面-ナデ。	
277		縄文上器	深鉢	24.9	_	-	灰黄褐色(10YR5/2)		外而-ナデ・煤。内面-ナデ。	
278		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-縄文(R L )。爆。内面-ナ デ。	
279		縄文上器	浅鉢?	16.5	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			
280		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ナデ。	
281		縄文土器	浅鉢?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ヘラミガキ。黒斑。	
282		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内面ナデ。	
283		縄文土器	浅鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ナデ・煤・黒斑。内面-ヘラ ミガキ。	
284		縄文土器	浅鉢	_	_	-	喑灰色 (N3/1)		内・外面-ヘラミガキ。	
285		縄文土器	浅鉢	_	_	-	鈍赤橙色(10R6/3)		外面-ヘラミガキ。	
286		縄文上器	浅鉢?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-ナデ・剥離。内面-ヘラミガ キ。	
287		縄文土器	深鉢	_	8.4	-	鈍黄色(2.5Y6/4)		内・外面-ナデ。底部-穀粒痕?。	
288		縄文土器	深鉢	_	_	-	淡黄色(2.5Y8/3)		外面-条痕。内面-ナデ。	
289		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		内面-ナデ。	
290		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍橙色 (7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。	
291		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍積色 (5YR6/4)		内・外面-ナデ。	
292		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。	
293		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		外面-条痕。内面-ナデ。	
294	河道2中流部	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面 貝殻条痕。	
295	<1 居>	縄文上器	深鉢	32.8	-	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ナデ。内面-貝殻条痕のちナ デ。	
296		縄文土器	浅鉢	_	_		鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-黒斑。煤。	
297		縄文工器	浅鉢	_	_	-	黄灰色(2.5Y4/1)		外而-煤。	
298		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍黄色 (2.5Y6/3)			
299		細文上器	浅鉢	_	-	-	灰黄褐色(10YR4/2)			
300		縄文上器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		ф. Н. и	
301		縄文土器	淡鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		内・外面-ナデ。	
302	河道2中流部	縄文土器	深鉢	_	_	_			内・外面-ナデ。 内・外面 ナデ。	
304	<2層>	縄文土器	浅鉢		_	_	無損傷也 (10YR6/3) 黒褐色 (10YR3/2)		гэ : 7NЩ 7 7 s	
305		縄文土器	浅鉢				無獨也 (101K3/2) 暗灰黄色 (2.5Y3/2)			
306		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		口縁部内面-貝殻条痕のちナデ。 体部外面-ケズリ。	
-	河道2中流部	縄文土器	深鉢	21.2	_	_	淡黄色(2.5Y8/3)		内・外面-只殼条痕のちナデ・黒 斑・煤付着。	
307	マル屋エデ									
307	<3層上面>	縄文土器	深鉢	23,3		-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-貝殻条痕・煤付着。内面-貝 殻条痕のちナデ。内・外面-黒斑。	

掲載	The Tab Adv Tile	teni	pare	p	測値 (cn	1)	<i>7.</i> =□	/ Divides	TO Add TO NE on Methodologic 12	/Ali: Het
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	品器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
310		縄文上器	深鉢	34.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-二枚貝条痕のちナデ・煤付 着。内面-二枚貝条痕・黒斑。	
311		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-貝殻条痕のちナデ。内面-ナ デ。	
312		縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		内・外面-条痕。	
313		縄文上器	深鉢	30.6	_	_	黄灰色(2.5Y4/1)		口唇部外面-ナデ。体部外面-条痕。 内而-ナデ。	
314		縄文上器	深鉢	-	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ・ケズ リ。	
315	河道 2 中流部	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-条痕・黒斑。内面-ナデ。	
316	<3層上面>	縄文上器	深鉢	42.0	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)		内・外面-ナデ・黒斑。	
317		縄文土器	深鉢	42.2	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-貝殻条痕。内・外面-黒斑。	
318		縄文上器	深鉢	29.2	_	_	鈍黄褐色(10YR4/3)		外前-条痕のちナデ・黒斑。煤付 着。	
319		縄文土器	深針	31.6	-	-	明赤褐色(5YR5/6)		内・外面-条痕・黒斑。口唇部-ナ デ。	
320		縄文土器	深針	38.8			鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-条痕のちナデ。内而-貝殻条 痕・ナデ。内・外面-黒斑。	
321		縄文上器	浅鉢	8.7	1.8	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-黑斑。	
322		縄文土器	浅針	22.8	2.8	10.0	灰黄褐色(10YR6/2)		内・外面-ナデ。外面-黒斑。	
323	河道2中流部 <3層>	縄文土器	浅鉢	_	_	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ケズリ。内面-ナデ・ケズ リ?。	
324		縄文上器	深鉢	28.9	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。内面-黒斑。外 而-煤付着。	
325		縄文土器	深針	29.0			鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ・黒斑。	
326		縄文土器	深鉢	25.3	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		口縁外-条痕のちナデ。休外-条痕。 外面-黒斑。	
327		縄文土器	浅鉢	19.4	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-貝殼条痕・黒斑・煤付着。 内面-ナデ・条痕。	
328		縄文土器	深鉢	16.2	_	-	黒褐色(10YR3/2)		内・外面- <sup></sup> 枚貝による条痕のち ナデ。	
329		縄文上器	深鉢	40,7	_	_	暗灰黄色(2.5Y4/2)		外面 巻貝条痕のちナデ。口唇部 ナデ。内面・ナデ。	
330	河道2中流部	縄文上器	浅鉢	32.7	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-二枚貝条痕(細い条痕)。 内面-ナデ。内・外面-黒斑。	
331	<3層上面>	縄文上器	浅鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)		外面-黒斑。 内面-ミガキ?・ナ デ。黒斑。	
332		縄文土器	浅鉢	_	_	_	黄灰色(2.5Y4/1)			
333		縄文上器	浅鉢	_	_	_	褐灰色(10YR4/1)		内而-黒斑。	
334		縄文土器	浅鉢	-	_	_	褐灰色(7.5YR4/1)		内·外面-黑斑。	
335		縄文土器	浅鉢				褐灰色(10YR4/1)			
336		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		内·外面-黑斑。	
337		縄文土器	浅鉢	44.0	_	_	喑灰黄色(2.5Y5/2)			
338		組文上器	深鉢	-	_	_	鈍黄松色(10YR6/4)		外面-ナデ。内面-ヘラミガキ?。 内・外面-黒斑。	
339		縄文土器	深鉢	_	4.6	_	鈍赤褐色(5YR5/4)		外面-ヘラケズリ。内面-ナデ。	
340		縄文土器	深鉢	_	6.1	1	鈍褐色(7.5YR5/4)		外面-二枚貝条痕・ナデ。内面-ナ デ・黒斑。	
341		縄文上器	深鉢	_	-	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ナデ。内面-ナデ・黒斑。	
342		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)		内・外面 貝殻条痕のちナデ。	
343		縄文上器	深鉢	_		-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-巻貝条痕。内面-条痕のちナ デ。	
344	Semplable on all the fine	縄文上器	深鉢	_		-	鈍黄橙色(10YR7/2)		体部外面-貝殻条痕。内面-ナデ・ 黒斑。	
345	河道 2 中流部 <3 層>	縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR5/4)		外而-貝殻条痕。内而-条痕のちナ デ。	
346		縄文土器	深鉢	41.0	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		外面-ナデ。内面-工具ナデ。	
347		縄文土器	深針	45.8			鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-条痕のちナデ。	
348		縄文上器	浅鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)			
349		縄文土器	精製浅鉢	-	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-黒斑。	
350		縄文上器	浅鉢?	-	_	_	黄灰色(2.5Y5/1)			

掲載				-	測値(cr	1)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
351		縄文土器	浅鉢				鈍褐色(7.5YR5/4)			
352		縄文上器	浅鉢	_	_	_	明黄褐色(10YR7/6)		内・外面-ナデ。	
353		縄文上器	浅鉢	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)			
354		縄文土器	浅鉢	19.1	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面 条痕・煤付着。内面 ナデ。	
355		縄文土器	底部	_	6.4	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。	
356		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-条痕のちナデ。内面-ナデ。	
357	河道2中流部	縄文上器	底部	_	1.8	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。	
358	<3層>	縄文土器	深鉢	49.0	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)			
359		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面 - 条痕のちナデ。	
360		縄文土器 (後期)	深鉢	_	-	-	灰色(5Y4/1)		外面 縄文(R L)・煤付着。内 面-ナデ。	
361		縄文土器	深針				浅黄色(2.5Y7/3)		外面-ナデ。内面-黒斑。	
362		縄文上器	注:□上器	19.5	_	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		外面-ナデ・擬縄文。内面-ナデ・ 二枚貝貝殻条痕・ヘラミガキ。 首~胴にかけて黒斑。	
363		縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ナデ・二枚貝条痕の後ナ デ。内面 ナデ。	
364		糺文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。	
365		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ・ユビオサエ。	
366		縄文土器	深鉢				黒褐色(10YR3/1)		外面-貝殼条痕。内面-工具ナデ。	
367		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。	
368		縄文土器	深鉢		2.4	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外血-ヘラケズリ・底面ナデ。内 面-ナデ・指頭圧痕。	
369		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-ナデ。内面-ヘラミガキ。	
370		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-ナデ。	
371		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-ナデ・煤付着。内面-ナデ。	
372		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-ナデ・煤付着。内面-ナデ。	
373		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		内・外面-ナデ・黒斑。	
374		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR6/3)		外面-二枚貝条痕の後ナデ・黒 斑。内面-ナデ。	
375		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		内・外面-ナデ・二枚貝条痕。	
376		縄文土器	鉢	_	_	_	喑灰色(N3/1)		内·外面-二枚貝条痕。外面-黒斑。	
377		縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR5/2)		外面-ナデ。内面-ナデ・黒斑。	
378		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y7/2)		外而-ナデ・黒斑。内面-ナデ。	
3 <b>7</b> 9		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		外面-巻貝条痕。内面-ナデ。	
380	河道2下流部 <1~3層>	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR6/2)		外面-条痕の後ナデ・二枚貝条 痕。内面 ナデ。	
381		縄文上器	深鉢	34.0	_	_	暗褐色(10YR3/3)		内・外面-ナデ。	
382		縄文土器	深鉢	31.0	_		鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-ナデ・ヘラケズリ。内面-ナ デ。内・外面-黒斑。	
383		縄文上器	深鉢	34.7	ı	I	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-ナデ・二枚只条痕。内面-ナデ。内・外面-黒斑。	
384		縄文土器	深鉢	_	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外而-貝殻条痕の後ナデ。黒魔。 内面-ナデ。	
385		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR4/3)		外面-条痕の後ナデ。内面-ナデ。	
386		縄文土器	深鉢	_			鈍黄橙色(10YR7/3)		内・外面-ナデ。	
387		縄文土器	深鉢?	_	-	1	鈍黄褐色(10YR5/4)		外面-ナデ・ヘラケズリ。内面-ナ デ。	
388		縄文土器	深鉢?	_	-	1	鈍褐色(7.5YR6/3)		外面-ナデ・ヘラケズリ。内面-ナ デ。	
389		縄文土器	深鉢	_	_	1	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-ナデ・ヘラケズリ・二枚貝 条痕。内面-ナデ。	
390		縄文土器	深鉢	_	_	1	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-工具ナデ・二枚貝条痕。内 面-ナデ・工具ナデ。	
391		縄文上器	深鉢	-	-	_	黒褐色(10YR3/2)		外面-ナデ・二枚貝条痕。内面-ナ デ。	
392		縄文土器	深鉢				明黄褐色(10YR6/6)			

掲載	177 (M2) 144	6501	an ee	p	測値(cn	n)	£ 75	10.00		/ United
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色調	状態	形態・手法の特徴など	備考
393		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-二枚貝による条痕。内面-ナ デ。内・外面-黒斑。	
394		縄文土器	深針	_	_	_	鈍褐色(7.5YR5/4)		内・外面-ナデ。	
395		縄文1:器	深鉢?	_	_	_	黄灰色(2.5Y5/1)		外面-二枚貝条痕。煤付着。内面- ナデ・黒斑?。	
396		縄文土器	深鉢	32.4	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-二枚貝条痕の後ナデ。内面- ヘラケズリの後ナデ。	
397		縄文土器	深鉢	24.3	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面-ナデ。内面-ナデ・黒斑。	
398		縄文土器	深鉢	37.8	_	_	鈍黄樹色(10YR7/2)		内・外面-ナデ。黒斑。	
399		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y4/1)		内・外面-二枚貝条痕。	
400		縄文土器	深鉢	(34.6)	_	_	橙色(5YR7/6~6/6)		外面-ナデ。内面-工具ナデ。	
401		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR6/3)		外面-二枚貝条痕。内面-ナデ。	
402		縄文土器	深鉢	46.0	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		内・外面-二枚貝条痕。	
403		縄文土器	深鉢	_	-	_	灰黄色(2.5Y7/2)		外面-二枚貝条痕。内面-ナデ。 内・外面-黒斑。	
404		縄文上器	深鉢	_	_	-	淡黄色(2.5Y8/3)		外面- 二枚貝条痕。内面-ナデ。 内・外面の口縁に煤付着。	
405		縄文上器	深鉢?	_	_	_	鈍褐色(7.5YR5/3)		外面-二枚貝条痕。内面-ナデ。	
406		縄文上器	深鉢	20.4	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面 二枚貝条痕・一部煤付着。 内面-ナデ。	
407		縄文土器	深針	31.8			鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-条痕後にナデ。内面-頸部に 粗いナデ・胴部下半にコケ付き。	
408		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-条痕の後ナデ。内面-ナデ。	
409		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-条痕の後ナデ。内面-ナデ。	
410		縄文土器	深鉢	-	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)		外面-二枚貝条痕・全体的に黒変。内面-ナデ・口縁部に黒斑。	
411		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		内・外面ナデ。	
412		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-二枚貝条痕。内面-工具ナデ。	
413	河道2下流部	縄文土器	深鉢	-	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-二枚貝条痕の後ナデ・二枚 貝条痕。煤付着。内面-工具ナデ。	
414	<1~3層>	縄文土器	深針	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-二枚貝条痕・下半分は煤付 着。内面-二枚貝条痕・頸部はそ の後ナデ。	
415		縄文土器	深鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ナデ・二枚貝条痕。内面-ナ デ。	
416		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		外面-二枚貝条痕・煤付着。内面- ナデ。	
417		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-条痕?後ナデ。内面-ナデ。	
418		縄文上器	深鉢	30.1	_	_	浅桁色(5YR8/4)		外面-二枚貝条痕。内面-二枚貝条 痕・ナデ。	
419		縄文上器	深鉢	17.6	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		内・外面-二枚貝条痕。	
420		縄文土器	深鉢	_	_	-	灰山色(2.5Y7/1)		外面-ヘラケズリ・ナデ・黒斑。 内面-ナデ・黒斑。	
421		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-二枚貝条痕後ナデ。内面-ナ デ。	
422		縄文土器	深鉢	30.0	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-二枚貝条痕後ナデ。内面-ナ デ。口縁に一部黒斑。	
423		縄文上器	深鉢	-	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-二枚貝条痕の後ナデ・ 黒斑。	
424		縄文土器	深鉢	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		外面-条痕の後ナデ。内面-ナデ。 内・外面-黒斑。	
425		縄文上器	深鉢	-	-	-	灰色(5Y4/1)		外面-ナデ・ヘラケズリ。内面-ナ デ。	
426		縄文土器	深鉢	28.6	-	_	黒褐色(10YR3/2)		外面-二枚貝条痕。内面-二枚貝条 痕の後ナデ。	
427		縄文土器	深鉢	29.0	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		内・外面-ナデ。	
428		縄文土器	深鉢	34.8			灰黄褐色(10YR6/2)		外而-二枚貝条痕。内而-二枚貝条 痕・ナデ。	
429		縄文土器	深鉢	37.9	_	-	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-二枚貝条痕。内面-ヘラ状 I. 具によるナデ?	

掲載	相称/市皿	\$15 EM	BB 6:1	TI.	測値(cn	n)	色調	of Porfules	TZ台集 。 王立上 // 東北が原 2- 3 m	/.Li:::dax
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器		状態	形態・手法の特徴など	備考
430		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR4/3)		外面 ナデ。内面 ナデ・黒斑。	
431		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰白色(10YR7/1)		外面-条痕・工具ナデ。内面-工 具ナデ・黒斑。	
432		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-貝殻条痕後ナデ・煤付着。 内面-工具ナデ。	
433		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-二枚貝条痕の後工具ナデ・ 黒斑。内而-二枚貝条痕の後ナデ。	
434		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面 ナデ・黒斑。内面 ナデ。	
435		縄文上器	深鉢	_	-	_	黒褐色(7.5YR3/2)		内・外面-ナデ。	
436		縄文土器	深鉢	37.4	_	_	灰白色(2.5Y8/1)		内・外面-ナデ・工具によるナ デ。外面の一部、内面に黒斑。	
437		縄文土器	深針	36.0	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面- 二枚貝条痕。内面-ナデ。	
438		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		内・外面-工具ナデ。	
439		縄文土器	深針	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-ナデ・口縁部に黒斑。内 面 ナデ。	
440		縄文上器	深鉢	_	_	_	黄灰色(2.5Y5/1)		外面-二枚貝条痕の後ナデ。内 面-ナデ。	
441		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-工具ナデ・黒斑。内面-ナ デ。	
442		縄文土器	深鉢	_	_	-	黒褐色(7.5YR3/1)		内・外面 ナデ。	
443		縄文上器	深鉢	_	_	_	黒褐色(10YR3/1)		内・外面-条痕の後ナデ。黒斑?	
444		縄文土器	深鉢	28.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。黒斑。	
445		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-二枚貝条痕・全体に煤付 着。内面-ナデ。黒斑。	
446		縄文上器	深鉢	_	_	_	黒褐色(10YR3/1)		外面-ナデ・二枚貝条痕。内面- ナデ。	
447		縄文土器	深針	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-ナデ・二枚貝条痕。内面- ナデ。	
448	河道2下流部	縄文上器	深鉢	-	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-工具ナデ。内面-ナデ。 内・外面-黒斑。	
449	<1~3層>	縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR5/4)		外面-条痕?・ナデ・ヘラケズ リ・煤付着。内而-ナデ。	
450		縄文土器	深鉢	_	4.8	_	鈍褐色(7.5YR5/4)		外面-ヘラケズリ・底面ナデ。内 面-ナデ。	
451		縄文土器	深鉢	_	5.6		鈍黄褐位(10YR5/3)		外面- L具ナデ・ヘラケズリ。内 面-ナデ。	
452		縄文土器	深鉢		3.6		鈍褐色 (7.5YR5/4)		外而-二枚貝条痕・底而ナデ。内 面-ナデ。	
453		縄文上器	深鉢	-	3.5	_	橙色 (7.5YR6/6)		外面-ケズリ。内面-ナデ・黒斑。	
454		縄文土器	深鉢	_	6.6	_	褐灰色(10YR5/1)		内・外面-ナデ。	
455		縄文上器	浅鉢	36.8	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)			
456		縄文土器	浅鉢	39.2	-	-	褐灰色(10YR4/1)			
457		縄文土器	浅鉢	43.8	-	-	橙色 (5YR7/6)		外面-黒斑・煤付着。内面-黒斑。	
458		細文上器	浅鉢	43.2	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外而-煤付着。内・外而-黒斑。	
459		縄文土器	浅鉢	_	_	_	明赤褐色 (5YR5/6)			
460		縄文上器	浅鉢	_	_	_	褐灰色(7.5YR5/1)			
461		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ヘラミガキ。内面-ヘラミガキ。煤付着。	
462		縄文上器	浅鉢		_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		oles fail 1° CTI vite	
463		縄文土器	浅鉢	23.4	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		内·外面-思斑。	
464		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-条痕の後ナデ。内面-ナデ。 丸底。	
465		縄文上器	浅鉢	-	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-貝殻条痕後ナデ・ユビオサ エ。内面-工具ナデ。	
466		縄文上器	浅鉢	_	_	_	黒色 (N2/)		外面-ナデ・全体的に黒斑?。内 面-ナデ。	
467		縄文土器	浅鉢	22.7	_	_	黄灰色(2.5Y4/1)			
468		縄文上器	浅鉢	26.8	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
469		縄文土器	浅鉢	30.6			灰黄褐色(10YR5/2)			
470		縄文土器	浅鉢?	28.6	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-ナデ。黒斑。	

掲載	10 10 40 10	een.	nn co	j]	測値(a	n)	<b>7</b> =0	./ 0.445	and take a grant to an idea of the Tay Tay	711: stor
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
471		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍褐色(7.5YR5/4)		内・外面-ナデ。	
472		縄文上器	浅鉢	_	_	_	褐色 (7.5YR4/4)			
473		縄文土器	浅鉢	_	_	-	黄灰色(2.5Y6/1)		外面-縄文(R L)。	
474		縄文土器	注口土器	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)		外面-縄文 (LR)。内面-ナデ。	
475		縄文土器	深鉢	33.4	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面「枚貝条痕の後ナデ?	
476		縄文土器	深鉢	_	_	-	灰色 (5Y4/1)		外面-二枚貝条痕。内面-ナデ。	
477	河道2下流部 <1~3層>	縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面 「枚貝条痕後ナデ?。内面 ナデ。	
478		縄文土器	深鉢	-	-	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-二枚貝条痕の後ナデ。内面- ナデ。	
479		縄文土器	?				鈍赤褐色(5YR5/4)		外面-二枚貝条痕後ナデか。内面- ナデ。内面と外面目縁端黒斑。	
480		縄文1:器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/4)		外面-二枚貝条痕・口縁部に黒 斑。内面-ナデ。	
481		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面・「枚貝条痕。	
482		<b>純文上器</b>	深鉢	-	_	-	鈍黄橙色(10YR7/2)		外面-二枚貝条痕のちナデ。内面- ナデ。内面全体と外面口縁一黒 斑。	
483		縄文土器	深針	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。	
484		縄文土器	深鉢	_	_	_	橙色(7.5YR7/6)		外面-ナデ・強い工具ナデ。内面- ナデ。	
485		縄文土器	深針				鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-二枚貝条痕。内面-ナデ・二 枚貝条痕。	
486		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍褐色(7.5YR5/3)		内・外面-工具ナデ・ナデ。黒変。	
487		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-二枚貝条痕の後ナデ。内面- ナデ。内・外面-黒斑。	
488		組文上器	深鉢	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		外前-二枚貝条痕。内前-工具ナデ。	
489		縄文上器	深鉢	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		内・外面-ナデ・二枚貝条痕。黒 斑。	
490		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-ナデ。内面-ナデ。工具痕。	
491		縄文上器	鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ナデ・二枚貝条痕。内面-ナ デ。	
492		縄文土器	浅鉢	22.0	_	-	灰黄褐色(10YR4/1)		外而-二枚貝条痕。内而-二枚貝条 痕の後工具ナデ(ヘラミガ キ?)。	
193	河道 2 下流部 <4 層>	縄文土器	浅鉢	_	_	_	明赤褐色(5YR3/1)		内・外面-口縁部ヘラミガキ・肩 部ヘラミガキ。2破片(同一個体) 特製土器。	
494		縄文土器	浅銝	=	-	_	灰黄褐色(7.5YR3/1)		外面-口縁部、頸胴部ヘラミガキ・胴部に黒斑あり。内面 日縁部、頸胴部ヘラミガキ。3破片同	
495		縄文土器	浅鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)			
496		縄文土器	浅鉢	_	_	_	明赤褐色(5YR3/1)		外面-ヘラミガキ。	
497		縄文土器	浅鉢	_		_	灰黄褐色(7.5YR3/1)		外面-ヘラミガキ・胴部に黒斑。	
498		縄文土器	浅鉢	_	_	_	明黄褐色(10YR6/6)			
499		縄文土器	浅銝	_	_	-	灰黄褐色(10YR5/2)		内・外面-ヘラミガキ。	
500		縄文上器	浅鉢	_	_	_	灰色(5Y4/1)		外而-ヘラミガキ。	
501		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰褐色(7.5YR4/2)		外面-胴部ヘラミガキ・結節縄文 (LR)。内面-ナデ。	
502		縄文土器	深鉢	-	_	_	灰褐色(7.5YR4/2)		外面-胴部ヘラミガキ・結節縄文 (LR)。内面-ナデ。	
503		縄文上器	鉢?	_	_	_	鈍黄褐色(10YR6/4)		外面-縄文(LR?)・二枚貝条 痕。内面-ナデ。	
504		縄文土器	浅鉢				鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-縄文(R L)。内面-ナデ。	
505		縄文土器	浅針	-	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。	
506		縄文土器	浅鉢	1	_	_	明黄褐色(10YR6/6)		外面-縄文(R)・ナデ。内面-ナ デ。	
507		縄文上器	注口上器	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-縄文(R L )。内面-ナデ。	
508		縄文上器	深鉢	25.2	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-ナデ。黒斑。煤付着。	
509	河道 3 A	縄文上器	深鉢	П	5.7	_	橙色(7.5YR6/6)		外面-二枚貝条痕・黒斑。内面-板 状工具ナデ。	

対応3   対応3   対応3   対応3   大き   対応3   大き   対応3   大き   対応3   対応3   大き   大き   大き   対応3   大き   大き   大き   大き   大き   大き   大き   大	掲載	掲載遺構	種別	器種	i,	上測値(cn	1)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
24   20	番号	1970,0214	13100	(h)M/III	口径	底径	高器		100,000	10:80 14765M 1869 C	NH "J
初文書   初文書   20	510		縄文土器	深鉢	_	_	_	黒褐色(10YR3/1)		内・外面-貝殻条痕。	
別文書   別文書   初雄   一	511	河道3B	縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍褐色(7.5YR6/3)		内・外面-ナデ。外面-黒斑。	
101	512		縄文上器	深鉢	_	ı		鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。内面-黒斑。	
報文主数   次本   次本   一	513		縄文土器	深鉢	-	-	-	橙色 (5YR7/6)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。 黒斑。	
1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017   1017	514		縄文土器	深鉢	-	-	_	鈍黄色(2.5Y6/4)			
回記   回記   回記   回記   回記   回記   回記   回記	515		縄文土器	深鉢	_	_	_	黄褐色(2.5Y5/3)		内・外面-ナデ。	
一日   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100   100	516		縄文土器	深鉢?				鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-貝殻条痕のちナデ?	
538   新文士書 海路	517		縄文上器	深鉢	_	_	_	浅黄橙色(2.5Y7/3)		内・外面-ナデ。黒焼。	
322	518		縄文土器	浅鉢?	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/4)			
現立   日本	519										
202   203   204   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   205   20					_	_	_				
222   超文上影   深林   一   一   超過報色(107(26/2)   円面です。(1)割によりで可用   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日本   日		河送 O D					_			外面 縄文(R L)・ナデ後細密 条痕・沈線1条・縄文(R L)。	
252   別文上語   第	522	例題 3 B	縄文土器	深鉢				灰黄褐色(10YR6/2)		内面-ナデ(剥離により不明	
262   「親文上器   38	523		縄文土器	鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		-	
超文上語   終	524		縄文上器	鉢	-	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)			
202	525		縄文上23	鉢	_	_	_	明黄褐色(10YR6/6)		外面-縄文(RL)。内面-ナデ?。	
1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921	526		縄文上器	鉢	-	-	-	褐灰色(10YR4/1)			
529   物(表地)   1上	527		縄文上器	鉢	_	-	_	明黄褐色(10YR7/6)			
1821   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921   1921	528		縄文上器	深鉢	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)		外面-条痕。内面-ナデ。	
530   親文土器   接終?	529		縄文土器	深鉢	_	_	_	浅黄色(10YR8/4)		外面 2枚貝条痕。内面 ナデ。	
332   2011   2012   2013   2014   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015   2015	530		縄文土器	浅鉢?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。	
10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5   10.5	531		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		内・外面-黒斑。	
534   銀文土器   深鉢	532	微高地 2 出上遺	縄文上器	深鉢	_	_	-	灰黄褐色(10YR6/2)			
調文土器   浅外	533	物<晩期ト層>	縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-条痕のちナデ。内面-ナデ。	
336   337   338   330   -   96   96   97   98   340   98   350   -   96   98   98   98   350   -   96   98   98   98   98   98   98   98	534		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		内・外面 ナデ。	
537   微高地 1 出土遺物	535		縄文土器	浅鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-ナデ。内・外面-黒斑。	
537   微高地   出土遺物   2   2   2   2   2   2   2   2   2	536		縄文上器	深鉢	37.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-縄文 (LR)。内面-ミガキ。	
538     縄文土器     深鉢     -     -     範萄色 (7.5YR5/4)     外面-沈線のち縄文 (LR)・ミガキ。線。内面-ミガキ。       539     縄文土器     深鉢     -     -     -     純黄橙色 (10YR7/4)     内・外面-ナデ。       540     初文土器     深鉢     -     -     -     純黄橙色 (10YR6/4)     内・外面-ナデ。外面-黒斑。       541     神文土器     深鉢     -     -     -     施養色 (7.5YR6/4)     内・外面-土牧只条痕。       542     縄文土器     深鉢     -     -     -     施養色 (7.5YR4/2)     外面-ナデ。内面-出斑。       543     縄文土器     深鉢     -     -     -     ・     外面-ナデ。以。内面-ナデ。県       544     織文土器     深鉢     -     -     ・     ・     外面-工牧只条痕。内面-ナデ。県       545     縄文土器     深鉢     27.0     -     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・     ・ <td< td=""><td>537</td><td></td><td>縄文上器</td><td>深鉢</td><td>_</td><td>_</td><td>_</td><td>灰黄褐色(10YR4/2)</td><td></td><td></td><td></td></td<>	537		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)			
540       541       541       542       542       543       544       645       546       547       548         40 文上器       740       41 (2)       42 (2)       43 (2)       44 (2)       44 (3)       45 (4)       46 (4)       47 (4)       545 (5)       48 (7)       48 (7)       49 (7)       40 (7)       40 (7)       40 (7)       40 (7)       41 (8)       42 (8)       43 (8)       44 (8)       45 (8)       45 (8)       46 (8)       46 (10)       47 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10)       48 (10) <td< td=""><td>538</td><td>100 \ (\Q) (\V)</td><td>縄文土器</td><td>深鉢</td><td>_</td><td>-</td><td>_</td><td>鈍褐色(7.5YR5/4)</td><td></td><td></td><td></td></td<>	538	100 \ (\Q) (\V)	縄文土器	深鉢	_	-	_	鈍褐色(7.5YR5/4)			
541       542       542       543       544       644       6545       546       547       548         641       642       643       644       6545       646       647       548         648       649       649       640       640       641       642       643       644       645       646       647       648       649       640       640       641       642       643       644       645       646       647       648       649       640       640       641       642       643       644       645       646       647       648       649       640       640       641       642       643       644       645       646       647	539		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。	
542       543       544       545       546       547       548         42       43       44       343       44       45       46       47       546       547       548         48       49       40       40       41       42       42       43       44       45       46       47       48       48       49       40       40       40       41       42       43       44       45       46       47       48       49       40       40       40       41       42       43       44       45       46       47       48       49       49       40       40       40       40       41       42       43	540		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-ナデ。外面-黒斑。	
542       543       544       545       546       547       548         42       43       44       254       44       45       46       47       546       547       548         48       49       40       40       41       42       42       43       44       45       46       47       48       48       49       40       40       41       42       42       43       44       45       46       47       48       49       40       40       40       41       42       43       44       45       46       47       48       49       49       40       40       40       40       41       42       43	541		縄文土器	深鉢	-	_	-	喑灰黄色(2.5Y5/2)		内・外面-二枚貝条痕。	
543     編文土器 深鉢?	542		縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。内面-黒斑。	
244   後高地 2 南東部   東斜面   「東外面   「東方面   「東面   「東面   「東面   「東面   「東面   「東面   「東面   「東面   「東面   「東面	543		縄文土器	深鉢?	_	-	-				
545     東斜面       546     細文上器 深鉢 27.0 鈍黄色 (2.5Y6/3)     外面枚貝条痕のちナデ。内面-ナデ。 ナデ。       546     細文土器 深鉢 鈍黄橙色 (10YR6/4)     内・外面枚貝条痕のちナデ。 外面 黒斑。       547     細文土器 深鉢 鈍黄褐色 (10YR5/3)     外面-結節縄文。内面・ヘラミガキ。       548     深鉢 29.8 暗灰黄色 (2.5Y4/2)	544	微高地2南東部	縄文土器	深鉢	_	-	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		_	
540     - 一	545		縄文上器	深鉢	27.0	-	-	鈍黄色(2.5Y6/3)			
548	546		縄文土器	深鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)			
	547		縄文土器	深鉢	-	-	-	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-結節縄文。内面-ヘラミガキ。	
	548		縄文上器	深鉢	29,8	_	-	暗灰黄色(2.5Y4/2)			
549     縄文土器   浅鉢   -   -   -   褐灰色 (10YR4/1)	549		縄文土器	浅鉢	_	_	_	褐灰色(10YR4/1)			
550   親文上器 浅鉢   灰黄色 (2.5Y6/2)   外面へラミガキ。	550			浅鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)		外面-ヘラミガキ。	

掲載					測値(cr	n)				
拘 番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
551		縄文土器	浅鉢	-	-	_	黄灰色(2.5Y5/1)		外面-ヘラミガキ。	
552		縄文上器	浅鉢	-	_		鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ヘラミガキ。	
553		縄文土器	深鉢	_	2.1	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-ケズリ・ナデ。内面-ナデ? 剥落。	
554		縄文土器	浅針				黄灰色(2.5Y6/1)		内・外面-ヘラミガキ。黒斑。	
555		縄文上器	淡鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面・ナデ。	
556		縄文上器	深鉢	-	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-ナデ。	
557		縄文土器	深鉢?	_	_	_	橙色(5YR7/6)		外面 ヘラケズリ。内面 ナデ。	
558		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/4)		外面-ナデ・ヘラケズリ。内面-ナ デ。	
559		紀文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-ナデ。	
560		縄文土器	深針				浅黄橙色(10YR8/4)		外面-二枚貝条痕。内面-ナデ。	
561		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		内・外面-ナデ。	
562		縄文土器	深鉢	-	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面- 「枚貝状痕。内面-ナデ。	
563		縄文土器	深鉢	-	-	_	鈍黄色(2.5Y6/3)		外面-二枚貝条痕。黒斑。内面-ナ デ。	
564		縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍黄樹色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。	
565		縄文土器	淡鉢	_	-	_	浅黄橙色(10YR8/4)		内・外面ナデ。	
566		縄文上器	深鉢	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		内・外面-ナデ。	
567		縄文土器	浅鉢	48.4	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外血-煤。	
568		<b>糾文上器</b>	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面-煤。内面-ナデ。黒斑。	
569		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-二枚貝条痕のちナデ。煤。 内面-ナデ。黒斑。	
570		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-二枚貝条痕。内而-ナデ。	
571		細文上器	深鉢	30.6	_	_	鈍黄桁色(10YR6/4)		外面 「枚貝条痕のちナデ。内面 ナデ。	
572		紀文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-ナデ。黒斑。	
573		縄文土器	深針	46.2	_	_	橙色(5YR7/6)		内・外面-ナデ。	
574	微高地2南東部	組文上器	深鉢	29.9	_	-	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-擬縄文(巻貝)。内面-ヘラ ミガキ。	
575	東斜面	縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)		内・外面ナデ。	
576		縄文上器	深鉢	-	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-条痕のちナデ。内面-ナデ。	
577		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文(?)・ヘラミガキ。内 前-ヘラミガキ。黒斑。	
578		縄文土器	深鉢	_	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-縄文(R L)・ヘラミガキ。 内面-黒斑。	
579		縄文土器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-縄文(LR)。内面-ヘラミ ガキ。	
580		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-縄文(R L)。内面-ナデ。	
581		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文 (RL)。内面-ヘラミ ガキ?。	
582		縄文上器	浅鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ヘラミガキ。	
583		縄文土器	浅鉢	-	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面 結節縄文。内面 ナデ。	
584		縄文上器	貅	_	_	_	暗灰色(N3/)		外面-縄文(R L)・ヘラミガキ。 内面-ヘラミガキ。	
585		縄文上器	浅鉢	_	-	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面:沈線のち縄文(R L)。	
586		縄文土器	深鉢	_	_	_	喑灰黄色(2.5Y4/2)		外面-縄文(R L )。内面-沈線の ち縄文(R L )。	
587		縄文土器	深鉢	-	-	1	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-縄文(R L)・ヘラミガキ。 煤。内面-ヘラミガキ。	
588		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ヘラミガキ・縄文 (RL)。 内面-ナデ。	
589		細文土器	深鉢	-	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ヘラミガキ・縄文 (R L)。 煤。内面-ヘラミガキ。	
590		細文上器	深鉢	_	-	_	鈍黄色(2.5Y6/3)		外面 ナデ・縄文(LR)。内面 ナ デ。内・外面-黒旗。	
591		細文上器	浅鉢	-	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-結節縄文(R L )。内面-ナ デ。	
592		縄文土器	深鉢	_	-	_	褐灰色(10YR5/1)		外面 ナデ。煤。内面 ナデ。	
593	1	縄文土器	深鉢	_	5.0	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。	

掲載	掲載遺構	種別	器種	Н	測値(a	n)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
番号	16/100/25/149	13679	TUTTE	口径	底径	高器	(m)	10/1/200	Dig . 1476M by & C	NH
594		縄文土器	深針	_	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		内・外面-ナデ。	
595		縄文上器	深鉢	_		-	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。	
596		縄文土器	深鉢	_		-	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。 黒斑。	
597		縄文土器	深鉢	22.2			浅黄橙色(10YR8/4)		外面-条痕。内面-ナデ。	
598		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍橙色(5YR7/4)		外而-貝殻条痕。内面-ナデ。	
599		縄文上器	深鉢	37.8	_	_	鈍橙色 (5YR7/4)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。	
600		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面 条痕のちナデ。内面 ナデ。	
601		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		内・外面-ナデ。	
602		縄文上器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。	
603		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。	
604		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。	
605		縄文土器	深鉢	_	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ。黒斑。	
606		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。	
607		縄文土器	深鉢	_	_	-	灰色(5Y5/1)		内・外面-ナデ。	
608		縄文土器	深鉢				鈍黄橙色(10YR6/3)		内·外面-条痕。	
609		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外而-ナデ。内而-条痕。	
610		縄文上器	深鉢	_	-	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-ナデ。黒斑。	
611		縄文土器	深鉢	_	-	-	灰黄色(2.5Y7/2)		内・外面-ナデ。	
612		縄文土器	深鉢	-	_	-	灰黄褐色(10YR5/2)		内・外面-ナデ。	
613		縄文上器	深鉢	17.8	_	-	黒褐色(2.5Y3/1)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。	
614		縄文土器	深鉢	_	_	-	喑灰色(N3/0)		内・外面-ナデ。	
615		縄文土器	深鉢	27.2	_	_	黒褐色 (2.5Y3/1)		外面-条痕のちナデ。煤。内面-ナ デ。	
616		縄文土器	深鉢	35,0	_	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-ナデ・貝による条痕。内面- ナデ。	
617	遺構に伴わない	縄文上器	深鉢	41,3	_	_			内・外面-貝条痕・ナデ。	
618	遺物<晩期>	縄文土器	深鉢	33.1	_	-	灰黄色(2.5Y7/2)		外面 貝殻条痕。黒斑。内面 ナデ。	
619		縄文土器	深鉢	-	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)		内・外面-貝殻条痕。	
620		縄文上器	深鉢	26.6	_	_	明赤褐色(5YR5/6)		内・外面-ナデ。黒斑。	
621		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (5YR6/5)			
622		縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/3)		外面-貝殼条痕。	
623		縄文上器	深鉢	_	_	_	灰白色(10YR8/2)		内而-ナデ。	
624		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-貝殼条痕。	
625		縄文土器	深鉢	31.8	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		内·外面-只殼条痕。外面-黑変。	
626		縄文土器	深鉢				鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-貝殼条痕.内面-ナデ。	
627		<b>和文上器</b>	深鉢	_	_	_	橙色 (5YR6/6)		外面-貝殻条痕のちナデ。内面-ナ デ。	
628		縄文土器	深鉢	_	_	_			外面-貝殻条痕。内面-ナデ。	
629		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-貝殻条痕。内面-ナデ。内・ 外面-黒斑。	
630		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-貝殻条痕のちナデ?。	
631		縄文土器	深鉢?	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)	+	内・外面・ヘラミガキ。外面・煤。	
632		縄文上器	浅鉢	<u> </u>	_		- 明褐色 (7.5YR5/6)	+	内而-黒斑。	
633		縄文上器	浅鉢	32.4			鈍黄褐色(10YR5/3)		内・外面-ヘラミガキ。	
634		縄文土器	浅鉢		_		灰黄色(2.5Y6/2)	+	内・外面へラミガキ。	
635		縄文土器	浅鉢	_	<u> </u>				19:70回 ハノベルギ。	
636		縄文工部	浅鉢	_		_	- 通典位世 (10YR6/4) - 鈍黄褐色 (10YR5/3)		別面-ヘラミガモ da-M面田町	
030			(米野	_		_			外面-ヘラミガキ。内・外面-黒斑。	
637		縄文土 器?	浅鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ナデ(砂粒の動く)。 内面-煤。	
638		縄文上器	深鉢?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内・外面-ナデ(砂粒の動く)。 内面-煤。	
639		縄文土器	浅鉢	19.4	_	-	褐灰色(7.5YR4/1)			
640		縄文土器	深鉢				鈍褐色 (7.5YR5/4)		縄文 (RL)。	
641	遺構に伴わない	縄文上器	深鉢	-	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		縄文 (R L)。	
	遺物<後期>								外而-縄文 (RL)。内而-ヘラミ	
642	I	縄文土器	深鉢?				鈍黄橙色(10YR6/4)		ガキ?。	

掲載	12 10 /4 14	een.i	E0.4-6	i i	測値(cn	1)	(r = 20)	.0.46	and different and the control of the second	/II: etw
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
643		縄文上器	浅鉢	_	_	-	鈍褐色(7.5YR5/3)			
644		<b>縄文上器</b>	深鉢	_	_	_	浅黄棕色(7.5YR8/4)		外面 細密条痕。内面 ナデ。内・ 外面-黒斑。	
645		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)			
646		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		内面-ヘラミガキ。	
647		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面 縄文 ( R L )。内面 ミガキ・ ナデ。	
648		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-縄文(R L)。	
649		縄文土器	鉩	_	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		外面-縄文(LR)。内面-貝殻条 痕。	
650		縄文土器	深鉢				黒褐色(2.5Y3/1)		内・外面-煤付着。	
651		縄文上器 (後)	深鉢	_	_	_	鈍橙色(5YR6/4)		内・外面-ミガキ。外面-縄文(R L)。	
652		縄文土器	鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/2)		外面-縄文 (RL?)。内面-ヘラ ミガキ。	
653		縄文上器	鉢	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-縄文(R L )。煤。内面-ナ デ。黒斑。	
654		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-ヘラミガキ。内面-縄文(L R)。	
655		縄文上器	深鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文(R L )・ミガキ。内・ 外面-黒斑。	
656		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-縄文(L R)。	
657		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-縄文(R L)。	
658		縄文土器	鉢	_	_	_	喑灰黄色(2.5Y5/2)		外面-縄文(R L)。	
659	WILLIAM AGO 2	縄文土器	浅鉢	-	_	=	鈍黄褐色(10YR5/3)		外而-結節縄文(R L )・刺突 (巻貝)。	
660	遺構に伴わない 遺物<後期>	縄文上器	?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-擬縄文(巻貝)。	
661		縄文土器	深鉢	_	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-縄文(R L)・ナデ。内面- ナデ。	
662		縄文上器	鉢	_	-	-	浅黄色(2.5Y7/4)		外面・結節縄文(RL)。内・外面-黒斑。	
663		縄文土器	鉢	_	-	-	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-結節縄文(LR)。内面-ナ デ。	
664		縄文上器	鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面·結節縄文(LR?)。内面- 黒斑。	
665		縄文土器	鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ヘラミガキ・結節縄文(R L)。内面-ナデ。煤付着。	
666		縄文上器	深鉢?	_	_	_	黄灰色(2.5Y5/1)		外面-縄文。煤付着。内面-ヘラミ ガキ?	
667		縄文上器	深鉢	_	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-・縄文 (R L)。内-ナデ。	
668		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-漆を塗布後へラミガキ・縄 文 ( L R )。内面-ヘラミガキ。	
669		縄文土器	深鉢?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-縄文(L R)。	
670		縄文上器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		糾文 (RLR)。	
671		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内・外面-ハケメ。外面-煤。	
672		縄文土器	深鉢	-	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内・外面-貝殻条痕。	
673		縄文土器	深鉢	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)			
674		縄文上器	深鉢	-	6.4	_	浅黄橙色 (10YR8/4)		外面-黒斑。	
675		縄文土器	深鉢	_	3.0	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			
676 677		縄文土器	深鉢 底部	_	2.6	_	橙色 (7.5YR6/6) 鈍褐色 (7.5YR5/3)			
678		組文上器	底部	_	6.0	_	鈍黄色(7.51R3/3) 鈍黄色(2.5Y6/3)		内・外面-ナデ。	
679		縄文1:器	深鉢	_	4.6	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		内・外面-ナデ。	
680	竪穴住居 5	弥生上器	±Mi	15.5	5.5	(28.2)	鈍橙色(7.5YR7/4)	復元完形	外面 口縁沈線 2 条・胴部タタキ のちタテハケ・ミガキ。内外面-	
681		弥生上器	並	18.0	_	_	褐色 (7.5YR4/3)		煤付着。 外面-櫛描波状文×2、9条。	
682	1000 to 1000 t	<b>弥生上器</b>	壺	16.6	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
683	竪穴住居 6	弥生土器	壺				鈍橙色(2.5YR6/4)		口縁端部に刻目文。	
684		弥生土器	壺				鈍橙色 (5YR6/4)		外面-刻目貼付突带 2 条。	

掲載	掲載遺構	種別	器種	d	測値(ca	n)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
番号	1号联起博	THEOT	004111	口径	底径	高器	CZ RAI	4/1/28	ル窓・14人の付款なる	NH 15
685		弥生上器	壺	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外前-櫛描波状文・直線文・煤付 着。	
686		弥生土器	韓	_	-	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-櫛描(直線文・波状文)× 2。	
687		弥生上器	並	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-櫛描(斜格子文・列点文)× 2。	
688		弥生土器	壺	_	9.6	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面 櫛描列点文。	
689	Eulia La	弥生土器	alii E	19.2	-	_	鈍赤褐色 (5YR4/4)		外面-頸部に煤付着。	
690	竪穴住居 6	弥生上器	魏	18.4	-	-	橙色 (7.5YR7/6∼6/6)		外面-頸部に煤付着。	
691		弥生土器	栗	30.8	_	_	橙色(2.5YR6/6)			
692		弥生土器	甕	22.4	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
693		弥生上器	煮	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		日縁端部下端に刻目文。	
694		弥生上器	织	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-櫛描列点文。	
695		弥生土器	甕	_	_	_	灰白色(10YR8/2)		外面 櫛描列点文×2。	
696		弥生土器	勳				暗褐色(10YR3/3)		外面-櫛描列点文。	
697		弥生上器	鉄	_	6.2	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		内面-コゲ付着。	
698	竪穴住居 7	弥生土器	ત્રીર્ધ -	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面・櫛描直線文・波状文・直線 文8条・ハケ刺突文。	1004と同一個体が
699		弥生土器	壺	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)		日縁端部に刻目文。	
700	竪穴住居 8	弥生上器	並	_	_	_	鈍褐色(7.5YR5/4)		外面-櫛描波状文・直線文・波状 文8条。	
701		弥生土器	聻	17.7	_	-	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-櫛描列点文。	
702		弥生上器	壶	17.4	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-押圧貼付突帯 2 条・口縁端 部に刻目文。	
703		弥生上器	無三量	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-櫛描波状文。	
704		弥生上器	甕	17.9	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-調整不明瞭。	
705		弥生土器	卖	10.6	_	_	橙色 (5YR7/6)		外面 ハケ刺突文。	
706		弥生土器	쇛	13.0	_	_	鈍橙色 (5YR6/4)		外面-ハケ刺突文。	
707		弥生上器	쵎	_	_	_	橙色 (5YR7/6)		外面-煤付着。	
708		弥生土器	甕	15.8	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)		外面-ハケ刺突文。煤付着。	
709	竪穴住居 9	弥生土器	禁	16.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		外面-ハケ刺突文。	
710		弥生土器	红	19.0	_	_	橙色(7.5YR7/5)			
711		弥生上器	無	20.0	_	_	桁色 (2.5YR6/8)		外面-ハケ刺突文。	
712		弥生土器	甕	21.0	_	_	鈍橙色 (5YR7/4)			
713		弥生土器	烈	27.0			橙色 (5YR7/6)			
714		弥生上器	選	34.7	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		71 - 1 MALE AN	
715		弥生上器	ार्ग	_	9.7	_	<b></b>		外面-煤付着。	
716 717		弥生土器 弥生土器		_	6.0	_	鈍橙色(2.5YR5.5/4) 鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-煤付着。	
718		弥生上器	無頸症	11.9	-	_	鈍黄松色(10YR7/3)			
719		弥生土器	壺				鈍褐色(7.5YR5/4)		外而-櫛描直線文・波状文・直線 文9条・列点文。	
720		弥生上器	幾	-	_	-	鈍褐色 (7.5YR6/3)		外面-煤付着。	
721	竪穴住居10	弥生土器	鉢	18.9	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
722		弥生土器	類	21.0	_	-	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
723		弥生上器	鐵	20.1	_	_	黒褐色 (2.5Y3/1)		外面-櫛描列点文。	
724		弥生上器	甕	19.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)			
725		弥生土器	쾦	_	5.7	_	鈍黄橙色(10YR6/4)			
726		弥生土器	壶	_	8.4	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。 外面 煤付着・タタキのちタテハ	
	竪穴住居12	弥生上器	甕	33.7	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		ケメ・ヘラミガキ。ハケ刺突文。	
727		77.71. 1.00	烈		7.2		鈍黄橙色(10YR7/2)			727と同一個体か
727 728		弥生土器	360							12. 412 11.11.1
	竪穴住居14	弥生土器 弥生上器 弥生上器	壶	13.5	3.8	_	鈍赤褐色 (5YR4/4) 灰褐色 (7.5YR5/2)		外面-櫛描波状文× 2 。煤付着。	

掲載	相称海蚀	\$50d	ga co	p	測値(a	n)	7, ∋n	of freeds	175台版,平江小水中306名。17	/Ati	±z.
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
732		弥生上器	爺	8.3	_	_	和色(5YR6/6)		口縁部内面-波状文4条・口縁端 部-刻目文。外面-刻目貼付突帯文 4条。		
733		弥生土器	壺	_	_	_	明赤褐色(2.5Y5/6)		外面-貼付突帯2条・櫛描直線 文×2、7条。		
734		弥生上器	壶	_	_	-	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-櫛指直線文・波状文・直線 文8条・列点文。		
735		弥生上器	甕	17.3	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-ハケ刺突文。		
736		弥生土器	壺	-	6.6	_	橙色 (7.5YR6/6)			735と同	-個体が
737	竪穴住居15	弥生上器	쇒	14.8	-	-	橙色(2.5YR6/6)				
738		弥生土器	甕	18.4	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-櫛描列点文。煤付着。		
739		弥生土器	然	19.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)				
740		弥生上器	쵎	27.8	_	_	橙色(7.5YR7/6)				
741		弥生土器	蒸	26.6	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)				
742		弥生上器	鉪	_	6.0	_	灰黄橙色(10YR6/2)				
743		弥生土器	甕	_	5.6	_	鈍橙色 (7,5YR7/4)				
744		弥生土器	5村 上本		4.4		灰黄色(2.5Y6/2)				
745		弥生上器	Set.	-	5.6	_	鈍黄橙色(10YR7/3)				
746		弥生土器	高杯	-	11.5	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		脚部穿孔 2 個 1 組 2 方向。		
747		弥生土器	無頸壺	8.2	_	_	鈍橙色(5YR7/4)		外面-櫛描直線文・波状文・直線 文・波状文・直線文12条。		
748		弥牛上器	無頸壺	9.8	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/3)		外面-櫛描直線文·波状文。		
749		弥生土器	無頸壺	12.3			鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-櫛指(直線文・波状文)× 5・直線文10条(最下層のみ7 条)・列点文。		
750		弥生上器	並	-	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/3)		外面-押圧貼付突带文 2 条。		
751		弥生上器	भीर	-	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)		外面-押圧貼付突帶文2条。		
752		弥生土器	類	16.9			鈍橙色 (5YR7/4)		□稼端部-刻目义。		
753		弥生上器	神	19.6	_	_	灰白色 (7.5YR8/2)		口縁端部-刻目文·外面-煤付着。		
754		弥生土器	甕	19.2	-	-	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-煤付着。		
755		弥生土器	editi Arri	18.9	_	_	橙色 (5YR7/6)		外面-煤付着。		
756	竪穴住居16	弥生上器	甕	19.8	_	_	校色 (2.5YR6/6)		外面-櫛描列点文・煤付着。		
757		弥生土器	甕	23.4	_	_	鈍橙色(5YR6/4)		外面-櫛描列点文・煤付着。		
758		弥生上器	類	28.7	_	_	橙色 (5YR7/6)				
759		弥生土器	燛	29.0	_	_	浅黄色(2.5Y7/4)		外面-櫛描列点文・煤付着。		
760		弥生土器	独	24.0	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		外面-ハケ刺突文・煤付着。		
761		弥生上器	类	31.2	_	_	鈍橙色 (5YR7/4)		外面-ハケ刺突文。		
762		弥生土器	契	16.3	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)				
763		弥生上器	煮	18.0	_	_	鈍橙色 (5YR7/4)				
764		弥生土器	甕	_	5.6	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)				
765		弥生土器	加		6.2		橙色(2.5YR6/6)		外面-煤付着。		
766		弥生上器	쇛	_	5.0	_	桁色 (2.5YR6/6)		内面-コゲ付着。		
767		弥生土器	भीतं	_	7.4	_	鈍橙色 (5YR7/4)				
768	竪穴住居17	弥生土器	壺	15.7	_	_	橙色 (7.5YR6/6)				
769		弥生上器	甕	-	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		内外面-煤付着。		
770		弥生土器	壺	10.8	_	_	鈍褐色(7.5YR5/4)		外面-押圧突帯文2条・櫛描波状 文×2、9条。		
771		弥尘土器	甕	18.5	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-ハケ刺突文。内外面-煤付着。		
772		弥生土器	鐵	17.5	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
773	竪穴住居18	弥生上器	쇒	21.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-煤付着。		
774	- NO SIE/E 20	弥生土器	甕	20.0	_	-	明赤褐色 (2.5YR5/6)		外面-櫛描列点文。煤付着。		
775		弥生上器	鐵	20.0			鈍赤褐色 (5YR5/4)		外而-櫛描列点文。		
776		弥生土器	甕	26.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-櫛描列点文×2。	P5出土	
777		弥生土器	類		5.9		明赤褐色 (2.5YR5/6)				
778		弥生土器	頸	_	5.2	_	鈍褐色 (7.5YR5/4)				

掲載	掲載遺構	種別	器種	j.	上測値(car	1)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
番号	163 南灯石田山市	14100	自由作品	口径	底径	高器		470128	形態・子伝の付換なこ	1HI 15
779		弥生土器	壺		6.3	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-煤付着。	
780	竪穴住居18	弥生土器	쇒	_	3,3	_	鈍赤褐色(5YR5/4)			
781		弥生上器	甕	-	4.9	-	橙色(2.5YR7/6)			
782		弥生上器	並	16.9	_	_	鈍黄褐色(10YR5/2)		外面-口縁端部上下2ヶ所に刻目 文。	
783		弥生上器	並		_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-櫛指列点文。内外面-煤付着。	
784		弥生土器	甕	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面 櫛描列点文。	
785		弥生土器	维	34.0	_	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-櫛描列点文×2。	
786		弥生上器	熱	_	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-櫛指列点文×2。	
787		弥生土器	甕	23.2	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面 煤付着。	
788		弥生土器	#II	19.1	7.5	31.2	鈍橙色 (5YR7/4)	復元完形		
789		弥生上器	鉄	14.8	_	-	鈍橙色 (7.5YR7/4)			
790	阿克尔巴10	弥生土器	要	_	-	_	橙色 (5YR6/8)		1.7 - 1911 22	
791	竪穴住居19	弥生土器	無	_	6.4	_	鈍黄色 (2.5Y6/3)		内面-コゲ付着。	
792 793		弥生上器	摂要	_	5.0 5.1	_	明褐色 (7.5YR5/6)		内面-コゲ付着。	
794		弥生土器	壺	_	10.4	_	灰黄褐色(10YR5/2)			
124		YPT. Linn	SE		10.4		MANUEL (101KJ/2)			
795		弥生土器	ジョッキ形	_	5.4	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-タタキのちタテハケ・ミガ キ。	
796		弥尘土器	高杯	_	20.5	19.7	鈍黄橙色(10YR6/3)	ほぼ完形	外面-口縁部・脚部に穿孔2個1 単位2箇所。	
797		弥生土器	蓋	7.6	_	3.2	黄灰色(2.5Y5/1)	完形	外面-穿孔 2 個 1 単位 2 箇所。	
798		弥生土器	鉢	28.0	_	_	橙色 (5YR6/6)			
799		弥生上器	高杯	_	15.6	_	鈍黄橙色(10YR6/4)			
800		弥生上器	壺		_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-刻口貼付突带文3条。	
801		弥生上器	維	20.4	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-口縁端部に刻日文・櫛描列 点文(胴部)。内外面-煤付着。	
802		弥生士器	甕	16.8	4.4	23.4	鈍橙色(7.5YR6/4)	ほぼ完形	外而-タタキのちタテハケ・ミガ キ、櫛描列点文。	
803		弥生土器	甕	17.4	5.7	28.9	鈍橙色(7.5YR6/4)	復元完形	外面-ハケ刺突文。	
804	竪穴住居20	弥生上器	8神 28元	19.4	_	_	鈍橙色(5YR6/4)			
805	V27 (11/11/20	弥生上器	甕	19.0	_	_	明赤褐色(2.5YR5/6)			
806		弥生土器	甕	21.6	_	_	鈍橙色(5YR7/4)		外面-櫛描列点文・煤付着。	
807		弥生上器	쇒	21,6	6.0	(32.5)	灰褐色(7.5Y6/2)	復元完形	外面-ハケ刺突文・煤付着。	
808		弥生上器	भीर्	_	6.6	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
809		弥生土器	製	_	6.1	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
810		弥生上器	熱	_	5.0	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)			
811		弥生上器	甕	- 12.0	6.0	_	校色 (5YR7/6)		ALL THROUGH THE P. D. DEFENSA	
812 813	竪穴住居21	弥生土器 弥生土器	- 製	13.6	5.0	_	黒褐色(10YR3/2) 灰黄褐色(10YR6/2)		外面-櫛描列点文・煤付着。	
814	竪穴住居22	弥生 1:器	壶	9.8	-	_			外面-刻口貼付突帯文4条・櫛描 直線文・波状文9条。	
815	Almaini ma	弥生上器	쇒	_	_	_				
816	竪穴住居23	弥生上器	甕	16.6	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		外面-煤付着。	
817	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	弥生土器	高杯	17.3	_	_	明赤褐色 (5YR5/6)		外面 脚部穿孔 4 方向。	
818	土器棺1	弥尘土器	喪	14.8	6.2	24.9	橙色 (5YR6/6)	完形	外面-肩部に刺突文3個。内外面- 煤付着。	
819	土器棺 2	弥生土器	喪	15.2	4.6	23.7	灰白色 (10YR7/1)	完形	内外面 煤付着。	
820		弥生土器	壶	-	-	-	鈍褐色 (7.5YR5/3)		外面-櫛描直線文・波状文 9 条。	
821	袋状土壙15	弥生上器	烈	_	_	_	橙色 (7.5YR7/6)			
822		弥生土器	喪	_	_	_	浅黄橙色 (7.5YR8/4)		外面-ハケ刺突文。	
823	袋状土壙17	弥生土器	壺	15.0	_	_	黄褐色 (2.5Y5/2)		外面-ハケ刺突文。	
824	土塘58	弥生土器	納	_	_	-	鈍赤褐色(5YR4/3)		外面-口縁端部に刻口文。頸部へ ラ描沈線3条。	
	土壙60	弥生上器	魏		_	_	鈍橙色 (5YR7/4)	1		

41 Laters					[測値(a	n)				
掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	備考
826	土壙60	弥生土器	抵	_	_	_	鈍赤褐色 (2.5YR5/4)			
827		弥生上器	並	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-ハケ刺突文。	
828		弥生土器	甕	19.7	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)			
829		弥生土器	新	13.7			鈍黄橙色(10YR7/2)			
830	土.壙61	弥生上器	ച	18.6	-	-	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-ハケ刺突文。	
831		弥生上器	甕	22.6	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)			
832		弥生土器	甕	_	5.5	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		内外面 煤付着。	
833		弥生土器	ച	-	6.2	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		内外面-煤付着。	
834		弥尘上器	並	-	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-複帯櫛描沈線文・ハケ刺突 文。	
835	上壙62	弥生土器	壺	_	_	_	橙色 (2.5YR6/6)		外面-押圧貼付突带文×2。	
836		弥生上器	ച	20.2	-	-	鈍橙色 (5YR7/4)		外而-煤付着。	
837		弥生上器	無	-	6.0	-	鈍橙色 (5YR6.5/4)			
838	I false o	弥生土器	甕	_	7.2	_	鈍橙色 (5YR6/4)			
839	上壙63	弥生土器	響		5.8		鈍赤褐色(5YR5/3)		内面-コゲ付着。	
840	土壙64	弥生上器	쇛	13.4	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外而-煤付着。	
841		弥生上器	માર્વ	14.8	_	_	鈍橙色 (5YR6/4)			
842	上壙66	弥生土器	甕	17.4	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)		外面-煤付着。	
843	土壙68	弥生土器	24E	_	8.9	_	橙色 (5YR6/6)		内面-コゲ付着。	
844	土壙69	弥生上器	3/bij	20.1	_	_	橙色 (7.5YR7/6)		外面-櫛描列点文。	
845		弥牛上器	並	27.6	9.0	(55.0)	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-口縁端部に刻目文・押圧貼 付突帯文・櫛描(直線文・波状 文)×4・直線文9条・列点文。	
846		弥生土器	壺	13.8	8.2	(29.0)	鈍黄褐色(10YR5/3)	復元完形	外而-口縁部外而に波状文7条・ 押圧突帯文・櫛描(直線文・波 状文)×2・直線文10条。	
847		弥生上器	並	_	7.1	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
848	上壙71	弥生土器	甕	29.6	_	_	橙色(7.5YR7/6)			
849		弥生土器	\$11 \$\square	21.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-櫛描列点文×2。	
850		弥生上器	3/ml	18.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
851		弥生土器	甕	_	5.2	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)			
852		弥生土器	甕	_	5.8	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		 内面-コゲ付着。	
853		弥生上器	8#i	_	5.6	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
854	土壙74	弥生上器	鉄	23.0	_	_	桁色 (5YR6/6)		外面-煤付着。	
855		弥生土器	માર્વ	_	_	_	橙色 (7.5YR6/6)		外面- 口縁端部に刻目文。	
856	上壙77	弥生土器	蒸		5.4		鈍黄橙色(10YR6/3)		内面-コゲ付着。	
857		弥生上器	纸	17.4	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
858	:壙78	弥生上器	甕	22,9	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)			
859		弥生土器	좵	_	7.8	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。	
860		弥生土器	쇒	19.4	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-複帯櫛描沈線文·煤付着。	167と同一個体か。
861	土壤79	弥生上器	甕	_	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面 複帯櫛描沈線文・櫛描列点 文。	166と同一個体か。
862	土壙80	弥生土器	壺	_	9.0	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-煤付着。	
863		弥生上器	高杯	14.6	_	-	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-櫛描波状文×2・櫛描直線 文7条・煤付着。	
864	上壙81	弥生土器	甕	19.6	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面 煤付着。	
865		弥生土器	越	20.0	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-ハケ刺突文・煤付着。	
866	十.壙82	弥生上器	塑	26.0	_	_	橙色 (5YR7/6)			
867	上壤86	弥生土器	भार	_	_	_	灰褐色(7.5YR4/2)		外面-櫛描(直線文・波状文)× 3・直線文9条・ハケ刺突文。	
868		弥生土器	纖	25.0	_	_	鈍褐色(7.5YR5/4)		外面-ハケ刺突文。内外面-煤付着。	
869	土壙87	弥生上器	类	19.8	_	_	橙色(7.5YR7/6)			
870		弥尘土器	甕	_	5.5	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内外面-煤付着。	
871		弥生土器	壺	17.2	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-口縁部外面にハケ斜格子 文。	
872	土壙89		甕	25.2	_	_	横色 (2.5YR6/6)			
873		弥生土器	細		5.6		純黄橙色 (10YR6/4)			
013		ツァ 士. コご名音	jus,		0.6				フト四-7米刊 付。	

掲載	掲載遺構	種別	器種	ri d	測値(cn	1)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
番号	拘収延件	性肥力リ	66411	口径	底径	高器	□ 前4	1//////////////////////////////////////	ル感・「仏の付取なる	NH 45
874		弥生土器	쇒	21.9	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		□縁端部-刻目文。	
875	13鷹90	弥生上器	쇒	23.0	_	-	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
876	1.3/00,00	弥生土器	甕	18.8	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)			
877		弥生土器	類		5.5		鈍黄橙色(10YR6/3)		内面-煤付着。	
878		弥生上器	壺	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		外面-櫛描直線文・列点文。	
879		弥生上器	甕	_	5.6	_	橙色(2.5YR6/8)		外面-煤付着。	
880	上壙93	弥生土器	甕	19.1	-	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)		外面 ハケ刺突文・煤付着。	
881		弥生土器	쇒	22.0	_	_	鈍橙色 (5YR7/4)			
882		弥生上器	訓	_	6.6	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		内外面-煤付着。	
883	Linko	弥生土器	無頸壺	7.9	7.0	(39.0)	鈍橙色(5YR7/4)		外面-櫛描(直線文・波状文)× 4、3~5条。	
884	土壙94	弥生 上器	鐵	20.0	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
885		弥生上器	並	_	5.3	_	浅黄橙色(10YR8/4)			
886		弥生土器	પોર્સ -	13.9	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/4)		外面-櫛描列点文。	
887		弥生土器	壺	14.6			橙色(2.5YR6/6)			
888	土壙97	弥生上器	纀	18.3	_	_	橙色 (5YR7/6)			
889		弥生上器	甕	_	5.2	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
890		弥生土器	喪	_	7.0	_	鈍褐色 (7.5YR5/3)		外面-被熱。	
891	水川1	弥生土器	想	_	6.0	_	鈍橙色 (5YR7/4)			
892		弥生上器	甕	13.9	_	_	鈍稅色(7.5YR6/4)		外面 タタキのちタテハケメ・[] 縁部凹線文3条。	
893		弥生土器	喪	15.2	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		胎土・作りともに粗雑。	
894		弥生 上器	쇒	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-粗いタタキ。	
895		弥生上器	拱	_	5.0	_	鈍黄橙色(10YR6/4)			
896		弥生上器	神	_	6.0	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
897		弥生上器	甕	15.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。	
898		弥生土器	要	15.9	_	=	鈍黄橙色(10YR7/4)		口縁部外面-9条の沈線。外面-煤 付着。	
899		弥生上器	鉢	16.9	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
900		弥生土器	蓋	14.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。把手欠損。	
901		弥生土器	韓	11.0	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-口縁部沈線3条。	
902	満4	弥生上器	壶	12.4	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面口縁部沈線3条。	器台転用品か?
903		弥生上器	前	14.1	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-口縁部沈線 4 条。	
904		弥生土器	લર્સ	10.9	4.7	(26.4)	淡橙色 (5YR8/3)	復元完形	外面-ハケ刺突义。内面-コゲ付着。	
905		弥生土器	壺	10.5	3.1	17.8	鈍橙色 (7.5YR7/4)	100000	/四・ワ村大人。円面 コノ目行。	
906			煮	13.3	4.6	26.4	浅黄橙色(10YR8/4)	復元完形	外面-煤付着。	
907			維	13.0	5.1	25.1	校员证E (1011kg/4) 检色 (5YR7/6)	完形	外面-口縁部沈線3条・ハケ刺突 文。	
908		弥生土器	组	13.1	4.6	19.4	浅黄橙色(2.5Y7/3)	復元完形	外面-口縁部沈線 2 条。	
909		弥生上器	施	14.4	6.3	(26.5)	线典值也(2.517/3) 鈍橙色(7.5YR7/4)	復元完形	外面-口縁部沈線 2 条・煤付着。	
910		弥生土器	要	12.3	- 0.3	- (20.3)	<b>粉色 (7.5YR7/4)</b>	1タノ しアモハウ	外面-タタキのちタテハケ。	
910		弥生土器	要	11.3	4.3	14.5	純黄橙色(10YR7/3)	復元完形	外面-ダタキのらタアハケ。 外面-煤付着。	
912		弥生土器	鉢	13.2	5.8	16.2	延黄橙色(10YR7/4)	ほぽ完形	外面-口縁部沈線2~3条・頸部 に穿孔2方向。	
913		弥生上器	無頸壺	10.8	_		鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-四線3条・斜格子文・櫛指 直線文4条・穿孔2方向。	
914	溝6	弥生上器	纽	15.6	_	_	鈍褐色(7.5YR6/3)		外而-タタキのちナデ。	
915		弥生上器	쇒	18.2	_	-	鈍黄橙色(10YR7/3)			
916		弥生土器	台付鉢	_	11.0	_	鈍橙色(5YR6/4)		外面 門線 4 条・穿孔 4 方向。	
917		弥生土器	壺	15.6			鈍赤褐色 (5YR5/4)		□縁部外面-櫛描波状文。	
918		弥生上器	無	18.2	_	_	鈍褐色(7.5YR5/3)			
919	溝12	弥生土器	ਅੰਜ਼ੀ	_	11.3	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
920		弥生土器	甕	_	6.4	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		内面-コゲ付着。	
921		弥生土器	鐵	_	6.0	_	灰黄褐色(10YR6/2)		内外面-煤付着。	
922	溝13	弥生上器	並	18.8	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)		□緑部外面-櫛描波状文。□緑部 内面-連続扇形文。外面-ハケ刺突 文。	

掲載	HII (D.VIII.44)	ppou	go es	ů	測値(cn	n)	/7, 6m	11546	10% 工分。小叶维克。12	f.lb:	±z.
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
923		弥生土器	壺	18.7	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/3)		口縁部外面-櫛描波状文。口縁部 内面-櫛描波状文・列点文・穿孔 2孔1対。		
924		弥生土器	朝	16.3	-	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		口緑部内外面-櫛描波状文。外面- 押圧突帯文。		
925		弥生上器	壶	16.1	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)		口縁部外面-ヘラ指斜格子文。外 面-押圧貼付突帯。		
926		弥生土器	चेंहें	17.2	-	_	鈍黄色(2.5Y6/4)		口緣部外面-沈線 4 条·刻目文。 頸部外面-指押圧× 2 。		
927	灣13	弥生土器	चंह	19.5	-		鈍黄橙色(10YR7/4)		口結部外而-凹線文4条·円形浮文 3×4方向。外面-櫛描波状文・ 櫛描斜格了文7条・凹線文7条・ 樟描波状文7条。		
928		弥生土器	甕	28.0	_	_	橙色 (7.5YR6/6)				
929		弥生上器	鉄	-	-	-	浅黄橙色(7.5YR8/6)		外面-煤付着。		
930		弥生土器	甕	28.1			橙色 (5YR6/6)		外面-肩部に穿孔1箇所。		
931		弥生上器	甕	34.2	_	_	明黄褐色(10YR7/6)		外面-煤付着。		
932		弥生土器	쾣	19.1	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-煤付着。		
933		弥生上器	甕	18.0	ı	_	鈍黄椒色(10YR6/4)		外面 タタキのちタテハケメ。内 外面-煤付着。		
934		弥生土器	甕	13.4	_	-	橙色 (2.5YR6/6)		口縁部外面-沈線 3 条。		
935		弥生上器	樂	11.8	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
936		弥生土器	聻	12.6	_	_	浅黄色(2.5Y7/3)		外面-煤付着。		
937		弥生上器	歯	20.2	=	=	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-口唇部に刻目文・刻目貼付 突帯文3条。		
938		弥生土器	甕	14.4	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)				
939	満14・15	弥生上器	鉄	25.2	_	_	黄灰色(2.5Y6/1)				
940		弥生上器	烈	15.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		口縁外面に刻目文。外面-煤付着。		
941		弥生土器	壺		15.2		鈍黄橙色(10YR6/4)				
942		弥生上器	甕	_	5.0	_	鈍橙色(7.5YR6/4)				
943		弥生土器	訓	17.2	_	_	黄灰色 (2.5Y5/1)				
944	溝17	弥生土器	悪	18.8	_	_	浅黄橙色 (7.5YR8/6)		内外面-煤付着。		
945	満26	弥生上器	壺	_	7.0	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		13216-14412110		
946		弥生上器	壶	17.8	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)		□緑部外面-凹線文3条。外面-櫛 指波状文7条・ヘラ指斜格子 文・凹線文11条・櫛描波状文7 条。		
947		弥生上器	壺	_	_	_	鈍黄褐色(10YR7/6)		外面-ヘラガキ列点文。		
948	窪地1	弥生土器	甕	18.0	_	_	鈍橙色(5YR6/4)		口縁部外面-凹線文2条。		
949		弥生上器	舞	18.0	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/6)		口縁部外面-凹線文2条。		
950		弥生土器	甕	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)				
951		弥生土器	台付鉢?	_		_	橙色 (7.5YR7/6)				
952		弥生上器	高杯	19.8	10.4	(11.5)	鈍橙色 (7.5YR7/4)	復元完形			
953		弥生土器	甕	19.4	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
954		弥生上器	鉄	21.1	_	_	明赤褐色 (2.5YR5/6)				
955	河道5	弥生土器	甕	21.8	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)	1			
956		弥生上器	無		6.8	_	鈍黄橙色(10YR6/4)				
957		弥生土器	鐵	14.4	-	_	明黄褐色(10YR6/6)	+	口絨部外面-凹線文 2 条。		
958	河道6	弥生土器	高杯	-	13.8	_	税色 (5YR6/6)		脚端部凹線文3条。		
959		弥生上器	瀬 瀬	16.0	-	_	橙色 (5YR6/6)		U. 100 HC HC1/25		
960		弥生上器	甕	14.1	_	_	暗灰黄色(5Y5/2)		外面 粗いタタキ後タテハケ・煤 付着。		
961		弥生土器	甕	15.4		_	鈍黄橙色(10YR6/4)		口縁部外面-ハケ刺突文。		
962		弥生上器	姓	20.2		_	鈍黄椒色(10YR7/3)	1			
963	河道7	弥生土器	華	-	_	_	鈍橙色 (2.5YR6/4)		外面-櫛描波状文·直線文·波状 文。		
964		弥生土器	壺	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外而-櫛描直線文・最下端へラ描 沈線文。		
965		弥生上器	無	_	_	_	橙色(7.5YR6/6)		外面-複帯櫛描沈線文·櫛描刺突 文。		

掲載	掲載遺構	種別	器種	d	測値(cn	1)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
番号	拘权思博	相望がり	石匠相里	口径	底径	高器	13 7河	- KRS	形態・丁伝の特徴など	1/19 45
966	河道 7	弥生土器	要	32.6	_		橙色(5YR6/8)		口縁端部に指押圧。外面-ヘラ描 き沈線4条以上。	
967		弥生上器	कां	12.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		内面-コゲ付着。	
968		弥生上器	쇒	14.0	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)			
969		弥生土器	eti 20.	16.2	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/3)			
970		弥生土器	契	17.4	_	_	橙色 (5YR6/6)			
971		弥生土器	甕	16.5	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
972		弥生上器	甕	13.9	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-煤付着。	
973		弥生上器	织	_	4.5	_	灰黄褐色(10YR5/2)			
974		弥生土器	쇛	14.0	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)		外面-煤付着。	
975		弥生土器	栗	15.1	_	_	褐灰色(10YR4/1)		口縁部外面-沈線3条。	
976		弥生土器	韓	11.9	_	_	明赤褐色 (5YR5/6)			
977	洪水砂関連遺物	弥生上器	પોર્સ	8.1	_	9.1	赤褐色(廾)(2.5YR4/6)	ほぼ完形	外而全体と内面一部に丹塗り。	
978		弥生上器	台付鉢	19.9	7.2	9.5	赤色(10R4/8)	ほぼ完形	内外面-丹塗り。	
979		弥生土器	壺	10.2	4.8	12.9	橙色 (5YR6/6)	完形	外面-頸部に穿孔2方向。	
980		弥生土器	悪	13.6	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-煤付着。	
981		弥生土器	卖	18.3	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面 煤付着。	
982		弥生上器	甕	14.7	-	-	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-櫛描波状文。	
983		弥生上器	魏	11.9	_	_	灰褐色(7.5YR5/2)			
984		弥生 上器	绁	14.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		外而-煤付着。	
985		弥生土器	独	14.0			鈍橙色(7.5YR7/3)		外面-煤付着。	
986		弥生土器	喪	_	5.3	_	灰黄色(2.5Y7/2)			
987		弥生土器	甕	_	5.3	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-煤付着。	
988		弥生上器	無頸壺	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/4)		外面-複帯櫛描沈線文。	
989		弥生上器	無頸症	_	_	_	淡橙色 (5YR8/4)		外面 櫛描直線文·波状文·直線文 7条。	
990		弥生土器	無頸壺	10.9	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-櫛描直線文・波状文 9 条。	
991		弥生土器	無頸壺	11.8	_	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-櫛描波状文·直線文·波状文 9条。	
992		弥生上器	無頸症	11.0	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
993		弥生 [:器	壶	-	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-櫛描直線文・波状文・直線 文・波状文・直線文7条。	
994		弥生 1:器	壶	_	_	_	黑褐色(10YR3/1)		外面-刻目貼付突帯文・横描(直 線文・波状文)×2・波・刻口貼 付突帯文・直線文5条。	
995		弥生上器	無頸壺	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-櫛描波状文。	
996		弥生土器	無頸壺	7.9	-	-	鈍黄橙色(10YR6/3)		内外而-煤付着。	
997		弥生土器	亞	10.3	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-刻目貼付突帯文3条・櫛描 波状文・直線文4条。	
998	遺構に伴わない 遺物	弥生上器	並	11.7	_	1	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-刻目貼付突帯文3条・櫛描 波状文・直線文・波状文5条?	
999		弥生土器	壺	12.2			鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-刻目貼付突帯文3条。	
1000		弥生土器	મોર્સ	10.6	-	-	橙色(7.5YR6/6)		外面-刻目貼付突帯文3条・櫛描 列点文。	
1001		弥生上器	壶	13.7	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-刻目貼付突带文 4 条。	
1002		弥生上器	壺	15.4	_	(9.5)	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-刻目貼付突帯文6条。口縁 部外而-櫛描斜格子文・円形浮文 2個1単位8方向。	
1003		弥生土器	壺	_	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)		外而-櫛描(波状文・直線文)× 3、9条・列点文。	
1004		弥生土器	પોર્ <u>દ</u>	17.2	_	-	橙色(5YR7/6)		口縁部外而に斜格子文。外而-押 圧突帯文2条。口縁部内面にハ ケ刺突文。	698と同一個体か。
1005		弥生上器	並	18.8	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		口縁部外面に波状文7条。口縁 部内面に波状文7条。	
1006		弥生土器	壺	19.4			明赤褐色 (5YR5/6)		口縁部外面にハケ斜格子文。口 縁部内面に櫛描列点文。	
1007		弥生土器	壺	20.8	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		口縁部外面-ヘラ描斜格子文。	

掲載	相称 师 Ⅲ	\$26 EM	ga ce	þ	「測値(cr	n)	7- ≕□	4.0%	176台版 。 五年3十一六,中年30年3年11年	/Ali:	±br.
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1008		弥生土器	壺	15.5	_	_	橙色(7.5YR6/6)		口縁部外面-上下端面に刻目文。 外面-押圧貼付突帯文。		
1009		弥生上器	વર્ષિ	16.7	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		口縁部外面 上下端面に刻目文。 外面-押圧貼付突帯文。		
1010		弥生上器	壶	18.0	-	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		口縁部外面-ハケ刺突文。口縁部 内面-凹線3条・櫛描波状文。		
1011		弥生上器	壶	13.6	_	_	橙色(2.5YR6/8)		「縁外面・ハケ綾杉文。  「縁内面・ 刻口突帯文・櫛描直線文・波状文 6条。		
1012		弥生土器	पहें	-	7.0	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面 煤付着。		
1013		弥生土器	wiki	_	9.4	_	浅黄橙色(10YR8/4)				
1014		弥生上器	献	_	9.1	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1015		弥生上器	並	_	12.0	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1016		弥生上器	壶	_	8.1	_	鈍黄褐色(10YR5/3)				
1017		弥生上器	養	16.6	_	_	村色(5YR6/6)		口縁部外面 刻目文。外面 ヘラ描 沈線文 4 条以上。		
1018		弥生土器	甕	_	-	_	鈍橙色(5YR6/4)		外面 櫛描沈線文・煤付着。		
1019		弥生土器	甕	-	_	_	鈍橙色 (7,5YR6/4)		外面-櫛描沈線文。被熱。		
1020		弥生土器	甕	-	_	_	鈍橙色(5YR6/4)		口縁部外面-刻口文。外面-複帯櫛 描沈線文・煤付着。		
1021		弥生上器	純	-	-	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-複带櫛描沈線文·列点文。		
1022		弥生上器	無	_	_	_	褐色( <b>7.</b> 5YR4/3)		口縁帶外面-刻目文。外面-複帯櫛 描沈線文。		
1023		弥生土器	興	_	_	_	橙色 (2.5YR6/6)		外面-複帯櫛描沈線文。		
1024		弥生上器	2 <u>4</u>	12.8	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面-複帯櫛描沈線文・櫛描列点 文。		
1025		弥生土器	卖	22.6	_	_	橙色 (7.5YR6/6)		外面 複帯櫛描沈線文。		
1026	遺構に伴わない	弥生土器	甕	21,2	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-複帯櫛描沈線文。		
1027	遺物	弥生上器	纯	22.9	-	_	橙色 (7.5YR6/6)		外面-複帯櫛描沈線文。		
1028		弥生上器	刘	16.0	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-複帯櫛描沈線文。		
1029		弥生上器	煮	13.0	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1030		弥生土器	쇒	16.3	_	-	橙色 (7.5YR7/6)				
1031		弥生土器	椠	18.8	-	-	橙色(2.5YR6/6)		外面-煤付着。		
1032		弥生土器	蔡	20.1	_	_	橙色(5YR6/6)				
1033		弥生土器	甕	22.6	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面-煤付着。		
1034		弥生土器	抵	18.0	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-櫛描列点文。煤付着。		
1035		弥生上器	烘	18.2	_	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ハケ刺突文。煤付着。		
1036		弥生上器	ച	20.8	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)		外面-櫛描列点文。煤付着。		
1037		弥生土器	劉	24.1	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ハケ炯突文。		
1038		弥生土器	甕	14.6	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-煤付着。		
1039		弥生土器	甕	16.5	_	-	橙色(2.5YR6/6)		外面 櫛描列点文。被熱。		
1040		弥生土器	甕	18,0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1041		弥生上器	幾	17.4	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1042		弥生上器	纯	16.1	_	_	橙色 (7.5YR6/6)		外面-櫛描列点文。煤付着。		
1043		弥生上器	쇒	18.2	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-ハケ刺突文。煤付着。		
1044		弥生土器	姓	12.9	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-煤付着。		
1045		弥生土器	甕	14.7	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1046		弥生土器	喪	17.6	_	_	褐色 (7.5Y4/3)		内外面 煤付着。		
1047		弥生土器	類	19.2	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-櫛描列点文。煤付着。		
1048		弥生上器	熱	19.4	_	_	校色 (2.5YR6/6)		外面 櫛描列点文。		
1049		弥生上器	\$40) \$40)	19.3	-	- 05.1	<b>鈍</b> 橙色(7.5YR7/4)	44	外面-煤付着。		
1050		弥生上器	納	21.7	6.4	25.1	浅黄色(2.5Y7/3)	復元完形	外面-ハケ刺突文。内外面-煤付着。		
1051		弥生土器	纸	15.3	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1052		弥生土器	製	18.1	l –	_	鈍褐色(7.5YR5/3)		外面-煤付着。		

掲載	ie ivan iii	ren.i	nnes.	H.	測値(cn	1)	f- =m	J PAIR	and date of the san title date in the	10:	-1*
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1054		弥生土器	刺	22.0			橙色(7.5YR6/6)		内外面-煤付着。		
1055		弥生土器	쇷	19.3	_	_	橙色(2.5YR6/6)				
1056		弥生土器	쇒	27.6	-	_	鈍褐色(7.5YR6/3)				
1057		弥生上器	壺	29.8	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)				
1058		弥生上器	쇒	31.7	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)				
1059		弥生上器	쇒	37.2	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外而-煤付着。		
1060		弥生上器	焦	11.4	-		鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-タタキのちタテハケ。煤付着。		
1061		弥生上器	魏	_	4.7	_	灰黄褐色(10YR6/2)				
1062		弥生上器	쇘	_	6.0	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-煤付着。		
1063		弥生上器	無	_	6.4	_	浅黄橙色(10YR8/4)				
1064		弥生上器	甕	_	4.8		鈍橙色(7.5YR7/4)				
1065		弥生上器	甕	_	5.4	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内面-コゲ付着。		
1066		弥生土器	甕	5.2	-	-	鈍褐色(7.5YR5/4)				
1067		弥生土器	甕	_	5.4	-	灰黄色(2,5YR6/2)		外面-煤付着。		
1068		弥生土器	甕	_	5.2	_	<b>鈍橙色(7.5YR6/4)</b>		内面-コゲ付着。		
1069		弥生土器	甕	_	6.3	_	鈍黄褐色(10YR5/3)				
1070		弥生土器	喪	_	4.4	-	鈍赤褐色(5YR5/4)		底部焼成前穿孔		
1071		弥生土器	甕	_	4.8	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部焼成前穿孔		
1072		弥生土器	栗	_	5.6	_	橙色(7.5YR6/6)		底部焼成前穿孔		
1073		弥生土器	高杯	23.8	-	_	浅黄色(2.5Y7/3)		外面-口唇部に刻目文。		
1074		弥生土器	高杯	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-口唇部に刻目文・穿孔2個 1単位。		
1075		弥生上器	高杯	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-口唇部に刻目文。口縁部内 面-円形浮文2個。		
1076		弥生土器	高杯				鈍赤褐色(5YR5/3)		外面-赤色顔料。口縁端部刻目文。		
1077		弥生上器	高杯	22.4	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1078		弥生上器	高杯	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-刻目突帯文3条·穿孔4方 向。		
1079	遺構に伴わない	弥生土器	高杯	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)				
1080	遺物	弥生土器	高杯	_	14.2	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1081		弥生土器	シ´ョッキ爪彡	15.0	_	_	鈍褐①(7.5YR5/4)		外而-櫛描波状文 4 条。口唇部-刻 目文。		
1082		弥生上器	र्ग अण्डेमार्ग	19.0	_	-	明赤褐色(5YR5/6)		外面-櫛描波状文10条・穿孔 1 個。		
1083		弥生上器	ジョッキ形	_	8.8	_	浅黄色(2.5Y7/3)				
1084		弥生上器	ジョッキ形	_	10.5		灰褐色(7.5YR4/2)				
1085		弥生上器	台付鉢?	_	17.5	_	鈍黄橙色(10YR6/4)				
1086		弥生上器	台付鉢?	_	14,2	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-穿孔 2 方向。		
1087		弥生上器	並	22.4	_	_	鈍赤橙色(5YR5/4)		□縁部 ハケ刺突文・□形浮文。外 面-ヘラ描綾杉文・□線文 6 条以 上。		
1088		弥生土器	壺	22.2			鈍黄橙色(10YR7/3)		口縁部外而-凹線文3条・円形浮 文4個。		
1089		弥生土器	喪	16.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		□縁部外面 凹線文2条。		
1090		弥生土器	甕	14.1	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		□縁部外面-凹線文2条。		
1091		弥生土器	高杯	20.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。		
1092		弥生土器	高杯		_		浅黄橙色(7.5YR8/4)		外面-脚部穿孔8方向。凹線文2条。		
1093		弥生土器	器台		29.2		鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-凹線文17条以上。		
1094		弥生土器	壺	_	_	_	明黄褐色(10YR7/6)				
1095		弥生土器	壶	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1096		弥生土器	姓	12.8	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		□縁部外面-沈線文3条。		
1097		弥生上器	想	14.7	_	-	橙色(7.5YR6/6)		口縁部外而-沈線文3条。		
1098		弥生 上器	高杯	_	_	_	橙色(5YR6/6)		口縁部外而-沈線文5条。		
1099		弥生上器	鉢	13.7	5.7	7.1	鈍橙色(5YR6/4)	ほぼ完形	外面-凹線文2条。内外面-煤付着。		
1100		弥生上器	並	11.8	_	_	橙色(2.5YR6/6)			弥生水田道	量物
1101		弥生上器	织	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-煤付着。		
1102		弥生上器	鉄	17.6	4.3	23.9	浅黄橙色(2.5Y7/3)	ほぼ完形			
1103		弥生上器	鐭	16.8	_	-	橙色(2.5YR6/6)		外面-煤付着。		
1104		弥生土器	甕	16.6	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)				

& Later				1	測値(cn	1)					
掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1105		須恵器	杯	11.8	_	4.4	灰色(5Y6/1)				
1106		須恵器	杯	10.9	6.6	4.4	灰色 (7.5Y6/1~5/1)				
1107		須恵器	杯	11.6	_	3.7	鈍黄色(2.5Y6/4)	ほぼ完形			
1108		須恵器	杯	12.1	_	3,8	灰色 (N6/)				
1109		須恵器	杯	17.2	_	_	黄灰色(2.5Y6/1)				
1110		須恵器	高杯	12.8	10.3	7.9	オリーブ黒色(7.5Y3/1)		外面-自然釉。大きく焼け歪む。		
1111	竪穴住居24	須恵器	高杯	13.0	_	_	灰色(10Y5/1)				
1112		須恵器	平瓶	-	_	6.7	浅黄色(2.5Y7/3)				
1113		上師器	甕	17.4	_	_	鈍黄橙色(10YR6./4)		外面-煤付着。内面-黑斑。		
1114		土師器	甕	23.2	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)				
1115		上師器	ച	14.0	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		外面-黒斑。内面-煤付着。		
1116		土師器	甕	15.4	_	_	橙色(5YR6/6)				
1117		土師器	组	19.5	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)				
1118		上師器	甕	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/3)		外面-煤付着。		
1119	竪穴住居26	土師器	甕	-	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)				
1120		上師器	髄	_	_	_	鈍橙色 (5YR6/4)				
1121	竪穴住居27	土師器	甕	16.7	-	-	橙色(7.5YR7/6)		外面-胴部に黒斑。胴下部煤付着。		
1122		須恵器	杯	10.1			灰色 (N6/1)				
1123		須恵器	高杯	-	_	-	灰白色(N7/1)				
1124		須恵器	高杯	_	_	_	灰色 (N6/1)				
1125	竪穴住居28	須恵器	高杯	_	9.0	_	灰白色(10YR8/2)				
1126	笠/(1+./占/20	須恵器	甕	12.9	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1127		土飾器	杯	12.0			橙色 (2.5YR7/6)				
1128		上師器	無	16.2	_	_	鈍黄橙色(10YR6.5/3)		内外面-煤付着。		
1129		上師器	244	13.8	_	_	灰褐色(7.5YR6/2)		内外而-煤付着。		
1130	竪穴住居29	須恵器	高杯	12.3	8.3	7.9	灰白色(N7/1)				
1131	五八江四23	須恵器	高杯	13.3			灰色 (N4/1)				
1132		須恵器	高杯	10.5	_	_	灰色 (N6/1)				
1133		須恵器	高杯	_	_	_	灰色 (N4/1)				
1134		須恵器?	高杯	-	10.0	-	鈍橙色(7.5YR7/3)				
1135		上師器	甕	_	_	_	鈍褐色(7.5YR5.5/2)		外面-煤付着。		
1136		土師器	甕	19.6	_	15.8	鈍橙色 (5YR6/4)		内外面-煤付着。		
1137	竪穴住居30	上師器	쐜	21.2	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-煤付着。		
1138	±/(II/id/00	土師器	甕	19.4	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/3)		外面-煤付着。		
1139		土的網	<b>新</b>	23.6	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1140		上師器	聻	17,7	_	28.1	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-煤付着・吹きこぼし痕。		
1141		土師器	甕	19.4	_	28.8	鈍橙色(5YR7/4)	完形	外面-煤付着。		
1142		上師質	カマド	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)	完形	内面-煤付着。高さ34.8cm、 幅51.3cm、奥行47cm		
1143	取会住民21	須恵器	杯蓋	-	11.8	_	灰色 (7.5Y6/1)				
1144	竪穴住居31	須恵器	平瓶?	6,0	-	-	灰色 (7.5Y6/1)				
1145		須恵器	壺				灰色 (5Y6/1)		外面-黒斑。		
1146	似小什里??	上師器	ш	20.8	_	_	浅黄色(2.5Y7/4)				
1147	竪穴住居32	土師器	甕	16.4	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1148		土的認	煮	21.0	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1149	竪穴住居34	上師器	चीर	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)				
1150		須惠器	益	16.5	_	3.6	灰白色(5Y7/1)	完形			
1151		須恵器	蓋	14.7	_	3.4	灰色(7.5Y6/1)				
1152		須恵器	横瓶	10.5	_	_	灰色(5Y6/1~5/1)				
1153	竪穴住居35	土油器	杯	15.8	11.3	3.9	明赤褐色 (2.5YR5/6)				
1154	7E/ XII/HQ0	上師器	杯	16.4	10.6	4.8	橙色(5YR6/6)				
1155		土師器	<b>第</b> 本	11.0	5.0	7.4	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1156		上師器	鉢	10.6	_	8.5	鈍橙色(7.5YR6/4)				
1157		土師器	鉢	13.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				

掲載				î	測値(cm	1)					
番号	掲載遺構	種別	器種	径	底径	器点	色 淵	状態	形態・手法の特徴など	備	号
1158	竪穴住居35	上師器	鉢?	_	_	_	橙色 (7.5YR6/6)				
1159		須惠器	高杯	-	9.4	-	灰白色(2.5Y8/2)				
1160	No.A.P. Por	上師器	魏	13.4	5.3	10.8	鈍赤褐色 (5YR5/4)				
1161	竪穴住居36	土師器	甕	14.8	-	15.8	鈍橙色(7.5YR7/3)		内外面-煤付着。		
1162		土師器	烈	15.6		17.9	鈍褐色 (7.5YR5/3)		外面-煤付着。		
1163		上師器	卅	-	-	-	橙色 (5YR6/6)				
1164		土師器	की	12.2	-	15.8	浅黄橙色(7.5YR8/6)				
1165	EV⇔A EZOO	土的器	壶	6.0	-	_	鈍黄色(2.5Y6/3)				
1166	竪穴住居39	上師器	甕	16.1	-	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面-黑斑。		
1167		土師器	壺	12.3	-	-	鈍褐色(7.5YR5/4)				
1168		上師器	高杯	14.5	-	-	灰白色(10YR8/2)				
1169		土師器	क्षं?	15.0	1	-	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-全体煤付着。		
1170		土師器?	魏	13.6	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		内外面-煤付着。		
1171		上師器?	甕	15.6	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-全体煤付着。		
1172	土壙108	土師器	甕	13.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。		
1173	上堀100	比師器?	쇒	14.7	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-全体煤付着。		
1174		土師器?	頸	17.0	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-全体煤付着。口縁部歪。		
1175		土師器	坩	15.0	_	_	橙色(5YR7/8)				
1176		上師器?	扩	8.9	3.7	8.2	鈍黄橙色(10YR6/3)				
1177	上壙109	土師器?	喪	12.4	-	-	浅黄色(2.5Y7/3)		外面:煤付着。		
1178	土壙110	土的3%	쇒	10.4	-	-	灰黄色(2.5Y6/2)		内外面-煤付着。		
1179	上壙111	須恵器	高杯?	10.4	_	_	灰色 (N6/0)				
1180	Lukaro	土師器	喪?	13.8	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)				
1181	土塘112	土師器	高杯?	14.0	-	-	鈍橙色(7.5YR6/4)				
1182	Librara		쇒	16.0	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)				
1183	土壙113	土師器	甕	16.0	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1184	土壙114	土師器	烈				鈍黄橙色(10YR7/4)				
1185	土壙115	上師器	並	13.4	_	_	橙色 (7.5YR7/6)		外面-煤付着。		
1186		須恵器	杯	13.7	-	4.4	灰黄色(2.5Y6/2)				
1187	土壙116	須恵器	壶	_	12.6	_	灰色 (5Y5/1)		内面-自然釉。		
1188		上師器	杯	_	_	_	松色 (5YR6/6)		赤彩。		
1189		土師器	甕	12.8	_	13.2	橙色(5YR6/6)	ほぼ完形	外面-煤付着。内面-黒斑。		
1190	土壙117	上師器	组	13.5	-	_	橙色(7.5YR7/6)		外面-煤付着。		
1191		弥生土器?	甕	16.4	_	_	鈍褐色(7,5YR5/4)				
1192	Meno	土的器	鉢	9.1	_	-	鈍橙色(7.5YR7/3)				
1193	満33	上師器	並	9.6	-	10.6	灰白色(2.5Y8/2)				
1194	溝36	須恵器	報	11.5	_	_	灰色 (N5.5/1)		外面 重ね焼き痕。		
1195		1:60728	壺	19.8	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1196		土師器	પ્રી <del>ર</del> ્શ	14.4	3,8	15.5	橙色 (5YR7/6)	ほぼ完形			
1197		土師器	類	13.6			橙色(2.5YR6/6)		外面-煤付着。		
1198		上師器	쇒	15.7	-	-	橙色 (5YR6/8)		外面-煤付着。		
1199		土師器	套	16.9	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		内面 煤付着。		
1200		土的湯	atti Atti	15.2	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		口緣外面-煤付着。		
1201		上師器	甕	18.4	_	-	灰黄褐色(10YR5/2)				
1202		土師器	製	15.4	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)				
1203	河道8	上師器	壶	15.1	_	_	鈍黄色(2.5Y6/3)				
1204		土師器	頸	13.6	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)				
1205		土師器	魏	13.9	-	_	鈍褐色 (7.5YR5/4)				
1206		上師器	繧	13.5	_	_	鈍橙色(2.5YR6/4)				
1207		土師器	甕	13.4	_	_	黑色 (N2/)				
1208		1:6728	했	16.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外而-煤付着。		
1209		土師器	甕	10.7	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)				
1210		土師器	觀	11.2			橙色 (5YR6/6)				
1211		土師器	類	11.4	_	17.2			外・内面-煤付着。		
1210		土印料	朝	11.2		17.2	橙色 (5YR6/6)		外・内面-爆付着。		_

掲載				ņ	測値(cr	n)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
1212		十.的認	ച	11.1	_	-	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1213		上師器	ᆀ	15.9	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)		外面-黒斑·煤付着。	
1214		土師器	甕	11.9	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面 煤付着。	
1215		上師器	ച	12.8	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-煤付着。内而-黒斑。	
1216		土師器	甕	13.1	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)			
1217		土師器	類	18.0			鈍黄橙色(10YR7/2)			
1218		上師器	麵	15.3	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1219		土師器	喪	17.2	_	26.3	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面 煤付着。	
1220		十.色度器	ച	16.3	-	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-煤付着。	
1221		上師器	甕	16.3	_	29.3	桁色 (7.5YR6/6)		内外面-煤付着。	
1222		土師器	좵	12.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。	
1223		上師器	劉	13.2	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-黒斑。	
1224		土師器	甕	13.6	_	_	橙色 (2.5YR6/6)		外面-思斑。	
1225		十.的2器	#4K	14.0	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1226		上師器	쇒	12.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		口縁内外面-黒斑。	
1227		土師器	甕	14.0	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面 煤付着。	
1228		上師器	쇒	13.1	_	_	橙色(7.5YR7/6)		外而-黒斑。	
1229		土師器	甕	14.0	_	_	橙色 (5YR6/6)		外面-煤付着。	
1230		土的網	5711 _243.	12.6			鈍黄橙色(10YR6/4)			
1231		上師器	鮑	16.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1232		土師器	甕	17.0	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1233		1:師器	shi .est	17.7	_	_	鈍赤褐色(5YR5/4)			
1234		上師器	甕	15.8	_	_	灰色 (5Y5/1)			
1235		上胂器	甕	13.9	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1236		土師器	甕	18.5	_	-	鈍橙色 (5YR6/4)		外面 煤付着。	
1237		1:6022	stei deci	15.6	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/4)			
1238	Service	土師器	甕	19,2	_	-	鈍橙色 (7.5YR7/4)		外面-煤付着·黑斑。	
1239	河道8	土的課	類	13.6			鈍橙色(7.5YR6/4)			
1240		上師器	<b>芝</b> 蕉	17.3	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)		外面-煤と黒斑。内面-黒斑。	
1241		土師器	甕	16.5	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1242		十的課	4/16 .EX	14.2	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内外面-煤付着。	
1243		上師器	进	12.0	_	_	校色 (5YR6/6)			
1244		土師器	甕	17.0	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
1245		上師器	類	14.6	-	_	黄橙色(10YR8/6)		外而-煤付着。	
1246		土師器	甕	16.4	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
1247		土的課	쾣	17.2	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1248		上師器	纤	19.0	_	_	桁色 (5YR6/6)		外面-煤付着。	
1249		土師器	甕	15.8		_	鈍黄褐色(10YR5/4)			
1250		1:師器	类	17.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			
1251		土師器	甕	14.6	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1252		土的紹	新	19.3			鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。	
1253		上師器	\$M	15.2	_	_	桁色 (5YR6/6)		外面-煤付着。内面-黒斑。	
1254		土師器	甕	16.8	_	_	明黄褐色(10YR6/6)		内外面 煤付着。	
1255		土的網	*48	15.8	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1256		上師器	甕	16.8	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
1257		土師器	高杯	19.0	-	-	橙色(5YR7/6)			
1258		上師器	高杯	17.7	_	_	橙色 (5YR6/6)		外面-煤付着。	
1259		土師器	高杯	15.6	10,2	12.8	橙色(5YR6/6)		外面-黑斑。	
1260		土的課	高杯	14.0	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1261		上師器	高杯	17.8	_	-	概色(5YR6/6)			
1262		土師器	鈴	14.0	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/6)			
1263		上師器	高杯	14.4	-	-	橙色(7.5YR7/6)			
1264		土師器	高杯脚	_	9,3	_	浅黄橙色(7.5YR8/6)			
1265	1	上師器	高杯	_	9.5	_	橙色 (5YR6/8)			

掲載	相影湯供	56 Dil	9866	г. 	測値(cn	1)	<i>(</i> 1) ≅⊞	HE:11	17.6%。手が小性傷をは	#± ≠z
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
1266		土的場	高杯	_	11.6	_	橙色(2.5YR7/8)			
1267		上師器	高杯	_	_	9.8	鈍黄橙色(10YR7/3)		透かし孔3か所。	
1268		土飾器	高杯	_	11.7	_	橙色(5YR6/6)			
1269		上師紹	高杯	_	9.6	_	橙色(7.5YR6/6)			
1270		土師器	高杯	_	12.1	_	橙色 (5YR7/6)		透かし孔3か所。	
1271		土師器	台付鉢		6.0		鈍黄橙色(10YR6/4)			
1272		上師器	쇒	9.3	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-煤付着。	
1273		赤彩土師器	鉢	6.3	_	_	橙色(2.5YR6/6)		外面 赤彩。	
1274		土的器	杯	10.7	_	4.7	橙色(7.5YR7/6)	ほぼ完形		
1275		上師器	甑	26.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1276		手づくね	鉢	8.4	3.9	5.5	鈍橙色(5YR6/4)		口縁歪。	
1277		上師器	製塩上器	_	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-黒斑。	
1278		須恵器	蓋	14.3	_	_	灰色 (5Y5/1)			
1279		須恵器	蓋	13.0	_	4.4	灰色 (5Y4/1)			
1280		須恵器	蓋	13.7	_	_	灰黄褐色(10YR4/2)		外面-自然釉。内外面-黑斑。	
1281		須恵器	蓋	12.8	_	4.5	灰色 (7.5Y6/1)			
1282		須恵器	蓋	13.1	_	3.8	灰色 (N4/)	ほぼ完形		
1283	河道8	須恵器	蓋	12.0	_	4.5	灰色 (N4/)		外面-手持ちケズリ。	
1284		須恵器	杯	11.2		5.4	暗青灰色 (5PB4/1)			
1285		須恵器	杯	11.7	_	-	灰色 (N4/)			
1286		須恵器	杯	12.6	4.8	5.5	灰位 (N5/)			
1287		須恵器	杯	11.8	_		灰色 (N4/)			
1288		須恵器	杯	11.0	_	4.6	灰色(7.5Y6/1)		外面-黑斑。	
1289		須思器	杯	9.7	4.4	4.7	灰色 (5Y5/1)			
1290		須惠器	杯	12.9	7.2	3.9	灰黄色(2.5Y7/2)		縁部の内外面-黒斑。	
1291		須恵器	杯	11.2	_	4.1	灰白色(5Y7/1)	ほぽ完形	仕上げナデ。	
1292		須恵器	蓋	11.8	_	5,1	灰白色 (5Y8/1)			
1293		須恵器	高杯脚		8.6		暗灰黄色(2.5Y5/2)		透かし孔3か所。	
1294		須恵器	高杯	_	8.9	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			
1295		須恵器	平瓶	2.3	_	-	褐灰色(10YR4/1)			
1296		須恵器	鉢	16.8	_	8.4	オリーブ黒色(7.5Y3/1)		鉄鉢形土器	
1297		須恵器	廛	_	_	-	暗青灰色(5B4/1)			
1298		須恵器	瑰	9.2	_	_	灰色 (N6/~N5/)			
1299		須恵器	器台	_	31.8	_	灰色(5Y5/1)			
1300		須恵器	甕	20.2	_	32.2	灰色 (N5/1)			
1301		須恵器	<u>설</u> 턴	20.6	-	_	灰色 (5Y7/1)			
1302		上師器	幾	13.6	_	_			外面-煤付着。	
1303	河道 9	土師器	製	14.2	_	_	橙色 (5YR6/6)		外面-煤付着。	
1304		上師器	高杯	_	11.2	_	橙色 (5YR7/6)			
1305		土師器	- 出	7.8	_	_	明褐色 (7.5YR5/6)			
1306		須恵器	杯	_		_	灰黄色(2.5Y6/2)			
1307	窪地2	須恵器	魏	_	_	-	褐灰色(10YR6/1)		11.70	
1308		土師器	杯	11.6	_	3.7	橙色 (7.5YR7/6)		赤彩。	
1309		上師器	杯	12.5	_	3.8	橙色 (2.5YR6/6)		赤彩。内外面-黒斑。	
1310	窪地3A	上師器	杯	14.5	-	_				
1311		須忠器	長蓮		8.9		灰色 (N6/)			
1312	準地3 B	上師器	魏?	20.3	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		内外面-煤付着。	
1313		土師器	高杯	_	_	_	橙色 (7.5YR6/6)		11= 1511 W	
1314		土的器	1 N	12.9	_	_	鈍黄色 (2.5Y6/4)		外面-煤付着。内面-黒斑。	
1315	滗地3C	上師器	鉄	16.8	-	_	灰黄褐色(10YR6/3)		内面-黑斑。	
1316		土師器	高杯	_	13.9	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)			
1317		上師器	鉄	14.6	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外而-煤付着。	
1318	窪地3D	土師器	坩	9.5	-	-	鈍黄橙色(10YR6/3)			
1319		上師器	高杯	_	10.0	_	鈍黄橙色(10YR8/4)			

掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	計測値 (cm)			45 iu	unak	形能,下注の特徴なび	644: 1
				口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
1320		土師器	甕	14.2	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		外面-煤付着。内面-ヨコナデ・ケ ズリ?	
1321	窪地3E	土師器	甕	12.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1322		土的課	高杯	20.5	10.4	12.9	橙色 (7.5YR7/6)			
1323	will a P	上師器	甕	13.7	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-全面に煤付着。	
1324	注地3F	須惠器	高杯	_	_	_	灰白色 (N7/)			
1325	窪地3G	上師器	杯	13.4	_	_	灰色 (N6/)			
1326		土師器	甕	15.1	-	-	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-煤付着。内面-黑斑。	
1327		土的課	ച	15.4	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-黒斑。	
1328		上師器	幾	17.4	_	-	明赤褐色 (5YR5/6)		外面-煤付着。	
1329		土師器	霕	13.6	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-煤付着。	
1330		上師器	\$4K	15.2	_	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外而-煤付着。	
1331		土師器	甕	-	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-黒斑。	
1332		<b>土的</b> 部	類	14.0			褐灰色(10YR5/1)			
1333		上師器	\$ <b>M</b>	14.2	-	-	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1334		土師器	栗	14.3	-	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外面 黒斑・一部に煤付着。	
1335	]	+.0022	鉪	13.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1336		上師器	霕	12.2	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)			
1337		土師器	甕	11.2	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
1338		上師器	維	14.2	_	_	橙色(7.5YR6/6)			
1339		土師器	雞	12.8	-	-	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1340		<b>土的</b> 部	8/8/ 2007	12.9	_	_	橙色 (7.5YR7/6)		外面-煤付着。	
1341		上師器	純	15.2	-	-	鈍橙色 (7.5YR6/4)			
1342		上師器	號	18.2	_	_	橙色 (7.5YR7/6)		外面-黒斑。	
1343		土師器	甕	14.7	-	-	鈍黄橙色(10YR6/4)			
1344		<b>土的</b> 22	atti .bs.,	21.2	_	_	鈍黄色 (2.5Y6/4)		外面-煤付着。内面-黒斑。	
1345		上師器	甕	16.4	_	_	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外面-煤付着。内面-黑斑。	
1346		土飾器	霕	17.0	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。	
1347		上師器	<b>*性</b>	17.4	_	_	灰色(5Y5/1)			
1348		土師器	甕	18.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-煤付着。	
1349	窪地3	土的課	쇞	22.2	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)		外面-煤付着。	
1350		上師器	高杯	23.9	_	_	鈍黄橙色(10YR6/4)			
1351		土師器	高杯	_	_	_	橙色 (2.5YR6/6)			
1352		1:6年22	高杯	_	_	_	橙色 (5YR7/8)			
1353		土師器	高杯	_	_	_	鈍黄色(2.5Y6/3)			
1354		土的課	高杯				浅黄橙色(10YR8/3)			
1355		上師器	杯	12.1	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1356		土師器	高杯?	13.9	_	_	橙色(5Y7/6)			
1357		:師器	高杯	14.6	_	_	橙色 (5YR7/6)			
1358		上師器	高杯	_	8.6	-	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1359		土師器	高杯	_	8.0	_	鈍橙色(5YR6/4)			
1360		上師器	高杯	_	8.7	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1361		土師器	高杯	_	_	12.0	明黄褐色(10YR7/6)			
1362		須恵器	杯蓋	14.8	_	_	灰白色(7.5Y7/1)			
1363		須恵器	燕	_	_	_	灰色(175/)			
1364		須惠器	益	11.1	_	_	灰色(10Y6/1)			
1365		須恵器	蓋	9.6	_	_	灰白色(2.5Y8/2)			
1366		須恵器	杯	12.6	_	_	オリープ灰色(5GY5/1)			
1367		須恵器	蓋	9.0	_	_	灰色 (N5/)			
1368		須恵器	杯	11.9	9.2	_	浅黄色(2.5Y7/3)			
1369		須恵器	杯	10.4	5.0	4.2	灰白色 (N7/)	ほぼ完形		
1370		須恵器	杯	9.2	_	_	青灰色(5 P B 6/1)			
1371		須恵器	杯	10.0	_		灰白色(2.5Y8/1)			
1372		須恵器	高杯	9.5	-	_	灰色(7.5Y5/1)		外面-自然釉。	

掲載	掲載遺構	種別	器種	11	測値(cn	1)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
番号	19 10 10	125773	THEFT	口径	底径	高器	[2] [69]	1// 1/2000	ル窓・ゴムッ村政なる	7.00
1373		須恵器	高杯	-	_	_	橙色 (5YR7/6)			
1374		須恵器	高杯	20,6	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-煤付着。	
1375		須恵器	高杯		8.0		灰色 (N6/)			
1376		須恵器	杯	9.4	5.1		灰色(10Y6/1・5/1)			
1377		須恵器	भर्म	11.6	-	_	灰色 (7.5¥6/1)			
1378		須恵器	壶	12.2	_	15.1	灰色 (7.5Y6/1)			
1379		須恵器	短頸症	8.2	-	-	灰色 (N6/)		dal a make a ballog t	
1380		須恵器	短頸壺	7.4	4.9	8.1	灰色(10Y5/1)		外面-一部自然釉。	
1381		須恵器	平瓶?	9.2	_	_	オリーブ黒色 (5Y3/1)		Maria A Harada Maria	
1382		須恵器	提瓶	_	_		灰色 (N5/)		外面-全体に自然釉。	
1383		須恵器	平瓶 手づくね		_		暗赤灰色 (7.5R4/1) 灰黄色 (2.5Y6/2)	105 1007 12 105		
$\vdash$		上師器	手づくね	3.5	_	2.2		ほぼ完形		
1385 1386		土師器	チづくね	3.4 4.5	_	2.7	浅黄橙色(10YR8/3) 浅黄色(2.5Y7/4)	完形 ほぼ完形		
1387		土師器	チづくね		_	2.7	美術性(10YR7/4)	完形		
1388	窪地3	土師器	チづくね	3.6		2.9	灰白色 (2.5Y8/2)	完形		
1389		上師器	手づくね	-	_		鈍黄橙色(10YR7/3)	76/15		
1390		土師器	手づくね	4.5	_	3.1	淡黄色 (2.5Y8/3)	完形		
1391		土的器	チづくね	4.3	_	3.0	浅黄橙色(10YR8/4)	完形		
1392		上師器	手づくね	4.4	_	3.1	浅黄橙色(10YR8/4)	完形		
1393		土師器	手づくね	5.4	_	4.0	鈍黄橙色 (10YR7/4)	完形		
1394		上卸器	チづくね	5.9	_	4.1	暗灰黄色(2.5Y5/2)	76/12		
1395		土師器	手づくね	6.4	_	5.1	浅黄橙色(10YR8/4)	完形		
1396		上前器	手づくね	4,1	_	3.7	浅黄橙色(10YR8/4)	完形		
1397		土飾器	手づくね	4.1		2.8	浅黄橙色(10YR8/4)	完形		
1398		上師器	手づくね	4.6	_	3.0	鈍黄橙色(10YR7/4)	完形		
1399		土帥器	手づくね	5.6	_	3.8	鈍黄色 (2.5Y6/3)	完形	内外面-黒斑。	
1400		十的器	手づくね	6.2	_	4.3	鈍黄橙色(10YR7/2)	完形	内外面-黒斑。	
1401		上師器	手づくね	6.3	_	1.2	灰黄色(2.5Y6/2)	707	内外面-黑斑。	
1402		土師器	手づくね	6.1	_	4.5	鈍黄橙色(10YR7/4)		1.45 1101 100200	
1403		上的28	壶	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)			
1404		土師器	费	15.6	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-煤付着。	
1405		土師器	魏	16.1	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			
1406		上師器	撫	14.0	_	_	明黄褐色(10YR7/6)			
1407		土師器	쾿	13.0	_	_	鈍橙色(5YR6/4)			
1408		1:61725	維	16.0	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/3)			
1409		土師器	甕	20.0	_	(13.5)	鈍黄橙色(7.5YR7/4)			
1410		土師器	烈	11.4			鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-煤付着。	
1411		上師器	魏	14.0	_	_	鈍樹色(7.5YR7/4)		外面-煤付着。	
1412		土師器	喪	23.4	_	_	鈍黄色(2.5Y6/3)			
1413		1:師器	高杯	16.0	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)			
1414	遺構に伴わない	上師器	高杯	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1415	遺物	土師器	高杯	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			
1416		上師器	鉢	14.6	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内外面-黒斑。	
1417		土師器	甑	_	_	_	鈍橙色 (5YR6/4)			
1418		土的綿	坩?	7.8	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1419		上師器	排?	9.5	_	-	鈍黄橙色(10YR6/4)			
1420		土師器	坩	_			鈍黄橙色(10YR6/4)			
1421		上師器	坩	7.9	ı	7.9	鈍黄橙色(10YR7/4)	ほぼ完形		
1422		土師器	坩	9.0	_	8.2	鈍橙色(7.5YR7/4)			
1423		土的器	坩	7.4		9.3	鈍橙色 (5YR6/4)			
1424		上師器	坩	9.0	3.7	8.6	鈍黄橙色(10YR7/3)	完形		
1425		土師器	坩	8.6	_	9.9	橙色(7.5YR6/6)			
1426		上師器	手づくね	5.7	-	3.8	浅黄橙色(10YR8/4)	ほぼ完形		

掲載				i i	測値(en	1)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
1427		<b>土的</b> 線	杯	15.4			鈍橙色(5YR6/4)		赤彩。	
1428		土師器	杯	12.3	_	5.1	橙色 (7.5YR6/6)		外面-赤彩。底部に黒斑。	
1429		須恵器	蓋	_	_	_	褐灰色(10YR5/1)			
1430		須恵器	蓋	_	13.1	5.2	暗灰色(N3/)			
1431		須恵器	蓋	12.2	_	3.9	黄灰色(2.5Y5/1)			
1432		須恵器	蓋	13.1	_	4.2	灰黄色(2.5Y7/2)			
1433		須恵器 須恵器	蓋	13.0	_	4.0 3.3	灰白色(2.5Y7/1) 灰色(7.5Y6/1)			
1434	遺構に伴わない	須恵器	蓋	11.7		2.3	族色(2.5Y4/1)			
1436	遺物	須恵器	杯	13.0	_	_	灰色 (7.5Y6/1・5/1)			
1437		須恵器	杯	12,4	_	3.5	灰色 (5Y5/1)			
1438		須恵器	杯	13.3	6.0	5.6	灰色 (N5/)	完形	外前-全前に自然釉。	
1439		須恵器	杯	12.6	5.7	6.0	灰白色(N7/1)			
1440		須恵器	高杯	_	_	_	灰色(5Y6/1)		透かし孔2段2か所。一部自然釉。	
1441		須恵器	長頸症?	_	_	_	灰色(5Y6/1)			
1442		須恵器	瑟	_	_	_	灰色(7.5Y5/1)			
1443		須恵器	चंद्र	13.0	_	_	喑灰黄色(2.5Y5/2)			
1444		須患器	*************************************	12.4	_	3.3	灰白色(2.5GY7/1)	完形	口縁部大きく歪。内面-自然釉 (黄・黄緑)。ロクロ左回転。	
1445		須惠器	桥	12.2	6.1	3.8	灰色 (7.5Y6/1)	完形	ロクロ右回転。	
1446	久III原 2 号墳	須速器	益	12.2		3.7	灰色 (7.5Y5/1)	完形	口縁都歪。内而-自然釉(5Y7/2 灰白色)。ロクロ左回転。	
1447		須恵器	杯	13.0	8.0	4.9	灰色 (N5/)	完形	ロクロ左回転。	
1448		須恵器	平瓶	5.9	6.8	11.1	灰色 (N6/)	完形	ロクロ左回転。	
1449		七的器	杯	13.6	7.8	4.2	赤色(10R5/6)		丹塗土器。	
1450		土師器	報?	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1451		須恵器	益	11.9	_	4.1	灰色 (N4/1)	完形	口縁部重ね焼き土器片付着。自 然釉。	
1452		須恵器	· ***	11.7	_	4.2	灰色(N6/1)	ほぼ完形	外面上器片付着。自然釉。	
1453		須恵器	蓋	12.4	_	3.9	灰色 (N4/1)	完形	天井外面-ヘラ切り後ナデ。上器 片付着。自然釉.。	
1454		須惠器	杯蓋	13.8		4.4	灰黄色(2.5Y6/2)			1456とセット
1455		須恵器	蓋	13.4	_	4.0	灰色 (N5.5/1)	ほぼ完形	天井外面-ヘラ切り後ナデ。器形 歪。	
1456		須恵器	杯	11.9	_	4.2	灰白色(2.5Y7/1)		ロクロ左回転。	1454とセット
1457		須恵器	蓋	11.3	10.7	-	灰色 (N6/1)		天井外面-ヘラ切り後粗いナデ。 天井内面-仕上げナデ。	
1458		須恵器	蓋	11.0	_	4.3	灰色(N6/1)	ほぼ完形	天井外前-ヘラ切り後ナデ。天井 内面-仕上げナデ。	
1459		須恵器	杯	11.0	_	_	灰白色(N8/1)		外面-自然釉。底部へラ切り後未 調整。内底部-仕上げナデ。	
1460	Feet	須恵器	杯	11.0	_	4.0	灰白色(2.5Y8/1)	完形	底部へラ切り。	
1461	久田原 5 号墳	須恵器	杯	10.3	_	4.0	灰色 (N5/1)	完形	外面底部 ヘラ切り後ナデ。自然 釉。	
1462		須恵器	杯	11.2	_	_	灰色 (N5/1)		外面-重ね焼き痕。内面底部-仕上 げナデ。	
1463		須惠器	杯	10.8	=	=	灰白色(N7.5/1)		外底面-ヘラ切り後ナデ。板目痕。 内底面-仕上げナデ。	
1464		須恵器	杯	11.0	_	_	灰色 (N5/1)		外面-重ね焼き痕。外面底部-ヘラ 切り後ナデ。	
1465		須惠器	蓋	12.7	_	-	灰白色(N7/1)		外面天井部-回転へラケズリ。内 面天井部-仕上げナデ。	
1466		須忠器	高杯		13.8		灰色 (N6.5/1)		透かし孔2段2か所。	
1467		須恵器	高杯	11.6			黑色 (N2/1)		透かし孔2段2か所。	1468とセット
1468		須恵器	高杯	_	13.8	_	黑色 (N2/1)		透かし孔2段2か所。	1467とセット
1469		須恵器	壶	15.2	_	_	灰色 (N5/1)		内面天井部-仕上げナデ。	
1470		須恵器	高杯	_	8.5	_	灰色 (N6/1)			
1471		須恵器	蓋杯	9.7	11.0	6.2	灰色(N4.5/1)		外面天井滞-ヘラキリ後ナデ。	

掲載				П	測値(a	n)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
1472		須恵器	FM.	10.4	_	_	暗灰色 (N3/1)		内而-自然釉。口縁部歪。	
1473		須恵器	殖	_		_	灰色(N5.5/1)		外面-重ね焼き?自然釉。	
1474		須恵器	强	_	-	_	灰色(N5.5/1)			
1475		須恵器	長頸瘤	_	ı	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面全体-自然釉付着。	
1476	久田原 5 号墳	須恵器	壺	9.8	-	_	灰色(5Y6/1)			
1477	八四原3 写項	須恵器	横瓶	_	_	_	灰色(N4/1)		外面-自然釉。内面-土器片付着。	
1478		須恵器	平瓶	6.0	-	14.2	灰色 (N6/0)	ほぼ完形	ロクロ左回転。	
1479		須恵器	平瓶	6.9	11.8	14.8	灰色(N5/0)			
1480		須恵器	쇒	21.6	_	_	明赤褐色(2.5YR5/6)			
1481		土師器	甕	26.0	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)			
1482		須恵器	杯	11.8	6.5	3.6	灰色(7.5Y5/1)		底部-ヘラ記号。ロクロ右回転。	
1483		須恵器	蓋	14.2	10.5	4.4	灰白色(7.5Y7/1)	完形	外面天井部-回転ヘラケズリ。ロ クロ左回転。	1484とセット
1484	久田原6号墳	須忠器	桃	12.3		4.7	灰白色(7.5Y7/1)	完形	外底面-回転ペラケズリ。ロクロ 左回転。内底面当具痕・仕上げ ナデ。	1484とセット
1485		1:6028	直□壺	-	_	-	浅黄橙色(10YR8/3)			
1486		須恵器	蓋	15.4	-	4.9	灰色 (N5/1)	完形	外面天川部-回転ヘラケズリ。ロ クロ左回転。内面天井部-仕上げ ナデ。ヘラ記号「一」。	
1487		須恵器	蓋	14,3	ı	4.4	暗灰色(N3/1)	完形	外面天井部-回転へラケズリ。ロ クロ左回転。内面天井部-仕上げ ナデ。	1488とセット
1488	久田原7号墳	須恵器	杯	12.2	_	4.5	暗灰色(N3.5/1)	完形	外面底部-回転ヘラケズリ。ロクロ左回転。自然釉。内面-仕上げ ナデ。	1487とセット
1489		須恵器	蓋	14.0	ı	5.2	暗灰色(N3/1)	完形	外面天井部回転へラケズリ。ロ クロ左回転。ヘラ記号「一」。内 面天井部-粗く仕上げナデ。	
1490		上師器	쇒	17.6	_	28.0	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-煤・黒斑。	
1491		須恵器	蓋	12.9	_	4.6	灰色(5Y5/1)	完形	天井部-ヘラ切り後ナデ。	
1492		須恵器	杯	11.1	_	3.8	暗灰黄色(2.5Y5/2)	完形	底部へラ切り後ナデ。	
1493		須惠器	高杯	13.6	9.4	9.0	浅黄色(2.5Y7/3)	完形		
1494		須恵器	高杯	14.7	10.7	10.5	灰白色(2.5Y7/1)			
1495	久川原8号墳	須惠器	高杯	14.9	11.0	11.0	灰白色(2.5Y7/1)	完形		
1496	71	須恵器	平瓶	7.0	8.0	14.6	灰白色(10Y7/1)	完形	自然釉-灰オリーブ色(7.5Y4/2)。 底部-ヘラキリ・板目。	
1497		須忠器	平瓶	_	14.8	_	灰色 (N6/1)		底部-ヘラ切り後ナデ。外面-ヘラケズリ。内面-仕上げナデ。ヘラ記号。	
1498		土師器	壺	20.4	_	-	赤色(10R5/6)		内外面-赤色顔料。	
1499		須恵器	盎	12.7	_	2.6	暗灰黄色(2.5Y5/2)	完形		
1500		須惠器	杯	12.6	7.2	4.7	灰白色(7.5Y6/1)	完形	外面-ヘラ切り。内面-仕上ナデ。	
1501		須恵器	杯	113.3	7.1	4.5	灰色(7.5y6/1)		外面-ヘラ切り。内面-仕上ナデ。	
1502		須惠器	杯	13.2	8.2	4.8	灰白色(5Y7/1)	完形		
1503	久田原 9 号墳	須忠器	杯	14.3	9.4	5.0	灰色(5Y4/1)	完形	外而-回転ヘラケズリ。ロクロ右 回転。	
1504		須惠器	杯	7.8	4.7	4.9	灰オリーブ色 (5Y6/2)	完形		
1505		須惠器	短頸壺	6.8	4.9	7.8	灰白色(7.5Y7/1)	完形	外而-回転ヘラケズリ。ロクロ右 回転。	
1506		須恵器	長頸術	_	11.1	_	灰オリーブ色(5GY5/1)		外面 回転ヘラケズリ。ロクロ左 回転。	
1507		上師器	鶈	15.2	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)			
1508		土師器	壺	11.0		(14.6)	橙色 (5YR6/6)			
1509	久田原11号墳	上師器	नीर	9.7	_	15.9	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1510		土師器	壺	10.5		11.9	浅黄橙色(10YR8/3)		外面-煤付岩。	
1511	久田原11号墳	上師器	鉢	11.9	1.5	7.4	鈍黄褐色(10YR5/3)			
									外面 ヘラ切り。底部に「×_の	
1512	久田原12号墳	須恵器	杯	12.1	7.0	4.6	灰色(5Y5/1)		墨書がある。	

机建				100	「測値(cm	1)				
掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
1514		須恵器	長頸壺	-	7.2	_	灰色 (10Y6/1)		内外面-自然釉(灰色7.5Y5/1)	
1515	- 1:器棺3	須恵器	類	_	_	_	灰白色(5Y7/1)		内面-タタキ目。	
1516	新式石棺 1	須恵器	杯	11.6	4.0	3.9	灰色 (N5.5/1)	完形	広部-ヘラ切り後ナデ。内面-自然 釉。仕上げナデ。口径歪。	
1517	箱式石棺 2 周辺	土的淵	<b>新</b> 斯	14.8	-	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		外面-煤付着。	
1518	土壙墓2	須恵器	杯	11.7	6.0	5.0	灰色 (N5/1)	完形	外底面 ヘラ切り。内面 仕上げナ デ。口径卵形に歪。	
1519		土飾器	杯	13.5	8.0	4.9	黑色 (N2/1)	完形	外面-煤付着。内面-赤色顏料。	
1520		須恵器	蓋	_	14.8	2.8	浅黄橙色(7.5YR8/3.5)	完形	内外面-黒斑。外面-回転ヘラケズ リ。内面-仕上げナデ。	
1521		須惠器	杯	11.8	7.7	3.6	灰色 (N5/1)	完形	底部 ヘラ切り。	
1522	上壙墓3	須恵器	杯	11.0	7.5	4.1	暗灰色(N3/1)	完形	外底面-ヘラ切り。内面-仕上げナ デ。	
1523		土師器	杯	13.4	10.1	3.9	橙色(7.5YR6/6)	完形	内面-赤色顔料。橙色(5YR6/6)。 黑斑。	
1524	1	土的器	杯	13.0	9.4	4.8	橙色 (2.5YR6/8)	完形	赤彩。丹塗り。	
1525	上壙墓4	上師器	杯	12.4	5.8	3.6	明赤褐色(2.5YR5/6)	完形		
1526	土壙墓 5	土師器	杯	13.7	8.7	4.2	鈍褐色(7.5YR5/4)	完形	外面-煤付着。	
1527		土師器	Ш	17.7	9.6	3.8	鈍橙色(5YR6/4)	完形		
1528	上壙墓6	上師器	ച	_	_	_	鈍黄橙色(10YR <b>7</b> /2)			
1529		須恵器	甕	_	_		灰色(5Y6/1)			
1530	土壙墓7	須恵器	杯	11.6	5.5	2.5	灰色 (N6/1)	完形		
1531	- 上壙墓8	須恵器	杯蓋	13.3	_	3.8	灰色 (N5/0)	完形	底部-ヘラ記号。内面-自然釉付着。 ロクロ右回転	
1532	上機差の	須恵器	杯	12.5	8.3	3.9	灰位(N4/0)	完形	底部-ヘラ記号。ロクロ右回転。	
1533		須恵器	細頸壶	9.8	8.6	18.1	灰色 (N4/0)	ほぼ完形	外面-ヘラ記号。	
1534		須恵器	蓋	15.7	_	3.0	灰色 (2.5Y8/1)			
1535		須惠器	蓋	15.3	_	2.8	灰白色(2.5Y8/1)			
1536		須恵器	蓋	17.0	_	_	灰白色(7.5Y7/2)			
1537	_	須恵器	蓋	_	_	_	灰白色(5Y8/2)			
1538		須恵器	壺?	_	9.7	_	灰色(N5.5/1)			
1539	_	須恵器	杯	_	13.6	_	灰白色 (5Y8/2)			
1540	#7.1.40-1 144	須恵器	稜椀	17.8	_	_	灰色 (7.5Y4/1)			
1541	竪穴住居41	須恵器	稜椀	17.7	-	_	灰色 (N5/1)			
1542	-	須恵器	高杯	_	10.3	_	灰色 (N6/1)			
1543		須恵器	att.	24.2	_	_	灰色 (N5.5/1)			
1544 1545	_	上師器	選 選	24.2			鈍黄色(2.5Y6/4) 鈍黄橙色(10YR7/3)			
1546	-	土師器	類	13.8			鈍黄橙色(10YR7/2)			
1547		上師器	甑	10.0		_	鈍黄褐色(10TR7/2) 鈍黄褐色(10YR5/3)			
1548	-	上師器	甑		12.0		灰黄褐色(10YR6/2)			
1549		須恵器	荒	_	_	_	灰色 (5Y6/1)			
1550	1	土師器	杯	_	11.2	_	時灰黄色 (2.5Y5/2)			
1551	1	須恵器	杯	_	13.1	_	灰白色(5Y7/1)			
1552	· 竪穴住居42	土師器	杯	14.4	10.4	3,6	鈍赤褐色 (5YR5/4)	復元完形	内外面-丹塗り・ヨコナデ。	
1553		土師器	壺?	11.8	-	_	鈍黄橙色(10YR6/4))			
1554	-	1:師器?	鐵	19.8	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		外面-煤付着。	
1555	-	上師器	甑	34.0	17.0	_	灰黄色(2.5Y6/2)			
1556		須恵器	荒	_	_	_	灰色 (N6.5/1)			
1557		須恵器	杯	15.4			灰色 (N5.5/1)			
1558	1	須恵器	杯	15.8	_	_	灰色 (N6.5/1)			
1559	107 ft () E	須恵器	杯	16.3	_	_	灰白色(2.5Y8/1)			
1560	- 竪穴住居43	須惠器	桥	16.8	_	_	灰色 (N6/1)			
1561	1	須恵器	杯	-	_	-	灰色 (N6/1)			
1562	1	須恵器	杯	-	_	_	灰色 (N6/1)		底部-イトキリ後貼付高台。	
1000			1				i e e e e e e e e e e e e e e e e e e e			

掲載				i	測値(cn	n)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
1564		須恵器	杯	_	10.1	-	灰色 (N6/1)			
1565		須惠器	杯	_	9.1	_	灰色 (N6/1~5/1)			
1566		須恵器	杯	_	9.4	_	灰色 (N5/1)			
1567		須恵器	杯	_	11.4	_	灰色 (N5/1)			
1568		須忠器	杯		11.0		灰色 (N5/1)			
1569		上師器	杯	-	12.4	-	浅黄橙色(10YR8/4)			
1570		須恵器	杯	10.7	_	-	灰色 (N5.5/1)			
1571	竪穴住居43	須恵器	高杯	_	_	-	灰色 (N6/1)		外面 1条沈線。内面 絞り痕	
1572	一家八年冲49	上師器	杯	13.8	8.7	3.8	赤桁色(10R6/6)		内外面赤色顔料塗布後ミガキ。	
1573		土師器	杯	12.5	_	_	橙色(2.5YR6/6)		内外面-赤色顔料塗布後ミガキ。	
1574		上師認	杯	12.3	_	-	橙色(2.5YR6/6)		内外面-赤色顔料塗布後ミガキ。	
1575		土師器	杯	12.6	4.6	4.2	橙色(10R6/6)		内外面-赤色顔料塗布後ミガキ。	
1576		土面器	杯	13.7	_	-	赤橙色(10R6/7)		内外面-赤色顔料塗布後ミガキ。	
1577		土師器	霕	_	_	_	鈍欖色(5YR6/3)		外面-煤付着。被熱により赤色変 化	
1578		上師器	쇘	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)			
1579		須恵器	杯	13.2	_	-	灰色 (N6/0)			
1580		須恵器	杯	13.0	8.4	3.9	灰色(7.5Y6/1)			
1581	竪穴住居44	須恵器	高杯?	15.6	_	-	灰色(7.5Y5/1)			
1582		土師器	楽	17.0	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)			
1583		上師器	魏	25.4	_	_	灰黄色(2.5Y6/2)			
1584	掘立柱建物13	土師器	葬	20.0	_	_	喑灰黄色(2.5Y5/2)			P5出土
1585	掘立柱建物17	土的課	좿	_	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)			P1/11+:
1586	掘立柱建物25	須惠器	壺				灰色 (N6/1)			P6/11 1:
1587		須恵器	翻	_	_	_	灰色(N6/1)		外面-自然釉	Р6444
1588	掘立柱建物26	須恵器	茶	_	_	_	灰色 (N5.5/1)		外面 自然釉。内面 重ね焼き痕。	P2出土
1589		十的認	杯	_	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)			P9/11+:
1590	掘立柱建物28	須恵器	杯	_	_	-	灰白色 (N7/1)			P8出上
1591		須惠器	杯	_	10.2	-	浅黄色(2.5Y7/3)			P5出土
1592	掘立柱建物30	須恵器	蓋	_	17.4	-	灰白色 (N7/0)			検川中
1593	ALL C. DAT INSE OR	須恵器	杯	12.5	8.2	4.4	灰白色(2.5Y8/1)		底部-ヘラオコシ。	P6出土
1594	掘立柱建物33	土的網	甑	_	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)			P2/II+:
1595	掘立柱建物40	上師器	杯	14.0	10.2	3.2	鈍赤褐色 (5YR5/4)	復元完形		P6出上:
1596		須惠器	常	_	17.1	_	灰色 (N5/0)			P4出土
1597	掘立柱建物41	須恵器	杯	_	_	_	灰色 (N5/0)			P2/[[-]:
1598		須恵器	杯	_	7.2	_	鈍黄色(2,5YR6/3)			P3出土
1599	掘立柱建物43	須恵器	杯	_	10.7	_	黄灰色(2.5Y6/1)			P1/1/±
1600	掘立柱建物44	須恵器	杯	14.3	9.8	4.2	灰色 (N5/0)	復元完形		P3出上:
1601	掘立柱建物47	須恵器	杯	12.4	8.9	4.4	灰色 (N6/0)	復元完形	底部 イトキリ。	P5出土
1602	掘立柱建物48	須恵器	杯	_	_	-	灰白色(5Y7/1)			P8/11+:
1603		上師器	甕	11.8	_	-	褐灰色(10YR4/1)			P13出上
1604	掘立柱建物49	土師器	쾣	15.3	_	-	黄灰色(2.5Y6/1)			P2H(+:
1605		上師器	瓶	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)			Р2 <u>Щ</u> :
1606	掘立柱建物50	須恵器	杯	_	_	_	灰色 (5Y6/1)			P8出土
1607		須恵器	蓋	_	_	_	灰白色 (2.5Y7/1)			P7/11+:
1608		須恵器	恭	_	_	_	灰色(7.5Y6/1)			P4出上
1609	掘立柱建物51	須恵器	杯	_	_	_	灰白色 (7/0)			P5出土
1610		上師器	杯	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			P5/II/L:
1611		土師器	鐭	16.0	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)			P6出土
1612	掘立柱建物52	須恵器	蓋	_	_	_	灰色 (N6.5/1)		外面-白然釉。	P1///+:
1613	掘立柱建物52	須恵器	杯	_	_	_	灰色 (N4/1)		灰釉。	P2出上:
1614	掘立柱建物54	須恵器	杯	11.4	_	_	灰色 (N4.5/1)			P9出土
	and the real results of the second	須恵器	蓋	_	_	_	灰色 (N5/1)		外而-自然釉。	Р2/II I:
1615		70.55.45								

掲載	掲載遺構	種別	器種	p	測値(cn	1)	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
番号	75/10/8/10	1200	HIPIAL	口径	底径	部高	C7	-poex	WE THANKE	иня
1617	掘立柱建物55	土師器	甕	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		外面 一部煤付着。	P8///+:
1618	掘立柱建物56	1:師器	ച	18.4	_	17.0	暗灰黄色(2.5Y5/2)		外而-煤付着。	P4出上
1619	柱穴列 6	須恵器	杯	13.8	_	_	灰白色(N7.5/1)			P2出土
1620	製鉄炉1	土師器	甕	_	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)			
1621	火葬墓1	須惠器	鉢	18.0	_	12.3	灰色(7.5Y6/1)	完形	外面-ヨコナデ。内面-ヨコナデ・ ナデ。	鉄鉢形
1622	土壙123	須恵器	杯	_	10.2	-	灰白色(7.5Y7/1)		底部 ヘラキリ痕。	
1623	1.4度123	土師器	煮	_	-	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1624		上師器	杯	_	_	-	灰白色(2.5Y8/1)			
1625	土壙124	須恵器	杯	14.0	_	-	灰色 (5Y6/1)			
1626	1.40124	須恵器	杯	_	8.5	-	灰色(10Y5/1)			
1627		須恵器	杯	_	10.0	_	灰黄色(2.5Y7/2)			
1628		須恵器	蓋	_	_	_	灰色 (N6/)		外面 自然釉。	
1629	上壙125	須恵器	杯	13.8	_	_	灰白色(5Y7/1・8/2)			
1630	上旗120	須恵器	杯	_	_	9.6	灰色(10Y5/1)			
1631		須恵器	杯	_	_	7.1	灰色(5Y6/1)			
1632	土壙131	土師器	燻	19.5	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		内外面-煤付着。	
1633	上 # 122	須恵器	杯	14.6	11.2	4.0	灰色(N5.5/1)			
1634	土壙133	須恵器	杯	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR5/3)		内面 自然釉。	
1635	土壙141	土師器	杯	-	7.7	-	鈍橙色(7.5YR7/4)			
1636		上師器	杯	12.8	7.0	_	鈍橙色(5YR6/4)		底部-ヘラオコシ。	
1637	土壙144	須恵器	杯	13.7	7.7	4.6	灰色(N5.5/1)		底部-ヘラオコシ。内面-重ね焼き 痕。	
1638		須恵器	杯	15.5	10.4	3.7	灰色(N6/1)		底部-回転ヘラキリ。	
1639	土塘148	須恵器	8 Mi 200.	_	_	_	灰白色(N7/1)			
1640		須恵器	**	15.0	_	_	灰色(10Y5/1)			
1641		須忠器	蓋	15,2	-	-	灰色(5Y6/1)		外面-自然釉。つまみが付いてい たと推定される。	
1642		須恵器	蓋	16.8	_	_	灰色(10Y6/1)			
1643		須恵器	桥	13.8	7.5		鈍黄色(2.5Y6/4)			
1644		須恵器	杯	14.2	_	_	灰色(10YR4/1)			
1645		須恵器	杯	13.1	9.6	4.5	緑灰色(7.5GY5/1)			
1646		土師器	桥		10.5		灰色 (N4/)			
1647		須恵器	杯	15.6	12.0	4.0	オリーブ灰色(2.5GY5/1)			
1648		須忠器	杯	_	12.0	_	灰白色(5Y7/1)			
1649		須恵器	桥	_	12.0	_	暗青灰色(5BG3/1)			
1650		須恵器	杯	_	10.6	-	灰色(10Y6/1)			
1651		須恵器	栎	14.4	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			
1652		須恵器	杯	14.7			オリーブ灰色 (5GY6/1)			
1653	満39	須恵器	長頸壺	_	_	_	黄褐色(2.5Y5/3)		外面-沈線。自然釉あり。	
1654	Mitoa	須恵器	杯	_	9.2	I	灰色(N6/)			
1655		須惠器	壺?		8.0		鈍黄色(2.5Y6/3)			
1656		須恵器	壶?	_	11.0	_	灰白色(5Y7/1)			
1657		須恵器	甕	38.0	-	-	灰色(7.5Y6/1)			
1658		須恵器	鉢	24,6	10.5	12.7	灰色(5Y6/1)		外面-カキ目。全体の摩滅が激しい。	
1659		土師器	杯	11.4	_	_	淡赤橙色(2.5YR7/4)		赤彩。	
1660		土師器	桥	11.6			橙色(2.5YR6/6)		赤彩。	
1661		上師器	杯	14.0	-	_	鈍橙色(7.5YR6/4)		赤彩。	
1662		土師器	杯	13.0	10.9	3,4	鈍橙色(5YR6/4)		赤彩。	
1663		土師器	桥	14.5	12.4	3.3	橙色(5YR6/6)		赤彩。	
1664		上師器	盤	19.0	13.7	2.7	橙色(5YR6/6)		赤彩。	
1665		土師器	甕	14.6	-	-	赤褐色(10YR4/3)			
1666		土師器	変	15.1			鈍橙色(7.5YR6/4)			
1667		土師器	甕	17.3	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			

±1.1±±;				i	測値(cr	1)				
掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
1668		土師器	sitti En	23.0	_	_	橙色 (5YR6/6)		赤彩。	
1669		上師器	袭	24.0	_	-	鈍黄橙色(10YR6/4)			
1670		土師器	築	26.4	_	_	灰白色 (5Y8/2)			
1671		上師器	ዺ	27.2	_	_	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1672	溝39	土師器	甕	26.7	_	_	鈍黄橙色(10YR7/2)			
1673		土師器	鉢	13.0			明赤褐色 (5YR5/6)		赤彩。	
1674		上師器	鉢	9.5	5.8	7.1	橙色 (5YR6/6)		外面-黒斑。	
1675		土師器	<b>9</b> 86	_	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/6)			
1676		土師器	Mai	_	13.6	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			
1677		須恵器	燕	16.3	_	_	灰色(7.5Y5/1)			
1678		須惠器	蓋	17.0	_	_	灰色(5Y6/1)			
1679		須恵器	刘	39.0	_	_	灰色 (N6/)		外面-波状文。	
1680	溝40	須恵器	赛	39.6	_	_	灰色 (7.5Y6/1)			
1681		土師器	桥	14.6	_	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		赤彩。	
1682		上師器	杯	16.7	11.5	_	橙色(5YR6/6)		赤彩。	
1683		土師器	喪	10.4	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		赤彩。	
1684		須恵器	蓋	_	_	-	灰色(5Y6/1)			
1685	溝45	土師器	杯	14.9	13.9	2.7	橙色 (5YR6/6)		赤彩。	
1686		土師器	鹽				鈍黄橙色(10YR7/3)			
1687		須恵器	杯	11.9	8.6	3.7	灰黄色(2.5Y6/2)	復元完形	底部-ヘラキリ後ナデ。	
1688		須恵器	杯	12.2	8.4	4.0	灰色 (5/0)	復元完形	底部 ヘラキリ後ナデ。	
1689		須恵器	杯	12.6	8.4	4.1	灰色 (N6/0)	復元完形	底部-ヘラキリ後ナデ。	
1690	上器溜まり2	須恵器	杯	13.0	9.0	3.2	暗灰黄色(2.5Y5/2)	復元完形	底部-ヘラキリ後ナデ。	
1691		須忠器	柞	13.4	9.8	3.9	鈍黄橙色(10YR7/3)	復元完形	底部-ヘラキリ後ナデ。	
1692		須恵器	बंध	9.7	13.0	23.6	灰色 (N4/0)			
1693		1:6728	Maj	31.9	17.4	31.6	灰白色(10YR8/2)			
1694		須恵器	燕	16.2	_	2.7	灰色(10Y6/1)			
1695		須惠器	蓋	15.2		3.2	灰色 (5Y6/1)			
1696		須恵器	蓋	_	17.0	2.3	灰色(10Y6/1)			
1697		須恵器	蔱	_	17.8	2.3	灰色 (N5/0)	復元完形		
1698		須恵器	蓋	14.2	_	2.2	黄灰色(2.5Y5/1)			
1699		須恵器	燕	_	_	_	灰白色(2.5Y7/1)			
1700		須惠器	益	_	_	_	灰白色 (5Y7/1)			
1701		須恵器	蓋	17.0	_	_	灰オリーブ色 (5Y6/2)			
1702		須忠器	葢	21.9	_	_	灰色(7.5YR5/1)			
1703		須恵器	杯	14.3	11.0	4.0	灰色 (N6/0)			
1704		須恵器	杯	15.5	11.2	4.0	灰色(7.5Y6/1)			
1705		須恵器	杯	14.6	8.6	5.2	灰色(5Y6/1)			
1706		須恵器	杯	12.7	9.5	3.8	青灰色(5B5/1)			
1707	遺構に伴わない	須恵器	杯	13.7	_	-	灰白色 (5Y7/2)			
1708	遺物	須惠器	杯	13.5	8.5	5.8	灰色 (N5/0)			
1709		須恵器	杯	11.5	10.0	4.3	灰色(5Y6/1)	復元完形	底部-ヘラキリ後ナデ。	有蓋
1710		須恵器	杯	_	8.3	_	灰色(5Y6/1)			
1711		須恵器	杯	7.8	5.1	5.0	灰オリーブ色 (5Y6/2)			
1712		須恵器	杯?	_	5.3	_	灰色(5Y5/1)			
1713		須惠器	林子	17.2	_	_	灰色 (7.5Y6/1)			
1714		須恵器	杯	11.5	6.6	4.2	灰色(10Y5/1)			
1715		須忠器	杯	13.5	6.4	4.1	灰オリーブ色 (5Y6/2)			
1716		須恵器	杯	15.0	11.2	4.3	鈍黄橙色(10YR6/4)			
1717		須恵器	杯	12,4	7.4	3.9	灰色(7.5Y6/1)		内面-竹管状工具による押圧。	
1718		須恵器	杯	12.1	9.2	3.5	灰色(7.5Y6/1)		底部 ヘラキリ?	
1719		須恵器	杯	13.4	10.0	4.1	灰色(5Y6/1)			
1720		須恵器	杯	_	8.6	_	灰白色(2.5Y7/1)		底部-イトキリ?	
1721		須恵器	長頸壺	11.7	9.2	23.7	灰白色(N7/1)		外面-自然釉。	

		I	ı		and tale of	`				I
掲載 番号	掲載遺構	種別	器種	口径	測値(cn 底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
1722		須恵器	壶	13.6	PXIE		灰黄色(2.5Y7/2)			
1723		須恵器	壶?	-	13.2	_	灰色 (10Y6/1)			
1724		須恵器	姓	21.9	13.2	_	灰白色 (N7/)			
1725		須恵器	甕	-		_	黄灰色(2.5Y6/1)		76回-十日メンデ。四回「同心口又。	
1726				35.4						
-		須恵器	甕			_	灰色 (7.5Y6/1)			
1727		須恵器	类	29.3			灰色(10Y6/1)			
1728	遺構に伴わない 遺物	須恵器	甕	45.2	-	-	灰白色(N7/0)			
1729	A217	土師器	杯	13.0	9.0	3.2	鈍黄橙色(10YR7/4)			
1730		上師器	杯	12.7	7.4	3.3	浅黄橙色 (7.5YR8/3)			
1731		土飾器	杯	13.9	7.8	3.1	鈍橙色(7.5YR7/4)		ale As Complete and Calaba	
1732		1:師器	杯	15.5	9.1	4.8	鈍橙色 (2.5YR6/4)		赤色颜料若干付着。	
1733		土師器	椀	_	7.5	_	橙色 (7.5YR6/6)			
1734		土師器	甕	29.0			鈍黄橙色(10YR7/3)		内外面-煤付着。	
1735		上師器	344	25.2	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			
1736	掘立柱建物64	白磁?	碗				灰白色(N8/0)		釉-明緑灰色(10GY7/1)。貫入 有。	P11/0+.
1737	掘立柱建物72	土師器	小皿	7.5	6.1	1.2	橙色 (2.5YR7/6)	完形	底部-回転ヘラキリ。内外面に煤。	P3出土
1738	掘立柱建物72	土的認	杯	12.5	8.0	4.2	浅黄橙色(7.5YR8/4)	完形	内面-煤付着。	PI出土
1739	掘立柱建物80	上師器	鈯	_	_	_	灰白色(2.5Y8/2)			P1出土
1740	No. 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1	土師器	小皿	7.6	5.4	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/4)			P9/11:
1741	掘立柱建物84	土的認	小皿	9.0	7.3	1.3	鈍橙色 (7.5YR7/3)			P16/11+:
1742	N I I LA ZHALI I I I	上師器	小皿	9.0	7.1	1.0	橙色 (5YR6/6)		底部-回転ヘラキリ。	P9出土
1743	- 加立柱建物101	土師器	ш	10.8	7.0	1.5	鈍黄橙色(10YR6/4)		底部-回転ヘラキリ。	P9/ILL:
1744	掘立柱建物102	上師器	小皿	9.8	7.4	1.5	浅黄橙色(10YR8/3)	沿形	底部 回転ヘラキリ。	P6・7出土
1745	掘立柱建物103	1:師器	鍋	14.9	_	_	灰白色 (10YR8/2)		外面全体に煤付着。	PU/III:
1746	掘立柱建物104	上師器	小皿	8.0	5.3	1.7	鈍褐色 (7.5YR5/3)	完形	底部-回転ヘラキリ。	P12出上:
1747		土師器	小皿	8.0	5.6	1.8	鈍橙色 (7.5YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。	P9/ILL:
1748	掘立柱建物106	上師器	小皿	7.7	6.1	1.7	鈍褐色 (7.5YR5/3)		底部-回転ヘラキリ痕。	P9出土
1749	掘立柱建物107	青磁	₽⁄i	_	_	_	灰白色 (N7/1)		釉-オリープ灰色 (2.5GY6/1)。	P4/11+
1750		勝間田焼	椀	_	_	_	灰白色 (N7.5/1)		外面-重ね焼き痕。	P24/11+:
1751	No. 1 12 2md/	勝問田焼	鉄	-	_	_	褐灰色 (5YR4/1)			P9出土
1752	- 振立柱建物108	土師器	鍋	_	_	_	明褐灰色(7.5YR7/2)		外面-煤付着。	P15出土
1753		上師器	鍋	34.4	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/3)		外而-煤付着。	P9出土
1754		土師器	小皿	7.8	5,6	1.3	橙色 (5YR7/7)		底部-回転ヘラキリ。	P20出土
1755		土師器	小皿	8.2	5.5	1.8	浅黄橙色(10YR8/4)		底部-回転ヘラキリ。	P36/11+:
1756		上師器	小皿	7.8	5.7	1.5	桁色 (5YR7/6)		底部-回転ヘラキリ。	P16出上
1757		土師器	小皿	7.6	5.5	1.8	橙色 (2.5YR6/6)		底部 回転ヘラキリ。	P10出土
1758		1:6节22	小皿	7.8	5.4	1.7	鈍橙色 (5YR6/4)		底部-回転ヘラキリ。	P29/H I:
1759		土師器	小皿	8.5	6.7	1.6	橙色(5YR6/6)		底部-回転ヘラキリ。内外面-煤? 付着。	P27出土
1760		上師器	小皿	7.3	4.8	1.5			底部-回転ヘラキリ。	P29出上
1761		土師器	小皿	8.0	6.2	1.8	橙色 (2.5YR7/8)		底部回転へラキリ。	P6/11+:
1762		土師器	小皿	8.0	6.3	1.6	鈍橙色 (7.5YR7/4)		底部-回転へラキリ。	P2出上
1763	掘立柱建物110	上師器	小皿	8.6	6.7	1.7	鈍黄裕色(10YR7/2)		底部-回転へラキリ。	P3出土
1764		土師器	小皿	8.5	6.1	1.9	橙色 (5YR7/6)		底部・回転ヘラキリ。	Р9/П:
1765		上師器	杯	14.5	_	-	灰褐色(7.5YR5/2)		被熱する。	P20/11_1:
1766		土師器	杯	-	8.1	_	明褐灰色 (7.5YR7/2)		底部-回転ヘラキリ。被熱する。	P3/11+.
1767		土師器	鍋	_	_	_	思色 (N2/1)		外面-煤付着。	P35/11+:
1768		陶器	34n	_	_	_	灰白色 (N8/1)		和-灰釉。ロクロ成形後施釉。	P26出上:
1769		勝問田焼	椀		_		灰白色 (N7/1)		19 クン190 P / P /A///文/地利10	P6/11:
1770		陶器	III ?	_	_	_	灰褐色 (7.5YR6/2)		和-鈍黄橙色(10YR4/3)	P8出上
1771		勝問田焼	惋	_	_	<del>-</del>	灰白色 (N7.5/1)		外面-重ね焼き痕。	P33出土
1772		勝間川焼	類			$\vdash$	展色 (N2/1)		外面-格子目タタキ。内面-ハケ。	
	加立柱建物111			7 #	5.9	1.6				P8/IIL
1773	3/05 (A.TEXE1/01111	土師器	小皿	7.6	5.2	1.5	鈍橙色 (5YR6/4)		底部-回転ヘラキリ。	P4出土

掲載	掲載遺構	種別	器種	<u> </u>	測値(cr	·	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
番号	7700=117			口径	底径	高器		-		
1774		土師器	小皿	8.3	6.1	1.3	鈍橙色(5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ。	P5出上
1775		上師器	小皿	7.8	6.0	1.7	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部 回転ペラキリ。口唇部煤付着?。	P6出土
1776		土的器	小皿	8.3	6.6	1.5	浅黄橙色(10YR8/3)		底部-ヘラオコシ後ナデ・板口 痕。外面-赤色顔料一部残。	P6出上
1777	hi la la salada a sa	土師器	杯	14.2	7.6	4.1	鈍橙色 (5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ・一部板目 痕。	P9///±
1778	掘立柱建物111	瓦質土器	鍋				思色(N2/1)			P6出上
.779		上師器	鍋	-	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		内面-煤付着?	P8出土
780		土師器	銷	_	_	_	鈍橙色 (5YR7/4)			P8出土
781		土師器	鋼	32.8	_	-	鈍褐色(7.5YR6/3)			P7/III:
782		勝間田焼	椀	_	_	_	淡橙色(5YR8/3)		底部-回転イトキリ。内外面:煤 付着。	P3出土
783		白磁	69ie	_	_	_	灰白色(N8/1)		釉-透明釉・貫入なし。	P3/4:
784	掘立柱建物112	瓦質土器	鍋				黑色 (N2/1)		外面-煤付着。	P7川上
785	掘立柱建物113	上師器	小皿	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)		底部-回転ヘラキリ。	P10川让
786	掘立柱建物114	勝間田燒	椀	_	_	_	灰色 (N6/1)			P1出土
787	掘坑柱建物115	白磁	70/e	_	_	_	灰白色(7.5Y8/1)		釉-灰白色(5Y7/1)・貫入有。	P4/11+:
788	掘立柱建物117	土的繆	小皿	7.8	5.8	1.4	鈍黄橙色(10YR7/4)			P5出上
789		上師器	小皿	7.1	6.3	1.2	鈍黄橙色(10YR7/4)		底部-回転ヘラキリ。	P10出上:
790		土師器	小皿	7.5	6.8	1.3	鈍橙色(10YR7/4)		底部-回転ヘラキリ。	P9出土
791		土師器	小皿	8.2	6.4	1.3	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-回転ヘラキリ。	P9出上
792	457 de 12 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20 20	上師器	小皿	7.2	5.6	1.3	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-イトキリ。	P17/H I:
93	掘立柱建物118	上師器	小皿	7.8	6.8	1.4	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部-イトキリ。	P10出上
94		1:0028	小皿	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ。	P9出上
795		上師器	小皿	7.8	5.8	1.6	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。	P21出上
796		土師器	鍋	_	_	_	灰白色 (2.5Y8/2)			P12出土
797	掘立柱建物121	土的認	杯	11.2	5.0	2.8	鈍橙色(7.5YR7/4)			P2出上
798		上師器	小皿	7.2	5.8	1.6	鈍橙色 (5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ。	P3出土
799	掘立柱建物126	土師器	小皿	8.0	5.7	1.5	鈍橙色 (5YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。	P18出土
800		勝間川焼	椀	_	7.0	_	灰色 (N5.5/1)		底部-イトキリ。	P20出土
801	掘立柱建物127	土的認	小皿	7.8	6.8	1.4	鈍黄橙色(10YR6/4)		外面-回転ヘラキリ。	P6/11+:
802	掘立柱建物132	瓦質上器	鍋	31.3	_	_	黒色(N1.5/)		外面-煤付着。	P1出土
803	掘立柱建物135	土師器	鍋	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)			P1/5+
804		土師器	小皿	7.6	5.2	1.2	橙色 (5YR7/5)		内外面-有機付着物多。	P13/11+:
805	掘立柱建物136	上師器	小皿	8.0	6.7	1,3	浅黄橙色(7.5YR8/4)	完形	底部-回転ヘラキリ後ヘラオコシ 痕。器面付着物多。	P11出上
806		土師器	杯	_	_	_	鈍橙色 (5YR7/4)			P15出土
807		土的紹	杯	12.4	5.4	3.5	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ・板目圧痕。	P22///+:
808	掘立柱建物143	上師器	杯	12.3	5.3	4.2	灰黄褐色(10YR5/2)		底部-イトキリ。	P8出土
809		土師器	杯	13.0	_	_	橙色 (7.5YR7/6)			P7出土
810		土師器	小皿	8.1	5.7	1.7	橙色 (5YR7/6)		底部-ヘラオコシ?	P6/I/1:
811	掘立柱建物144	1:61722	小皿	9.9	7.0	2.0	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。	P1出上
812		瓦質上器	鍋	-	_	-	灰色(N4/1)			P4出土
813		白磁	IIIL	_	_	-	灰白色 (N8/1)		釉-透明釉・貫人有。	P11出土
814	掘立柱建物151	瀬戸美濃	香加i	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/3)		釉-明オリーブ灰色 (5GY7/1) ・貫入行。	P6出上
815	掘立柱建物152	上師器	小皿	7.9	5.2	1.6	鈍橙色(5YR7/4)		底部-回転イトキリ。	P3出土
816	掘立柱建物153	土師器	小皿	6.6	4.5	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	完形	底部-回転ヘラキリ後ヘラオコ シ。	P3川上
817	掘立柱建物156	備前焼	拙鉢	_	_	_	灰赤色(2.5YR4/2)		内面-僅に攜目残る。	P1出土
818	掘立柱建物158	土師器	小皿	7.2	5.9	1.5	鈍橙色 (7.5YR6/4)		底部・回転ヘラキリ。	P5/11+:
819		土師器	小皿	7.3	5.7	1.2	鈍黄橙色 (10YR6/4)			
820		1:607223	小皿	7.7	5.0	1.6	鈍橙色 (7.5YR7/4)			
821	鍛冶工房 1	上師器	杯		8.0	-	灰白色(10YR8/2)			
			1					_		

掲載				p	測値(cn	n)	_	,			4.
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1823		瓦質土器	羽後	22.3	_	_	灰色(7.5Y4/1)		外面-煤付着。		
1824		瓦質土器	羽笼	_	_	_	灰色(10Y4/1)		外面 煤付着。		
1825	鍛冶工房 1	瓦質土器	鍋	_	_	_	灰色 (N4/)		外面-煤付着。		
1826		上師器	类	_	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)				
1827		土師器	小皿	7.3	6.0	1.5	鈍橙色 (5YR7/4)				
1828	   鍛冶かi7	十分问题	皿?	_	5.4	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)		底部-回転ヘラキリ?。		
1829	,	上師器	鍋	_	_	_	<b>鉱</b> 橙色 (5YR7/4)		744		
1830	鍛冶炉12	瓦質土器	鍋	25.1	_	_	灰色 (N5/)		外面 煤付着。		
1831	2017	土師器	小皿	7.9	6.2	1.5	鈍橙色 (7.5YR6/4)	復元完形	底部-回転イトキリ。		
1832		上師器	小皿	8,3	6.1	1.6	灰黄褐色(10YR6/2)	完形	底部・回転へラキリ。内面・煤付着。		
1833	土壙墓11	土師器	小皿	8.3	6.6	1.4	鈍黄橙色 (10YR7/3)	76/12	底部回転イトキリ。		
1834		土師器						%i-J⇔u8			
	Luketta e o		小皿	8.2	6.6	1.4	鈍橙色(7.5YR6/4)	復元完形	底部-回転ヘラキリ。		
1835	土壙墓12	上師器	小皿	7.1	5.3	1.3	校色 (5YR6/6)	/ba abare/			
1836	上壙墓14	瀬戸	四耳壺	11.0	9.0	30.8	オリーブ黄色 (5Y6/3)	復元完形	of class and a second second		
1837	上壙墓16	十加器	小皿	7.6	5.3	1.3	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形	底部-回転ヘラキリ。		
1838		上師器	小皿	8.0	6.1	1.6	鈍橙色(.5YR6/4)	完形	底部-回転ヘラキリ。		
1839	土壙墓22	上師器	小皿	8.0	5.8	1.6	鈍橙色(7.5YR7/3)	完形	底部-回転ヘラキリ。内外面-煤付 着。		
1840		上師器	小皿	7.7	5.6	1.6	鈍橙色(7.5YR7/4)	完形	底部-回転ヘラキリ。		
1841		上師器	小皿	7.7	5.9	1.6	鈍橙色(7.5YR7/3)	完形	底部 回転ヘラキリ・ヘラオコシ 痕。外面-煤付着?		
1842	- 上壙墓24	土師器	小皿	7.9	6,0	1.6	鈍橙色(7.5YR7/4)	完形	底部-回転ヘラキリ後ヘラオコシ 痕。		
1843		土師器	小皿	8.0	6,0	1.6	鈍橙色(7.5YR7/4)	完形	底部-回転へラキリ。		
1844	上壙墓25	備前燒	拙鉢	-	-	_	灰褐色 (7.5YR5/2)	76/0	底部-ヘラキリ後指ナデ。内面-擂 口潰れる。		
1045	words His o	1. recum	AG.	24.0			E/':/4 (107/D0/0)				
1845	竪穴遺構 2	土師器	鍋	34,6	_	_	灰白色(10YR8/2)		内外面-煤付着。		
1846	土壙160	備前焼?	擂鉢	_	_	_	灰色 (5Y5/1)		11- 14-11/4		
1847	土壤161	上師器	鍋	_		_	黄灰色(2.5Y5/1)		外面-煤付着。		
1848	:壙162	土師器	杯	-	7,0	_	灰黄褐色(10YR6/2)				
1849	:壙163	土師器	杯	12.8	8.4	3.9	灰白色 (10YR8/2)		底部-回転イトキリ?		
1850		上師器	杯	_	9.0	-	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-回転イトキリ?		
1851	:壙164	土師器	杯	_	8.0	_	鈍褐色(7.5YR6/3)				
1852	上壙165	土師器	小皿	8.0	_	_	鈍褐色(7.5YR5/3)				
1853	土壙166	瓦質上器	片口鉢	19.4	10.4	7.9	暗灰色 (N3/0)				
1854	:壙169	土師器	小皿	8,1	5,9	1.6	鈍橙色 (7.5YR6/4)		底部-回転イトキリ。		
1855	土壌170	瓦質土器	鍋	_	_	-	灰白色(2.5Y8/2)				
1856	土壙172	白磁	碗	_	_	-	灰オリーブ色 (5Y6/2)				
1857	上壙173	土師器	小皿	7,9	6.7	1.5	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。		
1858	上壙174	土飾器	杯	_	7.0	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部-回転イトキリ。		
1859	土壙175	上師器	杯	11.7	7.0	3.3	鈍橙色(7.5YR6/4)		外而-煤付着		_
1860	上壙177	土師器	杯?	-	_	_	灰色(5Y6/1)				_
1861	上壙180	備前烷	甕	-	31.3	_	喑灰黄色(2.5Y5/2)				
1862	Linksoc	青磁	碗	-	-	_	オリーブ灰色(2.5GY5/1)		外而-連弁文様。		
1863	上壙186	上師器	杯	-	7.0	-	鈍黄樹色(10YR7/2)		底部-回転ヘラキリ。		
1864		土飾器	小皿	7.8	5.4	1.6	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転イトキリ?		
1865		上師器	ш	10.1	6.9	2.9	浅黄橙色(7.5YR8/6)		底部-回転イトキリ。		
1866	上壙187	上師器	IIIL	10.9	6.4	2,0	鈍橙色(7.5YR7/4)	ほぼ完形	底部-回転イトキリ。		
1867		瓦質土器	鍋	22.6	_	_	喑灰色 (N3/)		外面-煤付着。		
1868	土壙187	瓦質上器	鍋	28.0	_	_	灰色 (N4/)		une 2799 at les V		
1869	,	上師器	小皿	8.3	8.2	1.3	鈍橙色 (7.5YR7/4)				
1870		土師器	杯	11.4	7.2	3.2	浅黄橙色(7.5YR8/4)				
	:壙188		杯	11.4	5.0	3.2			<b>功</b>		
1871	1.4pq.100	1:師器	TI	<del>-</del>	5.0	_	鈍橙色(7.5YR7/4)		内面-煤付着。		
	i .	上師器	杯	1	5.6	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部 回転ヘラキリ。内面 全体黒		

掲載					測値(cr	n)					
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1873	上壙188	土師器	鍋	20.6	_	-	鈍橙色(5YR7/3)		内外面 煤付着。		
1874	土壙189	1:師器	小皿	7.8	6.1	1.8	鈍黄橙色(10YR6/3)				
1875	土壙191	勝間田焼	繧	35.7	_	-	黄灰色(2.5Y5/1)		外面-格子目タタキ。		
1876	上壙192	土師器	杯	12.0	6.4	2.3	橙色(7.5YR7/6)				
1877	土壙195	土師器	杯	_	4.4	-	橙色(7.5YR6/6)				
1878	土壙198	灰釉系陶器	小皿?	_	_	_	灰オリーブ色(5Y6/2)		外面-灰釉。		
1879		土師器	小皿	8.6	5.8	1.2	鈍橙色(7.5YR7/3)				
1880	土壙199	土師器	小皿	8.0	5.4	1.3	鈍橙色 (7.5YR7/4)				
1881		上師器	小皿	9.8	7.2	1.7	鈍橙色(5YR7.5/4)		底部-回転ヘラキリ。		
1882	土壙201	土師器	m	13.7	8.4	2.6	浅黄橙色(7.5YR8/4)		底部-回転ヘラキリ。		
1883	土壙208	土師器	鍋	_	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		外面-煤付着。		
1884	土壙209	瓦質上器	鍋	_	_	_	褐灰色(10YR5/1)		外面-煤付着。		
1885		土師器	鍋	_	_	_	黑色 (N2/1)		外面 煤付着。		
1886	土壙215	勝間田焼	椀	_	_	_	灰色 (N5.5/1)		外面-重ね焼き痕。		
1887	土壙217	上師器	鍋	33.0	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		外面-煤付着。		
1888	上壙223	土師器	小皿	8.0	6.0	1.8	浅黄橙色(10YR8/3)		底部 回転ヘラキリ後板目痕。		
1889	土壙224	山質	鍋	_	_	_	暗灰色 (N3/1)		Committee of the Commit		
1890		土師器	小皿	8.6	6.0	1.8	灰黄褐色(10YR5/2)		底部-回転ヘラキリ・ヘラオコ シ。		
1891	土壤226	土師器	小皿	_	5.3	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ後板日痕?		
1892		白磁	(施	_	_	_	灰白色(10YR8/2)		和-透明和・細い貫入有。		
1893	上壙229	土師器	小順?	_	6.0	_	灰白色 (2.5Y8/1)		底部 イトキリ後板目痕か?		
1894	工-利利 に こう	土師器	小皿	8,3	6.0	1.8	純橙色 (5YR6,5/4)		底部-回転ヘラキリ。		
1895		瓦質上器	鍋	29.5	0,0	_	灰色 (N5/1~4/1)		外面-煤付着。		
1896	土塘230	五質上器	鍋	32.7		12.0	黄灰色(2.5Y6/1)		7 国 元 本		
1897	1.494230	土師器		34.8		12.0			N.J. 推开美		
1898			細			_			外面-煤付着。		
		土師器	鍋	34.0			鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-煤付着。		
1899	土壙232	上師器	小皿	7.9	6.0	1.5	灰褐色 (7.5YR5/2)		底部-回転ヘラキリ。		
1900	土壙233	上師器	細	_	_	_	黒色(N2/1) 灰褐色(7.5YR6/2)		外面-煤付着。		
1901		土師器	鍋	_			<b>3 3.1 7</b>		外面-煤付着。		
1902	上壙234	上師器	<b>1</b> ?			_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		底部-回転ヘラキリ後板目。		
1903		瓦質	銅	_	_	_	黒色 (N2/1)		外面-煤付着。		
1904		青磁	₹%ie	_	6.2	_	灰白色 (N8/1)		釉-灰白色(5Y7/1)・貫入右。		
1905	土壙235	1:11128		_		_	灰色 (N6/1)		底部-回転イトキリ。		
1906		上師器	鍋	_	_	-	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-煤付着・被熱器面剥落痕。		
1907		土師器	小皿	8.2	6.5	1.5	鈍橙色 (5YR6/4)		底部-回転ヘラキリ。		
1908	土壙237	1:6028	鍋	_	_	-	鈍橙色 (7.5YR6/3)		外而-煤付着。		
1909		上師器	銅	_	-	_	浅黄橙色(7.5YR8/3)				
1910	1:壙238	土師器	小皿	_	4.6	_	浅黄橙色(10YR8/3)		底部-回転ヘラキリ。		
1911		1:67728	小皿	8.2	5.8	1.2	橙色(2.5YR6/6)		底部-回転ヘラキリ。		
1912		上師器	銅	29.1	_	-	鈍橙色(7.5YR6/4)		内外间·煤付着。		
1913	上壙239	土師器	細	31.2	_	-	鈍橙色(7.5YR7/3)				
1914		1:61728	214	_	_	-	灰黄褐色(10YR5/2)		内外而-煤付着。		
1915	土壙240	上師器	小皿	7.6	5.7	1.4	灰褐色 (7.5YR5/2)		底部-回転ヘラキリ。		
1916		陶器	?	-	_	-	灰色 (N7/1)		釉-灰釉貫入有。		
1917	<b>土曜241</b>	土師器	小皿	8.0	6.0	1.6	鈍橙色(7.5YR7/6)		底部-回転ヘラキリ後ヘラオコシ 痕。		
1918	土壤241	勝間田焼	鉢	-	5.4	-	灰白色 (2.5Y7/1)		底部-回転イトキリ。		
1919		1:6728	鍋	_	_	-	鈍橙色(7.5YR7/4)		外而-煤付着。		
1920	1:壙241	勝問田焼	鉢	_	14.6	_	灰色 (N6/1)		底部-回転ヘラオコシ。		
1921	上壙242	亀山焼	3本	_	_	-	灰色 (N6/1~5/1)		外面-自然釉僅。		
1922		1:61729	小皿	7.8	5.4	1.3	褐灰色(10R6/1)		底部-回転ヘラキリ。		
1977											
1923	比壙243	1:師28	小皿	8.2	6.0	1.4	鈍橙色 (5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ。内外面-一部 煤付着。		

掲載					l:測値(cr	1)					
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1925	土壤243	上師器	羽釜	_	-	_	鈍橙色(5YR6/4)				
1926	上壙244	土師器	小皿	8,0	5,9	1.3	鈍橙色 (7.5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ痕。		
1927		土師器	鍋	32.0	22.2	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		内外面-煤付着。		
1928	土壙245	白磁	碗	17.5	_	_	灰白色 (N8/0)		釉-灰白色(7.5Y7/1)・貫人有。		
1929	土壤246	上師器	小皿	7.8	4.5	1.7	灰黄褐色(10YR6/2)		底部-回転ヘラキリ?		
1930	上壙247	土師器	小皿	7.0	5.6	0.9	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部-回転ヘラオコシ。		
1931	現底公生了	土師器	小皿	7.4	5.9	1.3	鈍黄橙色(10YR6/3)		底部-回転イトキリ?		
1932	土壤249	上師器	杯	13.8	8.2	3.9	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-回転イトキリ?		
1933	1:壙250	上師器	銷	_	_	ı	灰色(5Y5/1)		外面-煤付着。		
1934	上壙252	土師器	小皿	7.9	6.6	1.5	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部 回転ヘラキリ。		
1935		土師器	小皿	7.0	5.6	1.2	鈍黄橙色(10YR7/3)				
1936		上師器	小皿	7.5	5.6	1.4	鈍橙色(7.5YR7/4)		底部-回転イトキリ。		
1937		土師器	小皿	7.5	_	_	鈍黄橙色(10YR6/3)		底部-回転イトキリ?		
1938	上壙253	土飾器	小皿	8.1	6.4	1.3	橙色 (5YR7/6)		底部-回転イトキリ。		
1939		上師器	小皿	8.0	6.3	1.4	灰黄褐色(10YR6/2)		底部-回転イトキリ。		
1940		上師器	杯	11.6	_	ı	鈍黄橙色(10YR6/3)				
1941		土師器	杯	12.9	7.0	3.9	鈍橙色 (7.5YR6/4)		底部-回転イトキリ?		
1942		土面器	小皿	7.5	6.1	1.2	鈍橙色(7.5YR7/4)	完形復元			
1943		上師器	杯	12.2	8.4	3.5	鈍黄橙色(10YR7/2)	完形	底部-回転ヘラキリ・板目痕。		
1944	1:1礦254	上師器	杯	-	6,2	_	鈍橙色 (7.5YR6/4)		底部-回転イトキリ。		
1945		土師器	杯	11.7	-	_	浅黄橙色(10YR8/3)		底部-回転ヘラキリ?		
1946		土師器	杯	12.9	7.0	4.5	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形復元	底部-回転ヘラキリ。煤付着。		
1947	土壤255	上師器	杯	11.8	8.5	3.8	鈍黄橙色(10YR7/2)	完形	底部-回転ヘラキリ。		
1948	上壤256	土師器	杯	_	8.8	_	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-回転イトキリ?		
1949		上种器	小皿	7.3	6.4	1.3	鈍橙色(7.5YR7/4)	完形	底部-回転ヘラキリ。		
1950	Littace	土師器	小皿?	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/4)				
1951	上壙257	土師器	桥		5.9		鈍橙色(7.5YR7/4)		底部-回転イトキリ。		
1952		上師程	鍋	_	_	_	オリーブ黒色(7.5Y3/1)				
1953	1 februare	上師器	小皿	8.2	6.8	1.4	鈍黄松色(10YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。		
1954	上壤259	土師器	鍋	_	_	_	灰黄色(2.5Y7/2)		外面-煤付着。		
1955		土的網	小皿	8.3	6.5	1.5	浅黄橙色(7.5YR8/3)		底部-回転ヘラキリ。		
1956		上師器	杯	_	_	_	浅黄橙色(7.5YR8/4)				
1957		青磁	HIL	_	_	_	灰白色(N8/1)		釉-灰白色(7.5Y7/1)。		
1958	上壙260	白磁	碗	_	_	_	灰白色 (N8/1)		釉-兰灰白色(5Y7/1)。		
1959		1:6722	鍋	_	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)				
1960		上師器	鍋	30.0	-	_	灰褐色(7.5YR6/2)				
1961	Lintropa	土師器	杯	_	_	_	灰白色(7.5YR8/2)				
1962	上壙261	土的器	鍋	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)		外面-煤付着。		
1963		上師器	小皿	7.3	5.1	1.5	橙色(2.5YR6/8)	完形	底部-回転ヘラキリ痕。内面-煤付 着。		
1964		土飾器	小皿	7.7	5.8	1.5	橙色(2.5YR6/6)	完形	底部-回転ヘラキリ後ヘラオコシ 痕。		
1965		上師器	小皿	6.9	5.8	1.5	桁色 (2.5YR6/6)	完形			
1966		土師器	小皿	7.5	5.3	1.7	橙色(2.5YR6/6)	完形	底部-回転ヘラキリ痕。内外面-煤 付着。		
1967		上師器	小皿	8.2	5.2	1.9	鈍橙色 (5YR6/4)	完形	底部-回転イトキリ痕。		
1968	1 takes	上師器	小皿	8.4	5.9	1.7	浅黄橙色(10YR8/4)	完形	底部-回転ヘラキリ。		
1969	土壙263	土飾器	小皿	8.5	6.4	1.7	橙色(2.5YR6/6)		底部-回転へラキリ痕。内外面-器 面付着物多。		
1970		上師器	小皿	7.8	4.3	1.5	灰白色(10YR8/1)	完形	底部-回転ヘラケズリ痕。		
1971		土師器	小皿	8.0	4.4	1,4	灰白色 (10YR8/2)	完形	底部・回転ペラキリ痕。		
1972		土師器	小皿	7.7	6.2	1.5	鈍橙色 (7.5YR7/4)	20,0	底部-回転ヘラキリ痕。		
1973		1:師器	杯	13.6	7.6	3.7	鈍橙色 (5YR7/4)	完形	底部・回転へラキリ痕。		
1974		上師器	杯	14.4	8.9	3.5	淡橙色 (5YR7.5/4)	完形	底部-回転へラキリ後板目痕。		
1017			11	17.7	0,0	0.0	Maria (Attrito) 4)	7010			
1975		上師器	杯	15.1	8.6	3.6	橙色(2.5YR6/6)	完形	底部-回転ヘラキリ痕後板目痕。 内面-重ね焼き痕。		

掲載					測値(cn	1)					
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
1976		上師器	杯	14.4	8.7	3.6	鈍橙色(7.5YR7/3)	完形	底部-回転ヘラキリ後板口痕。		
1977	上壙263	土師器	杯	14.4	8.0	4.0	橙色(2.5YR7/6)		底部 回転ヘラキリ後板目痕。		
1978		勝間田焼	椀	_	_	_	灰色 (N5/1)		外而-重ね焼き痕。		
1979		上師器	小皿	7.5	5.6	1.5	鈍橙色 (5YR7/4)	完形	底部回転イトキリ?		
1980		土師器	小皿	7.8	5.8	1.5	鈍赤褐色 (5YR5/4)	完形	底部-回転ヘラキリ。		
1981	土壙264	上師器	小皿	9.0	5.9	1.7	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形	底部-回転イトキリ。		
1982		土師器	小皿	8.4	5.9	1.6	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形	底部-回転イトキリ。		
1983		土師器	小皿	8.3	6.2	1.7	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形	底部-回転イトキリ。		
1984	土壙265	瓦質上器	羽釜	-	_	_	灰色(5Y4/1)				
1985		土師器	小皿	8.1	5.8	1.0	灰黄色(2.5Y7/2)		底部-回転ヘラキリ。内面-煤付着。		
1986		上師器	小皿	7.6	6.5	1.1	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。内面-煤付着。		
1987	土壙266	土師器	小皿	7.8	6.6	1.4	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-回転ヘラキリ。底面に僅に 板日痕。内面-煤付着。		
1988		上師器	杯	13.4	8.8	3.0	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。		
1989		土師器	鍋	25.6	_	_	灰黄色(2.5Y7/2)				
1990		1:師器	鍋	25.0	_	_	灰白色(2.5Y8/1)		外而-僅煤付着。		
1991	1:壙272	上師器	鍋	26.3	_	_	鈍黄褐色(10YR5/3)				
1992	上壙278	土師器	小皿	6.8	5.4	1.2	鈍橙色 (7.5YR6/4)				
1993		上師器	小皿	14.3	_	_	橙色 (5YR7/6)		外面-煤付着。		
1994	上壙280	青磁	碗	14.6	_	_	灰白色 (N7.5/1)		称-オリーブ灰色(10Y5/2)。外 面-雷文帯・連介文。		
1995		上師器	鍋	_	_	_	橙色 (5YR7/6)				
1996	上壙282	土師器	鍋	_	_	_	浅黄橙色(10YR8/4)				
1997		勝間田焼	鉢	_	_	_	灰白色 (10YR8/1)				
1998	土壙286	備前焼	擂鉢	_	_	_	赤褐色(10R5/3)		内面-擂目6条以上。		
1999	1:壙287	上師器	杯	12.8	6.4	4.5	褐灰色(10YR5/1)		底部回転ヘラキリ。		
2000	土壙288	備前焼	要	_	18.0	_	鈍橙色 (5YR7/4)		EXPERIM 12 1 20		
2001	土壙289	青磁	施	_	_	_	灰白色 (N8/1)		釉-オリーブ灰色(10Y5/2)。		
2002		土師器	m	13.2	7.4	2.1	灰白色(10YR8/1)		底部-回転ヘラキリ後ヘラオコシ 痕。		
2003	土壙290	上師器	IIIL	19.7	_	_	淡梢色 (5YR8/3)				
2004		備前	擂鉢	_	_	_	灰赤色 (7.5YR4/2)		外面-自然釉・重ね焼き痕。		
2005	満50	上師器	m	10.8	6.3	2.1		完形復元	底部-回転イトキリ。		
2006		備前焼	<b>擂鉢</b>		_		灰色 (5Y5/1)	7277 1327 2	August Indian Co.		
2007	満51	備前焼	擂鉢	_	_	_	鈍赤褐色 (2.5YR5/3)				
2008		備前燒	拙鉢	_	_	_	灰赤色(7.5YR4/2)				
2009		勝間山焼	極	_	_	_	灰色 (N4/1)				
2010	満80	勝間田焼	椀	_	6.0	_	灰色 (N5.5/1)		底部-回転イトキリ。		
2011	溝94	土師器	小皿	_	-	_	校色 (2.5YR6/6)		底部-回転ヘラキリ。		
2012		土師器	柳		6.2		浅黄橙色(10YR8/4)				
2013		上師器	椀	_	5.7	_	校色 (5YR6/6)				
2014		瓦質土器	鍋	_	-	_	灰色 (574/1)				
2015		五質上器	3M	33.5	_	_	<u> 果色(N2/)</u>				
2016		勝間田焼	椀	12.5	_	_	灰色 (N6/)				
2017		勝間田焼	極	14.0	7.0		水色 (No/) オリーブ灰色 (2.5GY6/1)		底部-回転イトキリ痕。		
2017		勝間田焼	椀	_	6.0	_	灰色 (N4/~5/)		WARE CITALL CT 2 70%		
2019	落ち込み1	勝問田焼	柳	18.6	-	_	灰色 (N6/)				
2020	, J J J J J J J J J J J J J J J J J J J	勝間田焼	椀		8.4	2.0	灰白色 (N7/1)		底部・回転イトキリ痕。		
2020		勝間田焼	1992 jak		-0.4	2.0	灰円也 (X7/1) オリープ灰色 (2.5GY6/1)		ANDERTAGE 1177 ソ (数o		
2021											
		勝間田焼	悪機		_	_	灰色 (N5/)				
2023		勝間田焼		30.0		_	灰色 (N4/)				
2024		勝間田焼	燕	43.8	12.0	_	灰白色 (5Y7/2)				
2025		勝間田焼	煮	_	13.8	_	灰色 (N6/)		AL		
2026		備前焼	亞	_	_	_	赤黒色(2.5YR2/1)		外内面 自然釉付着。		

掲載		1			測値(cn	1)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	部高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
2027		備前焼	壺	11.6	_	6.9	暗赤褐色 (7.5R3/1)		外面-沈線5~6条。外面-自然釉	
2028		備前燒	徳利	-	5.0	_	灰白色(7.5Y7/1)			
2029		備前燒	拙鉢	-	_	_	鈍赤褐色 (5YR5/4)			
2030		備前焼	擂鉢	-	_	-	灰褐色 (5YR5/2)			
2031		備前焼	擂針	-	_	_	灰色 (N6/)			
2032	落ち込み 1	備前燒	掛鉢	_	_	_	灰赤色(7.5R5/2)			
2033		備前焼	揺鉢	_	16.1	_	灰褐色(7.5YR5/2)			
2034		瀬戸焼	壺	_	_	_	灰白色 (5Y7/2)			
2035		青磁	台子蓋	6.0	_	_	明緑灰色 (7.5GY7/1)		外而-連華文。	
2036		青磁	(bii	-	4.1	_	灰白色(5Y7/2)		外面-櫛描文。	
2037		青磁	69'é	14.0	_	_	オリーブ灰色 (2.5GY6/1)			
2038		土師器	小皿	8.5	5.5	1.6	橙色 (5YR7/6)		底部-回転ヘラキリ。	
2039		勝問田焼	椀	_	5.1	_	灰色(N5.5/1)		底部-回転イトキリ痕。内面-重ね 焼き痕。	
2040		勝間田焼	椀	_	6.0	_	灰白色 (10YR8/2)		底部-回転イトキリ痕。	
2041		勝問田焼	壶	28.0	_	_	灰色 (N6/0)		外面全体・内面口縁部-自然釉。 外面:格子日タタキ。	
2042	落ち込み2	勝問田焼	甕	_	_	_	灰色 (N5/1)		外面-灰釉。	
2043		勝間川焼	甕	_	_	_	暗灰色 (N3/1)		> 3 hwar - 25 d/s fee m	
2044		上師器?	燃?	_	13.0	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)			
2045		<u> </u>	施	9.8	-	_	灰白色 (N8/1)		和-明オリーブ灰色 (2.5GY7/1)。	
2046		白磁	碗	-	_	_	灰白色 (N8/1)		釉-灰白色 (5Y7/1)。	
2047		白磁	碗	_	_	_	灰白色 (N8/1)		釉 灰白色(10Y8/1)。貫入なし。	
2048		上師器	小皿	7.8	5.6	1.2	校色 (5YR7/6)		底部・回転ヘラキリ。	
2049		工門	羽釜	1.0	3.0	-	鈍黄橙色(10YR7/2)		然而-煤付着。	
2049	落ち込み3	備前焼	描鉢			_	灰褐色 (5YR5/2)		グトロース米13.4日。	
2051		土師器	鍋	37.6	_	_	鈍褐色 (7.5YR6/3)		内外面-煤付着。	
2052		土的認	小皿	8.8	7.0	1.3	灰白色 (7.5YR8/2)		底部-回転へラオコシ。内外面-一部煤付着。	
2053		土師器	小皿	9.2	8.2	1.7	灰白色(10YR8/2)		底部-回転ヘラキリ。	
2054	窪地4	土的課	小皿	9.6	7.5	1.6	浅黄橙色(7.5YR8/3)		底部-回転ヘラキリ後ヘラオコシ 痕。	
2055		備前焼	指鉢	_	_	_	灰褐色(7.5YR5/2)		外面-重ね焼き痕。	
2056		<b></b>	₩i	13.7	6.0	7.1	灰白色 (N7/1)		釉-オリーブ色。底部-釉剥ぎ。	
2057		土師器	m	7.8	6.1	1.4	鈍橙色 (5YR6/4)		成部-回転ヘラキリ後板目痕。	
2058		上師器	Ш	10.0	6.8	1.9	浅黄橙色(7.5YR8/4)		底部-回転ヘラキリ後ヘラオコシ 痕。	
2059		土師器	III.	15.6	10.0	1.8	浅黄橙色(7.5YR8/2.5)		底部 回転ヘラキリ痕。	
2060	窪地 5	備前焼	壺	-	-	_	灰赤色(2.5YR4/2)		MARIE I 1774 1 / 7250	
2061		備前焼	壶	_	3.8	_	灰色 (N5/1)		底部-回転イトキリ痕。	
2062		備前焼	描鉢	_			灰赤色 (75YR4/2)		外面-重ね焼き痕。	
2063		備前焼	擂鉢	_	_		鈍橙色 (5YR6/4)		7.1 pm → 12.4 eV/V € 21×0	
2064		1:師器	小皿	7.6	5.8	1.1	鈍橙色 (7.5YR7/3)		底部-回転イトキリ。	
2065		上師器	小皿	7.6	5.8	1.1	郵橙色 (7.5YR7/3) 鈍橙色 (5YR6/4)		底部-回転イトキリ。	
2066			土鍋	7.0	J.1	- 1.5			科団  料(1 ドイグ。	
	窪地6	五質土器		7.0	40	-	灰色(N6/1)		新 士 I _ プログ (2 c C V c / I )	
2067	注心り	青磁	杯	7.6	4.8	2.6	灰色 (N6.5/1)		釉-オリーブ灰色 (2.5GY5/1)。	
2068		備前焼	壶	11.8	_		灰褐色(5YR4/2)		外面-自然釉	
2069		備前焼	चीर कांक	21.0	10.5	_	暗赤褐色 (2.5YR3/2)		eh fal 3.2 (1.64) 多布	
2070		備前焼	喪	21.8	18.5	- (0.0)	鈍赤褐色 (2.5YR5/3)		内外面自然釉。	
2071	words =	土師器	<u></u>	(14.4)	(7.1)	(2.2)	灰白色 (7.5YR8/2)		底部-回転ヘラキリ。	
2072	窪地 7	上師器	鍸	_	_	-	黒褐色(10YR3.5/1)		外面-煤付着。	
2073		備前燒	拙鉢	_	_	_	赤褐色(10R4/3)		底部-ヘラオコシ。	
2074		青磁	ێ	16.1	_	_	灰白色(N7.5/1)		釉-明オリーブ色・貫入有。	
		青磁	ш	_	_	_	灰色 (N6.5/1)		釉-灰オリーブ色(10Y6/2)・貫	
2075	窪地8	H 10%	11111				7.00 (10.0) 17		入有。	

掲載				Π	測値(cn	1)				
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	高器	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備 考
2077		上師29	鍋	_	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)			
2078	窪地8	瀬戸	香炉?	_	-	-	浅黄橙色(10YR8/3)		底部-回転イトキリ狼。外面- 部 鉄釉。	
2079	窪地10	1:師25	小皿	9.0	6.8	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)		底部-回転ヘラキリ。	
2080		瓦質上器	鍋	_	_	_	暗灰色 (N3/0)		外面-煤付着。	旧C2E区出土
2081		土師器	小皿	8.3	6.3	1.6	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形	底部-回転へラキリ。内外面-煤付 着。	山87   本      :
2082		瓦質上器	鍋	34.1	_	_	灰色(N6/1)		外而-煤付着。	IRB 5 区出土
2083		上師器	鍋	27.2	_	_	灰黄褐色(10YR6/3)		外面-煤付着。	旧B7区出土
2084		瓦器	鍋	30.0	_	_	灰黄褐色(10YR6/2)		外面-煤付着	[□B7区[[-]:
2085		土師器	鍋	30.1	_	_	灰色 (5Y5/1)		外面-煤付着	ⅡB7区出上
2086		上師器	鍋	37.1	_	_	灰黄褐色(10YR5/2)		内外面-煤付着。	IRB7区出土
2087		勝間田焼	ਅਜਿੱ	28.9	_	_	灰色 (N6/0)		内外面-自然釉。	旧B7区出土
2088		勝間田焼	壺	_	14.1	1	黑色 (N2/0)			□B7区出土
2089		1:師25	小皿	8.3	6.8	1.2	鈍橙色(7.5YR7/4)			IRC1区出上
2090		上師器	小皿	7.2	5.4	1.5	浅黄色(2.5Y7/4)			旧C1区出土
2091		土師器	小皿	6.4	5.4	1.0	灰黄褐色(10YR6/2)			旧B7区出土
2092		七師器	小皿	7.6	6.1	1.4	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部-回転イトキリ。	IIB7区出上
2093		上師器	小皿	7.2	5.7	1.3	鈍橙色(7.5YR6/4)		底部-回転イトキリ。	IRB7区出土
2094		上師器	小皿	8.2	6.0	1.5	灰白色(2.5Y7/1)		底部-回転ヘラキリ?	旧B7区出土
2095		土師器	小皿	7.9	6.7	1.1	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-回転イトキリ。	∐B7⊠/   I:
2096		土師器	小皿	7.1	5.5	1.4	鈍橙色 (7.5YR7/4)		底部-回転イトキリ。	ⅢB7区出上
2097		上師器	小皿	8.3	5.8	1.5	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転ヘラキリ。	IHB7区出土
2098		土師器	椀	_	_	_	鈍橙色(7.5YR6/4)			旧87区出土
2099		上師器	椀	13.0	_	_	鈍橙色 (7.5YR7/4)			HB7区出土
2100		土師器	₩i	12.7	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			旧B7区出土
2101		土師器	極	10.7			鈍黄橙色(10YR7/4)			ⅡB7区出上
2102		上師器	椀	11.7	_	_	鈍橙色(7.5YR7/3)			IRB7区出土
2103		上師器	小皿	7.5	4.4	2.1	鈍橙色 (7.5YR6/4)	完形復元	底部-回転ヘラキリ。	旧B7区出土
2104		土師器	小皿	9.1	7.9	1.3	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転ヘラキリ?	□B7区出土:
2105	柏穴	土師器	杯	11.0	4.9	4.0	鈍橙色(7.5YR6/4)	完形復元	底部-回転ヘラキリ?	ⅡB7区出上
2106		上師器	杯	10.2	5.3	3.6	鈍棕色(7.5YR6/4)	完形復元	底部 回転イトキリ。外面 全体 煤?付着。	旧B7区出土
2107		土師器	小皿	8.0	6.6	1.4	浅黄橙色(10YR8/4)			ILIC 2 EKATA I:
2108		上師器	杯	_	8.0	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			IIIC2E区出上
2109		上師器	杯	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)			IEC1区出土
2110		須恵器	杯	13.0	8.8	_	灰白色(10YR8/2)		底部-回転ヘラキリ?	個C1区出土
2111		土師器	杯	13.3	8.7	3.6	鈍黄橙色(10YR7/3)		底部-回転イトキリ?	ⅡB7区出上
2112		上師器	杯	12.1	7.4	3.2	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-回転ヘラキリ後ナデ。	IRB7区出土
2113		上師器	杯	13.0	8.8	3.8	鈍黄松色(10YR7/2)	完形復元	底部-回転ヘラキリ後ナデ。	旧B7区出土
2114		土師器	杯	12.1	8.1	4.2	鈍黄橙色(10YR7/2)	完形	底部 回転ヘラキリ?後板目?	∐B7 ≤/  +
2115		七師器	杯	12.1	8.1	3.9	灰白色 (2.5Y8/2)	完形	底部-回転ヘラキリ?	ⅡB7区出上
2116		上師器	杯	13.7	9.4	3.3	灰黄色(2.5Y7/2)			IRB7区出土
2117		白磁	Rhie	-	_	_	灰白色(5Y8/1)		釉-灰白色・ガラス質・貫人なし	IBB7区出土
2118		勝間田焼	悪	_	_	_	灰色 (7.5Y6/1)		******	□B7区出土
2119		l:師器	鍋	_	_	_	鈍黄橙色(10YR7/3)		外面-煤付着。	IB7区出上
2120		上師器	小皿	8.3	5.4	1.4	浅黄橙色(7.5YR8/4)		底部-回転ヘラキリ痕。	旧F3S出土
2121		土師器	小皿	7.7	5.6	1.5	鈍橙色 (7.5YR6/3)		底部 回転ヘラキリ痕。	EF3S/  +
2122		土師器	小皿	7.9	5.8	2.0	橙色 (5YR7/6)		成部-回転ヘラキリ痕。	IF3S出上
2123		上師器	小皿	_	5.2	1.7	鈍橙色 (5YR6/4)		底部-回転ヘラキリ痕。	IFF3S出土
2124		土師器	小皿	7.4	5.4	1.3	鈍機色 (7.5YR7/3)		底部・回転ペラキリ。	旧F3S出土
2125		土師器	小皿	6.8	5.8	1.5	鈍橙色 (5YR7/4)	完形	底部-回転ペラキリ後板口痕。内 面底 煤付着。	IIIF3SIII 1.
2126		上師器	小皿	6.6	1.8	1.3	淡橙色(5YR8/4)		底部 回転ヘラキリ狼。内面 煤付	旧F3S出土
		1	and a						者。	
2127		白磁	施	15.5	_	_	灰白色(10YR7/1)		釉-灰オリーブ色・貫入僅か有。	IFF3S出土

掲載	掲載遺構	種別	器種	î	測値(cn	1)	<b>色</b> 調	状態	形態・手法の特徴など	備考
番号	14/1/08/14	1200	1117122	口径	底径	器高	C 1049	17 (3428	112-514 BV-9-C	IVHS 17
2128		備前焼	擂鉢	_	_	_	鈍赤褐色(2.5YR5/3)			川F3S出上
2129		備前焼	拙鉢	_	_	_	鈍赤褐色 (2,5YR5/3)		内外面-自然釉。	旧F3S出土
2130	杜穴	備前焼	擂鉢	_	_	_	赤褐色(10R5/3)		内外面-自然釉ゴマ状。	[LF3S][[]:
2131	122/	備前焼	擂鉢	_	_	_	赤褐色(10YR4/3)		外而-自然釉。	I用F3S出土
2132		備前焼	拙鉢	_	_	_	灰褐色(7.5YR4/2)			旧F35川士
2133		勝間川焼	鈋	33.8			灰白色(2.5Y7/1)			HIF3S出上
2134		上師器	杯	8.1	3.9	1.4	鈍黄橙色(10YR7/3)	完形	底部-回転ヘラキリ痕。	
2135		土師器	小皿	7.7	6.1	1.5	鈍黄橙色(10YR7/3)			
2136		十.色度器	小皿	8.7	7.1	1.5	灰黄褐色(10YR6/2)			
2137		上師器	小皿	7.7	6.1	1.7	鈍黄橙色(10YR7/2)		底部-ヘラキリ?	
2138		土飾器	小皿	8.5	6.7	1.8	鈍橙色(5YR7/4)		底部-回転ヘラオコシ。	
2139		上師器	小皿	7.3	6.3	1.1	鈍橙色(7.5YR7/3)		底部-回転イトキリ?	
2140		土師器	小皿	7.6	5.7	1.3	鈍黄橙色(10YR6/3)		底部-回転イトリ後ナデ?	
2141		土的課	小皿	8.6	6.8	1.3	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面-回転ヘラキリ。	
2142		上師器	小皿	8.2	4.2	1.6	灰色(N6/ )		底部-回転イトキリ。	
2143		土師器	小皿	7.8	5.5	1.2	鈍橙色(7.5YR6/4)		外面-回転ヘラキリ。	
2144		上師器	小皿	8.5	5.6	1.7	橙色 (2.5YR6/6)		底部-板口痕。	
2145		土師器	小皿	8.4	6.6	1.9	鈍橙色 (5YR7/4)		底部-回転ヘラキリ。	
2146		土的器	Ш	8.6	7.0	1.6	鈍黄橙色(10YR7/4)			
2147		上師器	小皿	7.8	6.4	1.5	浅黄橙色(7.5YR8/3)			
2148		土師器	小皿	7.2	4.5	1.4	橙色 (2.5YR6/6)		底部 回転ヘラキリ後板目痕。	
2149		1:師器	小皿	8.1	6.8	1.3	鈍橙色(7.5YR7/4)			
2150		上師器	小皿	8.2	5.8	1.2	鈍橙色 (7.5YR7/4)			
2151		上師器	IIII.	11.5	7.5	2.3	鈍黄橙色(10YR6/3)			
2152		土師器	IIII.	9.8	7.9	1.4	灰黄色(2.5Y6/2)		底部-回転イトキリ。	
2153		1:6028	Ш	10.8	6.8	2.0	鈍橙色 (5YR7/4)	ほぼ完形	底部-回転ヘラキリ痕。	
2154		土師器	IIIL	13,8	6,0	2,1	橙色 (5YR7/6)		外面-回転イトキリ。	
2155		土的器	杯	13.5	7.5	4.0	浅黄橙色(7.5YR8/4)	完形	底部-回転ヘラキリ。	
2156		上師器	杯	11.2	8.1	3.5	明褐色 (7.5YR5/6)	7 - 7 - 7		
2157	遺構に伴わない	土師器	杯	12.4	8.7	3.8	浅黄橙色(7.5YR8/3)	完形	底部 回転ヘラキリ・板目痕。	
2158	遺物	+:0022	杯	11.9	8.6	3.5	灰白色(10YR8/2)	ほぼ完形	底部-回転ヘラキリ痕。	
2159		上師器	杯	12,6	7,8	4,2	鈍橙色 (7.5YR7/4)	10-10-7 0.7	底部-回転ヘラキリ痕。	
2160		土飾器	杯	11.7	8.5	3.8	鈍黄橙色(10YR6/1)	ほぼ完形		
2161		上師器	杯	11.9	7.9	4.0	灰黄褐色(10YR4/2)		底部-回転ヘラキリ。	
2162		土師器	杯	11.6	8.8	4.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)	完形	底部-回転ヘラキリ。	
2163		瓦質土器?	鈋	_	_	_	黄灰色(2.5Y5/1)	70,15	EXILITE 7 7 7 0	
2164		上師器	鉢	_	_	_	灰白色(10YR8/2)			
2165		土師器	鍋	28.7	_	_	果色(N2/1)			
2166		瓦質上器	鍋	31.2	_	_	灰色 (5Y6/1)		, pass rogery self≎	+
2167		瓦質	羽後	23.1	_	_	呼灰色(N3/1)			
2168		瓦質	羽釜	25.2			灰色 (7.5Y6/1)			
2169		瓦質上器	細	30.0	_	_	黄灰色(2.5Y4/1)			+
2170		土師器	鍋	33.0	_	_	頻灰色 (2.514/1) 鈍橙色 (7.5YR7/3)		r 37 門町 MKTS 相 c	
2170		勝問田焼	小皿	- 33.0	_	_	灰色 (N6/1)		底部回転イトキリ。	+
2172		勝問田焼	椀	14.8	5.6	5,7	黄灰色(2.5Y6/1)		底部回転イトキリ。	
2172		勝間川焼	柳		5.0	6.1	販色 (N5/1)		成部回転イトキリ? 成部-回転イトキリ?	
2173		勝問田焼	椀	15.1 14.6	5.0	- 0.1	灰色 (N7/1)		PSAPEPITS ( にギリ (	
2174		勝問田焼	柳		_		灰色(N6/1)			
				15.9		_			<b>対電 同応プレキロが</b>	+
2176		勝間川焼	椀	-	7.0	_	鈍黄橙色(10YR7/4)		外面・回転イトキリ痕。	
2177		勝問田焼	(bii	16.6	_	_	灰色 (X6/1)		外面-自然釉(暗灰色)	
2178		勝問川焼	献	15.4	_	_	灰色 (5Y6/1)			
2179		勝問田焼	煮		_	_	灰色 (N5.5/1)			-
2180		勝問田焼	鉢	27.2	_	-	灰色 (X6/1)			
2181		瓦質上器	壶	18.2	_	12.1	灰白色 (N7/)			

掲載	相本、本体	460u	BB4T	þ	測値(ca	n)	∃π	M CHIS	TC部 工計 小連線 と 17	LU	-tz
番号	掲載遺構	種別	器種	口径	底径	器高	色 調	状態	形態・手法の特徴など	備	考
2182		東播系領 恵器	鉢	_	_	_	灰色 (N6/1)				
2183		東播系須 恵器	鉢	24.3	_	-	灰色 (N4/)				
2184		東播系須 恵器	鉢	27.4	_	_	灰色(5Y6/1)				
2185		勝間田焼	套	26.6	_	_	黄灰色(2.5Y6/1)				
2186		上師器	IIIL	8.2	_	_	橙色(2.5YR6.5/6)		底部-回転ヘラキリ。		
2187		上師器	ш	_	_	_	橙色(2.5YR6.5/6)		底部-回転ヘラキリ痕。		
2188		土師器	m	_	5.3	_	赤橙色(10R6/8)		底部-回転イトキリ痕。		
2189		備前燒	擂鉢	26.1	_	_	灰褐色(5YR4/2)				
2190		備前焼	拙鉢	28.6	_	_	灰色(5Y4/1)				
2191		備前燒	推針	_	_	_	鈍赤褐色(5YR5/3)		外面-自然釉。		
2192		備前焼	擂鉢	_	_	_	灰白色(5Y8/1)				
2193		備前燒	擂鉢	_	_	_	黄灰色(2.5Y6/1)				
2194		備前焼	擂鉢				灰赤色(2.5YR4/2)		外而-自然釉・重ね焼き痕胎上付 着。		
2195		備前焼	擂鉢	_	_	_	灰色(N6.5/1)		外面-重ね焼き痕。		
2196		備前燒	擂鉢	_	_	_	鈍赤褐色(7.5YR4/3)		外面-重ね焼き痕。		
2197		備前燒	拙鉢	_	_	_	鈍橙色(5YR7/3)				
2198		備前燒	小壶	7.0	7.5	8.2	灰褐色(5YR5/2)		底部-回転イトキリ痕。		
2199		備前焼	製	33.7	_	_	灰色 (N4/ )				
2200		備前焼	擂鉢	30.0	12.0	_	灰赤色(10R5/2)				
2201		<b>肯磁</b>	IIIL	10.3	5.6	1.9	灰色(7.5Y6/1)				
2202		青磁	Ш	10.1	3.9	2.1	オリープ灰色(5GY6/1)				
2203		青磁	m	11.3	4.7	2.3	オリーブ灰色 (2.5GY)				
2204	遺構に伴わない	青磁	施	_	_	_	オリーブ灰色(10Y6/2)		外面-鎬蓮介文。		
2205	遺物	青磁	椀	15.6	_	_	灰白色 (N8/1)		釉-透明・貫入有・灰オリーブ色。		
2206		青磁	₽́ė	17.4	_	_	灰オリーブ色 (7.5Y4/2)				
2207		<b>-                </b>	Rhé	13.2	_	_	オリーブ灰色 (2.5GY6/1)				
2208		青磁	施	12.6	_	_	緑灰色(10GY6/1)				
2209		青磁	碗	14.6	_	_	明緑灰色(10GY7/1)				
2210		青磁	施	15.2	_	_	緑灰(7.5GY6/1)				
2212		白磁	施	10.7			灰白色 (5GY8/1) 灰白色 (2.5Y8/1)		釉-灰釉・貫入なし。		
2213		白磁	施	14.0			灰白色(5Y7/2)		表面に施釉。		
2214		白磁	碗	15.3			灰オリーブ色 (5Y6/2)		3文皿で 7世間。		
2215		山北	₹8/é	16.2	_	_	灰白色 (7.5GY7/2)				
2216		白磁	firie	17.5	_	_	灰白色(10Y8/1)				
2217		白磁	施	-	_	_	灰白色 (N8/1)				
2218		青磁	碗				灰白色 (2.5Y7/1)		釉-オリーブ色 (5Y5/2)・貫入有。		
2219		<b>青磁</b>	Tible	13.4	_	_	灰オリーブ色 (7.5Y6/2)				
2220		青磁	fièrie	15.6	_	_	緑灰(10GY6/1)				
2221		青磁	施	_	6.0	_	灰オリーブ色 (7.5Y5/2)				
2222		白機	施	_	-	_	灰白色(N8/1)		釉-透明釉・ガラス質・灰白色 (10Y8/1)・貫入なし。		
2223		白磁	filiti	17.8	_	_	灰白色(5Y7/2)				
2224		白磁	施	_	_	_	灰白色 (N8/1)		釉-透明ガラス質釉・貫入なし。		
2225		白磁	施	_	5.5	_	灰白色(N7.5/1)		釉-透明釉・ガラス質・オリーブ 灰色 (2.5GY6/1)。底部 釉剥ぎ。		
2226		磁器	高台施	_	7.0	_	灰白色(N8/1)		釉-半透明釉貫人なし。		
2227		青磁	施	_	4.8	_	緑灰色 (5G6/1)				
2228		青磁	壶?	_	11.0	_	明緑灰色 (7.5GY7/1)				
2229		瀬戸	菊皿	10.5	5,3	2.4	浅黄橙色(10YR8/3)				

## 土製品一覧表

1	掲載 番号	掲載遺構名	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	色 調	時 期	備考
*** ***	C 1	竪穴住居 7	紡錘車	3.85	3.70	0.50	10	鈍橙色		
日本日本	C 2		紡》車	4.50	4.80	0.70	18	鈍黄橙色		
15.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5   1.5	С3		紡ご車	4.35	4.40	0,60	14	枪色		
***  ***  ***  ***  ***  ***  ***  *	C 4	竪穴住屋 9	紡錘車	7.10	3.60	0.40	15	鈍橙色		欠損
10	C 5	327 (IZ/II 3		3.70	3.95	0.85	17			
68	$\overline{}$									***
*** *** *** *** *** *** *** *** *** *					2.90					欠損
10	-	竪穴住居10								
1	-									
1893年	$\overline{}$									
13	$\overline{}$									( 100
1984年   2.10	$\overline{}$									
15   15   15   15   15   15   15   15	-									
お野田   4.00   3.75   0.99   9   30歳色   7   20歳色   7	$\vdash$									<u>火損</u>
177	-									
	$\vdash$									
日子										
	$\overline{}$									
	$\overline{}$									PS
C22         軟欠目信5         砂質車         4.20         4.20         0.55         12         改質型	-									
	$\vdash$	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -								/\BM
佐田		W. VITILITY								
大学    10   10   10   10   10   10   10	$\overline{}$									
お達出   5.00	-									欠捐
C27	$\overline{}$									7XB3
	$\overline{}$							-		
(元分										欠損
	$\overline{}$									
	$\vdash$									
	C 31		紡錘車		4.90	0.40	9			
(C 34	C 32		紡錘車	3.90	3.60	0.65	11	淡黄色	- 弥生中期	
公元   大学   大学   大学   大学   大学   大学   大学   大	C 33		紡錘車	5,00	4,50	0,65	16	灰褐色		
大学	C 34		紡錘中	3.80	4.00	1.00	17	褐灰色		P6, 土器底部の再利用
C37	C 35		紡錘車	3.40	3.60	0.60	9	鈍黄橙色		
C38	C 36	竪穴住居18	紡錘車	3.40	3.70	0.30	5	鈍黄橙色		
C39   お顔車   4.60   5.20   0.35   12   純黄柏色   欠損   欠損   欠損   欠損   欠損   欠損   欠損   欠	C 37		紡錘車	5.00	5.20	0.50	12	淡黄色		
C 10         新雄車         5.40         3.10         0.70         13         鈍黄椎色         欠根         欠相	C 38		紡錘車	5.10	4.70	0.60	18	浅黄色		
C41     紡錘甲     5.20     2.40     0.55     9     浅黄色       C42     紡錘甲     3.30     3.50     0.70     9     淡黄色       C43     紡子車     5.00     4.60     0.60     13     浅黄色       C44     紡錘車     5.00     2.40     0.70     10     浅黄色       C44     紡錘車     4.20     2.30     0.80     10     浅黄色       C47     紡錘車     2.15     2.40     0.55     3     浅黄色       C49     紡錘車     2.80     1.50     0.40     2     淡黄色       C50     紡錘車     2.80     1.50     0.40     2     淡黄色       C50     紡錘車     2.80     1.50     0.40     2     淡黄色       C50     紡錘車     2.20     3.40     0.40     7     浅黄橙色       C51     紡錘車     2.20     3.40     0.40     7     浅黄橙色       C52     紡錘車     4.70     4.90     0.60     18     純酸肉樹色       C55     紡錘車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色       C56     紡錘車     4.10     3.00     0.60     7     房灰色       C57     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     房灰色	C 39		紡錘車	4.60	5.20	0.35	12	鈍黄橙色		
C 42       新鮮甲       3.30       3.50       0.70       9       淡黄色       欠損	C 40		紡錘車	5.40	3.10	0.70	13	鈍黄橙色		
C43     約 車     5.00     4.60     0.60     13     浅質性色       C44     約 車     5.00     2.40     0.70     10     浅黄色       C45     粉錘車     4.20     2.30     0.80     10     浅黄色       C47     粉錘車     2.20     4.60     0.55     3     浅黄色       C48     粉錘車     2.80     1.30     0.40     2     淡黄色       C59     粉錘車     2.50     3.80     0.50     4     灰黄色       C50     粉錘車     3.20     4.00     0.40     7     浅黄橙色       C51     粉錘車     2.20     3.40     0.45     5     浅黄色       C53     粉錘車     2.20     4.50     0.40     7     浅黄橙色       C54     粉錘車     4.70     4.90     0.60     18     郵送機管       C55     粉錘車     4.10     3.30     0.60     17     灰褐色       C56     粉錘車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C57     粉錘車     3.20     3.60     0.60     7     桐灰色       C59     粉錘車     3.20     3.80     0.60     7     桐灰色       C59     粉錘車     3.20     3.60     0.60     7     桐灰色	C 41		紡錘車	5.20	2.40	0.55	9	浅黄色		欠損
C 44         紡士車         5.00         2.40         0.70         10         浅黄色         欠担           C 45         紡錘車         4.20         2.30         0.80         10         浅黄色         欠担           C 46         紡錘車         2.20         4.80         0.50         6         浅黄色         欠損           C 47         6         統錘車         2.15         2.40         0.55         3         浅黄色         欠損           C 49         紡錘車         2.50         3.80         0.50         4         灰黄色         欠損           C 50         紡錘車         2.50         3.80         0.50         4         灰黄色         欠損           C 51         紡錘車         2.20         4.50         0.40         7         浅黄橙色         欠損           C 52         紡錘車         2.20         4.50         0.40         7         浅黄橙色         欠損           C 52         紡錘車         4.70         4.90         0.60         18         純黄色         欠損           C 54         紡錘車         4.10         3.30         0.60         7         楊灰色         欠損           C 55         紡錘車         3.20         3.80         0.80         13	C 42		紡錘車	3.30	3.50	0.70	9	淡黄色		
C 45     お鎌車     4.20     2.30     0.80     10     浅黄色     欠損       C 46     お鎌車     2.20     4.60     0.50     6     浅黄色     欠損       C 47     お鎌車     2.15     2.40     0.55     3     浅黄色     欠損       C 48     公額車     2.80     1.30     0.40     2     淡黄色     欠損       C 50     約鍾車     2.50     3.80     0.50     4     灰黄色       C 51     約鍾車     3.20     4.00     0.40     7     浅黄橙色       C 51     お鎌車     2.20     4.50     0.40     7     浅黄橙色       C 52     お鈴車     4.70     4.90     0.60     18     美黄食色       C 54     お鈴車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色       C 55     お鈴車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色       C 57     お鈴車     3.20     3.60     0.60     7     桐灰色       C 59     お鈴車     3.20     3.60     0.60     7     明黄老色       C 59     お鈴車     3.20     3.60     0.60     7     明黄老色       C 60     野童車     3.70     3.70     0.50     8     新養白色       C 61     野次住居     新鮮車										
C 46       紡錘車       2.20       4.60       0.50       6       浅黄色       欠損         C 47       紡錘車       2.15       2.40       0.55       3       浅黄色       欠損         C 48       C 49       紡錘車       2.80       1.30       0.40       2       淡黄色       欠損         C 50       紡錘車       3.20       4.00       0.40       7       浅黄橙色       欠損         C 51       紡錘車       2.20       3.40       0.45       5       浅黄色       欠損         C 52       紡錘車       4.70       4.90       0.60       18       鈍黄栓色       欠損         C 52       紡錘車       3.90       4.10       0.65       17       灰褐色       欠損         C 55       紡錘車       3.90       4.10       0.65       17       灰褐色       欠損         C 55       紡錘車       3.20       3.80       0.80       13       浅黄色       欠損         C 57       紡錘車       3.20       3.60       0.60       7       调查       欠損         C 58       紡錘車       3.20       3.60       0.60       7       明黃色       欠損         C 59       紡錘車       3.20       3.60       0.60 <t< td=""><td><math>\vdash</math></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></t<>	$\vdash$									
C 47     約録車     2.15     2.40     0.55     3     浅黄色     欠損       C 48     お鐘車     2.80     1.30     0.40     2     淡黄色     欠損       C 50     粉鐘車     2.50     3.80     0.50     4     灰黄色     欠損       C 50     粉鐘車     3.20     4.00     0.40     7     浅黄橙色     欠損       C 51     粉鐘車     2.20     3.40     0.45     5     浅黄色     欠損       C 52     粉鐘車     4.70     4.90     0.60     18     動量軟栓色       C 53     粉鐘車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色       C 55     粉鐘車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色       C 57     粉鐘車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C 57     粉鐘車     3.20     3.60     0.60     7     場質色       C 59     粉鐘車     3.70     3.70     0.50     8     郵貨柜       C 60     粉鐘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色       C 62     土場94     粉錘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     外生神       C 63     水田1     分銅形上製品     5.00     6.30     1.30     43     郵貨費を										
C 48     新鍾車     2.80     1.30     0.40     2     淡黄色       C 49     粉鍾車     2.50     3.80     0.50     4     灰黄色       C 50     粉鍾車     3.20     4.00     0.40     7     浅黄色     欠損       C 51     粉鍾車     2.20     3.40     0.45     5     浅黄色     欠損       C 52     粉鍾車     4.70     4.90     0.60     18     郵費整色     欠損       C 53     粉鍾車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色     欠損       C 55     粉鍾車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色     欠損       C 55     粉鍾車     4.10     3.30     0.60     7     楊灰色       C 57     粉鍾車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色     欠損       C 58     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     明黃褐色     欠損       C 59     紡錘車     3.70     3.70     0.50     8     延黄色     欠損       C 60     粉鍾車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     欠損       C 62     土壤94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄色     次生       C 63     水川1     分銅形主     4.40     4.2	$\overline{}$									
C 49     整次作居19     紡錘車     2.50     3.80     0.50     4     灰黄色     欠損       C 50     紡錘車     3.20     4.00     0.40     7     沒黃橙色     欠損       C 52     紡錘車     2.20     3.40     0.45     5     浅黄色     欠損       C 52     紡錘車     4.70     4.90     0.60     18     鈍黄橙色     欠損       C 53     紡錘車     4.10     3.30     0.60     11     沒黃色     欠損       C 55     紡錘車     4.10     3.30     0.60     11     沒黃色     欠損       C 57     紡錘車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C 59     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     明黃褐色       C 59     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     明黃褐色       C 60     紡錘車     3.20     3.70     0.50     8     鈍黃樹色       C 61     緊穴住居20     紡錘車     3.20     5.65     0.40     14     沒黃色       C 62     土壌94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     沒黃橙色     外生後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 64     満3     納鈍車     5.20     5.10     0.80     29     灰黃褐色     小生1期										
C 50   新鍾車   3.20   4.00   0.40   7   浅黄橙色   次担   次担   次担   次担   次担   次担   次担   次	-	EV/2/A Lisa								
C51     紡錘車     2.20     3.40     0.45     5     浅黄色       C52     紡錘車     2.20     4.50     0.40     7     浅黄橙色       C53     紡錘車     4.70     4.90     0.60     18     延黄橙色       C55     紡錘車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色       C55     紡錘車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色       C56     紡錘車     2.90     3.40     0.60     7     褐灰色       C57     紡錘車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C59     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     明黃褐色       C59     紡錘車     3.70     3.70     0.50     8     鈍黃檢色       C60     紡錘車     3.70     3.70     0.50     8     鈍黃檢色       C61     緊穴住居20     紡錘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     大根       C62     土壤94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C64     満3     統錘車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥牛後期     上半久損。中期に遡る可能性あり	$\overline{}$	<b>227711月19</b>								
C 52       約錘車       2.20       4.50       0.40       7       浅黄橙色       欠損         C 53       紡錘車       4.70       4.90       0.60       18       純黄橙色       欠損         C 54       紡錘車       3.90       4.10       0.65       17       灰褐色       欠損         C 55       紡錘車       4.10       3.30       0.60       7       褐灰色       欠損         C 56       紡錘車       2.90       3.40       0.60       7       褐灰色       欠損         C 57       紡錘車       3.20       3.80       0.80       13       浅黄色       欠損         C 59       紡錘車       3.20       3.60       0.60       7       明黃褐色       欠損         C 60       紡錘車       3.70       3.70       0.50       8       鈍黃樹色       欠損         C 61       緊穴住居20       紡錘車       3.20       5.65       0.40       14       浅黄色       欠損         C 62       土壤94       紡錘車       4.40       4.20       0.30       11       浅黄橙色       弥生後期       上半欠損。中期に遡る可能性あり         C 64       満出3       参鍾車       5.20       5.10       0.80       29       灰黄褐色       弥生後期       上半久損。中期に遡る可能性あり	$\vdash$									
C 53       紡錘車       4.70       4.90       0.60       18       鈍黄栓色         C 54       紡錘車       3.90       4.10       0.65       17       灰褐色         C 55       紡錘車       4.10       3.30       0.60       11       浅黄色       欠損         C 56       紡錘車       2.90       3.40       0.60       7       楊灰色       次損         C 57       紡錘車       3.20       3.80       0.80       13       浅黄色       欠損         C 59       紡錘車       3.20       3.60       0.60       7       明黃褐色       欠損         C 60       紡錘車       3.70       3.70       0.50       8       鈍黃檢色       欠損         C 61       緊穴住居20       紡錘車       3.20       5.65       0.40       14       浅黄色       欠損         C 62       土壤94       紡錘車       4.40       4.20       0.30       11       浅黄橙色       弥牛後期       上半欠損。中期に遡る可能性あり         C 64       満出3       統錘車       5.20       5.10       0.80       29       灰黄褐色       弥牛後期       上半久損。中期に遡る可能性あり	$\vdash$									
C 54     統師車     3.90     4.10     0.65     17     灰褐色       C 55     C 56     統庫車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色     欠損       C 57     C 58     統庫車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C 59     統庫車     3.20     3.60     0.60     7     明黃褐色       C 60     粉錘車     3.70     3.70     0.50     8     鈍黃樹色       C 61     野水住居20     紡錘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     大根       C 62     土壤94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 63     水川1     分銅形 上製品     5.00     6.30     1.30     43     鈍黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 64     満別3     統領     野女樹色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり										八1层
C 55     紡錘車     4.10     3.30     0.60     11     浅黄色     欠損       C 56     紡錘車     2.90     3.40     0.60     7     褐灰色       C 57     紡錘車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C 59     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     明黃褐色     欠損       C 59     紡錘車     4.40     4.90     0.65     22     淡黄色       C 60     粉錘車     3.70     3.70     0.50     8     鉱黃粉色       C 61     竪穴住居20     紡錘車     3.20     5.65     0.40     14     淡黄色     欠損       C 62     土壌94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 63     水川1     分銅形1:製品     5.00     6.30     1.30     43     純黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 64     満13     新鈍車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥生心期	$\overline{}$									
C 56     紡錘車     2.90     3.40     0.60     7     褐灰色       C 57     放棄車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C 59     放棄車     3.20     3.60     0.60     7     明黃褐色       C 60     粉錘車     4.40     4.90     0.65     22     淡黄色       C 61     野穴住居20     粉錘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     大根       C 62     土壌94     粉錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 63     水川1     分銅形1:製品     5.00     6.30     1.30     43     純黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 64     満13     新鈍車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥生心期	$\vdash$									友捐
C 57     紡錘車     3.20     3.80     0.80     13     浅黄色       C 58     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     明貴褐色     欠損       C 59     紡錘車     4.40     4.90     0.65     22     淡黄色       C 60     紡錘車     3.70     3.70     0.50     8     鈍黃樹色       C 61     竪穴住居20     紡錘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     欠根       C 62     土壌94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 63     水川1     分銅形1:製品     5.00     6.30     1.30     43     鈍黄橙色     弥牛後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 64     満13     統錘車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥生心期										NB4
C 58     紡錘車     3.20     3.60     0.60     7     明貴褐色     欠損       C 59     紡錘車     4.40     4.90     0.65     22     淡黄色       C 60     紡錘車     3.70     3.70     0.50     8     鈍英酸色       C 61     竪穴住居20     紡錘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     欠根       C 62     土壌94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色     弥生後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 63     水川1     分銅形上製品     5.00     6.30     1.30     43     鈍黄橙色     弥生後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 64     満13     紡錘車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥生心期	$\overline{}$									
C59     紡錘車     4.40     4.90     0.65     22     淡黄色       C60     紡錘車     3.70     3.70     0.50     8     純英酸色       C61     竪穴住居20     紡錘車     3.20     5.65     0.40     14     浅黄色     欠損       C62     土壌94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色     次生優色       C63     水川1     分銅形上製品     5.00     6.30     1.30     43     純黄橙色     弥生後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C64     満13     紡錘車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥生月期										
C60         紡錘車         3.70         3.70         0.50         8         鈍黄枪色           C61         竪穴住居20         紡錘車         3.20         5.65         0.40         14         浅黄色         欠損           C62         土壌94         紡錘車         4.40         4.20         0.30         11         浅黄橙色         次生後期           C63         水川1         分銅形上製品         5.00         6.30         1.30         43         鈍黄橙色         弥生後期         上半欠損。中期に遡る可能性あり           C64         満13         紡錘車         5.20         5.10         0.80         29         灰質褐色         弥生月期	$\vdash$									7.025
C61         竪穴住居20         紡錘車         3.20         5.65         0.40         14         浅黄色         欠担           C62         土壌94         紡錘車         4.40         4.20         0.30         11         浅黄橙色           C63         水川1         分銅形上製品         5.00         6.30         1.30         43         鈍黄橙色         弥牛後期         上半欠損。中期に遡る可能性あり           C64         満13         紡錘車         5.20         5.10         0.80         29         灰黄褐色         弥生1期	$\overline{}$									
C 62     土壌94     紡錘車     4.40     4.20     0.30     11     浅黄橙色       C 63     水川1     分銅形上製品     5.00     6.30     1.30     43     鈍黄橙色     弥生後期     上半矢損。中期に遡る可能性あり       C 64     満13     紡錘車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥生月期	_	竪穴住居20								
C 63     水川1     分銅形上製品     5.00     6.30     1.30     43     鈍黄橙色     弥生後期     上半欠損。中期に遡る可能性あり       C 64     満13     紡錘車     5.20     5.10     0.80     29     灰黄褐色     弥生印期	$\vdash$									
C 64         満13         紡錘車         5.20         5.10         0.80         29         灰黄褐色         弥生中期									弥生後期	上半欠損。中期に遡る可能性あり
#13										
	C 65	満13	紡錘車	3.80	4.00	0.80	15	浅黄橙色		

## 土製品一覧表

掲載 番号	掲載遺構名	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	色 調	時 期	備
C 66		紡錘車	3.70	3.80	0.70	11	鈍黄橙色		欠損
C 67		紡錘車	3.20	3.20	0.50	6	淡黄色	- - 弥生中期	
C 68	溝13	紡錘車	3.90	3.90	0.55	8	淡黄色	~後期	
C 69		紡錘車	3.60	3.90	0.40	8	鈍黄橙色		
C 70	溝14·15	紡錘車	1.90	3.50	0.45	5	黄灰色		欠損
C 71		紡錘車	4.62	4.36	0.50	13	灰黄褐色		
C 72	海岸に使むをいる場所	紡錘車	4.30	4,10	0.50	11	橙色	弥生中期	
C 73	遺構に伴わない遺物	紡錘車	2,40	3,10	0.35	2	橙色		欠損
C 74		紡錘車	2,85	2.70	0.45	4	鈍橙色		
C 75		土.馬	5.40	2.70	2.10	28.90	橙色		麗?
C 76	竪穴住居35	土馬片?	3.10	1.80	1.10	4.70	橙色	古墳	黨?
C 77		鞴の羽口	9.00	6.10	3.10	190.00	思褐色~灰色	1194	
C 78	窪地3	船形上製品?	6.10	2.95	_	26.15	灰黄色		
C 79	竪穴住居43	鞴の羽口	12.80	8.40	2.80	276.00	黒褐色~粉色		
C 80	掃立柱建物40	土馬	3.82	2.02	2.28	16.20			P1出土
C 81	掘立柱建物51	鞴の羽口	8.88	8.25	3.32	199.40	灰~橙色		P3出土:
C 82		陶馬	21.10	6.45	_	535.00	灰色		
C 83		上馬	7.10	6.00	2.70	112.00	鈍黄橙色		頭頸部
C 84		上馬	7.90	5.40	5.10	183.00	- 鈍黄橙色		胴部
C 85	ittan.	土馬	5.70	3.10	3.05	56.00	浅黄橙色		胴部
C 86	溝39	土馬	4.10	5.70	1.80	30.00	橙色		殿?
C 87		十.馬	1.65	2.20	2.00	4.00	鈍橙色 >>>以1546/42		級? 家?
C 88		1:馬	3,30	1.50	2.80	11.00	浅黄橙色		脚部?
C 89		上馬	6.30	3.20	2.70	71.00			脚部
C 90		上馬	7.10	3,30	3.40	85.00	鈍黄橙色		脚部
C 91		土馬	8.50	3.30	2.40	72.00	鈍黄橙色 45世紀名		脚部
C 92	溝40	十.馬	8.10	2.70	3.00	76.00	鈍黄橙色		脚部
C 93		土馬	5.50 5.50	3.00	2.40	58,00	鈍黄橙色 鈍黄橙色		脚級
C 95		円面便	(14.00)	3.50	2.50	60.00	灰色		須恵器
C 96		円面視	(13.00)	_		_	灰色		須恵器
C 97		门面砚	(13.00)	_			灰色	古代	須恵器
C 98		円面硯	_	_	_	_	灰色	ші	須恵器
C 99		土馬	4.14	2.42	8.20	16.30			頭頸部
C 100		十.馬	2.90	2.80	3.40	22.00	鈍黄橙色		頭部
C 101		十.馬	7.20	5.30	4.80	139.00	浅黄橙色		胴部
C 102		上馬	2.40	4.10	1.60	12.00	鈍橙色		鬣? 赤彩
C 103		上馬	3,40	4.30	3.70	44.00	<b>鈍黄松色</b>		<b>旭</b> 部
C 104		土馬片	10.25	3.35	2.80	94.00	明赤褐色		胴部 赤彩
C 105	遺構に伴わない遺物	十馬	9.90	3.10	3.10	130.00	鈍橙色		胴部 赤彩
C 106		十馬	9.50	3.20	2.60	111.00	橙色~鈍黄橙色		脚部 赤彩
C 107		比馬	6.70	4.60	3.30	90.00	鈍黄橙色		脚部
C 108		上馬	5.30	3.95	2.95	65.00	浅黄橙色		脚部 赤彩
C 109		土馬	5,30	3.25	3,15	46.00	橙色~鈍黄橙色		脚部 赤彩
C 110		土馬	5.30	4.10	3.15	56.00	浅黄色	]	脚部
C 111		十.馬	4.00	2.20	2.90	20.00	鈍橙色		脚部。赤彩
C 112		土馬?	2.90	2.40	_	5.90	鈍橙色		脚部
C 113		鞴の羽口	13.30	9.80	3.50	994.00	淡灰色~橙色		
C 114		鞴の羽口	7.00	9.70	3.80	230.00	黒褐色~黄灰色		
C 115		鞴の羽口	7.60	8.30	3.40	250.00	淡灰色~橙色		
C 116		鞴の羽口	9.60	10.00	_	651.00	赤紫・黒紫・灰色		孔径2.4、
C 117	鍛冶工房 1	鞴の羽口	9.20	11.60	_	195.00	灰白~思褐色		孔径2.2、
C 118		鞴の羽□	4.80	11.00	_	692.00	灰白~黒褐色		孔径2.8、
C 119		鞴の羽口	4.80	11.00	_	98.00	灰泊~黒褐色		孔祥3.4、
C 120	上壙179	土錘	5,89	1.15	_	6.00	淡欖褐色		
C 121		土錘	4.05	1.50	_	9.00	灰黄色		
C 122	上壙211	土錘	4.10	1.50		8.00	褐色		
C 123		:錘	3.10	1.45	_	6.00	灰白色	中世	
C 124	Limoro	上錘	3.30	1.45	_	6.00	褐色		
C 125	1:壙218	上錘	3,75	1.10		3.80	灰白色		
C 126	上壙258	土錘	2.50	1.30		3.00	淡黄灰色		
C 127		十.錘	5.34	1.50		10.05	鈍橙色		
C 128	土壙266	十無	5.34	1.46	_	9.76	鈍赤褐色~鈍褐色 - 紅土#45		
C 129 C 130		上9年	4.66	1.44	_	8.03	鈍赤褐色 25 以際40		
I U 130		十.錘	5.65	1.49	_	10.28	鈍赤橙色	<u> </u>	

## 土製品一覧表

掲載 番号	掲載遺構名	쁆	種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	色 調	時 期	備考
C 131		上錘		5.50	1.53	_	11.17	鈍赤橙色		
C 132		上》)		5.89	1.53	-	11.75	鈍赤橙色		
C 133		T:3 :		5,59	1.43	_	10.14	鈍橙色		
C 134		土錘		5.35	1.40	_	9.48	灰赤色		
C 135		土錘		5.38	1.44	_	9.21	鈍赤褐色		
C 136		十.錘		5.77	1.54	_	10.07	鈍赤橙色		
C 137	上壙266	上錘		5.60	1.43	_	9.69	橙色		
C 138	-1.00 L	上錘		5.67	1.49	_	11.11	鈍赤橙色		
C 139		土鍾		5.44	1.44	_	9.11	鈍赤橙色		
C 140		土鍾		5.34	1.39	-	8.86	灰黄色~鈍赤橙色		
C 141		十.錘		4.97	1.42		7.88	鈍赤橙色		
C 142		上錘		4.85	1.41	_	8.43	鈍黄橙色		
C 143		上錘		5.25	1.57	_	11.61	浅黄粉色~赤粉色		
C 144		土錘		5.37	1.39	_	9.06	鈍赤橙色 ※#E		
C 145	<b>ポセパル</b>	土錘		5.50	1.45	-	10.00	淡黄灰色 鈍褐色		
C 146	落ち込み 1	十無		6.30 3.50	1.30	_	7.00 6.00	<b>興</b> 梅也 浅黄橙色		
C 147		1.3m		3.80	1.45		0.00	浅黄橙色		
C 148	柱穴	上錘		4.20	1.45	_				IIB7区出上
C 149		土錘		3.50	1.25	_	5.00	-		1110 ( 松田工
C 150		十.錘		5.35	1.40	_	9.00	鈍褐色		
C 151		十錘		4.65	1.90	_	15.00	鈍黄橙色		
C 153		上錘		4.95	1.65	_	10.00	鈍黄褐色		
C 154		上錘		4.86	1.86	_	12.00	鈍赤褐色		
C 155		土錘		5.91	1.68	_	16.80	灰黄色		
C 156		土錘		4.90	1.60	_	8.00	橙色		
C 157		土錘		5.40	1.65		9.00	橙色		
C 158		上錘		3.15	1.20	_	2.00	灰白色		
C 159		十.錘		3.60	1.20	_	5.10	淡黄褐色		
C 160		十.錘		4.40	1.50	_	9.40	鈍褐色		
C 161		1:錘		5.70	1.50	-	10.00	鈍橙色	中世	
C 162		上錘		5.75	1.45	_	10.00	鈍橙色	TIE	
C 163		土錘		4,30	1,55	-	8,00	鈍橙色		
C 164		土鍾		5.70	1.40	_	10.00	鈍橙色		
C 165		十.錘		2.60	1.40		4.00	喑灰黄色		
C 166		1:錘		5.65	1.45	-	9.00	灰黄褐色		
C 167		上鍾		4.95	2.05	_	18.00	鈍褐色		
C 168		上錘		3.30	1.30	-	5.00	鈍黄橙色		
C 169		土錘		5.54	1.20	_	6.00	褐色		
C 170	vitradity as AV 2. also y contralian	十.錘		5.25	1.70	_	12.00	灰黄色		
C 171	遺構に伴わない遺物	土錘		5.15	1.55	_	10.00	灰白色		
C 172		上洲		4.80 4.25	1.75	_	13.00	灰黄色 鈍赤褐色		
C 173		±:		4,25	1.35	_	7.00 9.00	郵 赤褐色		
C 174		十進		4.70	1.40	_	8.00	鈍褐色		
C 176		十.錘		3.35	1.25		5.00	鈍黄橙色		
C 177		1:錘		5.40	1.80	_	15.00	灰白色		<u> </u>
C 178		上錘		5.10	1.40	_	8.00	鈍橙色		
C 179		上錘		3.65	1.60	_	10.00	灰オリーブ色		
C 180		土錘		2.40	1.90	_	9.30	淡灰黄色		
C 181		十.錘		4.00	1.60	_	10.00	鈍赤褐色		
C 182		十.錘		4.50	1.35	_	8.00	鈍赤褐色		
C 183		上注		5.05	1.75	_	11.00	鈍橙色		
C 184		上錘		7.40	2.35	_	32.00	灰白色		
C 185		土錘		3.75	0.95	-	2.20	浅黄橙色~灰白色		
C 186		土錘		4.90	1.90	_	14.50	淡黄褐色		
C 187		土錘		5.00	1.30	_	8.00	鈍黄橙色		
C 188		上錘		5,60	1.75	_	20.00	橙色		
C 189		上錘		4.00	1.65	_	9.00	鈍黄橙色		
C 190		土錘		3.45	1,40	_	5.00	鈍赤褐色		
C 191		土鍾		4.45	1.45	_	8.00	淡黄褐色		
C 192		上錘		4.85	1.40	_	8.00	鈍橙色		

番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (mm)	厚み (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	残存率	時期	備考
S 1		石錐	サヌカイト	18.0	16.5	4.0	_	1.0			
S 2	- 竪穴住居 1	石鍬	緑色片岩	97.0	35.0	15.0	_	49.5			
S 3	V/ (II/II 1	石鍬	緑色片岩	97.5	47.0	27.0	_	103.8			
S 4		石鍬	緑色片岩	102.0	41.0	15.5	_	78.5			
S 5		石鏃	サヌカイト	22.0	15.0	3.0	_	0.8			
S 6		石鏃	サヌカイト	21.5	17.0	4.0	_	1.2	欠		
S 7		石鏃	サヌカイト	20.0	13.5	3.3	_	0.8			
S 8		石鏃	サヌカイト	15.0	14.0	2.8	_	0.5	欠		
S 9		RFか楔?	サヌカイト	32.5	29.0	6.0		7.2			
S 10	竪穴住居 2	石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	73.0	31.0	10.5	_	26.7	欠?		
S 11		磨製石斧(局部)	安山岩(灰黒色ガラス質)	47.0	39.5	12.0	_	33.2	欠		
S 12		石鍬	緑色片岩	77.5	48.5	13.0	_	49.7			
S 13		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	89.0	36.5	16.0	_	62.7	欠	ém Jenéz III	
S 14		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	97.5	45.0	15,0	_	71.5		縄文晩期 中葉	
S 15		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	94.0	58.0	16.0	_	97.7			
S 16		石鍬	緑色片岩	121.0	36.5	12.0	_	61.0			
S 17		イ 道秋	緑色片岩	88.0	77.5	28.0	_	230.2		]	
S 18		イi鍬	緑色片岩	82.5	39.5	13.0	_	54.0		]	
S 19		石油	緑色片岩	40.5	69.5	10.5	-	39.9			
S 20	竪穴住居3	石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	125.5	97.0	28.0	-	357.5		]	
S 21	竪八田/百3	右鏃	サヌカイト	16.5	14.0	3,5	_	0,6			
S 22		石鏃	サヌカイト	17.0	13.0	3.5	-	0.7		1	
S 23		石鏃	サヌカイト	17.5	14.5	3.5	_	0.6		1	
S 24		石鏃	サヌカイト	20.0	14.5	3.3	_	0.8		1	
S 25		石錐	サヌカイト	28.0	20.0	4.5	_	2.7		1	
S 26		スクレイパー	サヌカイト	48.5	46.5	11.5	_	22.3		1	
S 27	一 竪穴住居 4	管玉	蛇紋岩	20.0	9.0	(6.5)	_	1.1			
S 28		スクレイパー	緑色片岩	106.0	46.5	11.0	_	77.7			
S 29		スクレイパー	緑色片岩	122.5	50.5	14.5	_	110.5			
S 30	土壙12	スクレイパー	緑色片岩	101.5	48.5	9.5	_	73.0			
S 31		スクレイパー	緑色片岩	113.5	43.0	10.0	_	59.8		縄文晩期	
S 32		打製石包」	サヌカイト	98.5	49.5	9.7	_	54.5		中葉~	
S 33	上壙14	石鏃	サヌカイト	19.0	16.5	3.5	_	0.9	欠	後葉	
S 34		石刀	緑色片岩	63,0	29,0	18,5	_	11,9		1	
S 35	上塘14関連	石刀	黒色粘上岩?	30.0	18.8	7.5	_	1,8	·-部	1	S34と同 · 固体
S 36	土壙20	管玉	緑色片岩	21.5	10.0	8.5	_	2,4	FI.		201013 1111
S 37	土壙33	石鍬	緑色片岩	134.0	50.5	20.0	_	153.3		縄文晩期	
-		1.1201						163.6		1	
LS 38	十- 地 37	鍬	緑色片岩	127.0	51.0	23.5	_				
S 38 S 39	土壙37 土壙41	鍬 RF	緑色片岩 サヌカイト	127.0 30.5	51.0 28.0	23.5 6.5	_ _	5.9		縄文晩期 中集	
S 39	土壙41	RF	サヌカイト	30.5	28.0	6.5	_	5.9	hi	中集	
									欠	中葉 縄文晩期 縄文後期	
S 39 S 40 S 41	土壙41 土壙48	RF 石鏃 石鍬	サヌカイト サヌカイト 珪質片岩	30.5 18.5 90.5	28.0 16.0 54.0	6.5 3.0 13.5	_ 	5.9 0.7 73.0	欠	中葉 縄文晩期	
S 39 S 40 S 41 S 42	土壌41 土壌48 土器消まり1	R F 石鏃 石鍬 石鏃	サヌカイト サヌカイト 珪質片岩 サヌカイト	30.5 18.5 90.5 20.0	28.0 16.0 54.0	6.5 3.0 13.5 3.6	- - -	5.9 0.7 73.0 0.7	欠	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43	土壙41 土壙48	RF 石鏃 石鏃 石鏃	サヌカイト サヌカイト 珪質片岩 サヌカイト 流紋岩	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5	- - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5		中葉 縄文晩期 縄文後期	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44	土壌41 土壌48 土器消まり1	R F 石鏃 石鏃 石鏃 石鏃 石鍬?	サヌカイト サヌカイト 珪質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0	- - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3	欠	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉	
\$ 39 \$ 40 \$ 41 \$ 42 \$ 43 \$ 44 \$ 5 45	土壌41 土壌48 土器消まり1	RF 石鏃 石鍬? 石鍬? 石鍬?	サヌカイト サヌカイト 珪質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0	- - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3	欠	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46	土壌41 土壌48 土器消まり1	RF 石鏃 石鏃 石鏃? 石鍬? 石鍬?	サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0	- - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8		中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46 S 47	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部	RF 石鏃 石鍬? 石鍬? 石鍬? 石鍬 スクレイパー	サヌカイト サヌカイト 珪質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5	- - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4	欠	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉	
\$ 39 \$ 40 \$ 41 \$ 42 \$ 43 \$ 44 \$ 45 \$ 46 \$ 47 \$ 48	土壌41 土壌48 土器消まり1	RF 石鏃 石鍬? 石鍬? 石鍬? 石鍬 イゴ鍬 スクレイパー イi鍬	サヌカイト サヌカイト 珪質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安川岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5 18.0	- - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7	欠	中葉 縄文喚期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
\$ 39 \$ 40 \$ 41 \$ 42 \$ 43 \$ 44 \$ 45 \$ 46 \$ 47 \$ 48 \$ 349	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石級? 石級? 石級? 石級 イづ級 イづ級 イが スクレイパー イi鍛	サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0 53.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5 18.0 21.0	- - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7	欠	中葉 縄文喚期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46 S 47 S 48 S 49 S 50	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石級? 石級? 石級? 石級 イづ級 イづ級 イづ級 イづ級	サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0 53.0 57.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5 18.0 21.0 18.5	- - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5	欠欠?	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
\$ 39 \$ 40 \$ 41 \$ 42 \$ 43 \$ 44 \$ 45 \$ 46 \$ 47 \$ 48 \$ 49 \$ 50 \$ 51	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部	RF 石鏃 石鍬? 石鍬? 石鍬? 石鍬 イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン	サヌカイト サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0 53.0 57.0 64.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5 18.0 21.0 18.5 13.0	- - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1	欠	中葉 縄文喚期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
\$ 39 \$ 40 \$ 41 \$ 42 \$ 43 \$ 44 \$ 45 \$ 46 \$ 47 \$ 48 \$ 49 \$ 50 \$ 51 \$ 52	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部	RF 石鏃 石鍬? 石鍬? 石鍬? 石鍬 イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン	サヌカイト サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質)	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0 118.5	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0 53.0 57.0 64.0 40.5	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5 18.0 21.0 18.5 13.0	- - - - - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1 79.7	欠欠?	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
\$ 39 \$ 40 \$ 41 \$ 42 \$ 43 \$ 44 \$ 45 \$ 46 \$ 47 \$ 48 \$ 49 \$ 50 \$ 51 \$ 52 \$ 53	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部	RF 石鏃 石鍬? 石鍬? 石鍬? 石鍬 イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン	サヌカイト サヌカイト  ・ サヌカイト  ・ 建質片岩 ・ サヌカイト ・ 流紋岩 ・ 流紋岩 ・ 安山岩(灰黒色ガラス質) ・ サヌカイト ・ 安山岩(灰黒色ガラス質) ・ サヌカイト ・ 安山岩(灰黒色ガラス質) ・ 安山岩(灰黒色ガラス質) ・ 安山岩(灰黒色ガラス質) ・ 安山岩(灰黒色ガラス質) ・ 安山岩(灰黒色ガラス質) ・ 森色片岩 ・ 緑色片岩	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0 118.5 103.5	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0 53.0 57.0 64.0 40.5 59.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5 18.0 21.0 18.5 13.0 10.0 15.0	- - - - - - - - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1 79.7 130.7	欠欠?	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
\$ 39 \$ 40 \$ 41 \$ 42 \$ 43 \$ 44 \$ 45 \$ 46 \$ 47 \$ 48 \$ 49 \$ 50 \$ 51 \$ 52 \$ 53 \$ 54	土壌41 土壌48 十器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鍬? 石鍬? 石鍬? 石鍬 イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン	サヌカイト サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安川岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 緑色片岩 緑色片岩	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0 118.5 103.5 90.5	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0 53.0 57.0 64.0 40.5 59.0 52.0	6.5 3.0 13.5 3.6 12.5 12.0 18.0 20.0 6.5 18.0 21.0 18.5 13.0 10.0 15.0 95.0	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1 79.7 130.7 60.2	欠欠?	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46 S 47 S 48 S 49 S 50 S 51 S 52 S 53 S 54 S 55	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石鏃? 石級? 石級? 石級 インンイパー イン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	サヌカイト サヌカイト  サヌカイト  建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 安川岩 (灰黒色ガラス質) 森色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0 118.5 103.5 90.5	28.0 16.0 54.0 16.3 48.5 45.0 61.0 59.0 27.5 62.0 53.0 57.0 64.0 40.5 59.0 52.0 64.0	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1 79.7 130.7 60.2 312.8	欠欠?	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46 S 47 S 48 S 49 S 50 S 51 S 52 S 53 S 54 S 55 S 56	土壌41 土壌48 十器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石鏃? 石級? 石級? 石級 インンイパー イi鍁 イi鍁 イi鍁 石鍁 石鍁	サヌカイト サヌカイト  建質片岩 サヌカイト  建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩(灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩(灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 森色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0 118.5 103.5 90.5 196.5 95.5	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  52.0  64.0  51.0	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1 79.7 130.7 60.2 312.8 133.6	欠欠?	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
\$ 39  \$ 40  \$ 41  \$ 42  \$ 43  \$ 44  \$ 45  \$ 46  \$ 47  \$ 48  \$ 49  \$ 50  \$ 51  \$ 52  \$ 53  \$ 54  \$ 55  \$ 56  \$ 57	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石鏃? 石級? 石級? 石級 インンイパー イi鍬 イi鍬 イi鍬 石鍮 石鍁 石鍁 石鍁 石級 スクレイパー 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼 石鍼	サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩(灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩(灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 家山岩(灰黒色ガラス質) 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5 18.5 90.5 20.0 88.0 97.0 105.0 131.0 50.0 103.5 159.0 109.0 118.5 103.5 90.5 196.5 95.5 94.5	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  52.0  64.0  40.5	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0  11.0	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1 79.7 130.7 60.2 312.8 133.6 70.0	欠欠?	中葉 縄文晩期 縄文後期 中葉 縄文晩期	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46 S 47 S 48 S 49 S 50 S 51 S 52 S 53 S 54 S 55 S 56 S 57 S 58	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石鏃? 石級? 石級? 石級 インタレイパー イi鍁 イi鍁 イi鍁 石鍮 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石 石 級 石 の 田 の の の の の の の の の の の の の の の の の	サヌカイト サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩(灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩(灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 安山岩(灰黒色ガラス質) 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5  18.5  90.5  20.0  88.0  97.0  105.0  131.0  50.0  109.0  118.5  109.0  118.5  103.5  90.5  196.5  94.5  79.0	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  51.0  49.0  55.0	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0  11.0  17.5	- - - - - - - - - - - - - - - - - - -	5.9 0.7 73.0 0.7 65.5 75.3 126.3 139.8 9.4 138.7 201.7 138.5 79.1 79.7 130.7 60.2 312.8 133.6 70.0 91.0	欠 欠? 欠?	中葉 縄文晚期 縄文後期 - 縄文検期	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46 S 47 S 48 S 49 S 50 S 51 S 52 S 53 S 54 S 55 S 56 S 57 S 58 S 59	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石鏃? 石皴? 石級? 石級 イが スクレイパー イi鍁 イi鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 不分 女 石 が の 石 級 石 級 石 級 石 級 石 級 石 級 石 級 石 級 石 級 石	サヌカイト サヌカイト  サヌカイト  建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5  18.5  90.5  20.0  88.0  97.0  105.0  131.0  50.0  109.0  118.5  109.0  118.5  103.5  90.5  196.5  94.5  79.0  16.5	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  51.0  49.0  55.0  18.5	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0  11.0  17.5		5.9  0.7  73.0  0.7  65.5  75.3  126.3  139.8  9.4  138.7  201.7  138.5  79.1  79.7  130.7  60.2  312.8  133.6  70.0  91.0  0.56	欠欠?	中葉 縄文晚期 組文後期 中葉 縄文 晩期 編文 晩期 縄文 後期 組文 晩期	
\$ 39  \$ 40  \$ 41  \$ 42  \$ 43  \$ 44  \$ 45  \$ 46  \$ 47  \$ 48  \$ 49  \$ 50  \$ 51  \$ 52  \$ 53  \$ 54  \$ 55  \$ 56  \$ 57  \$ 58  \$ 59  \$ 60	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石鏃 石鏃・石鏃・石鏃・フースを (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	サヌカイト サヌカイト  建質片岩 サヌカイト  建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5  18.5  90.5  20.0  88.0  97.0  105.0  131.0  50.0  109.0  118.5  109.0  118.5  196.5  94.5  79.0  16.5  108.5	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  51.0  49.0  55.0  18.5	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0  11.0  17.5  2.7		5.9  0.7  73.0  0.7  65.5  75.3  126.3  139.8  9.4  138.7  201.7  138.5  79.1  79.7  130.7  60.2  312.8  133.6  70.0  91.0  0.56  131.4	欠 欠? 欠?	中葉 縄文晚期 組文後期 中葉 縄文 晩期 編文 晩期 縄文 後期 組文 晩期	
\$ 39  \$ 40  \$ 41  \$ 42  \$ 43  \$ 44  \$ 45  \$ 46  \$ 47  \$ 48  \$ 49  \$ 50  \$ 51  \$ 52  \$ 53  \$ 54  \$ 55  \$ 56  \$ 57  \$ 58  \$ 59  \$ 60  \$ 61	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部 河道2中流部 <褐色砂層>	RF 石鏃 石鏃 石鏃 石鏃? 石鍛? 石鍛? 石級 スクレイパー イi鍁 イi鍁 石鍼 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 不分 女 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力	サヌカイト サヌカイト  建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 変印岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5  18.5  90.5  20.0  88.0  97.0  105.0  131.0  50.0  109.0  109.0  118.5  103.5  90.5  196.5  94.5  79.0  16.5  108.5  74.5	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  51.0  49.0  55.0  18.5  49.0  59.0	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0  11.0  17.5  2.7  16.0  9.0		5.9  0.7  73.0  0.7  65.5  75.3  126.3  139.8  9.4  138.7  201.7  138.5  79.1  79.7  130.7  60.2  312.8  133.6  70.0  91.0  0.56  131.4  28.4	欠 欠? 欠?	中葉 縄文晚期 組文後期 中葉 縄文 晩期 編文 晩期 縄文 後期 組文 晩期	
\$ 39  \$ 40  \$ 41  \$ 42  \$ 43  \$ 44  \$ 45  \$ 46  \$ 47  \$ 48  \$ 49  \$ 50  \$ 51  \$ 52  \$ 53  \$ 54  \$ 55  \$ 56  \$ 57  \$ 58  \$ 59  \$ 60  \$ 61  \$ 62	土壌41 土壌48 土器溜まり 1 河道2上流部 河道2上流部	RF 石鏃 石鏃 石鏃 石鏃 石鍛? 石鍛? 石級 スクレイパー イi鍁 イi鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁	サヌカイト サヌカイト  建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 変山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 森色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑	30.5  18.5  90.5  20.0  88.0  97.0  105.0  131.0  50.0  109.0  118.5  109.0  118.5  196.5  94.5  79.0  16.5  108.5  74.5  89.0	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  51.0  49.0  55.0  18.5  49.0  59.0  39.5	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0  11.0  17.5  2.7  16.0  9.5		5.9  0.7  73.0  0.7  65.5  75.3  126.3  139.8  9.4  138.7  201.7  138.5  79.1  79.7  130.7  60.2  312.8  133.6  70.0  91.0  0.56  131.4  28.4  33.0	欠 欠? 欠?	中葉 縄文晚期 組文後期 中葉 縄文 晩期 編文 晩期 縄文 後期 組文 晩期	
S 39 S 40 S 41 S 42 S 43 S 44 S 45 S 46 S 47 S 48 S 49 S 50 S 51 S 52 S 53 S 54 S 55 S 56 S 57 S 58 S 59 S 60 S 61	土壌41 土壌48 +器溜まり 1 河道 2 上流部 河道 2 上流部 河道 2 ト流部 <褐色砂層>	RF 石鏃 石鏃 石鏃 石鏃? 石鍛? 石鍛? 石級 スクレイパー イi鍁 イi鍁 石鍼 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 石鍁 不分 女 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力 大力	サヌカイト サヌカイト  建質片岩 サヌカイト 流紋岩 流紋岩 安山岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 変印岩 (灰黒色ガラス質) サヌカイト 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 安山岩 (灰黒色ガラス質) 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩 緑色片岩	30.5  18.5  90.5  20.0  88.0  97.0  105.0  131.0  50.0  109.0  109.0  118.5  103.5  90.5  196.5  94.5  79.0  16.5  108.5  74.5	28.0  16.0  54.0  16.3  48.5  45.0  61.0  59.0  27.5  62.0  53.0  57.0  64.0  40.5  59.0  51.0  49.0  55.0  18.5  49.0  59.0	6.5  3.0  13.5  3.6  12.5  12.0  18.0  20.0  6.5  18.0  21.0  18.5  13.0  10.0  15.0  95.0  18.0  20.0  11.0  17.5  2.7  16.0  9.0		5.9  0.7  73.0  0.7  65.5  75.3  126.3  139.8  9.4  138.7  201.7  138.5  79.1  79.7  130.7  60.2  312.8  133.6  70.0  91.0  0.56  131.4  28.4	欠 欠? 欠?	中葉 縄文晚期 組文後期 中葉 縄文 晩期 編文 晩期 縄文 後期 組文 晩期	

掲載 番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (nm)	厚み (m)	孔径 (mm)	重量 (g)	伐存率	時期	備考
S 65	河道 2 中流部 <黒褐色土層>	磨製石斧	流紋岩	94,0	57,0	31,0	-	216,5	欠または 未成品	縄文晩	
S 66	河道2中流部 <黒褐色上層上而>	石鍬	緑色片岩	82.5	55.0	17.5	_	81.3		~後期	
S 67		イi鏃	サヌカイト	18.5	14.0	3.0	_	0.7	完		
S 68		有鏃	サヌカイト	22.0	17.0	3.2	-	1.0	2/3		
S 69		有鏃	サヌカイト	26.5	20.0	5.0	-	1,2	完		
S 70		石鍬?	安山岩(灰黒色ガラス質)	89.0	39.5	18.5	_	53.5	完		
S 71		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	59.5	11.0	67.0		53.6	欠?		
S 72		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	128.0	45.5	1.5	-	85.1	完		
S 73	河道2下流部	石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	129.0	50.5	18.0	-	127.1	欠	組文晩期 中葉	
S 74		スクレイパー	サヌカイト	96.0	64.0	9.5	-	55.2		11:3%	
S 75		石鍬?	安山岩 (灰黒色ガラス質)	69.0	58.0	15.0	_	88.6	完		
S 76		石鍬	安山岩 (灰黒色ガラス質)	129.0	58,0	30.0	_	191.3	欠?		
S 77		磨石?	角閃石 安山岩	101.0	88.0	58.5	_	772.6			
S 78		石鍬?	安山岩(灰黒色ガラス質)	95.0	33.0	12.0	_	49.6	欠		
S 79		イ)鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	120.0	55.5	22.0	_	150.6	欠		
S 80	2-0% o	スクレイパー	サヌカイト	80.0	38.5	8.0	_	21.0		om Jenas Hil	
S 81	河道3	石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	109.5	44.5	15.0	_	92.1	欠	縄文晩期	
S 82		イ泡丁(石鍬 の転用品?)	緑色片岩	126.0	51.0	11.0	_	82.2			
S 83		石鍬	緑色片岩	96.0	54.0	16.0	_	89.3			
S 84		石鍬	流紋岩	104.0	67.0	18.5	_	157.1			
S 85		石鍬	緑色片岩	90.0	45.0	14.0	_	68.8			
S 86		石鍬	緑色片岩	92.5	62.5	12.5	_	81.0			
S 87		石鍬	緑色片岩	106.5	50.5	18.5	_	97.4			
S 88		石鍬	緑色片岩	116.0	39.5	21.0	_	99,3			
S 89		石鍬(未製品?)	緑色片岩	147.0	43.5	20.0	_	196.7			
S 90		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	165.5	54.5	29.0	_	337.5	欠		
S 91		石鍬	緑色片岩	113.5	51.0	16.5	_	99.2			
S 92		石鍬	緑色片岩	94.0	51.0	14.0	_	86.9			
S 93		石鍬	緑色片岩(黒色片岩含)	75.5	52.5	14.0	_	72.6			
S 94		石鍬	緑色片岩	120,5	59,0	15,5	_	165,9			
S 95		石鍬	緑色片岩	102.5	50.5	19.0	_	119.9			
S 96	微高地 1 <暗褐色土・	石鍬	緑色片岩	103.0	53.0	16.0	_	103.3			
S 97	褐色砂層>	石鍬	緑色片岩	97.5	52.0	14.0	_	100,2			
S 98		行鍬	緑色片岩	71.5	56.5	15.0	_	92.6			
S 99		石鍬	緑色片岩	76.5	41.5	15.5	_	54.6			
S 100		石鍬	緑色片岩	117.0	48.5	19.0	_	131.0			
S 101		石鍬	緑色片岩	93.0	46.5	14.0		74.4			
S 102		石鍬	緑色片岩	105.5	32.5	10.5		44.8			
S 103		石匙	サヌカイト	50.1	57.1	7.6	_	20.1			
S 103		石鏃	サヌカイト	16.0	19.5	4.0	_	0.9	欠	縄文晩期	
S 104		石鏃	サヌカイト	20.0	13.5	2.5	_	0.5	欠	中~後葉	
S 106		石鏃	サヌカイト	15.0	13.0	2.0	_	0.5	欠		
S 107		石鏃	サヌカイト	17.5	16.5	2.3	_	0.6	欠		
S 108		石鏃	サヌカイト	19.5	14.5	4.0	_	0.7	ほぼ完		
S 100		石鏃	サヌカイト	16.0	13.5	3.5	_	0.5	欠		
S 110		イi鏃	黒曜石	17.0	11.0	3.0	_	0.4	欠		
S 111		イi鏃	サヌカイト	26.0	17.5	4.0	_	1,4	完		
S 112		イi鏃	サヌカイト	22.5	15.0	5.0	_	0.8	欠		
S 113		イi鏃	サヌカイト	23.0	15.0	5.0	_	1.4	ほぼ完		
S 114		台鏃	サヌカイト	23.0	18.0	3.0	_	0.9	欠		
S 115		石鏃	サヌカイト	21.0	14.5	3.0	_	0.8	ほぼ完		
S 116		石鏃	サヌカイト	27.0	19.0	3.0	_	1.2	完		
S 117		スクレイパー	サヌカイト	54.0	40.5	9.0	_	20.3	70		
S 118		スクレイパー	サヌカイト	54.0	27.5	7.5	_	7.4			
$\overline{}$	独立師・山下地跡ショウ	スクレイパー	流紋岩	97.0	42.0	1.6	_	88.5			
I S 110 i	微高地1出上遺物<暗	スクレイパー	サヌカイト	78,5	50,0	6.5	_	29.8			
S 119 S 120	褐色土・褐色砂層>		2.21.06.1.1		69.0	16.5	_	110.6			
S 120	褐色土・褐色砂層>		緑角片岩		00.0	10.0	I	110.0	I	l .	
S 120 S 121	褐色土・褐色砂屑>	スクレイパー	緑色片岩	87.0 84.0	35.0	2.0	_	25 N			
S 120 S 121 S 122	褐色土・褐色砂層>	スクレイパースクレイパー	サヌカイト	84.0	35.0	8.0		25.0 179.1	/y		
S 120 S 121 S 122 S 123	褐色土・褐色砂屑>	スクレイパー スクレイパー イi刀	サヌカイト 緑色片岩	84.0 149.0	29.0	23.5	_	179.1	欠		朗讪 26/1 270
\$ 120 \$ 121 \$ 122 \$ 123 \$ 124	褐色土・褐色砂屑>	スクレイパー スクレイパー イi刀	サヌカイト 緑色片岩 黒色粘板岩	84.0 149.0 138.6	29.0 26.4	23.5 18.5	_ _	179.1 117.1	欠		関連 254 370
\$ 120 \$ 121 \$ 122 \$ 123 \$ 124 \$ 125	褐色土・褐色砂層>	スクレイパー スクレイパー イi刀 イi刀 叩き右	サヌカイト 緑色片岩 黒色粘板岩 花崗閃緑石	84.0 149.0 138.6 141.0	29.0 26.4 60.0	23.5 18.5 37.0	_ _ _	179.1 117.1 455.8	欠		関連 254 370
\$ 120 \$ 121 \$ 122 \$ 123 \$ 124	褐色土・褐色砂層>	スクレイパー スクレイパー イi刀	サヌカイト 緑色片岩 黒色粘板岩	84.0 149.0 138.6	29.0 26.4	23.5 18.5	_ _	179.1 117.1	欠		関連 254 370

掲載 番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (mm)	厚み (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	残存率	時期	備考
S 128	微高地1<晩期下層>	砥石	砂岩	198.5	131.5	39.5	_	840.0			
S 129	微高地1<暗褐色土・ 褐色砂層>	石錘	黑色粘板岩	44.0	45.0	21.0	_	57.9	完	縄文晩期 中〜後葉	
S 130	微高地 1 <後期>	イi鍬	緑色片岩	87.0	42.0	13.0	_	56.0		細文後期	
S 131		イi鍬	緑色片岩	92.5	58.5	18.0	_	103.5		神(又1安月)	
S 132		石鍬	緑色片岩	94.5	47.0	13.0	_	73.3			
S 133		R F	緑色片岩	35.5	25.5	5.0	_	5.5		縄文晩期	
S 134		石鍬	緑色片岩	125.5	45.6	24.0		173.3		中葉	
S 135		石鍬	緑色片岩	124.5	51.5	15.0	_	129.4			
S 136		石鏃	サヌカイト	15.5	12.5	3.0	_	0.5			
S 137	微高地 2 南東部	石鏃	サヌカイト	11.5	14.0	2.5	_	0.4			
S 138	斜面	石鏃	サヌカイト	13.5	13.5	2.0	_	0.4			
S 139		スクレイパー	サヌカイト	40,5	19.5	7.5	_	5.7			楔の転用?
S 140		UF	サヌカイト	68.5	34.5	6.0	_	13.7		縄文後期	
S 141		石鍬	流紋岩	137.0	69.5	29.0	_	320.5			
S 142		イi鍁	緑色片岩	107.5	53.5	17.0	_	103.5			
S 143		イi鳅	緑色片岩	99.5	49.0	19.0	_	113.9			
S 144		イi鳅	花崗閃緑石	84.0	47.5	16.5	_	78.5			
S 145		イi鍬	緑色片岩	115.0	56.5	15.0	_	109.5			
S 146		/i鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	115.5	40.5	19.0	-	107.2			
S 147		石鍬	緑色片岩	117.5	47.5	13.0		97.5			
S 148		石鍬	緑色片岩	105.5	51.5	26.5	_	211.1			
S 149		石鍬	緑色片岩	76.5	46.0	13.0	_	54.8	欠?	縄文晩期	
S 150	微高地2<晩期下層>	石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	50.0	56.0	14.0	_	57.2		中葉	
S 151		石鍬	緑色片岩	70.5	51.5	9.0	_	27.9			
S 152		石鍬	緑色片岩	89.0	64.0	17.0	_	93.8	欠?		
S 153		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	80.0	61.0	8.5	_	62.3			
S 154		スクレイパー?	サヌカイト	116.0	47.5	8.0	_	49.8			
S 155		スクレイパー片	サヌカイト	34.5	29.0	6.5	_	7.4			
S 156		石鍬	安山岩(灰黒色ガラス質)	88.0	34.5	20.0	_	70.3	欠		
S 157		石鍬	緑色片岩	89.5	36.5	13.0	_	54.1			
S 158		石鍬	緑色片岩	61.0	30.5	25.0	_	60.5			
S 159		石鍬	緑色片岩	56.0	42.5	18.0	_	25.2	欠		
S 160		石鍬	緑色片岩	92.5	40.5	12.0	_	55.2			
S 161		石融	緑色片岩	112.0	46.5	14.0	_	88.6			
S 162		イi鍬	緑色片岩 (黒色片岩含)	109.0	49.0	16.5	_	94.0			
S 163	微高地出土遺物	イi鍬	緑色片岩	106.5	43.5	11.0	_	66.4			
S 164	<後期>	イi鍬	緑色片岩	93.5	50.5	14.5	_	76.3			
S 165		石鍬	緑色片岩	80.5	45.0	15.0	_	71.5			
S 166		石鍬	緑色片岩	144.5	65.0	19.5	_	225.1			
S 167		石鍬	緑色片岩	116.0	62.5	19.5		160.3		縄文後期	
S 168		石鍬	緑色片岩	143.0	64.5	28.0	_	242.3	欠?		
S 169		石鍬	緑色片岩	53.5	56.5	18.0	_	68.5			
S 170		石鍬	緑色片岩	88.5	61.0	15.0	_	88.6			
S 171		石鍬	緑色片岩	67.0	65.0	12.5	_	64.0	欠?		
S 172		石鍬	緑色片岩	96.0	64.5	23.0	_	196.6	欠		
S 173		石鍬	黒色片岩 (4.45-11)	72.0	80.5	13.5	_	99.7	欠		
S 174	微高地出土遺物	石鍬	緑色片岩	117.5	88.0	20.5	_	246.0	4		
S 175	<後期>	/i鏃	サヌカイト	22.0	15.0	4.0	_	1.0	欠?		
S 176		有無	サヌカイト	21.0	18.5	4.0	_	0.7	ほぼ完		
S 177		石鏃	サヌカイト	18.0	8.0	2.5	_	0.3			
S 178		楔	サヌカイト	25.5	18.5	8.0	_	3.8	-		
S 179		石鍬	緑色片岩	84.5	50.0	12.0	_	63.8	完		
S 180		石鍬	緑色片岩	68.5	43.5	9.5		40.4	欠		
S 181		石鍬	緑色片岩	91.0	43.0	14.0	_	62.5	-		
S 182		石鍬	緑色片岩	91.0	51.0	15.0	_	78.4	完		
S 183		石鍬	緑色片岩	89.0	56.0	17.0	_	97.8	h		
S 184		石鍬	緑色片岩	103.5	56.0	19,5	_	140.7	欠		
S 185	遺構に伴わない遺物	石鍬	緑色片岩	128.0	54.0	20,0	_	194.3	欠	縄文	
S 186		石鍬	緑色片岩	153.0	59.5	21.0	_	191.0	完		
S 187		有鳅	緑色片岩	108.5	41.5	20.0	_	124.6	完 // //		
S 188		/i敏	緑色片岩	147.0	54.0	21.5	_	215.0	欠?		
S 189		/i鳅	緑色片岩	164.0	57.5	15.0	_	146.4	/.,		
S 190		石鍬	緑色片岩	172.0	65.0	33.0	_	562.4	欠		
S 191 S 192		磨石	流紋岩	51.5	35.0	33,5	_	53,5	欠		
		イi鏃	サヌカイト	22.5	19.5	2.5	_	0.9	ほぼ完		I

1985	掲載 番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (mm)	厚み (m)	孔径 (mm)	重量 (g)	残存率	時期	備考
1.50	S 193		イ繊	サヌカイト	20.5	12.5	2.6	_	0.5	欠		
1986   1987 전   1988	S 194		石鏃	サヌカイト	16.5	12,0	3.2	-	0,5	欠		
「報子の子子   15.0   15.2   15.5   - 10.7   次子   - 10.0   15.5   - 10.0   次子   - 10.0	S 195	遺構に伴わない遺物	石鏃	サヌカイト	18.5	11.5	3.5	_	0.6	欠	%!!· <b>▽</b>	
1985   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016   2016	$\overline{}$	721131C11 12764 7210		サヌカイト	16.0	16.0	3.5	_	0.7		1000	
	$\overline{}$					10.0		_	0.7			
Second	S 198		剥片		22.5	14.0	10.5	_	2.9	欠?		
7階	S 199	竪穴住居 6	石鏃	サヌカイト	22.0	15.5	3.5		0.8	完		
安茂   中央	S 200	竪穴住居 7	スクレイパー	サヌカイト	53.0			_	13.1			
金銭   ・・・	-				21.0	15.0	2.8	_	0.8			
子供   一次を介下   240   160   47   - 1   14   25   25   25   25   25   25   25   2	$\overline{}$			サヌカイト				_	0.8			
日本語	-				19.5		3.5	_	1.0			
日本語	-							_	1.4			
3290	$\overline{}$							_				
200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   200   20	-							_				
1773   975   285   -   1829   元   1829	$\overline{}$							_				
空記   守玉 東京   16.6   4.2   4.2   1.9   0.3   元   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1.0   1	$\overline{}$	竪穴住居 9						_				S437と同一個体
登記	-											
SZ12   日本	$\overline{}$											
S213   安正	-											
S216   野代 (中央)   野田	-											
중216   名文 原介   四本	$\overline{}$											
Seption	-									_		
S217   S218   次の	$\vdash$									77.20.1	-	
S218         食吹付品12         有識         サヌカイト         21.0         14.0         3.4         - 0.8         はぼ完           S220         円数日かり         サメカイト         24.0         16.5         5.0         - 1.1         はぼ完           S221         石碗子の子かり         ホルンフェルス         104.0         51.5         10.5         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.1         - 72.	$\overline{}$	竪穴住居10									-	
S219         飲作用12         石酸         サヌカイト         24.0         16.5         5.0         -         1.1         は低光           S221         安田守行子         女は中で成世のサスクロ         101.0         51.5         12.0         -         72.1         -         表皮固         表皮固         一         0.3         欠         大阪         一         72.1         -         0.3         欠         人工         人工 <td><math>\vdash</math></td> <td></td>	$\vdash$											
下製石型   一次担合する大型   一次担合する   一次担合する大型   一次担合する   一次工会   一次工会	$\overline{}$	Euch (). Et a										
S22	$\overline{}$	竪穴任居12										4.45
S222         石酸         サヌカイト         12.0         10.0         2.0         - 0.3         欠           S224         イ酸         サヌカイト         12.0         12.5         2.5         - 0.4         投資           S225         石酸         サヌカイト         14.5         14.5         4.0         - 0.6         次           S226         石酸         サヌカイト         14.5         14.5         3.0         - 0.6         次           S227         石酸         サヌカイト         15.0         14.5         3.0         - 0.6         次           S228         石酸         サヌカイト         14.0         16.5         3.0         - 0.6         次           S229         石酸         サヌカイト         14.0         16.5         3.0         - 0.6         次           S220         石酸         サヌカイト         15.0         15.5         3.0         - 0.6         次           S231         石酸         サヌカイト         15.0         15.5         3.0         - 0.7         26定           S232         石酸         サヌカイト         19.0         16.5         3.5         - 0.7         26定           S232         石酸         サヌカイト         19.0         17.5         <	-											
S 223         行談         サヌカイト         12.0         12.5         2.5         - 0.3         欠           S 224         石談         サヌカイト         16.0         13.0         2.5         - 0.4         はほど           S 225         石談         サヌカイト         14.5         14.5         4.0         - 0.6         欠           S 227         石談         サヌカイト         15.0         14.5         3.0         - 0.6         欠           S 228         石談         サヌカイト         18.6         12.5         2.5         - 0.6         欠           S 229         石談         サヌカイト         14.0         15.5         3.0         - 0.6         欠           S 220         石談         サヌカイト         14.0         15.5         3.0         - 0.6         欠           S 231         石談         サヌカイト         15.0         12.0         4.0         0.6         欠           S 232         石談         サヌカイト         15.0         15.0         3.5         - 0.7         7 ほぼぶ           S 233         石談         サヌカイト         15.0         15.0         3.5         - 0.9         元           S 234         石談         サヌカイト         19.0         16.5	-											中加工品
S224         有職         サヌカイト         16.0         13.0         2.5         — 0.4         保護完           S226         石蔵         サヌカイト         14.5         14.5         4.0         — 0.6         完           S227         石蔵         サヌカイト         15.0         14.5         3.0         — 0.6         欠           S228         石臓         サヌカイト         13.0         16.0         2.5         — 0.6         欠           S229         石臓         サヌカイト         14.0         15.5         3.0         — 0.6         欠           S220         石臓         サヌカイト         14.0         15.5         3.0         — 0.6         欠           S231         石臓         サヌカイト         15.0         15.0         3.5         — 0.7         124元           S232         石臓         サヌカイト         19.0         16.5         3.0         — 0.7         124元           S232         石臓         サヌカイト         19.0         16.5         3.0         — 0.7         124元           S232         石臓         サヌカイト         19.0         16.0         3.5         — 0.9         完           S233         石臓         サヌカイト         19.0         16.0	-											
S225     石鏃     サヌカイト     14.5     14.5     14.0     - 0.6     完       5 226     石鏃     サヌカイト     15.0     14.5     3.0     - 0.6     欠       5 227     千銭     サヌカイト     18.5     12.5     2.5     - 0.6     欠       5 228     石蕊     サヌカイト     14.0     15.5     3.0     - 0.6     欠       5 231     石蕊     サヌカイト     15.0     15.0     14.0     0.6     欠       5 231     石蕊     サヌカイト     15.0     15.0     3.0     - 0.7     ほぼ完       5 232     石鏃     サヌカイト     15.0     15.0     3.0     - 0.7     ほぼ完       5 232     石鏃     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     - 0.7     ほぼ完       5 233     石鏃     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     - 0.9     完       5 234     大     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     - 0.8     欠       5 225     石鏃     サヌカイト     19.0     16.0     40     - 1.1     欠       5 237     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     - 0.8     欠       5 238     石臓     サヌカイト     21.5     16.5     40     - 1.2     ほぼ完	-											
S 226   石談 サヌカイト	-											
S 227     石田     サヌカイト     18.5     12.5     2.5     - 0.7     完       S 228     石田     サヌカイト     13.0     16.0     2.5     - 0.6     欠       S 229     石田     サヌカイト     14.0     15.5     3.0     - 0.6     欠       S 231     石田     サヌカイト     15.5     12.0     4.0     0.6     欠       S 231     石田     サヌカイト     15.0     15.0     3.5     - 0.7     ほぼ元       S 232     石田     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     - 0.9     完       C 233     石田     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     - 0.9     完       S 234     イ田     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     - 0.8     欠       S 235     イ田     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     - 0.8     欠       S 237     石田     サヌカイト     19.5     13.5     3.5     - 0.8     欠       S 238     石田     サヌカイト     12.5     16.5     4.0     - 1.1     欠       S 240     石田     サヌカイト     21.5     16.5     4.0     - 1.2     ほぼ光       S 241     石田     サヌカイト     25.0     16.0     5.0     - 1.4     ほぼ光	-											
S 228       石臓       サヌカイト       13.0       16.0       2.5       - 0.6       欠       弥生中期         S 239       石磯       サヌカイト       14.0       15.5       3.0       - 0.6       欠         S 231       石磯       サヌカイト       15.0       15.0       3.5       - 0.7       ほぼ光         S 232       石磯       サヌカイト       17.0       17.5       3.0       - 0.7       ほぼ光         S 233       石磯       サヌカイト       19.0       16.5       3.5       - 0.9       完         S 234       石磯       サヌカイト       19.0       17.0       2.5       - 0.8       欠         S 235       石磯       サヌカイト       19.0       17.0       2.5       - 0.8       欠         S 236       石磯       サヌカイト       19.0       17.0       2.5       - 0.8       欠         S 237       石磯       サヌカイト       19.0       16.5       3.0       - 0.8       欠         S 243       石磯       サヌカイト       21.5       16.5       3.0       - 0.8       欠         S 249       石磯       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.1       皮球売         S 241       石磯       サヌカイト	-											
S229     石鏃?     サヌカイト     14.0     15.5     3.0     - 0.6     欠       S230     石鏃     サヌカイト     15.5     12.0     4.0     0.6     欠       S231     石鏃     サヌカイト     15.0     15.0     3.5     - 0.7     6.4       S232     石鏃     サヌカイト     11.0     17.5     3.0     - 0.7     6.4       S233     石鏃     サヌカイト     119.0     16.5     3.5     - 0.9     完       S234     石鏃     サヌカイト     119.0     17.0     2.5     - 0.8     欠       S235     石鏃     サヌカイト     119.5     13.5     3.5     - 0.8     欠       S236     石鏃     サヌカイト     11.5     16.0     4.0     - 1.1     欠       S237     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     - 0.8     欠       S239     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     - 0.8     完       S240     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     4.0     - 1.2     ほぼ完       S241     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     5.0     - 1.4     はぼ完       S242     石鏃     サヌカイト     12.0     20.0     5.0     - 1.4     はぼ完	-										76:7f-11:HH	
S230     石鏃     サヌカイト     15.5     12.0     4.0     0.6     欠       S231     イ繊     サヌカイト     15.0     15.0     3.5     -     0.7     ほぼ完       S232     石鏃     サヌカイト     17.0     17.5     3.0     -     0.7     ほぼ完       S233     石鏃     サヌカイト     19.0     16.5     3.5     -     0.8     欠       S235     イ繊     サヌカイト     19.5     13.5     3.5     -     0.8     欠       S237     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     -     0.8     欠       S237     石鏃     サヌカイト     19.5     13.5     3.5     -     0.8     欠       S238     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     -     1.1     欠       S238     医穴住居ち     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     -     1.2     ほぼ完       S240     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     4.0     -     1.2     ほぼ完       S241     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     5.0     -     1.5     ほぼ完       S242     石鏃     サヌカイト     12.0     12.0     20.0     5.0     -     1.4     ほぼ完	-										30.77.1340	
S 231       有職       サヌカイト       15.0       15.0       3.5       -       0.7       ほぼ完         S 232       石酸       サヌカイト       17.0       17.5       3.0       -       0.7       ほぼ完         S 234       石酸       サヌカイト       19.0       16.5       3.5       -       0.9       完         S 235       イ酸       サヌカイト       19.0       17.0       2.5       -       0.8       欠         S 236       石臓?       サヌカイト       19.5       18.5       16.0       4.0       -       1.1       欠         S 237       石酸       サヌカイト       21.5       16.5       3.0       -       0.8       欠         S 239       要次住居15       石酸       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       -       1.2       ほぼ完         S 240       石酸       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       -       1.2       ほぼ完         S 241       石酸       サヌカイト       21.5       16.0       5.5       -       2.1       欠         S 242       石酸       サヌカイト       21.0       20.0       5.0       -       1.4       ほぼ完         S 243       石酸       サヌカイト	-											
S 232         石酸         サヌカイト         17.0         17.5         3.0         -         0.7         ほぼ完           S 233         5 234         石酸         サヌカイト         19.0         16.5         3.5         -         0.9         完           S 235         5 236         イ酸         サヌカイト         19.5         13.5         3.5         -         0.8         欠           S 237         5 238         石酸         サヌカイト         21.5         16.5         3.0         -         0.8         完           S 239         整穴住屋15         石酸         サヌカイト         21.5         16.5         4.0         -         1.1         欠           S 240         石酸         サヌカイト         21.5         16.5         4.0         -         1.2         ほぼ宅           S 240         石酸         サヌカイト         23.5         17.0         5.0         -         1.4         ほぼ宅           S 241         石酸         サヌカイト         25.0         16.0         5.5         -         2.1         欠           S 242         石酸         サヌカイト         12.0         20.0         5.0         -         1.4         ほぼ宅           S 241         石酸	-							_				
S 233       石鏃       サヌカイト       19.0       16.5       3.5       - 0.9       完         S 234       イ籤       サヌカイト       19.0       17.0       2.5       - 0.8       欠         S 236       石籤       サヌカイト       19.5       13.5       3.5       - 0.8       欠         E 237       石籤       サヌカイト       18.5       16.0       4.0       - 1.1       欠         E 238       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.2       ほぼ完         E 248       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.2       ほぼ完         E 249       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.2       ほぼ完         E 241       サヌカイト       21.0       20.0       5.0       - 1.4       ほぼ完         E 242       サヌカイト       12.0       10.0       5.0       - 1.4       ほぼ完         E 243       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       - 0.3       次         E 244       サヌカイト       13.5       13.0       2.5       - 0.4       元         E 245       サヌカイト       16.5       13.5       2.0       - 0.4       ほぼ完         E 246       サヌカイト	-											
S 234       行談       サヌカイト       19.0       17.0       2.5       - 0.8       欠         S 235       石臓?       サヌカイト       19.5       13.5       3.5       - 0.8       欠         T 6歳?       サヌカイト       18.5       16.0       4.0       - 1.1       欠         S 238       サヌカイト       21.5       16.5       3.0       - 0.8       完         S 239       子蔵       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.2       ほぼ完         S 240       石臓       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.5       ほぼ完         S 241       石臓       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.5       ほぼ完         S 241       石臓       サヌカイト       22.5       17.0       5.0       - 1.4       ほぼ完         S 241       石臓       サヌカイト       9.5       11.0       3.0       - 0.3       欠         S 242       石臓       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       - 0.3       欠         S 243       石臓       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       - 0.3       欠         S 246       石臓       サヌカイト       18.5       14.0       4.0 </td <td><math>\overline{}</math></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>_</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td>	$\overline{}$							_				
S 235       イ臓       サヌカイト       19.5       13.5       3.5       - 0.8       欠         S 236       石蔵?       サヌカイト       18.5       16.0       4.0       - 1.1       欠         S 237       石臓       サヌカイト       21.5       16.5       3.0       - 0.8       完         S 238       イ臓       サヌカイト       21.5       16.5       4.0       - 1.2       ほぼ完         S 240       石織       サヌカイト       23.5       17.0       5.0       - 1.5       ほぼ完         S 241       石織       サヌカイト       21.0       20.0       5.0       - 1.4       ほぼ完         S 241       石織       サヌカイト       9.5       11.0       3.0       - 0.3       欠         S 242       石織       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       - 0.3       欠         S 243       石織       サヌカイト       11.0       12.0       13.0       - 0.3       欠         S 244       石臓       サヌカイト       11.5       13.5       13.0       2.5       - 0.4       完         S 245       イ織       サヌカイト       18.5       14.0       4.0       - 0.9       完         S 248       石織       サヌカイト	-							_				
S 236     石鏃?     サヌカイト     18.5     16.0     4.0     -     1.1     欠       S 237     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     -     0.8     完       S 238     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     4.0     -     1.2     ほぼ完       S 240     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     5.0     -     1.5     ほぼ完       S 241     石鏃     サヌカイト     21.0     20.0     5.0     -     1.4     ほぼ完       S 242     石鏃     サヌカイト     12.0     12.0     3.0     -     0.3     欠       S 243     石鏃     サヌカイト     13.5     13.0     2.5     -     0.4     完       S 244     石鏃     サヌカイト     16.5     13.5     2.0     -     0.4     完       S 244     石鏃     サヌカイト     16.5     13.5     2.0     -     0.4     完       S 245     石鏃     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     -     0.6     欠       S 246     石鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     欠       S 248     石鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     欠	$\overline{}$											
S 237     石鏃     サヌカイト     21.5     16.5     3.0     - 0.8     完       S 238     野次カイト     21.5     16.5     4.0     - 1.2     ほぼ完       S 240     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     5.0     - 1.5     ほぼ完       S 241     石鏃     サヌカイト     25.0     16.0     5.5     - 2.1     欠       S 241     石鏃     サヌカイト     21.0     20.0     5.0     - 1.4     ほぼ完       S 242     石鏃     サヌカイト     9.5     11.0     3.0     - 0.3     欠       S 243     石鏃     サヌカイト     12.0     12.0     3.0     - 0.3     欠       S 244     石鏃     サヌカイト     16.5     13.5     2.0     - 0.4     庶ぼ完       S 245     イ織     サヌカイト     16.5     13.5     2.0     - 0.4     庶ぼ完       S 246     イ織     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     - 0.6     欠       S 247     石織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     - 0.6     欠       S 248     石織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     - 0.6     欠       S 249     イ織     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     - 0.7     戻       S 251<	$\overline{}$										1	
S 238         野次位居15         石鏃         サヌカイト         21.5         16.5         4.0         -         1.2         ほぼ完           S 240         石鏃         サヌカイト         23.5         17.0         5.0         -         1.5         ほぼ完           S 241         石鏃         サヌカイト         25.0         16.0         5.5         -         2.1         欠           S 242         石鏃         サヌカイト         21.0         20.0         5.0         -         1.4         ほぼ完           S 243         石鏃         サヌカイト         9.5         11.0         3.0         -         0.3         欠           S 244         石鏃         サヌカイト         12.0         12.0         3.0         -         0.3         欠           S 245         石鏃         サヌカイト         13.5         13.0         2.5         -         0.4         完           S 246         石鏃         サヌカイト         18.5         14.0         4.0         -         0.9         完           S 248         石鏃         サヌカイト         19.0         16.0         3.0         -         0.6         欠           S 249         石鏃         サヌカイト         19.0         16.0         3	-										1	
S 239     竪穴住居15     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     5.0     -     1.5     ほぼ完       C 241     石鏃     サヌカイト     25.0     16.0     5.5     -     2.1     欠       C 242     石鏃     サヌカイト     21.0     20.0     5.0     -     1.4     ほぼ完       S 242     石鏃     サヌカイト     12.0     12.0     3.0     -     0.3     欠       S 243     石鏃     サヌカイト     13.5     13.0     2.5     -     0.4     完       S 244     石鏃     サヌカイト     16.5     13.5     2.0     -     0.4     完       S 246     石鏃     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     -     0.6     欠       S 248     石鏃     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     -     0.6     欠       S 249     石鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     欠       S 250     石鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     穴       S 251     石鏃     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 252     石鏃     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完	-										1	
S 240       石鏃?       サヌカイト       25.0       16.0       5.5       -       2.1       欠         S 241       石鏃       サヌカイト       21.0       20.0       5.0       -       1.4       ほぼ完         S 242       石鏃       サヌカイト       9.5       11.0       3.0       -       0.3       欠         S 243       石鏃       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       -       0.3       完         S 244       石鏃       サヌカイト       13.5       13.0       2.5       -       0.4       完         S 245       石鏃       サヌカイト       16.5       13.5       2.0       -       0.4       ほぼ完         S 246       石鏃       サヌカイト       18.5       14.0       4.0       -       0.9       完         S 247       石鏃       サヌカイト       16.0       14.0       2.5       -       0.6       欠         S 248       石鏃       サヌカイト       19.0       16.0       3.0       -       0.6       完         S 250       石鏃       サヌカイト       20.5       15.5       3.0       -       0.7       完         S 251       石鏃       サヌカイト       19.0       20.0 <td< td=""><td>-</td><td>竪穴住居15</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td></td></td<>	-	竪穴住居15									1	
S241       石鏃       サヌカイト       21.0       20.0       5.0       -       1.4       ほぼ完         S242       石鏃       サヌカイト       9.5       11.0       3.0       -       0.3       欠         S243       石鏃       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       -       0.3       穴         S244       石鏃       サヌカイト       13.5       13.0       2.5       -       0.4       完         S245       イ鏃       サヌカイト       16.5       13.5       2.0       -       0.4       完         S246       イ鏃       サヌカイト       18.5       14.0       4.0       -       0.9       完         S247       石鏃       サヌカイト       16.0       14.0       2.5       -       0.6       欠         S248       石鏃       サヌカイト       19.0       16.0       3.0       -       0.6       穴         S249       イ鏃       サヌカイト       19.0       16.0       3.0       -       0.6       完         S250       石鏃       サヌカイト       20.5       15.5       3.0       -       0.7       完         S251       石鏃       サヌカイト       19.0       20.0       3.5	-											
S 242       石鏃       サヌカイト       9.5       11.0       3.0       -       0.3       欠         S 243       石鏃       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       -       0.3       欠         S 244       石鏃       サヌカイト       13.5       13.0       2.5       -       0.4       完         S 245       イ鏃       サヌカイト       16.5       13.5       2.0       -       0.4       ほぼ完         S 246       イ繊       サヌカイト       18.5       14.0       4.0       -       0.9       完         S 247       石鏃       サヌカイト       16.0       14.0       2.5       -       0.6       欠         S 248       石鏃       サヌカイト       19.0       16.0       3.0       -       0.6       完         S 249       イ織       サヌカイト       20.5       15.5       3.0       -       0.7       完         S 250       石織       サヌカイト       20.5       15.5       3.0       -       0.7       完         S 251       石織       サヌカイト       19.0       20.0       3.5       -       1.0       ほぼ完         S 252       石織       サヌカイト       19.0       16.0	$\overline{}$										1	
S 243       石臓       サヌカイト       12.0       12.0       3.0       -       0.3       完         S 244       石臓       サヌカイト       13.5       13.0       2.5       -       0.4       完         S 245       石臓       サヌカイト       16.5       13.5       2.0       -       0.4       ほぼ完         S 246       石臓       サヌカイト       18.5       14.0       4.0       -       0.9       完         S 247       石鏃       サヌカイト       16.0       14.0       2.5       -       0.6       欠         S 248       石鏃       サヌカイト       19.0       16.0       3.0       -       0.6       完         S 249       イ織       サヌカイト       19.0       16.0       3.0       -       0.6       完         S 250       石織       サヌカイト       20.5       15.5       3.0       -       0.7       完         S 251       石織       サヌカイト       19.0       20.0       3.5       -       1.0       ほぼ完         S 252       イ織       サヌカイト       19.0       16.0       3.0       -       0.7       欠         S 253       イ織       サヌカイト       19.0       16.0 <td< td=""><td>-</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></td<>	-											
S 244     石鏃     サヌカイト     13.5     13.0     2.5     -     0.4     完       S 245     石鏃     サヌカイト     16.5     13.5     2.0     -     0.4     ほぼ完       S 246     石鏃     サヌカイト     18.5     14.0     4.0     -     0.9     完       S 247     石鏃     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     -     0.6     欠       S 248     石鏃     サヌカイト     20.0     15.0     3.2     0.7     ほぼ完       S 249     イ鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     完       S 250     石鏃     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     -     0.7     完       S 251     石鏃     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 252     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 253     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石織     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石織     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     欠       S 256 <td>-</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>_</td> <td></td> <td></td> <td>1</td> <td></td>	-							_			1	
S 245     石鏃     サヌカイト     16.5     13.5     2.0     -     0.4     ほぼ完       S 246     石鏃     サヌカイト     18.5     14.0     4.0     -     0.9     完       S 247     石鏃     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     -     0.6     欠       S 248     石鏃     サヌカイト     20.0     15.0     3.2     0.7     ほぼ完       S 249     イ鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     完       S 250     石鏃     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     -     0.7     完       S 251     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     4.0     -     1.1     完       S 252     イ繊     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石織     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石織     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     欠       S 256     イ織     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	$\overline{}$										1	
S 246     イ徽     サヌカイト     18.5     14.0     4.0     -     0.9     完       S 247     石鏃     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     -     0.6     欠       S 248     石鏃     サヌカイト     20.0     15.0     3.2     0.7     ほぼ完       S 249     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     完       S 250     石鏃     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     -     0.7     完       S 251     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     4.0     -     1.1     完       S 252     イ織     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石織     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石織     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     欠       S 256     イ織     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	$\vdash$											
S 247     石鏃     サヌカイト     16.0     14.0     2.5     -     0.6     欠       S 248     石鏃     サヌカイト     20.0     15.0     3.2     0.7     ほぼ完       S 249     イ協     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     完       S 250     石鏃     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     -     0.7     完       S 251     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     4.0     -     1.1     完       S 252     イ繊     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     イ繊     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石織     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石織     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     穴       S 256     イ織     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	-										1	
S 248     石鏃     サヌカイト     20.0     15.0     3.2     0.7     ほぼ完       S 249     イ3鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     完       S 250     石鏃     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     -     0.7     完       S 251     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     4.0     -     1.1     完       S 252     イ3鏃     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     イ3銭     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石銭     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石銭     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ3銭     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	$\overline{}$										1	
S 249     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.6     完       S 250     石織     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     -     0.7     完       S 251     石織     サヌカイト     23.5     17.0     4.0     -     1.1     完       S 252     イ織     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石織     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石織     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ織     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	-										1	
S 250     石鏃     サヌカイト     20.5     15.5     3.0     -     0.7     完       S 251     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     4.0     -     1.1     完       S 252     石鏃     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     イ鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石鏃     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石鏃     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ繊     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	$\overline{}$							-			1	
S 251     石鏃     サヌカイト     23.5     17.0     4.0     -     1.1     完       S 252     石鏃     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     イ鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石鏃     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石鏃     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ繊     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	$\overline{}$							_			1	
S 252     石鏃     サヌカイト     19.0     20.0     3.5     -     1.0     ほぼ完       S 253     石鏃     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石鏃     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石鏃     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ繊     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	-							_			1	
S 253     イ織     サヌカイト     19.0     16.0     3.0     -     0.7     欠       S 254     石鏃     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石鏃     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ織     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	$\overline{}$										1	
S 254     石鏃     サヌカイト     19.0     21.5     3.5     -     1.1     完       S 255     石鏃     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ協     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	-											
S 255     石鏃     サヌカイト     15.0     10.5     2.0     -     0.3     完       S 256     イ協     サヌカイト     12.0     13.5     2.0     -     0.3     欠	-							_			1	
S 256 イ織 サヌカイト 12.0 13.5 2.0 - 0.3 欠	$\overline{}$							_			1	
	-							_			1	
1   1   1   1   1   1   1   1   1   1	S 257		石鏃	サヌカイト	17.5	15.5	3.5	_	0.8	完	1	

掲載 番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (mm)	原み (nm)	孔径 (mm)	重量 (g)	残存率	時期	備考
S 258		石鏃	サヌカイト	12.5	14.5	3.7	-	0.6	欠		
S 259		石鏃	サヌカイト	22.0	14.5	4,2	-	1,0	ほぼ完		
S 260		石鏃	サヌカイト	18.0	16.0	2.5	_	0.8	欠		
S 261		イi鏃	サヌカイト	19.5	14.5	3.0	_	0.6	欠		
S 262		石鏃	サヌカイト	20.0	15.0	3.5	_	0.8	欠		
S 263		石鏃	サヌカイト	20.0	15.5	3.5	_	0.8	完		
S 264 S 265		石鏃	サヌカイトサヌカイト	20.5	15.0 15.5	4.3 3.5	_	0.9	欠		
S 266		石鏃	サヌカイト	25.0	16.0	4.7		1.2	ほぼ完		
S 267		石鏃	サヌカイト	24.0	15.0	4.0	_	1.2	欠		
S 268		石鏃	サヌカイト	12.0	14.0	2.0	_	0.3	欠		
S 269		イi鏃	サヌカイト	15.5	12.5	3.0	_	0.4	欠		
S 270		石鏃	サヌカイト	18.0	10.5	3.5	_	0.4	ほぼ完		
S 271		石鏃?	サヌカイト	18.0	14.0	2.5	-	0.7	欠		
S 272		石鏃	サヌカイト	26.5	17.5	3.0	_	0.8	欠		
S 273		石鏃?	サヌカイト	20.5	16.0	3.5	_	1.4	欠		
S 274		石鏃?	サヌカイト	24.0	19.5	4.0	_	1.7	欠		
S 275		磨製石包丁	緑色片岩	113.0	66.0	12.0		139.8			未成品
S 276		イi錐	サヌカイト	30.0	10.0	3.5	_	0.7	完		
S 277		石錐	サヌカイト	17.5	5.5	3.5	_	0.3	欠		
S 278		石錐	サヌカイト	22.0	7.0	5.0	_	0.8	欠		
S 279		石錐	サヌカイト	25.5	12.0	4.5	_	1.4	完		
S 280 S 281		石錐 石錐	サヌカイトサヌカイト	19.0 18.5	9.0 7.5	3.5 2.5	_	0.7	欠		
S 282	竪穴住居15	石錐	サヌカイト	23.5	12.0	5.0		0.4	定		
S 283		1.1 新 イ i 錐	サヌカイト	16.5	9.5	3.5		0.6	欠		
S 284		石錐	サヌカイト	24.0	8.5	4.0	_	0.7	完?		
S 285		石錐	サヌカイト	28.0	12.0	4.4	_	1.1	完		
S 286		石錐	サヌカイト	31.0	14.5	4.0	_	1.6	完		P13
S 287		石錐	サヌカイト	33.0	11.5	5.0	_	2.1	完		
S 288		石錐?	サヌカイト	17.0	12.5	4.0	-	0.8	欠?		
S 289		石錐?	サヌカイト	17.5	14.5	4.0	_	0.7	欠?		
S 290		石錐?	サヌカイト	18,0	15.5	3,5	_	0.7	欠	弥生中期	
S 291		石錐?	サヌカイト	19.0	17.0	3.5	_	0.9	完		
S 292		Ti錐	サヌカイト	19.0	16.0	3.5	_	0.8	完		
S 293		石錐?	サヌカイト	21.5	15.0	3.5	_	0.9	完		
S 294		石錐	サヌカイト	19.5	18.0	4.5	_	1.0	完		
S 295		石錐?	サヌカイト	20.5	24.0	5.0		2.3	欠		
S 296 S 297		石錐?	サヌカイトサヌカイト	27.0	21.5 12.0	3.0 4.5		2.0	欠欠		
S 298		スクレイパー	サヌカイト	42.5	22.5	8.0	_	6.2	完		
S 299		スクレイパー	流紋岩	78.0	68.0	14.5	_	86.7	完		
S 300		スクレイパー	角閃石頁岩	88.0	61.0	7.5	_	31.7	欠?		
S 301		スクレイパー	角閃石安山岩	101.0	86.0	19.5	_	173.9	龙		
S 302		スクレイパー	砂岩	145.0	97.0	23.0	_	315.0	欠?	]	
S 303		スクレイパー	砂岩	152.5	135.0	32.0	-	656.8	完		S476と接合関係
S 304		砥石	砂岩(流紋岩質)	86.0	76.5	56.0	_	380.3	欠		
S 305		碧玉未成品	碧玉	66.5	47.5	31.5	_	131.4	-		
S 306		石鏃	サヌカイト	26.0	25.0	5.0	_	2.9	欠		
S 307		石鏃	サヌカイト	18.0	14.5	2.5	_	0.5	完		
S 308		石鏃	サヌカイト	17.0	16.0	4,0	_	0,8	欠		
S 309 S 310	竪穴住居16	石鏃	サヌカイト	12.5	17.5	3.7	_	0.8	欠		
S 310	○八日本台10	石鏃 石錐	サヌカイトサヌカイト	16.0 23.5	19.0 15.0	5.0 3.7	_	1.7	欠		
\$312		石錐	サヌカイト	46.5	14.0	6.5		3.8	欠		
S 313		スクレイパー	サヌカイト	61.5	38.0	11.0		17.7	完?		
S 314		楔	サヌカイト	47.0	31.5	7.0	_	11.1	完		
S 315		石鏃	サヌカイト	23.0	17.5	3.5	_	1.0	完		
S 316		石鏃	サヌカイト	18.5	15.0	2.5	_	0.7	ほぼ完	1	
S 317		<b>台</b> 錐	サヌカイト	29.5	10.5	5.0	-	1.2	完		
S 318	竪穴住居18	磨製石包丁	砂岩	78.0	29.5	6.0	-	16.5	_		再加工品
S 319	3E/ VILI/II 10	磨製石包丁	黑色片岩	113.0	45,5	10,0	_	63.3	完?		
S 320		敲石	角閃石安山岩	115.0	62.5	29.0	_	317.3	完		
S 321		低石	砂岩(細粒)	179.0	91.5	20.0	_	311.3	完		
S 322		砥石	砂岩	210.0	132.5	113.0	_	3350.0	完		

掲載 番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (mm)	厚み (mm)	孔径 (nm)	重量 (g)	残存率	時期	備考
S 323		石鏃	サヌカイト	29.5	20.5	4.7	_	1.6	完		
S 324		石鏃	サヌカイト	24,0	13,5	4,0	_	1.1	ほぼ完		
S 325		石鏃	サヌカイト	24.5	16.0	3.5		1.0	欠		
S 326		イi鏃	サヌカイト	12.5	17.0	3.0	_	0.6	欠		
S 327		イi鏃	サヌカイト	21.5	15,5	4.0	_	0.9	完		
S 328		石鏃	サヌカイト	16.0	18.5	3.0	_	0.6	%		
S 329		石鏃	サヌカイト	14.0	15.5	3.0		0.6	完		
S 330		石鏃	サヌカイト	18.0	12.0	3.0		0.5	ほぼ完		
S 331		石鏃	サヌカイト	16.5	12.5	3.5		0.6	完		
S 332		石鏃	サヌカイト	20.0	13.5	2.9		0.9	ほぼ完		
S 333		石鏃	サヌカイト	27.0	17.0	4.5		1.6	ほぼ完		
S 334		fi鏃	サヌカイト	23.0	15.5	4.0		1.1	完		
S 335		石鏃	サヌカイト	22,5	17.5	3.0	_	1.0	ほぼ完		
S 336		石鏃	サヌカイト	22.0	14.0	2.5		0.9	欠		
S 337		イi鏃	サヌカイト	19.0	17.0	2.3	_	0.8	欠		
S 338		Ti鏃	サヌカイト	21.5	16.5	3.0	_	0.9	ほぼ完		
S 339		石鏃	サヌカイト	20.7	15.9	3.7	_	1.0	ほぼ完		
S 340		石鏃	サヌカイト	19.5	15.0	3.4		0.9	完		
S 341		石鏃	サヌカイト	19.0	17.0	3.5		0.9	完	-	
S 342		石鏃	サヌカイト	19.5	13.5	4.5		1.0	完		
S 343		石鏃	サヌカイト	18.0	12.0	2.2		0.5	ほぼ完		
S 344		石鏃	サヌカイト	19.0	11.5	2.5		0.5	完		
S 345		/i鏃	サヌカイト	13.5	14.0	3.0		0.6	ほぼ完		
S 346		石鏃	サヌカイト	14.5	12.0	2.3		0.4	沧		
S 347		石鏃	サヌカイト	14.0	12.0	2.0		0.3	完		
S 348		石鏃	サヌカイト	13.0	13.0	2.7		0.5	欠		
S 349 S 350	竪穴住居19	石錐	サヌカイト	20.0	9.0	3.7		0.6	完		
S 350	宏八川、四18	石錐	サヌカイト	20.5	9,5	4.0		0.6	完完	弥生中期	
S 352		石錐	サヌカイト	-	10.5	4.5		0.9	完	沙江:中州	
S 353		1 年 1 行錐	サヌカイト	21.0 25.5	9.0	5.3		1.1	完		
S 354		石雞?	サヌカイト	27.5	10.5	4.6		1.4	完		
S 355		石錐	サヌカイト	24.0	11.0	6,3		1,4	完		
S 356		石錐	サヌカイト	23.0	13.5	3.5		1.0	ほば完		
S 357		石錐?	サヌカイト	22.0	17.5	5.4		1,9	完		
S 358		石錐	サヌカイト	20.5	9.0	5.0	_	0.9	ほぼ完		
S 359		石錐	サヌカイト	16.5	10.5	4.0		0.9	完		
S 360		石錐	サヌカイト	15.0	9.6	2.9		0.5	ほぼ完		
S 361		石錐	サヌカイト	20.5	11.0	5.3	_	0.9	ほぼ完		
S 362		石錐	サヌカイト	17.0	14,0	4,0	_	0,9	完		
S 363		石錐	サヌカイト	37.0	11.0	4.5	_	2.1	完		
S 364		<b>石錐</b>	サヌカイト	38.5	8.0	6.5	_	2.0	完		
S 365		石錐	サヌカイト	41.0	10.0	5.0	_	1,7	完		
S 366		石錐	サヌカイト	29.0	11.5	4.0	_	1.3	%		
S 367		石錐	サヌカイト	30.5	17.0	5.0	_	1.4	完	1	
S 368		/i錐	サヌカイト	28.5	8.8	4.5	_	1.1	ほぼ完	1	
S 369		石錐?	サヌカイト	12.5	10.0	3.0	_	0.5	欠	1	
S 370		管玉未成品	碧玉	14.5	2.6	2.6	_	0.2	_	1	
S 371		管玉未成品	碧玉	13.0	8.5	4.5	_	0.7	_	1	やや質が悪い
S 372		扁平片刃石斧	緑色片岩	45.5	29.5	7.0	_	19.5	完	1	
S 373		磨製石包丁	緑色片岩	97.0	54.0	6,5	_	48,8	_		未成品
S 374		打製石包丁?	サヌカイト	81.0	48.0	7.5	_	30.9	完		
S 375		敲石	黒雲母花崗岩 (細粒)	98.0	87.5	52.5	_	620.6	完		
S 376		敲石	角閃石安山岩	152.0	90.0	50.5	_	1041.3	完		
S 377		砥石	砂岩 (細粒)	367.5	93.0	72.0	_	3145.0	完		
S 378	竪穴住居20	太型蛤刈石斧	角閃石頁岩	126.0	60.0	43.5		520.8	欠		
S 379	上壙84	石包丁	粘板岩	101.0	45.5	19.0	_	117.3	_		未成品
S 380		石鍬	緑色片岩	103.5	59.0	20.0	_	168.9	完	弥生中期?	
S 381	上壙94	敲石	安山岩	98.5	88.5	60.5	_	816.5	完	弥生中期	
S 382	水田1	石鏃	サヌカイト	28.0	19.5	5,0	_	2.2	欠		
S 383	A STANLEY	Ti鳅	安山岩(黒色ガラス質)	85.5	39.0	10.0	_	37.8	完	弥生中期?	
S 384		スクレイパー	サヌカイト	21.0	36,0	5.0	_	4.7	78 78		
S 385	溝1	スクレイバー	サヌカイト	43.0	30.0	5.0	_	6.3	完	弥生	
S 386		スクレイパー	サヌカイト	48.0	25.5	5.7	_	7.5	完		
S 387		スクレイパー	サヌカイト	42.0	35.0	5.0	_	7.2	完		

掲載 番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (mm)	厚み (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	残存率	時期	備考
S 388		スクレイパー	サヌカイト	58,5	39.5	5.5	_	10.0	完		
S 389		スクレイパー	サヌカイト	54.5	36.0	9.5	_	9.7	完	1	
S 390		スクレイパー	サヌカイト	54.0	69.0	12.5	_	35.8	完	1	
S 391		スクレイパー	サヌカイト	42.5	44.5	7.0	_	13.8	完	1	
S 392	溝 4	スクレイパー	サヌカイト	50.0	37.5	7.0	_	15.4	完	1	
S 393		石錐	サヌカイト	64.0	42.5	7.0	_	14.9	完		
S 394		イi錐	サヌカイト	64.0	39.0	8.5	_	16.2	完		
S 395		右錐	サヌカイト	28.5	21.0	5.5	_	2.4	完	1	
S 396		太型蛤刃石斧	緑色片岩	65.0	61.0	26.0	_	174.6	欠	1	
S 397		石鏃	サヌカイト	22.5	15.0	3.0	-	0.9	欠	1	
S 398		石鏃	サヌカイト	17.0	15.0	2.5	_	0.6	ほぼ完	1	
S 399		石鏃	サヌカイト	18.5	14.0	3.0	_	0.6	完		
S 400		石鏃	サヌカイト	14.5	17.5	3.5	_	0.8	欠		
S 401		石鏃	サヌカイト	19.0	16,0	3,5	_	0.8	欠	- 弥生	
S 402		石鏃	サヌカイト	18.5	16.0	3.0	_	0.8	欠		
S 403		石鏃	サヌカイト	12.0	15.0	3.0	_	0.5	欠	-	
S 404		/i鏃	サヌカイト	30.5	17.5	5.0	_	2.2	完	1	
S 405		行鏃	サヌカイト	18.5	13.0	3.0	_	0.5	完	-	
S 406	満13	イi鏃	サヌカイト	15.0	14.0	2.5	_	0.5	欠	1	
S 407		/i鏃	サヌカイト	21.5	17.0	2.5	_	0.6	欠	1	
S 408		石錐	サヌカイト	26.0	9.0	4.5	_	0.9	欠	1	
S 409		石錐	サヌカイト	31.0	12.5	4.0		1.1	完	1	
S 410		石錐	サヌカイト	25.5	18.0	6.0	_	1.8	欠	-	
S 411		楔	サヌカイト	21.5	25.5	4.5		2.3	完	-	
S 411		スクレイパー?	サヌカイト	37.0	39.5						
S 412		スクレイハー:   磨製石包				6.0		11.3	完		再加工品
			緑色片岩	88.5	33.5	6.0		20.6		The fle o	門加工品
S 414		石鍬	緑色片岩	105.5	50.5	15.0	_	108.2	ほぼ完	弥生?	
S 415		敲石?	角閃石安山岩	185.0	54.0	76.0	_	117.0	完	弥生	
S 416		石鏃	サヌカイト	20.0	18.0	3.5	_	0.7	5E	_	
S 417		石鏃	サヌカイト	19.5	15.0	4.5	_	0.9	ほぼ完	-	
S 418		石鏃	サヌカイト	14.5	18.0	3.0	_	0.7	欠		
S 419		石鏃	サヌカイト	23.0	17.0	4.5	_	1.5	完		
S 420		石鏃	サヌカイト	18.5	16.0	4.0	_	0.9	欠		
S 421		石鏃	サヌカイト	19.5	15.5	4.0	_	0,9	ほぼ完		
S 422		石鏃	サヌカイト	16.0	12.5	2.5	_	0.4	欠	-	
S 423	溝14・15	石鏃	サヌカイト	15.0	11.0	2.0	_	0.3	欠	21.21 1.44	
S 424		イi鏃	サヌカイト	10.5	13.5	2.0	_	0.3	欠	弥生中期	
S 425		イi鏃	サヌカイト	13.5	14.0	2.5	_	0.4	ほぼ完		
S 426		石錐?	サヌカイト	12.5	12.5	3.0	_	0.5	火		
S 427		イi錐	サヌカイト	39.5	13.0	5.5	_	2.3	完		
S 428		石錐	サヌカイト	37.5	10.0	4.0	_	1.3	完		
S 429		石錐	サヌカイト	27.0	6.0	3.5	_	0.6	完		
S 430		石錐?	サヌカイト	18.5	16.0	3.0	_	0.8	欠		
S 431		石錐?	サヌカイト	20.0	22.5	5.0	_	2.2	欠		
S 432	溝17	石鏃?	サヌカイト	23.0	18.5	3.5	_	1.4	欠		
S 433		磨製石包」	流紋岩	121.0	48.0	11.0	_	64.9	欠		
S 434		磨製石包」	流紋岩	75.0	54.0	6.0	_	27.8	_		再加工品
S 435		磨製石包」	緑色片岩	86.5	39.0	8.5	_	33.6	欠		
S 436		磨製石包丁	緑色片岩	85.0	45.5	7.5	_	45.7	欠		
S 437		磨製石包丁	粘板岩	35.0	20.0	5.0	-	5.0	欠	]	S 208と同一個体
S 438		磨製石包丁	流紋岩	77.0	46.5	7.5	-	37.8	欠	]	
S 439		磨製石包丁	流紋岩	105.0	30.0	26.0	-	102.9	欠	]	
S 440		磨製石包丁	緑色片岩	70.5	50.5	6.0	-	30.1	欠		
S 441		磨製石包丁	緑色片岩	82.0	50.5	8.0	_	42.3	欠		
				1	32.5	5.0	_	10.0	欠		
S 442		磨製石包丁	緑色片岩	44.0					L &	弥生.	I
	遺構に伴わない遺物		緑色片岩 サヌカイト	91.0	69.5	19.0	_	83.9	完	5小十.	
S 442	遺構に伴わない遺物	磨製石包丁				19.0 7.5	_	83.9 27.3	元	5/h·+	
S 442 S 443	遺構に伴わない遺物	磨製石包」 打製石包」	サヌカイト	91.0	69.5					5/h+t.	土壙65に属する 遺物の可能性有
S 442 S 443 S 444	遺構に伴わない遺物	磨製石包」 打製石包」 打製石包」	サヌカイト サヌカイト	91.0 71.0	69.5 44.0	7.5	_	27.3	完	54\+.	
S 442 S 443 S 444 S 445	遺構に伴わない遺物	磨製石包」 打製石包」 打製石包」 大型石包」	サヌカイト サヌカイト サヌカイト	91.0 71.0 195.5	69.5 44.0 109.0	7.5 18.0	_	27.3 230.5	完	5小士.    -  -	
S 442 S 443 S 444 S 445 S 446	遺構に伴わない遺物	磨製石包」 打製石包」 打製石包」 大型石包」 大型石包」	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト	91.0 71.0 195.5 157.0	69.5 44.0 109.0 103.5	7.5 18.0 18.0	_ 	27.3 230.5 228.6	完 完 完	5/h·+:	
S 442 S 443 S 444 S 445 S 446 S 447	遺構に伴わない遺物	原製石包丁 打製石包丁 打製石包丁 大型石包丁 大型石包丁 大型石包丁 スクレイパー	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト	91.0 71.0 195.5 157.0 85.5	69.5 44.0 109.0 103.5 60.0	7.5 18.0 18.0 16.0	_ 	27.3 230.5 228.6 68.8	完 完 完 完	547-+:	
S 442 S 443 S 444 S 445 S 446 S 447 S 448	遺構に伴わない遺物	原製石包丁 打製石包丁 打製石包丁 大型石包丁 大型石包丁 スクレイパー スクレイパー	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト	91.0 71.0 195.5 157.0 85.5 70.5	69.5 44.0 109.0 103.5 60.0 37.5	7.5 18.0 18.0 16.0 10.5	- - - -	27.3 230.5 228.6 68.8 33.3	完 完 完 完 完	7/1-1:	
S 442 S 413 S 444 S 445 S 446 S 447 S 448 S 449	遺構に伴わない遺物	<ul><li></li></ul>	サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト サヌカイト	91.0 71.0 195.5 157.0 85.5 70.5 38.5	69.5 44.0 109.0 103.5 60.0 37.5 42.5	7.5 18.0 18.0 16.0 10.5 6.0		27.3 230.5 228.6 68.8 33.3 12.2	完 完 完 完 完 完	7/1-1:	

掲載 番号	掲載遺構名	器種	材質	長さ (mm)	幅(径) (mm)	厚み (m)	孔径 (nm)	重量 (g)	残存率	時期	備考
S 453		石鏃	サヌカイト	22.5	14.5	3.5	_	0.9	ほぼ完		
S 454		石鏃	サヌカイト	23.0	14.5	4.0	_	1.1	欠		
S 455		石鏃	サヌカイト	20.0	15.0	2.0	_	0.7	欠		
S 456		イi鏃	サヌカイト	16.5	17.0	1.5	_	0.5	ほぼ完		
S 457		石鏃	サヌカイト	19.0	18.0	2.5	_	1,0	欠		
S 458		石鏃	サヌカイト	21.5	18.5	3.5	_	1,1	欠		
S 459		石鏃	サヌカイト	26.0	18.5	4.5	_	1.7	完		
S 460		<b>台錐</b>	サヌカイト	21.5	12.5	4.0	_	1.0	ほぼ完		
S 461		台錐	サヌカイト	21.5	12.5	4.0		1.0	ほぼ完		
S 462		石錐	サヌカイト	33.0	7.5	4.0	_	0.8	完		
S 463		石錐	サヌカイト	33.0	14.5	4.5	_	1.2	完		
S 464		石錐	サヌカイト	31.0	15.0	7.0	_	2.0	完		
S 465		扁平片刃石斧		104.5	56.5	28.0	_	202.5	光		
S 466		扁平片刃石斧	安山岩	70,5	50.5	19.0	_	93,1	欠		
S 467		扁平片刃石斧?	安山岩(灰黒色ガラス質)	83.0	39.0	11.0	_	54.2	完?		
S 468	遺構に伴わない遺物	扁平片刃石斧?	緑色片岩	76.0	47.5	8.0		37.4	7C :	弥生	未成品
S 469		扁平片为41定:		89.5	65.0	18.0		160.8	完		ZINPA IIII
S 470		太型蚧刃石斧	カスロダ川石 安山岩(灰黒色ガラス質)	103.5	47.0	33.0	_	262.1	欠		
$\vdash$							_				
S 471		太型蛤刃石斧	緑色片岩	62.0	59.0	36.0		188.7	欠		
S 472		太型蛤刃石斧	緑色片岩	65.0	50.0	32.5	_	130.9	欠		
S 473		太型蛤刃石斧	安山岩	93.5	51.0	26.5	_	200.3	欠?		
S 474		太型蛤刈石斧	角閃石安山岩	150.5	46.0	33.0		362.5	完		1. DH
S 475		太型蛤刃石斧	角閃石頁岩	114.5	58.0	48.0	_	505.9	_		未成品
S 476		すり石	<b>角</b> 関石安山岩	80.0	50.0	40.0	_	270.8	完		
S 477		すり石	安山岩	114.0	62.0	55.5	_	548.4	完		
S 478		敲石	<b>角閃石頁岩</b>	147.5	98.0	42.0	_	1104.6	%		
S 479		筋砥石	砂岩	202.5	74.0	30.5	_	698.7	完		玉生産関連遺物
S 480		砥石	砂岩	95.5	64.5	26.5	-	136,8	完		
S 481		ハンマー	水晶	37.0	33.0	20.0	_	22.1	欠		
S 482		残核	砂岩	236.0	268.5	126.0	_	9500.0	_		S303と接合関係
S 483	竪穴住居31	砥石		89.0	94.0	55.0	_	686.2		古墳後期	
S 484	竪穴住居36	似石	流紋岩	137.0	55.0	52.0	_	567.4		113(12/4)	
S 485	上壙113	双孔円盤	滑石	26,0	26,0	4.0	2.0	4.2	欠	古墳前期	
S 486	河道 8	砥石	流紋岩	45,0	29,0	28,0	_	37,3		古墳	
S 487	久田原 5 号墳	管玉	緑色凝灰岩	25.0	8.0	8.0	4.0	3.0		古墳後期	
S 488	久田原7号墳	白玉	水品?	8.0	8.0	8.0	4.0	0.6	欠?	口吸风机	
S 489	竪穴住居43	低石	流紋岩	56.0	29.5	16.0	_	34.9	欠		
S 490	掘立柱建物33	低石	流紋岩	72.0	57.5	21.0	_	107.1	完		P2出土
S 491		低石	流紋岩	55.5	60.0	16.8	_	42.5	欠		
S 492		砥石	流紋岩	77.5	60.5	17.0	_	80.5	欠		
S 493		砥石	流紋岩	51.5	35.0	33.5	_	53.5	欠	占代	
S 494	遺構に伴わない遺物	砥石	流紋岩	58.0	44.5	32.0		127.5	欠		
S 495		砥石	砂岩 (細粒)	110.0	56.0	42.0	-	329.8	欠		
S 496		砥石	砂岩(細粒)	105.0	30.0	26.0	-	102.9	完?		
S 497		砥石	流紋岩	47.0	28.5	66.0	_	122.3	欠		
S 498	上壙243	砥石	流紋岩	256.0	84.5	66.0	_	2300.0	光?		
S 499	1:壙290	砥石	貞岩	55.5	24.5	11.0	-	14.7	欠		
S 500	落ち込み1	砥石	流紋岩	129.0	58.0	46.0	_	437.9	欠		
S 501	<b>窪地</b> 4	低石	流紋岩	24.5	36.5	22.3	-	56.8	欠		
S 502	窪地 7	低石	頁岩	50.0	30.0	7.5	_	12.1	欠		
S 503		硯	頁岩	50.5	24.5	10.0	_	8.9	欠	中世	
S 504	窪地 9	低石	頁岩	49.0	34.0	13.5	_	26.1	欠?		
S 505		低石	流紋岩	66.5	38.0	32.0	_	69.5			
S 506		砥石	流紋岩	86.0	35.0	18.5	_	67.4	欠		
S 507	遺構に伴わない遺物	砥石	砂岩 (流紋岩質)	143.0	20.0	36.5	_	137.7			
S 508		低石	流紋岩	70.5	55.0	15.0	_	83.9	欠		
5 500		(EAT )	press.	10.0	00.0	10.0		00.0		L	

掲載 番号	掲載遺構名	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	時 期	備考
M 1	竪穴住居 9	板状鉄斧	4.50	2.10	0.25	11.79		鍛造鉄斧再加工品?
M 2		<b>袋状鉄斧</b>	5,10	3,70	0,30	35,92		
М 3		板状鉄斧	3.50	3.50	0.50	39.05		
M 4		板状鉄斧	3.20	2.30	0.40	13.63		
M 5	竪穴住居15	板状鉄斧	3.25	2,50	0,40	10.84		鋳造鉄斧再加工品
M 6		板状鉄斧	4.20	2.10	0.60	32.20		鋳造鉄斧再加工品
M 7		不明	2.60	0.75	0.50	2.78	弥生中期	鍛造品
M 8		手鎌?			0.35			新校型型 鍛造品 ?
$\vdash$	竪穴住居18	板状鉄斧	3.90	1.30		3.92		教理前で   鋳造鉄斧再加工品
M 9	1. Apple C s		2.80	2.00	0.50	8.21		
M10	上壙61	板状鉄斧?	1.90	3.25	0.40	6.98		铸鍛不明
M11	河道7	不明	1.90	3.00	0.40	6.48		
M12	遺構に伴わない遺物	整	3.50	1.00	0.40	5.57		鋳造鉄斧再加工品
M13	竪穴住居24	鎌	13,00	3.30	0,25	45,77		
M14	竪穴住居29	黄金具?	2.30	2.80	0.20	1.68		
M15		鏃	3.85	2.20	0.40	6.54		
M16		鎌	18.60	3.40	0.50	68.02		
M17	竪穴住居30	刀片	7.20	2.10	0.40	19.14		
M18		工具 (/ミ?)	7.80	1.65	0.50	16.86		
M19	竪穴住居35	流出孔泽	8.30	5.95	4.50	290.52		鉄滓
M20		鉸具?	5.00	3.90	0.40	9.63		
M21	河道8	鏃	9.30	2.70	0.40	19.30		
M22		鋤or鍬先	9.20	4.60	0.90	40.45		U字形
M23	窪地2	貴金具	2.50	3.40	0.20	6.24		
M24		鏃	7.15	3.02	0.20	18.64		
M25		鏃	7.35	3.30	0.35	15.74		
M26		鏃	7.55	3.50	0.65	25.73		
M27		鏃 (方頭)	6.25	3.70	0.25	28.21		
M28		鏃(方頭)	8.90	2.85	0.90	31.24		
M29		鏃 (方頭)	10.25	2,45	0.55	24,49		
$\overline{}$	NAME FIELD AND DESCRIPTION							
M30	遺構に伴わない遺物	鏃(方頭)	15.30	2.60	0.65	29.04		
M31		長頸	16.70	1.00	0.50	15.26		Ability of the
M32		斧	9.25	4.55	1.60	114.59		<b>- 公状鉄斧</b>
M33		斧	7,85	4,50	0,35	107,07		NO III O MITT
M34		銅製品 耳環	2.55	2.55	0.50	8.62		鉄地金銅貼
M35		紡錘車	4.05	3.92	0.25	9.42		
M36		馬具飾金具	4.30	4,30	0.30	24,46		
M37		鐙金具	7.75	4.20	1.55	31.66		木質线
M38		<b>鐙金</b> 具	8.35	5.30	1.60	32.13	占填後期~	
M39		両頭金具	13.20	1.35	0.85	20.62	終末	馬具か?
M40		鏃	16.10	3.65	0,89	46.16		
M41		鏃	8.50	3.05	0.65	25.52		
M42		鏃	12.75	1.25	0.60	29.10		
M43	久田原2号墳	鏃	13.15	0.80	0.50			
M 44		鏃	13.45	0.70	0.55			
M 45		鏃(長頭)	12.63	0.80	0.63	9.70		
M46		鏃	9.30	0.85	0.55	9.54		
M47		鏃の茎?	4.40	0.60	0.55	2.44		
M48		炉壁	_	-	_	231.00		
M49		カi壁	_	_	_	765,00		
M50		鏃	10.60	2.95	0.40	16.56		
M51		鏃	6,70	2.55	0,30	12,23		
M52		鏃	6.20	2.60	0.40	9.30		
M53		鏃	7.00	2.90	0.40	8.84		
M54		鏃	5.65	2.45	0.40	12.20		
M55		鏃	5.90	1.70	0.35	8.60		
M56	久田原 5 号墳	鏃						
-			8.75	2.85	0.30	12.89		
M57		鏃	10.40	3.20	0.50	18.56		
M58		鏃	10.15	3.20	0.70	26.60		
M59		鏃	8.70	2.80	0.40	23.35		
M60		鏃	7.80	0.85	0.40	4.90		
M61		刀子	10.05	1.20	0.50	10.40		
M62		鏃	15,00	4.50	0.70	36,30		
		鏃	13.75	3.10	0.45	17.40		
M63	久田原 6 是墳		20110					
M63 M64	久田原 6 号墳	鏃	12.60	2.65	0.65	13.20		

掲載	掲載遺構名	器種	長さ	幅	厚	重さ	時 期	備考
番号	有规型机	一 福	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	M-1 - 1971	VIII 4号
M66	久田原6号墳	鏃	13.80	1.10	0.95	8.80		
M67	久田原 7 号墳	鉄刀	48,80	3.10	0.40	_		出土状況図より復元
M68	久田原11号墳	鏃	6.80	1.50	0.95	11.12		茎部
M69	箱式石棺 1	刀子	11.50	1.25	0.20	15.90		
M70	A Harth o	耳環	30.00	27.50	0.58	12.34	古墳後期~	
M71	土壙墓 3	鏃	_	0.65	_	6.77	終末	
M72	竪穴住居42	鎌	17.15	3.95	0.30	46.31		
M73	並/(11/四42	刀子	16.90	1.05	0.45	17.65		
M74	竪穴住居43	刀子	2.90	1.60	0.20	6.20		
M75		鏃	7.70	0.90	0.50	2.74		
M76	掘立柱建物40	金槌?	1.90	8.40	1.10	52.72		P2出上
M77		鏃	13.40	3.00	0.70	30.02		
M78	240	鏃	8,90	3,40	0.40	19,94		
M79	溝39	鋤先	16.15	11.55	1.40	191.97		
M80		鋤先	9.75	3.75	1.05	29.94		
M81		石突?	7.40	1.40	0.15	22,22	-1.75	
M82	上器溜まり 2	鎌	16.50	3.60	0.35	64.05	古代	
M83		鎌	14.10	2.50	0.30	40.43		
M84 M85	一括出土鉄鎌	鎌鎌	20.10	2.90 3.60	2.00	56.48 71.38		
M86		海	5.00	2.20	0.90	36.00		
M87	遺構に伴わない遺物	行突?	5,85	1.20	0.20	17.02		
M88	22/H41-011 42/06 / 2821/0	椀形滓	10.35	10.15	3.90	527.00		
M89	加立柱建物106	刀子	11.70	2.50	0.50	30.16		P20出土
M90	加立柱建物107	銅鈴?	5.00	3.00	0.50	23.26		P10H+:
M91		不明	4.30	0.80	0.40	7.74		P36[[1]]:
M92		茶	7.45	0.90	(0.40)	7.68		P36出上:
M93	抓立柱建物110	紡錘車	4.70	_	0.60	18.35		P30出土
M94		鎌	9.30	1.00	0.50	52.21		P28出上:
M95		不明	3.60	_	2.00	36.33		P36出土
M96	掘立柱建物117	火打ち金	8.50	2.80	5.50	41.79		P2出上
M97		釘?	2.35	0.75	_	1.48		P8出土
M98	掘立柱建物127	椀形滓	10,45	9.85	3,00	437,44		P10出土
M99		椀形滓	8.40	6.10	3.00	302.49		P10出土
M100	振立柱建物128	釘	5.15	0.80	_	2.65		P2出上:
M101	JAN 18. TEXE PATEO	椀形滓	6.50	5.95	3.50	165.64		P3出上
M102	抓立柱建物132	不附	3.55	0.85	_	1.55		P8   \f.
M103	掘立柱建物141		3.80	1.10	4.00	10.25		P20///+.
M104	掘立柱建物143	釘	6.50	8.50	_	7.15		P8出土
M105		整	6,40	2,56	1.53	64,91		
M106		製	5.84	2.11	1.61	54.01		
M107		責金具	3.65	2.71	0.72	6.44		
M108 M109		刀子	12.85	2.85 1.95	0.35	48.46		
M1109		刀子 (茎)	6.20 4.87	1.29	0.30	13.85 10.77	中世	
M110		刀子(茎)	4.60	1.29	0.34	18.86		
M111		刀子(茎)	5.25	1.33	0.30	8.86		
M113		2J (15)	2.74	0.48	0.36	1.43		
M114		釘	2.30	0.48	0.24	2.50		
M115		釘	5.32	0.70	0.59	5.29		
M116		釗	3,19	0,50	0.30	1,81		
M117	NO. 1	31	3.76	0.39	0.52	3.49		
M118	鍛冶工房 1	釘	5.80	0.60	0.65	6.46		
M119		釘	6.40	0.80	0.75	4.57		
M120		âj	6.64	0.53	0.39	5.01		
M121		31	6.90	0.55	0.54	6.21		
M122		鉄片 (棒状)	9.71	0.42	0.42	4.75		
M123		鉄片 (棒状)	10.36	0.51	0.45	15.21		
M124		<b>企</b> 具	3.85	1.80	0.30	5.11		
M125		金具	4.65	1.70	0.22	5,37		
M126		金具	8.50	2.35	0.55	20.38		
M127		金具	5.46	1.83	0.96	8.97		
M128		鉄片:	4.79	1.57	0.22	5.38		
M129		鉄片	3.65	1.26	0.24	6.09		
M130		鉄片	1.73	4.91	0.68	16.21		

		1						_		
掲載	掲載遺構名	器 種	長さ	幅	厚	重さ	時 期	,	備	考
番号	F9 444,053   15 1   1	THT 1368	(cm)	(cm)	(cm)	(g)	mg 70)	'	IPHS	-9
M131		鉄片	3,30	3.34	0.40	12.56		$\neg$		
M132		鉄片	4.41	1.53	0.50	8.13		ı		
M133		鉄片	4.53	0.86	0.27	9.47		ı		
M134		鉄片	4.99	1.36	0.30	5.56		ı		
M135		鉄片	3.17	1.36	0,24	3.64		ı		
M136		鋤先	4.20	4.60	1,30	58.28		ı		
M137		鋤先	2,90	2.83	1,35	27.13		ı		
M138		鉄滓	9.60	7.60	3.80	317.00		ı		
M139		鉄滓	5.80	5.60	2.40	140.00		ı		
M140	鍛冶工房 1	鉄滓	11.20	8.60	2.00	272.00		ı		
M141		鉄滓	7.40	7.20	1.80	113.00		ı		
M142		鉄滓	7.60	9.40	3.00	316.00				
M143		鉄滓	7.80	5.40	1.80	125.00				
M144		鉄滓	10.00	6.40	3.40	429.00				
M145		鉄滓	6.20	5.40	1.80	39.00				
M146		鉄滓	8.60	6.80	4.40	246.00				
M147		鉄滓	6.80	4.20	1.60	72.00		ı		
M148		鉄滓	4.20	4.80	1.80	48.00				
M149	鍛冶hi4	鏃	5.40	1.40	0.90	22.68		Ī		
M150	鍛冶þi5	刀子荃部分?	2.60	1.70	0.70	10.02				
M151	鍛冶が6	金槌?	3,95	1.60	1.00	19.72		Γ		
M152		- 5	6.05	2.50	1.20	79.83				
M153		鏨	5.00	2.65	0.90	70.65				
M154		不明	4.80	2.75	1.20	21.67				
M155		刀子	6.00	0.95	0.40	8.92				
M156		刀子	4.60	1.80	0.20	6.07				
M157		刀子?	4,30	1.00	0.15	5.52				
M158		刀子	4.30	0.90	0.20	4.65				
M159		刀子?	4.40	1.40	0.50	8.56				
M160		Иſ	3.80	0.90	0.15	2.87		L		
M161		刀子	3.85	0.75	0.10	1.90		-		
M162		刀子?	2.40	0.75	0.15	2.01		-		
M163		不明	2.60	1.75	0.10	4.09	11世	-		
M164		卸	3,30	0.80	_	3,97		-		
M165		釘	3.50	0.50	_	2.09		ŀ		
M166 M167	鍛冶如7	不明 釘?	3,20 2,90	0.75		5.44 2.37		ŀ		
M168	野又(□ 川 )	鉄鏃?	3.65	0.43		4.39		ŀ		
M169		釘	4.05	0.75	_	1.72		ŀ		
M170		釘	2.45	0.45	_	1.80		ŀ		
M171		釘?	2.45	1.30	_	3.77		ŀ		
M172		21	2.70	0.34		1.42		ŀ		
M173		2)	1.80	0.35	_	0.38		ŀ		
M174		âj	2.50	0.40	_	1.44		-		
M175		2)	4.35	0.50	_	3.16		-		
M176		A)?	3.95	0.40	_	1.37		-		
M177		釗?	4.45	0.55	_	3.64				
M178		釘?	4.20	0.60	_	6.53		t		
M179		釘	5.95	0.55	_	8.97				
M180		不明	5.90	1.60	0.80	23.72		İ		
M181		不明	3.40	1.80	1.10	13.88		Ī		
M182		不明	1.20	2.05	0.20	1.29		Ī		
M183		釘	7.15	0.60	_	6.30		Ī		
M184		釘	2.70	0.50	_	0.93				
M185	鍛冶炉 9	<b>3</b> [?	6.00	0.45		1.98				
M186		îj	3.25	0.35	_	1.92				
M187		刀子	4.60	0.85	0.10	4.94				
M188	鍛冶炉i12	椀形滓	7.80	6.85	2.50	104.82				
M189	上壙墓10	腰刀	32,30	2.40	0.30	257.01		L		
M190		争 j	4.00	0.80	_	3,86				
M191		釘	4.60	0.60	_	3.46				
M192	土壙墓11	釘	4.95	0.90	_	4.28				
M193		釘	3.55	1.25	_	4.19				
M194		釘	5.45	0.60	_	4.62		-		
M195		釘	5.70	1.05	_	6.03				

掲載 番号	掲載遺構名	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	時	期	備考
M196		釘	7.00	1.00	_	6.08			
M197		釘	7,10	1,45	_	7,76			
M198		âj	6.60	0.85	_	5.83			
M199	上壙墓11	釘	6.90	0.60	_	5.87			
M200	上順盔11	釘	7.20	1.05	_	6.30		ĺ	
M201		2J	6.90	0.80	_	6.21			
M202		ŷj	7.72	0.80		7.45			
M203		釘	2.10	0.80	_	3.38			
M204		釘	7.50	1.00	_	9.06			
M205		Î)	7.50	0.90	_	7.32			
M206 M207		釘	7.70 6.65	0.80		10.45 6.23			
M208		金厂	7,90	1,00		8,19			
M209	上壙墓12	ær	9.05	0.80	_	8.36			
M210		釘	7.10	1.00	_	8.35			
M211		釘	6.50	0.70	_	6.01			
M212		ûſ	5.40	1.05	_	7.39			
M213		ĝj.	6.00	1.20		5.99			
M214		釘	4.00	1.10	_	5.98			
M215	上壙墓15	腰刀	23.95	2.30	0.25	91.49			
M216	土壤墓16	腰刀	37.45	3.30	0.30	259.30			
M217		不明鉄製品	7.25	0.70	0.20	6.08			
M218		刀子	12.75	1.40	0.15	15.34		-	
M219 M220	土壤墓17	화 화	1.82 2.50	0.15		0.08		}	
M220		鎖	2.50 8.99	0.18	0.10	0.11 22.30			菊花散双鳥鏡 布目痕跡あり
M222	土壙墓18	鏃	12.30	4.00	1.00	23.93			第1七日以外局頭 4中日長時の9
M223	1.90(2310	âs.	7.10	0.90	-	10.49			
M224		釘	6.10	1.40	0.50	8.53			
M225	上壙墓19	ĝj	4.50	0.80	0.40	6.80			
M226		釘	5.50	0.45	0.40	3.41			
M227		釘	4.40	0.35	0.30	1.67			
M228	上壙墓21	腰刀	33,60	3,70	0.90	440,73	中世		
M229		腰刀	33.60	3.20	0.85	332.82			
M230		鏃	14,40	3.50	1.35	41.15			
M231		釘	9.45	1.00	0.60	17.30			
M232 M233		ĝj er	8.90	1.00	0.50	13.25			
M234		釘	8.55 8.15	0.75	0.65	14.65 10.53			
M235		金」	9.15	1,05	0.80	10.65			
M236		â)	8.40	0.70	0.65	10.65			
M237		釘	8.15	1.05	0.75	13.40			
M238	上壙墓22	釘	8.55	0.75	0.60	11,14			
M239		ĝj	14.30	0.90	0.75	13.40			
M240		\$f	7.45	0.90	0.75	11.12			
M241		釘	8.60	0.70	0.70	13.25			
M242		卸	5.40	0.50	0.60	9.87			
M243		âj	8.00	0.70	0.45	10.09			
M244		釘 er	7.85	0.90	1.10	11.26			
M245		釘釘	8.30 5.10	1.45	1.05	10.32		}	
M246 M247	上壙墓23	服力	5,10 24,25	0,85 2.80	0,50	11.79 189.79			
M248	上领金公	fg/J 釘	5.00	1.25	0.70	7.24		ŀ	
M249		釘	5.50	1.20	_	4.00			
M250	( ukrista -	ĝj	3.50	1.20	_	5.00			
M251	土壙墓25	ĝŗ	3.60	1.20		3.00			
M252		釘	2.20	0.50	-	2.00		Ì	
M253		釘	3.40	0.40	_	2.00			
M254	上壙186	鉄滓	14.00	11.00	3.50	823.00			
M255	土壙193	釘	7.25	0.65	_	15.08			
M256	土壌196	銭貨(元豊通宝)		_	_	1.14			
M257	上壙200	腰刀	25.90	3.05	0.25	106.40			
M258	上壙218	鉄	12.30	1.00	0.10	18.44		}	
M259 M260	土壙220 上壙231	<b>釘</b>	9.05 5.25	1.15 0.40	0.40	12.72 3.21			
IVIZOU	二上 役員との1	m J	3.23	0.40	0.40	3.21			

掲載 番号	掲載遺構名	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	時 期	Ą		備	考
M261	上壙233	鏃	9.50	5.40	1.40	37.05					
M262	土壙236	紡錘車	4.70	_	0.60	17.05					
M263		椀	7.50	_	0.10	86.39					
M264	土壤243	釘	7.30	1.00	0.40	9.09					
M265		釘	3.60	0.70	0.40	3.71					
M266	土壤260	釘	5.00	1.00	_	6.01					
M267	1.9M200	針	30,30	4.10	2.55	297.68					
M268		刀子	11.50	1.50	0.65	15.67					
M269		刀子	12.20	1.50	0.55	17.66					
M270		Иſ	16.45	1.55	0.60	25.32					
M271		刀子	16.30	1.45	0.55	20.38					
M272	上壙263	IJŤ	11.10	1.45	0.50	16.96					
M273	11.000	カチ フラ	10.20	1.30	0.65	12.09					
M274		刀子	10,60	1.40	0.40	14.45					
M275		刀子	4.10	1.15	0.40	3.95					
M276		鎌	10.40	1.25	0.40	14.44					
M277		鎌	13.00	1.45	0.60	21.50					
M278	土壙266	椀形泮	14.20	7.90	4.00	625.16					
M279	土壙279	釘	7.20	0.40	_	5.95					
M280	土壙280	銭貨(永楽通寶)	_	_	_	0.61					
M281	T-964 2000	銭貨(政和通寶)	_	_	_	1.50					
M282	土壙281	銭貨(淳化元寶)				2.10					
M283	上壙284	刀소	16.00	1.20	0.10	32.65					
M284		î	8.80	6.50	_	16.90	中世	L			
M285	窪地 5	â[	6.65	0.55		4.96	111111111111111111111111111111111111111				
M286		<b>3</b> J	5.80	0.60	_	9.13					
M287	窪地6	責金具	3,80	_	0.80	14.74					
M288		鉄鍋	_	19.00	0.40	48.19			口径18.8cm		
M289		斧	5.25	3.40	0.20	19.48					
M290		鏃	7.95	2.80	0.70	36.97					
M291		鏃	9.80	4.60	1.20	36.65		L			
M292		鏃	4.75	2.55	0.60	11.88					
M293		鏃?	12.65	1.30	0.60	13.23					
M294		釗	6,45	1.05		7,15					
M295		釘	5.45	0.80	_	5.53					
M296		紡錘車	5.60	5.70	0.40	42,03		L			
M297		座金具	4.80	_	0.50	19.46					
M298	遺構に伴わない遺物	刀子	7.60	1.20	0.45	9.38		L			
M299		刀子	13.35	1.55	0.20	20.21					
M300		刀子?	5.30	1.95	0.20	10.57					
M301		不明 刀子?	7.00	1.95	0.20	17.27					
M302		刀子	20.60	2.45	0.70	62.03					
M303		釒	3.20	0.80		4.13		L			
M304		釗	4.70	1.35	1.15	11.33		L			
M305		銭貨(祥符通寶)	2.50	_	0.10	_		L			
M306		鎌	16.54	3.47	0.59	124.66					
M307		鉄片 (板状)	5.85	10.46	5,80	68.11		L			
M308		鉄片(板状)	7.04	8.68	6.10	62.96					

1967년대급   1	1114000000	to a field a line	11 - 14 - 14 - 14 - 14 - 14 - 14 - 14 -	1. 1			to companie this be		71 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -
1977년대2   C F F F   1977년대2   2017년 1972   3 S F   2897   2017년 1999   3 S F   2897   2897   2017년 1999   3 S F   2897   201776   3 S F   2	掲載遺構名	旧地区名	山遺構名	掲載遺構名	旧地区名	1遺構名	掲載遺構名	旧地区名	山遺構名
1977년대 명   1977년대									
50년년 5   C									
19/10년5									
安水で出る	竪穴住居 4				B 3 ⊠		加立柱建物91		***
## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ## ##	竪穴住居 5	C4SK		掘立柱建物25	B 3 区		掘立柱建物92	B1N区	
Post	竪穴住居 6	C 5 🗵	No.23竪穴住居	掘立柱建物26	B 3 🗷	建物102	掘立柱建物93	B1⊠	No.129掘立柱建物
	竪穴住居7	A2K	竪穴住居 3	掘立柱建物27	B 3 🗷	建物8	掘立柱建物94	B 1 区	No.130掘立柱建物
安かでは10   1 日本   1 日	竪穴住居 8	C 5 🗵	No.24竪穴住居	掘立柱建物28	B 3 🗵	建物106	掘立柱建物95	B 2 ⊠	建物 3
安水性四日	竪穴住居 9	A 2 区	竪穴住居 2	加立柱建物29	B1N⊠	建物 4	加立柱建物96	B 2 区	建物 2
## 2012年2日	竪穴住居10	C 6 🗷	竪穴住居 1	掘立柱建物30	B1N⊠.	建物 5	掘立柱建物97	A 1 🗷	建物 1
	竪穴住居11	C 6区	竪穴住居 2	掘立柱建物31	B1N⊠	建物 8	掘立柱建物98	B 6 ⊠	No.27掘立柱建物
野子に出	竪穴住居12	B 1 🗷	140竪穴式住居	振立柱建物32	DK.	建物 3	掘立柱建物99	C 8 🗷	掘立柱建物2
田田	竪穴住居13	B1⊠	143竪穴住居	掘立柱建物33	B 3 ⊠	建物3	掘立柱建物100	C 8 区	掘立柱建物 1
おけん	竪穴住居14	B 1 ⊠	142竪穴住居	掘立柱建物34	B 3 ⊠	建物 2	掘立柱建物101	A 1 ⊠	建物 2
N   1   1   1985円代理画   株理性理報   1983   操物性   操物性   操物性   操物性   操物性理報   1987   操物性理解   1987	似泰任尼16	B 2 🗷	11 1	掘立柱建物35	B 3 🗷	建物1	掘立柱建物102	A 1 区	建物3
황갓(杜郎)	竪八田府13	B 1 🗵	136竪穴式住居	掘立柱建物36	B3⊠	建物12	掘立柱建物103	B 1 ⊠	No.132掘立柱建物
時代日前日         日本区	竪穴住居16	A 1 区	S H O 1	掘立柱建物37	B 3 区	建物 9	加立住建物104	B 5 区	No.8抽立柱建物
研究性的         B 2 K         持ちら(外)         刷が料理物目         B 1 K         知り組みでき物         助していません         知りません         おろく 機能回の           研究性的         B 2 K         日子         新立性物料目         B 1 K         知りません         利力はないません         別のよりません	竪穴住居17	B 2区	H 4	掘立柱建物38	B 4 区	建物 1	掘立柱建物105	B 7 区	建物 4
房とは         日子の         航空機動の         B 1 K         お日前日かけ間が正確を含める         最近生産物のの         B 3 K         運動的日本           場所と届日日         B 2 K         日子の         航空程機制の         B 1 K         B 1 K         B 1 K         最近日本地のの         B 3 K         運動的日本           場外で生用の         B 2 K         日子の         航空程機制の         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K         B 1 K	Bでだった・□・○	B 2区	H6a(内)	掘立柱建物39	B 1 区	No.101掘立柱建物	掘立柱建物106	B 3 🗵	建物121
財政化目前         B 2 LS         1 F 7         概立性報酬は         B 1 LS         助 13 財産と記事件         販売 化産物のの         B 3 LS         受勢11 を           髪火作片の         B 2 LK         H 3         組入性理物は         B 1 LK         あ 1 LOW お 1 LOW お 1 LOW が 1 目標         最 2 LK         接物11 である。         受別が出口の         第 3 LK         連動11 所の         最 2 LK         1 名 3 LK         連動11 所の         最 2 LK         1 名 3 LK         連動12 LK         最 2 LK         1 名 3 LK         連動13 LK         助 12 LK         最 2 LK         1 名 3 LK         連動13 LK         動 12 LK         動 12 LK         動 2 LK         題 3 LK         連動13 LK         動 12 LK         動 2 LK         動 2 LK         題 3 LK         連動13 LK         動 12 LK         動 12 LK         動 2 LK         動 2 LK         連動13 LK         動 12 LK         動 12 LK         動 2 LK         動 2 LK         連動11 LK         動 12 LK         動 2	*※八任居18	B 2 🗷	H 6 b (外)	振立柱建物40	B 1 🗷	No.114掘立柱建物	掘立柱建物107	B 3 ⊠.	建物109
おきたいたけらした。	Bitter D. Co.		***		B 1 🗵	No.113掘立柱建物	掘立柱建物108	B 3 ⊠	建物114
最少代柱内20   B 2   K   H 3   関立性理物質   B 1   K   M 108編少れ建物   関心性理物目   B 3   K   使物 113   W 108m   B 1   K   M 107解立程申符   W 10m   M 10	- 竪穴任居19	B 2 🗵	H 2	加立柱建物42	B 1 🗵	No.102加立柱建物	掘立柱建物109		建物117
粉穴住居	竪穴住居20				B 1 🗷				
野									
製か作品23   P.3.N   製が1   概点性理物46   B.1   Mo.117機立柱理物   機立程理物113   B.3   規物120   World2624   D.1   Mo.24程程物47   B.1   Mo.14程度が115   B.2   操物52   操物52   World27   B.3   Mo.24程   World27   B.3   Mo.24程   World27   B.3   Mo.24程   World28   B.1   Mo.107機立柱建物   Mo.24程物115   B.7   Mo.24程   World27   B.3   Mo.24   World28   B.1   Mo.107機立柱建物   Mo.24程物116   B.7   Mo.24程   World27   B.3   Mo.24   World27   B.3   Mo.24   Mo.24   World28   B.3   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.24   Mo.24   Mo.24   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   World29   Mo.24   World29   B.3   Mo.24   Mo.2									
	l		竪穴1		BIK	No.117掘立柱建物		B 3 🗷	建物119
要次作的25						No.111掘立柱建物			
竪穴住四26   B 3   区   窓穴2   概立柱建物50   B 1   区   Na107報立柱建物   超立柱建物116   B 7   区   建物 9   移次でに回27   B 4   区   野穴104   無立柱建物51   B 1   区   Na109組立柱建物   無立柱建物117   B 7   区   定物 9   区   交換 1   日本 1   日									
勝立性建物50									
図文件記29   B 3   区   図文102   組立柱建物52   B 3   区   控物111   組立社建物119   B 7   区   控物11   銀立柱建物120   B 7   区   控物15   銀文柱程が13   B 7   区   经物10   銀立柱建物10   B 7   区   建物8   銀文柱超初13   B 7   区   经物10   銀立柱建物10   B 7   区   建物8   銀文柱超初13   B 7   区   经物10   銀立柱建物22   B 7   区   建物3   级文化层33   C 3   区   万形土曜   銀立柱建物56   B 3   区   医物103   銀立柱建物123   B 7   区   建物3   级文化层33   C 3   区   万形土曜   銀立柱建物56   B 3   区   医物103   銀立柱建物123   B 7   区   建物5   级文化层33   C 3   区   万形土曜   銀立柱建物56   B 3   区   区   区   区   区   区   区   区   区		-			· ·				
竪穴住居30   B 3									
製水住産部3   B 7 区   外穴 1   指水柱建物54   B 3 区   建物104   排水柱建物121   B 7 区   建物10   多次で展示32   C 2 区   No.21 上前   指立柱建物55   B 3 区   建物103   横元柱建物122   B 7 区   建物3   多次で展示33   C 3 区   No.10多次で展示3   C 3 区   No.10多次で展示3   Ro.10多次で展示3   B 3 区   指水柱建物57   B 5 区   No.13指立柱建物   B 7 区   建物5   多次で展示35   A 3 区   大工版 1   指立柱建物58   B 3 区   建物101   接立柱建物125   B 5 区   No.14据立柱   Ro.10多次で展示35   A 3 区   大工版 1   推立柱建物58   B 3 区   建物101   接立柱建物125   B 5 区   No.14据立柱   Ro.10多次で展示35   A 3 区   大工版 1   推立柱建物58   B 3 区   建物101   接立柱建物125   B 5 区   No.14据立柱   Ro.2 区   Ro.2 区 区   Ro.2									
整次住居32	l								
竪穴住居33									
整次住居34         C 5 区         № 10野/住居         掘立柱建物57         B 5 区         № 1 加工柱建物124         B 7 区         建物7           整次住居35         A 3 区         大土堰 1         据立柱建物58         B 3 区         建物101         類立柱建物125         B 5 区         № 14報立柱           形式比增物56         B 2 区         土坡 2         無立柱建物50         B 3 区         建物10         類立柱建物125         B 5 区         № 14報立柱           整次住房37         C 7 区         整次 1         掘立柱建物60         B 3 区         建物10         類立柱建物126         B 6 区         № 2 級土程           整次住居38         C 7 区         整次 2         銀立柱建物63         B 3 区         建物10         類立柱建物129         B 6 区         № 2 報物1           整次住居4         A 4 区         整次住居4         規立柱建物63         F 1 区         № 4 排 5         上 2 区         建物1         要次住居4         B 6 区         № 34報 5         表域物1         B 6 区         № 34報 5         表域物1         B 6 区         № 33報 5         表域物1         B 6 区         № 33 株 3         表域物2         建物1         基立社建物66         E 2 区         № 30 地域地2         B 6 区         № 33 株 3         基 2 区         上 2 区<									
整穴住居35   A 3 区 大上版   振立柱建物58   B 3 区 建物101   振立柱建物125   B 5 区									
竪穴住居36         B 2 区         土壌 2         独立柱建物59         B 3 区         建物10         脚立柱建物126         B 8 区         建物 1           堅欠住居37         C 7 区         竪穴 1         掘び柱建物60         B 3 区         建物108         掘び柱建物127         B 6 区         Na 2 粉建柱           竪穴住居38         C 7 区         壁穴 2         掘立柱建物61         B 3 区         建物107         掘立柱建物128         B 6 区         Na 4 届立村           竪穴住居39         F 1 区         Na 138平代住居         掘立柱建物63         F 1 区         Ma 138平代住居         独立柱建物33         財立住建物129         B 6 区         Na 34届立村           竪穴住居40         A 4 区         表外 (LET)         掘立柱建物63         F 1 区         Na 34届立村         提立柱建物33         B 6 区         Na 34届立村           竪穴住居41         A 3 区         人土堰2         掘並柱建物65         E 2 区         Na 9 建物         掘立柱建物33         B 6 区         Na 34属立村           竪穴住居42         B 1 区         人工收2         掘立柱建物66         E 2 区         Na 10建物         掘立柱建物132         B 6 区         Na 34属立村           竪穴住居43         B 3 区         金物 1         相立柱建物66         E 2 区         Na 10建物         掘立柱建物133         B 6 区         Na 5 掘立村           野穴住居44         B 1 区         地物 2         地方         加工柱建物66									
整次住居37         C 7 K         努穴1         掘立柱建物60         B 3 K         建物108         掘立柱建物127         B 6 K         No 2 報達柱 %           努穴住居38         C 7 K         整穴2         据立柱建物61         B 3 K         建物107         掘立柱建物128         B 6 K         No 4 相以村 線立柱建物129         B 6 K         No 4 相以村 線立柱建物130         B 2 K         No 4 期以付建物129         B 6 K         No 3 相以付 線立柱建物130         B 2 K         建物 1           整穴住居40         A 4 K         察穴住居1         掘立柱建物64         C 1 K         No 4 期以付建地物         掘立柱建物130         B 2 K         建物 1           整穴住居41         A 3 K         人土 城 2         掘立柱建物66         C 1 K         No 4 期以 2 H         掘立柱建物131         B 6 K         No 33 届以 4           整穴住居43         B 3 K         盛穴101         掘立柱建物66         E 2 K         No 10建物         掘立柱建物133         B 6 K         No 34 別以 4           整穴住居44         B 1 K         No 121 幣(2 K         租立柱建物67         C 1 K         No 10建物         掘立柱建物133         B 8 K         2 被物 5           搬立柱建物2         B 2 K         建物 2         掘立柱建物68         C 1 K         No 10建物         掘立柱建物144         B 6 K         No 28 風以 4           搬立柱建物2         自 公物 2         土地 1         掘立柱建物68         C 1 K         No 10 地域 4 </td <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td>									
終穴住居38         C 7 区         整穴2         掘立柱建物61         B 3 区         建物107         掘立柱建物128         B 6 区         No 4 櫃 7 科           竪穴住居39         F 1 区         No 13零次住居         抽立柱建物62         C 8 区         掘立柱建物3         期立柱建物129         B 6 区         No 34届立村           竪穴住居40         A 4 区         零次住居1         掘立柱建物63         F 1 区         No 4 掘立柱建物3         期立柱建物30         B 2 区         建物1           竪穴住居40         A 3 区         人土城2         掘立柱建物66         C 1 区         No 241建物         掘立柱建物31         B 6 区         No 35届立柱壁 8 区         Mo 241建物         掘立柱建物31         B 6 区         No 35届立柱 8 区         Mo 241建物         掘立柱建物33         B 6 区         No 35届立柱 8 区         Mo 241建物         掘立柱建物33         B 6 区         No 35届立柱 8 区         Mo 24 区         No 24 区         Mo					· ·				
較欠住居39         F I 区         Na13等欠住居         抽立柱建物62         C 8 区         超立柱建物3         抽立柱建物129         B 6 区         Na34期分析           整欠住居40         A 4 区         等欠住居1         据立柱建物63         F I 区         Na 4 加立柱建物         提立柱建物130         B 2 区         建物1           8次住居41         A 3 区         人土壤2         据立柱建物66         C 1 区         Na 9 建物         提立柱建物31         B 6 区         Na 38超立柱壁次代居42         B 1 N 区         9次1         指立柱建物65         E 2 区         Na 9 建物         提立柱建物32         B 6 区         Na 38超立柱                 Na 5 超立柱                 Na 9 建物         期立柱建物32         B 6 区         Na 5 超立柱                 Na 5 超立柱                Na 1									
竪穴住居40         A 4 区         竪穴住居41         据立柱建物63         F I 区         No.4 新心柱建物         提立柱建物130         B 2 区         建物1           竪穴住居41         A 3 区         大土廣2         据立柱建物64         C 1 区         No.241建物         提立柱建物131         B 6 区         No.35編立柱           竪穴住居42         B 1 N 区         竪穴1         据立柱建物65         E 2 区         No.10建物         加立柱建物132         B 6 区         No.34崩立村           竪穴住居43         B 3 区         竪穴101         据立柱建物66         E 2 区         No.10建物         押立柱建物132         B 6 区         No.5 掘立村           竪穴住居44         B 1 区         M 121 門外住居         組立柱建物66         E 2 区         No.10建物         押立柱建物133         B 6 区         No.5 掘立村           勝立住建物1         馬立柱建物66         E 2 区         No.246建物         押立柱建物133         B 6 区         No.28瓶立柱           開立柱建物1         馬立柱建物68         C 1 区         No.246建物1         押立柱建物135         B 8 区         2 地 93           超立柱建物1         下面2         掘車2         規立柱建物136         B 8 区         2 地 93         押立柱建物136         B 8 区         2 地 93           掘立柱建物3         A 1区下屋         掘車2 性 90         押立柱建物137         F 1 区         No.38掘立村         M 2 区         M 2 区         M 2 区         M									· ·
密穴住居41   A 3   A 1   A 1   A 3   A 1   A 1   A 3   A 1   A 3   A 1   A 3   A 3   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4   A 4									
竪穴作居42         B1N区         吸穴1         指立柱建物65         E2区         Na9建物         排立柱建物132         B6区         Na3晶立柱           竪穴住居43         B3区         竪穴101         掘立柱建物66         E2区         Na10建物         掘立柱建物133         B6区         Na5晶立柱           竪穴住居44         B1区         Na121啜穴住居         掘立柱建物67         C1区         Na242建物         掘立柱建物134         B6区         Na28制立柱           掘立柱建物1         B2区         建物1         掘立柱建物68         C1区         Na246建物         掘立柱建物135         B8区         建物3           掘立柱建物9         B2区         建物1         掘立柱建物69         C1S区         建物10         掘立柱建物136         B8区         建物3           掘立柱建物9         A1区下層         建物1(下層)         掘立柱建物70         C1S区         建物9         掘立柱建物137         F1区         Na36届立柱           掘立柱建物9         A1区下層         建物2(下層)         掘立柱建物71         C1S区         建物8         埋立柱建物138         F1区         Na38届立社           掘立柱建物5         低立柱建物72         C2区         建物2         掘立柱建物139         F1区         Na37届立村           掘立柱建物5         低立柱建物73         C1S区         建物1         現立柱建物140         F1区         Na36型           掘立柱建物75         D区         建物1         <									
竪穴住居43         B 3 区         竪穴101         掘立柱建物66         E 2 区         No10建物         掘立柱建物133         B 6 区         No 5 貼立村									No.35掘立柱建物
廖次住居44         B 1 区         No121廖次住居         挑立柱建物67         C 1 区         No242建物         排立柱建物134         B 6 区         No28排立柱排放           掘立柱建物1         B 2 区         建物1         掘立柱建物68         C 1 区         No246姓物         掘立柱建物135         B 8 区         建物3           掘立柱建物2         B 2 区         建物2         掘立柱建物69         C 1 S 区         建物10         掘立柱建物136         B 8 区         建物2           掘立柱建物3         A1区下層         建物1 (下層)         掘立柱建物70         C 1 S 区         建物9         掘立柱建物137         F 1 区         No.36掘立柱           掘立柱建物4         超立柱建物71         C 1 S 区         建物8         掘立柱建物138         F 1 区         No.38掘立柱           掘立柱建物5         超立柱建物72         C 2 区         建物2         掘立柱建物139         F 1 区         No.37掘立柱           掘立柱建物6         C 8 区         掘立柱建物4         掘立柱建物72         C 2 区         建物2         掘立柱建物139         F 1 区         No.37棚立柱           掘立柱建物6         C 8 区         掘立柱建物4         掘立柱建物72         C 1 S 区         建物14         房 1 区         No.37棚立柱           掘立柱建物77         D 区         建物1 (N2建物)         掘立柱建物75         C 1 S 区         建物12         掘立柱建物141         F 1 区         No.10届立柱           掘立柱建物8 <t< td=""><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></t<>									
抽立柱建物1									No.5 掘立柱建物
掘立柱建物2   B 2   2   2   2   2   2   2   2   2									No.28加立柱建物
掘立柱建物3         AI区下層         建物1(下層)         掘立柱建物70         C 1 S 区         建物9         掘立柱建物37         F 1 区         Na36掛立柱           掘立柱建物4         AI区下層         建物2(下層)         掘立柱建物71         C 1 S 区         建物8         掘立柱建物138         F 1 区         Na38掘立柱           掘立柱建物5         掘立柱建物72         C 2 区         建物2         掘立柱建物139         F 1 区         Na37掘立柱           掘立柱建物6         C 8 区         掘立柱建物5         掘立柱建物73         C 1 S 区         建物14         掘立柱建物140         F 1 区         Na35掘立柱           掘立柱建物7         D 区         建物1 (N2建物)         掘立柱建物74         C 1 S 区         建物13         掘立柱建物141         F 1 区         Na36掘立柱           掘立柱建物8         D 区         建物4         掘立柱建物75         C 1 S 区         建物12         掘立柱建物141         F 2 区         Na11組立杆           掘立柱建物89         D 区         建物2         掘立柱建物76         C 1 S 区         建物7         掘立柱建物143         F 2 区         Na10個立柱           掘立柱建物90         D 区         建物5         掘立柱建物77         C 1 S 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物2           掘立柱建物11         C 1 S 区         建物2         掘立柱建物145         F 3 N 区         建物5         建物3           細立柱建物12									
抽立柱建物4         AI区下層         建物2(下層)         掘立柱建物71         C 1 S 区         建物8         握立柱建物138         F 1 区         No.38据立柱           掘立柱建物5         C 8 区         掘立柱建物4         掘立柱建物72         C 2 区         建物2         掘立柱建物139         F 1 区         No.37据立柱           掘立柱建物6         C 8 区         掘立柱建物5         掘立柱建物73         C 1 S 区         建物14         掘立柱建物140         F 1 区         No.35届立柱           掘立柱建物7         D 区         建物1 (N2建物)         掘立柱建物74         C 1 S 区         建物13         掘立柱建物140         F 1 区         No.36届立柱           掘立柱建物8         D 区         建物4         掘立柱建物75         C 1 S 区         建物12         掘立柱建物142         F 2 区         No.11組立柱           掘立柱建物9         D 区         建物2         掘立柱建物76         C 1 S 区         建物7         掘立柱建物143         F 2 区         No.10届立柱           掘立柱建物10         D 区         建物5         掘立柱建物77         C 1 S 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物2           掘立柱建物11         C 1 S 区         建物5         掘立柱建物78         C 1 S 区         建物6         掘立柱建物145         F 3 N 区         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建									
梱立柱建物5         C8区         掘立柱建物4         掘立柱建物72         C2区         建物2         掛立柱建物139         F1区         No.37樹立柱 Mo.35福立柱 Mo.35福立柱 Mo.41建物7         Mo.37樹立柱 Mo.41建物7         Mo.37樹立柱 Mo.41建物7         Mo.37樹立柱 Mo.41建物7         Mo.37樹立柱 Mo.41建物7         Mo.35福立柱 Mo.41建物7         Mo.35福立柱 Mo.41超立柱建物14         F1区         No.36福立柱 Mo.41超立柱建物14         F1区         No.36福立柱 Mo.41超立柱建物14         F1区         No.36福立柱 Mo.41超立柱建物14         F1区         No.31超立柱 Mo.11超立柱 建物5         Mo.11超立柱 Mo.10超立柱 Mo.41建物77         C1S区         建物7         超位主建物143         F2区         No.10超立柱 建物2         Mo.10超立柱 建物14         F3N区         建物2         建物12         Mo.37樹立柱 Mo.41建物143         F1区区         No.34國立 建物2         Mo.11超立柱 建物4         F1区区         No.10超立 建物5         Mo.10超立 基地3         Mo.10超立 基地3         Mo.10超立 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10超过 基地3         Mo.10基地3									No.36掘立柱建物
抽立柱建物6         C 8 区         抽立柱建物5         描立柱建物73         C 1 S 区         建物14         提立柱建物140         F 1 区         No.35届立村           超立柱建物7         D 区         建物1 (N2建物)         据立柱建物74         C 1 S 区         建物13         描立柱建物141         F 1 区         No.34届立村           棚立柱建物8         D 区         建物4         制立柱建物75         C 1 S 区         建物12         期立柱建物142         F 2 区         No.11制立柱           棚立柱建物9         D 区         建物2         掘立柱建物143         F 2 区         No.10棚立柱           棚立柱建物10         D 区         建物5         掘立柱建物77         C 1 S 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物2           棚立柱建物10         D 区         建物5         掘立柱建物77         C 1 S 区         建物6         掘立柱建物145         F 3 N 区         建物1           棚立柱建物12         A 4 区         建物1         掘立柱建物79         C 1 S 区         建物6         堀立柱建物145         F 3 N 区         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物4         建物3         建物4         超点柱建物80         C 1 S 区         建物1         掘立柱建物147         F 3 N 区         建物4         超物5         建物5         埋立柱建物148         F 3 N 区         建物5         掘立柱建物148         F 3 N 区								· ·	No.38掘立柱建物
超立柱建物7         D区         建物1 (N2建物)         掘立柱建物74         C 1 S 区         建物13         揮立柱建物141         F 1 区         No.3 福立柱建物76         雇立柱建物75         C 1 S 区         建物12         押立柱建物142         F 2 区         No.11制立柱地方台         加立柱建物76         C 1 S 区         建物7         掘立柱建物143         F 2 区         No.10掘立柱地方台         Ma立柱建物144         F 3 N 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物1         建物1         建物2         建物6         加立柱建物145         F 3 N 区         建物1         建物1         建物1         建物3         建物1         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物4         建物5         掘立柱建物148         F 3 N 区         建物5         建物4         建物5         建物5         建加2柱建物148         F 3 N 区         建物5         建物5         建加2柱建物148         F 3 N 区         建物5         建物5         建加2柱建物149         F 3 N 区         建物6         加2柱建物150         厂2 S 区         加42納6         加2柱建物8         加2柱建物8         加2柱建物8         加2柱建物8         加2柱建物8         加2柱建物8         加2柱建物8         加2柱建物3         加2柱建物149         F 3 N 区         加2柱地的6 <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>No.37掘立柱建物</td>									No.37掘立柱建物
梱立柱建物8         D区         建物4         挑立柱建物75         C 1 S 区         建物12         排立柱建物142         F 2 区         Mall組立柱地方移           掘立柱建物9         D区         建物2         掘立柱建物76         C 1 S 区         建物7         掘立柱建物143         F 2 区         Mall組立柱 建物2         Mall組立柱建物144         F 3 N 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物2         掘並柱建物145         F 3 N 区         建物2         建物3         建物1         建物1         掘立柱建物79         C 1 S 区         建物11         掘立柱建物146         F 3 N 区         建物3         建物3         建物3         建物3         建物3         建物4         建物5         建物4         基地5         建地5         建地6         地方柱建物148         F 3 N 区         建地5         建地5         超点柱建物148         F 3 N 区         建地5         建地5         超点柱建物148         F 3 N 区         建地5         超地5         建地5         基地6         地方柱建物148         F 3 N 区         建地5         超地5         建地5         基地6         地方柱建物149         F 3 N 区         建地6         地方柱建物15         上地6         地方柱建物150         F 3 S 区         Mall相互柱建物8         A 4 区         基地6         地方柱建物150         F 3 S 区         Mall相互柱建物8         A 4 区         基地6         地方柱建物150         F 3 S 区									No.35掘立柱建物
抽立柱建物9         D区         建物2         据立柱建物76         C 1 S 区         建物7         握立柱建物143         F 2 区         No.10幅立柱           掘立柱建物10         D区         建物5         据立柱建物77         C 1 S 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物2           掘立柱建物11         C 1 S 区         掘車約1         掘車柱建物78         C 1 S 区         建物6         加車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車車									No.3 掘立柱建物
掘立柱建物10         D区         2棟物5         掘立柱建物77         C 1 S 区         建物2         掘立柱建物144         F 3 N 区         建物2           掘立柱建物11         C 1 S 区         No.39         掘立柱建物78         C 1 S 区         建物6         掘立柱建物145         F 3 N 区         建物1           棚立柱建物12         A 4 区         建物1         掘立柱建物79         C 1 S 区         建物11         掘立柱建物146         F 3 N 区         建物3           脚立柱建物13         B 1 N 区         建物1         掘立柱建物80         C 1 S 区         建物1         掘立柱建物147         F 3 N 区         建物4           掘立柱建物14         B 1 N 区         建物2         掘立柱建物81         C 1 S 区         建物5         堀立柱地物148         F 3 N 区         建物5           掘立柱建物15         B 1 N 区         建物3         掘立柱建物82         C 1 S 区         建物3         堀立柱建物149         F 3 N 区         建物6           排立柱建物16         A 4 区         建物4         排立柱建物83         A 4 区         建物3         排立柱建物150         F 3 S 区         Ma2編集直柱									No.11加立柱建物
抽立柱建物11     C1SK     No.39     描立柱建物78     C1SK     建物6     描立柱建物145     F3NK     建物1       棚立柱建物12     A4K     建物1     掘立柱建物79     C1SK     建物11     掘立柱建物146     F3NK     建物3       棚立柱建物13     B1NK     建物1     掘立柱建物80     C1SK     建物1     掘立柱建物147     F3NK     建物4       棚立柱建物14     B1NK     建物2     掘立柱建物81     C1SK     建物5     堀立柱地物148     F3NK     建物5       棚立柱建物15     B1NK     建物3     掘立柱建物82     C1SK     建物3     堀立柱建物149     F3NK     建物6       棚立柱建物16     A4K     建物4     掘立柱建物83     A4K     建物3     掘立柱建物150     F3SK     Ma4組立柱									No.10掘立柱建物
超立柱建物12     A 4 区     建物1     据立柱建物79     C 1 S 区     建物1     提立柱建物146     F 3 N 区     建物3       抽立柱建物13     B 1 N 区     建物1     拥立柱建物80     C 1 S 区     建物1     抽立柱建物147     F 3 N 区     建物4       超点柱建物14     B 1 N 区     建物2     据立柱建物81     C 1 S 区     建物5     提立柱建物148     F 3 N 区     建物5       超立柱建物15     B 1 N 区     建物3     振立柱建物82     C 1 S 区     建物3     提立柱建物149     F 3 N 区     建物6       抽立柱建物16     A 4 区     建物4     排立柱建物83     A 4 区     建物3     描立柱建物150     F 3 S 区     Ma2編章柱		DK	建物 5		C1S区			F3NK	
揃立柱建物13     B 1 N区     建物 1     揃立柱建物80     C 1 S 区     建物 1     揃立柱建物147     F 3 N 区     建物 4       掘立柱建物14     B 1 N 区     建物 2     掘立柱建物81     C 1 S 区     建物 5     掘立柱建物148     F 3 N 区     建物 5       掘立柱建物15     B 1 N 区     建物 3     掘立柱建物82     C 1 S 区     建物 3     掘立柱建物149     F 3 N 区     建物 6       揃立柱建物16     A 4 区     建物 4     掘立柱建物83     A 4 区     建物 3     掘立柱建物150     F 3 S 区     Ma2編立柱		C1S区						F3NK	
掘立柱建物14     B1NK     建物2     掘立柱建物81     C1SK     建物5     堀立柱建物148     F3NK     建物5       掘立柱建物15     B1NK     建物3     掘立柱建物82     C1SK     建物3     掘立柱建物149     F3NK     建物6       掘立柱建物16     A4K     建物4     掘立柱建物83     A4K     建物3     掘立柱建物150     F3SK     Ma4組立柱		A 4 ⊠						F3N区	
棚立柱建物15     B1N区     建物3     掘立柱建物82     C1S区     建物3     掘立柱建物149     F3N区     建物6       揃立柱建物16     A4区     建物4     揃立柱建物83     A4区     建物3     揃立柱建物150     F3S区     Ma2樹立柱	掘立柱建物13	B1N⊠	建物 1	据立柱建物80	C1SK	建物 1	掘立柱建物147	F3N⊠	建物 4
- 抽点柱建物16 A 4 区 建物 4 - 排点柱建物83 A 4 区 建物 3 - 排点柱建物150 F 3 S 区 Ma 2 排点柱建物16 - F 3 S 区 Ma 2 排点柱程 Ma 2 排 Ma 2	掘立柱建物14	B1N区	建物2	掘立柱建物81	C1S区	建物 5	握立柱建物148	F3NK	建物 5
	掘立柱建物15	B1N⊠	建物 3	掘立柱建物82	C18区	建物 3	掘立柱建物149	F3N⊠	建物 6
据立柱建物17 A 3 区 建物3 据立柱建物84 C 2 区 建物1 据立柱建物151 F 3 S 区 Na23据立柱	拥立柱建物16	A 4 区	建物 4	加立柱建物83	A 4 🗵	建物3	掘立柱建物150	F3S区	No.42加立柱建物
	掘立柱建物17	A 3 🗵	建物3	掘立柱建物84	C 2 🗷	建物1	掘立柱建物151	F3SK	No.23掘立柱建物
掘立住建物18 B 1 N 区	掘立柱建物18	B 1 N⊠	建物 6	掘立柱建物85	A 4 ⊠	建物 (25) 7	掘立柱建物152	F 3 S 🗵	No.18掘立柱建物
- 揃立柱建物19 B 1 N 区 建物 7	掘立柱建物19	B1N⊠	建物7	加立柱建物86	A 4 🗵	建物 (23)	掘立柱建物153	F3S区	No.25加立柱建物
据立柱建物20 B 3 区 建物 4 据立柱建物87 A 4 区 建物 2 擺立柱建物154 F 3 S 区 No.26掘立柱	掘立柱建物20	B 3 ⊠	建物 4	掘立柱建物87	A 4 ⊠	建物2	掘立柱建物154	F3SK	No.26掘立柱建物

日か生体を	旧地区名	li DSHILO	掲載遺構名	0.1446.7.27	0.1593.411.67	掲載遺構名	旧地区名	[1 ()25+th.67
掲載遺構名 加立柱建物155	F3S区	口遺構名 No.24掘立柱建物	抱軟退轉石 土壙墓 9	旧地区名 F1区	旧遺構名 NO72土壙幕	担戦退悔石 上擴51	B 2 KW	旧遺構名 縄文上12
掘立柱建物156	F3S区	No.32掘立柱建物	土壙墓10	C 4 🗵	1NO72 1. 城亳 土城31	土壙51	C8K	上塘 4
掘立柱建物157			土壙墓10 土壙墓11		No.122土壌	土壙53		工場 1 No.90土場
	F3SK	No.30掘立柱建物		B 1 ⊠			B 6 ⊠	
掘立柱建物158	F3SX	No.31掘立柱建物	上壙墓12	B3K	上壤169	上壙54	B 6 K	Na.92上壙
柱穴列 1	DK.	柱列3	土壙墓13	B 3 🗷	土壌173	土壙55	B 6 ⊠	No.91土壙
柱穴列2	D⊠	柱列4	土壙墓14	B3⊠	方形周溝	土壙56	F 2 🗵	No.16土壙
住穴列3	DK	柱列1	上壙墓15	B 5 ⊠	No.5 土壙	上坡57	F 2 🗵	No.17上壙
柱穴列 4	DM	柱列2	土壙墓16	B 5 ⊠	No.7 上壙墓	土壙58	C5⊠	No.32土.擴
柱穴列 5	B3N区	柱列2	上壙墓17	B 5 区	No.3 土壙	上壙59	A 2 区	土壙 1
柱穴列 6	B3N⊠	柱列1	土壙墓18	B3⊠	土壌181	土壙60	A 2 🗵	上壙 2
柱穴列7	C1SK	柱穴列2	土壙墓19	B 3 🗷	土壙174	土壙61	A 2 🗵	土壙 3
柱穴列 8	C1SK	柱穴列 1	上壙墓20	B 7 ⊠.	上壤110	上壙62	A1区下層	SK302
柱穴列 9	A 4 ⊠		土壙墓21	B7区	土壌109	土壙63	A1区下層	SK303
柱穴列10	F 1 🗵	No.59 柱穴列	土壙墓22	B 7 ⊠	土壙114	土壙64	A1区下層	SK304
柱穴列11	F1区	No.58 科·穴列	上壙墓23	B 7 区	1:壙1	上坡65	A1区下層	SK306
柱穴列12	F1⊠	No.60 柱穴列	土壙墓24	B8⊠	土.壙15	土.壙66	A1区下層	SK305
柱穴列13	F1区	No.39 柱穴列	上壙墓25	F3⊠S	No.29上墳	上壙67	A1区下層	SK308
製鉄炉1	B3N⊠	製鉄炉1	上壙 1	A 3 🗵	上壙 4	土壙68	B 2 KW	上壙3
鍛冶工房1	C 2 🗹	方形土壙 1	土壤 2	A 3 🗵	土壌3	土壙69	B 2 KW	土壤 1
鍛冶炉1	B3NX	鍛冶炉 2	土壙 3	A 3 🗷	土壙 7	上壙70	B 2 ⊠W	土壙 2
鍛冶炉2	B3N⊠	鍛冶が3	上壙 4	A 3 🗵	上壙 5	土壙71	B 2 ⊠W	上墳 4
鍛冶炉3	B3N⊠	鍛冶炉 4	土壙 5	C 5 🗵	No.28上壙	上壙72	B 2 ⊠W	上壙25
鍛冶炉 4	B3N⊠	1: 壙53	上壙 6	C 5 K	No.38 I:塘	上版73	B2KW	1:壙24
鍛冶加5	B3N⊠	鍛冶炉5	1:壙 7	C 5 ⊠	No.29十.壙	土 壙 74	B 2 ⊠W	土壤11
鍛冶炉 6	B3N区	鍛冶炉9	土壙 8	C 5 🗷	Ne.37上墳	上壙75	B 2 ⊠W	土壙 5
鍛冶炉7	B3N⊠	鍛冶炉6	上壙 9	C5K	No.31土壤	土壙76	B2⊠W	土.壙26
鍛冶炉8	B3N⊠	鍛冶炉8	土壙10	C 5 🗵	No.30土壤	土壙77	B 2 KW	土壙 6
鍛冶炉 9	B3N⊠	鍛冶炉7	上壙11	C 5 🗷	No.40上壙	上壙78	B2⊠W	土壙 7
鍛冶炉10	B6⊠	No. 1 鍛冶如 i	土壙12	A 2 🗵	P - 8	土壙79	B 2 ⊠W	上壙 9
鍛冶炉11	B6⊠	No.3 鍛冶炉	上壙13	C 5 🗵	No.71上墳	上壙80	B 2 ⊠W	上壙23
鍛冶炉12	B 6 🗷	No. 8 鍛冶炉	土壙14	B 2 ⊠W	縄文土3	土壙81	B 2 ⊠W	土壙 8
袋状土壙 1	Λ3区	土壙 6	上壙15	C 6区	上壤22	上堰82	B2⊠W	上壤12
袋状土壙 2	C 6 ⊠	土壤20	土塘16	C 6 🗵	十.壙29	土.壙83	B 2 ⊠W	土壤10
袋状土壙 3	B2⊠W	縄文土壙7	上壙17	06⊠	上壙21	上壙84	B2⊠W	上壙22
袋状上塘 4	B2⊠W	縄文上壙 6	土壙18	C 6区	土壙23	土壙85	B 2⊠W	土壙17
袋状土壙 5	B 2 ⊠W	縄文土壙 5	土壙19	C4S⊠	No.110土壌	土壙86	A1区下層	SK307
袋状土壙 6	B 2 ⊠W	縄文土壙 8	上壙20	C 6 🗵	土壙 4	上壙87	B 2 ⊠W	上壤27
袋状上壙 7	B2⊠W	縄文上壙 9	土壙21	C 6区	上壙 7	土壙88	B 2 ⊠W	土壙19
袋状土壙 8	B2⊠W	縄文土壙10	土壙22	€6区	土壙12	土壙89	B2⊠W	土壙13
袋状上壙 9	B2⊠W	縄文上壙11	1:塘23	C 6区	上壙 5	上壙90	B2⊠W	上壙14
袋状土壙10	B 6 ⊠	No.79貯蔵穴	土壙24	C 6 ⊠	上壙 9	土壙91	B 2 ⊠W	土壤15
袋状上壙11	C 8 🗵	袋状土壙 1	上壙25	C6区	上壙10	上壙92	B2⊠W	上壙16
袋状土壙12	C 8 🗷	袋状上擴 3	土壙26	C 6区	上壙 6	上壙93a	A1区下層	SK301b
绞状土壙13	C 8 🗵	袋状土壙 2	土壙27	C 6 🗵	土壤 8	土壙93b	A1区下層	SK301a
袋状上壙14	B 6 区	No.78貯蔵穴	上壙28	C 6 🗷	上壤26	上壙94	B 2 ⊠W	上壙28
袋状土壙15	C 5 区	No.25貯蔵穴	土壙29	C6区	土壤28	土壙95	B 2区W	土壙18
袋状上壙16	B 5 ⊠	No.67貯蔵穴	上壙30	C 6 🗵	上壙27	上壙96	B 2 ⊠W	上壙20
袋状上壙17	B 5区	No.66貯蔵穴	上壤31	C 6 🗵	1:壙31	1:壙97	B 2 ⋉W	1:壙21
焼成土壙 1	C 7 ⊠	焼工土壙1	土壤32	C 6 🗵	土壙11	土壙98	B 2 ⊠W	土壙30
焼成土壙 2	C 6区	上壙19	上壙33	C 7 🗷	上壙23	上壙99	B 2 ⊠W	上壙29
焼成上壙3	C7⊠	土壙12	土壙34	C 7区	土壙26	土壙100	B 2 ≤ E	土壙15
焼成土壙 4	C 8 🗵	焼成土壙 2	土壙35	C 7 区	土壙10	土壙101	B2⊠E	土壙14
焼成土壙 5	C 8区	焼成土壙 1	1:壙36	C 7 🗵	:壙11	上壙102	B 6 区	No.50 1:塘
焼成土壙 6	C7⊠	土壤14	土壙37	C 7区	土壙22	土壙103	B 6 ⊠	No.70十.塘
焼成土壙 7	C7区	上壙13	上壙38	C 7区	上壙21	上壙104	B6⊠	No.88上壙
焼成上壙 8	C7⊠	土壙15	土壙39	C 7区	土壙20	土壙105	B 6 ⊠	No.51土壙
土器棺 1	B 2 ⊠ E	土器2・3	土壙40	C 7区	土壙25	土壙106	B 6 ⊠	No.52土壙
土器棺 2	B 2 区 E	土器 1	上壙41	C 7区	上壙16	上壙107	C1 N区	No. 4 土壙
上器棺3	B2⊠E	壺柁	土壙42	C 6区	土壙14	土壙108	C 1区	No.219土壙
土壙墓 1	DK	土壙21	土壙43	C 6 🗵	土壙25	土壙109	C 1 ⊠	No.224土壙
1.996215 1	1	上壙墓1	1:墳44	C 6区	上壙30	上壙110	C 1区	No.227 上壤
上壙墓 2	B3-2⊠				土.壙15	土壙111	C 1 🗵	ar ooo Law
	B 3-2 区 B 3-2 区	上壙墓2	十.壙45	C 6 🗵	1.99(13)	1.49(111	CIE	No.222土壤
上壙墓2			土壙45 上壙46	C 6区	上壙19	上壙112	C1K	No.222工項 No.226上墳
上壙墓 2 上壙墓 3	B 3-2 <u>⊠</u>	上壙墓 2						· ·
上壙墓2 上壙墓3 土壙墓4	B 3-2 🗹 A 4 🗹	上壙墓 2 上壙168	上壙46	C 7区	上壙19	上壙112	C 1 🗵	No.226上壙
上壙墓2 上壙墓3 土壙墓4 上壙墓5	B 3-2区 A 4区 B 1 N区	上壙墓2 上壙168 上壙墓1	上壙46 土壙47	C 7区 C 7区	上壙19 土壌27	上壙112 土壙113	C1区 E1区	No.226上壙 No.21土壙

掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名
上壙117	C 2 🗵	土壙 3	上壙184	C 2 🗵	上壙11	上壙251	B 7区	上壙71
上塘118	B 1 区 N	上壙 3	土壙185	C 2 🗷	土壤10	土壙252	B 7区	土壙81
土壙119	F 1 🗵	No.62土壙	土壙186	C 2 🗵	方形土壙 2	土壙253	B 7 ⊠	土壤25
上壙120	C 2 🗵	上壙31	上壙187	C 2 🗵	土壙 2	上壙254	B 7区	土壙 5
土壙121	C 2 🗵	土壙29	土壙188	C 2 🗵	上壙1	土壙255	B 7 区	上壙 4
土壙122	C 2 🗵	土壙27	土壙189	C 2 🗵	土壙 4	土壙256	B 7 🗵	土壙 6
上壙123	DK	上壙19	上壙190	C 2 🗷	上壙12	上壙257	B 7 区	上壙56
土壙124	D区	土壤27	土壙191	C 2 🗵	土壙18	土壤258	B 7 ⊠	上壙3
上壙125	D区	上壙26	上壙192	A 3 ⊠	上壙23	上壙259	B 7区	上壙65
土壙126	D区	土壙28	土壙193	A 3 🗵	土壙24	土壙260	B 8 ⊠.	上壙 2
土壙127	B 3 🗷	土壙113	土壙194	A 3 ⊠	土壙33	土壙261	B 8 ⊠	土壌 1
上壤128	B3K	上壙101	上壙195	A 3 🗵	土壙 2	上壙262	B 8 区	上壙11
土壙129	B3⊠	土壙102	土壙196	A 3 🗵	上壙 5	土壙263	B 8 ⊠	土壙17
土壙130	B 3 ⊠	土壙103	土壙197	A 2 🗵	No.31土墳	土壙264	B 7 ⊠	土壙66
上壙131	B3K	1:壙54	:壙198	C 4 S 🗷	No.77 上壙	1:壙265	B6区	No.10 比壙
土壙132	A 2 🗵	No.27土壤	土壙199	C 7 ⊠	1:壙 7	土壤266	B 6 ⊠	No.15十.壙
上墳133	B3区	上壙112	上壙200	B 2 ⊠W	上墳12	上壙267	C8区	墓1
土壙134	B 3 K	土壌111	土壙201	A 1 🗷	上塘3	土壙268	F1区	No.28土壌
土壙135	B 3 🗵	土壙107	土壙202	B3⊠ D3⊠	土壙15	土壙269	F1区	No.27土壤
上壤136	B3K	上壙106	上壤203	B3K	上壤23	上壙270	F1区	No.29上壙 No.20土壙
土壙137 [-#應139	B 3 🗵	土壙105	土壙204	B3×	土壙16	土壙271	F1 🗵	No.30土壙 No.19 I:壙
上壙138	B3K	上墳108	上壙205	B3⊠	上壙21	上壙272	F1⊠	
上壙139 土壙140	B 3 ⊠ B 3 ⊠	上壤143	1:壙206	B3X	上版18		F 1 ×	No.8 上塘
		土壙141	土壙207	B3×	土壙20	土壙274	F 1 🗵	No.9 上壙
上壙141 土壙142	B 3 区 B 3 区	上壙137 土壙139	上壙208 土壙209	B3K B3K	上壙177 土壙156	上壙275 土壙276	F1区 F1区	No.7土壙 No.6上壙
土壙143		土壙139 土壙140	土壙209	_	土壙156	土壙277		No.12土塘
上壙144	B 3 🗹	上壙140 上壙109	上壙211	B 3 ⊠	上壙10	上壙278	F1区 F3N区	土壙 4
土壙144	B 3 ⊠	土壙109	土壙211	B 7 区 B 3 区	土壙10	土城279	F3NK	上壙5
上壙146	B3K	上壙114	上壙213	B3K	上壙31	上壙280	F3NK	土城3
土壙147	B 3 🗹	土壙138	土壙214	B 3 🗷	土壙48	土壙281	F 3 N 🗵	土壙3
上塘148	B3K	上壙224	上壙215	B3K	上壙44	上壙282	F3NK	土壙 2
土塘149	B 3 🗹	土壙224	土壙216	B3⊠6⊠	土塘43	土壙283	F3SK	No.19土塘
上墳150	B3K	上壙115	上壙217	B3⊠	上壙28	上壙284	F3S⊠	No.17上塘
土壙150	B 3 K	土壙116	土壙218	B3K	土壙27	土壙285	F3SK	No.12土壙
土塘152	B 3 🗵	土場120	土壙219	B 3 🔀	土塘49	土壙286	F3SK	No. 8 土塘
上壙153	B3K	上壙104	上壤220	B3K	上塘35	上壙287	F3SK	No.10上壙
土壙154	E 1 🗵	No.19土場	土壙221	B3⊠	土壙36	土塘288	F3SE	No.39十.壙
土壙155	E 1 🗵	No.12土壙	土壙222	B 3 ⊠	土壙40	土壙289	F3SK	No.38土塘
1:塘156	E 1 K	No.11 上塘	上壙223	B3区	1:塘42	上壙290	F3SX	No.27 I:塘
土壙157	E 1 🗵	No.14土壙	十.壙224	B 3 ⊠	土壙41	火処 1	C 5 🗵	No.41
上塘158	D区	上塘11	上壙225	B3⊠	上塘25	火処 2	C 5 🗵	No.42
土壙159	D区	土壙12	土壤226	B 3 区	土壙151	火処3	B 2 ⊠W	焼上面1
土壙160	C 1 S 🗵	土壙78	土壤227	B 3 ⊠	土壙33	火処 4	C 7 🗵	姓士面 4
上壙161	C1SK	土壙 7	上壙228	B 3 🗷	上壙34	火処 5	C 7 🗵	焼土面2
土壙162	C1S区	土壙57	十.壙229	B 3 区	土壙199	火処6	€7区	焼上面3
上壙163	C1SK	上壙60	上壙230	B 3 ⊠	上壙200	火処7	C 7 🗵	焼土面5
上塘164	C1S⊠.	上擴56	上壙231	B 3 区	1:塘186	火処8	C 7 🗷	No.19焼上壙
土壙165	C 1 S 🗵	土壙61	土壙232	B 3 🗷	土壙192	火処9	B 2 ⊠W	焼 1: 7
上壙166	C18区	上壙63	上壤233	B 3 🗷	上壙157	火処10	B 2区W	焼土6
土壤167	C18区	土壙16	土壙234	B 3区	土壙172	火処11	B 2 区W	焼上5
土壙168	C1S⊠	土壙 4	土壤235	B 3 ⊠	土壙196	火処12	B 2 ⊠W	炒E十. 4
上壙169	C1S区	1:壙14	1:坤[236	B 3区	l:壙176	火処13	B 2 区W	焼土3
土壙170	C1S⊠	土壙54	土壤237	B 3 ⊠	土壙194	火処14	B 2 ⊠W	焼 l: 2
上壙171	C1S⊠	上壙34	上壤238	B 3 ⊠	上壙188	火処15	B2⊠W	炉土 1
土壙172	C15区	土壙39	土壙239	B 3 区	土壙210	溝1	C 5 🗷	No.34溝
土壙173	C1S⊠	土壙10	土壙240	B 3 ⊠	土壙201	溝 2	C 5 🗵	No.27満
上壙174	C 1 S 区	土壙 9	上壤241	B 3 区	上壙213	満3	E 2 ⊠N	No.31溝
土壙175	C1SK	上壙 8	土壤242	B 3 区	土壙209	溝 4	E 2 🗵	窪地30
土壙176	C1S⊠	土壙17	土壙243	B 3 ⊠	土壙187	満5	C 3 🗵	満1
上壤177	C1S⊠	土壙 2	1:城244	B 3区	上壙189	満6	C 4区	No.39溝
土壙178	C 1 S 🗵	十.壙82	土壤245	B 7 ⊠	土壤78	溝 7	C 4 ⊠	No.40満
上壙179	C 2 🗵	土壙 5	上壙246	B 7 ⊠	上壙35	満8	C4S⊠	No.104溝
土壙180	C 2 🗷	埋幾	土壤247	B7⊠	土壤36	溝 9	C 11	No.107溝
土壙181	C 2 🗵	土壙27	土壙248	B 7 ⊠	土壙22	潰10	A 2 🗵	溝2
上壙182	C 2 🗷	上壙23	上壤249	B 7 区	上壙23	溝11	A 2区	満3
土壙183	C 2 🗵	土.壙14	土壙250	B 7 区	土壙89	滑12	A 2 ⊠	溝 1

旧遺構名

河道

No.26溝

No.103満

No.53河道

No.14河道

窪地30

たわみ 河道

河道

7号墳

5 号墳

2号墳

6号墳

1号墳

3号墳

4号墳

8 号墳

11号墳

9 号墳

12号墳

10号墳

191石棺

石棺2

石棺3

石棺1

幕1

No.18土器溜まり

№.103土器溜まり

掲載遺構名

上器溜まり1

土器溜まり2 久田原 1 号墳

久田原2号墳

久川原 3 号墳

久田原 4 号墳

久田原 5 号墳

久田原 6 号墳

久田原7号墳

久川原 8 号墳

久田原 9 号墳

久川原10号墳

久田原11号墳

久田原12号墳

箱式石棺1

箱式石棺2

箱式/i枪3

箱式石棺4

箱式石棺5

旧地区名

C7区

C 5区

C 4 ⊠

B 6区

F 2 • 1⊠

E 2 ⊠

D区

C 7 ⊠

F3N区

F 1 ⋅ 2|≤

B 1 S ⊠

C 1 🗵

A 2 ⊠

A 1 ⊠

A 1 🗵

 $A \ 1 \, \boxtimes$ A 1区

A 1区

B 5 ⊠

C 7 🗷

B 6 ⊠

F 1区

F 1 🗵

В 3 🗵

B 2区

B 2 区

B 2 ⊠

C 7区

掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧地区名	旧遺構名	掲載)
	B 2 区	清1	溝69	D2区	溝10	河道4
溝13	C 7 🗵	溝2	─ 満70	D 2 🗵	溝 9	河道 5
	C 8 ⊠	溝 5	11710	B 3 ⊠ 1 ⊠	溝2	河道 6
溝14	B 2 🗷	満2	溝71	D2区	溝11	河道7
満15	B 2 区	大溝の東	清72	C4S⊠	No.32清	11375
1010	C 7 ⊠	満3	清73	A 1 ⊠	満1	河道8
溝16	B 2 区	溝6	溝74	A 1 ⊠	溝3	河道 9
満17	B 2 ⊠	溝 4	満75	A 1 🗵	溝 6	河道
溝18	B 2 ⊠	清 3	溝76	A 1 ⊠	満7	河道
溝19	B 2 区	溝 5	溝77	A 1 🗵	溝 8	上器溜ま
満20	A 1 ⊠	溝 3	Stitzo	B 3 🗵	満111	土器溜ま
imos.	A 1 🗷	清2	<del> </del>	B 5 ⊠	No.13溝	久田原 1
溝21	C 8 🗵	満10	清79	B 3 🗵	満107	久田原 2
itt oo	A 1 ⊠	満1	溝80	B 3 🗵	溝109	久川原3
溝22	C 8 🗷	溝 3	溝81	B3区	溝110	久田原/
N/4 = -	C 8 ⊠	溝 7	満82	B 7 ⊠	溝 1	久田原 5
溝23	C 8 🗷	清 9	溝83	B 7 🗷	溝 2	久田原 6
清24	C 8 区	溝 8	清84	B 7 ⊠	溝3	久田原 7
満25	B 6 ⊠	В 5 区№63滞	清85	C 8 🗵	満1	久川原 8
溝26	B 6 ⊠	No.69溝	溝86	F1K	No.68溝	久田原 9
満27	C 8 🗵	溝 6	満87	F 1 🗹	No.67滞	久田原1
溝28	F 2 · 1区	No.13溝	溝88	F 1 🗵	No. 2 清	久田原1
溝29	F 2 • 1 🗹	No.15溝	溝89	F1K	No.10溝	久田原1
滞30	F 1 🗵	滞61	11300	F 1 🗵	No.11滞	箱式石材
溝31	F2·1区	No.1 i#i		F3NK	游3	新式石 <b>村</b>
清32	F 2 • 1 🗹	No.2 溝	清91	F3NK	溝4	箱式石油
HIPSE	+					
	E 1 🗵	No.22清	清92	F3NK	溝1	箱式石棉
溝33	D2K	溝 4	溝93	F3NK	溝 5	箱式石柏
	B 3 ⊠	溝 1	消94	F3NK	溝2	_
Mar	B3⊠	溝101	溝95	F3S⊠	No.37溝	_
満34	D2K	清8	満96	F3SK	No.34清	_
溝35	B 3 ⊠	溝 5	溝97	F3S区	No.43溝	_
満36	B 3 ⊠	満105	満98	F3SK	No.40清	_
溝37	A 1 ⊠	満 5	落ち込み1	D区	満1	_
溝38	E 1 🗵	No. 5 溝	落ち込み2	B 3 🔀	たわみ101	_
満39	E 1 ⊠	No.13清	落ち込み3	B7 • 8区	下がり	
溝40	E 1 🗵	No. 4 満	泮地1	C 4 🗷	No.106	
満41	E 1 ⊠	No. 3 溝	窪地 2	E 1 🗵	No.20たわみ	
溝42	E 1 ⊠	No.6港?		C I NK	たわみ	
溝43	E 2 🗷	No.29溝	Catally o thanks	C 1 🗵	たわみ	
満44	A 4 🗵	溝 2	──	C1SK	たわみ	
溝45	B 1区	No.110溝		C 2 🗵	たわみ	
溝46	B 3 🗵	溝3	窪地3A	C 2 🗵	たわみ5	
満47	B 3 ⊠	溝 4	窪地3B	C 2 🗵	たわみ1	
溝48	B 4 🗷	溝7	海地3 C	C 2 🗵	たわみ 4	$\dashv$
満49	C 1 🗵	No.235満	窪地3D	C 2 🗵	たわみ 2	
溝50	C1区	No.249溝	窪地3E	C 2区	たわみ3	
溝51	C 1区	No.243溝	窪地3 F	C 2 K	たわみ8・12	$\dashv$
満52	D1K	溝 2	窪地3G	C 2 🗵	たわみ10	
11702	E1K	No.1 清	<b>淮地4</b>	F3NK	たわみ2	-
溝53	D1区	溝3	窪地5	F3N区	たわみ4	$\dashv$
Mica	+			F3SK		$\dashv$
満54	D1⊠	港1	窪地6		土壙7	_
溝55	E 1 🗷	No.23溝	全地7	F3SX.	上壙 5	_
満56	C1SK	No.100港	窪地8	F3SK	No.1 上壙	_
溝57	C 1 S 🗵	清1	窪地9	F3S⊠	No.15・16上壙	_
276	C 2 🗵	溝 1	窪地10	F3SX.	No.35土壤	
満58	A 3 ⊠	満10	<b>-</b>	B 3 🗵	トがり	_
溝59	A 3 🗷	满 9	河道1	B6区	Na.53河道下層	
灣60	A 3 ⊠	溝 5		F 2 • 1⊠	No.20 河道	
溝61	A 3 ⊠	滞 4	河道1・2分岐部	A 3 ⊠		
溝62	A 3 ⊠	溝3		B 2 🗷	河道	
満63	A 3 ⊠	溝2	河道 2	B 6 ⊠	Na.65河道	
溝64	A 3 🗷	滞1		C 5 🗷	No.47河道	
溝65	A 2 🗷	No38溝	河道3	C 5 K	No.26沙①道	
満66	B1KN	溝 1	河道3A	C4S⊠	No.108河道	
						_
溝67	B 1 ⊠.N	溝3	河道3B	C4SK	No.109河道	

#### 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184

# 久田原遺跡 久田原古墳群

苫田ダム建設に伴う発掘調査 2 (第2分冊)

平成16年3月25日 印刷 平成16年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター 岡山市西花尻1325-3

発 行 国土交通省苫田ダム工事事務所 津山市小田中原南2280-1 岡山県教育委員会 岡山市内山下2-4-6

印 刷 旭総合印刷株式会社

# 久田原遺跡 久田原古墳群

苫田ダム建設に伴う発掘調査

2

(第3分冊)

2004

国土交通省苫田ダム工事事務所 岡山県教育委員会

# 目 次

付載	自然	科学による鑑定・分析		
1	岡山	県奥津町久田原遺跡出土の奈良時代火	葬骨•••••	••••• 松下孝幸••••• 759
2	久田	原遺跡出土炭化種子塊の識別・・・・・・・	• • • • • • • • • •	•••••• 松谷暁子••••• 765
3	奥津	町久田原遺跡出上の結晶片岩様緑色管	玉、碧玉製:	剥片の産地分析・・藁科哲男・・・・・・ 771
4	久田	原遺跡出土サヌカイト製石針の原材産	<b>地分析••••</b>	······
5				······大澤正己······ 804
6	久田	原遺跡出土土器の胎土分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• • • • • • • • •	•••••• 白石 純••••• 907
写真図	版			
報告書	抄録			
		写直	図版	
to to to	45		1	
縄文時		16.#11.4排 京县 1		2 晩期土壙14石刀出土状況(北東から)
図版 1	1	晩期微高地1、河道2東斜面 (南から)		3 晩期土壙47注口土器 出土状況(東から)
	2	晩期微高地1南端(南から)		1 晩期土壙55 (南から)
	3	後期微高地2、河道4(東から)		2 晩期火処7 (北から)
図版 2	1	晩期河道3断面(北から)		3 晩期土器溜まり1 (北から)
	2	晩期竪穴住居1(西から)	図版 9	竪穴住居出土遺物①
	3	晩期竪穴住居1炉(西から)	図版10	竪穴住居出土遺物②
図版3	1	晩期竪穴住居2、周辺遺構(西から)	図版11	竪穴住居出土遺物③
7,424	2	晩期竪穴住居3(南から)	図版12	袋状土壙、焼成土壙、土壙出土遺物①
	3	晩期竪穴住居4(南から)	図版13	土壙山土遺物②
図版 4	1	晚期河道2底部、	図版14	土器溜まり1出土遺物
		袋状土壙群(北から)	図版15	河道1、河道1・2分岐部、
	2	晚期河道2底部、		河道2上流部(東斜面)出土遺物①
		袋状土壙群(北から)	図版16	河道2上流部出土遺物②
	3	晩期袋状上壙3(北西から)	図版17	河道2上流部出上遺物③
図版 5	1	晚期袋状上壙 8 (前)	図版18	河道2中流部出上遺物①
		・9 (奥) (北西から)	図版19	河道2中流部出土遺物②
	2	晩期袋状土壙12断面(南から)	図版20	河道2下流部<下層:第4層>出土遺物①
	3	晩期袋状土壙13(東から)	図版21	河道2下流部出土遺物②
図版6	1	晩期焼成土壙1(南東から)	図版22	河道3、遺構に伴わない遺物
	2	晩期焼成土壙5断面(南から)		<微高地 1 ・ 2 出土遺物>①
	3	晩期焼成土壙7(南東から)	図版23	遺構に伴わない遺物

<微高地1・2包含層石器>②

図版7 1 晩期土壙12石器出土状況(北東から)

ᄧᄺᄕᇬᄼ	/审1	生」・14もちい事物/スの44への	ı	つ、進つの(おとう)	
凶版24	退机	構に伴わない遺物<その他>③	507 UC 4.1	3 溝30(北から)	
また 仕 rt± /_	E.		図版41	1 河道 6 (北西から)	
弥生時作		取力及見 (まなと)		2 河道7 (北から)	
図版25	1		₩#E 40	3 河道7(東から)	
	2	竪穴住居5土器出土状況(南東から)	図版42	竪穴住居出土遺物①	
lv4ll⊏oo	3	竪穴住居6遺物出土状況(西から)	図版43	竪穴住居出土遺物②	
凶版26	1	竪穴住居6(西から)	図版44	竪穴住居出土遺物③	
	2	竪穴住居8(南西から)	図版45	竪穴住居出土遺物④	
□ ### * o =	3	竪穴住居7・9(北から)	図版46	竪穴住居出土遺物⑤	
図版27	1	竪穴住居7(北から)	図版47	竪穴住居出土遺物⑥	
	2	竪穴住居9断面(東から)	図版48	竪穴住居出土遺物⑦	
	3	竪穴住居9(北から)	図版49	竪穴住居出土遺物⑧	
図版28	1	竪穴住居11(南西から)	図版50	竪穴住居出土遺物⑨	
	2	竪穴住居12(北から)	図版51	竪穴住居山土遺物⑩、土器棺山土遺物	
	3	竪穴住居13(南から)	図版52	土壙山土遺物①	
図版29	1	竪穴住居14(南から)	図版53	土壙出土遺物②、水田1出土遺物、	
	2	竪穴住居15、周辺遺構群(北から)		溝出土遺物①	
図版30	1	竪穴住居15、周辺遺構群(南から)	図版54	溝出土遺物②	
	2	竪穴住居15、掘立柱建物1・2	図版55	溝出上遺物③	
		(北から)	図版56	溝出上遺物④、洪水砂関連遺物、	
図版31	1	竪穴住居15(北から)		遺構に伴わない遺物①	
	2	竪穴住居16遺物出土状況(東から)	図版57	遺構に伴わない遺物②	
	3	竪穴住居16(東から)	図版58	遺構に伴わない遺物③	
図版32	1	竪穴住居17(南西から)	図版59	遺構に伴わない遺物④	
	2	竪穴住居18~21(西から)	図版60	遺構に伴わない遺物⑤	
	3	竪穴住居20(南西から)			
図版33	1	竪穴住居22(東から)	古墳時代		
	2	竪穴住居23(北西から)	図版61	1 竪穴住居24(東から)	
	3	掘立柱建物 1 (南から)		2 竪穴住居24鉄鎌出上状況(北西から)	l
図版34	1	掘立柱建物2(南から)		3 竪穴住居24カマド(東から)	
	2		図版62	1 竪穴住居25断面(南西から)	
	3	掘立柱建物4(南西から)		2 竪穴住居25(北東から)	
図版35	1	掘立柱建物 5 (北東から)		3 竪穴住居26断面(南西から)	
	2	掘立柱建物6(北から)	図版63	1 竪穴住居26(北から)	
	3	土器棺1・2(北から)		2 竪穴住居27断面(北東から)	
図版36	1	袋状土壙15(南から)		3 竪穴住居27土器出土状況(束から)	
	2	袋状土壙16(南から)	図版64	1 竪穴住居27(東から)	
	3	袋状土壙17(西から)		2 竪穴住居28(西から)	
図版37	1	土壙65(北東から)		3 竪穴住居29(東から)	
	2	土壙71(南西から)	図版65	1 竪穴住居29カマド(東から)	
	3	土壙93a・b(北から)		2 竪穴住居30(東から)	
図版38	1	水田 1 、溝13・14(北から)		3 竪穴住居30カマド(南西から)	
	2	溝6・7(南西から)	図版66	1 竪穴住居31(南東から)	
	3	溝11・13・14上流部(北から)		2 竪穴住居32炭化材出土状況(東から)	į
図版39	1	溝13・14中流部(北から)		3 竪穴住居33東側土壙(東から)	
	2	溝13下流部(南から)	図版67	1 竪穴住居32(東から)	
	3	上壙103・104、溝25・26(南から)		2 竪穴住居33(北東から)	
図版40	1	溝28、河道7(北から)		3 竪穴住居35断面(南から)	
	2	溝29(北から)	図版68	1 竪穴住居35遺物出土状況(北東から)	ı

	2	竪穴住居35(東から)	図版88	1	箱式石棺1(東から)
	2		区が及るる	1	
100 m	3	竪穴住居35カマド(南から)		2	箱式石棺2・3(東から)
図版69	1	竪穴住居39(南から)	ENTIC 00	3	箱式石棺2(東から)
	2	掘立柱建物7(南から)	図版89	1	箱式石棺3(東から)
	3	土壙119(两から)		2	箱式石棺4検出状況(北から)
凶版70	1	河道8(南から)		3	箱式石棺4(北から)
	2	河道9(南東から)	図版90	1	箱式石棺5(南から)
	3	窪地3(西から)		2	土壙墓2(南西から)
図版71		7住居出土遺物①		3	土壙墓3断面(南から)
図版72		<b>个住居出土遺物②</b>	図版91	1	土壙墓3作業風景(北から)
図版73		7住居出土遺物③、土壙出土遺物①		2	土壙墓3棺材・土器出土状況
図版74	土坝	廣出土遺物②、河道出土遺物①			(北から)
図版75	河道	<b>道</b> 出土遺物②		3	土壙墓3遺物出土状況(北から)
図版76	河道	道出土遺物③	図版92	1	土壙墓3完掘状況(北から)
図版77	河道	道出土遺物④		2	土壙墓4断面(南から)
図版78	窪均	也出土遺物①		3	土壙墓5(東から)
図版79	窪均	也出土遺物②、遺構に伴わない遺物	図版93	1	土壙墓6(東から)
				2	土壙墓8(北から)
久田原T	†墳郡	样		3	上壙墓9(南東から)
図版80	1	久田原 1 号墳全景(東から)	図版94	久日	日原 2 号墳出上遺物、
	2	久田原 2 号墳主体部検出状況		久日	日原 5 号墳出土遺物①
		(南から)	図版95	久日	H原 5 号墳出土遺物②
	3	久田原 2 号墳主体部(南から)	図版96	久日	日原 6・7 号墳出土遺物、
図版81	1	久田原 2 号墳主体部遺物出土状況		久日	日原 8 号墳出土遺物①
		(北から)	図版97	久日	日原 8 号墳出土遺物②、
	2	久田原 2 号墳主体部鉄鏃出土状況		久日	日原9・11・12号墳出土遺物
		(西から)	図版98	土書	8棺、箱式石棺、土壙墓出土遺物
	3	久田原3号墳墳丘(東から)			
図版82	1	久田原 4 号墳主体部(南西から)	古代		
	2	久田原5号墳全景(南西から)	図版99	1	北部中央・北東
	3	久田原 5 号墳主体部(北西から)			(掘立柱建物8~10付近)
図版83	1	久田原6号墳全景(南西から)			(北東上空から)
	2	久田原6号墳主体部(北から)		2	中央部北東航空写真
	3	久田原7号墳全景(南西から)			(掘立柱建物39~48付近)
図版84	1	久田原7号墳主体部(南から)			(南上空から)
	2	久田原8号墳主休部(南西から)	図版100	1	中央部北東
	3	久田原 8 号墳主体部遺物出土状況			(掘立柱建物50~55付近)
		(南西から)			(南上空から)
図版85	1	久田原9号墳主体部(北から)		2	t t two t
	2	久田原10号墳全景(西から)			(掘立柱建物58~61付近)
	3	久田原10号墳主体部(南から)			(南上空から)
図版86	1	久田原11号墳全景(南西から)	図版101	1	
	2	久田原11号墳全景(北東から)		•	(南から)
	3	久田原11号墳周溝内遺物出土状況①		2	竪穴住居43
	9	(南西から)		_	(北西から)
図版87	1	久田原11号墳周溝内遺物出土状況②		3	竪穴住居44
H//X01	•	(南西から)			(北から)
	2	久田原12号墳主体部(南西から)	図版102	1	掘立柱建物8、柱穴列1
	3	土器棺3(北西から)	E3/0X102	1	(北東から)
	J	エロロロ ( ( ( ( ( ) ) ) )	1		(ALAKA: シ)

	2	掘立柱建物 9			(南から)
		(北東から)		3	掘立柱建物43
	3	掘立柱建物10			(南から)
		(北から)	図版111	1	掘立柱建物46
図版103	1	掘立柱建物11			(南西から)
		(南西から)		2	掘立柱建物48
	2	掘立柱建物12			(南西から)
		(南西から)		3	掘立柱建物48~50周辺全景
	3	掘立柱建物12~17周辺全景			(南東から)
		(北から)	図版112	1	掘立柱建物50
図版104	1	掘立柱建物15			(南から)
		(南東から)		2	掘立柱建物52
	2	掘立柱建物16·17			(北から)
		(北東から)		3	掘立柱建物53
	3	掘立柱建物20			(北から)
		(南東から)	図版113	1	掘立柱建物54
図版105	1	掘立柱建物21			(北から)
		(北から)		2	掘立柱建物55
	2	掘立柱建物22			(北から)
		(北から)		3	掘立柱建物56
	3	掘立柱建物23			(南から)
		(北から)	図版114	1	掘立柱建物57
図版106	1	掘立柱建物24			(西から)
		(南東から)		2	掘立柱建物58
	2	掘立柱建物25			(北から)
		(東から)		3	掘立柱建物59
	3	掘立柱建物26			(北から)
		(北東から)	図版115	1	掘立柱建物60
図版107	1	掘立柱建物28			(北から)
		(北から)		2	掘立柱建物61
	2	掘立柱建物29·30周辺全景			(北から)
		(北東から)		3	掘立柱建物63
	3	掘立柱建物32			(南から)
		(北から)	図版116	1	製鉄炉1検出状況
図版108	1	掘立柱建物33~35周辺全景			(束から)
		(束から)		2	鍛冶炉 1
	2	掘立柱建物33			(北から)
		(北西から)		3	鍛冶炉2・3、土壙126
	3	掘立柱建物34			(南から)
		(北西から)	図版117	1	火葬墓1検出状況
図版109	1	掘立柱建物35・36、製鉄炉1			(南から)
		(北から)		2	火葬墓 1 火葬骨埋納状況
	2	掘立柱建物37			(南から)
		(東から)		3	火葬墓 1 完掘
	3	掘立柱建物38			(南から)
		(東から)	図版118	1	溝38(奥)・40
図版110	1	掘立柱建物40·41			(北東から)
		(南から)		2	溝39(右)・40
	2	掘立柱建物42			(南東から)

	Mb (da)			to to to to make the
	3 溝40 (奥)		2	掘立柱建物73
	(北から)			(南から)
図版119	1 溝39 (奥)		3	
	(北から)			(西から)
	2 溝39陶馬頭部出土地点周辺	図版130	1	掘立柱建物74~76
	遺物出土状況			(西から)
	(南東から)		2	掘立柱建物77
	3 溝39陶馬頭部出土地点付近			(南から)
	遺物出土状況		3	掘立柱建物77・78
	(北西から)			(南から)
図版120	1 溝45断面	図版131	1	掘立柱建物78、柱穴列8
	(南から)			(西から)
	2 格子溝		2	掘立柱建物79
	(南東から)			(南から)
	3 土器溜まり2		3	掘立柱建物80
	(北から)			(南から)
図版121	竪穴住居、掘立柱建物、火葬墓、	図版132	1	掘立柱建物81
	土壙出土遺物			(南から)
図版122	溝39出上遺物		2	掘立柱建物82
	溝40、上器溜まり、一括出上鉄鎌			(南から)
	遺構に伴わない遺物		3	掘立柱建物84
	21137-1112-311-2113			(南西から)
中世		図版133	1	掘立柱建物92
図版125	1 掘立柱建物64	<u> </u>	•	(東から)
E7/02120	(北東から)		2	掘立柱建物98
	2 掘立柱建物65・66		_	(南東から)
	(西から)		3	掘立柱建物103
	3 掘立柱建物67		Ü	(南から)
	(南から)	図版134	1	中央部東掘立柱建物群①
図版126	1 掘立柱建物68	四,00154	1	(南上空から)
四州及120	(北東から)		2	
	2 北部西掘立柱建物群①		4	(南上空から)
	(南から)	図版135	1	中央部東掘立柱建物群③
		X  / X  133	1	(北上空から)
	3 北部西掘立柱建物群② (西から)		2	掘立柱建物106・107周辺
₩1107			2	
図版127	1 北部西掘立柱建物群近景	₩.100	1	(北上空から)
	(南から)	図版136	1	掘立柱建物104
	2 掘立柱建物69~71、柱穴列 7		0	(北から)
	(西から)		2	掘立柱建物105
	3 掘立柱建物70・71		_	(西から)
<b>₩</b>	(南から)		3	掘立柱建物107
図版128	1 掘立柱建物70			(南から)
	(南から)	図版137	1	掘立柱建物108周辺
	2 掘立柱建物71			(北上空から)
	(南から)		2	掘立柱建物110周辺
	3 掘立柱建物72			(北上空から)
	(北西から)	図版138	1	掘立柱建物111周辺
図版129	1 掘立柱建物73・74			(北上空から)
	(南から)		2	掘立柱建物113・114周辺

		(北上空から)		2	掘立柱建物133
図版139	1	掘立柱建物108			(南東から)
		(東から)		3	掘立柱建物134
	2	掘立柱建物109			(北から)
		(南から)	図版148	1	掘立柱建物135
	3	掘立柱建物110			(北から)
		(北から)		2	掘立柱建物136
図版140	1	掘立柱建物111			(北から)
		(南から)		3	掘立柱建物137
	2	掘立柱建物114			(南から)
		(東から)	図版149	1	掘立柱建物138・139
	3	掘立柱建物115			(南から)
		(西から)		2	掘立柱建物140
図版141	1	中央部南東掘立柱建物群			(西から)
		(北上空から)		3	掘立柱建物141①
	2	掘立柱建物116周辺			(真上から)
		(北上空から)	図版150	1	掘立柱建物141②
図版142	1	掘立柱建物117			(南東から)
		(北から)		2	掘立柱建物142・143
	2	掘立柱建物118			(南東から)
		(西から)		3	柱穴列10~12
	3	掘立柱建物119			(南東から)
		(南から)	図版151	1	南部南端掘立柱建物群①
図版143	1	掘立柱建物120・124			(南上空から)
		(北から)		2	南部南端掘立柱建物群②
	2	掘立柱建物121			(真上から)
		(南から)	図版152	1	南部南端掘立柱建物群③
	3	掘立柱建物122			(真上から)
		(北から)		2	南部南端掘立柱建物群④
図版144	1	掘立柱建物123			(真上から)
		(北から)	図版153	1	南部南端掘立柱建物群⑤
	2	掘立柱建物124			(真上から)
		(北東から)		2	南部南端掘立柱建物群⑥
	3	掘立柱建物125			(北上空から)
		(束から)	凶版154	1	掘立柱建物145
図版145	1	掘立柱建物126			(西から)
		(北から)		2	掘立柱建物147・148
	2	掘立柱建物127・128周辺			(北西から)
		(北東から)		3	掘立柱建物149
	3	掘立柱建物127①			(西から)
		(南東から)	図版155	1	掘立柱建物151・152
図版146	1	掘立柱建物127②			(北から)
		(北西から)		2	掘立柱建物152
	2	掘立柱建物127・132			(北から)
		(南東から)		3	掘立柱建物153~155
	3	掘立柱建物128			(北東から)
		(北東から)	図版156	1	掘立柱建物153・154
図版147	1	掘立柱建物131			(北から)
		(南から)		2	掘立柱建物155

		(北東から)		3	上壙墓21
	3	掘立柱建物156~158			(南から)
		(南西から)	図版165	1	土壙墓22
図版157	1	掘立柱建物156			(西から)
		(南から)		2	土壙墓23
	2	掘立柱建物157			(南から)
		(南から)		3	土壙墓24
	3	掘立柱建物158			(北から)
		(南から)	図版166	1	竪穴遺構 1
図版158	1	鍛冶工房 1 周辺			(南から)
		(南東から)		2	竪穴遺構 2
	2	鍛冶工房 1 検出状況			(南から)
		(北西から)		3	土壙180
	3	鍛冶工房 1			(南から)
		(北西から)	図版167	1	土壙187
図版159	1	鍛冶炉4・5周辺		_	(西から)
	-	(北から)		2	土壙192
	2	鍛冶炉 6			(南から)
		(南から)		3	上壙200
	3	鍛冶炉8		_	(北から)
		(北西から)	図版168	1	土壙218
図版160	1	鍛冶炉10検出状況①		-	(南から)
	-	(北西から)		2	土壙233
	2	鍛冶炉10検出状況②			(南から)
		(北西から)		3	土壙235
	3	鍛冶炉10		_	(北から)
		(北東から)	図版169	1	土壙254
図版161	1	上壙墓10			(東から)
		(東から)		2	上壙255
	2	土壙墓10腰刀出土状況			(北から)
		(東から)		3	土壙263
	3	土壙墓11			(南から)
		(東から)	図版170	1	土壙264
凶版162	1	土壙墓12			(北から)
		(束から)		2	土壙264遺物出土状況
	2	土壙墓13			(東から)
		(西から)		3	土壙266遺物出土状況
	3	土壙墓14周辺			(西から)
		(北から)	図版171	1	土壙269
図版163	1	土壙墓14			(南から)
		(南から)		2	土壙274
	2	土壙墓16			(南から)
		(北から)		3	土壙275
	3	土壙墓17			(南から)
		(東から)	図版172	1	土壙283
図版164	1	土壙墓20検出状況			(南から)
	-	(南から)		2	上壙288
	2	土壙墓20		_	(東から)
		(北から)		3	土壙290
			ı		

(北東から)

図版173 1 溝52、落ち込み1

(北から)

2 溝57周辺

(南西から)

3 溝72

(北から)

図版174 1 溝88

(南西から)

2 溝89・90

(南東から)

3 窪地10

(南から)

図版175 掘立柱建物出上遺物

図版176 鍛冶工房1出上遺物

図版177 鍛冶炉出土遺物、土壙墓出土遺物①

図版178 土壙墓出土遺物②

図版179 土壙墓出土遺物③

図版180 土壙墓出土遺物④

図版181 土壙墓出土遺物⑤、土壙出土遺物①

図版182 土壙出土遺物②

図版183 土壙出土遺物③

図版184 土壙出土遺物④、落ち込み、

窪地出土遺物

図版185 柱穴出土遺物、遺構に伴わない遺物

#### 1 岡山県奥津町久田原遺跡出土の奈良時代火葬骨

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム松 下 孝 幸

キーワード:岡山県、火葬骨、奈良時代人骨、女性

#### はじめに

岡山県苦田郡奥津町久田下原に所在する久田原遺跡の発掘調査が1995年~2000年に実施された。この遺跡は奈良時代の集落の跡であるが、製鉄炉、鍛冶炉の跡が見つかっており、ここで鉄器の生産がおこなわれていた。火葬墓はわずか1基のみである。他に土壙墓が検出されているが、これは中世の土壙墓である。火葬墓の調査は1996年におこなわれ、蔵骨器から火葬骨が検出された。

筆者がおこなった奈良時代の火葬骨の鑑定は本例で2例目である。初例は山口県長門市の上藤中横 穴から出土した火葬骨で(松下、1999)、8世紀前半に属する。奈良時代の火葬骨の例は少なく、他に 出雲市の光明寺3号墓(井上、2000)や鳥取県倉吉市長谷遺跡(井上、1992)の例があるにすぎない。

火葬骨の量は、他の例に漏れず本例も多くない。骨の状況に差がみられることから火力に部分的に ムラがあったことが推測される。

火葬骨は人類学的には鑑定の価値がないように思われているが、そのようなことはけっしてない。 蔵骨器に納められている場合は、すべての骨が容器に納められたわけではないので、どのような骨が 選択されたかを考えておかねばならない。頭蓋の量があまりにも少なすぎる場合は、分骨の可能性も 考慮しておく必要がある。拾骨された部位によっては性別や年齢も推定することが可能であるし、火 力が弱ければ、変形があまりおきないので、計測も可能な場合もある。また、「のどぼとけ」と俗称 される第二頸椎(の歯突起)がいつごろから意識的に埋納されるようになったかも、筆者は意識的に追 究している。

本例の場合は製鉄遺跡から出土した火葬骨であるから、この製鉄や鍛冶をおこなった人々、あるいは鍛冶集団を治めた特定の集団との関わりを意識して人骨を鑑定した。その結果を報告しておきたい。

#### 資料および所見

残存していた火葬骨は重量にして約560gである。人骨は各骨ごと番号が付けられて取り上げられていたので、その人骨一つひとつを同定・鑑定したが、重複する部分がないので、蔵骨器から検出された火葬骨は1体分の人骨の一部と推測した。ただ、飴が溶けたように著しく捻れたものも存在したが、それほど亀裂も生じていないものや炭化して黒くなった骨もみられたことから、火力にムラがあったと思われる。これほど骨の状態に差がある火葬骨は珍しい。

蔵骨器に納められていた人骨は、頭蓋、下顎骨、鎖骨、肩甲骨、上腕骨、前腕骨(橈骨、尺骨)、大腿骨、脛骨、椎骨、肋骨、足根骨、手根骨、中手骨のそれぞれ一部である。頭蓋は脳頭蓋のごく一部で、残存量が少なすぎて、不自然である。

下顎骨は歯槽部が残っていたので、歯槽の状態を観察することができた。歯式で示しているように、

本来歯が釘植していたようであるが、蔵骨器には歯は入っていなかった。

//**6** 5 4 3 2 / //////

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 /:不明、番号は歯種〕

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小臼歯、5:第二小臼歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯〕

下顎骨の径は小さい。肩甲骨は両側の関節窩部分(外側角)と烏口突起が残っており、他の骨とは明らかに違った残り方をしている。肩甲骨が蔵骨器に納められていることはほとんどない。筆者がこれまで経験した例では、佐賀県の霊仙寺跡から出土した中世火葬骨に肩甲骨が残っていたことを珍しい事例として記憶しているにすぎない(松下、1980)。上腕骨は骨体の一部や滑車などの遠位端が残っていた。残存部分の径は小さい。大腿骨の残りも少なく、骨体の破片や骨頭の一部が残っていたにすぎない。脛骨の残りも少なく、骨体の一部が同定できただけである。大きな骨である上腕骨、大腿骨、脛骨の残存量が少ないわりに椎骨と肋骨の量が比較的多く、これが本火葬墓にみられる特徴である。また、距骨、踵骨、外則楔状骨といった足根骨や左側第二中手骨が残っていた。また、豆状骨(手根骨)というごく小さな骨が残っていたが、これは中手骨を納める際に一緒に入ったとみた方がよかろう。

注目していた第二頸椎(軸椎)の歯突起部分を認めた。第一頸椎は存在しなかったが、他の頸椎や胸椎が比較的多く残っていたので、第二頸椎だけを意識的に埋納したとは考えにくい。また、第二頸椎は最上部から検出されたわけではなく、下層から検出されている。

以上、本蔵骨器から検出された火葬骨の残存状態の特徴をまとめると、火葬されたあとの状態の差がやや大きい、頭蓋の量が少なすぎる、四肢長骨(上腕骨、大腿骨、脛骨)の残存量が少なく、その割には椎骨と肋骨の量が多い、ということを指摘できるが、同時に肩甲骨に至っては左右両側が納められており、これは特筆に値する。

性別は、寛骨が存在しないし、頭蓋も前頭骨や後頭骨が残っていないので、形態的特徴から性別を判別することができなかった。骨は火を受けると収縮するといわれているが、筆者のこれまでの経験からすれば、火葬されてもそれほど大きく縮小することはないようである。本例は、下顎骨、上腕骨の径が小さく、径が大きいことが予想されそうな骨はまったく見あたらなかった。骨の大きさだけから性判別する際は、危険率が大きくなるが、本例の場合は、骨の大きさからしか性別を推測することができない。骨の径が小さいことを根拠にすれば、本例は女性の可能性が強い。

もし、男性だとしても、四肢骨の径が小さいことから、鍛冶の仕事に従事していたとは考えがたい。

鍛冶の遺跡から出土した人骨の例は沖縄県北谷町後兼久原遺跡出土のグスク時代人骨があるが、この男性人骨は四肢骨が太くたくましかった。とくに上腕骨の太さは著しく、おそらくこの被葬者が鍛冶屋だったと推測される。この例と比較しても本例の火葬骨は四肢骨の径が小さすぎるのである。

年齢は、頭蓋の残存量が少なすぎて、縫合を観察することができなかったので、不明であるが、成 人骨であることは間違いない。残存していた椎骨体に骨棘がみられないので、それほど高齢者だった とは思えないし、骨端線も認められないから20歳前後の若年者とも考えられないので、壮年か、熟年だったと思われる。年齢区分は表1を参照されたい。

表 1 年齢区分 (Table 1.Division of age)

区分   年     1歳未満	<b>持</b>
見 1歳未満	
	•
1歳~ 5	5歳(第一大臼歯萌出直前まで)
見 6歳~155	5歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
手 16歳~205	〕歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
₽ 21歳~39	0歳(40歳未満)
₣ 40歳~59	9歳(60歳未満)
- 0015011	
	手 40歳~59 手 60歳以上

注)成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

次に、蔵骨器に骨を埋納する際に規則性があったかどうかを検討してみた。幸い人骨の実測図が作成され、番号が付けられて人骨が取り上げられていたので、上層、中層、下層でそれぞれ検討してみた。下層には大腿骨、脛骨、上腕骨、橈骨などの大きな骨の一部(骨片)が存在し、肋骨や椎骨もみられる。同時に第二中手骨や豆状骨なども存在するが、これは骨の隙間から下層へ落ちたものであろう。中層では肋骨と四肢骨片がみられ、上層ではこれに椎骨が増える。下層に四肢骨の大きな破片がみられる以外には、三層とも大きな違いはみられない。頭蓋片は上層と下層にみられ、下顎骨片は中層と下層にあった。肋骨と椎骨は三層に入っているが、両者とも下層がもっとも多い。このように下層にやや大きな破片を入れている以外は目立った規則性はみられない。これはこれまで筆者が火葬骨を調査してきた例と同じ傾向である。

#### 要約

岡山県苦田郡奥津町久田下原にある久田原遺跡の1996年の発掘調査で、火葬墓が1基発見され、蔵骨器から火葬骨が検出された。火葬骨の残存量は多くはないが、人体を構成する各骨が埋納されていた。残存人骨を解剖学的、人類学的に精査し、以下の所見を得た。

- 1. 人骨の残存量は重量にして約560gで、残存量は少ない。
- 2. この火葬骨は、考古学的所見から奈良時代(8世紀前半)に属する火葬骨である。
- 3. 蔵骨器に納められていた人骨は、頭蓋、下顎骨、鎖骨、肩甲骨、上腕骨、前腕骨(橈骨、尺骨)、 大腿骨、脛骨、椎骨、肋骨、足根骨、手根骨、中手骨のそれぞれ一部で、骨の種類は多いが、頭蓋 の残存量が少なく、その割に、肋骨と椎骨の量が多い。
- 4. 寛骨や前頭骨、後頭骨が残存していなかったので、形態的に性別を判別することができなかった。 四肢骨の径が小さいが、このことだけから、性別を推定するとすれば、女性ということになろう。
- 5. 年齢は不明であるが、椎体からは高齢者とは思えないし、四肢骨の骨端には骨端線もみられないので、若年者とも考えられない。

- 6. 拾骨に際しては、最初に大腿骨や脛骨などの大きな骨の破片を埋納して、その後は適当に骨を納めていったようで、とくに規則性はみられなかった。
- 7. 第二頸椎が存在するが、中層の下部から検出されており、また他に頸椎や胸椎もみられることから、第二頸椎が「のどぼとけ」として意識的に選択され、埋納された可能性は低い。
- 8. 肩甲骨は両側とも検出され、しかも両側とも上層から検出されたことは興味深い。両側とも埋納されていることから、肩甲骨は意識的に拾骨された可能性がある。
- 9. 本遺跡は製鉄や鍛冶の遺跡であることから、火葬された被葬者はこれらと何らかの関係をもった 人間であることが予想されたが、四肢骨の径が小さいことから、被葬者は男性よりも女性の可能性 が強い。もし、男性だとしても、製鉄や鍛冶に直接携わった人間とはとても思えない。火葬墓がわ ずか1基しか発見されておらず、蔵骨器に使用された須恵器は、鉄鉢とよばれる仏器を模倣したも ので、寺院や官衙跡から出土するという。本遺跡からは製鉄炉、鍛冶炉が発見されているので、被 葬者は製鉄や鍛冶に何らかのかかわりを持ち、その宗教的行事に関係のある人間かもしれない。

#### 謝辞

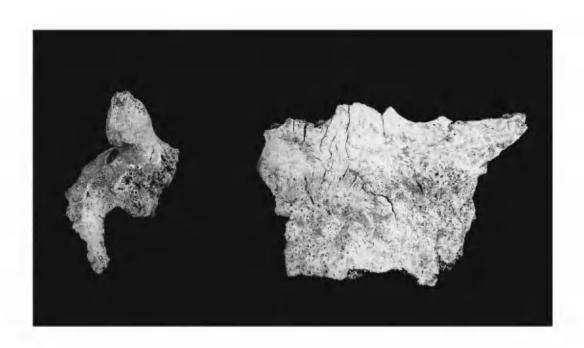
擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた岡山県古代吉備文化財センターの諸先 生方に感謝致します。

#### ≪参考文献≫

- 1. 井上晃孝、1992: 3区古墓の火葬骨。長谷遺跡発掘調査報告書(倉吉市文化財調査報告書第76集):106-109.
- 2. 并上晃孝、2000:出雲市上塩冶町光明寺 3 号墓火葬骨。光明寺 3 号墓  $\cdot$  4 号墳(斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 II):54-63.
- 3. 松下孝幸、1980:茶屋原遺跡出土の中世人骨。茶屋原遺跡(北九州文化財調査報告書37):58-61.
- 4. 松下孝幸、1980:霊仙寺跡出土の中世人骨。霊仙寺跡(東脊振村文化財調査報告書4):108-113.
- 5. 松下孝幸・他、1987:山口県下松市梅ノ木原遺跡出土の火葬骨。梅ノ木原遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告 第98集):107-112.
- 6. 松下孝幸、1995:山口県周東町上久宗遺跡出土の火葬骨。山口県埋蔵文化財調査報告第174集:25-30.
- 7. 松下孝幸、1997: 広島県豊平町地徳古墓出土の中世人骨。国営広島北部土地改良事業に係る埋蔵文化財 発掘 調査報告書(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第152集): 51-59.
- 8. 松下孝幸、1998:北九州市下到津近世墓出土の火葬骨。下到津近世墓-福岡県北九州市所在の下到津近世墓 の発掘調査報告書-:9-11.
- 9. 松下孝幸、1999: 長門市上藤中横穴出土の奈良時代火葬骨。上藤中横穴墓群(長門市埋蔵文化財調査報告 第 3集):15-18.
- 10. 松下孝幸、1999:山口県豊浦町吉永遺跡出土の中世火葬人骨。吉永遺跡(Ⅲ 東地区) 平成10年度県営 ほ場 整備事業に伴う発掘調査報告 (山口県埋蔵文化財調査センター報告第10集): 51-54.
- 11. 松下孝幸、2002:山口県下関市吉母堂の下遺跡出土の中世火葬骨。吉母堂の下遺跡(下関市埋蔵文化財調査報告書61):10-11.
- 12. 松下孝幸、2002:三重県亀岡市勢武谷経塚出土の近世火葬骨。近畿自動車道名古屋関線(亀山〜亀山) 埋蔵文化財調査報告 I 勢武谷経塚(三重県埋蔵文化財調査報告226-1):32-36.
- 13. 松下孝幸、徳島県三好町円通寺遺跡出土の中世火葬骨。(印刷中)
- 14. 松下孝幸、島根県美都町東仙道土居遺跡出土の中世火葬骨。(印刷中)

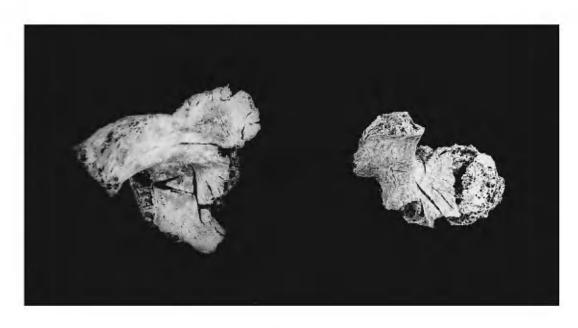


下顎骨



第二頸椎(軸椎)(左)・頭蓋(右)

久田原遺跡出土人骨(火葬骨)



肩甲骨



左側距骨



上腕骨

久田原遺跡出土人骨 (火葬骨)

#### 2 久田原遺跡出土炭化種子塊の識別

東京大学総合研究博物館 松谷 暁子

久田原遺跡土壙墓3から出土した炭化種子塊の識別を依頼され、実体顕微鏡を中心とした観察を行った。種子塊の片面は、炭化した板材破片に付着しており(注1)、塊となって残存したのはそのためと考えられる。板材が付着している面のほか、その裏面や、両側面からも種子が観察される(写真1-12)。燃焼により外形をとどめないものも多いが、板材の付着している面で観察される粒の方が、その裏面よりも比較的保存がよいものが多い。

保存状態のよい種子に注目すると、様々な方向を向いていて、正確な大きさを計測するのは困難であるが、長さが4-5ミリメートル、幅は2-2.5ミリメートルくらいの楕円形をしていると思われる(写真4、5、10、11)。この大きさと外形から考えられる作物としては、イネ、オオムギ、マメ類などが考えられるが、へそが観察されないことなどから、マメ類ではなく、外額や内額が残っていない状態のイネやオオムギと思われる。額の取れた状態のイネとオオムギが炭化した場合、よく似ていて紛らわしいことが多いが、オオムギの場合は、上下に走る溝が片面に存在し、その裏面の下方中央には胚の跡が存在しているのに対し、イネ粒の場合は、外額と内額が付着していたときの位置を示す二本の線が表面に認められ、胚の跡は、中央ではなく側方に来るなどで、識別される(松谷1900)。

久田原遺跡から出土した炭化種子塊の様々な部分を観察すると、オオムギに粒に相当する構造は見当らないが、二本の線などイネ粒に相当する構造は幾つか観察される(写真2-5、8-11)。そして、保存の良くない部分もイネ粒と考えても差し支えないように思われる。

さて、イネ粒が炭化して塊となったものを筆者が識別した例としては、神奈川県の大塚遺跡や本郷遺跡などがあるが、それらの場合には、特徴的な籾の細胞構造が残存しており、それによってイネとの判断を行うことができた(松谷1991、1994)。

籾構造がなく、粒の外形もはっきりせず、観察された微細構造のみによってイネと推定した例として、宮崎県内野々遺跡から出土した土器(弥生時代後期)に残された炭化物がある。この場合は、本郷遺跡から出土した炭化粒の微細構造と比較してイネと推定した(松谷1992)。

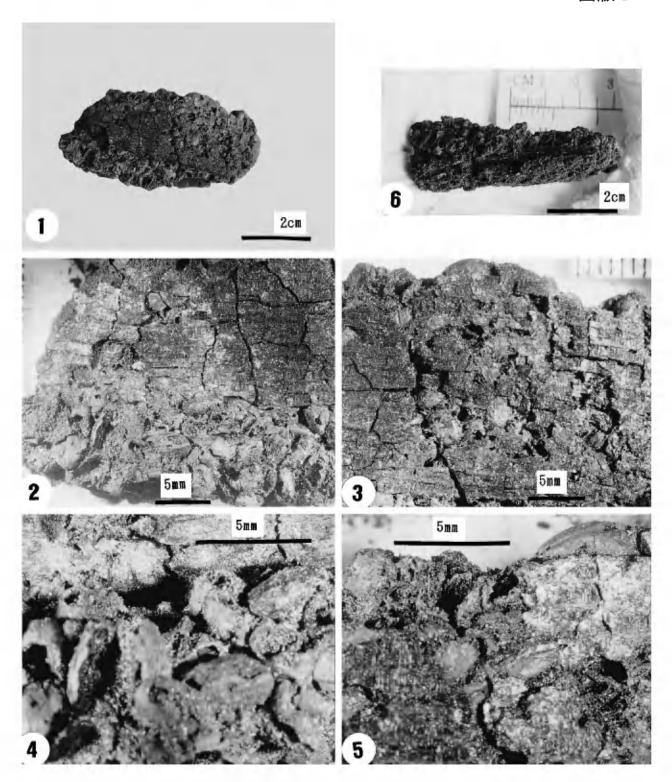
久田原遺跡出土炭化種子塊の中には、籾の部分が認められず、従って籾相当の構造による確認はできない。そこで、走査型電子顕微鏡を利用して、塊からはがれた粒の破片の微細構造の観察を行ったところ、平行線構造や多角形細胞が観察された(写真14-15)。これらは本郷遺跡などイネ炭化粒と考えられる粒で観察される細胞構造(写真16)とよく似ている。

従って、結論として、久田原遺跡から出土した塊状を構成する炭化種子は、イネ粒が炭化したもの と判断しても良いであろう。

(注) 7世紀の棺材に利用されたと考えられているこの板材は、徑断面が観察され、従って柾目材である。導管は存在せず、針葉樹である。棺材にはコウヤマキが多く使用されるので、走査型電子顕微鏡による観察で分野膜孔を観察したが、分野膜孔は窓状ではなく、従ってコウヤマキではなかった(写真17、18)。

#### 文献

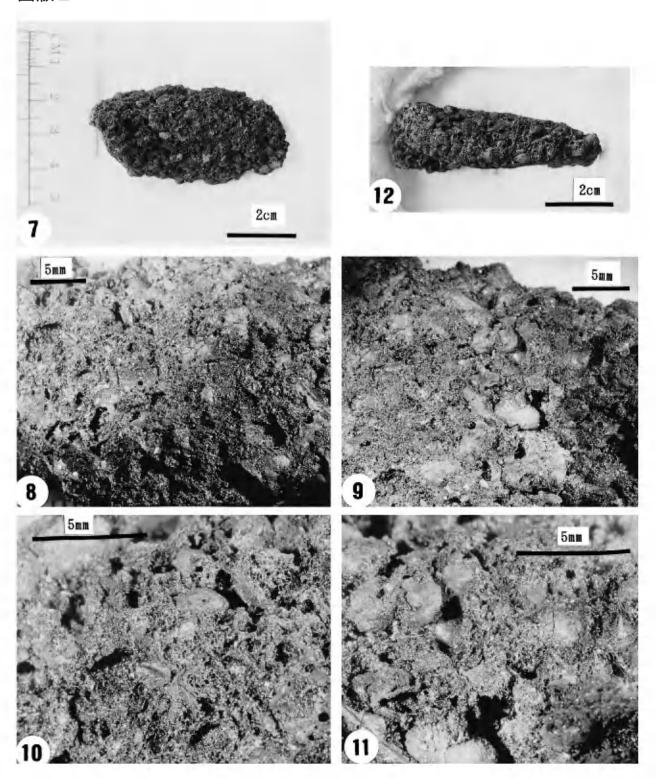
- 松谷暁子 1990 岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰像について。「岡山大学構内遺跡調査研究報告4」103-106。
- 松谷暁子 1991 海老名本郷遺跡出土炭化植物遺残の識別。「海老名本郷(WII)」本郷遺跡調査団、288-293 図版102-107。
- 松谷暁子 1992 内野々遺跡出土炭化物の識別。「内野々遺跡」 宮崎県教育委員会、82-85。



板付着面と側面の接写および実体顕微鏡写真

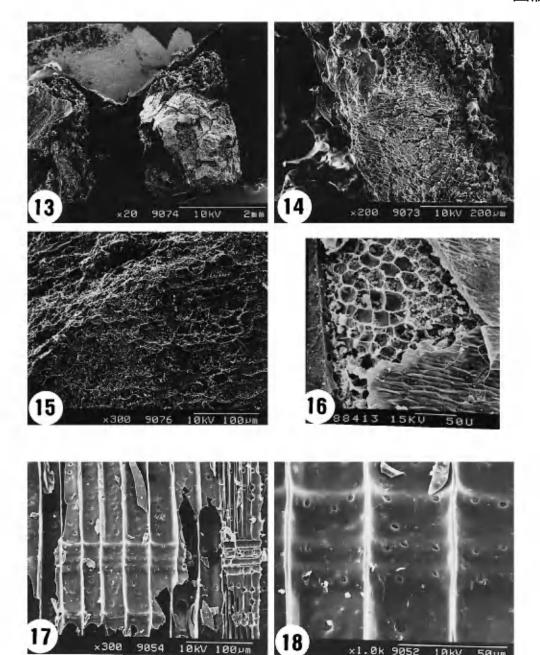
- 1 板付着面から見た炭化塊
- 2 写真1の左部分拡大写真(実体顕微鏡写真)
- 3 写真1の右部分拡大写真(実体顕微鏡写真)
- 4 写真2の左下方部拡大写真(実体顕微鏡写真)
- 5 写真4の左上部拡大写真(実体顕微鏡写真)
- 6 炭化塊側面(板付着面が上)

### 図版Ⅱ



板付着面の裏面と側面の接写および実体顕微鏡写真

- 7 炭化塊 (写真1の裏面)
- 8 写真7の左上部分拡大写真(実体顕微鏡写真) 11 写真9の左上部拡大写真(実体顕微鏡写真)
- 9 写真7の右上部拡大写真(実体顕微鏡写真) 12 炭化塊側面(板付着面は下)
- 10 写真8の左上部拡大写真(実体顕微鏡写真)



炭化粒破片と参考写真および炭化板材片の走査型電子顕微鏡写真

- 13 炭化塊から剥がれた粒の2破片(走査型電子顕微鏡写真)
- 14 写真13の左破片下部拡大写真:平行線を下細胞構造が観察される
- 15 写真13の右破片中央部拡大写真
- 16 参考写真:海老名本郷遺跡から出土したイネ粒の一部拡大
- 17 板材破片の徑断面(走査型電子顕微鏡写真)
- 18 同上写真左中央部拡大写真

## 3 奥津町久田原遺跡出土の結晶片岩様緑色管玉、 碧玉製剥片の産地分析

京都大学原子炉実験所 藁 科 哲 男

#### 1 はじめに

勾玉、玉、垂玉、管玉などの岩石名の推定は、一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが 真実のよう思われているのが実態である。玉類の原材料としては滑石、軟玉(角閃石)、硬玉、蛇紋 岩、結晶片岩、碧玉、緑色凝灰岩(グリーンタフ)などが推測される。

それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があ り、若干の傷を覚悟して硬度を求める、色、光沢感、比重、介在物の有無、定性的な成分組成を求め るなどで、岩石名を決める重要な結晶構造、屈折率など鉱物組成を明らかにする情報は得られない。 また、肉眼観察で求めた岩石名が岩石・鉱物学界で通用するとは思えない。原石名が決定されたのみ では考古学の資料としては不完全で、例えば緑色凝灰岩の管玉と言う岩石名が決められても産地は沢 山あり何れの産地か不明である。また、軟らかく加工が容易だと想像できても、実際の硬度、打撃亀 裂性などを測定した上で考察しなければ、古代の管玉製作技術に関する資料として無意味である。地 学の専門家でも、肉眼観察では、岩石名を間違うことは避けられないと指摘している。岩石名を決定 することよりも、どこの産地の原石が使用されているか、産地分析が行われて初めて、考古学に寄与 できる資料となり、また産地分析の過程で岩石名決定に関係する情報の一部が得られるが岩石名を特 定するには至らない場合が多い。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発 見後は、専ら国内説で、岩石学的方法12 および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光 X線 分析で行う元素比法2沖3沖4)が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究 は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例がが報告されている。 石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の 意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範 囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生き るために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセ サリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らか になるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしている かもしれず、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器 の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

産地分析で遺物の原材産地が特定出来なくても得られた分析値と同じ組成の遺物を使用した遺跡の 広がりを求めることにより、遺跡間相互になんらかの関係があったと推測できる情報が得られ、将来、 原材産地の所在地が明らかになれば原石伝播に関する情報も得られる。今回分析を行った管玉は岡山 県苫田郡奥津町久田下原に位置する久田原遺跡出土の縄文時代晩期の結晶片岩様緑色管玉2個および 弥生時代の碧玉製剥片2個で、産地分析結果が得られたので、結晶片岩様緑色管玉、碧玉製剥片の順 番に報告する。

#### 2 非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。また、原石産地が不明の玉材を使用した遺物についても、遺物同士の指紋を比較することにより、同質の玉材が使用されているか否か判定できる。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が 行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している40 非破壊で分析を行なう蛍 光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光 X 線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。結晶片岩様緑色玉類は ESR 法を併用するが試料を全く破壊することなく、玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した50。

#### 3 久田原遺跡出土の結晶片岩様緑色管玉の原材産地分析

#### 原石産地不明の結晶片岩様緑色玉類の蛍光×線分析

結晶片岩様緑色岩の玉材および玉類は九州南部の遺跡から出土するが、原石産地は不明で、肉眼的に均一な石質ばかりではなく、中には不均一で緑色の部分に石英脈状岩石が貫入しているもの、緑色部分に黄色の微小斑点が見られる物、結晶並びが明確なもの、またヒスイ様に見える部分など様々である。従って、これら玉類はヒスイ製、軟玉製、滑石製、蛇紋岩製など様々推測されてきた経緯がある。この玉類の岩石名を決定するには、岩石を構成する鉱物の種類を求める必要があり、X線回折など結晶定数から同定する必要がある。蛍光X線分析でこれら玉類から硬玉の主成分組成であるNa元素が検出限界以下であることと、硬玉の比重が3.0以上に達しないとの理由から硬玉の可能性はないと考えられる。また、玉類の比重が2.7以上であることから石材が碧玉の可能性も否定できる。これら玉類の割れ面は平面のものが多く、肉眼観察で結晶に平行な劈開面がみられることから、結晶片岩様緑色岩と仮称する。結晶が一定方向に並んだ岩石は広域変成帯で生成されることから玉材の起源が変成帯の可能性が推測される。広域変成帯ではMgが主成分の蛇紋岩、Mg、Caが主成分の透角閃石とかMg、Ca、Feが主成分の陽起石の軟玉が産出する。玉類に含有されるMg/Siが1.0以下でMgが主成分の蛇紋岩とは言えない。また、Ca/Kの値が1.0以下ではCaが主成分の軟玉とは言えない。滑石鉱床はしば

しば蛇紋岩中の小レンズ鉱床となっている場合が多く、滑石は玉類の原材料に使用される、出土玉類 の中には硬度は約2.5も見られ、比重なども滑石、蛇紋石に近いが一致しない。緑色であることを考 慮すると緑泥石の比重、硬度に一致する。しかし緑泥石の主成分組成のMg、Feの量が少ない。また、 緑泥石の可能性が低い理由としてKの含有量が非常に高いことがあげられる。これら玉類の硬度、比重、 AI、K元素の含有量が多いことなどを考え合わせると雲母系と一致すると考えられるが結晶構造による 判断が必要である。遺物にCrの含有量が比較的多く含有されている。このクロムがCr゚」として存在 していると、緑色になることが知られているため、Crが緑色の原因元素になっている可能性が考えら れ、岩石名の決定には様々な鉱物学的分析に基づいた結果から求める必要がある。今回分析した細身 小型エンタシス形の玉に限定して考察すると、本報告書のX線回折の結果によれば、細粒の白雲母の 微結晶集合体であると同定している。鹿児島県加世田市川畑2627-1に位置する上加世田遺跡の縄文 時代後期出土の玉材は、これら結晶片岩様の緑色岩を使用した玉造遺跡で、平成8年度出土の管玉46 個、勾玉6個、小玉6個、未製品12個、玉材39個、平成7年以前の調査で出土した玉類40個の合計 150個の蛍光 X 線分析の元素分析の結果を分類して上加世田第 1 群、上加世田第 2 群、上加世田第 3 群、上加世田第4群の4個の遺物群を作った(表1)。このように4個の遺物群に分類されるのは結 晶片岩様緑色岩の原石産地が分類群ごとに4ヶ所存在するのではなく、肉眼観察とESR分析結果か ら推測して、含有される鉱物の種類が多く、分布が不均一なために玉ごとの元素組成の変動が大きく なったと推測される。各遺跡で出土する結晶片岩様緑色岩製玉類の蛍光×線分析値と上加世田遺跡の 4 個の遺物群に比較し多変量統計のマハラノビスの距離からT²検定することにより上加世田遺跡の 玉に一致するか否か同定できる。

#### 久田原遺跡出土の結晶片岩様緑色管玉の蛍光×線分析結果と判定

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で蛍光X線分 析を行った。結晶片岩様緑色岩製管玉で観測された元素は、マグネシウム(Mg)、主成分と推測される アルミニュム(AI)、珪素(Si)および比較的含有量の多い元素はカリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム (Cr)、鉄(Fe)、バリウム(Ba)で、他にカルシウム(Ca)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イット リウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオビウム(Nb)、マンガン(Mn)の15元素で、蛍光X線スペクトルを 図1-1、-2に示した。この玉の原石産地を明らかにするためにAl/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、 Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zr、Na/Si、Mg/Si、Cr/Fe、Ba/Zrなどの各元 素比値を求め、表2に示した。また、玉の比重は岩石の種類を同定するときに重要な指標になり、遺 物の汚染をさけるために蒸留水を用いたアルキメデス法で測定した結果、管玉No.1の重量は2.37744グ ラムでかさ比重は2.841になり、上加世田群の遺物原石に多く見られる。また、No.2の重量は1.06563グ ラム、かさ比重は2.680で軽く、この比重より軽い遺物原石は上加世田群の中に1個見られるにすぎな い。これら管玉の元素分析の結果について、上加世田第1,2,3,4群と比較した結果は、No.1と No.2の管玉では信頼限界の0.1%を越えて上加世田第3、4群に一致した。この様に複数の原石群に同 定される理由は、原石群が相互に似ていて、組成比の一部が相互に重なるためと思われる(表3)。管 玉No.1を上加世田第3群に同定のための比較は『管玉No.1は上加世田第3群に属さない』と仮定して、 この仮定が間違っている危険度を求めると5%の確率となり、上加世田第3群に属さないとは『言え ない』との定量的な結果が得られる。何故『言えない』のかは、言い換えるとこの管玉の元素比組成 が上加世田遺物群の元素比組成の平均値より離れる物が、上加世田遺物群の原石でも100個中に5個も

あると考えられる。しかし、上加世田第3群に属すると言う結果ではない。即ち、未発見の、この玉の原材産地があり、未発見の原石産地の可能性を否定した結果でないことに注意しなければならない。 蛍光X線分析で含有元素が一致することが明らかになったが、さらに、玉に含有されている鉱物に関する信号を分析するESR分析結果も一致すればさらに正確な同定結果が得られる。

#### ESR法による産地分析

ESR分析は玉類石材に含有されているイオンとか、玉材が自然界からの放射線を受けてできた色 中心などの常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用 した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は 胡麻粒大で分析ができる場合がある。ESR分析した管玉のESRスペクトルを図3に示す。ESR 信号を出す常磁性種が一種類ではなく4種類以上あるため、ESR信号は複雑なスペクトルになって いる。上加世田遺跡では各玉とか玉材毎に4種類以上の常磁性種の混合比が玉ごとに不均一に含有さ れている。したがって、ESR信号はこれら常磁性種の合成した形で観測されるためにESR信号の スペクトルの形は玉毎に異なる。ここで大切はことは、上加世田遺跡の玉の信号と分析した管玉の信 号を重ね合わせて一致すれば言うことはないが、一致しなくても同じ常磁性種が管玉に含有されてい るか否かが重要である。ESR信号を出す常磁性種の個数の同定を鹿児島県加世田市上加世田遺跡出 土の緑色片岩様玉類の分析結果を用いて試み図2に示した。図2-(1)のバックグラウンド信号と 名付けた信号Ⅱは玉によっては信号形が異なることから複数の鉄イオンの信号で構成されている可能 性が推測されるが幅広い信号である。図2-(2)は幅の広いバックグラウンド信号と上加世田遺跡 出土玉類に特徴的なY、X、W、Z、Ⅲの一組になったピーク信号を出す常磁性種とで構成される。 信号 $\blacksquare$ にはSiO₂に関係した信号が含まれている可能性が推測される。 $W \to \blacksquare$ 、 $\blacksquare \to W$ 、 $W \to X$ の ピーク間に見られる小さな常磁性種は玉によっては非常に大きな信号になり、W、Y、Ⅲのピークと 重なった部分は相互に変形する。また、一組になったピーク信号は、例えばYが測定されれば、残り のピークも他の信号と合成されて変形して確認が困難な場合もあるが必ず存在する。図2-(3)は 幅の広いバックグラウンド信号に、マンガンイオンによると思われるP、Q、R、S、T、Uの同じ 信号強度の6本が一組の信号で合成されてできたESRスペクトルである。Mnイオン濃度が低い状 態で、(2)の信号と合成されるとPとかP、Q(Wと重なり変形)のピークのみ確認されR、S、 T、Uが変形したために確認できないと推測される場合が多い。図2-(4)は幅の広いバックグラ ウンド信号に、少量の(2)が重なっている状態が確認でき、また、信号を出す常磁性種は同定出来 ていないが、O、Vのピーク信号は2:1の比で1000ガウス(G)間隔で対になって構成されている。 以上最低 4 種類の常磁性種の存在が確認できた。また、 $W \rightarrow III$ 、 $III \rightarrow W$ 、 $W \rightarrow X$ のピーク間に見られ る信号が何種類の常磁性種で構成されているか不明で、まだ上加世田遺跡出土玉類のESR信号を完 全に説明できない部分が残っている。分光学的に説明ができなくても、Y、X、W、Z、Ⅲのピーク を出す常磁性種が上加世田遺跡出土玉類に共通して存在することを利用すれば玉類石材の産地分析に 応用できる。分析した管玉No.1のESRスペクトルの図 3 (76372)には、マンガンイオンによると思 われるP、Q、R、S、T、Uの同じ信号強度の6本が一組の信号があり、上加世田遺跡出土玉類に 特徴的なWとⅢのピーク信号が見られことから管玉の玉材と上加世田遺跡出土玉類の玉材は一致する と判定した。また管玉No.2の(76373)にもマンガンイオンによると思われる P、Q、R、S、T、U の同じ信号強度の6本が一組の信号が見られるが、上加世田遺跡出土玉類に特徴的なWとⅢのピーク

信号が見られない。しかし、上加世田群の遺物の中には、管玉No.2の(76373)と極めて似たESR信号を示す玉材がみられることから管玉の玉材と上加世田遺跡出土玉類の玉材は一致すると判定した。産地分析では玉類の蛍光X線分析結果とESR信号結果が同じ石材群に同定されたとき総合的に判定し、玉類がそこの群の原石と同じものが使用されていると推定する。

#### 久田原遺跡出土の結晶片岩様緑色管玉の考察

今回分析を行った結晶片岩様緑色管玉2個は上加世田遺跡出土玉類と蛍光×線分析結果、ESR分析の両方法で一致することから、九州南部で多用されている結晶片岩様緑色岩が使用されていると判定した。上加世田群が4個の遺物群に分類されるのは、群ごとに原石産地が異なる可能性、または共生する鉱物の種類が異なり玉、玉材ごとの元素組成の変動が大きくなったと推測される。考古学者の中では、今回分析した管玉の結晶片岩様緑色管玉の原材産地として特に注目されている産地としてはヒスイ類似岩の原産地である長崎県大瀬戸町雪浦産原石と誤解されていることが非常に多い。確かに、肉眼観察では区別が困難で、比重も一致している。この結晶片岩様緑色岩と呼んでいる原材と大瀬戸町の原石の異なる点は、バリュウム元素の含有量が結晶片岩様緑色岩の方が桁違いに多いことで、両者は容易に区別できる。

結晶片岩様緑色岩製玉類、剥片、加工途中の未製品が出土する遺跡は上加世田遺跡で、ワクド遺跡では剥片が確認されている。また、製品のみ使用では、縄文時代後期、晩期または後期~晩期に関係する遺跡で、宮崎県学頭遺跡の丸玉、岐阜県の西田遺跡(上加世田遺跡より直線距離で約800キロメートル伝播)の丸玉に、島根県匹見町のヨレ遺跡の管玉、勾玉、岡山県吉野口遺跡管玉に、向出遺跡出土小玉にそれぞれ使用されていることから、結晶片岩様緑色岩も糸魚川地域産硬玉製玉類に匹敵する伝播距離を示す可能性があり、古代人にとって非常に重要な玉類原材であったことが推測される(図4)。本遺跡出土管玉が九州南部産の玉が伝播した可能性が推測され、本遺跡が九州南部の情報・文化を入手していたと推測できる。

#### 4 久田原遺跡出土碧玉製剥片の原材産地分析

#### 碧玉原石の蛍光×線分析

碧玉の蛍光 X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を図 5 に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光 X線ピークも異同はあるものの図 5 で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いている。

#### 碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図6に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ケ所か見られるが、今回分析した原石は猿八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石などであり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ

層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が 2.6~2.5の間のものは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれ ている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の 縞があるなど、多少色の違いがあっても分析した組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙 山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②島根県八東郡玉湯町玉造温泉地域である。産出す る原石は、濃緑色から緑色の緻密で剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろい ろで、他に硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質 が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間 のものは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、 2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のものが 分析されているのがわかる。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる分析組成の差はみられなか った。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色、石質などは 肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものも みられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙 山産、佐渡猿八産原石より緻密で優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出 量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644~ 2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられ なかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。 二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医 王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。ここの河原で見られる碧玉原石は、大 部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の 中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で 後者は2.34である。また元素組成は他の産地の組成と異なっており区別できる。しかし、この4個が 二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析数を増 やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフ の岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では、他の産地の碧玉と区別 できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が分析した8個は 2.25~2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛 知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このう ち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄 の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地 と区別できる。興部産地は、⑦北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高 く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定す る指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県氷上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩とし て採取されるが産出量は非常に少ない。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富 良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6~2.5が5個、2.5~2.4 が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数 収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町

の茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大 きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏 差値をもとめて母集団を作り表4-1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例 えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成 に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。 原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の 玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索すると言う目的で、 これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代(B))群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉 類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木汲田遺跡の管玉に産 地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定 C (未定(C)) 群をそれぞれ原石群 と同じように使用する。また、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚(1)、(2)の遺物群、多 摩ニュウタウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡、菜畑遺跡などから出土し た玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか 定量的に判定できるようにし、遺物群を表4-2に示した。この他、鳥取県の福部村多鯰池、鳥取市 防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、 土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫 県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し 青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光×線分析の結果では、興部産碧玉 に似ているが、ESR信号および比重(2.35)が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

#### 5 久田原遺跡出土の碧玉製剥片と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類、玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、(1) 蛍光 X 線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

#### 蛍光X線法による産地分析

これら玉類の蛍光 X線分析のスペクトルを図7-1、-2に示し、比重および管玉の蛍光 X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を表5に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光 X線分析でRb,Sr,Y,Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した結果、比重が約2.5で、また、緑色凝灰岩(グリーンタフ)製は比重が2.4に達しない玉材が多いことから分析した2 個は碧玉と判定した。これら遺物の元素組成比の結果をの碧玉原石群(表4)の結果と比較してみる。分析個数が少なくて統計処理ができる群が作れなかった産地については、原石の元素組成比を今回分析した遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリング T 2 乗検定 $^{6}$  により同定を行ったところ、分析番号88566番は女代南 B 遺物群と菩提産原石群に、88567番は女代南 B 遺物群と養八産原石群にそれぞれ信頼限界の0.1%以上の確率で帰属され、必要条件は求められた。次に十分条件である他の全ての原石・遺物群(表4)について、信頼限界の0.1%に達しないなど、一致ないこと全ての群について証明してい

るが、紙面都合上、表6には原石・遺物群(表4)の中から高確率で同定された原石・遺物群を抜粋して表6に記した。元素分析で女代南B群と同定された玉材を、より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して総合的に産地分析を行った。

#### ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色 中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用 した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は 胡麻粒大で分析ができる場合がある。図8-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したと きに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、g値が2 付近の幅の広い信号(Ⅱ)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(Ⅲ)で構成されている。図 8-(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図8-(2)、-(3)の二俣、 細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉 類の中で信号(Ⅱ)が信号(Ⅲ)より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石 の信号(Ⅲ)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図9-(1)に花仙山、猿 八、玉谷、土岐を図9-(2)に興部、石戸、八代谷-4、女代 B 遺物群、八代谷および図9-(3) に富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号 (Ⅲ)のスペクトルを示す。図9−(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およ びグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。また、菜畑形を示す碧玉の蛍光X線分析結 果では未定C群元素組成と菜畑遺物群元素組成の2種類がある。ESR分析では玉材剥片と管玉のE SR信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石だったり、産地不明遺物群のESR信号形と一致した 場合、そこの産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した剥片のESR信号(Ⅲ)の結 果を図10に示す。分析番号88566番は女代南B遺物群に一致している。88567番は共生鉱物からと思わ れるノコギリ刃の様な信号が観測され、F位置の女代南B形が変形し、女代南B形の存在が想像され るにすぎない。ESRスペクトルが一致した原石産地および遺物群に玉材の原産地を特定するが、よ り正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でとも に同じ原産地に特定された場合は、蛍光X線の元素分析のみで判定した原石・遺物群産地よりも正確 に、そこの原石・遺物群と同じものが使用されているとして総合判定原石産地の欄に結果(表6)を 記した。

#### 久田原遺跡出土の碧玉製剥片の考察

分析番号88566番は蛍光 X 線分析と E S R 分析の両結果が女代南 B 遺物群に一致した。また、菩提原石にも近い組成で、菩提産地に88566番により高い確率で一致する原石が存在する可能性は否定できない。88567番の剥片の蛍光 X 線分析結果は女代南 B 遺物群と猿八産原石群にそれぞれ信頼限界の0.1%以上の確率で帰属されるが、女代南 B 遺物群に80倍の高確率で同定されることから女代南 B 遺物群と判定したが、 E S R 分析では、共生鉱物からと思われる信号が重なり女代南 B 形と正確に判定できなかったことから、女代南 B 遺物群原石の可能性が高いという意味で?を附けて判定した。弥生時代に使用された碧玉は、 E S R 分析は菜畑形で菜畑遺跡(弥生時代早期)の管玉は、蛍光 X 線分析で未定 C 遺物群と菜畑遺物群の 2 種類に同定された管玉があり、また神戸市の本山遺跡の管玉(弥生時代前期)に未定 C 遺物群と同定された管玉が菜畑形の E S R 信号 (Ⅲ)を示している。久田原遺跡

で使用されている女代南B群は弥生時代を中心に使用された原石で、豊岡市の女代南遺跡の中期の玉 作り過程の石片、滋賀県の筑摩佃、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉 には玉谷産と共に使用されていた。玉谷産碧玉は、京都府の余部遺跡で剥片が出土している。関東地 方では埼玉県蓮田市宿下遺跡、東海地方では、清洲町朝日遺跡、新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代 の管玉に、畿内地域では東大阪市の、鬼虎川、巨摩、亀井、久宝寺北、久宝寺南遺跡で、また中国地 方では、作用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生前期末~中期初頭 の玉材、岡山市の百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町 の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出上の管玉、東広島市 の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群Ⅱ、2号墳、3 世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺 遺跡の中期の管玉、また宇木汲田遺跡の管玉に使用されていた。また、続縄文時代には北海道の上磯 町茂別遺跡、余市大川遺跡、千歳市キウス遺跡にまで伝播し、女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに 匹敵する広い分布圏を示している。一方、今だ畿内では使用が確認されていない管玉として、南溝手 遺跡の中期前葉の管玉片には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った原石群の未定C群の原石が使用 され、この未定C群は坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大 和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ理遺跡の南西サブトレ出土の 管玉に使用されている。また、猿八産原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川 遺跡および茂別遺跡の続縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出 土の続縄文(後北C1式)の管玉に、七飯町の大中山13遺跡(続縄文)出土の管玉に使用され、佐渡 島以北で主に使用されていることが明らかになっている。西日本では、鳥取県の高瀬長浜遺跡では女 代南B群と同時に猿八産碧玉が使用されているにすぎない。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出 土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、 これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡 をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。未定 C群は、最近の予備的な実験で朝日遺跡で使用されている可能性が推測されたことから、推測は空論 になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通って伊予、備前、 讃岐へ流入し現在の東進の限界になっている。朝日遺跡での使用が確実になれば、播磨、摂津、大和、 近江を飛び越え、尾張の朝日遺跡に伝播したことが明らかになり東進の限界が一気に300km延びる可 能性がでている(図6)。最近の分析で初めて明らかになった、笠見第3遺跡で使用されている最古 (弥生時代後期)の花仙山産原石の管玉未製品は、花仙山産原石地が笠見第3遺跡から近いにもかか わらず、圧倒的に、北陸産と推測している女代南B遺物群が搬入されている。これは遺跡から近い産 地が多用されとはかぎらないことを示し、先史の交易を推測する貴重な例と思われる。玉類の産地分 析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団(原石群)を作り、原 石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当 に伝播していないかを調査し、女代南B群、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、こ れら不明の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方と の文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析する ことが重要で、是非とも各地の遺跡の詳細な碧玉製遺物の科学的調査が必要であるが現在調査が殆ど

進んでいないのが現状で、国庫補助での発掘調査には必ず科学的調査も加えるべきだと思う。今回行った産地分析は完全な非破壊で、玉類、碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われます。

#### 参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考 古学論 攷』, 14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考占学と自然科学, 16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina (1992)、 Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90

表 1 上加世田遺跡出土結晶片岩様緑色岩製遺物による遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺物群名	分析個数			元 素 比		
<b>退物件</b> 有	刀仍凹奴	Mg/Si	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K
上加世田第1群	25	$0.359 \pm 0.704$	$0.373 \pm 0.062$	18.521±1.779	$0.287 \pm 0.208$	0.625±0.202
上加世田第2群	19	$0.395 \pm 0.346$	$0.357\!\pm\!0.064$	$18.508 \pm 2.093$	$0.354 \pm 0.312$	0.442±0.128
上加世田第3群	59	$0.716 \pm 0.375$	$0.260 \pm 0.045$	$17.898 \pm 1.578$	$0.221 \pm 0.136$	0.422±0.158
上加世田第4群	34	0.662±0.882	$0.308 \pm 0.294$	$18.054 \pm 1.992$	$0.228 \pm 0.169$	0.411±0.252

遺物群名	分析個数			元 素 比		
退物研石	/J 17   IIPI女人	K/Fe	Ti/Fe	Cr/Fe	Mn/Fe	Fe/Zr
上加世川第1群	25	$1.649 \pm 0.886$	$0.913 \pm 0.510$	$0.910 \pm 0.555$	$0.033 \pm 0.020$	$0.787 \pm 0.536$
上加世川第2群	19	$1.097 \pm 0.599$	$0.452 \pm 0.294$	$0.374 \pm 0.369$	$0.020 \pm 0.012$	$2.842 \pm 3.064$
上加世田第3群	59	$0.820 \pm 0.535$	$0.302 \pm 0.213$	$0.318 \pm 0.244$	$0.015 \pm 0.009$	$3.144 \pm 2.437$
上加世田第4群	34	$0.899 \pm 0.590$	$0.314 \pm 0.265$	$0.324 \pm 0.245$	$0.014 \pm 0.009$	6.272±13.60

遺物群名	分析個数		元	素 比	
退彻研行	/ / / / /	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Ba/Zr
上加世田第1群	25	0.273±0.104	$0.634 \pm 0.157$	$0.033 \pm 0.028$	$63.338 \pm 25.035$
上加世田第2群	19	$0.717 \pm 0.653$	$3.157 \pm 3.513$	$0.049 \pm 0.061$	$161.605 \pm 211.1$
上加世田第3群	59	$0.984 \pm 0.439$	$0.181 \pm 0.162$	$0.097 \pm 0.082$	$57.082 \pm 22.78$
上加世田第4群	34	$1.886 \pm 5.936$	$1.174 \pm 2.862$	$0.255 \pm 0.591$	$121.500 \pm 156.3$

平均値±標準偏差値

#### 表 2 久田原遺跡出土結晶片岩様緑色管玉の元素比組成

分析				Ī	ī	素	比			
番号	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr
76372	0.247	19.146	0.049	0.186	0.508	0.424	4.792	2.032	0.228	0.154
76373	0.267	19.668	0.053	0.209	0.996	0.720	1.581	1.139	0.091	0.066
JG-1	0.067	3.392	0.774	0.237	0.111	0.263	3.795	0.998	1.345	0.281

分析 番号	Mu/Fe	Ti/Fe	元 Nb/Zr	素 Na/Si	比 Mg/Si	Cr/Fe	Ba/Zr	玉重量グラム	かさ比重
76372	0.014	0.098	0.054	0.000	0.518	0.200	120.270	2.37744	2.841
76373	0.015	0.317	0.041	0.000	0.330	0.402	89.111	1.06563	2 <b>.</b> 680
JG-1	0.024	0.024	0.079	0.000	0.000	0.001	7.002		

JG-1:標準試料-Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

#### 表3 久田原遺跡出土結晶片岩様緑色管玉の上加世田群推定確率

分析		上 加 世 日	出 遺 物 群		ESR信号	<b>※公本中</b> 学	
番号	第1群	第2群	第3群	第4群	E9Kl⊒ A	総合判定	
76372	0.0000%	0.04%	5%	3%	上加世田群に有り	上加世田遺物群	
76373	0.0000%	8%	54%	17%	上加世田群に有り	L加世田遺物群	

76372:No. 1 管玉 出上区(上壙20 S 36) 76372:No. 2 半欠管玉 出土区(竪穴住居 4 S 27)

表4-1 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析	Al/Si	K/S i	Ca/K	T i / K	K∕Fe
	個数	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm \sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$
興 部	31	$0.011 \pm 0.003$	$0.580 \pm 0.320$	$0.123 \pm 0.137$	$0.061 \pm 0.049$	$0.022 \pm 0.006$
空知A1	42	$0.039 \pm 0.006$	$1.026 \pm 0.281$	$2.728 \pm 0.907$	$0.547 \pm 0.119$	$0.042 \pm 0.011$
空知A2	46	$0.021 \pm 0.008$	$0.866 \pm 0.447$	$0.797 \pm 0.393$	$0.225 \pm 0.050$	$0.032 \pm 0.006$
空知 B	47	$0.064 \pm 0.004$	$3.600 \pm 0.328$	$0.088 \pm 0.008$	$0.101 \pm 0.009$	$0.242 \pm 0.037$
猿八	36	$0.046 \pm 0.007$	$3.691 \pm 0.548$	$0.049 \pm 0.038$	$0.058 \pm 0.011$	$0.370\pm0.205$
土 岐	51	$0.006 \pm 0.004$	$0.361 \pm 0.131$	$0.072 \pm 0.063$	$0.098 \pm 0.063$	0.023±0.005
玉 谷	27	$0.025 \pm 0.009$	$0.625 \pm 0.297$	$0.110 \pm 0.052$	$0.476 \pm 0.104$	$0.045 \pm 0.014$
花仙山 1	27	$0.019 \pm 0.004$	$0.909 \pm 0.437$	$0.171 \pm 0.108$	$0.222 \pm 0.098$	$0.059 \pm 0.019$
花仙山 2	33	$0.023\pm0.003$	$1.178 \pm 0.324$	$0.157 \pm 0.180$	$0.229 \pm 0.139$	$0.055 \pm 0.015$
細入	8	$0.019 \pm 0.003$	$0.534 \pm 0.284$	$0.991\!\pm\!0.386$	$0.372 \pm 0.125$	$0.031 \pm 0.008$
二段	4	$0.043 \pm 0.001$	$2.644 \pm 0.183$	$0.337\!\pm\!0.079$	$0.158 \pm 0.009$	$0.312 \pm 0.069$
石 戸	4	$0.019 \pm 0.004$	$0.601\!\pm\!0.196$	$0.075\!\pm\!0.022$	$0.086 \pm 0.038$	$0.154 \pm 0.072$
茂辺地川	4	$0.031 \pm 0.002$	$1.847 \pm 0.246$	$0.077 \pm 0.024$	$0.222 \pm 0.052$	$0.092 \pm 0.021$
ケショマップ 1	44	$0.040 \pm 0.007$	$2.745 \pm 0.957$	$0.234 \pm 0.139$	$0.135 \pm 0.030$	$0.067 \pm 0.008$

原石群名	分析	Rb/Fe	Fe/Zr	R b∕Z r	Sr/Zr	Y/Z r
	個数	$X$ a $_{ extsf{v}}\pm\sigma$	$X$ a $_{ extsf{Y}}$ $\pm$ $\sigma$	X a $_{ ilde{ ilde{v}}}\pm\sigma$	$X$ a $_{ extsf{Y}}\pm\sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$
興 部	31	$0.070\pm0.021$	$174.08 \pm 124.9$	$16.990 \pm 13.44$	$0.668 \pm 0.435$	$1.801 \pm 1.434$
空知 A 1	42	$0.124 \pm 0.058$	$3.309 \pm 1.295$	$0.353 \pm 0.101$	$12.485 \pm 3.306$	$0.032 \pm 0.045$
空知A2	46	$0.039 \pm 0.007$	$25.866 \pm 11.50$	$1.023 \pm 0.499$	$7.433 \pm 4.531$	$0.378 \pm 0.198$
空知 B	47	$0.460 \pm 0.055$	$2.137 \pm 0.274$	$0.974 \pm 0.110$	$0.190 \pm 0.082$	$0.137 \pm 0.022$
猿 八	36	$0.384 \pm 0.153$	$1.860 \pm 1.070$	$0.590 \pm 0.185$	$0.139 \pm 0.127$	$0.165 \pm 0.138$
上岐	51	$0.096 \pm 0.025$	$43.067\!\pm\!23.28$	$4.056\!\pm\!2.545$	$0.271 \pm 0.308$	$0.159 \pm 0.180$
玉 谷	27	$0.151 \pm 0.020$	$6.190 \pm 1.059$	$0.940 \pm 0.205$	$0.192 \pm 0.170$	$0.158 \pm 0.075$
花仙山 1	27	$0.225 \pm 0.028$	$10.633 \pm 3.616$	$2.345 \pm 0.693$	$0.476 \pm 0.192$	$0.098 \pm 0.052$
花仙山2	33	$0.219 \pm 0.028$	$12.677 \pm 2.988$	$2.723 \pm 0.519$	$0.472 \pm 0.164$	$0.132 \pm 0.071$
細人	8	0.073±0.020	$12.884 \pm 3.752$	$0.882 \pm 0.201$	$1.879 \pm 0.650$	$0.026 \pm 0.032$
二 俣	4	$0.338 \pm 0.039$	$1.495 \pm 0.734$	$0.481 \pm 0.176$	$0.697 \pm 0.051$	$0.088 \pm 0.015$
石戸	4	$0.170 \pm 0.079$	$7.242 \pm 1.597$	$1.142 \pm 0.315$	$0.649 \pm 0.158$	$0.247 \pm 0.092$
茂辺地川	4	$0.190 \pm 0.052$	$5.566 \pm 1.549$	$0.980 \pm 0.044$	$0.300 \pm 0.032$	$0.171 \pm 0.051$
ケショマップ 1	44	$0.096 \pm 0.007$	5.720±0.608	$0.543 \pm 0.034$	$0.489 \pm 0.184$	0 <b>.</b> 146±0 <b>.</b> 027

原石群名	分析	M n∕F e	T i∕F e	N b∕Z r	比 重
邓山村一	個数	$X_{av}\pm\sigma$	$X_{av} \pm \sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$
興部	31	$0.004 \pm 0.003$	$0.001 \pm 0.001$	$0.455 \pm 0.855$	$2.626 \pm 0.032$
空知A1	42	$0.028 \pm 0.009$	$0.020 \pm 0.005$	$0.007 \pm 0.010$	$2.495 \pm 0.039$
空知A2	46	$0.009 \pm 0.003$	$0.006 \pm 0.002$	$0.118 \pm 0.167$	$2.632 \pm 0.012$
空知 B	47	$0.015 \pm 0.002$	$0.022 \pm 0.004$	$0.134 \pm 0.024$	$2.607 \pm 0.001$
猿八	36	0.003±0.001	$0.018 \pm 0.010$	$0.032 \pm 0.014$	$2.543 \pm 0.049$
土 岐	51	$0.001 \pm 0.001$	$0.001 \pm 0.001$	$0.072 \pm 0.160$	$2.607 \pm 0.009$
玉 谷	27	$0.006 \pm 0.003$	$0.016 \pm 0.003$	$0.054 \pm 0.021$	$2.619 \pm 0.014$
花仙山 1	27	$0.001 \pm 0.001$	$0.009 \pm 0.002$	$0.042 \pm 0.034$	$2.570 \pm 0.044$
花仙山2	33	$0.001 \pm 0.001$	$0.009 \pm 0.004$	$0.035 \pm 0.025$	$2.308\pm0.079$
細入	8	$0.003 \pm 0.002$	$0.008 \pm 0.002$	$0.021 \pm 0.344$	$2.169 \pm 0.039$
二 俁	4	$0.007 \pm 0.002$	$0.043 \pm 0.010$	$0.043 \pm 0.023$	$2.440 \pm 0.091$
石 戸	4	$0.007 \pm 0.001$	$0.009 \pm 0.002$	$0.227\!\pm\!0.089$	$2.598 \pm 0.008$
茂辺地川	4	$0.003 \pm 0.008$	$0.016 \pm 0.001$	$0.132 \pm 0.069$	$2.536 \pm 0.033$
ケショマップ 1	44	$0.003 \pm 0.001$	$0.009 \pm 0.001$	$0.035 \pm 0.018$	$2.287 \pm 0.013$

X a v :平均值、 σ :標準偏差値

表4-2 各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺物群名	分析	Al/Si	K/S i	C a / K	T i / K	K∕F e
退物矸石	川数	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ » $_{ extsf{v}}$ $\pm$ $\sigma$	$X_{\mathfrak{s}\scriptscriptstyle{v}}\!\pm\!\sigma$	$X$ , $v \pm \sigma$	$X_{\mathfrak{d}}$ v $\pm \sigma$
女代南 B	68	$0.045 \pm 0.016$	$3.115 \pm 0.445$	$0.042 \pm 0.024$	$0.107 \pm 0.036$	$0.283 \pm 0.099$
未定C	58	$0.030 \pm 0.028$	$4.416 \pm 0.618$	$0.013 \pm 0.013$	$0.207 \pm 0.034$	$0.589 \pm 0.130$
車塚 1	33	$0.030 \pm 0.015$	$3.774 \pm 0.404$	$0.015 \pm 0.005$	$0.278 \pm 0.043$	$0.334 \pm 0.031$
市塚 2	45	$0.035 \pm 0.015$	$4.066 \pm 0.618$	$0.012 \pm 0.004$	$0.232 \pm 0.025$	$0.544 \!\pm\! 0.118$
<b>牟田辺</b>	58	$0.082 \pm 0.042$	$3.327 \pm 0.450$	$0.853 \pm 0.213$	$0.913 \pm 0.178$	$0.091 \pm 0.019$
長塚(1)	47	$0.036 \pm 0.004$	$3.525 \pm 0.347$	$0.033 \pm 0.005$	$0.439 \pm 0.050$	$0.204 \pm 0.037$
長塚(2)	45	$0.028 \pm 0.007$	$2.659 \pm 0.122$	$0.010 \pm 0.004$	$0.064 \pm 0.003$	$0.719 \pm 0.065$
No.200-1	32	$0.042 \pm 0.004$	$0.808 \pm 0.025$	$3.588 \pm 0.074$	$0.639 \pm 0.016$	$0.051 \pm 0.002$
No.200-2	28	$0.037 \pm 0.004$	$0.990 \pm 0.021$	$2.384 \pm 0.067$	$0.605 \pm 0.029$	$0.064 \pm 0.003$
No.200-3	28	$0.039 \pm 0.003$	$0.926 \pm 0.020$	$2.527 \pm 0.114$	$1.085 \pm 0.059$	$0.053 \pm 0.002$
No.200-4	32	$0.047 \pm 0.007$	$0.855 \pm 0.025$	$3.771 \pm 0.079$	$1.228 \pm 0.035$	$0.057 \pm 0.003$
No.200-6	32	$0.040 \pm 0.006$	$4.185 \pm 0.162$	$0.031 \pm 0.006$	$0.103 \pm 0.003$	$0.821 \pm 0.019$
梅川1	40	$0.021 \pm 0.003$	$1.204 \pm 0.094$	$0.066 \pm 0.017$	$0.143 \pm 0.008$	$0.065\!\pm\!0.005$
梅田2	44	$0.032 \pm 0.004$	$2.539 \pm 0.246$	$0.025\!\pm\!0.006$	$0.522 \pm 0.050$	$0.172 \pm 0.035$
梅田3	40	$0.027 \pm 0.003$	$1.911 \pm 0.062$	$0.020 \pm 0.007$	$0.518 \pm 0.010$	$0.261 \pm 0.012$
梅田 4	38	$0.081\!\pm\!0.008$	$7.149 \pm 0.288$	$0.023 \pm 0.003$	$0.082 \pm 0.002$	$0.558 \pm 0.020$
上ノ段1	42	$0.014 \pm 0.002$	$0.413 \pm 0.046$	$0.054 \pm 0.026$	$0.395 \pm 0.040$	$0.053 \pm 0.005$
梅田東1	51	$0.030 \pm 0.007$	$1.974 \pm 0.317$	$0.026 \pm 0.011$	$0.529 \pm 0.061$	$0.192 \pm 0.011$
新方 1	67	$0.062 \pm 0.005$	$1.868 \pm 0.115$	$1.640 \pm 0.137$	$0.733 \pm 0.069$	$0.078 \pm 0.012$
新方2	30	$0.056 \pm 0.005$	$4.152 \pm 0.162$	$0.226 \pm 0.181$	$0.313 \pm 0.010$	$0.212 \pm 0.019$
新方3	39	$0.044 \pm 0.008$	$0.912 \pm 0.178$	$2.416 \pm 0.174$	$0.786 \pm 0.267$	$0.080 \pm 0.011$
新井 1	51	$0.046 \pm 0.004$	$3.875 \pm 0.879$	$0.316 \pm 0.009$	$0.234 \pm 0.004$	$0.146 \pm 0.018$
亀井3	41	$0.112 \pm 0.010$	$3.879 \pm 0.431$	$0.122 \pm 0.022$	$0.668 \pm 0.030$	$0.034 \pm 0.004$
東船 2	40	$0.118 \pm 0.001$	$0.466 \pm 0.010$	$0.376 \pm 0.009$	$0.108 \pm 0.004$	$0.020\pm0.001$
山ノ奥1	42	$0.013 \pm 0.002$	$0.608 \pm 0.049$	$0.080 \pm 0.015$	$0.355 \pm 0.018$	$0.136 \pm 0.011$
昼飯3	48	$0.028 \pm 0.005$	$2.002 \pm 0.046$	$0.020 \pm 0.010$	$0.442 \pm 0.015$	$0.169 \pm 0.009$
昼飯 4	48	$0.030 \pm 0.005$	$2.078 \pm 0.122$	$0.040 \pm 0.018$	$0.702 \pm 0.032$	$0.132 \pm 0.008$
斉当坊6	45	$0.045\!\pm\!0.004$	$3.512 \pm 0.108$	$0.038 \pm 0.004$	$0.090 \pm 0.003$	$0.839 \pm 0.059$
笠见3-5	46	$0.103 \pm 0.010$	$4.761 \pm 0.127$	$0.039 \pm 0.005$	$0.513 \pm 0.069$	$0.090\pm0.003$
笠見8	40	$0.079 \pm 0.008$	$3.542 \pm 0.123$	$0.148 \pm 0.014$	$0.561 \pm 0.019$	$0.044 \pm 0.001$
笠見10	48	$0.100 \pm 0.008$	$4.776 \pm 0.117$	$0.064 \pm 0.004$	$0.600 \pm 0.007$	$0.078 \pm 0.001$
笠見 4	45	$0.105 \pm 0.002$	$0.135 \pm 0.005$	$0.313 \pm 0.043$	$0.781 \pm 0.030$	$0.013 \pm 0.001$
笠見13	45	$0.088 \pm 0.008$	$4.591 \pm 0.091$	$0.123 \pm 0.005$	$0.439 \pm 0.008$	$0.074 \pm 0.002$
矢野 4	46	$0.039 \pm 0.004$	$2.666 \pm 0.087$	$0.042 \pm 0.006$	$0.144 \pm 0.003$	$0.482 \pm 0.018$
青川77	48	$0.038 \pm 0.005$	$2.294 \pm 0.066$	$0.109 \pm 0.009$	$0.302 \pm 0.008$	$0.273 \pm 0.010$
肯田78	48	$0.053 \pm 0.007$	$2.304 \pm 0.206$	$0.432 \pm 0.011$	$0.766 \pm 0.016$	$0.072 \pm 0.003$
菜畑	36	$0.029 \pm 0.019$	$3.666 \pm 0.328$	$0.081 \pm 0.034$	$0.268 \pm 0.050$	$0.529 \pm 0.189$

遺物群名	分析	R b∕F e	F e∕Z r	R b∕Z r	Sr/Zr	Y/Z r
<b>退彻什</b> 们	回数	$X_{uv}\pm\sigma$	$X$ a $v \pm \sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a $v \pm \sigma$	$X_{av}\pm\sigma$
女代南 B	68	$0.267 \pm 0.063$	$2.374 \pm 0.676$	$0.595 \pm 0.065$	$0.214 \pm 0.097$	$0.171 \pm 0.047$
未定C	58	$0.650 \pm 0.113$	$0.583 \pm 0.110$	$0.369 \pm 0.035$	$0.090 \pm 0.030$	$0.070 \pm 0.026$
車塚 1	33	$0.469 \pm 0.030$	$0.782 \pm 0.071$	$0.365 \pm 0.016$	$0.071 \pm 0.012$	$0.090\pm0.060$
中塚2	45	$0.672 \pm 0.112$	$0.540 \pm 0.122$	$0.350 \pm 0.036$	$0.070 \pm 0.280$	$0.057 \pm 0.019$
作田辺	58	$0.161 \pm 0.018$	$1.342 \pm 0.160$	$0.214 \pm 0.026$	$2.140 \pm 0.412$	$0.064 \pm 0.024$
長塚(1)	47	$0.361 \pm 0.040$	$2.756 \pm 0.473$	$0.980 \pm 0.110$	$0.472 \pm 0.083$	$0.379 \pm 0.143$
長塚(2)	45	$0.832 \pm 0.054$	$0.412 \pm 0.038$	$0.341 \pm 0.023$	$0.036 \pm 0.010$	$0.386 \pm 0.242$
No.200-1	32	$0.042 \pm 0.006$	$1.751 \pm 0.149$	$0.073 \pm 0.016$	$4.665 \pm 0.374$	$0.239 \pm 0.026$
No.200-2	28	$0.072 \pm 0.011$	$1.422 \pm 0.075$	$0.102 \pm 0.015$	$6.680 \pm 0.322$	$0.170\pm0.017$
No.200-3	28	$0.053 \pm 0.009$	$1.668 \pm 0.093$	$0.088 \pm 0.015$	$4.455 \pm 0.197$	$0.343 \pm 0.031$
No.200-4	32	$0.118 \pm 0.023$	$1.110 \pm 0.129$	$0.130 \pm 0.030$	$9.626 \pm 1.090$	$0.117 \pm 0.025$
No.200-6	32	$0.692 \pm 0.040$	$0.646 \pm 0.037$	$0.447 \pm 0.025$	$0.207 \pm 0.020$	$0.296 \pm 0.026$
梅田1	40	$0.220 \pm 0.029$	$12.333 \pm 0.882$	$2.710 \pm 0.421$	$0.273 \pm 0.374$	$0.741 \pm 0.134$
梅田 2	44	$0.299 \pm 0.051$	$3.517 \pm 0.603$	$2.024 \pm 0.053$	$0.316 \pm 0.048$	$0.283 \pm 0.066$
梅田3	40	$0.430 \pm 0.017$	$3.262 \pm 0.209$	$1.401 \pm 0.057$	$0.338 \pm 0.028$	$0.386 \pm 0.048$
梅田 4	38	$0.473 \pm 0.026$	$1.003 \pm 0.046$	$0.473 \pm 0.018$	$0.222 \pm 0.032$	$0.100 \pm 0.013$
上ノ段1	42	$0.223 \pm 0.020$	$3.772 \pm 0.448$	$0.833 \pm 0.068$	$0.077 \pm 0.037$	$0.296 \pm 0.053$
梅田東 1	51	$0.219 \pm 0.019$	$2.366 \pm 0.474$	$0.512 \pm 0.069$	$0.072 \pm 0.024$	$0.101 \pm 0.042$
新方1	67	$0.111 \pm 0.205$	$1.610 \pm 0.264$	$0.175 \pm 0.018$	$8.298 \pm 0.619$	$0.078 \pm 0.019$
新方2	30	$0.297 \pm 0.018$	$3.847 \pm 0.314$	$1.137 \pm 0.057$	$0.649 \pm 0.095$	$0.139 \pm 0.053$
新方3	39	$0.086 \pm 0.018$	$1.685 \pm 0.413$	$0.144 \pm 0.050$	$7.449 \pm 1.605$	$0.182 \pm 0.056$

遺物群名	分析	R b∕F e	Fe/Zr	R b∕Z r	Sr/Zr	Y/Zr
1月17日	回数	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm \sigma$	X a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$
新井1	51	$0.255 \pm 0.021$	$1.874 \pm 0.168$	$0.476 \pm 0.020$	$1.994 \pm 0.080$	$0.077 \pm 0.022$
亀井3	41	$0.073 \pm 0.011$	$9.768 \pm 0.951$	$0.706 \pm 0.062$	$0.117 \pm 0.011$	$0.126 \pm 0.022$
東船 2	40	$0.087 \pm 0.004$	$48.841 \pm 6.946$	$4.250 \pm 0.538$	$0.756 \pm 0.136$	$0.056 \pm 0.074$
山ノ奥1H	42	$0.278 \pm 0.025$	$1.052 \pm 0.082$	$0.291 \pm 0.015$	$0.083 \pm 0.010$	$0.142 \pm 0.015$
昼飯3	48	$0.290 \pm 0.014$	$0.967 \pm 0.040$	$0.280 \pm 0.010$	$0.052 \pm 0.007$	$0.062 \pm 0.010$
<b>昼飯 4</b>	48	$0.263 \pm 0.009$	$3.774 \pm 0.170$	$0.991 \pm 0.049$	$0.227 \pm 0.035$	$0.145 \pm 0.048$
斉当坊 6	45	$0.618 \pm 0.047$	$0.849 \pm 0.074$	$0.522 \pm 0.020$	$0.181 \pm 0.011$	$0.984 \pm 0.219$
笠見3-5	46	$0.157 \pm 0.006$	$1.470 \pm 0.050$	$0.231 \pm 0.007$	$0.574 \pm 0.047$	$0.022 \pm 0.015$
笠見8	40	$0.047 \pm 0.004$	$2.782 \pm 0.184$	$0.131 \pm 0.014$	$1.861 \pm 0.149$	$0.028 \pm 0.009$
笠見10	48	$0.097 \pm 0.009$	$1.650 \pm 0.059$	$0.159 \pm 0.016$	$2.187 \pm 0.074$	$0.020\!\pm\!0.014$
笠見 4	45	$0.045 \pm 0.005$	$7.429 \pm 0.531$	$0.332 \pm 0.035$	$0.220 \pm 0.037$	$0.105 \pm 0.032$
笠見13	45	$0.099 \pm 0.007$	$2.090 \pm 0.151$	$0.206 \pm 0.013$	$1.523 \pm 0.108$	$0.028 \pm 0.010$
矢野 4	46	$0.456 \pm 0.019$	$0.911 \pm 0.041$	$0.415 \pm 0.016$	$0.173 \pm 0.011$	$0.262 \pm 0.023$
青田77	48	$0.401 \pm 0.018$	$1.349 \pm 0.077$	$0.540 \pm 0.026$	$0.627 \pm 0.035$	$0.143 \pm 0.024$
青川78	48	$0.116 \pm 0.009$	$1.643 \pm 0.158$	$0.190 \pm 0.021$	$1.583 \pm 0.113$	$0.031 \pm 0.019$
菜畑	36	$0.674 \pm 0.256$	$0.548 \pm 0.131$	$0.337 \pm 0.017$	$0.198 \pm 0.096$	$0.103 \pm 0.038$

)男//m/124/夕	分析	Mn∕Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	比 重
遺物群名	回数	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	$X$ a v $\pm$ $\sigma$	X a v $\pm \sigma$	Xαν±σ
女代南 B	68	$0.011\pm0.004$	$0.026 \pm 0.009$	$0.034 \pm 0.016$	2.554±0.019
未定C	58	$0.002\pm0.001$	$0.101 \pm 0.019$	$0.019 \pm 0.016$	2.646±0.023
車塚1	33	$0.002\pm0.001$	$0.081 \pm 0.013$	$0.033 \pm 0.013$	$2.619\pm0.019$
車塚2	45	$0.002\pm0.001$	$0.109 \pm 0.023$	$0.028 \pm 0.013$	$2.616\pm0.019$
牟田辺	58	$0.008 \pm 0.003$	$0.067 \pm 0.008$	$0.018 \pm 0.010$	2.1~
長塚(1)	47	$0.005 \pm 0.001$	$0.094 \pm 0.013$	$0.022 \pm 0.016$	2.533±0.016
長塚(2)	45	$0.004 \pm 0.001$	$0.047 \pm 0.004$	$0.024 \pm 0.013$	$2.569 \pm 0.003$
No.200-1	32	$0.006 \pm 0.001$	$0.033 \pm 0.001$	$0.006 \pm 0.009$	2,308
長塚(1)	47	$0.005\pm0.001$	$0.094 \pm 0.013$	$0.022 \pm 0.016$	2.533±0.016
No.200-2	28	$0.008\pm0.001$	$0.038 \pm 0.002$	$0.006 \pm 0.010$	2.277
No.200-3	28	$0.014\pm0.003$	$0.058 \pm 0.003$	$0.002 \pm 0.005$	2.270
No.200-4	32	$0.005\pm0.001$	$0.068 \pm 0.002$	$0.006 \pm 0.008$	2.256
No.200-6	32	$0.011\pm0.002$	$0.082 \pm 0.003$	$0.038 \pm 0.026$	2.542
梅田 1	40	$0.001\pm0.000$	$0.009 \pm 0.001$	$0.014 \pm 0.019$	$2.579\pm0.013$
梅田 2	44	$0.005 \pm 0.001$	$0.080 \pm 0.011$	$0.035 \pm 0.015$	$2.531 \pm 0.007$
梅川3	40	$0.005\pm0.001$	$0.121 \pm 0.005$	$0.033 \pm 0.027$	2.511
梅田 4	38	$0.006 \pm 0.001$	$0.039 \pm 0.002$	$0.039 \pm 0.010$	2.446
上ノ段1	42	$0.006\pm0.001$	$0.019 \pm 0.001$	$0.014 \pm 0.018$	$2.636 \pm 0.001$
梅田東 1	51	$0.008\pm0.001$	$0.095 \pm 0.014$	$0.027\!\pm\!0.018$	$2.541 \pm 0.016$
新方1	67	$0.050\pm0.020$	$0.046 \pm 0.006$	$0.027 \pm 0.009$	2.290±0.018
新方2	30	$0.010\pm0.003$	$0.061 \pm 0.004$	$0.032 \pm 0.017$	$2.546 \pm 0.011$
新方3	39	$0.068 \pm 0.027$	$0.057 \pm 0.013$	$0.007 \pm 0.007$	$2.257 \pm 0.024$
新井1	51	$0.084 \pm 0.001$	$0.035 \pm 0.001$	$0.021 \pm 0.011$	2.482
亀井3	41	$0.005\pm0.001$	$0.022 \pm 0.002$	$0.094\!\pm\!0.020$	$2.530 \pm 0.054$
東船 2	40	$0.001\pm0.000$	$0.002 \pm 0.000$	$0.115 \pm 0.058$	2.190 吸水
山ノ奥1	42	$0.010\pm0.001$	$0.045\pm0.002$	$0.027\!\pm\!0.016$	2.461
昼飯 3	48	$0.002\pm0.001$	$0.070\pm0.002$	$0.035 \pm 0.010$	2.501
昼飯 4	48	$0.005 \pm 0.001$	$0.083 \pm 0.002$	$0.035 \pm 0.015$	2.579
斉当坊 6	45	$0.015 \pm 0.001$	$0.070 \pm 0.004$	$0.030 \pm 0.033$	2.554
笠见3-5	46	$0.008\pm0.001$	$0.044 \pm 0.006$	$0.025\!\pm\!0.005$	2.249-2.098
笠見8	40	$0.008\pm0.001$	$0.024 \pm 0.001$	$0.023 \pm 0.006$	2.257
笠見10	48	$0.009\pm0.001$	$0.046 \pm 0.001$	$0.018 \pm 0.005$	2.278
笠見 4	45	$0.059 \pm 0.002$	$0.010 \pm 0.001$	$0.049 \pm 0.027$	2.610
笠見13	45	$0.008 \pm 0.001$	$0.032 \pm 0.001$	$0.024\!\pm\!0.007$	2.297
矢野 4	46	0.008±0.001	$0.064 \pm 0.002$	$0.024 \pm 0.016$	2.456
青川77	48	$0.004 \pm 0.001$	$0.077 \pm 0.003$	$0.033 \pm 0.019$	2.583
青田78	48	$0.011\pm0.001$	$0.051 \pm 0.002$	$0.024 \pm 0.009$	2.403
菜畑	36	$0.005\pm0.002$	$0.129\pm0.028$	$0.035 \pm 0.016$	$2.521 \pm 0.027$

安代南 B:女代南遺跡(豊岡市)、未定 C:宇木汲田遺跡(唐津市)、車塚1,2:車塚古墳(交野市)、牟田辺: 牟田辺遺跡(多久市)、長塚(1),(2):長塚古墳(可児市)、No.200-1~6:多摩ニュウタウン遺跡(東京都)、梅田1~4:梅田古墳(兵庫県和田山町)、梅田東1:梅田東古墳(兵庫県和田山町)、上ノ段1:上ノ段遺跡(兵庫県鳥町)、新方1~3:新方遺跡(神戸市)、新井1:新井三丁目遺跡(東京都中野区)、亀川3:亀川遺跡(阪南市自然田)、東船1:東船遺跡(鳥根県今津町)、山ノ奥1:山ノ奥遺跡(岡山県)、昼飯3,4:昼飯人塚古墳(人垣市)、斉当坊6:市田斉当坊(京都府久御山町)、笠見3~13:笠見第3遺跡(鳥取県東伯町)、矢野4:矢野遺跡(徳島市)、青田77、78:青田遺跡(新潟県加治川村)、菜畑(唐津市)で使用されている原石産地不明の下類で作った群。

表5-1 久田原遺跡碧玉製剥片の元素分析結果

分析			元	3	素	比		
番号	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
88566	0.044	3.442	0.027	0.102	0.491	0.422	1.274	0.538
88567	0.046	3.833	0.016	0.096	0.225	0.252	2.554	0.643
JG-1ª)	0.056	3,412	0.785	0.230	0.112	0.264	3.740	0.986

#### 表5-2 久田原遺跡碧玉製剥片の元素分析結果

分析 番号	Sr/Zr	元 Y/Zr	素 Mn/Fe	比 Ti/Fe	Nb/Zr	重 量 gr	比 重
88566	0.092	0.188	0.016	0.046	0.011	0.11969	2.496
88567	0.071	0.120	0.005	0.020	0.034	130.8670	2.483
JG-1 a >	1.348	0.246	0.023	0.023	0.042		

a):標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference

samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.

Geochemical Journal, Vol.8 175-192.

注:88567番の比重は大型剥片の微少片で求める。

#### 表 6 久田原遺跡出土碧玉製剥片の原材産地分析結果

分析番号	出 土 区	住 居 址	原石産地(確率)	ESR信号形	総合判定
88566	3 8 08 Da	竪穴住居 9 S 214	女代南 B 遺物群(13%), 菩提(0.6%)	女代南B形	女代南 B 遺物群
88567	3 8 08 D c	竪穴住居15 S305	女代南B遺物群(80%),猿八(1%)	女代南B形?	女代南 B 遺物群?

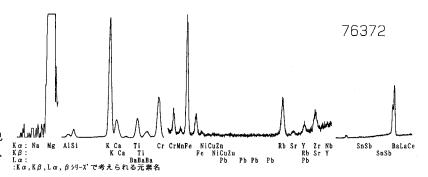


図1-1 久田原遺跡出土結晶片岩様緑色 管玉No.1 (76372) の蛍光×線ス ペクトル

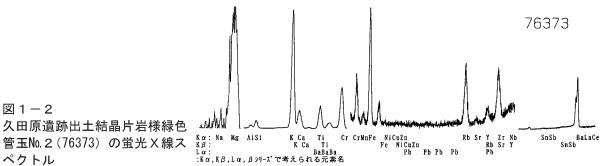


図1-2 久田原遺跡出土結晶片岩様緑色 ペクトル

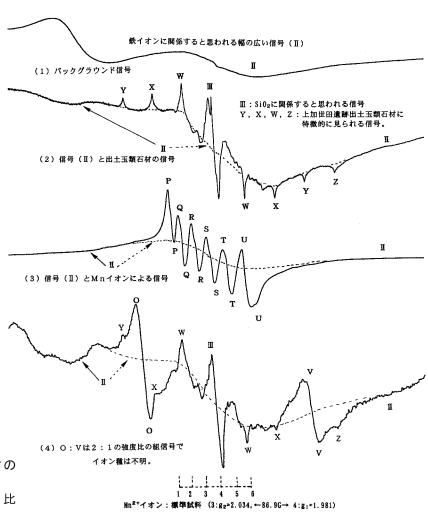


図 2 上加世田遺跡出土玉類石材の ESR信号 (結晶片岩様緑色玉類石材、比 重3.0~2.7)

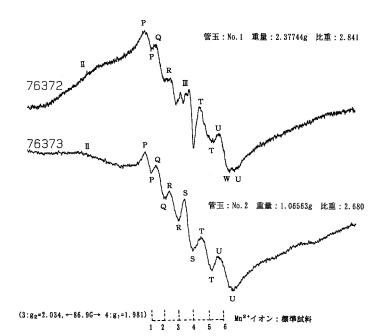


図3 久田原遺跡出土結晶片岩様緑色岩製 管玉の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

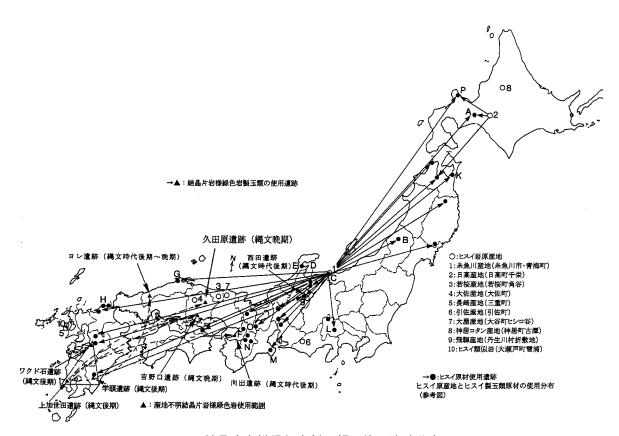
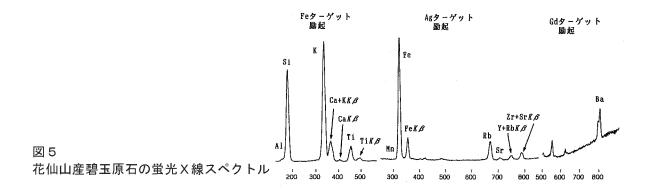
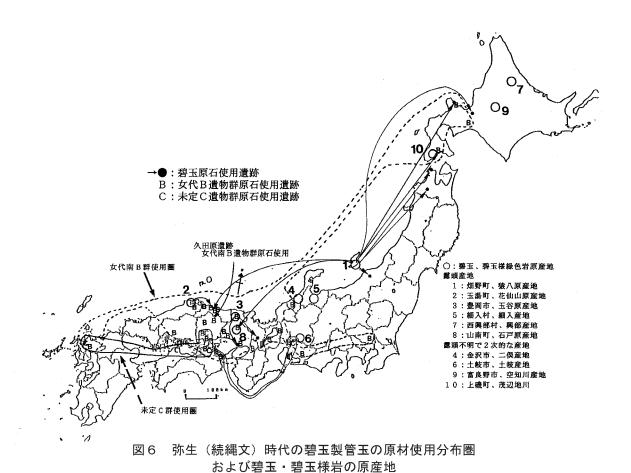


図 4 結晶片岩様緑色岩製玉類の使用遺跡分布図 (細粒の白雲母の微結晶集合体含む)





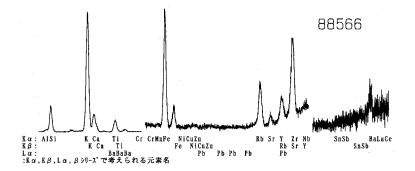


図7-1 久田原遺跡出土碧玉製 剥片 (88566) の蛍光×線スペ クトル

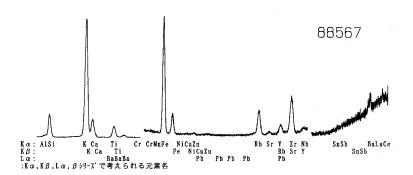


図7-2 久田原遺跡出土碧玉製 剥片 (88567) の蛍光×線スペクトル

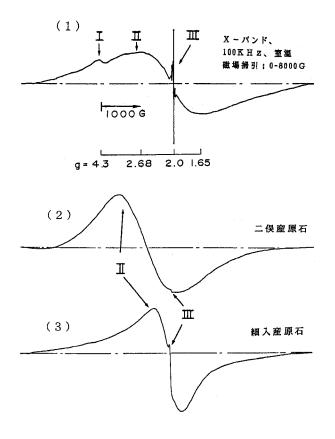


図8 碧玉原石のESRスペクトル (花仙山、玉谷、猿八、土岐)

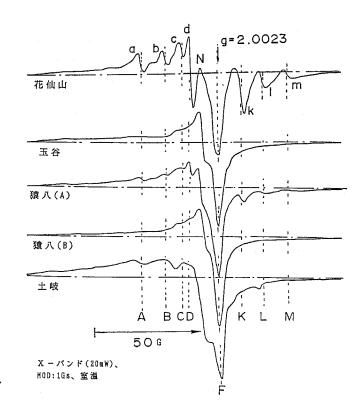


図 9 − ( 1 ) 碧玉原石の信号 (Ⅲ) のESRスペクトル

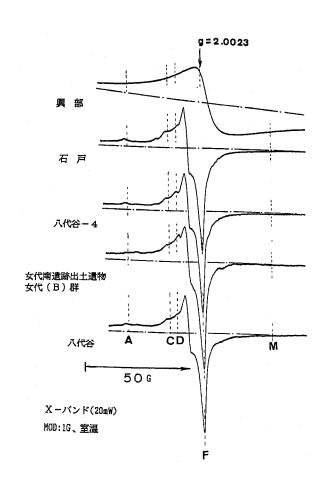


図 9 − ( 2 ) 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

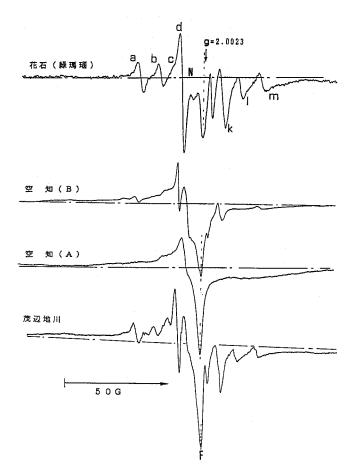
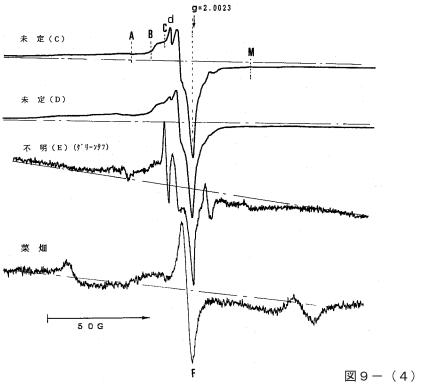


図 9 − (3) 碧玉原石の信号 (Ⅲ) のESRスペクトル



碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

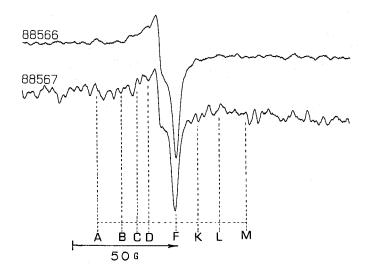


図10 久田原遺跡出土碧玉製 剥片の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

# 4 久田原遺跡出土サヌカイト製石針の原材産地分析

京都大学原子炉実験所 藁 科 哲 男

## 1 はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、占代の交流、交易 および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石 材産地推定を行なっている! 2,3)。石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。 地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成 が一致すれば必要条件を満たし、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、十分条 件を満たし、ただ一カ所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。遺物の産地 分析では『石器とある産地の原石が一致したからと言っても、他の産地に一致しないと言えないため に、一致した産地のものと言い切れないが、しかし一致しなかった場合そこの産地のものでないと言 い切れる』が大原則である。考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味が あり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わ った調合素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、古代人の思考 が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な結果である。石器の様式による分類ではなく、 白然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動 キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代 用にすると産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性 がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満足しても、原材 産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、十分条件の移動ルートを自然の法則に従って地形学 で証明できず、その石器原材がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原 石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない。確かにA産地との交流で伝播した可能性は否 定できなくなったが、B、C、Dの産地でないとの証拠がないために、A産地だと言い切れない。B 産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関しては B 産地と交流がなかったと言い切れる。ここで、十分条件として、可能なかぎり地球上の全ての原産地 (A、B、C、D・・・・)の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件 として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求める ことは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が 区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなけ れば分からない。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたか により、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、サヌカイトなどの主成分 組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があ ると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類 の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合(マハラノビスの距離)を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限に近い個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある石器原材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に一個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産地では・・・・一個と各産地毎に結果が得られるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した安山岩(サヌカイト)製遺物は、岡山県苫田郡奥津町下久田原に位置する久田原遺跡 出土の弥生時代のサヌカイト製石針と推測される遺物について産地分析の結果が得られたので報告す る。

# 2 サヌカイト、ガラス質安山岩原石の分析

サヌカイト、ガラス質安山岩原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネル ギー分散型蛍光×線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、 Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消す ために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイト、ガラス質安山岩で は、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの比量を指標として用いる。サヌカ イトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地、および質は良くないが考 古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わ せて32ヶ所以上の調査を終えている。図1にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五 色台地域では、その中の多くの地点から良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、か つそれらは数ヶ所の群に分かれる(図2)。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原 石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は、細石器時代に使用された原材で、善通寺市の大麻山 南からも産出している。これら産地の原石および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると133個 の原石群に分類でき、その結果を表1に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域の サヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個 の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩の原石群については、香川県埋蔵文化財センタ 一の森下英治氏より提供された金山奥池、雄山の原石を補充して、金山・奥池第1群、奥池第2群、 雄山群の原石群を確立し、神谷町南山地区の原石で南山群を作った。このうち、奥池第1群、雄山群、 南山群の組成は非常に似ていて、遺物の産地分析では多くの場合これら3個の群に同時に帰属される。 また、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類され、奥池、雄山、南山の各群と区別 することが可能である。これらのガラス質安山岩は成分的に黒曜石に近いものであり肉眼観察では下 呂石に酷似するもの、西北九州産の中町、淀姫産黒曜石、大串、亀岳原石と酷似するものもみられる ため、風化した遺物ではこれら似た原材の肉眼での区別は困難と思われるので、正確な原材産地の判 定をするためには本分析が必要である。またサヌカイト原石のうち金山・五色台地域産のサヌカイト 原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すものが淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取 される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表2に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区において岩屋第一群に一致する原石が、それぞれ92%および88%の割合の個数で存在し、その他に群を作らない数個の原石とがみられ、それらのうちで金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される(表3)。また和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない(表4)。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表3、4のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表3のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

# 3 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と 異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮 空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石 製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水 洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の 分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて 産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元 素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不 確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した久田原遺跡から出土したサヌカイト製遺物の分析結果を表5に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Srの一変量だけを考えると、分析番号88565番の遺物はRb/Srの値が0.306で、金山東群の[平均値]±[標準偏差値]は、 $0.293\pm0.022$ であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値( $\sigma$ )を基準にして考えると遺物は原石群から $0.5\,\sigma$  離れている。ところで金山東群の産地から100ケの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm0.5\,\sigma$ のずれより大きいものが61ヶある。すなわち、この遺物が、金山東群の原石から作られていたと仮定しても、 $0.5\,\sigma$ 以上離れる確率は61%であると言える。だから、金山東群の平均値から $0.5\,\sigma$ しか離れていないときには、この遺物が金山東群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を二上山群に比較すると、二上山群の平均値からの隔たりは、約9 $\sigma$ である。これを確率の言葉で表現すると、二上山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から9 $\sigma$ 以上離れている確率は、十億分の一であると言える。このように、十億個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、二上山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は金山東群に61%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから金山

東群の原石が使用されいると同定され、さらに二上山群に対しては千万分の一%の低い確率で帰属さ れ、信頼限界の0.1%に満たないことから二上山産原石でないと同定される」。遺物が金山東群と一致 したからと言っても、遺物が金山産地から採取された証拠はなく、分析している試料は原石でなく遺 物でさらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは 言えず、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産 地(金山東産地)に一致し必要条件を満足したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、 帰属確率による判断を表1の133個すべての原石群について行ない十分条件を求め、低い確率で帰属 された原石群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて金山東産地の石材のみ が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変 量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならならい。例えばA原産地のA群で、Ca元素と Rb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の 石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずで ある。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言 わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手 法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT2乗検定である。これによって、それぞ れの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する4.50。産地の同定結果は1個の遺物に対して、サヌ カイト製では133個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果につ いては低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上『記入』を省略しているのみで、<u>実際</u> <u>に計算している</u>ため、省略<u>産地の可能性が非常に低いことを確認したという重要な意味を含んでいる</u>、 すなわち、金山東群の原石と判定された遺物について、香川県白峰産原石とか佐賀県多久産、北海道 旭山の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表6に記入 した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物 試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた 遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越て 大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている 0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原石産地(確率)の欄にマハラノビスの距 離D2乗の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物 でこのD2乗の値が原石群の中で最も小さなD2乗値である。この値が小さい程、遺物の元素組成は その原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほゞ間違い ないと判断されたものである。

今回分析した久田原遺跡出土遺物には、金山東麓産が使用されている。ここで金山東群に一致する原石は香川県金山麓産地以外に、岩屋産地、和泉・岸和田原産地からも採取されるために、表2にしたがって金山東群の1個が岩屋原産地から採取された可能性の確率は、0.05(5%)で、和泉・岸和田産地(表3)からは、0.01(1%)の低い確率になり、また、遺物の中に岩屋産地、和泉・岸和田原産地から確率高く採取される岩屋第1群に同定される遺物がみられないなど、岩屋産原材が使用されたと推定できる証拠はみられないことから、岩屋産地の原材は使用されていないと推測され、香川県金山東麓産地から伝播したと推測される。すでに、弥生時代の玉穿孔用ドリル材として、豊岡市女代南B遺跡では、金山東麓、馬ノ山、二上山産原石の使用が確認されているが、岡山県奥津町久田原遺跡でも

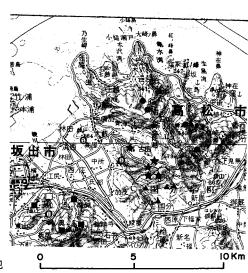
石針に金山東麓産原石の使用が確認されたことから、同じ穿孔技術をもっていたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

#### 参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光 X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977),(1978), 蛍光 X 線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。 (IV)。考古学と自然科学, 10,11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信(1980), 考古学と物理化学。学生社



図1 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地



●: 法印谷群 ★: 白峰群 ▲: 国分寺群 △: 護光寺群 ■: 城山、金山西群 □: 金山東群 馬曜石様ガラス質安山岩 (①②③) ①: 奥池群 ②: 雄山 ③: 南山群

図2 金山・五色台地域サヌカイト、 黒曜石様ガラス質安山岩の原産地

表 1-1 各サヌカイト(安山岩)の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

	rich tal. An arizontal	分析					元 第	素 比				
).	京産地名原石群名	個数	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Z r / S r	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
	イトムカ	46	$0.359 \pm 0.020$	$0.430 \pm 0.014$	$0.081\pm0.006$	$5.884 \pm 0.223$	$0.166 \pm 0.011$	$0.120\pm0.013$	$0.883 \pm 0.030$	$0.015 \pm 0.013$	$0.013 \pm 0.001$	$0.137 \pm 0.007$
	旭山	80	$0.351 \pm 0.011$	$0.288 \pm 0.010$	$0.089 \pm 0.005$	$5.064 \pm 0.140$	$0.174 \pm 0.011$	$0.096 \pm 0.009$	$0.903 \pm 0.029$	$0.015 \pm 0.012$	$0.015 \pm 0.001$	$0.141 \pm 0.005$
_11_55 <del>=</del> 556	台場A	48	$0.278 \pm 0.010$	$0.323 \pm 0.009$	$0.086\pm0.009$	$4.941 \pm 0.223$	$0.143 \pm 0.008$	$0.095 \pm 0.010$	$0.768 \pm 0.032$	$0.012 \pm 0.006$	$0.018\pm0.002$	$0.149 \pm 0.005$
北海道	台場B	82	$0.341 \pm 0.014$	$0.295 \pm 0.017$	$0.085 \pm 0.011$	$4.787\pm0.310$	$0.177 \pm 0.014$	$0.102\pm0.015$	$0.929 \pm 0.041$	$0.021 \pm 0.010$	$0.021 \pm 0.002$	$0.169 \pm 0.008$
	台場C	50	$0.238 \pm 0.016$	$0.303 \pm 0.008$	$0.116 \pm 0.012$	$7.800\pm0.313$	$0.160\pm0.016$	$0.135 \pm 0.015$	$0.856 \pm 0.056$	$0.018 \pm 0.012$	$0.018\pm0.002$	$0.150\pm0.009$
	台場D	49	$0.319 \pm 0.008$	$0.466 \pm 0.011$	$0.119\pm0.012$	$6.686 \pm 0.217$	$0.131 \pm 0.012$	$0.140 \pm 0.012$	$0.894 \pm 0.042$	$0.012 \pm 0.007$	$0.019\pm0.002$	$0.160 \pm 0.007$
群馬県	荒船山	43	$0.194 \pm 0.070$	$0.360 \pm 0.028$	$0.129\pm0.014$	$9.205 \pm 1.153$	$0.080\pm0.034$	$0.085 \pm 0.014$	$0.458 \pm 0.082$	$0.009\pm0.010$	$0.013 \pm 0.021$	$0.123\pm0.032$
神奈川県	火打沢	40	$0.092 \pm 0.005$	$0.285 \pm 0.009$	$0.166\pm0.009$	12.406±0.332	$0.023 \pm 0.006$	$0.111\pm0.008$	$0.483 \pm 0.023$	0.005±0.007	$0.012\pm0.001$	$0.012\pm0.001$
新潟県	極野	48	$0.231 \pm 0.008$	$0.349 \pm 0.028$	$0.141\pm0.015$	$10.218 \pm 0.328$	$0.141\pm0.012$	$0.159\pm0.011$	$0.819\pm0.042$	$0.019\pm0.012$	$0.012\pm0.001$	$0.124 \pm 0.005$
福井県	滝波川	52	$0.327 \pm 0.010$	$0.333 \pm 0.008$	$0.056\pm0.005$	$3.145\pm0.088$	$0.084 \pm 0.005$	$0.510\pm0.006$	$0.606 \pm 0.027$	$0.015 \pm 0.006$	$0.020\pm0.002$	$0.150\pm0.0052$
伸开坑	法恩寺山	38	$0.478 \pm 0.029$	$0.349 \pm 0.020$	$0.033 \pm 0.003$	$2.137\pm0.099$	$0.148 \pm 0.007$	$0.038\pm0.008$	$0.667 \pm 0.028$	$0.022 \pm 0.006$	$0.024\pm0.002$	$0.192\pm0.012$
長野県	横川	70	$0.183 \pm 0.007$	$0.340\pm0.017$	$0.153 \pm 0.017$	11.018±0.398	$0.118 \pm 0.011$	$0.157\pm0.013$	$0.721\pm0.030$	$0.019\pm0.009$	$0.012\pm0.001$	$0.113 \pm 0.005$
支到'乐	八風山	46	$0.274 \pm 0.028$	$0.324 \pm 0.010$	$0.090\pm0.008$	$4.905 \pm 0.505$	$0.104 \pm 0.009$	$0.100\pm0.009$	$0.581 \pm 0.033$	$0.012 \pm 0.009$	$0.018\pm0.002$	$0.168 \pm 0.014$
岐阜県	下呂	93	$1.576\pm0.055$	$0.227 \pm 0.011$	$0.038 \pm 0.004$	$0.766 \pm 0.025$	$0.277 \pm 0.020$	$0.031\pm0.013$	$0.504 \pm 0.024$	$0.035 \pm 0.009$	$0.052\pm0.003$	$0.660\pm0.025$
愛知県	豊川	51	$0.299 \pm 0.007$	$0.568 \pm 0.020$	$0.052\pm0.009$	$4.672\pm0.338$	$0.115 \pm 0.008$	$0.083 \pm 0.019$	$0.848 \pm 0.028$	$0.031 \pm 0.009$	$0.020\pm0.002$	$0.151 \pm 0.005$
发和乐	茶臼山	24	$0.293 \pm 0.005$	$0.324 \pm 0.007$	$0.093\pm0.009$	$6.643 \pm 0.256$	$0.141 \pm 0.009$	$0.107 \pm 0.011$	$1.086 \pm 0.037$	$0.038 \pm 0.009$	$0.021 \pm 0.002$	$0.157 \pm 0.006$
奈良県	:1:11	51	$0.288 \pm 0.010$	$0.215 \pm 0.006$	$0.071\pm0.006$	$4.629\pm0.270$	$0.202 \pm 0.012$	$0.066 \pm 0.009$	$0.620\pm0.022$	$0.024 \pm 0.010$	$0.019\pm0.001$	$0.144 \pm 0.005$
大阪府	和泉	26	$0.494 \pm 0.023$	$0.325 \pm 0.025$	$0.056\pm0.004$	$4.060\pm0.148$	$0.296 \pm 0.021$	$0.065 \pm 0.010$	$0.706 \pm 0.025$	$0.038 \pm 0.010$	$0.023\pm0.001$	$0.194 \pm 0.009$
	岩屋第一	28	$0.616 \pm 0.021$	$0.254 \pm 0.012$	$0.057\pm0.005$	$3.610\pm0.189$	$0.365 \pm 0.019$	$0.056 \pm 0.012$	$0.846 \pm 0.026$	$0.027 \pm 0.017$	$0.018\pm0.001$	$0.186 \pm 0.007$
兵庫県	岩屋第二	24	$0.535 \pm 0.020$	$0.263 \pm 0.005$	$0.053\pm0.005$	$3.438 \pm 0.103$	$0.340 \pm 0.015$	$0.042 \pm 0.012$	$1.069\pm0.030$	$0.026 \pm 0.014$	$0.017\pm0.001$	$0.173 \pm 0.008$
	甲山	22	$0.300 \pm 0.017$	$0.154 \pm 0.005$	$0.056 \pm 0.007$	$3.350\pm0.261$	$0.130 \pm 0.012$	$0.061 \pm 0.033$	$0.574 \pm 0.021$	$0.012 \pm 0.007$	$0.018\pm0.001$	$0.159 \pm 0.008$
	国分卡	28	$0.457 \pm 0.011$	$0.251 \pm 0.007$	$0.053 \pm 0.005$	$3.574 \pm 0.122$	$0.311 \pm 0.019$	$0.043 \pm 0.016$	$0.970\pm0.033$	$0.038 \pm 0.015$	$0.015 \pm 0.001$	$0.149\pm0.005$
香川県	五 蓮光寺	18	$0.459 \pm 0.012$	$0.249\pm0.008$	$0.053\pm0.005$	$3.518\pm0.129$	$0.308 \pm 0.019$	$0.043\pm0.015$	$0.972 \pm 0.037$	$0.034 \pm 0.009$	$0.016\pm0.001$	$0.150\pm0.004$
	五色 蓮光寺 白峰	51	$0.534 \pm 0.015$	$0.262 \pm 0.005$	$0.053\pm0.005$	$3.376 \pm 0.108$	$0.340 \pm 0.014$	$0.040\pm0.016$	$1.071\pm0.051$	$0.032 \pm 0.011$	$0.017\pm0.001$	$0.173 \pm 0.007$
	法印谷	25	$0.397 \pm 0.009$	$0.239 \pm 0.004$	$0.069\pm0.005$	$4.619\pm0.127$	$0.277 \pm 0.012$	$0.059\pm0.011$	$1.145\pm0.029$	$0.031 \pm 0.013$	$0.015\pm0.001$	$0.130 \pm 0.004$
	金山東山 金山山	48	$0.478 \pm 0.014$	$0.227 \pm 0.006$	$0.076\pm0.009$	$4.511\pm0.119$	$0.293 \pm 0.022$	$0.083 \pm 0.014$	$1.183\pm0.046$	$0.020\pm0.010$	$0.025\pm0.003$	$0.188 \pm 0.005$
	山金山西	43	0.414±0.011	$0.217 \pm 0.006$	$0.078\pm0.007$	$4.574 \pm 0.132$	$0.283 \pm 0.014$	$0.073\pm0.015$	1.100±0.040	$0.032 \pm 0.013$	$0.023\pm0.002$	$0.168 \pm 0.006$
	城山	63	$0.402 \pm 0.011$	$0.216 \pm 0.006$	$0.079\pm0.006$	$4.741\pm0.138$	$0.289 \pm 0.014$	$0.068 \pm 0.016$	$1.065 \pm 0.026$	$0.021 \pm 0.014$	$0.013 \pm 0.001$	$0.116 \pm 0.003$
	双子山	54	$0.350 \pm 0.007$	$0.233 \pm 0.005$	$0.074 \pm 0.006$	$4.898 \pm 0.169$	$0.261 \pm 0.012$	$0.061 \pm 0.014$	$1.093 \pm 0.035$	$0.023 \pm 0.016$	$0.011 \pm 0.002$	$0.105 \pm 0.004$
	*奥池第一群	51	$0.842 \pm 0.046$	$0.127 \pm 0.006$	$0.024\pm0.006$	$2.087\pm0.088$	$0.492 \pm 0.030$	$0.018\pm0.018$	$0.722 \pm 0.047$	$0.045\pm0.013$	$0.035\pm0.003$	$0.434 \pm 0.024$
	* 奥池第二群	50	$0.641 \pm 0.052$	$0.133 \pm 0.007$	$0.033 \pm 0.007$	$2.471 \pm 0.135$	$0.391 \pm 0.028$	$0.021\pm0.017$	$0.934 \pm 0.067$	$0.038 \pm 0.011$	$0.029\pm0.003$	$0.331 \pm 0.027$
	*雄山	50	$0.827 \pm 0.052$	$0.128\pm0.006$	$0.026\pm0.008$	$2.119\pm0.091$	$0.485 \pm 0.032$	$0.016\pm0.018$	$0.731 \pm 0.050$	$0.043\pm0.014$	$0.035\pm0.003$	$0.421\pm0.027$
	*神谷・南口	51	$0.852 \pm 0.040$	$0.131\pm0.007$	$0.027 \pm 0.008$	$2.083\pm0.088$	$0.495 \pm 0.026$	$0.020\pm0.016$	$0.703\pm0.045$	$0.050\pm0.014$	$0.035 \pm 0.004$	$0.433 \pm 0.023$
	*大麻山南第一群	39	$0.693 \pm 0.072$	$0.149\pm0.007$	$0.041\pm0.010$	$2.792 \pm 0.180$	$0.473 \pm 0.043$	$0.034 \pm 0.021$	$0.965 \pm 0.061$	$0.044 \pm 0.012$	$0.029\pm0.003$	$0.344 \pm 0.038$
	*大麻山南第二群	34	$0.992 \pm 0.041$	$0.124 \pm 0.009$	$0.034 \pm 0.011$	$2.370\pm0.138$	$0.691 \pm 0.024$	$0.021\pm0.022$	$0.774 \pm 0.032$	$0.054 \pm 0.015$	$0.039\pm0.004$	$0.480 \pm 0.018$
愛媛県	中井谷	40	$0.458 \pm 0.041$	$0.374 \pm 0.007$	$0.073\pm0.009$	$5.160 \pm 0.157$	$0.393 \pm 0.022$	$0.108\pm0.017$	$1.473\pm0.051$	$0.037 \pm 0.021$	$0.020\pm0.008$	$0.219\pm0.009$
	馬ノ山	23	$0.188 \pm 0.007$	$0.178\pm0.006$	$0.011\pm0.001$	$0.916 \pm 0.033$	$0.032 \pm 0.002$	$0.001 \pm 0.002$	$0.177 \pm 0.009$	$0.004 \pm 0.002$	$0.015\pm0.001$	$0.111 \pm 0.005$
鳥取県	下砂見	46	$0.168 \pm 0.003$	$0.162\pm0.004$	$0.021\pm0.003$	$1.447 \pm 0.038$	$0.028 \pm 0.004$	$0.011\pm0.003$	$0.262 \pm 0.026$	$0.007 \pm 0.003$	$0.016 \pm 0.001$	$0.119\pm0.005$
	麻畑	51	$0.442 \pm 0.012$	$0.444 \pm 0.044$	$0.061\pm0.006$	$3.570\pm0.097$	$0.109 \pm 0.008$	$0.080\pm0.009$	$0.988 \pm 0.032$	$0.078 \pm 0.009$	$0.027\pm0.003$	$0.206 \pm 0.006$
	冠高原	60	$0.651 \pm 0.021$	$0.485\pm0.014$	$0.046\pm0.004$	3.322±0.104	$0.174 \pm 0.009$	$0.029\pm0.009$	$0.462 \pm 0.017$	$0.185 \pm 0.010$	$0.025\pm0.002$	$0.241 \pm 0.008$
	冠 伴蔵 C	45	$0.277 \pm 0.010$	$0.345 \pm 0.008$	$0.019\pm0.002$	$1.604 \pm 0.057$	$0.039 \pm 0.015$	$0.008 \pm 0.006$	$0.368 \pm 0.012$	$0.026 \pm 0.006$	$0.019\pm0.001$	$0.171\pm0.006$
広島県		51	$0.340\pm0.008$	$0.319 \pm 0.008$	$0.020\pm0.003$	$1.347\pm0.025$	$0.047 \pm 0.011$	$0.011 \pm 0.005$	$0.381 \pm 0.021$	$0.044 \pm 0.056$	$0.019\pm0.002$	$0.190\pm0.009$
	山 冠山東	29	$0.323 \pm 0.019$	$0.363 \pm 0.031$	$0.019\pm0.001$	$1.607 \pm 0.060$	$0.059 \pm 0.009$	$0.003 \pm 0.005$	$0.399 \pm 0.043$	$0.025 \pm 0.009$	$0.021 \pm 0.001$	$0.171 \pm 0.006$
	飯川	25	$1.116 \pm 0.061$	$0.472 \pm 0.022$	$0.037 \pm 0.005$	$2.228\pm0.080$	$0.245 \pm 0.011$	$0.023\pm0.009$	$0.524 \pm 0.014$	$0.246 \pm 0.013$	$0.038\pm0.003$	$0.391 \pm 0.021$
山口県	平生	45	$0.184 \pm 0.009$	$0.190 \pm 0.006$	$0.112\pm0.031$	$7.290 \pm 0.346$	$0.170 \pm 0.015$	$0.077 \pm 0.011$	$0.691 \pm 0.040$	$0.026 \pm 0.010$	$0.011 \pm 0.001$	$0.097 \pm 0.004$

表 1-2 各サヌカイト(安山岩)の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

		分析						素 比				
,	原産地名原石群名	個数	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Z r / S r	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
	昭和池第一群	50	$1.825 \pm 0.041$	$0.644 \pm 0.024$	$0.053 \pm 0.007$	$2.125\pm0.063$	$0.453 \pm 0.019$	$0.107 \pm 0.017$	$1.477 \pm 0.049$	$0.044 \pm 0.022$	$0.050\pm0.003$	$0.500 \pm 0.012$
福岡県	公 昭和池第二群	50	$1.592 \pm 0.066$	$0.609 \pm 0.020$	$0.061 \pm 0.005$	$3.075\pm0.123$	$0.534 \pm 0.039$	$0.111 \pm 0.020$	$1.671\pm0.134$	$0.049 \pm 0.012$	$0.042 \pm 0.003$	$0.419\pm0.014$
備画界		50	$3.144 \pm 0.069$	$0.724 \pm 0.036$	$0.073 \pm 0.009$	$2.919\pm0.099$	$0.925 \pm 0.048$	$0.181 \pm 0.026$	$2.820\pm0.114$	$0.072 \pm 0.020$	$0.074 \pm 0.026$	$0.817 \pm 0.040$
	昭和池第四群	50	$1.922 \pm 0.108$	$0.681 \pm 0.050$	$0.064 \pm 0.005$	$3.023\pm0.103$	$0.607 \pm 0.033$	$0.122 \pm 0.017$	$1.887 \pm 0.098$	$0.050\pm0.015$	$0.050\pm0.004$	$0.499 \pm 0.018$
	椎葉崖第四群	53	$0.831 \pm 0.047$	$0.404 \pm 0.013$	$0.056 \pm 0.007$	$4.718\pm0.225$	$0.510 \pm 0.037$	$0.062 \pm 0.019$	$0.850\pm0.033$	$0.222 \pm 0.018$	$0.016\pm0.003$	$0.201 \pm 0.011$
	多久第二群	23	$0.834 \pm 0.055$	$0.396 \pm 0.016$	$0.065 \pm 0.010$	$5.342 \pm 0.317$	$0.566 \pm 0.047$	$0.081\pm0.028$	$0.866 \pm 0.046$	$0.242 \pm 0.023$	$0.016\pm0.005$	$0.202 \pm 0.014$
	多人第三群	8	$1.097 \pm 0.232$	$0.350 \pm 0.028$	$0.065 \pm 0.014$	$4.498 \pm 0.903$	$0.701 \pm 0.084$	$0.084 \pm 0.025$	$0.828 \pm 0.052$	$0.239 \pm 0.019$	$0.021\pm0.003$	$0.263 \pm 0.046$
	梅野	42	$1.287 \pm 0.051$	$0.340\pm0.013$	$0.058\pm0.010$	$3.643 \pm 0.225$	$0.784 \pm 0.030$	$0.081 \pm 0.022$	$0.824 \pm 0.033$	$0.265 \pm 0.032$	$0.038\pm0.009$	$0.458 \pm 0.050$
	老松山	62	$0.705 \pm 0.034$	$0.314 \pm 0.011$	$0.067\pm0.009$	$5.323 \pm 0.244$	$0.543 \pm 0.036$	$0.075\pm0.021$	$0.691 \pm 0.034$	$0.208 \pm 0.023$	$0.014\pm0.002$	$0.174 \pm 0.007$
	寺山・岡本	30	$0.629 \pm 0.043$	$0.310\pm0.010$	$0.070\pm0.008$	$5.600\pm0.323$	$0.489 \pm 0.029$	$0.066 \pm 0.017$	$0.644 \pm 0.032$	$0.192 \pm 0.018$	$0.013\pm0.001$	$0.157 \pm 0.010$
佐賀県	西有田	17	$0.453 \pm 0.019$	$0.331 \pm 0.005$	$0.098 \pm 0.010$	$7.489 \pm 0.249$	$0.307 \pm 0.024$	$0.081 \pm 0.015$	$0.568 \pm 0.023$	$0.106 \pm 0.010$	$0.023\pm0.002$	$0.237 \pm 0.016$
	松尾転礫	47	$0.717 \pm 0.036$	$0.410\pm0.012$	$0.081 \pm 0.006$	$5.312 \pm 0.241$	$0.383 \pm 0.024$	$0.094 \pm 0.013$	$0.810\pm0.039$	$0.095 \pm 0.023$	$0.028 \pm 0.027$	$0.291 \pm 0.014$
	松尾第二群	40	$0.970 \pm 0.032$	$0.330\pm0.009$	$0.066 \pm 0.007$	$3.683 \pm 0.122$	$0.431 \pm 0.021$	$0.077 \pm 0.016$	$0.554 \pm 0.023$	$0.110 \pm 0.021$	$0.034\pm0.003$	$0.377 \pm 0.012$
	椎葉崖第一群	42	$0.822 \pm 0.027$	$0.369 \pm 0.010$	$0.065\pm0.007$	$3.888 \pm 0.236$	$0.392 \pm 0.021$	$0.076\pm0.018$	$0.540 \pm 0.049$	$0.089 \pm 0.020$	$0.027\pm0.009$	$0.330 \pm 0.013$
	椎葉崖第二群	41	$0.675 \pm 0.016$	$0.390\pm0.010$	$0.073 \pm 0.007$	$4.666 \pm 0.218$	$0.346 \pm 0.021$	$0.078 \pm 0.012$	$0.582 \pm 0.065$	$0.087 \pm 0.013$	$0.024 \pm 0.007$	$0.280 \pm 0.011$
	椎葉崖第三群	12	$0.538 \pm 0.011$	$0.401 \pm 0.007$	$0.076 \pm 0.010$	$5.271\pm0.189$	$0.296 \pm 0.019$	$0.075\pm0.015$	$0.587 \pm 0.024$	0.075±0.009	$0.022\pm0.002$	$0.227 \pm 0.009$
	椎葉崖第四群	37	$0.744 \pm 0.014$	$0.409 \pm 0.010$	$0.080\pm0.010$	$5.176 \pm 0.202$	$0.399 \pm 0.020$	$0.092 \pm 0.015$	$0.807 \pm 0.027$	$0.096 \pm 0.023$	$0.029\pm0.003$	$0.302\pm0.010$
	駒崎鼻	28	$1.111 \pm 0.118$	$0.140\pm0.009$	$0.055 \pm 0.020$	$1.650\pm0.236$	$0.236 \pm 0.043$	$0.041\pm0.027$	$0.486\pm0.038$	$0.082 \pm 0.022$	$0.050\pm0.006$	$0.607 \pm 0.059$
	亀岳	19	$1.072 \pm 0.042$	$0.144 \pm 0.008$	$0.041 \pm 0.006$	$1.776\pm0.152$	$0.233 \pm 0.014$	$0.015\pm0.013$	$0.497 \pm 0.018$	0.065±0.015	$0.049\pm0.003$	$0.587 \pm 0.018$
	牟Ⅲ第一群	30	$0.784 \pm 0.092$	$0.345 \pm 0.026$	$0.069 \pm 0.008$	$4.561\pm0.236$	$0.875 \pm 0.132$	$0.220\pm0.028$	$0.727 \pm 0.053$	$0.299 \pm 0.039$	$0.015\pm0.003$	$0.188 \pm 0.021$
	牟HH第二群	13	$0.594 \pm 0.048$	$0.328 \pm 0.013$	$0.088 \pm 0.010$	$7.759\pm0.411$	$1.114\pm0.104$	$0.348\pm0.031$	$0.989 \pm 0.071$	$0.496 \pm 0.041$	$0.012\pm0.001$	$0.144 \pm 0.010$
	川棚第一群	59	$0.498 \pm 0.030$	$0.302 \pm 0.011$	$0.067 \pm 0.005$	$4.225\pm0.181$	$0.220\pm0.018$	$0.076\pm0.010$	$0.814 \pm 0.048$	$0.035 \pm 0.012$	$0.012\pm0.002$	$0.133 \pm 0.008$
長崎県	川棚第二群	9	$0.406 \pm 0.048$	$0.265 \pm 0.027$	$0.071\pm0.004$	$4.854\pm0.374$	$0.203 \pm 0.029$	$0.081\pm0.012$	$0.714 \pm 0.048$	$0.034 \pm 0.017$	$0.011\pm0.001$	$0.109\pm0.011$
	福井第一群	15	$0.630 \pm 0.012$	$0.329 \pm 0.005$	$0.090\pm0.011$	$7.531\pm0.315$	$1.211 \pm 0.040$	$0.365 \pm 0.035$	$1.028\pm0.047$	$0.534 \pm 0.033$	$0.013\pm0.001$	$0.154 \pm 0.003$
	福井第二群	25	$0.512 \pm 0.014$	$0.317 \pm 0.008$	$0.084 \pm 0.011$	$7.157\pm0.312$	$0.941 \pm 0.037$	$0.301 \pm 0.027$	$0.874\pm0.043$	$0.431 \pm 0.033$	$0.011\pm0.002$	$0.126 \pm 0.004$
	崎針尾第一群	68	$0.382 \pm 0.026$	$0.252 \pm 0.023$	$0.052 \pm 0.006$	$4.106 \pm 0.227$	$0.160 \pm 0.018$	$0.057 \pm 0.009$	$0.434 \pm 0.039$	$0.056 \pm 0.011$	$0.010\pm0.001$	$0.107\pm0.007$
	崎針尾第二群	56	$0.590 \pm 0.072$	$0.393 \pm 0.020$	$0.077 \pm 0.009$	$5.396\pm0.448$	$0.330 \pm 0.028$	$0.078\pm0.015$	$0.675 \pm 0.059$	$0.096 \pm 0.017$	$0.024 \pm 0.006$	$0.219\pm0.041$
	駒崎鼻	42	$0.642 \pm 0.071$	$0.310\pm0.010$	$0.070\pm0.008$	$5.529\pm0.354$	$0.498 \pm 0.051$	$0.081 \pm 0.015$	$0.656 \pm 0.039$	$0.200 \pm 0.028$	$0.022 \pm 0.006$	$0.246 \pm 0.023$
	阿蘇第一群	39	$1.999 \pm 0.212$	$0.664 \pm 0.061$	$0.067 \pm 0.011$	$1.862\pm0.368$	$0.476\pm0.060$	$0.126 \pm 0.023$	$1.647\pm0.181$	$0.067 \pm 0.014$	$0.067\pm0.010$	$0.602 \pm 0.086$
熊本県	阿蘇第二群	44	$1.045\pm0.171$	$0.547 \pm 0.064$	$0.056 \pm 0.008$	2.822±0.410	$0.312 \pm 0.048$	$0.088 \pm 0.015$	$1.108\pm0.160$	$0.046 \pm 0.013$	$0.036\pm0.006$	$0.302 \pm 0.038$
	菊池	42	$0.678 \pm 0.057$	$0.458 \pm 0.020$	$0.062 \pm 0.005$	$3.457 \pm 0.206$	$0.194 \pm 0.018$	$0.072\pm0.009$	$0.728 \pm 0.054$	$0.025 \pm 0.010$	$0.019\pm0.002$	$0.185 \pm 0.015$
標準試料	J G - 1 a)	56	$1.327 \pm 0.021$	$0.266 \pm 0.006$	$0.058 \pm 0.006$	$2.817\pm0.074$	$0.756 \pm 0.015$	$0.183 \pm 0.024$	$0.762 \pm 0.033$	$0.078 \pm 0.014$	$0.036\pm0.003$	$0.448 \pm 0.011$

麻畑原石産地は岡山理科大学白石純氏発見の原産地(近日正式発表予定) 平均値土標準偏差値、 \* :黒曜石様ガラス質安山岩 a):Ando.A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8 175-192.

表1-3 原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

	bud & what my &	分析						 素 比				
Į.	遺跡名遺物群名	個数	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	A 1 / C a	Si/Ca
11.36.336	頭無川遺物群	35	$0.352 \pm 0.029$	$0.291 \pm 0.021$	$0.094 \pm 0.012$	5.376±0.721	$0.170\pm0.015$	$0.103\pm0.016$	$0.874 \pm 0.101$	0.018±0.011	$0.017\pm0.021$	$0.156 \pm 0.090$
北海道	納内No.17遺物群	48	$0.284 \pm 0.006$	$0.316 \pm 0.008$	$0.113\pm0.016$	9.214±0.461	$0.158 \pm 0.013$	$0.160\pm0.013$	$1.067\pm0.046$	$0.022 \pm 0.012$	$0.020\pm0.002$	$0.164 \pm 0.0040$
	丁葉1群	32	$0.089 \pm 0.002$	$0.307 \pm 0.005$	$0.177 \pm 0.013$	13.143±0.459	$0.066 \pm 0.006$	$0.116 \pm 0.012$	$0.557 \pm 0.030$	0.016±0.008	$0.012\pm0.002$	$0.102 \pm 0.004$
<b>工葉県</b>	千葉2群	36	$0.292 \pm 0.012$	$0.352 \pm 0.007$	$0.109\pm0.010$	$7.204 \pm 0.254$	$0.184 \pm 0.011$	$0.135 \pm 0.013$	$0.906 \pm 0.035$	$0.024 \pm 0.013$	$0.019\pm0.002$	$0.161\pm0.008$
T #510	千葉3群	48	$0.098 \pm 0.002$	$0.306 \pm 0.004$	$0.141 \pm 0.012$	8.952±0.285	$0.032 \pm 0.008$	$0.096 \pm 0.008$	$0.419\pm0.019$	$0.011 \pm 0.006$	$0.014 \pm 0.001$	$0.120\pm0.003$
「泉県	千葉4群	48	$0.134 \pm 0.002$	$0.259 \pm 0.004$	$0.128 \pm 0.012$	$9.617 \pm 0.196$	$0.092 \pm 0.009$	$0.098 \pm 0.009$	$0.612 \pm 0.023$	0.017±0.009	$0.012 \pm 0.001$	$0.093 \pm 0.002$
	有占No.13群	48	$0.143 \pm 0.002$	$0.243 \pm 0.004$	$0.114 \pm 0.010$	$7.889\pm0.163$	$0.091 \pm 0.009$	$0.097 \pm 0.009$	$0.566 \pm 0.029$	$0.016 \pm 0.009$	$0.015\pm0.002$	$0.117 \pm 0.003$
	有吉No.14群	48	$0.204 \pm 0.002$	$0.310\pm0.004$	$0.116 \pm 0.009$	$8.780\pm0.158$	$0.146 \pm 0.009$	$0.106 \pm 0.010$	$0.654 \pm 0.026$	$0.015 \pm 0.002$	$0.015 \pm 0.002$	$0.130 \pm 0.003$
石川県	酒見遺物群	42	$0.447 \pm 0.064$	$0.608 \pm 0.017$	$0.089 \pm 0.012$	$5.098\pm0.781$	$0.153 \pm 0.019$	$0.116 \pm 0.014$	$1.258 \pm 0.118$	$0.016 \pm 0.012$	$0.024 \pm 0.004$	$0.208 \pm 0.027$
	野笆No.261他群	56	$0.632 \pm 0.032$	$0.393 \pm 0.013$	$0.045\pm0.005$	$2.234\pm0.070$	$0.170\pm0.009$	$0.046 \pm 0.012$	$1.030\pm0.041$	$0.029 \pm 0.006$	$0.022 \pm 0.002$	$0.213\pm0.010$
	野笆No.271他群	35	$0.407 \pm 0.010$	$0.304 \pm 0.005$	$0.040\pm0.005$	$1.882 \pm 0.041$	$0.089 \pm 0.005$	$0.033 \pm 0.005$	$0.671\pm0.030$	$0.023 \pm 0.005$	$0.018\pm0.002$	$0.177 \pm 0.006$
岐阜県	野笹No.282他群	33	$0.799 \pm 0.009$	$0.512 \pm 0.010$	$0.050\pm0.005$	$2.540\pm0.096$	$0.221 \pm 0.014$	$0.077 \pm 0.011$	$1.213\pm0.039$	$0.034 \pm 0.007$	$0.026 \pm 0.002$	$0.240\pm0.009$
	野笹No.289他群	32	$3.515 \pm 0.134$	$1.068 \pm 0.047$	$0.149\pm0.023$	$6.620\pm0.453$	$0.617 \pm 0.041$	$0.210\pm0.032$	$1.330 \pm 0.067$	$0.158 \pm 0.027$	$0.167 \pm 0.015$	$2.525 \pm 0.081$
	野笹No.262群	40	$0.384 \pm 0.004$	$0.318 \pm 0.006$	$0.057\pm0.005$	$2.356 \pm 0.068$	$0.102 \pm 0.007$	$0.051\pm0.007$	$0.651\pm0.022$	$0.022 \pm 0.005$	$0.017 \pm 0.002$	$0.161\pm0.004$
	野笹No.295群	32	$3.584 \pm 0.178$	$1.077\pm0.058$	$0.075\pm0.016$	$3.775\pm0.153$	$0.441 \pm 0.024$	$0.197 \pm 0.019$	$1.118\pm0.053$	$0.150 \pm 0.028$	$0.183\pm0.019$	$2.989 \pm 0.159$
静岡県	川津No.1群	48	$0.101 \pm 0.002$	$0.297 \pm 0.003$	$0.145 \pm 0.012$	13.011±0.347	$0.056 \pm 0.009$	$0.112\pm0.009$	$0.589 \pm 0.028$	$0.011 \pm 0.009$	$0.011 \pm 0.001$	$0.088 \pm 0.002$
愛知県	朝日No.7群	35	$0.334 \pm 0.004$	$0.362 \pm 0.005$	$0.067\pm0.009$	$3.895\pm0.150$	$0.082 \pm 0.005$	$0.044 \pm 0.007$	$0.758 \pm 0.044$	$0.027 \pm 0.009$	$0.017 \pm 0.002$	$0.147\pm0.010$
及利宗	朝日No.15群	35	$1.016 \pm 0.022$	$0.582 \pm 0.012$	$0.043\pm0.005$	$4.187\pm0.141$	$0.477 \pm 0.019$	$0.089\pm0.020$	$1.722\pm0.058$	$0.058 \pm 0.026$	$0.032 \pm 0.009$	$0.557 \pm 0.021$
	向出No.6群	30	$0.236 \pm 0.003$	$0.189\pm0.003$	$0.075\pm0.005$	$4.966\pm0.089$	$0.194 \pm 0.010$	$0.063\pm0.011$	$0.588 \pm 0.019$	$0.010\pm0.011$	$0.015\pm0.001$	$0.127 \pm 0.002$
	向出No.49群	30	$0.310 \pm 0.003$	$0.203\pm0.003$	$0.052\pm0.004$	$3.734\pm0.074$	$0.228 \pm 0.016$	$0.059\pm0.010$	$0.610\pm0.021$	$0.011 \pm 0.012$	$0.017\pm0.001$	$0.147 \pm 0.002$
	中社No.62群	30	$0.333 \pm 0.003$	$0.229\pm0.003$	$0.066\pm0.004$	$4.363\pm0.080$	$0.212 \pm 0.014$	$0.066 \pm 0.011$	$0.618\pm0.019$	$0.010\pm0.011$	$0.017 \pm 0.001$	$0.142 \pm 0.002$
	山社No.82群	30	$0.340 \pm 0.003$	$0.226 \pm 0.003$	$0.065\pm0.005$	$4.305\pm0.085$	$0.208 \pm 0.010$	$0.069\pm0.009$	$0.628 \pm 0.015$	$0.010\pm0.010$	$0.016 \pm 0.001$	$0.136 \pm 0.002$
	山社No.86群	30	$2.638 \pm 0.057$	$0.949 \pm 0.026$	$0.025\pm0.008$	$4.536\pm0.105$	$0.624 \pm 0.019$	$0.139\pm0.027$	$1.425 \pm 0.050$	$0.059 \pm 0.019$	$0.097 \pm 0.033$	$1.903\pm0.055$
大阪府	山社No.89群	30	$0.600 \pm 0.005$	$0.287 \pm 0.004$	$0.046\pm0.004$	$3.077\pm0.060$	$0.363 \pm 0.014$	$0.048 \pm 0.012$	$1.088 \pm 0.022$	$0.022 \pm 0.016$	$0.028\pm0.002$	$0.256 \pm 0.004$
	中社No.104群	30	$0.133 \pm 0.002$	$0.117 \pm 0.002$	$0.095\pm0.006$	$6.365\pm0.098$	$0.112 \pm 0.007$	$0.044 \pm 0.010$	$0.328 \pm 0.020$	$0.009 \pm 0.009$	$0.011 \pm 0.001$	$0.102 \pm 0.002$
	鬼虎No.16群	33	$0.361 \pm 0.004$	$0.253 \pm 0.004$	$0.053\pm0.007$	$3.105\pm0.070$	$0.238 \pm 0.106$	$0.063 \pm 0.014$	$0.684 \pm 0.025$	$0.027 \pm 0.008$	$0.018\pm0.001$	$0.170\pm0.004$
	鬼虎No.17群	33	$0.372 \pm 0.004$	$0.250\pm0.004$	$0.049\pm0.007$	$2.987 \pm 0.060$	$0.241 \pm 0.010$	$0.056 \pm 0.009$	$0.675 \pm 0.024$	$0.023 \pm 0.008$	$0.018 \pm 0.001$	$0.176 \pm 0.005$
	粟生問谷No.98群	48	$0.421\pm0.009$	$0.227 \pm 0.005$	$0.066\pm0.009$	$4.359\pm0.132$	$0.217 \pm 0.015$	$0.067\pm0.009$	$0.651 \pm 0.025$	$0.026 \pm 0.009$	$0.015 \pm 0.002$	$0.129\pm0.006$
	粟生間谷No.T5群	48	$0.240 \pm 0.002$	$0.268 \pm 0.005$	$0.058 \pm 0.007$	$4.106\pm0.087$	$0.160\pm0.010$	$0.059\pm0.009$	$0.582 \pm 0.027$	$0.022 \pm 0.008$	$0.018 \pm 0.002$	$0.123\pm0.004$
兵庫県	寺川No.117群	48	$0.378 \pm 0.005$	$0.226 \pm 0.004$	$0.071\pm0.007$	$4.592\pm0.093$	$0.216\pm0.009$	$0.063\pm0.009$	$0.611\pm0.024$	$0.022 \pm 0.008$	$0.019\pm0.002$	$0.134 \pm 0.004$
	堅田No.8遺物群	48	$11.976 \pm 0.595$	$1.248\pm0.069$	$0.035 \pm 0.011$	$3.745\pm0.214$	$1.647 \pm 0.054$	$0.215\pm0.053$	$1.272\pm0.054$	$0.120\pm0.023$	$0.276 \pm 0.032$	$4.203\pm0.241$
和歌山県	堅田No.24遺物群	48	$23.782 \pm 1.975$	$3.082\pm0.279$	$0.045\pm0.014$	$6.290\pm0.406$	$2.437 \pm 0.192$	$0.444 \pm 0.070$	$2.258\pm0.134$	$0.178 \pm 0.026$	$0.500\pm0.066$	$5.731 \pm 0.519$
	堅田No.28遺物群	48	$1.934 \pm 0.083$	$1.349\pm0.064$	$0.026\pm0.010$	$8.161\pm0.354$	$0.625 \pm 0.025$	$0.128\pm0.027$	$1.414\pm0.061$	$0.072 \pm 0.027$	$0.092\pm0.010$	$1.051\pm0.059$
鳥取県	笹畝 2 No.2群	48	$0.491 \pm 0.008$	$0.524 \pm 0.009$	$0.040\pm0.005$	$2.278\pm0.047$	$0.098 \pm 0.006$	$0.045 \pm 0.007$	$0.629\pm0.017$	$0.066 \pm 0.006$	$0.028 \pm 0.002$	$0.222 \pm 0.006$
759-1A215	色畝 2 No.3群	48	$0.324 \pm 0.007$	$0.508 \pm 0.007$	$0.048\pm0.005$	$2.859\pm0.079$	$0.068 \pm 0.056$	$0.051\pm0.006$	$0.622 \pm 0.025$	$0.048 \pm 0.008$	$0.021\pm0.002$	$0.152\pm0.006$
	平川遺物群	70	$0.211 \pm 0.006$	$0.296 \pm 0.007$	$0.092 \pm 0.014$	$7.108\pm0.245$	$0.098 \pm 0.011$	$0.071\pm0.012$	$0.552 \pm 0.038$	$0.021 \pm 0.008$	$0.013 \pm 0.001$	$0.118 \pm 0.005$
	喜時雨遺物群	44	$3.461\pm0.177$	$2.341\pm0.134$	$0.158\pm0.041$	$17.661\pm1.079$	$1.099 \pm 0.048$	$0.268 \pm 0.036$	$2.124 \pm 0.106$	$0.157 \pm 0.035$	$0.116 \pm 0.012$	$1.201\pm0.085$
	下山遺物群	60	$0.190\pm0.003$	$0.286 \pm 0.005$	$0.090\pm0.010$	$6.872 \pm 0.311$	$0.088 \pm 0.008$	$0.064 \pm 0.008$	$0.528 \pm 0.021$	$0.017 \pm 0.008$	$0.014 \pm 0.001$	$0.102\pm0.005$
	下山No.5遺物群	48	$0.178 \pm 0.002$	$0.284 \pm 0.003$	$0.086 \pm 0.007$	$7.148 \pm 0.141$	$0.082 \pm 0.007$	$0.060\pm0.009$	$0.501 \pm 0.023$	0.013±0.005	$0.012\pm0.001$	$0.092 \pm 0.003$
	下山No.11遺物群	48	$0.161\pm0.004$	$0.272 \pm 0.004$	$0.090\pm0.008$	$7.586 \pm 0.287$	$0.076 \pm 0.009$	$0.060\pm0.008$	$0.468 \pm 0.019$	$0.014 \pm 0.006$	$0.012\pm0.001$	$0.087 \pm 0.003$
島根県	東船1遺物群	48	$4.547\pm0.269$	$0.836 \pm 0.030$	$0.168 \pm 0.048$	$10.523\pm1.762$	$2.447\pm0.594$	$0.375\pm0.120$	14.278±3.081	$1.094 \pm 0.249$	$0.114\pm0.008$	$1.029\pm0.047$
	川平No.2遺物群	48	$0.745 \pm 0.012$	$0.216 \pm 0.006$	$0.017 \pm 0.002$	$0.685 \pm 0.015$	$0.104 \pm 0.005$	$0.005 \pm 0.005$	$0.276 \pm 0.025$	$0.019\pm0.004$	$0.032\pm0.004$	$0.311 \pm 0.011$
	槙ヶ峠石斧群	48	$8.728 \pm 1.974$	$2.927 \pm 0.557$	$0.242\pm0.037$	$25.324 \pm 3.676$	$2.332 \pm 0.005$	$0.115 \pm 0.045$	$1.833\pm0.105$	$0.040\pm0.012$	$0.142 \pm 0.030$	$0.952 \pm 0.188$
	槙ヶ峠石棒群	48	$0.020\pm0.003$	$0.170\pm0.011$	$0.319\pm0.027$	$33.311 \pm 1.670$	$0.053 \pm 0.016$	$0.151 \pm 0.017$	$0.517 \pm 0.051$	$0.022 \pm 0.012$	$0.007\pm0.001$	$0.051 \pm 0.002$
	家の後No.14群	48	$1.518 \pm 0.195$	$0.929 \pm 0.084$	$0.108\pm0.014$	$7.721 \pm 0.024$	$0.462 \pm 0.036$	$0.101 \pm 0.022$	$1.134 \pm 0.046$	$0.026 \pm 0.011$	$0.049\pm0.007$	$0.384 \pm 0.041$
	平川磨製石斧群	48	$0.365 \pm 0.025$	$0.281 \pm 0.018$	$0.252 \pm 0.010$	$3.352\pm0.083$	$0.241 \pm 0.013$	$0.016 \pm 0.008$	$0.189 \pm 0.024$	$0.005 \pm 0.002$	$0.023 \pm 0.003$	$0.165 \pm 0.006$

一4 原石産地不明の組成の似た遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

表

	は夕、世俗語々	分析					元素	11.				
<u>n</u>	因或石园松矸石	個数	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	A1/Ca	Si/Ca
徳島県	城ノ内遺物群	20	$3.129\pm0.089$	$1.851\pm0.049$	0.185±0.028	$17.480\pm0.603$	$1.168\pm0.046$	$0.235\pm0.052$	2.177±0.082	$0.115\pm0.038$	$0.144 \pm 0.012$	1.445±0.053
*	六ツ日遺物群	30	$30 0.307 \pm 0.004$	$0.258\pm0.005$	$0.067\pm0.005$	$4.736\pm0.096$	$0.235\pm0.010$	$0.058\pm0.014$	$0.840\pm0.023$	$0.030\pm0.013$	$0.016\pm0.005$	$0.133\pm0.004$
- XII/4	庵の谷遺物群	09	$0.684 \pm 0.012$	$0.248\pm0.006$	$0.066\pm0.012$	$4.139\pm0.128$	$0.429\pm0.019$	$0.077 \pm 0.022$	$1.178\pm0.040$	$0.058\pm0.013$	$0.025\pm0.002$	$0.262\pm0.007$
白知県	松ノ木遺物群	37	$0.610\pm0.017$	$0.223\pm0.004$	$0.797\pm0.005$	$4.528\pm0.120$	$0.325\pm0.016$	$0.063\pm0.017$	$1.151\pm0.028$	$0.019\pm0.014$	$0.024\pm0.002$	$0.193\pm0.006$
	永进No.18遺物群	48	$0.293\pm0.007$	0.237±0.003	0.050±0.006	$3.976\pm0.127$	$0.164\pm0.010$	$0.061\pm0.010$	$0.658\pm0.026$	$0.024\pm0.008$	$0.017\pm0.002$	$0.127\pm0.007$
	永近No.19遺物群	48	48 $0.440\pm0.085$	$2.190\pm0.242$	$0.026\pm0.005$	$0.671 \pm 0.068$	$0.012\pm0.002$	$0.057\pm0.005$	$0.913\pm0.047$	$0.050\pm0.008$	0.339±0.037	4.867±0.543
	人木野10遺物群	34	$0.397\pm0.006$	$0.297\pm0.007$	$0.071\pm0.009$	$3.723\pm0.129$	$0.181\pm0.011$	$0.048\pm0.012$	$0.397\pm0.029$	$0.071\pm0.010$	$0.021\pm0.002$	$0.189\pm0.012$
1, cli K I E	人木野12遺物群	48	48 $0.687\pm0.010$	800.0±698.0	$0.046\pm0.005$	$2.596\pm0.074$	$0.132\pm0.008$	$0.033\pm0.010$	$0.995\pm0.027$	$0.066\pm0.011$	$0.033\pm0.003$	$0.284\pm0.014$
张 国 和	人木野17遺物群	45	45 37.546±7.947	$6.872\pm1.512$	$0.055\pm0.024$	$12.163\pm1.242$	$1.718\pm0.118$	$0.319\pm0.060$	$1.898\pm0.167$	$0.211 \pm 0.052$	$1.490\pm0.316$	$16.795\pm3.403$
	人人野26遺物群	48	48 $20.336\pm1.582$	$7.598\pm0.614$	$0.046\pm0.015$	$7.914\pm0.477$	$1.359\pm0.073$	$0.396\pm0.064$	$3.562\pm0.227$	$0.050\pm0.029$	$0.803\pm0.098$	8.469±0.649
	久木野44遺物群	45	$45 \mid 0.766 \pm 0.067$	$0.513\pm0.029$	$0.049\pm0.019$	$2.430\pm0.163$	$0.334\pm0.034$	$0.418\pm0.052$	$0.739\pm0.083$	$90.0\pm690.0$	$0.080\pm0.016$	$4.625\pm0.293$
	人人下野45遺物群	48	48 1.207±0.070	$  1.243 \pm 0.056  $	$0.022\pm0.009$	$1.545\pm0.063$	$0.152\pm0.015$	$0.080\pm0.015$	$0.493 \pm 0.039$	$0.030\pm0.012$	$0.160\pm0.020$	$7.566\pm0.327$
汗: 向出遺跡、	洋:向出遺跡、下山No5.No.11群、中才社遺跡、宍ツ日遺跡、松ノ木遺跡、朝山遺跡、短池川遺跡、野笹No.262、295群、栗牛間谷遺跡、夜泊2遺跡、笹島2遺跡、単町。遺跡 、家の後遺跡、槙ヶ峠遺跡、川戸町、有吉遺跡、壁田遺跡No.8.24,28	製が、六、	7日遺跡、松ノ木道	<b>协、朝山遺跡、鬼</b> 身	岩川遺跡、野笹No.2	'62、295群、媒生間	1谷遺跡、永道2遺勘	1、笹散2遺跡、川	平。遺跡、家の後遺	動、横ケば遺跡、	川津町、有吉遺跡、	<b>韓田遺跡№8.21.28</b>

## 表 2 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	2 2	3 3	白峰群に一致
	6	9	法印谷群に一致
	5	8	国分寺群に一致
	4	6	蓮光寺群に一致
	3	5	金山東群に一致
	2	3	和泉群に一致
	4	6	不明 (どこの原石群にも属さない)

# 表3 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の 分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	12個	1 7 %	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	1 3	" , " , "
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	3 9	5 4	不明(どこの原石群にも属さない)

# 表 4 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の 分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩层第一群	1	5	n = n = n
	1 0	4 8	不明(どこの原石群にも属さない)

## 表 5 久田原遺跡出土サヌカイト製石針の元素比分析結果

分析番号				π	· 3	Ę Ŕ	比			
刀机併与	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
88565	0.449	0.224	0.089	4.680	0.306	0.055	1.233	0.032	0.025	0.190
JG-1	1.273	0.277	0.057	2.674	0.761	0.195	0.783	0.078	0.031	0.405

JG-1:標準試料-Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and

# 表 6 久田原遺跡出土サヌカイト製石針の原材産地分析結果

分析番号	出土区	住居址	原石産地(確率)	判定	備考
88565	3 8 08 D c	竪穴住居15	金山東(77%),金山西(1%)	金山東	S 285

注意: 近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っていますが、判定基準の異なる研究方法(上器様式の基準も研究方法で異なるように)にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係(相互チェックなし)ありません。本研究結果に連続させるには本研究で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察をする必要があります。

# 5 久田原遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター大澤正己

## 概要

久田原遺跡出土の弥生時代中期前半に属する鋳造鉄斧破片、奈良時代(8世紀代)の製鉄関連遺物、中世の鍛冶関連遺物などを調査して、次の点が明らかになった。

- (1) 弥生時代中期前半の遺物は鋳造鉄斧破片である。銹化した鉄片であったが、組織痕跡に塊状 黒鉛と層状パーライトが検出できた。この組織をもつ鉄片は、中国東北部方面で製作された銑鉄の硬 くて脆い欠点が、焼きなまし脱炭で軟質鉄に変換された黒心可鍛鋳鉄製品に分類される。ただし、該 品はフェライト(Ferrite: α鉄もしくは純鉄)化までの脱炭の進展がなく、砥石で研磨できる柔軟 性を欠き、再生鉄器化の点は不明瞭である。
- (2) 奈良時代は製鉄関連遺物の調査である。製鉄は低チタン砂鉄を原料とする低温還元直接製鋼法の採用となる。製錬滓の鉱物組成はウルボスピネル(Ulvöspinel:2FeO・TiO₂)を晶出し、生成鉄は高炭素系(過共析:>0.77%C、亜共晶組成白鋳鉄:<4.23%C)が残されていた。また、鉄塊系遺物の一部には急速水冷が想定できるマルテンサイト(麻の葉模様の針状組織)の析出があった。水鋼的な鉧塊の破砕を前提する操業であろう。
- (3) 中世の鍛冶炉 5 遺構では、荒鉄(製錬生成鉄で、表皮スラグや巻込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄:鉄塊系遺物)の不純物除去を目的とした精錬鍛冶から沸し鍛接・素延べなど製品製作までの鍛冶一貫作業が確認できた。更に、鍛冶炉 7 遺構側では、砂鉄系廃鉄器を鍛冶原料とした鍛冶が想定される。
- (4) 同じ中世堀立柱をもつ鍛冶工房においても、鍛冶炉5・7に準じた鍛冶作業である。精錬鍛冶では荒鉄と廃鉄器の両方を処理し、これらの素材からの鉄器製作が推定された。なお、当遺構からは中世に比定される製錬滓の混入があって、奈良時代の(8C代)の製鉄炉出土滓に近似した組成の確認がとれた。古代・中世と地場砂鉄からの製鉄操業が推測される。

### 1 いきさつ

久田原遺跡は岡山県苫田郡奥津町に所在する。苫田ダム建設に伴う発掘調査で検出された大集落遺跡である。発掘調査は平成8年度より平成14年度まで継続された。そのなかで下記年度の鉄関連遺物について金属学的調査を行った分を報告する。

- (1) 平成10年度調査(旧B3区)・・・奈良時代(8C代) 製鉄関連遺物 10点
- (2) 平成11年度調査(旧B3区)・・・中世鍛冶炉5・7の鍛冶関連遺物 24点
- (3) 平成12年度調査(旧C2区)・・・中世鍛冶工房1出土鍛冶関連遺物 26点
- (4) 平成14年度調査(旧B2区)・・・弥生時代中期前半竪穴住居15出土鋳造鉄斧破片 1点

# 2 調査方法

### 2-1. 供試材

Table. 1 のその 1 . その 2 に示す。調査が 4 年度(平成10年~12年度、14年度)にわたる製鉄・鍛冶関連遺物や鉄器類で合計61点である。

#### 2-2. 調査項目

### (1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

## (2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投 影機の10倍もしくは20倍のいずれかで撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い 範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

#### (3) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3 $\mu$ と1 $\mu$ で仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクラル(ピクリン酸飽和アルコール液)で、フェライト結晶粒は5%ナイタル(硝酸アルコール液)で、腐食(Etching)している。

## (4) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester )を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

## (5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性 X 線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料と X 線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

### (6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S)、:燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム( $AI_2O_3$ )、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム( $K_2O$ )、酸化ナトリウム( $Na_2O$ )、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン ( $TiO_2$ )、酸化クロム( $Cr_2O_3$ )、五酸化燐( $P_2O_5$ )、バナジウム(V)、銅(Cu)、:ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法:誘導結合プラズマ発光分光分析。

#### (7) 耐火度

耐火度の加熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態度の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当たり $10^{\circ}$ の速度で $1000^{\circ}$ Cまで温度上昇させ、それ以降は $4^{\circ}$ Cに昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

# 3 調査結果

### 3-1. 平成10年度調査 製鉄炉1関連遺物

## (1) KTH-1: 砂鉄

炉床上に堆積した砂鉄が採取された。送付された粉末状遺物は、 $0.5 \, \mathrm{mm}$  フルイにかけて選別後に水洗・乾燥し、被熱土砂の混入が酷いので、更にこれらを磁選した。供試材は無光沢で黄褐色~茶褐色の被熱砂鉄である。Photo. 1 に各砂鉄粒子の顕微鏡組織を示す。砂鉄粒子は、 $0.1 \, \mathrm{mm}$  以下の微細粒から $0.45 \, \mathrm{mm}$  までの変動をもつ。各粒子は粒内の脈石は少なく、高品位傾向にある。ただし、各粒子は被熱痕跡が強く現われて、粒内に黒色斑点模様がきつく点在する。完全な生砂鉄はなくて、見かけ状の生砂鉄らしきものは $(0.1 \, \mathrm{mm})$  の粒子群であろう。この白色粒子が磁鉄鉱粒子のマグネタイト(Magnetite: $(0.1 \, \mathrm{mm})$  であり、チタン磁鉄鉱( $(0.1 \, \mathrm{mm})$  が格子組織 $(0.1 \, \mathrm{mm})$  である。更に、該品らが炉内出土品であることは $(0.1 \, \mathrm{mm})$  の結晶が認められる。

Table. 2 その1に化学組成を示す。全鉄分(Total Fe)53.54%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.26%、酸化第1鉄(FeO)23.06%、酸化第2鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)50.55%の割合であった。当砂鉄の酸化度はFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>/FeO $\stackrel{.}{=}$ 2.2と小さく還元性砂鉄のようである。性状については被熱履歴であってあまり重要視はできまい。ガラス質成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は15.14%と高く、やはり酸化土砂の混入は避けがたい面をもつ。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)は5.46%,バナジウム(V)0.20%は酸性砂鉄と塩基性砂鉄の境界レベルである。酸化マンガン(MnO)は0.79%と高め傾向にあるが、他の随伴微量元素は低めであって酸化クロム( $Cr_2O_3$ )0.04%、硫黄(S)0.02%、五酸化燐( $P_2o_3$ )0.38%、銅(Cu)0.006%であった。

久田原方面の過去の鉄滓調査からみた推定砂鉄から大きく外れるものではない。

### (2) KTH-2: 砂鉄焼結塊

平面は不定形の砂鉄焼結塊で23g強の小塊である。製鉄炉の炉壁で付着形成された半還元状態の砂鉄が垂下流動性を僅かに留める。上端が破面で、一部に滓化が進むが砂鉄粒子の集合化した塊は、顆粒状肌が顕著である。色調は地が暗灰色で破面に光沢質を残し、茶褐色の酸化土砂が付着する。

Photo.2の①~⑨に顕微鏡組織を示す。いずれの視野も生砂鉄はなくて、Titano・Magnetite中のMagーIlmeniteの溶離組織が被熱により強調される。また砂鉄粒子の周辺は滓化が進み、ウルボスピネル(Ulvöspinel:2FeO・TiO<sub>2</sub>)やファイヤライト(Fayalite:2FeO・SiO<sub>2</sub>)の結晶が晶出始めている。半還元砂鉄粒子の様相に終始する。

# (3) KTH-3: 炉壁片

平面が不整台形状の製鉄炉の炉壁片である。内面は被熱により溶融ガラス化し、1mm径程度の気泡が多く、色調は灰色から暗灰色を呈する。炉壁胎土は、橙褐色で、1~10mm前後の砂や石粒と共に、短く切った大量のスサが混入される。炉壁最大厚みは36mmを測る。Phote. 3の①~③に炉壁内面の溶融ガラス組織を示す。粘土素地を構成する粘土鉱物セリサイト(Cerisite)は加熱変化から非晶質化し、石英、長石類は高温クラック発生までは達していないが、やや溶融気味である。②③は局部的な組織で溶融ガラス中に微細なファイヤライトとマグネタイトの晶出があった。

Table. 2 に胎土の化学組成を示す。供試材は強熱減量のIgLossは、3.24%と熱影響を受けて結晶構造水がかなり飛散した熱経歴粘土の分析である。鉄分( $Fe_2O_3$ )の4.36%は、特別高値でなくて軟化性は適度に保ち、酸化アルミニュウム( $Al_2O_3$ )の17.41%は低めで塩基性成分(CaO+MgO)の1.77%の高めと両者相俟って耐火性は高くは望めぬ成分系である。粘土中には砂鉄の混入は僅かにみられ、二酸化チタン( $TiO_2$ )0.76%、バナジウム(V)0.01%であった。鉄を劣化させる硫黄(S)0.01%、五酸化燐( $P_2O_5$ )0.16%など高くはない。炉壁粘土に要求される荷重なしに自重だけで軟化し崩れるところの耐火度は1260であった。奥津町方面の耐火度実績としてはやや低めである。例えば過去に報告してある高下休場遺跡出土炉壁耐火度は1510で 端的 城峪城跡のものは $1420\sim1500$ での値がある。

### (4) KTH-4: 炉内滓

平面は不整菱形もしくは台形状の炉底塊の破片が想定される。側面は弯曲する一面を残して、他は全部が破面で、形状が捉え難い。全体的に緻密な滓で、表面側に1mm径の気泡が密に発生するが、なかには5mm大も僅かに点在する。破面は光沢質、色調は地の色が黒灰色で表面に黄褐色から茶褐色の酸化土砂を付着する。

Photo.3の④に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は大きく成長した淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルと微小化した淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトで構成される。砂鉄製錬滓の晶癖である。巨大結晶の中央に硬度圧痕を示す。 硬度値は693Hvであってウルボスピネルに同定される。(\*\*3)

Table. 2 に化学組成を示す。鉄分は低めでガラス分の多い特徴を持つ滓である。全鉄分は31.69%で、このうちに金属鉄(Metallic Fe)0.20%、酸化第 1 鉄(FeO)31.61%、酸化第 2 鉄(Fe₂O₃)9.89%の割合であった。ガラス分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は41.87%と多く、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)を6.52%と高値に含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)7.68%、バナジウム(V)0.14%は酸化砂鉄側に近寄った製錬滓の成分である。酸化マンガン(MnO)の0.96%の高値と銅(Cu)の0.003%の低値は砂鉄製錬滓を裏付ける。

### (5) KTH-5: 炉内滓

平面は不整五角形を呈する炉内滓の破片である。表面には垂下痕を明瞭に残し、強い光沢を発す。 全面の色調は黒灰色で緻密性に富み、重量感のある塊である。2ヶ所に砂鉄付着が残る。製鉄炉の送 風孔近傍の高還元空間で生成された強磁性滓のマグネタイト系遺物らしくもある。

顕微鏡組織をPhoto.3の⑤~⑦に示す。鉱物組成は白色多角形結晶のウルボスピネルもしくはマグネタイト結晶が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。⑦に硬度圧痕を示して硬度値は 561Hvと マグネタイトを表明する。いずれにしろ、製鉄炉内の生成物に分類される。

#### (6) KTH-6: 炉底塊

平面が不整五角形を呈する扁平な炉底塊の破片である。側面の4面は破面で、残る一面が生きた面を残す。上面は流動状の凹凸が顕著に刻まれて、黒灰色の緻密な滓である。裏面(下面)の形状は、炉底が浅い皿状で幅狭の小型製鉄炉が想定される。2~3mmの小礫が全面に付着して茶褐色から黄褐色の酸化土砂に覆われる。

顕微鏡組織をPhoto. 4 の①~③に示す。鉱物組成は巨大結晶のウルボスピネルとファイヤライトで構成されて、砂鉄製錬滓の晶癖を明瞭に表す。前述したKTH-4に準じた組織であった。

化学組成をTable. 2 に示す。化学組成も KTH-4に近似した値である。全鉄分31.69%、ガラス質成分 43.80%、二酸化チタン 7.72%、バナジウム(V) 0.18%、酸化マンガン(MnO) 0.83%などである。

# (7) KTH-7: 鉄塊系遺物

平面は片窄まりの丸みを帯びて全面が黄褐色酸化土砂に覆われた小型 (33 g) の鉄塊系遺物である。この鉄塊系遺物は砂鉄原料で生成された滓まじりの一次鉄塊で、鍛冶や鋳造用の素材となる。該品は現状の観察からは、地の部分が見えなくて外観特徴は読みとれない。 1 ヶ所に幅 5 ㎜程度の木炭が付着する。雰囲気として鋳鉄系の予測がつく。Photo. 4 の④~⑧に銹化鉄に残された金属鉄組織の痕跡を示す。④⑤⑥は表層の遺存組織である。針状セメンタイト痕跡と地に一部パーライト痕跡が認められて過共析鋼(>0.77% C)組織を残す。また、⑤⑥は鉄塊内部組織で、白色板状結晶の初晶セメンタイトと地はオーステナイト(常温ではパーライト)とセメンタイトの共晶のレデブライト (Ledebulite)の痕跡で、共晶組成の白鋳鉄(4.23% C)レベルであった。表層側は脱炭現象が現われているが、銑鉄塊とみてよかろう。

### (8) KTH-8: 鉄塊系遺物

平面は不定形で、黄褐色酸化土砂に覆われ、基地は不明瞭ながら亀裂を走らせて、内部に金属鉄を 残す20gと小型の鉄塊系遺物である。僅かに一端を覗かせる基地は黒褐色を呈し、表面の数ヶ所には 木炭片を付着する。該品もやはり流動傾向の丸味を帯びて高炭素系鉄塊が読みとれた。

Photo. 7 に マクロ組織を示す。断面形状の外縁が銹化鉄で眼鏡状を呈し、両輪の継ぎ部分に金属 鉄が遺存する。この部分は麻の葉状の針状組織が表われてマルテンサイトの析出である。製鉄炉で生 成した鉄塊は、水中冷却された可能性を示唆する水冷組織である。マクロ組織からは詳細な組織が把 握されないので Photo. 5 の 顕微鏡組織に移る。①は鉄中の非金属介在物を示す。中央の 5  $\mu$ 以下 の微小な黄褐色異物である。これは硫化鉄(FeS)であって、Photo. 8 の EPMA調査結果をみてみよう。二次電子像(SE)に15の番号をつけた個所は、特性 X 線像の硫黄(S)に白色輝点が集中し、定量分析値は90% FeO -37% S組成で硫化鉄(FeS)が同定される。この硫化鉄の上下には不明瞭ながら粒状異物が点在している。特性 X 線像の燐(P)をみると白色輝点が上下に伸びており、16の番号の定量分析値は 126% FeO(100% Fe) -18.8%  $P_2$   $O_5$  組成が得られた。ここには  $Fe-Fe_3$   $C-Fe_5$  PO 三元系共晶のステダイト(Steadite)が存在する。該品は僅かに燐(P)を含む銑鉄であった。

# (9) KTH-9: 黒鉛化木炭

外観が木質であるのに磁着する特殊な遺物である。このような鉄が木炭に置換したものを黒鉛化木炭と呼ぶ。製鉄遺跡や鋳造遺跡で多く目につく遺物であって、高温・強還元雰囲気下での派生物とも言われているが、その実態は不明瞭である。供試材は、樹皮側に鉄が置換し、これに滓が付着する。しかし、当品も黄褐色酸化土砂が全体を厚く覆っていて地の状態は判り難い。色調は黒灰色で磁着するが金属鉄は遺存しない。木炭の痕跡は、樹皮内面に残る縦方向に走る木目(繊維・導管模様)から判別できる。

顕微鏡組織をPhote. 6 の①~⑤に示す。①は金属鉄が遣存しなかったので銹化鉄を撮影した。組織はゲーサイト(Goethite: $\alpha$  - FeO・OH)化し、それも組織痕跡も失して鉄の素性(炭素量の高低)も判然としない。②~⑤は鉄(置換鉄)に付着した滓である。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイト(④の硬度値496Hv)と、多角形結晶のマグネタイト(⑤の硬度値533Hv)から構成される。ヴスタイトの晶出は酸化雰囲気であろうか。少々気がかりな鉱物相であった。

## (10) KTH-10: 炉外流出滓

平面は不定形状で上面が流動状滑らか肌の炉外流出滓である。側面の1面のみに破面をもつ端部破片。最大幅は約10cmを測る。下面は凹凸は少なく2~20cm程度の礫を付着する。破面は気孔少なく緻密・光沢質で重量感をもつ滓である。該品も2次的に茶褐色酸化土砂に覆われる。

顕微鏡組織をPhoto. 6 の⑥~⑧に示す。鉱物組成はウルボスピネルとファイヤライトの組合わせで砂鉄製錬滓に分類される。ウルボスピネル結晶の硬度値は 682Hvを呈した。次に化学組成をTable. 2 に示す。 成分傾向は、前述してきたKTH-4, 6に準じたものである。すなわち、全鉄分は39.92%、ガラス質成分は若干少なくて35.68%,砂鉄特有成分の二酸化チタンは 7.71%, バナジウム (V) 0.17%,酸化マンガン (MnO) 1.02%などであった。この組成は砂鉄製錬滓に分類される。

### 小結

8世紀代の製鉄遺構から出土した製鉄関連遺物は、いずれも炉床上に堆積していた砂鉄成分に連なる組成であった。まず砂鉄組成は、中チタン含有の酸性砂鉄(真砂)に分類される。鉄滓の炉内滓と炉外流出滓は共に鉱物組成がウルボスピネルを晶出し、箱型炉の操業を裏付ける。堅形炉でみかける高温操業での鉱物相、イルミナイト、シュードブルーカイトなどの晶出はない。ただし、生成された鉄塊系遺物は、過共析(>0.77%C)から亜共晶組成(<4.23%C)白鋳鉄と、高炭素系が遺存していた。この高炭素系鉄塊は、偶発的な産物なのか、目標産物なのか、出来あい産物なのか、気になると

ころである。注目しておきたい。

## 3-2. 平成11年度調査 鍛冶炉5出土遺物

## (1) KTH-11: 鍛冶滓

平面が不整半円形状の鍛冶滓である。側面一面が破面で、上下面ともに全面木炭痕により凹凸を刻む。地の色調は黒褐色で、破面には1~3㎜径の気孔が散在する。Photo. 9の①~③に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は白色粒状の ウスタイト と、淡灰色長柱状結晶のファイヤライトで構成される。③は白色粒状結晶の硬度測定の圧痕であって、硬度値は 450Hv であった。文献硬度値の450~500Hv の範囲内にありヴスタイトに同定される。該品は沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓に分類される。

Table. 2 に化学組成を示す。製錬滓に比べると鉄分が多くてガラス質成分や脈石成分(Ti,V,Mn)が低減されるのが鍛冶滓成分(沸し鍛冶滓)の特徴である。全鉄分 (Total Fe)が56.72%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.14%、酸化第 1 鉄 (FeO) 60.70%,酸化第 2 鉄 (Fe2O3) 13.44%の割合である。ガラス質成分(SiO2+Al2O3+CaO+MgO+K2O+Na2O)は21.19%で、このうちに塩基性成分(CaO+MgO) 1.22%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO2)0.96%、バナジウム(V) 0.038%と低下する。酸化マンガン(MnO)は0.17%と こちらも少なくなる。沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓とみてよい。

## (2) KTH-12: 含鉄椀形鍛冶滓

鍛冶炉の炉底で堆積形成された滓である。木炭の噛み込みや処理中に小鉄塊が落下して含鉄となる場合もありうる。該品の平面は、不整五角形を呈する椀形鍛冶滓の破片である。側面の3面と上面の一部が破面。上面の自然面には細かい木炭痕を刻む。下面は滑らかな炉床との反応痕をもつ。側面の破面に1箇所の銹膨れがあって落下鉄の存在を知らせる。地の色調は黒褐色で破面は光沢を放つ。

Photo. 9 の④~⑧に顕微鏡組織を示す。④~⑥の右側に含鉄部分の銹化鉄組織が見られる。針状セメンタイトと基地はパーライトで構成された過共析鋼(>0.77%C)の痕跡が認められた。滓の鉱物組成はヴスタイトと、その粒内に微小晶出物(Fe—Ti化合物)を内蔵するところに特徴がある。製錬鉄塊系遺物の不純物除去を行った際の排出物である精錬鍛冶滓に分類される。

Table.2に化学組成を示す。前述KTH-11に近似した成分系である。全鉄分は57.43%に対してガラス質成分は20.32%である。砂鉄特有成分の二酸化チタンは若干高めでヴスタイト粒内晶出物のチタン分が影響して 1.68%、バナジュウム 0.088% であった。酸化マンガン(MnO)は 0.18% を含有する。脈石成分(Ti、V、Mn)やや高めで、不純物除去で排出された精錬鍛冶滓とみるべきであろう。

## (3) KTH-13:含鉄椀形鍛冶滓

平面は本来楕円形状になるものが、片端面を欠損した椀形鍛冶滓である。最大厚みが17㎜程度の扁平な滓で上面側に1㎜径程度の細かい気孔が散在するが、これも全体に黄褐色の酸化土砂に覆われる。酸化土砂中には銀灰色の鍛造剥片を付着する。上面側に亀裂が走り金属鉄の残存が予測される。Photo. 10 の①~⑨に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は②③にみられる微小ヴスタイトと長柱状ファイヤライトで構成される。金属鉄が遺存して、④⑤は亜共晶組成の白鋳鉄(<4.23%C)と⑥⑦にみられるパーライト基地に白色板状セメンタイトを析出する過共析鋼(>0.77%)である。⑧はパーライト基地の硬度圧痕で273Hv、⑨は板状セメンタイトの774Hvであった。組織に対応した値である。該

品は高炭素鋼系の落下鉄を内蔵するが、沸し鍛接の後工程に属する素延べ作業での排出滓の可能性をもつ。また、この滓を覆った酸化土砂には、①に示す赤熱鉄素材から派生した鍛造剥片が付着する。 鍛打作業を証明する微細遺物である。

# (4) KTH-14:含鉄椀形鍛冶滓

平面形状は、もとは楕円形状が長辺2辺が一部欠損したために、やや不定形になっている。該品も 黄褐色酸化土砂に覆われて地の観察を困難にしているが、黒灰色の緻密滓である。当鉄滓も亀裂が走り、金属鉄の残存が予測された。Photo. 11 の①~⑨に顕微鏡組織を示す。①は酸化上砂に付着した 鍛造剥片である。赤熱鉄素材の表面から鍛打作業で剥落した酸化膜であり、2次的な付着物ではあるが鍛錬鍛冶を証明する試料になりうる。②は含鉄の表皮スラグである。左側の多角形結晶はウルボス ピネルかマグネタイトである。③は鉄中の非金属介在物の硫化鉄(FeS)を示す。淡黄褐色の小型介在物で最硬鋼(0.8~1.2%C)から銑鉄(2.1~6.7%C)で検出される例が多い。

Photo. 33にこの硫化鉄の E P M A 調査結果を示している。反射電子像(C O M P)に 2 の番号をつけた介在物の定量分析値は、70% FeO -38%S 組成で硫化鉄が同定される。更に注目しておきたいのは、当硫化鉄は、4.7% TiO $_2$  -1.3% MnO の固溶があって、砂鉄由来の証拠を抱えていた。なお、この種の硫化鉄は Fe - Fe $_3$  C - Fe $_3$  P の三元系共晶のステダイトが存在する例が多いので C O M P に 1 の番号をつけた個所を分析したが燐(P)の検出はなかった。132% FeO(100% Fe) -0.7% P $_2$  O $_5$  の値である。

次に④~⑨に金属鉄のナイタル腐食(Etching)で表われた組織を示す。④は白色針状フェライト結晶が極く少量晶出するが共析鋼に近い組織で、⑤右側は全面パーライトの共析鋼である。この領域の硬度値は⑦でみられるように225Hv、⑥はパーライト基地に白色網目状の初析セメンタイト析出がある過共析鋼(>0.77%C)で、ここでのパーライト基地の硬度値は⑧の235Hvであった。殆んど前述パーライト領域と差異はない。⑨は初析セメンタイトの成長しかかったところの硬度圧痕である。硬度値は硬化して351Hvであった。広いセメンタイトであれば700Hv以上を指す筈であるが、被測定面の面積不足から誤差を生じている。いずれにしてもこの椀形鍛冶滓での鍛冶作業は、高炭素鋼(0.8%前後)素材の充当が想定された。刃金加工であろうか。

# (5) KTH-15: 鉄片

平面は銹膨れから不整五角形を呈するが、本来は長方形の条材(棒状)の破片であろう。厚みは 7 mmを測る。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われて、側面は亀裂が層状に走る。鍛打工程を経た鉄素材 (条材)の切れ片であろうか。

Photo. 12の①~⑦に顕微鏡組織を示す。①~③は鉄中の非金属介在物である。①は白色粒状のヴスタイト、淡灰色短柱状結晶はファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグなどから構成される。また、②③は 点列状もしくは不定形の暗黒色ガラス質スラグである。④⑤は金属鉄をナイタル腐食して表われた亜共析鋼(<0.77% C)から共析鋼(0.77% C)組織である。炭素量は0.2%程度から0.8%前後のバラツキを持つ半製品であろう。⑥はフェライト( $\alpha$ 鉄もしくは純鉄)部分の硬度測定の圧痕を示す。値は 111Hv 、⑦は共析域の硬度であって 210Hv を呈した。フェライトに対してパーライト部の硬質化の相対比較が出来るであろう。

Photo. 34 の上段に非金属介在物の E P M A 調査結果を示す。反射電子像(C O M P)に3の番号のつく暗黒色ガラス質スラグは、 $64\%\text{SiO}_2-16\%\text{Al}_2\text{O}_3-2.6\%\text{CaO}-1.0\%\text{MgO}-3.7\%\text{K}_2\text{O}組成の珪酸塩である。これには8%FeO-2.1%TiO}_2の固溶がある。鉄分は微細なファイヤライト、チタン(Ti)分は砂鉄原料を裏付ける成分である。次に右側に同じく3層の介在物の定量分析結果を示す。反射電子像(C O M P)に4の番号のついた淡灰色短柱状介在物は、<math>69\%\text{FeO}-31\%\text{SiO}_2$ 組成でファイヤライト( $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ )が同定される。

5の番号は、白色粒状結晶で98%FeO-1.4%TiO $_2$ でヴスタイト(FeO)、6の番号は暗黒色ガラスで42%SiO $_2$ +18%Al $_2$ O $_3$ +4.3%CaO+6.6%K $_2$ O+2.6%Na $_2$ O組成は珪酸塩である。こちらには25%FeOの固溶がある。顕微鏡観察で判定した鉱物相の検定ができた訳である。

### (6) KTH-16: 粒城滓 (FM)

粒状滓及び後述する鍛造剥片は、赤熱鉄素材を鍛打した時点で表面から飛散する微細遺物(酸化膜の一種)を指す。この微細遺物(通常5m以下~0.05mの検出に当っては、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。そのため、鍛冶炉周辺の床面の土砂を水洗することにより回収される。今回の供試材も層位別に採り上げられた。そのうちの5層から4点:1~4、9層から4点:5~8の8点を選出している。各4点の繰返しは直径の大きなものから小さなものへと変化させている。

#### KTH-16-1:2.9mm径

Photo. 13 の上段に外観写真を示す。やや歪な球状遺物で複数の小さな突起を持つ。色調は無光沢の黒褐色で表面に小さな気孔を発する。顕微鏡組織は①~③にみられるように、内部は大きく空洞化し、鉱物相は白色粒状結晶のヴスタイトと、その粒間を淡灰色のファイヤライトが埋める。鍛打作業で派生した粒状滓に認定できる。

## KTH-16-2: 粒状滓 2.1~2.5mm径

表面に僅かの凹凸をもつ歪な球状遺物である。色調は無光沢黒褐色。外観写真をPhoto. 13の3段目に示す。鉱物相は④にみられる白色粒状ヴスタイトとファイヤライトである。内部に空洞化はないが、粒状滓に分類できる。

## KTH-16-3: 粒状滓 1.4~1.6mm径

やや歪な球状遺物であるが、該品は光沢質黒褐色を呈する。外観写真をPhote. 13の4段目に示す。鉱物相は⑤から⑦にみられるように、内部は大きく空洞化し、鉱物相は表層側が白色多角形結晶のマグネタイト、その内側を白色粒状結晶のヴスタイトが占める。粒状滓に判定される。

### KTH-16-4:粒状滓 1.0mm径

外観写真をPhoto. 14の最上段に示す。端正な球状を呈する遺物で、表面に小さな気孔と凹凸を残す。色調は無光沢黒褐色を呈す。鉱物相は①にみられるように内部を大きく空洞化した外周部に白色多角形結晶のマグネタイトが埋める。粒状滓に分類される。

### KTH-16-5:4.1mm径

やや歪な球状遺物で、複数の小さな突起を発し、無光沢質で黒褐色を呈している。

Photo. 14の2段目に外観写真を示す。鉱物相は②にみられるように白色粒状結晶のヴスタイトが凝集気味に晶出する。内部に空洞化はないが0.12~0.15mm径気孔の散在が特徴的である。粒状滓に分類される。

### KTH-16-6:2.2mm径

表面は僅かに凹凸をもち、小気孔を発するやや歪な球状遺物である。無光沢質の黒褐色を呈する。 外観写真をPhoto. 14の3段目に示す。③が鉱物相である。微小白色粒状ヴスタイトの晶出があり、 0.07~0.25mm径の気孔が点在する。粒状滓に分類される。

#### KTH-16-7:1.8mm径

外観写真をPhoto. 14の4段目に示す。やや歪な球状遺物で表面に僅かの凹凸を刻む。色調は無光 沢質の黒褐色を呈する。鉱物相を④に示す。本来の白色鉱物相は風化されてヴスタイトは黒ずみ、多 角形結晶のマグネタイト側が白色を留める。これも粒状滓に判定される。

#### KTH-16-8:1.1mm径

端正な球状で、滑らか肌の光沢質黒灰色遺物である。Photo. 14の5段目に示す。0.17㎜径の気孔を発し、鉱物相の大部分が風化侵食されて黒ずみ、マグネタイト部分を白色部に留めた粒状滓である。

#### (7) KTH-17: 鍛造剥片 (注5)

鍛造剥片の試料選別に当っては、粒状滓と同じように 5 層から  $1\sim4$  の 4 点、 9 層からも  $5\sim8$  の 4 点で、合計 8 点を準備した。なお、この 4 点の繰返しは厚みの大きいものから小さなものへと変化させた。

## KTH-17-1: 擬似鍛造剥片(鉄滓の皮か) 8.1×5.9×0.8mm

0.8mmと厚手で平坦性を保つ剥片を選んだ。表面は光沢質の暗灰色で、僅かに凹凸を持つ。裏面は無光沢の灰褐色で細かい気孔を多発する。外観写真と顕微鏡組織をPhoto. 15の最上段と①~③に示す。該品は①の 被膜層の裏面側に大きな気孔が発生し、通常の鍛造剥片をもつ平坦性を欠く傾向が強い。 最表層に白色微厚のヘマタイト層をもつが中間層がなく、あとは白色粒状ヴスタイトの凝集組織である。鍛造剥片ではなくて鍛冶滓の皮が想定される。

### KTH-17-2: 鍛造剥片 8.1×5.8×0.3mm

平坦で厚みも通常みかける0.3mm程度の剥片である。表面は光沢質青灰色で、裏面は無光沢質の茶褐色を呈する。外観写真をPhoto. 15の3段目に示す。また、被膜構成は④の如く3層分離型の典型的な鍛造剥片である。外層へマタイト(Hematite: $Fe_2O_3$ )は白く微厚で存在し、中間層のマグネタイト(Magnetite: $Fe_3O_4$ )は黄変して健全で、内層ヴスタイト(Wüstite:FeO)は非晶質であった。鍛打作業の後半段階、すなわち、鉄器製作の素延べ・火造り工程からの派生物が想定される。

KTH-17-3:鍛造剥片 4.7×3.5×0.3mm

前述したKTH-17-2剥片と同系で破片としての大きさに差異があるものの、外観から被膜構造は 殆んど差異のないものであった。Photo. 15の4段目に外観写真を、⑤に鉱物相を示す。

KTH-17-4: 鍛造剥片 3.4×2.9×0.2mm

僅かに湾曲気味の薄手 (0.2㎜) の鍛造剥片である。表面は光沢質青灰色で、裏面は無光沢の青灰色を呈する。顕微鏡組織をPhoto.15の⑥に示す。被膜構成は3層分離型で前述したKTH−17−2、KTH−17−3などに準ずるものであった。

KTH-17-5: 擬似鍛造剥片(鉄滓皮か) 7.0×5.8×0.6mm

平坦ではあるが0.6mmと厚手の剥片である。表面は無光沢の黒灰色で、裏面の荒れが著しい無光沢質の鉄滓皮である。裏面に気孔が多いのは鍛造剥片とは異なる。Photo. 16の上段に外観写真を、また、①~③に顕微鏡組織を示す。外層は白色針状へマタイトをもち、内層はヴスタイトの凝集組織を呈する。①に示した多孔質と不均等厚みの鍛造剥片は存在しない。該品は鍛冶滓の皮である。

KTH-17-6: 擬似鍛造剥片 6.0×4.6×0.5mm

該品は前述KTH-17-5にほぼ準じた表面外観を呈している。

Photo. 16の3段目に外観写真を、また顕微鏡組織を④に示す。被膜全体がヴスタイトの凝集組織で 占められる。鍛造剥片ではなくて鍛冶滓の皮であろう。

KTH-17-7:鍛造剥片 5.7×5.0×0.25mm

平坦性を保ち、0.25mmと薄手で表面は光沢質、裏面は無光沢の黒灰色から青灰色を呈する剥片である。Photo. 16の上から4段目に外観写真を、⑤に顕微鏡組織を示す。3層分離型の鉱物相を持ち、外層へマタイト、中間層マグネタイト、内層ヴスタイトの非晶質が観察された。鍛打作業の後半段階の派生物と認定される。

KTH-17-8: 鍛造剥片 3.7×2.9×0.2mm

平坦で0.2mmと薄手の剥片である。表裏共に光沢質の黒灰色を呈する。Photo. 16の5段目に外観写真を、⑥に顕微鏡組織を示す。被膜構成は、外層白色微厚のヘマタイト、中間層のマグネタイト、内層非晶質ヴスタイトが識別できる。鍛造剥片に認定できる。

### (8) KTH-18: 微細鍛冶関連遺物 (9層出土)

被熱土砂、小さく砕けた鍛造剥片、天然砂鉄などの混在する微細遺物である。粒状滓や鍛造剥片を選び出した残査物を供試材とした。Photo. 17に外観写真と顕微鏡組織を示す。①~③の中央に0.05~0.16mm径の粒状滓、他は鍛造剥片などを提示した。⑤は外層へマタイトは白く明瞭で、中間層のマグネタイトも判別でき、内層は凝集ヴスタイトが確認できる。また、⑨の内層ヴスタイトは非晶質といった微厚剥片(0.07~0.10mm)の存在が確認できた。

## 3-3. 平成11年度調査 鍛冶炉7出土遺物

## (1) KTH-19: 椀形鍛冶滓

側面の2面が破面となるが、小型( $7.1\,\mathrm{g}$ )で偏平の椀形鍛冶滓である。表層はガラス質で上面には $1\sim2\,\mathrm{m}$ 径の気孔を散在させ、下面は荒れの少ない肌をもち、僅かに微細気孔を点在させる。顕微鏡組織をPhoto.  $180\,\mathrm{I}$ ~⑤に示す。鉱物組成は白色粒状ヴスタイトの凝集組織が主体をなすが、③の右側のガラス質基地に微量ヴスタイトを晶出した表層、裏面のやはりガラス質とファイヤライトを晶出した鉱物相などは、外観観察のガラス質に繋がる.廃鉄器(銑鉄)の下げ滓に想定できる晶癖である。なお、白色粒状結晶の硬度値は⑤にみられるように $462\mathrm{Hy}$ でヴスタイトに同定される。

## (2) KTH-20: 鍛冶滓

平面が楕円形まで到達しきっていない不定形小型(14.5g)の椀形鍛冶滓の完成品である。上面は細かい木炭痕が刻まれているが左程荒れはなく、下面は周縁部に木炭痕を弱く残す。滓の色調は黒灰色であった。Photo. 18の⑥~⑧に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は白色粒状ヴスタイトが凝集気味で、その粒間をファイヤライトが埋める。⑧は硬度圧痕であり、値は562Hvと硬質で、ヴスタイトでなくてマグネタイトの領域を呈した。硬度測定対象の結晶は風化されて色むらを発生し、更に圧痕には亀裂が発生していて硬度値には一抹の不安を感じる。

Table. 2 に化学組成を示す. 鉄分は多くて脈石成分(Ti、V、Mn)の低減された成分系を呈する。全鉄分は60.86%と多くて酸化第 1 鉄が39.04%、酸化第 2 鉄の43.49%の割合である。因に $FeO/Fe_2O_3$ の比をとると0.9となる。鍛冶炉 5 のKTH-11、12の鍛冶滓が4.5、3.9に比べて鍛冶炉内の酸化雰囲気が大きく異なっている。酸化第 2 鉄の増量は銹化鉄含みで大きくなる傾向をもつので要注意であるが該品の成分系は気がかりである。ガラス質成分は思った程多くなくて14.66%で、このうちに塩基性成分(Cao+MgO)は0.64%とこちらも少ない。更に砂鉄特有成分の二酸化チタン0.38%、バナジウム0.014%など低下して、酸化マンガンも0.02%と一桁落ちる。鍛冶炉 5 の椀形鍛冶滓とは脈石成分も大きく異なる特徴を持つ。廃鉄器原料か、鍛冶炉 5 の後続作業なのか注目される。

## (3) KTH-21: 不明鉄製品(棒状)

断面が長方形を呈し、現存長さ5.9cmの棒状鉄製品である。基部側は幅広で先端へ向けて先細りして平面は隅丸状に成形される。一見すると鏨状にも感じられるが刃部を持たず用途不明である。表面全体が赤褐色の酸化土砂に覆われ、亀裂を走らせる。Photo. 19、20に顕微鏡組織を示す。Photo. 19の①②は鉄中の非金属介在物(鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物、つまり鉄やマンガン、珪素および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称)である。①は暗黒色ガラス質中に茶褐色、紡垂状の析出物が点在する。②にみられる介在物と同類であろう。当試料ではEPMAの調査がないので断定はできないまでもルチル(TiO。)系が想定されて砂鉄原料の鉄と推定される。

金属鉄のナイタル(5%硝酸アルコール液)腐食組織のPhoto. 20の①をみると、厚み方向中央はパーライト基地に網目状に微量のフェライトを晶出した亜共析鋼(<0.77%C)の高炭素域で、これを挟んで軟鋼(0.2~0.3%C)クラスの低炭素鋼が合せ鍛えされている。Photo. 20の②~⑤に炭素含有量の異なる領域の硬度測定の圧痕を示す。0.2%炭素含有量の軟鋼クラスで145Hv、0.8%全面パーライトで占められる共析鋼クラスで263Hvであった。組織に見合った値を呈している。なお、その中

間的炭素域では158Hv、186Hvの硬度値が得られている。

## (4) KTH-22: 鉄製品(刀子?)

現存長さ4.6cmで両端を欠く鉄製品である。平面は片側が先細りで厚み2mと薄手で刀子が想定されるが定かでない。銹化の進行により、表層の一部は層状剥離を起こしている。顕微鏡組織をPhoto. 21の①~⑧に示す。①②は鉄中の非金属介在物である。暗黒色ガラス質スラグ中に淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネル、白色針状結晶のイルミナイト(Ilmenite: FeO・TiO₂)が晶出する。砂鉄を始発原料とした鉄素材であろう。金属組織は③~⑥にみられるようにパーライト基地に網状に結晶粒界にフェライトを僅かに晶出する高炭素鋼である。該品も心金部分の残存で皮金部分が銹化剥落している可能性を残す。刀子であれば心金部分は丸鍛えが想定される。硬度圧痕を⑦⑧に示す。⑦は全面パーライト部で282Hv、⑧はパーライト基地に網目状フェライト析出部で216Hvであった。やや軟質化しており、二者は組織に対応した値である。

## (5) KTH-23: 不明鉄製品

現存長さ3.4cm、幅1.8cm、厚み1.1cmの基部側は断面長方形を呈する破損品。片側先端部は先窄まり。器種の特定は難しい鉄製品である。顕微鏡組織をPhoto. 22の①~⑤に示す。①②は鉄中の非金属介在物である。鍛打で長く展伸した暗黒色ガラス質スラグ中に茶褐色多角形結晶の鉱物相が点在する。これらの介在物のEPMA調査結果をPhoto. 34の下段に示すのでこちらから説明する。左側の反射電子像(СОМР)像に7の番号をつけた茶褐色結晶の定量分析値は、76% $TiO_2$ が得られてルチル( $TiO_2$ )が同定される。これには10% $Al_2O_3$ -6.5%MgO-7.5%FeOを固溶する。ルチルの検出は砂鉄原料の高温操業で、生成された鉄素材といえる。 第0番号は暗黒色ガラス質スラグ部分の定量分析値であり、その組成は34% $SiO_2$ -21% $Al_2O_3$ -18%CaO-3%MgOで珪酸塩が同定される。ここでも砂鉄特有成分の12% $TiO_2$ と8%FeOの固溶がある。また、9の番号の淡茶褐色結晶はTotal83%の減衰された数値のデータであり細かい数値は省略するが、34% $TiO_2$ の検出があって砂鉄系を裏付けることのみ記述しておく。

更にPhoto. 34の右側の反射電子像の介在物に10の番号をつけたものは63%TiO₂-20%FeO組成、11の番号のガラス部分は32%SiO₂-19%Al₂O₃-20%CaO-4%MgO-11%TiO₂が得られた。前述左側の分析結果の再現結果が得られた訳である。次に、また、Photo. 22の顕微鏡組織にもどす。①は表層側の上下にパーライト析出量の多い高炭素含有域を有して中央は白くフェライト量の増した低炭素域の組織である。④に低炭素域の硬度測定の圧痕を示すが127Hv、⑤は高炭素域のパーライト部で198Hvであった。鉄中の炭素量の違いが硬度値によく効いている。該品は外周層を木炭粉にまぶして加熱して材質強化を図った浸炭処理製品の可能性をもつ。浸炭製品の最表層は過共析鋼となるが、この部分は銹化して拡散域の亜共析部分から金属鉄が残存している。

#### (6) KTH-24: 鉄釘

頭部を直角に曲げて形成した釘で先端部を欠損する。現存長さ3.3cm、断面は方形に近く8×6 m、 銹化により亀裂が走る。顕微鏡組織をPhoto. 23の①②に示す。①は鉄中の非金属介在物である。暗 黒色ガラス質スラグ中に茶褐色多角形状のウルボスピネルかルチル系の組成が認められる。試料採取 が横断面方向なので、展伸性がないが、縦方向になると伸びた介在物である。ナイタル腐食の金属組織が②である。全面パーライト晶出の共析組織(0.77%C)であって、硬度値が299Hv、321Hvが得られた。ただし硬度圧痕写真は紙面の都合から割愛している。

# (7) KTH-25: 鉄製品

不定形の鉄製品の破片である。表層側からの剥離が繰返されていて器種を特定するのは難しい。 Photo. 23の③~⑥に顕微鏡組織を示す。③は鉄中の非金属介在物である。暗黒色ガラス質スラグ中に淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネルかルチルの類が存在する。砂鉄を始発原料とする鉄素材である。④は金属鉄組織で全面パーライトに極微量のフェライトの析出があるが、ほぼ共析鋼に分類できよう。⑤⑥に硬度測定の圧痕を示す。硬度値は284Hv、291Hvであった。組織に見合った値である。

## (8) KTH-26: 粒状滓

鍛冶炉7出土の遺物である。

KTH-26-1:粒状滓 5.3~7.0mm径

粒状滓としては超大型である。表面には複数の小さな突起をもち、歪な球状を呈する。色調は無光沢の黒灰色で滑らか肌である。顕微鏡組織をPhoto. 24の①~③に示す。鉱物組成はヴスタイトの凝集組織で、0.06~0.2mm径の気孔が散在する。③に硬度測定の圧痕を示す。値は405Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を割るが測定対象部が凝集部であって、ヴスタイトに同定できよう。

### KTH-26-2: 粒状滓 4.4~5.2mm径

一端が尖り気味の滴状を呈する粒状滓である。色調は無光沢の黒褐色で表面は滑らか肌である。一部破損して内部は大きく空洞化する。顕微鏡組織をPhoto. 24の④~⑥に示す。該品もヴスタイトの凝集組織で構成される。

## KTH-26-3:粒状滓 3.2mm~3.8mm径

僅かに歪みをもつ球状遺物である。複数の小さな突起を持ち、色調は無光沢の黒褐色を呈する。肌荒れはない。顕微鏡組織をPhoto. 24 ⑦に示す。鉱物組成は大量のヴスタイトの晶出である。結晶に明暗差があるのは、風化現象のため、大部分の結晶が侵されて暗色化している。内部に気孔が多く、0.04~0.32mm径のものが散在する。

### $KTH-26-4:2.9\sim3.3mm$ 径

前述粒状滓KTH-26-3のやや小型化したもので、外観はほぼ同じである。顕微鏡組織をPhoto.25 の①~③に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトが暗黒色ガラス中に大量晶出する。なお、局部的に鍛造剥片状ヴスタイト凝集帯が介在する。時折りみかける現象であるが成因は明らかでない。該品の中核部は0.2~0.25mmの気孔が幾つか寄り集って大きく空洞化する。

## KTH-26-5:2.4~2.6mm径

ほぼ球状を保持し、複数の小さな突起を発する。色調は無光沢の黒褐色の滑らか肌粒状滓である。

Photo. 25の④~⑥に顕微鏡組織を示す。内部断面は多孔質で、その間隙に白色樹枝状結晶のヴスタイトが微小針状結晶(ファイヤライトか)と暗黒色ガラス基地上に晶出する。赤熱鉄素材の酸化防止に粘土汁を多用したところの粒状滓であろうか。

KTH-26-6:1.7mm径

前述粒状滓KTH-26-5に準じ、小型化した端正な遺物である。Photo. 25の⑦に顕微鏡組織を示す。ヴスタイトの樹枝結晶が暗黒色ガラス中に晶出する。

KTH-26-7: 粒状滓 1.3mm径

やや歪な球状を呈し、無光沢で黒褐色の表面が滑らかな球状滓である。顕微鏡組織をPhoto. 26の ①に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトが凝集状に晶出する。断面内部には0.02~0.16mm径 の気孔が散在している。

KTH-26-8:粒状滓 0.8mm径

僅かに縦伸した粒状滓である。色調は半光沢で表面肌は滑らかさをもつ。顕微鏡組織をPhoto. 26 の②~④に示す。鉱物組成はヴスタイトであるが風化の影響が強くて鉱物相の大半は侵されて消滅している。断面内部には0.36mmの大きな気孔が存在している。

## (9) KTH-27: 鍛造剥片

鍛冶炉7からの検出遺物である。

KTH-27-1: 擬似鍛造剥片(鉄滓の皮か) 5.9×5.0×0.6~1.3mm

厚み変動の大きな剥片である。表面は無光沢黒灰色で凹凸が激しく、裏面は無光沢黒灰色の微細気孔の多い肌をもつ。顕微鏡組織をPhoto. 26の⑤~⑦に示す。鉱物組成はヴスタイトの粒状と非晶質が混在し、被膜内に0.7mm径の気孔が発生し、鍛造剥片に分類できぬ内部構造である。鍛冶滓の皮部分であろう。

KTH-27-2: 鍛造剥片 6.3×4.8×0.4mm

僅かに弯曲気味で平坦度を保つ剥片である。色調は表裏面共に無光沢黒灰色で、裏面側に凹凸が発生する。Photo. 27の①に顕微鏡組織を示す。外層の白色微厚へマタイトは存在し、中間層黄変マグネタイトは健全で、内層ヴスタイトは粒状が晶出する。三層分離型の鍛造剥片である。鍛打作業も前段階での派生物に分類される。

KTH-27-3: 鍛造剥片 5.2×4.1×0.4mm

平坦度を保つ剥片である。表面は光沢質滑らか肌を呈し、裏面は無光沢黒灰色で弱く凹凸をもつ。 顕微鏡組織をPhoto. 27の②に示す。外層白色微厚へマタイトは、一部遊離するが存在し、中間層マ グネタイトは健全で、内層ヴスタイトの上半分が王水腐食(Etching)で黒変化するが下半分は腐食 効果が弱い。なお、内層ヴスタイトは凝集もかなり進行していて粒界は消えかかった状態である。鍛 打作業も中間より後よりでの派生物とみられる。 KTH-27-4:鍛造剥片 9.9×5.8×0.3mm

前述KTH-27-3剥片に近似した外観をもつ。顕微鏡組織をPhoto. 27の③に示す。 3 層分離型の 剥片で各層の分離は明瞭である。該品は鍛打も仕上げ段階に属した剥片に分類される。

KTH-27-5: 鍛造剥片 5.2×3.4×0.2mm

鍛造剥片としての平坦度を保持する剥片である。表裏面共に銀灰色で微細な凹凸が見受けられる。 顕微鏡組織をPhoto. 27の④に示す。僅かに片減りした剥片である。外層へマタイトは明瞭であるが 中間層のマグネタイトが不鮮明となり、被膜中央に腐食(Etching)を受けない個所が発生する。風 化の影響が強い剥片であった。外観から見て鍛造剥片の要素は強い。

KTH-27-6:鍛造剥片 2.7×2.0×0.1mm

薄手で小さく砕けた剥片であるが、平坦度を保つ。表面は銀灰色光沢質の滑らか肌で、裏面は無光 沢黒灰色を呈する。顕微鏡組織をPhoto. 27の⑤に示す。王水腐食(Etching)効果は弱めであるが 3層分離型の被膜構造で、内層ウスタイトの非晶質が明瞭に観察される。

### (10) KTH-28:微細鍛冶関連遺物

被熱土砂と小さく砕けた鍛造剥片などと共に僅かに天然砂鉄などを含む微細遺物である。主体は鍛造剥片であって前述した鍛冶炉5の微細遺物に準じた外観である。Photo. 28に顕微鏡組織を示す。該品側には粒状滓は目に付かず、内層ヴスタイトが粒状から非晶質の鍛造剥片で占められる。割れやすくて薄手が多く0.02~0.12mmのグループであった。鍛冶炉7も間違いなく微細遺物の鍛造剥片を内蔵した鍛冶遺構と認定できる。

# (11) KTH-29: 椀形鍛冶滓(土壙218出土)

平面が不整台形状の完形椀形鍛冶滓で重量は288 g を測る。上面の端部に羽口先端からの溶融物である黒色ガラス質滓が付着する。上下面共に細かい木炭痕による凹凸を刻む。顕微鏡組織をPhoto. 29の①~③に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトと淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトで構成される。③に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。値は512Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の450~500Hvの上限を僅かに上廻るが、圧痕に亀裂が入り若干の誤差が生じたのかも知れぬ。また、白色粒状結晶のマグネタイト化の可能性もありうることである。鍛冶作業は沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓に分類される。

### (12) KTH-30:含鉄鉄滓

平面が台形状の含鉄鉄滓である。黄褐色の酸化土砂に分厚く覆われて側面1面は大きく破面となる。下面の一部も破面化して径1mm以下の気孔を散存させる。滓の色調は、黒灰色を呈し、上面はガスの抜けきっていない質感を残す。下面は銹化による赤銹変色や亀裂走りで金属鉄の残存が予測できた。顕微鏡組織をPhoto. 29の④~⑧に示す。④は銹化鉄粒と、ヴスタイト及びファイヤライトの小結晶が晶出する。⑤は外縁部の銹化鉄部でパーライト痕跡が少量あって亜共析域をもつが、大半は⑦⑧に

みられる全面パーライト基地に、針状セメンタイトを析出した共析鋼から過共析鋼で占められる。含 鉄部は高炭素鋼である。⑦の硬度値は274Hv、⑧は276Hvであった。

## (13) KTH-31: 含鉄鉄滓

平面が不整円形を呈する含鉄鉄滓である。表層は黄褐色の酸化土砂に覆われ、地の観察は難しいが、 黒褐色の滓らしい。該品も亀裂と一部銹化と剥落があって含鉄の存在が察知される。Photo. 30に顕 微鏡組織を示す。①は表層の鉄滓の鉱物組成である。ファイヤライト基地に少量のウスタイトの晶出 である。②に鉄中の非金属介在物を示す。鉱物相は硫化鉄(FeS)である。③~⑦はナイタル腐食に よる金属組織であって、パーライト基地の共析域と、それに針状セメンタイトを析出する過共析域を もつ。共析域の硬度値は⑧の圧痕で273Hv、過共析域は⑨の297Hvであった。組織に対応した値であ る。こちらも含鉄部分は高炭素鋼である。

### (14) KTH-32: 含鉄椀形鍛冶滓

平面は不整楕円形状の椀形鍛冶滓である。表層全体が黄褐色の酸化土砂に覆われて、側面の6面は破面で1面のみが生きている。下面には小割された木炭痕で長さ1.5cm程度が刻まれる。表層は亀裂が走り金属鉄の残留を予測させる。顕微鏡組織をPhoto. 31の①~⑦に示す。①の右側は滓部でヴスタイトとファイヤライトの晶出部で、酸化雰囲気に曝された鍛冶滓を証明する鉱物組成である。次に注目しておきたいのは②~⑤に示した金属組織が黒色のオーステナイト(常温ではパーライトになる)の初晶と、地は蜂の巣状のレデプライトからなる亜共晶組成の白鋳鉄が存在する。この白鋳鉄は加熱脱炭される「下げ」の原料鉄である。廃鉄器の鉄鍋などの充当が想定されて、鍛冶関連遺物で時折り遭遇される事例である。(沿川) ⑥はオーステナイト(パーライト) 部硬度測定の圧痕で、値は244Hv、⑦はレデブライト部で、550Hvを呈した。組織に対応した値となる。

## (15) KTH-33: 含鉄椀形鍛冶滓

平面が不整六角形を呈する椀形鍛冶滓で636gを測る大型完形品である。上面中程は窪み、細かいピッチの荒れ肌で、これに銹化による変色や亀裂が走り、金属鉄の遺存を知らしめる。下面は全面に木炭痕による凹凸が顕著である。表面は黄褐色の酸化土砂が広範囲に付着するが地の色調は黒褐色で、一部に紫紅色酸化雰囲気の強さも表わす。該品には鍛造剥片の付着も多かった。Photo. 32の①~⑤に顕微鏡組織を示す。滓の鉱物組成は①②にみられるヴスタイトとファイヤライトである。上面の窪みは風圧の強さもあろうが、処理した鉄塊の存在した痕跡の可能性も考えられて、大型化と併せて精錬鍛冶滓に分類されよう。金属鉄部分はフェライト・パーライトの極軟鋼部分(<0.15%C)も有するが、多くは全面パーライト析出部の共析鋼である。④の硬度測定の圧痕は、極軟鋼部で102Hv、全面パーライト部は⑤であって179Hvであった。後者は、炭素量に対して若干低め傾向を呈している。

#### (16) KTH-34: 含鉄椀形鍛冶滓

平面が台形状で890g近い大型椀形鍛冶滓である。側面の2面が破面となる。上面は酸化土砂の付着が著しく、その中に木炭粉や粒状滓、鍛造剥片が混入する。下面は細かい木炭痕を刻む。銹化による変色や亀裂は各所に残す。

顕微鏡組織をPhoto. 32の⑥~⑧に示す。鉄滓の鉱物組成はヴスタイトと、大きく成長したファイヤライトである。金属鉄は全面パーライト析出の共析鋼となる。化学分析値が実施されてなく数字からの裏付けが取れていないが、滓の大型化と鉱物組成から荒鉄の不純物除去の精錬鍛冶滓に分類されよう。

#### 小結

(1) 鍛冶炉 5 は、在地中世製鉄炉より搬入された荒鉄(製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ 更には炉壁粘上など不純物を含む原料鉄、鉄塊系遺物)の不純物除去から成分調整を行った精錬 鍛冶滓(KTH-20)から 鉄器製作に際しての鉄素材の沸し鍛接滓(KTH-19)、素延べ鍛錬鍛冶滓(KTH-21)までの工程が想定できる滓を出土する。

製鉄原料は砂鉄であり、製作鉄器は高炭素鋼の刃金類から硬鋼(0.5~0.8%C)クラスの高炭素鋼を使いこなしている。鉄器製作時には、鍛打作業に入ると赤熱鉄素材の表面から 粒状滓から鍛造剥片が大量に派生するが、それらの微細遺物も検出された。特に鍛打剥片は3層分離型の被膜構造をもつものが0.3mm厚み以下の剥片でしっかりと押えられた。0.6mm以上の厚手剥片は鍛冶滓の皮の混入もあって選別には注意を要する。

(2) 鍛冶炉 7 は廃鉄器再生鍛冶を主体の作業が想定できた。まずリサイクル鍛冶の特徴は椀形鍛冶滓の鉱物組成は ヴスタイト (FeO) が凝集化傾向になり、化学組成では脈石成分 (Ti、V、Mn) が低下する。具体的には、KTH-20椀形鍛冶滓の化学組成でみると、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は鍛冶炉 5 の $0.96\sim1.68\%$ に対して0.38%、バナジウム (V) は $0.038\sim0.088\%$ が0.014%、酸化マンガン (MnO)  $0.17\sim0.18\%$ が0.02%と大幅に低減される。

鍛冶炉7の鍛冶原料鉄は、折れ曲がった釘や、刀子破片、器種不明鉄器などの鍛造鉄器が遺存されていた。また、当然鋳造鉄製品(鉄鍋破片など)が大きな原料鉄となったものと考えられる。ただし残念ながら調査対象品には選ばれてなかったが、土壙217の含鉄椀形鍛冶滓の含鉄部分に亜共晶組成の白鋳鉄が検出された。この白鋳鉄は「下げ」脱炭精錬鍛冶滓の存在を表明する試料である。

一方、鍛冶炉7においても鍛打作業で派生する微細遺物の粒状滓と鍛打剥片の検出があって、下げ 精錬鍛冶から鉄器製作の鍛錬鍛冶までの鍛冶一貫作業のあったことを証明することとなった。

## 3-4. 平成12年度調査 鍛冶工房1上層および下層出土品

# (1) KDH-1: 製錬滓

平面が不整台形状の緻密な炉底塊破片である。上下面と側面の一面は自然面で、側面3面が破面となる。上面は長さ1cm大の木炭痕を密に刻み、凹部には淡褐色の粘土質を付着する。全体に滑らか肌で極細かい気孔を散存させる。破面は光沢質の暗灰色で、巨晶化結晶が観察される。製錬滓の特徴である。顕微鏡組織をPhoto. 35の①~⑨に示す。①~③は滓の鉱物組成である。白色多角形結晶が樹枝状として晶出し、これに淡灰色長柱状結晶のファイヤライトが共存する。白色多角形結晶の硬度測定の圧痕を⑧に示す。値は680Hvである。この結晶はウルボスピネルに同定される。砂鉄製錬滓の晶癖である。この滓中には④~⑦にみられる鉄粒が点在する。④はフェライト単相の純鉄である。⑤はフェライト・パーライトの軟鋼  $(0.2\sim0.3\%C)$  ⑥⑦はセメンタイト・パーライトの硬鋼  $(0.5\sim0.8\%$ 

## C) クラスの炭素量であろう。⑨は硬度値が420Hvであった。組織に見合った値である。

Table. 2 (その2) に化学組成を示す。鍛冶滓と異なって鉄分低くて脈石成分 (Ti、V、Mn) の多い成分系である。平成10年度調査で製鉄炉1 (KTH-4、6、10) に準じた傾向をもつ。操業年代が変っても在地砂鉄使用の証である。すなわち、全鉄分は33.94%でガラス質成分多くて44.24%、このうちに塩基性成分 (CaO+MgO) を3.83%含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン7.19%バナジウム0.16%で、酸化マンガン0.86%である。随伴微量元素のうち酸化クロムの0.01%以下、五酸化燐の0.24%などは8世紀代の製錬滓 (KTH-4、6、10) よりは僅かに低めである。鍛冶工房に製錬滓が存在するのは、鍛冶原料鉄の荒鉄に共伴したものの廃棄滓とみてよかろう。

## (2) KDH-2: 椀形鍛冶滓

平面は不整楕円形状の完形椀形鍛冶滓である。重量は317gを測る。側面に1ヶ所抉れ部分をもつ。上面は石英・長石・砂粒などを含む酸化土砂を固着するが、その肌はガス抜け不十分の質感を残す。また、土砂中には光沢質銀灰色の鍛造剥片や粉炭の混入がある。下面は周縁部に細かい木炭痕による荒れ肌を刻む個所があるものの全体的に滑らか肌である。Photo. 36の①~⑤に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は②にみられる白色粒状ヴスタイトと淡灰色木ずれ状ファイヤライトの晶出と、一部に亜共析組成(<0.77%C)痕跡の銹化鉄が認められる。鉄素材の沸し鍛接で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。④はフェライト・パーライト組成の鉄粒の硬度測定の圧痕である。硬度値は116Hv、白色粒状結晶の硬度値は⑤に示して459Hvであった。両者は組織に対応した値である。①は酸化土砂にみられた鍛造剥片である。内層ヴスタイトは凝集気味の鍛打作業の後半段階の組織であった。二次付着物であるが、椀形鍛冶滓の組成に準ずるものである。

Table. 2(その2)に化学組成を示す。鉄分高めで脈石成分(Ti, V、Mn)低減された鍛冶滓特有の数字を呈す。全鉄分は49.02%に対して、ガラス質成分29.51%でそのうちに塩基性成分(CaO+MgO)は1.77%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタンは0.32%と大きく減少し、バナジュウムも0.01%と落ち込む。更に酸化マンガンも0.08%と製錬滓の1/10まで下る。沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓の成分に分類される。

## (3) KDH-3: 椀形鍛冶滓

平面は不整方形に数個所の張出部をもつ完形の椀形鍛冶滓である。中型品で250gを測る。上面は褐色の酸化土砂に覆われて地の観察は難しいが、ガラス質部分があって羽口先端の溶融物の滴下個所を示すのであろう。また1箇所に亀裂があって含鉄部を内蔵している。下面は全体に木炭痕による凹凸が著しく、1個所粒瘤状の突起物も有し、荒れ肌である。Photo. 36の⑥~⑧に顕微鏡組織を示す。鉱物組成はヴスタイトとファイヤライトでこれに銹化鉄(亜共析組成痕跡)を含む。沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。白色粒状結晶の硬度値は492Hvでヴスタイトに同定された。該品は化学分析を実施してないものの、KDH-2に準じたものと想定される。

## (4) KDH-4: 椀形鍛冶滓

平面が本来は楕円状をとるのが側面2面が抉れたように欠けている為不定形となる。KDH-2の1面抉れと近似した割れ欠損で、また上面固着の酸化土砂も同質である。更に粉炭や鍛造剥片の混入が

ある。上面は平坦で、下面は細かい木炭痕による凹凸を刻む荒れ肌となる。破面では径  $1 \sim 2 \, \text{mm}$ 程度 の木炭痕が散存していた。顕微鏡組織をPhoto.  $37 \, \text{の①} \sim 5$ に示す。滓の主要鉱物相は②③にみられる白色粒状ヴスタイトかマグネタイトの凝集組織である。④は椀形鍛冶滓の底面で、炉床粘土との接触面で、ファイヤライト主体組織となる。白色粒状結晶の一部は⑤に示す硬度圧痕位置で、値は526Hvを呈した。ヴスタイト文献硬度値の $450 \sim 500 \, \text{Hy}$ の上限を超えており、マグネタイトの範囲に寄っていた。マグネタイトの晶出もありうる。

Table. 2(その 2)に化学組成を示す。前述したKDH-2に近似した脈石成分(Ti、V、Mn)である。ただし該品は鉄分(Total Fe)が58.06%と約10%高く、その分ガラス質成分が低下して18.30%に留まる。二酸化チタン0.39%,バナジウム(V)0.04%、酸化マンガン0.07%を呈す。鉄素材の沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓に分類される。

## (5) KDH-5: 椀形鍛冶滓

平面がやはり楕円形状の椀形鍛冶滓で、こちらは16mmと薄手で軽量72 gとなる。 ただし約1/2の欠損であるが、前述してきたKDH-2、3、4よりは半分以下の小型化滓である。上面端部の1箇所に羽口先端溶融物のガラス質滴下付着がみられる。上面は平坦で、下面に細かい木炭痕による凹凸を刻む。表面に薄く酸化土砂が固着してこれに鍛造剥片が混在する。顕微鏡組織を1Photo. 139の⑥~⑧に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトあるいはマグネタイトと、これらの粒内に1Fe1TiCe 物を析出し、極く一部に⑦にみられる淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネル(Ulvöspinel:1Fe1TiCe を晶出する。鍛冶原料鉄は精錬不充分で原料砂鉄の脈石成分をまだ抱え込んでいた可能性が高い。該品は化学分析を実施してないが、恐らく $1\sim2$ %1TiCe、 $1\sim$ 

## (6) KDH-6: 鉄塊系遺物

平面が不整五角形を呈する塊で、厚板状鉄片に見間違いしそうな外観をもつ。厚く酸化土砂に覆われ、細かい観察ができないが、少なくとも側面3面は銹化剥落による破面である。表面に細かい亀裂が走り、表層には剥落痕跡が数箇所に残す。しかし中核部に金属鉄が遺存するのか重量感を覚える。Photo. 55にマクロ組織を示す。白色部が金属鉄である。明暗度があるのは炭素量の変化を表わし、明色部は炭素量少なく、暗部へ寄る程高炭素化する。金属鉄は銹化の進行で虫喰い状態の侵され方である。

次にPhoto. 38の①~⑧に顕微鏡組織を示す。①と④左側は表皮スラグの鉱物相である。微細結晶であるがヴスタイトとウルボスピネル及びファイヤライトを晶出する。砂鉄系鉄塊と判る。金属鉄はマクロ組織で指摘したように③にみられる純鉄と同じフェライト単一相、黒と層状のパーライトが変動する。⑤~⑧に炭素量の低い組織から高いものへと硬度測定を行った。極低炭素域の⑤はフェライト単一相で最も軟質で100Hv、⑥は炭素量0.1%推定域で107Hv、⑦の炭素量0.3%推定域で147Hv、⑧は全面パーライト域の0.77%C域で231Hvを呈した。パーライトの占める面積は炭素含有量の増加にともなって増し、焼ならし状態では0.4%前後で約半分、0.77%で全面パーライトとなる。このパーライトの増加は硬さが向上してゆくのは前述した通りである。なお、④で白色フェライトが針状化して

いるのは急速冷却を受けた熱履歴を表わしている。該品は鍛冶炉で加熱されていたところから何らか の理由で急に炉外へ取り出されたのであろう。まだ炭素含有量にバラツキをもつ鉄塊である。

#### (7) KDH-7: 鉄塊系遺物

平面が不整台形状で、側面に1ヶ所大きく破面を持つ鉄塊系遺物である。前述鉄塊が91gに対して 該品は32gと小型化する。全面が酸化土砂に覆われ二分する亀裂をもつが芯の金属鉄はよく遺存する。 Photo. 55の下段にマクロ組織を示す。高炭素域の黒色部と低炭素域の白色部が混在する断面で、気 孔の点在する個所から亀裂が走る。Photo. 39の①~⑧に顕微鏡組織を示す。①は表層の滓でヴスタ イトの晶出である。酸化雰囲気に曝された鉱物相は鍛冶系の鉄塊系遺物である。また、②③の鉄中の 非金属介在物から該品の製造履歴を窺うと、②の暗黒色ガラス質スラグ中に白色針状結晶はチタン系 鉱物から砂鉄を始発原料とした鉄塊と判定できる。また、③の3μ前後の微細な黄褐色介在物は硫化 鉄である。この2種の介在物の定量分析結果をPhoto. 61の1段目と2段目に示す。まず、1段目は 暗黒色ガラス質スラグと白色針状結晶である。反射電子像(COMP像)に1の番号をつけた暗黒色 ガラス質スラグは、 $56.5\%SiO_2-20.0\%Al_2O_3-3.0\%CaO-1.5\%MgO-8.4\%K_2O組成の珪酸塩である。$ これには砂鉄特有元素の5.7%TiO $_2$ -1.0%ZrO $_2$ の固溶と共に2.1%MnO-5.0%FeOも含まれる。 2の番 号は55.4%TiO₂−2.5%V₂O₃−1.9%ZrO₂でルチル(Rutile:TiO₂)系に同定されるが、他に15.4%SiO₂−  $10.4\% \text{Al}_2\text{O}_3 - 4.1\% \text{MgO} - 3.1\% \text{K}_2\text{O}$ など周囲の珪酸塩からの影響がでている。いずれにしても砂鉄原 料の鉄塊を明瞭に表明している。次に顕微鏡組織の③に対応する。Photo. 61の2段目の分析結果で ある。対象介在物は微小黄褐色異物で反射電子像(COMP)に3の番号をつけたものは、 97%FeO-30.5%Sで硫化鉄(FeS)である。更に、この硫化鉄を囲む個所の4の番号の定量分析値を みると、95.0%FeO-36.7%SiO。組成であった。本来ならばFe-Fe<sub>3</sub>C-Fe<sub>3</sub>Pの三元系共晶のステダイ ト (Steadite) の存在を予測したが、外れた結果となった。5の番号の黒点は、145%FeO (100%Fe) で特別な元素の検出はなかった。

Photo. 39の④~⑧の顕微鏡組織にもどす。金属鉄をナイタル腐食した組織である。④はマクロ組織で黒色で観察された領域で、パーライト全面析出から右側へ移動すると網目状のフェライトの晶出へと変化していく。⑤⑥は白色部の亜共晶組成の炭素量の少ない領域である。

この炭素含有量と硬度値の関係を⑥~⑧に示す。⑥のフェライト基地では軟質の116Hv、斑模様にパーライトの増加で硬化して143Hv、全面パーライトになると276Hvまで硬度値は高くなる。組織に対応した値である。

## (8) KDH-8: 椀形鍛冶滓(鍛冶工房下層出土遺物)

平面が不整三角形状をした272gの椀形鍛冶滓である。ほぼ、完形品で、側面1面にのみ小さく破面化する。上面はガスが抜けきれなくて、緩くうねりをもち、下面は木炭痕による極く弱い凹凸を呈する。黄褐色の酸化土砂に全体が覆われている。Photo. 40の①~⑤に顕微鏡組織を示す。鉱物組成はヴスタイトと少量のウルボスピネルである。ヴスタイト粒内には淡茶褐色のFe-Ti化合物の析出がある。ヴスタイトの硬度値は519Hv,ウルボスピネルは687Hvであった。荒鉄の不純物除去を目的とした精錬鍛冶滓の晶癖である。鍛冶工房上層でみたKDH-5椀形鍛冶滓の鉱物組成に準じたものである。

Table. 2 に化学組成を示す。鉄分やや低めでガラス分の多いめの成分系である。全鉄分は41.3%、

ガラス質成分40.32%のうちに塩基性成分(CaO+MgO)を3.38%とやや高めを含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン0.85%、バナジュウム0.03%で、酸化マンガンも0.22%と鍛錬鍛冶滓よりも高め傾向にある。同じく酸化クロム0.14%、銅0.007%なども随伴微量元素としては鍛錬鍛冶滓レベルよりは多い。精錬鍛冶滓に分類される。

#### (9) KDH-9: 椀形鍛冶滓

平面は不定形で流動気味の偏平(20mm厚み)な椀形鍛冶滓である。113gと小型ながら完形品。上面は局部的に小気孔を発するものの滑らか肌で1cm以下の木炭痕が散在する。下面側は一面木炭痕で荒れ肌となる。Photo. 40の⑥~⑧に顕微鏡組織を示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトが凝集する部分と、淡灰色盤状結晶のファイヤライトの晶出する部分に分かれている。ヴスタイトは481Hvの硬度値、ファイヤライトは584Hvを呈した。後者は文献硬度値の600~700Hvの下限値を若干割るものの、圧痕亀裂による誤差とみられる。2つの鉱物相は顕微鏡鑑定通りに同定される。Table. 2(その2)に化学組成を示す。ヴスタイトの粒内析出物が無かったように脈石成分(Ti、V、Mn)は低め傾向に向かった成分系である。前述KDH-8椀形鍛冶滓よりも鉄分は増加して全鉄分が50.28%、ガラス質成分31.8%、二酸化チタン0.76%、バナジウム0.02%、酸化マンガン0.13%、酸化クロム0.01%以下、銅0.002%などである。随伴微量元素も低減傾向を示して精錬鍛冶の終末か鍛錬鍛冶の初期段階の成分系である。鍛冶原料鉄は純度の高いものが想定できる。

## (10) KDH-10:含鉄椀形鍛冶滓

平面は不整方形で端部の一部を欠損した含鉄椀形鍛冶滓である。上面は亀裂が走り、比重が大きく 鉄を内蔵する。金属探知器も弱で大きく反応する。また、上面は浅く木炭痕を刻むが平坦で肌荒れも 少ない。表層の滓部は暗灰色で、破面には極く小さい気孔が散在している。下面側は酸化土砂の付着 が激しくて素肌の観察は困難であった。

顕微鏡組織をPhoto. 41の①~⑨に示す。①は滓の鉱物組成でヴスタイトとファイヤライトから構成される。②は鉄中の非金属介在物で球状を呈している。鍛打が加わればこれが展伸されて様相は一変するので鉄製品との区別は明瞭となる。③~⑨は金属鉄のナイタル腐食組織を示す。炭素量はフェライト基地に少量のパーライトを析出する。③から全面パーライトの⑦にある共析領域(0.77%C)までの変動をもつ。低炭素域の硬度値は⑧で102Hv,高炭素域は⑨にみられて252Hvを呈した。組織に見合った値である。Table. 2(その 2)に化学組成を示す。含鉄の半分は顕微鏡試料側に投入しているので、分析値はスラグ成分となる。全鉄分は50.0%に対してガラス質成分が32.17%、塩基性成分1.32%、二酸化チタン0.19%、バナジウム0.01%以下、酸化マンガンも低減されて0.05%、銅0.01%以下となる。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

## (11) KDH-11:含鉄椀形鍛冶滓

平面が伸びた不整台形状の小型(62g)偏平な含鉄椀形鍛冶滓である。側面の1面が破面で、2面は銹化による欠損部をもつ。上面は平坦で亀裂と銹膨れの剥離面があり金属鉄の内蔵が窺える。平面は周辺部で、やや凹凸を表わす。滓部は暗黒色で破面に小さい気孔を発する。顕微鏡組織をPhoto. 42の①~⑨に示す。滓の鉱物組成はヴスタイトの凝集とファイヤライトで占められる。含鉄部の金属

組織は針状フェライトとパーライトの亜共析域(0.77%以下の炭素量)と共析域(0.77%炭素)の共存である。前者の硬度値は131HV、後者は283HV、またヴスタイトは448Hvであった。それぞれは組織に見合った値を呈す。

## (12) KDH-12: 鉄塊系遺物

平面は不定形ながら丸みをもつ小型(34g)の鉄塊系遺物である。全面が黄褐色の酸化土砂に覆われて地の観察が困難であるが、一部の銹化剥落面からみると、表層に薄く灰色の滓が付着するが大部分は鉄塊である。Photo. 43に顕微鏡組織を①~⑨に示す。①②は滓部である。①は暗黒色ガラス中にファイヤライトが析出し、②はヴスタイトとファイヤライトの混在である。精錬鍛冶の中途で加熱をやめている。③は鉄中の非金属介在物で硫化鉄(FeS)と周辺にFe-Fe<sub>3</sub>C-Fe<sub>3</sub>P三元系共晶のステダイトの存在がある。銑鉄特有の介在物である。④⑤はパーライト基地に片状黒鉛が析出するねずみ鋳鉄、⑥はパーライトとセメンタイト、レデブライトで構成された亜共晶組成の白鋳鉄組織である。硬度圧痕を⑦~⑨に示す。⑦はパーライト基地のねずみ鋳鉄で286Hv、⑧は白鋳鉄のセメンタイト部で920Hv、⑨は白鋳鉄化しつつある基地パーライトで371Hvであった。「下げ」脱炭の必要な鉄塊も鍛冶原料鉄として搬入されている。

#### (13) KDH-13: 粒状滓

KDH-13-1: 粒状滓 3.0~3.6mm径

光沢質黒灰色で、僅かに歪な球状を呈する粒状滓である。マクロ組織をPhoto. 44の①に示す。断面の中核部が1.8mm以上に空洞化して、外周部を薄く白色鉱物相が晶出する。②は顕微鏡組織である。白色粒状ヴスタイトが凝集した典型的な粒状滓組織を示す。

### KDH-13-2:粒状滓 2.5mm径

表面を1個所小さな突起を持つ球状遺物である。光沢質黒灰色を呈し、前述KDH-13-1に近似する。Photo. 44の③にマクロ組織を示す。断面左側は歪な球体に銹化鉄が付着しており、外観的に突起が目立つ状況にあった。断面気孔は0.1mm径前後を多発する。顕微鏡組織は④~⑥にあるように、鉱物相はヴスタイトの凝集である。

## KDH-13-3:粒状滓 1.9mm径

端正な球体をもち、光沢質黒灰色の粒状滓である。マクロ組織をPhoto. 44の⑦に示す。断面は0.1~0.3mm径の気孔を発するが白色鉱物相が満遍無く埋める。⑧が顕微鏡組織でヴスタイト凝集の晶出であった。

## KDH-13-4:粒状滓 1.3mm径

こちらも端正な形状で、光沢質黒灰色の粒状滓である。Photo. 44の⑨にマクロ組織を示す。断面は0.1mm径以下の気孔が数点発生し、その間隙に白色鉱物相が埋める。⑩が顕微鏡組織でヴスタイトの巨大化が始まった鉱物相である。

KDH-13-5:粒状滓 0.9mm径

光沢質の黒灰色で、やや歪な球状を呈する粒状滓である。Photo. 45の①にマクロ組織を示す。断面は楕円形状で外周部は風化され、黒く侵される。また、中核部は小気孔が多く集中して、一見0.25 mm径の大気泡の発生に感違いする。しかし、いずれこの小気孔が集まり空洞化するのだろう。顕微鏡組織を②~④に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質基地に、微細な樹枝状マグネタイトと、凝集ヴスタイトが晶出する。赤熱鉄素材に塗布された粘土汁の影響が表われた粒状滓である。

#### KDH-13-6:粒状滓 0.6mm径

光沢質黒灰色で、端正な球状を呈する微小粒状滓である。Photo. 45の⑤にマクロ組織を示す。断面は0.1~0.2mm径の気孔が集中し、ほぼ空洞化に近い状況にある。顕微鏡組織は⑥にあるように暗黒色ガラス基地に多角形結晶のマグネタイトと樹枝状ヴスタイトが晶出する。

## (14) KDH-14: 鍛造剥片

KDH-14-1: 鍛造剥片 3.2×2.6×0.45mm

僅かに弯曲する鍛造剥片である。表面は光沢質灰色で、裏面は無光沢の黒灰色を呈する。マクロ組織をPhoto. 45の⑦に示す。断面は弧を描き、膜中央部の一部は風化して虫食状に侵されてはいるが鍛造剥片としての平坦度を保つ剥片である。顕微鏡組織は⑧に示すように外層へマタイトは微厚で連続性を保持し、中間層マグネタイトは健全で、内層ヴスタイトは下面側の一部に粒状性を残すものの、その大部分は非晶質化している。三層分離型の鍛打作業も後半段階の派生物である。

#### KDH-14-2:鍛造剥片 5.0×1.8×0.3mm

ほぼ平坦な鍛造剥片である。表面は光沢質銀灰色で、裏面は無光沢を呈する。マクロ組織をPhoto. 45の⑨に示す。断面は極僅少のうねりをもつものの平坦度は保つ。顕微鏡組織は⑩にみられるように 3層分離型で外層へマタイト、中間層マグネタイト、内層ヴスタイトは明瞭である。

#### KDH-14-3:鍛造剥片 5.3×4.5×0.25mm

基本的には ほぼ水平を保つ剥片であるが、表面に皺状の凹凸をもつ。また、色調は光沢質の銀灰色で、裏面は無光沢の灰色を呈す。Photo. 46の①にマクロ組織を示す。断面右側に0.1mm前後の気孔が4点集中するが、他は緻密質の剥片である。②は顕微鏡組織である。被膜が風化気味で外層へマタイトが研磨過程で剥落する。また、中間層も左側の約2/3は欠落傾向にある。内層ヴスタイトはしっかりと非晶質組織を備えていて、内側(裏面)外層に白色不均一被膜が形成するのは鍛冶炉内の再加熱で生成されたへマタイトである。3層分離型の鍛造剥片は間違いない。

#### KDH-14-4: 鍛造剥片 3.0×2.7×0.2mm

ほぼ水平な鍛造剥片である。表裏共に半光沢の灰色を呈す。マクロ組織をPhoto. 46の③に示す。僅かに半減り傾向の剥片で、内側寄りに小気孔を発す。④は顕微鏡組織である。被膜構造は3層分離型で鍛造剥片に分類される。ただし、中間層のマグネタイトは荒れて水平状は損なわれている。理由は定かでない。

KDH-14-5: 鍛造剥片 2.0×2.6×0.2mm

極く僅かに弯曲する鍛造剥片である。表面は光沢質の銀灰色で、僅かに皺状の凹凸をもつ。裏面は無光沢の灰色を呈す。Photo. 46の⑤にマクロ組織を示す。ほぼ均等厚みであるが、右側1/3のところで盛り上がり個所を有する。顕微鏡組織を⑥~⑧に示す。⑥は研磨のままの組織である。外層へマタイトは一部欠損するが三層分離型の鍛造剥片が読みとれる。⑦⑧は王水腐食(etching)の組織であって、内層ヴスタイトの凝集組織が表われた。該品も鍛打作業の後半段階側の派生物である。

## KDH-14-6: 鍛造剥片 1.7×1.5×0.15mm

小片の極薄手の剥片である。表裏面共に極く僅かに皺状の凹凸をもち、表面は光沢質銀灰色で、裏面は無光沢質の灰色を呈する。Photo. 46の⑨にマクロ組織を示す。僅かに外反するが外傷の少ない断面を有する。⑩は顕微鏡組織である。外層へマタイトに乱れがあるが、該品も3層分離型の鍛造剥片に分類される。

## 小結

#### (1) 鍛冶工房1上層出土遺物

- ① 椀形鍛冶滓以外に、第1工程で排出された砂鉄製錬滓の混入があった。鉱物組成はウルボスピネルを晶出し、化学組成は脈石成分(7.2%TiO<sub>2</sub>、0.16%V、0.86%MnO)の高め傾向を特徴とする。前述した8世紀代の製錬滓と同系原料砂鉄成分の流れを汲む。
- ② 椀形鍛冶滓は荒鉄の不純物除去と成分調整を目的とした精錬鍛冶滓から、沸し鍛接の高温鍛錬鍛冶滓まで混在する。両者の鉱物組成の違いは、前者のヴスタイト粒内にはFe-Ti化合物の析出があり、後者はヴスタイト単一相の晶出となる。また、化学組成は二酸化チタンが1%前後に分岐点をもち、これに加えてバナジウム、酸化マンガンにも高低差が現れる。
- ③ 出土鉄塊系遺物の表皮スラグは、ウルボスピネルなど製錬に直結するものはなくて、ヴスタイトを晶出した一度酸化雰囲気に曝された鍛冶系鉄塊に分類された。前工程の粗精錬を経た鍛冶原料鉄の搬入だろうか。一方、鉄中の非金属介在物はルチルを析出するものがあり、製錬段階は結構高温操業であることが窺われた。

# (2) 鍛冶工房1下層出土遺物

- ① 椀形鍛冶滓の鉱物組成や化学組成は、前述した鍛冶工房上層のものに近似する。また、鉄滓中に存在する落下鉄塊や鉄塊系遺物の炭素含有量は高めで、共析鋼(0.77%C)レベルから銑鉄までが存在する。製錬は高炭素鋼指向であったろう。
- ② 微細遺物も検出された。粒状滓の鉱物相はヴスタイト凝集型で、断面内部は気孔と空洞化して明らかに該品らは鍛打工程に入ってからの派生物である。更に、後続工程で派生した鍛造剥片は、3層分離型で内層ヴスタイトが凝集から非晶出化しており、鉄器製作時の素延べ・火造り段階の遺物に分類された。
- ③ 以上の如く、鍛冶工房の上層と下層の作業工程に大きな差異は認められなかった。

#### 3-5. 平成12年度調査 鍛冶工房1方形穴および土壙186出土品

#### (1) KDH-15: 椀形鍛冶滓

平面が不整楕円形状の椀形鍛冶滓で、側面の1面が破面となる欠損品である。上面は広く黒色ガラス質主体となり、滑らか肌に1cm程度の木炭痕を刻む。色調は紫紅色気味で酸化雰囲気を表わす。下面側は緻密な光沢質の灰色滓で所々に小礫を噛み込む。これには木炭痕の細かい凹凸と酸化土砂の付着があった。重量は316gの中型品。顕微鏡組織をPhoto. 47の①~③に示す。①は上面ガラス化した個所の鉱物組成である。珪酸塩に微細な樹枝状晶のマグネタイトを析出する。②が平均的な鉱物組成で白色粒状ヴスタイトと、その粒間を淡灰色小柱状ファイヤライトが埋める。沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。③はヴスタイトの凝集気味の個所の硬度測定の圧痕である。単一結晶の測定でないので、327Hvと低値が得られた。誤差が大きく採用すべき値ではない。

Table. 2 (その2) に化学組成を示す。表層のガラス分の影響から鉄分低めでガラス分の高い成分 系となる。すなわち、全鉄分が31.91%で、ガラス分が55.45%を呈する。二酸化チタンは0.44%と少なく、バナジウムも0.01%以下となる。更に酸化マンガンも0.09%など脈石成分は低減化傾向にあり、鍛錬鍛冶滓に分類される。ガラス分の多いのは赤熱鉄素材に酸化防止に粘土汁を多用した表れではないだろうか。

#### (2) KDH-16: 椀形鍛冶滓

平面は不整楕円形状をとるが、側面 2 面が破面となるので本来は円形状の椀形鍛冶滓であろう。厚みが44mmと肥大気味で大型椀形滓となる。更に、上面は中央が窪む形状で不純物除去の精錬鍛冶滓の形状を留める。上下面共に木炭痕を刻むが、下面側は特に細かい木炭を髣髴(ほうふつ)させる痕跡である。破面には径  $1\sim5$  mm程度の気孔を発するが重量感のある緻密な滓である。顕微鏡組織をPhoto. 47の④~⑥に示す。鉱物組成は成長したヴスタイトの晶出で、その粒内にはFe—Ti化合物の析出がみられる精錬鍛冶滓の晶癖である。白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を④に示した。硬度値は494Hvでヴスタイトに同定される。Table. 2(その 2)に化学組成を示す。鉄分は57.43%と高めであるが、脈石成分(2.06%TiO $_2$ 、0.04%V、0.33%MnO)も高め傾向にある。該品は荒鉄の不純物除去に際して排出された精錬鍛冶滓に分類される。

### (3) KDH-17: 椀形鍛冶滓

平面が不整台形状で小型偏平(125g)な完形椀形鍛冶滓である。上面は平坦で、下面に細かい木炭痕による凹凸を刻む。顕微鏡組織をPhoto. 47の⑦に示す。鉱物組成は大きく成長した白色粒状結晶のヴスタイトと淡灰色長柱状結晶のファイヤライトで構成される。沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。白色粒状結晶の硬度値は456Hvが得られてヴスタイトに同定される。Table. 2(その2)に化学組成を示す。全鉄分57.85%と高めでガラス分が18.89%と低めの成分である。脈石成分(0.23% TiO<sub>2</sub>、0.02%V、0.05%MnO)が低めで沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓に分類される。

#### (4) KDH-18: 椀形鍛冶滓

平面は不定形で小型(48g)の椀形鍛冶滓である。側面の1面が破面となるが、ほぼ完形品。上面は端部にガラス質部分をもち、下面に木炭痕による凹凸荒れ肌を有する。色調は部分的に濃い茶褐色を呈し、内部に微細な鉄粒を内蔵させる。Photo. 48の①~③に顕微鏡組織を示す。鉱物組成はヴス

タイトがやや少なめに樹枝状に晶出し、淡灰色長柱状ファイヤライトと金属鉄粒の小さいものが点在する。こちらも粘土汁多用の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。②の金属鉄粒は白色フェライト基地に少量のパーライトの析出した極軟鋼の組織である。鉄粒の硬度測定の圧痕を③に示す。硬度値は117Hvであった。少量のパーライト析出金属鉄としては組織に対応した値である。Table. 2(その2)に化学組成を示す。小型偏平滓ながら僅かながら脈石成分(0.59% $TiO_2$ 、0.01%V、0.12%MnO)が高め傾向の滓である。鉄分も44.46%とあまり多くなく、ガラス質成分は39.81%に留まった。精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の中間的成分系であった。

## (5) KDH-19:含鉄椀形鍛冶滓

平面が不整ハート形状の一端に括れ込みをもつ含鉄椀形鍛冶滓である。含鉄部は銹化により2片に割れたものが接合されている。表面の滓は黒灰色を呈し、下面側は細かい木炭痕の凹凸の荒れ肌である。ほぼ完形品で124gを測る。顕微鏡組織をPhoto. 48の④~⑧に示す。④が表皮スラグで鉱物相は白色粒状ヴスタイトの大きな結晶の晶出である。含鉄部分は⑤が銹化鉄となるが針状セメンタイトと基地鉄の全面パーライトが読みとれる。⑦は全面パーライト共析鋼域である。⑧は共析鋼域の硬度測定の圧痕で値は309Hvであった。組織に見合った値となる。沸し鍛接時の落下鉄塊であろう。滓は鍛錬鍛冶滓に分類される。

## (6) KDH-20: 鉄塊系遺物

平面が不整台形状で39gと小型の鉄塊系遺物である。表層部は黒灰色の滓で覆われ、上下面は細かい木炭痕を刻む。芯には金属鉄が内蔵されていて重量感をもつ。不純物除去の精錬鍛冶での排出物であろう。Photo. 58の上段にマクロ組織を示す。全体に銹化が進み、中央部に亜共析鋼から過共析鋼と炭素含有量に偏析をもつ金属鉄を残す。顕微鏡組織はPhoto. 49の①~⑨に示した。①は表皮スラグで小粒ヴスタイトと淡灰色短柱状結晶のファイヤライトで構成される。精錬鍛冶滓に分類される晶癖である。②は鉄中の非金属介在物で、まだ未鍛打材なので円形状を呈している。介在物組成は珪酸塩にイルミナイト系鉱物相の晶出である。ナイタル腐食の金属組織を③~⑤に示す。③は針状フェライトとベイナイト(フェライト地に分散した炭化物で構成された組織)組織であり、④は全面パーライトの共析鋼、⑤は初析セメンタイトを析出した過共析鋼である。炭素含有量に偏析をもつ。⑥~⑨は炭素含有量の異なる領域での硬度測定の圧痕を示す。⑥は少量のパーライト析出域で0.15%前後炭素量想定個所で90Hv、⑦は0.4%前後の炭素域で143Hv、⑧は全面パーライト域の共析域で222Hv、⑨は過共析域で318Hvの硬度値が得られた。それぞれが組織に見合った値を呈している。

## (7) KDH-21: 椀形鍛冶滓(鍛冶工房中央穴出土)

平面が不整星型を呈する小型(39g)偏平な椀形鍛冶滓である。表面には多数の粒状滓や鍛造剥片などを混入させる酸化土砂を付着する。上面は石英質の礫の噛み込みをもち、肌はガス抜けの悪い質感を呈す。下面は細かい木炭痕による凹凸を刻む。Photo. 58の下段にマクロ組織を示す。断面の各個所に白色鉱物相の凝集したところが点在する。顕微鏡組織がPhoto. 50の①~⑤である。①は粒状ヴスタイトの局部凝集個所、②③はヴスタイトとファイヤライトの分散する個所、④⑤はヴスタイトの大きく成長した粒子の集中個所を提示した。これも沸し鍛接の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

### (8) KDH-22: 椀形鍛冶滓(土壙186出土)

平面が楕円形で823gと大型椀形滓の完形品である。上面は中央部が窪むタイプで精錬鍛冶滓的形状を呈している。この上面は細かい気孔の散在があるものの、ガス抜けが十分でない質感を残す。下面は一部に淡褐色砂質の炉床粘土を付着する。また、全体は黄褐色酸化土砂に覆われている。顕微鏡組織をPhoto. 50の⑥~⑧に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトはやや量的に少なく淡灰色長柱状ファイヤライトが多く晶出する。外観的に上面の中窪み形状の精錬鍛冶的要素を鉱物相に結び付けると鉄かんらん石のファイヤライト晶出の多さである。⑥に淡灰色長柱状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は650Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値は600~700Hvの範囲であって、その範囲内に収まっていた。Table. 2(その2)に化学組成を示す。全鉄分は36.82%と低めに対して二酸化珪素が32.81%と高い。造滓成分(ガラス分)/Total. Fe=1.3と多く精錬鍛冶滓傾向は有するものの、砂鉄特有成分の二酸化チタンは0.47%、バナジウム0.01%は左程多くない。しかし、酸化マンガンは0.1%とこちらは増加気味である。滓の大型化と上面の中窪みは精錬鍛冶滓的ではあるが、成分的には今一歩精錬鍛冶滓に分類するには躊躇する数値である。鍛冶原料鉄の純度の高さと、廃鉄器投入などあって単純な鍛冶操業でないのかも知れぬ。

#### (9) KDH-23: 鉄製品

外観上は小型鉄塊系遺物か鉄製品破片か見極めの難しい遺物である。側面の2面は古い破面で、銹化により大きく3片に割れたものが接合してあった。表裏面には黄褐色の酸化土砂が固着して地の観察は難しい。ただし、滓の付着は全く見当たらない。Photo. 59の上段にマクロ組織を示す。断面は銹膨れで異形を呈するが本来は板状で刃物断片であろうか。金属鉄は右側白色部は地鉄のフェライトで左側のV字側を形成して高炭素域となり黒色を呈している。浸炭処理を施した鉄製品らしい情報が得られた。顕微鏡組織をPhoto. 51の①~⑧に示す。①は鉄中の非金属介在物である。この介在物は淡灰白色米粒状結晶のヴスタイトと暗黒色ガラス質の珪酸塩から形成され、鍛打による展伸性が認められる。鉄製品になる。また、②の左側表層部は黒色で全面パーライトの共析域、右側へ移動してゆくと炭素は減じてゆき内部は地のフェライト組織となる。また④では左側は僅かにフェライト針状組織を内蔵した亜共析域で、亀裂部の銹化鉄を介して針状セメンタイトを析出したパーライト地の過共析域で、その右側は全面パーライトの共析鋼となる。亀裂を境に組織の乱れがあるが浸炭処理を施した鉄製品の可能性が高い。⑤~⑧に炭素含有量の異なる領域での硬度測定の圧痕を示す。⑤のフェライト地は118Hv,⑥針状フェライトでパーライト0.1%C以下の組織は127Hv、⑦全面パーライト域は309Hv、⑧針状セメンタイト過共析域で280Hvが得られた。⑦と⑧は逆転傾向となったが、押し並べて炭素量の増加は硬度値が向上してゆく傾向がよく判る。

#### (10) KDH-24: 鉄製品

棒状の鉄製品である。断面は方形か長方形で先端側へ向けて先細りとなる。何か工具類の破片であろうか。表層(皮金)が銹化剥落して心金のみが遺存する。現存長さ3.6cm、断面は1.1×1.0cmを測る。マクロ組織をPhoto. 59の下段に示す。研磨は横断面(C 方向)である。明暗の異なる鉄素材の合せ鍛えが窺える組織が表われた。大型の非金属介在物が中央部に偏在している。顕微鏡組織をPhoto. 52に示す。①は鉄肌に生じた酸化第1鉄のヴスタイト(FeO)である。③に暗黒色ガラス地に

淡茶褐色片状結晶の介在物がみられるが、鉄素地の製造履歴を語るものである。介在物組成はPhoto. 6103 段目に示した E P M A 分析値によると40%FeO-52%TiO $_2$ 系でイルミナイト(Ilmenite:FeO・TiO $_2$ )と68%TiO $_2$ -24%FeOのルチル(Rutil:TiO $_2$ )系が同定される。また暗黒色ガラス質は52%SiO $_2$ -18%Al $_2$ O $_3$ -4.8%CaO-4.6%K $_2$ O-1.2%Na $_2$ Oの珪酸塩である。これにも砂鉄特有成分の4.6%TiO $_2$ -1.1%ZrO $_2$ の固溶があり、更に2.8%MnOも検出された。前後するがPhoto. 6104 段目に白色から淡茶褐色米粒状介在物の E P M A 調査結果を示す。反射電子像(C O M P)に1000番号をつけた白色米粒状結晶の定量分析値は101%FeO-1.5%TiO $_2$ でヴスタイト(FeO)、1100番号の米粒状介在物は65%FeO-30%SiO $_2$ 組成でファイヤライト(2FeO・SiO $_2$ )、12,13の淡茶褐色介在物は67%FeO-31%TiO $_2$ 。67%FeO-31%TiO $_2$ のウルボスピネル(Ulvöspinel:2FeO・TiO $_2$ )が同定された。更に140番号のついた暗黒色ガラスは41%SiO $_2$ -14%Al $_2$ O $_3$ -4.2%CaO-6.8%K $_2$ O-1.9%Na $_2$ Oの珪酸塩であった。こちらにも1.8%TiO $_2$ の固溶があって砂鉄原料を明瞭に表明している。

次は顕微鏡の金属鉄組織にもどす。②の連続組織は、フェライト単層から亜共析鋼で炭素量でみると0.6%前後の硬鋼までの混在した材質である。心金部分であって皮金側がどのような炭素量であったか判らないと器種の特定は難しい。④はフェライト素地の硬度測定の圧痕で139Hv、⑤はパーライト量の多い個所で194Hvが得られた。フェライトの139Hvは硬すぎて、全面パーライトの194Hvは軟化傾向がきつい。両方共に金属鉄でありながら風化の影響が表われている。該品は廃鉄器でリサイクル鉄素材となる可能性があろう。

## (11) KDH-25: 鉄塊系遺物

15gと小型で細長く伸びた形状の鉄塊系遺物である。先端は楕円形状に拡がり、片側は銹化による破損部となる。表層は僅かに灰色の滓が付着し、細かい木炭痕と粉末が残る。Photo. 60の上段にマクロ組織を示す。断面半円形で表層側はガラス質基地に微細な粒状結晶の晶出がある。その内側に明暗の分かれた金属鉄を遺存させる。顕微鏡組織をPhoto. 53の①~⑨に示す。②③は表皮スラグでヴスタイトの晶出である。ファイヤライトは微細化されて高温化操業を表明する。①は鉄中の非金属介在物を示す。暗黒色ガラスの球状化で未鍛打品と想定できる。④~⑨は金属鉄組織である。針状フェライトとフェライト地のなかに分散された微細なセメンタイトで構成された恒温変態を起こさせたベイナイトを晶出する。針状フェライト部の硬度測定の圧痕を⑧に示す。硬度値は161Hv、⑨はベイナイト基地で硬度値は177Hvであった。該品は鍛冶系の鉄塊系遺物に分類される。

#### (12) KDH-26: 鉄製品

銹化により表層の多くが剥落し、原形が捉えられない不定形遺物である。また、黄褐色酸化土砂に覆われて内部に金属鉄は遺存するものの外観から収集できる情報は皆無にちかい。大きさは $15 \times 12 \times 16$ mmで 8 g の小片である。Photo. 60の下段にマクロ組織を示す。断面は本来は方形を呈するものが銹化剥落で、逆三角形状に金属鉄が遺存する。横断面(C方向)の切り口からの観察となる。鍛接面の密着するところと、口を開きかけたところの落差が大きい。炭素含有量は明暗差があって、フェライト単相から軟鋼(0.3%C)の範囲であろう。顕微鏡組織をPhoto. 54の①⑤に示す。①②は巻込みスラグと鉄中の非金属介在物である。非金属介在物は白色粒状ヴスタイトと白色針状束ね結晶のヘーシナイト(Hercynite:FeO·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)の晶出である。③~⑤に金属鉄のナイタル腐食組織を示す。上部

はフェライト単相の極軟鋼域で、下方に向かってフェライトと羽毛状の比較的高温度の恒温変態によって得られた高ベイナイト(High bainate)が観察される。該品は鉄器の心金部分でこの周囲には皮金の存在があったと考えられるが、銹化剥落でそれの情報は得られない。それ故鉄器の器種同定も難しい。④に極軟鋼域の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は95Hv、⑤は軟鋼域の炭素量の多い領域で175Hvが得られた。2者は組織に見合った値である。

## 小結

- ①鍛冶工房方形穴とは、鍛冶工房内の送風装置(ふいご)設置が想定できる側の2つの上拡である。これより出土した椀形鍛冶滓も前述した鍛冶工房上層・下層出土の椀形鍛冶滓組成に近似して、不純物除去を目的とした大型(429g +  $\alpha$ )の精錬鍛冶滓(KDH-16)から小型(<130g)の沸し鍛接、鍛錬鍛冶滓(KDH-17、18)まで出土する。
- ②精錬鍛冶滓(KDH-16)は、外観的には上面中央部が窪み、厚さが44mmあって側面 2 面が破面なる形状で、本来は600 g 以上に推定できる大型椀形鍛冶滓の可能性をもつ。鉱物組成はヴスタイト晶出であるが、その粒内に砂鉄系特有のFe-Ti化合物を析出し、化学組成は脈石成分高め傾向(2.06%  $TiO_2$ 、0.04%V、0.33%MnO)に対して、小型の沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓(KDH-16、17)は、ヴスタイト単相で粒内析出物はなく、低脈石成分(0.50% $TiO_2$ 、0.01%V、0.09%~0.12%MnO)である。
- ③土壙186より出土した椀形鍛冶滓(KDH-22)は、大型で一部に欠損部をもつが、ほぼ完形品に近く823gを測る。鉱物組成は、ヴスタイト単相で粒内析出物はなくて脈石成分(0.47%TiO $_2$ 、0.01%V、0.10%MnO)はKDH-16精錬鍛冶滓よりも低めである。このKDH-16椀形鍛冶滓は廃鉄器再生の排出滓が想定されて、こちらも精錬鍛冶滓に分類される。なお、この方形土壙 2 には多くの鉄器片が残されていて砂鉄系であった。
- 一方、このKDH-22椀形鍛冶滓と鉱物組成・化学組成に酷似する滓で鍛冶工房方形穴出土品(KDH-15)がある。方形土壙2は鍛冶工房方形穴の出土品と有機的な繋がりのあることが想定できる。 ④鍛冶工房中央穴は鉄床石(鉄砧)の設置が想定できて、その横が鍛冶炉跡である。この中央穴からも小型(39g)椀形鍛冶滓が出土した。鉱物組成はヴスタイトであって、沸し鍛接鍛錬鍛冶滓に分類される。該品も他の遺構出土品と組成的に大差ない。

# 3-6. 平成14年度調査. 竪穴住居15出土品

(1) KDH-27: 鋳造鉄斧片(弥生時代中期前半)

平面が不整三角形を呈する鋳造鉄斧の破片である。残存長さ3.3cm、最大幅2.5cm、厚みは銹膨れを除くと約4mmを測る。Photo. 63の上段にマクロ組織を示す。断面は外周の黒錆のマグネタイトを残して内部は侵食される。金属鉄の残存はなく、ゲーサイト(Goethite: $\alpha$ -FeO・OH)である。次に顕微鏡組織をPhoto. 62の①~⑨に示す。すべて銹化鉄となるが僥倖にも組織の痕跡は残していた。黒い塊は黒鉛であり、白い部分はフェライト(Ferrite: $\alpha$  鉄)、層状部分はパーライトである。この組織は白鋳鉄の焼きなまし脱炭組織で黒心可鍛鋳鉄製品に分類される。『\*\*\*2\* 該品は紀元前5世紀頃の中国開発の熱処理技術で、鋳鉄の硬くて脆い欠点を900℃以上の温度で焼きなまし脱炭を施して柔軟化した鉄製品となる。製造履歴を推定すると次のようになろう。

まず、鉄斧は陶笵もしくは鉄笵に鋳込まれて成形される。固化した製品を赤鉄鉱など鉱石粉か砂鉄、

もしくは鍛造剥片などの酸化剤と共に密閉容器(壺もしくは鉄箱)に入れて900℃以上の温度で2~3日間をかけて加熱する。そうすると下記の反応が起こって脱炭製品の誕生となる。

①Fe<sub>3</sub>C (セメンタイト) →3Fe (オーステナイト) +C(黒鉛)

白鋳鉄中の遊離セメンタイト中の炭素の黒鉛化である。更に710℃前後に温度を下げるとパーライト 中の炭素が黒鉛化する。

- ②オーステナイト→フェライト+C(黒鉛)
- ③オーステナイト→パーライト+フェライト

以上の熱履歴を経た結果の組織がPhoto. 62の①~⑨になると想定される。

次にPhoto. 63の下段に鉄中の非金属介在物の特性 X線像と定量分析結果を示す。反射電子像の C O M P 像に 1 の番号をつけた個所は、塊状黒鉛に接して約 3 μ 程度の微細なマンガン含みの硫化鉄 (FeS) が存在する。当介在物に白色輝点が集中する元素が硫黄 (S) とマンガン (Mn) である。定量分析値でみると79%FeO-4%S-4%MnO組成が得られた。Totalが89%と減衰された値であって、硫黄 (S) やマンガン (Mn) は本来もう少し高い値を示すものであるが、銹化鉄のため、介在物の一部は剥落して誤差を生じた。しかし、この硫化物の存在は該品が鋳造品を裏付ける重要な介在物であることは間違いない事実である。一方この鋳造鉄斧の破片は、列島内で破片となったのか、それとも破片の状態で中国より搬入されたのか、議論を呼ぶ問題である。筆者は後者の可能性を考える。鋳造鉄斧はもともと破損しやすい性質をもつ。鉄斧は鋳造に際して、肉厚の不同や、形状による冷却速度の相違、あるいは冷却部に伴う鋳物の収縮に対する鋳型の抵抗から生ずる残留応力の問題がある。この残留応力の存在は、強さが低下し、歪を生じ、亀裂が発生して破壊に至る。中国側の鋳造鉄斧の生産過程では多くの破壊品が生じたことは想像に難くない。それらの破片の一部が列島内にもたらされて、完全脱炭軟化材は、大陸系磨製石器同様の製作技術でもって加工再生されている。これに対して中途脱炭の硬質材は砥石研磨が困難で放置された例は多いようである。該品も層状パーライト残留組織であって加工し難い側の破片に属するものと考えられる。

## 小結

弥生時代中期前半に属する竪穴住居15出土の鋳造鉄斧破片は、中国で紀元前5世紀代以降に開発された白鋳鉄製品の焼きなまし脱炭の黒心可鍛鋳鉄製品に分類された。当住居跡には3片の鋳造鉄斧片と共に碧玉を原料とした玉造りとの関係が窺われた。白鋳鉄製品の鋳込みままでの硬くて脆い欠点は、焼きなまし脱炭を施せば或る程度克服されるが、いつでも完全に脱炭できるとはいい難い。今回調査の鋳造鉄斧片は、焼きなまし脱炭の痕跡は塊状黒鉛の分布から明瞭であるが、その組織はフェライト(軟質の純鉄)は少なくて層状パーライトを留めたもので、砥石研磨による再生転用を図る材質としては若干硬質で最適品とはいいきれないものであった。完全軟質材であれば岡山市南方遺跡出土のノミ状鉄器にみられる素性が不鮮明となるまでに削り込みがなされるであろう。(注13)

鋳造鉄斧破片は西日本を中心に現在までに300点以上は出土していよう。(世球) そのうちの29点(製品2点含む)は金属学的調査から焼きなまし脱炭の確認はできているが、その組織はさまざまである。 貝元遺跡からの出土品はフェライト基地、表層フェライトで心部パーライト、表層フェライト・パーライトで心部は過共晶白鋳鉄組織など、焼きなまし脱炭条件の反映が組織に表われていた。(単15) 中国の戦国時代から漢代へかけての数多く製造された鋳造製の農工具は、溶湯を鋳型に流し込めば大量生 産のきくもので、これらすべての製品は材質強化のための焼きなまし脱炭が施されている可能性は頗 る高いであろう。その時の品質の変動が気になるところである。

## 4 まとめ

久田原遺跡出土鉄関連遺物の調査結果のまとめをTable. 3のその1、その2に示す。

(1) 弥生時代中期前半に比定される竪穴住居15から碧玉の石核と共に鋳造鉄斧破片が出土した。鋳造鉄斧破片は列島内の初期鉄器文化を担う鉄器群とも云えて、その出上点数は日ごとに伸びている。岡山県南側では6遺跡10点以上の発見があったが、県北出土は今回が初例となる。(産16) また、県北久田原遺跡出土の鋳造鉄斧破片は、焼きなまし脱炭の黒心可鍛鋳鉄製品と確認されて、更に中国東北部産の裏付けが取れた事は意義深い。

日本海ルートを介しての鉄と玉の流通が指摘できると共に、鋳造鉄の焼きなまし脱炭製品は一人歩きすることなく、玉造(水晶、緑色凝灰岩、ガラス)、辰砂、朱、べんがらなど赤色顔料を含めた当時の最先端技術の産物が共伴することを前に述べている。 今回の久田原遺跡出土の鋳造鉄斧破片も鉄単独の問題でなくて、碧玉が存在し、弥生時代の手工業技術としての追求が必要となった。

- (2) 苫田ダム建設に伴う発掘調査では、数多くの製鉄遺跡の検出があった。久田原遺跡は奈良時代の箱型炉が想定されるが、過去の調査例では、古墳時代後期(7世紀)の城峪城跡製鉄遺跡は円形炉、造場。古代の峪畑遺跡(箱型炉か)、登場。などがある。また、吉井川流域としてみた場合、奥津町教育委員会調査の高休場遺跡(古代)登場。大神宮原No.14遺跡(古代)登場。をはじめとして、平成10~11年に実施の奥津リフレッシュビレット開発計画に伴う発掘調査で検出された多数の遺跡(は22)が挙げられる。これらの製錬滓は、いずれも砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)が7.0~10.0%台 酸化マンガン(MnO)0.8~1.0%台を含有することを特徴とする。奥津町方面の賦存砂鉄が古墳時代から古代・中世にかけて同系鉱脈のものが使用されたことを物語る。
- (3) 久田原遺跡の中世に属する鍛冶作業は、高純度の荒鉄と廃鉄器類を原料として精錬鍛冶(不純物除去と成分調整)を行い、ここで生成された鉄素材を用いて沸し鍛接から素延べ成形の鉄器製作がなされている。廃鉄器を原料とした鍛冶の調査事例は山城関係に多くみられるか (\*\*23) 沖縄方面離島での検出に始終した。(\*\*24) これらは鋳造鉄鍋破片など比較的溶融しやすい原料鉄に対して、久田原遺跡では鋳鉄の充当はあるものの亜共析鋼(<0.77%C)から過共析鋼(0.77%C)の鉄器片が主体をなす。この違いは原料鉄としての資源の問題か、技術的な背景があるのか定かでないが、今後に残された研究課題となってくる。

### 注)

- (1) 大澤正己「高下休場遺跡出上製鉄関連遺物の金属学的調査」『高下休場遺跡・西屋A遺跡』(奥津町埋蔵文化財発掘調査報告2)奥津町教育委員会 1996. 3
- (2) 大澤正己「城峪城跡出上製鉄関連遺物の金属学的調査」『城峪城跡他』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 170) 国上交通省苫田ダム工事事務所、岡山県教育委員会 2003. 2 日刊工業新聞社『燒結鉱組織写真および識別法』 1968

- (3) ヴスタイトは 450~500Hv、マグネタイトは 500~600Hvファイヤライトは 600~700Hv の範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv 以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700Hv を超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (4) 粒状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。
- (5) 鍛造剥片とは鉄素材を人気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に 鉄肌(金肌)やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色 (光沢を発する)へと変化する。粒状滓の後続派生物で鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押さえる上で 重要な遺物となる。(186)

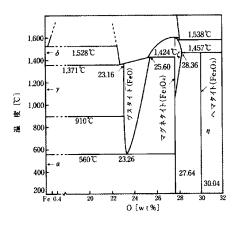
この鍛造剥片や粒状溶は極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶跡の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当っては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗選別、秤量により分布状態を把握できれば、工房内の作業空間配置の手がかりとなりうる重要な遺物である。古代の調査例、(注7) 古墳時代中期(5 C 中頃)の例がある。(注8)

鍛冶剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト(Hematite: $Fe_2O_3$ )、中間層マグネタイト(Magnetite: $Fe_3O_4$ )、大部分は内層ヴスタイト(Wüstite:FeO)の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される。 $^{\text{(Lis)}}$ 

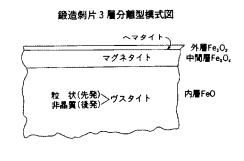
鍛造剥片を王水(塩酸3:硝酸1)で腐食すると、外層へマタイト(Hematite: $Fe_2O_3$ )は腐食しても侵されず、中間相マグネタイト(Magnetite: $Fe_3O_4$ )は黄変する。内相のヴスタイト(Wüstite:FeO)は黒変する。

鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト(Wüstite: FeO)が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打工程作業のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

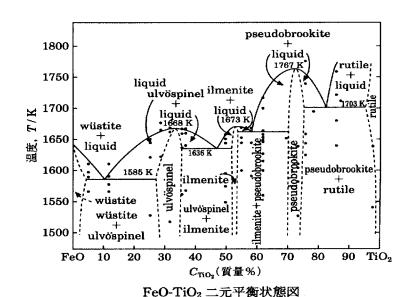
- (6) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘 年報15』(平成3年度) 千葉県房総風土記の丘 1992
- (7) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化 財調査報告第13集)福岡県教育委員会 1991
- (8) 大澤正己「重留遺跡鍛冶工房跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『重留遺跡第4地点』〜若園町線住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告4〜(北九州市埋蔵文化財報告書第303集)(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2002.3
- (9) 森岡ら「鉄鋼腐食化学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975



Fe-O系平衡状態図



(10) J, B, Mac chesney and A, Murau: American Mineralogist, 46 (1961), 572 イルミナイト (Ilmenite)、シュードブルーカイト (Pseudobrookite) ルチル (Ruitile) の晶出は FeO-TiO2 二次元平衡状態図から高温操業が推定される。



- (11) ①大澤正己「頭地松本B遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」「頭地松本B遺跡(2)」(熊本県文化財調査報告第173集)熊本県教育委員会 1999
  - ②大澤正己「パナタガー嶺・上ノ頂・尻川遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『尻川遺跡』~個人 住宅建設に伴う緊急発掘調査~(平良市埋蔵文化財調査報告書第5集)平良市教育委員会 2003
- (12) 大澤正己「弥生時代の初期鉄器〈可鍛鋳鉄〉序論」(~金属学的調査からのアプローチ~『製鉄史論 文集:たたら研究会創立40周年記念論文集』) たたら研究会 2000. 10
- ①3 大澤正己「吉備の鉄」平成9年度岡山県埋蔵文化財担当職員研修会資料 岡山県古代吉備文化財センター 1998
- (14) 村上恭通「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』(平成7年度~平成9年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書)研究代表者 下条信行 1998. 3 1998年代で200件がいわれていた。その後の増加を見込むと300件にはなろう。
- 15 大澤正己・鈴木瑞穂「貝元遺跡出土鉄製品の金属学的調査」『貝元遺跡Ⅱ下巻』福岡県教育委員会 1999
- (16) 佐藤寛介「吉備における弥生時代の鉄器文化」『吉備の鉄』(考古学研究会 岡山例会第7回シンポジウム資料) 岡山大学 2003. 1.11
- ① 大澤正己「弥生時代の鉄器の動向〜金属学的見地からのアプローチ〜」『東日本における鉄器文化の 受容と展開』(第4回鉄器文化研究会)埼玉県朝霞市コミュニティセンターホール 1997
- (18) 大澤正己前掲書(2)に同じ
- 19 大澤正己「峪畑遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『峪畑遺跡他』〈苫田ダム建設に伴う発掘調査 1〉(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告170) 国土交通省苫田ダム工事事務所 岡山県教育委員会 2003. 2
- (20) 大澤正己前掲書(1)に同じ
- ②) 大澤正己「大神宮原No.14遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『大神宮原No.14遺跡』(奥津町埋蔵文 化財発掘調査報告3)奥津町教育委員会 1998
- 22 大澤正己、鈴木瑞穂「大神宮原遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『大神宮原No.13遺跡、 大谷遺跡、大神宮原No.26遺跡、大神宮原No.25遺跡、大神宮原No.8・9遺跡、引野中原遺跡、福見A遺跡』

(奥津リフレッシュビレッジ開発に伴う発掘調査) 奥津町教育委員会 2003. 3

- ② ①大澤正己(1994)「福島県小野町猪久保城出上鍛冶関連遺物の金属学的調査」『東北横断自動車道遺跡調査報告28』福島県教育委員会・福島県文化センター
  - ②大澤正己(1997)「シミズ谷城跡出上椀形鍛冶滓と盤状鉄の金属学的調査」『京都府遺跡調査概報第79冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター
  - ③ (1999)「上関城跡出上椀形鍛冶滓・鉄釘の金属学的調査」『上関城跡』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第14集)山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター
  - ④大澤正己(1981)「花尾城址出土鉄滓からみた鍛冶の考察」『幻の山城花尾城』(北九州青年経営者 会議創立20周年記念誌)
  - ⑤大澤正己(1998)「平山城跡出土椀形鍛冶滓の金属学的調査」『平山城跡』(八代市文化財調査報告書第11集)八代市教育委員会
  - ⑥大澤正己(2003)「高江城跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」「高江城跡調査概報」(玄海町文化財調査報告書第10集)佐賀県東松浦群玄海町教育委員会 2003. 3
- (24) 大澤正己前掲書(11)-②

Table.1(その1)供試材の履歴と調査項目

						計測	値				調	査	項	Ħ				
調査年度	符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	大きさ (mm)	重量 (g)	メタル度	マクロ 組 織	顕微鏡 組 織	ビッカース 断面硬度	X線回折	СМА	化学分析	耐火度	カロリー	備	考
H10年度	KTH-1	久田原	製鉄炉1	砂鉄	8c	_	_	_		0				0				
	KTH-2	久Ⅲ原	製鉄炉1	砂鉄焼結塊	8c	32×45×11	23.36	H (()		0								
	КТН-3	久田原	製鉄炉1	炉壁	8c	$50 \times 65 \times 36$	82.74	なし		0				0	0			
	KTH-4	久田原	製鉄炉1	製錬滓 (炉内滓)	8c	$37 \times 53 \times 27$	60.1	なし		0	0			0				
	KTH 5	久田原	製鉄灯1	製錬滓(含鉄hi内滓)	8c	66×51×25	123.82	H (()		0	0							
	KTH-6	久田原	製鉄炉1	製錬滓 (炉底塊)	8c	170×143×40	904.26	H (()		0	0			0				
	KTH-7	久田原	製鉄炉1	鉄塊系遺物	8c	$41\times28\times23$	33.27	H (()		0								
	KTH-8	久田原	製鉄炉1	鉄塊系遺物	8c	$34 \times 27 \times 18$	20.3	H (()	0	0	0		0					
	KTH-9	久田原	製鉄炉1	製錬滓 (炉内滓)	8c	66×25×29	30.68	H (()		0	0							
	KTH-10	久田原	製鉄炉1	製錬滓(炉外流出滓)	8c	$103 \times 95 \times 48$	495.28	なし		0	0			0				
H11年度	KTH-11	久田原	鍛冶炉 5	鍛冶滓	中世	69×43×42	82.20	なし		0	0			0				
	KTH-12	久田原	鍛冶炉 5	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	$33\times54\times31$	88.93	銹化(△)		0	0			0				
	KTH-13	久田原	鍛冶炉 5	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	45×39×17	60.15	L (●)		0	0							
	KTH-14	久田原	鍛冶炉 5	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	$46 \times 24 \times 21$	40.69	L (•)		0	0		0					
	KTH-15	久田原	鍛冶炉 5	鉄片	中世	$26 \times 17 \times 7$	10.02	L (•)		0	0		0					
	KTH-16	久川原	鍛冶炉 5	粒状滓	中世	_	_	なし		0								
	KTH-17	久田原	鍛冶炉 5	鍛造剥片	中世	_	_	なし		0								
	KTH-18	久田原	鍛冶炉 5	微細鍛冶関連遺物	中世	_	_	なし		0								
	KTH-19	久田原	鍛冶炉 7	椀形鍛冶滓	山山坑	27×22×11	7.13	なし		0	0							
	KTH-20	久川原	鍛冶炉 7	鍛冶滓	中世	$41\times25\times12$	14.46	なし		0	0			0				
	KTH-21	久田原	鍛冶炉 7	鉄製品	中世	59×16×8	23.72	L (•)		0	0							
	KTH-22	久田原	鍛冶炉 7	鉄製品 (刀子茎?)	中世	46×18×2	6.07	L (●)		0	0							
	KTH-23	久田原	鍛冶炉 7	鉄製品	中世	$34\times18\times11$	13.88	L (•)		0	0		0					
	KTH-24	久田原	鍛冶炉 7	鉄釘	中世	33×8×6	3.97	M (©)		0								
	KTH-25	久田原	鍛冶炉7	鉄製品	山山崖	$44 \times 14 \times 10$	8.56	L (•)		0	0							
	KTH-26	久田原	鍛冶炉 7	粒状滓	中世	_	_	なし		0	0							
	KTH-27	久田原	鍛冶炉 7	鍛造剥片	中世	_	_	なし		0								
	KTH-28	久田原	鍛冶炉 7	微細鍛冶関連遺物	中世	_	_	なし		0								
	KTH-29	久田原	土壙218	椀形鍛冶滓	THE.	96×80×44	287.65	なし		0	0							
	KTH-30	久川原	土壙218	含鉄鉄滓	中世	57×41×39	70.62	L (•)		0	0							
	KTH-31	久田原	上壙218	含鉄鉄滓	中世	39×35×30	47.99	L (•)		0	0							
	KTH-32	久田原	土壙217	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	62×54×31	158.12	L (•)		0	0							
	KTH-33	久田原	土壙217	椀形鍛冶滓 (含鉄)	山川原	155×120×41	635.63	M (©)		0	0							
	KTH-34	久田原	土壙217	椀形鍛冶滓 (含鉄)	ППĖ	115×145×41	887.83	L (•)		0								

— osy -

Table.1(その2)供試材の履歴と調査項目

						計測	値				調	查	項	Ħ				
調査年度	符号	遺跡名	遺構名	遺物名称	推定年代	大きさ (mm)	重量 (g)	メタル度	マクロ 組 織	顕微鏡 組 織	ビッカース 断面硬度	X線回折	СМА	化学分析	耐火度	カロリー	伂	考
H12年度	KDH-1	久田原	鍛冶工房上層	製錬滓	山川坑	51×45×41	131	なし		0	0			0				
	KDH-2	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	95×76×38	317	なし		0	0			0				
	KDH-3	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	86×70×44	246	なし		0	0							
	KDH-4	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	$74 \times 64 \times 41$	222	なし		0	0			0				
	KDH-5	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	मिमि	$71\times45\times16$	72	なし		0	0							
	KDH-6	久田原	鍛冶工房上層	鉄塊系遺物	中世	$46 \times 44 \times 14$	91	L (•)	0	0	0							
	KDH-7	久田原	鍛冶工房上層	鉄塊系遺物	1[1]#	$28\times24\times20$	32	L (•)	0	0	0		0					
	KDH-8	久HI原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓	中世	116×85×21	272	なし		0	0			0				
	KDH-9	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓	中世	80×73×20	113	なし		0	0			0				
	KDH-10	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	65×55×24	140	L (•)	0	0	0			0				
	KDH-11	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓 (含鉄)	1[1]#;	60×31×18	62	L (•)	0	0	0							
	KDH-12	久HI原	鍛冶工房下層	鉄塊系遺物	中世	$32\times28\times14$	34	L (•)	0	0	0							
	KDH-13	久田原	鍛冶工房下層	粒状滓	中世		_	_	0	0								
	KDH-14	久田原	鍛冶工房下層	鍛造剥片	中世	_	_	_	0	0								
	KDH-15	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	山埔	77×93×30	316	なし		0	0			0				
	KDH-16	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中	91×64×44	429	なし		0	0			0				
	KDH-17	久田原	鍛冶工房方形穴	<b>椀形鍛</b> 冶滓	中世	$77 \times 53 \times 19$	125	なし		0	0			0				
	KDH-18	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	44×48×19	48	なし		0	0			0				
	KDH-19	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓 (含鉄)	माम्	63×61×23	124	L (•)	0	0	0							
	KDH-20	久田原	鍛冶工房方形穴	鉄塊系遺物 (鍛冶系)	中	35×33×19	39	L (•)	0	0	0							
	KDH-21	久田原	鍛冶工房中央穴	<b>椀形鍛冶滓</b>	中世	63×54×19	39	なし	0	0								
	KDH-22	久田原	土壙186	椀形鍛冶滓	中世	139×118×37	823	なし		0	0			0				
	KDH-23	久田原	土壙186	鉄製品	中世	29×28×19	27	L (•)	0	0	0							
	KDH-24	久田原	土壙186	鉄製品	中世	36×11×10	17	L (•)	0	0	0		0					
	KDH-25	久田原	土壙186	鉄塊系遺物	山堆	40×18×10	15	L (•)	0	0	0							
	KDH-26	久田原	土壙186	鉄製品	中庫	15×12×16	8	L (•)	0	0	0							
H14年度	KDH-27	久田原	竪穴住居15	鋳造鉄斧破片	弥生中期	32.5×25×7.5	10.84	銹化(△)	0	0			0					

Table.2(その1)供試材の化学組成

									*	*	*	*	*	*			#.lgloss					<u>ک</u> *				
試料 番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)		酸 化 第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )		ミニウム	ルシウム	酸化マグ ネシウム (MgO)	リウム	トリウム	酸化マ ンガン (MnO)	チタン	酸化ク ロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸 化燐 (P <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	炭素 (C)	バナ ジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	造滓 成分	造滓成分 Total Fe	TiO <sub>2</sub> Total Fe
KTH-1	久田原	製鉄炉1	砂鉄	8c	53.54	0.26	23.06	50.55	9.32	3.81	0.77	0.68	0.34	0.22	0.79	5.46	0.04	0.02	0.38	0.51	0.20	0.006		15.14	0.283	0.102
КТН-3	久田原	製鉄炉1	炉壁	8c	4.33	0.05	1.58	4.36	63.62	17.41	0.47	1.30	2.00	1.20	0.12	0.76	0.02	0.01	0.16	#3.24	0.01	0.001	1260	86.00	19.861	0.176
KTH-4	久田原	製鉄炉1	炉内滓	8c	31.69	0.20	31.61	9.89	26.77	7.09	4.75	1.77	1.03	0.46	0.96	7.68	0.01	0.02	0.74	0.34	0.14	0.003		41.87	1.321	0.242
KTH-6	久田原	製鉄炉1	炉底塊	8c	31.69	0.15	31.32	10.29	29.51	8.11	2.85	1.52	1.21	0.60	0.83	7.72	0.02	0.02	0.43	0.23	0.18	0.002		43.80	1.382	0.244
KTH 10	久田原	製鉄炉1	炉外流出浡	8c	39.92	0.16	45.83	5.91	23.78	5.82	3.22	1.52	0.94	0.40	1.02	7.71	0.02	0.02	0.49	0.17	0.17	0.003		35.68	0.894	0.193
KTH-11	久田原	鍛冶炉 5	鍛冶滓	中世	56.72	0.14	60.70	13.44	14.86	4.02	0.73	0.49	0.79	0.30	0.17	0.96	0.041	0.01	0.16	0.20	0.038	0.004		21.19	0.374	0.017
KTH-12	久田原	鍛冶炉 5	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	57.43	0.09	60.05	15.25	14.87	3.04	0.97	0.42	0.75	0.27	0.18	1.68	0.038	0.02	0.15	0.08	0.088	0.002		20.32	0.354	0.029
KTH-20	久田原	鍛冶炉7	鍛冶滓	中世	60.88	0.12	39.04	43.49	10.08	3.23	0.36	0.28	0.51	0.20	0.02	0.38	0.029	0.05	0.15	0.09	0.014	0.004		14.66	0.241	0.006

Table.2(そ	<b>の</b> 2)	供試材の	化学組成	戓
-----------	-------------	------	------	---

								*	*	*	*	*	*						#:Igloss	;			Σ*			
試料 番号	遺跡名	出上位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸 化 第1鉄 (FeO)	酸 化 第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化 珪 素 (SiO <sub>2</sub> )		酸化カ ルシウム (CaO)			酸化ナ トリウム (Na <sub>2</sub> O)		チタン	디스	硫黄 (S)	五酸 化燐 (P₂O₅)	炭素 (C)	バナ ジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	造滓 成分	造滓成分 Total Fe	TiO <sub>2</sub> Total Fe
KDH-1	久田原	鍛冶工房上層	製錬滓	中世	33.94	0.11	37.96	6.18	30.49	7.74	2.15	1.68	1.58	0.6	0.86	7.19	< 0.01	0.02	0.24	0.09	0.16	0.003		44.24	1.303	0.212
KDH-2	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	49.02	0.13	43.67	21.37	20.57	5.14	1.15	0.62	1.47	0.56	0.08	0.32	<0.01	0.04	0.18	0.48	0.01	0.006		29.51	0.602	0.007
KDH-4	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	58.06	0.08	51.1	26.11	13.2	3.2	0.56	0.35	0.68	0.31	0.07	0.39	< 0.01	0.02	0.15	0.35	0.04	0.004		18.3	0.315	0.007
KDH-8	久川原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓	中世	41.3	0.18	39.19	15.24	26.42	6.74	2.63	0.75	3.01	0.77	0.22	0.85	0.14	0.03	0.27	0.19	0.03	0.007		40.32	0.976	0.021
KDH-9	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓	中世	50.28	0.07	55.86	9.75	22.97	4.94	1.31	0.45	1.29	0.84	0.13	0.76	< 0.01	0.01	0.17	0.15	0.02	0.002		31.8	0.632	0.015
KDH-10	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓(含鉄)	中世	50	5.4	44.32	14.51	23.78	5.01	0.84	0.48	1.4	0.66	0.05	0.19	0.02	0.06	0.11	0.47	< 0.01	0.006		32.17	0.643	0.004
KDH-15	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	31.91	0.06	34.5	7.2	39.59	8.79	1.71	0.82	3.14	1.4	0.09	0.44	0.01	0.01	0.2	0.16	< 0.01	0.006		55.45	1.738	0.014
KDH-16	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶淬	中世	57.43	0.08	55.14	20.72	13.9	3.15	0.73	0.41	0.83	0.35	0.33	2.06	< 0.01	0.02	0.15	0.13	0.04	0.003		19.37	0.337	0.036
KDH-17	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	57.85	0.06	49.94	27.13	13.64	3.13	0.64	0.35	0.79	0.34	0.05	0.23	< 0.01	0.02	0.08	0.23	0.02	0.005		18.89	0.327	0.004
KDH-18	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	44.46	0.1	49.66	8.24	28.4	6.32	1.4	0.71	2	0.78	0.12	0.59	0.07	0.02	0.17	0.12	0.01	0.003		39.61	0.891	0.013
KDH-22	久田原	上壙186	椀形鍛冶滓	中世	36.82	0.05	33.99	14.8	32.81	7.84	2.2	0.92	2,23	0.95	0.1	0.47	0.01	0.04	0.28	0.17	0.01	0.006		46.95	1.275	0.013

Table.3(その1)出土遺物の調査結果のまとめ

	がて 単様々 山口			444.11				i	淵 作	項日	1			
符号	遺構名	出上位置	遺物名称	推定 年代	顕微鏡組織	Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	塩基性 成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス 質成分	Cu	所 見
KTH-1	久田原遺跡	製鉄炉1	砂鉄	8c	被熱砂鉄粒子, (M粒子、I粒子)	53.54	50.55	1.45	5.46	0.20	0.79	15.14	0.006	酸化砂鉄と塩基性砂鉄の境界組成
KTH-2	久田原遺跡	製鉄炉1	砂鉄焼結塊	8c	半還元砂鉄粒子	-	-	-	-	-	-	-	-	酸化砂鉄と塩基性砂鉄の境界組成
KTH-3	久田原遺跡	製鉄炉 1	炉櫈	8c	胎土溶融部 F+M、H	4.33	4.36	1.77	0.76	0.01	0.12	86.00	0.001	3.8%Al₂O₂-1.8%塩基性成分、耐火度1260℃(製鉄炉向き粘上)
KTH-4	久川原遺跡	製鉄炉1	製錬滓(炉内滓)	8c	U+F	31.69	9.89	6.52	7.68	0.14	0.96	41.87	0.003	砂鉄製錬滓
KTH-5	久田原遺跡	製鉄炉1	製錬滓(含鉄炉内滓)	8c	UとM混在、F微細化	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄製錬滓
KTH-6	久川原遺跡	製鉄炉1	製錬滓(炉底塊)	8c	U+F	31.69	10.29	4.37	7.72	0.18	0.83	43.80	0.002	砂鉄製錬滓
KTH-7	久田原遺跡	製鉄炉1	鉄塊系遺物	8c	針状C+L	-	-	-	-	-	-	-	-	過共析鋼と亜共品組成の高炭素鋼
KTH-8	久田原遺跡	製鉄炉1	鉄塊系遺物	8c	Mar組織と亜共晶組成白鋳鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	水冷履歴の高炭素鋼
KTH-9	久田原遺跡	製鉄炉 1	黒鉛化木炭	8c	U+W(粒内Fe-Ti析出物)、銹化鉄	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄が木炭に置換した遺物、スラグ分付着
KTH-10	久川原遺跡	製鉄炉1	製錬滓 (炉外流出滓)	8c	U+F	39.92	5.91	4.74	7.71	0.17	1.02	35.68	0.003	砂鉄製錬滓
KTH-11	久田原遺跡	鍛冶炉5	鍛冶滓	中世	W+F	56.72	13.44	1.22	0.96	0.038	0.17	21.19	0.004	沸し鍛接、鍛錬鍛冶滓
KTH-12	久田原遺跡	鍛冶炉5	椀形鍛冶滓 (含鉄)	山山柱	W(粒内:Fe-Ti化合物)+F、Go	57.43	15.25	1.39	1.68	0.088	0.18	20.32	0.002	精鍊鍛冶滓
KTH-13	久田原遺跡	鍛冶炉5	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	F+微小W、亜共晶組成白鋳鉄と過共析鋼	-	-	-	-	-	-	-	-	素延べ鍛錬鍛冶滓
KTH-14	久田原遺跡	鍛冶炉5	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	MorU、介在物FeS(含Ti) 共析鋼クラス	-	-	-	-	-	-	-	-	高炭素鋼 ( 刈金 ) 充当鍛冶 ( 砂鉄系素材 )
KTH-15	久田原遺跡	鍛冶炉5	鉄片	中世	介在物:W、F、G 亜共析鋼~共析鋼	-	-	-	-	-	-	-	-	一部脱炭部をもつ硬鋼クラス半製品(砂鉄系)
KTH-16	久田原遺跡	鍛冶炉5	粒状滓	山世	Wと一部M共存品出	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打作業派生物
KTH-17	久田原遺跡	鍛冶炉5	鍛造剥片	中世	0.5mm以上は鍛冶滓の皮、W	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打作業派生物 0.3mm以下は鍛造剥片
KTH-18	久川原遺跡	鍛冶炉5	微細鍛冶関連遺物	中世	0.05~0.16mm粒状滓、0.07~0.1mm鍛造剥片	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打作業派生物 0.15mm以下の微細遺物確認
KTH-19	久田原遺跡	鍛冶炉7	椀形鍛冶滓	中世	W凝集、表裏薄膜ガラス	-	-	-	-	-	-	-	-	廃鉄器原料の処理滓か
KTH-20	久田原遺跡	鍛冶炉7	鍛冶滓	山山峠	W+F	60.88	43.49	0.64	0.38	0.014	0.02	14.66	0.004	廃鉄器原料の処理滓か
KTH-21	久HI原遺跡	鍛冶炉7	鉄製品	中世	P+Fe,亜共析鋼(介在物R系か)	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鉄製品:器種特定不明
KTH-22	久Ⅲ原遺跡	鍛冶炉7	鉄製品 (刀子茎?)	中世	P+Fe,亜共析鋼(介在物R系か)	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鉄製品:高炭素系心金部分丸鍛え
KTH-23	久田原遺跡	鍛冶炉7	鉄製品	中世	P+Fe, 亜共析鋼表層高炭、中央低炭域	-	-	-	-	-	-	-	-	浸炭処理製品
KTH-24	久川原遺跡	鍛冶炉7	鉄釘	中世	P 共析鋼(介在物UかR)	-	-	-	-	-	-	-	-	頭部直角曲げで家釘の一種か、高炭素鋼使用
KTH-25	久田原遺跡	鍛冶炉7	鉄製品	中世	P 共析鋼(介在物UかR)	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系鉄製品、高炭素鋼
KTH-26	久田原遺跡	鍛冶炉7	粒状滓	山岬	W凝集	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打作業派生物の粒状滓
KTH-27	久田原遺跡	鍛冶炉7	鍛造剥片	中世	W粒状~非晶質	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛打作業派生物 0.4mm以下は鍛造剥片
KTH-28	久田原遺跡	鍛冶炉7	微細鍛冶関連遺物	中世	002~0.12mm鍛造剥片(W)品出	-	-	-	-	-	-	-		鍛打作業派生物 0.12mm以下の微細遺物確認
KTH-29	久田原遺跡	土壙218	椀形鍛冶滓	中世	W+F	-	-	-	-	-	-	-	-	沸し鍛接、鍛錬鍛冶滓
KTH-30	久田原遺跡	土.壙218	含鉄鉄滓	मिर्मि	表層銹化鉄P少量、大部分はP+初析C	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶系鉄塊、高炭素鋼
KTH-31	久田原遺跡	土壙218	含鉄鉄滓	中世	表層滓F+W、鉄部P、P+C	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶系鉄塊、高炭素鋼
KTH-32	久田原遺跡	上壙217	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	表層滓W+F、金属鉄P+L	-	-	-	-	-	-		-	下げ精錬鍛冶滓、亜共晶組成白鋳鉄含み
KTH-33	久田原遺跡	土壙217	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	表層滓W+F、鉄部F・P、P	-	-	-	-	-	-	-	-	636 g 大型滓、上面中窪み、精錬鍛冶滓か
KTH-34	久田原遺跡	土壙217	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	表層滓W+F、鉄部P、共析鋼	-	-	-	-	-	-	-	-	890g大型滓精錬鍛冶滓か

Ma:Magnetite (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・FeO)、I:Imenite(FeO·TiO<sub>2</sub>)、F:Fayalite(2FeO·SiO<sub>2</sub>) ,M:Magnetite(Fe<sub>3</sub>O<sub>3</sub>) ,H:Hercynite(FeO·Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 、 U:Ulvöspinel(2FeO·TiO<sub>2</sub>)、C:Cementite(Fe<sub>3</sub>C)、L:Ledeburite(パーライトとセメンタイトの共晶) Mar:Martensite (硬い麻の葉模様の針状組織)、W:Wüstite(FeO)、G:Goethite(α – FeO・OH)、P:Pearlite(フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織)

Table.3(その2)出土遺物の調査結果のまとめ

ASSET NOTALIS AS				+#+,',				Ē	<b>測</b> 企	項日				
符号	遺構名	出上位置	遺物名称	推定 年代	<b>顕微鏡組織</b>	Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	塩基性 成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	ガラス 質成分	Cu	所 見
KDH-1	久田原	鍛冶工房上層	製錬滓	中世	U+F、金属鉄粒	33.94	6.18	3.83	7.19	0.16	0.86	44.24	0.003	砂鉄製錬滓、鍛冶原料鉄共伴滓か
KDH-2	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	山頂	W+F、Fe・P鉄粒付着鍛造剥片	49.02	21.37	1.77	0.32	0.01	0.08	29.51	0.006	砂鉄系沸し鍛接鍛錬鍛冶滓
KDH-3	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	W+F、亜共析鋼銹化鉄									砂鉄系沸し鍛接鍛錬鍛冶滓
KDH-4	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	W+F、亜共析鋼銹化鉄	58.06	26.11	0.91	0.39	0.04	0.07	18.30	0.004	砂鉄系沸し鍛接鍛錬鍛冶滓
KDH-5	久田原	鍛冶工房上層	椀形鍛冶滓	中世	W (Fe-Ti化合物析出) +U+F									砂鉄系精錬鍛冶最終段階もしくは鍛錬鍛冶初期
KDH-6	久田原	鍛冶工房上層	鉄塊系遺物	中世	滓:W+U+F、金属鉄、Fe~全面P									砂鉄系精錬鍛冶を経た鉄塊
KDH-7	久田原	鍛冶工房上層	鉄塊系遺物	中世	滓:W、介在物(R系)、而共析組成									砂鉄系鍛冶鉄塊
KDH-8	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓	山山原	W (Fe-Ti化合物) +U+F	41.30	15.24	3.38	0.85	0.03	0.22	40.32	0.007	砂鉄系精錬鍛冶最終段階もしくは鍛錬鍛冶初期
KDH-9	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓	中世	W+F	50.28	9.75	1.76	0.76	0.02	0.13	31.80	0.002	KDH-8よりも後発排滓
KDH-10	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	滓:W+F、亜共析~共析鋼	50.00	14.51	1.32	0.19	<0.01	0.05	32.17	0.006	砂鉄系沸し鍛錬鍛冶滓、落下鉄含み
KDH-11	久田原	鍛冶工房下層	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	浡:W+F、亜共析~共析鋼									砂鉄系沸し 鍛錬鍛冶滓、落下鉄含み
KDH-12	久田原	鍛冶工房下層	鉄塊系遺物	山山原	滓:W+F、片状黒鉛、L									砂鉄系銑鉄(ねずみ鋳鉄と白鋳鉄混在)
KDH-13	久HI原	鍛冶工房下層	粒状滓	中世	W凝集、W+M									3.6~0.6mm径粒状滓鍛打作業派生物
KDH-14	久田原	鍛冶工房下層	鍛造剥片:	中世	W非晶出									0.45~0.15mm鍛造剥片鍛打後半段階派生物
KDH-15	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	W+F	31.91	7.20	2.53	0.44	<0.01	0.09	55.45	0.006	砂鉄系鍛錬鍛冶滓粘上汁多用
KDH-16	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	W(Fe-Ti化合物)	57.43	20.72	1.14	2.06	0.04	0.33	19.37	0.003	砂鉄系精錬鍛冶滓
KDH-17	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	W+F	57.85	27.13	0.99	0.23	0.02	0.05	18.89	0.005	砂鉄系沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓
KDH-18	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓	中世	W+F、鉄粒Fe地にP少量	44.46	8.24	2.11	0.59	0.01	0.12	39.61	0.003	精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界的鍛錬鍛冶滓
KDH-19	久田原	鍛冶工房方形穴	椀形鍛冶滓 (含鉄)	中世	W+F、含鉄共析鋼主体									沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓
KDH-20	久田原	鍛冶工房方形穴	鉄塊系遺物 (鍛冶系)	山川原	表皮スラグW+F、鉄部、Fe、B、P、Ce									鍛冶系鉄塊炭素含有量バラツキ
KDH-21	久田原	鍛冶工房中央穴	椀形鍛冶滓	中世	W+F (W凝集部分的)									沸し鍛接、鍛錬鍛冶滓
KDH-22	久田原	上壙186	椀形鍛冶滓	中世	W+F (F量增大)	36.82	14.80	3.12	0.47	0.01	0.10	46.95	0.006	823gの大型滓で上面中窪みで精錬鍛冶的、ただし脈石成分は高くない
KDH-23	久田原	土壙186	鉄製品	中世	針状C、P、針状フェライト									表層浸炭鉄器の可能性
KDH-24	久川原	上壙186	鉄製品	中世	介在物R、Fe、P									方形断面合せ鍛接鉄製品心金亜共析鋼充当
KDH-25	久田原	土壙186	鉄塊系遺物	中世	表皮スラグ、W+微細F、鉄部Fe・B									未鍛打鍛冶系鉄塊
KDH-26	久田原	土塘186	鉄製品	11##	介在物:W+H,、Fe・B									軟鋼素材の心金部分 (廃鉄器か)
KDH-27	久田原	竪穴住居15	鋳造鉄斧破片	弥生中期	銹化鉄、塊状黑鉛、P素地									可鍛鋳鉄製品破片(脱炭焼きなまし製品)

U:Ulv spinel(2FeO・TiO<sub>2</sub>)、F:Fayalite(2FeO・SiO<sub>2</sub>)、W:W stite(FeO)、Fe:Ferrite(α鉄もしくは純鉄)、P:Pearlite(フェライトとセメンタイトが交互に重なりあって構成された層状組織)、R:Rutile(TiO<sub>2</sub>)、M:Magnetite(Fe<sub>2</sub>O<sub>4</sub>)、B:Bainite(フェライト地に分散した炭化物で構成される)、Ce:Cementite(Fe<sub>2</sub>C)

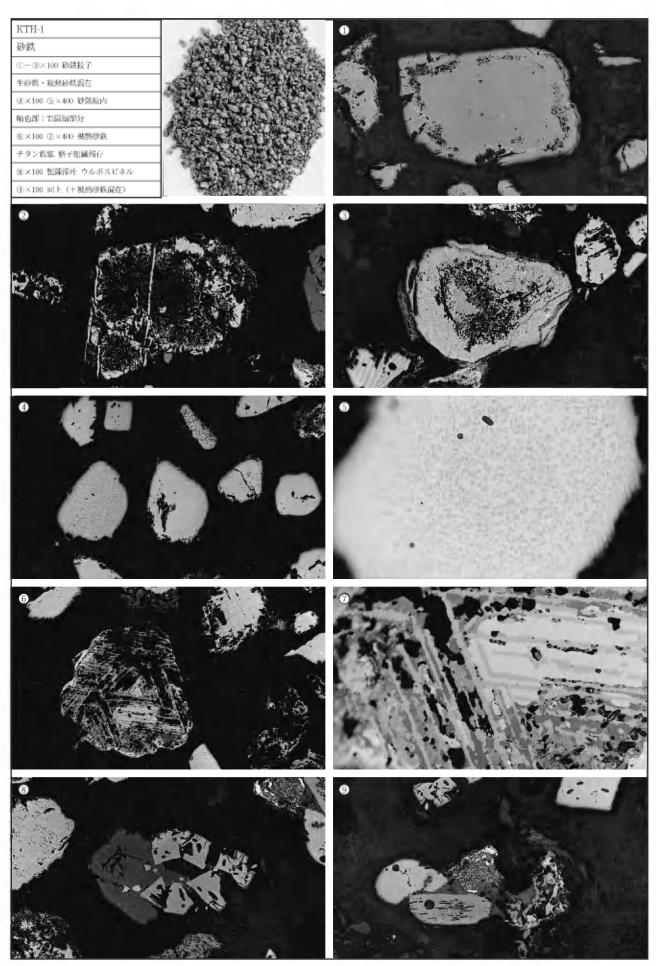


Photo.1 砂鉄の顕微鏡組織

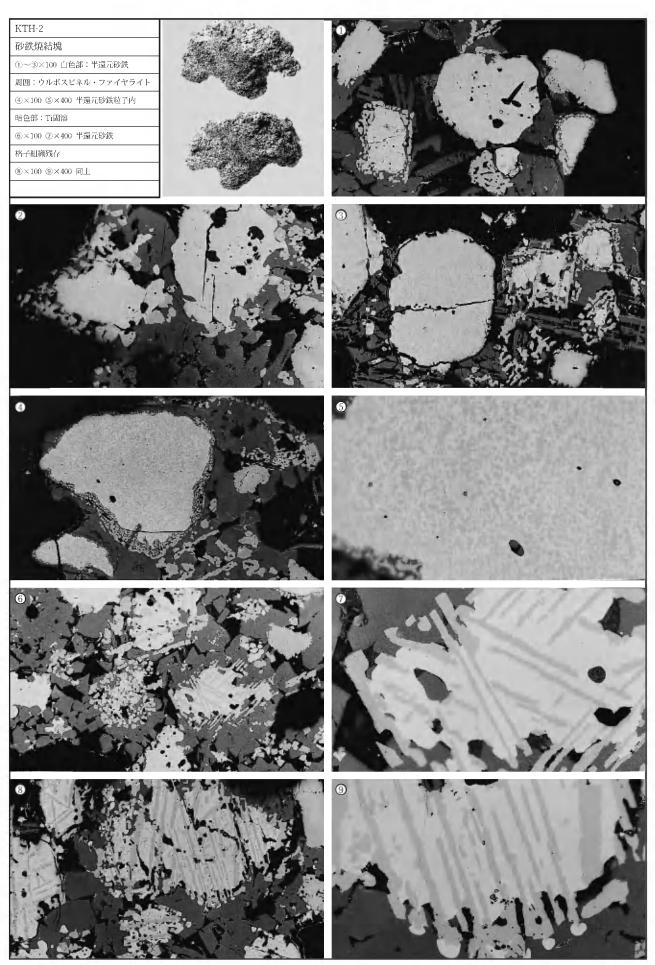


Photo.2 砂鉄焼結塊の顕微鏡組織

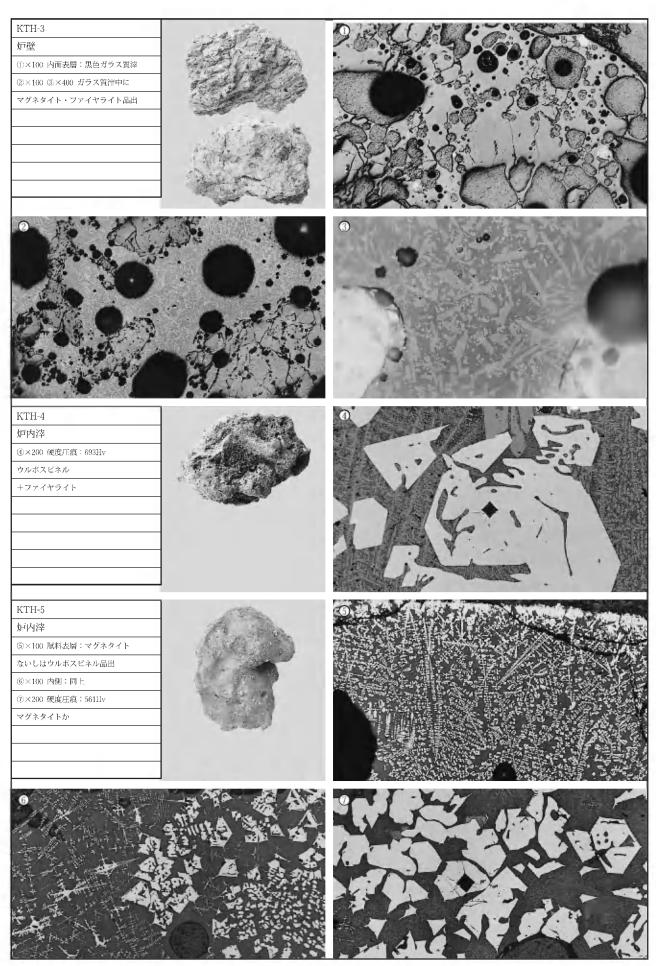


Photo.3 炉壁・炉内滓の顕微鏡組織

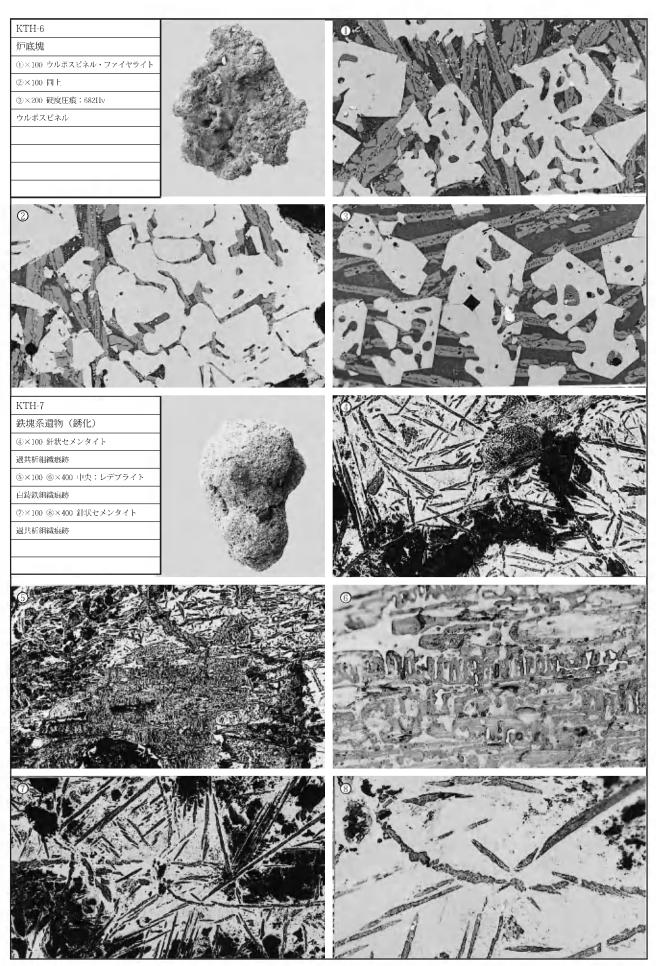


Photo.4 炉底塊・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

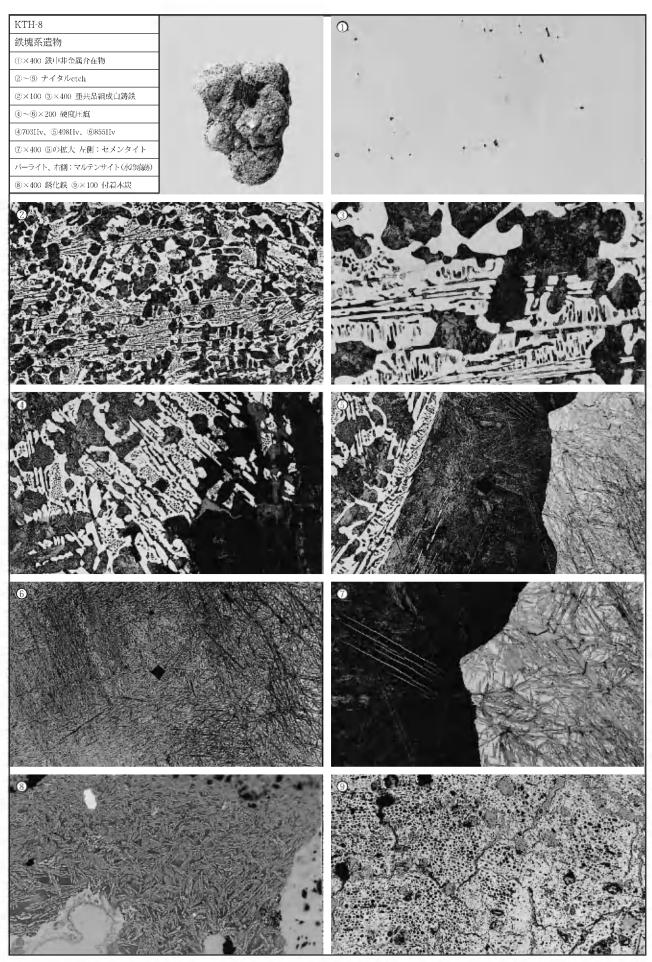


Photo.5 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

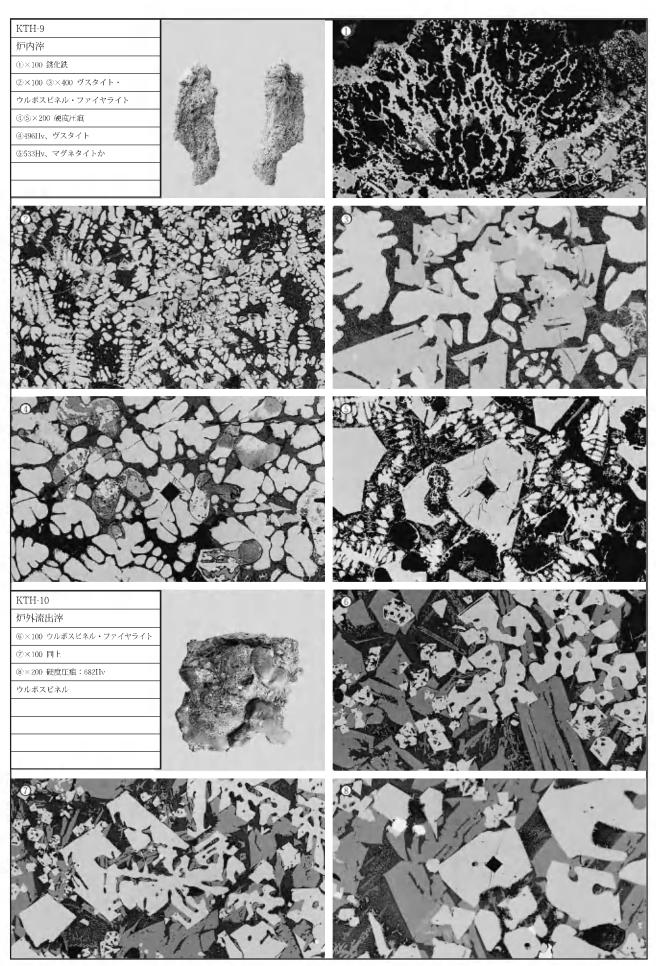


Photo.6 炉内滓・炉外流出滓の顕微鏡組織

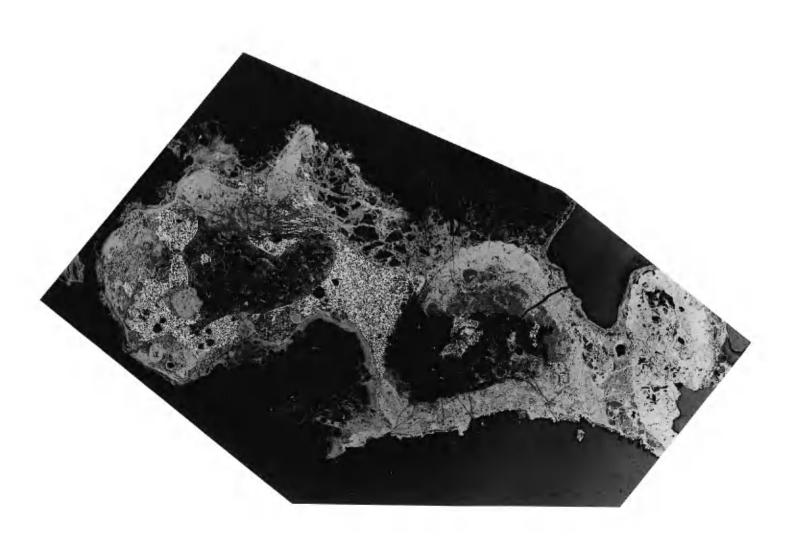


Photo.7 鉄塊系遺物 (KTH-8) のマクロ組織 (×10)

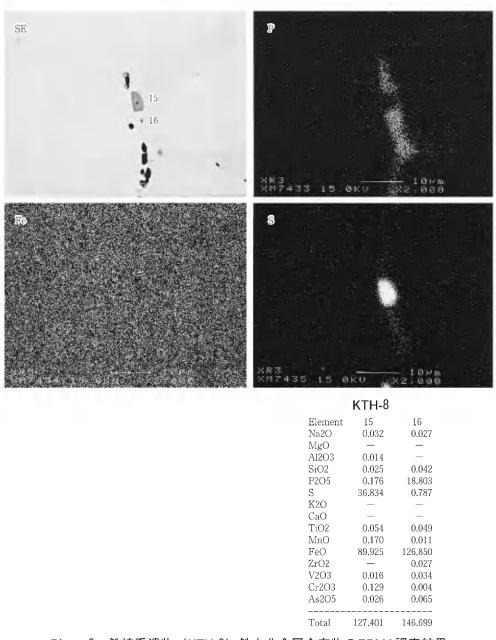


Photo.8 鉄塊系遺物(KTH-8)鉄中非金属介在物のEPMA調査結果

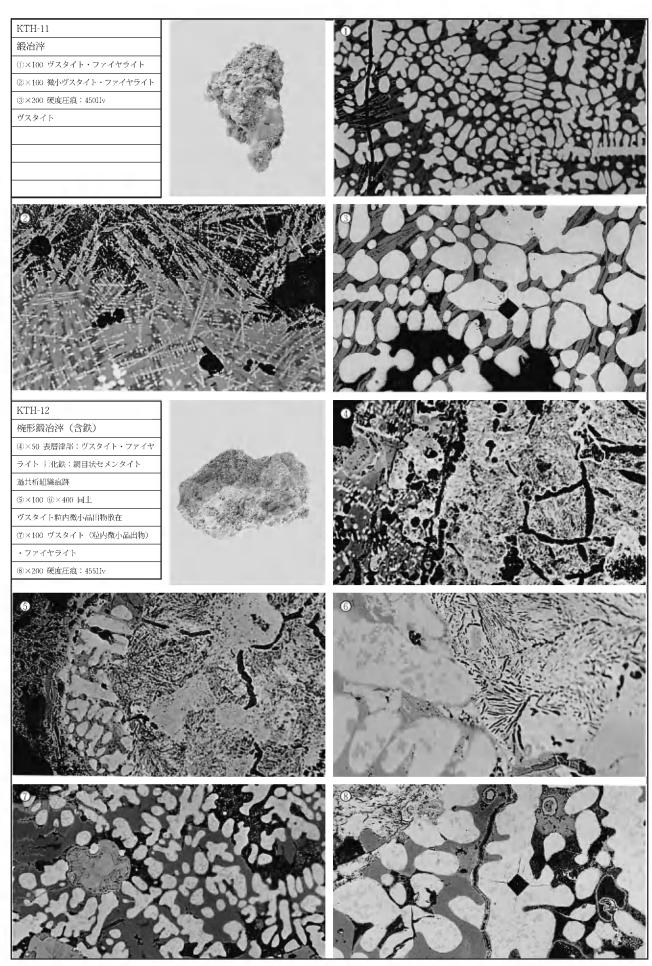


Photo.9 鍛冶滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

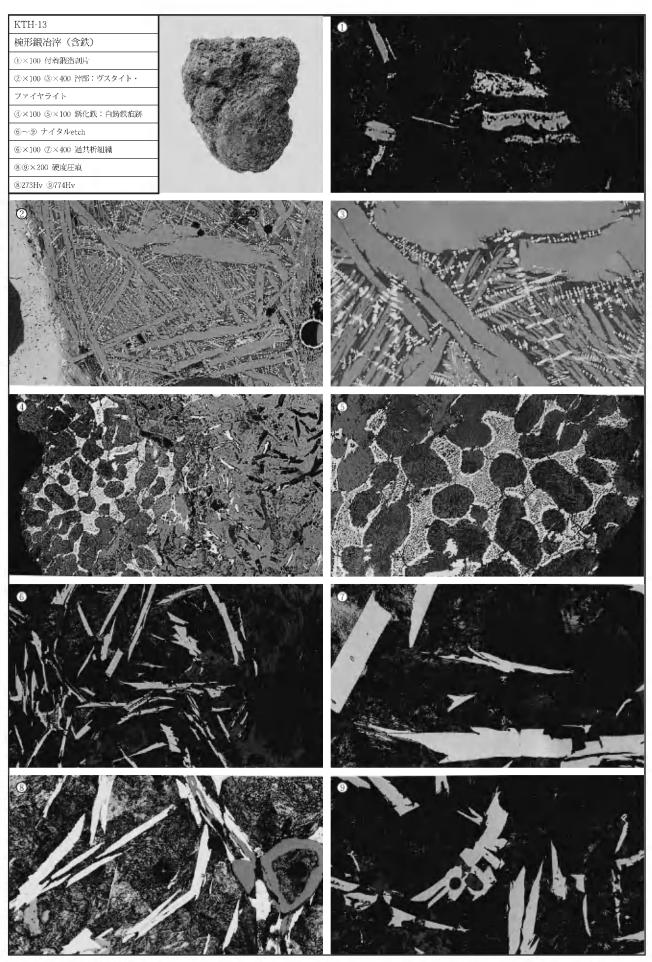


Photo.10 椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

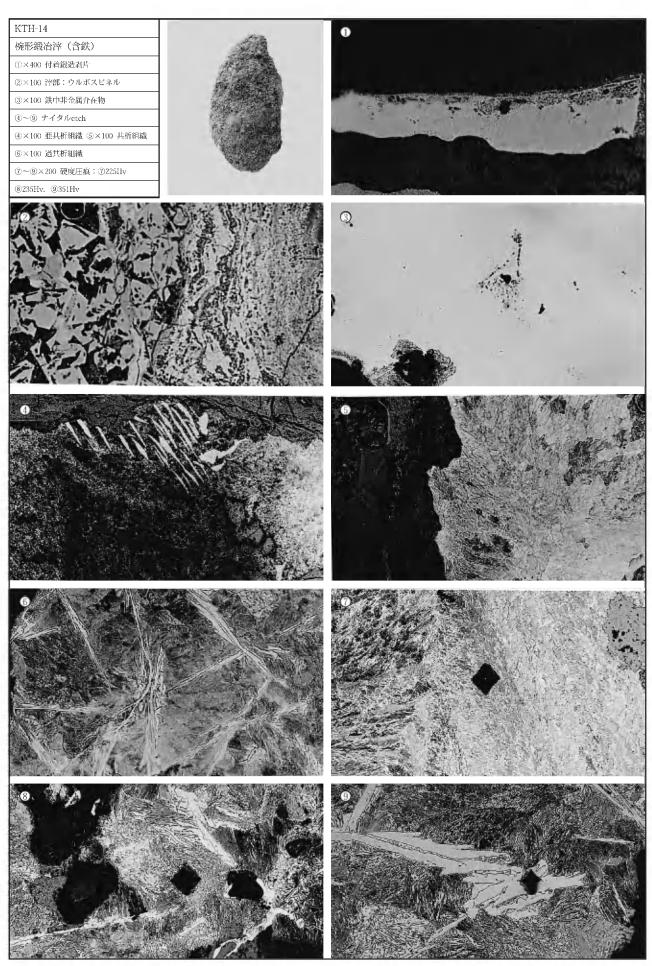


Photo.11 椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

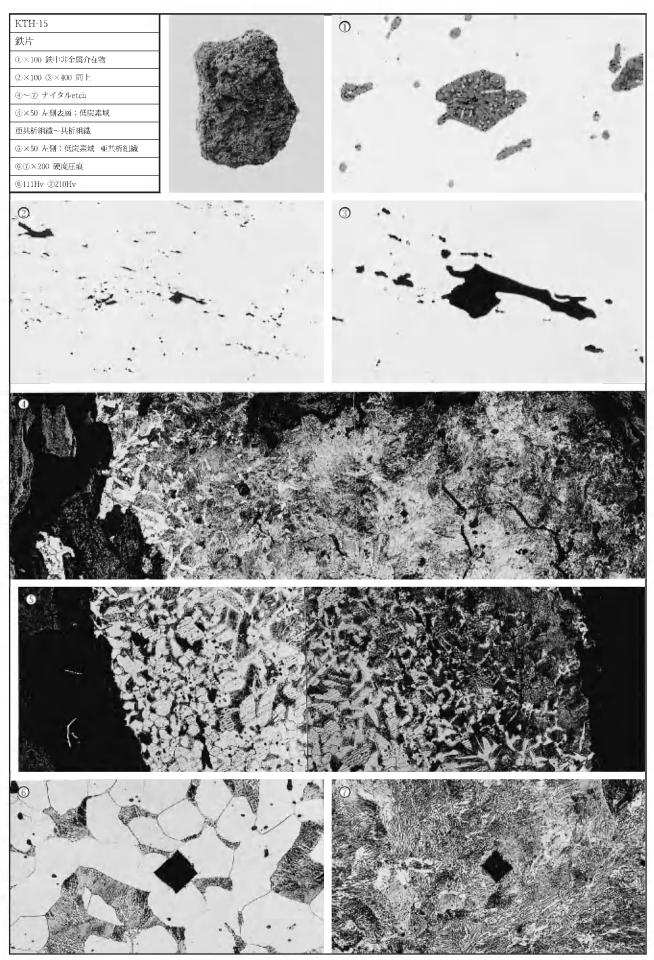


Photo.12 鉄片の顕微鏡組織

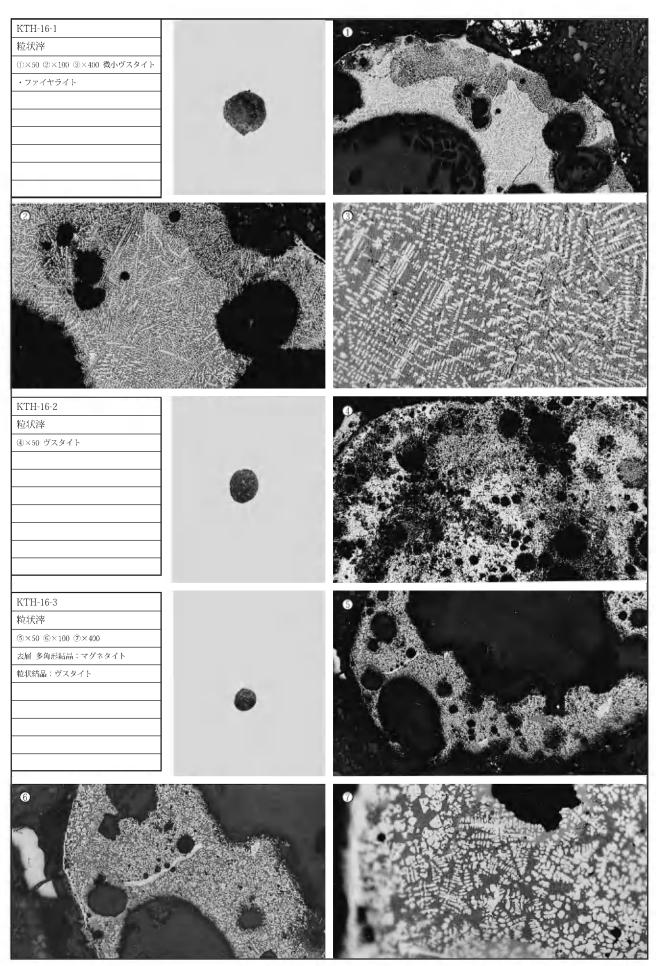


Photo.13 粒状滓の顕微鏡組織

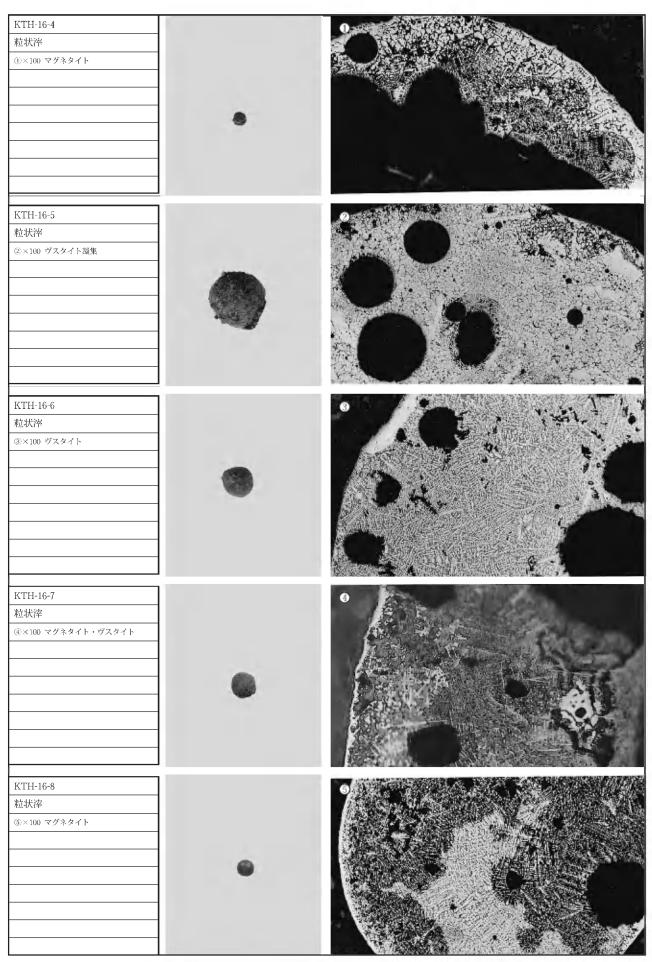


Photo.14 粒状滓の顕微鏡組織

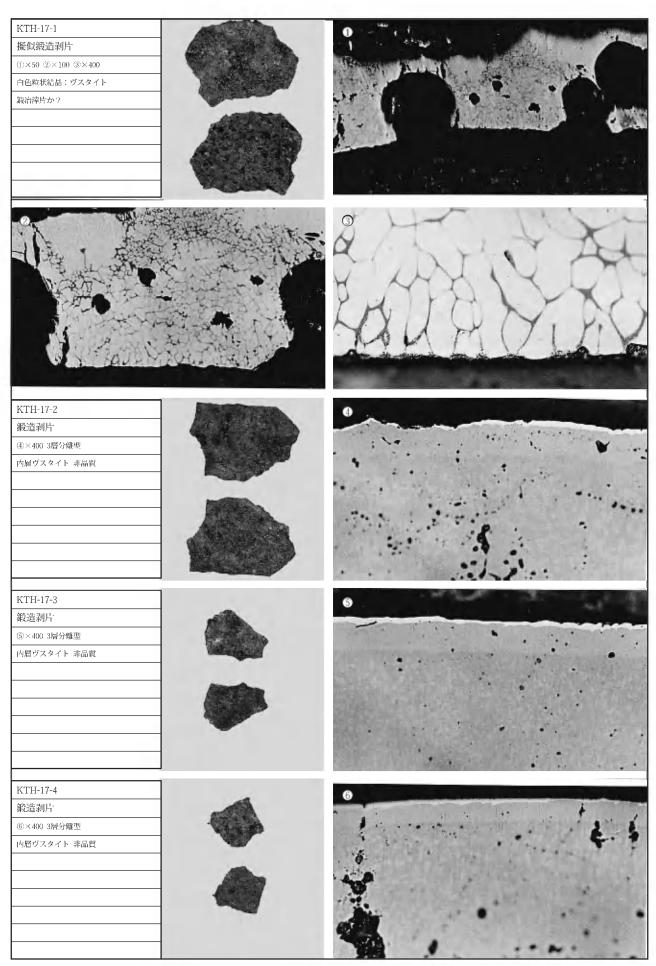


Photo.15 鍛造剥片の顕微鏡組織

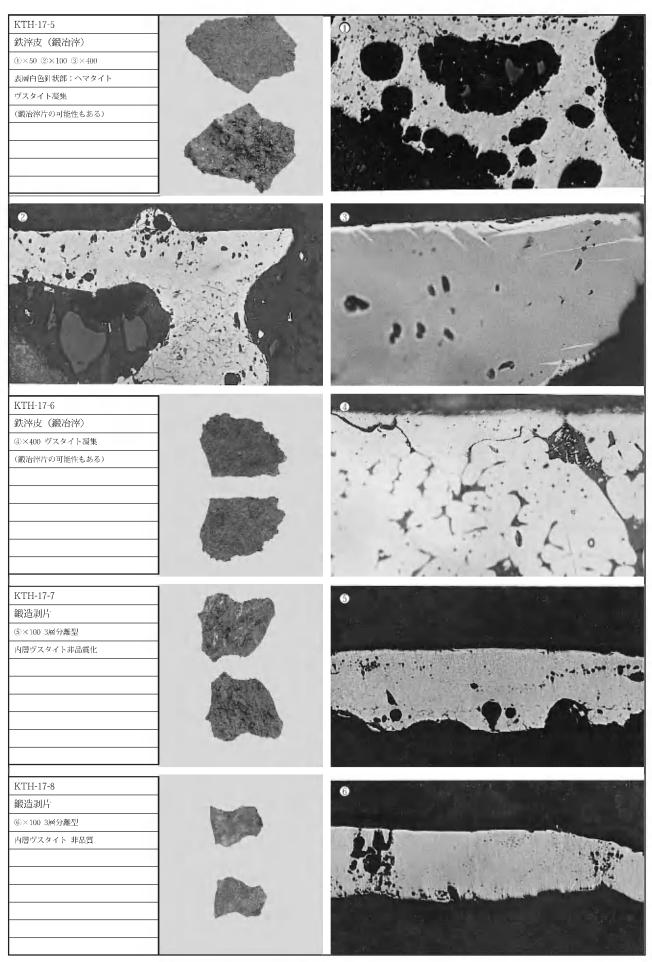


Photo.16 鍛造剥片の顕微鏡組織

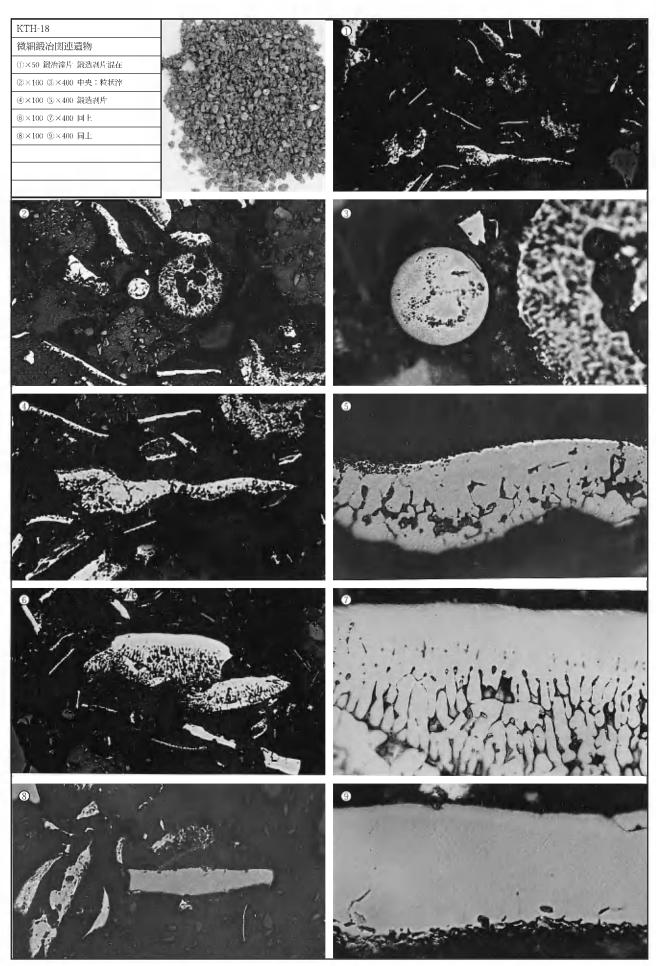


Photo.17 微細鍛冶関連遺物の顕微鏡組織

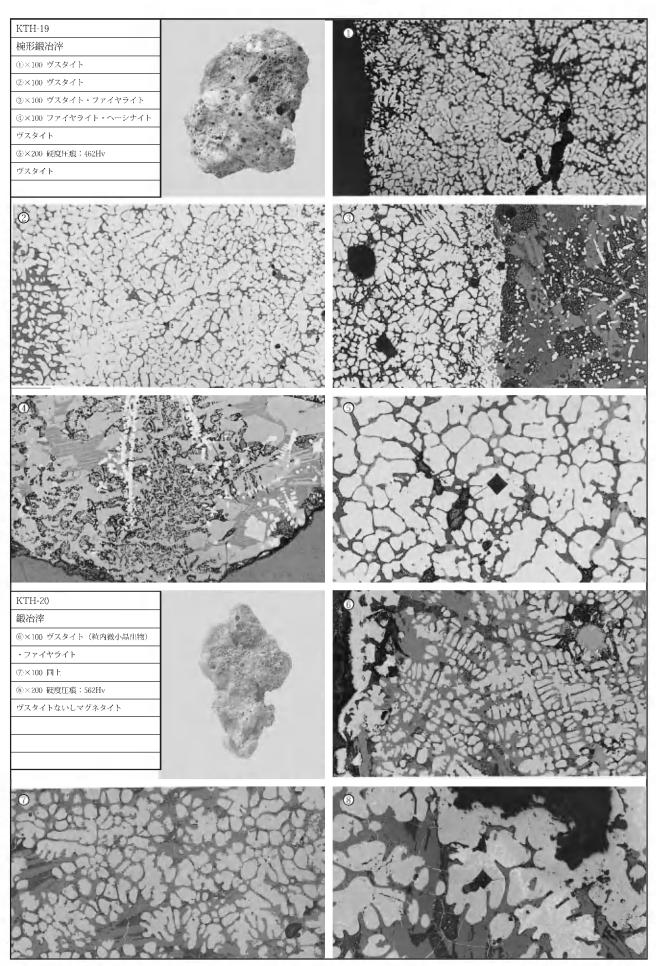


Photo.18 椀形鍛冶滓・鍛冶滓の顕微鏡組織

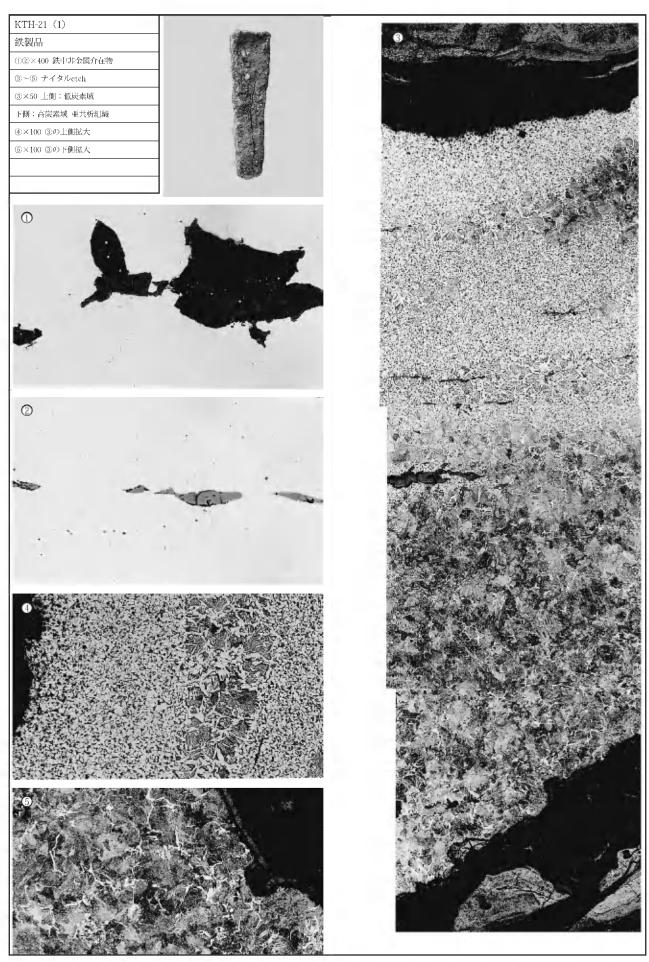


Photo.19 鉄製品の顕微鏡組織

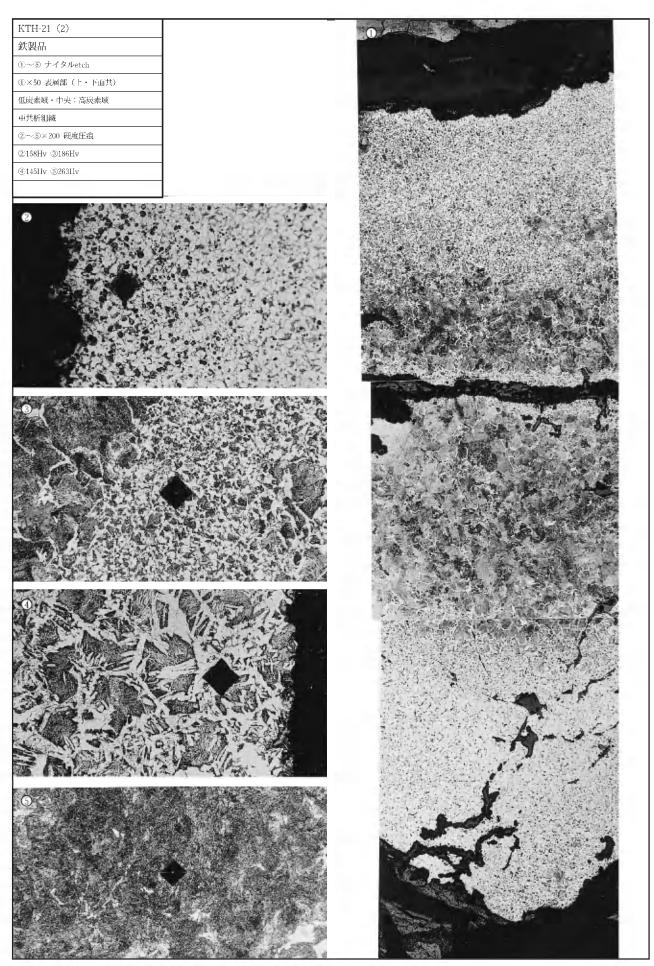


Photo.20 鉄製品の顕微鏡組織

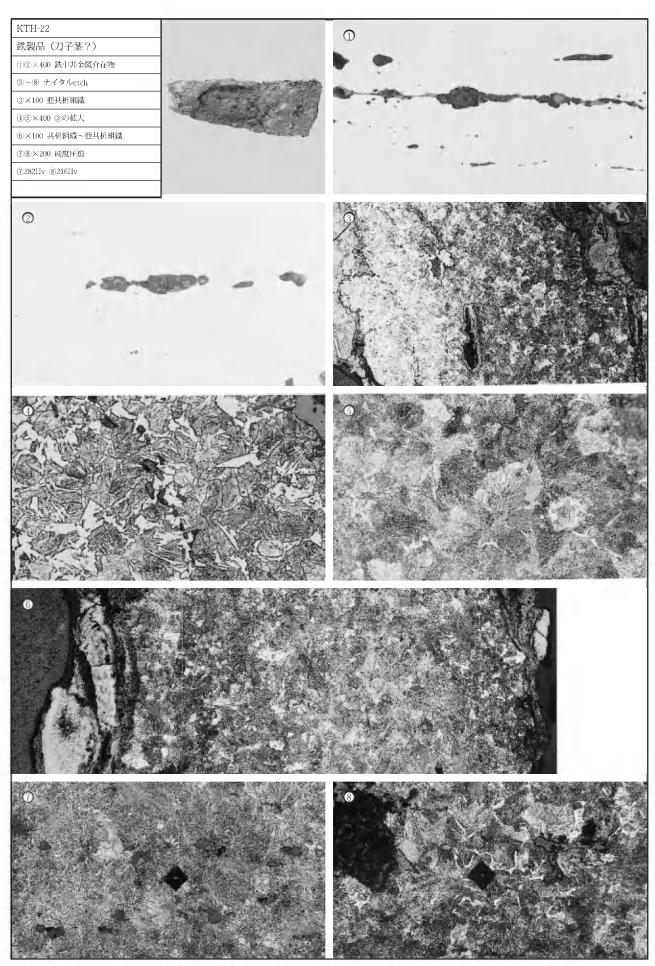


Photo.21 鉄製品(刀子茎?)の顕微鏡組織

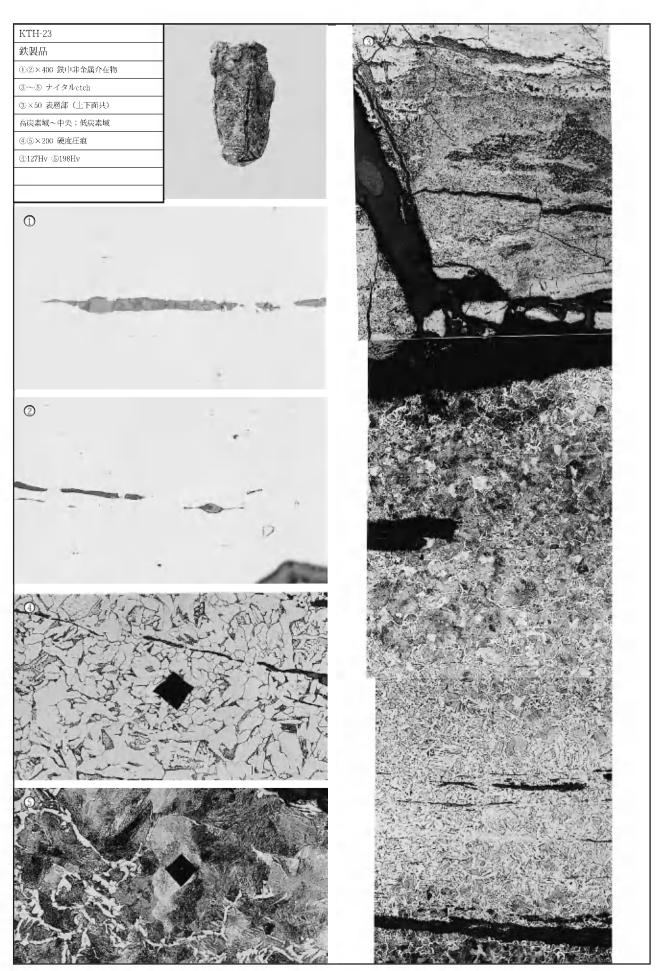


Photo.22 鉄製品の顕微鏡組織

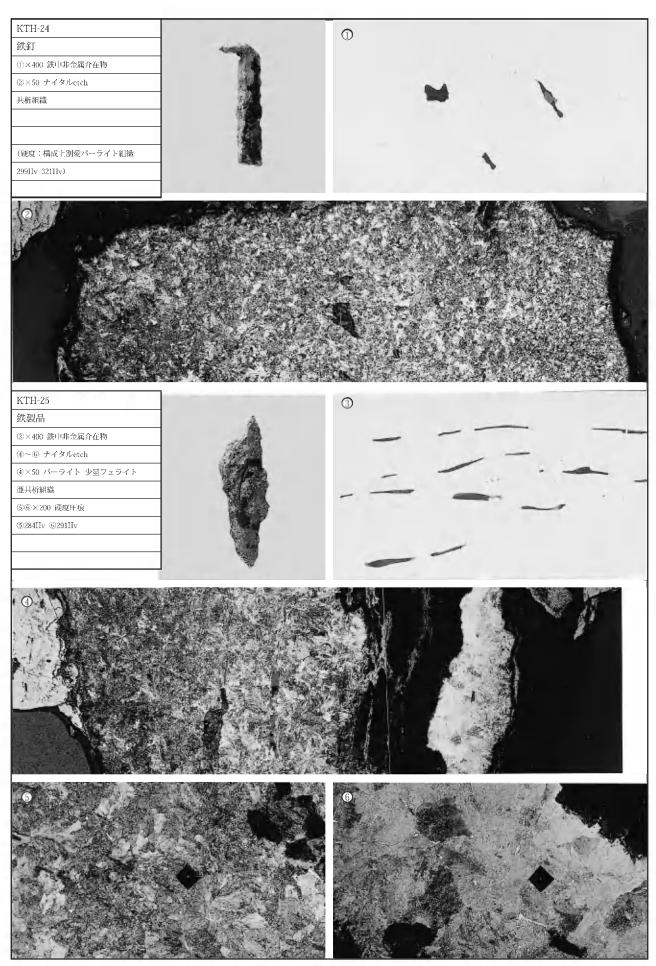


Photo.23 鉄釘・鉄製品の顕微鏡組織

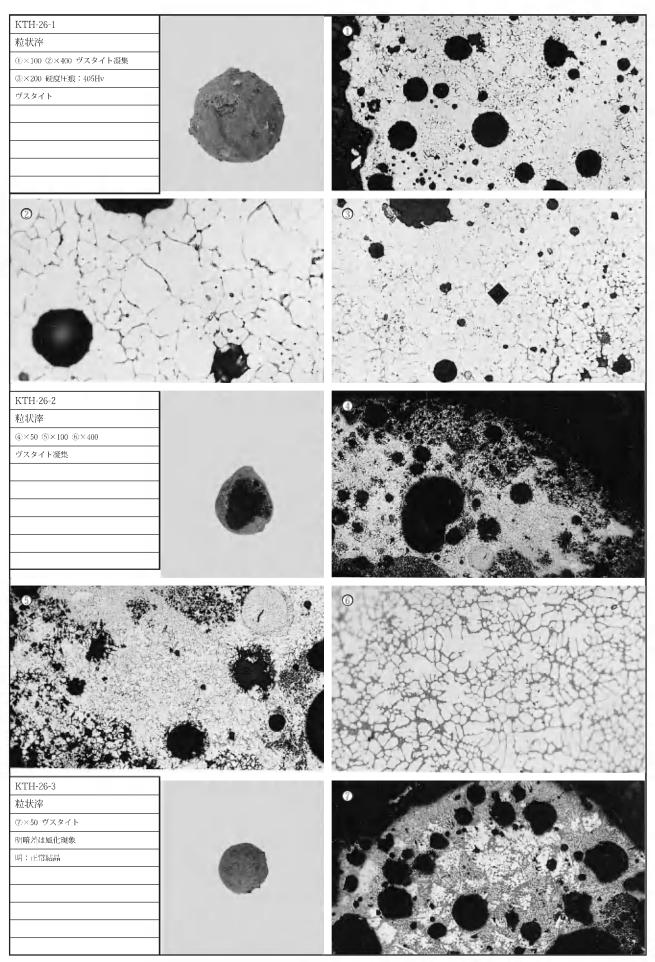


Photo.24 粒状滓の顕微鏡組織

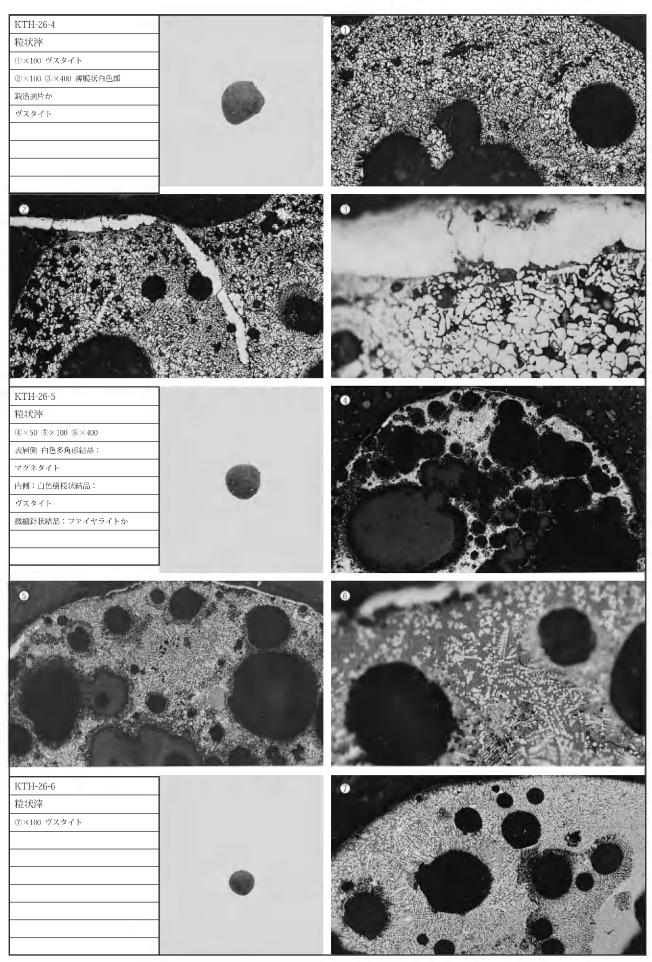


Photo.25 粒状滓の顕微鏡組織

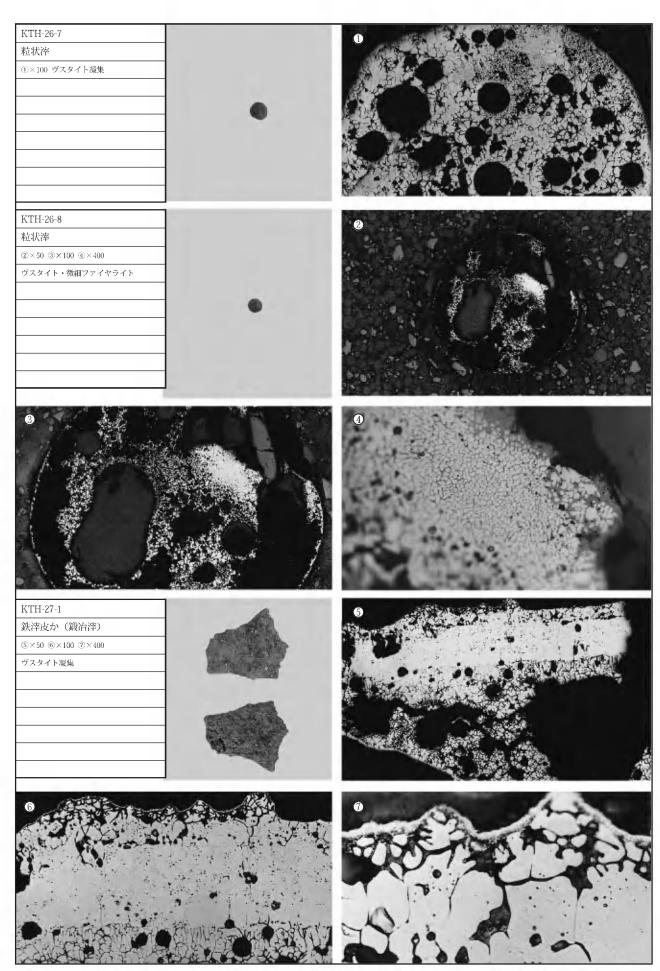


Photo.26 粒状滓・鍛造剥片の顕微鏡組織

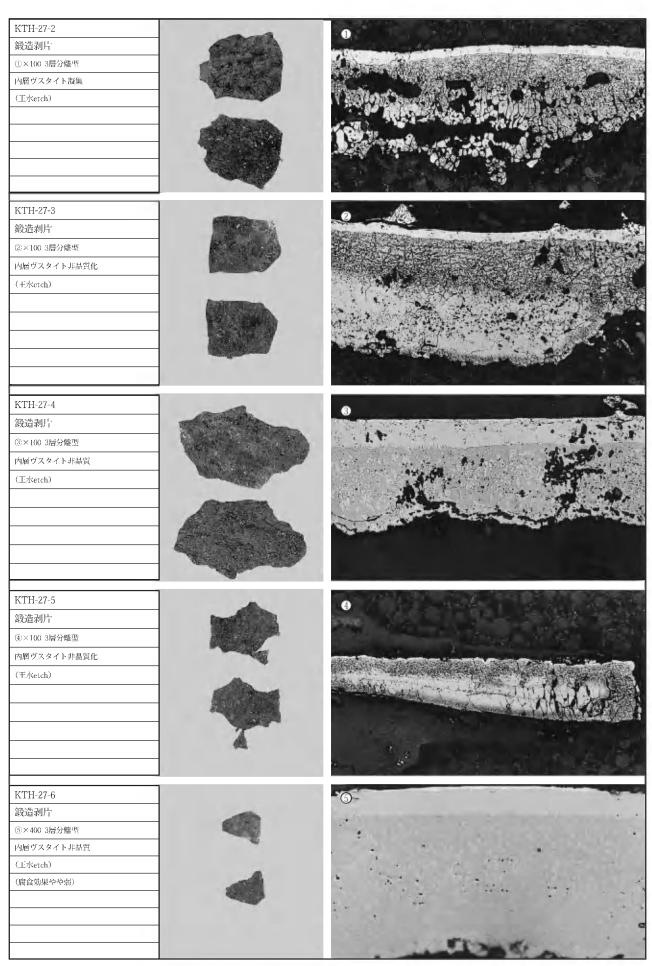


Photo.27 鍛造剥片の顕微鏡組織

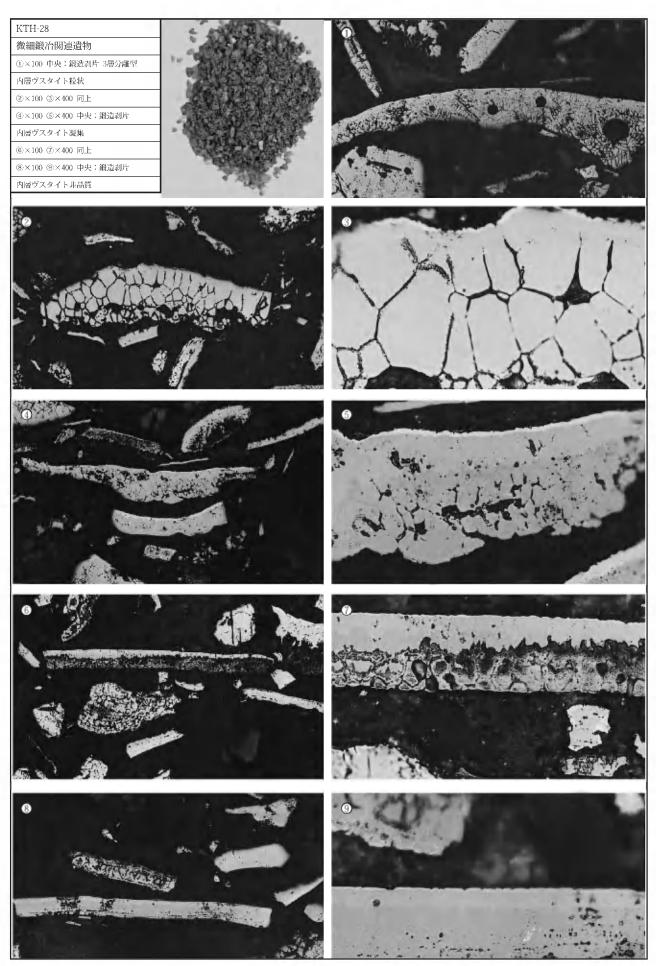


Photo.28 微細鍛冶関連遺物の顕微鏡組織

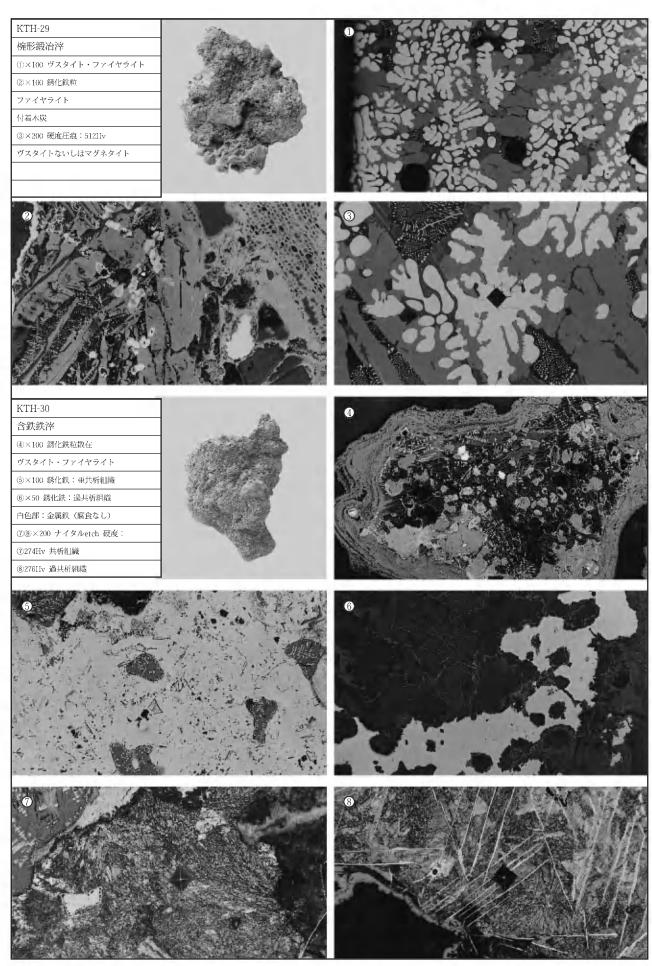


Photo.29 椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓の顕微鏡組織

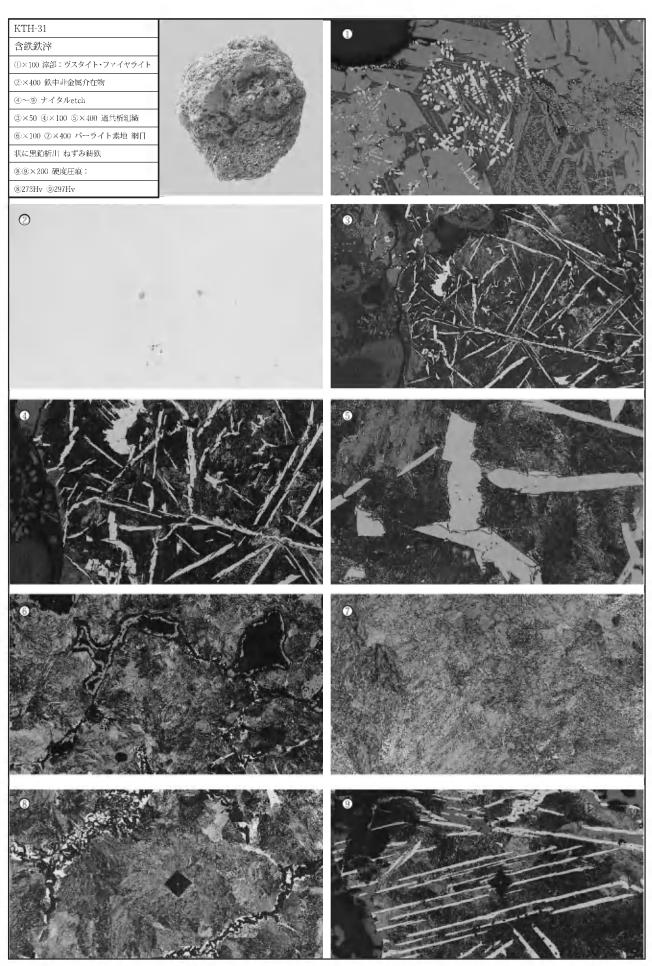


Photo.30 含鉄鉄滓の顕微鏡組織

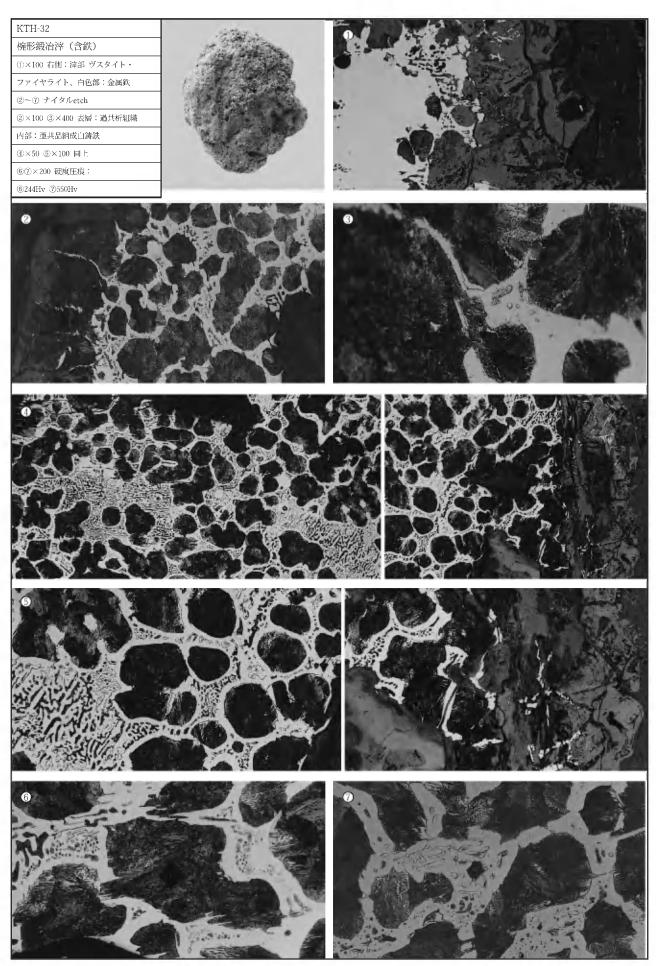


Photo.31 椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

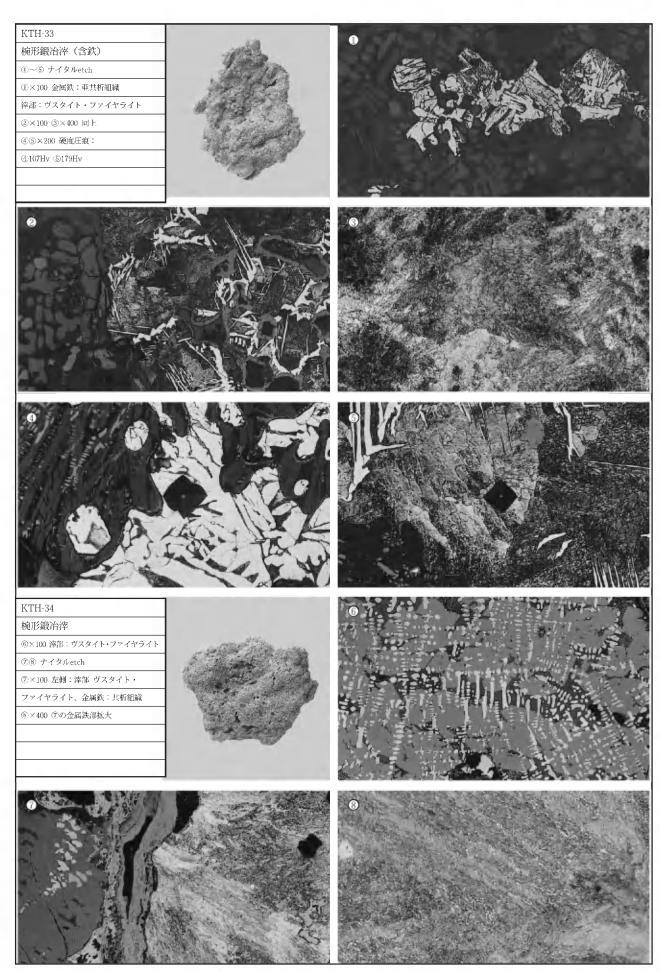


Photo.32 椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

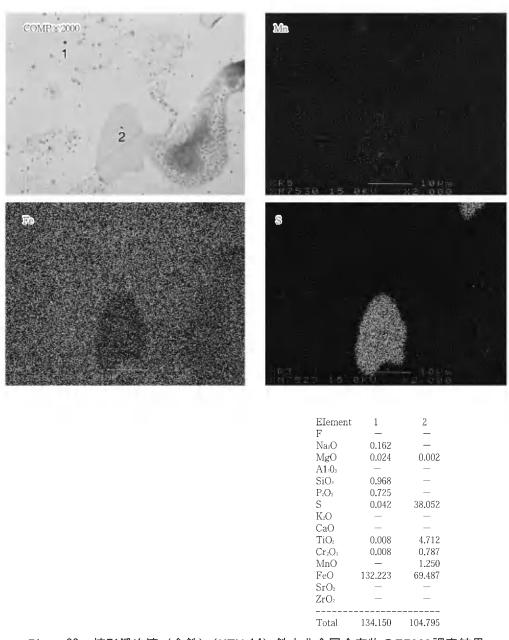
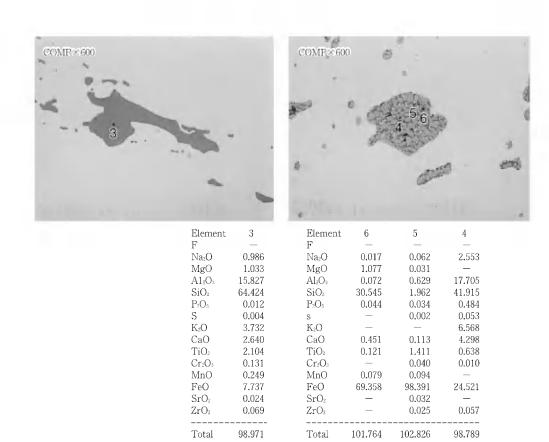
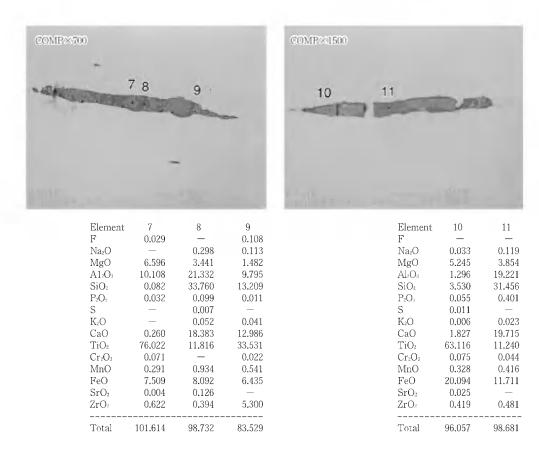


Photo.33 椀形鍛冶滓(含鉄)(KTH-14)鉄中非金属介在物のEPMA調査結果



椀形鍛冶滓 (KTH-15) 鉄中非金属介在物の反射電子像及び定量分析値



鉄製品(KTH-23)鉄中非金属介在物の反射電子像及び定量分析値 Photo.34 EPMA調査結果

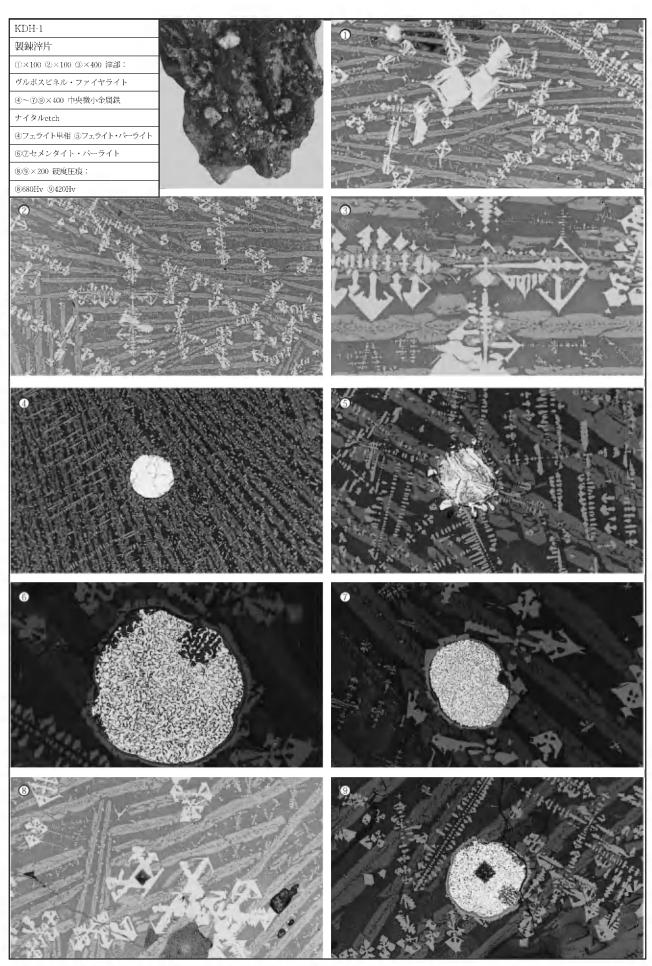


Photo.35 製錬滓片の顕微鏡組織

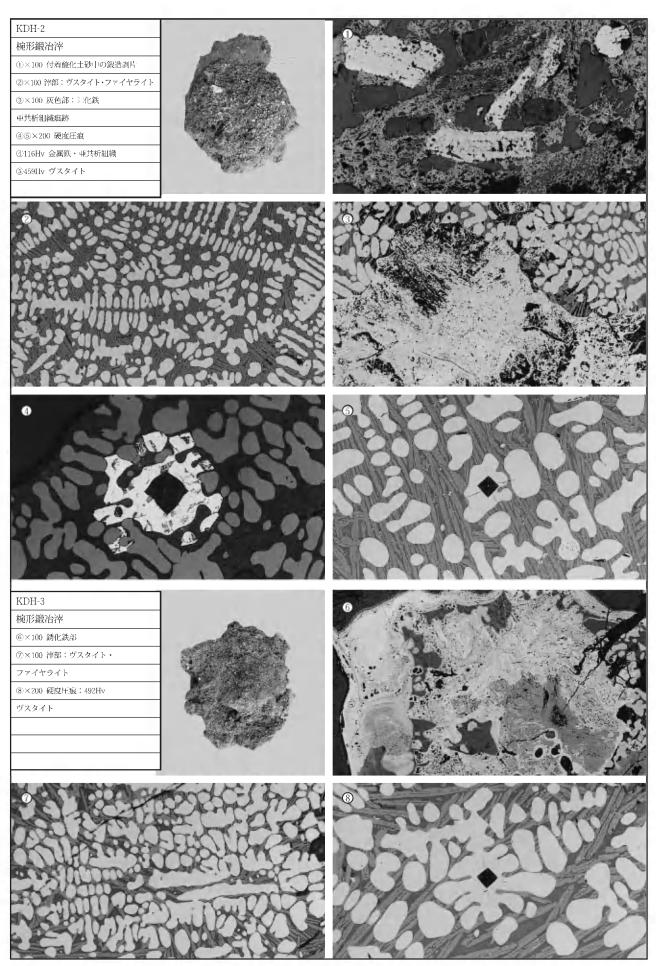


Photo.36 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

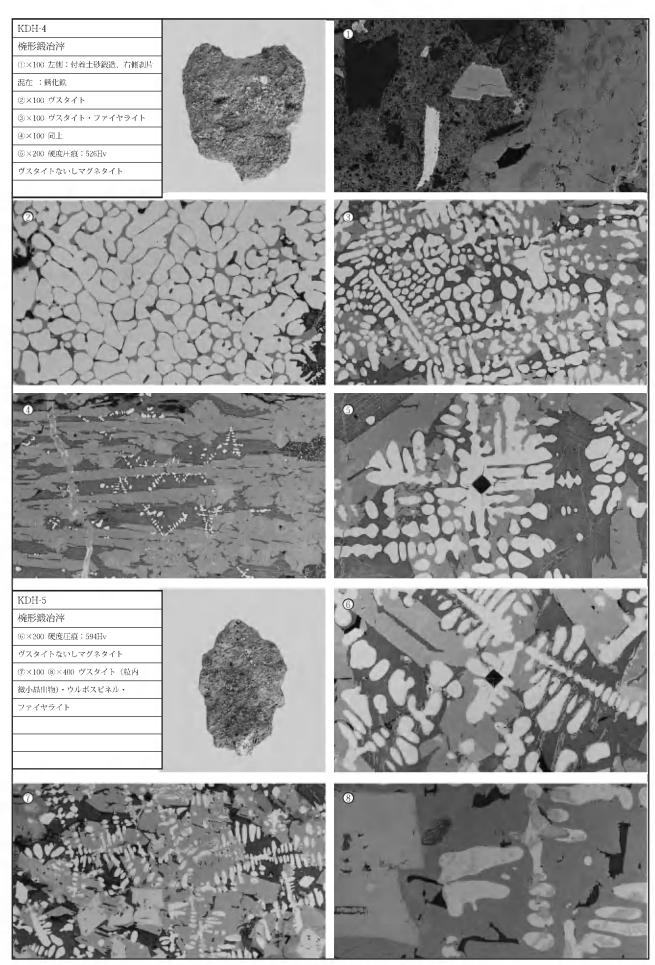


Photo.37 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

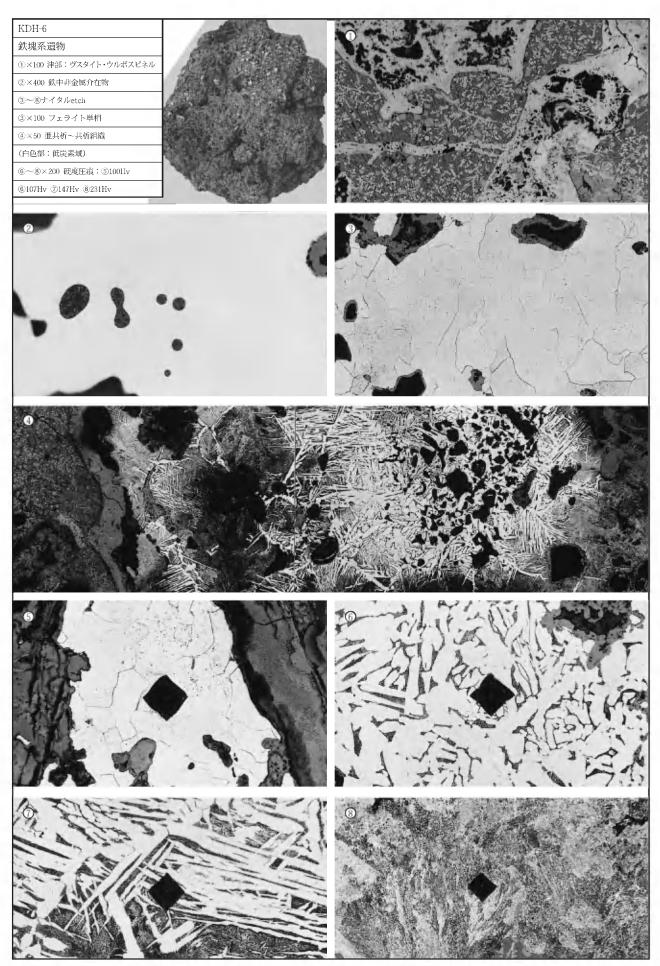


Photo.38 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

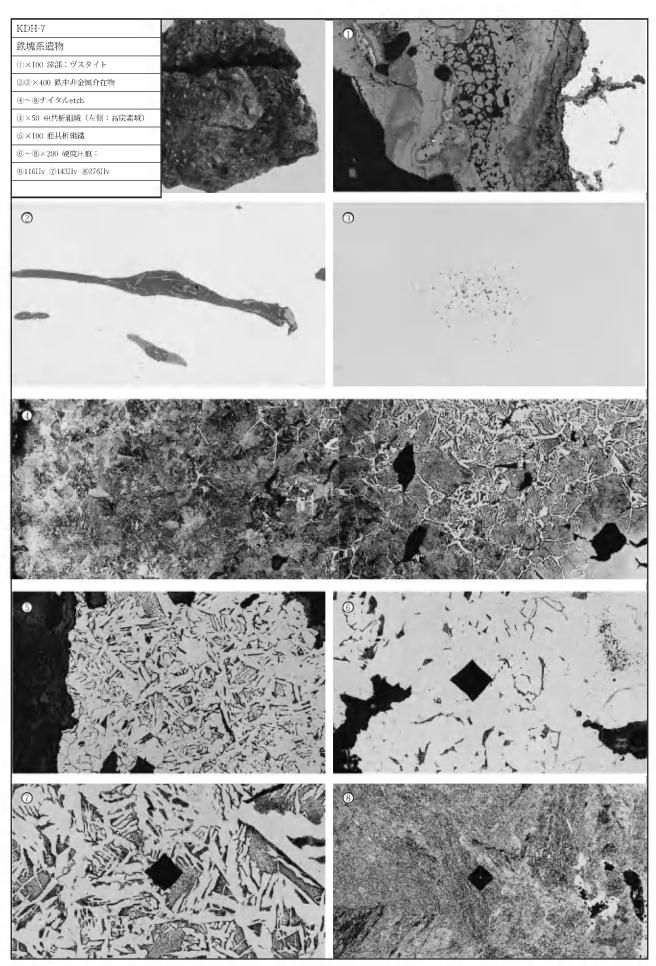


Photo.39 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

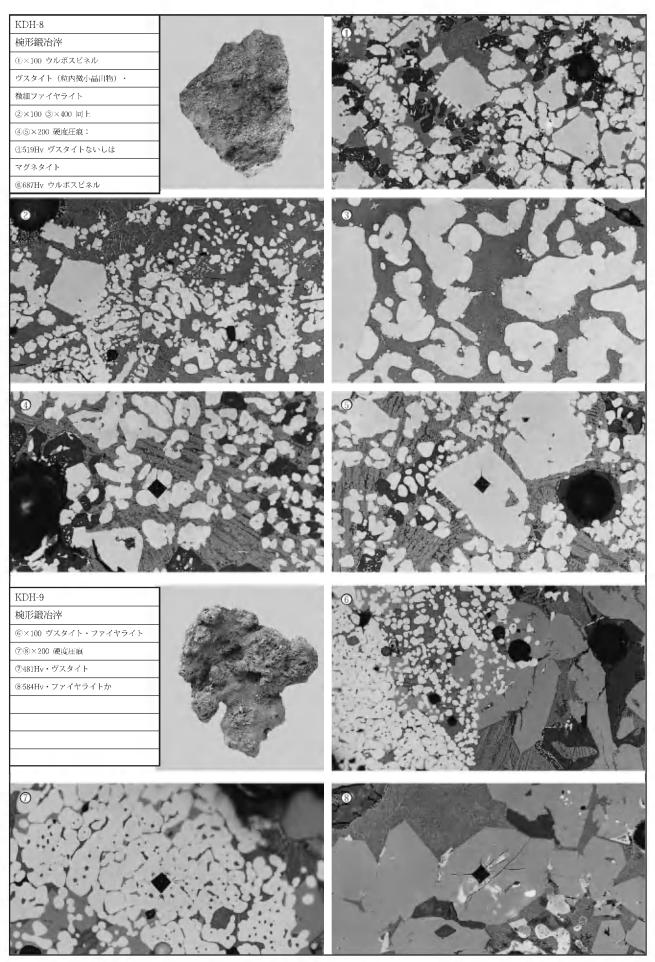


Photo.40 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

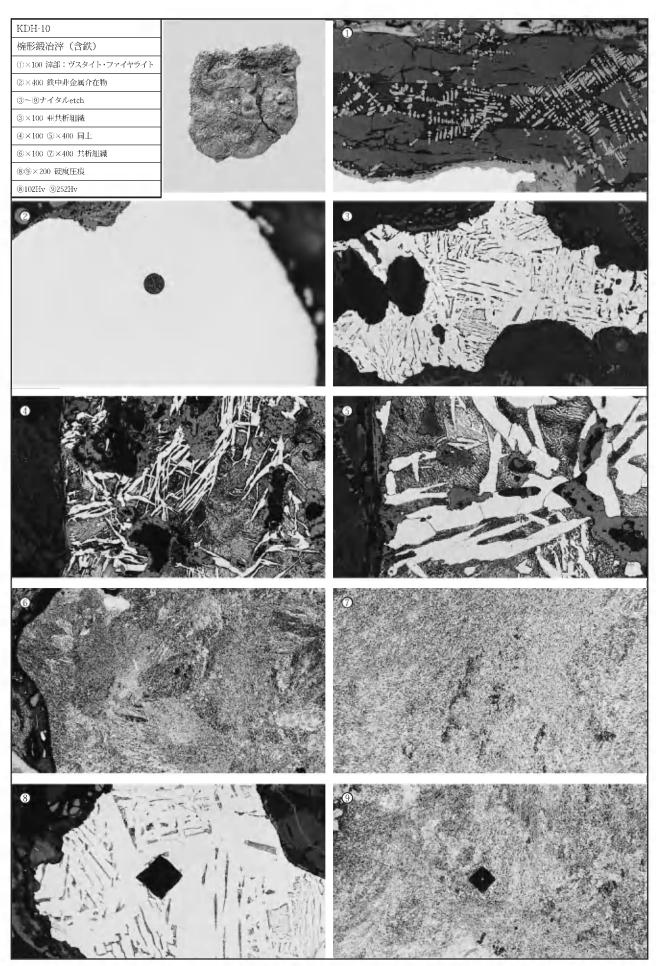


Photo.41 椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

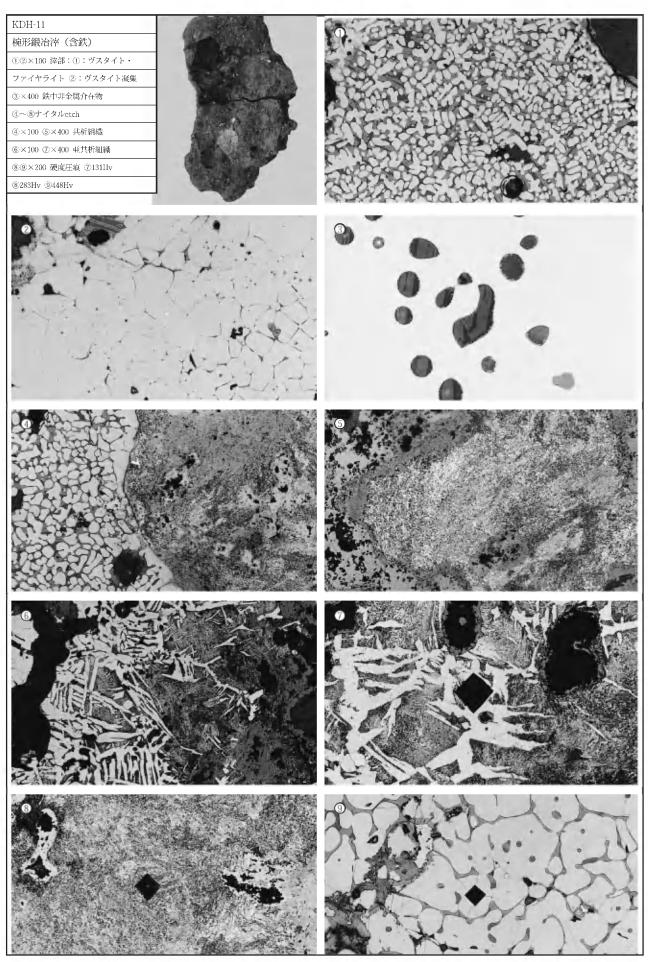


Photo.42 椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織

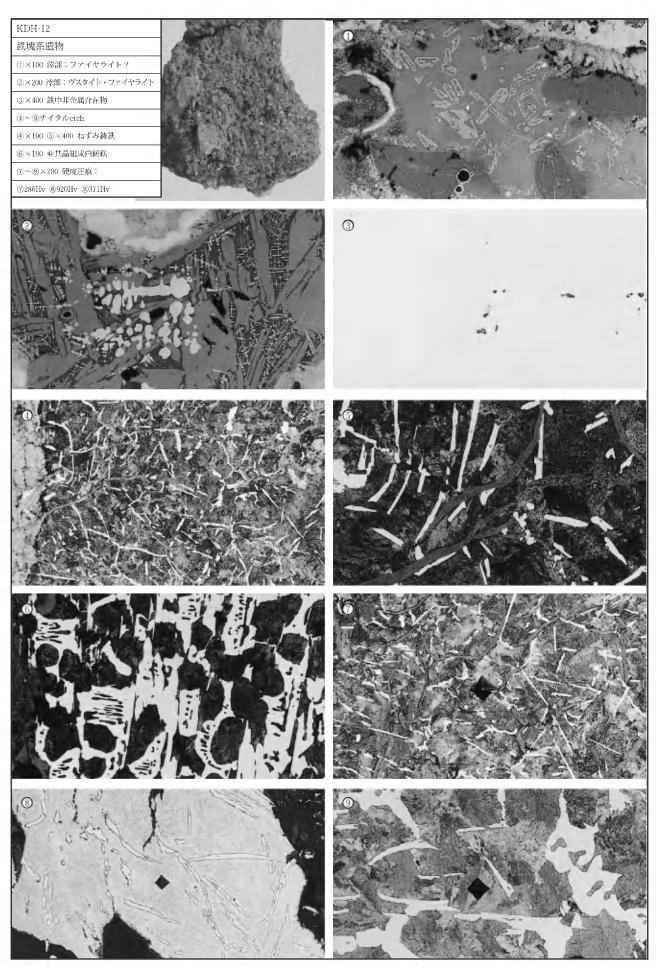


Photo.43 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

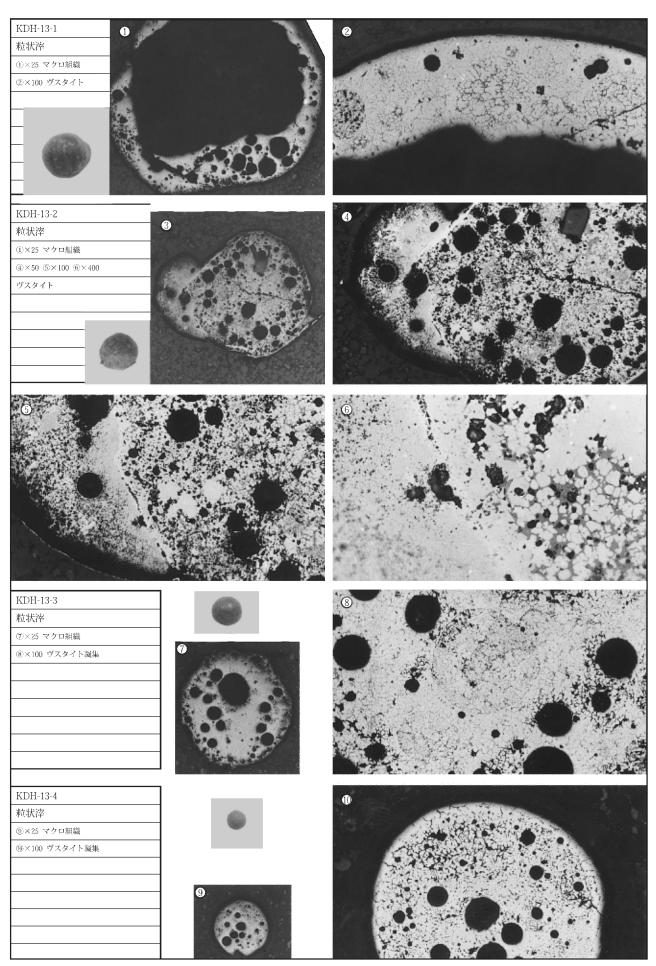


Photo.44 粒状滓の顕微鏡組織

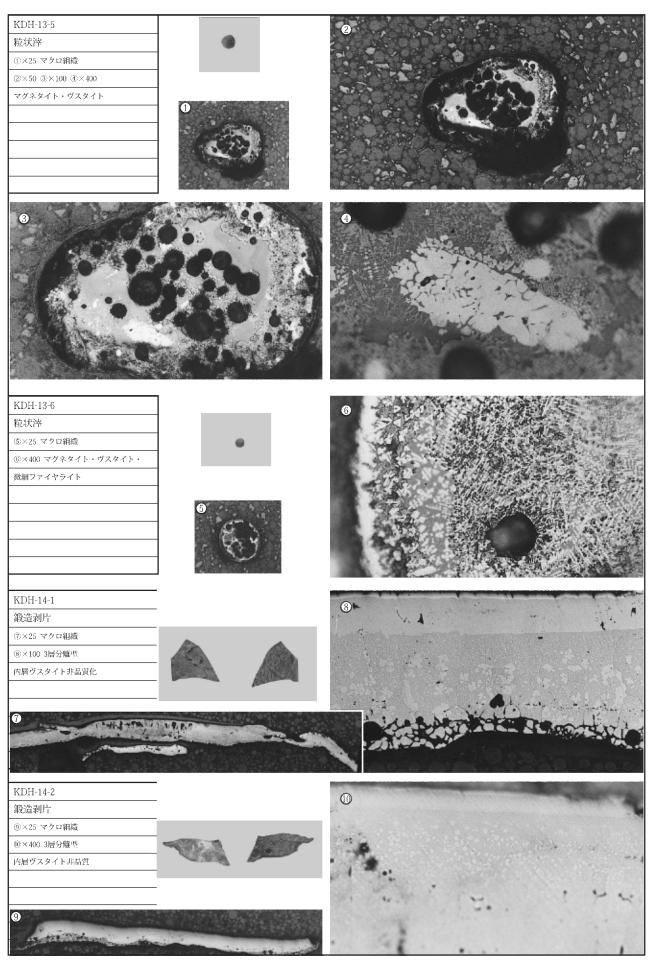


Photo.45 粒状滓 鍛造剥片の顕微鏡組織

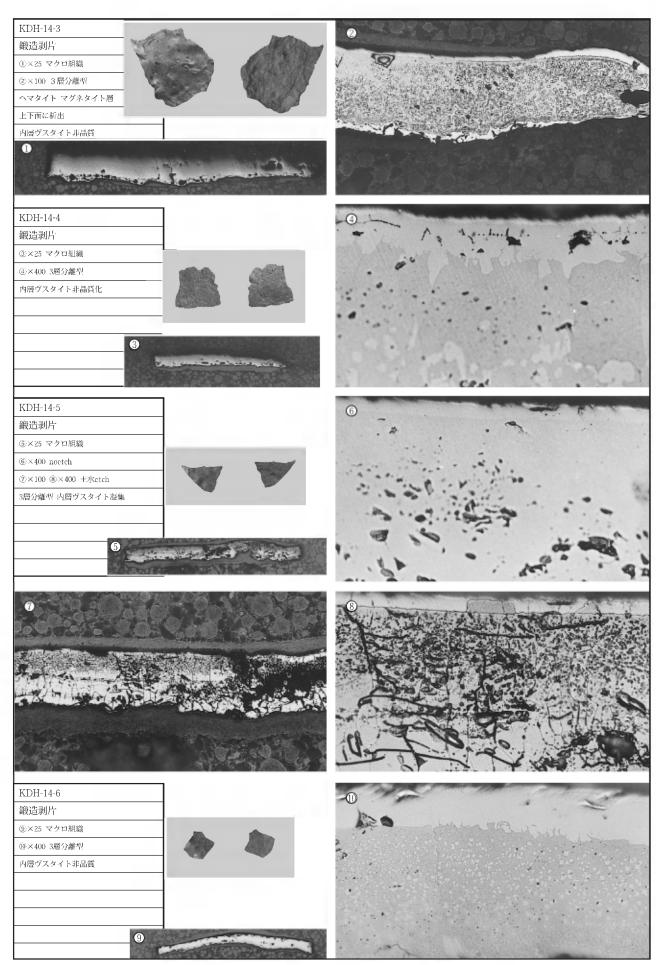


Photo.46 鍛造剥片の顕微鏡組織

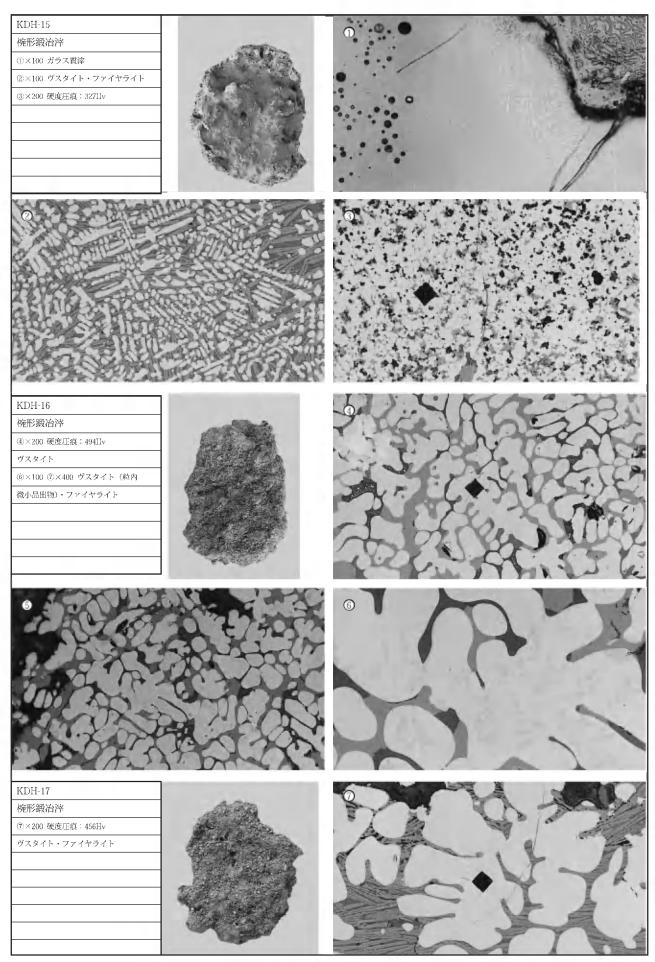


Photo.47 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

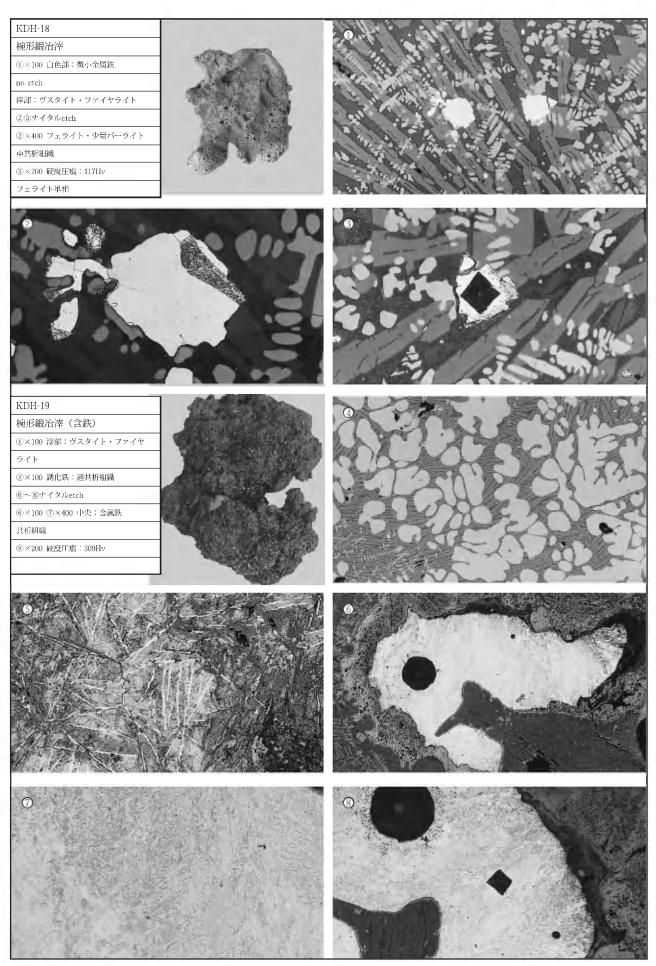


Photo.48 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

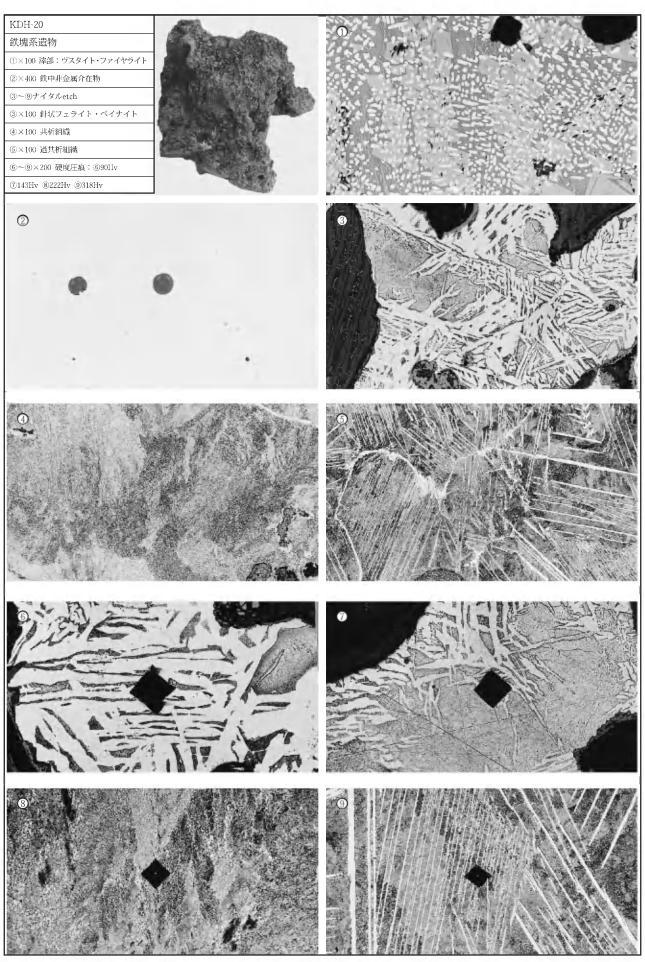


Photo.49 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

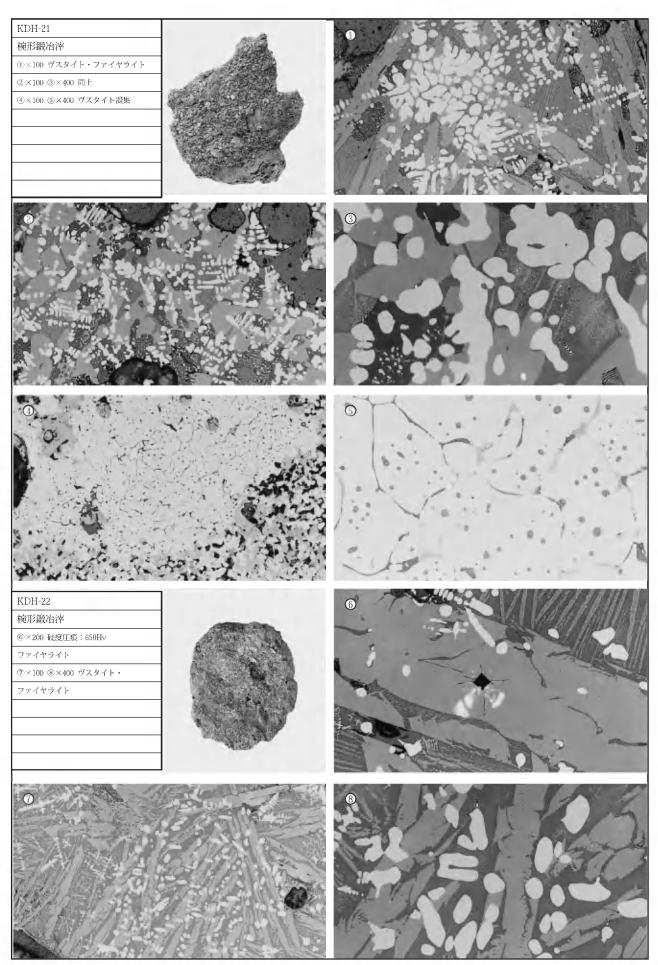


Photo.50 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

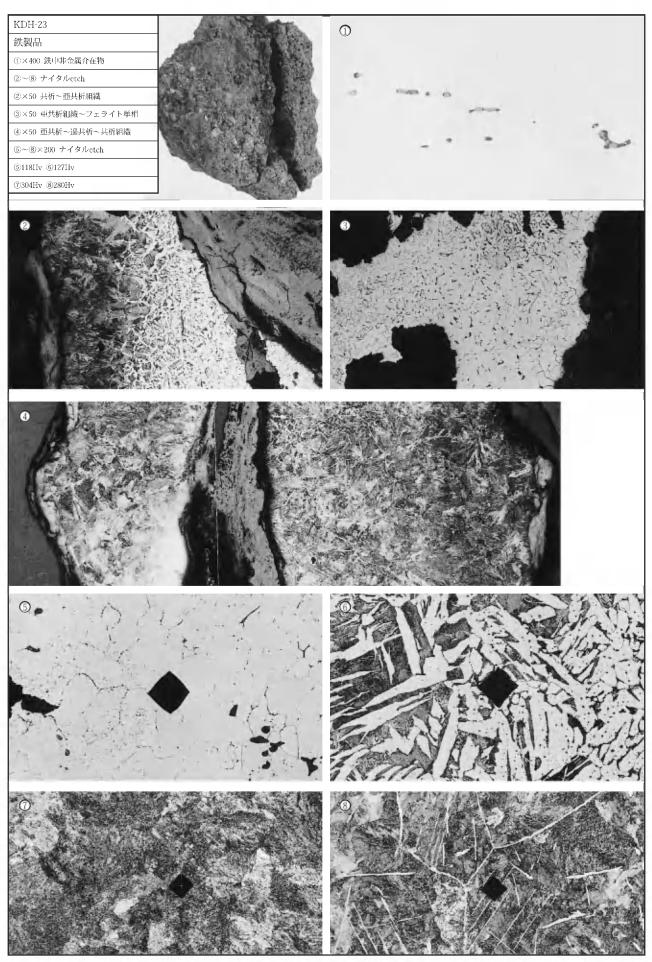


Photo.51 鉄製品の顕微鏡組織

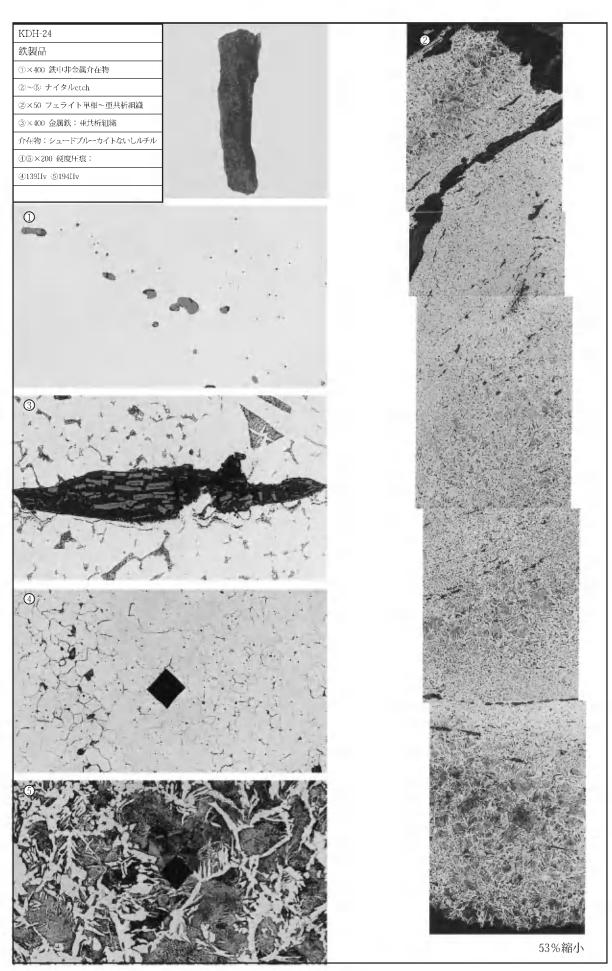


Photo.52 鉄製品の顕微鏡組織

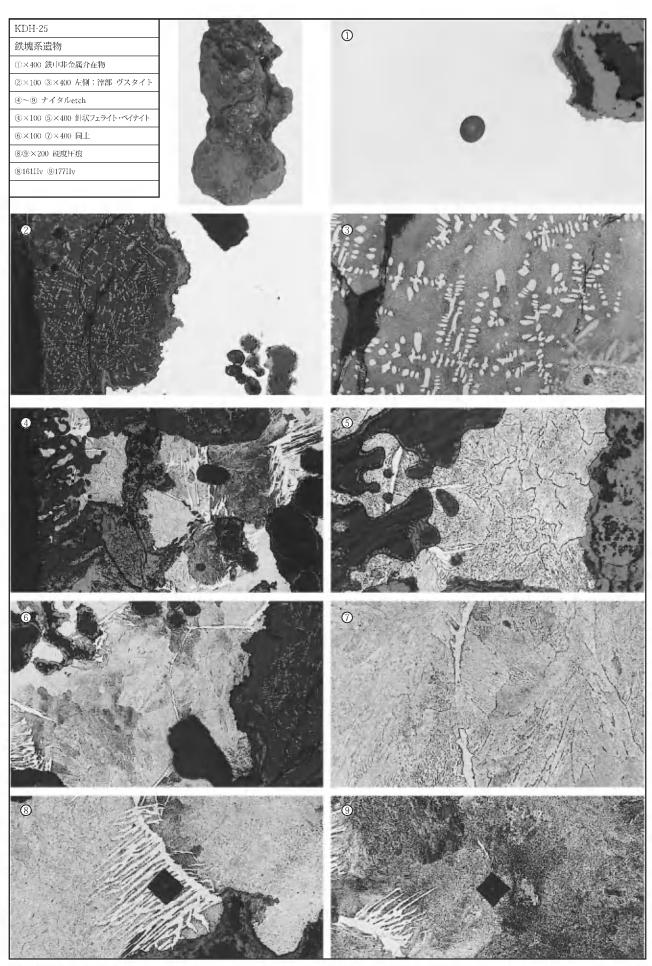


Photo.53 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

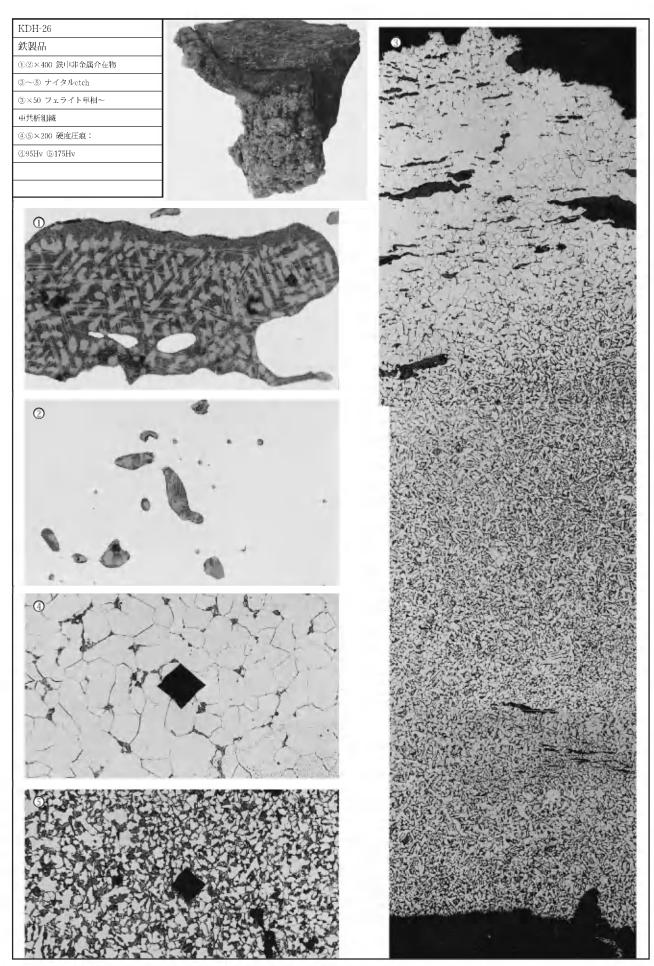


Photo.54 鉄製品の顕微鏡組織

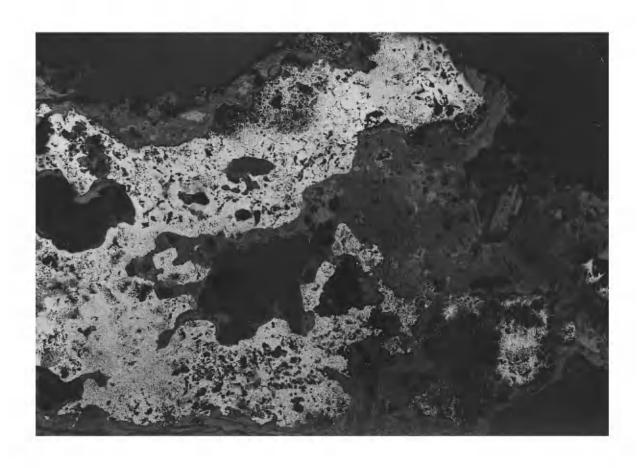
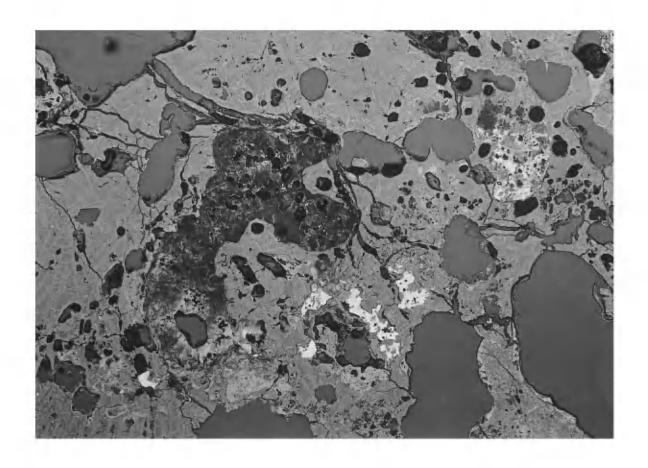




Photo.55 上段:鉄塊系遺物(KDH-6)のマクロ組織(×10) 下段:鉄塊系遺物(KDH-7)のマクロ組織(×10)



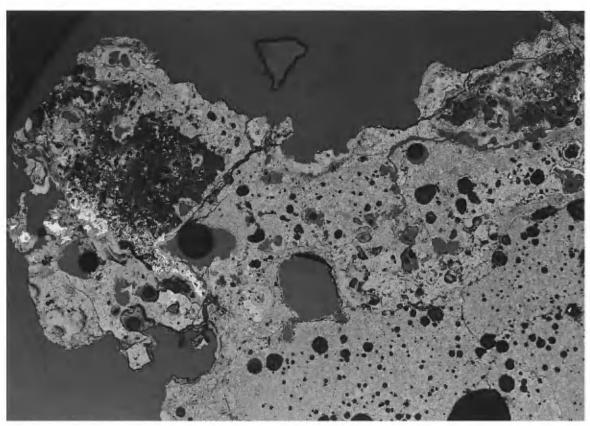
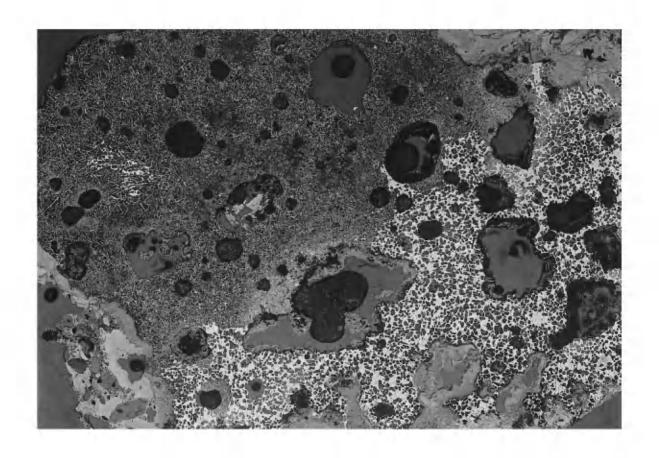


Photo.56 上段: 椀形鍛冶滓(含鉄)(KDH-10)のマクロ組織(×10) 下段: 椀形鍛冶滓(含鉄)(KDH-11)のマクロ組織(×10)



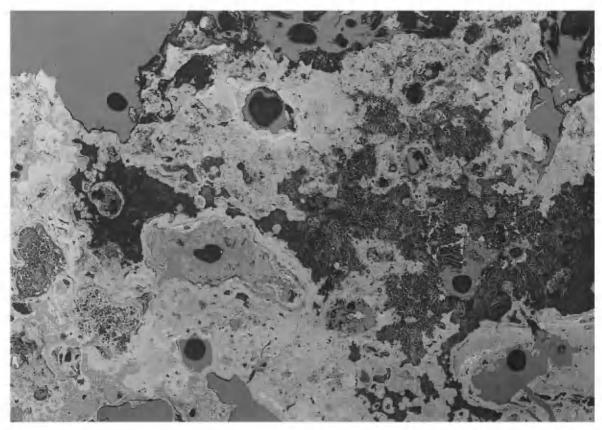
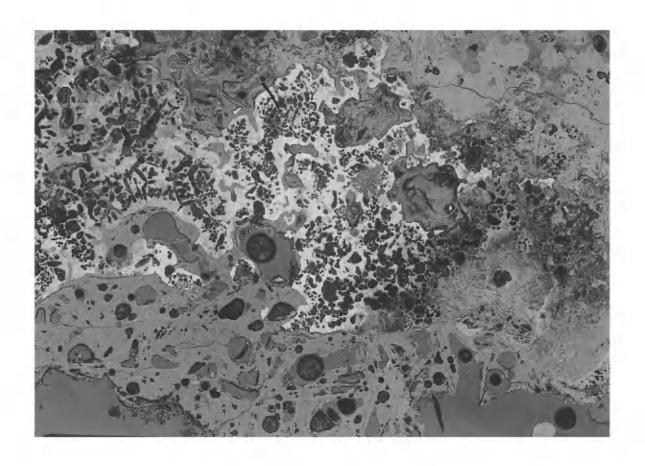


Photo.57 上段:鉄塊系遺物(KDH-12)のマクロ組織(×10) 下段:椀形鍛冶滓(含鉄)(KDH-19)のマクロ組織(×10)



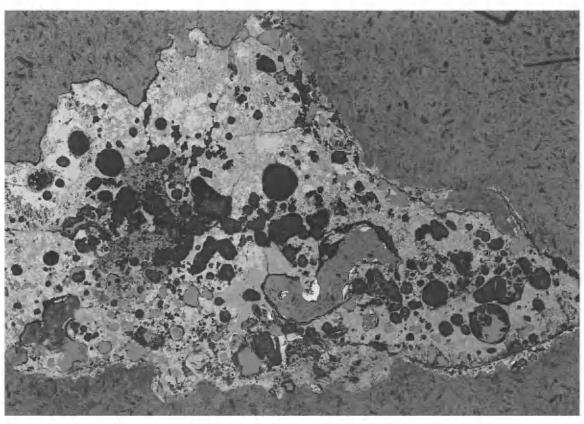
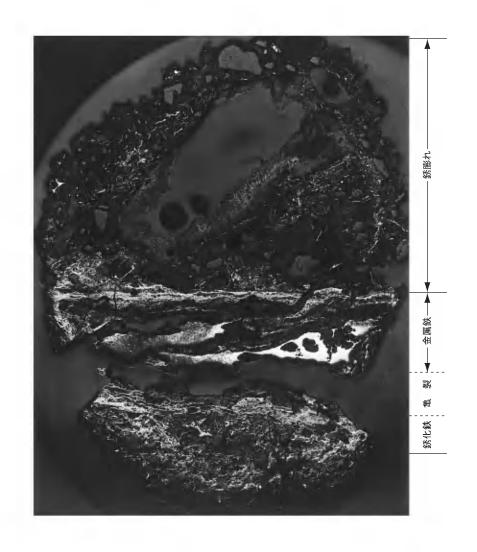


Photo.58 上段: 鉄塊系遺物 (KDH-20) のマクロ組織 (×10) 下段: 椀形鍛冶滓 (KDH-21) のマクロ組織 (×10)



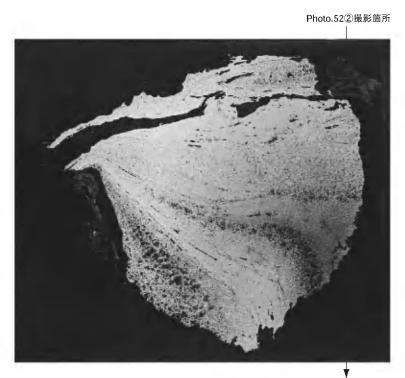
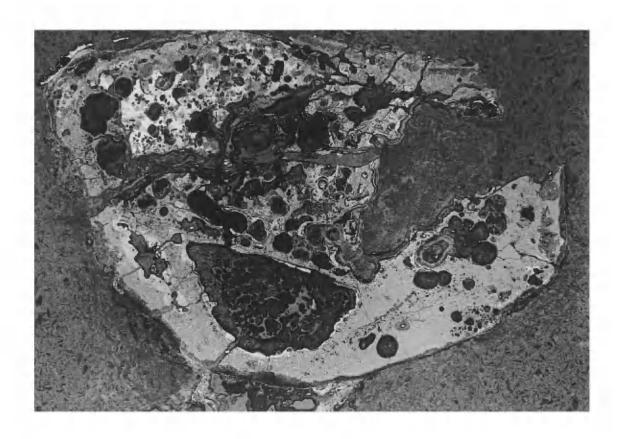


Photo.59 上段: 鉄製品(KDH-23)のマクロ組織(×5) 下段: 鉄製品(KDH-24)のマクロ組織(×5)



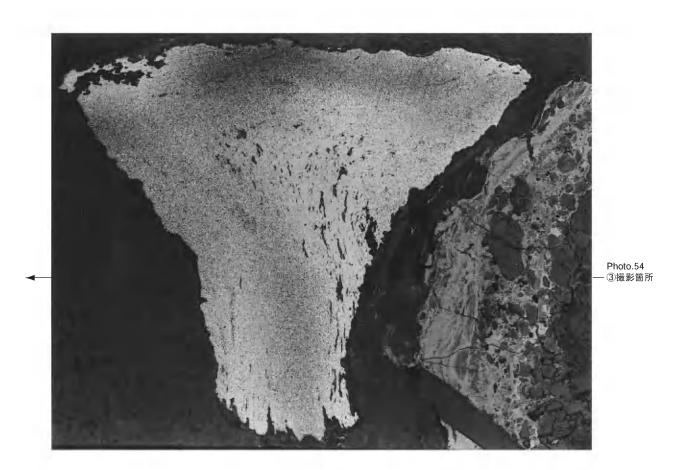


Photo.60 上段:鉄塊系遺物(KDH-25)のマクロ組織(×10) 下段:鉄製品(KDH-26)のマクロ組織(×10)

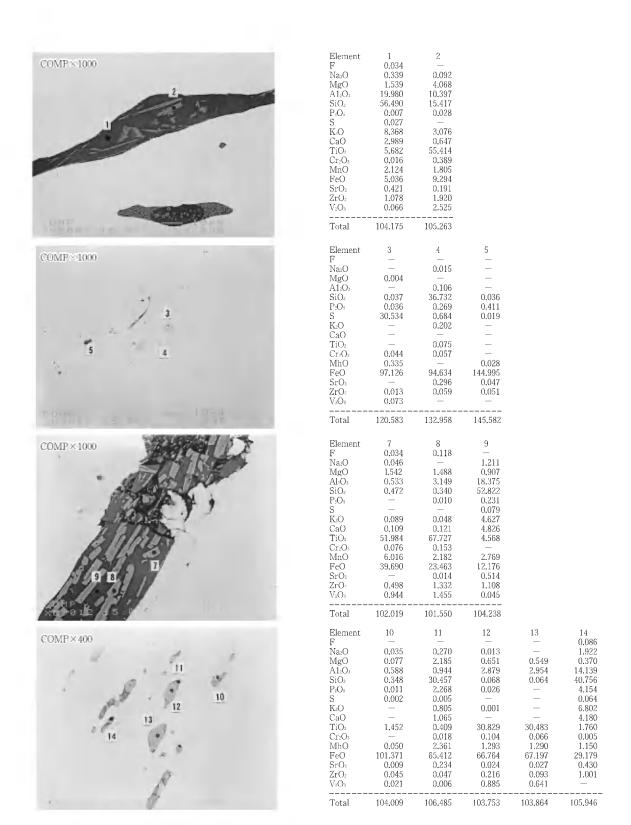


Photo.61 上段:鉄塊系遺物(KDH-7) 下段:鉄製品(KDH-24)のEPMA調査結果

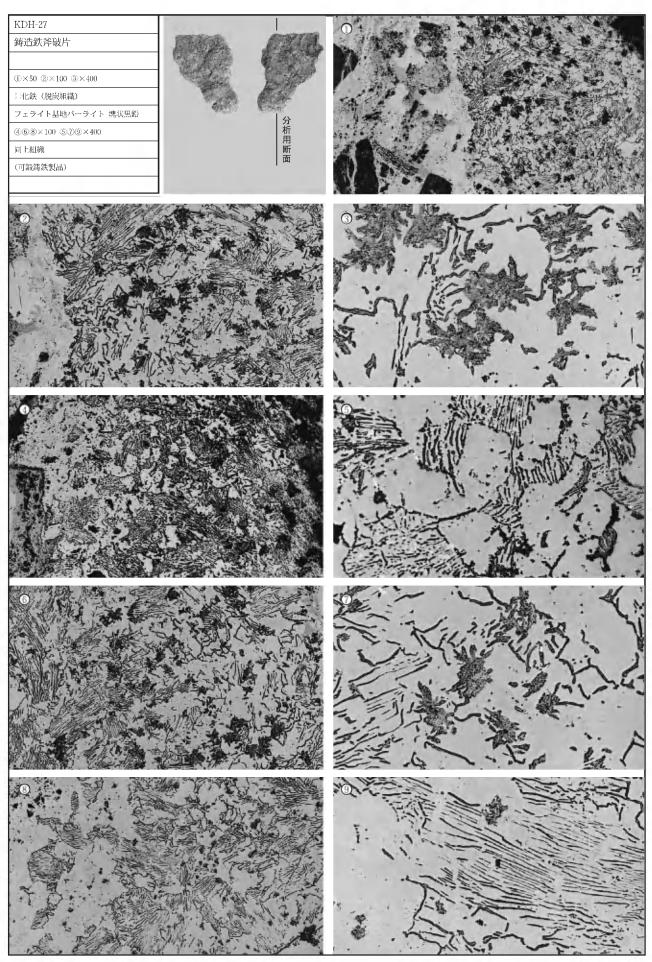
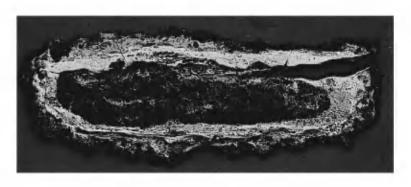


Photo.62 鍛造鉄斧破片(可鍛鋳鉄製品)の顕微鏡組織



鋳造鉄斧破片(可鍛鋳鉄製品)のマクロ組織(×5)

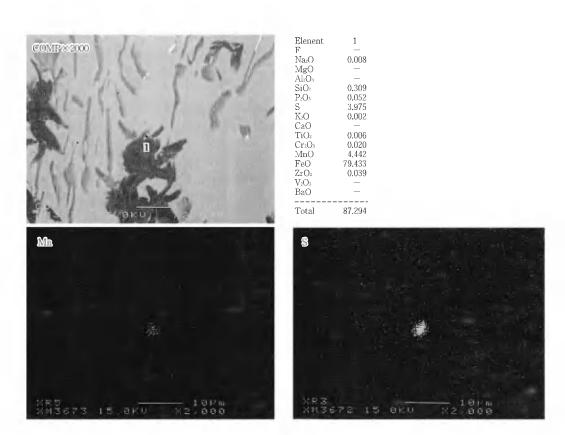


Photo.63 鋳造鉄斧破片のマクロ組織とEPMA調査結果

# 6 久田原遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白 石 純

# 1 分析目的

久田原遺跡の縄文、弥生、占墳、中世の各時期出土土器の胎土分析を実施し、以下のことについて 検討した。

#### 《縄文時代》

同遺跡では、後期・晩期の土器で形態・技法的に在地品、搬入品と考えられるものがある。そこで、 これら土器が、胎土分析で分類可能かどうか検討した。

### 《弥生時代·古墳時代》

この時期、同遺跡には在地で生産されたものから、山陰、山陽の特徴をもつ土器が出土している。 これら、形態・技法的に差がみられる土器が、胎土分析により分類ができるかどうか検討した。 《中世》

土師器杯・皿が、底部調整の特徴から糸切り底(山陰系?)、糸切り底部のあと押圧上げ底(京都系?)、へラ切り底(岡山南部か在地?)の3群にわけられている。また、瓦質鍋、土師質鍋なども出土しており、胎土分析によりこれら土器と比較することで、在地品か搬入品か検討した。

## 2 分析方法、資料

胎土の分析方法には、二つの方法を採用した。

一つは、蛍光 X 線分析法で、胎土中の成分(元素)量を調べる方法である。この方法は、分析試料を一部破壊して測定した。以下に試料作製、測定装置、方法、について述べる。

試料の作製方法は、土器表面の汚れを除去し、乾燥( $80^{\circ}$ Cで 1 時間)したものをタングステンカーバイト製の粉砕容器に詰め、試料粉砕機により約200メッシュほどに細かく粉砕し粉末試料にする。この粉末試料を塩化ビニール製のリング(直径約25mm、厚さ約2mm)に詰め、油圧式成形機で約15 t 圧力を加えコイン状に成形したものを、蛍光 X線分析装置の測定試料とした。分析装置はエネルギー分散型卓上型蛍光 X線分析計SEA2010L(セイコーインスツルメント社製)を使用した。測定条件は、X 線照射径:10mm、電流: $50\sim200$ mA、電圧:50KV・15KV、測定時間:200秒、測定室:真空で測定した。また、各元素の定量値は、地質調査所のJA-1標準試料を用いて検量線を作成し求めた。測定した元素はSi(珪素)、Ti(54y)、Al(71/にごりム)、Fe(鉄)、Mn(72/57)、Mg(72/57 53/54)、53 (54)、Na(57 57 58 (55)、57 (58)、58 (58)、59 (58)、59 (59)、59 (59)、59 (59)、59 (59)、59 (59) (59)、59 (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59) (59)

もう一つは、実体顕微鏡を用いた土器表面の砂粒観察である。これは、胎土に含まれている砂粒(岩石・鉱物)の種類、含有量を肉眼観察により判別し、どのような地質基盤の粘土を用いているか調べ

る方法である。

分析試料は、表 1 に示した50点の土器で内訳は、縄文土器13点、弥生・古墳時代22点、中世15点である。

## 3 分析結果

#### 蛍光X線分析

測定した元素のうちTi (チタン)、Ca (カルシウム)、K (カリウム)、Rb (ルビジウム)、Sr (ストロンチウム)、Zr (ジルコニウム)の各元素に違いがみられることから、これら元素のXY散布図を作製し比較した。

#### 【縄文時代】

第1図K-Ca散布図、第2図Rb-Sr散布図では、番号19(後期・深鉢)、22(晩期・深鉢・・谷尻式)、25(晩期・浅鉢)の3点の土器がやや離れて分布し、胎土が異なっていた。26、27、28の晩期の深・浅鉢(谷尻式)は、在地品?と考えられている土器で、ほぼ一つにまとまる傾向がみられた。

第3図Sr-Zr散布図でも19、22、25の土器は、他のものと離れて分布し判別できた。また、16(後期・注口土器)も単独で分布した。なお、この土器は東日本(加曽利B式)からの搬入品と考えられているものである。

#### 【弥生・古墳時代】

第4図K-Ca散布図から、32(在地?)・39(因幡?)・40(県南部?)・42の土器は他のものと離れて分布 し、判別が可能であった。また、中期や後期初頭の土器は1つにまとまる傾向がみられた。

第5図Ti-Ca散布図では、各地域の産地(岡山南部・伯耆・因幡)が重ならずに判別できることから産地を推定すると、40は県南部に、32、39は伯耆にそれぞれ分布した。42はどこにも入らず離れて分布した。

### (中世)

第6図K-Ca散布図、第7図Rb-Sr散布図では、杯・皿類で山陰系?と京都系?に分類されているものが、それぞれまとまる傾向にある。そして、第8図Si-Al散布図では、杯・皿(山陰系?)と瓦質鍋が1つにまとまり、他のものと判別できた。また、土師質鍋(特に15の鍋)が他のものと胎土が異なっていた。

#### 実体顕微鏡による土器表面の砂粒観察

#### 【縄文時代】

大きく3つの種類にわれる。

- ・0.5mm以下の石英・長石を多く含み、少量の0.5mm以下の黒雲母・赤色粒を含む。 試料番号16
- ・0.5mm以下の石英・長石を多く含み、0.5mm以下の黒雲母・角閃石を少量含む。まれに火山ガラスを含む。 試料番号19、22、25
- ・1 mm以下の石英・長石を多く含み、0.5mm以下の黒雲母を少量含む。まれに片岩の岩片がみられる。 試料番号 17、18、20、21、23、24、26、27、28

【弥生時代・古墳時代】

この時期の土器は、大きく4種類に分類できる。

・1 mm以下の石英・角閃石・長石を多く含む。

試料番号42

- ・1 mm以下の石英・長石を多く含み、0.5mm以下の角閃石をやや多めに含む。 試料番号40
- ・1 mm以下の石英・長石を多く含み、0.5mm以下の角閃石・黒雲母をやや多めに含む。 試料番号32、39
- ・2 m以下の石英・長石を多く含み、1 m以下の黒雲母・角閃石を少量含む。まれに片岩の岩片を含む。 試料番号29、30、31、33、34、35、36、37、38、41、43、44、45、46、47、50

#### (申世)

この時期は、大きく3種類に分類できる。

- ・2mm以下の石英・長石を多く含み、0.5mm以下の角閃石をやや多めに含む。 試料番号15
- ・1 mm以下の石英・長石を含み、0.5mm以下の黒雲母・角閃石・赤色粒を少量含む。試料番号1、2、3、4
- ・1 mm以下の石英・長石を含み、0.5mm以下の黒雲母を少量含む。試料番号5、6、7、8、9、10、11、12、13、14

以上のように、各時期の土器とも3ないし4種類に胎土が分類できた。

縄文時代後・晩期もので形態・技法的に在地と考えられている土器には、黒雲母や片岩が含まれていた。また、弥生・古墳時代でも在地産は、ほぼ同様な砂粒構成であった。

中世の土器では、杯・皿などの小形品には、土師質鍋と比べて、精製された粘土 (水簸?)が使用されている。そのため、実体顕微鏡で観察できる砂粒が他の時期のものと比べ、非常に少なかった。

### 4 まとめ

2つの分析法により胎土分析を実施したところ、以下のことが明確になった。

【蛍光X分析】縄文時代後・晩期の土器では、在地産?と考えられるものがほぼ1つにまとまる様相を呈した。しかし、これらのグループに入らないものもあり、分析試料を増やして検討する必要がある。搬入品(東日本)と考えられるものも識別できたが、搬入元の胎土を調べて再検討する必要がある。

弥生・古墳時代の土器では、中期および後期初頭の土器が1つにまとまり胎土的に同一であり、山陽(県南部)、山陰(伯耆・因幡)の各地域の遺跡と比較をしたところ、中期・後期初頭の分布域とは重ならず、判別できた。この中期・後期初頭の分布域が、在地産の可能性がある。データを増やして再検討する必要がある。

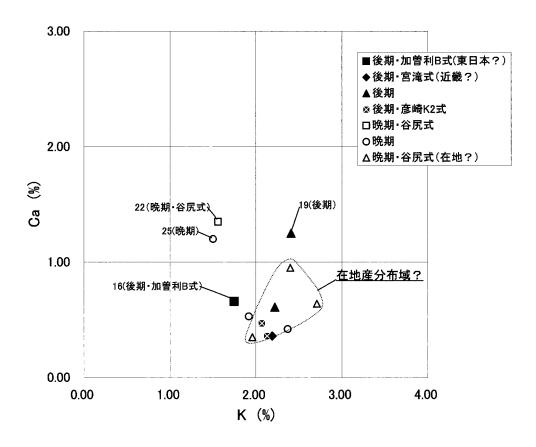
中世の杯・皿の分析では、山陰系?とその他のものに分類でき、胎土的には異なることが指摘でき

る。また、瓦質鍋も山陰系?の杯・皿と胎土的に類似していた。土師質鍋は杯・皿類とは明らかに胎 土が異なっていた。この分析でも、試料を増やして、再検討しなければならない。

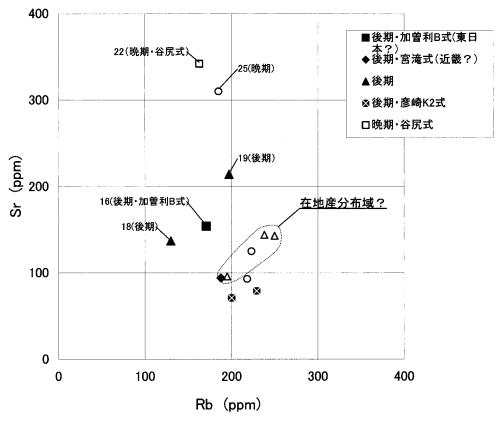
【砂粒観察】基本的に各時代の胎土に含まれる砂粒は、石英・長石・黒雲母・角閃石などで胎土差として表れるのは、長石、角閃石、黒雲母の多少でほぼ決まるようである。また、今回の分析では、片岩や花崗岩の岩片がまれに観察された。これは、久田原遺跡が立地する土層堆積層には、花崗岩、片岩起源の砂粒や粘土が堆積しており、遺跡周辺の粘土を使用した可能性が考えられる。

蛍光X線分析および砂粒観察により胎上分析を実施し、在地品か、搬入品か検討した。その結果、在地品と考えられる特徴をほぼ推定できたが、分析点数が絶対的に少なく、蛍光X線では各地域ごとの分布のまとまりや広がりを十分に把握できなかった。今後の課題である。

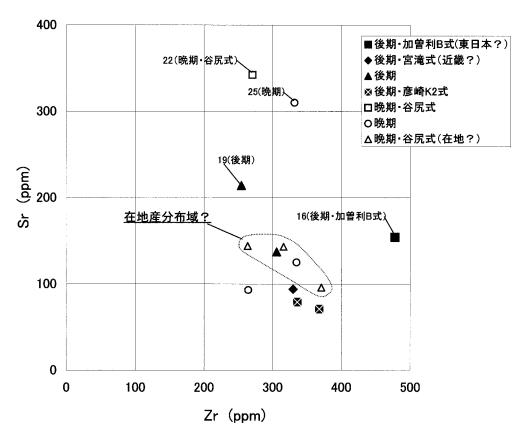
この分析の機会を与えていただいた弘田和司氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センターの職員方々には、試料収集でいろいろとお世話になった。記して感謝致します。



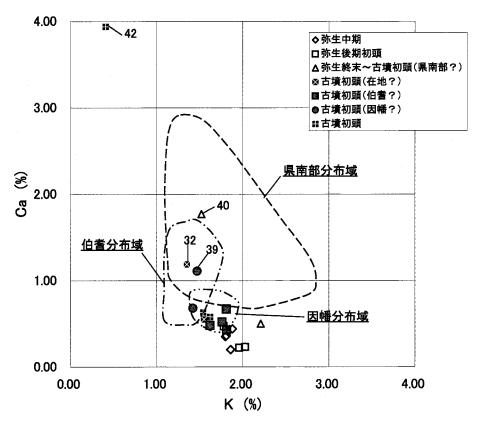
第1図 縄文時代後・晩期土器の胎土比較(K-ca 散布図)



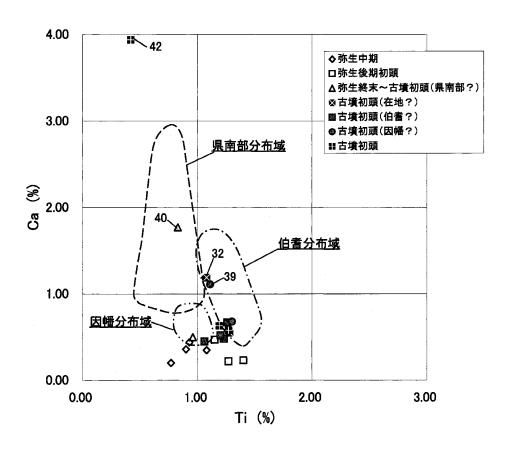
第2図 縄文時代後・晩期土器の胎土比較(Rb-Sr 散布図)



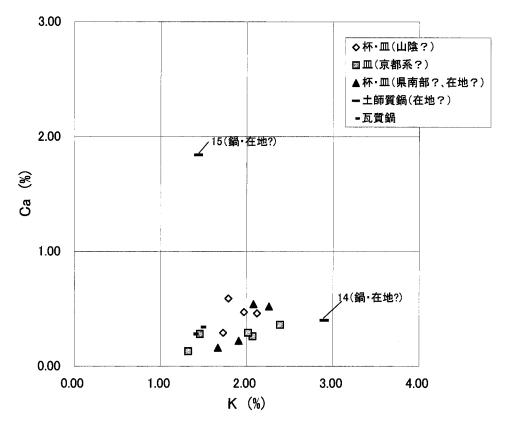
第3図 縄文時代後・晩期土器の胎土比較(Zr-Sr 散布図)



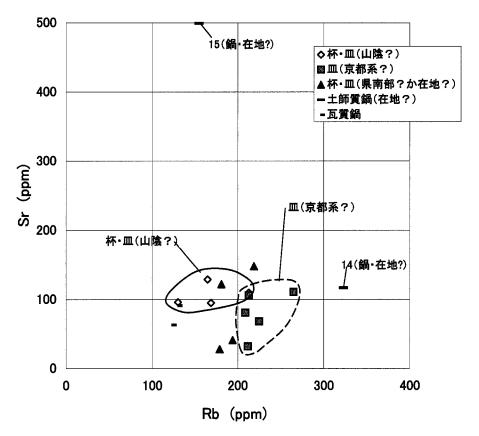
第4図 弥生・古墳時代土器の胎土比較(K-Ca 散布図)



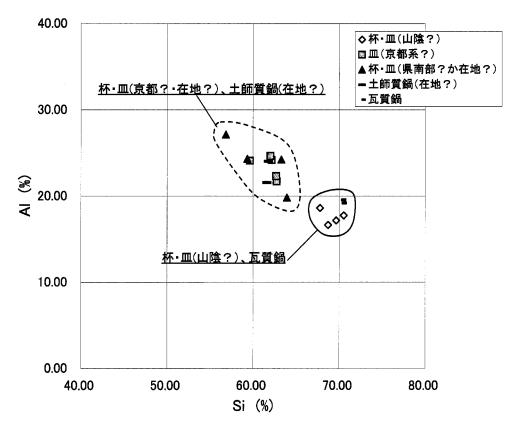
第5図 弥生・古墳時代土器の胎土比較(Ti-Ca 散布図)



第6図 中世土器の胎土比較(K-Ca散布図)



第7図 中世土器の胎土比較(K-Ca 散布図)



第8図 中世土器の胎土比較(Si-AI散布図)

第1表 久田原遺跡出土土器の胎土分析値一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm。

番号	地区	掲載 番号	種類	器種	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	Р	Rb	Sr	Zr	備考
1	В7	2106	土師器	杯	I I I II	69.66	0.78	17.17	4.79	0.08	1.88	0.46	2.49	2.12	0.35	165	129	345	山陰産?
2	В7	_	上帥器	杯	中世	68.71	0.98	16.64	6.57	0.14	1.79	0.59	2,03	1.79	0.56	169	95	389	山陰産?
3	В7	1792	土師器	iii.	市世	70.53	0.90	17.74	2.53	0.02	1.77	0.29	2.26	1.73	2.02	130	96	428	山陰産?
4	B7	1951	土師器		中世	67.77	0.99	18.61	5.45	0.07	2.00	0.47	2.02	1.97	0.49	213	110	388	山陰産?
5	В7	1942	土師器	Ш	中世	62.15	1,33	24.17	3.96	0.04	2.03	0.28	2,12	1.46	2,26	225	68	477	京都系?
6	В7	1795	土師器	Ш	中世	62.02	1.27	24.63	3.73	0.04	1.97	0.13	2.36	1.32	2.26	212	32	472	京都系?
7	В7	1789	上帥器	IIIL	中世	59.63	1.26	24.10	5.65	0.05	2.09	0.26	2.32	2.07	2.15	265	111	445	京都系?
8	В7	1788	土師器	Ⅲ	1[1]ħ	62.74	1.09	21.71	5.31	0.08	2.18	0.36	3.22	2.39	0.64	213	106	399	京都系?
9	В7		上師器	HIL	中世	62,68	1,22	22,30	5,85	0.06	2.09	0.29	2,25	2.02	0.95	209	81	443	京都系?
10	В7	2114	土師器	杯	山埔	63.28	1.23	24.22	3.40	0.04	2.03	0.16	2.24	1.67	1.55	194	41	433	県南?在地?
11	B7	1983	土師器	小皿	中世	63.92	0.95	19.82	6.88	0.10	2.06	0.52	2.20	2.26	1.05	219	148	372	県南?在地?
12	B7	_	土師器	Ш	中世	56.85	1.19	27.12	6.95	0.06	1.99	0.22	2.59	1.91	0.94	179	28	526	県南?在地?
13	В7		土師器	Ⅲ	中世	59.34	1.23	24.31	6.55	0.08	2.16	0.54	3.18	2.08	0.29	181	122	403	県南?在地?
14	B8	1960	上帥器	鍋	中世	61.76	0.98	24.02	3.68	0.03	1.98	0.40	2.39	2.90	1.69	323	117	307	在地?
15	B8	2051	上師器	鍋	1[1]#;	61.61	1.03	21.55	7.74	0.11	2.02	1.84	2.33	1.44	0.11	155	499	260	在地?
16	C7	60	縄文上器	注口上器	後期加曾利B式	60.74	1.04	23.20	7.60	0.06	1.95	0.66	2.81	1.75	0.04	171	154	478	東日本
17	B2W	362	縄文土器	注口土器	後期宮滝式	61.97	1.09	24.25	3.11	0.03	2.30	0.36	4.33	2.19	0.17	188	94	330	近畿?
18	C8	652	縄文土器	鉢	後期	67.06	1.00	20.65	3,58	0.04	1.91	0.61	2,59	2.22	0.13	130	137	306	
19	C8	659	縄文土器	深鉢	後期	63.56	1.04	23.17	3.55	0.03	1.86	1.25	2.68	2.41	0.24	197	214	255	
20	B2W	656	縄文土器	深鉢	後期彦崎K2式	65.68	1.03	22.64	3.13	0.04	2.01	0.36	2.71	2.13	0.10	229	79	336	
21	B2W	536	縄文上器	深鉢	後期彦崎K2式	64.08	0.89	21,41	6.54	0.05	1.86	0.47	2.35	2.07	0.09	200	71	368	
22	A1	617	縄文土器	深鉢	晚期谷尻式	63.84	0.99	23.73	3.65	0.04	1.96	1.35	2.49	1.56	0.23	163	342	271	t dd o
23	C7	5	縄文上器	浅鉢	晚期	67.70	0.86	20.00	3.57	0.05	1.88	0.42	2.78	2.37	0.16	218	93	265	在地?
24	B2W	320	縄文土器	浅鉢	晚期	66.07	1.18	22.47	3.04	0.03	2.07	0.53	2.09	1.92	0.35	223	125	335	
25	C7	26	縄文土器	深鉢	晚期	61.67	1.05	22,87	6,82	0.06	1.94	1.20	2.42	1.50	0.27	185	310	332	400.0
26	B6	463	縄文土器	浅鉢		66.73	1.00	21.61	2.82	0.03	1.91	0.64	1.93	2.71	0.36	250	143	316	在地?
27	B6	457	縄文土器	浅鉢	晚期谷尻式	59.88	1.22	24.46	6.42	0.04	2.05	0.35	2.97	1.96	0.29	195	96	371	在地?
28 29	B6	383 927	縄文土器	浅鉢		61.22	1.09	22.61	5.83	0.05	2.12	0.95	3.02	2.40	0.49	238 154	93	264 266	在地?
30	C7 B2W	868	- 弥生土器 - 弥生上器	壺甕	弥生中期   弥生中期   弥生中期	66.13 62.59	0.93	19.60 22.19	6.55 7.27	0.06	1.83	0.44	2.31	1.88	0.09	152	105	334	
31	B2W	795	<u>弥生工器</u> 弥生土器	ジョツキ形	- 弥生中朔 - 弥生中期	69.34	0.90	19.78	3.14	0.00	1.87	0.36	2.28	1.81	0.42	157	103	304	
32	E2	1200	土師器	ショノヤル	古墳初頭	63.88	1.08	23.40	4.32	0.03	1.97	1.19	2.54	1.35	0.07	128	319	321	在地?
33	E2	1198	土師器	甕	占墳初頭	58.57	1,23	23.40	10.69	0.04	1.80	0.48	2,22	1.62	0.07	135	113	287	11.地; 伯耆?
34	E2	898	弥生土器	甕	弥生終末	67.78	0.96	20.61	3.02	0.04	1.79	0.50	2.73	2.21	0.22	197	117	283	県南?
35	E2	907	<u>弥生工品</u> 弥生土器	<b>無</b>		63.73	1.15	21.73	6.95	0.04	1.75	0.47	1.87	1.78	0.22	145	118	394	5区円;
36	E2	904	弥生上器	壺	弥生後期初頭	62.97	1.13	25.33	3.46	0.03	2.06	0.47	2,29	1.76	0.09	167	73	456	
37	E2	912	弥生土器	鉢	- 弥上及列初頭 弥生後期初頭	65.46	1.40	22.91	3.66	0.03	1.82	0.23	2.03	2.03	0.27	168	60	369	
38	E2	1196	上帥器	壶	古墳初頭	59.66	1.20	25.94	6.31	0.05	1.94	0.52	2.37	1.76	0.05	204	160	387	伯耆?
39	E2	1199	土師器	甕	古墳初頭	64.36	1.11	23.10	3.90	0.04	2.01	1.11	2.52	1.47	0.17	145	319	294	因幡?
40	E2	1405	土師器	甕	古墳初頭	61.17	0.83	22,31	7,11	0.17	1.89	1.77	2.61	1.52	0.12	134	218	259	県南?
41	E2	1197	土師器	甕	占墳初頭	61,62	1.26	20.28	9.39	0.11	1.72	0.67	2.71	1.81	0.26	181	114	378	伯耆?
42	C1N	1326	土師器	鉄	古墳初頭	47.75	0.42	32.99	8.06	0.12	3.24	3.94	2.92	0.41	0.01	32	256	74	11111
43	C2	1191	上帥器	類	占墳初頭	59.40	1.28	23.81	8.92	0.09	2.00	0.55	2,13	1.55	0.05	143	113	346	在地?
44	C2	1189	土師器	繧	古墳初頭	61.03	1.27	20.48	10.29	0.09	1.75	0.58	2.50	1.62	0.16	193	116	299	
45	C2	1323	上師器	獲	古墳初頭	61.14	1.06	23.84	7.13	0.07	1.97	0.45	2,27	1.80	0.06	177	97	321	伯耆?
46	C2	1317	土師器	甕	古墳初頭	66.62	1.30	21.88	3.29	0.04	1.84	0.68	2.64	1.42	0.11	144	190	419	因幡?
47	C2	1190	上師器	甕	古墳初頭	60.17	1.19	21.81	9,51	0,10	2.04	0.63	2.81	1.54	0.06	119	104	258	
48	C2	1868	瓦質土器	鍋	山世	70.36	1.20	19.17	3.75	0.04	1.77	0.28	1.79	1.39	0.09	123	63	405	
49	C2	_	瓦質土器	鍋	中世	70.30	1.10	19.56	3.15	0.05	1.67	0.34	1.85	1.48	0.29	130	91	404	
50	C4	680	弥生土器	甕	弥生中期	67.06	0.77	18.62	7.25	0.07	1.81	0.20	2.08	1.86	0.07	134	97	324	

# 縄文時代



1 晩期 微高地1、河道 2東斜面 (南から)



2 晩期 微高地1南端 (南から)



3 後期 微高地2、 河道4 (東から)



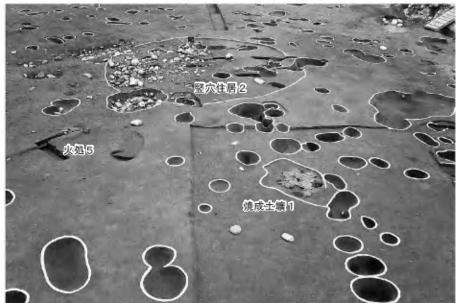
1 晩期河道3断面(北から)



2 晩期 竪穴住居 1 (西から)



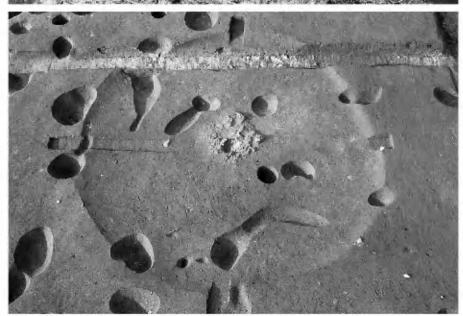
3 晩期 竪穴住居 1 炉 (西から)



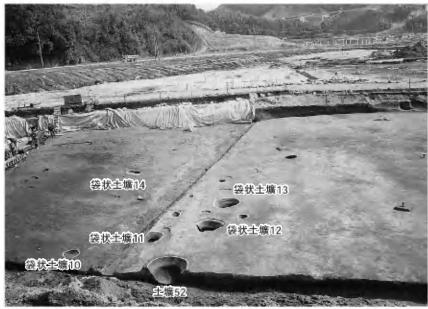
1 晩期 竪穴住居2、 周辺遺構 (西から)



2 晩期 竪穴住居3 (南から)



3 晩期 竪穴住居4 (南から)



袋状土填8。9 袋状土填7 袋状土填6 袋状土填6

1 晩期 河道2底部、 袋状土壙群 (北から)

2 晩期河道2底部、袋状土壙群(北から)

3 晩期 袋状土壙3 (北西から)

縄文時代



1 晩期 袋状土壙 8 (前)9 (奥)(北西から)



2 晩期 袋状土壙12 断面 (南から)



3 晩期 袋状土壙13 (東から)



1 晩期 焼成土壙 1 (南東から)



2 晩期 焼成土壙 5 断面 (南から)

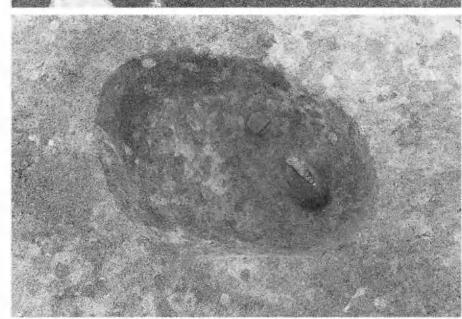


3 晩期 焼成土壙7 (南東から)

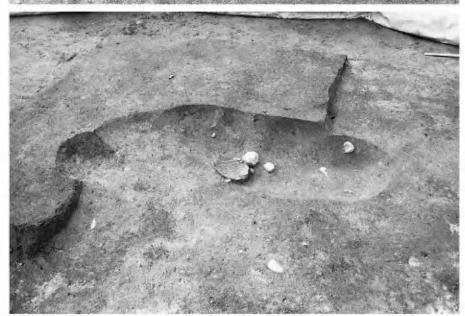
縄文時代



1 晩期 土壙12石器 出土状況 (北東から)



2 晩期 土壙14石刀 出土状況 (北東から)



3 晩期 土壙47注口土器 出土状況 (東から)



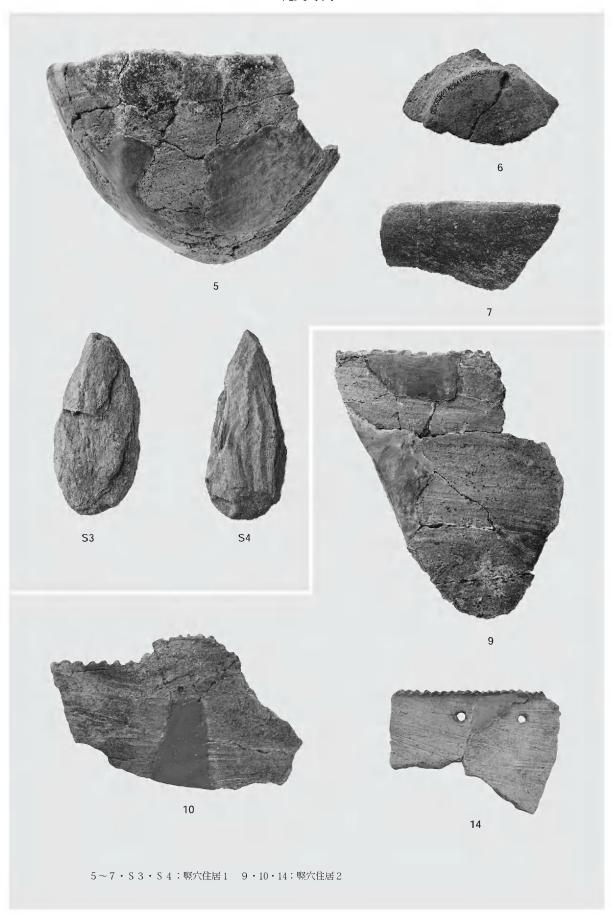
1 晩期 土壙55 (南から)



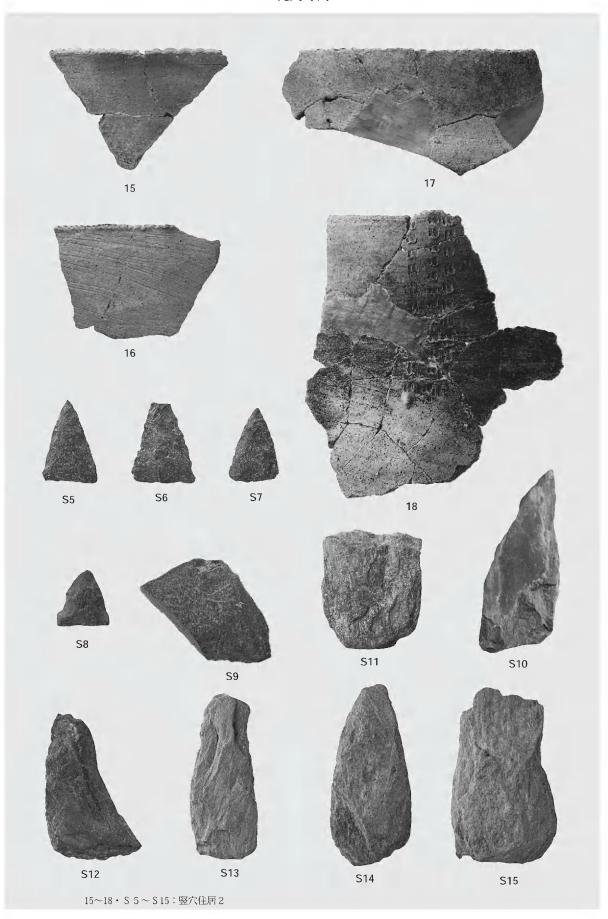
2 晩期 火処 7 (北から)



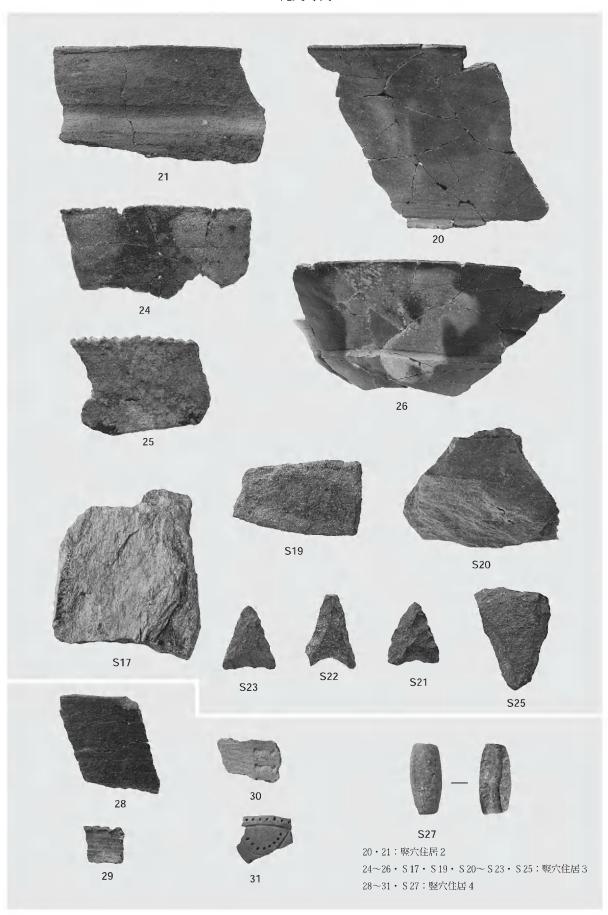
3 晩期 土器溜まり1 (北から)



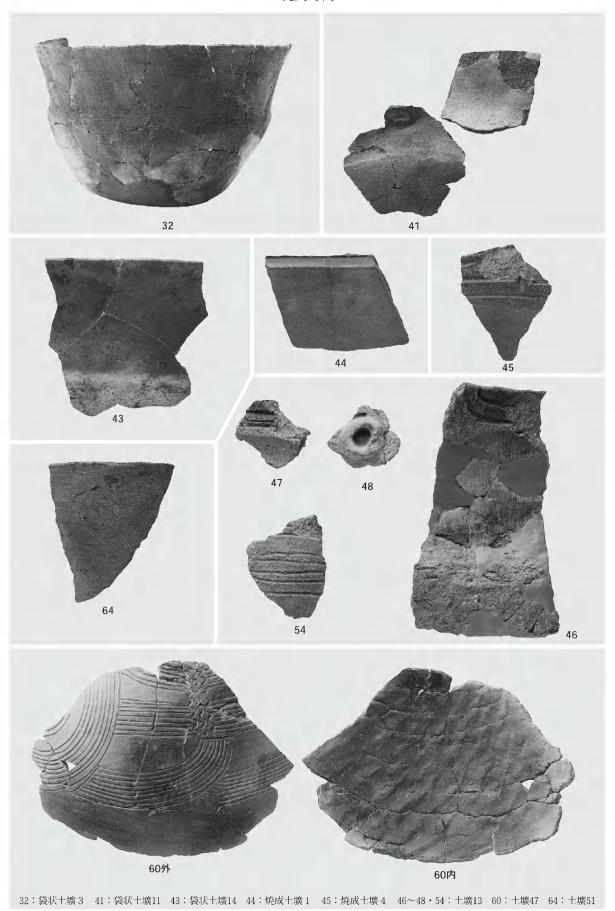
竪穴住居出土遺物①



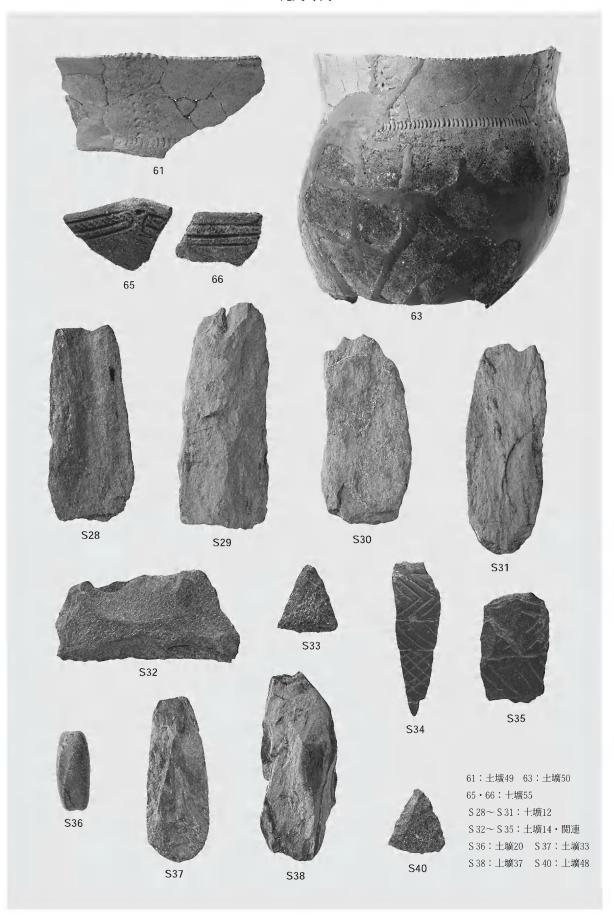
竪穴住居出土遺物②



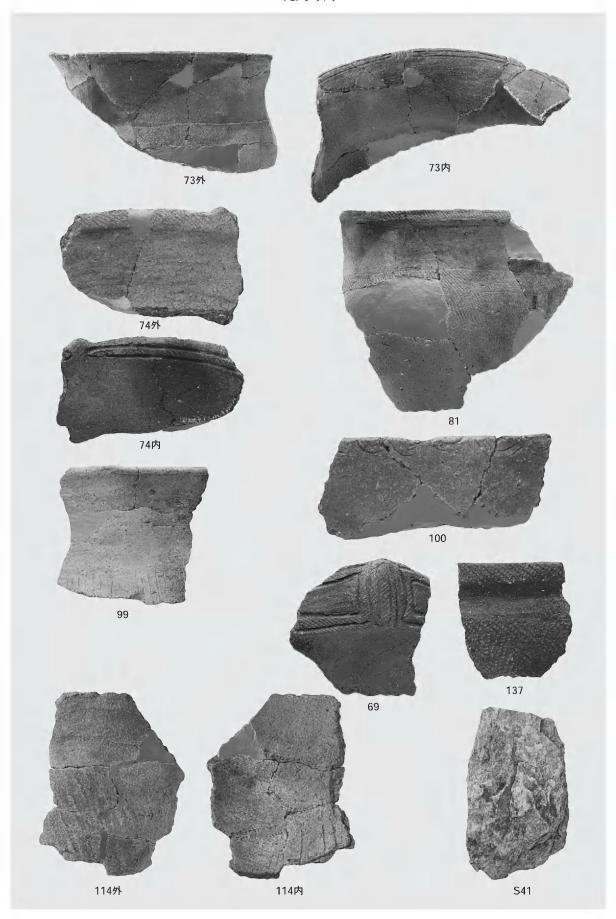
竪穴住居出土遺物③



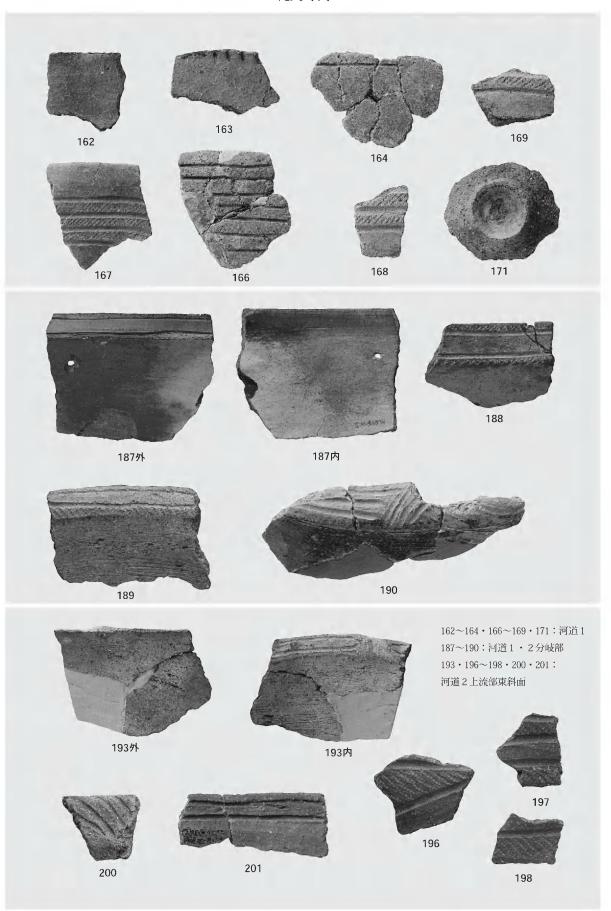
袋状土壙、焼成土壙、土壙出土遺物①



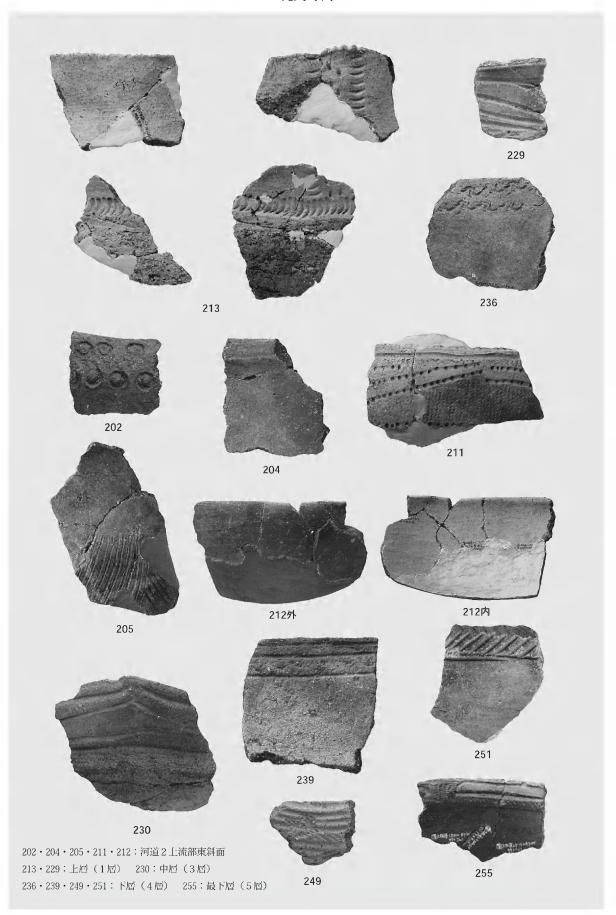
土壙出土遺物②



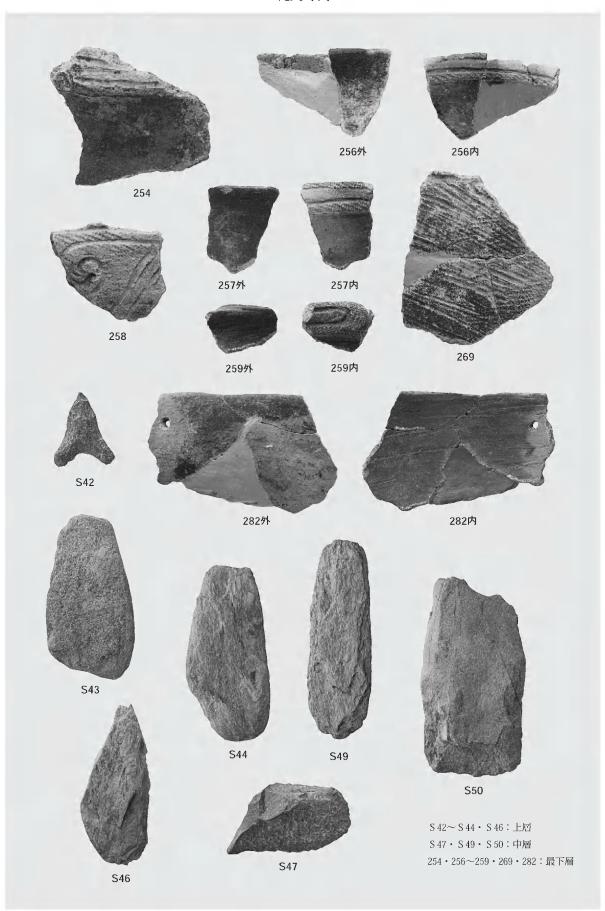
土器溜まり1出土遺物



河道1、河道1・2分岐部、河道2上流部(東斜面)出土遺物①



河道2上流部出土遺物②



河道2上流部出土遺物③